
魔法先生ネギま～ゲーム世界を巡る旅～

知蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま〜ゲーム世界を巡る旅〜

【Nコード】

N4113H

【作者名】

知蔵

【あらすじ】

麻帆良学園で教師をしている10歳の魔法使いの少年ネギ・スプリングフィールドは麻帆良学園女子中等部3 Aの教師として頑張っていたが、これから起きる事件に巻き込まれてゆく事となる。

第一話〜謎の館へ〜（前書き）

話によっては残酷な描写がありますが、基本的にはそんなにグロい訳ではないので安心して読めます。

因みにネギまの設定は原作の学園祭の後という形で進めています。

第一話 謎の館へ

（麻帆良学園）

授業を終えた麻帆良学園の子供教師ネギ・スプリングフィールドは学園の外を散歩していた。

ネギ

「ふっつ、今日の授業も疲れたなあ。」

？

「兄貴、今日もご苦労だったな！」

突然ネギの肩からオコジヨ妖精のアルベール・カモミールが顔を出す。

ネギ

「だ、駄目だよカモ君！急に顔出して喋っちゃ……………」

ネギが慌ててカモを引っ込めようとする。

カモ

「いいじゃね〜か！誰もいねんだからさ。」

？

「ネギーーッ！！」

突然ネギの後ろから3 Aの生徒の神楽坂明日菜がダッシュで駆け寄ってくる。

ネギ

「あ、明日菜さん！？そんなに慌ててどうしたんですか？」

明日菜

「い、いいから一緒に来て！」

そう言つと、明日菜はネギの腕を掴む。

ネギ

「ちよ、ちよつと待つ……………わあ〜っ！？」

明日菜はそのままネギの腕を掴みながら走り出す。

く世界樹前く

？
「あ、明日菜が戻ってきた。」

？

「ネギ先生を連れてきたようですね。」

世界樹の前に明日菜と同じ3 Aの生徒の近衛木乃香と桜咲刹那がいた。

明日菜

「木乃香、刹那さん、お待たせ！」

明日菜はネギの腕を引っ張ったまま木乃香達の前で勢い良く止まる。

ネギ

「あ、明日菜さん！何があったのかそろそろ説明して下さいよ。」

明日菜

「あゝ、そうね……とにかく、これ見てよ。」

そう言うと、明日菜は木乃香達の後ろに置いてある巨大な鉄の球体に指さす。

ネギ

「こゝ、これは？」

刹那

「私とお嬢様が最初に発見したのですが……。」

木乃香

「ネギ君、これ何やと思うっ?」

ネギ

「うん……。」

ネギは唸りながら球体に触れる。

ネギ

(何だろう? 鉄球にしては大き過ぎるし……。)

?

「ネギ先生——!」

ネギが謎の球体を調べていると、後ろから明日菜達と同じ3 Aの生徒の宮崎のどかが大声でネギの名を呼びながら近付いてくる。

明日菜

「ほ、本屋ちゃん?」

ネギ
「のどかさん!?!どうしました?」

のどか

「あ、あの……い、今すぐその爆弾から離れて下さい!」

明日菜

「ば、爆弾!?!」

のどかの言葉に全員耳を疑った。

ネギ

「ば、爆弾って……どうゆう事ですか!?!」

のどか

「そ、それが……黒いコートを着た人が教えてくれたんです。」

明日菜

「黒いコートを着た人?」

ネギ

「その人、どんな顔してました？」

のどか

「そ、それがフードを被っててよく分からなかったの……」。

ウィイイン

のどかが説明しようとした時、爆弾らしき球体の側面が真っ二つに開く。

木乃香

「な、何や!？」

刹那

「まさか……爆弾が起動したのでは!？」

ピッピッピッ

爆弾らしき球体からデジタルの時計が3分からどんどん時間を刻んでいく。

カモ

「マ、マズイぜ兄貴！どうやら本当にこれ爆弾のようだぜ！！」

ネギ

「う、うん……皆さん！急いでその場から逃げて下さい！！」

明日菜

「わ、分かったわ！」

ピッピッピッピッ！

全員その場から駆け出した時、爆弾らしき球体の時計が0を刻む。

ドオオオツ！！

次の瞬間、爆弾が起動してブラックホールのような物がどんどん広がって世界樹や周辺を飲み込む。

明日菜

「な、何よあれ！？」

ネギ

「と、とにかく早く逃げないと……………」。

木乃香

「きゃっ!!」

全員ダッシュで走っている最中、木乃香が石に躓いて転んでしまう。

刹那

「お、お嬢様!？」

刹那が後ろを振り返り、慌てて木乃香の元へ走り出す。

木乃香

「せっちゃん、ウチに構わず早う逃げて!」

刹那

「何を言うのです!お嬢様の為なら私は……………」。

ゴオオオッ!!

刹那が木乃香を抱き抱えた時、ブラックホールみたいな物が二人を飲み込む。

ネギ

「木乃香さん！刹那さん！」

ネギは二人が飲み込まれた光景を見て立ち止まる。

明日菜

「ネギ！早く逃げないと危ないわよ！！！」

ネギ

「で、でも木乃香さん達が……………」

のどか

「きゃあああっ！！！」

ネギがのどかの叫び声に反応して振り返ると、のどかがブラックホールのような物に吸い込まれそうになっている。

ネギ

「のどかさん！！！」

ネギは咄嗟に杖を取り出し、のどかに接近して手を伸ばしてのどかの手を握る。

のどか

「ネ、ネギ先生……。」

ネギ

「ほ、僕が来たからにはもう大丈夫ですよ！」

ゴオオオツ！！

更に次の瞬間、ブラックホールのような物がネギとのどかを飲み込む。

明日菜

「ネギーーッ！！」

明日菜が大声でネギの名前を叫んだ後、明日菜はブラックホールのような物の中へ突っ込んでいく。

く???.???)

カモ

「兄貴！しっかりしろよ兄貴！！」

ネギ

「う、うん……………」

気絶していたネギがカモの声にゆっくりと起き上がる。

カモ

「兄貴！無事で良かったぜ。」

ネギ

「カモ君……………僕は確かあのブラックホールみたいな物に飲み込まれて……………あ！明日菜さん達は！？」

ネギは慌てて辺りを見回すと、横になって倒れていた明日菜達を見する。

ネギ

「み、皆さん！起きて下さい！！」

明日菜

「うん、うるさいわね……………」

ネギの声で明日菜が目を擦りながら起きる。

明日菜

「あ！ネギ、無事なの！？」

ネギ

「は、はい……………明日菜さんも無事みたいですね。」

ネギは明日菜の様子を見て安心する。

明日菜

「ねえネギ、私達どうなったの？」

ネギ

「さ、さあ……………それより木乃香さん達を起こさないで。」

明日菜

「そ、そうね……………」

ネギと明日菜は気絶していた木乃香、刹那、のどかを起こした。

木乃香

「……………あれ？ウチらどないしたんやろ？」

刹那

「確かあの変な物に飲み込まれてしまったのですが……………」

のどか

「で、でもみんな無事で良かったです……………」

ネギ

「僕も皆さんが無事で本当に良かった。」

ネギは三人が無事だと分かり、ホッと胸を撫で下ろす。

明日菜

「ところで、私達って今何処にいるんだろ？」

全員明日菜の言葉を聞いて辺りを見渡す。

ネギ

「そう言えばそうですね……………」

刹那

「少なくとも私達が先程までいた場所ではありませんね。」

木乃香

「せやったら、此処は一体……………」

のどか

「あ、あの……………」

突然のどかが会話の途中で割り込んでくる。

明日菜

「ん？本屋ちゃんどうかしたの？」

のどか

「あの……向こうに建物がありますけど……。」

そう言うと、のどかはネギ達がいる場所から南の方角に指さす。

ネギ

「建物……ですか？」

ネギ達はのどかが指さす方を見ると、地平線の向こうで館のような大きな建物を発見する。

木乃香

「ホンマや……ほなら、あの建物へ入ってみる？」

刹那

「しかし、中へ入るのは少し危険かと……。」

明日菜

「大丈夫だって！何かあっても私達なら何とかなるって。」

ネギ

（何処にそんな自信が出てくるんだろう……。）

明日菜の自信溢れた発言に全員唾然となる。

明日菜

「さあ！行くわよ！！」

そう言いつと、明日菜はダッシュで建物がある場所へ駆け出す。

ネギ

「あ、明日菜さん！」

ネギは慌てて明日菜の後を付いていく。

のどか

「い、行っちゃった。」

木乃香

「やっぱり明日菜らしいなあ。」

刹那

「そうですね……………」

残りの三人も二人の後を追うように付いていく。

ネギを含めた五人は館のような建物の前に立っていた。

ネギ

「な、何かこの建物ボロボロですね……………」

木乃香

「そやな、窓硝子も割れとるし屋根も少し崩れとるし……………」

刹那

「こんな所に人なんて住んでいるんでしょうか？」

明日菜

「そんなの入ってみなきゃ分からないじゃない。」

ガチャ

そう言うと、明日菜は館の扉に手を掛けて入ろうとする。

ネギ

「ちよ、ちよっと明日菜さん!？」

カモ

「ったく、しょうがねえな。」

ネギ達も渋谷館の中へ入ろうとする。

明日菜

「お邪魔します!」

全員館の中へ入ると、荒れ放題荒れているフロアが目に入る。

木乃香

「ありゃ、中もボロボロやな……………」。

のどか

「な、何かあったんでしょうか?」

明日菜

「すいませ〜ん!誰かいませんか〜!？」

？

「誰だ！？」

ネギ&刹那

「！？」

ネギと刹那は突然聞こえてきた声に警戒する。

？

「此処へ何しに来た！？それに貴様らは何者だ！？」

ネギ

「ぼ、僕達は怪しい者ではありません！ただ此処が何処なのか知りたくて中へ入ったんです！」

？

「……………何？」

スーッ

突然白い手袋をした巨大な左手がネギ達の前に現れる。

明日菜

「な！？お、大きな手が……………」

ネギ

「あ、貴方は一体……………」

ネギ達は突然現れた大きな手に驚愕する。

？

「驚くのも無理は無いが、君達こそ一体何者なんだ？」

ネギ

「あ、僕はネギ・スプリングフィールドと申します。」

明日菜

「私は神楽坂明日菜です。」

木乃香

「ウチは近衛木乃香です。」

刹那

「桜咲刹那です。」

のどか

「み、宮崎のどかです……………」。

？

「……………スプリングフィールド……………それにその杖は……………」。

全員が自己紹介した後、巨大な手はネギの方を見続ける。

ネギ

「あの、僕の顔に何か付いてますか？」

？

「い、いや、何でもない……………それより、君達は現実世界から来たようだな。」

刹那

「現実……………世界？」

刹那は巨大な手の言葉に耳を傾ける。

？

「そう、此处は君達の住む現実世界とは別の世界……………亜空間だ。」

ネギ

「あ、あの、おっしゃてる意味がよく分からないんですけど……。」

「

？

「それはそつだ……だが、私が言った事はそのまんまの意味だ。」

「……………」

巨大な手の言葉に一瞬撃沈が続く。

木乃香

「……………ほ、ほなら今ウチらがいるその亜空間って何なん？」

？

「亜空間は君達がいる現実世界とは違って何も無い異次元のような空間だ。」

明日菜

「そ、それじゃ私達これからどうすればいいの!？」

明日菜は巨大な手の説明を理解して大声を上げる。

木乃香

「ネギ君、なんとかならへんの？」

ネギ

「うん、そうですね……………」

ネギは腕を組みながら考え込む。

？

「ところで、君達はどつやってこの亜空間へ来たのだ？」

刹那

「それが、爆弾みたいな物が爆発して、ブラックホールのような物に飲み込まれて気が付いたら此処へ……………」

？

「そつか、やはりな……………」

ネギ

「何か心当たりがあるんですか？」

?

「その爆弾というのは恐らく………亜空間爆弾だ。」

のどか

「亜空間爆弾？」

全員巨大な手の言葉に首を傾げる。

?

「その爆弾は約3分後に起動して、ブラックホールのような空間が広範囲に広がり、周りのありとあらゆる物をこの亜空間へと引きずり込む危険な爆弾だ。」

ネギ

「一体誰がそんな危険な物を世界樹の近くに………。」

?

「それは間違いなくタブーの仕業だ。」

木乃香

「タブー？」

?

「タブーはこの亜空間に生まれた謎の存在で、亜空軍というものを設立して様々な世界を亜空間へ引きずり込もうと企んだ奴だ。」

明日菜

「なんか恐ろしい奴ね……………」

刹那

「もしかしてタブーは私達の世界も……………」

？

「ああ、亜空間へ引きずり込もうと思ったんだろう。」

カモ

「なんて野郎だ。」

ネギ達は険しい表情を浮かべる。

？

「だが、そのタブーはスマッシュブラザーズによって倒されたハズだ。」

ネギ

「スマッシュ……………ブラザーズ？」

？

「君達はテレビゲームをやった事はあるかな？」

「……………へ？」

ネギ達は巨大な手の質問に一瞬啞然とする。

明日菜

「え、えつ」と……………ゲームなら昔木乃香とよくやったけど……………。

「

木乃香

「そやな、スーパーマリオとか星のカービィとか……………。」

刹那

「私はゲームはあまり……………。」

のどか

「わ、私も……………夕映やハルナとたまにやるけど……………。」

？

「そうか……そのマリオやカービィのような現実世界で人気のゲームキャラクターが集結して結成したのがスマッシュブラザーズだ。」

明日菜

「え？ちよ、ちょっと待って……マリオと違ってゲームのキャラクターでしょ？」

？

「確かにそうだ……だが、彼らは現実世界の人々の想像によって生まれ、それぞれ別の世界で存在している。」

木乃香

「へえ、全然知らなかったわ。」

？

「そこで私は見事にタブーを倒した彼らをこの館へ招待して、楽しい大乱闘を繰り広げた……ところがある日、復活したタブーが私の前に現れた。」

刹那

「何故復活したんですか？」

？

「それは私にも解らない………奴の復活にいち早く気が付いた私は彼らを元いた世界へ帰した。」

ネギ

「どうしてですか？」

明日菜

「そうよ、全員で力を合わせてやっつければいいじゃない。」

？

「いや、奴は前とは比べものにもならない程の力を持っていた………それに奴の狙いは自分を倒した彼らだからな。」

ネギ

「じゃあ貴方は皆さんを守る為に………。」

カモ

「くうく、泣かせるねえく！」

ネギ達は巨大な手に向かって尊敬の眼差しを浮かべる。

？

「ま、まあ私は当然の事をしたまでだ………そしてタブーは私の前

に現れて、私をこの館ごと亜空間へ封じ込めたのだ。」

ネギ

「なんて事を……………」

のどか

「酷い……………」

ネギ達は哀れむような表情を浮かべる。

？

「そこで君達に頼みがある……………もし私の頼みを聞いてくれたら君達を元の世界へ帰してやろう。」

ネギ

「ほ、本当ですか!？」

木乃香

「それで？頼みって何なん？」

？

「そんなに難しい事ではない……………このバッチをスマッシュシュブラザーズのみんなに渡してほしい。」

パチッ

巨大な左手が指を鳴らすと、様々な形の小さなバッチが現れる。

刹那

「これは何ですか？」

？

「このバッチはそれぞれ該当した者が付けると、タブーと対抗出来るまでに力をアップさせる事が出来る。」

ネギ

「それは凄いですね。」

明日菜

「要するにそのバッチをスマなんとかっていう人達に渡せばいいのね？」

？

「そつだ………引き受けてくれるかな？」

ネギは明日菜達に顔を向けると、全員ゆっくりと頷く。

ネギ

「分かりました！僕達に任せて下さい！！」

？

「そうか、引き受けてくれるか……感謝する。」

巨大な手はお辞儀をするかのように手首全体を下げる。

？

「それでは、この館の内部を案内しよう。」

そう言うと、巨大な手は館内を案内しようと浮遊する。

ネギ

「あ、そうだ！まだ貴方の名前を聞いてませんでした。」

？

「私か？私の名は……マスターハンドだ。」

ネギ

「マスターハンドさんですね……これから宜しくお願いします！」

ネギはマスターハンドに向かって深くお辞儀する。

マスターハンド

「ああ、こちらこそ宜しく。」

マスターハンドは再び軽くお辞儀すると、ネギ達を館内の案内を始める。

第一話〜謎の館へ〜（後書き）

マスターハンドの頼みを聞いたネギ達にどんな試練が待ち構えているのかお楽しみ下さい！

第二話 最初の世界へ

〜大乱闘の館内部〜

マスターハンドはネギ達を館の中を案内していた。

マスターハンド

「食堂は下の階にあり上の階の殆どが寝室になっているから、好きな部屋で寝てもらって構わない。」

ネギ

「分かりました!」

のどか

「あ、あの……………」

マスターハンド

「ん?何かな?」

のどか

「あの部屋は……………何ですか?」

そう言うと、扉が開いている奥の部屋を指さす。

マスターハンド

「あの部屋は確か……取り合えず入ってみるかい？」

ネギ

「え？いいんですか？」

マスターハンド

「勿論、この館には見られてマズイ所は無いからね。」

そう言うと、マスターハンドは部屋へ向かって進む。

明日菜

「部屋の中は……うわ〜！？何これ？」

明日菜が部屋を覗くと、中には本が一杯入ってる本棚が沢山あった。

刹那

「この部屋は図書室か何かですか？」

マスターハンド

「あ、ああ……………確かこの本はマリオを始めとするゲームキャラ達の活躍が本として納められていた部屋のハズだ。」

木乃香

「ハズって？」

マスターハンド

「い、いや……………私もあまり入った事がないから覚えていないのだよ。」

明日菜

「ふん……………」

マスターハンドの曖昧な答えに明日菜は首を傾げる。

のどか

「あ、あの……………この部屋の本を読んでもいいですか？」

マスターハンド

「ああ、構わないよ。」

のどか

「あ、ありがとうございます！」

のどかはマスターハンドにお礼を言うと、早速部屋に入って本棚を眺める。

ネギ

「のどかさんって本当に本が好きなんですね。」

木乃香

「なんせ、図書館探検部員やからな。」

マスターハンド

「さて、次は入浴所へ案内しよう。」

そう言うと、マスターハンドは別の場所へ移動しようと進み出す。

明日菜

「本屋ちゃん！私達先に行ってるからねー！！」

のどか

「は、はい！」

明日菜達はのどかを残して歩き出す。

のどか

「凄いい………一体何冊あるんだろうっ?」

そう言つと、のどかは本棚から一冊の本を取り出して、そのまま読み始める。

くネギの部屋く

ネギ

「ふあ〜っ、そろそろ寝ようかな〜。」

ネギは欠伸した後でベットに寝転がる。

カモ

「う〜ん……………」

カモがベットの枕の上で真剣な顔しながら考え込んでいた。

ネギ

「どうしたのカモ君？真剣な顔して……………」

カモ

「いやあ、あのマスターハンドって野郎が気になって……………」

ネギ

「えっ！？気になるってどっいつ事？」

ネギはカモの言葉に耳を傾ける。

カモ

「あいつ、自分の館の部屋をろくに覚えてないんだぜ？可笑しいだろ？」

ネギ

「うーん……でも、この館広いから全部の部屋を把握出来ないのは当然じゃない？」

カモ

「ま、まあ……それもあるかもな。」

ネギの言葉にカモは言い返せなくなる。

ネギ

「さて、僕もう寝るから……おやすみ。」

そう言いつつ、ネギはすぐに眠り始める。

カモ

（俺っちの勘に狂いはないんだけどなあ。）

カモは頭を掻きながら体を丸くして眠り込む。

（翌日）

起床したネギ達は朝食を終えて館の外にいた。

ネギ

「皆さん、おはようございますー！」

明日菜

「おはよう。」

木乃香

「おはようさん。」

刹那

「おはようございます。」

のどか

「おはようございま……ふあっつ。」

のどかが少し大きな欠伸をする。

ネギ

「あれ？昨日はあまり眠れなかったんですか？」

のどか

「い、いえ……………昨日の夜遅くまで本を読んだもので……………」

明日菜

() やっぱり早速読んでたんだ……………。()

明日菜達はのどかの本好きに少し啞然とする。

マスターハンド

「みんな、おはよう。」

突然マスターハンドがネギ達の前に現れる。

ネギ

「あーおはようございます。」

マスターハンド

「昨日はよく眠れたかな？」

木乃香

「はい、部屋が立派やったから気持ち良く眠れたわ。」

明日菜

「本屋ちゃんは少し寝不足みたいだけどね。」

マスターハンド

「ん？部屋が気に入らなかったのかね？」

のどか

「い、いいえ……昨日本を読みすぎてあまり眠れなかったんです。」

「

マスターハンド

「そうか……君は本が好きなんだな。」

のどか

「は、はい……。」

マスターハンド

「ところで、早速君達には彼らに例のバッチを渡してほしいのだが……。」

ネギ

「はい！任せて下さいー！」

マスターハンド

「いい返事だ………それではまずキノコの形したバッチを出してくれ。」

ネギ

「は、はい。」

ネギはポケットからキノコ型のバッチを取り出す。

マスターハンド

「キノコ型のバッチは全部で四つあるだろ？」

ネギ

「はい、確かにあります。」

マスターハンド

「そのバッチをマリオ、ルイーダ、ピーチ、クッパに渡してくれ。」

ネギ

「マリオさんにルイーダさん、それにピーチさんにクッパさんですね。」

ネギは咄嗟にメモする。

明日菜

「マリオってあのスーパーマリオよね？」

木乃香

「という事は、まずウチらはマリオの世界に行くんやな？」

マスターハンド

「そういう事だ……では、早速マリオ達の世界へ行ってもらおうか。」

パチッ

マスターハンドが指を鳴らすと、地面から緑色の土管が出てくる。

マスターハンド

「その土管に入ると、マリオ達の世界へ行ける。」

木乃香

「わ、この土管マリオのゲームとそっくりやわ。」

明日菜

「ほ、本当ね……………」

木乃香以外のメンバーは土管を見て啞然とする。

刹那

「で、では……………そろそろ参りましょうか。」

ネギ

「そ、そうですね。」

ネギ達が土管に近付いた時……………。

マスターハンド

「あ！ちよつといいかな？」

ネギ

「はい？何ですか？」

ネギ達はマスターハンドに呼び止められて立ち止まる。

マスターハンド

「彼らに私の今の状況を話さないでほしいのだが……………」

ネギ

「えっ！？どうしてですか？」

マスターハンド

「彼らに余計な心配を掛けたくない……………それに私が彼らを元の世界に帰したのは息抜きを与える為でもある。」

刹那

「ですが、タブーという奴の狙いはまず自分を倒したスマッシュブラザーズの皆さんを始末する事……………だからこの事を話さない危険ではないでしょうか？」

マスターハンド

「そ、それもそうだな……………それじゃ、君達が全員にバッチを渡してくれたら後ほど全て話そう……………今話したら不安感を与えるだけだからな。」

ネギ

「そ、そういう事でしたら僕達もあまり余計な事は言いません。」

マスターハンド

「……………何から何まですまないな。」

マスターハンドは申し訳なさそうに手首を下げる。

ネギ

「い、いえ……………それでは僕達そろそろ行きますね!」

マスターハンド

「ああ、気をつけてな。」

ビョビョビョッ

ネギ達が土管の中へ入ると、土管は地面の中へと沈んでいく。

マスターハンド

(頼むぞ、サウザンドマスターの息子よ……………。)

くキノコタウンく

ムシムシムシムシ

ネギ

「ムシムシムシムシ」

地面から生えてくるように現れた土管の中からネギが出てくる。

明日菜

「ぶはっ、やっと着いたようね。」

木乃香

「意外と長かったな。」

ネギの後から明日菜達が続々と土管から出てくる。

刹那

「……………どうやら此処は町の中ですよですね。」

刹那が辺りを見回しながら言う。

のどか

「なんかとても賑やかですね……………」

ネギ

「あれ？でも町の人達がキノコみたいな帽子を被ってますよ。」

ネギが町にいるキノピオを見ながら言う。

木乃香

「……………ネギ君、あれは帽子やなくて頭なんよ？」

ネギ

「えー？じ、じゃあこの町はキノコ人間の町なんですか？」

ネギは木乃香の言葉を聞いて驚愕する。

明日菜

「……………アンタ、マリオのゲームやった事ないの？」

ネギ

「は、はい……………ゲームは全然やった事ないんです。」

木乃香

「へえ、意外やわ。」

明日菜

（でも、名前くらいは知ってるでしょ。）

明日菜がネギの言葉に唾然してる時……………。

？

「ルイージ、早く来いよ〜！」

？

「兄さん、待ってよ〜！」

のどか

「ん？」

のどかは声が出た方を見ると、赤い帽子に青いオーバーオールを着た髭の男と緑色の帽子に同じく青いオーバーオールを着た髭の男が目に入る。

のどか

「あ！あの人達は……………」

明日菜

「ん？どうしたの本屋ちゃん？」

明日菜が目を見開きながら驚いてるのどかに声を掛ける。

のどか

「あ、あの……………マリオさんを見つけました！」

ネギ

「えっ！？ど、何処ですか！？」

のどか

「あ、あそこに……………」。

のどかの指さす方向に、確かにマリオとルイージがいた。

木乃香

「あゝっ！ホンマや〜！！」

刹那

「た、確かに本物ですね……………」。

ネギ

「早速声を掛けてみましょう！」

そう言つと、ネギはマリオ達がいる所まで駆け出していく。

明日菜

「あ、ちょっと待ちなさいよ！」

ネギの後から明日菜達は慌てて駆け出す。

ネギ

「あの一！ちょっといいですかー!？」

マリオ

「……………ん？」

マリオとルイージはネギの方を向く。

ネギ

「し、失礼ですけど……………貴方はマリオさんですよね？」

マリオ

「え？ああ、そうだけど……………君は誰だい？」

ルイージ

「やだなく兄さん、この子きつと兄さんのファンだよ。」

ルイージが肘でマリオの背中を突きながら言う。

ネギ

「そ、それと貴方は……………」。

ルイージ

「えっ！？僕を知っているの？嬉しいな、僕ってあまり目立たないからよく名前を忘れられてるから……………」。

ネギ

「……………すみません、名前忘れてしまいました。」

ズルツッ！！

ネギの言葉にルイージは勢い良くコケる。

ルイージ

「い、いいよ……………どうせ僕は日陰が似合う永遠の二番手だから……………」。

そう言うと、ルイージはしゃがんだまま指で地面を突く。

ネギ

「あ、あの……。」

マリオ

「いいからいいから、いつもの事だから気にしなくていいよ。」

マリオは左右に手を振りながらネギに言う。

ネギ

「で、でも……。」

明日菜

「コラー！ネギ坊主ー！！」

ネギが驚いて後ろを向くと、明日菜達がダッシュで近付いてくる。

ネギ

「あ、明日菜さん！？」

明日菜

「ったく、一人で先行かないでよ！」

ネギ

「す、すいません。」

ネギは明日菜に向かって謝罪する。

木乃香

「うわゝ、本物のマリオやゝ！握手してもええですか？」

マリオ

「え？う、うん……………別にいいよ。」

マリオが呆然としながら答えると、木乃香は嬉しそうにマリオに握手する。

ルイージ

「……………兄さんだけいいな。」

ルイージは未だにしゃがみ込みながら呟く。

マリオ

「そ、それより君達は一体何々だい？」

ネギ

「あ！申し遅れました……………僕達マスターハンドさんに頼まれて二人に会いに来たんです！」

ルイーダ

「えっ!?!」

マリオ

「マ、マスターハンドに!?!」

マリオとルイーダはマスターハンドの名前を聞いて耳を疑う。

マリオ

「じゃあ、君達は別の世界から来たんだね？」

ネギ

「そういう事になります……………後これを渡しておきます。」

ネギはマリオとルイーダにキノコ型のバッチを渡す。

ルイーダ

「これは?」

ネギ

「あまり詳しい事は言えませんが、マスターハンドさんがこれから起こりうる災難から守る為の物だそうです。」

ルイーダ

「これから起こりうる………災難？」

マリオ

「一体どういづ……。」

?

「マリオ殿〜！ルイーダ殿〜！〜！」

マリオとルイーダがネギの話に驚く中、白い髭を生やしたキノコ人間の老人が駆け寄ってくる。

?

「キノじい〜！ちょっと待ってたら〜！〜！」

?

「と、年なのに何て速さだろ……。」

キノじいと呼ばれた老人の後ろから、少年の姿したキノコ人間とピンク色で三つ網みたいな髪型の少女の姿したキノコ人間が駆け寄ってくる。

マリオ

「キノじい！それにキノピオやキノピコまで……………」。

ルイーダ

「そんなに慌ててどうしたの？」

キノじい

「た、大変ですじゃ！ピーチ姫が誘拐されてしまったのですじゃ！
！」

マリオ&ルイーダ

「な、何だつて……………!?」

キノじいの言葉にマリオとルイーダは驚愕する。

ネギ

「明日菜さん、ピーチ姫つてもしかして……………」。

明日菜

「そう、よくマリオに助けられてるお姫様よ。」

キノピオ

「それから、サラサ・ランドのデイジー姫も誘拐されたようです。」

ルイーダ

「えっ！？デイジー姫も……………」

キノピオの言葉を聞いたルイーダは驚愕する。

キノピオ

「そ、それに……………ロゼッタさんも誘拐されたそうです。」

マリオ

「ロ、ロゼッタまで……………!?!」

キノピオの言葉を聞いたマリオは更に驚愕する。

刹那

「何やら深刻な状況のようですね……………」

木乃香

「そ、そやな……………」

刹那達はマリオ達の様子を見て困惑する。

マリオ

「一体誰がそんな事を……………」

ルイーダ

「兄さん、こんな事をするのはあいつしかないよ。」

マリオ

「……………クツパか！」

ルイーダの言葉にマリオは拳を握る。

ネギ

「え！？クツパさんって悪い人なんですか？」

明日菜

「そうよ、クツパがいつもピーチ姫を誘っていくのよ。」

ネギ

「でもクツパさんもスマッシュブラザーズの一員なんですよね？」

明日菜

「うーん、そんな風に言ってたと思うけど……でも実際は悪役だからねえ。」

ネギの質問に明日菜は曖昧に答える。

キノじい

「とにかくお二方、ピーチ姫をどうか助けて下され！」

キノピオ&キノピコ

「「お願いします！」」

キノじい達はマリオ達に向かって深く頭を下げる。

ルイージ

「勿論、そのつもりだよ。」

マリオ

「大丈夫！ピーチ姫達は必ず僕達が救出するから。」

ネギー行

「お〜！かつこいい〜！！！」

パチパチパチッ

ネギ達はマリオとルイーダに拍手する。

キノじい

「いつも、すまないのお。」

キノピオ

「マリオさん！ルイーダさん！頑張ってください！！！」

キノピコ

「それから、気をつけて下さいね。」

マリオ

「ああ、分かってる！！」

ルイーダ

「兄さん、行こう！！！」

マリオ

「おう!!」

マリオとルイージが駆け出そうとした時……。

ネギ

「待って下さい!!」

マリオ

「えっ!?!」

マリオとルイージはネギに声を掛けられて立ち止まる。

ネギ

「あの、僕達も連れてって下さい!!」

ルイージ

「な、何だって!?!」

ネギの言葉にマリオとルイージは驚く。

マリオ

「駄目だよ！僕達が行く所はとても危険な場所で……………」

ネギ

「……………これを見て下さい。」

そう言うと、ネギは懐から小さな杖を取り出す。

ネギ

「プラクデ ピギ・ナル 火よ灯れ！」

ポツ！

すると、杖の先からライター位の火が出てくる。

ルイージ

「あ！火が付いた！？」

マリオとルイージはネギの魔法に少し驚愕する。

マリオ

「君は魔法が使えるのかい？」

ネギ

「はい、それに後ろの明日菜さん達もとても強いんです。」

明日菜

「それに、私達もピーチ姫やクツパに用があるし……………」

木乃香

「せやから、ウチらも連れてって下さい！」

刹那&のどか

「「お願いします！」」

ネギ達は一齐にマリオに向かって頭を下げる。

ルイージ

「兄さん、どうする？」

マリオ

「うーん……………」

マリオはしばらく間を開けて考え込む。

マリオ

「……………分かった！そこまで言うなら連れてってあげるよ。」

ネギ

「ほ、本当ですか!？」

ネギ達は思わず顔を上げる。

マリオ

「ああ、それに沢山仲間がいた方が早く終わるしね。」

ルイージ

「そうだね、これだけいればクッパなんて楽勝だよね。」

ネギ

「ありがとうございます!！」

ネギは再び頭を下げてお礼を言う。

マリオ

「それじゃ、早速行こうか！」

ネギ

「はい！！」

そう言いつと、全員クツパ城に向かって駆け出していく。

第二話〜最初の世界へ〜（後書き）

マリオの世界へやって来たネギ達は果たしてピーチ姫達を救出する事が出来るのか！？

次回をお楽しみに！

第三話 待ち受ける強敵達（前編）（前書き）

クッパ城へやって来たネギー行とマリオブラザーズ。
果たして彼らに待ち受けるのは！？

第三話 待ち受ける強敵達（前編）

くッパ城前

ネギー行とマリオブラザーズはクッパ城の前にいた。

ネギ

「これがクッパ城ですか？」

マリオ

「ああ、この中にクッパやピーチ姫達がいる。」

ルイーザ

「それじゃ、早速城へ入ろう。」

そう言うと、全員クッパ城の扉へ歩き出すが……。

？

「マリオくん！ルイーザくん！！」

マリオ&ルイーザ

「「えっ!?!」」

全員声がした方へ向くと、大きな風呂敷を担いだ白いモヒカンヘア
ーに瓶底眼鏡びんぞこを掛けた白衣の小さな男が駆け寄ってくる。

ルイージ

「もしかして……………オヤ・マー博士!?!」

オヤ・マー

「フオツフオツ、久しぶりじゃのう。」

マリオ

「どうして此処へ?」

オヤ・マー

「いや何、キノじいから訳を聞いてのお……………君達にこれを渡しに
来たんじゃない。」

そう言うと、オヤ・マー博士は風呂敷を捲り、中には大きなポンプ
と掃除機が入ってた。

マリオ

「あつ、ポンプだ!」

ルイージ

「それと、オバキュームも……………」

マリオとルイージはポンプとオバキュームを見て驚愕する。

ポンプ

「マリオさん、お久しぶりです。」

明日菜

「わっ！ポンプが喋った!?!」

ポンプが喋り出すと明日菜達は驚愕する。

マリオ

「ああ、ドルピック島や大乱闘以来だな。」

ネギ

「あ、あの……………そのポンプは何ですか?」

ネギが代表して恐る恐るオヤ・マー博士に尋ねる。

オヤ・マー

「これは我がオヤ・マー・サイエンス社が開発したお喋り機能付きのポンプじゃ。」

ポンプ

「皆サン初めまして、ポンプと申します。」

木乃香

「名前もそのまんまやな……………」

刹那

「では、この掃除機みたいな物は？」

ルイージ

「このオバキュームはテレサとかのオバケを吸い込む事が出来るんだ。」

のどか

「オ、オバケ!?!」

のどかはオバケと聞いて少し震える。

オヤ・マー

「とにかく、この先何が起こるか分からないから持っていくがよい。」

ルイージ

「オヤ・マー博士、ありがとうございます！」

マリオ

「それじゃネギ君、改めて城へ入ろう！」

ネギ

「は、はい！」

ネギ達はクツパ城の入口に向かって一直線に歩く。

オヤ・マー

「気をつけてな。」

そんな光景をオヤ・マー博士は手を振りながら見送る。

くツッパ城内く

マリオ

「よし、目指すは城の一番奥だ。」

ネギ

「分かりました。」

全員城へ進もうとした時……………。

？

「うおーっ！！」

前方からキノコや亀の姿したモンスターが駆け寄ってくる。

明日菜

「な、なんかいっぱい出て来たわね……………」

ルイージ

「でも、クリボーやノコノコなら楽勝だ。」

マリオ

「それじゃ、一丁いきますか！」

ネギ

「明日菜さん、刹那さん、行きますよ！」

刹那

「はい！」

明日菜

「OK! アデアット!」

パアアッ

明日菜は咄嗟に『ハマノツルギ』（ハリセン形態）を出す。

マリオ

「ファイアボール!」

ルイーダ

「こっちもファイアボール!」

ポオオッ!!

クリボー複数

「あちゃちゃ〜!」

複数のクリボーがマリオとルイーダのW^{ダブル}ファイアーボールに焼かれていく。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル…… 『魔法の射手 連弾・光の17矢』!!」

バシユユツ

ノコノコ複数

「ぐわああつ!!」

ネギの放った光弾が複数のノコノコに命中する。

明日菜

「とりゃああつ!!」

バシイイツ!!

「うわああつ!!」

刹那

「神鳴流奥義・百列桜華斬!!」

ズバアアッ！！

「ぐおおおっ！！」

明日菜の『ハマノツルギ』と刹那の『夕風』で沢山のクリボーやノ
コノコを吹っ飛ばす。

〈数分後〉

先程まで沢山いたクリボーやノコノコの大群はネギ達やマリオブラザーズによって倒されて気絶している。

マリオ

「ふう〜っ、あらかた片付いたなあ。」

ルイーダ

「それにしても、君達思ってたより強いね。」

ネギ

「そ、そうですか？」

マリオ達に褒められてネギは頬を紅く染める。

マリオ

「ところで、明日菜ちゃんが持つてるそのハリセンは……………」

明日菜

「え？……あ、これですか？」

明日菜は『ハマノツルギ』をマリオ達に見せる。

ルイーダ

「大きなハリセンだね……大乱闘で使うハリセンより大きいね。」

木乃香

「ほえ？大乱闘で何でハリセンなんか使うん？」

マリオ

「大乱闘ではハリセンを始めとするアイテムを使う事があるんだ。」

ネギ

「そうなんですか……他にはどんなアイテムがあるんですか？」

ルイーダ

「えっくと……ハンマーとかホームランバットとか色々あるよ。」

明日菜

「ハンマーにバットねえ……。」

刹那

「なんて言うか………シンプルですね。」

明日菜と刹那は半ば啞然とする。

マリオ

「さてと、そろそろ先へ進もうか。」

ネギ

「そ、そうですね。」

ネギ一行とマリオブラザーズは城の奥へ目指して進もうとする。

くクツパ城の奥く

？

「ちよつと！早く此処から出しなさいよ！！」

クツパ城の奥にある牢屋のような中から黄色いドレスを着た茶髪でシヨートヘアの女性が大声で叫ぶ。

？

「デイジー、少し落ち着いた方がいいわ。」

デイジーと呼ばれた女性の後ろから、ピンク色のドレスに金髪のロングヘアの女性がデイジーを宥める。

「ピーチ姫の言う通りですよ……………それに、あまり大声を出すところの子が起きてしまいます。」

ピーチと呼ばれた女性の隣に、黄緑色のドレスのような服を着た右目を長い前髪で隠してる女性が、一枚の敷布を被って寝息をたてながら寝転んでいる何者かを摩りながらデイジーに注意する。

デイジー

「だって、このままジツとしてるなんて私には耐えられないわ。」

ピーチ

「気持ちは分かるけど、もうすぐマリオとルイーダが助けに来てくれるわ。」

デイジー

「それはそうだけど……………」

ピーチ

「けど？」

デイジー

「マリオはともかく、ルイージはちょっと頼りないから心配なのよねえ。」

ピーチ

「そ、そんな事ないわよ……………ね？ロゼッタ。」

ロゼッタ

「え？ええ、まあ……………」

ロゼッタと呼ばれた女性は突然ピーチに振られて曖昧に答える。

ピーチ

「それに、ルイージも私達と共に大乱闘に参加してたから大丈夫よ。」

「

デイジー

「あ、マスターなんかの所でやったアレね。」

ロゼッタ

「それなら、心配する必要はありませんね。」

ピーチ

「そういう事……………だから、今は二人を信じて待ちましょ？」

デイジー

「で、でも……………」

ロゼッタ

「私は信じます。」

デイジーが考え込む中、突然ロゼッタが発言する。

ロゼッタ

「あの二人の活躍のおかげでスターが集まり、『ほつき星の天文台』に力が戻りました……………だから、私は彼らを信じます。」

ピーチ

「ロゼッタ……………」

ロゼッタの言葉にピーチとデイジーは心打たれる。

デイジー

「……………分かった！私も二人を信じて大人しく待つわ。」

そう言うと、デイジーはその場で座り込む。

ピーチ

(マリオ、無事でいてね……………。)

ピーチはひそかに手を合わせて心の中で祈る。

くツッパ城・中心部く

ネギー行とマリオブラザーズは下は溶岩が煮だっている吊橋を渡っていた。

のどか

「あ、熱い……………」

木乃香

「そろそつや、下は溶岩やからな〜。」

ネギ

「み、皆さ〜ん！下へ落ちないで下さいね〜！」

ネギは汗だくになりながらのどか達に注意する。

マリオ

「ふ〜っ、やっと渡り終わった。」

ルイージ

「ん？何だこれ？」

全員吊橋を渡り切った時に、ルイーヂが次へ続く扉の前の看板に気付く。

ルイーヂ

「何々……… 『此処から先へ通るには、待ち受けている強力な番人達を倒さなければならぬ』 だって。」

ルイーヂは看板に書かれた文章を読み上げる。

刹那

「要するに、この先からは敵を倒さないと通れない訳ですか。」

マリオ

「そういう事だね………みんな、準備はいいかい？」

ルイーヂ以外全員

「はい……！」

マリオ

「よし、それじゃ開けるよ………。」

ギィィイツ

マリオが扉を開けると、全員ゆっくりと中へ入る。

？

「は〜い、いらっしや〜い！」

扉の中には、頭に赤いリボンを付けたピンク色のボディの恐竜みたいな生物がいた。

ルイーダ

「えっ!?!?き、君はもしかして……………」。

マリオ

「キャサリン!?!」

マリオとルイーダはキャサリンという名前の恐竜を見て驚愕する。

キャサリン

「そうよ、でもキャシーって呼んで。」

ネギ一行

「……………」

ネギ達はキャサリンを見て啞然とする。

マリオ

「な、何で君が此処に居るんだ!？」

キャサリン

「それがね、、『いい男を紹介するからこの部屋に入ってきた奴をぶっ倒せ』って言われたのよ。」

ルイーダ

「言われたってクツパに？」

キャサリン

「そ・れ・は、禁則事項よ。」

キャサリンはルイーダに向かってウインクする。

ネギ

「マ、マリオさん……………あの恐竜とはお知り合いですか？」

マリオ

「ま、まあ一応ね……………」

木乃香

「で、でもよく見たら可愛らしいなあ。」

ルイージ

「……………だけど、ああ見えてもオカマなんだ。」

のどか

「オ、オカマ……………ですか？」

明日菜

「う、嘘……………」

明日菜達はキャサリンがオカマだと知って驚愕する。

キャサリン

「と・に・か・く、此処から先へ通りたかったら私を倒す事ね。」

ルイージ

「兄さん、キャサリンと闘うなんで随分久しぶりだね。」

マリオ

「そう言えばそうだな……………」。

キャサリン

「それじゃ行くわよっ……………それっ!!」

ポーン!

キャサリンは口から大きな卵を吐き出す。

マリオ

「やっぱり攻撃方法は変わらないな。」

ルイージ

「そうだね……………ここは僕に任せて!!」

スウウツ

ルイージはオバキュームで卵を吸い付ける。

ルイージ
「発射!!」

ドガッ!!

キャサリン
「ぐえっ!!」

ルイージがオバキュームで吸い付けた卵を発射して、キャサリンの顔面にぶつける。

キャサリン
「いっつゝ……よくもやってくれたわね!!」

スポポポッ!

キャサリンは四方八方に卵を乱射する。

ネギ
「わっ!? 無茶苦茶に卵を発射してきた!」

マリオ

「こ、これじゃ避けるのが精一杯だ……………」

ネギやマリオ達は卵を一生懸命避ける。

のどか

「ア、アデアット!!」

パアアッ

のどかは咄嗟に『いどのえにつき』を呼び出す。

のどか

「えっくと……………マリオさん!左へ避けて下さい!!」

マリオ

「えっ?わ、分かった!」

マリオはのどかの言う通りに左へ避ける。

のどか

「ネギ先生は右です!!」

ネギ

「は、はい！」

ネギものどかの言う通りに右へ避ける。

のどか

「ルイージさんはそのまま右へ、明日菜さんと刹那さんはそれぞれ左右へ避けて下さい！」

ルイージ

「う、うん！」

刹那

「分かりました！」

明日菜

「本屋さん、ありがとうございます！」

それぞれのどかの指示通りに避ける。

キャサリン

「ハアハアッ……………もおっ！何で当たらないのよっ！……！」

キャサリンは疲れたせいで攻撃を止める。

ネギ

「今だ！ラス・テル マ・スキル マギステル……………風の精霊1
1人、縛鎖となって敵を捕らえよ！」魔法の射手・戒めの風矢」！
「！」

バシユユツ

キャサリン

「ちよ、ちよっと！何よこれ!？」

ネギは敵を拘束する魔法でキャサリンの動きを止める。

ネギ

「マリオさん！今です!！」

マリオ

「分かった！スーパーマリオパンチ!！」

ボカアアツ!!

キャサリン

「ぐへっ!!」

マリオの強力なパンチがキャサリンの顔にクリティカルヒットする。

キャサリン

「や、やられちゃったわ……………」

バタッ

キャサリンはそのまま倒れてしまう。

マリオ

「ふっつ、意外と手間取った……………」

木乃香

「……………この子、もしかして死んだん？」

ルイーダ

「いや、気を失ってるだけだよ。」

マリオ

「それに、キャサリンはこの位じゃ死なないよ。」

マリオは苦笑いしながら答える。

ネギ

「それにしても、この先は他にどんな強敵が待ち受けているんでしょうか？」

マリオ

「恐らく僕らが今まで闘ってきた奴だと思う。」

ルイージ

「それだったら、あまり警戒しなくてもいいんじゃない？」

マリオ

「いや、例え前に倒した奴でも決して油断はしないように！ネギ君達もいいかい？」

ネギ一行

「はい！」

マリオの言葉にネギ達は強く返事する。

マリオ

「よし、それじゃ次へ進もう！」

ネギー行とマリオブラザーズは次の部屋へ進んでいく。

第三話 待ち受ける強敵達（前編）（後書き）

最初の敵・キャサリンを倒したネギー行とマリオブラザーズ。

果たしてこの先にはどんな強敵が待っているのでしょうか!？

第四話く待ち受ける強敵達（後編）く（前書き）

キャサリンを倒したネギー一行とマリオブラザーズに待ち受ける強敵達はどんな奴らなのか？

少し話の展開が早いと思いますが、どうぞお楽しみ下さい！

第四話 待ち受ける強敵達（後編）

くッパ城・中心部

最初の敵であるキャサリンを倒したネギー行とマリオブラザーズは次の強敵が待ち受ける部屋へ進もうとしていた。

マリオ

「それじゃ、次の部屋へ進むけどいいかい？」

ネギ

「はい！」

ルイージ

「じゃあ、開けるよ。」

ギイイイッ

ルイージが次の部屋へ続く扉を開けると、全員部屋へと入っていく。

？

「ガアアアツ!!」

明日菜

「な、何この馬鹿でかい奴は!？」

部屋の中には赤と白の斑点のビキニパンツを履いた巨大な植物の化け物がいた。

マリオ

「今度はボスパックンのお出ましか。」

ルイージ

「みんな、コイツは色んな攻撃してくるから気をつけて……………」。

ボスパックン

「ゴハアアツ!!」

ドバアアツ

ルイージ

「うわっ!?!」

ボスパックンが口から吐き出した泥がルイージに命中して、ルイージは泥まみれになる。

ネギ

「ル、ルイージさん!?!」

のどか

「だ、大丈夫ですか?」

ルイージ

「う、うん……………何とかね……………」

マリオ

「待ってる、今洗ってやるから。」

ドブユエツ

マリオは背中に背負わせてあるポンプでルイージの体中に付いている泥を落とす。

ルイージ

「サ、サンキュー兄さん……………」

ルイージはしぶ濡れになりながらマリオに礼を言う。

ポンプ

「マリオさん、あいつの倒し方は分かってマスよね？」

マリオ

「ああ、奴が口を開けた瞬間に水をいっぱい飲ませて、奴の腹が水でいっぱいになって転んだ時に腹をヒップドロップするんだったな。」

「

ネギ

「それでしたら、早速やってみましょう。」

ボスパックン

「グワアアツ!!!」

木乃香

「こ、今度は何や?」

ボスパックンが雄叫びを上げる中、のどかが『いどのえにつき』を見て驚愕する。

のどか

「皆さん、少し離れて下さい！竜巻が発生します！！」

ネギ

「た、竜巻！？」

マリオ

「そうだ！奴は手の部分の葉っぱで竜巻を出すんだ！！」

ルイージ

「急げ〜！！」

ボスパックン

「ガアアッ！！」

ビュウウウツ！！

全員ボスパックンから少し距離を置いた後、ボスパックンが手の部分の葉っぱを振り下ろした瞬間、三つの大きな竜巻が発生してボスパックンを守るかのように周りを回り続ける。

ネギ

「これじゃ迂闊に近付けませんね。」

マリオ

「うーん、どうすれば……………」

刹那

「……………私が『瞬動』で奴に接近して、奴の手を切り落とします。」

そう言うと、刹那は夕凧を構えながら一歩前に出る。

ルイージ

「せ、刹那ちゃん！迂闊に近付いちゃ危ないよ！」

刹那

「大丈夫です。」

シュツ

ルイージが刹那を止めようとした時、刹那はその場から消えてしま
う。

ルイージ

「あれ！？刹那ちゃんが消えた！？」

ネギ

「いえ、刹那さんはあそこです。」

ルイージ

「えっ?……あっ!?!」

ネギが指さす方を見ると、刹那はボスパックンの目の前で立っていた。

ルイージ

「い、いつの間に?」

マリオ

「あの子、一瞬で竜巻を避けながら接近したのか?」

マリオとルイージは刹那の瞬動に驚愕する。

ボスパックン

「ゲガッ!?!」

ボスパックンは目の前に現れた刹那を見て驚く。

刹那

「神鳴流奥義・斬岩剣!!」

スパッ!スパッ!

ボスパツクン

「グガアアツ!!」

刹那は夕風でボスパツクンの両手（葉っぱ）を切り落とす。

ビュユツ……

それと同時に、三つの大きな竜巻は消えていく。

刹那

「マリオさん!今の内です!!」

マリオ

「分かった!放水!!」

ブシュユツッ!!

ボスパツクン

「ガポポポ……………」

マリオはボスパツクンの口の中目掛けて放水する。

ボスパツクン

「グ、ググ……………」

バターーン!!

ボスパツクンは水を沢山飲んで腹が膨れてしまい、遂に後ろへ転んでしまう。

マリオ

「とどめだ! ヒップドロップ!」

ドッシーーン!!

ボスパツクン

「グガアアアッ!!」

マリオはボスパックンの腹の上へジャンプして、勢い良く腹に攻撃する。

ボスパックン

「ガ……ガガ……。」

ドロドロッ

ボスパックンは泥のように溶けていく。

のどか

「と、溶けちゃった。」

明日菜

「あいつは一体何だったの？」

ネギ

「手強い相手でしたね。」

マリオ

「まさかボスパックンまで出て来るとは……とにかく、先へ進も

う。」

ネギ

「は、はい！」

ギイイイツ

マリオは次の部屋へ続く扉を開けて、全員部屋の中へ入る。

木乃香

「……………誰もいないようだな。」

刹那

「恐らく何処かへ潜んでいるんです。」

マリオ

「きつとそうだ、油断しないでね。」

そう言いつと、全員で部屋の周りを見回す。

ネギ

「うわっ!?!」

明日菜

「ネギ!?!どうしたの!?!」

全員ネギの方を向くと、ネギが自分の姿が写ってる鏡を見て慌てふためくネギの姿が目に入る。

ネギ

「き、気をつけて下さい皆さん!僕そっくりの敵がそこに……………。」

ネギ以外全員

「……………」。

マリオ達は鏡を見て慌てているネギに啞然とする。

カモ

「落ち着けよ兄貴、それはただの鏡だぜ。」

ネギ

「へ！？か、鏡？」

ネギは目を丸くしながら改めて自分が写ってる鏡を見つめる。

ネギ

「な、なんだ……………びっくりした〜。」

明日菜

「全く、しっかりしなさいよ。」

全員

「ハハハハハハハ！」

部屋中にみんなの笑い声が響き渡る。

？

「……………ケケケケ。」

ルイージ

「!？」

ルイージは微かに聞こえた不気味な笑い声に反応して辺りを見回す。

マリオ

「ルイージ、どうかしたか？」

ルイージ

「いや、何か変な笑い声が聞こえたような気がして……………」

明日菜

「きゃっ!?!」

マリオ

「な、何だ!？」

マリオとルイーダは明日菜の叫び声に反応して振り向くと、明日菜が震えながら『ハマノツルギ』を掲げていた。

ネギ

「あ、明日菜さん！？どうしたんですか！？」

明日菜

「わ、分からない……………体が勝手に動くの。」

木乃香

「明日菜？一体どないした……………あっ！？」

木乃香は何かを発見して目を見開きながら驚愕する。

刹那

「お嬢様、どうなさいました？」

木乃香

「か、鏡……………鏡見てみて。」

刹那

「鏡……………なっ！？」

刹那を含む全員が明日菜を写している鏡を見ると、明日菜の背後に王冠を被った白くて丸っこいオバケが引っ付いていた。

ネギ

「こ、これは一体……………」

？

「ケケケ、どうやらバレちゃったようだな。」

ルイージ

「お、お前はまさか……………キングテレサか!？」

キングテレサ

「そうさ、俺がこの小娘に取り憑いているのさ。」

ネギ

「そ、そんな……………じゃあ、明日菜さんは……………」

マリオ

「ああ、キングテレサの操り人形になってしまった。」

マリオの言葉を聞いたネギ達は困惑な表情をする。

キングテレサ

「ケケケ、攻撃したきゃすればいいさ！ただし、攻撃してもダメージを受けるのはこの小娘だな。」

刹那

「くっ！卑怯な……。」

ネギ

「明日菜さん……。」

マリオ

「ルイージ！お前が持つてるオバキュームでキングテレサを……。」

ルイージ

「駄目だ……。キングテレサがちゃんと実体化しないと吸い込む事が出来ないよ。」

のどか

「そんな……。」

木乃香

「ほなら、どないすればええの？」

全員この状況に困惑する中、キングテレサに操られてる明日菜が動き出そうとする。

キングテレサ

「さあ！お前が今持つてるそのハリセンで奴らをぶっ倒せ！！」

そう言っと、明日菜は『ハマノツルギ』を持つてる腕を振り上げる。

明日菜

「うっ……うっ……。」

キングテレサ

「やれーっ！ー！！」

キングテレサの大声で全員目をつむるが……。

キングテレサ

「……………あ、あれ！？」

ネギ

「……………え？」

全員目を開けると、明日菜が震えながら『ハマノツルギ』を上に掲げたまま動きを止めていた。

明日菜

「だ、誰が……………アンタなんか……………操られる……………もんですか！」

キングテレサ

「ば、馬鹿な！？この小娘、バカ力だけで抑えているというのか！？」

キングテレサはバカ力だけで抑えている明日菜に驚愕する。

ネギ

「す、凄い……………」

木乃香

「流石明日菜や……………」

ネギ達は明日菜を見て啞然とする。

マリオ

「そ、それより今の内に何とかしないと……。」

ルイーダ

「でも、どうすれば……。」

カモ

「俺っちに任せて下せえ！」

突然カモがネギの肩から飛び出してくる。

ネギ

「カ、カモ君!？」

ルイーダ

「な、何?あの生物は……。」

マリオ

「さ、さあ……。」

マリオとルイーダはカモを見て目を丸くする。

ネギ

「カモ君、危ないよ！」

明日菜

「エ、エロガモ？」

キングテレサ

「あ？何だあのちっこい動物は。」

明日菜とキングテレサはこっちへやって来るカモが目映る。

カモ

「姐さん！目をつむってくれ！！」

明日菜

「えっ？わ、分かった！」

明日菜はカモの言う通りに目をつむる。

カモ

「くらえ！オコジヨフラッシュュ！！」

カツ!!

キングテレサ

「ぐえっ!ま、眩しい……………」

カモが持っていた金属マグネシウムとライターで強い光が発生し、それに驚いたキングテレサが実体化する。

マリオ

「今だルイージ!キングテレサが実体化したぞ!!」

ルイージ

「分かってるよ!それーっ!!」

スウウウツ

キングテレサ

「し、しまった!ぎゃあああああっ!!」

キングテレサはオバキュームに吸い込まれてしまった。

ルイージ

「……………ふっつ、吸引完了っ！」

カモ

「どうでい兄貴、俺っちだってやる時はやるだろ？」

ネギ

「うん！見直したよカモ君！！」

明日菜

「……………まさかエロガモに助けられるなんてね。」

明日菜は苦笑いしながら頬を掻く。

木乃香

「ほら明日菜、カモ君にお礼を言わなアカンやろ？」

明日菜

「え？そ、そうね……………あ、ありがとね。」

明日菜は少し照れ臭そうにカモにお礼を言う。

カモ

「いいんすよ姐さん！報酬は姐さんの下着で結構で……………」。

グニユ！！

カモ

「ぐえっ！！」

明日菜

「調子に乗るな！」

明日菜は力強くカモを握る。

マリオ

「……………そ、そろそろ進もうか。」

ネギ

「そ、そうですね。」

ネギ達は苦笑いしながら次の部屋へ進もうとする。

ギイイッ

扉を開けて、全員次の部屋へ入っていく。

？

「グワツハツハ！よく此処まで来れたな！！」

部屋の中には、痩せ型の体型に細長い髭に長い顎で紫色の帽子に真っ黒いオーバーオールを着た男がいた。

ルイージ

「ワ、ワルイージじゃないか！？」

ルイージはワルイージを見て驚愕する。

ワルイージ

「まず此処までやって来た事だけ褒めてやる……………だが、この先はワルイージ様が一步も通させんぞ！」

マリオ

(……………またとんでもない奴が現れたもんだ。)

マリオは思わず頭を抑える。

ネギ

「……………あの人、ルイージさんに少し似てませんか？」

明日菜

「そ、そう言えばそうね……………」。

ネギは小さい声で明日菜に尋ねる。

ワルイージ

「さあ！そろそろ始めようか……………」。

？

「うおおおおっ！…！」

全員

「!?!」

ドガアアツ!!

ワルイージ

「ぐわあああつ!!」

ズボツ!!

ワルイージは突然現れた何者かに体当たりされて、壁に減り込んでしまっ。

?

「ハアハアツ……………此処まで来るのに苦労したぞ。」

?

「げへへ、でもやっとマリオに会う事が出来たぞ。」

ワルイージを吹っ飛ばしたのは、卵の殻を頭の部分と下半身に被せた子供みたいな男と眼鏡を掛けて、真ん中に×(ばつ)の印が付い

た服を着た男の二人組であった。

マリオ

「コワッパ！それにメガバツテンのペケダーまで……………」

マリオはコワッパとペケダーを見て驚愕する。

コワッパ

「マリオ！俺達はお前を倒す為に同盟を組んだのだ！」

ペケダー

「その通り！我々が手を組めばお前など敵ではないわ！」

マリオ

（…………嫌な同盟だな。）

マリオは二人の言葉を聞いて再び頭を抑える。

木乃香

「…………あの二人、マリオはんに相当恨みがあるようやな。」

刹那

「ええ、マリオさんはあの二人に何をしたんでしょうか？」

木乃香と刹那は目を丸くしながらコワツパ達を見る。

ルイージ

「……………兄さん、あの二人に何したの？」

マリオ

「まあ、ちよつとね……………」

ルイージの質問にマリオは曖昧に答える。

コワツパ

「という訳で、今度こそ此処で決着を着けてやるぞ……………行くぜ！
パワーアップ！！」

コワツパが叫んだ後、背中には羽根が生えており、頭に被ってる卵の殻の真ん中はトゲみたいに尖っており、手には杖のような物を持っている。

ネギ

「わっ！？何か色々備わってる……………」

マリオ

(……………今までパワーアップした形態をまとめて一つにしたって感じだな。)

ネギー行とルイージはコワツパのパワーアップした姿を見て驚愕するが、マリオだけは頭を抑える。

ペケダー

「げへへ、わしも新たなロボを呼び出すぞ……………いでよ！バツテンダー・マーク3!!」

ドッシーン!!

ペケダーが叫ぶと、ピンクと黒のシマ模様の紙箱のようなボディに蛇腹形の紙の手足で出来てるロボットが現れる。

明日菜

「うわー、デザインが微妙……………」

マリオ

(……………初代とマーク2の色を合わさっただけで原形も全然変わってない。)

全員がバツテンダー・マーク3を見て呆然とする。

ペケダー

「それでは早速、戦闘開始だ!!」

ガシャーーン!!

ペケダーはバツテンダー・マーク3の操縦席に乗り込む。

ペケダー

「ロケットパンチ発射!!」

ドカン!ドカン!

ペケダーはバツテンダー・マーク3の手を発射させる。

マリオ

「みんな!避ける!!」

マリオがそう言いつつ、全員間一髪避ける。

ペケダー

「避けても無駄だ！そのロケットパンチは命中するまで止まらないんだー！」

明日菜

「そ、そんなのアリ〜！？」

ネギ

「と、とにかく避けないと……………」。

コワッパ

「おらおら！よそ見してる場合じゃないぜー！」

ビュー！ビュー！ビュー！

コワッパが杖を振りかざすと、杖の先から光弾を出してマリオ達に攻撃してくる。

ルイージ

「こ、これじゃキリがないよー！」

ネギ

「一体どうすれば……………ん？」

ネギは避けている中、バッテングダー・マーク3のロケットパンチが目に映る。

ネギ

「……………そつだ！」

ネギは何か閃いたかのように、杖に跨がり飛び立つ。

明日菜

「ネギ？…どうしたのよ！？」

ルイージ

「あ！ネギ君が飛んだ！！！」

ルイージは杖に跨がって飛行するネギを見て驚愕する。

ネギ

（よし！パンチが一つだけ僕の追いかけているな。）

ネギは後ろを向くと、バッテングダー・マーク3のロケットパンチの一つがネギを追跡していた。

のどか

「あ！ネギ先生が追われてる……………」。

マリオ

「くっ……………助けに行きたいけど、こっちも精一杯なんだ！」

マリオ達はバッテンドー・マーク3のロケットパンチとコワツパの魔法攻撃から避けるのに必死だった。

コワツパ

「ほれほれー！避けるだけじゃ俺達には勝てないぜ！」

ネギ

「そつでもありませんよ！！！」

コワツパ

「何！？」

コワツパは声が出た方を見ると、ネギが猛スピードで近付いてくる。

コワツパ

「ほおっつ、俺とやる気みたいだな……いいだろう！マリオの仲間
間は俺の敵だからな！」

そう言つと、コワツパは頭のとゲをネギに向けて突っ込んで来る。

明日菜

「ネギ！避けて！！」

マリオ

「危ない！！」

ネギ

（いや、まだまだ……ぎりぎりまで引き付けないと……）

ネギは明日菜達の制止も聞かずに、そのままコワツパに突っ込もうとする。

コワツパ

「くらえ……！」

コワツパの頭のとゲがどんどん迫ってくるが……。

ネギ

(……………今だ!!)

シュッ

ネギはコワツパとぶつかってしまっ程の距離まで近付くと、そのまま上昇して避ける。

ドガアアッ!!

コワツパ

「ぐおおおおっ!!」

ネギを追っかけていたバッテンドー・マーク3のロケットパンチがコワツパに命中する。

マリオ

「あ!ロボのパンチがコワツパに命中した。」

明日菜

「ネギったら、やるじゃない!」

バッターーン!!

コワッパ

「ほげ〜っ。」

コワッパは地面へ落下して、そのまま気絶してしまった。

ペケダー

「ぐへっ!? 同士がやられてしまったか……………だが、まだパンチはあと一つあるぞ!」

ルイージ

「兄さん! もう一つのパンチが兄さんの方に来てるよ!」

ルイージの言う通りに、バッテンドー・マーク3のロケットパンチはマリオに向かってくる。

ネギ

「マリオさん! 逃げて下さい!」

マリオ

「……………いや、逃げる必要はないよ。」

明日菜

「えっ!?!」

マリオの言葉に全員耳を疑った。

ペケダー

「げっへへへ!流石のマリオも観念したようだな。」

マリオ

「……………ポンプ!あのパンチを受け止めてくれ!…」

ポンプ

「了解!」

そう言うと、マリオはポンプの顔部分をロケットパンチに向ける。

ズボッ!!

すると、ポンプは口でキャッチする形でロケットパンチを受け止める。

刹那

「ポンプが……受け止めた？」

木乃香

「……………結構根性あるなあ。」

明日菜

「そういう問題じゃないと思うけど……………」

明日菜達はロケットパンチを受け止めたポンプを見て感心する。

マリオ

「よし！放水用意！！」

そう言うと、マリオはバッテンドー・マーク3にポンプを向ける。

ペケダー

「げへっ！？ま、まさか……………」

マリオ

「発射——！！」

ドピュユッ!!

マリオはポンプを口にロケットパンチを詰めたまま放水する。

ドガアアッ!!

ロケットパンチがバツテンダー・マーク3の真ん中部分を貫通させる。

ネギ

「や、やった!!」

ルイージ

「流石兄さんだ!!」

ゴゴゴゴゴッ

ペケダー

「い、嫌な予感……。」

ボカーーーン!!

ペケダー

「げへ〜〜っ!」

バッテンドー・マーク3はショートしてしまい、そのまま爆発する。

バッターーン!!

ペケダーは全身真っ黒になりながら地面へと落下する。

ペケダー

「ま、またやられてしまった……………ガクッ。」

ペケダーはそのまま気絶する。

マリオ

「……………まったく、コイツらは本当にしつこいなあ。」

マリオは気絶してるコワッパとペケダーを見て溜め息をつく。

ネギ

「それにしても、マリオさんの作戦にはビックリしましたよ!」

マリオ

「いやいや、ネギ君の誘導作戦も中々だったよ。」

ネギ

「い、いえ………僕のなんてたまたまですよ。」

ネギとマリオはお互いの行動に評価する。

カモ

「ちよいとお二方、そろそろ先へ進んだ方がいいんじゃないんですかい？」

ネギ

「そ、そうだね！」

マリオ

「………そろそろ先へ進めばクッパが居る場所まで到着するハズだよ。」

明日菜

「だったら、どんどん進んで行きましょ！」

全員

「おおーっ！！」

ネギー行とマリオブラザーズは更に奥へと進んでいく。

ワルイージ

「……………俺様の出番はこれだけかよ。」

ワルイージは壁に減り込んだまま呟く。

第四話〈待ち受ける強敵達（後編）〉（後書き）

という訳で、マリオシリーズでお馴染みのボスキャラやペーパーマリオシリーズで最も数回マリオと闘うコワツパとペケダーを登場させました。

因みに、この小説に登場したキャラは『ゲーム世界を巡る旅』登場人物紹介集』で詳しく紹介しますので、そちらもお見逃しなく！

次回からあのキャラが登場します！

第五話　本当の黒幕

く　クツパ城・最深部

ボスパックン、キングテレサ、コワツパ&ペケダーを倒したネギ一行とマリオブラザーズはクツパ城の奥へどんどん進んでいた。

ルイージ

「……………敵はもう現れないみたいだね。」

マリオ

「いや、きっと僕達を待ち伏せているのかもしれない。」

ネギ

「それでしたら、きっと何処かに……………」

バン！バン！バン！

明日菜

「な、何の音!?!」

突然何かを叩く大きな音に全員警戒する。

木乃香

「ん？あの部屋からや。」

木乃香は左側の壁にある扉を指さす。

刹那

「誰か入っているんでしょうか？」

マリオ

「まさか、ピーチ姫達が……………」

マリオは慌てて扉の前まで来て、ドアノブに手を掛ける。

ガチャガチャ！

マリオ

「駄目だ！鍵が掛かって開かない。」

明日菜

「……………マリオさん、ちょっとそごいで。」

マリオ

「え？ああ……………」

マリオは扉から一旦離れる。

明日菜

「とりゃーっ！っ！」

ガシャーン！！

明日菜の強力な蹴りで扉を打ち破る。

全員

（す、凄い……………」

全員開いた口が塞がらない状態で明日菜を見つめる。

マリオ

「あ！それよりピーチ姫達を……………」

？

「ぬお〜っ！もつと静かに扉を開けれんのかー！！」

全員

「!?!」

扉が開いた入口から背中の甲羅に数十本のトゲを付けた亀のような生物が頭を抑えながら出て来る。

マリオ&ルイーダ

「ク、クツパ!?!」

マリオとルイーダはクツパの姿を見て驚愕する。

クツパ

「マ、マリオ!?!それにルイーダも……………」

クツパもマリオとルイーダの姿を見て驚愕する。

ネギ

「え!?!この亀みたいなのがクツパさんなんですか?」

明日菜

「そ、そうだけど……………どうかした？」

ネギ

「い、いえ……………かなりイメージと違ったもので……………」

木乃香

（ネギ君、どんなイメージしてたんやろ？）

木乃香はネギの言葉を聞いて首を傾げる。

クツパ

（マ、マズイな……………奴らに本当の事が知れたら……………なんとかごまかさなければ……………。）

クツパは険しい表情で考え込んでいる。

クツパ

「……………二人共、元気にしてたか？」

マリオ

「……………は？」

クッパの突拍子のない発言にマリオは困惑する。

クッパ

（わ、我輩の馬鹿！何を訳の分からない事を……………これでは不自然極まらないわ！）

クッパは自分の頭を軽く叩く。

ルイーダ

「……………なんだかクッパの様子が可笑しいね。」

のどか

「何かあったんでしょうか？」

マリオを除く全員がクッパの様子についてヒソヒソと話す。

マリオ

「それよりクッパ！ピーチ姫達を返せ！！」

クッパ

「ピーチ姫？何の事だ？」

クッパはマリオの言葉を聞いて首を傾げる。

マリオ

「惚けるな！ピーチ姫の他にデイジー姫やロゼッタを誘拐しただろ
！！！」

クッパ

「ちよつと待て！ピーチ姫はともかく、何故デイジー姫のようなあんな気の強い女を誘拐せねばならんのだ！？それにロゼッタって誰だ？」

ルイージ

「ほら、カートレースの時にいた……………」

クッパ

「……………ああ！あの右目を前髪で隠してたあの女か。」

クッパはルイージの言葉を聞いて納得したように思い出す。

クッパ

「……………言っておくが、我輩はまだ誰も誘拐しておらんぞ！」

マリオ

「何だつて？」

マリオはクッパの言葉を聞いて首を傾げる。

ルイーダ

「じゃあ、一体誰がこんな事を……それに、あの部屋で何やってたの？」

クッパ

「そ、それは……お前らに言つつもりは無い！」

そう言うと、クッパはマリオ達に背を向ける。

ルイーダ

「あ、りや、だんまり決め込んだ……。」

マリオ

「クッパは一度こうと決めたら頑固だからな。」

マリオとルイーダは思わず頭を掻く。

刹那

「ネギ先生、どうしましょう?」

ネギ

「うーん……………あ!そっだ!」

ネギは何かを思い付いたように声を上げる。

ネギ

「のどかさん、お願いします。」

のどか

「え?あ、はい……………分かりました。」

ネギはのどかに何かをお願いすると、のどかは恐る恐るクッパに近づく。

のどか

「あ、あの……………何であの部屋の中にいたんでしょうか?」

クッパ

「さっきも言っただろ!お前らに言う必要は無い!」

のどか

「あ、あう……………し、失礼しました。」

のどかはクツパの怒声に怯えながらネギ達の元へ戻り、『いどのえにつき』を開く。

のどか

「読みます……………」
『うう〜っ、この城の主である我輩がまたあいつに城を乗っ取られて、しかも物置部屋に閉じ込められたなんて言えるものか!』

クツパ

「な、何っ!？」

クツパはのどかの読み上げた言葉を聞いて思わず振り向く。

クツパ

「お、おい貴様!何故我輩の考えていた事が分かったのだ!？」

クツパは動揺しながらのどかに詰め寄る。

のどか

「あ、いや、その……………あうっ。」

のどかは困った表情でネギ達を見つめる。

マリオ

「お、落ち着けクッパ！それより、城が乗っ取られたってどういう事なんだ？」

クッパ

「うっ……………」

クッパはマリオの質問に少し間を開けるが……………。

クッパ

「……………恥ずかしい事にまたあいつに我輩の城を乗っ取られてしまったのだ……………お前もよく知っている奴にな。」

マリオ

「僕も知っている奴……………誰なんだ？」

クッパ

「……………カジオーだ。」

マリオ

「カ、カジオーだって!？」

マリオはクツパの言葉に耳を疑った。

マリオ

「そ、そんな馬鹿な!カジオーは前に倒したハズじゃ……………」

クツパ

「ああ……………だが、奴は我輩の前に現れた……………息子の「ルイージ」(ユニア)を人質にしてな。」

ルイージ

「え!?!クツパ!」が……………」

ルイージはクツパの息子のクツパ「ルイージ」が誘拐されている事を聞いて驚愕する。

ネギ

「クツパさんって子供いたんですね。」

明日菜

「私も初めて知ったわ。」

木乃香

「奥さんってどんな人やる？」

刹那

「やはり、相手も亀なのでしょうかね？」

のどか

「少し気になりますね……………」

ネギ達のヒソヒソ話にクツパは聞き耳を立てながら苛立つ。

クツパ

「え〜い！さつきから失礼だぞ貴様ら！！」

ネギ

「あ、すみません。」

ネギ達は怒り出したクツパに慌てて謝る。

クツパ

「マリオ！コイツらは一体何なのだ！？」

マリオ

「僕達に協力してくれる新しい仲間達さ。」

ネギ

「そ、そんな大袈裟な……………」

マリオの言葉にネギは頬を紅く染める。

ネギ

「あ！そうだ……………クッパさんにもこれを渡しておきます。」

そう言うと、ネギはクッパにマリオ達にも渡したキノコ型バッチを渡す。

クッパ

「……………何だこれは？」

ネギ

「これはマスターハンドさんがスマッシュブラザーズの皆さんに渡してくれと……………」

クッパ

「何！？マスターハンドからだと？」

クッパはマスターハンドの名前を聞いて耳を傾ける。

ルイージ

「確かマスターハンドが言うには、これから起こりうる災難に備えて……………あ、そうか！」

マリオ

「ん？どうした？」

ルイージ

「マスターハンドが言った災難ってこの事だったんだよ！」

マリオ

「あ！そうか！！」

マリオはルイージの言葉に納得する。

ネギ

「え？いや、そういう訳じゃ……………」。

カモ

「兄貴！」

ネギが弁解しようとした時、カモが呼び止める。

カモ

「そう思い込ませれば、こっちとしても都合がいいじゃないか。」

ネギ

「で、でも……………」

明日菜

「まあ、それだったら納得がいくからいいんじゃない？」

ネギ

「……………分かりました。」

ネギはあまり納得がいかないまま承諾する。

刹那

「……………ところで、皆さんがさっきおっしゃってたカジオーとは何

者なんですか？」

マリオ

「ああ、カジオーは以前にこのクッパ城を乗っ取って、この世界を武器や兵器だけの世界にしようと企んだ悪人なんだ。」

木乃香

「でも、マリオはんが倒したんやろ？」

クッパ

「厳密に言えば我輩が倒したんだがな。」

クッパ以外全員

「……………」。

クッパの嘘っぽい発言に全員黙り込む。

クッパ

（何だ？この空気は……………」。

マリオ

「そ、それは置いといて……………」確かに僕は仲間達と協力してカジオーをやっつけた。」

ルイーダ

「でも、何かの理由でカジオーが復活して、また悪さを始めた……」

マリオ

「ああ、そして奴はピーチ姫達を誘拐した……」

クッパ

「我輩の」r・もな……」

そう言うと、辺りに重い空気が流れる。

マリオ

「……クッパ、ここはまた協力しないか？」

クッパ

「何？また貴様と組むのか？」

マリオ

「お前も僕も目的は同じだろ？それに……大切な人を救いたい気持ちもさ。」

ネギ

「マリオさん……………」

クツパ

「……………」

クツパはしばらく真剣な眼差しをしているマリオを見つめる。

クツパ

「……………仕方ない！貴様がどうしても言つのなら一緒に組んでやらん事もないぞ。」

マリオ

「クツパ……………」

マリオはクツパの言葉を聞いて笑みを浮かべる。

クツパ

「だが、この件が片付いたらまた貴様と我輩はライバル同士だからな！」

マリオ

「ああ、分かってる！」

マリオとクッパはお互い見つめ合いながら語る。

ネギ

「あの二人、本当に仲が悪いんでしょうか？」

明日菜

「うーん……ちょっと難しいわね。」

ネギの質問に明日菜は曖昧に答える。

クッパ

「よし、それでは我が『新クッパ軍団』よ！ボスである我輩に付いて来るのだー！！」

そう言うと、クッパは先へ進んでいく。

明日菜

「ちょ、ちょっと！私達がいつクッパ軍団になったのよー！！」

木乃香

「まあまあ明日菜。」

怒り出す明日菜を木乃香が優しく宥める。

ルイージ

「やれやれ、相変わらずだね兄さん。」

マリオ

「ああ、でもそれがあいつらしいけどね。」

そう言つと、全員クッパの後を追つように進んでいく。

「城の更に最深部」

ネギ達はとても大きな扉の前に立っていた。

クツパ

「この中にカジオーがいるぞ。」

マリオ

「よし、全員準備はいいかい？」

マリオの言葉に全員静かに頷く。

マリオ

「それじゃ、突入だー！！」

パンツ!!

マリオが扉を蹴破ると、全員勢い良く部屋へ突入する。

?

「フフフ……マリオよ、待っておったぞ。」

マリオ達の前には、大きなハンマーを持って頭に王冠を被った白くて長い髭を生やした男がいた。

マリオ

「カジオー……………」

カジオー

「ほお、覚えていてくれて嬉しいぞ。」

マリオがカジオーを見て相手の名前を呟くと、カジオーは静かに笑い始める。

マリオ

「カジオー、お前がピーチ姫達を誘拐したんだな？」

カジオー

「フツ、察しの通りじゃ。」

カジオーは鼻で笑いながら答える。

マリオ

「どうしてそんな事を……………ピーチ姫達をどつするつもりだ!？」

カジオー

「どつするもどつするも……………あの娘共はお前をおびき出す為だけに誘拐したに過ぎんわ。」

ネギ

「な……………」

明日菜

「何ですって……………?」

刹那

「ただ、それだけの為に……………」

のどか

「酷い……………」

木乃香

「……………許されへん。」

カジオーの言葉にネギ達の表情が険しくなる。

クツパ

「貴様！そんなくだらぬ理由で息子の「」も……………」

マリオ

「待て！クツパ！！」

マリオはカジオーに攻撃を仕掛けようとしたクツパを制止する。

マリオ

「落ち着け、このまま突っ込んで行けば奴の思う壺だ。」

ルイージ

「でも兄さん！あんな事言われて腹が立たないの!？」

マリオ

「勿論僕だって腹が立つさ……でも、感情だけで突っ込んで奴には勝てない。」

ネギ

「マリオさん……………」。

刹那

「感情的になっても敵に勝てない……………か。」

マリオの言葉に全員目が覚めたように顔を上げる。

クッパ

「フツ、確かに……………我輩とした事がつい感情的になってしまったわ。」

ルイージ

「クッパはいつも感情的になってるような……………」。

クッパ

「……………何か言ったか？」

ルイージ

「い、いや別に……。」

ルイージはクッパから目を反らしながら答えをはぐらかす。

カジオー

「いつまでゴチャゴチャ言っておる！？そろそろ決着を着けようではないか！！」

ドゥスーン！！

カジオーは持っていたハンマーを地面に叩き付けながら言う。

ネギ

「皆さん！油断しないで下さい！！」

明日菜

「分かってるわよ！」

マリオ

「ルイージ！気を抜くなよ！！」

ルイージ

「勿論だよ！」

クツパ

「フン！せいせい我輩の足を引つ張るなよ！！！」

全員それぞれ気合いを入れると、カジオーに向かって身構える。

カジオー

「何処からでも掛かって来い！こわっぱ共よ！！！」

カジオーもマリオ達に向かってハンマーを振りかざそうとする。

第五話〜本当の黒幕〜（後書き）

次回からネギー行とマリオチームがいよいよカジオーと対決する！

果たして彼らはカジオーを倒す事が出来るのか？

お楽しみ！！

第六話 鍛冶王の最後

くっつパ城・最深部

ネギー行とマリオチームはカジオーと睨み合っていた。

ネギ

「行きます！契約執行180秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』・『桜咲刹那』！！」

パアアアツ

ネギが呪文を唱えると、明日菜と刹那の体中に魔力が覆う。

くっつパ

「何だ？あの小娘共の体が光ったぞ。」

カモ

「皆さん達は兄貴の魔力によって強さが超人的にアップしたのさ。」

ルイージ

「へえ、それは頼もしいね。」

マリオ

「よし、まず全員で攻撃してカジオーの体力を減らそう！」

ネギ

「はい！！」

明日菜

「それじゃ行くわよ！」

全員カジオーに向かって突っ込もうとするが……。

カジオー

「フッフ、わしに勝てるかな？……『メガトンハンマー』！！」

のどか

「み、皆さん！その場から離れて下さい……！」

クッパ

「な、何！？」

ネギ

「わ、分かりました！」

ドゥシーーン！！

ネギ達がのどかの忠告を聞いてその場から離れると、カジオーの振り下ろしたハンマーが巨大化してネギ達がいた地面を叩き付ける。

ルイーダ

「あ、危なっかった……………」

カジオー

「ほお、今の攻撃をよく避けられたな。」

カジオーは攻撃を避けたネギ達に少し驚く。

クツパ

「それより、あの小娘は何故奴の攻撃が分かったのだ？」

ネギ

「のどかさんは、あの持っている本で相手の思考を読み取る事が出来るんです。」

マリオ

「そう言えばキャサリンの時も……………」。

ルイージ

「それだったら、こっちもモンだね!」

マリオ

「でも、油断するなよ。」

クッパ

「フン!我輩は別に忠告など要らぬわ!」

そう吐き捨てると、クッパはカジオーに向かって駆け出す。

明日菜

「あ!ちよっと!」?

刹那

「明日菜さん、私達も行きましょう!」

明日菜と刹那もそれぞれ武器を構えて、クッパの後から駆け出していく。

クツパ

「くらえ！『クツパプレス』！！」

ゴオオオツ！！

クツパはカジオーに向かって口から炎を吐き出す。

カジオー

「フツ、そんな炎でわしを倒せるものか！！」

カジオーはクツパの炎を直に浴びたにも関わらず、クツパに向かってハンマーを振り下ろそうとする。

クツパ

「馬鹿な！？我輩の炎をもろに浴びたハズなのに……………」

明日菜

「危ない！！」

バシィィィン！！

カジオー

「ぬおっ!？」

明日菜が咄嗟に『ハマノツル』で攻撃してカジオーを撃退させる。

明日菜

「ふっつ、危ないところだった……。」

クツパ

「お、お前……。フン！部下がボスを助けるのは当然だからな。」

明日菜

「な!？ちよっと！助けてあげたのにその態度は何なのよ！」

クツパ

「誰も助けてなど言っておらんだろ！」

明日菜

「何ですって!？そんなんだから毎回マリオさんにやらねちゃつよよ！」

クツパ

「な、何だと？！？」

明日菜とクツパはお互いに睨み合う。

刹那

「ふ、二人共！喧嘩はやめて下さい！！」

刹那が慌てて二人を制止しようとした時……………。

カジオー

「おのれ〜！よくもやってくれたな〜！！」

カジオーが刹那に向かってハンマーを振り下ろそうとする。

ネギ

「刹那さん！危ない！！！」

刹那

「！！！」

シュッ

ドゥスーーン！！

刹那は瞬動でカジオーのハンマーから逃れる。

カジオー

「き、消えた！？」

カジオーは驚愕しながら辺りを見回す。

クツパ

「ム！？あの小娘は何処へ行ったのだ？」

明日菜

「刹那さんならあそこよ。」

明日菜はカジオーの頭上を指さす。

カジオー

「う、上だと？」

カジオーが恐る恐る見上げようとした時……………。

刹那

「神鳴流奥義・百烈桜華斬!!」

ズバァァン!!

カジオー

「ぐおおおつ!!」

ドッシーーン!!

刹那がカジオーの真上から攻撃すると、攻撃を受けたカジオーは壁に叩き付けられる。

明日菜

「流石刹那さんね。」

刹那

「いいえ、敵が隙だらけなんですよ。」

クツパ

(……………コイツら、女のクセに強いな。)

クツパは明日菜と刹那を唾然としながら見つめる。

ルイージ

「ネギ君、あの子達って本当に強いね。」

ネギ

「は、はい……………二人はいつも剣の稽古をしているんです。」

マリオ

「成程ね……………」

マリオはネギの説明に納得する。

カジオー

「お、おのれ〜！」

カジオーはゆっくりと立ち上がる。

マリオ

「やっぱり、これくらいじゃあやられないか。」

カジオー

「次はこれだ！『レインソード』！！」

のどか

「あっ！！」

のどかは『いどのえにつき』を見て驚愕する。

木乃香

「どないしたん？」

のどか

「頭上に注意して下さい！！」

明日菜

「え？上って……………」

明日菜は頭上を見上げると、沢山の短剣が雨のように降ってくる。

ルイーダ

「わっ！？剣が沢山降ってきた！！」

マリオ

「みんな！避ける！！」

マリオの声と共に短剣がどんどん近付いてきて、全員それを間一髪避ける。

明日菜

「うわっ！危ない！！」

刹那

「な、なんて危険な技だ……………」

マリオ

「くそっ……………攻撃を止めるー！！」

ブシユユッ

カジオー

「ぬわっぷ！？」

マリオがカジオーに向けてポンプから水を放水すると、短剣の雨が止む。

明日菜

「はぁっつ、やっとおさまった。」

のどか

「い、痛い……………」

ネギ

「の、のどかさん!?!」

全員のだかの方を見ると、足に切り傷を負ったのだかが目に写った。

ネギ

「大丈夫ですか!?!」

のどか

「は、はい……………」

木乃香

「ネギ君、ウチの力で傷を治すから安心してや。」

ネギ

「お、お願いします。」

ネギはこの場を木乃香に任せて、マリオ達の元へ戻る。

明日菜

「ネギ、本屋ちゃんどうだった？」

ネギ

「大丈夫です、足に軽い切り傷を負っただけです。」

ルイーダ

「そう、良かった。」

全員のどかの容態を聞いて安心する。

カジオー

「フン、役に立たない者など邪魔なだけだろうに。」

マリオ

「な、何だと？」

ネギ

「のどかさんが……役立たず?」

カジオーの言葉にマリオとネギの表情が更に険しくなる。

ネギ

「……………マリオさん、ちょっといいですか?」

マリオ

「ん?何だい?」

ネギとマリオは他のみんなに聞こえないように何かを話し合う。

明日菜

「ちょっと、二人だけ何の話してるのよ?」

刹那

「明日菜さん、ここは二人に任せてみましょう。」

明日菜

「そ、そっね……………」

明日菜は刹那に言われて二人の様子を伺う事にした。

マリオ

「……………よし、それで行こう。」

ネギ

「お願いします。」

二人が話し終わると、揃ってカジオーの方を見る。

カジオー

「どうした？掛かって来んのか？」

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………風精召喚 剣を執る
戦友！迎え撃て！！！」

ブワアアッ

ネギが呪文を唱えると、ネギそっくりの精霊を8体召喚されて、そのままカジオーに向かって突っ込んでいく。

カジオー

「ムツ!?分身か……幾ら数を増やしても無駄な事じゃ!」

ドスン!ドスン!

カジオーは接近してくる精霊を次々とハンマーで潰していく。

クツパ

「お、おい!簡単にやられてしまってるではないか。」

明日菜

「大丈夫、あれはきっと罠よ。」

ルイージ

「罠?」

明日菜の言葉にクツパとルイージは首を傾げる。

カジオー

「ハハハハ!こんなに弱くては話にならないな。」

ドスーン!!

カジオーが最後の一匹の精霊をハンマーで潰した時……………。

マリオ

「こつちだカジオー！」

カジオー

「何っ!？」

カジオーが上を見上げると、ジャンプで高く跳んでいるマリオが目に入った。

マリオ

「スーパー連続ジャンプ!!」

ボカッ!ボカッ!ボカッ!ボカッ!ボカッ!

カジオー

「ぐぬっ!お、おのれ……………。」

マリオは連続ジャンプ攻撃でカジオーに攻撃する。

マリオ

「ネギ君！今だ！！」

ネギ

「はい！！」

カジオー

「ぬっ！？」

ネギはいつの間にかカジオーの目の前にいた。

ネギ

「契約執行0・5秒 ネギ・スプリングフィールド！」

ボガッ！！

カジオー

「はっ！？」

ネギが再び呪文を唱えると、ネギはカジオーの腹部に強力なパンチを繰り出す。

カジオー

「うぐぐぐ……………」

カジオーは堪らず腹を抑える。

ネギ

「Marioさん！離れて下さい！！」

Mario

「分かった！！」

ドガッ

カジオー

「あだっ！！」

Marioはカジオーを踏み台にして、その場から離れる。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。」

呪文復唱中にネギがカジオーの腹に手を置くと……………。

ネギ

「白き雷！！！」

ズバアアアツ！！

カジオー

「ぬおおおっ！！！」

ネギが呪文を全て唱えた直後、カジオーの体に強力な電気が走る。

ルイージ

「す、凄い……………」

クツパ

「あの小僧は一体何者なのだ？」

明日菜

「私達の先生よ。」

ルイージ&クツパ

「せ、先生!？」

ルイージとクッパは明日菜の言葉を聞いて耳を疑う。

カジオー

「う……………うぐぐ……………」

ネギ

「のどかさんを……………僕の大切な生徒を馬鹿にする奴は許さない！」

マリオ

「その通り！」

ネギとマリオが俯せで倒れてるカジオーに言い放つ。

のどか

「ネ、ネギ先生……………」

木乃香の力で足の怪我な治ったのどかが離れた場所でネギの言葉に感動する。

マリオ

「……………あれ？生徒って？」

マリオは『生徒』という単語を思い出して首を傾げる。

カジオー

「ぐがががが……………」

ネギ&マリオ

「なっ!?!」

カジオーが唸りながらゆっくりと立ち上がる。

ネギ

「そ、そんな……………さっきの攻撃を喰らって立ち上がるなんて……………」

マリオ

「相変わらず頑丈な奴だ。」

カジオー

「おのれ……………よくもわしをコケにしてくれたな……………遂にわしはイッてしまった……………そしてキレてしまった……………いいだろう! わしの真の姿を見せてやるう!…!」

刹那

「真の姿!?!」

マリオ

「そう、あの姿は仮の姿なんだ。」

明日菜

「そんなのアリ!?!」

クッパ

「大ありなのだ。」

カジオー

「行くぞ! わしの真の姿と力をとくと見るがいい!?!」

パアアアツ

カジオーから強い光が放たれる。

カジオー

「……………フフフフ。」

光が止むと、カジオーは目や口が大きく丸っこい顔になっていた。

ネギ

「さ、さっきのと全然違う……………」。

マリオ

「見た目は間抜けだが、かなり強いよ。」

カジオー

「では、行くぞ……………戦車モード変換!！」

ポコポコッ!!

カジオーはハンマーで自分の顔を叩く。

明日菜

「あいつ、何してるの?」

クッパ

「奴は顔を変える事で攻撃方法が変わるのだ。」

カジオー

「その通り！まずは戦車モードじゃー！！」

そう言うと、カジオーの顔の形が戦車みたいになる。

ネギ

「せ、戦車！？」

マリオ

「マズイ！早く逃げないと……………」

カジオー

「逃がすか！！」

ズドーン！！

ネギ&マリオ

「うわああっ！！」

ネギとマリオはカジオーが発射した弾を間髪避けたが、爆風に巻き込まれて吹っ飛ばされてしまう。

明日菜

「ネギー!!!」

ルイージ

「兄さん!!!」

明日菜達がネギとマリオの元へ駆け寄る。

刹那

「二人共、大丈夫ですか？」

ネギ

「え、ええ……………」

マリオ

「なんとかね……………」

ネギとマリオはゆっくりと起き上がる。

カジオー

「まだまだ行くぞ!!!」

ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！

カジオーは四方八方に弾を乱射する。

クツパ

「あいつ、無茶苦茶に撃っておるな。」

マリオ

「これじゃ迂闊に近付けない。」

ネギ

「どつすねば……………」

スポン！

カジオー

「むぐつ！？」

突然カジオーの口に菁かぶのような野菜が投げ込まれてスツポリとはまる。

ボツカーン!!

カジオー

「むがつ!!」

すると、カジオーの口の中で弾が発する。

マリオ

「あの野菜はまさか……………」

?

「マリオ!!」

ルイーザ

「え?今の声は……………ピーチ姫!？」

全員声がした方へ向くと、離れた場所にピーチとデイジー、それにロゼッタとクッパ」r. がいた。

クッパ」r.

「父さん!!」

クツパ

「おお、息子よ！無事だったか。」

クツパは「r」の姿を見て安心する。

マリオ

「みんな無事だったんですね。」

カジオー

「ゲホツゲホツ……………ど、どうやって牢屋から抜け出した？」

クツパ「r」

「簡単だよ、僕が隠し持ってたボム兵で壁に穴を開けて脱出したのさ。」

ルイーダ

(……………流石クツパの子だね。)

ルイーダはクツパ「r」の行動に啞然とする。

クツパ

「どうだ？あの子我輩に似て可愛いだろ？」

刹那

「えー？そ、そうですね……………」。

明日菜

「でも、似てるかどうかは別だけどね。」

クッパ

「何！？それはどっいつ意味だ！？」

クッパは明日菜の返答に怒り出す。

カジオー

「おのれ、よくも邪魔してくれたな……………消え失せろ！！」

ズドン！！

カジオーの放った弾がデイジーに向かって飛んでくる。

ルイーダ

「デイジー姫！危ない！！」

デイジー

「えっ!?!」

ルイージは急いでデイジーの元へ駆け寄り……。

ドッカーン!!

ルイージ

「ぐわぁあっ!?!」

デイジー

「ル、ルイージ!?!」

ルイージがデイジーの前に立ち盾になって、弾をまともに受けてしまっ。

ルイージ

「うう……ま……間に合っ……良か……った……。」

ボタン!

ルイージはそのまま倒れ込んでしまっ。

マリオ

「ルイーダ！！」

デイジー

「ルイーダ！しっかりしてルイーダ！！」

デイジーは倒れているルイーダを激しく揺さぶる。

ロゼッタ

「落ち着いて、ルイーダにはまだ微かに息があります。」

デイジー

「ほ、本当に！？」

ロゼッタはデイジーの質問に静かに頷く。

ネギ

「木乃香さん！ルイーダさん達を安全な場所へ……………」

木乃香

「分かったえ！」

のどか

「わ、私も手伝います!」

木乃香とのどかは慌ててルイーダが倒れてる所へ駆け寄る。

木乃香

「さあ、こっちへ……………」

ロゼッタ

「はい……………デージー姫も早く。」

デージー

「え、ええ……………よいしょっと!」

デージーはルイーダを抱き抱えながら木乃香達に付いていく。

マリオ

「カジオーめ、よくもルイーダを……………」

マリオが拳を震わせながらカジオーを睨む。

ロゼッタ

「マリオ、貴方に再び力を与えます……………さあ、お行きなさい。」

？

「はい！ママ。」

そう言うと、ロゼッタは星の姿をした小さい生物をマリオの方へ行かせる。

マリオ

「君は……………僕と一緒に冒険したあのチコ？」

ベビーチコ

「そうです！また貴方に力を貸してあげに来ました。」

そう言うと、ベビーチコはマリオの中に入る。

マリオ

「よし……………クッパ、それにネギ君も集まって！」

ネギ

「は、はい…。」

クッパ

「何なのだ？」

マリオの言葉にネギとクッパが集まる。

ロゼッタ

「ピーチ姫、私達も向こうへ……………」

ピーチ

(マリオ、頑張ってね……………。)

ピーチはロゼッタに引っ張られて、その場から離れる。

カジオー

「えい貴様ら！ゴチャゴチャと何をやってるんじや！…！」

カジオーが頭から湯気を出しながら怒鳴る。

マリオ

「……………それじゃ、行くよー！」

クツパ

「フン、分かっておるわ！」

ネギ

「では、まず僕から行きます！瞬動！」

シュン！

カジオー

「ぬっ！？」

ネギが瞬動でカジオーの前まで移動する。

カジオー

「ちよございなー！」

シュン！

ドツシーーン！！

カジオーはハンマーを振り下ろすが、ネギは再び瞬動で避ける。

ネギ

「こっちですよー!」

カジオー

「何っ!?!」

ネギはカジオーの背後にいた。

カジオー

「おのれ!どこまでわしをコケにするか!」

カジオーはネギの方を向いた時……………。

マリオ

「クッパ!今だ!」

クッパ

「行くぞ!とおりゃ……………!」

ブンッ!!

マリオを片手で持ち上げたクッパが、背を向けてるカジオーに向かってマリオをおもいつきり投げ飛ばす。

ネギ

（来た！！）

シュン！

カジオー

「ムッ！？」

ネギは瞬動で別の場所へ移動する。

マリオ

「覚悟しろカジオー！強カスピンアタック！！」

ドガアアアツ！！

カジオー

「ぐわあああつ！！」

ズーーン！！

マリオが回転しながらカジオーに強力な体当たりをして、カジオーは壁におもいつき叩き付けられる。

ネギ

「や、やった……………」

マリオ

「よっしゃー!」

マリオは思わずガッツポーズをする。

カジオー

「グ……………グガガ……………」

カジオーが減り込んだ壁から出て来る。

明日菜

「ちょ、ちょっと! あいつまだ立ち上がるつもりなの!？」

クツパ

「本当にしぶといな。」

カジオー

「お……おのれ……先程の攻撃で……体が言う事を……。」

？

「……………ぶざまだな。」

全員

「!?!?」

全員声が出た方を見ると、黒いコートを着て顔をフードで隠してる怪しい人物が立っていた。

のどか

「あ！あの方は!?!?」

木乃香

「ほえ？どないした？」

のどか

「あの方は……………私に『爆弾がある』と教えてくれた人です。」

木乃香

「ええっ!？」

のどかの言葉に木乃香とネギ達が耳を疑った。

カジオー

「お、お前は……………」

?

「折角復活させてやったというのに、なんてザマだ……………」

マリオ

「復活させた?じゃあお前がカジオーを……………」

マリオは黒コートの人物の言葉を聞いて身構える。

?

「もうお前は用済みだ……………消え去れ。」

カジオー

「ま、待ってくれ!わしはまだ……………」

パチッ

ボカーーーン!!

カジオー

「ぐおおおおっ!!」

黒コートの人物が指を鳴らすと、カジオーの周りだけ大爆発する。

クッパ

「な、何がどうなってるのだ!？」

刹那

「な、何故突然爆発が……。」

明日菜

「あ、あれ!？」

全員爆発した所を見ると、さっきまでその場にいたカジオーの姿がなかった。

マリオ

「カジオーが……いない？」

？

「当然だ、今の爆発で灰になったのだからな。」

ネギ

「……貴方は一体誰なんですか？」

？

「……それより、早くこの城から脱出した方がいいぞ。」

クツパ

「何？それはどういっ……。」

ゴゴゴゴゴッ！！

突然城が地震みたいに激しく揺れ動く。

マリオ

「な、何だ！？」

ネギ

「じ、地震!？」

?

「恐らくカジオーが何度も地面を叩くから地盤が緩んできたのだろ
う。」

クツパ

「何だと!？それじゃ、我輩の城は今にも崩れるというのか!？」

?

「そつだ、早く逃げないと生き埋めになるぞ。」

ネギ

「皆さん!急いで城から脱出しますよ!！」

マリオ

「姫!僕にしっかりと捕まってお下さい!！」

ピーチ

「ええ!！」

マリオは急いでピーチを抱き抱える。

ネギ

「のどかさんは僕の杖に……………」。

のどか

「は、はい…」

のどかは慎重にネギの杖に跨がる。

刹那

「お嬢様は私が……………」

そう言うと、刹那は木乃香を抱き抱える。

明日菜

「それじゃ、急いで脱出しましょ…！」

そう言うと、全員城の入口を目指して走り出す。

くクツパ城の外く

全員無事に城から脱出していた。

マリオ

「……………どじやら全員無事のようだね。」

ネギ

「そのとおりですね。」

ルイーダ

「うっ……うっ……。」

デイジー

「ルイーダ!? まだ痛むの?」

重傷を負ったルイーダをデイジーが必死に看病していた。

マリオ

「そうだ! ルイーダを病院へ……。」

ネギ

「いえ、その必要はありませんよ。」

マリオ

「えっ!?!」

ネギの言葉にマリオ達は首を傾げる。

ネギ

「木乃香さん、お願いします。」

木乃香

「任しとき……アデアット!!。」

パアアアッ。

木乃香は『コチノヒオウギ』と呼び出して、ルイーダの怪我を癒していく。

デイジー

「け、怪我が治っていく……。」

ピーチ

「凄いわ……。」

ロゼッタ

「まさに奇跡ですね。」

ルイーダ

「うん……あれ?もう痛くない。」

ルイージは怪我が全て治ると、驚いたよつに起き上がる。

マリオ

「ルイージ！本当良かった……………」

ガシッ

ルイージ

「えっ!?!」

突然デイジーがルイージに抱き着く。

デイジー

「良かった……………本当に良かった。」

ルイージ

「デ、デイジー姫……………」

涙声で呟くデイジーをルイージは優しく背中を摩る。

木乃香

「あの二人、もしかしたら……………」

明日菜

「かもね。」

明日菜と木乃香はいい雰囲気の二人を眺める。

クツパ

「はあ〜っ、我輩の城が……………」

クツパ「r」

「父さん、元気出して。」

クツパと息子の「r」は跡形もないクツパ城を寂しげに眺めていた。

ネギ

「……………なんか可哀相ですね。」

ピーチ

「大丈夫よ、そのうちまた元気になるわ。」

ネギ

「はあ……………あ！忘れてた！！」

ネギは何かを思い出して声を上げる。

ネギ

「ピーチさん、これを受け取って下さい。」

そう言うと、ネギはピーチにキノコ型のバッチを渡す。

ピーチ

「あら、可愛いバッチね。」

ネギ

「えつくと……………僕からのプレゼントです。」

ピーチ

「あら、ありがとう。」

ピーチはネギにお礼を言うと、バッチを胸元に付ける。

カモ

（兄貴、今の言葉ナイスだぜ。）

ネギ

(そ、そうかな?)

カモの言葉にネギは少し照れる。

マリオ

「二人共、何の話をしてるの?」

マリオが二人の話に割り込んでくる。

ピーチ

「私とネギ君だけの秘密の話よ。」

ネギ

「ひ、秘密って……。」

ピーチの言葉にネギは焦りまくる。

マリオ

「秘密……ですか。」

マリオはピーチの言葉に少し動揺する。

ピーチ

「あら、妬いちゃった？」

マリオ

「い、いいえ！そんな事は……………」

マリオは更に動揺する。

ピーチ

「冗談よ……………マリオったら慌てちゃって。」

マリオ

「ピ、ピーチ姫！」

マリオの顔全体が真っ赤になる。

明日菜

「……………あっちもいい感じね。」

木乃香

「そやな〜。」

明日菜と木乃香が今度はいつの間にかマリオとピーチを眺めていた。

ワルイージ

「ったく、どいつもこいつもイチャつきやがって……………」

ネギ

「え？」

ネギは声が出た方を見ると、地面でふて腐れながら座ってるワルイージとキャサリンがいた。

ルイージ

「あれ？二人共無事だったんだ。」

ワルイージ

「当たり前だろ！あれくらいでくたばってたまるか！」

キャサリン

「あゝあ、結局いい男を紹介してくれる件はチャラか……………ん？」

キャサリンはふとネギと目が合う。

ネギ

「な、何でしょうか?」

キャサリン

「アンタ、よく見たら可愛い顔してるじゃない。」

そう言うと、キャサリンはどんどんネギに近付いてくる。

ネギ

「あ、あの……。」

キャサリン

「ねえねえ、ちょっと私と遊ばない?」

ネギ

「い、いえ!結構です!!」

そう言うと、ネギは全速力で逃げ出す。

キャサリン

「あ〜ん、待って〜！」

全員

「ハハハハハハ〜！」

キャサリンはネギを追いかけて、その光景を見て全員笑い出す。

第六話 鍛冶王の最後 (後書き)

やっとマリオ編が終了しました！

ネギ達は次はどんな世界へ行くのかお楽しみに！

第七話〜ジャングルの世界へ〜（前書き）

マリオの世界から館へ帰ってきたネギー一行は次に何処の世界へ行くのか？

第七話〈ジャングルの世界へ〉

〈大乱闘の館〉

ネギー一行はマリオの世界から館へ帰ってきた。

マスターハンド

「どうやら無事に帰ってきたようだな。」

明日菜

「はい、約一名を除けば無事です。」

マスターハンド

「ん？ところでネギ君、その頬はどうしたんだね？」

マスターハンドは落胆しているネギの頬に付いてる大きなキスマークについて聞く。

ネギ

「あ、いや……………これには色々ありまして……………」

カモ

「あんまり聞かねえでやってくれ。」

マスターハンド

「わ、分かった……………ところで、ちゃんとマリオ達にバッチを渡せたかね？」

刹那

「はい、バッチは渡せたのですが……………」

マスターハンド

「何かあったのかね？」

ネギ

「実は……………」

ネギはマスターハンドにマリオの世界で起こった出来事を説明した。

マスターハンド

「成程、以前マリオ達が倒したハズのカジオーが復活していた……………
…更にそのカジオーを簡単に始末した謎の人物が現れた。」

木乃香

「それに、のどかに爆弾がある事を教えたんもその人やって。」

マスターハンド

「何！？本当かね？」

のどか

「は、はい……………で、でも服装が同じだっただけで自信はありません。」

マスターハンド

「そうか……………」

マスターハンドはしばらく黙り込む。

ネギ

「あの……………その人が誰なのか心当たりがあるんですか？」

マスターハンド

「あ、ああ……………恐らくそいつはタブーの手下に違いない。」

全員

「えっ!?!」

マスターハンドの言葉に全員耳を疑った。

明日菜

「じゃあ、カジノーを復活させたのも……………」。

マスターハンド

「きつとマリオ達を始末する為だろう。」

刹那

「やはりマリオさん達に復讐する為にでしょうか？」

マスターハンド

「多分な……………」。

ネギ

「でも、その人はどうして僕達に爆弾があると教えてくれたのです
ようか？」

マスターハンド

「それは私にも分からない……………」。

カモ

「なんだかややこしくなってきたな。」

マスターハンド

「とにかく、今日はゆっくり休むといい。」

ネギ

「そうですね、また明日考えましょう。」

明日菜

「それがいいわね。」

そう言うと、ネギ一行はそれぞれ部屋へと戻っていく。

マスターハンド

(……………奴め、一体なんのつもりだ?)

スッ

マスターハンドはその場から姿を消す。

（翌日）

起床して朝ごはんを終えたネギ一行は館の庭へ集結していた。

ネギ

「皆さん、全員いらっしやいますね？」

木乃香

「全員いるえ〜。」

マスターハンド

「それではまず、DKの文字型のバッチが二つ出してくれ。」

ネギ

「はい。」

ネギは懐からDKの文字を模った^{かたど}バッチを二つ出す。

マスターハンド

「そのバッチをドンキーコングとディディーコングに渡してほしい。」

明日菜

「ドンキーって、マリオさんのゲームにも出てるあのコンピュータ？」

マスターハンド

「その通り……では、気をつけて行くよじつ。」

ネギ

「はい！それでは早速……………」

ネギ達はワイプ土管へ近付くが……………。

マスターハンド

「待った！」

ネギ

「え？何ですか？」

ネギ達はマスターハンドに呼び止められて立ち止まる。

マスターハンド

「もしまた黒コートの人物に会っても、絶対に手を出さないでほしい。」

ネギ

「えっ！？それはどついう意味ですか？」

マスターハンド

「確信は無いが、奴はひょっとしたらタブーに匹敵する程の強さを持っている……………だからむやみに奴と相手をしないでほしいのだ。」

マスターハンドの言葉にネギー一行はしばらく黙り込む。

ネギ

「……………分かりました！マスターハンドさんの言う通りにします。」

マスターハンド

「そうか、理解してくれて感謝する。」

マスターハンドはお辞儀をするかのように手首を下げる。

ネギ

「でも、もしマリオさんの世界のように悪人が復活していたら、その世界の人達と一緒に悪人を懲らしめてもいいですか？」

マスターハンド

「……………君達がどうしても言うのなら私はこれ以上何も言わないが……………決して無茶はしないようにな。」

ネギ

「はい！ありがとうございます……！」

マスターハンドの言葉を聞いたネギは深く頭を下げる。

木乃香

「ネギ君らしいなあ。」

カモ

「でもよお、バッチを渡すだけでいいのに何も悪者をやっつけなくても……………」

明日菜

「別にいいじゃない！悪い奴は放っておけないし……………」

刹那

「その通りです！悪は必ず成敗しなければなりません。」

のどか

「……………なんか桜咲さんも張り切ってますね。」

ネギ

「それでは皆さん！改めて参りましょう！…！」

ネギ以外全員

「はい！…！」

ネギ達は改めてワイプ土管へ入る。

マスターハンド

(フフ、実に頼もしい……。)

く???.???.

ビュビュビュン

ネギ

「よいしょっ………っわっ!？」

ネギ達がワイプ土管から出ると、沢山のバナナに覆われる。

明日菜

「ちよつと!何この大量のバナナは!？」

木乃香

「随分沢山あるなあ。」

刹那

「と、とにかくこのバナナの海から出ましよう!」

数分後、ネギ達はなんとかバナナの海から抜け出した。

ネギ

「ふう〜っ、なんとか抜け出せましたね。」

刹那

「あれ？宮崎さんは？」

木乃香

「あ！あそこや！」

木乃香の指さす方を見ると、のどかの右手がバナナの海から突き出ていた。

のどか

「た、助けて下さい！」

明日菜

「大変！本屋ちゃんがバナナの海で溺れてる！」

ネギ

「い、今僕が助けに行きます！」

そう言うと、ネギはバナナの海へ飛び込む。

ネギ

「のどかさん！僕の手に乗まって下さい！」

のどか

「は、はい！」

ネギは手を伸ばすと、のどかはネギの手を握る。

ネギ

「それっ！！」

のどか

「きゃっ！！」

ネギはのどかの腕をおもいっきり上へ引っ張り上げる。

ドスン！！

ネギ

「わぁっ！？」

そのせいで、ネギとのどかはお互い向き合っ形で倒れてしまっ。

のどか

「ひゃっ！？す、すいませんー！」

ネギ

「い、いいえ！こちらこそ……………」。

ネギとのどかは慌てて離れる。

カモ

「おいおい、二人して何いちゃついでんだよ。」

ネギ

「ち、違うよカモ君！誤解だよ！」

明日菜

「はいはい、分かったから落ち着きなさい。」

明日菜が慌てて弁解するネギを宥めていた時……………。

？

「誰がいるのか!？」

全員

「!？」

ネギー一行は声に驚いて辺りを見回すと、赤いネクタイをした大柄なゴリラと赤い帽子と服を着た小柄なチンパンジーがいた。

ネギー

(ゴ、ゴリラとチンパンジー!?)

明日菜

(あれ?もしかして……………。)

明日菜はゴリラとチンパンジーを見て反応する。

？

「ウホ?バナナ倉庫の中に人間が入ってる。」

？

「気をつけてドンキー!コイツらきつとクレムリン軍の一味だよ!」

明日菜

「ドンキー？やっぱりこのゴリラがドンキーコングだったんだ！」

ドンキー

「ウホッ！？何で僕の名前を知ってるの？」

ドンキーという名前のゴリラは明日菜に自分の名前を言われて驚く。

ネギ

「えっ！？このゴリラがドンキーさん？」

木乃香

「ほなら、この子がディディーくんやね？」

ディディー

「えっ！？ど、どうしてオイラの名前を……。」

ディディーという名前のチンパンジーも木乃香に名前を言われて驚く。

ネギ

「じ、実はお二人にお話があるんです。」

ネギはドンキーとデイディーにあらかた説明する。

デイディー

「へえ〜っ、そうだったんだ。」

ドンキー

「よく分からないけど、大変だったんだね〜。」

ネギ

「は、はい………という訳で、これをお二人にお渡しします。」

ネギはDK文字型のバッチをドンキーとデイディーに渡す。

ドンキー

「これがそのバッチか〜。」

デイディー

「どうもありがとう〜!」

ネギにお礼を言うと、ドンキーはネクタイでデイディーは胸元にバッチを付ける。

刹那

「あの、つかぬ事をお聞きしますが……………最近何か変わった事はありませんでしたか？」

デイディー

「変わった事？うん……………」

ドンキー

「特に無いよね？」

明日菜

「本当に何も？」

ドンキー&デイディー

「うん。」

ドンキーとデイディーは同時に頷く。

カモ

「何も無いのなら、もう館へ帰るついでに兄貴。」

ネギ

「でも……。」

ドンキー

「そんなに心配なら、克蘭キー爺さんに聞いてみよっか。」

デイディー

「そうだね、オイラ達がバナナ倉庫の見張りをしていた間に何かあったかもしれないし。」

ネギ

「はい、お願いします!」

デイディー

「それじゃ、オイラ達に付いて来て。」

そう言うと、ネギ一行はドンキーとデイディーに付いて行く。

く克蘭キー小屋の前く

ドンキーとデイディーはネギー行を古びた一件の小屋の前まで連れて来た。

デイディー

「おい！克蘭キー爺さん！！！」

？

「何じゃ？騒々しいのお……………」

小屋の中から長くて白い髭を生やしたゴリラの老人が杖を付きながら出て来る。

ドンキー

「この人が長老のクランキーコングだよ。」

クランキー

「はて？何故此処に人間がおるんじゃ？」

デイディー

「え〜っとね……………この子達はマリオ達と同じくいい人間なんだよ。」

クランキー

「ほお……………」

クランキーはネギ達を食い入るようにつめる。

ネギ

「な、何でしょうか？」

克蘭キー

「……………なんとも頼りなさそうな面じゃのう。」

ネギ

「なっ!?!」

ネギは克蘭キーの言葉を聞いてショックを受ける。

明日菜

「ちよつとお爺さん!初対面でいきなり失礼じゃない!?!」

木乃香

(明日菜かて、初対面の時ネギ君に無神経とかミジンコとか言つてたよつな……………)

木乃香は心の中で明日菜にツッコミを入れる。

克蘭キー

「これ!わしを年寄り扱いするでない!?!」

バシバシッ!

明日菜

「痛たたた!!」

克蘭キーは持っていた杖で明日菜の頭を叩く。

デイデー

「そ、それより聞きたい事があるんだけど……………」

克蘭キー

「聞きたい事?何じゃ?」

克蘭キーは明日菜を叩くのをやめる。

デイデー

「最近何か変わった事無かった?」

克蘭キー

「うーん……………特に無いのう。」

ネギ

「そつですか……………」

カモ

「ほらな、やっぱ今回は何も無いんだよ。」

木乃香

「どないする？もう館へ帰る？」

ネギ

「うん……。」

ネギが深く考え込んでいた時……。

？

「ガァーッ！大変だー！！」

明日菜

「な、何！？」

突然ネギ達の前に緑色のオウムのような鳥が現れる。

ドンキー

「あ！スコークス。」

クランキー

「何々じゃ！？そんなに大声で鳴きおつて……………」

スコークス

「さっきビーチの上空を飛行してたら、キャンディーとディクシーがクレムリンに襲われてたんだ！」

ドンキー&ディディー

「な、何だつて!?!」

ドンキーとディディーはスコークスの言葉を聞いて驚愕する。

ドンキー

「スコークス、そのビーチへ案内して！」

スコークス

「分かった！」

スコークスは木々が多いジャングルの方へ飛んでいく。

ドンキー

「ディディー！行こう!!!」

デイディー

「OK!」

そう言つと、ドンキーとデイディーは急いでスコークスの後を追つ。

のどか

「い、行っちゃいましたね……………」

刹那

「ネギ先生、どうします?」

ネギ

「僕達も行つてみましょう!」

明日菜

「やっぱりね。」

木乃香

「ネギ君ならそう言つと思つたわ。」

カモ

「そこが兄貴のいい所なんだけどな。」

ネギ

「それでは皆さん！行きましょう！！」

ネギ以外全員

「はい！」

そう言うと、ネギ達もドンキー達の後を追いかける。

クランキー

「……………若いつていいのぉ。」

クランキーはネギ達を羨ましそうに見つめながら見送る。

第七話「ジャングルの世界へ」(後書き)

という訳で、ドンキーの世界へやって来たネギ達にこの先何が起るのでしょうか？

それから、もし登場させたい各ゲームのキャラクターがいましたら、感想を書く欄にてご応募下さい！出来る限り登場させようと思いません。

(例えば 『星のカービィ』シリーズのメタナイトを登場させて！)

ご応募お待ちしております！

第八話〜また誰かが誘われた!〜(前書き)

この話にはクランキーキングの他にもキングファミリーが登場します。

第八話　　また誰かが誘われた！？」

　　ジャングル

ネギー一行は暑さで汗をかきながらドンキーとディディーを追いかけていた。

木乃香

「はっつ、やっぱりジャングルは暑いなあ。」

刹那

「そ、そうですね。」

のどか

「あ、あう……………」

のどかは次第に足をふらつかせる。

ネギ

「のどかさん、大丈夫ですか？」

のどか

「は、はい〜……………な、何とか……………」。

明日菜

「それにしても、ビーチはまだ着かないの〜?」

ネギ

「そうですね……………もう約一時間は歩いてますよね。」

カモ

「お〜い!まだビーチに到着しねえのかよー!」

カモが遠くにいるドンキー達に問い掛ける。

ディディー

「もうちよつとでビーチに着くよ〜!」

ディディーが首だけ向いて大声で答える。

明日菜

「……………さっきもそんな事言っただけだった?」

明日菜は歩きながらボンッとシッコむ。

ドンキー

「やっと着いた〜。」

そう言いつつ、ドンキーとデイディーはその場で立ち止まる。

ネギ

「どっちら着いたようですね。」

明日菜

「やれやれ……………」

ネギ達は少しくタクタになりながらドンキーに近付くと、その先には広いビーチがあった。

木乃香

「……………此处で泳いだら気持ち良さそやな〜。」

明日菜

「何呑気な事言ってるのよ。」

ドンキー

「スコークス、キャンディー達は何処にいるの？」

スコークス

「可笑しいなあ、此処ら辺にいたと思っただけど……………」

カモ

「何かの見間違いだったんじゃないのか？」

スコークス

「何だと!？」

カモの言葉にスコークスは怒り出す。

刹那

「あ!向こうで誰か倒れてます。」

全員

「えっ!？」

刹那が指さす方を見ると、砂浜に金髪でピンク色の衣装を着たスタイル抜群の雌ゴリラが倒れていた。

ドンキー

「あーあれはキャンディーコングだ〜！」

ドンキーは倒れているキャンディーの所まで急いで走り出す。

デイディー

「あー待ってよ〜。」

デイディーを含む残りのメンバーは慌ててドンキーに付いたいく。

ドンキー

「キャンディー、しっかりして〜！」

刹那

「大丈夫、気絶してるだけのようです。」

キャンディー

「う、う〜ん……………」

キャンディーがゆっくりと目を開ける。

ドンキー

「ウホ！キャンディーが目を覚ました。」

キャンディー

「……………ド、ドンキー？来てくれたのね。」

カモ

（……………それにしても、この猿の姉ちゃん結構スタイルいいな。）

カモが嫌らしい目つきでキャンディーを見つめる。

キャンディー

「あら？この子達は……………ひょっとして人間？」

ドンキー

「そうだよ、でも悪い人じゃないから安心して。」

ディディー

「そ、それよりディクシーは？今まで一緒だったんでしょ？」

キャンディー

「そ、それが……………。」

キャンディーは下へ俯いてしまう。

ドンキー

「どづしたの？」

キャンディー

「……………ディクシーはクレムリン達に誘拐されたわ。」

ディディー

「な、何だつて!？」

ディディーはキャンディーの言葉を聞いて驚愕する。

キャンディー

「私、ディクシーと一緒にこのビーチで遊んだの……………そしたら突然クレムリン達が現れて……………」。

ネギ

「そして、そのまま襲われて気を失ってしまった訳ですか……………」。

木乃香

「でも、怪我が無くて良かったわ。」

ドンキー

「ところでキャンディー、クレムリン達が何処へ行ったか覚えてる？」

キャンディー

「えっと……確か、船で海を渡っていったと思うわ。」

カモ

「海か……かなり厄介だな。」

ネギ

「そうだね……どうやって海を渡ればいいんだろう。」

ドンキー

「どうやってって……泳いで行けばいいんじゃない？」

明日菜

「幾ら何でも泳いで追いかけるなんて出来る訳ないでしょ！」

？

「いかだを作るのです……。」

のどか
「えっ!?!」

のどかは突然聞こえてきた声に驚く。

刹那

「宮崎さん?どうかしましたか?」

のどか

「い、今声が聞こえたような気がして……………」

木乃香

「声?」

のどか

「ええ、いかだを作るとか何とか……………」

ドンキー&ディディー

「いかだ……………それだ!!」

ドンキーとディディーは二匹揃って大声を上げる。

明日菜

「な、何！？急に大声出して……………」

デイディー

「だから、いかだを作って海を渡ればいいんだよ！」

ネギ

「え！？いかだで海を？」

明日菜

「本気なの？」

ドンキー

「大丈夫だよ、クレムリン達がいる所までだから。」

刹那

「ですが、そのクレムリンが何処の海にいるのか……………」

キャンディー

「確かクレムリン達はあっちの方へ行つたような……………」

そう言うと、キャンディーは南の方角を指さす。

デイディー

「よし、方角が分かったところで早速いかだを作らなきゃ！」

木乃香

「……………何かもういかだ作る事になってもったなあ。」

カモ

「でも、いかだなら木を何本か切って、それを縄で縛るだけだからそんな難しくはねえハズだ。」

明日菜

「だったら、早く作りましょうよ。」

ネギ

「ところで、キャンディーさんはどうしますか？」

ドンキー

「あ、そうだな……………一緒に連れていく訳にはいかないし……………」

「

ドンキーが頭をポリポリ掻きながら悩んでいた時……………。

?

「Hey、ドンキーにディディー！」

ドンキー

「ウホ？この声は……………」

ドンキーが声に反応すると、上空からタルの形した飛行機らしき物体がゆっくり下降してくる。

明日菜

「……………これって飛行機なの？」

ディディー

「うん、一応ね。」

?

「Hello！久しぶりだねー。」

タル型の飛行機が地面に着地すると、操縦席から頭にバンダナを巻いてサングラスを掛けたゴリラが顔を出す。

ドンキー

「やっぱりファンキーコングだ。」

デイディー

「どうしてファンキーが此処へ？」

スコークス

「俺がファンキーを呼んだんだ。」

そう言うと、スコークスはドンキー達の前に現れる。

ドンキー

「そうだったんだ。」

ファンキー

「それより、キャンディーの事はミーに任せときな。」

ドンキー

「うん、お願いね。」

そう言うと、キャンディーをファンキーの飛行機へ乗せる。

キャンディー

「ドンキー。」

ドンキー

「ウホ？何だい？」

キャンディー

「気をつけてね。」

ドンキー

「うん、大丈夫だよ。」

ドンキーは笑顔でキャンディーに答える。

明日菜

「あれ？あの二人いい感じじゃない？」

スコークス

「キャンディーはドンキーのガールフレンドだからな。」

木乃香

「へえ〜、そうなんや〜！」

スコークス

「因みに、クレムリンに誘拐されたディクシーはディディーのガールフレンドだ。」

ディディー

「ちょっと！スコークスったら……。」

ディディーはスコークスの言葉に激しく動揺する。

木乃香

「ほなら、一刻も早くディクシーちゃんを助けなアカンな？」

ディディー

「う、うん！」

木乃香の温かい言葉にディディーは元気良く返事する。

ファンキー

「それじゃ、しっかりやれよ兄弟！」

ファンキーはドンキーに向かって親指を上げながら言う。

ブロロロッ

ファンキーの飛行機はそのまま上空へ飛んでいく。

ドンキー

「バイバイ。」

スコークス

「さて、俺も仕事があるから行くわ。」

そう言うと、スコークスはそのまま飛び立っていく。

デイデー

「仕事？スコークスって何かやってたっけ？」

カモ

「そんな事より早くいかだを作ろうぜ。」

ネギ

「それなら、木の多い場所へ移動しよう。」

ネギー行とドンキー&ディディーは木々の多いジャングルまでやって来た。

ディディー

「此処なら良そそじゃない?」

ドンキー

「よし、早速木を薙ぎ倒して……………」。

ネギ

「いえ、その必要はありません。」

ドンキー&デイディー

「へっ?」

ネギの言葉にドンキーとデイディーは首を傾げる。

ネギ

「刹那さん、お願いします。」

刹那

「はい、お任せ下さい。」

そう言うと、刹那は夕凧を取り出す。

刹那

「ハッ!」

ザユユユッ!!

刹那は夕風で沢山の木々を切り倒していく。

デイデー

「す、凄い……………」

木乃香

「せつちゃんお見事や〜!」

刹那

「あ、ありがとうございます。」

刹那は木乃香に褒められて頬を紅く染める。

ドンキー

「それじゃ〜、この木でいかだを作ろう。」

ヒョイッ

ドンキーは刹那が切り倒した数本の木を全て持ち上げる。

ネギ

「わ、木を全部持ち上げてる……………」。

明日菜

「相当力持ちね……………」。

ネギと明日菜はドンキーの怪力を見て呆気に取られる。

カモ

「兄貴に姐さん！ポケットとしてねえで早くいかだを作ろっぜ。」

ネギ

「そ、そうだね……………」。

こうして、ネギー行とドンキー&ディディーのいかだ作りが始まった。

くビーチ周辺

数時間後、少し大きいかだが完成した。

ネギ

「ふうう、何とか完成しましたね……」。

明日菜

「有り合わせにしてはよく出来たんじゃない？」

ドンキー

「よし、早速出発だ〜!!」

デイディー

「お〜っ!!」

ドンキーとデイディーがいかだを海へ打ち上げようとしたが……。

明日菜

「ちょっと待った!!」

ドンキー&デイディー

「えっ？」

ドンキーとデイディーは明日菜に呼び止められて、そのまま立ち止まる。

明日菜

「よく見なさい!もう夕方よ。」

そう言うと、明日菜は水平線へ沈みかけてる夕日を指さす。

ドンキー

「あ、本当だ〜…………でも、それがどうかしたの？」

明日菜

「ど、どうかしたのって…………今出発したら夜になっちゃっつじゃない。」

刹那

「そうですね、私達は照明道具を持ってませんし…………今海に出たら危険です。」

のどか

「それなら、明日の朝出発しましょう。」

デイディー

「で、でもディクシーが…………。」

デイディーが続けて言おうとした時、ドンキーがデイディーの肩をポンツと叩く。

ドンキー

「デイクシーなら大丈夫だよ、僕達がクレミス島へ探検してクレムリン軍に捕まった時に助けに来てくれたじゃない。」

デイディー

「う、うん………そうだよね。」

デイディーはドンキーの言葉に半ば受け入れる。

ネギ

「それでは、もう暗くなってしまっているので寝所を探しましょう。」

ドンキー

「此処で寝れば？」

明日菜

「えっ！？此処で？」

明日菜はドンキーの発言に耳を疑った。

木乃香

「ウチは別に構わへんよ。」

明日菜

「そんな呑気な……。」

刹那

「そうですねよ、夜のジャングルには猛獣とかがごろついているから危険です。」

デイディー

「でも、此処ら一帯には何も出て来ないよ。」

明日菜

「だ、だけど……。」

明日菜達はしばらく言い合いをする。

刹那

「……………それでしたら、一応式神を放っておきますか？」

ネギ

「そ、それがいいですね。」

ドンキー

「式神って何？」

刹那

「式神とは術者が扱う使い魔のような物です。」

デイディー

「……………余計分かんなくなっちゃった。」

ドンキーとデイディーは刹那の説明を聞いて首を傾げる。

明日菜

「……………刹那さん、口で説明するより実際に見せてやったら?」

刹那

「そ、そうですね……………それっ!」

パアアツ

刹那が懐から

「桜咲刹那」と書かれた紙を取り出して掲げると、巫女姿の小さな刹那が現れた。

?

「お呼びですか？」

ドンキー

「ウホッ!？」

デイディー

「な、何このちっこいのは!？」

ドンキーとデイディーは小さな刹那を見て驚愕する。

?

「初めまして、ちびせつなどお呼び下さい。」

ドンキー&デイディー

「は、はあ……………」

ちびせつなが丁寧に辞儀すると、ドンキーとデイディーもつられてお辞儀する。

刹那

「それより、このビーチに怪しい奴が近付いて来たら教えてくれ。」

ちびせつな

「はい、畏まりました。」

シユユツ

ちびせつなその場から姿を消す。

デイデイー

「あれ！？消えちゃったよ？」

刹那

「いえ、姿を消しただけです。」

ネギ

「では、問題が解決出来たところで、そろそろ寝ましょう。」

ドンキー

「そうだね……………ふわあ〜っ。」

ドンキーは大きな欠伸あくびをする。

明日菜

「それじゃ、私達は向こうの方で寝るから。」

ネギ

「はい、おやすみなさい。」

明日菜達はネギ達の居る場所から離れる。

デイデュー

「じゃあ、オイラ達も寝よつか。」

ネギ

「そうしますか……………おやすみなさい。」

ドンキー

「おやすみ〜。」

ネギ達はそのまま砂浜へ寝転ぶ。

「すう……すう……」。

明日菜達はネギ達とは別の砂浜で寝ていた。

のどか
「ん、ん……」。

すると、のどかが目を擦りながらゆっくりと起き上がる。

のどか

「ト、トイル……。」

そう言いつと、のどかはジャングルの方へ歩いていく。

ドンキー

「んが〜っ!〜!」

ネギ

（ね、眠れない……。
）

ネギはドンキーの大きな躰こひらで眠れなかった。

カモ

「あ、兄貴……………この躰をなんとかしてくれよ。」

ネギ

「そ、そんな事言われても……………」

のどか

「きゃーっ!〜!〜!」

突然のどかの叫び声がジャングルの方へ響き渡る。

ネギ

「い、今のは……………」

カモ

「のどか嬢ちゃんの声だぜ！」

ネギ

「行ってみよう！」

ネギは急いで叫び声がした方へ駆け出していく。

ドンキー

「……………んがっつ！！」

デイディー

「ムニャムニャ……………」

ドンキーとデイディーは気持ち良さそうに眠り続けていた。

くジャングル内部く

ネギはジャングルの中へ入り、のどかを探していた。

ネギ

「のどかさんは何処に……。」「

明日菜

「あ、ネギ！」

突然ネギの前に明日菜と刹那が現れた。

ネギ

「明日菜さんに刹那さん！どうして此処に……………」。

明日菜

「眠ってたら本屋ちゃんの叫び声が聞こえてきたから、刹那さんと一緒にやって来たのよ。」

ネギ

「そうだったんですか……………ところで木乃香さんは？」

刹那

「お嬢様はまだ眠っておられます。」

明日菜

「……………一応聞くけど、ドンキー達は？」

ネギ

「え？あれっ!？」

ネギはドンキー達が居ない事を今になって気付く。

カモ

「あいつらも気持ち良く眠ってるだろっぜ。」

明日菜

「全く……………」

明日菜は深い溜め息をつく。

刹那

「と、とにかく宮崎さんを捜さないと……………」

明日菜

「そ、そうね！」

ネギ

「のどかさーん！何処ですかー！？」

のどか

「ネ、ネギ先生〜。」

カモ

「あっちから声がしたぜ！」

明日菜

「行ってみよう！」

ネギ達かのどかの声が聞こえた方へ走り出す。

ネギ

「のどかさん！」

のどか

「あ、ネギ先生……………それに皆さん……………」。

ネギ達は地面へ座り込んでるのどかを発見する。

明日菜

「本屋ちゃん、一体どうしたの？」

のどか

「あ、あの……………トイレに行こうとしたら……………突然猿お婆ちゃんみたいな幽霊が現れて……………」。

刹那

「幽霊？」

？

「……………驚かせてごめんなさいね。」

ネギ

「だ、誰ですか!？」

スーッ

突然ネギ達の前に猿のお婆ちゃんの姿した全身真っ白な幽霊が現れる。

のどか

「こ、この人です!」

ネギ

「貴方は誰ですか？」

？

「私はリンクリーコングといます。」

明日菜

「コングって事は……………ドンキー達の知り合いですか？」

リンクリー

「はい、正確には彼らの先生でもあります。」

ネギ

「先生？……という事は貴方も僕と同じ教師なんですね。」

リンクリー

「それでは貴方も……随分可愛い先生ですね。」

ネギ

「え？そ、そんな事ありませんよ。」

ネギはリンクリーに可愛いと言われて少し照れる。

刹那

「ところで、どうして宮崎さんの前に現れたんですか？」

リンクリー

「それは……貴方達に話があったんです。」

ネギ

「話？」

ネギ達はリンクリーの言葉に耳を傾ける。

リンクリー

「貴方達の事はドンキーとデイディーに付いてた時から見ていました……………そこで、折り入ってお願いがあります。」

ネギ

「何でしょうか？」

リンクリー

「今回の冒険は何故だか嫌な予感がするんです……………彼らはまだ若いから危なっかしい部分があります……………もし彼らに何か起きたら私は……………」

明日菜

「リンクリーさん……………」

リンクリー

「私はこの通り魂だけの存在です……………だから、彼らを温かく見守る事しか出来ません……………そんな私の分も含めて、ドンキーとデイディーの力になってあげて下さい。」

ネギ

「……………分かりました！僕達がリンクリーさん分まで頑張ります！」

リンクリー

「そうですか……………本当にありがとうございます。」

リンクリーはネギに向かって深く頭を下げる。

リンクリー

「それでは、私はそろそろ……………」

そう言うと、リンクリーの姿がどんどん透けていく。

明日菜

「あっ！体が……………」

リンクリー

「心配しなくても大丈夫……………ただ姿が見えなくなるだけです。」

ネギ

「で、でも……………」

リンクリー

「では……………私の可愛い教え子達を……………お願いね。」

スーッ

リンクリーは消えてしまったかのように見えなくなる。

のどか

「み、見えなくなっちゃいましたね……………」

ネギ

「……………皆さん！明日から頑張りましょうね……………」

明日菜

「そうね、リンクリーさんの為にもね！」

刹那

「そうですね！」

のどか

「……………」

のどかは顎に手を付けて考え込んでいた。

のどか

(あの時の声って、もしかしてリンクリーさんが……………。)

ネギ

「のどかさん、どうしました?」

のどか

「あ、いえ……………何でもありません。」

ネギ

「そ、そうですね……………それでは、明日に備えてもう寝ましょう!」

ネギ以外全員

「はい!」

ネギ達はその場から立ち去っていく。

その頃、ドンキーとデイディーは……。

デイディー

「リンクリー先生……ドンキーがまた……授業中にバナナを
……食べてます……ムニャムニャ……。」

ドンキー

「んがっっ！……っ！っ！めん……なまっい……。」

ドンキーとデイディーはまだ夢の中でした。

第八話〜また誰かが誘われた!〜(後書き)

次回からネギー行とドンキー&デイディーはクレムリン軍がいる所まで行きますので、ご期待下さい!

ところで、沢山のリクエストや感想をありがとうございます!まだまだ募集しますので、どんどん応募して下さい!!

第九話〈クレムリンとアニマルフレンド〉(前書き)

タイトル通りですが、ごく少数のクレムリンとアニマルフレンドが登場します。

第九話　くクレムリンとアニマルフレンド　く

く翌朝　く

ネギとドンキー＆デイディーは朝早くから起床していた。

ネギ

「ふあ〜っ…………おはようございます。」

ドンキー

「おはようネギ君、よく眠れた？」

ネギ

「ええ、何とか…………ふあ〜っ。」

ネギは再び大きな欠伸をする。

デイディー

「あれ？欠伸なんかしちゃって…………本当は眠れなかったんじゃないの？」

ネギ

「い、いや………そんな事ないよ。」

カモ

（兄貴、ドンキーの躰が煩いから眠れなかったって正直に言えよ。）

ネギ

（そ、そんな事言えないよ！）

ドンキー

「ん？何の話してんの？」

ネギ

「い、いえ！何でもありません。」

ネギは慌ててドンキーに弁解する。

明日菜

「ネギ〜！」

すると、明日菜達がネギ達の元へやって来る。

木乃香

「ネギ君、昨日はよう眠れた？」

ネギ

「は、はい……………」

木乃香

「やっぱりなく、明日菜達なんて眠れなかったみたいでさっきから欠伸ばかりしてたんやで。」

ネギ

「そ、そうですね……………」

ネギは苦笑いしながら答える。

明日菜

(アンタが気持ち良く眠ってる間にちょっとした事件があったのよ……………。)

明日菜は心の中で木乃香にツッコミを入れる。

ドンキー

「それより、そろそろ朝メシにするっ。」

ネギ

「そうですね……でも、何かあるんですか？」

ドンキー

「うーんと……ちょっと待ってて。」

そう言つと、ドンキーは何処かへ行つてしまつ。

明日菜

「何処へ行くのかしら？」

刹那

「食料でも確保しに行くんでしょっか？」

デイディー

「きつとそつだよ。」

ネギ

「でも、一体何を持ってくるんでしょっか？」

ドンキー

「お待たせ〜！」

しばらくすると、ドンキーが大きなタルを担ぎながら戻ってきた。

のどか

「それは何ですか？」

ドンキー

「これはね、バナナが入ったタルだよ。」

木乃香

「バナナ？」

ドンキー

「そう、ほらっ！」

ドンキーがタルのフタを外すと、タルの中には沢山のバナナが入っていた。

ネギ

「わ〜、バナナがいっぱいだよ。」

明日菜

「……ちょっと待って、まさか朝食ってバナナだけ？」

ドンキー

「そっだよ。」

木乃香

「別にええやん……それに朝にバナナ食べるとダイエットになるらしいで？」

明日菜

「えっ！？そっなの？」

明日菜は木乃香の言葉に耳を傾ける。

のどか

「あ、それ私も知ってます……確か朝食をバナナだけで過ごす痩せられるってハルナが言ってました。」

明日菜

「マジで！？それだったらいっぱい食べちゃおうと！」

木乃香

「……いや、いっぱい食べたら逆に太るで。」

デイディー

「……ねえ、あの子達は何の話をしてるの？」

ネギ

「さ、さあ……。」

ネギはデイディーの質問に首を傾げる。

カモ

「フツ、女つてのは美しくなる為なら色々な努力をするモンんだぜ。」

「

ドンキー

「……よく分からないけど、早く食べようよ。」

ドンキーはカモの話を理解出来ず、みんなに朝食を薦める。

数分後、全員朝食を終えた。

ドンキー

「ふう〜っ、食った食った〜。」

カモ

（スゲエな……殆どコイツが食っちまったぜ。）

カモはドンキーの大食いに啞然とする。

明日菜

「まさかバナナだけで腹一杯になるなんてね……………」。

デイデー

「それじゃ、腹がいっぱいになった所で早速出発しよう！」

ドンキー

「よし、全員いかだに乗って！」

ドンキーに言われて、全員いかだに乗り込む。

ドンキー

「そーれっ!!！」

ドンキーはネギ達を乗せたままいかだを波打際へ押し込む。

ドンキー

「よいしょっしょー！」

その後でドンキーがいかだに乗り込む。

木乃香

「わ〜、ウチらが作っただがちゃんと浮いとるわ〜。」

明日菜

「……………そりゃ、いかだから浮くでしょ。」

ネギ

「それでは、南へ向けて出航します!」

そう言うと、ネギは杖でいかだを漕ぎ始める。

ディディー

(ディクシー、今行くからね……………。)

く海上く

数時間後、ネギー行とドンキー&ディディーを乗せたいかだは今なお海の上を進んでいた。

ネギ

「ハアツハアツ……………これって意外と力を使うな。」

明日菜

「どれ、次は私が漕ぐわ。」

ネギ

「お願いします。」

ネギは明日菜と交代して杖を渡す。

木乃香

「う……う……。」

刹那

「お嬢様？どうなさいました？」

木乃香

「ど、どうやら………船酔いしてもうた。」

刹那

「だ、大丈夫ですか!？」

刹那は慌てて木乃香の背中を摩る。

のどか

「あっ!？」

ネギ

「ど、どうしました？」

のどか

「あ、あそこに……………背せ鱭びれが……………」

デイディー

「背鱭？」

全員のどかの指さす方を見ると、海から突き出てる青い背鱭がこちらへ接近してくる。

明日菜

「あ、あれってもしかして鮫さめ！？」

ドンキー

「待って、あの背鱭は……………」

バシャーーン

ネギ達の前まで接近してきた背鱭が勢い良くジャンプすると、大きな青いカジキの姿が目に見える。

のどか

「あ、あれって……カジキ？」

デイディー

「やっぱりエンガードだ！」

ドンキー

「エンガードがいれば安心だね。」

ネギ

「どうしてですか？」

ドンキー

「エンガードは海の敵を倒してくれんだ。」

木乃香

「それは頼もしいなあ。」

ネギ

「……ん？アレは何でしょう？」

ネギが海に浮かんでるフグのような魚に指さすと……………。

プクーンッ

フグはハリセンボンみたいにトゲを出して膨らみだす。

ネギ

「な！？魚が風船みたいに膨らんだ！？」

デイデー

「アレはパフタップだ！このままじゃ爆発しちゃうー！」

明日菜

「な、何ですって！？」

全員パフタップが爆発すると聞いてに動揺するが……………。

ザッパーン！！

エンガードが猛スピードで泳いで、パフタップを鋭い鼻で一掃する。

のどか

「……………な、何が起こったんでしょうか？」

ドンキー

「エンガードがパフタップをやっつけてくれたんだ。」

刹那

「い、いつの間に……………」

木乃香

「やっぱり頼りになるな。」

木乃香は水面から顔を出したエンガードの鼻を撫でる。

明日菜

「それじゃ、改めて出発するわよ！」

そう言うと、明日菜は杖で漕ぐ手を動かし始める。

↳更に数時間後↳

明日菜

「ハアハアツ……………」。

流石の明日菜も数時間も漕ぎっぱなしで疲れていた。

ネギ

「あ、明日菜さん……………そろそろ僕が代わりますよ。」

明日菜

「お、お願い……………」

そう言いつと、明日菜はネギと交代する。

ドンキー

「もつそろそろ何か見えてきてもいいんだけど……………」

刹那

「……………ん？」

木乃香

「せつちゃん、どないしたん？」

刹那

「前方に何か見えてきました。」

デイデュー

「えっ！？何々？」

全員刹那が指さす方を見ると、前方にワニの顔を模った塔のような巨大要塞があった。

ネギ

「ま、まるで巨大な塔みたいですね。」

デイディー

「ドンキー、あれってもしかして……………」。

ドンキー

「わゝ、あれ大きいね〜！」

ドンキーは初めてみたように要塞を眺める。

デイディー

「ちょっと！ドンキーはあれを覚えてないの!？」

ドンキー

「え？あれ前に見た事あったっけ？」

デイディー

「あるじゃん！前にキングクルールがあれに乗ってオイラ達の島を

破壊しようとしたじゃないか！」

ドンキー

「うーん……………覚えてないや。」

ズルッ

ドンキーの言葉にディディーは「ケる。

ディディー

「だ、駄目だこりゃ……………。」

明日菜

「……………アンタも苦労してんのね。」

ネギ

「と、とところでそのキングクルールって誰ですか？」

ドンキー

「僕達のバナナを盗んだクレムリン軍のボスだよ。」

刹那

「成程、要するにそいつが敵の親玉という訳か……………」

明日菜

「取り合えず、あの建物へ上陸しましょ。」

ネギ

「そうですね。」

ネギはいかだを要塞に近付けて、全員要塞に上陸する。

デイディー

「よし、中へ入ってディクシーを助けよう！」

ドンキー

「おーっ！ー！」

ドンキーとデイディーはダッシュで要塞の中へ入っていく。

刹那

「あつ！？こ、此処は敵の本拠地だからもつと慎重に行かないと……………」

ネギ

「……………行っちゃいましたね。」

明日菜

「仕方ない……………私達も行きましょう！」

ネギ達もドンキーとディディーの後から要塞の中へ入っていく。

くハイドアウト最上階く

ブーッ！ブーッ！

ハイドアウトの最上階の奥の部屋で警報機が鳴り響いていた。

？

「やはり来たか猿共………クランプ將軍は居るか！？」

椅子に座りながら膝に緑色の犬くらの大きさのワニを乗せた何者かがクランプという名のヘルメットを被った大柄のクレムリンを呼ぶ。

クランプ

「はい！お呼びですか？」

？

「猿共が侵入した………全軍総出で迎え撃つのだ！」

クランプ

「了解！」

クランプは何者かに向かって敬礼すると、その場から立ち去る。

？

「フッフ、今度こそ奴らの最後だ………なあ？俺様の可愛いクランプトラップちゃんよ。」

クランプトラップ

「ガウガウッ！」

クランプトラップという名の小さなワニは何者かの問いに答えるかのよじに鳴く。

くハイドアウト一階く

ネギー行とドンキー&ディディーはハイドアウト内部をさ迷っていた。

ドンキー

「……………入ったのはいいけど、何処を目指せばいいんだろ？」

明日菜

「そりゃ、一番上を目指せばいいんじゃない？」

刹那

「確かに、ボスは最上階にいる可能性がありますね。」

ネギ

「では、目指すは最上階ですね。」

ネギ達は最上階目指して進むとした時……。

デイディー

「ウギヤーツー!!」

ドンキー

「ど、どうしたのデイディー!？」

全員デイディーの大声で振り向くと、デイディーがビーバーのような生物に長い尻尾を噛まれていた。

デイディー

「助けて〜!ノーティに尻尾を噛まれちゃったよ〜!!」

明日菜

「まったく、しょうがないわね〜。」

そう言つと、明日菜がノーティをディディーの尻尾から引き離して片手で持ち上げる。

ディディー

「ふっつ、助かった……………」

ディディーはノーティの歯型が残つてる尻尾を優しく撫でる。

木乃香

「それにしても、この子可愛ええな〜。」

明日菜

「どごがよ。」

ポイツ

明日菜はノーティをそこから辺に投げ捨てる。

ネギ

「よ、よく考えたら此処は敵の本拠地でしたね……………」

刹那

「ええ、だから敵が何処から現れても可笑しくありません。」

ドンキー

「よし、それじゃ慎重に進もう。」

そう言うが、ドンキーはそのまま突っ走っていく。

デイディー

「あー待ってよドンキー!!」

デイディーもドンキーを追って突っ走る。

刹那

「って、言ってる側から……………」

ネギ

「ハア〜ツ……………」

ネギと刹那はドンキーの行動に呆れ返る。

明日菜

「とにかく、私達も出発しましょう。」

明日菜の言葉にネギ一行も進み出す。

「ハイドアウト二階」

ネギー行とドンキー&ディディーは次の階へやって来た。

ディディー

「可笑しいなあ、前に侵入した時と全然構造が違うな。」

ドンキー

「うーん……………僕やっぱり覚えてないや。」

ドンキーが頭をポリポリ搔いていると……………。

?

「そこまでだ!」

全員

「!?!?」

突然聞こえてきた声に驚いて辺りを見渡すと、高い足場にクランプと沢山の二足歩行のワニが立っていた。

ディディー

「クランプ!それにこんなに沢山のクリッターまで……………」

明日菜

「ひょっとして、コイツらがクレムリン？」

ドンキー

「そうだよ。」

クランプ

「此処から先は通す訳にはいかん！全軍がかれーっ！！」

クリッター軍

「おおーっ！！」

クランプの掛け声でクリッター全員が足場から降りて、ドンキー達を囲む。

明日菜

「やるしかないわね……………アデアット！！」

パアアッ

明日菜は『ハマノツルギ』を呼び出す。

ネギ

「行きますよ！契約執行180秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』
！！」

明日菜

「んっ……………」

ネギが呪文を唱えると、明日菜の身体が魔力に覆われる。

デイディー

「な、何か光ってるよ!？」

ドンキー

「本当だ……………」

ドンキーとデイディーは明日菜の異変に首を傾げる。

クリッター

「やっちまえー!！」

次の瞬間、クリッターの団体がネギ達に襲い掛かる。

明日菜

「おりゃー！！」

パシィーン！！

クリッター軍

「ぐお〜っ！！！」

明日菜は『ハマノツルギ』で数十体のクリッターを吹っ飛ばす。

刹那

「神鳴流奥義・百烈桜華斬！！！」

ザシユユツ

クリッター軍

「ぎゃあああっ！！！」

刹那も夕風で複数のクリッターを切り裂く。

ドンキー

「僕だって……………ハンドスラップ!!」

バン！バン！バン！

クリッター軍

「ぐえ〜っ!!」

ドンキーは勢い良く地面を叩いて、クリッターの大群を吹っ飛ばす。

デイディー

「オイラも……………ローリングアタック!!」

ドガガガガッ!!

クリッター軍

「どわ〜っ!!」

デイディーは強力なローリングアタックでクリッターの大群を蹴散らす。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……魔法の射手 連弾・
光の17矢!!」

ドドドドドッ!!

クリッター

「うぎや〜っ!!」

ネギは魔法の光弾でクリッター軍を一掃する。

クランプ

「えーい! どんどん掛かれー!!」

クリッター軍

「うおーっ!!」

クランプの掛け声でクリッターの大群が続々現れる。

明日菜

「コ、コイツら一体何匹いるのよ!？」

刹那

「くっ、幾ら倒してもキリがない……………」

デイディー

「オ、オイラ……………目が回ってきた。」

デイディーが頭を抑えながらフラフラしていると……………。

？

「フゴーツ!!」

ネギ

「な、何だ!？」

突然ネギ達の後ろからサイのような動物が向かって来る。

明日菜

「ま、まさかまた敵!？」

ドンキー

「いや、アレはランビだ!」

デイディー

「オイラ達を助けに来てくれたんだ！」

ランビ

「フゴーツ!!」

ドガアアッ!!

クリッター軍

「ぐわあああっ!!」

ランビの強力な体当たりが複数のクリッターを吹っ飛ばす。

のどか

「す、凄い……………」

木乃香

「一発で吹っ飛ばしてもうた……………」

のどかと木乃香はランビの体当たりの威力に啞然とする。

ディディー

「いいぞランビ！そのまま残りの奴らも吹っ飛ばしちやえ！！」

ランビ

「フゴーツ！」

ランビはどんどん沢山のクリッターを吹っ飛ばしていく。

クランプ

「このままではマズイ……………行け！クロバー部隊！！」

クロバー

「へいつ！！」

クランプの掛け声と共に、タルを服代わりに装着してるクレムリンのクロバーが沢山突撃してきた。

ドンキー

「ランビ、向こうからも来たよ！」

ランビ

「フゴーツ！！」

バガアアッ!!

ランビは数秒でクロバー達を吹っ飛ばす。

クランプ

「うぬぬ、あのサイを何とかしなければ……クラッシャ!あのサイを止めてくれ!!」

クラッシャ

「おう!任せろ!!」

クランプの後ろから筋肉ムキムキのクレムリン・クラッシャが現れて、下の方へ移動してランビに近づく。

ランビ

「フゴーツ!!」

ランビはクラッシャに向かって突っ込むが……。

ガシッ!!

クラッシャはランビの角を掴んで動きを止める。

クラッシャ

「フン、力では誰にも負けないぜ！」

ランビ

「フゴゴゴ……。」

ランビはどんどんクラッシャに押されていく。

デイディー

「じ、このままじゃランビが……。」

明日菜

「大変！助けなきゃ……。」

ネギ

「あ、明日菜さん！？」

明日菜は『ハマノツルギ』を持ったままランビとクラッシャの方へ駆け出す。

明日菜

「ちょっとアンタ！」

クラッシャ

「何っ!？」

明日菜

「くらええええっ!!！」

パシヤヤヤン!!

クラッシャ

「ぬわ〜っ!!！」

明日菜が『ハマノツルギ』でクラッシャを吹っ飛ばす。

クランプ

「お、おい!こっちへ来るんじゃない……。」

ドカーッ!!

クランプ

「どわ〜っ!!！」

クランプは明日菜に吹っ飛ばされたクラツシャと共に空の彼方へ吹っ飛ばす。

デイディー

「ス、スゲエ……………クラツシャを一撃で吹っ飛ばしちゃった。」

ドンキー

「明日菜ちゃんって、見かけによらず力強いんだね。」

ドンキーとデイディーは目を丸くしながら明日菜を見つめる。

クリッター

「うおーっ！！」

またしてもクリッターの大群が続々と現れる。

木乃香

「ま、また出て来たえ〜！」

デイディー

「本当にしつこいな〜。」

ランビ

「フゴフゴッ！」

ランビは『先に行け！』と言わんばかりに鳴き声を上げる。

ドンキー

「え？『先に行け』って言ってるの？」

ネギ

「そ、そんな……………」

ランビ

「フゴォーッ！！」

ランビはクリッターの大群に向かって突っ込んでいく。

明日菜

「あー！ちょっと！？」

刹那

「……………行ってしまいましたね。」

ディディー

「仕方ない……………先へ急ごう！」

ドンキー

「そうだね！ランビが頑張ってるしね。」

ネギ

「では、先へ進みましょう！」

ネギ一行とドンキー&ディディーはそのまま最上階目指して先へ進む。

第九話くクレムリンとアニマルフレンドく（後書き）

次回からデイクシーを誘拐した奴の正体が明らかに………といても既に名前が出てますが………。

皆さんの登場してほしいキャラのリクエストは引き続き募集してますが、必ずそのキャラを出す訳ではありませんのでご了承ください………。

第十話「コングクルー大集合」(前書き)

タイトル通りですが、『ドンキーコング64』でお馴染みのキャラクターが登場します。

ご期待下さい！

第十話〜コングクルー大集合〜

〜ハイドアウト最上階〜

ネギー行とドンキー&ディディーは廊下で沢山の大きな蜂に追われていた。

明日菜

「な、何あの大きな蜂は!?!」

ドンキー

「アレはジンガーっていうんだけど、全身トゲだらけだから普通に倒せないんだ。」

ネギー

「では、僕が魔法で……………」。

ディディー

「いや、オイラに任せて!」

そう言うと、ディディーは後ろの方を向いて、そのまま立ち止まる。

明日菜

「ちよ、ちよっと!?!」

木乃香

「危ないえ!」

デイディー

「大丈夫! オイラにはこれがあるから……………」。

デイディーは懐から木製の二丁拳銃のような武器を取り出す。

カモ

「おいおい、そんな玩具おもちゃみてえな武器で倒せるのか!?!」

デイディー

「オイラのピーナッツ・ポップガンを馬鹿にするなよ……………発射!
!」

パン!パン!パン!

ジンガー

「ブウウツ!!」

デイディーはピーナッツ・ポップガンの引き金を引くと、銃口から大きな落花生が発射されてジンガーを命中させる。

刹那

「い、今のは落花生？」

明日菜

「……………変わった武器ね。」

デイディー

「この武器はファンキーのお手製なんだ。」

ネギ

「ファンキーさんってあのタル型の飛行機を操ってたゴリラですか？」

ドンキー

「そうそう、ファンキーが僕達の為に武器を製作してくれたんだけど……………僕もココナッツ・キャノンを持ってくれば良かった……………」

ドンキーはデイディーのピーナッツ・ポップガンを羨ましそうに見

つめながら言う。

ネギ

「……………」と、とにかく先へ進みましょう。」

ネギ達はドンキーに気にせずそのまま先へ進んでいく。

しばらく進んでいくと、頑丈な扉がそびえ立っていた。

デイディー

「デイクシーはきっとこの中に……………」。

ネギ

「早速入りましょう。」

明日菜

「でも、この扉普通の力じゃ開きそうもないわよ。」

ドンキー

「任せて。」

ドガアアッ!!

ドンキーの強力なパンチによって、頑丈な扉は簡単に壊れてしまった。

のどか

「す、凄い……。」

デイデー

「流石はドンキー！」

ドンキー

「さあ、入ろう。」

全員大きな穴が開いた扉の中へ入っていく。

？

「フフフ……やはり来たな猿共。」

部屋の中には王冠を被って赤いマントを着けた大柄のワニが立っていた。

ドンキー

「やっぱりキングクルールだったのか。」

ネギ

「この大きなワニが……。」

明日菜

「手下もワニならボスもワニって訳ね。」

デイディー

「やいクルール！デイクシーを返せ！！」

クルール

「フン、あの子猿の事か？」

？

「助けて〜！！」

キングクルールの真上に縄で縛られながら吊されているポニーテールにピンク色の帽子を被った雌猿がいた。

デイディー

「デイクシー！！」

木乃香

「あんな所に吊されて可哀相や……………」。

ドンキー

「デイクシーを返せ！」

クルール

「いいだろう……ただし、俺様を倒せたらな！」

そう言うと、お互い戦闘体制に移る。

のどか

「アデアッド……！」

ペアアツ

のどかは咄嗟に『いどのえにつき』を呼び出す。

クルール

「何人掛かって来ようが無駄じゃ！喰らえ……！」

キングクルールは頭の王冠を掴む。

のどか

「気をつけて下さい！王冠を投げてきます……！」

ドンキー

「え？本当に？」

ドンキーはのどかの忠告に首を傾げる。

クルール

「それっ！！」

ヒュッ！！

のどかの言う通りに、キングクルールは王冠を投げ付ける。

デイディー

「あ！本当に投げってきた。」

ドンキー

「でも、前に闘った時の同じ攻撃だね。」

明日菜

「こんな攻撃打ち返してやるわ！それっ！！」

パコーン!!

クルール

「ぐえっ!!」

明日菜が『ハマノツルギ』で王冠を打ち返して、キングクルールの顔面にヒットさせる。

カモ

「姐さん、ナイスヒットだぜ!」

明日菜

「まあね!」

クルール

「お、おのれ……次はこれだ!!」

クイツ

クルールは顔を抑えながら目の前にぶら下がってる紐を引っ張る。

のどか

クルールは信じられないような表情をしながら驚愕する。

明日菜

「ねえ、もうそろそろやつつけちゃわない？」

刹那

「そうですね、時間の無駄ですし………。」

ネギ

「明日菜さん！刹那さん！一気に行きましょう！……！」

ドンキー

「ぼ、僕も行くよ！……！」

ネギの掛け声を合図に、ネギ・明日菜・刹那・ドンキーがクルールの所へ駆け出す。

ネギ

「風花・武装解除！……！」

ズバァアッ！！

クルール
「ぬおっ!?!」

ネギの武装解除の魔法でクルールの王冠を吹き飛ばし、マントを花びらに変える。

クルール

「お、俺様の愛用の王冠とマントが……………」

明日菜

「今度はこつちよ!?!」

スパアアアン!!

クルール

「あだーっ!?!」

今度は明日菜が『ハマノツルギ』でクルールを吹っ飛ばす。

刹那

「神鳴流秘剣・百花繚乱!?!」

ズバアアアツ!!

クルール

「ぐおおおっ!!」

更に刹那の剣技を受けたクルールが宙へ舞い上がる。

ドンキー

「とどめだ!スピニングコーング!!」

ズドドドドツ!!

クルール

「ぐわあああっ!!」

ドガーーーーッ!!

最後にドンキーが駒のように回転しながらクルールに体当たりすると、クルールはその勢いで壁へ叩き付けられる。

クルール

「や、やられた……。」

バタッ

クルールはそのまま倒れてしまった。

明日菜

「……………何かあっさり片付いちゃったわね。」

ドンキー

「うーん……………クルールってこんなに弱かったっけ？」

ドンキーは頭をポリポリ掻きながら倒れてるクルールを見つめる。

ディディー

「きつと大乱闘のお蔭でオイラ達が強くなっただよ。」

明日菜

「どっちにても勝ったんだからいいじゃない。」

木乃香

「そやで、ほなら早っはやディクシーちゃんを降さなアカンな。」

デイディー

「あーそうだった。」

デイディーは慌ててディクシーが吊されてる所へ駆け寄る。

デイディー

「ディクシー、今降ろすからね！」

ディクシー

「早く降ろして〜！」

ディクシーは足をバタつかせる。

デイディー

「ちよっと待って……………って、やっぱりオイラじゃ届かないや。」

デイディーはディクシーを降ろそうと手を伸ばすが、全然手が届かなかった。

ドンキー

「デイディー、僕がディクシーを降ろすよ。」

そう言つと、ドンキーを含む全員がディディーの元へ駆け寄ってくる。

ディディー

「ドンキー、早くディクシーを降ろしてあげて。」

ドンキー

「任せて！うん……………」

ドンキーはディクシーに向かっておもいつきり手を伸ばすが、ドンキーの指が微かにディクシーの足を触れる程度だった。

ドンキー

「もうちょっとなのに……………ネギ君、僕の肩に足を乗せてディクシーを降ろしてくれない？」

ネギ

「は、はい…」

ネギはドンキーの広がって大きい肩に足を乗せる。

ネギ

「も、もう大丈夫だからね。」

ディクシー

「貴方はディディー達の仲間？」

ネギ

「ま、まあ……………そんなところかな。」

ネギがディクシーの問いに答えながら手を伸ばすと……………。

のどか

「!?!?」

のどかはふと『いどえにつき』を見ると、表情を凍り付かせる。

のどか

「み、皆さん!急いでこの場から逃げて下さい!…」

明日菜

「え!?!?な、何……………」

クールル

「もう遅いわ!!」

ビィィッ!!

のどかが大声を上げた直後、倒れたハズのクールルがラツパの形をした銃から光線を放出させる。

刹那

「危ない!!」

刹那は咄嗟に木乃香の手を引っ張りながら避ける。

明日菜

「本屋ちゃん!こっちへ……」。

明日菜ものどかの手を引っ張りながら避ける。

デイディー

「ヤ、ヤバイ!!」

デイディーも間一髪避けるが……。

ドンキー

「ぐあああつー!!」

ネギ

「うわあああつー!!」

ネギとドンキーは避け切れずに光線を受けてしまう。

明日菜

「ネギーー!!」

デイディー

「ドンキーー!!」

全員攻撃を受けたネギとドンキーに近付く。

ネギ

「う……う……う……。」

ドンキー

「い、一体何が……。」

ネギとドンキーは立ち上がろうとするが、先程の攻撃で身体が動かせない状態だった。

クールル

「フン、俺様がそう簡単にやられると思ったか？」

クールルはラツパ型の銃を持ちながら鼻で笑う。

刹那

「き、貴様……………」

明日菜

「やられたフリをしたのね……………」

クールル

「この手は前にドンキーの時にも使ったのだが、またこつも簡単に引っ掛かってくれるとはな。」

木乃香

「卑怯や……………」

全員クールルの卑劣な行動に表情が険しくなる。

クルール

「ところでデイディーよ、この銃に見覚えはないか？」

デイディー

「銃？……あつ！確かその銃はキャプテンクルールが使ってたのと同じやつだ！」

デイディーはクルールの銃を見て目を見開いて驚く。

クルール

「その通り！だが、この銃は兄貴のよりも性能が良いし攻撃力も抜群だ……何せ、以前俺様が開発したあの『プラストマティック』と同等の威力だからな。」

デイディー

「な、何だつて！？」

デイディーはクルールの言葉を聞いて驚愕する。

明日菜

「な、何？その『プラス何とか』って……。」

デイディー

「『プラスチックマティック』だよ……………クルールが前にオイラ達の島を破壊する為に造った兵器だよ。」

刹那

「で、ではあの銃は島を一つ破壊出来る程の威力を……………」

のどか

「その攻撃をネギ先生はまともに……………」

のどかは倒れ込んでるネギを見つめる。

明日菜

「木乃香！ネギとドンキーをお願いね！！」

木乃香

「分かったえ！」

そう言うのと、木乃香は倒れ込んでるネギとドンキーに駆け寄る。

明日菜

「よし、ネギ達の事は木乃香に任せて、私達はあのワニをやってっけ

ましょー！
「」

刹那

「はい！！」
「」

デイディー

「OK！！」
「」

明日菜

「本屋ちゃん！いつも通りにサポートをお願い！！」
「」

のどか

「は、はい！！」
「」

クルール

「フン、お前らごときに俺様が倒せるか……………いでよ！俺様の可愛いペット達よ！！」
「」

パチッ

クラブトラップ

「ガウガウッ！」
「」

クルールが指を鳴らすと、沢山のクラップトラップが現れる。

明日菜

「な、何よこの犬みたいなワニは!?!」

デイディー

「クラップトラップだよ! 噛まれないように気をつけて!」

ドガガガガッ!!

デイディーはローリングアタックで複数のクラップトラップを蹴散らす。

明日菜

「このこの〜! こっちへ来るな〜!」

パシィィィッ!!

明日菜は近寄ってくるクラップトラップを『ハマノツルギ』で吹っ飛ばしていくが……。

クラップトラップ
「ウガァッ!!」

明日菜

「なっ!?!」

一匹のクラップトラップが明日菜に向かって飛び掛かってくる。

クラップトラップ

「ガウガウァッ!!」

それを合図に複数のクラップトラップが明日菜に群がる。

ペロペロペロペロッ

明日菜

「ちょ、ちょっと!?!何なのよ!イッちゅ!!」

次の瞬間、沢山のクラップトラップが明日菜の身体を舐め回す。

刹那

「あ、明日菜さん!今助けに……。」

刹那が慌てて明日菜の所へ向かおうとした時……………。

のどか

「桜咲さん！避けて下さい！！」

刹那

「えっ！？」

ビィィッ！！

刹那はのどかの声に反応して振り向くと、クルールが放った光線が目の前まで来てた。

刹那

（マズイ！瞬動！！）

スッ

刹那は瞬動を使って間一髪避ける。

クールル

「チツ、間一髪避けたか……………」

クールルは不機嫌に舌打ちをする。

刹那

「み、宮崎さん……………助かりました！」

のどか

「い、いえ……………」

のどかは刹那にお礼を言われて照れてしまう。

刹那

（それにしても、私とした事が……………もし宮崎さんが教えてくれなければ私は確実にあの攻撃を喰らっていた。）

刹那は真剣な顔立ちで考え込む。

クールル

「ほれほれ！どんどん発射するぞー！」

クルールは再び銃を構えるが……………。

ディディー

「やめるー!!」

ドンッ!!

クルール

「むぐっ!!?」

ディディーがクルールの背後から体当たりをする。

クルール

「このちび猿め!邪魔するな!!」

ドガッ!!

ディディー

「うぐっ!!」

クルールはディディーを蹴り飛ばす。

デイディー

「いててて……………」

デイディーは頭を抑えながら立ち上がる。

クルール

「まずは貴様から始末してやる。」

そう言うと、クルールはデイディーに向けて銃を構える。

明日菜

「デイ、デイディー！逃げて〜！！」

刹那

「くっ！ワニ共が邪魔で近付けない……………」

明日菜と刹那は沢山のクラブトラップに妨害されて苦戦していた。

クルール

「これで終わりだ！！」

クルールが銃の引き金を引こうとした時……。

ブスッ！

クルール

「いたたたた〜！！」

突然クルールのお尻部分に赤い羽根が突き刺される。

明日菜

「な、何が起こったの？」

？

「デイディー、助けに来たよ！」

？

「わいらが来たからにはもう安心やで！」

？

「僕達も加勢するよ！」

デイディー

「え！？ま、まさか……………」

デイディーが声が聞こえた方を見ると、金色のツインテールが特徴の長身の雌ゴリラと道化師のような風貌のオラウータンと小さな帽子とチョッキを着た大柄なゴリラがいた。

デイディー

「タイニー！ランキー！チャンキー！来てくれたんだー！」

タイニー

「スコークスから話を聞いてね。」

ランキー

「水臭いやっちゃん、何でわいらに声を掛けへんねん。」

チャンキー

「言ってくれば協力したのに……………」

デイディー

「ごめん……………慌ててたから話す暇が無くて……………」

デイディーは申し訳なさそうに謝る。

タイニー

「まあ、いいわ……………クラブトラップは私達がやっつけるから。」

ランキー

「ほな、行こか〜!」

チャンキー

「よーし、やるぞー!」

タイニー達は群がるクラブトラップに向かって駆け出していく。

明日菜

「だ、誰でもいいから早く助けて〜!」

タイニー

「任せといて!フェザー・ボウガン発射!」

プスッ!プスッ!

クラブトラップ

「キャー〜ン!」

タイニーが小さなボウガンのような物を取り出すと、赤い羽根を連射して明日菜に群がるクラップトラップ達のお尻に突き刺す。

明日菜

「た、助かった……………ありがとう。」

タイニー

「いいえ、どう致しまして」

明日菜はくたくたになりながらタイニーにお礼を言う。

クラップトラップ

「ウガ~~~~ッ!!」

刹那

「くっ!数が多過ぎる……………」。

ランキー

「わいに任しとき〜!」

ビョーーーーン……!

クラップトラップ

「きゃウ~~~~ッ!」

ランキーが腕をゴムのように伸ばして、刹那に群がるクラップトラップ達を吹っ飛ばす。

ランキー

「姉ちゃん、怪我はありまへんか?」

刹那

「え、ええ……………助かりました。」

刹那はランキーに一礼をする。

クラップトラップ

「ガウガウッ!」

のどか

「きゃーっ!」

数匹のクラップトラップがのどかに襲い掛かる。

チャンキー

「危ない！！！」

ドガガガガッ！！

クラブトラップ

「グギヤッ！！！」

チャンキーがのどかに襲い掛かるクラブトラップを回転しながら
薙ぎ払う。

チャンキー

「もう大丈夫だよ。」

のどか

「あ、ありがとうございます。」

のどかは丁寧にチャンキーにお礼を言う。

ディディー

「わ、タイニー達のお蔭でクラブトラップは全滅しちゃったよ。」

「

クルール

「うぬぬ……………」

クルールはこの状況に焦り始める。

タイニー

「さうて、これからどうするの？」

ランキー

「もはやアンタに勝ち目は無いで。」

チャンキー

「大人しく降参したら？」

クルール

「ぬうう……………誰が降参なんかするか！！」

そう言うのと、クルールは吊されてるディクシーに銃口を向ける。

ディディー

「ディ、ディクシー！」

クルール

「おっと！それ以上動いたら銃の引き金を引くぞ。」

刹那

「何処までも卑怯な奴め……………」。

明日菜

「アンタ最低よ!!！」

クルール

「何度でも言え！これが俺様のやり方だ!!ハーツハハハハハハハハハハハ……………」。

クルールが高笑いを始めた時……………」。

ネギ

「魔法の射手・戒めの風矢!!！」

ズバアアツ!!！」

クルール

「むぐつ!?か、体が動かん……………」

木乃香の力で回復したネギが拘束魔法でクルールの動きを止める。

明日菜

「ネギ!もう大丈夫なの!？」

ネギ

「はい、木乃香さんのお蔭で助かりました!」

ドンキー

「僕もこの通り体力回復したし……………そろそろお仕置きをしちやおうかな?」

ポキポキッ

体力を回復したドンキーは指を鳴らしながらクルールに近付いていく。

デイデュー

「やつちやえドンキー!」

ランキー

「いよっ！待ってましたー！！」

クルール

「ま、待て！話せば分かる……………」。

ドンキー

「ジャイアントパンチ！！」

ボガアアアツ！！

ドンキーは強力なパンチでクルールを吹っ飛ばす。

クルール

「ぬおおっ！覚えてろよおおっ！！」

クルールはそのまま空の彼方へ飛ばされてしまう。

デイデー

「やったー！クルールを倒したぞー！！」

タイニー

「流石ドンキーね！」

ランキー

「やっぱりアンタがジャングルの王や！」

チャンキー

「カツコイイ〜！」

ドンキー

「そ、そうかな〜？」

ドンキーはディディー達におだてられて顔を真っ赤に染める。

ディクシー

「……………ねえ、みんな私の事忘れてない？」

ネギ

「み、皆さん！ディクシーさんを助けないと……………。」

ディディー

「あ！そうだった！！」

ディディー達は慌ててディクシーを救出する。

ディクシー

「……………ふう、やっと降りられた。」

ディディー

「ディクシー、クレムリン達に酷い事されなかった？」

ディクシー

「うん、大丈夫……………助けに来てくれてありがとう。」

ディディー

「い、いや……………」

ディディーはディクシーのお礼の言葉に顔を紅く染める。

木乃香

「何かええ感じやな。」

明日菜

「それに、お似合いのカップルね。」

明日菜と木乃香はデイディー達の光景を微笑みながら眺める。

ネギ

「そ、それでは此処から出ま……………あっ!？」

のどか

「ネギ先生? どうしました?」

ネギ

「あ、あの人は……………」

ネギが指さす方を見ると、マリオの世界にいた黒コートの人物が立っていた。

デイディー

「な、何だお前は!?! クルールの仲間か!?!」

?

「仲間ではないが、奴に加担した事はある。」

ドンキー

「加担って何?」

ネギ

「要するに、その人の協力をしたって意味ですよ。」

ネギは加担の意味をドンキーに説明する。

？

「そういう事だ……それに、この銃を開発したのは私だ。」

明日菜

「な、何ですって!？」

全員黒コートの人物の言葉に驚愕する。

？

「だが、奴はこれを上手く使いこなせなかったようだ……。」

そう言うと、黒コートの人物は床に転がってたクルールの銃を拾う。

刹那

「しまった！奴が銃を……。」

刹那は夕風を取り出そうとするが……。

バキィッ!!

全員

「!?!」

黒コートの人物は銃を真つ二つにへし折ってしまう。

?

「幾ら武器の性能が良くても、その使い手が優秀でなければ何の価値も無い……。」

そう言い残すと、黒コートの人物はその場から立ち去ろうとする。

ネギ

「ま、待って下さい!」

ネギは慌てて黒コートの人物を呼び止めようとするが……。

カモ

「待て兄貴!マスターの旦那があいつに手を出すなって言ってたじ

「やねえか！」

ネギ

「で、でも僕……あの人に色々聞きたい事が……。」

ネギとカモが言い合いしてる中、黒コートの人物は何処かへ去っていく。

明日菜

「……行っちゃった。」

ドンキー

「あいつは何だったんだろう？」

木乃香

「ウチらもよく分からへんねん。」

ディディー

「それより、そろそろ島へ帰るつよー！」

そう言つと、全員今居る部屋から出る。

くDKアイランドく

キングファミリーはディクシーの救出を手伝ってくれたネギー一行に感謝していた。

クランキー

「いや、お前さん達には世話になったのお。」

ネギ

「い、いや……そんな事はありませんよ。」

ネギはクランキーの言葉に照れる。

ファンキー

「Hey!そこでユー達にバナナをプレゼントするぜ。」

キャンディー

「沢山食べてね。」

ファンキーはバナナが入った中位の大きさのタルをネギに渡す。

ネギ

「あ、ありがとうございます……。」

ネギは苦笑いしながらタルを受け取る。

明日菜

「ま、またバナナなのね……………」

木乃香

「ええやん、バナナは体にエエんやで。」

刹那

「た、確かにそうですね……………」

明日菜達はコング達に聞こえないように話す。

ドンキー

「ところで、ネギ君達はこれからどうするの？」

ネギ

「僕達はそろそろ別の世界へ行きます。」

デイディー

「えー、もつちよっとゆっくりしていけばいいのさ。」

明日菜

「私達もそうしたいんだけどね……………」

木乃香

「大丈夫や、きっとまた会えるから……………」。

デイクシー

「本当に？」

木乃香

「ホンマや……………なあ？みんな。」

木乃香の問いにネギ達は頷く。

デイデイー

「また遊びに来てね！」

タイニー

「私達も待ってるわ。」

ランキー

「いつでも大歓迎やで〜。」

チャンキー

「またね〜。」

ドンキー

「それじゃ、バイバイ！」

ネギ

「はい、またいつか会いましょう！」

ネギ達はコング達に見送られながらジャングルを去っていく。

第十話「コングクルー大集合」(後書き)

という訳で、ドンキーコング編は終了です。

次は誰の世界へ行くのかご期待下さい！

第十一話 黄昏の姫君との再会 (前書き)

マリオ、ドンキーコングの世界に続いて次にネギ達はどの世界へ行くのでしょうか？

第十一話 黄昏の姫君との再会

（大乱闘の館）

ネギー一行はドンキーコングの世界から帰って来た。

マスターハンド

「今回も無事に帰って来たか。」

ネギ

「は、はい……………」

ネギはコングファミリーから貰ったバナナ入りのタルを抱えていた。

マスターハンド

「ん？そのタルは？」

のどか

「コングファミリーの皆さんから貰ったんです。」

木乃香

「マスターハンドはんも食べる？」

マスターハンド

「いや、私はこの姿だから……………」。

カモ

「それじゃ、マスターの旦那は普段何も食べねえんですかい？」

マスターハンド

「ああ、だから私には空腹という気持ちがないのだ。」

ネギ

「お腹が空かないなんて凄いですね……………」。

ネギ一行は何故か感心する。

マスターハンド

「と、とにかく今日はゆっくり休むといい。」

全員

「はいー！」

ネギ一行はそれぞれ部屋へと戻っていく。

ネギ一行はいつも通りに朝食を終えて、中庭へ集まっていた。

マスターハンド

「それではネギ君、三角形の形したバッチを出してくれ。」

ネギ

「はい。」

ネギは懐から三角形の間に三角の穴が開いたバッチを四つ取り出す。

マスターハンド

「そのバッチをリンク、ゼルダ、ガノンドロフに渡してほしい。」

明日菜

「リンクってあの『ゼルダの伝説』の主人公ね。」

ネギ

「あれ？バッチは四つあるのに三人だけ渡すんですか？」

マスターハンド

「ああ………それについては後で詳しく話すから、今はその三人にバッチを渡してくれ。」

ネギ

「わ、分かりました。」

ネギは少し納得がいかず首を傾げる。

刹那

「ネギ先生、そろそろ参りましょうか。」

ネギ

「そ、そうですね………では、行って来ます！」

マスターハンド

「気をつけてな。」

ネギー行はいつものようにワイプ土管へ入る。

トアル村

トアル村

ネギ

「よいしょとー」

ネギー一行はワイプ土管から出ると、場所は自然に囲まれた小さな村だった。

のどか

「何だか、とてもどかな村ですね。」

木乃香

「そやなく、みんなで此処でピクニックでもしたいわ。」

明日菜

「木乃香ったら……。」

明日菜は木乃香の呑気な言葉に笑みを浮かべる。

ネギ

「それでは早速、リンクさん達を捜しに……。」

？

「メエーッ！！」

カモ

「兄貴！後ろから何か来るぜ！！」

ネギ

「えっ！？」

ネギが後ろを向くと、体が青くて左右の角が繋がってる大きな山羊ちのひがこちらに向かって突っ込んでくる。

明日菜

「ネギ！危ない！！」

ネギ

「あわわ……………ど、どうすれば……………」。

ネギが慌てふためいていた時……………。

ネギ

「ハ……………ハ……………ハツクション！！」

ブワアアアッ！！

山羊

「メエ……………ッ！？」

ネギはくしゃみをするとう風の魔法が発動し、山羊は風に押されてひっくり返ってしまっ。

ブワァアッ!!

のどか

「きゃあっ!?!」

明日菜

「あ、あいつまた……………」

それと同時に明日菜達の履いてたスカートが風で捲れる。

カモ

(うひょく、今日はいいモン見たぜ!)

カモは明日菜達の方を見てニヤつく。

明日菜

「こら!何見てんのよ!?!」

カモ

(ヤベェ……………)。

カモは慌ててネギの肩へ隠れる。

木乃香

「それよりネギ君、大丈夫かえ？」

ネギ

「は、はい、何とか……………」

？

「こらー！待てー！！」

刹那

「ん？」

突然赤茶色の大きな馬に乗った耳の先端が尖った金髪の青年がネギ達の前に現れる。

？

「君達、さっき山羊が此処を通らなかつたかい？」

ネギ

「え？や、山羊ってアレの事ですか？」

？
「えっ？」

青年がネギの指さす方を見ると、山羊が目を回しながらひっくり返っていた。

？
「……………ま、まさか君達がやったの？」

ネギ
「あ、その……………すいませんでした！」

ネギは青年に向かって深く頭を下げる。

？
「いや、逆に助かったよ……………山羊追いの最中に牧場から逃げ出して困ってたんだ。」

明日菜
「山羊追い？」

木乃香

「スペインの牛追い祭りみたいなモンやるか？」

明日菜達は山羊追いという言葉に首を傾げる。

？

「もし良かったら、山羊追いを見してみる？」

ネギ

「えっ？いいんですか？」

？

「勿論さ……牧場はこの先だから付いて来て。」

ネギ達は青年に言われて後を付いて行く。

トアル牧場

ネギ達は青年に連れられて、山羊たちが放牧してある小さな牧場へやってきた。

明日菜

「さっきの山羊がいっぱいいるわ。」

？

「中は危険だから、君達は柵の外で見ててね。」

ネギ

「分かりました。」

そう言うと、青年は馬に乗ったまま牧場の中へ入る。

？

「はあっ！…！」

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

青年は沢山の山羊達を煽あおりながら小屋の中へと誘導させる。

433

木乃香

「成程、山羊達を小屋の中へ入れる為にああやって追い立てるんやな。」

刹那

「それにしても、随分手慣れてますね。」

ネギ

「馬とも息がピッタリの様子ですし。」

ネギ達は青年の山羊追いを感心しながら見る。

？

「……………よし、全部小屋の中へ入ったな。」

青年は山羊達を小屋の中へ入れて、牧場から出て来る。

ネギ

「凄いですね、あっという間に終わっちゃいましたね。」

？

「この牧場の山羊達はすぐに脱出するから、その度に俺とエポナがこつやって山羊追いをしているんだ。」

木乃香

「へえ、この馬エポナって名前なんや。」

木乃香はエポナという名前の馬の顔を優しく撫でる。

？

「ところで、君達は町の方から来たの？」

ネギ

「え？い、いえ僕達は……………」

？

「リンク〜！」

突然後ろ髪を前の方へ突き出した金髪のショートヘアの少女が青年の名前を呼びながら駆け寄ってくる。

明日菜

（えっ！？リンク？）

明日菜はリンクという名前に耳を疑った。

リンク

「あ！イリア……………」

イリア

「今日も山羊追いご苦労様……………エポナも疲れたでしょう？」

そう言うと、イリアはエポナの頭を優しく撫でる。

イリア

「あら？その子達は？」

イリアはネギ達を見て首を傾げる。

リンク

「俺もさつき会ったばかりなんだ……多分町の方から来たんじゃないかな？」

イリア

「そうなんだ……トアル村へようこそ！何も無い村だけど、ゆっくりしてってね。」

ネギ

「あ、はい、ありがとうございます……」

ネギはイリアの歓迎の言葉に慌ててお礼を言う。

イリア

「私はいつもの泉でエポナの体を洗ってくるから、リンクはこの子達の村の案内をお願いね。」

リンク

「ああ、いつも悪いな。」

イリアはエポナを連れて、牧場を後にする。

ネギ

「あ、あの……貴方はリンクさんですか？」

リンク

「え？うん、俺はリンクは俺だけ……。」

全員

「ええーっ！？」

ネギ達は一斉に驚きの声を上げる。

明日菜

「こ、この人があの勇者の……。」

木乃香

「イメージと全然ちゃうな。」

刹那

「とても、剣に優れているようには見えませんね。」

のどか

「むしろ、今時の若者って感じですね。」

明日菜達はリンクを見て、それぞれ感想を述べる。

リンク

（な、何々だ？）

リンクは明日菜達に見られて困惑する。

ネギ

「リンクさん、お話があるのですが……………」

リンク

「話？それなら俺の家で話そう。」

リンクはネギ達を自分の家へ案内しようと牧場を後にする。

くリンクの家く

ネギはリンクにこれまでの経緯を話した。

リンク

「……そうか、何か俺達の為に申し訳ないな。」

ネギ

「いえ、僕達は元の世界へ帰ればそれでいいんです………それよ
り、これを渡します。」

ネギはリンクに三角型のバッチを渡す。

リンク

「どうもありがとう。」

リンクは笑顔でネギからバッチを受け取る。

明日菜

「残りは後二人ね。」

ネギ

「そうですね………リンクさん、僕達ゼルダさんとガノンドロフさ
んにもこのバッチを渡したいのですが………。」

リンク

「えっ！？ゼルダ姫はともかくガノンドロフにも？」

リンクは目を見開きながら驚く。

のどか

「あの……私、リンクさんの冒険を本で読んだんですけど……ガ
ノンドロフさんって確か……。」

リンク

「そう……俺と奴とは敵対関係にある。」

刹那

「では、マリオさんとクッパさんのような感じですか？」

リンク

「いや、マリオさんとクッパはたまに一緒に冒険したりするって聞いた事があるけど……俺と奴はそんな生温い関係じゃないんだ。」

木乃香

「でも、大乱闘では一緒やったんやろ？」

リンク

「確かに奴も参戦していた……だが、奴は他のみんなと違って本気で始末しようと殺気立たせながら闘っていた。」

ネギ一行はリンクの話を聞いて、しばらく黙り込む。

ネギ

「そ、そんなに悪い人なんですか……………」。

明日菜

「何でそんな奴がスマッシュブラザーズの一員なのよ？」

リンク

「さあ、マスターハンドの気まぐれかもね。」

リンクは皮肉っぽく答える。

のどか

「……………な、ならゼルダ姫には会えますか？」

リンク

「ああ、ゼルダ姫ならハイラル城にいるよ。」

ネギ

「そのハイラル城は何処にあるんですか？」

リンク

「ラネール地方のハイラル王国にあるけど……俺が案内しようか？」

刹那

「宜しいんですか？」

リンク

「勿論さ、俺もゼルダ姫とは大乱闘以来お会いしてないしね。」

木乃香

「へえ、二人は遠距離恋愛してたんや。」

リンク

「れ、恋愛！？」

リンクは木乃香の言葉に真っ赤になりながら慌てふためく。

木乃香

「あれ？二人は付き合ってるんちゃうの？」

リンク

「お、俺と姫はそういう関係じゃ……………それに、身分が違いすぎる。」

刹那

「……………その気持ちは分かります。」

ネギ

「え？」

明日菜

「せ、刹那さん？」

刹那の発言に全員耳を傾ける。

刹那

「あ、いや、その……………別に深い意味はありません。」

刹那はハッと我に返ると、真っ赤になりながら縮こまる。

木乃香

「せつちゃんたら、急にどないしたん？」

刹那

「い、いえ……………」

明日菜

（刹那さん、やっぱり木乃香の事が……………」）

明日菜は木乃香と刹那を見比べながら苦笑いを浮かべる。

ネギ

「……………」それよりリンクさん、早速案内をお願い出来ますか？」

リンク

「ああ、いいけど……………」もう夕方になったみたいだ。」

リンクの言う通りに、窓からオレンジ色の光が照らされていた。

ネギ

「本当だ……………」では、明日にしましょうか。」

明日菜

「それがいいわね……………」リンクさん、宿屋って何処にありますか？」

リンク

「宿屋？」の村には無いけど……。」

ネギー行

「えっ……？」

ネギー行はリンクの言葉を聞いて一瞬固まる。

のどか

「宿が……無い？」

刹那

「ど、どうしますか？」

明日菜

「行つとくけど、また野宿なんて嫌よ？」

ネギ

「ど、どうしましょう……。。」

ネギはこの状況に慌てふためいていた。

リンク

「うん……イリアと相談してみようか。」

そう言うと、リンクはネギ達を連れて家を出る。

（イリアの家の前）

リンクはネギー一行を連れて、イリアと相談していた。

イリア

「……………それだったら、女の子達は私の家へ泊めてあげるわ。」

木乃香

「えっ！？ホンマにええの？」

明日菜

「でも、お父さんやお母さんに悪いんじゃないの？」

イリア

「大丈夫、お父さんからは私からお願いするから……………」。

リンク

「それじゃ、ネギー君は俺の家に泊まるうか。」

ネギー

「は、はい……………何から何まですいません。」

ネギは申し訳なさそうに深く頭を下げる。

イリア

「いいのよ、困った時はお互い様なもの。」

リンク

「そうそう、だからそんなに畏まるなよ。」

ネギ

「はい、お世話になります！」

こうして、ネギはリンクの家に、明日菜達はイリアの家に宿泊する事になった。

〈真夜中・リンクの家〉

リンク

「えっ！？ネギ君って先生なの？」

ネギ

「はい、そうです。」

リンクはネギが教師である事に驚く。

リンク

「じゃあ、あの女の子達は……。」

ネギ

「僕の生徒であり、大事な友達です。」

カモ

「それと、兄貴のパートナー候補なんスよ。」

ネギ

「カ、カモ君!?!」

カモが突然ネギの肩から顔を出す。

リンク

「イ、イタチが喋った……………」

リンクはカモを見て目を丸くする。

カモ

「イタチじゃなくて、オコジヨ妖精のカモツスよ!」

リンク

「オ、オコジヨ妖精?聞いた事無いけど……………」

？

「リンク〜！！」

突然家の外から誰かがリンクを呼んでいた。

リンク

「ん？こんな夜遅くに誰だろう？」

ギイイツ

リンクは家の扉を開けると、外には金髪の子供がいた。

リンク

「コリンじゃないか、こんな時間にどうした？」

コリン

「昼間にタロ達と一緒に森へ散歩してて、暗くなったから村へ帰ろうとしたら……………泉の方にモンスターがいて……………」。

リンク

「モンスターだって！？」

リンクはコリンという名の子供の言葉に耳を疑った。

ネギ

「リンクさん、何かあったんですか？」

リンク

「知り合いの子が森の泉でモンスターを見たらしい。」

カモ

（兄貴、もしかしたら……………。）

ネギ

（うん、恐らくね……………。）

ネギとカモはリンクに聞こえないようにヒソヒソと話す。

リンク

「それで、タロ達は？」

コリン

「モンスターを見て、慌てて村の方へ逃げていったよ。」

リンク

「そうか……………コリンも早く村へ帰るんだ。」

コリン

「分かった。」

そう言うと、コリンは村の方へ走り出していく。

リンク

「それじゃ、森の泉の方へ行ってみるか。」

そう言うと、リンクはカンテラを持って外へ出ようとする。

ネギ

「待って下さい、僕も行きます。」

リンク

「えっ?でも……………」

カモ

「兄貴を連れてけば損は無いと思っぜ?」

ネギ

「お願いします。」

ネギは強い眼差しでリンクを見つめる。

リンク

「……………分かった、一緒に行こう。」

ネギ

「ありがとうございます！」

カモ

「兄貴、姐さん達にも知らせるかい？」

ネギ

「勿論だよ……………早速ねむわ念話で明日菜さんに知らせなきゃ……………。」

ネギは懐から明日菜の契約カードを取り出して、おでこにカードを当てる。

ネギ

（明日菜さん、他の皆さんと一緒にリンクさんの家の近くの森の泉へ来て下さい。）

ネギは念話を使って明日菜に用件を伝えた。

リンク

「ネギ君、そろそろ行くぞ。」

ネギ

「は、はい！」

リンクとネギは森の方へと走り出す。

トアルの森の泉

リンクとネギは森の中の大きな泉へやって来た。

ネギ

「此処が森の泉ですか……………」

リンク

「そう、此処でイリアがいつもエポナの体を洗ってくれるんだ。」

ネギ

「……………リンクさんとイリアさんって仲が良いんですね。」

リンク

「へー？あ、いや……………あいつとは小さい頃からの幼なじみだからね。」

リンクは少し顔を真っ赤にして答える。

ネギ

「幼なじみ……………ですか。」

ネギはふと夜空を見上げる。

ネギ

(アーニャ……………元気でやってるかな？)

リンク

「……………ネギ君？」

リンクが上の空のネギを見て首を傾げると……………。

？

「……………………………………………………」

リンク

「だ、誰か居るのか!？」

リンクは何者かのうめき声の方にカンテラを向ける。

ネギ

「ハッ!.....モ、モンスターですか？」

ネギはハッと我に返り、リンクに質問する。

リンク

「多分そうだ.....もう少し近付いてみよう。」

そう言うと、リンクはカンテラを掲げながら前へゆっくりと進んでいく。

?

「ううっ.....だ、誰だ.....。」

リンク

「.....そこか!？」

リンクは何者かの声がした方へカンテラを向けると……………。

？

「うっ！眩しい……………」

カンテラの明かりに写し出されたのは、左目と口元を露にした仮面を被った小さな魔物だった。

リンク

「なっ！？ま、まさか……………」

リンクは魔物の姿を見て驚愕する。

ネギ

「リンクさん？」

ネギは様子が可笑しなリンクに首を傾げる。

リンク

「……………ミドナー!!」

リンクはミドナという名前の魔物におもいつきり抱き着く。

ミドナ

「…………リ、リンク？リンクなのか？」

リンク

「ああ、そっか…………。」

ミドナ

「リンク…！」

ミドナもリンクに抱き着く。

明日菜

「ネギー…ッ…！」

次の瞬間、明日菜達がネギの元まで駆け寄ってくる。

ネギ

「あ、皆さん！」

明日菜

「一体何があったの？」

ネギ

「そ、それが……………」

ネギが気まずそうに指さす方を見ると、リンクとミドナが深く抱き合っていた。

木乃香

「…………何か知らんけど、ええ雰囲気になってへん？」

刹那

「ネギ先生、これはどういう状況なのでしょうか？」

ネギ

「さあ、僕も何が何だか……………」

ネギ達は今の状況を把握出来ずに困惑していた。

ミドナ

「……………っ！っ！」

ミドナは咄嗟に肩を抑える。

リンク

「ど、どうした！？怪我でもしたのか？」

ミドナ

「あ、ああ……………色々あってな。」

ネギ

「ど、とにかく、リンクさんの家へ戻りましょう。」

リンク

「あ、ああ……………そうしよう。」

ネギ一行とリンクはミドナを連れて家へと戻る。

くリンクの家

リンクはネギ達にミドナの事を全て話した。

明日菜

「……………成程、この子は影の世界の女王様なのね。」

木乃香

「めっちゃ可愛ええ王女様やな。」

木乃香はミドナの頭を撫でる。

ミドナ

「こ、こらー！ 気安く頭を撫でるな！」

ミドナは逃げるように木乃香から離れる。

リンク

「……ところでミドナ、どうやってこの世界へ来たんだ？ それに、どうしてまたその姿に……。」

ミドナ

「そ、それは……。」

ミドナはリンクの質問に表情が暗くなる。

ミドナ

「……私の住む世界がまた乗っ取られたんだ……お前が倒したハズのガノンドロフにな。」

ネギ一行

「!？」

リンク

「な、何だって!？」

ミドナの言葉を聞いた全員が耳を疑った。

リンク

「そ、そんな馬鹿な……………」

ミドナ

「本当だ!ガノンドロフが私の前に現れて、私をまたこんな姿に変えて……………そして、奴は私をこの世界へ追放したんだ。」

リンク

「……………」

リンクはミドナの話聞いて表情が険しくなる。

のどか

「……………な、何かとんでもない事になっちゃいましたね。」

ネギ

「は、はい……………思ったより深刻な状況ですね。」

ドンッ！！

リンクが突然テーブルをおもいつき叩き付ける。

リンク

「許さない……………絶対に許さないぞ！ガノンドロフ！！」

リンクは抑え切れない怒りを露にする。

ネギ

「リ、リンクさん……………」

リンク

「俺は大乱闘でガノンドロフと一緒にいた……………それなのに俺は……………俺が奴を野放しにしなければこんな事にはならなかった。」

明日菜

「そんな、別に貴方のせいじゃ……………」

木乃香

「そやで、あまり自分を責めたらアカンで。」

刹那

「そうですね、悪いのはそのガノンドロフという悪人です。」

リンク

「みんな………ありがとう、少し気が楽になったよ。」

リンクは明日菜達の励ましの言葉に少し元気になる。

リンク

「………明日、ハイラル城へ行ってゼルダ姫に会おう。」

ミドナ

「そうだな、ゼルダ姫なら何か力を貸してくれるかもしれない。」

ネギ

「僕達も一緒に連れてって下さい、きっとリンクさんの力になれます！」

そう言うと、リンクはしばらくネギを見つめる。

リンク

「………この先何が起こるか分からないけど、それでも一緒に行く

「？」

リンクの問いに全員頷く。

リンク

「よし、じゃあ朝になったらすぐにハイラル王国へ向けて出発しよう！」

全員

「はい！！」

ミドナ

(リンク……………私の為にすまないな。)

ミドナは悲しそうな表情でリンクを見つめる。

明日菜

「じゃあ、私達はイリアさんの家へ戻るから。」

木乃香

「ネギ君、また明日な。」

ネギ

「はい、おやすみなさい。」

明日菜達はリンクの家から出て行く。

リンク

「それじゃ、俺達もそろそろ寝ようか。」

ネギ

「そうですね……………おやすみなさい。」

リンク

「おやすみ……………ミドナも寝る？」

ミドナ

「いや、私は二階で景色でも見てから寝るよ。」

リンク

「そっか……………じゃあ、また明日な。」

ミドナ

「ああ、また明日……………」

リンクとネギが寝る準備をする中、ミドナは家の二階にある窓から景色を眺めていた。

ミドナ

（リンク、またお前には世話になるぞ……でも、その分私はお前に力を貸すからな。）

ミドナは心の中に言い聞かせながら決心する。

第十一話　黄昏の姫君との再会（後書き）

ハイラル王国へ行き、ゼルダ姫に会う事になったネギー行とリンク。果たして彼らに待ち受けるのは……？

因みに吉田眼鏡さんからの意見については、最初の意見は明らかに自分のミスです……お詫び申し上げます。

二つ目の意見については、自分はあまりネギの技を全て把握してなかったからです……重ね重ね申し訳ありません。

こんな駄作で宜しければ、これからも読んで下さい！

第十二話『光の賢者の導き』（前書き）

打倒ガノンドロフに燃えるリンクとネギー行に待ち受ける試練とは……？

因みに、『トワイライトプリンセス』以外のキャラも登場します。

第十二話　光の賢者の導き

～リンクの家・翌日～

ネギ

「いっちにーさんしー！にいーにいーさんしー……………」

ネギはリンクの家の前で準備体操をしていた。

カモ

「ふわ～あ……………まだ眠いな～。」

カモは大きな欠伸をする。

ネギ

「カモ君ったら……………もうすぐ出発するんだから、もうちょっとしつかりしてよ。」

カモ

（んな事言ってもよお……………俺っちはさっき起床したばかりなんだぜ。）

カモは心の中で愚痴を零す。

ネギ

「それより、明日菜さん達遅いなあ。」

明日菜

「おーい、ネギー！」

ネギが準備体操を終えると、明日菜達が歩いて来た。

のどか

「お、おはようございます。」

ネギ

「あ、皆さん！おはようございますー！ー！」

ネギは明日菜達に向かって元気良く両手を左右に振りながら挨拶する。

木乃香

「ネギ君たら、朝から張り切ってるな。」

明日菜

「あいつ、一体何時に起きたんだろ？」

明日菜は唾然としながらネギの方を見る。

刹那

「あれ？リンクさんは……………」

ネギ

「家の中で何やら準備してます。」

カモ

「あの兄ちゃんもネギの兄貴みたいに色々装備してんじゃないかねえか？」

明日菜

「ま、まさか。」

？

「いや、あいつはそんな横着な奴じゃない。」

ネギ

「えっ！？だ、誰ですか？」

シユユッ

ネギが声に反応して辺りを見回すと、ネギの影からミドナが現れる。

木乃香

「あーミドナちゃん、おはようさん。」

ミドナ

「ミ、ミドナ………ちゃん!？」

ミドナは木乃香に『ちゃん付け』で呼ばれて耳を疑う。

木乃香

「ミドナちゃん、夜はちゃんと眠れた？」

ミドナ

「お、おい!その『ミドナちゃん』って呼ぶのはやめる!」

木乃香

「え、何で?別にええやん。」

ミドナ

「良くない!!」

ミドナは真っ赤になって怒り出す。

ガチャ

リンク

「みんな、お待たせ!」

家とドアが開くと、背中に盾を背負わせて、緑色の帽子と服を着たリンクが出て来る。

明日菜

「あ!その格好……。」

木乃香

「お馴染みの服や〜。」

のどか

「……………何だかそれを着てると、改めてリンクさんだっと思えますね。」

リンク

(……………俺って、そんなに緑が似合うのかな?)

リンクは明日菜達に食い入るように見られて苦笑いする。

刹那

「あれ？盾はあるのに剣がありませんけど……………」。

リンク

「ああ、剣はこれから取りに行くんだ。」

ネギ

「え？取りに行くって……………」。

ネギ達はリンクの言葉に疑問を持つ。

ミドナ

「じゃあ、まずはあの場所へ行くんだな？」

リンク

「そついでに。」

カモ

「そんじゃ、早く出発しよ……………」。

？

「リンク〜!!」

村の方からイリアとコリンがリンクの名前を呼びながら駆け寄ってくる。

ミドナ

(おっと、マズイ!)

ミドナは慌ててリンクの影の中に隠れる。

リンク

「イリア、それにコリンまで……………」。

イリア

「コリンから昨夜の事を聞いてね……………大丈夫?」

コリン

「モンスターに襲われなかった?」

リンク

「え？あ、いや……泉には何も居なかったよ。」

コリン

「え！？本当に？」

リンク

「ああ……多分森の猿か何かと見間違えたんだよ。」

コリン

「そ、そうかな……。」

リンクの言葉にコリンは首を傾げる。

イリア

「それよりリンク、そんな格好して何処かへ行くの？」

リンク

「あ、ああ……最近物騒だから、ネギ君達を町の方まで護衛しようと思って……。」

イリア

「そうなの……じゃあ、エポナも連れて行くの？」

リンク

「いや、エポナは置いてく……だから、またエポナの事を任せてもいいかな？」

イリア

「……しょうがないわね、気をつけて行ってきてね。」

イリアは少し間を置いて考えると、笑顔で承諾する。

リンク

「ありがとう……じゃあ、行くつか。」

ネギ

「は、はい！」

リンクはネギ達を連れて森の方へ歩き出す。

コリン

「リンクく、行ってらっしゃい！」

コリンは手を大きく振りながらリンクを見送る。

イリア

(…… どうしてだろう？ 何故か胸騒ぎがする。)

イリアは不安げな表情でリンクを見送る。

「フィローネの森」

ネギー一行とリンクは大きな森の入口までやって来た。

ネギ

「マスターソードはこの森の奥にあるんですか？」

リンク

「そう、早速出発して……………」

ミドナ

「おいおい、わざわざ森を歩いて渡るって言うのか？」

リンク

「だって、それしか方法は……………」

ミドナ

「私の力を忘れちゃったのかい？」

リンク

「え？………あっ！」

リンクはミドナの言葉を聞いて何かを思い出す。

リンク

「それじゃ、頼むよ。」

ミドナ

「任せとけ！」

パチッ

明日菜

「えっ！？な、何なの？」

シュユッ

刹那

「じ、これは………。」

ネギ

「ぼ、僕達の姿が……………」

ミドナが指を鳴らした途端、その場にいた全員が上空に吸い込まれるかのように姿が消えていく。

〔森の聖域・神殿〕

ネギー行とリンクはミドナの力で神殿のような場所へやって来た。

のどか

「あ、あれ……………」

木乃香

「な、何が起こったんや？」

木乃香達は辺りを見回しながら困惑する。

リンク

「ミドナが目的地までワープしてくれたんだ。」

ミドナ

「久しぶりだったから、あまり自信は無かったがな。」

木乃香

「へえ、ミドナちゃんって凄いんやな。」

ミドナ

「だ、だからその呼び方はやめろってば！」

ミドナは木乃香にちゃん付けで呼ばれて、再び真っ赤になる。

リンク

「と、とにかく台座に刺さってるマスターソードを探さないと……」

刹那

「それって、あれの事ですか？」

刹那が指さす方を見ると、台座に刺さってる剣が目に入る。

リンク

「あれだ！あれがマスターソードだ。」

ミドナ

「それなら、早く引き抜けよ。」

リンク

「よし！」

リンクがマスターソードを握って、引き抜こうとした時……………。

パアアッ

ネギ

「うっ……………」

マスターソードが刺さってた台座から光が放たれる。

リンク

「……………まさか、またこの剣を使う事になるとはな。」

リンクは引き抜いたマスターソードを掲げながら悲しげな表情を浮かべる。

リンク

「今度こそこのマスターソードでガノンドロフと決着を付ける！」

カチャ！

そう言つと、リンクはマスターソードを回しながら符まじに収める。

ミドナ

「よし、次はハイラル城までワープさせるぞ！」

木乃香

「また頼むで〜、ミドナちゃん。」

ミドナ

「だ、だからその呼び方は……………」

明日菜

「はいはい、分かったから早くして。」

ミドナ

「ったく……………」

パチッ

シユユッ

ミドナが不機嫌そうに指を鳴らすと、全員その場から消えてしまう。

く
ハイラル城前
く

全員ミドナの力でハイラル城までワープした。

ネギ

「もっ着的たみたいですね……………」

明日菜

「……………何だか、あつという間ね。」

リンク

「よし、早速ハイラル城へ……………なっ!？」

リンクは目の前のハイラル城が三角の立方体のような結界に覆われている光景を見て驚愕する。

ミドナ

「け、結界か……………」

リンク

「あの時とまるっきり同じだ……………」

刹那

「あの時?」

刹那はリンクの言葉に耳を傾ける。

ミドナ

「ああ、前もガノンドロフがハイラル城にこんな結界を張ったんだ。」

「

木乃香

「ほなら、結界を破る方法はあるんやろ？」

リンク

「前は確か、影の結晶石でパワーアップしたミドナが結界を破ったんだっけ？」

ミドナ

「ああ………だが、結晶石はガノンドロフが壊しちゃった。」

リンク

「そう言えば………でも、今ミドナが被ってるそれは？」

ミドナ

「この仮面は私がこの世界に飛ばされた時に見つけたやつなんだ。」

リンク

「そ、そうなのか……………」

それを聞いたリンクは、深く考え込む。

明日菜

「何か他に方法は無いの？」

ミドナ

「そんな事言ってもな……………」

ネギ

「何か方法があるハズです。」

全員これからについて話し合っていた時……………。

？

「……………リンクよ。」

リンク

「えっ!？」

リンクは誰に呼ばれて、辺りを見回す。

のどか

「リ、リンクさん？」

刹那

「どっしました？」

リンク

「い、いや……………誰かに呼ばれた気がして……………」

？

「……………リンク。」

リンク

「だ、誰なんだ!？」

リンクはまた聞こえてきた声に警戒する。

？

「リンク……………少しの間だけ、わしの声に集中してくれ……………」

リンク
「集中……………」

リンクは声に従って、ゆっくりと目を閉じて集中させる。

？

「……………目を開けるがよい。」

リンク

「……………」

リンクは声に従って、ゆっくりと目を開けると……………。

リンク

「なっ！……………」
「こゝ、此処は何処だ！？」

リンク驚愕した。何故ならさっきまでいた場所とは違って、周囲がどこと無く神秘的な場所だったからだ。

？

「落ち着きなさい、此処は『賢者の間』じゃ。」

リンク

「『賢者の間』?」

パアアツ

リンクが聞き慣れない場所に耳を傾けると、周りがある緑・赤・青・紫・銅・金色の台がある内の金色の台から貴族のような高貴な服を着た老人が光に照らされながら現れる。

リンク

「だ、誰だ!？」

リンクは老人を見た途端に身構える。

?

「わしの名はラウル……その昔、時の神殿を造り聖地との道を繋ぎし賢者の一人じゃ。」

リンク

「賢者?俺が前に会った賢者達と姿が全然違うけど……。」

ラウル

「彼らはこの時代の賢者達じゃ……わしはこの時代よりも古い賢

者なのじゃ。」

リンク

「何だつて!？」

リンクはラウルの言葉に耳を疑った。

リンク

「じゃあ、その古い時代の賢者がどうして俺の前に現れたんだ？」

ラウル

「……………お前はわしらの時代に活躍した『時の勇者』の末裔まっえいだから
じゃ。」

リンク

「『時の勇者』?」

リンクは更にラウルの言葉に耳を疑う。

ラウル

「『時の勇者』とは、時を越えて魔王を打ち倒した勇敢な人物……
…わしを含む六人の賢者は勇者と共に魔王を封じ込めたのじゃ。」

リンク

「その勇者が俺の先祖だって言うのか？」

ラウル

「そうじゃ、現にお前はトライフォースの力を受け継いでおるではないか。」

リンクはラウルの言葉を聞いて黙り込んでしまつ。

ラウル

「話を戻すが、わしら賢者が『時の勇者』の末裔であるお前を助
けよう。」

リンク

「助けるって事は……あの結界を打ち破ってくれるのか？」

ラウル

「じゃが、その為にはわしを除く残り五人の賢者からメダルを受け
取らなければならん。」

リンク

「メダル？」

ラウル

「わしら賢者の力の源みなもととも言うべき代物じゃ。」

リンク

「なら、そのメダルを全部揃えれば結界を破れるんだな？」

ラウル

「うむ……………それでは、まずわしから光のメダルを渡そう。」

そう言うと、ラウルはリンクに金色のメダルを渡す。

リンク

「これで後五個集めればいいんだな。」

ラウル

「それと、これも渡しておこう。」

ラウルは懐から青いオカリナを取り出す。

リンク

「これは……………オカリナ？」

ラウル

「これは『時のオカリナ』といって、ハイラル王家に代々伝わる秘宝じゃ……………このオカリナで、ある曲を奏でないと残りの賢者達は目覚める事が出来ぬのじゃ。」

リンク

「ある曲って？」

ラウル

「ハイラル王家に代々伝わる曲じゃ……………心して聞くがよい。」

）
）
）
）
）
）
）
）

ラウルは『時のオカリナ』で音色を奏でる。

リンク

（何でだろ？どこか懐かしい感じがする……………。）

リンクはラウルの演奏に聴き入ってしまう。

ラウル

「よいか、賢者達が眠っている場所にトライフォースの紋章が刻ま

れておる……………その紋章の上で今の曲を奏できれば賢者達を目覚めさせる事が出来る。」

リンク

「分かった、俺やるよ……………ゼルダ姫の為に！」

ラウル

「よし……………まずは森へ行き、森の賢者に会うのじゃ。」

パアアアッ

そう言うと、リンクの視界がどんどん白くなっていく。

ラウル

「頼んだぞ、『時の勇者』の血を引く者よ……………。」

ネギ

「リンクさん！しっかりして下さい！..！」

リンク

「.....えっ!?!？」

ネギが上の空状態のリンクを激しく揺さぶると、リンクはハッと我に返る。

ミドナ

「お前、さっきからずっと呼び掛けても返事しなかったけど大丈夫

か？」

リンク

「あ、ああ……………俺、夢でも見てたのかな？」

リンクはネギ達に聞こえないように呟く。

のどか

「あ、あの……………その手に持っている物は何ですか？」

リンク

「えっ？」

リンクはふと手を見ると、手には『時のオカリナ』と『光のメダル』
を持っていた。

リンク

（や、やっぱりアレは夢じゃなかったんだ！）

明日菜

「それって、オカリナとメダル……………よね？」

木乃香

「そやな。」

刹那

「リンクさん、それは一体……………」

リンク

「……………みんな、今から俺の話を聞いてくれ。」

ネギ

「は、はい……………」

リンクは自分が見てきた事をネギ達に全て話した。

ミドナ

「……………成程、もしその爺さんの言う事が本当なら、まずは森の賢者に会わないとな。」

リンク

「森って言ったらやっぱり……………森の聖域だよな。」

ミドナ

「よし！早速そこへワープしよう。」

パチッ

シュユッ

ミドナが指を鳴らすと、全員その場からワープする。

く森の聖域く

ネギー一行とリンクはミドナの力で、とても薄暗い森の中へやって来た。

明日菜

「なんだか随分薄暗い森ね……………」

リンク

「この森は外界げかいから隠された場所にあるからね。」

？

「はあ〜っ、困りましたね〜。」

木乃香

「ほえ？あそこに誰かおるえ。」

木乃香の指さす方を見ると、大きな荷物を背負わせた細目の男が切り株の上に腰掛けていた。

リンク

「こんな所に人がいるなんて……………」

ネギ

「ちょっと声を掛けてみましょう。」

明日菜

「あ！ちょっと……………」

ネギは明日菜の制止を聞かずに、男に近付いていく。

ネギ

「あの、どつかしたんですか？」

？

「どつしたもこつしたも……………子供達に一番人気の『キータンのお面』が変な子供に盗まれてしまったんです。」

ネギ

「お面？」

？

「はい、私はハイラルの城下町でお面屋を開こうと思ったのですが……この森に迷い込んでしまいましたね。」

ネギ

「お面屋さんだったんですか……。」

お面屋

「お願いします！私の大事な商品を取り返して下さい……！」

お面屋は物凄い形相でネギの肩を掴みながら揺さぶる。

ネギ

「わ、分かりました……任せて下さい。」

お面屋

「本当ですか！？ありがとうございます！」

お面屋はネギに向かって深く頭を下げる。

明日菜

「ネギ、一体何があったのよ？」

明日菜達がネギの元へ駆け寄る。

ネギ

「じ、実は……………」

ネギは明日菜達にお面について説明した。

明日菜

「はあ〜っ、これからやらなきゃいけない事があるってのに……………」

明日菜は呆れ返りながら溜め息をつく。

ネギ

「だ、だって……………困ってるみたいだったから放っておけなくて……………」

木乃香

「そやな、困ってる人は放っておけへんからな。」

刹那

「では、すぐにお面を取り返しましょう。」

のどか

「でも、そのお面を盗んだ子供ってというのは……………」。

リンク

「うーん……………その子供ってというのは恐らくスタルキッドだ。」

ネギ

「スタルキッド？」

リンク

「この森の住人さ……………俺もあいつには手を焼いたよ。」

リンクは苦笑いしながら言う。

明日菜

「とにかく、早くそのスタルキッドって奴を見つけましょう。」

ネギ

「そうですね！」

ネギ一行とリンクはそのまま森の奥へと進んでいく。

お面屋

「ホホホ………それではお願いしますよ。」

お面屋は不気味に笑いながらネギ達を見送る。

第十二話　光の賢者の導き（後書き）

お面屋さんに頼まれてスタルキッドからキータンのお面を取り返す事になったネギー行とリンク……………果たして賢者捜しの行方は！？

第十三話 森・火・水の賢者 (前書き)

森でスタルキッドを捜しているネギー行とリンクに待ち受けるのは
……。
少し話の流れが早くなっていると思いますが、お楽しみ下さい。

第十三話 森・火・水の賢者

森の聖域・内部

ネギー行とリンク&ミドナは『キータンのお面』を盗んだスタルキッドを捜し回っていた。

明日菜

「……………もう大分歩いたけど、まだ見つからないわね。」

リンク

「スタルキッドはすばしっこいからね……………見つけてもすぐに逃げられるかもしれないよ。」

カモ

「それなら大丈夫さ、兄貴の魔法ならパパッと捕らえられるぜ!」

リンク

「な!?!……………イ、イタチが喋った。」

リンクはネギの肩から顔を出して喋り始めたカモに驚愕する。

カモ

「イタチじゃねえ！俺っちはオコジヨ妖精ツスよ！」

ネギ

「カモ君、落ち着いてよ……………」

ネギが怒り出したカモを宥めてた時……………。

？

「ケケケケ……………」

突然森中に不気味な笑い声が響き渡る。

のどか

「ひっ!?!」

木乃香

「な、何やる？」

刹那

「気をつけて下さい、この場所に何かいるようです。」

そう言うと、刹那は夕凧を構えながら辺りを見回す。

リンク

「一体何処に……………あっ!!」

リンクが木の上の方を見上げると、木の枝に狐のお面を被った子供が座っていた。

ミドナ

「遂にスタルキッドを見つけたぞ!」

明日菜

「早く捕まえましょ!」

プウーッ。

ザザザザッ

スタルキッドは突然ラッパを取り出して吹くと、人形のようなモンスターが沢山現れる。

リンク

「じ、しまった!」

明日菜

「な、何なのよコイツら!?!」

ミドナ

「そいつらはスタルキッドが呼び出した人形達だ!」

ネギ

「に、人形?」

刹那

「それなら、すぐに片付きますね……………」

そう言うと、刹那は夕凧の符を抜く。

刹那

「神鳴流奥義・百烈桜華斬!」

ザシユユッ!!

刹那は夕風でスタルキッドが呼び出した人形を一掃させる。

リンク

「す、凄い剣裁きだ……………」

リンクは刹那の技を見て啞然となる。

ミドナ

「リンク、もしかしたらお前よりあいつの方が剣の腕が上かもな。」

刹那

「そ、そんな事ありません！私なんてまだまだ……………」

リンク

「いや、確かにそうかも……………もし良かったら後で稽古付けてもらってもいいかな？」

刹那

「えっ!?!」

刹那はリンクのお誘いに戸惑う。

明日菜

「刹那さんだったら、やったじゃない。」

木乃香

「ホンマやなく、お誘いされるなんて羨ましいわ〜。」

刹那

「ちよつ、からかわないで下さいよ!」

刹那は明日菜と木乃香にからかわれて真っ赤になる。

スタルキッド

「ケケケ……………」

すると、スタルキッドは地面へ着地して逃げ出そうとする。

のどか

「あっ!逃げて行っちゃいますよ!」

全員

「えっ!?!」

のどかの声に反応して振り向くと、スタルキッドが遠くへ逃げ出していた。

ネギ

「あ！もうあんな遠くに……。」

明日菜

「急いで追い付かなきゃ……。」

全員スタルキッドを追って森の奥へと目指す。

＼森の聖域・最深部＼

スタルキッド

「ケケケケ……………」

明日菜

「ま、待て〜!」

ネギー行とリンクはスタルキッドを追いかけながら森の奥までやって来た。

リンク

「こうなったら……………それっ!」

ビュッ!…!

リンクがスタルキッドに向かってブーメランを投げると、ブーメランが竜巻みたいな風を起こしながらスタルキッドに突っ込んでいく。

スタルキッド

「ウワツ!？」

スタルキッドはブーメランの風に巻き込まれてしまい、ブーメランは狐のお面を付けたままリンクの元へ戻っていく。

リンク

「よし!これがキータンのお面だな。」

リンクは戻ってきたブーメランとキータンのお面をキャッチする。

ネギ

「リンクさん、そのブーメランは？」

リンク

「これは『疾風のブーメラン』といって、標的に向かって投げると風を起こしながら突っ込んでいく道具なんだ。」

カモ

「へえ、まるで兄貴の風の魔法みたいだな。」

リンク

「魔法？」

リンクはカモの言葉に首を傾げる。

明日菜

「あれ？あいつが居ない……………」

明日菜の言う通り、スタルキッドは跡形もなく消えていた。

スタルキッド

「ケケケ、マタ遊ボウネ……………」

突然スタルキッドの声が辺りに響き渡る。

のどか

「……………結局、あの子は何だったんでしょ？」

ミドナ

「恐らくあいつは、ただ私らと遊びたかっただけなんだ。」

明日菜

「何だか迷惑な奴ね。」

ネギ

「ところで、此処は何処でしょうか？」

ネギの言葉に全員辺りを見回す。

刹那

「どうやら、あの子を追っかけるのに夢中で迷ったみたいですね。」

リンク

「そのようだな……それに、森の賢者が眠っているトライフォースの紋章も見当たらないし……。」

木乃香

「そのトライとホースの紋章ってどんな形なん？」

リンク

「トライフォースだよ……ネギ君が俺に渡してくれたバッチと同じ形してるんだ。」

木乃香

「それやったら、リンクはんの下にあるけど……。」

全員

「えっ？」

全員リンクの足元を見ると、地面にはトライフォースの紋章が刻まれている。

ミドナ

「『灯台もと暗し』とはこの事だな。」

リンク

「そ、そうだな……早速オカリナでラウルに教えてもらったメロディーを奏でよう。」

リンクは懐から『時のオカリナ』を取り出す。

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

リンクは『時のオカリナ』でラウルに教えてもらったメロディーを奏でる。

のどか

(……………何か、とっても不思議なメロディー。)

木乃香

(何でやる？懐かしい気持ちになるわ。)

全員リンクの奏でるメロディーに聴き入ってしまう。

？

「……………何だか懐かしいわね。」

全員

「!?!」

突然リンクの目の前に緑色の髪と服の少女が現れる。

リンク

「もしかして君が……………森の賢者?」

？

「はい、私が森の賢者のサリアと申します。」

明日菜

「えっ!?!?どう見ても普通の女の子だけど……………」。

全員サリアという名の少女を見て啞然とする。

リンク

「実は俺達が此処へ来たのは……………」。

サリア

「ええ、分かっています……………賢者の証であるメダルを受け取りに来たのね。」

サリアの言葉にリンクはゆっくりと頷く。

サリア

「それでは、貴方に『森のメダル』をお渡しします。」

パーツ

サリアはリンクに緑色のメダルを渡す。

リンク

「よし、これでメダルは後四つだな。」

サリア

「……………」。

サリアは微笑みながらリンクを見つめる。

リンク

「ん？俺の顔に何か付いてる？」

サリア

「い、いえ……………貴方を見ていると彼を思い出してしまって……………」。

ネギ

「あの人？」

サリアの言葉に全員耳を傾ける。

サリア

「そっくりなの、昔一緒によく遊んだ彼に……………」。

リンク

「もしかして、その彼ってというのは……『時の勇者』？」

サリア

「まあ……そういう事になるかな。」

全員

「ええーっ！？」

サリアの発言に全員驚きを隠せない。

木乃香

「ほ、ほなら……二人は幼なじみやったんやな。」

のどか

「何だか凄い話ですね……。」

ネギ

「あれ？という事は、その『時の勇者』さんはサリアさんと同じ歳
って事ですか？」

サリア
「いいえ、彼は私より年上よ……私はコキリ族だから成長しないの。」

明日菜

「コキリ族？」

サリア

「私達コキリ族は森に住んでいて、ずっと子供のまままで成長しない種族なの。」

刹那

「ずっと子供のまま……。」

リンク

「昔この森にそんな種族がいたなんて知らなかった。」

サリア

「……………それより、早く次の賢者に会った方がいいわ。」

リンク

「あ！そうだった。」

リンクはサリアの言葉にハッと気付く。

サリア

「次の賢者に会うなら、デスマウンテンにいる炎の賢者に会うといいわ。」

リンク

「デスマウンテンか……ありがとう。」

サリア

「どう致しまして……頑張ってたね、サリアは応援してるから……」

そう言つと、サリアは少し寂しそうな表情をしながらゆっくりと消えていく。

木乃香

「あの子、何か寂しそうな顔してたな……。」

ネギ

「そんなにリンクさんと時の勇者さんは似てるんでしょうか？」

？

「ええ、そっくりですよ……………」。

全員

「!?!?」

全員驚いて後ろを向くと、お面屋がニヤニヤしながら立っていた。

のどか

「び、びっくりした……………」。

お面屋

「驚かせてしまいました……………それより、さっきの話ですが……………」。

ネギ

「え？リンクさんと時の勇者さんの事ですか？」

お面屋

「ええ、これは私の先代から言い伝えられてる話ですが……………時の勇者は彼と同じ緑色の帽子と服を着て、同じ剣や盾等を備えていたそうです。」

リンク

「そんなんですか……でも、どうして貴方の先代は時の勇者に
ついてそんなに詳しいんでしょうか？」

お面屋

「何でも、先代が持っていた呪術用の仮面をスタルキッドに奪われ
た時に時の勇者が取り返してくれたそうです。」

明日菜

「先代もあいつにお面を取られたんだ……。」

明日菜はお面屋の話聞いて苦笑いする。

お面屋

「ところで、私が頼んだ『キータンのお面』は……。」

リンク

「あ！すっかり忘れてた……はい！」

リンクは懐から『キータンのお面』を取り出し、お面屋に渡す。

お面屋

「おお、これですよ！本当にありがとうございます……！」

お面屋はリンクに向かって深く頭を下げる。

お面屋

「それでは、お礼と言っては何ですが……………これをお受け取り下さい。」

お面屋はリンクにウサギの耳が付いた被り物を渡す。

リンク

「こゝ、これは？」

お面屋

「それは『ウサギずきん』といって、これを頭に付けるだけでウサギのように高くジャンプ出来たり速く走れるという優れ物です。」

リンク

「へ、へえ……………それは凄いなあ。」

リンクは苦笑いしながら『ウサギずきん』を受け取る。

お面屋

「それでは、私はそろそろこれで……………」

そう言つと、お面屋はその場から立ち去っていく。

ミドナ

「ふう、やっと行ったか……………他の奴が居ると隠れてなきやいけな
いからな。」

ミドナは溜め息をしながらリンクの影から出て来る。

リンク

「ミドナ、早速デスマウンテンまでワープしてくれ。」

ミドナ

「OK!」

パチッ

シュユッ

ミドナが指を鳴らすと、全員その場から消えてしまふ。

くデスマウンテンく

ネギー行とリンクはミドナの方で岩山が見える場所へやって来た。

ネギ

「此処がデスマウンテンですか。」

リンク

「そう、この岩山にはゴロン族達が住み着いているんだ。」

明日菜

「ゴロン族って？」

ミドナ

「会えばどんな奴らか分かるぞ。」

リンク

「そういう事………付いて来て。」

そう言つと、リンクは岩山を登山していく。

ネギ

「では皆さん！転ばないように注意して……。」

ブシュユッ……！

ネギ

「わあっ!?!」

ネギが岩山に一步足を踏み出した時、突然地面から熱気が勢い良く吹き出してくる。

リンク

「あっ!言い忘れてたけど、この岩山は噴煙ふんえんが吹き出してくるから注意してね。」

ネギ

「は、早く言ってお下さい……………」

ネギは腰砕け状態になっていた。

のどか

「ネ、ネギ先生……………大丈夫ですか?」

ネギ

「は、はい……………」

明日菜

「ほら、しっかりしなさいよ!」

ネギ

「わ、分かってますよ……………」。

明日菜達が先へ進んだ後、ネギが後から付いて行く。

くデスマウンテン頂上・相撲部屋く

ネギー一行とリンクは岩みたいに丸っこい種族に囲まれていた。

？

「おっ、よく来てくれた」。

？

「ゆっくりして」。

リンク

「あ、ありがとう……」。

リンクは苦笑いしながらお礼を言う。

ネギー

「リ、リンクさん……この人達がゴロン族ですか？」

リンク

「そ、そう……見た目は怖そうだけど、とても優しい種族だよ。」

？

「おう、兄ちゃん！久しぶりじゃねえか。」

ネギとリンクが話していると、大きなゴロンが嬉しそうにリンクに近付いてくる。

リンク

「ダルボスさん！お久しぶりです。」

リンクはダルボスという名のゴロンを見てお辞儀をする。

明日菜

（ほ、他のゴロン族より大きい……。）

明日菜はダルボスを見て啞然とする。

ダルボス

「今日はどうした？こんなに友達を連れて来て……………」

リンク

「実は俺達、こんな紋章を探してるんですけど何処かで見た事ありませんか？」

そう言うと、リンクはライフオーブスが描かれた一枚の紙をダルボスに見せる。

ダルボス

「うーん、何処かで見た事あるような……確かゴロン鉱山の奥で見た気がするゴロ。」

リンク

「ゴロン鉱山……ありがとうございます！」

リンクはダルボスにお礼を言うと、全員ゴロン鉱山に通じる部屋へ入っていく。

ダルボス

「下の熔岩に落ちねえように気をつけろよ！」

（ゴロン鉱山・奥部）

ネギー行とリンクは下が熔岩で煮だっている場所を進んでいた。

明日菜

「ハア〜ツ、熱い……………」。

ネギ

「マリオさんの世界を思い出しますね……………」。

ミドナ

「ゴロン族の奴ら、よくこんな場所で仕事出来るよな。」

リンク

「やっぱりゴロン族達は慣れてるから………あっ!!」

リンクは鉱山の奥の床に刻まれてるトライフォースの紋章を見つける。

木乃香

「やっと見つかったわ。」

リンク

「それじゃ早速……。」

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

リンクはトライフォースの紋章に立ち、時のオカリナでメロディーを奏でる。

？

「……………やっと来やがったか。」

突然リンクの目の前に、ダルボスの同じ位の大柄のゴロン族が現れる。

リンク

「貴方が炎の賢者ですか？」

？

「おうよ！俺は炎の賢者でもあり、元ゴロン族の族長でもあるダルニアでい。」

ダルニアと名乗るゴロン族は胸を叩きながら自慢げに話す。

リンク

「そ、それであの……話は聞いていますよね？」

ダルニア

「ああ、俺が持つてるメダルが欲しいんだろ？」

ミドナ

「全てお見通しか……。」

ダルニア

「ほらよ兄弟、炎のメダルを受け取るゴロ！」

パアアツ

ダルニアはリンクに赤色のメダルを渡す。

リンク

「どうもありがとう……ところで、兄弟っていつのは？」

ダルニア

「いや、悪い悪い……オメエを見てるとあいつを思い出してな。」

ネギ

「あいつというのは、時の勇気の事ですか？」

ダルニア

「そうさ、あいつは男の中の中だゴロ……あいつが俺らゴロン族を苦しめた凶暴なモンスターをやってつけてくれたお蔭で食料不足が解消されたからな。」

リンク

「それで兄弟って呼んでたって訳か……………」

リンクはダルニアの言葉に納得する。

ダルニア

「ところでよお、次の賢者に会いたけりやな……………確かゾーラの里に水の賢者がいるハズだゴロ。」

リンク

「ゾーラの里か……………」

木乃香

「ミドナちゃん、ゾーラの里ってどんな所なん？」

ミドナ

「ゾーラ族という種族が住んでいる里だ」

刹那

「そのゾーラ族とは、どういう種族ですか？」

ミドナ

「そうだな……………水の中を魚のようにスイスイ泳げる種族だ。」

明日菜

「うーん、分かったような分からないような……………」

全員ミドナの説明を聞いて首を傾げる。

ダルニア

「そんじゃ、俺はそろそろ眠りにつくか……………じゃあな、兄弟。」

そう言うと、ダルニアはゆっくりと消えていく。

ミドナ

「……………よし、次はゾーラの里へと行きますか！」

パチッ

シュユッ

ミドナが指を鳴らすと、全員その場から姿を消す。

くゾーラの里

全員

「うわっ!？」

バチャーーン!!

ミドナの手でゾーラの里へワープするが、全員底が深くなっている水場へ落ちてしまう。

ネギ

「プハッ……み、皆さん……浅い場所まで頑張って泳いで下さい……。」

ネギの指示通りに、全員浅い場所まで泳いでいく。

明日菜

「ふっ、びっくりした〜。」

木乃香

「危うく溺れてまうとこらやったわ〜。」

リンク

「ミドナ、もうちょっと安全な場所へワープしよる。」

ミドナ

「何だよ、目的地までちゃんとワープさせたのに……。」

ミドナはリンクに文句を言われて愚痴を零す。

？

「一体何の騒ぎだ？」

リンク達の前に半魚人のような姿をした人々が駆け寄ってくる。

のどか

「も、もしかしてこの人達が……」

リンク

「そう、彼らがゾーラ族さ。」

ゾーラ族

「おや？貴方は確か、ラルス王子を救って下さった……」

リンク

「ああ、そのラルスにちょっと用事があったて此処へ……」

？

「あっ！リンクさんじゃありませんか。」

突然小柄なゾーラ族の少年がリンクの顔を見るなり駆け寄ってくる。

リンク

「ラルス！最近見ない間に立派になったな。」

ラルス

「いえ、それもこれもリンクさんのお蔭です。」

ラルスはリンクに向かって丁寧に挨拶する。

明日菜

「……………あの子、歳はネギと同じ位ね。」

刹那

「ええ、それに丁寧なところもネギ先生そっくりですね。」

明日菜達はネギとラルスを見比べる。

ネギ

「な、何ですか？」

明日菜

「いや、別に……………」

明日菜はネギの質問に対して曖昧に答える。

リンク

「ところでラルス、こんな紋章を見た事無いかな？」

リンクはトライフォースの紋章が描かれた用紙をラルスに見せる。

ラルス

「あ！その紋章なら、あの奥の部屋で見た事あります。」

ラルスは洞穴ほらのような部屋を指さす。

リンク

「そうか……………ラルス、あの部屋へ入ってもいいかな？」

ラルス

「ええ、構いませんけど……………」

ネギ

「では、早速入ってみましょう。」

そう言うと、全員部屋の中へ入っていく。

明日菜

「……………中は意外と広いのね。」

ミドナ

「この広い部屋の何処に紋章があるんだか……………」

ネギ

「あつ！あつた！！」

ネギが一早く地面に刻まれたトライフォースの紋章を見つける。

リンク

「よし！早速『時のオカリナ』で演奏を……………」

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

リンクはいつものように紋章の上で『時のオカリナ』を使って演奏する。

「……………ほほう、やっと来たか。」

突然リンク達の前に、背丈が高いゾーラ族の女性が現れる。

ネギ

（き、綺麗な人……………じゃなくてゾーラ族だなあ。）

ネギはゾーラ族の女性の美しさに見とれる。

リンク

「君が水の賢者かい？」

「……………？」
「そうじゃ、わらわは水の賢者であり、元ゾーラ族のプリンセスの
ルトである。」

明日菜

「王女様か……………どうりで美しい訳ね。」

刹那

「それに、気品も漂ってますね。」

ミドナ

「そうか？私から見ればイマイチだけだな。」

ネギー一行がルトと名乗るゾーラ族の女性の美しさに見とれる中、ミドナだけ不満げだった。

ルト

「ところで、そなたが此処に来たのは……わらわのフィアンセになり来たのであろう？」

全員

「へっ!？」

ルトの発言に全員唾然とする。

リンク

「いや、その、何というか……………」

木乃香

「それはちょっとよ、リンクはんにはイリアちゃんがおるから……………」

リンク

「ちよっ、ちよっと木乃香ちゃん!？」

木乃香の言葉にリンクは真っ赤になりながら焦る。

ルト

「フフッ、そうか……………そういうウブな所がますます似ておるゾラ。」

「

リンク

「え?似てるってまさか……………」。

ネギ

「『時の勇者』さんですね。」

ルト

「そうじゃ、あやつもそなたみたいにウブで可愛かったゾラ。」

ルトは微笑みながらリンクを見つめる。

リンク

「……………もしかして、俺をからかっているの?」

ルト

「いや、そういう訳では無いが……わらわが幼い頃に将来の約束を交わし合ったその『時の勇者』と面影があるのでついな……。」

のどか

（しよ、将来の約束を交わし合ったって……。）

木乃香

（きつと結婚の約束やな！）

木乃香達はルトと時の勇者の關係に興味津々になる。

明日菜

「そ、それで？彼とはどうなったの？」

ルト

「うむ、やはりあやつとは住む世界が違う……だから、わらわの方から潔く諦めた。」

刹那

「そつですか……。」

木乃香

「悲しい結末やな……………」

女性陣は全員悲しい表情を浮かべる。

ネギ

「あ、あの……………話を戻しますが、そろそろメダルを……………」

ルト

「おお、そうであったな……………では、わらわの愛の証でもある『水のメダル』を受け取るゾラ。」

パアアツ

ルトはリンクに青色のメダルを渡す。

リンク

「よし、これでメダルは後二個だな。」

ルト

「という事は残りの賢者は後二人か……………確か闇の賢者がカカリコ村におると聞いたゾラ。」

ミドナ

「カカリコ村か……よし、早速行こうぜー」

パチッ

シユユッ

ミドナが指を鳴らすと、全員その場から消える。

ルト

「頑張るのじゃ……あやつのを継いでるお主ならきつとやれる。

」

そう言い残すと、ルトはゆっくりと姿を消す。

第十三話 森・火・水の賢者 (後書き)

ネギー行とリンクは残り二人の賢者に会う事が出来るのであろうか？
ご期待下さい！

因みに本作に登場する賢者達は原作である『時のオカリナ』と設定が若干異なりますが、ご了承下さい。

第十四話 闇・魂の賢者とポストマン (前書き)

残る賢者は後二人……果たしてネギー行とリンクは賢者に会えるのか！？

第十四話 闇・魂の賢者とポストマン

カカリコ村・墓地

ネギー行とリンクはミドナの力で小さな墓場へやって来た。

ネギ

「あれ？此処は墓場みたいですね。」

リンク

「何もこんな所へ飛ばさなくても……………」

ミドナ

「しょうがないだろ！村のど真ん中にフープさせて、誰かに見られたらどうすんだ？」

刹那

「それもそうですね。」

全員ミドナの言葉に納得する。

木乃香

「それにしても、やっぱり昼間でもお墓は不気味やな。」

木乃香は辺りを見回しながら呟く。

明日菜

「だ、大丈夫だって！昼間から幽霊なんて出ないから……………」。

のどか

「きゃーっ！っ！」

ネギ

「の、のどかさん？どうしました!？」

全員のどかの叫び声に驚いて振り向くと、のどかの前にスコップを持った恐ろしげな顔した男が立っていた。

？

「失礼な娘っ子だなあ、人の顔を見るなり大声を上げるなんてよお。」

「

のどか

「え？あ……………す、すいません!」

のどかは慌てて男に向かって頭を下げる。

明日菜

（でも、あんな顔を見たら叫びたくもなるわ。）

明日菜は苦笑いを浮かべながら男を見る。

リンク

「あ、貴方は……………」

？

「オラか？オラはこの墓地の墓守りをしてるダンペイだ。」

ネギ

「墓守りというと、この墓地はダンペイさんが管理してるんですか？」

ダンペイ

「そんだ、昼間はぐっすり眠って夜に墓地を見回るんだ。」

カモ

(……墓地にこんなおつかねえ顔したオッサンがいたらビビるだろつな。)

カモが苦笑いを浮かべながらダンペイを見る。

ダンペイ

「ところで、オメエ達はこんな所で何してるだ？もしや、墓を荒らしに来ただか！？」

リンク

「ち、違いますよ！俺達はただ、この紋章を捜してるだけで……。」

リンクはライフオーズの紋章が描かれた用紙をダンペイに見せる。

ダンペイ

「ん？そげな紋章なら確か奥の墓石の近くになつたな。」

ネギ

「本当ですか！？ありがとうございます！」

リンク

「よし、その墓石の所へ行ってみよう！」

そう言うと、全員が奥に建ってる墓石の方へ走っていく。

ダンペイ

「おーい、あまり墓を荒らすんじゃないぞー！」

そう言うと、ダンペイはその場から立ち去っていく。

ミドナ

「……………ふう、あのオッサンやつと帰ったか。」

ミドナが一安心したような表情をしながらリンクの影から出て来る。

木乃香

「ミドナちゃんも大変やな……………いちいち隠れなアカンからな。」

ミドナ

「仕方ないさ、この醜い姿を見たら大騒ぎになるしな……………」。

木乃香の言葉にミドナが切なそうに答える。

木乃香

「そかな？ウチは可愛ええと思うけどな。」

ミドナ

「か、可愛い!？」

ミドナは木乃香の言葉に耳を疑った。

ミドナ

(……………この姿でそんな事言われたのは初めてだ。)

リンク

「おっ!あつた!！」

ミドナが真っ赤になって照れてる中、リンクがライフオーズの紋章を見つける。

リンク

「じゃあ、いつものように『時のオカリナ』を出して……………」

く
く
く
く
く
く
く
く
く
く

リンクは懐から『時のオカリナ』を取り出してメロディーを奏でる。

？

「……………よつやく来たか。」

突然リンクの目の前に、リンク同様に耳を尖らせた大人びた女性が現れる。

？

「私は闇の賢者であり、シーカー族のインパだ。」

リンク

「シーカー族？」

リンクはインパと名乗る女性の言葉に耳を傾ける。

インパ

「シーカー族は代々ハイラル王家に忠誠を誓っていた民族だ……………かつて私も先代のゼルダ姫様を乳母として育てていた。」

全員

「えっ!？」

インパの言葉に全員耳を疑った。

ネギ

「乳母って事は……………ゼルダさんの母親代わりって事ですね。」

明日菜

「それじゃ、お母さんは……………」

インパ

「ああ、姫様がまだ幼い頃に亡くなった……………それ以来、私が乳母としてゼルダ姫様をお守りしてきた。」

リンク

「そうだったのか……………」

リンクはインパの話聞いて感心する。

インパ

「さて、要らぬ話をしてしまったな……………『時の勇者』の末裔よ、『闇のメダル』を受け取るがいい。」

ペアアツ

インパはリンクに紫色のメダルを渡す。

リンク

「残りのメダルは後一個か……………」

インパ

「少年よ、残りの魂の賢者はゲルド砂漠の何処かにいる。」

リンク

「ゲルド砂漠か……………あそこはちょっと厄介だな。」

リンクは困った表情を浮かべながら頭を掻く。

インパ

「確かに場所が厄介だが……………此処まで来れたお前達ならきつと乗り越えられる。」

リンク

「インパさん……………」

インパの励ましの言葉に全員笑みを零す。

リンク

「よし、最後の賢者に会いに行こう！」

全員

「おおーっ!!」

リンクの掛け声全員元気良く答える。

インパ

「フフ、みんな元気が良いな………ところで、お前に私から一つだけ頼みがある。」

573

リンク

「え？何ですか？」

インパ

「この時代のゼルダ姫様を救い出してほしい………頼む。」

インパが頼み込むように少し頭を下げる。

リンク

「……………分かりました、必ずゼルダ姫を救い出します！」

インパ

「やはり頼もしいな……………では、さらばだ。」

インパはリンクの答えを聞いて安心して、そのままゆっくりと消えていく。

ミドナ

「それじゃ、ゲルド砂漠まで行ってみようか。」

パチッ

シュユッ

ミドナが指を鳴らすと、全員その場から消えていく。

くゲルド砂漠・キャンプ前く

ネギー行とリンクはミドナ力で、砂漠にそびえ立つ遺跡のような建物の跡地へやって来た。

明日菜

「わっ！まるで遺跡みたいね。」

リンク

「此処つてもしかして……………」

リンクは跡地を見渡しながら眺める。

ミドナ

「忘れたか？ブル布林共がアジトとして使っていた場所さ。」

リンク

「も、勿論覚えてるよ。」

木乃香

「ブル布林って何なん？」

リンク

「ハイラル全土に出没するモンスターさ……………こん棒や弓矢を武器に使うて人に襲い掛かってくるんだ。」

刹那

「では、この跡地はそのモンスター達のアジトって事ですか。」

ミドナ

「でも、前にリンクが一匹残らずやっつけたから今はもう……………」

グサツ！

ネギ

「うひゃっ!？」

突然ネギの足元に弓矢が突き刺さる。

明日菜

「ネ、ネギ!？」

のどか

「大丈夫ですか？」

ネギ

「はい、何とか……。」

リンク

「ま、まさか……。」

リンクがふと建物の方を見ると、やぐらの上に口を布で隠してる緑色のモンスターが弓矢を構えていた。

ミドナ

「ブルブリンの奴らだ！」

リンク

「くそっ、また此処をアジトにしてたのか！」

そう言いつと、リンクは懐から弓を取り出す。

リンク

「くらえ！！」

ビシュッ

グサッ！

ブルブリン

「グエーッ！！」

リンクの放った弓矢はやぐらの上にはいたブルブリンに見事命中する。

ネギ

「あ、あの距離で命中させた……。」「

木乃香

「お見事や！」「

リンク

「い、いや……。」「

リンクはネギ達に褒められて頬を紅く染める。

ドドドドドドドドッ……

すると、アジトから沢山のブルブルンが現れる。

明日菜

「な、何なのこの大群は！？」「

刹那

「まさかこんなに潜んでいたとは……。」「

ネギ

「木乃香さんとのどかさんは下がってて下さい！」「

のどか

「は、はい。」

木乃香

「みんな、気いつけてな。」

リンク

「それじゃ、みんなでやっつけちまおう！」

明日菜

「『アデアット』……！」

パアアッ

明日菜は咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出す。

明日菜

「『アデアット』……！」

パアアッ

明日菜は咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出す。

ブルブリン

「ウオオッ！」

ブルブリンの大群が持っていたこん棒を振り回しながら突っ込んでくる。

明日菜

「はぁあっ!!！」

バシヤヤッ!!！」

ブルブリン

「グワーーーーッ!!！」

明日菜の一降りで沢山のブルブリンが吹っ飛ばされる。

刹那

「神鳴流奥義・斬岩剣!!！」

ザシュユツ

ブルプリン

「ギャヤツ!!」

刹那の夕風が沢山ブルプリンを切り裂いていく。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……魔法の射手 連弾・
光の29矢!!」

バシュユツ!!

ブルプリン

「グワァーッ!!」

ネギの放った光弾が沢山のブルプリンに命中する。

ブルプリン

「ウォーッ!!」

沢山のブルプリンがリンクを囲むように襲い掛かるが……。

リンク

「くらえ！回転斬り！！」

ザシヤヤツ！！

ブル布林

「グガアアツ！！」

リンクが剣を構えたと同時に回転しながらブル布林を切り裂いていく。

ブル布林

「ウガァーッ！」

ブル布林がアジトからどんどん出て来る。

明日菜

「ま、まだこんなに居るの〜！？」

リンク

「一体何匹いるんだ？」

ミドナ

「……………リンク、久しぶりにあの姿になってみないか？」

リンク

「あの姿……………そ、それってまさか!？」

リンクは怪しい笑みを浮かべながら言うミドナの言葉にハッと何かに気付く。

リンク

「で、でも……………あの姿はちょっと……………」

ミドナ

「悩んでる場合じゃないだろ？奴らを一扫するにはあの姿になるしかないんじゃないか？」

リンク

「うっ……………」

リンクはブルブルと震えて闘ってるネギ達をふと見る。

リンク

「……………分かった！あの姿にしてくれ。」

ミドナ

「OK！」

パチッ

シュユッ

ミドナが指を鳴らすと、リンクの体全体が真っ黒になり変形していく。

585

ネギ

「リンクさん、そっちの状況は……………えっ!？」

ネギがリンクの方へ向くと、そこには大柄な狼しか居なかった。

ネギ

「あれ？リンクさんは何処へ……………。」

ミドナ

「此処にいるじゃないか。」

そう言つと、ミドナは狼の背中に乗っかる。

ネギ

「ええーっ!?!」

刹那

「こ、この狼がリンクさん!?!」

明日菜

「嘘でしょ!?!」

全員狼の姿になってしまったリンクを見て啞然となる。

ミドナ

「嘘じゃないさ、なあリンク?」

ケモノリンク

「ウォーッ!」

ケモノリンクがミドナに答えるかのように雄叫びを上げる。

全員

（ほ、本当だ……。）

ネギー一行は目を丸くさせたままケモノリンクを見つめる。

ミドナ

「んじゃ、行ってみようか！」

ケモノリンク

「ウガアーツー！」

ミドナの掛け声と共に、ケモノリンクは勢い良くブルブリンの群れに突っ込んでいく。

ドガアアツー！！

ブルブリン

「ウワアーツー！」

ケモノリンクは強力な体当たりでブルブリンの大群を吹っ飛ばす。

ケモノリンク

「ガールルルル……………」

ケモノリンクは周りを囲んでいるブルプリン達に唸り声を上げながら威嚇する。

刹那

「リンクさんが敵に囲まれている!」

明日菜

「助けに行かなきゃ!」

明日菜達がケモノリンクに加勢しようとして駆け寄ろうとした時……………。

ケモノリンク

「ガウガウッ!」

明日菜

「うひっ!?!」

ケモノリンクが駆け寄ろうとした明日菜達に向かって吠える。

ネギ

「ど、どうしたんですか？」

ミドナ

「『近付くな！』って言ってるのね。」

刹那

「えっ、どうして……。」

ミドナ

「今からあの技を発動させるからさ………結界発動！！」

ミドナが片手を上げると、ケモノリンクを中心に黒い結界が発生する。

ミドナ

「ロック完了！行けーっ！！」

ケモノリンク

「ガアアア！！」

ズシヤヤヤッ！！

ブルプリン

「グギャヤッツー!!」

ケモノリンクは体を高速回転させながら周りを囲んでるブルプリン達を吹っ飛ばす。

ネギ

「す、凄い……………」

刹那

「あんなに沢山囲んでいた敵を一瞬で……………」

明日菜

「まさに目にも止まらぬ速さね……………」

ネギ達がケモノリンクの素早い攻撃に啞然としていると……………。

ブルプリン

「ウォーッ！」

ブルプリンの大群がアジトからどんどん出て来る。

ミドナ

「チッ、これじゃ幾ら倒してもキリがないな。」

ケモノリンク

「ガルルル……………」

ケモノリンクがこちらへ突っ込んで来るブルブリンの大群に威嚇した時……………。

？

「ヤメロー!!」

ブルブリン

「!?!」

ブルブリン達は何者かの制止を聞いて動きを止める。

ケモノリンク

「ガウツ?」

ミドナ

「今の声は……………」

ドスン！ドスン！

アジトの方から、巨大な斧のような武器を担いだ大柄のモンスターが現れる。

明日菜

「……………どうやら、敵の親玉のようね。」

ネギ

「いかにも強そうですね。」

ミドナ

「やっぱり、コイツか……………」

ケモノリンク

「ウ……………」

ミドナとケモノリンクはモンスターを見て表情が険しくなる。

ケモノリンク

「ガウガウッ！」

ミドナ

「『元に戻してくれ！』だって？分かった。」

パチッ

シュユッ

ミドナが指を鳴らすと、ケモノリンクは元の人間の姿に戻る。

リンク

「……………キングブルプリン！」

キングブルプリン

「久シブリダナ。」

リンクとキングブルプリンはお互い睨み合う。

刹那

「……………リンクさんと奴は知り合いですか？」

ミドナ

「ああ、色々あってな。」

刹那の質問にミドナは曖昧に答える。

リンク

「今はお前と遊んでる暇はないんだ……………大人しくこの場から立ち去ってくれ！」

キングブルプリン

「……………。」

キングブルプリンはリンクの言葉を聞いてしばらく黙り込む。

キングブルプリン

「……………分かった。」

全員

「……………え？」

キングブルプリンの意外な返答に全員耳を疑った。

ブオーッ！

ドドドドドッ

キングブルブリンが懐からラツパのような物を取り出すと、遠くから猪いのししのような生物が沢山駆け寄ってくる。

のどか

「い、猪？」

木乃香

「わゝ！大きい猪が沢山来たわゝ。」

キングブルブリン

「野郎共、引キ上ゲルゾ。」

ブルブリンA

「へッ！？」

キングブルブリンの言葉に手下のブルブリン達は困惑する。

ブル布林B

「デ、デモ親分……。」

キングブル布林

「イイカラ早くぶるぼーニ乗レー!!」

ブル布林C

「へ、へ〜イ!!」

キングブル布林の一喝にブル布林達は慌ててブルボーという名前の猪に乗り込む。

リンク

「ど、どうして……。」

キングブル布林

「忘レタカ? 俺達八強イ奴ニ従ウダケダ。」

そう言うと、キングブル布林は一回り大きなブルボーに乗る。

キングブル布林

「行クゾ!!」

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

キングブルブリンは手下のブルブリン達を引き連れて砂漠の彼方へ立ち去っていく。

ネギ

「い、行っちゃいましたね……………」

リンク

「ああ……………」

明日菜

「……………あいつら、喋れるんだ。」

ミドナ

(私と同じ事言ってるな……………)

明日菜のツッコミにミドナは苦笑いする。

リンク

「そ、それよりライフオーズの紋章を探さない……………」

ネギ

「あーそうだった……皆さん！手分けして捜しましょう。」

そう言うと、全員ブルブルリン達のアジト内の探索を始める。

木乃香

「あーあつたえ〜！！」

木乃香がトライフォースの紋章を発見して声を上げると、全員その場へ集結する。

598

明日菜

「これで残る賢者は後一人ね。」

リンク

「よし………。」

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

リンクは『時のオカリナ』で演奏を始める。

？

「……やれやれ、やっとお出ましのようだね。」

突然リンクの前に赤い髪に褐色の肌の女性が現れる。

リンク

「君が最後の賢者だな？」

？

「そうさ、アタイが魂の賢者でゲルド族のナボールだ。」

ミドナ

「ゲルド族？どっかで聞いたような……………」

ミドナはナボールと名乗る女性の言葉に耳を傾ける。

ナボール

「聞いた事はあるハズだぜ？あのガノンドロフもアタイと同じゲルド族だからね。」

リンク

「な、何だって！？」

リンクはナボールの言葉を聞いて驚愕する。

ナポール

「元々アタイらゲルド族は女しか生まれない種族でね……………でも、百年に一人だけ男が生まれて、その男は族長になる資格が与えられるのさ。」

ミドナ

「それがガノンドロフか……………」

ナポール

「それにしても、さっきの激闘を見せてもらったけど中々やるじゃないか……………あいつと同じ位カッコ良かったよ。」

リンク

「え？そ、そうかな？」

リンクはナポールに褒められて頭を掻きながら照れる。

ミドナ

「ところで、アンタと『時の勇者』とはどうゆう関係なんだ？」

木乃香

「あ！それウチも知りた〜い。」

明日菜

「こ、木乃香まで……………」

明日菜はとミドナに悪のりした木乃香に呆れる。

ナポール

「関係？そうだな……………簡単に言えば、あいつはアタイの命の恩人だな。」

ネギ

「命の恩人？」

ナポールの言葉に全員首を傾げる。

ナポール

「アタイがガノンドロフの手下に洗脳されて奴のいいように操られていた時、あいつがアタイを洗脳から解放してくれたって訳さ。」

木乃香

「へえ、その『時の勇者』さんっていっぱい良い事してるな」

のどか

「まるで正義の味方みたい……………」

ネギ

「リンクさんの祖先ってそんなに偉大な方だったんですね。」

リンク

「な、何だかまた照れるな……………」

リンクはネギ達に褒められて更に照れる。

ナポール

「おっと、随分話がズレちまったけど……………改めてアンタに『魂のメダル』を授けるから受け取りな！」

ペアアツ

ナポールはリンクに銅色のメダルを渡す。

リンク

「これで六個のメダルが揃った。」

ミドナ

「これならハイラル城の結界を壊せるな。」

ナボール

「これでアタイら六賢者の役目は終わった……………後はアンタに任せ
たからね。」

シユユツ

ナボールはそのままゆっくりと消える。

リンク

「ミドナ、早速ハイラル城へワープ……………。」

？

「リンクさーんー!!」

全員

「!?!?」

突然聞こえてきた声に反応して振り向くと、砂漠の彼方から赤い帽子を被った男がこちらへ駆け寄ってくる。

ミドナ

（うわっ！マズイ……。）

ミドナは慌ててリンクの影に隠れる。

ネギ

「誰ですか？」

リンク

「あの人はポストマンといって、手紙とかを届けてくれる郵便配達人だよ。」

明日菜

「へえ、わざわざ走って配達するのね。」

リンクがネギ達にポストマンについて話していると、ポストマンはリンクの前で立ち止まる。

ポストマン

「ハアハアッ……リンクさんにイリアさんから手紙とお届け物を

預かっています。」

リンク

「えっ！？イリアから？」

リンクはポストマンから手紙と届け物を受け取る。

ポストマン

「それでは、私はこれで失礼します。」

そう言うと、ポストマンはそのまま砂漠の彼方へ走り去っていく。

木乃香

「……………あの人、この広い砂漠を走って此処まで来たんやろか？」

刹那

「そのようですね……………」。

ミドナ

「あいつは配達の為ならどんな場所でも行きそうだな……………」。

全員ポストマンのタフさに唖然とする。

明日菜

「ところで、手紙には何て書いてあるの？」

リンク

「え？ああ、えつくとね……………」

リンクは慌てて手紙の封筒を破り、手紙を読み上げようとする。

リンクへ

突然こんな手紙を書いて驚いているかもしれませんが、どうしても貴方にこの手紙と瓶に入れたアレを渡しておきたくて送りました。きっと役に立つと思うから持っていてね。

追伸：リンク、無事に帰って来てね。

イリアより。

リンク

「……………と書いてあった。」

明日菜

「ふん、成程ね。」

木乃香

「やっぱり二人は仲がええな。」

リンク

「そ、そうかな……。」

リンクは何故か否定しないで真っ赤になりながら照れる。

ネギ

「そ、それよりイリアさんは何を送ってくれたんですか？」

リンク

「え？えつと……あ！これは……。」

リンクは手紙と一緒に付いていた瓶の中身を確認すると、大きな羽根を生やしてて蛍のように光ってる丸い物体が入っていた。

カモ

「何だこりゃ？でっかい蛍か？」

リンク

「違うよ、これは妖精だよ。」

のどか

「よ、妖精？」

リンク

「この妖精に触れると、一瞬で怪我を癒してくれるんだ。」

刹那

「まるでお嬢様の能力と同じですね。」

ミドナ

「でも、妖精が一匹につき一回しか回復してくれないんだよな。」

ネギ

「成程……………」

ネギ一行はリンクの説明をすぐに理解する。

ミドナ

「さて、そろそろハイラル城へ行くか！」

リンク

「ああ、そうだな。」

そう言うと、リンクは妖精が入ってる瓶を懐に入れる。

ミドナ

「そんじゃ……………」

パチッ

シュユッ

ミドナが指を鳴らすと、全員その場から消えていく。

〈ハイラル城前〉

ネギー行とリンクはミドナの力でハイラル城の前までやって来た。

ラウル

(リンク、聞こえるか?)

リンク

「ラ、ラウル!？」

リンクは突然聞こえてきたラウルの声に驚いて辺りを見回す。

ネギ

「ど、どうしたんですか？」

ネギ達はリンクの異変に困惑する。

ラウル

（どうやら六人の賢者に会ってメダルを貰ったようじゃな………では、その六つのメダルを掲げるのじゃ！）

リンク

「はい！」

プワァーッ

リンクがラウルに言われたように六つのメダルを掲げると、メダルは丸の形を作りリンクの頭上に浮かぶ。

明日菜

「メダルが浮いた!？」

刹那

「一体何が起こるんでしょっつ?」

明日菜達はただこの状況を眺める事しか出来なかった。

ピカアアッ！！

六つのメダルから強力な光線がハイラル城の結界に向かって放たれる。

シユユユッ

すると、結界が光と共にどんどん消えていく。

リンク

「結界が……消えていく。」

ミドナ

「どっちら上手くいったみたいだな！」

ネギ

「皆さん！いよいよ敵陣へ突入しますよ！！！」

明日菜

「分かってるわよ！」

リンク

「よし！行こう！」

全員ハイラル城に向かって走り出す。

「ハイラル城内部」

明日菜

「どいたどいたー!!」

パシャーーツ!!

刹那

「斬岩剣!!」

ザシユユツ!!

明日菜と刹那は通路を塞ぐモンスター（スタルフォスやダイナフォス等）をそれぞれの武器で進みながら薙ぎ倒していた。

ミドナ

「あの二人、殆ど一撃でモンスター共を吹っ飛ばしてるな。」

リンク

「かなり戦闘慣れしてるね。」

リンクとミドナは二人の様子を見て感心しながら進んでいた。

ネギ

「リンクさん、この奥にゼルダさんやガノンドロフさんが居るんでしょうか？」

リンク

「ああ、きつと奴は前みたいにゼルダ姫を捕らえて俺が来るのを待っているに違いない。」

リンクは思い詰めたような表情で答える。

ミドナ

「おっ！どうやらそのガノンドロフが待ち伏せている場所まで来たみたいだぜ。」

ミドナの言葉を聞いて立ち止まると、目の前には大きな扉があった。

ネギ

「いよいよって感じですね……………」

リンク

「……………みんな、こっからが本番だけど、準備はいいかい？」

リンクの言葉に全員静かに頷く。

リンク

「よし！行こうー！」

ガラガラッ

リンクの掛け声と共に、大きな扉をくぐり抜けて部屋へ入り込む。

？

「……………フツ、来たか。」

部屋に入ると、王室のような広い場所で王座オウザに腰を降ろす赤い髪に褐色の肌の大男と、その隣にある台座で死んだように眠っているドレスを来た茶髪の女性が目に写った。

ネギ

「あの方がガノンドロフさんですが。」

明日菜

「そして、あの眠っている女性がゼルダ姫ね。」

リンク

「ガノンドロフ、お前に一つだけ聞きたい事がある！」

ガノンドロフ

「……………何だ？」

リンク

「ミドナをこの姿に変えて影の世界へ追放したり、ハイラル城を乗っ取って結界を張ったのはお前の仕業なんだな？」

ガノンドロフ

「……………だとしたら？」

リンク

「今日こそお前との決着を着けてやる！！」

そう言うと、リンクはガノンドロフに向かってマスターソードを取り出して身構える。

ガノンドロフ

「フン、勝てるか？この俺に……………ハアアアツ！！」

ゴオオオツ！！

次の瞬間、ガノンドロフの身体中から魔力が溢れ出してきて体がど
んどん変形していく。

ネギ

（な、何て強大な魔力なんだ……………。）

リンク

「ま、まさか……………。」

ガノン

「グオオオツ！！」

ガノンドロフは雄叫びを上げると、大きな角を生やした巨大な四足
歩行の獣へと変化する。

明日菜

「こ、これじゃ化け物じゃない……………。」

ミドナ

「いきなり獣へ変形しやがったか……。」

ネギ

「皆さん！気をつけて下さいね！！」

リンク

「来い！魔獣ガノン！！」

ガノン

「ガアアアツ！！」

ガノンはそのままリンク達に突っ込んでくる。

第十四話 闇・魂の賢者とポストマン (後書き)

ついにガノンドロフと対決する事になったネギー行とリンクは果たして勝てるのだろうか!?

第十五話 影の僭王との対決 (前書き)

少し話が長いですが、『ゼルダの伝説』編完結です！

第十五話 影の僭王との対決

ハイラル城・王室

ガノン

「グオオオツ!!!」

魔獣と化したガノンドロフがネギー一行とリンクに突っ込んでくる。

明日菜

「き、来たわ!」

リンク

「みんな!避ける!!!」

ネギ

「のどかさん!僕の手に掴まって下さい!!!」

のどか

「は、はい!」

刹那

「お嬢様は私に……。」

木乃香

「分かったえ！」

リンクの掛け声でネギはのどかの手を掴み、刹那は木乃香の手を掴んで、全員ガノンの体当たりを避ける。

明日菜

「ふうっ、危なかった……。」

刹那

「お嬢様、此処は危険ですので安全な場所へ避難して下さい。」

木乃香

「う、うん……気付いてな。」

ネギ

「のどかさんは木乃香さんの居る場所から敵の行動を教えてください。」

のどか

「わ、分かりました。」

木乃香とのどかは安全な場所へ避難する。

ミドナ

「リンク、ガノンドロフの倒し方は覚えてるよな？」

リンク

「勿論さ……まずは奴の額に攻撃して、その後奴が倒れたら腹に攻撃すればいいんだ。」

ネギ

「という事は、まず額を集中攻撃すればいいんですね？」

明日菜

「よし！そうと決まれば早速……。」「

刹那

「危ない！！」

ガノン

「ガアアアッ！！」

ガノンが再びリンク達に突っ込んでくる。

リンク

「し、しまった……。」「

リンクは咄嗟に弓を構えようとするが……………。

バツ！！

全員

「えっ！？」「

ガノンはその場で高くジャンプして、リンク達の真下へ着地しようとする。

明日菜

「わっ！こっちに落ちてくるっ！……！」「

ネギ

「皆さん！急いで逃げて下さい！……！」「

ドゥッスーン！！

ガノンが勢い良く着地する前に全員間一髪逃げ出す。

明日菜

「か、間一髪だったわ……………」。

ミドナ

「やっぱり一筋縄ではいかないな。」

リンク

「奴の動きを止める事が出来れば……………」。

ネギ

「それなら、僕に任せて下さい！」

そう言うと、ネギは杖を構えながらガノンに接近する。

リンク

「ネ、ネギ君!？」

刹那

「大丈夫ですよ、ネギ先生に任せましょう。」

リンク

「で、でも……………」

リンクは心配そうにネギを見守る。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………風の精霊11人！縛鎖となりて敵を捕まえろ！魔法の射手・戒めの風矢！！」

ドオオオツ！！

ガノン

「グガアアツ！？」

ネギは拘束魔法でガノンの動きを止める。

リンク

「あ、あれは……………もしかして魔法！？」

刹那

「はい、実はネギ先生は魔法使いなんです。」

明日菜

「ネギから何も聞いてなかった？」

リンク

「い、いや……………君達の先生だって事は聞いたけど……………」

リンクは唾然としながら明日菜の質問に答える。

ガノン

「グウウ……………ガアアツ！」

ガノンは首を激しく振りながらネギの拘束魔法を破る。

ネギ

（ぼ、僕の魔法を破った！？）

ネギは信じられないような表情を浮かべながら驚愕する。

のどか

「ネギ先生、敵が先生に向かって体当たりしようとしています！」

ネギ

「わ、分かりました！」

ガノン

「グオオツ！」

のどかの言う通りに、ガノンがネギに向かって突っ込んでくる。

ミドナ

「私に任せな！」

ガシッ！！

ガノン

「ウゲツ！？」

突然ミドナがガノンの前に立ち塞がり、後ろに束ねてる後ろ髪の部分を変形させてガノンの額を掴む。

明日菜

「な、何か凄いのが出て来たんだけど……………」。

リンク

「ミドナはああ見えても、かなり強大な魔力を秘めてるみたいなんだ……………」

刹那

「た、確かに……………さっきから強力な魔力を感じます。」

ガノン

「グガガガ……………」

ミドナ

「うぐぐ……………」

ミドナは必死でガノンの動きを止めようとするが……………。

ガノン

「ガアアッ！」

ミドナ

「ぐわっ！…！」

ドゥシューーン…！

ミドナはガノンに振り払われて、壁に叩き付けられる。

リンク

「ミドナ！」

リンクが慌ててミドナに近付いた時……………。

のどか

「リンクさん！行っちゃ駄目です！！！」

リンク

「え？」

ガノン

「ゲオオッ！！！」

リンクがのどかの声に反応して後ろを向くと、ガノンが勢い良くリンクに向かって突っ込んでくる。

リンク

「し、しまった……………」

ネギ

「リンクさん!!」

ネギが杖に跨がりリンクに接近しようとする。

カモ

「駄目だ兄貴!あの距離じゃ間に合わねえ!」

ネギ

「で、でも……………」

リンク

「くそっ!ここまでか……………」

リンクが気絶してるミドナを強く抱きしめながら目を覆った時……………

ザシュツ!!

ガノン

「グギヤヤツ!!」

突然ガノンの額に光に覆われた弓矢が突き刺さり、ガノンは光に覆われながらもがき苦しむ。

明日菜

「な、何が起こったの？」

刹那

「誰かが攻撃をしたんでしょうか？」

ネギ

(……………この光から強い魔力を感じる。)

ネギは驚いたような表情で光に覆われているガノンを見る。

リンク

「この光の力は……………まさか!？」

リンクが別の方を向くと、眠っていたハズのゼルダが台座の上で弓を構えていた。

リンク

「ゼルダ姫!!」

リンクはミドナを抱きしめたままゼルダの方へ駆け寄る。

ゼルダ

「リンク……………怪我はありませんか？」

リンク

「はい、俺は大丈夫です……………それより、ゼルダ姫は大丈夫ですか？」

ゼルダ

「私も大丈夫です……………心配をかけてごめんなさい。」

ゼルダはリンクに向かって申し訳なさそうに頭を下げる。

リンク

「そ、そんな……………頭を上げて下さい!」

ミドナ

「う……………う……………」

リンクが動揺していると、ミドナが意識を取り戻す。

リンク

「ミドナ！良かった……………気が付いたか。」

リンクはミドナが意識を取り戻して一安心する。

ゼルダ

「ミドナ？……………ミドナなの！？」

ゼルダはミドナを見て驚愕する。

ミドナ

「あ、ああ……………久しぶりだな姫さん。」

ゼルダ

「また貴女に会えるなんて……………嬉しいわ！」

ミドナ

「おわっ！？」

ゼルダは笑顔でミドナに抱き着く。

ミドナ

「じ、じら……よせって……。」

リンク

「やれやれ……。。」

リンクはミドナが真っ赤になりながらゼルダから離れようとしている光景を見て微笑んでいた。

明日菜

「コホン！あの……お取り込み中申し訳ないんですけど……。」

リンク&ゼルダ

「……………えっ？」

ネギ

「そ、そろそろとどめを……。」

ネギは苦笑いしながら今だに光に覆われて苦しんでいるガノンに指さす。

リンク

「あ！そうだった！！」

リンクは慌ててガノンに向けてマスターソードを構える。

リンク

「ガノンドロフ！今日でお前との決着を着けてやる！！」

そう言うと、リンクはマスターソードをガノンの腹に突き刺そうと振り上げた時……………。

ガノン

「ゲウウ……………ゴハアツ！！」

全員

「！？」

突然ガノンが口から黒くて丸い物体を吐き出す。

のどか

「じ、これは……………」

木乃香

「口から何か出て来たけど……………」。

全員謎の物体に驚愕していると、物体がゆっくりと地面に着地する。

？

「……………ふう、危ないところだった。」

ネギ

「じゃ、喋った!？」

ミドナ

(今の声は……………)。

謎の物体が言葉を発すると、どんどん人型へと変形していく。

明日菜

「な、何なの……………」。

刹那

「人の形へ変形していく……………」。

全員物体の異変に警戒している中、物体は兜かぶとのような仮面を被った人物へ姿を変えた。

ゼルダ

「そ、そんな……………」

リンク

「まさか、お前は……………」

ミドナ

「……………ザント……！」

リンクとゼルダが驚愕する中、ミドナは怒りに満ちた表情で仮面の人物の名前を叫ぶ。

ザント

「おやおや、私の事を覚えてくれて光栄だな。」

ネギ

「リンクさん、あの人は一体……………」

リンク

「奴はザントといって、前にミドナのいた世界を乗っ取って、ハイ

ラルも影の世界にしようと思んだ悪い奴さ。」

ゼルダ

「ですが、彼はリンクに倒されたハズ……………」。

カモ

（兄貴、恐らくあいつもタブーって奴の力で復活したんだ。）

ネギ

（そうだね、きっとリンクさん達を始末する為に……………」。

ネギとカモはリンク達に聞こえないように話す。

ミドナ

「何故だ……………何故お前が此処に居るんだ!？」

ザント

「フフフ……………私は本当の神と出会ったのだ。」

リンク

「何だと?？」

リンクはザントの言葉に耳を傾ける。

ザント

「黒い衣を纏った神が私を蘇らせて下さったのだ。」

明日菜

「黒い衣って……………まさか!？」

刹那

「例の黒コート的人物……………」

ネギ

「やっぱりあの人が……………」

ネギ達はザントを蘇らせた者が黒コートの人物だと悟る。

ミドナ

「ケツ! お前みたいな奴を蘇らせるなんて、余程間抜けな神様だな
!」

ザント

「いや、一番間抜けなのは……………私の後ろで倒れてるコイツだ。」

ザントは元の姿に戻って倒れ込んでいるガノンドロフに指さす。

ザント

「私は以前、この男を神と崇^{あが}めていた……だが、今の私から見ればゴミも同然だ。」

ネギ

「ゴ、ゴミ？」

ザント

「そうとも、だから私はいとも簡単にこの男に憑^{ひよ}依^{つい}する事が出来たのだ。」

リンク

「じ、じゃあ……お前がガノンドロフに取り付いて悪さを働いていたんだな？」

ザント

「ああ、そうした方が何かと都合が良くてな……。」

ゼルダ

「都合？」

全員ザントの言葉に耳を傾ける。

ザント

「この男は私より力が衰えているとはいえ力のトライフォースの継承者………いずれは私の魔力を越える力を発揮する………だから、この男に成り済まして残りの知恵と勇気のトライフォースの力を持つ貴様らを倒して、トライフォースを完成させて私がこの世界の支配しようと思っただのだ！」

ネギ

「な、何て自分勝手な………。」

明日菜

「どの世界の悪者も考えている事は一緒ね。」

明日菜はザントの言葉に呆れ返る。

ザント

「だが、この男が死んだ以上はもはや叶わぬ願い………とんだ腑抜ふぬけだった。」

そう言うと、ザントは倒れ込んでるガノンドロフを蹴りを入れようとしたが………。

ガシッ!!

ザント

「!?!」

突然ガノンドロフの手がザントの足を掴む。

ガノンドロフ

「フツ、貴様のような負け犬に腑抜け呼ばわりされるとは……………何とも片腹痛いな。」

ザント

「な、何と!?!」

ザントはガノンドロフから距離を取ると、ガノンドロフはゆっくりと立ち上がる。

ザント

「まだ生きていたとは……………流石の私も驚いたぞ。」

ガノンドロフ

「あの程度の攻撃でこの俺がやられると思ったのか？」

リンク

(やっぱりな……………。)

リンクはガノンドロフの生命力に納得する。

ガノンドロフ

「それにしても、随分俺の体で好き放題やってくれたな……………俺を敵に回した事を後悔させてやる！！」

そう言うと、ガノンドロフは握り拳から黒い炎を纏わせながら身構える。

ミドナ

「さくて、どうするザント？この人数相手じゃ勝ち目なんて無いんじゃないか？」

ミドナがザントに皮肉を言うと、全員が攻撃体制に移る。

ザント

「うむ、こうなったら少しハンデを少なくするか……………いでよ！我が忠実なる影の使者達よ！！」

ザントが両手を掲げながら言うと、ザントの真上が真っ黒い大きな穴が開く。

刹那

「な、何だ？」

明日菜

「嫌な予感がする……………」。

ドサッ！ドサッ！

すると、穴から全身真っ黒のリンクと同じく全身真っ黒で髑髏どくろの顔をしたガノンドロフが現れる。

リンク

「あ、あれって……………俺!？」

ガノンドロフ

「フン、くだらん真似を……………」。

リンクは自分そっくりの敵に驚愕して、ガノンドロフは不機嫌そう

に眩く。

ザント

「さあ、ダークリンクにファントムガノン！コイツらを始末せよ！
」

そう言うと、ダークリンクとファントムガノンは何も言わずにリンク達に向かって駆け出していく。

ゼルダ

「リンク、此処は私達に任せて貴方はザントを……………」

リンク

「し、しかし……………」

パアアアツ

リンクが戸惑っていると、ゼルダが光に包まれて口元を布で覆われた青年の姿に変化する。

？

「奴を倒せるのは君だけなんだ……………だから早く！」

リンク

「シーク……………」

リンクはシークという名の青年の言葉に心打たれる。

ネギ

「あ、あの……………」

シーク

「ん？何だい？」

ネギ

「つかぬ事を伺いますが……………ゼルダさんですよね？」

シーク

「いや、この姿ではシークと呼んでくれ。」

リンク

「ゼルダ姫は魔法で全く別の姿へ変身する事が出来るんだ。」

ネギ

「ま、魔法で……………」

明日菜

(姿だけじゃなくて口調も変わってるし……。)

ネギ達はゼルダとシークの変貌に啞然となる。

ガノンドロフ

「おい貴様ら！もうお喋りしてる暇は無いぞ！！」

ガノンドロフの大声に驚いて振り向くと、ダークリンクとファントムガノンがすぐそこまで迫っていた。

シーク

「急げリンク！後は僕達に任せろ！」

ガノンドロフ

「言うておくが、あんな奴に負けたら承知しないぞ！」

リンク

「……………分かった！」

リンクはザントに向かって駆け出していく。

シーク

「よし、僕はあいつの相手をしてやるうか。」

そう言うと、シークはダークリンクの方へ駆け出していく。

ガノンドロフ

「俺の姿で闘いを挑むとは愚かな………偽物は本物に勝てないという事を教えてやる!!」

そう言うと、ガノンドロフはファントムガンンに向かって駆け出していく。

650

ネギ

「明日菜さんと刹那さんはお二人のサポートをして下さい!」

明日菜

「アンタはどうすんのよ?」

ネギ

「僕はリンクさんのサポートに向かいます!」

刹那

「……………分かりました、
お気をつけて下さい。」

ネギ

「はい！」

ネギはリンクの後からザントの元へ駆け出していく。

ミドナ

「待てネギ坊主！私も一緒に……………」

そう言うと、ミドナはネギの後を追いかけていく。

明日菜

「そんじゃ、私達も行きますよ！」

刹那

「はい！」

明日菜はガノンドロフの元へ、刹那はシークの元へ駆け出していく。

シーク

「ハッ!!」

ビビュッ

カカカカッ

シークはダークリンクに向かって数本の細長い針を投げ付けるが、ダークリンクは盾で防ぐ。

シーク

(相手の考えが読みにくい……隙を見て攻撃するしかないな。)

ダークリンク

「たあっ!!」

ダークリンクは真つ黒なマスターソードでシークに切り掛かろうとするが……………。

刹那

「危ない!!」

ガキイイツ!!

ダークリンク

「!？」

刹那が夕風でダークリンクのマスターソードを受け止める。

シーク

「き、君は……………」

ダークリンク

「……………」

ダークリンクは咄嗟に刹那から離れる。

刹那

「ゼルダ姫……………じゃなくてシークさん！私がサポートしますのでご安心を！」

シーク

「……………ありがとう、助かるよ。」

刹那の言葉にシークは少し微笑みながら答える。

シーク

「それじゃ行くよ！」

刹那

「はい！」

シークと刹那はダークリンクに向かって駆け出していく。

ガノンドロフ

「ぬううっ
「.-!

ファントムガノン

「.....」。

ファントムガノンの槍とガノンドロフの細長くて白い剣が鏖^{あつ}せり合
っていた。

ガノンドロフ

(カまでほぼ互角か……………全く忌ま忌ましい。)

ガノンドロフが眉間にシワを寄せながらファントムガノンを見ていると……………。

キイイン!!

ガノンドロフ

「うおっ!?!」

ファントムガノンに押し出されて、ガノンドロフはその勢いで尻餅を着いてしまう。

バシユツ!!

ファントムガノンは素早く距離を取って、槍の尖端から光弾を放つ。

明日菜

「おりゃーっ!?!」

ブンッ!!

明日菜が『ハマノツルギ』（大剣形態）を振り回してファントムガノンが放った光弾を弾き返す。

バシヤヤツ！！

ファントムガノン

「グワアアツ！！」

ファントムガノンは明日菜が弾き返した光弾に当たってしまふ。

ガノンドロフ

「……………小娘、何の真似だ？」

明日菜

「何の真似って、危なかったから助けたんじゃない……………。」

ガノンドロフ

「余計な事をするな！貴様のような小娘に助太刀されるくらいなら死んだ方がマシだ！！」

明日菜

「な、何ですって!？」

明日菜はガノンドロフの言葉に怒り出すが……。

ファントムガノン

「ウオオツ!!」

ファントムガノンがまるで怒ったかのように大声を上げる。

明日菜

「……………どっちら、喧嘩してる場合ではないよね。」

ガノンドロフ

「……………言っておくが、俺の邪魔だけはするなよ。」

明日菜

「はいはい……………」

明日菜がガノンドロフの言葉を軽く遇あしらうと、二人揃ってファントムガノンに向かって身構える。

ザ
ント

「ハアアツ!!」

ガキイイイツ!!

リンク
「くっ！」

リンクはザントの二刀流を盾で受け止めていた。

リンク

(攻撃方法は同じだが、以前よりも動きが素早くなってるな。)

ザント

「どうした？防いでるだけでは私に勝てないぞ！」

ザントがリンクに猛攻し続けてる時……………。

ネギ

「魔法の射手・戒めの風矢!!」

ギョルギョルギョル

ザント

「なっ!?!い、いつの間に……………」

ネギが背後から拘束魔法を繰り出して、ザントの動きを封じる。

リンク

「ネ、ネギ君！」

ネギ

「リンクさん、僕が敵の動きを封じました！」

ミドナ

「今のうちに攻撃を……………」。

ザント

「お、おのれ……………私を甘く見るなああつ……！」

グルグルグルツ……！

ザントが駒のように高速回転して、ネギの魔法を振り払う。

カモ

「あの野郎、兄貴の魔法を跳ね退けやがった！」

ミドナ

「あいつがあそこまでパワーアップしてるとは……………」。

ザント

「ううっ…………め、目が…………。」

ザントは回転を止めると、頭を抑えながらフラフラする。

カモ

「……………もしかして、回り過ぎて目を回しちゃったのか？」

ミドナ

「……………やはり前と全然変わってないな。」

ミドナはザントがふらついてる姿を見て呆れ返る。

ネギ

「リ、リンクさん！今のうちに…………。」

リンク

「よし！……」

リンクはマスターソードを構えながらザントに近付くが……………。

ザシュッー！

リンク
「かはっ……。」

ザント

「フフフ……油断したな。」

ザントの二刀流がリンクの腹部を貫通する。

バターーン！

ネギ

「リンクさん……！」

ミドナ

「リンク……！」

ネギとミドナはその場で倒れたリンクに向かって駆け出す。

ミドナ

「リンク……しっかりしろ……！」

ミドナは倒れてるリンクを激しく揺さぶるが、全く応答が無い。

ザント

「無駄だ………そいつはもう死んだ。」

ミドナ

「………き、貴様あああつー！」

ミドナは後ろに束ねてる後ろ髪の先端をトゲみたいに尖らせてザントに向けて放つが………。

ザント

「………フン！」

ザントは片手でミドナの攻撃を受け止める。

ミドナ

「………」

ザント

「前はこれでやられてしまったが、同じ手は喰わんぞー！」

その言いつつ、ザントはミドナに近付いようと駆け寄ってくる。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステ……………」

ガシッ！！

ネギ

「うぐっ！？」

ネギが咄嗟に呪文を唱えてた時、ザントが素早くネギの首を掴む。

ザント

「小僧、貴様は魔法使いだな……………ならば貴様に呪文を詠唱させる訳にはいかんな。」

ネギ

「う……………うぐっ……………」

ザントはネギの首を掴みながらミドナに近付いていく。

カモ

「この野郎！兄貴を離しやがれ！…」

カモはネギの肩からザントに向かって飛び掛かるが……。

バシッ！！

カモ

「むぎゅー！！」

ザントは飛び掛かってきたカモを簡単に叩き落とす。

ネギ

「カ……カモ君……。」

ザント

「フツ、弱き者が私に盾突くからだ……さて、ミドナよ。」

ザントは地面に座り込んでミドナの前にそびえ立つ。

ザント

「私と一緒にこの世界を影の世界として支配してみないか？そうすれば命だけは助けてやる。」

ミドナ

「前にもそんな事言ってたよな……誰がお前のくだらない企みなんかに乗るか!」

ザント

「……………」。

ドサッ!!

ネギ

「うっ……………ゴホッゴホッ!」

ミドナの言葉を聞いたザントはネギの首を掴んでいた手を離すと、ネギはそのまま床に尻餅を着いて咳込む。

ザント

「いいだろう……………ならば、その醜い姿のままあの世へ行くがいい!」

ネギ

「あ、危ない……………」。

ザントはミドナに向かって両手の刀を振り下ろそうとするが……………。

ザシュッー!!

ザント
「な、何……………」

何者かがザントの肩を切り付ける。

ネギ

「も、もしかして……………」。

ミドナ

「……………リンクー！」

ネギとミドナはザントを背後から肩を切り付けたのがリンクだと認識する。

ザント

「ば、馬鹿な……………確かに手応えがあったハズ……………」。

リンク

「ああ、確かにな……………だが、コイツが助けてくれたのさ。」

そう言いつと、リンクの回りに妖精が飛び回る。

ネギ

「あ、あの妖精はイリアさんが……………」。

リンク

「そう、イリアが贈ってくれた妖精が俺の傷を癒してくれたんだ。」

ザント

「お、おのれえっ!!！」

ザントは高速回転しながらリンクに突っ込むが……。

リンク

「これを試してみるか……。」

そう言うと、リンクは懐から『ウサギずきん』を取り出して頭に被せる。

ミドナ

「お、おい！そんな物を頭に被ってる場合じゃ……。」

ピョーン！

ミドナのツッコミの最中に、『ウサギずきん』を被ったリンクが高いジャンプでザントの攻撃を避ける。

ミドナ

「う、嘘……………」

ネギ

「な、何て高いジャンプなんだ……………」

ネギとミドナは『ウサギずきん』の効果に呆然とする。

リンク

「ほ、本当に高くジャンプ出来た……………」

ジャンプして見事に着地したリンクも『ウサギずきん』の効果に呆然となる。

ザント

「な、何！？ 奴は何処へ……………」

ザントは攻撃を止めると、リンクを捜そうと辺りを見回す。

シーク

「リンク！ これを使え！！」

リンク

「え？」

シークがリンクに尖端が光に包まれてる弓矢を投げると、リンクは見事にキャッチする。

リンク

「これは……………光の弓矢？」

シーク

「その矢をザントに向けて放つんだ！」

リンク

「……………分かった！」

ザント

「ムッ！？そこに居たか！！！」

ザントはリンクを発見すると、再び高速回転しよつと構えるが……………。

ネギ

「魔法の射手・戒めの風矢!!」

バシユユツ!!

ザント

「ぬっ!?ま、またしても……………」

ネギが拘束魔法でザントの動きを封じる。

ネギ

「リンクさん!今です!!」

リンク

「ありがとうネギ君……………くらえ!!」

ビビユツ!

リンクは弓でザントに向けて光の弓矢を放つと……………。

グサツ!!

ザント

「ぐおおおおっ！！」

ザントの腹部に光の弓矢が命中して、ザントは光に包まれていく。

ザント

「わ、私は……………また……………負けたと……………言う……………の……………か……………」

パアアアッ！！

ザントを包んだ光が強く発光する。

リンク

「……………治まったか。」

リンクが辺りを見回すと、何処にもザントの姿が無かった。

ネギ

「終わっただんですね。」

リンク

「ああ、ザントを倒したからね。」

明日菜

「ネギ〜!〜!」

明日菜を含む全員がネギとリンクの元へ駆け寄ってくる。

木乃香

「二人共、怪我せえへんかった?」

ネギ

「は、はい……僕やリンクさんも大丈夫です。」

のどか

「よ、良かった……。」

のどかはネギの言葉を聞いて、ホッと胸を撫で下ろす。

リンク

「それより、そっちは片付いたの?」

刹那

「はい、こちらも何とか倒しました。」

ゼルダ

「彼女のお蔭で難無く倒せました。」

刹那

「あ、いえ………そんな事はありませんよ。」

刹那はゼルダに褒められて真っ赤になりながら照れる。

ネギ

「では、明日菜さんの方も………」

明日菜

「まあね!」

ガノンドロフ

「フン、このじゃじゃ馬がでしゃばらなければ数秒で始末出来たものを………」

明日菜

「だ、誰がじゃじゃ馬ですって!?!」

明日菜はガノンドロフの言葉に怒り出す。

ネギ

「あ、明日菜さん……………落ち着いて下さい。」

ネギは慌てて明日菜を宥める。

木乃香

「あれ？ところでミドナちゃんは何処なん？」

ミドナ

「此処だよ。」

全員声がした方を向くと、容姿端麗で細身長身の女性がいた。

ネギ一行

「……………誰？」

リンク

「ミドナ！元の姿に戻ったんだ。」

ゼルダ

「良かった……。」

ガノンドロフ

「……………フン！」

リンクとゼルダはミドナの本来の姿を見て嬉しそうになるが、ガノンドロフだけは不機嫌そうに目を反らす。

ネギー一行

「ええー！ーっ!？」

ネギー一行はミドナの本来の姿に驚愕する。

木乃香

「こ、これがミドナちゃんの本当の姿？」

明日菜

「さっきとはまるで別人ね……………」

ネギ

（……………背が高くてスリムで綺麗。）

ネギー一行はミドナを見て唾然となりながら見とれる。

ミドナ

「どうした？私あまりに美しいから見とれてんのか？」

木乃香

「あ、やっぱりミドナちゃんや……………」。

ネギー一行はミドナの言葉を聞いて『やっぱりミドナだ』と確信する。

ミドナ

「それより、困ったな……………」。

のどか

「ど、どうかしたんですか？」

ミドナ

「元の姿に戻ったのはいいが、どうやって影の世界に帰ればいいのか……………」。

リンク

「あ！そうか……………唯一この世界と影の世界を繋いでる『陰りの鏡』は前にミドナが壊しちゃったし……………」。

ゼルダ

「どつしましゅう……………」。

全員この深刻な状況に悩んでいると……………」。

パチッ

全員

「！？」

全員指が鳴った音に反応すると、ガノンドロフのいた場所に大きな真っ黒な穴が開いていた。

ゼルダ

「何でしょうか？この穴は……………」。

ミドナ

「この穴……………影の世界へ通じているぞ！」

リンク

「な、何だつて!?!」

全員ミドナの言葉を聞いて耳を疑った。

カモ

「兄貴、俺っちは見たぜ!」

ネギ

「見たつて何を?」

カモ

「あのガンドロフって奴が指を鳴らして、あの穴を出現させて何処かへ立ち去って行くのをな!」

全員

「ええっ!?!」

全員カモの言葉に驚愕する。

リンク

「まさか、あいつが……………」

ゼルダ

「信じられません……………」。

リンクとゼルダは今だに信じられないような表情を浮かべていた。

ミドナ

「…………とにかく、これで影の世界へ帰れるな。」

そう言いつと、ミドナは穴に近付こうとする。

リンク

「ミドナ…！」

ミドナ

「ん？何だ？」

ミドナはリンクに呼び止められて足を止める。

リンク

「その、あまり上手く言えないけど……………元気だな。」

ミドナ

「……………ああ、もう会う事も無いかもしれないが……………」

ゼルダ

「いいえ、そんな事ありません……………この世界の人々が影の世界の人々を受け入れてくれたら、いつか必ず光と影が共存出来ると私は信じています。」

ミドナ

「ゼルダ……………アンタって本当に良い人だな。」

ミドナはゼルダの言葉を聞いて微笑む。

ミドナ

「それに、お前達にも世話になった……………ありがとうな。」

ネギ

「い、いえ……………僕達は何も……………」

ネギはミドナに礼を言われて謙遜する。

ミドナ

「あーそれと……………もしガノンドロフに会ったら礼を言っておいてく

ね。」

リンク

「ああ……………一応会ったらな。」

ミドナの言葉にリンクは苦笑いしながら引き受ける。

ミドナ

「それじゃ……………さようなら。」

ミドナの頬に一滴の涙が伝わせて、穴の中へと入っていく。

シュウウウッ

すると、穴はそのままゆっくりと消えてしまふ。

ゼルダ

「……………行ってしまいましたね。」

リンク

「でも、またいつか会える……………俺はそう信じてます。」

リンクの言葉にゼルダはゆっくりと頷く。

ネギ

「ううっ……………僕、何か泣けてきちゃっう。」

のどか

「わ、私も……………」

木乃香

「ミドナちゃん、影の世界でも元気だな。」

明日菜

「もう、みんな涙目になっちゃって……………」

刹那

「そう言う明日菜さんこそ……………」

ネギー一行はミドナとの別れに涙目になっていた。

カモ

「兄貴、感動してるところで悪いんだけどよ……………姫さんにアレを渡した方がいいんでないかい？」

ネギ

「え……………あ！すっかり忘れてた！！」

そう言うと、ネギは慌ててゼルダに近付く。

ネギ

「ゼルダさん、これを受け取って下さい！」

ネギはゼルダにトライフォースのバッチを渡す。

ゼルダ

「まあ、素敵なバッチね……………どうもありがとう。」

ゼルダは嬉しそうにバッチを胸元に付ける。

明日菜

「あ！そう言えばガノンドロフにも渡さなきゃいけないんだよね？」

ネギ

「あ！そうだった……………どうしましょう！？」

ネギはこの状況に慌てふためくが……。

カモ

「兄貴、その事でしたら心配無用だぜ。」

ネギ

「えっ！？どうして?」

カモ

「俺っちがこっそりと奴の懐にバッチを付けておいたからな!」

ネギ

「そ、そうなの!？」

明日菜

「いつの間に……。」

全員カモの素早さに唖然とする。

木乃香

「ほなら、そろそろ帰るか。」

刹那

「そうですね。」

ネギー行はその場から立ち去ろうとした時……。

リンク

「みんな！」

ネギ

「えっ？」

ネギー行はリンクに呼び止められて、その場で足を止める。

リンク

「俺、君達を応援するから………頑張れよ！」

ネギ

「はい！ありがとうございます……！」

そう言つと、ネギー行はリンクに一礼して再び歩み始める。

「……やれやれ、何とも哀れな姿だ。」
?

「……?」

真ん中に池のような水溜まりがある神殿のような場所で、黒コート
の人物が倒れているザントを見て溜め息を零す。

ザント

「うっ……うっ……」。

すると、ザントが意識を取り戻す。

？

「ほお、まだ生きていたとはな………てっきり死んでたかと思った
ぞ。」

ザント

「お、おお………我が忠誠なる神よ………」。

ザントは黒コートの人物を見るなり、慌ただしくなる。

？

「無理をするな………まともに光の攻撃を受けたから魔力は殆ど残
っていない。」

ザント

「か、神よ……どうか私にもう一度魔力を……。」

ザントは動けない体を動かさそうとしながらも、黒コートの人物に懇願する。

？

「……いいだろう、お前にもう一度チャンスをやろう。」

ザント

「おお！あ、有り難き幸せ……。」

ザントは黒コートの人物の言葉を聞いて安心する。

？

「……ただし。」

パチッ

ニユルニユル……

ザント

「な、何だ!？」

黒コート的人物が指を鳴らすと、池の中から目を生やした真つ黒な触手が数本現れてザントの体に巻き付く。

？

「この夢幻魔神ベラムーの手足となつてな。」

ザント

「そ、そんな……………うわあああああつ！…！」

ザントは触手に巻き付けられたまま池の中へ引きずり込まれる。

？

「フツ、所詮奴はこの程度でしか役に立た無いという事だ……………」

そう言つと、黒コート的人物はその場から立ち去っていく。

第十五話 影の僭王との対決 (後書き)

見事大役を果たしたネギが次はどの世界へ行くのか……。

登場させてほしいキャラのリクエストはまだまだ募集してます！

第十六話　もう一人の緑衣の勇者　（前書き）

リンクの世界から帰って来たネギー一行が次へ行く世界とは？

第十六話 一人の緑衣の勇者

（大乱闘の館）

ネギー一行はリンクの世界から無事に帰還してきた。

ネギ

「只今帰りました！」

マスターハンド

「おお、やっと戻ってきたか……………少し遅かったから心配したぞ。」

明日菜

「まあ、今回も色々あって……………」

マスターハンド

「そうか……………とにかく、今日はゆっくり休みなさい。」

木乃香

「はい。」

全員館の自分達の部屋へ戻っていく。

（翌日）

ネギー一行はいつものように中庭へ集合していた。

ネギ

「皆さん、今日も頑張っ
て行きましょーうねー！」

のどか

「は、はいー！」

マスターハンド

「それでは、早速バツ
チを渡そーう。」

そう言うと、マスター
ハンドはネギにトライフ
ォースの形したバツチ
を渡す。

ネギ

「あれ？このバツチ
ってリンクさん達に渡
したやつと似てますね。」

マスターハンド

「ああ、そのバツチ
をリンクに渡してほし
いのだが……………」

木乃香

「ほえ？リンクはん
には前にちゃんと渡
したけど……………」

マスターハンド

「いや、このスマッシュブラザーズのメンバーの中にリンクという名前の人物は二人いるんだ。」

刹那

「……………それって、どういう意味ですか？」

ネギー一行はマスターハンドの説明を理解出来ずに首を傾げる。

マスターハンド

「そもそも『ゼルダの伝説』は『スーパーマリオ』と違って一つの物語が独立して成り立っている……………だから、リンクという名前の少年はそれぞれの世界で活躍しているんだ。」

699

明日菜

「うーん、よく分からないけど……………つまりリンクって名前の人はそれぞれの世界にいっぱい居るって事？」

マスターハンド

「そう理解してくれた方がいいだろう。」

ネギー

「では皆さん、そのもう一人のリンクさんに会いに行きましょう！」

そう言つと、ネギー行はワープ土管の中へ入っていく。

く大海原く

ベヨベヨベヨッ

ネギー一行がワイプ土管から出ると、海を渡っている大きな船の上だった。

刹那

「此処は……船の上のようですね。」

木乃香

「わゝ、辺り一面大海原やゝ。」

全員船から見える一面の海を眺めていると……。

？

「おい！お前ら何やってんだ！？」

全員

「！？」

ネギ達は声に驚いて後ろを向くと、数人の男達を取り囲んでいた。

ネギ

「あ、あの……………僕達は別に怪しい者では……………」。

？

「嘘つけ！俺ら海賊の船に忍び込んでおいてよく言っぜ！」

のどか

「か、海賊！？」

全員海賊と名乗る男の言葉に耳を疑った。

ネギ

「か、海賊って……………あの海の盗賊と呼ばれてる……………」。

明日菜

「も、もしかして……………本物？」

？

「ゴンゾの兄貴、この子らはどうやってこの船に侵入したんですか
ナ？」

ゴンゾ

「分からねえ……………とにかく、コイツらを引っ捕らえろ！」

海賊達

「おーっ!!」

ネギ

「そ、そんな……………」

?

「アンタ達、一体何を騒いでいるんだい？」

海賊達の後ろから、金髪で褐色の肌の少女が現れる。

ゴンゾ

「あ！テトラの姉貴……………実はコイツらがこの船に侵入してたんださあ。」

テトラ

「何だって?」

テトラという名の少女はゴンゾの言葉を聞いてネギ達を見つめる。

ネギ

「ぼ、僕達はただ……………リンクさんという人を捜してるんです。」

テトラ

「リンク？……………アンタ達はリンクの知り合いかい？」

ネギ

「えっ！？リンクさんを知ってるんですか？」

テトラ

「知ってるも何も、今この船にいるよ。」

明日菜

「じゃあ、早速会わせてほしいんだけど……………」

テトラ

「いいだろう……………ニコ、リンクを呼んできな！」

ニコ

「へい…！」

テトラはニコという名の小柄な男の子にリンクを呼びに行かせる。

ニコ

「おいリンク！姉貴が呼んでるぞ〜！」

ニコは船内に向かってリンクに呼び掛ける。

ガチャ

？

「う〜ん……………まだ眠いよ……………」

船内から金髪に緑色の服を来た少年が眠そうに猫のような大きな目を擦りながら出て来る。

ニコ

「早く来いよ！お前の知り合いがこの船に乗ってるよつだぜ。」

？

「え？知り合い？」

少年はニコの言葉に反応し、テトラ達の方へ駆け寄っていく。

テトラ

「リンク、遅かったじゃないか……まさかまた居眠りしてたんじゃないだろうね？」

リンク

「あ、いや……………」

リンクと呼ばれた少年はテトラの言葉に苦笑いする。

ネギ

「え？彼が……………」

明日菜

「まだ子供じゃない。」

木乃香

「歳もネギ君と同じ位やな。」

ネギ一行はリンクの姿を見て目を丸くする。

リンク

「あれ？テトラ、この子達は誰なの？」

テトラ

「だ、誰って……アンタの知り合いじゃないのかい？」

リンク

「いや、僕会った事も無いけど……。」

ゴンゾ

「おい坊主共！こりゃ一体どういう事だ？」

男達は再びネギ達を睨み付ける。

ネギ

「ま、待って！少しでも僕達の話聞いて下さい。」

ネギはリンク達にこれまでの経緯を説明した。

リンク

「……………そっか、僕達の為に色んな世界を旅をしてるんだ。」

木乃香

「そやで……………ところで君は今何歳なん？」

リンク

「え？僕は今12歳だけど……………」

刹那

「ネギ先生より2歳年上ですね。」

明日菜

「厳密に言えば、3歳上だけだね……………」

明日菜は苦笑いしながら訂正する。

ネギ

「えっと……………それじゃ、リンク君にもバッチを渡しておくよ。」

そう言つと、ネギはリンクにバッチ子を渡す。

リンク

「どうもありがとう。」

明日菜

「ところで、最近何か変わった事は無かった？」

リンク

「変わった事？うん……………」

リンクは腕を組んで考え込む。

リンク

「特に無いと思つけど……………」

？

「うむ、そう言えば……………」

突然右側のレンズが割れてる瓶底眼鏡を掛けた小柄な男が発言する。

テトラ

「何だいモッコ、何か心当たりでもあるのかい？」

モッコ

「いや、最近幽霊船がまた夜の海をさ迷っているという噂を聞きましてナ。」

リンク

「えっ！？ゆ、幽霊船ってまさか……………」

リンクとテトラはモッコの言葉を聞いて表情を凍らせる。

のどか

「ゆ、幽霊船ってあの幽霊を乗せているという船……………」

のどかは幽霊船という単語を聞いて怯える。

カモ

「兄貴、どうやらその幽霊船が怪しいな。」

ネギ

「そ、そうだね。」

リンク

「まさか、あいつが……………」。

テトラ

「そんな訳ないだろ？だって、あいつは前にリンクが倒したじゃないか。」

？

「リンク！」

リンク

「えっ？」

リンクは誰かに名前を呼ばれて辺りを見回す。

テトラ

「どうしたリンク？」

リンク

「いや、今誰かに呼ばれた気が……………」。

？

「リンク！」

リンク

「わっ！？」

突然リンクの目の前に、金色の羽根を生やした妖精が現れる。

木乃香

「あ、妖精や！」

リンク

「も、もしかして……………シエラ！？」

シエラ

「そうだよ！久しぶりだね。」

リンク

「シエラ！」

リンクは嬉しそうにシエラという名の妖精に抱き着く。

明日菜

「……………何だか、久しぶりに対面したって感じね。」

刹那

「そうですね。」

明日菜達はリンクとシエラを見て微笑ましくなる。

テトラ

「でも、どうしてシエラが此処に?」

シエラ

「そ、それは……………」

シエラはテトラの質問に少し暗くなる。

リンク

「どうしたの?」

シエラ

「ちょっと言い難いんだけど……………リンクがやつつけた夢幻魔神ベラムーが復活して、この世界で悪事を働いてるのよ。」

リンク&テトラ

「ええっ!?!」

リンクとテトラはシエラの説明を聞いて驚愕する。

リンク

「そ、そんな……………どうして……………」

シエラ

「私にも分からないわ、でも爺ちゃん……………じゃなくて海王様つみおはこの事に早く気付いて、リンクにこの事を伝えるようにって私に向かわせたの。」

714

テトラ

「そうだったんだ……………」

リンクとテトラはシエラの説明を聞いて俯いてしまう。

シエラ

「……………ところでリンク、この子達は?」

シエラはネギ達に近付いてリンクに質問する。

リンク

「え、えっとね……………ついさっき会ったネギ君と明日菜ちゃん達で……………」

ネギ

「それよりシエラさん、さっき言ってたベラムーとは何者なんですか？」

シエラ

「え、えっと……………ベラムーは私のいた世界で人間が持っている『フォース』という力を吸い取って、世界を支配しようと企んだ怪物よ。」

明日菜

「『フォース』って何？」

シエラ

「生命の誰もが必ず持っている力よ……………それを吸い取られた者は石になってしまうの。」

のどか

「い、石に……………」

ネギー一行はシエラの説明を聞いて一瞬凍り付く。

刹那

「あの、もう一つ質問があるのですが……………」。

シエラ

「何かしら？」

刹那

「先程おっしゃってた『私のいた世界』とはどういう意味でしょうか？」

シエラ

「ああ、その事ね……………実はこの世界の他にもう一つ世界があるの。」

木乃香

「もう一つの世界？」

全員シエラの説明を聞いて首を傾げる。

シエラ

「元々この世界と私や海王様のいる世界は行き来は出来ないんだけど、ベラムーはその二つの世界を幽霊船で行き来しているのよ。」

カモ

「成程、そのベラムーって野郎が今回の事件の元凶って訳か。」

ニコ

「わ〜！この動物喋ってる。」

ニコがネギの肩から顔を出してきたカモを興味津々に見ていると…

……。

？

「リンクさ〜ん！」

リンク

「え？今度は誰……。」

リンクが声がした方へ向くと、鳥のような翼を羽ばたかせる少女と葉っぱのようなプロペラを回転させてる葉っぱのお面を被った小柄の木（？）がこちらへ向かって飛んで来る。

リンク

「あーメドリ！ーそれにマコレも……………」。

リンクは二人の姿を見るなり元気に手を振ると同時に、メドリとマコレは船の上に着地する。

メドリ

「リンクさん、お久しぶりです。」

マコレ

「またお会い出来て嬉しいデス。」

リンク

「本当に久しぶりだね！……………ところで、急にどっしたの？」

メドリ

「そ、それが……………」。

メドリとマコレはリンクの質問に一瞬俯いてしまう。

リンク

「……………何かあったの？」

メドリ

「……………実は今日、久しぶりに竜の島へ帰ってきたのですが……………
そしたらヴァルー様やコモリ様を含む島の人々が……………一人残らず
石になっていたんです。」

リンク

「な、何だって!?!」

リンクはメドリの言葉を聞いて驚愕する。

マコレ

「私もデクの樹様へ会いに森の島へ帰って来たら……………デクの樹様
や仲間のコログ達が……………」

そう言つと、マコレは泣き出してしまつ。

テトラ

「まさか、全てベラムーの仕業だつて言つのか……………」

シエラ

「やっぱりベラムーは前よりもパワーアップしてゐるって事ね。」

リンク

「……………酷い、酷過ぎる。」

リンクは握り拳を震わせながら呟く。

シエラ

「あ！忘れてた……………海王様からこれを預かったの。」

そう言うと、シエラはリンクに剣と砂時計を渡す。

リンク

「これは……………『夢幻のつるぎ』と『夢幻の砂時計』？」

シエラ

「それらがないとベラムーを倒せないでしょ？」

リンク

「……………分かった！もう一度ベラムーを倒そう！」

リンクは剣を高く掲げながら言う。

シエラ

「……………リンクならそう言っと思った。」

テトラ

「でも、そのベラムーが今何処に居るんだろっ。」

リンク

「……………それが問題だね。」

明日菜

「ネギ、アンタの魔法で何とかならない？」

ネギ

「そ、そう言われましても……………」

全員この状況に困惑していると……………。

マロレ

「あ！そう言えば……………デクの樹様の前にこんな物が落ちてました。」

そう言っつと、マロレはリンクにマミップを見せる。

リンク

「これは……マップのやつだね。」

シエラ

「もしかしたら、何かの手掛かりになるかもしれないわ。」

テトラ

「リンク、早速開いてみなよ。」

リンク

「う、うん……。」

リンクはマコレが持ってたマップを開くと、全員マップに注目する。

木乃香

「……………これ、何て書いてあるん？」

ネギ

「……………読めませんね。」

テトラ

「どつやら、マップを解読しないと読めないらしいね。」

シエラ

「じゃあ、まずマップを解読しないと……………」。

リンク

「それだったら僕、マップを解読してる人に心当たりがあるんだけど……………」。

メドリ

「本当ですか！？それでしたら、早速その人の所へ……………」。

リンク

「そ、そうだね……………」。

リンクは何故か乗り気が無いように返事する。

シエラ

「どうしたの？あまり乗り気じゃないみたいだけど……………」。

リンク

「い、いや……………僕、その人がちょっと苦手で……………」。

明日菜

「苦手って、どっいっ風だっ。」

リンク

「何て言うか……ちょっと変わってるんだよね。」

テトラ

「何だ、そんな事が……とにかく、その場所へ向けて出航だ！」

海賊全員

「ウィーッスー!!」

テトラの掛け声に海賊達はそれぞれ配置に着く。

テトラ

「とここで、その場所はなんていうんだ？」

リンク

「えっとね……。」

くチンクル島く

ネギー行とリンク達は高いタワーが建っている小島へやって来た。

木乃香

「随分高い建物やな。」

刹那

「この塔以外は何もないようですね。」

テトラ

「リンク、本当にこの島にマップを解読してくれる人がいるのかい？」

リンク

「う、うん……。」

？

「お、おい！妖精さーん！！」

全員

「!?!」

全員声に反応して上を見上げると、タワーの頂上から全身緑色のタイツを着た男が元気良く手を振っていた。

シエラ

「あ、あの人？」

リンク

「そう、チンクルっていうんだけど……。」

チンクル

「あれ？今日は沢山連れて来たね……まあいいや、ちょっと待ってて！」

そう言つと、チンクルはタワーを梯子からゆっくりと降りてくる。

明日菜

「……ねえ、あの人で大丈夫なの？」

リンク

「だ、大丈夫……ちょっと変わってるけど、マップに関してはちゃんとやってくれるから……。」

チンクル

「よいしょっと！」

明日菜とリンクがひそひそ話をしていると、チンクルは梯子を降りて地面へ着地する。

チンクル

「妖精さん、ひょっとしてマップを解読してほしいんじゃない？」

リンク

「え！？な、何で分かったの？」

チンクル

「忘れたの？チンクルは何でもお見通しなんだぞ　ってね。」

シエラ

（に、似合わない……。）

明日菜

（何なのよ、この親父は……。）

カモ

（いい歳こいて何やってんだか……。）

全員チンクルの発言にどん引きする。

リンク

「そ、それなら早速マップを解読してくれる？」

チンクル

「いいよ……ただし、いつものように398ルピーね。」

明日菜

「えっ！？お金取るの！？」

チンクル

「勿論だよ、こっちだって商売だからね。」

テトラ

「ふうん、海賊相手に金を吹っかけようなんていい度胸してるじゃないか。」

そう言うと、テトラを含む海賊達がチンクルを睨み付ける。

チンクル

「……………き、今日は特別にタダで解説してあげてもいいよ。」

リンク

「ほ、本当に！？」

テトラ

（やじいー！）

テトラはこっそりとガッツポーズをする。

チンクル

「それじゃ、行くよ〜……………チンクル・チンクル・クルリンパツ！」

チンクルは陽気に跳び跳ねながら可笑しな呪文を唱える。

ネギ

「……………い、今のは何ですか？」

チンクル

「マップが読めるようにおまじないを掛けたんだよ」

カモ

「お、おいおい……………そんな可笑しなまじないでマップが読める訳が……………」

リンク

「あー！読めるようになってる。」

明日菜

「う、嘘!?!」

全員リンクが開いたマップに注目する。

木乃香

「ホ、ホンマや……。」

のどか

「さっきまで読めなかったのに……。」

明日菜

「まさか、さっきの可笑しな呪文の力？」

刹那

「そのようですね……。」

カモ

「あんな可笑しな呪文でも効果があるんだな……。」

ネギ

「あの人、意外と凄い人かも……色んな意味で……。」

ネギー一行はチンクルの凄さに唖然とする。

シエラ

「それより、マップには何て書いてあるの？」

リンク

「うーんとね……………何か島が記されてるようだけど……………えっ!？」

リンクはマップに記されている島を見て驚愕する。

テトラ

「リンク、この島って確か……………」

リンク

「うん、間違い無い……………この島は僕が生まれ育った島……………プロ
口島だよ。」

全員

「えっ!？」

リンクの言葉に全員耳を疑った。

リンク

「でも、ベラムーはどうしてプロロ島に……。」

メドリ

「そう言えば、ヴァルー様から聞いた事あります……。水の精霊であるジャブー様は魚の島が破壊されたので、そのままプロロ島へ移住されたと……。」

シエラ

「この世界の精霊達は海王様と同様に強大なフォースを持っている……だからベラムーは精霊達のフォースを狙ってるのね。」

リンク

「それでベラムーはジャブーのいるプロロ島に……。」

リンクはそのまま俯いてしまう。

テトラ

「みんな！プロロ島へ向けて出航するから急いで準備しな！」

海賊

「ウィーーツス……！」

海賊達はテトラの掛け声と共に準備を始める。

テトラ

「ほらリンク、いつまでも落ち込んでないで船に乗りな！」

バンツ！！

リンク

「わっ！？」

テトラは俯いてるリンクの背中をおもいきり叩く。

シエラ

「そうよ！今は君が頼りなんだからね。」

リンク

「う、うん……………」

リンクは痛そうに背中を摩りながら返事する。

ネギ

「リンク君、僕達も協力するから元気出して！」

リンク

「え？でも……。」

明日菜

「遠慮なんかしない！その為に私達はこの世界へやって来たんだから！」

バチィィン！！

リンク

「あうっ！？」

明日菜もおもいきりリンクの背中を叩く。

リンク

「あ、ありがとう………それにしても、さっきより痛かったなあ……」

リンクは再び背中を摩りながら船に乗り込む。

テトラ

「ゴンゾ！プロロ島へ向けて全速前進！！」

ゴンゾ

「ウィーッス！」

ゴンゾが舵かじを取ると、船が動き出して前進する。

チンクル

「妖精さ〜ん！今度はちゃんと金払ってね〜。」

チンクルは離れていく船に向かって叫ぶ。

リンク

（お婆ちゃん、アリル……………今行くからね。）

リンクは船の先端の上で妹と祖母の安否を心配する。

第十六話 一人の緑衣の勇者 (後書き)

ネギー行とリンク達は急いでプロロ島へ目指すが、果たしてこの後
どうなる!?

因みに、この『ゼルダの伝説・トウーンリンク編』はあまり長く続
かないと思いますので御了承下さい。

第十七話 海の男との再会 (前書き)

ネギー行とリンクは夢幻魔神ベラムーが向かってるプロロ島急いで
出航中………果たしてア Ril 達はどうなるのか？

第十七話 海の男との再会

（大海原）

ネギー行とリンクを乗せたテトラ海賊団の船はプロロ島に向かって
出航していた。

テトラ

「もつそろそろプロロ島が見えてくるよ！」

リンク

「お婆ちゃん、ア rilル……大丈夫かな？」

リンクは心配そうに海を眺めている。

木乃香

「大丈夫やて、きっと島のみんなも無事におるから。」

リンク

「あ、ありがとう。」

リンクは木乃香に慰められて少し元気を出す。

刹那

「……………ん？」

明日菜

「刹那さん、どうしたの？」

刹那

「……………急に雲行きが怪しくなってきました。」

刹那の言う通りに、突然空に暗雲が覆ってゆく。

のどか

「ほ、本当だ……………何だか怖い……………」

ネギ

「大丈夫ですよ、僕が皆さんを守りますから……………」

のどか

「ネギ先生……………」

のどかはネギの言葉にポクツと頬を紅く染める。

カモ

「兄貴ったら、今のカツコ良かったツスよ。」

ネギ

「えっ！？な、何が？」

ネギはカモの言葉が理解出来ずに困惑する。

ゴンゾ

「姉貴！島が見えてきましたぜ！」

全員ゴンゾの指さす方を見ると、遠くからプロロ島と思われる島と幽霊船らしき大きな船が船着き場へ止まっていた。

ネギ

「あれが……幽霊船。」

リンク

「もうプロロ島へ到着してる……。」

テトラ

「ゴンゾ！そのまま全速前進！！」

ゴンゾ

「ウィーッス！」

船はそのまま前進してプロロ島へ近付くと、船着き場へと船を止める。

シエラ

「ベラムーはこの村へ潜んでいるハズよ。」

テトラ

「それじゃ、みんなで手分けして捜すよ！」

海賊達

「ウィーッス！」

海賊達は一斉に船から降りる。

テトラ

「おっとー！ニコはいつものように留守番だよ。」

ニコ

「へっ!?ま、またオイラツが留守番ツスカ。」

ニコは少しがっかりしたように船へ戻る。

リンク

「メドリとマコレも船で留守番してて。」

マコレ

「え、でも……………」。

メドリ

「……………そうですね、私達がいても邪魔なだけですし。」

リンク

「いや、そついう訳じゃ……………」。

明日菜

「二人が危険な目に合わない為……………でしょ?」

リンク

「え?あ、そつそつ!」

明日菜の言葉にリンクは激しく頷く。

メドリ

「……………やっぱりリンクさんは優しいですね。」

マコレ

「リンク様、気をつけて下さいね。」

リンク

「うん、任せてー!」

そう言つと、リンクを含む全員がメドリとマコレとニコを船に残して島へ上がっていく。

ネギ

「もし何か見つけたら僕に連絡して下さいね。」

明日菜

「はいよー!」

テトラ

「アンタ達も何かあったらリンクか私に連絡するんだよ。」

海賊達

「ウィーッス！」

そう言いつつ、全員散らばって村中の搜索を開始する。

リンク

「あー！そっだ……………」。

リンクは何かを思い出したかのように一軒の家の中へ入っていく。

ネギ

「リンク君、どうしたの？」

ネギはリンクの後を追うように家の中へ入っていく。

「リンクの家」

リンク

「……………遅かったか。」

リンクは家の中にあつた女の子と老婆の姿の石を見て落胆する。

ネギ

「こ、これは……………」

シエラ

「まさか、この二人が……………」

リンク

「そう……………僕のお婆ちゃんと妹のアリルだ。」

リンクは石化してるア ril 達の前で膝を床に着ける。

ネギ

「……………リンク君、君の気持ちは痛い程分かる……………でも、今はベラムーを捜すのが先決だよ。」

カモ

（兄貴、どうやら六年前のあの事件を思い出したようだな。）

ネギが思い詰めたように語る様子を見て、カモは何かを察する

シエラ

「彼の言つ通りよ！ベラムーさえ倒せばきっと元に戻るわよ。」

リンク

「そうだね……………よし！ベラムーを倒してア ril 達を元の姿に戻そう
！！」

リンクは勢い良く立ち上がって宣言する。

シエラ

「そう、その意気よ！」

ネギ

「それでは、改めてベラムーを捜しに……………」。

？

「誰か中におるのか？」

突然家の中から白い髭を生やして槍を持った老人が入ってきた。

リンク

「あ！赤シャチの爺ちゃん。」

赤シャチ

「おお！リンクじゃないか……………最近見ない内にまた一段と遅たくましくなったのう。」

赤シャチという名前の老人はリンクを見て感心する。

シエラ

「リンク、このお爺さんは？」

リンク

「この人は赤シャチといって、島を出る前に僕に剣術を色々教えてくれたんだ。」

ネギ

「という事は、リンク君の師匠^{マスター}って事が……………」

ネギは感心しながら赤シャチを見つめる。

赤シャチ

「それよりリンク、一刻も早くこの村から出た方がいい……………怪物が村の連中を石に変えてしまったんじゃ。」

シエラ

「やっぱりベラムーがこの村を……………」

リンク

「……………爺ちゃん、その怪物が何処に居るか分かる？」

赤シャチ

「確か何者が森の方へ向かってくのを見たが……………まさか、今からその怪物を退治しに行くつもりじゃ……………」

リンク

「勿論だよ、アイルやお婆ちゃんや島のみんなを助ける為にね！」

赤シャチ

「……………そうか、それならワシからは何も言わんが、気をつけるんじゃないぞ。」

リンクが赤シャチの言葉に強く頷いた時……………。

のどか

「きゃーっ!!！」

突然家の外からのどかの叫び声が聞こえてきた。

ネギ

「の、のどかさん!?!」

カモ

「外で何かあったんだ!」

リンク

「行ってみよう!」

くリンクの家の前く

ネギ

「あつ!？」

全員家の外へ出ると、明日菜達が大きな剣を持って鎧を着たモンスターと闘っていた。

リンク

「コイツら、海王の神殿にいた……………」

シエラ

「ファントムよ！きつとベラムーが引き連れてきたのね。」

そう言うと、二体のファントムが駆け寄ってくる。

赤シャチ

「リンク！コイツらはワシが相手をする……………お前は急いで森へ行け！」

リンク

「で、でも……………」

赤シャチ

「いいから早く行け！！」

リンク

「……………分かった、行こうネギ君！」

ネギ

「うん！……………明日菜さん達も此処をお願いします！！」

明日菜

「OK！」

刹那

「ネギ先生もお気をつけて！」

ネギとリンク&シエラはそのまま森の方へ駆け出していく。

く森の奥く

ネギとリンクは森の中でベラムーを捜していた。

シエラ

「大分奥まで入ったけど、何処にベラムーが潜んでいるか分からないから注意してね。」

カモ

「兄貴も注意しろよ。」

ネギ

「わ、分かってるよ。」

ガサガサッ

リンク

「誰だ!？」

リンクは突然動き出した草むらに警戒しながら身構える。

？

「お、おい待て！俺は怪しいモンじゃねえよ！」

草むらから赤いスカーフに青い服を着た男が両手を上げながら出て来る。

シエラ

「え？も、もしかしてアンタ……………」

リンク

「ラインバックー！」

リンクとシエラはラインバックという男の姿を見て思わず声を上げる。

ラインバック

「……………って、子供じゃねえかよ。」

ラインバックはリンク達の姿を見るなり態度を変える。

ネギ

「この人、リンク君の知り合い？」

リンク

「うん、前に一緒に冒険した事があって……。」

ラインバック

「は？ちよつと待てよ！俺はお前みたいな小僧なんか知らないぜ。」

リンク

「え……………」

リンクはラインバックの言葉を聞いて耳を疑う。

シエラ

「リンク、この世界のラインバックは前に私達と冒険したラインバックじゃないの……………だから私達の事なんて分からないのよ。」

リンク

「そ、そうなんだ……………」

リンクはシエラの言葉を聞いて肩を落とす。

ネギ

「と、とここでラインバックさんはこの森で何をしてるんですか？」

ラインバック

「な、何って……この島に財宝があるって聞いたから探してたんだよ。」

シエラ

(この世界のラインバックも財宝を探してるのね……………。)

シエラはラインバックの言葉を聞いて苦笑いする。

ネギ

「この森は危険です！急いで森から出た方が……………」

テトラ

「リンク！応答してくれ！！」

リンク

「テ、テトラ！？」

突然聞こえてきたテトラの声に驚いて全員辺りを見回す。

ラインバック

「な、何だ！？何処から声が……………」

リンク

「もしかして……………」

リンクは懐から青く光り輝く石を取り出す。

シエラ

「それは？」

リンク

「これはテトラが僕に預けてくれた『海賊のお守り』……………これがあれば遠くにいるテトラと話が出るんだ。」

カモ

「へえ、まるで兄貴の『仮契約カード』みてえだな。」

カモは『海賊のお守り』を見て感心する。

テトラ

「リンク、早く来てくれ！ベラムーがみんなを……………うわっ！！」

リンク

「テトラ！一体どうしたの！？応答して！！」

ネギ

「ま、まさか……………」

？

「早く村へ戻れ。」

全員

「！？」

全員声がした方を向くと、草むらから黒コートの人物が立っていた。

ネギ

「あ、貴方は……………」

ラインバツク

「こ、今度は何だ？」

リンク

「お前は何者だ！？」

リンクは黒コート的人物に剣を向ける。

？

「私の事より、急いで村へ戻った方がよいのではないか？」

ネギ

「うっ………リンク君！急いで村へ戻ろっ！！」

リンク

「う、うん！」

そう言うと、ネギとリンクは急いで森から出ていく。

ラインバツク

「お、おい！俺様を置いてくなよ！！」

ラインバツクも慌ててリンク達の後を追いかける。

？

「その意気だ………サウザンドマスターの息子よ。」

スッ

黒コートの人物はその場から姿を消す。

く村の中心く

リンク

「ハアハアツ……………」
「これは!?!」

ネギ

「そんな……………」

ネギとリンクの目に写ったのは、ベラムーにフォースを吸われて石化した明日菜達やテトラ海賊団や赤シャチの姿だった。

リンク

「テトラ!赤シャチの爺ちゃん!それにみんなも……………」

ネギ

「明日菜さん……………木乃香さん……………刹那さん……………それにのどかさんまで……………」

ネギは石化した明日菜達を見て落胆する。

カモ

「酷えな……………これじゃあまるで修学旅行の時みたいだぜ……………」

シエラ

「あーあれを見て!!」

シエラの声に反応して海の方を見ると、幽霊船が島の反対方向へ向かっていった。

リンク

「きつと島の裏側にいるジャブーを狙ってるんだ!」

シエラ

「大変!急いで止めなきゃ……………」

リンクがテトラの海賊船に向かって走り出そうとした時……………。

カモ

「待ってくれ!ネギの兄貴が……………」

リンク

「えっ?」

リンクはカモに呼び止められて振り向くと、ネギが下へ俯いたまま

意気消沈していた。

ネギ

「……………僕、のどかさんに『絶対守る!』って約束したのに……………僕は誰一人守れなかった……………」

カモ

「兄貴! 気持ちは分かるけど、今はベラムーの野郎をやつつけるのが先決だろ!？」

リンク

「そうだよネギ君! それに僕が石になったアシル達を見て落ち込んだ時に励ましてくれたのは君じゃないか! 僕を励ましてくれたさっきの君は何処へ行ったのさ!？」

ネギ

「カモ君、リンク君……………」

ネギはカモとリンクの言葉を聞いて、ゆっくりと顔を上げる。

ネギ

「ごめん、もう大丈夫……………カモ君やリンク君の言う通りに、ベラムーを倒して明日菜さん達を元の姿に戻そう!！」

カモ

「そつだ！それでこそ兄貴だぜ！！」

リンク

「それじゃ、早速船へ乗り込んで……………」

ラインバック

「うおっ！何じゃこりゃ！？」

リンク達が船に乗り込もうとした時、ラインバックが石化した明日菜達を見て腰を抜かす。

ラインバック

「一体この島は何々だ……………早いところずらかった方がいいな。」

そう言うと、ラインバックはテトラの海賊船とは反対側の船着き場に止めてある小さな船へ乗り込む。

シエラ

「……………そつだ！ラインバックの船で幽霊船を追いかけてましょ。」

リンク

「えっ！？でも……。」

シエラ

「大丈夫、私に任せて！」

リンク

「……………分かったよ。」

そう言うと、全員ラインバックの船へ乗り込む。

ラインバック

「お、おい！勝手に俺様の船に乗ってんじゃねえよ！」

ネギ

「お願いします！この船で幽霊船を追いかけ下さい！」

ラインバック

「はあ！？ふざけるな！何で俺様がそんな事を……………。」

シエラ

「あら残念、その幽霊船には財宝がいっぱい積んであるのに……………。」

ラインバック

「何！？財宝だと？」

ラインバックはシエラの言葉に耳を傾けた。

ラインバック

「……………おい！その幽霊船は今何処に居る？」

リンク

「え？こ、この島の反対側だけど……………」

ラインバック

「よっしゃー！財宝を乗せた幽霊船に向かって出航だー！！」

ネギ

「う、嘘……………」

カモ

「……………随分あの親父の扱いが上手いな。」

シエラ

「まあね。」

ザッパリーン

全員ラインバックの態度の変化に啞然としていると、ラインバックの船がプロロ島の反対側へ向けて出航する。

（プロロ島の反対側）

リンク

「そろそろ反対側まで来たと思うけど……………」。

ネギ

「あっ！見つけた！！」

ネギの指さす方を見ると、幽霊船が島の洞穴へ入ろうとしていた。

リンク

「マズイ！あの穴の中にはジャブーが……………」。

シエラ

「ラインバツク！大砲を発射させて！」

ラインバツク

「何だと！？そんな事したら船が壊れて、財宝が海に沈んじまうじやねえか！」

シエラ

「いいから早くー!!」

ラインバック

「……………チツ!こつなりや焼け糞だー!!」

ドンー!ドンー!ドンー!

ラインバックは幽霊船に向けて大砲を発射させる。

ボガアーーーン!!

すると、大砲の弾が全て幽霊船に命中して沈没する。

カモ

「やった!幽霊船が沈んでいくぜ。」

ラインバック

「あゝあ、財宝も沈んでいく……………」

ラインバックは沈没する幽霊船を見て肩を落とす。

ネギ

「ん？あそこに誰がいる……………」。

ネギの指さす方を見ると、船の残骸の上に何者かが立っていた。

シエラ

「もしかしてベラムーかもしれないわ。」

リンク

「よし、あそこまで行ってみよう！」

ネギ

「それなら、僕の杖に乗って。」

ネギが杖に跨がると、リンクも一緒に杖に跨がる。

リンク

「乗ったよ。」

ネギ

「それじゃ、しっかり掴まってね！」

ビュッッー!!

リンク

「わー！飛んだ飛んだー!!」

ネギの杖はリンクを乗せて船の残骸に向かって飛び立つ。

ラインバック

「……………な、何かよく分からんが、俺様はズラからせてもらっぜ。」

そう言うと、ラインバックは船の進路を変えて、その場から去ろうとする。

ラインバック

「……………。」

ところが、ラインバックの船はそのまま動きを止める。

く幽霊船の残骸く

リンク

「よいしょっと！」

ネギとリンクは何者かが立っている船の残骸の上へ着地する。

シエラ

「可らしい……さつきから微動だにしないわ。」

リンク

「何か怪しいな……。」

カモ

「お、おい兄貴……まさかあいつは……。」

ネギ

「う、うん……でも、どうして……。」

ネギとカモはリンク（トワイライトプリンセス）の世界で倒したハズのザントの姿を見て驚愕する。

リンク

「ネギ君、どうかしたの？」

ネギ

「い、いや……。」

ザント？

「……っ……っ……」

突然ザント両手に剣を出して、勢い良く回転しながらネギ達に向かって突っ込んでくる。

ネギ

「!?!」

リンク

「危ない!?!」

ネギとリンクは咄嗟にザントの攻撃を避ける。

ザント?

「……………ハアハアツ。」

しばらくすると、ザントが攻撃を止めてネギ達に背を向けて息を切らす。

シエラ

「リンク!あいつの背中に……………」

リンク

ザントはネギ達の方を向いて、真っ赤な光弾を連射させる。

リンク

「また来た!!」

ネギ

「風花・風障壁!!」

リンクは盾を取り出して、ネギは障壁魔法でザントの攻撃を防ぐ。

ネギ

「リンク君、どうやってたらベラムーを倒せるの?」

リンク

「えっとね、この『夢幻の砂時計』でベラムーの動きを止めて、
『夢幻のつるぎ』で突き刺せば……。」「

ザント?

「とりゃーっ!!」

ガシャーーン!!

リンク
「うわっ!？」

リンクが懐から『夢幻の砂時計』を出した瞬間、ザントの放った光弾が『夢幻の砂時計』に命中して粉々に砕け散る。

リンク

「あーっ!？」『夢幻の砂時計』が……………」

シエラ

「これじゃ、ベラムーの動きを止められないわ!」

ネギ

「……………大丈夫、僕が敵の動きを封じてる隙に攻撃すれば倒せるよ。」

そう言うと、ネギはザントに向かって駆け出していく。

リンク

「ネ、ネギ君!？」

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………魔法の射手・戒めの

風矢！！」

ズバアアアッ！！

ネギはザントに向けて拘束魔法を放つが……………。

ピョーン

ネギ

「あっ！？」

ザントは高くジャンプしてネギの魔法を避ける。

ザント

「とじしゃりしゃりしゃりしゃりしゃりしゃりしゃりしゃりしゃり……」

……シビビビビビビビビビビ……

ネギ

「くわああっ……」

ザントが空中から連射した光弾が全てネギに命中する。

リンク

「ネギ君！大丈夫！？」

リンクが慌ててネギに近付こうとした時……………。

ガシッ！！

リンク

「うぐっ！？」

ザントがリンクの首を掴み上げる。

ネギ

「うう……………リンク君……………」。

ネギがゆっくりと立ち上がった時……………。

シュルシュル……………

ネギ
「むぐっ!？」

ベラムー本体から目玉を生やした真っ黒な触手が伸びて、ネギの首に巻き付いて締め付ける。

カモ
「あ、兄貴!？」

シエラ
「リンク!しっかりして!！」

ネギ
「うぐぐぐ……。」「

リンク
「く、苦しい……。」「

ネギとリンクがザントとベラムーによって苦しんでいると……。

ドガアーーン!！」

リンク
「わっ!!」

突然ザントの前に大砲の弾が命中して、ザントとリンクは衝撃で吹っ飛ばされてしまう。

ネギ
「うっ……………ゲホッゲホッ！」

ネギも触手から解放されて咳込む。

カモ
「兄貴！大丈夫か!？」

ネギ
「う、うん……………何とかね……………」

シエラ
「リンクも平気!？」

リンク
「あ、ああ……………でも、一体誰が攻撃を……………」

ラインバック

「イヤッハー！どんなもんだい！！」

遠くからラインバックが船の上で歓喜を上げながら跳びはねていた。

リンク

「ラ、ラインバック？」

シエラ

「あいつ……………」

リンクとシエラは信じられないような表情でラインバックの船を見つめる。

ザント

「つ……………つ……………」

ザントは頭を抱えながら立ち上がるつとす。

ネギ

「魔法の射手・戒めの風矢！！」

ギユルギユルギユル!!

ザント

「むっ!?!」

すると、ネギが素早く拘束魔法でザントの動きを封じる。

ネギ

「リンク君!今の内に攻撃を……………」

リンク

「わ、分かった!」

リンクは急いでザントの後ろへ回り込む。

リンク

「たぁーっ!」

ザシュッ!!

リンクは『夢幻のつるぎ』でザントの背中ごとベラムーを突き刺す。

ザント

「ぎゃあああっ……！」

グシヤッ……！！

ザントの断末魔の叫び声と共に、ベラムーがザントの背中から離れる。

サラサラッ……

すると、ベラムーは宙に浮いたまま砂のように溶けていく。

バタッ……！！

スウウッ……

ザントが倒れた瞬間、そのままゆっくりと消滅する。

リンク

「か、勝った……………」

ネギ

「これで明日菜さん達も元に戻るね……………」

ラインバック

「おい、お前ら〜！」

ラインバックがネギ達の居る場所まで船を近付ける。

ラインバック

「まったく、俺様がいなかったらお前ら絶対にやられてたぜ？」

リンク

「……………ラインバック、どうして僕達を助けてくれたの？」

シエラ

「そうよ、普段のアンタだったら怖くて逃げ出すのに……………」

ラインバック

「ば、馬鹿言つな！……………そりゃあ、確かに普段の俺様なら逃げ出してたところだけどよ……………何故かお前を放っておく事が出来なくて、無我夢中でお前を助けたいと思ったんだよ。」

シエラ

「ラインバック……。」

リンクとシエラはラインバックの言葉を聞いて微笑む。

リンク

「本当にありがとう、お蔭で助かったよ！」

ラインバック

「フ、フン！いいからさっさと船に乗れよ！」

ラインバックは笑顔でお礼を言うリンクを見て真っ赤になって照れる。

ネギ

「それでは、お言葉に甘えて……………」

リンク

「お邪魔します！」

ラインバック

「よし、全員乗ったな………それじゃ、村の方へ戻るぞー！」

ザッパーン!!

ラインバックの船はプロロ島の表側を目指して出航する。

くプロロ島・村の中心く

ネギ

「……………皆さん、僕は『皆さんを守る』って約束したのに、誰一人守る事が出来なかった……………本当にすいません！」

ネギは元の姿に戻った明日菜に向かって深く頭を下げる。

明日菜

「……………何言ってるのよ！」

バシンッ！！

ネギ

「あつっ！？」

明日菜はネギの背中をおもいつきり叩く。

明日菜

「確かに私達は危険な目に遭ったけど、アンタは結果的に私達を守

つてくれたじゃない。」

木乃香

「そやで、ネギ君がおらんかったらウチらは今頃どうなってたか……。」

刹那

「そうですね、今の私達がいるのもネギ先生のお蔭なんです。」

のどか

「ネギ先生……本当にありがとうございます！」

ネギ

「み、皆さん……。」

ネギは明日菜達の温かい言葉に涙を浮かべる。

シエラ

「……リンク、そろそろお別れだね。」

リンクとシエラは浜辺でお互いに見つめ合っていた。

リンク

「シエラ、君のいた世界へもう帰っちゃうの？」

シエラ

「ええ、海王様が心配するし……………」

リンク

「……………ねえシエラ、僕達また会えるよね？」

シエラ

「も、勿論よ！きっと……………きっとまた会えるわ。」

シエラは涙声でリンクの質問に答える。

リンク

「そっだよね……………シエラ、また会おうね。」

シエラ

「ええ、また会いましょう……………じゃあ、さようなら。」

シエラはそのまま水平面に向かって飛んでいく。

メドリ

「リンクさん……私達もそろそろ行きますね。」

マコレ

「機会があったら、いつでも会いに来て下さいね。」

リンク

「……………うん！二人共、元気でね！」

メドリとマコレもそれぞれ飛行して去っていく。

ラインバック

「……………さてと、湿っぽくなってきたから俺様も行くとするか。」

そう言うと、ラインバックは自分の船に乗り込む。

ラインバック

「リンク、お前とはまた会える気がする……………今度は何処かの海で会おうぜ！」

リンク

「うん、またね！」

バッシャーーン

ラインバックの船はそのまま真っすぐ進んでいく。

？

「お兄ちゃん！！」

リンク

「えっ？」

リンクが声がした方を向くと、妹のアリルとお婆ちゃんがリンクに向かって手を振っていた。

リンク

「アリルー！お婆ちゃん！！」

リンクはアリル達がいる所まで駆け出していく。

アリル

「お兄ちゃん、会いたかったよ！」

アリルは嬉しそうにリンクに抱き着く。

お婆ちゃん

「おお、リンク……………最近見ない間に随分大きくなったのお。」

リンク

「そ、そうかな?」

リンクはお婆ちゃんという言葉に苦笑いする。

テトラ

「リンク、今日一日は家族と一緒にいてあげな。」

リンク

「えっ!?!いいの?」

テトラ

「ああ、こんな機会は滅多に無いからね。」

アリル

「わ〜い!今日一日お兄ちゃんといっぱい遊べるんだ〜!」

ア ril は跳びはねながら喜ぶ。

お婆ちゃん

「それなら、今夜はリンクの為に特製スープを作っておくからね。」

リンク

「お婆ちゃん……………」

リンクはお婆ちゃんの優しさに涙を浮かべる。

テトラ

「さて、私たちは明日の出航に備えて色々準備をするよ！」

海賊達

「ウィーッスー!!」

そう言いつと、テトラと海賊達は海賊船に向かって歩き出す。

リンク

(テトラ、ありがとう……………)。

リンクは去っていくテトラを見つめる。

アリル

「お兄ちゃん、早く遊ぼうよー!」

リンク

「え?あ…………よし、今日はいっぱい遊ぼう!」

アリル

「わーい!」

ネギ

「……………皆さん、僕達もそろそろ帰りましょうか。」

明日菜

「そうね、この世界はもう大丈夫みたいだし。」

木乃香

「それに、だんらん家族団欒を邪魔したらアカンな。」

刹那

「それでは、参りましょう。」

そう言いつと、ネギー行はこの世界を後にするのであった……。

第十七話 海の男との再会 (後書き)

今回はこれにて『ゼルダの伝説 トウーンリンク編』は完結します！

次回をお楽しみに！

第十八く 絶体絶命の本屋く (前書き)

『マリオ』・『ドンキーコング』・『ゼルダの伝説』の世界を巡ったネギ達が次へ向かう世界とは……？

第十八 絶体絶命の本屋

大乱闘の館・中庭

リンク（トウイン）の世界から帰って来たネギ一行は丸一日休んで朝早くからいつものように中庭に集合していた。

ネギ

「皆さん！今日も頑張りましょう！！」

木乃香&のどか

「はい！」

マスターハンド

「今回は稲妻の形したバッチをサムスという人物に渡してほしい。」

ネギ

「え〜と……………あ！これですね。」

ネギは懐から稲妻を象ったバッチを取り出す。

マスターハンド

「それと今回は、ちょっとした対策の為にある事をする……………ハッ
！」

カツ！！

明日菜

「わっ！？何？」

マスターハンドは手の平から光線を放って、ネギ達に浴びせる。

刹那

「い、今のは何ですか？」

マスターハンド

「これから君達が行く世界は宇宙が舞台なのだ……………だから、それ
に適応出来るようにした。」

のどか

「う、宇宙ですか？」

ネギ達はマスターハンドの言葉に耳を疑った。

木乃香

「宇宙かぁ……………ひょっとしたら宇宙人に会えるかもな。」

カモ

「おいおい、兄貴のクラスメイトに火星人がいたじゃねえか……………」

「

カモは聞こえないように木乃香にツッコミを入れる。

ネギ

「とにかく、今回は宇宙という事で今まで以上に気をつけて行きましよう！」

そう言つと、ネギー一行はワープ土管へ入っていく。

く惑星ゼーベースく

ビョビョビョッ

ネギー一行は夜みたいに薄暗くて、地形が岩盤で覆われた星へやって来た。

明日菜

「……………何だか薄暗いわね。」

ネギ

「今は夜なんですか？」

刹那

「いえ、空の周りには太陽が無いようなので普段からこんな感じだと思われます。」

木乃香

「という事は、此処はいつも夜みたいに薄暗いんかな？」

のどか

「何かちょっと嫌ですね……………」

カモ

「お！？ありや何だ？」

カモが指さす方を見ると、遠くに要塞のような建物がそびえ立っていた。

明日菜

「……………見るからに怪しいわね。」

ネギ

「取り合えず、あそこまで行ってみましょう！」

そう言いつと、ネギー一行は要塞に向かって歩き出す。

〈要塞付近〉

ネギ一行は要塞の近くまでやって来た。

木乃香

「やっぱり近くで見ると大きいなあ。」

明日菜

「そりゃそうでしょ、あんなに遠くから見ても大きく見えたんだもの……………」

のどか

「……………あれ？」

ネギ

「のどかさん、どうかしましたか？」

のどか

「な、何かがこっちに近付いて来ますけど……………」

のどかが指さす方を見ると、クラゲのような姿に下部から四つの牙が生えた物体が浮遊しながらこちらへ近付いてくる。

明日菜

「な、何！？あのクラゲみたいな物体は……。」

ネギ

「も、もしかしてエイリアンじゃ……。」

刹那

「どちらにせよ味方ではないようですね……斬岩剣……！」

スパアーン！

刹那が夕風で謎の物体を真っ二つに切り裂いた時……。

グニャ〜ツ

のどか

「きゃあっ!?!」

謎の物体の中からゼリーのような液体が溢れ出てきて、のどかに覆い被さるかのように掛かる。

明日菜

「ちよっと本屋ちゃん！大丈夫!?!」

のどか

「は、はい……………何とか無事です……………」

カモ

「おりよ！？あれ見てみるよ！」

カモが指さす方を見ると、先程刹那に切り裂かれた謎の物体がどんだん元の姿へ再生していく。

ネギ

「こ、これは!?!」

刹那

「再生している……………」

明日菜

「こんなのアリ〜!?!」

ネギ達が謎の物体の再生能力に驚愕している中、完全に再生した謎の物体はネギ達に牙を剥き出したまま勢い良く向かって来る。

？

「伏せて!!」

ネギ

「えっ!?!」

ブワアアッ!!

明日菜

「わっ!?!危なっ!!」

ネギ達は何者かの声に従って慌てて伏せると、冷気のようなビームが謎の物体を包む。

カチカチカチ……………

すると、謎の物体はどんどん凍り付いていく。

？

「ミサイル発射!」

ドンッ!

ボガアーーン!!

更にミサイルが発射されて、凍り付いた謎の物体は破壊される。

明日菜

「……………何か、あつという間に片付いたって感じね。」

刹那

「え、ええ……………」

?

「貴方達、怪我は無い？」

ネギ達の背後から真つ赤な鎧やヘルメットを着用した人物が近寄ってくる。

カモ

（何だコイツ？まるでロボットみてえな成りだな。）

カモは目を丸くさせながら謎の人物を見つめる。

ネギ

「は、はい！……それより、危ないところを助けて頂いてありがとうございます！」

ネギは謎の人物に向かって深く頭を下げる。

？

「どう致しまして……それより、貴方達はこんな危険な星で何をしていたの？宇宙服も着てないし、何の装備もしないで……。」

ネギ

「あ、僕達はですね……。」

のどか

「……………」。

バタッ！

ネギが説明しようとした時、突然のどかが倒れてしまう。

ネギ

「の、のどかさん！？」

ネギは慌ててのどかに近付く。

ネギ

「のどかさん！どうしたんですか！？しっかりして下さい！…」

のどか

「うう………な、何か………熱い………です。」

明日菜

「わっ！？本屋ちゃん凄く熱くない！」

明日菜はのどかのおでこに手を当てると、あまりの熱さに手をおでこから離す。

？

「とにかく、私の宇宙船へ運びましょう。」

ネギ

「は、はい…」

くスターシップ内部く

ネギー一行は謎の人物が所有する宇宙船の中へのどかを寝かせていた。

のどか

「ハア……ハア……。」

ネギ

「のどかさ……。」

ネギは少し息を荒くして眠っているのどかを心配そうに見つめる。

木乃香

「それにしても、急にどないしたんやろ？」

カモ

「ひょっとして、最近流行ってるインフルエンザじゃ……。」

明日菜

「ま、まさか……。」

？

「どっ？彼女の容態は……。」

明日菜達が話をしていると、先程の人物がやって来る。

ネギ

「今は何とか落ち着いたようです。」

？

「そう、それは良かった……………」

謎の人物はのどかの容態を聞いて安心する。

カモ

「兄貴、のどか嬢ちゃんがこんな状態じゃあサムスって奴を捜せねえな……………」

ネギ

「そ、そうだね……………」

？

「……………あら、それだったら捜す必要は無いわ。」

ネギ

「えっ？」

ネギ達が謎の人物の言葉に耳を傾けると、謎の人物はヘルメット部分を外す。

？

「私が貴方達のお捜しのサムス・アランよ。」

ネギ

「えっ！？あ、貴方がサムスさん？」

ネギ達はサムスと名乗る女性の金髪碧眼な素顔を見て驚愕する。

明日菜

「じよ、女性だったんだ……………」

カモ

「しかもスゲー美人だな。」

全員サムスを美しさに見とれる。

ネギ

「え、えっと……………早速ですが、お話があります。」

ネギはサムスにこれまでの経緯を説明する。

サムス

「……………成程、マスターに頼まれて色んな世界を巡ってるのね。」

ネギ

「はい……………それから、このバッチを渡しておきますね。」

ネギはサムスに稲妻を象ったバッチを渡す。

サムス

「どうもありがとう。」

のどか

「ううっ……………ゲホッゲホッ!!」

ネギ

「のどかさん!?!」

ネギは突然激しく咳込むのどかに近付く。

ネギ

「大丈夫ですか?のどかさん……………。」

のどか

「ハアハアツ……………」

ネギが呼び掛けると、のどかは静かに息をする。

刹那

「本当にどうしたんでしょうか？」

サムス

「……………ねえ、この世界へ来てこの子に何か変わった事は無かった？」

明日菜

「そう言えば……………刹那さんがあのクラゲみたいな奴らを斬ったら、変なゼリーみたいな液体が本屋ちゃんに覆いかぶさってきて……………」

サムス

「ゼリーみたいな液体？まさか……………」

サムスは明日菜の言葉を聞いて考え込む。

ネギ

「何か心当たりがあるんですか？」

サムス

「ええ、恐らく彼女はXに寄生えいぐすされてるかもしれないわ。」

刹那

「X？」

ネギー一行は『X』という単語に耳を傾ける。

サムス

「Xは簡単に言うと寄生生物の一種で、他の生物の体内に侵入して補食しながら殺害していくの。」

明日菜

「じ、じゃあ……………本屋ちゃんは……………」

サムス

「ええ、このまま放っておくと彼女は死んでしまっわ。」

ネギ

「そ、そんな……………」

ネギ一行はサムスの言葉を聞いて意気消沈する。

木乃香

「ほ、ほならウチの力で……………」

カモ

「駄目だ……………木乃香姉さんの力じゃ、のどか嬢ちゃんの病気を治せても寄生生物自体を殺す事は出来ねえ。」

木乃香

「そ、そうなんや……………」

木乃香はカモの説明を聞いて肩を落とす。

刹那

「私のせいだ……………私がああ物体を攻撃しなければ宮崎さんは……………」

明日菜

「そんな……………刹那さんのせいじゃないわよ。」

木乃香

「明日菜の言う通りや、自分を責めたらアカンよ。」

明日菜と木乃香は自分を責める刹那を励ます。

ネギ

「サムスさん、のどかさんを救う方法を教えてください！」

ネギは少し取り乱しながらサムスに懇願する。

サムス

「お、落ち着いて………実は私も前にXに寄生させて命の危機に陥ったけど、ベビーマトロイドのワクチンが投与されて一命を取り留めたの。」

ネギ

「ベビーマトロイド？」

サムス

「さっき貴方達に襲い掛かってきた物体の名称よ………ベビーマトロイドはそのメトロイドの赤ちゃんのようなものね。」

明日菜

「じゃあ、そのベビーマトロイドのワクチンさえ手に入れば本屋ち

「やんは助かるのね。」

木乃香

「せやけど、そのワクチンは何処で手に入れるん？」

刹那

「そこが問題ですね……………」

全員これからどうすればいいか考えていると……………。

？

「何を考えているんだ？レディー！」

全員

「!?!」

ネギー一行は突然聞こえてきた声に驚きながら辺りを見回す。

サムス

「アダムつたら、突然声を出したから彼らが驚いてるじゃない。」

アダム

「そうか、それはすまなかった……………」

サムスは呆れたように操縦席の画面に向かって話す。

ネギ

「あ、あのサムスさん……………今の声は一体誰なんですか？」

サムス

「ああ、紹介するわ……………今喋ったのは、このスターシップの知能コンピュータのアダムよ。」

アダム

「諸君、宜しく。」

ネギ

「こ、こちらこそ……………」

ネギは思わず画面に向かって頭を下げる。

アダム

「それより、ベビーマトロイドについてだが……………この惑星ゼーブスの中枢であるツーリアンに保管されている可能性が高い。」

ネギ

「えっ！？本当ですか？」

ネギはアダムの言葉を聞いて耳を傾ける。

サムス

「ちよつと待って、どうして言い切れるの？」

アダム

「よく考えてみる、先程彼らはメトロイドの大群に襲われたんだ………だったら、ベビーメトロイドがいても可笑しくないだろ？」

刹那

「成程………確かに、最低でも一匹位いても可笑しくくないですね。」

全員アダムの説明に納得する。

サムス

「それだったら、急いでゼーベスの中枢へ向かわないと………。」

アダム

「おっと！その前にデーン提督から通信が来てるぞ。」

サムス

「えっ！？デーン提督から？」

サムスはアダムの言葉に耳を疑った。

アダム

「早速通信を繋げるぞ……………」

デーン

「……………サムス、聞こえるか？」

サムス

「は、はい！よく聞こえます。」

デーン

「突如復活した惑星ゼーベスの破壊の件についてだが……………」

ネギ

（えっ？破壊って……………」

ネギはデーン提督の言葉に耳を傾ける。

サムス

「はい、何でしょうか？」

デーン

「我々銀河連邦第七艦隊が調査した結果、どうやら惑星ゼーベスだけではなくスペースパイレーツの奴らも復活している事が分かったのだ。」

サムス

「な、何ですって!？」

サムスはデーン提督の言葉を聞いて驚愕する。

デーン

「その証拠に、各星々から奴らによる被害報告が届いている。」

サムス

「そうですか……………今回の任務も骨が折れそうね。」

サムスは頭を抱えながら呟く。

デーン

「出来れば我々も君に協力したいのだが、生憎別の事件でこちらへ行けそうも無さそうなのだよ。」

サムス

「いえ、お気持ちだけでも感謝します……私一人でも必ずやパイレーツと共に惑星ゼーベスを破壊します！」

デーン

「そうか、相変わらず頼もしいな……くれぐれも無理はしないようにな。」

プツンッ

アダム

「デーン提督からの通信は以上だ。」

ネギ

「サムスさん、さっきこの星を破壊すると言っていましたけど……。」

サムス

「ええ……元々この惑星ゼーベスは以前破壊された星であり、スペースパイレーツという宇宙海賊が鳥人族を追放して基地にしてい

た星だから銀河連邦から破壊してほしいという依頼が届いたの。」

刹那

「それでは、すぐにでもこの星を……………」。

サムス

「勿論破壊するわ……………ベビーメトロイドかそのワクチンを手に入れたらね。」

明日菜

「サムスさん……………」。

ネギ達はサムスの言葉を聞いて嬉しそうに微笑む。

サムス

「それじゃ、早速奴らの本拠地へ乗り込むとしますか。」

そう言うと、サムスはヘルメットを被る。

ネギ

「サムスさん、僕達も一緒に行きます！」

サムス

「え？でもあの子の側に居てあげないと……。」

ネギ

「確かにそうかもしれませんが……でも、このままのどかさんが苦しんでいる姿を見ながら待っているなんて堪えられないんです！」

明日菜

「ネギ……。」

全員ネギの言葉を聞いて心打たれる。

サムス

「……………分かったわ、一緒に行きましょう。」

ネギ

「あ、ありがとうございます……！」

ネギはサムスに向かって深く頭を下げる。

サムス

「ただし、一つだけ条件があるわ。」

ネギ

「え？な、何でしょうか？」

サムス

「やはり誰かがあの子の側に居てあげないと精神的に不安になるから、最低でも誰か一人は此処に残るのが条件よ。」

ネギ

「わ、分かりました。」

ネギは渋々とサムスの条件に乗る。

カモ

「うーん、ネギの兄貴は絶対不可欠だから別として……姐さんや刹那の姉さんも戦闘には欠かせねえし……。」

木乃香

「……………ほなら、ウチが残るわ。」

刹那

「お、お嬢様！？」

全員木乃香の方を向いて少し驚いたような表情をする。

木乃香

「ほら、ウチが付いて来ても足手まといになるだけやし……………」。

明日菜

「そ、そんな！足手まといだなんて……………」。

刹那

「そうですよ！私はお嬢様が足手まといなどとはこれっぽっちも思っていない！！」

刹那は真剣な眼差しで木乃香に訴える。

木乃香

「……………わ、分かったから少し落ち着こ？」

木乃香は苦笑いしながら刹那を落ち着かせる。

カモ

「うーん、木乃香姉さんが残る事になると……………こりゃ迂闊に大怪我はできねえな。」

ネギ

「そつだね…………でも、ここは木乃香さんをお願いしよう。」

そう言うと、ネギは木乃香に顔を向ける。

ネギ

「木乃香さん、のどかさんの事お願いします！」

木乃香

「うん、任せて！」

のどか

「ハア…………ハア…………。」

ネギ

（のどかさん、もう少しだけ待ってて下さいね。）

ネギは静かに寝息を立ててるのどかを見つめる。

サムス

「じゃあ、準備が出来たところで出発よ！」

ネギ&明日菜&刹那

「はい！！」

こうしてネギ・明日菜・刹那の三人はサムスと共にスペースパイレーツの本拠地へ向かうのであった。

第十八回 絶体絶命の本屋 (後書き)

果たしてネギはのどかを救う事が出来るのか!?

次回もお楽しみに!

第十九話　パイレーツの四天王（前書き）

Xに寄生されたのどかを救う為にネギー行とサムスは惑星ゼーベスの中枢へ目指す。

第十九話　パイレーツの四天王

「惑星ゼーベス・プリンスタ」

ネギー一行とサムスはスペースパイレーツの本拠地である要塞の内部へ侵入していた。

サムス

「みんな、こつから先には手強い怪物達が潜んでいるから気をつけて。」

ネギ

「はい、分かりました。」

カモ

「兄貴！向こうからメトロイドが……。」

カモの指さす方を見ると、数匹のメトロイドが近付いてくる。

明日菜

「またコイツらか……アデアッド……！」

パァアッ

明日菜は素早く『ハマノツルギ』（ハリセン）を呼び出す。

サムス

「……………随分大きなハリセンね。」

サムスは『ハマノツルギ』を見て啞然とする。

明日菜

「たぁーっ!!」

スパァーっ!!

明日菜は『ハマノツルギ』でメトロイドの大群を吹っ飛ばす。

カモ

「いいぞ！流石姐さんだぜ！」

明日菜

「まぁね……………あれ？」

ところが、明日菜が吹っ飛ばしたハズのメトロイドの大群は再び襲い掛かってくる。

明日菜

「嘘お！？全然効いてないの？」

刹那

「明日菜さん！今助けに……………うっ。」

刹那は夕風を構えて明日菜を助けようとしたが、途中で何かを思い出して急に立ち止まる。

838

ネギ

「せ、刹那さん？」

刹那

「……………。」

刹那は思い詰めた表情でその場から動かなくなる。

サムス

「アイスショット!!」

バシユユツ!

カチカチカチ……

サムスが右腕のアームキャノンからビームを放つと、メトロイドの大群は凍り付いてしまう。

明日菜

「こ、凍っちゃった……。」

サムス

「メトロイドは冷気に弱いので……。でも、しばらくするとまた動き出すから急いで破壊した方がいいわ。」

明日菜

「えっ!? は、はい!」

パライイツ!!

明日菜は慌てて『ハマノツルギ』で凍り付いたメトロイドを破壊す

る。

明日菜

「ふうっ、危なかった〜……………」

ネギ

「……………刹那さん、一体どうしたんですか？」

刹那

「す、すみません……………」

刹那は申し訳なさそうに頭を下げる。

明日菜

「……………ひょっとして、まだ本屋ちゃんの事を気にしてるの？」

刹那

「……………はい。」

明日菜の言葉に刹那はゆっくり口を開く。

刹那

「もし、あのメトロイドを斬ってXが明日菜さんに寄生したらと思うと……………どうしてもその場から動けなくなるんです……………やはり私は神鳴流剣士としてまだまだ未熟です。」

ネギ

「刹那さん……………」

ネギ達は刹那の言葉を聞いてしんみりとなる。

明日菜

「……………」

明日菜は無言のまま刹那に近付く。

バッチイインー！

刹那

「きゃっつー!?!」

すると、明日菜は刹那の背中をおもいつきり叩く。

明日菜

「何言ってるのよ！そんな弱気な事言っなんて刹那さんらしくないよ？」

ネギ

「そ、そうですね！それにのどかさんが寄生されたのは刹那さんのせいじゃありません！」

刹那

「で、でも……………」

サムス

「それに、元々メトロイドはXを根絶させる為に鳥人族が造った生命体なの……………だからXがメトロイドに寄生するなんて有り得ないわ。」

刹那

「じゃあ、あの時私が斬ったのは……………」

サムス

「恐らくそれは『メトロイドモトキ』よ。」

ネギ

「『メトロイドモトキ』？」

ネギ達はサムスの言葉に耳を傾ける。

サムス

「『メトロイドモドキ』はスペースパイレーツの奴らがメトロイドを増殖させる為に造って失敗したメトロイドの失敗作よ……きつと刹那ちゃんが斬ったのは、Xに寄生された『メトロイドモドキ』だったのね。」

カモ

「成程なあ……たまたまXが出来損ないのメトロイドに寄生してたから、こんな事になっちまったって訳か。」

ネギ

「だったら、刹那さんは何も悪くありませんよ！」

刹那

「で、ですが……宮崎さんは絶対私の事を……。」

明日菜

「あゝも〜！それ以上グダグダ言わないの！！！」

刹那

「!?!?」

明日菜の怒声に刹那は少し驚く。

明日菜

「私達はクラスメートであり友達じゃない！だからそれ位で本屋ぢやんが嫌いになったりすると思う？………本当にもう、馬鹿なんだから。」

刹那

「あ、明日菜さん………。」

刹那は明日菜の励ましの言葉に心打たれる。

カモ

「大変だ！また向こうから何か来るぜ！」

再びカモが指さす方を見ると、直立歩行したザリガニのような生物の大群が近寄ってくる。

ネギ

「こ、今度は何ですか！？」

サムス

「きつとパイレーツの部下のゼーブス星人達よ！」

サムスが咄嗟にアームキャノンを構えようとした時……………。

刹那

「……………私に行かせて下さい！」

そう言うと、刹那は夕凧を構えながらネギ達より一歩前に出る。

ネギ

「刹那さん！」

カモ

「どつやら、姐さんの激励が効いたようだな。」

明日菜

「そ、そうかな？」

明日菜はカモの言葉に思わず照れる。

刹那

「桜咲刹那、いざ参るー!!」

そう言うと、刹那はゼーベス星人の大群に向かって駆け出していく。

ゼーベス星人

「ウオオッ!!」

ゼーベス星人達は刹那に向かって鋭いハサミを突き出して突っ込んでいくが……………。

刹那

「神鳴流秘剣・百花繚乱!!」

ズバアアアッ!!

ゼーベス星人達

「グワアアアッ!!」

刹那の剣技がゼーベス星人の大群を切り裂いていく。

ネギ

「やったー!!」

明日菜

「それでこそ刹那さんね！」

サムス

(……………この子達、とてつもない力を持つてるわね。)

ネギと明日菜が歓喜してる中、サムスは刹那の剣技に啞然とする。

刹那

「皆さん、お騒がせして申し訳ありませんでした……………でも、もう大丈夫です！」

ネギ

「それは良かったですね。」

明日菜

「その調子でどんどん進みましょう！」

サムス

「そうね、中枢までまだまだ先だから少し急がないと……………」

ネギ

「そうですね、のどかさんの為にも急いで出発しましょう！」

そう言いつつ、全員中枢へ目指して駆け出していく。

〈惑星ゼーベス・難破船エリア〉

ネギー一行とサムスは周りに難破した宇宙船があるエリアへやって来た。

明日菜

「な、何だか不気味な所ね……………」

ネギ

「まるで宇宙船の墓場みたいですね。」

サムス

「此処にある宇宙船は全てパイレーツの奴らに撃墜されたのよ。」

刹那

「恐ろしい連中ですね……………ん!？」

刹那は険しい表情になり立ち止まる。

明日菜

「刹那さん、どうかした？」

刹那

「……………何か居ます。」

そう言つと、刹那は夕凧を構える。

ネギ

「え？一体何が……………うわあっ!?!?」

突然ネギが何かを発見して腰砕け状態になる。

明日菜

「ど、どうしたの!?!?」

ネギ

「ひ、火の玉がいっぱい……………。」

ネギの言つ通り、目の前には沢山の青白い火の玉が浮かび上がっていた。

明日菜

「な、何々なのよこれ!?!?」

サムス

「これは恐らく奴の仕業ね……………」。

ポオオオツ

そう言うと、突然髑髏のような姿の生命体が幽霊のように透けてる状態で見れる。

ネギ

「こ、これは……………まるで幽霊みたいに透けてる……………」。

サムス

「コイツはフロントウーンといって、この辺り一帯を縄張りになっているパイレーツの幹部の一人よ！」

明日菜

「こんな化け物が幹部だなんて……………他にどんな奴がいるんだろ？」

明日菜は変な想像をしながら苦笑いする。

刹那

「あ、明日菜さん……………そんな事よりあいつを倒さないと……………」。

明日菜

「そ、そうね……急いだから一撃で倒すわ!」

そう言うと、明日菜はファントウーンに向かって飛び掛かり『ハマノツルギ』を振り下ろすが……。

スカッ

明日菜

「あ、あれ!？」

明日菜の攻撃は命中せずに通り抜けてしまった。

ネギ

「す、摺り抜けた!？」

明日菜

「い、一体どうなってんの!？」

サムス

「奴には物理的な攻撃は効かないわ。」

剎那

「では、どうすれば……………」

カモ

「サムスの姉さん！何か弱点は無いのかい？」

サムス

「奴の口が開かれた瞬間にだけ見える目玉を攻撃すれば倒せるわ。」

パカッ！

サムスが言い終わると同時に、ファントウーンの口が開かれて目玉が露になる。

カモ

「兄貴！奴が口を開けたぜ！」

ネギ

「よし！ラス・テル マ・スキ……………」

ボウッ！

ネギ

「あちゃっ!?!」

ネギが呪文を詠唱していると、火の玉がネギに近付いてくる。

ネギ

「ひ、火の玉が邪魔して呪文を詠唱出来ない……………」

明日菜

「こっちも火の玉が邪魔で近付けな〜い!」

明日菜はそう言いながら『ハマノツルギ』で火の玉を振り払う。

サムス

「この前戦った時より火の玉の数が多いわ……………」

刹那

「まずは火の玉を何とかしなければ……………」

カモ

「う〜ん、一気に火の玉を吹き消す方法は……………あ!そっだ!」

カモは何かを思い付いたかのように指を鳴らす。

カモ

「兄貴、辛抱してくれよ……………」。

コチヨコチヨ…………

ネギ

「ふがあっ！？カ、カモ君？何を……………」。

カモは長い尻尾でネギの鼻をくすぐる。

ムズムズ…………

ネギ

「ハ…………ハ…………ハツクション！！」

ブワアアアッ！！

ネギのくしゃみで火の玉は全て吹き消されてしまっ。

サムス

「い、今は……………」

刹那

「一応ネギ先生の魔法です。」

明日菜

「相変わらず凄い威力ね……………」

サムスはネギのくしゃみの威力に驚く中、明日菜は相変わらずの威力に苦笑いする。

カモ

「サムスの姉さん！今がチャンスだぜ！！」

サムス

「え、ええ……………ミサイル発射！！」

ドンッ！！

サムスはアームキャノンからミサイルを発射させる。

ドッカーーン!!

ファントウーン

「オオオオツ!!」

ボガアーン!!

ミサイルが目玉に命中すると、ファントウーンは不気味な叫び声と共に爆発する。

明日菜

「ふう、意外と呆気なかったわね。」

カモ

「これも俺たちの作戦のお蔭だな。」

ネギ

「そ、そうだね……流石カモ君だよ……。」

ネギは鼻を指で摩りながらカモを褒める。

サムス

「あまり時間が無いから急ぎましょ。」

刹那

「そろそろましょう。」

全員この場から駆け出していく。

〈惑星ゼーベス・マリーディア〉

ネギー一行とサムスは辺りに水溜まりが多い場所へやって来た。

ネギ

「此処ってやけに水溜まりが多いですね。」

サムス

「それがこのマリーディアの特徴よ。」

明日菜

「もし躓^{つまず}いて転んじやったらずぶ濡れね……………」

刹那

「そうならないように足元に注意しないと……………」

全員足を滑らさないように進んでいた時……………。

ザッパーン!!

突然目の前の池の中から大きな甲殻類のような生物が現れる。

明日菜

「ま、また何が出た〜!?!」

サムス

「今度はドレイゴンか……………奴の口から吐き出す粘液に気をつけて
!」

ドパアーン!!

サムスが注意した後、ドレイゴンは口から粘液を吐き出す。

ネギ

「皆さん、当たらないように避けて下さい!」

ネギは杖に跨がって粘液を避けるが……………。

べちゃッ!!

明日菜

「あっ!?!」

粘液が明日菜の足元に粘り着く。

刹那

「明日菜さん!大丈夫ですか!?!」

明日菜

「だ、大丈夫だけど………全然動けない。」

明日菜は必死にもがくが、足は全然動かない。

ズズズズズッ

すると、ドレイゴンは勢い良く明日菜に向かって突っ込んでくる。

サムス

「危ない!ドレイゴンが突っ込んでくる!?!」

明日菜

「わ〜！来るな来るな来るな〜！！！」

スパアアアツ！！

ドレイゴン

「ギユユユツ！！！」

ドガアアアツ！！

明日菜が乱暴に振り回した『ハマノツルギ』がドレイゴンに命中して、そのまま壁に叩き付けられる。

862

明日菜

「……………あ、あれ？」

明日菜はハツと我に返る。

明日菜

「も、もしかして……………やっつけちゃった？」

ネギ

「は、はい……………」

カモ

「やっぱり姐さんはスゲエな……………」

刹那

「お、お見事でした……………」

サムス

（この子の力も侮れないわね……………」

全員苦笑いしながら明日菜を褒めたたえる。

明日菜

「……………」
「そ、それより先へ進みましょう！」

明日菜は足が自由になると同時に慌てて先へ進もうとする。

ネギ

「あ、待って下さい！」

ネギ達も明日菜の後から進んでいく。

〈惑星ゼーバス・ノルフエア〉

ネギー行とサムスは辺りは溶岩で囲まれている場所へやって来た。

カモ

「あ、暑い〜……………」

ネギ

「こ、今度はマグマがあるエリアですか……………」

サムス

「でも、此処を抜けると中枢である『ツーリアン』に着くから頑張
つて。」

刹那

「ですが、このエリアにも何か現れそうですね……………」

明日菜

「大丈夫だって、きっと今までの奴らと同じで対した事ないわよ！」

サムス

（だといいけど……………そろそろあいつらが現れるかも……………）

サムスが少し不安げに進んでいると……………。

ゴゴゴゴゴッー！

突然辺りが地震のように激しく揺れ動く。

明日菜

「こ、今度は何！？」

ネギ

「地震でしょうか？」

サムス

「いや、恐らくこの揺れは……………」

？

「グワアアッー！！」

突然地面から怪獣のような緑色の怪物がネギ達の目の前に現れる。

刹那

「な、何だ！？この大きさは……………」

明日菜

「これじゃ、まるでゴジラじゃない!!」

サムス

「クレイドよ！プリンスタに現れなかったから可笑しいと思ったけど……………」

クレイド

「グオオオツ!!」

クレイドはネギ達に向かって巨大な鋭い爪を振り下ろす。

ネギ

「あ、危ない!!」

グシャーーツ!!

ネギ達は間一髪クレイドの攻撃を避ける。

明日菜

「や、やっぱり凄い破壊力だわ……………」

刹那

「こんなデカイ奴をどうやって迎え撃てば……。」「

サムス

「奴の弱点は口よ！口の中を攻撃すれば倒せるわ！」

ネギ

「口ですか……。分かりました！」

そう言うと、ネギは杖を持って身構える。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……。風精召喚・剣を執る
戦友！迎え撃て！！」

ブワアアッ！！

ネギは剣を持った自分そっくりの精霊を召喚して、精霊達はクレイドに向かって突っ込んでいく。

クレイド

「グウウッ！」

クレイドは迎え撃ってくるネギの分身を必死に振り払う。

明日菜

「よし、分身に気を取られている隙に一気に行くわよ！」

刹那

「はい!!！」

明日菜と刹那が武器を持ってクレイドに突っ込もうとした時……。

ビビュッ!!

突然クレイドの腹部から巨大なトゲが発射される。

刹那

「な、何!?!」

明日菜

「そんなのアリ!?!」

明日菜と刹那は間一髪トゲを避ける。

明日菜

「あ、危なかった……。」

刹那

「奴には隙が無いのか……………」

サムス

「二人共！大丈夫！？」

サムスが慌てて明日菜達に駆け寄った時……………。

ガシッ！！

サムス

「し、しまった！！」

サムスがクレイドに捕まってしまつた。

ネギ

「サムスさん！！」

サムス

「くっ……………この！離せ！！」

クレイド

「ガアアッ……………」

クレイドはサムスを口元まで持ってきて、大きな口を開けてて飲み込もうとする。

カモ

「ヤベエ！サムス姉さんが食われちゃう！！」

ネギ

「急いで助けないと……………」

そう言うと、ネギは再び杖に跨がってサムスを助けようとした時……………。

サムス

「私なんかよりこれでも食ってなさい！！」

ドンッ！！

サムスはクレイドの口に向けてミサイルを放つ。

ドガアーーーン!!

クレイド

「グオオオツ!!」

サムス

「よし!今の内に………ボール変型!!」

サムスはクレイドが攻撃を受けて怯んでいる隙にボールのように変型して脱出する。

カモ

「兄貴!攻撃のチャンスだぜ!!」

ネギ

「う、うん!!」

ネギは杖に跨がりクレイドに接近する。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル 来たれ雷精・風の精！……
……雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐・雷の暴風！！」

ズバアアアツ！！

クレイド

「グガアアアツ！！」

ネギの強力な攻撃がクレイドの口の中に命中して、身体中に電気が走る。

クレイド

「グガ……ガ……。」

バッターーン！！

クレイドはそのまま後ろから倒れてしまう。

カモ

「やったぜ兄貴！！」

ネギ

「や、やった……。」

ネギはそのまま地面へ不時着しようとした時……。

？

「キエエエツ！！」

ネギ

「な、何！？」

カモ

「兄貴！向こうから何か近付いてくるぜ！」

カモが指さす方を見ると、巨大な翼竜のような生物が迫ってくる。

明日菜

「ま、また何か現れた！？」

サムス

「やっぱり現れたわね……奴がパイレーツの最高指揮官のリドリーよ！」

刹那

「という事は、奴がボスですか……………」

リドリー

「キエエツ!!」

ゴオオオツ!!

リドリーはネギに向かって口から炎を吐き出す。

ネギ

「うわぁっ!!」

ネギは慌ててリドリーの炎を避ける。

カモ

「兄貴、まずは奴の動きを止めようぜ!!」

ネギ

「分かった!ラス・テル マ・スキル マギステル……風精召喚・
剣を執る戦友!捕まえて!!」

ブワアアッ!!

ネギは再び精霊を召喚させて、リドリーに向かって突っ込んでいく。

リドリー

「クワアアアッ！」

バサアーーーーッ!!

リドリーは大きな翼を羽ばたかせて、物凄い風力で精霊達を吹き飛ばす。

ネギ

「そ、そんな……………」

カモ

「なんて野郎だ……………兄貴が召喚した精霊を簡単に吹き飛ばしやがった。」

ネギとカモはリドリーの力に唾然となる。

刹那

「このままではネギ先生が……………私も加勢します!」

バサッ!!

刹那は背中から白くて大きな翼を出す。

サムス

「つ、翼が……………」

サムスは刹那の大きな翼を見て驚愕する。

刹那

「ネギ先生、今参ります!」

バツ!!

刹那はネギの元へ飛び立っていく。

明日郎

「あの、サムスさん……………」

サムス

「え？何？」

明日菜

「刹那さんの今の姿を見て驚いていると思うけど、刹那さんの事を化け物だとかって思わないでほしいんです。」

サムス

「明日菜ちゃん……。」

サムスは真剣な表情で訴える明日菜を見て心動かされる。

サムス

「……………大丈夫！私はあんな綺麗な翼を持った子を化け物だなんて思っていないから安心して。」

明日菜

「本当！？良かった……………。」

明日菜はサムスの言葉を聞いてホッと胸を撫で下ろす。

サムス

「それに、本当の化け物は……あいつよ!」

そう言うと、サムスはリドリーに向けてアームキャノンを構えて、銃口からエネルギーを溜め始める。

明日菜

「サムスさん、何をしてるの?」

サムス

「エネルギーをチャージしてるのよ……あの子どもがリドリーに反応してる間にチャージを完了させておかないとね。」

リドリー

「キエエエツ!」

その頃、リドリーがネギに向かってトゲのように尖った尻尾を突き付けながら突っ込んでくる。

刹那

「ハアツ!」

スパツ!!

リドリー

「ギエエエツ!!」

突如刹那が夕風でリドリーの尻尾を切断する。

ネギ

「せ、刹那さん!!」

刹那

「ネギ先生、私がサポートします!!」

カモ

「よっしゃ、刹那姉さんがいりゃ百人力だぜ!!」

リドリー

「キエエエイ!!」

リドリーは怒り狂っているながら腕を振り下ろそうとするが……………。

ガギイイツ!!

刹那が夕風でリドリーの攻撃を防ぐ。

刹那

「ネ、ネギ先生！い、今の内に……………」。

ネギ

「分かりました！ラス・テル マ・スキル マギステル……………」。

カモ

「刹那の姉さん、避ける！」

刹那

「は、はい！」

バサッ！！

刹那は急いでリドリーから離れる。

ネギ

「魔法の射手 連弾・雷の17矢！！」

トトトトトトツッ……！！

リドリー

「ギヤヤヤツ！！」

ネギの放った雷の矢がリドリーに命中する。

リドリー

「キエエツ！！」

ところが、リドリーはまだピンピンしていた。

カモ

「チツ、しぶとい野郎だな……………」

ネギ

「もっと攻撃して弱らせないと……………」

刹那

「それなら、私が奴に猛攻して弱らていきましようか？」

ネギ

「でも、相手はとても凶暴ですから迂闊に手を出したら危険です。」

リドリ―

「クアアアツ!!」

ネギ達が話し合っている最中に、リドリ―が攻撃を仕掛けようとした時……………。

サルス

「今だ!発射!!」

ドオオオン!!

サルスがアームキャノンからリドリ―に向けて巨大なエネルギー弾を発射させる。

ドバアアアツ!!

リドリ―

「ギャアアアアツ!!」

サルスの放った巨大なエネルギー弾が見事リドリ―に命中する。

ネギ

「い、今のは……………」

カモ

「どつやら、サムス姉さんが下から攻撃したみたいだぜ。」

刹那

「という事は、あの距離から狙いを定めて撃つたのか……………」

刹那は下にいるサムスとリドリーを見比べながら啞然とする。

リドリー

「ク…………クウウ……………」

リドリーは今にも落ちそうな位にフラフラする。

カモ

「兄貴！今度こそ仕留めてやれ！！」

ネギ

「よし！ラス・テル マ・スキル マギステル……………闇夜切り裂く
一条の光・我が手に宿りて敵を喰らえ。」

すると、ネギは呪文詠唱中にリドリーに掌てのひらを向ける。

ネギ

「白き雷！！」

ズバアアアツ！！

リドリー

「ギャアアアアツ！！！」

ネギの掌から雷が放たれて、リドリーの身体を電気が通り抜ける。

リドリー

「ク……クガ……。」

ヒューーッ

リドリーはそのまま下へ落としていく。

ネギ

「や、やっつけたみたい……………」

カモ

「流石兄貴だぜ！」

刹那

「お見事でした！」

ネギ

「い、いや……………それより、明日菜さんとサムスさんの所へ戻りましょう。」

そう言うと、ネギと刹那はサムス達がいる所へ着地する。

明日菜

「二人共、大丈夫だった？」

ネギ

「はい、サムスさんのお蔭で助かりました。」

サムス

「どう致しまして……………」

サムスは何処か元気が無いように答える。

刹那

「あの、どうかなさいましたか？」

サムス

「い、いや……いつになったらあいつと決着を着けれるのかと思つて……。」「

明日菜

「あいつつて、さっきの鳥みたいな怪物の事ですか？」

サムス

「そう……でも、あいつは何度倒しても私の前に姿を現す……私の両親を殺したあいつがね。」「

ネギ

「えっ!?!」

ネギ達はサムスの言葉に耳を疑った。

ネギ

「サムスさんの御両親……殺されたんですか？」

サムス

「ええ……母はまだ幼い私をあいっから庇ってくれて死んだ……
……そして父は命と引き換えに奴らの母艦に突っ込んで命を落とした
の。」

明日菜

「そ、そうだったんですか……。」

刹那

「まさにサムスさんにとって奴は御両親の仇だったんですね……。」

サムス

「そういう事ね……。」

そう言つと、辺り一面に重苦しい空気が流れる。

サムス

「ごめんなさい、つまらない話して……さて、気を取り直して先
へ進みましょうー！」

カモ

「そ、そうだけ兄貴！のどか嬢ちゃんを救う為にもな。」

ネギ

「そ、そうだね……皆さん、行きましょう！」

刹那

「はい！」

明日菜

「OK！」

ネギ一行とサムスはそのまま奥へと進んでいく。

第十九話　パイレーツの四天王（後書き）

スペースパイレーツの怪物達を倒したネギー一行とサムスに次は何が待ち構えているのか！？

第二十話　もう一人のサムス？（前書き）

Xに寄生されたのどかを救う為にネギー行とサムスはパイレーツの四天王を打ち破り、ツーリアンを目指して進んでいく。

第二十話　もう一人のサムス？

（スターシップ内部）

のどか

「ハア……ハア……。」

のどかは未だ苦しそうにうなされていた。

木乃香

「大丈夫や、きっとネギ君達が何とかしてくれるから……。」

そう言うと、木乃香はのどかの手を強く握る。

アダム

「それに、レディーも一緒だから何も心配する事は無い。」

木乃香

「そやね……ところで、一つ聞いてええかな？」

アダム

「ん？何だね？」

木乃香

「アダムはんって、何でサムスはんの事をレディーって呼ぶん？」

アダム

「ああ、その事が……………」

アダムはしばらく考えるように黙り込む。

アダム

「私が彼女をレディーと呼ぶのは、恐らく彼の思考や口調を基に作られたからだろう。」

木乃香

「彼って？」

木乃香はアダムの言葉に首を傾げる。

アダム

「アダム・マルコビッチという男だ……………彼はレディーが銀河連邦に所属していた頃の上司でもあり友人でもある人物だ。」

木乃香

「ふん……その人は今でも銀河連邦におるん？」

アダム

「いや、彼はある任務で事故にあつて還らぬ人となつた……。」

木乃香

「そ、そうなんや……何か悪い事聞いてもつたなあ……。」

木乃香はアダムの言葉を聞いて沈み込む。

アダム

「いや、気にしないでくれ……話を变えるが、私に『アダム』と名付たのは彼女なんだ。」

木乃香

「そつか、きつとサムスは昔親しかったアダムはんと重ねてたんやな……。」

アダム

「きつとそうだろう……だが、今のレディーは私が彼とは違つと気付いているようだ。」

木乃香

「……………サムスはんって強い人なんやね。」

アダム

「強くなければバウンティハンターなんてしていないさ。」

木乃香

「それもそやな。」

木乃香とアダムの会話はしばらく続いた……………。

「惑星ゼーベス・ツーリアン」

その頃、ネギー一行とサムスはツーリアンにある研究室のような部屋にいた。

ネギー

「此処は研究室のようですね……………」

サムス

「そのような……………沢山のメトロイドが保管されているし……………」

サムスの言う通り、棚の中にはカプセルに保管されたメトロイドが並べられていた。

刹那

「色々なメトロイドが保管されてますね……。」

サムス

「恐らく此処でメトロイドの研究をしていたのね……きっとズビ
ーメトロイドやワクチンも保管されてるハズよ。」

明日菜

「それじゃ、手分けして捜さなきゃ……ん？」

明日菜はカプセルに保管されてるメトロイドとは別に卵のような物
体を発見する。

明日菜

「何これ？卵みたいだけど……。」

サムス

「あつたわ！」

明日菜

「えっ！？本当に……。」

パカッ！

明日菜

「!?!」

明日菜がサムスの声に反応した時、卵のような物体が割れて中から出て来たのは……………。

その頃、ネギと刹那はサムスが持っている試験官に注目している。

ネギ

「サムスさん、それは何ですか？」

サムス

「これはベビーメトロイドのワクチンのサンプルよ。」

刹那

「サンプルでも効果があるんですか？」

サムス

「『このサンプルでの効果は検証済み』と書いてあるから大丈夫よ。」

「

ネギ

「じゃあ、これでのどかさんは助かるんですね？」

サムス

「ええ、確実にね。」

カモ

「やったな兄貴、これでもう安心だな！」

ネギ

「うん、本当に良かったよ！明日菜さんもこっちに来て下さ……あれ？」

明日菜

「ちょ、ちょっと……。」

？

「キュウ！キュウ！」

ネギが明日菜の方を振り向くと、困惑した表情を浮かべてる明日菜の周りに小さなメトロイドが浮遊していた。

カモ

「お、おい！姐さんの周りをうろついているのはメトロイドじゃねえか！？」

ネギ

「あ、明日菜さん！早くそのメトロイドから離れて下さい！」

明日菜

「いや、私もさっきから離れようとしてるんだけど……。」

そう言つと、明日菜はメトロイドから離れようとするが……。

メトロイド

「キキュウ！キキュウ！」

メトロイドは慌てて明日菜の元へ近付く。

明日菜

「いくら離れても私に付いて来るのよ〜！」

サムス

「……………ひょっとして、そのメトロイドは卵から生まれてこなかった？」

明日菜

「え？た、確かに卵のような物体から出て来たみたいだけど……………」

サムス

「やっぱりね……………そのベビーメトロイドは貴女の事を母親だと思
い込んでいるのよ。」

ネギ&刹那

「えっ……………」

明日菜

「ええーーーーー！？」

サムスの言葉に全員耳を疑った。

明日菜

「そ、そんな！冗談ですよね！？」

サムス

「いいえ、私も以前に生まれたばかりのベビーマトロイドに母親だと思われて懐かれた事があったわ。」

明日菜

「う、嘘……………」

ベビーマトロイド

「キュキュウツ！」

明日菜が落ち込む中、ベビーマトロイドは無邪気に明日菜の肩に寄り付いてきた。

刹那

「それにしても、生まれて最初に見た者を母親だと思うなんて……」

…。」

カモ

「まるでヒヨコみてえだな。」

ネギ

「でも、こうして見ると……結構可愛いですね。」

明日菜

「どこがよ……。」

そう言つと、明日菜は肩に擦り寄せているベビーメトロイドを見つめる。

明日菜

「ま、まあ……ちょっとだけ可愛い……かも。」

明日菜は少し照れ臭そうに頬を指で掻きながら言つ。

刹那

「それより、急いで此処を脱出して宮崎さんを助けないと……。」

サムス

「その前にこの基地」と星を破壊しないとね。」

ネギ

「えっ！？破壊ってどうするんですか？」

サムス

「恐らくアレも復活してると思うからアレを破壊しないと……………」

カモ

「アレ？アレって何だい？」

サムス

「後で説明するから、取り合えず急いでこの場から出ましょー！」

そう言つと、サムスは研究室から出ようとしたが……………。

明日菜

「あの、この子はどうすれば……………」

明日菜はベビーメトロイドについてサムスに聞く。

サムス

「……………連れて行きましょ。」

明日菜

「え？でも、この子は……………」

サムス

「大丈夫、ベビートロイドはむやみに人を襲ったりしないわ。」

ネギ

「それだったら、何の問題もありませんね。」

明日菜

「良かった……………それじゃ、一緒に行こっか！」

ベビートロイド

「キュキュウ！」

ベビートロイドは明日菜の言葉を聞いて嬉しそうに跳びはねる。

刹那

「……………何だか明日菜さんも満更でもないみたいですね。」

ネギ

「そうですね。」

ネギと刹那は笑顔で戯れる明日菜とベビーメトロイドを見て微笑む。

サムス

「……そろそろ出発しないと時間が無いわよ。」

ネギ

「あ！そうでしたね……皆さん、急いで此処から出ましょー！」

そう言いつと、全員この研究室を後にする。

くツリーアン・奥部く

ネギ

「これは……………何ですか？」

ネギは目の前にある巨大な脳みそのような物体に指をさしてサムスに尋ねる。

サムス

「マザーブレインといって、この惑星ゼーベス全体を管理している機械生命体よ……………コイツを破壊すれば自爆装置が作動して惑星ゼーベスは破壊されるわ。」

明日菜

「じゃあ、これを破壊したら急いで脱出しないと……………」

ズドドドドドツッ！！

刹那

「あ、危ない！！」

突然何者かがネギ達に向けて攻撃してくるが、刹那の声で全員間髪を避ける。

明日菜

「な、何よ！？いきなり攻撃なんて……………」

ネギ

「あれ？でも、アレって……………」

ネギ達の後ろにいたのは、全身真っ黒なボディにサムスと酷似した姿の人物だった。

カモ

「あいつ、サムスの姉さんに似てねえか？」

サムス

「まさかコイツも復活してるとは……………」

ネギ

「サムスさん、あの人は一体……………」

サムス

「奴はフェイゾンという力で生まれたエネルギー生命体……………パイ
レーツの奴らはダークサムスと呼んでいるらしいわ。」

刹那

「ダークサムス……………」

ネギ達はサムスの言葉を聞いて息を呑む。

ガシャン！

すると、ダークサムスはアームキャノンをネギ達に向ける。

明日菜

「ネギ！来るわよ！！」

ネギ

「はい！契約執行180秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』・
桜咲刹那』！！」

パアアツ

ネギが呪文を唱えると、明日菜と刹那が一瞬魔力に包まれる。

明日菜

「刹那さん！行くわよ！！」

刹那

「はい！！」

明日菜と刹那はダークサムスに向かって駆け出していく。

ズドドドドツッ！！

すると、ダークサムスが明日菜達に向けて攻撃を繰り返す。

明日菜

「おっとっと！」

明日菜と刹那は難無く避ける。

明日菜&刹那

「ハアアツ！！」

その隙に明日菜と刹那は同時にダークサムスに向かって武器を振り下ろすが……………。

ササツ！！

明日菜

「!?!」

刹那

（は、速い……………。）

ダークサムスは素早い動きで明日菜達の攻撃を避ける。

ズドドドドドッ……！

明日菜

「うわぁっ!!」

ダークサムスの攻撃が明日菜に命中する。

刹那

「明日菜さん!」

刹那が明日菜の方を向いた時……………。

ボカッ!!

刹那

「うぐっ!!」

ダークサムスが素早く刹那に蹴りを喰らわせて吹っ飛ばす。

ネギ

「明日菜さん!刹那さん!」

サムス

「やはり素早い……………こつちも攻めましょ！」

ズドドドドドツッ！

サムスはアームキャノンからエネルギー弾をダークサムスに狙いを定めて連射する。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………魔法の射手 連弾・光の29矢！！」

ドドドドドドツッ！

それと同時にネギもダークサムスに向けて光弾を放つ。

ササッ！

ところが、ダークサムスは二つの攻撃を難無く避ける。

ネギ

「す、全ての攻撃を避けた！？」

サムス

「これ程までパワーアップしているとは……。」

シュツ！

ネギとサムスがダークサムスの素早さに驚いていると、ダークサムスが分裂する。

カモ

「な、何だ！？あの野郎分裂しやがったぜ！」

サムス

「気をつけて！それぞれ別れて向かって来るわ！！！」

サムスの言う通りに一体のダークサムスはネギとサムスの方へ駆け出して、もう一体のダークサムスは明日菜と刹那の方へ駆け出していく。

明日菜

「刹那さん、こっちにも来るわよ！」

刹那

「は、はい！今度こそ倒しましょう！」

そう言うと、明日菜と刹那は再びダークサムスに向かって駆け出す。

ズドドドドドッ！！

すると、ダークサムスは明日菜達に向けて攻撃する。

明日菜

「二度も同じ攻撃を喰らってたまるもんですか！」

そう言うと、明日菜は『ハマノツルギ』を振り回しながらダークサムスの攻撃を弾き返す。

明日菜

「刹那さん！今よ！！！」

刹那

「はい！神鳴流奥義・斬岩剣！！！」

スパッ！！

突然刹那がダークサムスの背後から切り付ける。

明日菜

「へへん！私ばかり気を取られてるからよ。」

刹那

「まさに油断大敵ですね……………ん!？」

シュユツ……………

真つ二つにされたダークサムスは段々と消えていく。

明日菜

「あれ？消えちゃった……………。」

刹那

「どっちら、ダミーだったようですね。」

明日菜

「じゃあ、ネギ達の方へ行ったのが……………。」

ズドドドドドッ!!

一方ネギとサムスは本物のダークサムスの攻撃を避けていた。

サムス

「マズイわ、急いで戻らないとあの子が……。」

ネギ

(のどかさん……………。)

ネギはサムスの言葉を聞いて思い詰めたような表情になる。

サムス

「ネギ、ちよつといい?」

ネギ

「はい、何ですか?」

サムスは周りに聞こえないようにネギと話す。

ネギ

「……………分かりました。」

サムス

「それじゃ、作戦開始よ！」

ゴロゴロッ！

そう言うと、サムスはボールに変形してダークサムスに接近する。

ズドドドドッ！！

すると、ダークサムスは接近してくるサムスに攻撃を仕掛ける。

サムス

「ボム発射！！」

ボガガガッ！！

サムスはボール変形のまま球状の爆弾を放ち、全てダークサムスに命中する。

サムス

「お次はこれよ！」

ビィィイツ!!

次にサムスは元の形態に戻り、アームキャノンから鞭状のビームを出してダークサムスの体を巻き付ける。

サムス

「それっ!!！」

更にサムスはダークサムスをそのままマザーブレインの方に放り投げる。

カモ

「兄貴!今だ!!！」

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……魔法の射手 連弾・雷の17矢!!！」

ドオオオオツ!!

ネギの魔法攻撃を受けてダークサムスはマザーブレインを囲っている硝子ガラスに叩き付けられる。

サムス

「よし、後はこの攻撃を繰り返せば……………」

ピッピッピッ!

サムスはアームキャノンに搭載されてるボタンを入力する。

サムス

「ゼロレーザー発射!!」

ドギューユツ!!

サムスはアームキャノンから極太ビームを放って、ダークサムスはマザーブレインと共に極太ビームの餌食となる。

カモ

「す、スゲエな……………」

ネギ

「でも、やりましたね！サムスさ……………」

サムス

「うつつ……………」

ネギがサムスの方を向いた瞬間、サムスはパワードスーツから電気を帯びながら膝を地面に着ける。

明日菜

「サ、サムスさん！？」

刹那

「どうしたんですか？」

サムス

「さ、さっきのビームでこのパワードスーツに大きな負担が掛かったのね……………もう壊れても可笑しくない状態よ。」

ピピッ！

そう言うと、サムスはパワードスーツの胸部分に搭載されてるボタンを押す。

ペアアツ……

すると、サムスが着用していたパワードスーツが光を放ちながら消えていく。

刹那

「こ、これは……………」

サムス

「パワードスーツをスターシップ内へ転送したの……………このままではいつ機能停止するか分からないしね。」

明日菜

「そ、そんなんですか……………」

ネギー一行は全身にフィットした青いタイツ状のスーツを着たサムスに見とれている。

ネギ

（サムスさんってスタイル良いんだ……………。）

カモ

(うひょー、全身タイツでサムス姉さんのナイスボディがいやらしくフィットしてて堪らねえな。)

ムギユツ!!

カモ

「ムゴッ!?!」

明日菜

「コラ、いやらしい目でじろじろ見ない!」

明日菜がいやらしい目付きでサムスを見つめるカモの首部分を握る。

サムス

「……………どうしたの?」

刹那

「いえ、いつもの事ですので……………」。

刹那はサムスの問い掛けに苦笑いしながら受け流す。

?

「話をしている場合ではないんじゃないか？」

全員

「!？」

全員声がした方を向くと、マザーブレインが設置してあった場所に黒コートの人物が立っていた。

サムス

「何者だ!？」

サムスは小型の銃を取り出して、黒コートの人物に向けて構える。

明日菜

「またアンタね……………いい加減顔くらい見せなさいよ!」

カモ

（そっちかよ……………。）

明日菜の発言にカモは呆れる。

？

「フッ……………」

明日菜

「あっ！今鼻で笑ったわね！！」

刹那

「お、落ち着いて下さい……………」

鼻で嘲笑う黒コートの人物に激怒する明日菜だが、刹那が冷静に明日菜を宥める。

？

「それより、早くこの要塞から脱出した方がいいんじゃないか？」

ビーッ！ビーッ！

黒コートの人物が言い終えた直後、突然辺りに警報が鳴り響く。

アナウンス

「時限爆弾作動シマシタ……………五分以内ニ脱出シテ下サイ。」

ネギ

「ご、五分!？」

サムス

「みんな!急いで来た道へ戻るわよ!」

明日菜&刹那

「は、はい!」

そう言うと、全員その場から急いで駆け出していく。

?

「爆発まで後五分四十六秒……果たしてタイムリミットまで脱出出来るかな?」

スッ………

黒コートの人物はそのまま姿を消してしまふ。

第二十話『もう一人のサムス?』(後書き)

ベビーマトロイドのワクチンのサンプルを手に入れて、ダークサムスとマザーブレインを破壊したネギー行とサムスは制限時間内に惑星ゼーベスを脱出出来るのか!?

次回はいよいよ『メトロイド編』クライマックスです!お楽しみに!

第二十一話くベピーメトロイドの勇姿く（前書き）

マザーブレインを破壊したネギー行とサムスは、星全体が爆発する前に急いで脱出しようと走り出していた……………。

第二十一話へビーメトロイドの勇姿

（スターシップ内部）

のどか

「ハアハア……………ネ、ネギ先生……………」

木乃香

「アカン、熱が全然下がらへん……………」

木乃香はのどかのおでこに手を置いたまま呟く。

アダム

「もうそろそろ限界だな……………ムッ!？」

ピピピピッ!

突然スターシップのコンピュータから警報らしき音が鳴り響く。

木乃香

「な、何が起こったんや!？」

アダム

「……………どつやらレディーがお呼びのようだ。」

ゴゴゴゴゴゴッ！

突然スターシップ内が地震のように揺れ始める。

木乃香

「こ、今度は何なん!?!」

アダム

「安心したまえ、今からレディー達の元へ発進するだけだ。」

木乃香

「えっ!?!この船って自動に動くん?」

アダム

「動くといってもレディーが居る場所までだがな……………それでは発射
!?!」

ゴォーッ!!

スターシップはそのまま目的地へ発進していく。

〈惑星ゼーベース・プリンスタ〉

ネギー行とサムスは今まさに必死で来た道まで駆け出していた。

ネギ

「ハアハアツ……………ぼ、僕達は今どの辺に居るんでしょうか？」

サムス

「此処を抜けたらもうすぐ出口に着くから頑張って！」

ベビーメトロイド

「キュウ！キュウ！」

明日菜

「え？どうしたのチビ……………って、わあっ！？」

明日菜はベビーメトロイドの鳴き声に反応して後ろを向くと、沢山のゼーベス星人が飛び掛かっていた。

明日菜

「こんのおおっ！！！」

パシイイイツ！！

ゼーベス星人達

「ギャヤヤツ！！！」

明日菜が『ハマノツルギ』でゼーベス星人達を吹っ飛ばす。

刹那

「明日菜さん、何かあったんですか!？」

明日菜

「ええ、私に襲い掛かってきたゼーベス星人をやっつけてたの……
…この子が教えてくれたお蔭で助かったわ。」

ベビーメトロイド

「キュキュウツ!」

ベビーメトロイドは無邪気に明日菜の周りを飛び回る。

カモ

「やれやれ、あいつすっかり姐さんに懐いてるな。」

ネギ

「そうだね、それに明日菜さんも気に入っているようだし……。」

アナウンス

「爆発マデ後三分デス……………」

サムス

「急いで！出口はもうすぐだから……………」

そうサムスが言いかけた時……………。

？

「キエエエエエツ！！」

ネギ

「え？」

明日菜

「い、今の声ってまさか……………」

全員後ろの方を向くと、倒したハズのリドリーが物凄いスピードで追いかけてきた。

サムス

「リ、リドリー……！」

カモ

「あの翼竜野郎、まだ生きてやがったか。」

刹那

「こんな時に……………」

明日菜

「べっするっ、せっしけちゅっ。」

サムス

「いや、時間が無いからこのまま進みましょう。」

ネギ

「分かりました……………皆さん！捕まらないようにして下さいね！」

明日菜

「分かってるって……………わっ!？」

ドスンッ!!

突然明日菜が石に躓いて転んでしまう。

ネギ

「あ、明日菜さん！」

刹那

「大丈夫ですか!？」

明日菜

「痛たたたた……………」

明日菜が俯せの状態から起き上がろうとした時……………。

ガシッ!!

明日菜

「し、しまった!!」

追い付いたリドリーが明日菜の両足を掴んで持ち上げる。

カモ

「マズイ、姐さんが捕まっちゃった!!」

ネギ

「明日菜さん!!」

ネギが慌ててリドリーに近付こうとしたが……。

ゴオオッ!!

ネギ

「あちっ!!」

リドリーが口から炎を吐いて、ネギの進行を妨げる。

刹那

「これじゃ迂闊に近付けませんね……………」。

サムス

「それに、明日菜ちゃんを盾にしてるから攻撃も出来ないわ。」

ネギ

「一体どうすれば……………」。

明日菜

「このヒロ鳥〜！離しなさいよ〜！〜！」

明日菜はリドリーに逆さまの状態で両足を掴まれて、スカートが捲れないように両手で押さえながら体を激しく揺らしていた。

ベビーメトロイド

「キュキュウツ〜！〜！」

ガシッ！

すると、ベビーメトロイドがリドリーの鼻先にくっつく。

リドリー

「ギイイツ!?!」

ドサツ!!--

明日菜

「痛っ!!--」

驚いたリドリーは明日菜の足を掴んでいた手を離して、明日菜はそのまま地面に落下してしまう。

939

ネギ

「明日菜さん!」

ネギ達は急いで明日菜に近づく。

刹那

「ベビメトロ無事の様子ですな。」

明日菜

「う、うん……………それよりチビが……………」

そう言つと、全員リドリーの鼻にくっついてるズビーメトロイドを見る。

サムス

「あの子、リドリーのエネルギーを吸い取っているわ……………きっと貴女を助ける為にね。」

明日菜

「チビ……………」

リドリー

「グウウウツ！！」

すると、リドリーは片手でズビーメトロイドを引き剥がしてしまつ。

ズビーメトロイド

「キュキュツ……………」

明日菜

「チビ……………」

明日菜は地面に落ちてた『ハマノツルギ』を拾い上げて、リドリーに接近しようとするが……。

グシャッ!!

明日菜

「!?!」

リドリーがベビーマトロイドをトマトのよつに握り潰す。

刹那

「な、なんて事を……………」

ネギ

「酷い……………」

アナウンス

「爆発マデ後二分デス……………」

サムス

「マズイわ…………みんな!急がないと危険よ!」

ネギ

「は、はい!…………明日菜さんも早く行きましょ!」

明日菜

「……………」

明日菜はネギの呼び掛けに答えずにただ立ち尽くしていた。

ネギ

「明日菜さん!!」

明日菜

「……………ネギ、契約執行して。」

ネギ

「えっ!?!」

ネギは明日菜の言葉に耳を疑った。

カモ

「おいおい!時間がねえつてのに奴と闘う気か!?!」

刹那

「無茶ですよ!奴は簡単に倒せるような相手じゃありません!」

ネギ

「そうですね！一刻も早く逃げないと……………」

明日菜

「お願い……………すぐに仕留めるから……………」

そう言うと、明日菜の頬に一筋の涙が流れる。

ネギ

「明日菜さん……………分かりました。」

カモ

「あ、兄貴まで何言ってるんだよ!？」

ネギ

「カモ君、此処は明日菜さんに任せようよ。」

刹那

「で、ですが……………」

サムス

「……………最低でも数秒が限界よ?それでいい?」

ネギ

「はい、ありがとうございます！」

ネギはサムスにお礼を言うと、明日菜に向かって杖を構える。

ネギ

「契約執行三十秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

パアアツ

ネギが呪文を唱えると、明日菜の身体が魔力に覆われる。

リドリー

「キエエエエツ！！」

それと同時に、リドリーが明日菜に向けて鋭い爪を振り下ろそうとする。

明日菜

「っおおおおっ！！」

ボガアアアン！！

リドリー

「グギヤヤツッ!」

明日菜は素早くリドリーを素手で殴り付けて、その衝撃でリドリーは地面へ倒れ込んでしまう。

明日菜

「たああああつ!」

ガシヤヤヤツッ!」

リドリー

「ギエエエエツ!」

更に明日菜は『ハマノツルギ』で地面に倒れ込んでいるリドリーに向けて渾身の力で叩き付ける。

リドリー

「グ……ググ……。」

リドリーはそのまま動かなくなる。

カモ

「スゲー、本当に秒殺だったな……………」

刹那

「よほど奴が憎かったんですね……………」

サムス

「でも、そろそろ行かないと本当に危ないわ。」

ネギ

「明日菜さん！先へ進みましょう！」

明日菜

「……………うん。」

そう言いつつ、全員その場から駆け出していく。

〈要塞出口付近〉

ネギー行とサムスは要塞の出口付近までやって来た。

アナウンス

「爆発マデ後一分デス。」

カモ

「わあ〜！もう間に合わねえ〜！！」

サムス

「大丈夫、スターシップはすぐそこにあるから。」

サムスの言う通り、スターシップが要塞の近くにあった。

ネギ

「あれ？何でこんな所に……………」

サムス

「パワードスーツを転送させた時に此处へ呼び寄せたの。」

刹那

「成程……………ともかく、急いで乗り込みましょう！」

そう言うと、全員スターシップに乗り込む。

〈スターシップ内部〉

ネギー行とサムスは勢い良くスターシップの操縦室へ入り込む。

木乃香

「あ！みんな帰って来はったん……………」。

刹那

「お嬢様、お話は後でお願いします!」

木乃香

「えっ?そないに慌ててどないしたん?」

木乃香は慌てふためく刹那達を見て首を傾げる。

ネギ

「サムスさん!急いで発進させて下さい!」

サムス

「OK!」

ゴゴゴゴゴゴッ

サムスはスターシップを起動させて、惑星ゼーベスから脱出する。

ドオーーーーン!!!

それと同時に、惑星ゼーベスは爆発してしまふ。

その後、のどかにベビーメトロイドのワクチンが投与された。

サムス

「これでのどかちゃんは助かるわ。」

ネギ

「そうですか……………本当に良かった。」

ネギはぐっすり眠っているのどかの寝顔を見て胸を撫で下ろす。

木乃香

「明日菜？なんか元気無いみたいやけど……………」

明日菜

「そ、そんな事無いわよ……………」

明日菜は木乃香の問いに弱々しく答える。

刹那

「明日菜さん……………」

ネギ

「やっぱり、相当ショックだったんですね。」

ネギと刹那は明日菜の悲しげな表情を見て同情する。

サムス

「……………私も明日菜ちゃんの気持ちは痛い程分かるわ。」

ネギ

「えっ？」

ネギ達はサムスの言葉に耳を傾けた。

サムス

「私に懐いたベビーマトロイドの事は話したでしょ？そのベビーマトロイドは私がメトロイドの研究者に渡したんだけど……………その直後にパイレーツの奴らがベビーマトロイドを奪ってしまった……………私はベビーマトロイドを奪回する為に奴らの基地に乗り込んだ……………けど、ベビーマトロイドは奴らに改造されて異常な程に巨大化していて理性を失っていた……………でも、私がマザーブレインにやられそうな時にあの子は奴のエネルギーを吸い取って私に分け与えてくれたの。」

ネギ

「そんな事が……………それで、そのベビーマトロイドはどうなったんですか？」

サムス
「……………死んだわ。」

明日菜
「えっ!?!」

サムスの言葉に全員耳を疑った。

明日菜
「まだ力が残っていたマザーブレインの攻撃を防ぐ為に……………私を守る為に庇ってくれたの。」

明日菜
「ま、まるで私の時と同じだわ……………。」

サムス
「そう、そしてマザーブレインを撃破した私はその後酷く落ち込んだ……………でも、いつまでも落ち込んでてもあの子は絶対に喜ばないと気付いた……………だから明日菜ちゃんも一日も早く元気になってね。」

明日菜
「サムスさん……………。」

サムスの言葉に明日菜は目に涙を浮かべる。

明日菜

「そうですね、私がいつまでも落ち込んでたらチビだって悲しみますよね……………」。

そう言いつと、明日菜は手の甲で目を擦る。

明日菜

「ネギ、そろそろ館へ帰るわよ！」

ネギ

「は、はい！」

木乃香

「それでこそ明日菜やな。」

刹那

「ええ、元気になって本当に良かったですね。」

ネギ達は笑顔になった明日菜を見て安心する。

サムス

(やっぱりあの子は強い子ね………………。)

サムスは明日菜を見え笑みを浮かべる。

第二十一話〜ベビーメトロイドの勇姿〜（後書き）

『メトロイド編』やっと完結しました！

かなり時間が掛かってしまいましたが、何とか終了しました。

メトロイドは未プレイなのであまり自信が無いのですがどうでしょうか？

という事で、次回もお楽しみに！

第二十二話、ドラゴンと双子の赤ちゃん

（大乱闘の館）

ネギー一行はサムスの世界から帰ってきた。

マスターハンド

「今回も遅かったようだ……………ん？のどか君に何かあったのかね？」

マスターハンドは明日葉に抱き抱えられて眠っているのどかを見て反応する。

ネギ

「はい、今回も色々ありまして……………」

ネギはマスターハンドにこれまでの経緯を説明する。

マスターハンド

「『X』か……………それはまた厄介な物に寄生されたな。」

ネギ

「でも、サムスさんが手伝ってくれたお蔭でのかさんは助かりました。」

マスターハンド

「そうか……とにかく、今日一日はいつものようにゆっくりと休むがいい。」

ネギ

「はい。」

そう言いつと、ネギ一行はそれぞれ自分の部屋へ戻っていく。

（翌日）

ネギ一行はいつものように中庭に集合していた。

ネギ

「のどかさん、調子はどうですか？」

のどか

「は、はい……………皆さんには本当にご迷惑をお掛けしました。」

そう言つと、のどかはネギ達に向かって深く頭を下げる。

明日菜

「何言つてんのよ、私達は仲間なんだから助け合つのは当然でしょ？」

木乃香

「そやで、困った時はお互い様や。」

刹那

「そうですね、だからあまりお気になさらないで下さい。」

のどか

「み、皆さん……………」

のどかは明日菜達の言葉を聞いて涙目になる。

マスターハンド

「感動の場面で悪いが、そろそろ次の世界へ行ってもらいたいのだが……………」

ネギ

「あ！そうでしたね……………」

ネギ達はマスターハンドの言葉にハッと気付く。

マスターハンド

「さて、今回は卵の形したバッチをヨツシーに渡してほしい。」

ネギ

「卵の形……ですね。」

ネギが懐から卵を象ったバッチを取り出す。

明日菜

「あれ？ヨツシーって確かマリオさんと一緒にいるあの恐竜みたいな生物だっけ？」

木乃香

「そやったら、マリオはんの世界に行っただついでに渡せとけば良かったんちゃう？」

マスターハンド

「そ、それは……それもそうだな。」

カモ

（コイツ、意外に抜けてるな……。）

ネギ達はマスターハンドを唾然とした表情で見つめる。

マスターハンド

「…………と、とにかく今回も気をつけて言ってきてくれ。」

ネギ

「は、はい。」

ネギ一行はいつものようにワープ土管に入る。

くヨッシーアイランドく

ピヨピヨピヨピ

ネギー一行はワープ土管から出ると、とても広い野原だった。

明日菜

「……………あれ？此処ってキノコタウンじゃないよね？」

ネギー

「そうですね、町じゃなくて広い野原に出たようですね。」

ネギー一行は辺りを見回していると……………。

？

「あ、人間がいるー！」

「え！？本当に？」

？

「近付いてみよう。」

ドドドドドドドドドドドド！

全員

「！？」

突然ネギ一行の前に沢山の恐竜らしき生物が駆け寄ってくる。

ネギ

「な、何々ですか！？」

木乃香

「これ、全部ヨッシーやね……………」

明日菜

「でも、幾ら何でも多過ぎでしょ。」

明日菜は苦笑いしながら様々な色のヨツシー達を見つめる。

赤ヨツシー

「この島に人間が来るなんて珍しいよね？」

青ヨツシー

「そうだね。」

黄ヨツシー

「何処から来たんだろう……。」

ヨツシー達はネギ達に聞こえないようにヒソヒソと話す。

ネギ

「あ、あの……ヨツシーさんはどなたですか？」

ヨツシー達

「はい……！」

ネギの質問にヨツシー全員が手を挙げる。

明日菜

「馬鹿ね、この場にいる全員がヨッシーなのよ……………」。

ネギ

「そ、そうでしたね……………では、マリオさんを知っているヨッシーさんはどなたですか？」

ヨッシー

「え？マリオなら僕が一番知ってるよ。」

そう言うと、緑色のヨッシーが手を挙げる。

ネギ

「そうですか！良かった……………」。

ネギは安心したように胸を撫で下ろす。

ヨッシー

「僕に何か用なの？」

ヨッシーの質問にネギはこれまでの経緯を説明した。

ヨッシー

「そうだったんだ………何だか僕達の為に申し訳無いね。」

ネギ

「そんな事ありませんよ………むしろ、色々な世界へ巡って楽しんでいるんです。」

カモ

「でも、結構危ない目に合ってるけどな……。」

カモがいつものようにネギの肩から顔を出すと……。

ヨッシー

「あー！美味しそ〜。」

シュツ！！

ヨッシーは長い舌でカモを捕らえる。

カモ

「うひゃ〜！た、助けてくれ〜！！！」

ネギ

「カ、カモ君!？」

ヨッシー

「あ、ゴメン……いつものクセでつい……。」

そう言うと、ヨッシーは申し訳無さそうにカモを捕らえた舌を緩める。

カモ

「な、なんて奴だ……俺っちを食べようとしやがって……。」

カモは文句を言いながらネギの肩に戻る。

ネギ

「と、ところで此処は何処なんでしょうか？」

ヨッシー

「此処？僕達ヨッシーが住んでいるヨッシーアイランドっていい島だよ。」

のどか

「ヨッシー……アイランド。」

刹那

「此処は島だったんですね……………」

のどかと刹那はヨツシーに場所を聞いて納得する。

ネギ

「それより、ヨツシーさんにもこれをお渡しします。」

ネギは卵型のバッチをヨツシーに渡す。

ヨツシー

「どうもありがとうございます……………そんなじゃ、頂きまゝです!」

シュツ!

パクツ!

全員

「ああ……………っ!?!」

ヨツシーがネギに渡されたバッチを舌で掴んで、そのまま飲み込ん

でしまう。

のどか

「た、食べちゃいましたね……………」

カモ

「コイツ、何処まで食い意地張ってんだ……………」

明日菜

「ま、まあ……………これはこれで一応渡したから良いんじゃない？」

刹那

「そ、そうでしょうか……………」

ネギ一行は苦笑いしながらヨッシーに聞こえないようにヒソヒソと話す。

ヨッシー

「あれ？どうかした？」

ネギ

「い、いえ……………それより、最近何か変わった事はありませんでしたか？」

ヨッシー

「変わった事？困った事ならあるけど……………」。

木乃香

「困った事？」

木乃香がヨッシーの言葉を聞いて首を傾げると……………。

？

「おぎゃー！おぎゃー！」

突然赤ん坊の泣き声が響き渡る。

明日菜

「何？赤ちゃんの泣き声のようだけど……………」。

ヨッシー

「きつと、お昼寝から目覚めたんだ……………誰かあの子達を連れてきて
）」！

赤ヨッシー

「分かった。」

青ヨッシー

「任せて〜。」

そう言うと、赤と青のヨッシーが何処かへ駆け出していく。

木乃香

「あの子達って誰なん？」

ヨッシー

「実は僕達もよく分からないんだけど……………空から三人の赤ん坊が降ってきたんだ。」

のどか

「え？赤ちゃんが空から……………。」

ネギ達はヨッシーの言葉に耳を疑った。

赤ヨッシー

「お〜い！」

青ヨツシー

「連れてきたよ〜!」

赤ヨツシーと青ヨツシーが背中に何かを乗せて戻ってきた。

ヨツシー

「丁度良かった……とにかく、その赤ん坊を見てごらん。」

ネギー一行はヨツシーに言われて赤ん坊を見ると、赤ヨツシーの背中に赤い帽子と赤い服に青いオーバーオールを着た男の子の赤ん坊と緑色の帽子と緑色の服に青いオーバーオールを着た男の子の赤ん坊がスヤスヤと気持ち良さそうに眠っていた。

木乃香

「わ〜、まるで双子みたいやな。」

のどか

「可愛い……。」「

刹那

「ん？この服装……。」「

刹那は双子のような赤ん坊を食い入るように見つめる。

ネギ

「刹那さん、どうかしましたか？」

刹那

「ええ、この子達の格好……………マリオさんとルイーダさんに似ていると思ひまして……………」

明日菜

「あっ！言われてみれば確かに似てるわね。」

刹那の言葉に明日菜は納得する。

ヨッシー

「やっぱりみんなもそう思つたよね……………」この子も見てみてよ。」

そう言つた、ヨッシーは青ヨッシーの背中に乗せてる赤ん坊に指さす。

全員

「ああっ！？」

ネギ達は青ヨツシーの背中に乗っかっていた、おしゃぶりを口にくわえてる女の子の赤ん坊を見て驚愕した。

木乃香

「この子、何かピーチ姫に似てへん？」

明日菜

「そ、そっね……………この王冠といい、髪型といい……………」

ヨツシー

「僕には赤ん坊の頃のマリオ達にしか見えない気がするんだ。」

ネギ

「ま、まさか……………」

？

「おぎゃー！おぎゃー！おぎゃー！おぎゃー！」

突然ピーチそっくりの赤ん坊が泣き出す。

青ヨツシー

「あわわ、さっき泣き止ましたのに……………」

ネギ

「ど、どうしましょー!？」

明日菜

「ど、とにかく泣き止ませないと……。」

全員ビーチそっくりの赤ん坊をあやすのに躍起しゅうせいになる。

くヨッシーアイランド上空く

?

「うむ、確かこの辺りのハズじゃが……………」。

ヨッシーアイランドの上空に、眼鏡を掛けて紫の服を着た老婆が箒に跨がって浮かんでいた。

?

「調査によると、此処ら一帯に過去と繋がっている時空の穴が開いたというが……………」とつやらとつくに閉じてしまったよつぢゃのう。」

そう言つと、老婆はその場から立ち去るとするが……………」。

?

「待て！その古いぼね。」

?

「な、何ぢやと!？」

老婆が声に反応して動きを止めると、同じく眼鏡を掛けて青い服を着た人物が箒に跨がって浮かんでいた。

?

「ム?お主もカメツクか……見ない顔ぢやが新入りか？」

カメツク

「何を訳の分からない事を……それより、此処が何処なのか教えてもらおうじゃないか？」

?

「新入りのクセに随分偉そうぢやのう……ワシはクツパ様に古くから仕えているカメツクババぢやぞ！」

カメツク

「何!？クツパ様だつて？」

カメツクはカメツクババの言葉に耳を疑った。

?

「カメツク、何を騒いでるんでちゆか？」

カメツクが背負っている袋の中から、亀のような顔した赤ん坊が目を擦りながら顔を出す。

カメツク

「あらら、クツパ坊ちゃまったら起きてしまったようですね。」

カメツクババ

「何っ!?!クツパ坊ちゃまぢゃと?」

カメツクババはカメツクの言葉を聞いて耳を疑った。

カメツクババ

（確かにあの子は御幼少時代のクツパ様に瓜二つぢゃ………もしや、あの子は昔のクツパ様で、あのカメツクは若い頃のワシだということか!?!）

カメツクババは信じられないような表情でベビィクツパと若い頃のカメツク自分を見つめる。

ベビィクツパ

「ところでカメツク、このオババは誰でぢゅか?」

カメック

「さあ……………私もさつき出会ったのでよく分からないんです。」

ベビィクツパは不思議そうにカメックババを見つめる。

カメックババ

「……………一つ聞いてもいいかのお。」

カメック

「ん？何だい？」

カメックババ

「この時代に来る前に何か変わった事は無かったかのお？」

カメック

「言っている事がよく分からないけど……………クツパ坊ちやまの命令でピーチ姫を誘拐しようとしたら、あの生意気な小僧がいつものように邪魔してきて小競り合いになった……………その時、空に大きな穴が開いて、私達はその穴に吸い込まてしまったのだ。」

カメックババ

（やはりそうだったか……………。）

カメックババはカメックの言葉を聞いて確信を得る。

カメックババ

「ん？ちよつと待て……………さっき生意気な小僧と言ったが、もしやその小僧というのは……………」。

カメック

「将来クッパ一族に災いを齎もたらすとされている忌まわしい小僧………確か名前はマリオといったな。」

カメックババ

「マ、マリオぢやと!?!」

カメックババはカメックの言葉を聞いて更に耳を疑った。

カメックババ

「……………もう少し詳しい話を聞かせて貰おうかのお。」

そう言うと、カメックはカメックババに話し始める。

その頃、ネギ一行とヨツシー達はピーチそっくりの赤ん坊をあやすのにクタクタになっていた。

明日菜

「ふっっ、やっと泣き止んだ……。」「

ネギ

「赤ちゃんって泣き出すと中々泣き止みませんよね。」

木乃香

「赤ちゃんは泣くのが仕事やからな。」

？

「ふわあゝ、よく寝むった〜……………」

突然赤い帽子の男の子が目を覚ます。

のどか

「あ、男の子が起きました。」

？

「あれ？此処は何処？」

男の子はキョロキョロと辺りを見回す。

ヨッシー

「此処はヨッシーアイランドだよ。」

?

「ヨッシーアイランド?」

男の子はヨッシーの言葉を聞いて首を傾げる。

木乃香

「ところで、君の名前はなんてゆうの?」

?

「僕?僕はマリオだよ。」

全員

「……………え?」

全員男の子の名前を聞いて一瞬固まる。

?

「……………」

すると、緑の帽子の男の子が目を擦りながら目覚める。

マリオ?

「あ！ルイージが起きた。」

ヨッシー

「ル、ルイージ！？」

マリオと名乗る男の子の発言に全員更に耳を疑った。

ルイージ？

「あ、兄ちゃん。」

マリオ？

「ルイージ、何処か怪我してない？」

ルイージ？

「うん、大丈夫みたい……………」

マリオ？

「そう、良かった。」

マリオ(?)はルイージ(?)の言葉に胸を撫で下ろす。

ネギ

「こ、これは一体どうゆう事でしょうか？」

明日菜

「私に聞いても知らないわよ……………」。

ヨッシー

「うん……………」。

？

「ワシが教えてあげようかい？」

全員

「!？」

全員声が出た方を見上げると、上空にカメックババとカメック&ベ
ビクツパがいた。

刹那

「何者だ!？」

ヨッシー

「あつ！確かクツパと一緒にいるカメックの婆さんだ。」

明日菜

「じゃあ、クツパの手下って訳ね……………」

カメツクババ

「それより、その小僧共が何者なのか知りたくはないかのお？」

ネギ

「え？何か知ってるんですか？」

ネギ一行はカメツクババの意味深な発言に耳を傾ける。

カメツクババ

「実は最近、この島の上空に過去と繋がった次元の穴が一時的に開いたんぢゃが……………その穴から三人の赤ん坊が落ちてきたんぢゃ。」

のどか

「過去と繋がった次元の穴……………？」

ネギ

「じゃあ、この子達はもしかして……………」

カメツクババ

「ほお、頭の冴える小僧ぢや……その通り！その小僧共は過去の時代からやって来たマリオとルイージなのぢや！！」

全員

「ええー！ーっ!？」

全員カメックババの言葉を聞いて驚愕する。

木乃香

「ほなら、この女の子はひょっとして……。」

カメックババ

「そうぢや、クツパ様が今なおも溺愛されておられるピーチ姫ぢや。」

「

ベビィクツパ

「ピーチ姫、やっと会えたでちゅー！」

突然ベビィクツパがカメックの背後から顔を出して、スヤスヤ眠っているベビィピーチに向かって手を振る。

明日菜

「あれ？その子ってもしかして……クツパ!？」

カメック

「そうさ、この目に入れても痛くない程可愛らしい子がクッパ坊ちやまである。」

カメックババ

「正確に言えば、御幼少の頃のクッパ大王様ぢやな。」

明日菜

(やっぱり……………似てるだけあってあまり可愛くないわね。)

明日菜は苦笑いしながらベビィクッパを見つめる。

カメックババ

「さて、話を元に戻すが……………マリオをこちらへ渡して貰おうかの
お。」

ネギ

「えっ!?!」

ヨッシー

「マ、マリオをどっしするつもり!?!」

カメックババ

「決まっておろう？過去のマリオがいなくなれば現代のマリオはいなくなる……だから、この場で過去のマリオを始末するのぢや！」

明日菜

「何ですって？まだこんなに幼い子供を……。」

ネギー一行とヨッシーはカメックババの言葉を聞いて表情が険しくなる。

カメックババ

「だから今の内に始末するんぢやろ？……さあ、早くその小僧を渡すのぢや！」

ヨッシー

「嫌だ！マリオは絶対に渡さない！！」

そう言うと、ヨッシーはベビィマリオを守るように抱きしめる。

カメックババ

「ほお、このワシに齒向かうつもりか……ならば、ワシの魔法を受けてみよ……！」

ビィィッ!!

カメツクババは懐から杖を取り出して、ヨッシーに向けて光線を放つ。

ネギ

「風楯!!」

バシユユツ!!

カメツクババ

「な、何と!?!」

ネギがカメツクババの放った光線を魔法の楯で防ぐ。

ネギ

「まだこんな幼い子供を手に掛けようとするなんて……………そんな事、僕達が許しません!!」

カメツク

「生意気な……………それなら、力付くまで奪うまでさ!!」

そう言うと、カメックはベビィマリオに向かって突っ込もうとするが……………。

ヨッシー

「それっ!！」

ビビュッ!!

カメック

「おっと!？」

ヨッシーはカメックに向けて卵を投げ付けるが、カメックは間一髪避ける。

ヨッシー

「マリオには指一本触らせないぞ!！」

カメック

「おのれ、どいつもこいつも……………」

カメックはヨッシーに向けて杖を構えようとするが……………。

カメツクババ

「待て！この場は一旦退却するぞ。」

カメツク

「何だつて！？」

カメツクババの言葉にカメツクは耳を疑った。

カメツクババ

「ワシに考えがある……だから、今は退却するのぢや。」

カメツク

「チツ、分かったよ。」

ベビィクツパ

「ピーチ姫、また会いに来るでちゅ。」

カメツクはカメツクババの指示に従って退却する。

カメツクババ

（あの小僧、ワシの魔法攻撃を簡単に防ぎおった……ただ者ではないな。）

カメックババもネギを睨み付けながら退却する。

のどか

「……………行っちゃいましたね。」

明日菜

「でも、あいつらまた現れるハズよ。」

刹那

「そうですね、恐らくマリオさんを狙って……………。」

ヨッシー

「大丈夫、僕が命に代えてもマリオを守るから。」

そう言うと、ヨッシーはベビィマリオを抱き上げる。

ベビィマリオ

「あ、ありがとう……………トカゲさん。」

ヨッシー

「い、いや……………僕はトカゲじゃなくて恐竜なんだけど……………。」

ベビィマリオの言葉にヨッシーは苦笑いを浮かべる。

木乃香

「何かヨッシー君がマリオはんの保護者に見えるわ〜。」

刹那

「そうですね。」

木乃香達はヨッシーとベビィマリオを見て微笑む。

ネギ

「……………ヨッシーさん、僕達もマリオさんの護衛をさせて下さい。」

ヨッシー

「え？ネギ達も一緒に協力してるの？」

明日菜

「勿論よ、マリオさんには色々お世話になったしね。」

ベビィマリオ

「僕、お姉ちゃん達に何かしたの？」

ベビィマリオは不思議そうに首を傾げながら明日菜に尋ねる。

明日菜

「あ、いや……………君が立派な大人になってからの話よ。」

明日菜は慌てながらベビィマリオに説明する。

ネギ

「とにかく、僕達もマリオさん達の為に頑張ります！」

ヨッシー

「みんな……………どうもありがとう。」

ヨッシーはネギ達に向かって深く頭を下げる。

ベビィマリオ

「ネギお兄ちゃん、僕達の為にどうもありがとう！」

ベビィルイージ

「お、お姉ちゃん達もありがとう……………。」

ベビィマリオとベビィルイージもネギ達に向かって深く頭を下げる。

ネギ

「い、いえ……………どう致しまして……………」

木乃香

「や〜ん、可愛過ぎるわ〜。」

刹那

「それに、子供にしては礼儀正しいですね。」

木乃香達はベビィマリオとベビィルイージの礼儀正しさに感心する。

ベビィピーチ

「ううっ……………おきゅー！おきゅー！おきゅー！」

ヨッシー

「わ〜、またピーチ姫が泣き出した〜！」

カモ

「またかよ……………」

ネギ

「と、とにかく急いで泣き止まさないと……。」

ネギ一行とヨッシーは突然泣き出したベビィピーチを再びあやし始める。

第二十二話、ドラゴンと双子の赤ちゃん（後書き）

ベビィマリオ達を守る事になったネギー行とヨッシーにこれから何が待ち受けるのか！？

次回をお楽しみに！

第二十三話 強力な七人衆現る (前書き)

ネギー行とヨッシーは過去からやって来たマリオ達を守る事となった。

今回はかなり短いのですが、あのキャラ達が登場します。

第二十三話　強力な七人衆現る

ヨッシーアイランドの洞窟内

カメックババ

「もしもし、ワシじゃが……………」

カメックババは携帯電話で誰かと連絡していた。

カメックババ

「ヨッシーアイランドという島を知っておるか？……………そう、ヨッシーが沢山住み着いておるあの島じゃ……………うむ、その島へ大至急来るのぢや……………よいか？この事はクツパ様には内緒ぢやぞ。」

ピッ

カメックババは携帯電話の電源を切り、携帯電話を懐にしまう。

ベビィクツパ

「カメック、早くピーチ姫と遊びたいでちゅよ。」

カメック

「も、もうしばらくお待ち下され……………」。

カメックは駄々をこねてるベビィクツパを宥めていた。

カメック

「おい！古い方の私よ、いつまでこんな洞窟に隠れているつもりだ
い？」

カメックババ

「まあまあ、そう慌てるな若い方のワシよ……………今さっき、援軍を
呼んでおいたからもう少しの辛抱ぢゃ。」

カメック

「援軍？」

カメックババ

「そう、とても頼もしい援軍がやって来るのぢゃ……………」。

そう言うと、カメックババは怪しげな笑みを浮かべる。

くヨツシーアイランドのとある広場く

ネギー行はベビィマリオとお喋りをしていた。

ネギ

「へえく、君は大人のマリオさんと会った事があったんだ。」

ベビィマリオ

「うん、一緒に冒険してゲドンコっていう悪い宇宙人をやっつけたんだよ。」

ベビィルイージ

「ほ、僕も兄ちゃん達と協力したよ……………」

ヨッシー

「その冒険なら前にマリオから聞いた事ある……………確かオヤ・マー博士が作ったタイムマシンが事件のきっかけだったんだよね。」

のどか

「タイムマシン……………そんな物があるんですね。」

刹那

「ん？待てよ……………」

刹那は腕を組んで深く考え込む。

木乃香

「せつちゃん、急にどないしたん？」

刹那

「いや、思ったんですけど……そのタイムマシンがあればマリオさん（ベビィ）達を元の時代へ戻す事が出来るなと思ひまして……」

ヨッシー

「あ！そう言えばそうだよな。」

ヨッシーは刹那の言葉に納得する。

ヨッシー

「オヤ・マー博士に頼んでタイムマシンを貸してもらえばいいんだ。」

明日菜

「成程、それは良い考えね。」

ネギ

「でも、一体どうやって……」。

ヨッシー

「うーん……あ！そうだ！……」

そう言つて、ヨッシーはその場から立ち去っていく。

木乃香

「……行つてもうた。」

明日菜

「急にどうしたんだろう?」

ヨッシー

「お待たせ〜！」

しばらくすると、ヨッシーが急いでネギ達の元へ戻ってきた。

のどか

「あ、戻って来ましたね……………」

ネギ

「何処へ行ってたんですか？」

ヨッシー

「オヤ・マー博士宛てに『タイムマシンを貸して』って手紙を書いたんだ。」

明日菜

「そうだったんだ……………でも、その手紙をどうやって届けるの？」

ヨッシー

「その事なら大丈夫だよ。」

ピーーッ！

ヨッシーが指をくわえて口笛を吹いた瞬間……。

？

「ワオワオッ！」

突然大型犬のような生物が駆け寄ってくる。

木乃香

「こ、これって……犬なん？」

ヨッシー

「そう、ポチっていうんだ。」

カモ

「随分在り来りた名前だな……。」

カモはポチの名前を聞いて苦笑いする。

ヨッシー

「ポチ、この手紙をオヤ・マー博士に届けてほしいんだ。」

ポチ

「ワオワオッ！」

ポチは手紙を口にくわえて、そのまま駆け出していく。

刹那

「……………果たして手紙は届くのでしょうか？」

ヨッシー

「大丈夫、ポチは体が頑丈な上に泳げるし……………」

明日菜

（そ、そついう問題かな？）

明日菜はヨッシーの言葉に内心不安になる。

ネギ

「とにかく、博士が来るまでマリオさん（ベビィ）達を悪者から守

りませう。」

明日菜

「そうね、さっきの連中がいつ襲って来るか分からないしね。」

木乃香

「……………あや？あれは何やる？」

のどか

「えっ？」

全員木乃香の指さす方を見ると、上空に大型船らしき物体が浮上していた。

ネギ

「船が飛んでる……………」

明日菜

「もしかして、もう博士が来たの？」

刹那

「いや、幾らなんでも速過ぎですよ……………」

ヨッシー

「あれは、もしかして……………」

ヨッシーが呟いた瞬間、船はネギ達が居る場所よりも少し離れた場所へ着陸する。

?

「みんな、着いたぞ！」

?

「へへ、やっと着いたか。」

?

「一斉に降りるぞ。」

?

「へい、ホー！」

すると、クツパより小型で背中にトゲを生やした七体の亀と赤い服と丸い目と口だけの仮面を被った複数の人物達が一斉に船から降りる。

明日菜

「な、何かいっばい出て来たんだけど……。」

ヨッシー

「あれはヘイホーとコクツパ七人衆だよ。」

ネギ

「コクツパ？」

ネギはヨッシーの言葉に耳を傾ける。

ヨッシー

「クツパの子供達と呼ばれている強力な部下達だよ……前に僕や仲間達を卵に閉じ込めてさらったのもあいつらなんだ。」

のどか

「そ、そんな悪い人達がどうして此処へ……。」

刹那

「恐らく、あのカメックババという者が呼び寄せたのでしょう。」

？

「ん？あそこに誰か居るぞ！」

？

「ハイホー共！逃げられないように囲めー！！」

ハイホー達

「ハイ、ホー！！」

青いロングヘアで緑色の甲羅のコクツパが合図した途端に、複数のハイホー達がネギ達が逃げないように囲む。

刹那

「し、しまった！」

木乃香

「これじゃ、逃げられへん！」

？

「へっ、誰一人逃がしやしねえよ。」

そう言うと、七人のコクツパがネギ達の前に現れる。

？

「お前らの事はカメツクババ様から聞いたぞ……素直に赤ん坊の
マリオを渡せば見逃してやってもいいぞ。」

？

「ついでに赤ん坊のピーチ姫もね。」

頭に三本の毛を生やして顔に星型の入れ墨をしたコクツパと頭にピ
ンクのリボンをつけた女の子のコクツパが怪しい笑みを浮かべなが
ら言う。

ネギ

「……………お断りします。」

？

「……………何だつて？」

？

「今、何て言った？」

小柄で青いモヒカンのような髪型のコクツパとスキンヘッドにサン
グラスを着用したコクツパがネギの言葉に耳を疑った。

明日菜

「聞こえなかったの？アンタ達のような連中にこの子達は渡さない
って言ったのよ！」

ヨッシー

「そつだそつだ！死んでも渡さないぞー！」

ベビイマリオ

「みんな……………」

ベビイマリオは明日菜やヨッシーの言葉に心打たれる。

？

「君達、もしかして僕達とやり合うつもりなのかい？」

？

「ケケケ、コイツら馬鹿だね。」

虹色のモヒカンに眼鏡を掛けたコクツパと同じく虹色のモヒカンに
目の焦点が合っていないコクツパが明日菜達の言葉を嘲笑う。

？

「……………いいだろう、そこまで言うのなら相手をしてやる。」

青いロングヘアーのコクツパが言うと、コクツパ全員がネギ達に向かって身構える。

ネギ

「明日菜さん！のどかさん！」

のどか

「は、はい！」

明日菜

「分かってるって！」

明日菜&のどか

「アデアット！！！」

パアアアッ

ネギの合図で、明日菜は『ハマノツルギ』を、のどかは『いどのえにつき』を呼び出す。

刹那

「お嬢様、マリオさん達をお願いします。」

木乃香

「分かった……………ほら、お姉ちゃんと一緒に少し離れよ?」

ベビイルイージ

「で、でも……………」

ベビィマリオ

「ルイージ、今の僕達じゃあいつらを倒せないよ……………だから、ヨッシーやネギ兄ちゃん達に任せよう。」

ベビイルイージ

「そ、そうだね……………」

ベビイルイージが渋々承諾すると、木乃香はベビィピーチを抱っこしてベビィマリオの手を握りながらその場から少し離れる。

?

「よし、お互い準備が整ったな……………イギー!モートン!お前らはあのハリセンを持った小娘の相手をしてやれ。」

イギー

「はいよ。」

モートン

「へっ、女なら楽勝だぜ。」

イギーとモートンは青いロングヘアの指示に従って、明日菜の元へ近付く。

？

「ロイとウェンディはあの刀を持った小娘の相手をしてやれ。」

ウェンディ

「分かったわ。」

ロイ

「任せとけ。」

そう言つと、ロイとウェンディは刹那の元へと近付く。

？

「ラリーとレミーはヨッシーと本を持った小娘の相手だ。」

レミー

「へいへい。」

ラリー

「すぐに終わらせてやるぞ。」

そう言うと、ラリーとレミーはヨッシーとのかの元へと近付く。

？

「小僧、カメックババ様の話によると、お前はとてつもない魔力を秘めているらしいな……ならば、お前はこのルドウィッグ様が相手になってやる！」

ネギ

「……………分かりました、僕も全力でお相手します。」

そう言うと、お互い攻撃体制へと移る。

ルドウィッグ

「行くぞー！ー！ー！」

ルドウィッグはそのままネギに向かって突っ込んでいく。

第二十三話 強力な七人衆現る (後書き)

ネギー行とヨツシーはコクツパ達を倒す事は出来るのか？

次回もお楽しみに！

第二十四話、ネギー行&ヨツシーVSコクツパ七人衆（前書き）

コクツパ七人衆と闘う事になったネギー行とヨツシーは果たして勝てるのか？

第二十四話、ネギー一行&ヨッシーVSコクッパ七人衆

「明日菜VSイギー&モートン」

モートン

「ケツ、女が相手じゃあつまらねえな。」

イギー

「それじゃ、僕が早めに終わらせてやるよ。」

そう言つと、イギーはじわじわと明日菜に近付いていく。

明日菜

「言つとくけど、女だからって油断していると痛い目見るわよ。」

イギー

「ほお、ならば………見せてもらおうか!」

そう叫びながら、イギーは明日菜に襲い掛かるが………。

明日菜

「とじやあああっ!」

パシィイイン！！

イギー

「へぶっ！？」

ガシヤヤヤン！！

明日菜は『ハマノツルギ』でイギーを吹っ飛ばして、イギーは大きな岩に叩き付けられる。

モートン

「な、何だと！？」

モートンは信じられないような目で岩に埋め込まれてるイギーを見る。

明日菜

「だから言ったでしょ？女だからって油断していると痛い目見るってね」

モートン

「た、確かに油断出来ねえな……………だったら俺も容赦しねえからな
!」

ビョーーン

そう言うと、モートンはそのまま高くジャンプする。

モートン

「おじゃあああっ!」

ドッシーーン!」

モートンは勢い良く着地して、地面が地震のように揺れ動く。

明日菜

「あわわ……………し、震動で動けない……………」

モートン

「だろうな……………その隙に攻撃するって寸法さ!」

そう言うと、モートンは鋭い爪を振りかざしながら震動で動けない明日菜に駆け寄ってくる。

明日菜

「くっ!!」

ガキイイン!!

明日菜は『ハマノツルギ』で、モータンの攻撃を防ぐ。

モータン

「このっ!!……だが、力比べなら俺の勝ちだ!」

モータンはそのまま明日菜を地面へ押し潰そうとする。

明日菜

「……………さあ、それはどうかしら?」

そう言うと、明日菜は『ハマノツルギ』でモータンを押し出している。

モータン

「な、何て怪力だ……………俺が押されてるなんて……………。」

明日菜

「残念だったわね……………とりゃあああつ！！」

モートン

「わああつ！？」

ドスン！！

モートンは明日菜に押し出され、後ろへひっくり返ってしまつ。

モートン

「ヤ、ヤベエ！これじゃ攻撃出来ねえ……………。」

モートンは必死にもがくが、もはや自力で起き上がれない状態だつた。

明日菜

「これで終わりよ！」

バシヤヤヤン！！

モートン

「ぐえ〜〜〜〜っ!!」

明日菜はモートンに向けて『ハマノツルギ』を振り落として強力な一撃を加える。

モートン

「こ、この俺が……こんな小娘にやられるとは……………」

そう呟くと、モートンはそのまま気絶してしまふ。

明日菜

「…………ふう、何とかやっつけたわね。」

明日菜は汗を拭いながら一安心する。

～刹那VSウエンディ＆ロイ～

刹那

「神鳴流奥義・斬岩剣!!」

ロイ

「おっと!!」

刹那はロイに攻撃を繰り返すが、ロイは難無く避ける。

ウエンディ

「へえ、あの子結構やるわねえ。」

ロイ

「ああ、少しは楽しめそうだな……………」

ウエンディとロイは怪しい笑みを浮かべながら刹那を見つめる。

刹那

（二対一では、こちらが不利だ……………まずは一人に絞って集中的に攻撃して倒すしかない。）

刹那がどちらから先に攻撃しようか悩んでいた時……………。

ウエンディ

「チャンスだわ！」

ヒュッ！！

ウエンディは刹那に向けて大きなリングを投げ付ける。

刹那

「な、何だ？あのリングは……………」

そう呟くと、リングは刹那の真上に止まった。

ガッ！！

刹那

「なっ！？」

すると、突然リングが刹那の腹部まで下降して、リングは刹那を締め付けるように一気に収縮する。

ウエンディ

「そのリングは、相手を捕らえて動きを封じる事が出来るのよ。」

ロイ

「良くやったぞウエンディ、これで奴は刀を持てまい。」

刹那

（し、しまった……………これでは夕凧を構える事が出来ない！）

刹那は必死にもがくが、手の自由が効かずに地面に落ちた夕凧を拾

う事すら困難だった。

ガシッ！！

刹那

「ぐっ！！」

突然ロイが刹那のサイドテール（左側の方へ縛った髪）を掴み上げる。

ロイ

「これで終わりだな……………喰らえ！！」

ロイは刹那に向けて鋭い爪を突き付けようとする。

刹那

（こゝ、これまでなのか……………。）

刹那が死を覚悟して目を閉じた時……………。

ゴッソッ！！

ロイ

「いだっ!!」

ロイの顔面に石が命中して、刹那の髪を掴んでいた手を放す。

木乃香

「せっちゃん!大丈夫!？」

刹那

「こ、このちゃん?」

刹那は咄嗟に木乃香の方を向くと、石を何個か持っていた木乃香が目に写った。

木乃香

「危ないところやったな。」

刹那

「あ、ありがとうございます……………助かりました。」

ロイ

「うぬぬ……………お、おのれ。」

ロイは命中した部分を押さえていた手を放すと、着用していたサングラスの右部分のレンズにヒビが入っていた。

ロイ

「よくも俺のお気に入りのサングラスを……………高かったんだぞ!!」

そう叫ぶと、ロイは木乃香に向かって突っ込んでいく。

刹那

「や、やめろ！木乃香お嬢様に手を出すな!!」

刹那は大きな声で叫ぶように言いながら立ち上がる。

ロイ

「やなこった！俺のサングラスにヒビを入れた罰だ!!」

木乃香

「ひっ……………」

ロイが木乃香にどんどん接近してきた時……………。

ベビィマリオ

「今だ！甲羅シュート！！」

パコッ！！

突然ベビィマリオがロイの前に現れて、赤い色の甲羅を蹴り飛ばす。

ボガッ！！

ロイ

「ぐえっ！！」

ロイの顔面に命中した甲羅は、ベビィルイージの方へ跳ね返ってくる。

ベビィルイージ

「そ、それっ！！」

パコッ！！

ベビィルイージもロイに向けて甲羅を蹴り飛ばす。

ボガッ!!

ロイ

「ぬがつ!!」

またしてもロイの顔面に命中して、甲羅はベビィマリオの方へ跳ね返ってくる。

ベビィマリオ

「まだまだ行くよー!」

パコッ!!

ボガッ!!

ロイ

「ぐおっ!!」

ベビィルイージ

「..!!」

パコッ！！

ボガッ！！

ロイ

「あがつー！！」

ベビィマリオが蹴り飛ばして、ロイの顔面に命中して跳ね返ってきた甲羅をベビィルイージが蹴り飛ばして、またロイの顔面に命中して跳ね返ってきた甲羅をベビィマリオが蹴り飛ばして………という行動が何度も繰り返される。

木乃香

「ナ、ナイスコンビネーションやな………。」

刹那

「やはり兄弟ですね………。」

木乃香と刹那はベビィマリオとベビィルイージの連携プレイに啞然とする。

明日菜

「刹那さん、ポケットとしてる場合じゃないでしょ！」

刹那

「ハッ！そ、そうでした……………」

刹那は後ろから明日菜に声を掛けられて意識を取り戻す。

明日菜

「その前にちょっと待っててね……………今からこのリングを外してあげるから……………」

刹那

「えっ！？は、外すって……………」

刹那が明日菜の言葉に耳を疑う中、明日菜は刹那を掴んでるリングに手を掛ける。

ウェンディ

「無駄よ、そのリングはそう簡単には壊せないわ……………」

明日菜

「ふんっ！…！」

ガシャン！！

明日菜が渾身の力を入れてリングを捻曲げるように掴むと、リングは簡単に壊れてしまった。

ウエンディ

「う、嘘……………」

ウエンディは信じられないような表情で啞然とする。

刹那

「あ、ありがとうございます！」

刹那は明日菜にお礼を言うと、地面に落ちてる夕凧を拾う。

ウエンディ

「マ、マズイわ……………」

ウエンディはその場から立ち去ろうとしたが……………。

刹那

「逃がすものか！神鳴流秘剣・百花繚乱！！」

ズバアアアツ！！

ウエンディ

「あ~~~~れ~~~~！！！！」

刹那の攻撃でウエンディは吹っ飛ばされてしまう。

バッターーーン！！

そして、ウエンディはそのまま地面へ落下していく。

明日菜

「やったわね刹那さん！！」

刹那

「はい！明日菜さん達のお蔭です。」

パシッ！

明日菜と刹那はお互いにハイタッチする。

ロイ

「も、もう……………駄目……………」

バッターーン!!

ロイはベビィマリオとベビィルイージの連続攻撃を受けて顔が酷く腫れ上がり、そのまま倒れ込んでしまう。

ベビィマリオ

「やったー！悪者をやっつけたー!!」

ベビィルイージ

「やったね兄ちゃん！」

パシッ!

ベビィマリオとベビィルイージも喜びながらハイタッチする。

木乃香

「ホンマに仲のええ兄弟やな。」

木乃香は笑顔を浮かべながらベビィマリオとベビィルイージを見つめる。

「のどか&ヨッシーvsレミー&ラリー」

ラリー

「たかが女とヨッシー相手なら楽勝だな。」

レミー

「ケケケ、早いところやっつけようぜ。」

ラリーとレミーは怪しい笑みを浮かべながらのどかとヨッシーに近付いていく。

のどか

「あ……あう……。」

のどかは少し怯えながら後ろへ後退りする。

ヨッシー

「君はのどかちゃんだっけ……僕の背中に乗って。」

のどか

「えっ？でも……。」

のどかはヨッシーの発言に少し困惑する。

ヨッシー

「いいから早く。」

のどか

「は、はい……………」

のどかは少し戸惑いながらヨッシーの背中に乗っかる。

レミー

「あれれ〜？もしかしてその子を乗せたまま僕達と戦うつもり？」

ラリー

「ケツ、随分舐めた真似してくれるな。」

レミーとラリーは嘲笑うかのように言う。

ヨッシー

「それじゃ、しっかり掴まってね！」

ダッ！！

のどか

「わっ!?!」

ヨッシーはのどかを背中に乗せたまま勢い良く駆け出していく。

ラリー

「来たな………これでも喰らえ!」

そう言うと、ラリーは首を甲羅の中へ引っ込ませる。

ラリー

「火炎発射!!」

ズドドドドドツ!!

ラリーは首を引っ込ませた穴から火炎弾を連射させる。

ヨッシー

「おっつと!」

ヨッシーは俊敏にラリーの攻撃を避ける。

レミー

「は、速いな……………」

ラリー

「ちくしょ〜……………ヨッシーなんか舐められてたまるかー!!」

ラリーは鋭い爪で身構えながらヨッシーに向かって突っ込んでいく。

のどか

「ヨッシーさん、左へ避けて下さい!」

ヨッシー

「えっ!? わ、分かった……………」

ヨッシーはのどかの言われた通りに左側へ避けると……………。

ラリー

「あ、あれっ!?!」

ラリーは攻撃をかわされてよろめいてしまっ。

ラリー

「こ、このっ！..」

ラリーは再びヨッシーに攻撃を仕掛けようとするが.....。

のどか

「次は右です！」

ヨッシー

「う、うん！」

ヨッシーは右側へ移動して、ラリーの攻撃を避ける。

ラリー

「何で俺の攻撃が当たらないんだよおおっ！..」

更にラリーはヨッシーに噛み付こうとするが.....。

のどか

「今度は後ろへ一歩下がって下さい..」

ヨッシー

「OK!」

ヨッシーは後ろへ一歩下がってラリーの噛み付き攻撃から逃れる。

ヨッシー

「今度はこっちの番だ!」

ゴッソーン!!

ラリー

「いでっ!」

ヨッシーはラリーの顔面に強烈な頭突きを繰り返す。

ラリー

「いっつて〜……………」

ラリーはその場で顔を手で押さえながらしゃがみ込む。

ヨッシー

「まだまだっ！」

ビシッ!!

ラリー

「ぐえっ!!」

更にヨッシーは太い尻尾でラリーに攻撃する。

ヨッシー

「仕上げはこれで……。」

プヨーン

ヨッシーはその場で高くジャンプする。

ヨッシー

「ヒップドロップ!!」

ドッシーーン!!

ラリー

「むじっ……！」

ヨッシーはお尻から勢い良く垂直方向へ落下して、ラリーの頭に直撃する。

ラリー

「ま、負けた……………」

バタッ！！

ラリーはそのまま前から倒れ込む。

レミー

「あわわわ……………ラリーがやられちゃった。」

レミーは少しずつ後退りしながら驚愕する。

のどか

「ヨッシーさんって強いんですね。」

ヨッシー

「そりゃ、僕もマリオ達と同じスマツシュブラザーズの一員だからね。」

ヨッシーは少し誇らしげに自慢していると……。

レミー

「い、今の内に……そらよつと!」

レミーは沢山の大きなボールをヨッシーに投げ付ける。

のどか

「ヨッシーさん!前方にボールが沢山飛んできます!」

ヨッシー

「わっ!?!頭下げて!」

ヨッシーとのどかはボールから避ける為に頭を下げながら伏せる。

レミー

「ま、またしても……ハイホー共!あいつらをやっつけろ!」

ハイホー

「へい、ホー!!」

数人のへいホーがヨッシーに向かって駆け出していく。

ヨッシー

「いっぱい来たね……………一気に頂きま〜す!」

シュツ!!

ヨッシーは長い舌で数人のへいホーを一気に巻き付ける。

パクン!

そして、一口でへいホー達を口の中へほおり込んで丸呑みする。

のどか

「ぜ、全員一気に食べちゃった……………」。

のどかはヨッシーの大食いに啞然とする。

ヨッシー

「ふう〜っ、ご馳走様でしたっ。」

レミー

「こ、こりゃ敵わない……………逃げよう!」

そう言つと、レミーはその場から駆け出そうとする。

ヨッシー

「あ!逃がさないぞ……………ふんっ!」

ポンッ!!

ヨッシーはお尻から何個か卵を生み出す。

のどか

「あっ!卵が……………」

ヨッシー

「これで仕留めてやる!」

そう言つと、ヨッシーは卵を投げ付けようと身構える。

レミー

「マ、マズイ……。」

レミーはヨッシーの気配に気付いて方向転換しよじとする。

のどか

「ヨッシーさん、左側へ投げたら当たりますよー!」

ヨッシー

「そ、そっつ、それじゃ……。それっ!」

ポイツ!

ヨッシーが左側に卵を投げ付けると……。

ポカッ!!

レミー

「……!」

レミーの頭にヨッシーの投げた卵が命中する。

ヨッシー

「凄い！見事に当たった。」

レミー

「な、何で……………」。

レミーは頭にタンコブを作りながら再び逃げよじと試みる。

のどか

「今度はそのまま真ん中へ……………」。

ヨッシー

「よーしー」

ピュッ！

ボガッ！！

レミー

「ぐあっ……………」

またしてもヨッシーが投げた卵がレミーの頭に命中する。

ヨッシー

「のどかちゃん、レミーがどの方向へ逃げるかどんどん教えてね。」

のどか

「は、はい…」

レミー

「も、もう勘弁して〜っ!〜!」

こうして、レミーはヨッシーが生み出した全ての卵をのどかの的確な指示通りに投げ付ける。

レミー

「……………も、もう駄目〜。」

バタッ!!

レミーは頭に沢山のタンゴブを作りながら倒れ込んでしまっ。

ヨッシー

「やったー！コクツパを倒したぞー！！」

ヨッシーはガッツポーズをしながら喜ぶ。

のどか

「か、勝ちましたね。」

ヨッシー

「うん、のどかちゃんのお蔭だよ。」

のどか

「そ、そんな事ありませんよ……………」

のどかはヨッシーの言葉に照れてしまっ。

「ネギVSルドウィッグ」

ルドウィッグ

「……………さて、そろそろ始めようか。」

ネギ

「そうですね……………」

ネギとルドウィッグは、お互い距離を置きながら身構える。

ルドウィッグ

「行くぞ!!」

ゴオオオツ!!

ルドウィッグは口から炎を吐き出す。

ネギ

「風楯!!」

パアアアツ

ネギは素早く魔法の楯でルドウィッグの炎を防ぐ。

ルドウィッグ

「まだまだ!!」

シュツ!!

ルドウィッグは顔や手足を甲羅の中へと引っ込ませる。

ネギ

「か、亀みたいに顔や手足が……………」

カモ

「兄貴、あいつは本物の亀なんだよ……………」

ネギの言葉にカモは苦笑いしながらツッコミを入れる。

ルドウィッグ

「このまま突っ込んでやる!!」

そう言うと、ルドウィッグは高速回転させながらネギに向かって突っ込んでくる。

カモ

「あ、危ねえ!!」

ネギ

「うわっ!?!」

ネギは瞬動でルドウィッグの体当たりを間髪避ける。

ネギ

(な、何て速さなんだ……………。)

ルドウィッグ

「まだまだ行くぞ!」

そう言うと、ルドウィッグは方向転換して再びネギに突っ込んでくる。

カモ

「また来やがるぜ!」

ネギ

「避けるだけじゃ駄目だ……………こつなつた迎え撃つしかない!」

そう言うと、ネギは突っ込んでくるルドウィッグに向かって身構える。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………魔法の射手 連弾・雷の17矢!」

ズバアアアツ!!

ネギの魔法攻撃がルドウィッグに直撃するが、ルドウィッグの動きに変わりはない。

ルドウィッグ

「残念だな！俺は甲羅に入ってる間は無敵なんだよ！！」

ドガッ！！

ネギ

「ぐわっ！！」

ネギはルドウィッグの体当たりを喰らって、吹き飛ばされてしまう。

カモ

「兄貴！！」

ルドウィッグ

「ガハハハ！どんどん行くぞ！！」

ドガッ！！

ネギ

「がっ!!」

ルドウィッグは地面へ落下するネギに再び体当たりを繰り返す。

カモ

「くそっ!これじゃ兄貴が反撃出来ねえ!」

明日菜

「エロガモ!」

明日菜達が慌ててカモの方へ駆け寄ってくる。

カモ

「あ、姐さん方!丁度良いところに……………兄貴を助けてくれ!」

明日菜

「分かった……………」

ドガッ!!

ネギ

「ぐあつー!!」

カモが明日菜達に助太刀を頼んでいる最中、ネギはまたしてもルドウィッグの体当たりを受けて吹っ飛ばされてしまう。

のどか

「ネ、ネギ先生ー!!」

ヨッシー

「酷いな、あんなに何度も何度も……。」

ルドウィッグ

「さて、そろそろ終わりにしようか……。」

ルドウィッグは吹っ飛ばされたネギの真下へ立ち止まり、頭と手足を甲羅の外へ出す。

ルドウィッグ

「そのまま俺の炎で焼き尽くしてやるー!!」

そう言うと、ルドウィッグはネギに向けて口を大きく開ける。

刹那

「マズイ！空中では避けられない！」

明日菜

「早く助けに行かないと……………」

明日菜と刹那がネギに助太刀しようと駆け出した時……………。

ネギ

(……………今だ！)

ネギは閉じてた目を大きく開く。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………来たれ雷精・風の精
！！」

ルドウィッグ

「な、何！？」

ルドウィッグが手を翳しながら落下してくるネギに目を疑った瞬間……………。

ネギ

「雷の暴風!!!」

ズバアアアツ!!

ルドウィッグ

「ぎゃあああつ!!」

ネギの強力な魔法攻撃がルドウィッグに直撃する。

明日菜

「わっ!?! な、何?」

刹那

「……………どうやら、ネギ先生がやったみたいですね。」

そう言いつと、爆風の中からボロボロ状態のネギが現れる。

木乃香

「あ! ホンマや。」

ネギ

「ネギ！アンタ大丈夫？」

ネギ

「はい、何とか倒しました……………」

そう言いながら、ネギは真っ黒焦げになって倒れ込んでるルドウィッグに指さす。

ヨッシー

「……………あんなに真っ黒焦げじゃあ食べられないね。」

カモ

「おいおい、食う事しか頭にねえのか。」

カモはヨッシーの発言に呆れながらツッコミを入れる。

のどか

「それより先生、お怪我の方は……………」

ネギ

「あ、これくらい平気ですよ……………痛っ！」

ネギは頭を手で押さえながら膝を地面に着ける。

木乃香

「ほら、全然平気やないやんか。」

ネギ

「そ、そうですね……………なんせ相手が顔を出すまで辛抱していたもので……………」

明日菜

「じゃ、じゃあアンタはあいつが顔を出すまでワザと攻撃を受けてたの？」

ネギ

「はい、途中で意識が飛んじゃうかと思いましたけど……………」

刹那

「な、何て無茶な……………」

ネギ以外全員がネギの行動に呆れ返る。

ヨッシー

「でも、結果的にはルドウィッグを倒したんだから良いじゃない？」

明日菜

「まあ、それもそうね……………」

木乃香

「ほなら、早速ウチが怪我を治したるわ。」

ネギ

「お、お願いします。」

そう言つと、木乃香はネギの怪我を癒す為の準備を始める。

第二十四話、ネギー行&ヨツシーVSコクツパ七人衆（後書き）

コクツパ七人衆を見事倒したネギー行とヨツシーだが、カメツクバ
バ達が黙ってる訳は無い……。

次回はあいつが大暴れします。

第二十五話 決戦！巨大化したベビィクツパ〜（前書き）

コクツパ七人衆を倒したネギー行とヨツシーだが……。

第二十五話 決戦！巨大化したベビィクツパ

カメツク

「……………あゝあ、アンタが呼び寄せた援軍が全員やられちゃったねえ。」

カメツクババ

「うぬぬ……………」

カメツクババ達はネギ達がいる場所から少し離れた草むらから様子を伺っていた。

カメツクババ

「まさかコクツパ七人衆が倒されるとは……………こりゃ大きな誤算ぢやぞ。」

カメツクババは頭を抱えながら深く考え込む。

カメツク

「全く、見てらんないねえ……………次は私がやらせてもらっよ。」

カメツクババ

「ム？何か良い考えでもあるのかえ？」

カメツクババはカメツクの発言に耳を傾ける。

カメツク

「私の魔法であの蛙を巨大化させて、奴らを一気に踏み潰してやるのさ。」

そう言うと、カメツクは近くでピョンピョン跳びはねてる小さな蛙に指さす。

カメツクババ

「成程、ワシも随分昔にドンブリブロスやノコノコ等を巨大化させてたのお。」

カメツク

「それじゃ早速……。」

カメツクは蛙に向けて杖を構える。

カメツク

「ハッ！！」

カメックが杖から魔法を放った瞬間……。

ベビィクツパ

「わ〜い、こんな所に蛙がいるでちゅ〜！」

カメック

「ぼ、坊ちやま!?!」

突然ベビィクツパが蛙の前に立ち塞がる。

バリバリバリッ!!

ベビィクツパ

「によわ〜〜っ!!」

そのせいで、ベビィクツパがカメックの魔法を受ける事になってしまふ。

カメックババ

「な、何て事ぢや!」

カメック

「こゝこのままではクツパ坊ちやまが……。」

カメックとカメックババは周りを走り回りながら慌てふためく。

その頃、ネギー行とヨッシーは……………。

木乃香

「ネギー君、もう何処も痛くないやろ？」

ネギ

「はい、ありがとうございます。」

ネギは木乃香の治療魔法で完全に回復していた。

ヨッシー

「それにしても、君達って不思議な力を持つてるよね。」

カモ

「そりゃそうさ、兄貴は一流の魔法使いだからな！」

ネギ

「お、大袈裟だよカモ君……………。」

ネギはカモにおだてられて頬を赤く染める。

ヨッシー

「魔法使いつて事は、カメックのように魔法が使えるんだ。」

ネギ

「はい、そうです。」

ベビイマリオ

「へえ、ネギ兄ちゃんつて魔法使いなんだ。」

ベビイルイージ

「凄いなあ……………」

ベビイマリオとベビイルイージは尊敬の眼差しでネギを見つめる。

ネギ

「い、いや……………それほどでも……………」

木乃香

「あ、ネギ君つたら照れてる。」

明日菜

「やっぱりまだまだお子ちゃまね。」

ネギ

「そ、そんな……。」

ネギが明日菜と木乃香にからかわれて少しへこんだ時……。

ドスン！！ドスン！！

突然大きな地響きが鳴り響く。

明日菜

「な、何！？今は……。」

ネギ

「地震でしょうか！？」

？

「グオオオオツ！！」

突然何者かの雄叫びが響き渡る。

刹那

「い、今のは一体……………」

のどか

「何か雄叫びのように聞こえましたけど……………」

木乃香

「まさか、また何か現れたんかな？」

ヨッシー

「あっ！？アレは……………」

全員ヨッシーが指さす方向を見ると……………」

？

「ガオー————！！」

カメツクの魔法で巨大化したベビィクツパがネギ達の目に写った。

明日菜

「デ、デカっ！！」

ヨッシー

「な、何で赤ちゃんクツパがこんなに大きくなってんの!？」

ビクククツパ

「ピーチ姫〜!俺様と遊ぶでちゅよ〜。」

そう言うと、ビクククツパは木乃香に抱かれて眠っているベビィピ
ーチに向かって手を伸ばそうとする。

刹那

「お嬢様!危ない!!」

木乃香

「あわわ……………」

ヨッシー

「やめろー!」

ボカツ!ボカツ!

ヨッシーは咄嗟にビクククツパの顔面に卵をぶつける。

ベビィクツパ

「ん？顔に何か当たったでちゅ……………」

ビククツッパは伸ばした手の動きを止めて辺りを見渡す。

ネギ

「皆さん、今の内に逃げて下さい！」

明日菜

「そ、そうね……………こんな大きい相手じゃ敵わないし……………」

ネギの言葉に全員その場から逃げ出そうとするが……………。

？

「小僧！お前だけは逃がさないよ！」

ネギ

「！？」

ネギは声がした方を向くと、上空にカメックとカメックババが箒に跨がりながら浮かんでいた。

明日菜

「ネギ、どうしたの？」

ネギ

「い、いえ……………何でもありません。」

明日菜

「そう、だったら早く逃げるわよ。」

そう言うと、明日菜達は急いで駆け出していく。

カメツクババ

「ほお、女子達おんなこを逃がして自ら残るとは良い度胸ぢやのう……………若
い方のワシよ、お前はクツパ様と一緒に残りの連中を始末しに向か
うのぢや。」

カメツク

「はいよ……………クツパ坊ぢやま！ピーチ姫はこちらです。」

ビクククツパ

「えっ！？何処でぢゆか？」

カメツクはビクククツパを引き連れて、明日菜達の方へ向かう。

ネギ

「あつ！？そっちの方角は……………」

ネギはビククツパ達が向かった方角を見て駆け出そうとするが……………。

カメックババ

「おっと！行かせなはしないよ。」

ドンツ！！

ネギ

「わっ！？」

カメックババが杖を振り下ろすと、ネギの前に大きなブロックが落ちてくる。

カメックババ

「先へ行きたければ、ワシと魔法勝負で勝ってみせるのぢや！」

ネギ

「……………分かりました、受けて立ちましょう。」

そう言うと、ネギは杖に跨がり宙に浮く。

カモ

「兄貴、やっぱり姐さん達を呼び戻した方がいいんじゃないか？」

ネギ

「大丈夫だよカモ君、すぐに終わらせるから……………」。

カモ

（あちゃ〜、また兄貴の頑固と子供っぽさが悪い方向へ出ちゃったぜ……………。）

カモは額に手を着けながら悶絶する。

カメツクババ

「それじゃ、行くぞい!!」

カメツクババは猛スピードでネギに突っ込んでいく。

その頃、ビツクツツパとカメツクは明日菜達を見失っていた。

カメツク

「おのれ、見失ったか……。」

ビククッパ

「ピーチ姫……………」

ビククッパは今にも泣き出しそうな顔になる。

カメック

「ご、ご安心を！ピーチ姫は必ず見つけてみせますので、もうしばらくご辛抱を……………」

カメックは慌ててビククッパを宥める。

ヨッシー

「……………どうやら、僕達を見失って捜してるみたいだね。」

ヨッシーがベビィクッパ達から少し離れた草むらから顔を出すと、明日菜達も遅れて草むらから顔を出す。

明日菜

「ふっつ、取り合えず助かったわね……………」

木乃香

「でも、これからどうするん？」

刹那

「攻撃を仕掛けようにもあの巨体では……………」。

のどか

「とても太刀打ち出来ませんね……………」。

ヨッシー

「うーん、何か良い方法は無いかなあ。」

全員腕を組んで深く考え込んでいた時……………」。

？

「おい！」

全員

「!?!?」

全員何者かの声に驚いて振り向くと、様々な体の色のヨッシー達が居た。

ヨッシー

「な、何だ……………びっくりさせないでよ。」

赤ヨツシー

「それより、あのデカ物は一体何なんだ？」

ヨツシー

「アレはね……………」

ヨツシーは仲間達に簡単に説明した。

青ヨツシー

「成程、赤ん坊のクツパが巨大化して暴れまくってるのか……………」

青ヨツシーはベビィクツパの頭上にある断崖絶壁にふと目を向ける。

青ヨツシー

「ちよっと集合……………」

青ヨツシーは他の色のヨツシー達を集めて、ヒソヒソと話し始める。

ヨツシー

「ねえ、みんなで何の話をしてるの？」

黄ヨツシー

「いや、ちょっとした作戦会議をしていたんだ。」

明日菜

「作戦つて、一体どんな作戦？」

青ヨツシー

「それはね……………」。

青ヨツシーは明日菜達にもヒソヒソと話す。

木乃香

「……………なるほろく、それはええ考えや。」

刹那

「ですが、その作戦だと奴に気付かれないようにしないとダメなね。」

のどか

「あれ？赤ちゃんのマリオさんは……………」。

ベビイルイージ

「あつ！兄ちゃんがあそこに……………」

ベビイルーヅの指さす方向を見ると、ベビィマリオがビククッパの目の前に立っていた。

明日菜

「あ、あんな所に……………」

ヨッシー

「マリオが危ない！」

ヨッシーはマリオの姿を確認するなり、物凄いスピードで駆け出していく。

明日菜

「ちょ、ちょっと…！」

明日菜もヨッシーの後から駆け出していく。

刹那

「明日菜さん！今行ったら危険です！」

刹那も後から駆け出そうとするが……………。

赤ヨツシー

「ちよつと待った！君達は僕達と一緒に来て。」

刹那

「えっ！？で、でも……………。」

黄ヨツシー

「いいから早く！」

そう言うと、ヨツシー達は刹那達を背中に乗せて何処かへ駆け出していく。

木乃香

「ひょっとして、ウチらもアレをやらされるのかな？」

のどか

「そ、そんな……………私には無理ですよ。」

木乃香とのどかは不安げな表情を浮かべながらヨツシー達に連れられていく。

ビククツッパ

「……………ん？」

ビククツッパは自分の足元に立っているベビィマリオに気付く。

ベビィマリオ

「クツッパ！お前なんかにピーチ姫は渡さないぞ！」

ビクククツッパ

「にゃ、にゃにお〜〜っ!？」

ビクククツッパはベビィクツッパの言葉に腹を立てる。

カメツク

「クツッパ坊ちやまに対して何という無礼な発言を……………坊ちやま！
そのまま踏み潰してやりましょう！」

ビクククツッパ

「言われなくてもそうするでちゅ〜!！」

そう言うと、ビクククツッパはベビィマリオを踏み潰そうとする。

ヨッシー

「マリオーーーーー!!!」

シュッ!!

ドゥシューーン!!

ところが、ヨッシーが長い舌でベビィマリオを巻き付けてから引き寄せて、ビククツパの巨大な足から間髪一髪逃れる。

カメック

「あっ!もうちよっとだったのに……」

ベビィマリオ

「ヨッシー、ありがとう……」

ヨッシー

「全く……いきなり敵の前に現れるなんて無謀だよ。」

ベビィマリオ

「ごめん……でも、クツパを倒さないと島のヨッシー達に迷惑が掛かるから……僕、居ても立ってもいられなくなって……」

ヨッシー

「マリオ……………」

ヨッシーはベビィマリオの思いやりの言葉に心を動かされる。

カメック

「目障りな恐竜め！それでも喰らえ！！」

バリバリッ！！

カメックがヨッシー達に向けて杖から光線を放つが……………。

明日菜

「危ない！！」

突然明日菜がヨッシー達の前に立ち塞がり、カメックの攻撃が明日菜に命中する。

ベビィマリオ

「あ、明日菜お姉ちゃんが！」

ヨッシー

「しまった!!」

ヨッシーとベビィマリオはカメツクの攻撃を受けた明日菜を見て驚愕する。

カメツク

「自分を犠牲にして他人を助けるとは何とも愚かな……………ぬっ!？」

カメツクは目を疑った。何故なら攻撃を受けたハズの明日菜が無傷だったから。

明日菜

「あ、あれ……………私、助かったの?」

明日菜は我に返るとすぐに辺りを見回す。

カメツク

(馬鹿な!？あの小娘は確かに私の魔法攻撃を受けたハズ……………なのに何故小娘はピンピンしているのだ!?)

カメツクは頭を抱えながら深く考え込む。

ヨッシー

「隙あり！」

シュッ！！

ゴツンッ！！

カメック

「ぐわっ！？」

ヨッシーの投げた卵がカメックの顔面に命中する。

カメック

「む、無念……………」

カメックはそのまま地面へ落下していく。

ベビィマリオ

「やったー、当たった！」

明日菜

「まさに油断大敵ね。」

ヨッシー

「さて、後はベビィクツパだけか……………」

そう言つと、全員ビククツパの方を見る。

ビククツパ

「ムキーッ！俺様はもう完全に怒つたでちゅー！！」

ビククツパはじだんだを踏みながら怒り出す。

明日菜

(……………もうアレの準備は出来てるかな？)

明日菜はビククツパの頭上にそびえ立つ断崖絶壁に目をやる。

ビククツパ

「お前らなんか俺様の炎で丸焼きにしてやるでちゅー！！」

ビククツパは口から炎を吐き出そうと息を吸い込み始める。

明日菜

「ちよっと！この距離で炎を吐くつもり！？」

ヨッシー

「今から離れても間に合わないよ！」

ベビィマリオ

「ど、どうしょ……。」

全員ビククツツパの攻撃に慌てふためいていた時……。

ヒューーッ

ビククツツパ

「……………ん？何の音でちゅか？」

ビククツツパが不思議そうに辺りを見回した瞬間……………。

ガッツーーーーン！！

ビククッパ

「ふぎゃっ!!」

ビククッパの頭上に巨大な丸い岩が落下してきて、ビククッパの脳天に命中する。

ビククッパ

「い、痛いでちゅ……………」

バターーッ!!

ビククッパは頭に大きなタンコブを作りながら倒れる。

明日菜

「……………う、上手くいったわね。」

ヨッシー

「ふっ、ちょっとヤバかったけどね。」

明日菜とヨッシーが一安心して胸を撫で下ろしていると……………。

赤ヨッシー

「おい！そつちは大丈夫か？」

木乃香

「明日菜！怪我はしてへんか？」

断崖絶壁の上からヨッシー達と木乃香達が手を振っていた。

明日菜

「まさか本当に上手くいくとはね……………」

明日菜は苦笑いを浮かべながら木乃香達に手を振り返す。

く今から数分前く

木乃香・刹那・のどかの三人はヨッシー達に連れられて、巨大な丸い岩が置いてある断崖絶壁の頂上にいた。

赤ヨッシー

「よし！みんなでこの大きなワンワン岩をクツパの頭目掛けて落とすぞー！！！」

ヨッシー達

「おーっ！！！」

ヨッシー達は掛け声と共にワンワン岩を押し始める。

刹那

「わ、私達も押しましようー！」

木乃香

「そやな！」

のどか

「わ、私………あまり力無いけど頑張ります！」

そう言うと、木乃香達もワンワン岩を押し始める。

全員

「よいしょーよいしょーよいしょー………」

全員の掛け声と共にワンワン岩はどんどん押し出されていく。

青ヨツシ

「も、もうちょっとだ………」

木乃香

「も、もう一踏ん張りやな………」

全員が最後の力でワンワン岩を押しした瞬間……。

ヒューーーーーッ

ワンワン岩は崖の下へ落下していく。

黄ヨツシー

「やったー！岩を落としたぞー！！」

ヨツシー達は嬉しさのあまりに跳びはねたりしてお互いに喜び合っ。

のどか

「ハアハア……………や、やりましたね……………」

のどかは汗だくになりながら地面へ座り込む。

刹那

「宮崎さん、大丈夫ですか？」

のどか

「は、はい……………ちょっと疲れただけです。」

木乃香

「でも、のどかにしてはよう頑張ったわ。」

のどか

「そ、そんな……………」

のどかは木乃香に褒められて照れ臭くなる。

木乃香

「……………まあ、こんな感じやな。」

木乃香は明日菜達に先程の状況を説明していた。

明日菜

「やっぱり、上は上で苦労してたのね……………」。

明日菜は木乃香の説明を聞いて苦笑いする。

ベビイルイージ

「ねえ、さっきから気になってたんだけど……………ネギ兄ちゃんは何処？」

全員

「えっ!？」

全員ベビイルイージの言葉に耳を傾けると、一通り辺りを見回す。

明日菜

「そう言えば、さっきから全然姿を見てないわ。」

ヨッシー

「それに、カメックババもクツパ達と一緒にいなかったって事は……もしかして、カメックババと闘ってるんじゃない……。」

のどか

「そんな、ネギ先生一人で……。」

全員の表情が不満げになってしまう。

？

「おーい！」

ヨッシー

「ん？この声はもしかして……。」

ヨッシーは声が出た方へ向くと、白衣を着て眼鏡を掛けたモヒカンヘアの老人が大きな風呂敷を掲げながら近寄ってくる。

刹那

「あの人は確か……。」

ヨッシー

「あ！オヤ・マー博士だ〜。」

ヨッシーは相手がオヤ・マー博士だと認識すると、オヤ・マー博士に向かって手を振る。

オヤ・マー

「手紙を読んで急いで駆け付けて来たんじゃないが……どうやら相当苦労しておったようじゃのお。」

ヨッシー

「まあね……。」

ヨッシーはオヤ・マー博士の言葉に苦笑いする。

ベビィマリオ

「それより、ネギ兄ちゃんを助けに行かないと……。」

明日菜

「あ！そうだった。」

ヨッシー

「急いで助けに行かなきゃ……………」。

オヤ・マー

「まあ、待ちなさい……………助けに行くなら、このアイテムを持って行くがよい。」

オヤ・マー博士はヨッシーにあるアイテムを渡す。

ヨッシー

「あつ!?!これは……………」。

ヨッシーは渡されたアイテムを見て驚愕する。

ネギ

「ハア……ハア……。」

カメツクババ

「ゼエ……ゼエ……。」

その頃、ネギとカメツクババはボロボロになりながら激しく息を切らす。

カモ

（何てこった。兄貴を此処まで追い詰めるとは………出来る！あのババアは出来るぜ！！）

カメツクババ

「こ、このワシが此処まで追い詰められるとは……………だが、これで
終わりぢやー!」

そう言うと、カメツクババは杖で大きな火の玉を作り出す。

カメツクババ

「この炎に焼き尽くされるがよい!」

ポッ!!

カメツクババが勢い良く杖を振り下ろすと、火の玉はネギに向かって突っ込んでいく。

ネギ

「レ、風楯……………」

カモ

「駄目だ!間に合わねえ……………」

火の玉がネギの目の前まで迫り、カモが手で目を覆った時……………。

パクッ！

カメックババ

「な、何と!?!」

ネギ

「……………え?」

ネギが顔を上げると、目の前には翼(『スーパーマリオワールド』のアイテム)を付けたヨッシーと背中にマントを付けたベビィマリオがいた。

ヨッシー

「ふう、危づく丸焼きになるところだったね。」

ネギ

「ヨ、ヨッシーさん?その翼は……………」。

ヨッシー

「あ、これ?オヤ・マー博士から貰ったんだ。」

ベビィマリオ

「僕もスターを貰ったお蔭で力が漲みなぎってくるんだ。」

カメックババ

(何?スターぢゃと!?!?)

カメックババはベビィマリオの言葉を聞いて青ざめる。

カメックババ

（スターの力となると流石のワシでも歯が立たなぬ……………逃げよう！）

カメックババはそのまま後ろを向いて逃げ出していく。

カモ

「あっ！あのババアが逃げるぜ！」

ヨッシー

「逃がさないよ……………それっ！！」

ポオオオオツ！！

ヨッシーが口から炎を吐き出して、炎はカメックババの箒に燃え移る。

カメックババ

「わっ！？ワ、ワシの箒が……………。」

カメックババはその場で動きを止める。

ヨッシー

「マリオ、準備はいいかい？」

ベビィマリオ

「いいよー！」

ヨッシー

「とりやつー！」

ブンッ！！

ヨッシーはカメックババに向けてベビィマリオを投げ付ける。

ネギ

「な、何て事を……。」「

ヨッシー

「大丈夫、スターを手にしたマリオは無敵なんだ。」「

カメックババ

「こ、このままではワシの幕が……………ムッ!？」

ベビィマリオ

「無敵マリオパーンチ!！」

ボカアーーーーッ!!

ベビィマリオの強力なパンチがカメックババの顔面に直撃する。

カメックババ

「むぎや~~~~っ!！」

カメックババはそのまま吹っ飛ばされてしまう。

ネギ

「す、凄い……………。」

カモ

「とても赤ん坊の力とは思えないぜ……………。」

ネギとカモはベビィマリオの力に啞然とする。

ヨッシー

「とにかく、みんなの所へ戻ろう。」

そう言いつと、ヨッシーはベビィマリオを背中に乗せて飛び去るつと
する。

ネギ

「あ、待って下さい!」

ネギも慌ててヨッシーの後を追うように杖で飛行する。

?

「……………また失敗か。」

木の陰から黒コートの人物がネギ達の様子を伺っていた。

?

「まあいい、こちらにしてみれば上手くいったところか……………」

スッ

黒コートの人物はその場から姿を消してしまふ。

みんなの合流したネギとヨッシーはオヤ・マー博士が持ってきた夕

イムマシンを眺めていた。

明日菜

「へえ、これがタイムマシンか。」

ネギ

「これで過去の世界へ行けるんですね。」

木乃香

「葉加瀬やったら、こうゆうの簡単に作れそうやな。」

オヤ・マー

「それじゃ、過去へ戻る者は急いでワシのタイムマシンに乗り込むのじゃ。」

そう言うと、ベビー達はオヤ・マー博士のタイムマシンに乗り込む。

ベビィマリオ

「ヨッシー、これでお別れだね……………」。

ヨッシー

「いや、お別れじゃないよ。」

ベビィマリオ

「えっ？」

ベビィマリオはヨッシーの言葉に耳を傾ける。

ヨッシー

「マリオが大人になったらまた会えるよ。」

ベビィマリオ

「あ、そっか……………」

ベビィルイージ

「じゃあ、僕達が大人になったらまた会えるんだね？」

ヨッシー

「勿論だよ。」

ヨッシーの満面の笑みにベビィマリオとベビィルイージの顔もつられて笑顔になる。

オヤ・マー

「さて、そろそろ出発させるぞい。」

ポチ

「ワンワンッ！」

突然ポチが気絶してるベビィクツパとカメツクを口にくわえながら
駆け寄ってくる。

ヨッシー

「あ、この二人の事を忘れてた……………」

ネギ

「この二人も一緒に乗せないといけませんよね？」

オヤ・マー

「そうじゃな……………さもないと、この時代のクツパとカメツクババ
がいなくなってしまうからのお。」

明日菜

「えつくと、そういうのって確か……………タイムパラソルって言うん
だっけ？」

のどか

「……………明日菜さん、タイムパラドックスですよ。」

明日菜が間違えた言葉をのどかが苦笑いしながら訂正する。

ベビィマリオ

「とにかく、クッパ達も一緒に乗せてこよう。」

そう言うと、ベビィマリオとベビィルイージはベビィクッパとカメラをタイムマシンに乗せる。

オヤ・マー

「これで全員乗ったな……………それじゃ、出発するぞ。」

そう言うと、オヤ・マー博士はタイムマシンの操縦席に乗り込む。

ベビィマリオ

「……………ネギ兄ちゃん。」

ネギ

「え？何だい？」

ベビィマリオ

「僕達が立派な大人になったら、兄ちゃん達にも会えるよね？」

ネギ

「そ、そりゃ勿……。」

明日菜

「勿論よ！君達にお髭が生えてきたら私達にも会えるから。」

ネギ

（ぼ、僕の台詞……。）

ネギは明日菜に台詞を取られて目から滝のような涙を流す。

オヤ・マー

「発進……！」

ポチッ

ゴゴゴゴゴゴゴッ

オヤ・マー博士がタイムマシンの発射ボタンを押すと、タイムマシンが揺れ動く。

ベビィマリオ

「みんな〜！またね〜！！！」

ベビィルイージ

「バイバイ！」

ベビィピーチ

「ばぶばぶ〜！」

スッ

ベビィマリオ達がタイムマシンの窓からネギ達に向けて手を振った瞬間、タイムマシンはその場から消えてしまう。

ヨッシー

「……………行っちゃったね。」

ネギ

「はい……………」

全員しばらくの間、そのままぼんやりしている。

明日菜

「……………さて、私達も帰りますか。」

ネギ

「そうですね。」

そう言つと、ネギ達はその場から立ち去るつとする。

ヨッシー

「え？もう帰っちゃうの？」

ネギ

「ええ、残りの人達にもバッチを渡さないといけないので……………。」

ヨッシー

「だったら、この島の美味しいフルーツを食べてからでもいいんじゃない？」

木乃香

「フルーツ？」

ヨッシー

「そう、この島のフルーツはとっても美味しいって評判なんだ。」

明日菜

(とっても美味しいフルーツ……。)

明日菜はその場で立ち止まって考え込む。

明日菜

「……………ネギ、もうちょっとだけこの島にいない？」

ネギ

「えっ！？でも、さっき帰ろっつて……………」。

明日菜

「いいじゃない！別に急ぐ旅でもないんだし……………」。

木乃香

「それもそやな……………せつちゃん！一緒にフルーツ食べに行い。」

刹那

「えっ！？は、はい！喜んで……………」。

木乃香は刹那の手を掴んで駆け出していく。

ヨッシー

「あつ！？そつちじゃないよ〜！」

ヨッシーは慌てて木乃香達の後を追いかける。

明日菜

「ネギ、私達も食べに行くわよ！」

ネギ

「は、はい……のどかさんも行きましょう。」

のどか

「は、はい……」

そう言つと、残りの三人も駆け出していく。

カモ

（やれやれ、色気より食い気が……。）

カモは首を左右に振りながら溜め息をつく。

第二十五話 決戦！巨大化したベビィクツパ〜（後書き）

ヨッシーアイランドを後にしたネギー一行が次へ訪れる世界とは？

第二十六話、ププランドの住人たち（前書き）

ヨッシーアイランドから帰ってきたネギー行が次に行く世界は？

第二十六話 ぐぷぷランドの住人たち

ぐ大乱闘の館

ヨッシーの世界から帰って来たネギー一行は腹が満腹した状態で館へ帰って来る。

明日菜

「た、ただいま……………うつぶ……………」。

ネギ

「明日菜さん、幾ら何でも食べ過ぎですよ……………」。

ネギは呆れ返りながら明日菜の背中を摩る。

マスターハンド

「ん？お腹でも痛いのかね？」

刹那

「それが、ヨッシーさんの世界でフルーツをいっぱい食べ過ぎたんです。」

木乃香

「ウ、ウチもちょっと食べ過ぎてもうた……。」

木乃香は刹那に肩を貸してる状態で話す。

マスターハンド

「そ、そうか……それなら、部屋で安静にしておいた方がいいだろう。」

のどか

「はい、そうします。」

ネギ

「それでは、おやすみなさい……。」

ネギ一行はそのまま部屋へと戻っていく。

（翌日）

ネギ一行はいつものように庭へ集合していた。

ネギ

「皆さん、お腹の具合は大丈夫ですか？」

明日菜

「ええ、もう平気よ！」

木乃香

「ウチも大丈夫や。」

明日菜と木乃香は笑顔でお腹を摩りながら答える。

マスターハンド

「それでは、今回も別の世界へ行って貰うが………まず、星型のバツチを取り出してくれ。」

ネギ

「は、はい。」

ネギは懐から三つの星型のバッチを取り出す。

マスターハンド

「そのバッチをカービィ・メタナイト・デデデの三人に渡してほしい。」

のどか

「カービィって、あの『星のカービィ』の事ですね。」

明日菜

「あ、あの何でも吸い込んだじゃうピンクボールね。」

ネギ

「ボ、ボール？」

ネギは明日菜の言葉に耳を疑う。

マスターハンド

「では、今回も気をつけて行って来なさい。」

ネギ

「は、はい！行って来ます……………」

そう言つと、ネギー一行はワープ土管へ入る。

くぷぷぷらんどく

ぐむむむむむ

ネギー一行はワープ土管から出ると、とてもどかな広場へとやつて来た。

ネギ

「此処もヨッシーさんの島みたいにのどかな場所ですね。」

明日菜

「だけど、こつこついう平和な世界に限って事件が起こるんだよね。」

刹那

「そう言われてみればそうですね……………」。

刹那は明日菜の言葉に納得する。

木乃香

「ほなら、まずカー君達を捜さなアカンな。」

明日菜

「カ、カー君ねえ……………」。

明日菜は木乃香のカービィの呼び名を聞いて少し苦笑いする。

？

「おい、お前ら。」

ネギ

「えっ？」

ネギ一行は声に気が付いて振り向くと、そこには大きなハムスターのような生物がいた。

木乃香

「わく、めっちゃ可愛ええ鼠さんやわく。」

木乃香は嬉しそうにハムスターのような生物の頭を撫でる。

？

「く、くすぐったいって……………それに俺はハムスターだよ。」

ハムスターは恥ずかしそうに木乃香の手から逃れようとする。

刹那

「ハムスターにしても随分大きいですね……………」

？

「リックっていうんだ、宜しくな。」

そう言うと、リックはネギ達に向かって軽くお辞儀する。

リック

「ところで、お前らこの辺じゃ見ない顔だけど……………何処から来たんだ？」

ネギ

「あ、えっと……僕達はカービィさんとメタナイトさんとデデデ
さんを捜しに遠くの方へ……。」

リック

「カービィ？お前らカービィの知り合いか？」

ネギ

「いや、知り合いというか何というか……。」

ネギはリックの問い掛けに曖昧に答える。

明日菜

「そんな事よりアンタ、カービィの事を知ってるの？」

リック

「ああ、だって俺とカービィは親友同士だもん。」

刹那

「そうですか……もし宜しければ、カービィさんの居る所まで案内してもらえますか？」

リック

「いいよ、カービィの家へ案内するから付いて来て。」

そう言つと、リックはそのままゆっくりと歩き出す。

明日菜

「あのリックつて子、とってもいい奴ね。」

木乃香

「そやなく、それにとつても可愛ええし……。」

ネギ

「とにかく、後を付いて行きましょう。」

ネギ一行はそのままリックの後を付いて行く。

〈カービィの家の前〉

リック

「ほら、これがカービィの家だよ。」

リックの指さす先には、煙突付きでドーム型の小さな白い家が建っていた。

明日菜

「随分小さい家ね……………」。

リック

「カービィ、お客さんだぞ〜。」

コンコン！

リックはカービィの家のドアをノックしながら言つが……………。

ネギ

「……………応答がありませんね。」

リック

「何処かへ出掛けたのかな〜。」

リックが参ったような表情で耳を掻いていると……………。

？

「リック、そんな所で何をしておる？」

リック

「ん？この声は……………」

全員声がした方へ見上げると、そこにはフクロウのような大きな鳥が羽ばたいていた。

リック

「あークーじゃないか。」

ネギ

「お知り合いですか？」

リック

「ああ、クーも俺の親友だからね。」

クー

「それよりリック、その者達は何だ？」

クーというフクロウはネギ達を見つめながらリックに聞く。

リック

「コイツら、カービィに会いたいんだってさ。」

クー

「カービィなら、さつき森の池の近くで見掛けたが……………」

木乃香

「ホンマ？せやったら、その池まで案内してくれへん？」

クー

「勿論構わないよ……………じゃあ、わしに付いて来なさい。」

ネギー行とリックは森の方へ飛び出したクーの後を追いかける。

く森の池付近く

ネギー行とリックはクーに連れられて森の中の池へやって来た。

クー

「この池の辺ほとりで見掛けたんだが……………」。

のどか

「……………何処にも居ませんね。」

全員辺りを懸命に見渡していると……………。

バシヤツ!

?

「んぼくっ!」

全員

「!?!」

突然池の中からマンボウのような大きな魚が水面から顔を出す。

リック

「何だ、カインじゃないか。」

カイン

「やあ、こんにちは。」

明日菜

(こ、今度はマンボウ……。)

カモ

(この世界には動物しかいねえのか?)

明日菜とカモはカインを見つめながら苦笑いする。

ネギ

「このマンボウさんも友達ですか？」

クー

「そう、カインもわしらの友達だ。」

リック

「カイン、此処ら辺でカービィを見なかったか？」

カイン

「カービィならさっきまで居ただけど、気が付いたら見失なっちゃって……………」。

カモ

「おいおい、また降り出しかよ……………」。

のどか

「ふう、色々歩き回って少し疲れちゃった……………」。

のどかが近くにあった切株の上に腰掛けた時……………」。

グニャッ！

のどか

「きゃっ!?!」

のどかは予想外の柔らかい感触に驚いて勢い良く立ち上がる。

ネギ

「ど、どうしました？」

のどか

「な、何か……お尻に柔らかい感触が……。」

明日菜

「お尻に？どれどれ……。」

明日菜はのどかの背後へ覗き込むと……。

明日菜

「あ……っ……！」

突然明日菜は大きな声を上げる。

カモ

「こ、今度は何だ？」

明日菜

「見つけた！カービイを見つけたわ……！」

全員

「えっ!？」

全員明日菜の言葉を聞いて切株の方へ駆け寄る。

明日菜

「ほらね。」

木乃香

「ホンマや〜!めっちゃ可愛ええわ〜。」

ネギ

「こ、これが……………」。

ネギは切株の上でスヤスと眠っているピンク色のボールのような体型の生物を見て言葉を失う。

カモ

「兄貴、こりゃどう見ても地球外生命体か何かだよな……………」。

ネギ

「そ、それはちょっとオーバーじゃないかな?」

ネギはカモの言葉に苦笑いしながらツツコミを入れる。

カイン

「何だ、そんな所で昼寝してたんだ。」

クー

「全く、相変わらず呑気な奴だな。」

リック

「おいカービィ、起きろよ。」

カービィ

「ムニャムニャ……………ぼよ？」

カービィは眠い目を擦りながら目を覚ます。

刹那

「あ、起きたみたいですね。」

カービィ

「ぼよ〜？」

カービィは不思議そうにネギ達を見つめる。

明日菜

「ほら、ネギ！」

ネギ

「は、はい……………ど、どうも初めまして！僕達は……………」

ネギは明日菜に後押しされて、カービィにこれまでの経緯をぎこちなく説明する。

ネギ

「……………という訳なのですが、理解して頂けたでしょうか？」

カービィ

「……………ぼよぼ？」

カービィはまた不思議そうに頭を左側へ傾げる。

ネギ

（あ、明日菜さん……………。）

ネギは滝のような涙を流しながら明日菜に助けを求める。

明日菜

「だ、大丈夫よ！恐らく理解してくれたはずよ……………多分。」

明日菜は最後の言葉だけ小声で呟く。

ネギ

「ううっ……………それでは、カービィさんにもバッチを渡しておきますね。」

諦めたネギはカービィに星型のバッチを渡す。

カービィ

「ぽよ……………パクッ！」

全員

「あ————っ!？」

カービィがバッチを食べる光景を目の当たりにしたネギ一行は驚愕する。

カモ

「コ、コイツもヨッシーと同じタイプか……。」

ネギ

「うっっ……明日菜さん、全然僕の話を理解してないじゃないですか。」

ネギはまた滝のような涙を流しながら明日菜に抗議する。

明日菜

「べ、別に泣く事無いじゃない……結果的にはバッチを渡せたんだし……。」

ネギ

「そっいつ問題じゃありませんよ。」

明日菜

「あ、もう！いつまでもグダグダ言わなうい！！」

ネギ

「うっっ……。」

ネギは恨めしそうに明日菜を見つめる。

刹那

「え、え〜っと……………話がかなりズれてしまいましたが、メタナイトさんとデデデさんが何処に居るか分かりますか？」

リック

「う〜ん、メタナイトは何処に居るか分からないけど……………デデデ大王なら自分のお城に居るハズだよ。」

木乃香

「大王って事は……………そのデデデって人は王様なんや。」

刹那

「そのお城は何処にあるんですか？」

クー

「この森を抜けて西の方へまっすぐ進めば城へ行けるが……………もしや、デデデ大王へ会いに行くつもりか？」

カイン

「やめといた方がいいよ。」

のどか

「どうしてですか？」

ネギー一行はリック達の言葉に耳を傾ける。

クー

「デデデ大王は傲慢で自分勝手な奴でな……………前にこのプププラン
ド中の食べ物を全て盗んだ事がある。」

剎那

「……………とても国を治める王様の行動とは思えませんね。」

リック

「いや、大王といってもあいつが勝手に自称してるだけなんだ。」

カイン

「だから、他の住人も大王の事をあまり意識してないんだ。」

木乃香

「そ、そうなんや……………」

木乃香達はリック達の言葉にただ苦笑いするしかなかった。

ネギ

「とにかく、僕達はデデデさんに会いに行きます……………いえ、会わなきゃならないんです。」

リック

「そっか、だったら俺達はこれ以上何も言わないよ。」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよ！」

カービィはネギ達に何かを伝えようと跳びはねる。

明日菜

「……………何て言ってるの？」

カイン

「カービィも一緒に大王の城へ行きたいってさ。」

木乃香

「え？ホンマに？」

カービィ

「ぼよっ！」

カービィは木乃香の問いに答えるかのように元気に返事をする。

のどか

「ネギ先生、どうしますか？」

ネギ

「……………連れて行きましょう。」

カービィ

「ぼよー！ぼよぼー！」

カービィはネギの言葉を聞いて喜びなが跳びはねる。

クー

「カービィが凄く喜んでるぞ。」

カモ

「まるで子供だな。」

刹那

「ともかく、急いで城へ向かいますよ。」

ネギ

「そうですね、その後でメタナイトさんを捜さないといけませんし……。」

ネギー行とカービィはデデデ城へ向けて歩き出す。

リック

「じゃあな。」

クー

「くれぐれも気をつけるんだぞ。」

カイン

「また会おうね。」

リック・クー・カインはネギー行とカービィを暖かく見送る。

第二十六話、ププランドの住人たち（後書き）

デデデの城へ向かう事になったネギー行とカービィに待ち受けるのは？

第二十七話、デデデ城での大乱闘（前書き）

デデデ城へ目指すネギー一行とカービィに待ち受けるのは？

第二十七話 〱 デデデ城での大乱闘 〱

〱 デデデ城前 〱

ネギー行とカービィは大きな城の門の前に立っていた。

ネギ

「どつやら此処がデデデさんのお城のようですね。」

カービィ

「ほよほよ。」

ギイイイツ

カービィはデデデ城の門の扉を押して入ろうとする。

明日菜

「ちょ、ちょっと！勝手に入っちゃっていいの？」

刹那

「……………何だか、いつも出入りしてるみたいに入っていましたね。」

木乃香

「ほなら、ウチらも中へ……………」。

カービィ

「ぽよ〜っ!!」

ネギー一行が城へ入ろうとした時、カービィが何者かに吹っ飛ばされて門の外へ勢い良く飛び出してくる。

のどか

「カ、カー君!？」

?

「無礼者! デデデ陛下の城へ無断で侵入するとは何事だ!？」

城の中からカービィ位の体形に槍を掲げた二匹の生物と頭に二本の毛を生やして顔の部分が大きな目で覆われた同じ体形の生物が現れる。

明日菜

「な、何よアンタ達は!？」

？

「私はこの城に仕えるワドルディ軍団の隊長のワドルドゥである。」

木乃香

「隊長さん？随分可愛らしい隊長さんやな。」

ワドルドゥ

「し、失敬な！……でも、悪い気はしない。」

ワドルドゥは木乃香に可愛いと言われて頬を真っ赤に染める。

ネギ

「あの、僕達デデデさんにお会いしたいんですけど……。」

ワドルドゥ

「陛下に会いたいだと？うむ……。」

ワドルドゥは大きな目でネギ達をじっくりと見つめる。

ワドルドゥ

「……ちょっとそいで待ってる。」

そう言いつと、ワドルドゥは二匹のワドルディと共に城の中へと入っていく。

のどか

「……………行っちゃいましたね。」

カービィ

「ぼよ……………」

明日菜

「それにしても、王様を自称してる割には一応手下がいるのね。」

刹那

「確かにそうですね。」

ネギー一行が世間話をしていると……………。

ワドルドゥ

「わびや……っ……」

全員

「っ……？」

突然ワドルドウの叫び声が城内から響き渡る。

のどか

「い、今の悲鳴は……………」

ネギ

「何かあったんでしょうか？」

カービィ

「ぼよっ！」

カービィは急いで城の中へ入っていく。

木乃香

「あっ！カー君が城の中へ入ってもうた。」

ネギ

「僕達も行ってみましょう！」

そう言うと、全員デデ城へと入っていく。

くデデデ城内部く

カービィ

「ぼよぼ……………」。

ネギ

「こゝ、これは一体……………」。

ネギ一行とカービィは廊下で沢山のワドルディ達が散乱して倒れる光景を見て言葉を失う。

明日菜

「まるで嵐が過ぎ去った後って感じね……………」。

刹那

「この城で何があったんでしょうか？」

ワドルドゥ

「うっ……うっ……」。

倒れてるワドルディ達の中にボロボロ状態のワドルドゥが起き上がろうとする。

カービィ

「ぼよっ！」

明日菜

「ちよつとアンタ、大丈夫!？」

明日菜達は慌ててワドルドゥの元へ近付く。

ワドルドゥ

「へ、陛下を……止めて……くれ……」。

そう言い残すと、ワドルドゥはその場で気絶してしまふ。

刹那

「………気を失ったみたいです。」

ネギ

「皆さん、この先に何が潜んでいるか分かりませんが………気を引き締めて進みましょう。」

木乃香

「そやな、ワドちゃん達の為にも頑張らなアカンわな。」

カービィ

「ぼよっ！」

明日菜

「そんじゃ、急いで先へ進むわよ！」

そう言つと、全員城の奥へ目指して駆け出していく。

くデデデ城王室く

ネギー一行とカービィはデデデ城の王室らしき広い部屋へやって来た。

明日菜

「ネギ、あそこに誰か居るわ。」

ネギ

「はい……………」

ネギー一行は部屋の中央に佇んでいる赤いガウンのような服に腹巻を巻いて、大きなハンマーを掲げてるペンギンのような人物を発見する。

木乃香

「アレ？あの人、デデデさんとちやうかな？」

ネギ

「えっ！？本当ですか？」

カービィ

「ぼよぼよ…」

カービィはネギの質問に答えるかのように頷く。

明日菜

「そう言われてみればそうね……………」。

ネギ

「それなら、早速バッチを渡しておかなくちゃ……………」。

そう言うと、ネギはデデデに近付いていく。

ネギ

「は、初めまして……………僕は怪しいものではありません。」

デデデ

「……………」。

デデデは虚ろな目でネギを見つめる。

カービィ

「ぼよぼ?」

カービィが不思議そうに頭を傾げた時……………。

デデデ
「うおー……っ!!」

ネギ
「なっ!?!」

ドガー……ッ!!

突然デデデがネギに向かってハンマーを振り下ろすが、ネギは瞬動で間髪避ける。

刹那
「ネギ先生!大丈夫ですか!?!」

ネギ
「はい、何とか……。」

明日菜
「ちょっと!いきなり攻撃するなんてどういっつもりよ!?!」

デデデ
「……………」

デデデは明日菜の質問に答えずにハンマーで身構える。

刹那

「どつちら、聞く耳持たないって感じですね。」

明日菜

「仕方ない……一丁やりますか！『アデアッド』！！」

パアアアッ

明日菜は咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出す。

ネギ

「それじゃ、行きます！契約執行180秒間！『神楽坂明日菜』・

『桜咲刹那』！！」

パアアアッ

明日菜 & 刹那

「んっ……………」

ネギが呪文を唱えると、明日菜と刹那の体が光で包まれる。

デデデ

「ぬおー……っ……！」

すると、デデデはハンマーを乱暴に振り回しながら明日菜達に近付いてくる。

明日菜

「とじや……っ……！」

ピョー……ん……！

明日菜は近付いてきたデデデに『ハマノツルギ』で攻撃するが、デデデはその場で高くジャンプして攻撃を避ける。

刹那

「な……？あの体形であんなに高くジャンプするとは………。」

デデデ

「でぢや……っ……！」

デデデは勢い良く下降しながら明日菜に向かってハンマーを振り下るそうとする。

明日菜

「マズイ！逃げないと……………」

ドガーーツ！！

明日菜はデデデの攻撃を間一髪避ける。

明日菜

「あ、危なかった。」

刹那

「明日菜さん、ここは二人で攻めていきましょう。」

明日菜

「そうね、二人で掛ければ怖いもの無しね。」

そう言いつと、明日菜と刹那はそれぞれ武器を構えながらデデデに向かって駆け出していくが……………。

スウーーーーッ！！

突然デデデが口を大きく開けて、物凄い吸引力で明日菜達を吸い込もうとする。

刹那

「な、何っ！？」

明日菜

「こ、このままじゃ吸い込まれ……………うわぁ……………っ！？」

バクッ！！

明日菜と刹那はデデデに吸い寄せられて、デデデの大きな口の中へ閉じ込められてしまう。

木乃香

「あ、明日菜とせっちゃんが……………食べられてもった。」

ネギ

「そ、そんな……………。」

カービィ

「ぼよ……………」

ネギ達は先程の光景にただ啞然とする。

プツ！！

明日菜

「わぁ……………っ！？」

刹那

「ぐっ……………」

すると、デデデは勢い良く明日菜と刹那を吐き出す。

刹那

「な、何て攻撃なんだ……………」

明日菜

「わゝ、睡でスグスグじゃない……………」

明日菜と刹那はデデデの唾液まみれのままゆっくりと起き上がる。

のどか

「あ、どうやら食べられてなかったみたいですね。」

木乃香

「そか、それは良かったわ〜。」

カービィ

「ぼよぼよ。」

明日菜

(ちっとも良くないわよ……………)。

明日菜はホッと胸を撫で下ろすネギ達を見て苦笑いする。

デデデ

「うおー……っ!!」

デデデは大きな巨体で明日菜達に向かって突っ込んでくる。

刹那

「明日菜さん! そっちへ来ます!!」

明日菜

「へ！？ちよつ、待った……………」。

ドガッ！！

明日菜

「わぁっ！！！」

明日菜はデデデの体当たりで吹っ飛ばされてしまう。

刹那

「明日菜さん！おのれえ！！！」

刹那は夕凧でデデデに攻撃を仕掛けるが……………。

バコッ！！

刹那

「がはっ！！！」

デデデのハンマーが刹那の腹部に命中して、そのまま勢い良く吹っ飛ばされてしまう。

木乃香

「せつちゃんー!」

カービィ

「ぼよー!ぼよぼ……ぼよっ!」

カービィはふと壁に大事そつに飾られてるハンマーに目を向ける。

カービィ

「ぼよっ!」

カービィは飾られてるハンマーに向かって駆け出していく。

のどか

「カー君? 一体何処へ……。」

明日菜

「!」のっ!よくもやってくれたわね!」

パシーーッ!!

のどかがカービィに気を取られた時、明日菜が『ハマノツルギ』で反撃するが、デデデはハンマーで簡単に『ハマノツルギ』を受け止める。

デデデ

「ふんっ!!」

明日菜

「あっ!？」

バターーッ!!

デデデは『ハマノツルギ』を弾き返して、明日菜は床に尻餅を着いてしまう。

ネギ

「明日菜さん!!」

ネギが慌てて明日菜のところへ駆け出そうとした時……。

カービィ

「ぼよっ!!」

スウーーーーッ!!

突然カービィがハンマーを掃除機のように吸い込み始める。

カモ

「兄貴!あいつが何かやってるぜ。」

ネギ

「えっ!?!」

ネギはカモの言葉を聞いて動きを止める。

パクッ!!

すると、ハンマーが吸い寄せられてカービィの口の中に入る。

カモ

「ハ、ハンマーを食っちゃまいやがった!?!」

木乃香

「これって、ひょっとして……………」

全員カービィの行動に啞然していると……………。

デデデ

「おりゃーっ！！」

デデデが明日菜に向けてハンマーを振り下ろそうとしている。

ネギ

「し、しまった！」

カモ

「マズイ、姐さんがピンチだぜ！」

のどか

「このままじゃ、明日菜さんが……………あれ？カー君が……………」

のどかがふとカービィの方を見ると、そこにはカービィの姿が無かった。

バコッ！！

デデデ

「ぬっ！？」

カービィ

「ぼよよ……………」

デデデが振り下ろしたハンマーを、頭に鉢巻きを巻いたカービィがデデデと同じ大きさのハンマーで防いでいた。

明日菜

「ア、アンタ……………」

カービィ

「はぁあっ！！」

デデデ

「ぬおっ！？」

カービィはデデデをハンマーごと勢い良く押し出す。

木乃香

「凄いわ……………あれがコピー能力なんや。」

ネギ

「コピー能力？」

木乃香

「カー君は吸い込んだ人や物をコピーして自分の能力にする事が出来るんや。」

のどか

「じゃあ、さっきハンマーを吸い込んだから……………」

カモ

「ハンマーカービィになっちまったって訳か……………」

ネギ達は啞然としながらカービィを見つめる。

カービィ

「とりゃーっ！！！」

バコッ！！

デデデ

「あだっ!!!」

カービィはハンマーでデデデの頭をおもいつきり叩き付ける。

カービィ

「でやーーーーっ!!」

ドカーーーーーッ!!

更にカービィはハンマーでデデデを吹っ飛ばす。

刹那

「っ、強い……………」。

明日菜

「何か、さっきとは全然違うわ……………」。

明日菜と刹那もカービィの強さに唖然としていた。

カービィ

「はあああ……………」

ポオオオツ!!

カービィが気合いを入れていると、持っていたハンマーが炎に包まれていく。

カモ

「おい、あいつのハンマーが燃えてるぞ。」

ネギ

「うん、一体何をするつもりだろう……………」

カービィ

「鬼殺し火炎ハンマー!!」

ブンツ!!

カービィは炎に包まれたハンマーをデデデに向かって投げ付ける。

ポオoooooooooo!!

デデデ

「ぐわぁーっ!!」

カービィの投げたハンマーがデデデに命中する。

明日菜

「す、凄すぎ……。」

刹那

「……お見事でした。」

カモ

「兄貴、あいつさつき喋ったよな?」

ネギ

「そ、そうだね……。」

ネギー一行はカービィの強さにまたしても啞然としていた。

ブワッ!!

全員

「!?!」

真っ黒焦げで倒れ込んでるデデデの体から全身真っ黒で真ん中に一つ目がある丸い物体が出て来て、カービィに向かって突っ込んでいく。

木乃香

「な、何やアレ!?!」

のどか

「カー君に襲い掛かってる!」

カービィ

「ぼ、ぼよっ!?!」

カービィが慌てて黒い物体から避けようとした時……………。

スパッ!

刹那

(ん?今の音は……。)

刹那は何処からか聞こえた音に耳を傾ける。

パカーーーッ!

全員

「!?!」

次の瞬間、黒い物体が真っ二つに切り裂かれてしまう。

カービィ

「ぼ、ぼよっ」

カービィは恐る恐る真っ二つになった黒い物体に触れる。

ネギ

「な、何がどうなってんでしょっか？」

明日菜

「わ、私に聞かないでよ……………」

ネギー行はこの事態に困惑する。

シュタツ！

カービィ

「ぼよっ！？」

突然カービィ位の背丈に仮面を被ってマントを付けた人物がカービィの背後へ着地する。

？

「危ないところだったな、カービィ。」

カービィ

「ぼよー！ぼよぼよー！」

カービィは嬉しそうに仮面の人物へと駆け寄る。

ネギ

「あの、貴方はカービィさんの仲間ですか？」

？

「ん？」

仮面の人物は恐る恐る声を掛けられたネギを見つめる。

？

「カービィ、この者達は？」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよぼよぼよ。」

カービィは仮面の人物に一生懸命説明する。

？

「何！？私とデデデ陛下を捜していただど？」

カービィ

「ぼよっ！」

カービィは仮面の人物の言葉に答えるように頷く。

明日菜

「えっ！？カービィの言葉が分かるの？」

？

「ああ、一応な……申し遅れたが、私が君達のお探しのメタナイトだ。」

ネギ

「あ、貴方が！？」

ネギ一行は仮面の人物がメタナイトだと聞いて目を丸くさせる。

メタナイト

「ところで、私に用があるとカービィに聞いたが……。」

ネギ

「は、はい！実は僕達はですね……。」

ネギはメタナイトにこれまでの経緯を説明をする。

メタナイト

「……………うむ、そうであったか。」

ネギ

（良かった、ちゃんと理解してくれたようだ。）

ネギはメタナイトが納得した様子を見て一安心する。

メタナイト

「それで、そのバッチというのは……………」

ネギ

「あ、はいはい！これです。」

ネギはメタナイトに星型のバッチを渡す。

メタナイト

「確かに受け取ったぞ。」

刹那

「……………あの、一つ聞いても宜しいですか？」

メタナイト

「ん？何だい？」

刹那

「これは貴方がやったんですか？」

そう言うと、刹那は真つ二つになって倒れてる黒い物体に指さす。

メタナイト

「ああ、私がこの剣で切り裂いたのだ。」

そう言うと、メタナイトは刹那に雷をのような形状の三対の枝刃が付いた金色の剣を見せる。

明日菜

「へえ、カッコイイデザインじゃない。」

ネギ

「それに、立派な剣ですね。」

刹那

(いや、立派なのは剣だけではない……………あの黒い物体を一瞬で、それも肉眼では見えない位の速さで切り裂いてしまつとは……………この人、かなり出来るぞ。)

刹那は真剣な表情でメタナイトを見つめる。

木乃香

「そもそも、この黒いのは一体何なん？」

メタナイト

「ああ、これが……………これは一般的にダークマターと呼ばれている。

」

のどか

「ダークマター？」

ネギー一行はメタナイトの言葉に耳を傾ける。

メタナイト

「ダークマターは宇宙で手頃な惑星を見つけては邪悪な黒い雲を拡散させて、自分達の住みやすい暗闇の世界に変えようとする謎の生命体だ……………しかも、ダークマターは他者に憑依しては宿主を支配してしまうのだ。」

ネギ

「という事は、先程僕達に襲い掛かってきたデデデさんは……………」

メタナイト

「そう、ダークマターに操られていたのだ。」

カモ

「成程、それなら兄貴達に襲い掛かってきた理由も納得出来るな。」

カービィ

「ぼよ?」

カモはメタナイトの説明を聞いて納得するが、カービィは不思議そうに顔を傾げる。

デデデ

「う、うん……………」

突然デデデが頭を押さえながらゆっくりと起き上がる。

木乃香

「あ、気が付いたようやな。」

メタナイト

「陛下、ご無事ですか？」

デデデ

「いや、頭が痛いぞい……………一体何がどうなってるぞい？」

明日菜

「ネギ、説明宜しくね。」

ネギ

「ま、またですか……………分かりました。」

カモ

（兄貴も大変だな、これで三回目だぜ……………。）

こうしてネギはデデデにこれまでの経緯を説明するのであった……………。

第二十七話、デデデ城での大乱闘（後書き）

デデデに取り憑いていたダークマターを倒したネギー行とカービィ
&メタナイトですが、この先何が起ころのか？

第二十八話　ダークマターに憑依されし者達（前編）　（前書き）

ダークマターに取り憑かれたデデデを解放したネギー行とカービィ
&メタナイトはこの後どうなるのか？

第二十八話〈ダークマターに憑依されし者達（前編）〉

〈デデデ城王室〉

ネギ

「……………という訳なんですよ。」

ネギはデデデにこれまでの経緯を全て説明した。

デデデ

「うむ、よく分からんが……………まあ、ご苦労だったぞい。」

明日菜

「何か腹が立つ言い方ね……………。」

メタナイト

「陛下はああいう方だが、あまり気にしないであげてくれ。」

カービィ

「ぼよ。」

明日菜

「わ、分かったわ。」

デデデの偉そうな態度にイラっとする明日菜だが、メタナイトとカ
ービィの言葉に少しだけ落ち着く。

ネギ

「それと、これを渡しておきますね。」

そう言うと、ネギはデデデに星型のバッチを渡す。

デデデ

「ほお、これを付けたらパワーアップするのかぞい……………」。

デデデは胸元に星型のバッチを付ける。

デデデ

「……………何にも変わらないような気がするぞい。」

ネギ

「そ、そんなハズはないと思いますが……………」。

ネギはデデデの言葉に少し焦る。

メタナイト

「それにしても、何故またダークマターが現れたのだろうか……
ダークマターの親玉であるゼロはカービィが倒したハズなのだが……
……。」

カービィ

「ぼよ……。」

メタナイトが腕を組んで深く考え込んでいると、カービィも真似して腕を組んで考え込む。

カモ

「兄貴、やっぱりこの世界にも異変が……。」

ネギ

「うん、きっとそうだよ。」

明日菜

「それなら、私達の出番って訳ね。」

ネギ達がカービィ達に聞こえないようにコソコソと話していた時……

……。

ボカアーーーーッ!!

突然何かが発したような大きな音が遠くから響き渡る。

デデデ

「な、何事ぞい!?!」

メタナイト

「城の外の方から聞こえてきたが……。」

カービィ

「ぼよぼよっ!」

カービィは爆発した音の方へ駆け出していく。

木乃香

「あ!カー君が行ってもうた……。」

ネギ

「僕達も行きましょう!」

そう言うと、全員カービィの後を追いかけていく。

くデデデ城の外く

？

「それぞれく！」

ボカン！ボカン！

ピエロのような服装をした人物がデデデ城に向けて爆弾を投げ付けている。

デデデ

「これ！わしの城を壊す気かぞい！？」

？
「ん〜？」

ピエロの人物が声がした方を向くと、そこにはネギー行とカービイ達が居た。

メタナイト

「ポピーブロスS r ・（シニア）よ、一体何故こんな真似を……。」

「

ポピー

「うるさい！これでもくらえ〜！！」

ポピーブロスS r ・はネギ達に向けて沢山の爆弾を投げ付ける。

明日菜

「ちよっと！あれって爆弾じゃない!？」

ネギ

「あわわ、避けないと……。」

メタナイト

「いや、その必要は無い……カービイ！あの爆弾を吸い込め!!」

カービィ

「ぼよっ！」

スウーッ！！

カービィはメタナイトに言われた通りに爆弾を全部吸い込む。

ポンッ！！

すると、カービィがポピーブロスSrと同じ水色の帽子に大きな爆弾を掲げた姿へと変わった。

木乃香

「あ！カー君がまたコピーした。」

メタナイト

「爆弾をコピーしたカービィはボムカービィへと変化したのだ。」

明日菜

「ハンマーカービィといい、そのまんまネーミングね……………」

明日菜はメタナイトの言葉を聞いて苦笑いする。

カービィ

「ほっ！ほっ！」

ポイツ！ポイツ！

カービィはポッピーブロスS r・よりも沢山の爆弾をポッピーブロスS r・に向けて投げ付ける。

ポッピー

「わっ！？ちよっとタンマ……………」

ボカアーーーーッ！！

ポッピーブロスS r・は避ける間もなくカービィの爆弾の餌食となってしまう。

ポッピー

「うっん……………」

デデデ

「ざまーみる！わしの城を爆破しようとした罰ぞい！」

デデデが真つ黒で目を回しているポピーブロスS r . に威張りながら近付いた時……………。

ブワッ！！

デデデ

「ぬおっ！？」

突然ポピーブロスS r . の体からダークマターが出て来る。

メタナイト

「何っ！？またしてもダークマターが……………。」

刹那

「急いで退治しなければ……………。」

刹那とメタナイトがそれぞれ剣を構えながらダークマターに切り掛かるつとすが……………。

デデデ
「にの〜っ!〜!」

グシャッ!!

全員

「!?!」

突然デデデがハンマーを振り下ろしてダークマターを叩き潰す。

デデデ

「ふん! わしを操って城を荒らした報いぞい。」

メタナイト

「さ、流石陛下……。」

刹那

「あっさり倒してしまいましたね……………」

刹那とメタナイトはその場で啞然とする。

メタナイト

「……………ところで、君は刹那といったな？」

刹那

「は、はい。」

メタナイト

「私とほぼ同じ動作をしていたところを見ると……………貴公も剣の腕を窮^{きわ}めている者だな？」

刹那

「えっ！？な、何故それを……………」

刹那はメタナイトに剣士だと言われて少し焦る。

メタナイト

「貴公の所持している刀と先程の動きを見れば一目瞭然^{いちもくりょうぜん}だ。」

刹那

（それだけで私が剣士だと分かるとは……………この人の目は本物の剣士の目だ。）

刹那はメタナイトの剣士の目に驚きを隠せなくなる。

カービィ

「ぼー!?ぼよぼよ!」

メタナイト

「ん?どうしたカービィ……………ア、アレは!？」

全員カービィが指さす方を見ると、四つの真つ黒な雲が森の方へ落下していく光景が目に入った。

のどか

「ア、アレってもしかして……………」

メタナイト

「ああ、ダークマターに間違いない……………」

ネギ

「森の方へ落下していきますね……………行ってみましょうか。」

カービィ

「ぼよ!」

カービィはネギの言葉に答えるように返事をする。

デデデ

「そうか……じゃあ、頑張ってる行って来るぞい。」

そう言うと、デデデはネギ達に向かって大きく手を振る。

明日菜

「ちよっと、アンタは行かないの？」

デデデ

「何でわしも一緒に行かなきゃならんぞい？お前達だけで行ってくればいいぞい。」

カモ

「な、何て我が儘で自分勝手な奴だ……。」

メタナイト

「さっきも言ったと思うが、陛下はああいう方なのだ……。」

メタナイトはネギ達に聞こえないようにこっそりと話す。

デデデ

「とにかく、わしは行かないっいたら行かないぞい！」

そう言うと、デデデは自分の城へ入って行く。

木乃香

「行ってもうた……。」

ネギ

「仕方ない、僕達だけで行きましょう。」

カービィ

「ぼよぼよ……。」

全員森に向かって駆け出していく中、カービィはチラッとデデデ城の方を見ながら走り出す。

「グリーングリーンズ」

ネギー一行とカービィ&メタナイトはダークマターが落下したと思われる森の中へやって来た。

ネギ

「確かこの辺りだと思うんですが……………」

メタナイト

「気をつける、何処かに潜んでいる可能性が高い。」

カービィ

「ぼよぼ……………ぼよ?」

のどか

「カー君、どうしたの?」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼ。」

カービィが指さす方向を見ると、大きな切り株の上で三脚型のイーゼルに画用紙を乗せて絵を書いている赤いベレー帽に緑色の服装の少女の後ろ姿が目についた。

剎那

「誰かがあそこで絵を書いているようですね。」

メタナイト

「あの後ろ姿はアドレーヌではないか？」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよ。」

カービィはメタナイトの言葉に答えるかのように頷く。

木乃香

「ひよっとして、知り合いなん？」

メタナイト

「私はあまり面識は無いのだが……確か彼女は絵の修行をする為にこのポップスターへやって来たのだ。」

明日菜

「へえ、私も美術部に入部してから絵には自信あるんだけどなあ。」

カモ

(入部当初は落書きみてえに酷かったけどな……。)

カモは明日菜の言葉を聞いて苦笑いする。

ネギ

「それより、あの人がこのまま絵を描いてたら危険ですよね。」

メタナイト

「うむ、何せダークマターが潜んでいるかも知れないからな。」

木乃香

「ほなら、早く知らせなアカンな。」

そう言うと、全員アドレーヌが居る場所まで駆け出す。

カービィ

「ぼ〜よ〜!」

カービィがアドレーヌに呼び掛けるように声を出す。

アドレーヌ

「……………あら、その声はカー君ね？」

カービィ

「ぼよぼよっ。」

アドレーヌはネギ達に背を向けて絵を描きながらカービィの声に反応する。

明日菜

「人と話をする時くらい描くのやめればいいのに……………」

ネギ

「よっぼど絵を描くのが好きなんですネ……………」

ネギと明日菜はカービィ達に聞こえないようにこっそりと話す。

メタナイト

「アドレーヌ、この辺りで黒い雲のような物体を見なかったか？」

アドレーヌ

「黒い雲……………?」

そう呟くと、アドレーヌは絵を描く動作を速める。

アドレーヌ

「……その黒い雲って、こんななの？」

アドレーヌは画用紙に自ら描いたダークマターの絵をネギ達に見せる。

ネギ

「わゝ、上手ですね。」

明日菜

「いや、これは上手ってレベルじゃないわよ。」

刹那

「まさに芸術ですね。」

ネギー行はアドレーヌの絵を見て絶賛する。

のどか

「何だか、そのまま絵から飛び出してきそつですね。」

アドレーヌ

「……………飛び出させてあげましょうか？」

木乃香

「えっ？」

ネギー一行は怪しい笑みを浮かべながら囁くアドレーヌの言葉に耳を傾ける。

アドレーヌ

「いでよ！私の書いた絵よ！！」

ブワッ！！

アドレーヌが大声で叫んだ時、画用紙に描かれたダークマターが飛び出てくる。

ネギ

「え、絵が飛び出してきた！？」

メタナイト

「しまった！アドレーヌの描いた絵は実体化するんだ！」

明日菜

「そんなのアリ〜!?!」

カービィ

「ぽよ〜っ!!」

全員アドレーヌの能力に驚愕する中、ダークマターがネギ達に向かって突っ込んで来る。

メタナイト

「みんな!避ける!!」

メタナイトの言葉で全員間一髪避ける。

アドレーヌ

「いいぞ〜、どんどんやっちやえ〜!」

木乃香

「あの子、どうしてこないな事を……………」

メタナイト

「恐らく彼女もダークマターに取り憑かれているのだろっ。」

カービィ

「ぼよ……………」

カービィはメタナイトの言葉を聞いて、ダークマターに取り憑かれて豹変したアドレーヌを悲しげに見つめる。

のどか

「カー君！後ろー！！」

カービィ

「ぼよっ！？」

カービィはのどかの声に反応して振り向くと、ダークマターがこちらに勢い良く迫ってきていた。

メタナイト

「マズイ！今避けても間に合わない……………」

木乃香

「そんな……………」

カービィ

「ぼよぼよ……。」

慌てふためくカービィにダークマターがどんどん迫って来るが……。

バツコーーン!!

全員

「!?!」

突然デデデがカービィの前に現れて、ハンマーで迫って来たダークマターを打ち返す。

カービィ

「……………ぼよ?」

カービィは音に気が付いてデデデの方を見る。

デデデ

「……………全く、世話の焼ける奴だぞい。」

メタナイト

「陛下、何故此処へ……………」

デデデ

「お前達だけでは何かと不安だから仕方なく付いて来たんだぞい。」

明日菜

「……………やっぱり腹が立つ言い方ね。」

デデデの素直じゃない言葉に明日菜は少し不満げになる。

アドレーヌ

「おのれ〜、こうなったらもっと強そうなのを描かなきゃ……………」

アドレーヌが画用紙に筆を近付けようとした時……………。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……… 大気よ、水よ、白霧となれ、彼の者等に一時の安息を。『眠りの霧』！！」

バフオツ！！

アドレーヌ

「きゃっ！？」

ネギが呪文を唱えながら杖を振り下ろすと、アドレーヌの周りに霧が発生する。

アドレーヌ

「う……うう……。」

バタツ！

アドレーヌは目が虚ろになり、そのまま倒れてしまう。

デデデ

「い、今何をしたぞい！？」

ネギ

「僕の魔法で、あの人の周りに相手を眠らせる霧を発生させたんです。」

メタナイト

「魔法か……………」

メタナイトはネギの言葉を聞いて興味深そうに納得する。

ブワッ！！

すると、眠っているアドレーヌの体からダークマターが出て来る。

デデデ

「また出たぞい！」

刹那

「此処は私が……………」

メタナイト

「ハアッ！！」

スパアアッ！！

刹那が夕凧を構えて駆け出そうとした瞬間、メタナイトが素早くダークマターを切り裂いてしまう。

ネギ

「は、速い……………」

明日菜

「やっぱり凄いわね。」

刹那

「……………」

ネギ達はメタナイトの音速を超える速ささに感心する中、刹那だけ少し悔しそうな表情を浮かべる。

木乃香

「せっちゃん、難しい顔してどないしたん？」

刹那

「い、いえ……………何でもありません。」

刹那は笑顔で木乃香の問いに答える。

木乃香

「そか、それならええんやけど……………」。

刹那

（何だ？このモヤモヤした感じは……………。）

刹那は手を胸に当てながら考え込む。

デデデ

「ところで、アドレーヌはちゃんと目を覚ますのかぞい？」

ネギ

「大丈夫ですよ、しばらくしたら自然に起きますから……………」。

カービィ

「ぼよぼよ。」

カービィはネギの言葉を聞いて一安心する。

メタナイト

「それにしても、この様子だと残りのダークマターも誰かに取り憑いているな…… 此処から先は気をつけて進むとしよう。」

ネギ

「はい、そうしましょう。」

そう言いつと、全員森の奥へと進んでいく。

第二十八話　ダークマターに憑依されし者達（前編）　（後書き）

残りのダークマターを退治する為にネギー行とカービィ達は先へ進むのであった。

第二十九話くダークマターに憑依されし者達（後編）く（前書き）

アドレーヌに取り憑いたダークマターを倒したネギー行とカービィ達は森の奥へと進む。

第二十九話くダークマターに憑依されし者達（後編）く

くグリーンングリーonzの森の奥く

ネギー行とカービィ達は残りのダークマターを退治する為に慎重に進んでいた。

ネギ

「あれ？あの一本の木だけ大きいですね。」

ネギは一本だけ大きな木に目を向ける。

明日菜

「本当だ、まるでこの森の主みたいね。」

メタナイト

「あの木は確か……。」

？

「この森から出て行け！」

全員

「!？」

その場に居た全員が突然聞こえてきた声に反応して身構える。

デデデ

「ど、何処に隠れてるぞい!？」

カービィ

「ぼよぼよ!？」

？

「お前達のすぐ傍にいる。」

明日菜

「す、すぐ傍って……………」

木乃香

「周りには誰も居てへんよ。」

メタナイト

（まさか……………。）

メタナイトは咄嗟に目の前の大きな木を見る。

メタナイト

「やはりウィスピーウッズか！」

メタナイトが目の前の大きな木に指さすと、木に埴輪はにわのような目と口に長い鼻が現れる。

のどか

「き、木に顔が……。」

ウィスピー

「この森を荒らす者は許さん！」

ネギ

「ぼ、僕達はそんな事……。」

ブワアアアツ！！

ウィスピーウッズはネギ達に向けて大きく息を吹き掛ける。

カービィ

「ぼ、ぼよ……。」

明日菜

「な、何なの？この台風みたいな風は……。」

メタナイト

「ウ、ウイスピーウツズが息を吹き掛けるんだ……。」

メタナイトは吹き飛ばされないように踏ん張りながら説明をする。

デデデ

「こ、こんな風に負けるかぞい……。」

デデデが前へ進み出そうとした時……。

ボカツ！！

デデデ

「あだっ！！」

突然デデデの頭上に大きな林檎が落下してくる。

木乃香

「な、何で林檎が上から……………」。

メタナイト

「ウイスピーウッズが故意に狙って落としているんだ……………」。

デデデ

「あたたた……………酷い目にあつたぞい。」

デデデは頭を押さえながら風に飛ばされないように踏ん張る。

刹那

「それにしても、この風を何とかしないと……………」。

メタナイト

(風……………そうだ！)

メタナイトは刹那の言葉に何かを思い付く。

メタナイト

「カービィ！風を吸い込め！！」

ネギ

「えっ？風って……。」

カービィ

「ぼよっ……！」

スウーーーーッ……！！

ネギ達がメタナイトの言葉に耳を疑っていると、カービィが風を吸い込み始める。

ポンッ……！！

すると、カービィの頭に菱形の渦のエンブレムの付いた輪っかを被った姿へと変化する。

のどか

「あの能力は………？」

メタナイト

「あれこそ強風をコピーしたトルネイドカービィだ。」

明日菜

「もつ何でもコピー出来ちゃうって感じね……………」。

明日菜はカービィのコピー能力に心底驚かされて思わず苦笑いする。

カービィ

「はぁ……………」

ビュユユユツツ!!

カービィは勢い良く回転して自ら竜巻を発生させて、そのままウィスピーウッズに突っ込んでいく。

ウィスピー

「うお……………」

ビュユツツ……………」

しばらくして風が止むと、ウィスピーウッズに生えていた木の葉が全部吹き飛ばされて目を回している状態になっていた。

木乃香

「あや、何か寂しい姿になってもつたな……。」

のどか

「ちょっと可哀相ですね……。」

木乃香とのどかが哀れな姿になったウイスピーウツズを見て啞然と
していた時……。

ブワッ!!

突然ウイスピーウツズの口からダークマターが出て来る。

メタナイト

「ハッ!!」

スパッ!!

メタナイトは音速を超える速さでダークマターを切り裂く。

メタナイト

「やはりウイスピーウツズもダークマターに取り憑かれていたか…

「……。」

明日菜

「凄い、動きが全然見えなかった……。」

木乃香

「ホンマやな、何かカッコエエわ。」

刹那

「……………」

刹那は木乃香の言葉を聞いた途端、表情が険しくなる。

ネギ

「刹那さん、どうかしましたか？」

刹那

「い、いえ別に……。」

ネギ

「そ、そうですね……。」

刹那

(まだだ……………また胸の辺りがモヤモヤする……………。)

刹那は胸に手を当てながら深く悩む。

デデデ

「 やれやれ、さっさと先へ進むぞい。 」

カービィ

「 ぽよっ! 」

カービィがそのまま駆け出そうとした時……………。

ポトツ

突然カービィの頭上に毛虫が落ちてくる。

のどか

「 ひっ! ? け、毛虫が……………。 」

カービィ

「 ぽよっ! ? 」

カービィはのどかの言葉を聞いて、一瞬固まってしまふ。

カービィ

「ぽよぽよ〜っ!」

すると、突然カービィが一直線に駆け出していく。

明日菜

「は、速っ!？」

木乃香

「カー君、急にどないしたんやろ？」

メタナイト

「カービィは何を隠そう毛虫が苦手なのだ。」

ネギ

「そ、そうなんですか!？」

ネギ達はカービィの苦手な物に耳を疑った。

刹那

「とにかく、後を追いかけてみましょう。」

デデデ

「……ったく、人騒がせなピンクボールぞい。」

ネギー行とメタナイト&デデデは急いでカービィの後を追いかける。

くグリーングリーンズの更に奥の森く

ネギー行とメタナイト&デデデは更に森の奥までやって来た。

ネギ

「……………一体何処へ行ったんでしょうか？」

メタナイト

「そう遠くへは行っていないと思うが……………」。

明日菜

「あれ？向こうから何か変な臭いが……………」。
「そう言つと、明日菜は変な臭いがするという場所へ向かつて歩き出す。」

ネギ

「ちよつと、明日菜さん……………」。

メタナイト

「我々も行つてみよう。」

残りのメンバーも明日菜の後を付いて行く。

？

「さあカービィ、いっぱい食べてね。」

カービィ

「ぽよっっ！」

全員変な臭いがする場所までやって来ると、カービィが縦長の体格でコック帽とエプロンをした人物が差し出したカレーライスを嬉し

そつに食べていた。

カモ

「何だよ、心配して捜してみりゃ呑気にカレーなんて食べてやがるぜ……………」

カモはネギの肩の上でふて腐れながら呟く。

ネギ

「でも、無事みたいだから安心したよ。」

木乃香

「それより、あの人は誰なん？」

メタナイト

「彼はコックカワサキといって、このプンプランド唯一の料理人だ。」

デデデ

「だが、奴の作る料理の味はイマイチぞい。」

のどか

「でも、カー君は美味しそうに食べてますけど……………」

メタナイト

「カービィは味覚よりも食べられればそれでいいんだ。」

刹那

「な、成程……………」

ネギー一行はメタナイトの説明を聞いて苦笑いする。

カービィ

「ぼよぼよ。」

カワサキ

「はいはい、お代わりだね。」

カービィが皿を差し出すと、カワサキは皿にご飯とカレーを盛り付ける。

明日菜

「……………あの調子だと無くなるまで食べ続けるわね。」

ネギー

「そ、そうですね……………呼びに行きましょう。」

メタナイト

「待った！」

ネギがカービィを呼ぼうと飛び出そうとしたが、メタナイトに制止される。

メタナイト

「もしかしたら、カワサキもダークマターに取り憑かれているかもしれない……………此処は慎重に行動しなければ……………」

デデデ

「そんな面倒な事より、こちらから先に攻撃を仕掛けた方がいいぞい！」

そう言うと、デデデはカワサキに向かって駆け出していく。

メタナイト

「へ、陛下!?!」

木乃香

「……………行ってもうたわ。」

カモ

「あいつ、絶対姐さんタイプだよな……………」

明日菜

「ちょっと、それどついう意味よ？」

明日菜はカモの言葉にカチンとする。

デデデ

「カワサキー！観念するぞーい！！」

カービィ

「ぼよ？」

カワサキ

「えっ？」

ドカーーーーーッ！！

カワサキ

「うひゃ~~~~っ！！？」

デデデはカワサキに向かってハンマーを振り下ろすが、カワサキは
間一髪避ける。

カワサキ

「い、いきなり何するの〜?」

デデデ

「黙れ! 正体を現わすぞい!」

デデデはハンマーを乱暴に振り回しながらカワサキに近付いてくる。

カワサキ

「だ、誰か助けて〜!」

デデデ

「待て待てーい!」

デデデは逃げるカワサキを追いかけ回す。

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよ?」

カービィが追い掛けっこしてるデデデとカワサキを見つめている時
……。

？

「スマツシュパンチ！」

ボカツ！！

カービィ

「ぼよっ！？」

突然何者かがカービィに殴り掛かる。

木乃香

「カー君！？」

デデデ

「なぬっ！？」

カービィ

「ぼ、ぼよ……」。

カービィは殴られた頬を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

？

「流石カービィだ、俺の攻撃を受けても立ち上がるとはな……………」。

カービィの前に、頭に鉢巻きを巻いた格闘家らしいスタイルをした少年が立っていた。

デデデ

「お、お前はナックルジョーではないか!？」

メタナイト

「まさか、ダークマターはカワサキではなくジョーに……………」。

ジョー

「そうさ、そのダークなんとかつてのが俺に取り憑いたお蔭で俺はとてつもない力を手に入れたんだ。」

そう言うと、ナックルジョーの拳がどす黒い気で包まれる。

ジョー

「行くぞカービィ！バルカンジャブ！！」

ボカカカカカッ！！

ナツクルジョーは目にも見えない速さでカービィを殴り付ける。

メタナイト

「カービィ！！」

明日菜

「あんなに一方的にやられてたら反撃出来ないじゃない……………」

ネギ

「……………僕が行きます！」

刹那

「ネ、ネギ先生！？」

ネギはナツクルジョーに向かって駆け出していく。

ジョー

「これでとどめだ！！」

カービィ

「ぼよっ……………」

ナックルジョーが全身ボロボロ状態のカービィに強力な一撃を加えようとした時……………」。

パシッ！！

ジョー

「な、何っ！？」

カービィ

「……………ぼよっ？」

カービィは閉じていた目を開けると、ナックルジョーの拳をネギが掌^{てのひら}で受け止めていた。

ジョー

「おい！俺は今カービィと闘ってたから邪魔するなよ！！」

ネギ

「カービィさんはもう闘える状態ではありません……………でも、どうしても闘いたいのでしたら、僕が選手交代します。」

ジョー

「ほ…っ……………」

ナツクルジョーはネギの言葉を聞いて怪しい笑みを浮かべる。

ジョー

「……………いいだろう！次はお前をぶっ飛ばしてやるよ！！」

そう言うと、ナツクルジョーはネギに攻撃を仕掛けてくる。

ジョー

「バルカンジャブ！！」

ボガガガガガッ！！

ネギ

「っっ……………」

ネギはただ両腕を突き出してナツクルジョーの攻撃を防ぐ。

明日菜

「ちよつとネギ！防ぐだけじゃ勝てないわよ！」

のどか

「ネギ先生……………」

明日菜達は心配そうにネギを見守るしかなかった。

ジョー

「どうだ！少しは効いたか？」

ナツクルジョーは一旦攻撃を止めてネギに質問する。

ネギ

「……………たいした事ありませんね。」

ジョー

「な、何っ？」

ナツクルジョーはネギの言葉に耳を疑った。

ネギ

「貴方のパンチは小太郎君に比べれば、全然たいした事ありません！」

ジヨ一

「何だとおくくっ!?」

ナツクルジヨ一はネギの挑発的な言葉に腹を立てる。

ジヨ一

「その糞生意気な減らず口を二度と開けないようにしてやるぜ!!」

そう言うと、ナツクルジヨ一は怒りに身を任せた状態でネギに突っ込んでいく。

明日菜

「ネギ一っ!!」

ジヨ一

「くらえ!ライジンブレイク!!」

ナツクルジヨ一はネギに向けて勢い良く拳を振り下ろすが……………。

ガシッ!!

ジョー

「!？」

ネギはまた難無くナツクルジョーの拳を受け止める。

ジョー

「くそっ!またしても……………」

ナツクルジョーが次の攻撃を仕掛けようとしたが……………。

ボガアッ!!

ジョー

「ぐふっ!？」

ネギが素早くナツクルジョーを殴り飛ばす。

ジョー

(ば、馬鹿な……。)

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステ……闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。」

ネギが呪文を唱えながら掌を掲げると、殴り飛ばされたナツクルジョーがネギの掌に落ちてきくる。

ジョー

(な、何をするつもりだ……。)

トンッ

ナツクルジョーの腰がネギの手に付いた瞬間……。

ネギ

「白き雷!！」

ズバアアアアーン!!

ジョー

「ぐわあああつ!!」

ネギの掌から強力な電気が流出して、ナックルジョーは体中電気に包まれる。

カモ

「やったぜ兄貴ー!!」

木乃香

「流石ネギ君やな。」

デデデ

「な、何てパワーぞい……。」

カワサキ

「うわゝ、まるで漫画みたいだよ。」

全員ネギの闘いに歓喜を上げる。

カービィ

「ぼよよよっ!!」

ネギ
「わっ!？」

突然カービィが嬉しそうにネギの頭に飛び付いてきた。

ジョー
「な、何故だ……強大な力を得たこの俺が……負けたんだ……
……。」

メタナイト
「答えは簡単だ……お前はその邪悪で悍ましい力に身を委ね過ぎ
て、お前は本来の力を見失っていたからだ……そんな者が正々堂
々と全力で闘いに挑んだ彼に勝てる訳がない。」

ジョー
「ち、畜生……。」

メタナイトの言葉を聞いたナックルジョーは、愚かな自分に悔やみ
ながら気絶してしまつた。

ブワッ!!

すると、ナックルジョーの体からダークマターが出て来て、そのま

ま空の彼方へと飛び去ってしまう。

メタナイト

「しまった！逃げられか……………」

ネギ

「一体何処へ飛んで行ったんでしょう……………」

カービィ

「ぼよぼよ……………」

カワサキ

「きつと宇宙へ逃げて何処かの星でお餅を突いてんだよ。」

全員

「……………」

全員カワサキの素っ頓狂な発言を聞いて怪訝そうな表情を浮かべる。

カワサキ

「あ、あはははははは……………嫌だなあ、今のはギャグだよギャグ……………」

カワサキは苦笑いしながらごまかす。

デデデ

「こんな時にくだらんギャグなど言いおって……………」。

メタナイト

「……………待てよ、意外と当たってるかもしれんぞ。」

ネギ

「えっ？」

全員メタナイトの言葉に耳を傾ける。

メタナイト

「ダークマターは宇宙空間でも移動が可能だ……………だから宇宙へ逃げても可笑しくない。」

明日菜

「でも、どうやって宇宙へ行けばいいの？」

カービィ

「ぼよぼよ。」

メタナイト

「その事なら心配いらない……………私に付いて来てくれ。」

そう言うと、メタナイトは何処かへ駆け出していく。

デデデ

「こら！一体何処へ行くぞい。」

刹那

「とにかく、後を付いて行きましょう。」

ネギー行とカービー達は慌ててメタナイトの後を追いかける。

カワサキ

「……………何だかよく分からないけど、みんな頑張つてね！」

カワサキはネギ達を見送りながら左右に手を振って声を上げる。

「プププランドのとある格納庫前」

ネギー行とカービィ達は大きな格納庫のような建物の前までやって来た。

ネギ

「見たところ、格納庫みたいですけど……………」。

木乃香

「この中に何があるの？」

メタナイト

「とにかく、中へ入ってくれ。」

ガチャッ

全員がメタナイトに言われた通りに格納庫へ入ると……………。

明日菜

「えっ？な、何これ!？」

ネギ

「す、凄い……………」

ネギー行は格納庫に納められてる左右に蝙蝠こうもりの翼みたいな二対のウイングに、艦首にメタナイトの仮面を象った巨大戦艦を見て目を丸くさせる。

メタナイト

「これは私が所有している巨大宇宙戦艦『ハルバード』だ。」

デデデ

(またこんな物を作っておったか……………。)

のどか

「まさか、これで宇宙へ行くんですか？」

メタナイト

「勿論だ……………その前に私は乗組員を集めるから先にハルバードの中へ入っててくれ。」

刹那

「わ、分かりました。」

ネギー一行とカービィ&デデデはハルバードの入口へ向かって歩き出す。

ネギ

「わゝ、この中に入るんですか……………何だかワクワクしますね。」

明日菜

「……………アンタ、目を輝かし過ぎよ。」

明日菜は目を輝かせながらハルバードを見つめるネギを見て苦笑いする。

メタナイト

（さて、急いでメタ・ナイツを集結させねば……………。）

メタナイトはネギ達がハルバードの中へ入っていくのを確認すると、格納庫から急いで出て行く。

第二十九話くダークマターに憑依されし者達（後編）く（後書き）

戦艦ハルバードで宇宙へ行く事になったネギー行とカービイ達に待ち受けるものは？

第三十話 悪戯好きの魔法使いと銀河最強の騎士 (前書き)

ダークマターを追いかける為にメタナイトの戦艦ハルバードで宇宙へ行く事となったネギー行とカービィ達だが、これからどうなるのか？

第三十話 悪戯好きの魔法使いと銀河最強の騎士

〔戦艦ハルバード内部〕

ネギー行とカービィ&デデデはハルバードの操縦室らしき部屋へや
つて来た。

ネギ

「この部屋は戦艦の操縦室みたいですね。」

明日菜

「見たところ、そんな感じね……………」

刹那

「……………それにしても、メタナイトさんは何の為にこの戦艦を造っ
たんでしょうか？」

デデデ

「このププランドを征服する為ぞい。」

全員

「えっ!?!」

ネギー一行はデデデの言葉に耳を疑った。

のどか

「それって本当ですか？」

デデデ

「本当ぞい、この戦艦は元々ププランドを征圧する為に制作した兵器ぞい……だが、その企みはカービィによって阻止されたがな。」

カービィ

「ぼよ……。」

カービィはデデデの言葉を聞いて少し落ち込む。

木乃香

「……とてもそういう人には見えへんけどな。」

明日菜

「そうね、なんか意外……。」

メタナイト

「……それはもう昔の話だ。」

全員

「!?!」

全員声がした方を向くと、そこにはメタナイトとそれぞれ斧・トゲ付き鎖鉄球・三つ又槍・投げ槍を持った部下らしき人物が四人いた。

メタナイト

「確かに、昔の私は世直しの意味でこのププブランドを征服しよう自惚れていた……だが、カービィに負けてハルバードが海に沈んだ後、私は自分の仕出かした行動が間違いであると気付いた……それ以来、私はププブランドを守る立場になると決心したのだ。」

のどか

「そうだったんですか……。」

ネギ

「色々事情があったんですね……。」

ネギー一行はメタナイトの言葉を重く受け止める。

木乃香

「話が変わるけど、後ろの人達は誰なん？」

メタナイト

「ああ、そうだったな……彼らは私の部下『メタ・ナイツ』のメンバーで、左からアックスナイト、メイスナイト、トライデントナイト、ジャベリンナイトだ。」

アックス

「話はメタナイト様から聞きました。」

メイス

「我々も協力するだスよ。」

ネギ

「本当ですか！ありがとうございます。」

ネギはアックスナイト達の温かい言葉を聞いて深く頭を下げる。

メタナイト

「よし、早速発進準備に取り掛かる！全員それぞれ配置に着け！！」

メタ・ナイツ達

「了解！！」

メタナイトの指示を聞いたメタ・ナイト達は操縦室から出ていく。

メタナイト

「さて、早速ハルバードを発進させよう……。」

そう言うと、メタナイトは両手で舵を握る。

メタナイト

「諸君、発進する際に多少揺れるから何かに掴まってるように……」

ネギ

「わ、分かりました。」

カービィ

「ほよほよ。」

全員メタナイトに言われた通りに、崩れ落ちないように何かに掴まる。

メタナイト

「それでは、戦艦ハルバード発進……！」

ゴゴゴゴゴゴッ!!

メタナイトが舵を動かすと、ハルバードが起動すると同時に格納庫の天井が真つ二つに開かれる。

明日菜

「う、動き出したわね……………」

ネギ

「何だかワクワクしますね。」

デデデ

「やれやれ、やっぱりまだ子供ぞい……………」

デデデは目を輝かせてるネギを見て少し呆れ返る。

メタナイト

「このまま宇宙へ向けて出航!!」

ゴォー……ッ!!

メタナイトの掛け声と共にハルバードは上昇して格納庫から出て、そのまま上空へ向けて飛行する。

メタナイト

「よし……もう手を離してもいいぞ。」

そう言うと、全員掴んでいた手を離す。

明日菜

「……ふう、変に緊張したわ。」

木乃香

「まるで飛行機のような揺れやったな。」

ネギ

「わ、とても良い眺めですね。」

カービィ

「ぼよぼよ。」

ネギとカービィははしゃぎながら窓から外を眺めていた。

のどか

「あれ？あの雲……。」

のどかは前方に浮かんでいる大きな雲を発見する。

明日菜

「ん？あの雲がどうかしたの？」

のどか

「いえ、何だかこちらへ近付いて来てるような気がして……。」

デデデ

「そんな馬鹿な事が……ぬっ!？」

デデデはふと雲の方を見ると、全身にトゲを生やして真ん中に大きな一つ目が付いた雲がこちらへ近付いてくる。

メタナイト

「アレはただの雲ではない！クラッコだ!！」

木乃香

「クラッコ?」

デデデ

「簡単に言えば雲の化け物ぞい！」

明日菜

「それじゃ、あいつは敵って事!？」

ネギ

「あわわ、どんどんこちらへ向かって来る……………」。

ネギと明日菜は近付いてくるクラッコに焦りまくる。

メタナイト

「全メタ・ナイトに告げる!直ちに前方の敵に向けて集中攻撃を開始しろ!！」

アックス

『了解!』

メタナイトは無線でメタ・ナイト達に攻撃の指示を与える。

ズドドドドドドドドツツ!!

次の瞬間、ハルバード全体から無数の弾丸がクラッコ目掛けて発射される。

刹那

「す、凄い……………」

カモ

「でも、あの雲野郎はまだピンピンしてやがる……………」

カモの言う通りに、クラッコは弾丸に命中してるが平然としていた。

メタナイト

「やはり、雲に弾丸は効かないか……………」

明日菜

「そんな……………どつすねばいいの？」

カービィ

「ぼよぼよ……………」

全員緊迫した状況に焦っていた時……………。

ピシャーーーーーン!!

クラッコが一筋の雷を放ち、雷はハルバードの艦首部分に命中する。

ネギ

「わっ!?!か、雷が直撃した……………」

メタナイト

「大丈夫だ、この程度の衝撃ではハルバードを破壊する事は出来ない。」

デデデ

「そうか、それなら安心ぞい……………」

ゴロゴロゴロツ!!

デデデが一安心したのもつかの間で、クラッコの雷攻撃は激しさを増す。

木乃香

「ひゃっ!?!…」

刹那

「お嬢様！大丈夫ですか！？」

刹那はしゃがみ込んで腹部を押さえる木乃香を見て慌てて駆け寄る。

木乃香

「だ、大丈夫……………ちょっとビックリしただけや……………それに……………」

刹那

「それに？」

木乃香

「お臍へそが盗られたらどないしよう思おもつてな……………」

刹那

「お、お臍……………ですか？」

刹那は木乃香の言葉を聞いて啞然とする。

木乃香

「うち、子供っぽいかな……………」？」

刹那

「そ、そんな事ありません！お嬢様のお臍はこの桜咲刹那が命に代えても守ってみせますー！」

木乃香

「せつちゃん……………」。

明日菜

（な、何か違うような……………。）

明日菜は二人の妙な雰囲気苦笑いする。

メタナイト

「……………こうなったらアレを使うしかないか。」

ネギ

「えっ？アレって何ですか？」

メタナイト

「見ていれば分かる……………二連主砲のビーム砲発射ー！」

ポチッ！

メタナイトが舵の隣に搭載されてるボタンを押すと……………。

ビーーーーッ！！

ハルバードの甲板に設置された二連主砲の下部の大砲から放たれた極太ビームがクラッコの目に命中する。

シュユッ……………

目玉を撃ち抜かれたクラッコは消滅していく。

明日菜

「す、凄まじい威力ね……………」

ネギ

「でも、これなら外の敵も手出し出来ませんね。」

メタナイト

「よし、引き続き宇宙に向けて再出航する。」

そう言うと、メタナイトは再び舵を握ってハルバードを宇宙に向けて出発させる。

グウ~~~~ッ

カービィ

「ぽ、ぽよ……。」

突然カービィの腹の音が鳴り響く。

木乃香

「あや？もしかしてカー君、お腹が空いたん？」

カービィ

「ぽよぽよぽよ……。」

カービィは木乃香の問いに力無く答える。

デデデ

「ワシももっすもっすぞい……。」

メタナイト

「承知した……メイス、客人達に食事を運んできてくれ。」

メイス

「了解だス。」

メタナイトはメイスナイトに無線で指示をする。

明日菜

「どつやら、食事を用意してくれるみたいね。」

木乃香

「やっぱりメタナイトはんって頼りになるな。」

刹那

「……………」

刹那は木乃香の言葉を聞いた途端、またしても表情が険しくなる。

刹那

（またあのモヤモヤが……………一体何々だ？）

メタナイト

「……………」

メタナイトは操縦しながら、胸を押さえ俯いてる刹那を横目で見つめていた。

↳数時間後↳

デデデ

「……………ふう〜っ、食った食ったぞい。」

カービィ

「ぼよ〜……………」

カービィとデデデはお腹を摩りながら満足そうに寝そべっていた。

明日菜

「それにしても、よくあんなに食べられるわね……………」。

ネギ

「最低でも五十杯以上は食べましたよね……………」。

デデデ

「あれ位の量はどつって事ないぞい……………そうだろう？カービィ。」

カービィ

「ぼよっ！」

カービィはデデデの問いに元気良く返事する。

メタナイト

「諸君、窓の外をしてみるがいい……………」。

のどか

「外？……………あっ!？」

のどかは窓の外を覗いてみると、窓の景色は宇宙空間だった。

ネギ

「わく、いつの間にか宇宙へ来てたんですね。」

のどか

「綺麗……………」。

ネギとのどかは宇宙の景色に見取れていた。

明日菜

「……………あれ？可笑しいわね。」

木乃香

「何が？」

明日菜

「だって、宇宙空間に入ると無重力になって体が軽くなって浮かび上がるハズじゃ……………」。

カモ

「うん……………どつやらこの世界では、俺っち達の常識は通用しねえみてえだな。」

木乃香

「やっぱり、ウチらの世界とは環境とかが違うんやな……………」。

カービィ

「……………ぼよ？」

カービィは明日菜達の会話を聞いてて、不思議そうに頭を傾げる。

メタナイト

「ムッ！？アレはもしか……………」。

メタナイトはダークマターを発見する。

ネギ

「あっ！ついに見つけましたね。」

メタナイト

「こつなればこつちのものだ……………」。

メタナイトはダークマターに攻撃を仕掛けようとしたが……………。

デデデ

「おや？あの小さな惑星へ向かって行ったぞい。」

メタナイト

「うむ、あの星へ着陸してみよう。」

そう言うと、メタナイトはハルバードをダークマターが不時着した小さな惑星へ向けて進路を変える。

〈とある惑星〉

ネギー一行とカービィ達はハルバードから降りて、辺りを見回していた。

ネギ

「……………何にもありませんね。」

メタナイト

「うむ、空気はあるが生物は居ないようだ……………此処はどういう星

なのだろうか？」

カービィ

「……………ぼよ？」

カービィは不思議そうに辺りを見回す。

のどか

「カー君、どうしたの？」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよ。」

メタナイト

「何？』前にこの星に来た事があるような気がする』だと？」

カービィ

「ぼよぼよ。」

カービィはメタナイトの言葉を聞いて頷く。

デデデ

「来た事があるって、こんな何も無い星へ何しに来たんだぞい？」

カービィ

「ぼよぼよぼ……………」

カービィはデデデの質問に両手で頭を抱える。

メタナイト

「『それが思い出せない』か……………」

明日菜

「結局分らず仕舞いか……………」

？

「ハイ、ハイ、ヘーイ！この僕が教えてあげるのサ。」

全員

「！？」

全員声がした方へ振り向くと、帽子を被ったカービィ位の体格の人物がボールで玉乗りしていた。

カービィ

「ぼよっ!？」

カービィはその人物を見て驚愕する。

メタナイト

「……貴公は何者だ？」

?

「あれ? ポップスターの住人なのに僕を知らないの？」

デデデ

「ワシもお前なんぞ知らんぞい！」

ズルッ

謎の人物はデデデの言葉を聞いて、足を滑らせてボールから落ちるようにコケる。

?

「ぼ、僕も随分落ちぶれたのサ……。」

カービィ

「ぼよー！ぼよぼよぼよー！」

カービィはネギ達に必死に説明するように何かを訴える。

メタナイト

「何だつて！？この者がかつて『ギャラクティック・ノヴァ』でポ
ップスターを支配しようとした魔法使いのマルクだと！？」

ネギ

（魔法使い！？）

カービィの説明を聞いて驚愕するメタナイトの言葉を聞いたネギは
耳を疑った。

マルク

「そうサ！僕がああマルク様なのサー！」

メタナイト

「そんな馬鹿な……………確か貴様はカービィとの闘いに敗れて死んだ
ハズでは……………」

マルク

「そうサ、確かに僕はカービィに負けて、ノヴァに激突して死にかけたのサ……………」

くとある宇宙空間

カービィとの闘いに敗れて、ギャラクティック・ノヴァに激突して瀕死状態のマルクがノヴァの残骸と共に漂っていた。

マルク

(ぼ、僕は……………野望を果たせないまま……………宇宙を漂い続けて……………死ぬのかナ……………)。

?

「助けてやるうか？」

マルク

「!?!?」

マルクが声に反応して半目を開けると、目の前に黒コート的人物が居た。

マルク

(だ、誰……なのサ?)

?

「私の事はどうでもいい………どうだ?もしお前が望むなら、私がお前に力を与えよう。」

マルク

(コイツ、僕の心を読んでいるのか………それより、本当に僕に力を与えてくれるのかい?)

?

「勿論だ………ただし、お前がその力を制御出来るかは保証は出来ないがな………」

マルク

(……………。)

マルクは黒コートの人物の言葉を聞いて、少し間を開けて黙り込む。

マルク

(この際、何だっぺいいサ……………僕に力を与えて欲しいのサ！)

？

「承知した……………」

パチッ！

黒コートの人物が指を鳴らすと、ノヴァの残骸がマルクに吸収されるように集まってくる。

マルク

「……………という訳で、僕はそいつのお蔭でパワーアップして復活したのサ。」

明日菜

「やっぱりあいつが……………」

ネギ

「……………」。

ネギー一行はマルクの説明を聞いて驚きを隠せなかった。

メタナイト

「では、一つ聞くが……………ダークマターを操っているのは貴様か？」

マルク

「その通りサ！僕は新たな力でダークマターを生み出し、ポップスターの住人達をダークマターに取り憑かれた連中でいっぱいにして、僕はポップスターの支配者になれるのサ！！」

1295

デデデ

「コイツ、大王であるワシを差し置いて支配者気取りかぞい……………」

デデデはハンマーを強く握りながらマルクを睨み付ける。

メタナイト

「貴様のくだらん企みなど切り刻んでくれる……………ハッ！！」

メタナイトが剣を抜いてマルクに切り掛かろうとしたが……………。

スッ！！

メタナイト

「!?!」

突然メタナイトの前に、カービィやメタナイトと同じ体型で天使のような翼を生やして、右手にランスのような長い剣と左手に小型の盾を装備した仮面の人物が姿を現わす。

マルク

「紹介するのサ……………彼は最近僕と友達になったナイト君なのサ。」

メタナイト

「ま、まさか……………ギャラクティック・ナイトなのか?」

Gナイト

「……………。」

ギャラクティック・ナイトはメタナイトの言葉に何も返さずにただ見つめていた。

マルク

「おや〜？どうやらお互い知り合いのようだね……………じゃあ、ナイト君はそいつの相手をしてほしいのサ。」

Gナイト

「……………。」

バツ！！

ギャラクティック・ナイトはその場から何処かへ飛び去っていく。

メタナイト

「場所を代えて闘う気が……………いいだろう！」

バサアーーーーッ！！

メタナイトは背中から蝙蝠こうもじのような翼を出して、ギャラクティック・ノヴァの後を追いかける。

明日菜

「な、何？メタナイトさんの背中に翼が……………。」

木乃香

「そ、それに蝙蝠みたいやったな……………」

ネギー行はメタナイトの翼に啞然としていた。

マルク

「さうて、残りの連中は僕が遊んでやるのサ……………ハアアアツ!!」

バサアーーーーッ!!

マルクの唸り声と共に、左右に大きな翼が生えて一回り大きくなつて先程の可愛さが消えて狂気じみた姿へと変貌する。

のどか

（さ、さっきと顔つきが全然違う……………）

カービィ

「ぼよぼ……………」

のどかとカービィマルクの変貌振りに戸惑つ。

マルク

「おーっほっほっほっ！これが生まれ変わった僕の真の姿『マルク・ソウル』なのサー！！」

デデデ

「『マルク・ソウル』だと……………」

明日菜

「ソウルだか何だか知らないけど……………ネギ！こんな奴さっさとやっつけるわよ！！」

ネギ

「はい！それでは、行きます！！……………契約執行180秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』・『桜咲刹那』！！」

パアアッ

明日菜&刹那

「んっ……………」

ネギが呪文を唱えると、明日菜と刹那は魔力に覆われる。

ネギ

「明日菜さんは僕のサポートを、刹那さんはメタナイトさんの方へ行ってサポートをして下さい……!」

明日菜

「OK!」

刹那

「分かりまし……えっ!？」

刹那はネギの指示に一瞬耳を疑った。

ネギ

「刹那さん? どうかしましたか?」

刹那

「い、いえ……では、行って参ります!」

バサアーーーーッ!!

刹那は背中から翼を出して、メタナイトの後を追いかける。

デデデ

「い、今のは何ぞい……………」

カービィ

「ぼよぼよ……………」

カービィとデデデは刹那の翼を見て啞然としている。

マルク

「あゝあ、行っちゃったのサ……………一人でも多い方が僕に勝てると思うけどなあ。」

明日菜

「何言ってるのよ！アンタなんか私達だけで十分よ！！」

デデデ

「その通りぞい！お前なんぞコテンパンにしてやるぞい！！」

ネギ

「それに、貴方のような悪い人なんかには絶対負けられません！！」

カービィ

「ぼよぼよ……………」

マルク

「ほ、お、面白い事言ってくれるねエ……………だったら、こっちも本気で遊んでやるのサ!！」

こうして、マルク&ギャラクティック・ナイトとの闘いが始まった……………。

第三十話 悪戯好きの魔法使いと銀河最強の騎士 (後書き)

果たしてネギー行とカービィ達はマルクとギャラクティック・ナイトに勝てるのか!?

第三十一話　凱旋　（前書き）

ネギ&明日菜とカービィ&デデデはマルクを、刹那とメタナイトはギヤラクティック・ナイトと闘う事になったが、果たして勝敗は！？

第三十一話 凱旋

メタナイト&刹那VSギヤラクティック・ナイト

メタナイト

「ハアアアツ!!!」

キイイイイン!!!

メタナイトとギヤラクティック・ナイトはお互い音速を超える速さで剣を交えていた。

刹那

(あ!居た……。)

刹那はメタナイト達と少し離れた場所から二人を発見する。

ザシュツ!!!

ギヤラクティック・ナイトが地面にランスを勢い良く突き刺すと、メタナイトに向かって衝撃波が放たれる。

メタナイト

「ムッ……………」

シュツー！

メタナイトはその場から姿を消すようにして衝撃波を避ける。

メタナイト

「マツハトルネイド！」

ギユイイイイン！！

姿を現したメタナイトは体を高速回転して竜巻を発生させて、そのままギャラクティック・ナイトに突っ込んでいく。

ギユイイイイン！！

すると、ギャラクティック・ナイトも体を高速回転して竜巻を発生させて、同じくメタナイトに突っ込んでいく。

ガキイイイイン！！

メタナイト

「ぐわっ!!」

メタナイトはギャラクティック・ナイトの攻撃に弾き返される。

メタナイト

(この前よりも強くなっている………ちょっとした油断でも命取りに成り兼ねんな………。)

そう思いながら、メタナイトはギャラクティック・ナイトと間合いを保つ。

刹那

(一体私はこんな所で何をしているんだ………早くメタナイトさんをサポートしなければ……。)

そう思いながらも、刹那は夕風を握る手を震わせながらメタナイト達の激闘をただ眺めているだけだった。

刹那

(でも、助けに行こうとしたら………あのモヤモヤがより一層強くなる………まるで胸が締め付けられるようだ………。)

刹那が胸を押さえながら悩んでいた時……………。

メタナイト

「ぬわあああつ！！」

刹那

「！？」

刹那はメタナイトの叫び声に反応して見てみると、メタナイトがギヤラクティック・ナイトの連続攻撃を受けていた。

ザシュツ！！

メタナイト

「ぐはっ！！」

更にギヤラクティック・ナイトは素早く接近してきて、メタナイトを切り付ける。

バタツ！！

すると、メタナイトは地面へ倒れ込んでしまう。

刹那

(?!…………メタナイトさん!?)

刹那は倒れ込んだメタナイトを見て驚愕する。

刹那

(いかん！今はモヤモヤなど気にしてる場合ではない！！メタナイトさんを助けない行かなければ…………)。)

バサアーーーーッ！！

刹那は全速力でメタナイトの元まで飛び出していく。

メタナイト

「くっ……………わ、私とした事が……………」

メタナイトは剣を杖代わりにして、ゆっくりと立ち上がりながら囁く。

ビュッ！！

すると、ギャラクティック・ナイトはランスを突き出して、物凄いスピードでメタナイトに向かって突っ込んでいく。

メタナイト

（もはやこれまでか……………。）

メタナイトがマントで目を覆った瞬間……………。

ガキイイイーン！！

Gナイト

「！？」

メタナイト

（い、今の音は……………？）

メタナイトが覆っていまマントを下ろすと、刹那が夕凧でギャラクティック・ナイトのランスを受け止めていた。

メタナイト

「き、君は……………」

刹那

「遅れて申し訳ありません……………貴方をサポートしに来ました。」

バツ！！

ギャラクティック・ナイトは慌てて刹那から離れながら間合いを保つ。

メタナイト

「そうか……………だが、奴は本当に強いから油断するな。」

刹那

「はい！」

刹那がメタナイトの言葉に返事をする、二人の剣士はギャラクテ

イック・ナイトに向かってそれぞれの剣で身構える。

バサーーッ!!

すると、ギャラクティック・ナイトは刹那に向かって飛び出していく。

刹那

(は、速い……………!!)

ガキイイン!!

刹那は咄嗟にギャラクティック・ナイトのランスを夕風で受け止める。

刹那

(やはり実力の差が有り過ぎる……………メタナイトさんはこんなに強い剣士と互角にやり合ってたのか……………)。

刹那はそう思いながら、夕風を握る力を少し緩めた時……………。

スパッ!!

刹那

「ぐっ!!」

ギャラクティック・ナイトが素早く刹那の右肩を切り付ける。

メタナイト

「ドリルラッシュ!!」

ギューイイイイン!!

メタナイトは剣を突き出して、ドリルのように回転しながらギャラクティック・ナイトに向かって突っ込む。

ガキイイイイン!!

ところが、ギャラクティック・ナイトは持っていた盾でメタナイトの攻撃を防ぐと同時に、その場から少し離れる。

メタナイト

「大丈夫か？」

刹那

「は、はい……少し掠^{かす}っただけです。」

メタナイト

「そうか……だから、油断するなと言っただろ。」

刹那

「す、すみません……。」

刹那は切り付けられた右肩を手で押さえながらメタナイトに謝る。

メタナイト

「それより、私に良い考えがあるのだが……。」

刹那

「えっ？」

メタナイトは刹那に近付いて、ギャラクティック・ナイトに聞こえないように小声で何かを伝える。

刹那

「……分かりました。」

メタナイト

「では、早速行くぞ……………ハアツ!!」

グサツ!!

メタナイトが勢い良く地面に剣を突き刺すと……………。

ビュウウウツ!!

巨大な竜巻が発生して、ギャラクティック・ナイトに向かって進んでいく。

バサツ!!

ギャラクティック・ナイトは竜巻を避けようと翼を広げて飛び立とうとするが……………。

刹那

「今だ! 斬岩剣!!」

スパツ！！

Gナイト

「!？」

突然刹那が竜巻の横から飛び出してきて、ギャラクティック・ナイトの左側の翼を切り裂く。

バサツ……

右側の翼を切り裂かれたギャラクティック・ナイトはバランスを崩していく。

刹那

(メタナイトさんの言った通りだ……上手くバランスを取れていない。)

メタナイト

(奴は移動する際には歩行をせずにいつも飛行のみだ……だから、そこを攻めれば奴の動きを止められると思ったが……予想通りだったな。)

ビュウウウツッ!!

Gナイト

「!!」

次の瞬間、ギャラクティック・ナイトは竜巻に飲み込まれてしまう。

メタナイト

「刹那、竜巻が止むと同時に一気に攻め込むぞ。」

刹那

「はい!」

そう言うと、刹那とメタナイトはいつでも飛び出せるように身構える。

ビュウウウ……

しばらくすると、竜巻がどんどん弱くなっていき、ギャラクティック・ナイトが地面へ落下していった瞬間……。

メタナイト

「よし!今だ!!」

バサーー！ツ！！

メタナイトの掛け声と同時に、刹那とメタナイトは翼を広げてギャラクティック・ナイトに向かって飛び出していく。

メタナイト

「空中回転斬り！！」

刹那

「神鳴流秘剣・百花繚乱！！」

ズバアアアツ！！

刹那とメタナイトの剣技がギャラクティック・ナイトに炸裂する。

シュタツ！

刹那とメタナイトが地面へ着地すると、ギャラクティック・ナイトはそのまま消滅していく。

刹那

「や、やった……うっ!!」

刹那は先程ギヤラクティック・ナイトに切り付けられた右肩を押さえながらしゃがみ込む。

メタナイト

「どうやら、傷口が開いてしまったようだな……。」

ビリビリッ!

刹那の右肩の傷を見たメタナイトは、いきなり自分のマントを破り始める。

刹那

「な、何を……。」

メタナイト

「いいから、ジッとしている……。」

そう言うと、メタナイトは先程破いたマントで刹那の右肩の傷口を縛る。

メタナイト

「よし、取り合えず応急処置はこれで良いな。」

刹那

「あ、ありがとうございます……………」。

刹那は深々と頭を下げながらメタナイトにお礼を言う。

メタナイト

「いや、私が今出来る事はせいぜいこれ位だ。」

刹那

(……………やはり、この人には敵わないな。)

刹那はそう思いながら力無く微笑む。

メタナイト

「……………先程よりも、いい目になったな。」

刹那

「えっ？」

刹那はメタナイトの言葉に耳を疑った。

メタナイト

「いや、君は気付いてないと思うが……君は人を妬むような目で私を見つめていたんだ。」

刹那

（妬む？私がメタナイトさんに……じゃあ、あのモヤモヤは……
……。）

刹那はメタナイトの言葉を聞いて何かを悟る。

メタナイト

「君はひよつとして、私に嫉妬していたのではないか？」

刹那

「……………」

刹那はメタナイトの言葉にしばらく黙り込むが……………。

刹那

「申し訳ありません……………貴方と私とでは実力の差があるのは十分

承知しています……でも、このちゃんが貴方に尊敬の眼差しを向けているのを見たら、私の中からモヤモヤが溢れ出てきて……いつの間にか私の中に嫉妬という感情が芽生えてきたんです。」

メタナイト

「そうか……やはり君は私と同じだな。」

刹那

「えっ！？それはどういう意味ですか？」

刹那はメタナイトの言葉に耳を傾ける。

メタナイト

「私もカービィに負けて以来、カービィに嫉妬していた……いや、嫉妬というより憎悪といった方が適切だろう……だが、ププランドを守る立場になってからは、カービィに対する嫉妬はいつの間にか消えていた……君は今でも私に嫉妬しているか？」

刹那

「そう言えば、いつの間にかモヤモヤが無くなってるとような……。」

「

メタナイト

「やはりな……そもそも嫉妬事態は悪い事ではない……その感

情があるからこそ『自分はもつと強くなりたい!』と思い、己を鍛え直す……私はそうやって自分に言い聞かせて、此処まで腕を上げてきた。」

刹那

「メタナイトさん……。」

刹那はメタナイトの言葉を聞いて、尊敬の念を抱くようになる。

刹那

「私もメタナイトさんみたいになれるんでしょうか?」

メタナイト

「それは君次第だが、君なら私のような凄腕の剣士になれるかもしれない。」

刹那

(じ、自分で凄腕って……。)

刹那はメタナイトの言葉に苦笑いする。

メタナイト

「とにかく、これからもお互い頑張ろう。」

刹那

「は、はい！」

メタナイトが握手を交わそうと手を差し出してきたので、刹那も慌てて手を差し出そうとした時……………。

ポロツ…………

刹那&メタナイト

「あっ!？」

突然メタナイトの仮面が顔から外れて、刹那とメタナイトは予想外の事態に驚愕する。

メタナイト

(い、いかん！素顔を見られてしまう……………)。

ササッ!!

メタナイトは慌てて仮面を拾って、先程破いたマントで素顔を隠す。

刹那

(い、今のがメタナイトさんの……………。)

刹那は目を丸くさせながら立ち尽くしていた。

メタナイト

(刹那に素顔を見られてしまった……………どう切り出せばいいのだろうか……………)。

刹那

(メタナイトさんの素顔を見てしまった……………どう答えればいいのか……………)。

刹那とメタナイトは、お互い気まずそうに見つめ合ったまま悩んでいた。

〈マルク・ソウルVSネギ&明日菜&カービィ&デデデ〉

マルク

「おーっほっほっほっ！どっからでも掛かって来るのサ！！」

明日菜

「それじゃ、お言葉に甘えて行かせてもらっわー！」

そう言うと、明日菜は『ハマノツルギ（大剣形態）』を掲げながらマルクに向かって駆け出していく。

明日菜

「おりゃーっ！！」

マルクに向かって高くジャンプした明日菜は、そのまま勢い良く『ハマノツルギ』を振り下ろすが……。

スッ……

明日菜

「あ、あれっ!?!」

次の瞬間、マルクがその場から姿を消す。

ネギ

「き、消えた!?!」

明日菜

「一体何処へ……………」。

マルク

「此処に居るサ!」

カービィ

「ぼよっ!?!」

全員マルクの声に反応して見上げると、マルクはネギ達の真上に浮かんでいた。

デデデ

「い、いつの間……………」。

マルク

「お前にこれをプレゼントするのサ!」

シャッ!!

マルクは両方の翼から三日月型のカッターを明日菜に向けて二つずつ投げ飛ばす。

ザシヤツ！

明日菜

「きゃっ！！！」

三日月型の四つのカッターが明日菜の全身に軽い切り傷を付ける。

ネギ

「明日菜さん！大丈夫ですか！？」

明日菜

「だ、大丈夫……………ちょっと掠っただけだから……………」

カービィ

「ぼよぼ……………」

明日菜の言葉を聞いたネギ達は一安心する。

マルク

「へい、へーい！僕の攻撃はまだまだ続くのサ！」

パカッ

そう言うと、突然マルクが真っ二つに分かれる。

木乃香

「ま、真っ二つになってもうた……………」。

デデデ

「何をするつもりぞい……………」。

全員マルクの異変に啞然とする。

ゴオオオオオッ！！

すると、真っ二つになったマルクの真ん中に穴が開いて、まるでブラックホールのようにネギ達を吸い込もうとする。

明日菜

「な、何これ!？」

のどか

「す、吸い込まれ……………きゃあっ!？」

木乃香

「ひゃあっ!？」

次の瞬間、木乃香とのどかが穴の中へ吸い込まれてしまう。

ネギ

「木乃香さん!のどかさん!」

マルク

「ほーっほっほっほっ!一気に二人も吸い込んでやったのサ。」

穴が消えたと同時に、いつの間にか元の姿に戻ったマルクが甲高く笑っていた。

明日菜

「アンタ!二人を何処へやったの!？」

マルク

「さあね……………もしかしたら、異次元の世界にでもさ迷ってるかもネ。」

カービィ

「ぼよぼよ……………」。

マルクの言葉を聞いたカービィの表情が険しくなる。

ネギ

「……………どっして。」

マルク

「ん？」

ネギ

「どっしてこんな事をするんですか！？貴方も魔法使いなら分かっているハズですよ！魔法使いは世の為人の為に働くのが仕事だと……………」。

マルク

「は？何馬鹿な事言っちゃってるのサ……………何で僕の魔法を他の奴らの為に使わなきゃならないのサ？僕の魔法は僕だけの為に使うのサ！」

明日菜

「何て自分勝手な奴なの……………」

デデデ

「……………どうやら、話しても無駄のようだぞい。」

ネギ

「そのようですね……………」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよ……………」

全員改めてマルクに向かって戦闘体制へと移る。

マルク

「おや？まだやる気みたいだね……………そうこなくちゃ僕も楽しくないのサ……………」

ペッ……………

そう言うと、マルクは口から黒くて丸い物体を吐き出す。

バリバリバリッ！！

すると、物体は衝撃波となって地面を這うようにしてネギ達に向かっていく。

明日菜

「危ない！」

デデデ

「おっとっと！」

全員それぞれジャンプしながら衝撃波を間一髪避ける。

カモ

「兄貴、あの野郎攻撃が多彩過ぎるぜ……………」

ネギ

「うん、これじゃ迂闊に近付けない……………」

カービィ

「ぼよ……………ぼよぼ……………」

突然カービィは何処からか赤い携帯電話を取り出して電話を掛け始める。

ネギ

「えっ？そ、それって携帯電話じゃ……………」

明日菜

「ってか、こんな時に電話なんかしてる場合じゃ……………」

デデデ

「待て、恐らくカービィはアレを呼び出すつもりぞい……………」

ネギ

「アレ？アレとは一体……………」

ネギがデデデの言葉に耳を傾けた時……………」

ビュッ……！

明日菜

「わあっ!?!」

突然ネギ達の前に五角形の大きな星が現れる。

ネギ

「こ、これは……………星ですか？」

デデデ

「ただの星ではないぞい……………カービィが遠くの場所へ移動する際に使用する『ワープスター』ぞい。」

カービィ

「ぼよぼよっ！」

ビビュッ！！

カービィがワープスターの上に乗ると、そのままマルクに向かって突っ込んでいく。

マルク

「フン！そんな星を呼び出したところで僕には勝てないのサ！」

シャッ！！

マルクはカービィに向けて三日月型のカッターを投げ飛ばす。

スウウウツッ!!

ところが、カービィは三日月型のカッターを全て吸い込んでしまう。

ポンツッ!

すると、カービィの頭にアイスラッガーの付いた黄色い帽子が現れる。

デデデ

「カービィが『カッターカービィ』になったぞい!」

カービィ

「ほよっ!」

カービィはアイスラッガーの部分からカッターを連続に投げ付ける。

マルク

「わっ！？危ないのサー!!」

マルクは左側に移動して、カービィの攻撃を避ける。

マルク

「よくもやったな……………百倍にして返してやるのサー!!」

バアアアアツ!!

マルクは翼から無数の小さな矢をカービィに向けて飛ばす。

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよぼー!!」

カービィはワープスターでマルクの攻撃を俊敏に避ける。

ネギ

「僕も加勢しなきゃ……………行って来ます!!」

ビビュッ!!

ネギは杖に跨がり、カービィの方へと飛び出していく。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル…… 闇夜切り裂く一条の光 我が手に宿りて敵を喰らえ…… 白き雷……」

ズバアアアツ！！

マルク

「ぐおっ！？」

ネギがマルクに接近しながら呪文を唱えると、ネギの掌から雷が放たれてマルクに直撃する。

明日菜

「やっつけたの！？」

デデデ

「いや、まだぞい……」

マルク

「ゲホッゲホッ…… ちょ、ちょっとだけ痺れちゃったのサ……」

マルクはボロボロ状態で少し咳込みながらネギの方を向く。

マルク

「どうやら、僕を完全に怒らせちゃったみたいだね……………そんな君にこれをプレゼントしてあげるのサ!!」

そう言うと、マルクは口から何かを吐き出そうと頬を膨らませる。

カービィ

「ぼ!?!ぼよよぼよ!」

ガシッ!!

ネギ

「わあっ!?!」

カービィは何かに気付いて、慌ててネギの手を握ってマルクから離れた瞬間……………。

ビィィィィッ!!

マルクの口から極太の光線が吐き出される。

ネギ

「あ、危なかった……どうもありがとう。」

カービィ

「ぼよぼよっ!」

カービィはネギの言葉に答えるかのように笑顔で返事する。

マルク

「チッ、もつちよっとだったのに……今度こそ命中させてや……」

ボカッ!!

マルク

「へぶっ!?!」

突然マルクの後頭部にデデデのハンマーと明日菜の『ハマノツルギ』が命中する。

明日菜

「よっしゃー！」

デデデ

「そっちばかりに気を取られるからだぞい！」

それぞれの武器を投げ飛ばしてマルクの後頭部に命中させた明日菜とデデデはガッツポーズする。

マルク

「はらほろひれはれ〜……………」

マルクは後頭部に二つの大きなタンコブを作りながら目を回す。

カモ

「兄貴！今の内に……………」

ネギ

「うん！」

カービィ

「ぼよっ〜！」

ネギとカービィは即座にマルクに接近していく。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル………来たれ廃空の雷 薙ぎ払え！」

マルク

「は、はへっ？」

マルクは目を回しながらネギの呪文を唱えてる声に反応する。

ネギ

「雷の斧ー!!」

ドガアアアツー!!

マルク

「ぎゃあああつー!!」

ネギの放った強力な雷がマルクに直撃する。

マルク

(き、さっきよりも強烈なのサ……………。)

カービィ

「ぼよーいーいー!」

マルク

「!?!」

マルクがカービィの声に反応して見上げると、カービィがマルクの頭上まで飛び上がっていた。

カービィ

「ファイナルカッター!」

スパアアアアン!!

マルク

「ぐはっ……………」

カービィが頭のアイスラッガーで、落下の勢いに任せてマルクを真っ二つにしていく。

マルク

「そ……そんな……僕が……また……負ける……なんて……有り
……得ない……の……サ。」

シュユツ……

真っ二つにされたマルクは消滅していく。

カービィ

「ぼよー！ぼよー！」

地面へ無事着地したカービィは、嬉しそうに飛び跳ねる。

パツ！！

のどか

「……………あ、あれ？」

木乃香

「ウ、ウチら助かったんや……………。」

突然木乃香とのどかが姿を現わす。

明日菜

「木乃香！本屋ちゃんも無事だったのね！」

ネギ

「良かった……………」

ネギと明日菜は二人の無事を確認するとホッと胸を撫で下ろす。

メタナイト

「どうやら、マルクを倒したようだな……………」

ネギ達が声がした方を見ると、いつの間にか刹那とメタナイトが立っていた。

木乃香

「せっちゃん！無事で良かったわ〜！！」

刹那

「お、お嬢様！？」

木乃香は嬉しそうに刹那に抱き着く。

ネギ

「そちらもあの騎士に勝ったんですね。」

メタナイト

「ああ、彼女のサポートのお蔭だ。」

メタナイトは頬を真っ赤に染めて木乃香に抱かれてる刹那を見つめながら言う。

デデデ

「さて、そろそろあのポップスターに帰るとするかぞい。」

そう言うと、デデデは五角形の大きな星型の惑星を指さす。

のどか

「わあ、何て素敵な形なの……。。」

カモ

（でも、星型の星ってのもなあ……。。）

ネギー一行はポップスターに見取れるが、カモだけ苦笑いを浮かべる。

メタナイト

「それでは諸君、私のハルバードでポップスターに帰ろう。」

カービィ

「ぼよ、ぼよぼよ……」

そう言うと、全員ハルバードがある場所まで歩き始める。

メタナイト

「ところで刹那……。」

刹那

「はい、何でしょうか？」

メタナイト

「先程も申ししたが、私の素顔については他言しないように……。」

刹那

「も、勿論です！絶対誰にも言いませんのでご安心下さい。」

メタナイト

「そうか………すまないな。」

刹那とメタナイトはみんなに聞こえないように歩きながら話していた。

〔戦艦ハルバード内部〕

ネギー一行とカービィ達はハルバードの操舵室へとやって来た。

デデデ

「やれやれ、これでやっと帰れるぞい。」

明日菜

「私達もやっと館へ戻れるって訳ね。」

ネギ

「そうですね。」

メタナイト

「それでは早速、ポップスターに向けて……………ハルバード発進！！」

コノコノコノコノコノッ……！！

こうして、ネギ達を乗せた戦艦ハルバードはポップスターに向けて発射していく。

第三十二話、恐竜の惑星の王子様（前書き）

カービィの世界から帰って来たネギー行が次は誰の世界へ行くのか？

第三十二話　恐竜の惑星の王子様

大乱闘の館・中庭

カービィの世界へ帰って来てから翌日、ネギー行はいつものように中庭に集合していた。

ネギー

「皆さん、今日も張り切っていきましようー！」

明日菜

「はいはい……………」

木乃香

「ネギー君の方が一番張り切ってるな。」

ネギーの元気潑刺じわじわとした発言に明日菜達は少し苦笑いする。

マスターハンド

「今回は翼を生やした狐のような形したバッチをフォックス、ファルコ、ウルフの三人に渡してほしい。」

ネギ

「翼を生やした狐のバッチ……………あ！これだ。」

ネギは懐から背中に翼を生やした狐のような三つバッチを取り出す。

マスターハンド

「それと今回も……………ハアツ！！」

カツ！！

マスターハンドは手の平から強い光を放って、ネギ達に浴びさせる。

1353

刹那

「い、今のはサムスさんの世界へ行く時にもやった……………。」

マスターハンド

「そう、今回も宇宙が舞台なので再びそれに適応出来るようにした。」

ネギ

「そうですね……………いつもありがとうございます。」

ネギはマスターハンドに向かって深くお辞儀する。

マスターハンド

「いや、私は出来る事をしただけだ。」

木乃香

「ほなら、早速次の世界へ行ってみよ。」

そう言うと、ネギー一行はワイプ土管へと入ろうとする。

マスターハンド

「今回も気をつけるんだぞ……………」。

〈惑星サウリア〉

シシシシシ

ネギ一行はとても緑豊かな場所へとやって来た。

のどか

「わあ、とても緑豊かな所ですね。」

木乃香

「ホンマやな、此処でみんなでピクニックでもしたいわ。」

明日菜

「木乃香ったら……。」

木乃香の呑気な発言に明日菜は苦笑いしながら呟く。

ネギ

「それでは、早速手分けしてフォックスさん達を手分けして捜しましよ……………」

ネギ以外全員

「!?!」

ネギの方を向いた明日菜達の顔色が真っ青に変わる。

ネギ

「あれ？皆さん、どうかしましたか？」

明日菜

「ネ、ネギ……………う、後ろ……………」

ネギ

「え？後ろって……………」

ネギが恐る恐る後ろへ振り向くと……………。

？

「やあ、こんにちは。」

ネギ

「う、うわあっ！？」

背後に四足歩行で立っていた角竜類の大きな恐竜を見てネギは思わず腰を抜かす。

カモ

「な、何だ！？この牛みてえに大きい奴は……………」

明日菜

「も、もしかして……………恐竜？」

刹那

「ま、まさか……………」

ネギ一行は蛇に睨まれた雨蛙状態で恐竜を見つめる。

？

「そんなに怖がらなくてもいいよ、君達を食べたりしないから。」

明日菜

「ほ、本当に？」

？

「本当さ……………それに、人を食べるのは肉食のレッドアイ族だけなんだ。」

ネギ

「……………ど、どつちら本当に僕達を食べる気は無いみたいですね。」

そう言つと、ネギー行は少しだけ一安心する。

？

「僕はトリツキー、アソーカ族の王子なんだ。」

のどか

「お、王子様？」

ネギー行はトリツキーという名前の恐竜の言葉に耳を傾ける。

木乃香

「随分可愛らしい王子様やなあ。」

トリツキー

「そ、そうかな？」

トリツキーは木乃香の言葉に照れまくる。

ネギ

「あの、僕達はフォックスさんとファルコさんとウルフさんを探してるんですけど……。」

トリッキー

「フォックス？フォックスなら知ってるよ。」

刹那

「ほ、本当ですか？」

トリッキー

「勿論、フォックスはこのサウリアを何度も救ってくれたんだ。」

明日菜

「じゃあさ、私達にそのフォックスさんに会わせてもらえないかな？」

トリッキー

「うーん、困ったなあ……………」

トリッキーは困ったような仕草で首を傾げる。

ネギ

「な、何か事情でも……………」

トリッキー

「フォックスは遊撃隊をやっけて、あちこちの惑星へ飛び回ってる

カモが指さす方を見ると、恐竜達がこちらに向かって走り出してくる。

のどか

「あ、あんなに沢山の恐竜が……………」。

明日菜

「これじゃ、ジュラシックパークじゃない!」

ネギ

「とにかく、逃げましょう!」

そう言っていると、ネギー行はその場から駆け出そうとするが……………。

木乃香

「……………あれ?」

恐竜達はネギ達を通り過ぎるように、そのまま走り出してゆく。

ネギ

「い、行っちゃいましたね……………」。

刹那

「どつちやら、私達を追い掛けようとした訳ではないようですな。」

トリッキー

「みんな、どつしたんだろつ……。」「

ガサガサッ！！

全員

「!?!?」「

全員何か動き回る音に反応して後ろを向いてみると、まるで昆虫のような生物がいっぱい居た。

明日菜

「な、何なのコイツら……。虫!?!?」「

木乃香

「やっ、ん、気持ち悪いわ。」「

トリッキー

「コイツら、前にこのサウリアの恐竜達に襲い掛かった奴らだ!」「

刹那

「という事は、敵って訳ですね……………」。

ネギ

「明日菜さん、刹那さん……………お願いします。」

明日菜

「OK!アデアッド!」

パアアアツ!!

明日菜はいつものように『ハマノツルギ』を呼び出す。

明日菜

「それじゃ、行くわよーっ!」

パシイイイン!!

明日菜の大きな一降りが、謎の生物達を吹き飛ばす。

刹那

「斬岩剣!！」

ズシヤヤヤツ!!

刹那も夕風で謎の生物達を切り裂いていく。

トリツキー

「す、凄い……………」

トリツキーは啞然とした表情で明日菜達の攻撃を見ている。

のどか

「ネ、ネギ先生!上を……………」

ネギ

「えっ!？」

ネギがのどかの指さす向へ見上げると、上空に蝶々のような巨大な生物が浮かび上がっていた。

カモ

「どつやら新手のお出ましのようだぜ……………」

ネギ

「アレは僕が相手をしてくる。」

木乃香

「ネギ君、気いつけてな……………」。

ビビュツ!!

ネギは杖に跨がって、謎の生物に接近していく。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………魔法の射手 連弾・
光の29矢!!」

ドオオオオツ!!

ネギは謎の生物に光の矢を放つが……………。

カモ

「駄目だ、全然効いてねえようだぜ!!」

ネギ

「そ、そんな……………」

ズババババツッ！！

次の瞬間、謎の生物がネギにビーム攻撃を繰り出す。

ネギ

「わっと！」

ネギは左側に寄って、謎の生物の攻撃を間髪避ける。

カモ

「兄貴、攻撃が通用しないんじゃないや勝ち目がねえよ……………」

ネギ

「で、でも……………」

ブワッ！！

突然謎の生物がネギに再び攻撃を繰り出そうとしたが……………。

ズドドドドドドッ……!

ネギ

「!?!」

何処からかレーザー砲が放たれて、謎の生物を破壊していく。

ネギ

「い、今は一体……」。

カモ

「あつ!?! 兄貴、アレを見るよ!」

カモの指さす方を見上げると、白い胴体と翼に青い主翼の付け根が鮮やかな戦闘機が飛行していた。

木乃香

「アレは何やる?」

トリツキ

「アレはフォックスのアーウィンだよ!」

のどか

「えっ!?!」

木乃香とのどかはトリッキーの言葉を聞いて耳を疑った。

カモ

「兄貴、どうやら着陸するようだぜ。」

ネギ

「そうだね、僕も着地しなきゃ……………」。

アーウィンという名前の戦闘機が着陸すると同時に、ネギも地面へ着地しようとする。

明日菜

「あ、ネギ!こっちはあらかじめ片付けたわよ。」

ネギ

「そうですか……………それに、二人共怪我な無いようですね。」

刹那

「ええ、ネギ先生の方こそご無事で何よりです。」

カモ

「そんな事より、あの機体から誰か出て来るようだぜ……………」。

カモの言う通りに、アーウインの操縦席からパイロットスーツの上
に白地のジャケットを着た狐の男が降りてきた。

？

「こちらフォックス、サウリアに現れたアパロイドを始末した。」

フォックスと名乗る狐は腕に付けた通信機で誰かに連絡する。

？

「了解、直チニソチラへ向カイマス。」

フォックス

「ああ、頼むぞナウス……………」。

トリツキー

「フォックス……………!!」

ダダダダダダッ！！

突然トリッキーがフォックスに向かって走り出していく。

フォックス

「トリッキー？………うわっ！？」

ドッシーーン！！

トリッキーはフォックスに勢い良く飛び付き、フォックスはトリッキーに押し潰されてしまう。

トリッキー

「会いたかったよ、フォックス〜！！」

フォックス

「ちよっ、トリッキー………お、重っ………。」

フォックスはトリッキーに押し潰された状態で腕をばたつかせる。

木乃香

「トリッキー君、少し落ち着かなアカンよ。」

明日菜

「そうよ、このままじゃ死んじゃうわよ！」

トリッキー

「あ、そうだね……………ゴメンねフォックス。」

そう言うと、トリッキーはフォックスから少し離れる。

フォックス

「……………ふう、このまま潰されるかと思った。」

フォックスはトリッキーから解放されて、ゆっくりと起き上がる。

ネギ

「あの、貴方がフォックスさんですか？」

フォックス

「ん？君達は……………」

トリッキー

「あ！忘れてた……………この子達がね、フォックスに会いたがってた

んだよ。」

フォックス

「何だつて？俺に？」

フォックスはトリッキーの言葉を聞いて耳を傾ける。

ネギ

「実は、僕達はですね……………」

ネギがこれまでの経緯をフォックスに説明しようとした時……………。

ゴオオオオツ！！

木乃香

「な、何の音や？」

フォックス

「おっと、どうやら到着したみたいだな。」

そう言うと、巨大な宇宙船らしき機体がネギ一行の目に写る。

ネギ

「ア、アレは何ですか？」

フォックス

「俺達スターフォックスの活動拠点としている宇宙空母・『グレートフォックス』さ。」

明日菜

「スターフォックス？」

フォックス

「実は俺、スターフォックスという雇われ遊撃隊のリーダーなんだ。」

「

トリッキー

「ね？僕の言った通りでしょ？」

トリッキーは少し自信満々に言う。

フォックス

「とにかく、詳しい話はグレートフォックスの中で聞こう。」

ネギ

「は、はい。」

フォックスはネギ一行を連れて、グレートフォックスの中へ入って
いくのであった……。

第三十二話、恐竜の惑星の王子様（後書き）

フォックスと対面したネギー一行は残り二人にも会えるのか？

第三十三話 惑星コーネリアの危機

「グレートフォックス内部」

ネギ

「……………という訳なんです。」

ネギはフォックスにこれまでの経緯を説明していた。

フォックス

「そうだったのか……………何か俺達の為に申し訳ないな……………」

明日菜

「いえ、私達も色々な世界へ巡ってきたから慣れちゃいました。」

刹那

「まあ、慣れたっていつのはちょっと変な言い方ですけど……………」

明日菜の言葉に刹那は苦笑いする。

ネギ

「それと、これが例のバッチです。」

ネギはフォックスにバッチを渡す。

フォックス

「ありがとう、確かに受け取ったよ……………」

？

「ふおつくす、タッタ今すりっぴートくりすたるガ帰ッテ来マシタ。」

フォックス

「ん？そうか……………」

突然フォックスの背後から人型のロボットが声を掛けてくる。

木乃香

「あ！ロボットや。」

フォックス

「紹介しよう、彼はこのグレートフォックスの艦内管理と航行を担っているオペレーターロボットのナウス64だ。」

ナウス

「初メマシテ、なうすと申シマス。」

のどか

「あ、どうも……………」。

ナウスが軽くお辞儀すると、のどかも思わずつられてお辞儀する。

？

「フォックス、今帰ったよ。」

フォックスの前に黄色いツナギのような服装した男性の蛙と紫色のレザースーツのような服装した青色の女性の狐が姿を現わす。

フォックス

「ああ、二人共ご苦勞様だったな。」

？

「あら？この子達は？」

フォックス

「え？ああ、彼らは……………」。

フォックスはネギ達の事を聞かれて、どう答えたら良いのか迷っていたが…………。

ネギ

「ぼ、僕達が危ないところをフォックスさんに助けてもらったんです。」

フォックス

「そ、そう！そうなんだよ。」

ネギの咄嗟の思い付きの言葉にフォックスも合わせる。

？

「そう、貴方達もアパロイドに襲われたのね。」

のどか

「アパロイド？」

刹那

「もしかして、さっきの虫みたいな連中の事ですか？」

フォックス

「そうだ……アパロイドは他の生命体や機械に侵食して、自分達の仲間にするんだ。」

明日菜

「まるでエイリアンね……。」

？

「でも、アパロイドは前にオイラ達がやったのに……。」

カモ

「兄貴、こりゃいつものアレだな。」

ネギ

「うん、間違いないね……。」

ネギとカモはフォックス達に聞こえないように話す。

木乃香

「ところで、そちらの二人は……。」

フォックス

「あ！そうだった……まずコイツは、電子工学が得意で発明好き

のスリッピだ。」

スリッピ

「えへへ、宜しく。」

スリッピは恥ずかそうに指で頬を掻く。

フォックス

「そして彼女は、テレパシー能力で俺達をサポートしてくれるクリスタルだ。」

クリスタル

「宜しくね。」

そう言うと、クリスタルはネギ達に微笑みかける。

フォックス

「それより、ファルコとアマンダはどうしたんだ？」

ナウス

「アノ二人ハ、ふおつくすヨリ先ニ戻ッテ来タノデスガ……………」

クリスタル

「どうしたの？」

ナウス

「惑星かたりなニあぱろいど反応が出タノデ、二人八かたりなへ出動シマシタ。」

スリッピ

「え〜っ！？アマンダがファルコと一緒に？」

スリッピはナウスの言葉を聞いて驚愕する。

スリッピ

「う〜ん、心配だなあ……………」

フォックス

「心配無いさ、ファルコが一緒だから……………」

スリッピ

「だから余計に心配なんだよ！もしアマンダがファルコに惚れちゃったらって思つと……………」

クリスタル

「あら、スリッピーったらヤキモチ妬いてるの？」

スリッピー

「へ！？い、いや……そういう訳じゃ……。」

スリッピーは顔全体を真っ赤にさせて俯いてしまう。

ネギ

「あの、お取り込み中で申し訳ないんですけど……。」

フォックス

「ん？何だい？」

ネギ

「フォックスさんがさっき言ってたファルコさんってもしかして……。」

フォックス

「ああ、君達が捜しているファルコも俺達スターフォックスの一員なんだ。」

ネギ

「そうなんですか……じゃあ、ウルフさんも仲間なんですか？」

フォックス

「い、いや……………あいつは……………」

フォックスがネギの質問に言葉を詰まらせた時……………。

ナウス

「ふおつくす、ペツピー將軍カラ通信ガ届イテマス。」

フォックス

「ペツピーから？」

フォックスはナウスの言葉に耳を傾ける。

スリッピー

「ひょっとして、アパロイドについて何か分かったのかな？」

フォックス

「ナウス、通信を繋いでくれ。」

ナウス

「了解。」

ポチッ

ナウスが通信用のボタンを押すと、赤い軍服の白い髭を生やした初老の兎の男の立体映像が映し出される。

明日菜

「わっ！？ビックリした〜……………」

ネギ

「アレって、立体映像ですか？」

スリッピー

「そうだよ、僕が制作したんだ〜。」

スリッピーは胸を張りながらネギ達に自慢する。

ペッピー

「フォックス、久しぶりじゃのお。」

フォックス

「そうだね、ペッピー……………いや、今はペッピー將軍かな？」

ペッピー

「いや、昔のようにペッピーで構わん……………そんな事より、お前達に至急頼みたい事があるんじゃない。」

クリスタル

「まさか、またアパロイドが……………」

ペッピー

「そうじゃ……………コーネリアの都市にアパロイドが大量発生して、我がコーネリア防衛軍が壊滅的な被害に遭っておるのじゃ。」

フォックス

「何だって!？」

フォックス達はペッピーの話聞いて驚愕する。

ペッピー

「もはやお前達だけが頼りじゃ……………頼む!コーネリアを救ってくれ!」

そう言つと、ペッピーは深く頭を下げる。

フォックス

「ペッピー……勿論さ！コーネリアは俺達が必ず救ってみせる！」

ペッピー

「そうか……やはりお前も段々親父に似てきたな……。」

ペッピーは頭を上げると、懐かしむようにフォックスを見つめる。

ネギ

（父さん……か。）

ネギは『親父』という単語を聞いて、自分の父の事を思い出す。
ナギ・スプリングフィールド

ペッピー

「今はビルが率いるコーネリア防衛軍が応戦しておる……急いで……来て……くれ……。」

そう言うと、ペッピーの立体映像が乱れながら消えてしまう。

フォックス

「ペッピー！？一体どうしたんだ！？」

ナウス

「妨害電波ノセイデ通信ガ途絶エマシタ。」

スリッピ

「フォックス、どうやら急いだ方が良さそうだね。」

フォックス

「そうだな…… ナウス！惑星コーネリアへ向けて全速で発進せよ！
！」

ナウス

「了解！」

ゴゴゴゴゴゴゴッ！！

ナウスはグレートフォックスを機動させて、そのまま上昇していく。

トリッキー

「じゃあね〜！バイバイ！！！」

トリッキーは発進していくグレートフォックスを駆け出しながら見送る。

〈惑星コーネリア都市〉

？

「くっ、このままでは犬死にだ……………」。

コーネリアの都市上空で頭にバイザー付きのヘルメットを被った犬の男が、アーウィンより起伏の少ない外観に白い翼と緑の胴体を持つ戦闘機コーネリアファイターで空中のアパロイド達に追われていた。

？

「みんな！援軍が来るまで持ち堪えるんだ！」

アパロイド達がどんどん犬の男の戦闘機に近付いてきた瞬間……………。

ドッカーーン！！

何処からか放たれたミサイルがアパロイド達を一掃した。

？

「何だ？今のミサイルは………ん？アレは？」

犬の男は遠くからグレートフォックスを発見する。

？

「アレはもしか、グレートフォックスじゃ………。」

フォックス

『ビル！無事か！？』

突然ビルという名前の犬の男の戦闘機に搭載されてる無線からフォックスの声が聞こえてくる。

ビル

「フォックス！？やっぱりフォックスか！」

フォックス

『もう大丈夫だ！今から俺達が援護に向かう！』

ビル

「すまない…………お前には助けられっぱなしだな。」

フォックス

『そんな事気にするな、俺達は仲間じゃないか！』

ビル

「フォックス…………。」

ビルはフォックスの仲間を想う言葉を聞いて心打たれる。

くグレートフォックス内部く

フォックス

「よし！スターフォックス出動だ！！」

クリスタル

「でも、ファルコ達はどつするの？」

フォックス

「ナウスに頼んで『カタリナのアパロイドを全滅させたら、大至急コーネリアへ来るように』と通信を送っておいたから大丈夫だ。」

スリッピ

「それなら安心だね……それじゃ行つくぞー！」

フォックス達はその場から駆け出そうとするが……………。

ネギ

「フォックスさん！僕達も一緒に……………」

フォックス

「いや、君達は此処で待つてくれ。」

ネギ

「で、でも……………」

スリッピ

「フォックス！速く行かないとマズイよ。」

フォックス

「ああ、急いじうー!!」

そう言つと、フォックス達は急いで駆け出していく。

明日菜

「……………行っちゃったわね。」

カモ

「たまにはいいじゃねえか、狐の兄ちゃん達が虫共を一匹残らずやつつけてくれるって。」

そう言いながら、カモはネギの肩で煙草を吸い始める。

木乃香

「カモ君、煙草はアカンよ。」

木乃香はカモから煙草を取り上げる。

カモ

「そ、そんな…………。」

カモは滝のように涙を流しながら肩を落とす。

ネギ

「……………僕、やっぱり行つて来ます!」

ネギはフォックス達の後を追い掛けるように駆け出していく。

のどか

「あつ!?!ネギ先生!」

明日菜

「ちょっと、待ちなさいよ!」

ナウス

「アッ!勝手ニ出テ行ッテハ……………」

ナウスの制止も虚しく、明日菜達はネギの追い掛けてゆく。

「コーネリアの都市内」

フォックスは荒れ果てた建物の陰で、小型の銃を持ちながら腕の通信機で仲間と連絡を取り合っていた。

フォックス

「こちらフォックス、上空の敵は任せたぞ。」

スリッピー

「こちらスリッピー、そっちは一人で大丈夫？」

フォックス

「大丈夫さ、何しろ大乱闘で銃の腕だけでなく腕っ節も鍛えたからな。」

クリスタル

「でも、くれぐれも気をつけてね……………」

フォックス

「ああ、クリスタルもな……………」

そう言うと、フォックスは銃を構えながら建物の陰から出て行く。

フォックス

「アパロイド!どっからでも掛かって来い!!」

そう叫ぶように言うと、地上に群がるアパロイドに向かって突っ込んでいく。

↳グレートフォックス内部・格納庫↳

明日菜

「……………つたく、こんな所で迷っちゃうなんて……………」

ネギ

「す、すいません……………」

ネギー一行はフォックス達と一緒に闘おうと後を追い掛けてたが、戦闘機や戦車等が保管されてる場所へ迷い込んでしまっていた。

木乃香

「それにしても、此処は一体何処なんやろか？」

刹那

「フォックスさんの戦闘機や戦車のような乗り物が置いてあるところを見ると、どうやら格納庫のようですね。」

のどか

「どつりで、色々あると思いました。」

ネギー一行は、格納庫に保管されてる戦闘機や戦車等を見渡していく。

その頃、フォックスは小型の銃でアパロイドを攻撃していた。

フォックス

「やはり数が多いな、ブラスターだけじゃ手に負えない……………ナウス！ランドマスターを転送してくれ！」

ナウス

『了解！』

フォックスは攻撃の手を止めて、通信機でナウスに指示をする。

一方、ネギ一行は今だに格納庫で戦車を眺めていた。

ネギ

「この戦車、カッコイイなあ……………」

そう呟きながら、ネギが戦車みたいな乗り物に手を触れた瞬間……………

シュン！！

ネギ

「!？」

突然戦車が手を触れたネギと共に、その場から姿を消していく。

明日菜

「……………あれ？ネギは？」

木乃香

「変やなあ、さっきまでそこにおったんやけど……………。」

明日菜達はネギがない事に気づき、辺りを見回す。

シューーーーーン……!

ネギ

「……………あれ？」

突然ネギは戦車と共に、荒れ果てたコーネリアの都市のど真ん中に現れる。

カモ

「おい！一体どうなってんだよ兄貴！？」

ネギ

「さあ、僕も何が何だか……………」

フォックス

「な、何故君が此処に！？」

ネギがこの状況に困惑していると、フォックスが驚いた表情をしながらネギに駆け寄ってくる。

ネギ

「あ、フォックスさん！僕にもよく分からないのですが……………この戦車に触れた途端、突然こんな所に居たんですよ。」

フォックス

「そうか、ランドマスターと一緒に転送されたんだな……………」

フォックスはネギの話を聞いて、片手で頭を抱える。

ネギ

「ランドマスターって、この戦車の事ですか？」

フォックス

「ああ、別名は『超高性能回転式地对空戦車』といって、地上探索用車両を改良した戦闘車両で……………」

カモ

「おい、狐の兄ちゃん……………長々と説明してる暇はねえんじゃねえか？」

フォックスとネギはカモの声に反応して気が付くと、いつの間にかアパロイドに囲まれていた。

ネギ

「い、いつの間に!？」

フォックス

「ネギ！俺が奴らを引き付けるから、君はその隙に……………」。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………魔法の射手 連弾・雷の17矢！！」

ドドドドドドドドッ！！

フォックス

「なっ！？」

ネギの魔法の矢がアパロイドを一掃していく光景に、フォックスは目を疑った。

フォックス

「い、今のは一体……………」。

ネギ

「僕の事は心配いりません……………それより、一刻も早くアパロイドをやっつけましょう！」

フォックス

「あ、ああ……………」。

フォックスは呆気にとられながらも、ランドマスターに乗り込む。

フォックス

「攻撃開始!!」ドキューーーーン!!

ランドマスターから放たれたビーム砲が周りを囲んでいたアパロイドを一掃していく。

くコーネリア上空く

その頃、スリッピートの戦闘機は三匹のアパロイドに追っ掛けられていた。

スリッピート

「あわわ!.....クリスタルく!後ろの敵を何とかしてよ!」

クリスタル

「ごめんなさい……………私も後ろを付かれて助けられないの！」

クリスタルの戦闘機クラウドランナーも五匹のアパロイドに追っ掛けられていた。

スリッピー

「そんな、誰か助けてよー！！」

ドッカーーン！！

スリッピー

「……………あ、あれ？」

突如スリッピーとクリスタルを追っ掛けていたアパロイドが何者かに撃墜させる。

？

「まったく、情けねえ声出してんじゃねえよ。」

クリスタル

「その声は……………ファルコね！」

クリスタルが声の主が誰なのか認識すると、上空から黄色いくちばしに青い鳥の男を乗せた一機の戦闘機スカイクローがこちらに接近してくる。

？

「スリッピー！大丈夫？」

スリッピー

「この声は……………アマンダだね！」

スリッピーがもう一人の声の主が誰なのか認識すると、上空からスリッピーより細長いピンクの蛙の女性を乗せたオタマジャクシ型の戦闘機ダットホールがファルコのスカイクローと同じように接近してくる。

ファルコ

「スリッピー、お前ちつとも成長してねえな。」

スリッピー

「な、何だよ！ちょっと油断しただけなのに……………」

スリッピーはファルコの皮肉っぽい言葉に怒り出す。

アマンダ

「ごめんなさい、私達も速く加勢しに行きたかったんだけど……………」

カタリナに現れたアパロイドが思ったよりも数が多くて、全部始末するのに手間取ってしまったの。」

クリスタル

「そうだったの……でも、来てくれて助かったわ。」

ファルコ

「さて、速いところ虫共を片付けてやるっぜー！」

スリッピー

「よーし、やるぞー！」

スリッピーの掛け声を合図に、それぞれの戦闘機が四方八方へと飛び去っていく。

数時間後、アパロイドはスターフォックスの活躍で一匹残らず始末されたのであった。

第三十四話 青い鳥VS四角形の豚 (前書き)

惑星コーネリアの危機を救ったネギー行とスターフォックスだが……。

第三十四話 青い鳥VS四角形の豚

グレートフォックス内部

惑星コーネリアのアパロイドを退治したネギとスターフォックスの面々はグレートフォックス内部でペッピーに報告していた。

フォックス

「……………という訳で、アパロイドは俺達が一匹残らず退治した。」

ペッピー

「そうか、ご苦労様だったな……………」

ペッピーはフォックスからの報告を聞いて一安心する。

明日菜

「もう、急に居なくなっちゃったからビックリしたわよ。」

ネギ

「はい、ご心配お掛けしてすみませんでした……………」

ネギは申し訳なさそうに明日菜達に向かって頭を下げる。

ファルコ

「フォックス、コイツらは誰だ？」

フォックス

「え？ああ、ネギ達の事か……………」

スリッピ

「フォックスの話によると、惑星サウリアでアパロイドに襲われたところをフォックスに助けられたんだってさ。」

ファルコ

「ほお……………」

ファルコは食い入るようにネギ達を見つめる。

ネギ

「じ、実は僕達ですな……………」

ネギはフォックスの時と同じように、ファルコにも説明する。

ファルコ

「……………成程、そいつはご苦労なこつたな。」

フォックス

「おいおい、そんな他人事みたいに……………」

フォックスはファルコの言葉を聞いて呆れる。

ネギ

「つ、ついでにこれもお渡しします。」

ネギはファルコにもバツチを渡す。

ファルコ

「仕方ねえ、貰っておいてやるか。」

明日菜

「……………何かムカつくわね。」

明日菜はファルコの言葉を聞いてムツとする。

フォックス

「すまない……………ファルコは口が悪いけど、根は良い奴なんだ。」

フォックスはファルコに聞こえないようにネギ達に話す。

ナウス

「ふおつくす、あばろいど反応ヲきゃっちシマシタ！」

フォックス

「何！？何処の星だ？」

ナウス

「惑星ふいちなデス。」

ペッピー

「な、何じゃと！？」

ペッピーを含むスターフォックス全員が耳を疑った。

ネギ

「フィチナって、どういう星なんですか？」

クリスタル

「フィチナは地表の約九割が永久凍土と雪で覆われている氷雪の惑

星よ……でも、気象コントロールセンターが建設されて、その装置のお蔭で生物が住みやすい星になったの。」

スリッピ

「ところが、前にアパロイドが気象コントロールセンターを侵食しようとしたから、また人が住めない星に逆戻りになるところだったんだよね。」

刹那

「では、アパロイドは再びその気象コントロール装置を侵食しようとしているのでは……。」

ペッピー

「だとしたら、娘のルーシーが危ない……フォックス、何度もお前に頼んで申し訳ないが……。」

フォックス

「分かってるさ！惑星フィチナもルーシーも俺達が救ってみせる！」

ファルコ

「ケツ、またカッコつけやがって……。」

ファルコはフォックスの言葉を聞いて、少し皮肉を漏らす。

フォックス

「ナウス！急いで惑星フィチナへ向かってくれ！！」

ナウス

「了解！」

ゴオーーーーーッ！！

グレートフォックスはフィチナに向けて動き出していく。

〈惑星フィチナ〉

グレートフォックスはフィチナへと到着した。

アマンダ

「……………特に異変は無いみたいね。」

フォックス

「どうやら、気象コントロールセンターはまだアパロイドに侵食されてないようだ。」

スリッピー

「あっ！？フォックス、アレ見てよ！」

スリッピーの指さす方を見ると、施設のような建物の周囲を飛び回っているアパロイドをウサギの耳のような双尾翼を持つ一機の戦闘機が応戦していた。

クリスタル

「アレはルーシーのスカイバニーだわ……………」

スリッピー

「ルーシーは今まで一人で闘ってたんだ……………」

フォックス

「……………よし！スターフォックス出動だ！！」

そう言うと、フォックス達はその場から駆け出していく。

ネギ

「僕達も行きましょう!」

刹那

「はい!」

明日菜

「木乃香と本屋ちゃんは此処で待っててね!」

木乃香

「わ、分かった……。」

のどか

「皆さん、気をつけて下さいね……。」

ナウス

「ダ、ダカラ勝手ニ出テ八困リマスツテバ……。」

ネギと明日菜と刹那はナウスの制止を聞かずに、フォックス達の後を追いついていく。

「フィチナ・気象コントロールセンター上空」

ルーシー

「……もう限界だわ。」

スカイバニーに乗ってアパロイドを応戦している薄ピンク色のウサギの女性ことルーシーは限界に近付いていた。

ルーシー

「でも、此処で私が諦めたらフィチナは再び死の星に……。。」

クリスタル

『ルーシー！応答して！』

ルーシー

「い、今の声は……。クリスタル！？」

ルーシーは無線から聞こえてきたクリスタルの声に反応すると、前方からクリスタルのクラウドランナーとスリッピーのブルフロッグとアマンダのタッドポールが接近してくる。

クリスタル

『一人でよく頑張ったわね。』

スリッピー

『オイラ達が来たからにはもう安心だよ!』

アマンダ

『一緒にフィチナを守りましょ!』

ルーシー

『みんな………ありがとう!』

ルーシーはクリスタル達の温かい言葉に涙ぐむ。

ルーシー

『……あれ?ところで、フォックスさんとファルコさんは?』

スリッピー

『あゝ、あの二人はねえ………。』

「フィチナ・気象コントロールセンター付近」

ファルコ

「……………つたく、何で俺も地上で応戦しなきゃならねんだ？」

ファルコは気象コントロールセンターの入口付近で、フォックスとネギ達三人を不機嫌そうに横目で睨み付けながら呟く。

フォックス

「仕方ないだろ、俺一人だけじゃネギ達を守り切れないし……………それに、俺の他に大乱闘に参戦したお前しか頼める相手がいなかったんだ。」

ファルコ

「だからって、俺もガキと女のお守りをしろってのかよ……………。」

明日菜

「ちょっとアンタ、さっきから聞いてればガキだの女だのと馬鹿にして……………」。

刹那

「あ、明日菜さん！少し冷静に……………」。

ファルコの言葉にブチ切れ寸前の明日菜を刹那が少し焦りながら宥める。

ネギ

「……………ファルコさん、何だか機嫌が悪いみたいですね。」

フォックス

「ああ、ファルコは白兵戦よりも戦闘機を使った闘いを好んでいるからな……………」。

カモ

「何だ、ただ単にイジけてるだけか……………」。

ファルコ

「……………おい、もうお喋りしてる場合じゃないみたいだぜ。」

そう言うと、複数のアパロイドがセンターに近付いてくる。

明日菜

「早速、団体さんのお出ましのようね……………アデアット!!」

パアアアツ!!

明日菜はいつものように『ハマノツルギ』を呼び出す。

フォックス

「ハ、ハリセン!？」

フォックスとファルコは突然現れた『ハマノツルギ』に度肝を抜かれる。

ファルコ

「……………おいおい、それでアパロイドにツッコミを入れるつもりか?」

明日菜

「フン、馬鹿にするのも今の内よ……………」

バアッ！！

突然一匹のアパロイドが明日菜に襲い掛かってくるが……………。

明日菜

「とりゃーっ！！」

パッシーーン！！

明日菜が『ハマノツルギ』をおもいつきり振り上げて、アパロイドを吹っ飛ばす。

フォックス

（す、凄い……………。）

ファルコ

（……………マジかよ。）

フォックスとファルコは明日菜の馬鹿力に啞然としていた。

カモ

「いよっ！流石は姐さん！」

明日菜

「へっへーん。」

明日菜はカモにおだてられて自慢げに指で鼻を摩るが……………。

ババツ！！

今度は五匹のアパロイドが一斉に明日菜に向かって襲い掛かってくる。

刹那

「危ない！神鳴流秘剣・百花繚乱！！」

ズバアアアツ！！

刹那が咄嗟に駆け出して来て、夕風でアパロイドを一掃する。

明日菜

「……………あれ？刹那さん？」

刹那

「明日菜さんったら、油断大敵ですよ。」

明日菜

「アハハハ、ゴメンゴメン……………」

少し怒ったように言う刹那に明日菜は苦笑いしながら謝る。

フォックス

「……………ネギ、あの二人強いな。」

ネギ

「はい、二人共殆ど欠かさず修行に励んでいますので……………」

ファルコ

「……………フォックス、俺達も負けてらんねえな。」

そう言うと、ファルコは懐からプラスターを二丁取り出す。

フォックス

「どっちら、やる気になったよっだな。」

フォックスも懐からブラスターを一丁取り出す。

ファルコ

「コイツらだけにいい格好させられねえからな……………とっっ！！」

次の瞬間、ファルコはその場から勢い良く真上へ高くジャンプする。

ファルコ

「くらえーっ！！」

ドドドドドドドドドドドッ！！

ファルコは二丁のブラスターでアパロイドを攻撃する。

ネギ

「わゝ、凄く高いジャンプですね……………」

フォックス

「ファルコはスマッシュブラザーズのメンバーの中で一番のジャンプ力を誇ってるんだ……………それより、俺達もアパロイド退治に取り掛かるっ！」

ネギ
「そうですね！」

ネギとフォックスは、それぞれの武器や杖を構えながらアパロイドの群れに突っ込んでいく。

くフィチナ上空く

ドカーーーッ！！

スリッピー

「敵を撃破！」

スリッピーのブルフロッグが空中のアパロイドを撃破する。

アマンダ

「スリッピー、今の凄くカッコ良かったわ。」

スリッピ―

「えへへ、そうかな？」

スリッピ―はアマンダに褒められて頬を赤く染める。

クリスタル

「はいはい、二人共そこまで。」

ル―シー

「まだ残ってるアパロイドもやっつけなきゃ……………」

スリッピ―

「わ、分かってるよ！」

？

「……………ブヒヒ、やっと見つけたぞ。」

アマンダ

「えっ？」

アマンダは何処からか聞こえてきた声に反応して周りを見回す。

スリッピ―

「アマンダ、どうかした？」

アマンダ

「今、変な声が聞こえたような気がして……。」

？

「変な声とは失礼やな。」

全員

「!?!」

全員声が聞こえた方を見上げると……。

スリッピ―

「うひゃ~~~~っ!?!」

クリスタル

「あ、貴方は……。」

スリッピ―とクリスタルは目の前の光景に目を疑った。

「気象コントロールセンター付近」

その頃、ネギ達はまだ地上のアパロイドを倒している最中だった。

フォックス

「……………ふう、もう半分位は倒したかな。」

ファルコ

「にしても、お前ら意外とやるじゃねえか。」

明日菜

「どっ？少しは見直した？」

ファルコ

「ああ、お前を女にしとくのが勿体無いくらいだぜ。」

明日菜

「ちよ、ちよっと！それってどづいう意味!？」

刹那

「ま、まあまあ……。」

ファルコの言葉に怒り出す明日菜を刹那が一生懸命に宥める。

スリッピー

『フォックス〜！ファルコ〜！助けて〜!!!』

突然フォックスとファルコの通信機からスリッピーの叫び声が響き渡る。

フォックス

「ど、どうしたスリッピー!？」

ファルコ

「どうせお前の事だ、また敵に後ろを取られて追っ掛け回されてんだろ?」

スリッピー

『そんなんじゃないってば〜!とにかく、急いで助けに来てよ〜』

「!!」

そう言つと、スリッピーからの通信が途絶える。

フォックス

「……………向こうで何が起こつてるんだ？」

ファルコ

「よし、俺がちよっくら行って来る……………ナウス！俺のスカイクローを今すぐ転送しろ！」

ナウス

『了解！』

シューーン！！

突然ネギ達の前にファルコのスカイクローが現れる。

フォックス

「ナウス！俺のアーウィンも……………」

ファルコ

「フォックス、お前は地上にいるアパロイドを片付けてる！」

フォックス

「おい、一人で行くつもりなのか!？」

ファルコ

「心配すんな、空の事は俺に任せな！」

そう言うと、ファルコは急いでスカイクローに乗り込む。

ファルコ

「そんじゃ、スカイクロー発進!!！」

ビビュッ!!

ファルコを乗せたスカイクローは勢い良く発進していく。

ネギ

「何だか胸騒ぎがするな……お二人共、後の事はお任せします!！」

刹那

「え?ネギ先生はどちらへ……。」

ネギ

「僕はファルコさんの後を追い掛けます！それでは……………」

明日菜

「ちょっと！待ちなさいネギ……………」

ビビュッ！！

ネギは杖に跨がって、そのまま飛び立っていく。

明日菜

「あゝあ、行っちゃった……………」

刹那

「……………ネギ先生らしいですね。」

フォックス

「そ、空を飛んで……………」

フォックスはネギが飛び立った光景に驚愕していた。

「フィチナ上空」

ファルコ

「それにしても、一体何があつたつてんだ？」

ファルコのスカイクローはスリッピー達の居る所へ向かっていた。

ネギ

「ファルコさん！」

ファルコ

「あ？何だ………つて、うおっ!？」

ファルコはネギの声に反応して振り向くと、ネギが杖に跨がりながら上空へ飛行してる光景を見て目を見開いて驚愕する。

ファルコ

「お、お前……………空を飛べるのか？」

ネギ

「はい、一応魔法使いですので……………それより、僕も一緒に行きま
す。」

ファルコ

「フン、好きにしな……………だが、足手まといにだけにはなるなよ。」

ネギ

「は、はい！」

カモ

（やっぱり偉そうな鳥だよな……………。）

カモはファルコの言葉に不愉快な気分になる。

ファルコ

「さて、そろそろスリッピー達と合流するハズだが……………」

スリッピー

「ファルコ！来てくれたんだね！」

しばらく飛行していると、スリッピーのブルフロッグを含む四機の戦闘機を発見する。

ファルコ

「スリッピー、一体何があったんだ？」

スリッピー

「それがね……………」

？

「ブヒヒ、その声はファルコやな。」

ネギ&ファルコ

「!？」

ネギとファルコが怪しい声に反応して見上げてみると、中央に豚の顔がある巨大な立方体状の箱のような物体が上空に浮かんでいた。

カモ

「な、何だ！？あの巨大な段ボール箱みてえな物体は……………」

？

「だ、段ボール箱とは何や！ワイが一番気にしてる事を……………」

ファルコ

「やっぱり、この下品な声はピグマだな！」

ピグマ

「ブヒヒヒ、ワイの事を覚えとったようやな。」

ピグマという名前の物体はファルコの言葉を聞いて不気味な声で笑い出す。

ネギ

「お、お知り合いですか？」

ファルコ

「ああ、一応な……………」

ファルコは呆れながら、ネギの質問を曖昧に答える。

ピグマ

「此処で会ったのも何かの縁や！今度こそお前らを始末したるわ！」

そう言つと、ピグマは四つずつに分裂する。

ネギ

「ぶ、分裂した!？」

ファルコ

「いや違う、奴は元々四つのパーツで構成されてんだ。」

ピグマ

「ほな、早速行くで!」

バババババババツ!!

四つに分裂したピグマはそれぞれ回転させながら光弾を乱射する。

ネギ

「わあっ!？」

ファルコ

「くそっ!無茶苦茶に攻撃しやがる……………」

ネギとファルコのスカイクローはピグマの攻撃を間一髪避ける。

ルーシー

「あの二人だけじゃ、すぐにやられてしまっわ……………」。

クリスタル

「みんなでファルコ達を援護しましょう!」

スリッピー

「よし、今度こそピグマをやっつけてやる!」

四機の戦闘機がネギ達に向かって発進させようとしたが……………。

?

『待つて、私が行くわ。』

アマンダ

「えっ!?!」

上空から突如、上から見ると猫の顔のような形の戦闘機が現れる。

クリスタル

「アレはスクラムジェット?」

アマンダ

「という事はまさか……………」

スリッピー達はネギ達の方へ向かっていくスクラムジェットという戦闘機を目で追っ掛ける。

ネギ

「あれ?向こうから何かやって来ますよ。」

ファルコ

「ああ、きっとスリッピーが誰かが援護しにやって来て……………」

?

「残念、正解は私よ。」

そう言うと、スクラムジェットに乗った黒猫の女性が勝ち誇ったような表情を浮かべながらファルコのスカイクローに接近してくる。

ファルコ

「キヤ、キヤット!?何でお前が此処に……………」

キヤット

「何よ、折角助けに来たのに随分な言い方ね。」

ファルコの言葉にキヤットという名の女性は不満げに口を尖らせる。

ネギ

「またファルコさんのお知り合いですか？」

ファルコ

「ああ、昔の暴走族仲間だ……………」。

ネギ

「えっ！？という事は、ファルコさんは暴走族だったんですか？」

ファルコ

「ったく、いちいち突っ込むガキだな……………」。

ファルコはネギの質問責めに少し不機嫌になる。

ピグマ

「こらー！ワイを無視して勝手に盛り上がるなー！！」

バババババババツ！！

そう叫ぶと、ピグマは先程よりも激しく攻撃してくる。

ネギ

「危ない！風楯！！」

バシユユユツ！！

ネギが大きな魔法障壁を作って、ファルコ達からもピグマの攻撃を防ぐ。

ピグマ

「な、何やと！？」

ファルコ

「い、今のはバリヤーみたいなもんか？」

ネギ

「まあ、そういったところです。」

キヤット

「どっちにしても、坊やお蔭で助かったわ……………お礼に後でお顔を舐め舐めしてあげるわ。」

ネギ

「な、舐め舐め……………ですか？」

ファルコ

「……………お前、ガキに何言ってるんだ？」

キヤットの言葉を聞いたネギは苦笑いし、ファルコは半ば呆れ返る。

ピグマ

「お、おのれ……………もう怒ったで……………!!」

そう言うと、四つに分裂したパーツは一つの個体に戻る。

ピグマ

「この強力な一撃でお前らを吹っ飛ばしたるで……………!!」

次の瞬間、ピグマの口の部分からピンク色の光が現れる。

ファルコ

「あのピンク色の光の塊がピグマの弱点だ！」

ネギ

「では、アレを攻撃すれば……………」

キャット

「でも、気をつけて……………ピグマはあの光から強力なエネルギー波を放つつもりだわ。」

ピグマ

「そういう事や！これでも喰らえ————！」

ビイイイイツー！！

ピグマは極太のビームをネギ達に向けて放つ。

ファルコ

「な、何だ！？この馬鹿太いビームは！」

キャット

「こんなの回避不可能だわ……………」

ネギ

「くっ……………風楯!!」

ブワアアアアッ!!

ネギは先程よりも大きな魔法障壁を発生させて、ピグマの極太ビームを防ぐ。

カモ

（あ、あんなに大きな魔法障壁を……………幾ら兄貴でも数分も持たないぞ。）

ネギ

「ファ、ファルコさん……………僕が全力で抑えますので……………い、今の内に攻撃を……………」

ファルコ

「お前……………」

ファルコは全力で障壁を作って、ピグマの攻撃を抑えてるネギを見て心打たれる。

ファルコ

「分かった………キヤット！行くぞー！」

キヤット

「ええ！」

ファルコのスカイクローとキヤットのスクラムジェットはビームを大きく回避しながらピグマに接近していく。

ピグマ

「ブヒッ！？ちょ、ちょっと待った………。」

キヤット

「待ったは無しよー！」

ファルコ

「これでも喰らいやがれ豚野郎ー！」

ジュジュジュジュッー！

二機の戦闘機はピンク色の光に向けて集中乱射する。

ピグマ

「ア、アカン！これ以上攻撃したら……。」

ポツカーーーーン！！

ピグマ

「ブヒ~~~~ツ！！」

ピグマは大爆発と共に、四つにバラバラになって宇宙の彼方まで吹き飛んでいく。

キャット

「や、やったわ……。」

ファルコ

「フツ、楽勝だぜ。」

カモ

「あ、兄貴！？」

ファルコ

「ん？」

ファルコはカモの声に反応して後ろを向くと、ネギがそのまま落下していく光景が目に見えた。

ファルコ

「あ、危ねえ！！」

ビビュッ！！

ファルコのスカイクローが急いでカーブして飛び出すと、ネギをスカイクローの翼部分に着地させる。

ファルコ

「ふっつ、危機一髪だったぜ……………」

キャット

「流石ファルコね。」

カモ

「す、すまねえ……………ネギの兄貴は魔法障壁を発生させるのに魔力を限界まで使っちゃまって、もう飛ぶ事すら困難だったんだ。」

ファルコ

「……………何言ってるのかよく分からねえが、とにかくもう力が残ってねえって事なんだな。」

ファルコはカモの説明を聞いて一瞬考えたが、自分なりにまとめて納得する。

キヤット

「それじゃ、私そろそろ行くから……………またね。」

そう言うと、キヤットのスクラムジェットはその場から上空へ飛び去っていく。

ファルコ

「……………たく、相変わらず気まぐれな猫だぜ。」

スリッピー

「ファルコ〜!!」

ファルコが不満そうに呟いてると、スリッピーを含む四人の戦闘機が接近してくる。

クリスタル

「どうやら無事みたいね。」

ファルコ

「ああ、コイツのお蔭でな……………」。

ファルコはスカイクローの翼の上で横たわっているネギに指さす。

アマンダ

「この子、どうしたの？」

ファルコ

「詳しい事はグレートフォックスで話す……………それより、フォックスの方はどうなったんだ？」

ルーシー

「さっきフォックスさんから連絡があつて、地上のアパロイドを全部退治したそうです。」

ファルコ

「そうか……………そんなじゃ、グレートフォックスへ戻るか。」

スリッピ

「そうだね、オイラもうクタクタだよ。」

そう言つと、全機はグレートフォックスへ向かつて飛び出していく。

第三十五話、アンドルフの意思（前書き）

ピグマを倒したネギとファルコは、他のメンバーと共にグレートフ
オックスへ帰っていくのだが……。

第三十五話くアンドルフの意思く

くグレートフォックス内部く

ファルコ

「……………そういう訳で、どうにかピグマを倒す事が出来たんだ。」

ファルコはフォックス達に、ネギのお蔭でピグマを倒せたという事を説明していた。

フォックス

「そうだったのか……………ネギには感謝しないとな。」

ファルコ

「ああ、それに借りも返さねえとな……………。」

明日菜

「ちよつとネギ、もう大丈夫なの?」

ネギ

「は、はい……………またご心配を掛けて申し訳ありません。」

ネギはまた申し訳無さそうに深く頭を下げる。

ナウス

「ふおつくす、ぺっぴー將軍カラ通信ガ届イテマス。」

フォックス

「繋いでくれ。」

そう言つと、ぺっぴーの立体映像が映し出される。

ぺっぴー

「諸君、この度は惑星フィチナや娘のルーシーを救ってくれてありがとう。」

スリッピー

「いや、オイラ達に掛かればどうって事ないよ。」

ファルコ

「何でお前が威張ってんだよ……………」

スリッピーの偉そうな発言にファルコは不満げに呟く。

ペッピー

「それより、アパロイドについて分かった事があるんじゃないか……。」

クリスタル

「えっ！？何が分かったの？」

ペッピー

「アパロイドの調査に向かったコーネリア防衛軍の隊員によると、アパロイドは惑星ベノムを本拠地にしとる事が判明したんじゃない。」

ファルコ

「な！？」

フォックス

「何だつて！？」

ペッピーの説明を聞いたフォックスとファルコは耳を疑った。

ファルコ

「おい、惑星ベノムって言えば……………」。

フォックス

「ああ、確かアッシュがベノム再興に取り組んでいると聞いたが……まさか、アッシュの身に何かあったんじゃないや……。」

フォックスは落ち込むかのように俯いてしまう。

明日菜

「ねえ、そのアッシュって誰なの？」

スリッピー

「アッシュは、僕達スターフォックスに憧れてコーネリア防衛軍に入隊したんだけど……。」

ペッピー

「しばらくして彼は惑星ベノムを再興させると言って、しばらくパイロットの仕事を休みたいと言ってきたんじゃない。」

ネギ

「そうだったんですか……。」

ネギー一行はスリッピーとペッピーの説明を聞いて納得する。

フォックス

「ナウス！大至急ベノムへ向かってくれ！」

ナウス

「了解！」

ゴオーーーーーッ！！

グレートフォックスは惑星ベノムへ向けて発進していく。

「惑星ベノム」

数時間後、グレートフォックスはベノムへと到着した。

刹那

「……………此処が惑星ベノムですか。」

木乃香

「何もあらへんなあ。」

のどか

「何だか、寂しい星ですね……………」

クリスタル

「ペツピーから聞いた話だけど、この惑星は岩場と断崖ばかりで大気中の酸素濃度が極めて薄い星だから生物の生息には全く適さない星なのよ。」

スリッピー

「それに、この星の海の海水は高濃度の硝酸なんだって……………これじゃ、泳げないよね。」

木乃香

(……………蛙やのに海でも泳げるんや。)

木乃香はスリッピーの発言に少し疑問を抱く。

ナウス

「ふおつくす、何者カノ通信ヲきゃっちシマシタ。」

フォックス

「もしかしたらアッシュかも……繋いでくれ。」

ポチッ！

ナウスが通信用のボタンを押すと……。

？

「やはり来たな！下等生物共め！！」

首に黄色いスカーフを巻いて、赤い服を着用した首と脚が細長い白い猿の男の立体映像が映し出される。

1459

フォックス

「お、お前は……オイツコニーか！？」

フォックス達はオイツコニーという名の猿の姿を見て驚愕する。

ファルコ

「何でテメエがこの星にいやがるんだ！？」

オイツコニー

「ハハハハハハ！随分可笑しな事を聞くな……今やこの惑星ベノムはアパロイドの住家でもあり、新皇帝の本拠地でもあるのだ！」

アマンダ

「新皇帝？」

全員オイツコニーの言葉に耳を傾ける。

オイツコニー

「その方は、あの偉大なるアンドルフ様の血を受け継いでおられる……お前達もよく知っているハズだ。」

ファルコ

「お、おい……そいつってまさか……。」

オイツコニー

「そうだ！アンドルフ様の孫のアッシュだ……！」

フォックス

「な、何だと!？」

オイツコニーの発言に今度は全員耳を疑った。

クリスタル

「じゃあ、アパロイドを操っているのはマザーじゃなくて……アツシュなの？」

フォックス

「嘘だ！あのアツシュがそんな事をするはずが無い！！」

フォックスの力強い言葉が内部に響き渡る。

ネギ

（フォックスさん……。）

オイツコニー

「私だって奴に会うまでは信じられなかったさ……。だが、アツシュは突然復活したアパロイドを自在に操る『アパロイド・コントロール装置』という物を開発して、このライラット系の惑星全てを支配しよう企んでいるのだ！」

ファルコ

「ケツ、テメエの言う事なんか信じられつかよ！」

フォックス

「その通りだ！どうせ俺達を動揺させようと貴様が考えた作り話だ

る!！」

オイッコニー

「フツ、信じるか信じないかは貴様らの勝手だ……どっちにしろ貴様らは此処で終わりだ!！」

そう言うと、オイッコニーの立体映像が消えたと同時にアパロイドの大群がグレートフォックスの周りを囲むように接近してくる。

スリッピー

「あわわ、いつの間にかアパロイドに囲まれてる……。」

ファルコ

「上等だ!一匹残らず始末してやるぜ!！」

フォックス

「よし!スターフォックス出動だ!！」

フォックスの言葉を合図に、スターフォックスのメンバーは駆け出していく。

ネギ

「僕達も行きましょう!！」

刹那

「はい！」

明日菜

「よっしゃー！今日も張り切って……………」

ネギ

「あっ！明日菜さんは木乃香さん達と一緒に残って下さい。」

ズシヤヤヤツ！！

明日菜はネギの言葉を聞いて床にダイブするように勢い良く転ぶ。

ナウス

「……………随分激シクスツ転ビマシタネ。」

明日菜

「ちょ、ちょっとネギ！何で私が残らなきゃいけないのよ!?!」

ネギ

「お、落ち着いて下さい……………今回は今までと違って空中戦になる

と思っんですよ。」

カモ

「成程、姐さんは刹那姉さんと違って翼を出して飛べねえからなあ。」

明日菜

「うっ……………」

明日菜はカモに痛いところを突かれて言葉を濁らせる。

明日菜

「だ、だからって此処で黙って待ってろって言うの？」

木乃香

「まあまあ、ウチらも一緒やから……………」

明日菜

「そういう問題じゃなくて……………」

カモ

（兄貴、これじゃキリがねえから行っちまおうぜ。）

ネギ

(そ、そうだね……………刹那さん、今の内に行きましょう。)

刹那

(は、はい……………。)

ネギと刹那は明日菜が木乃香と口論している隙に、その場からこっそりと抜け出していく。

明日菜

「だから、私が言いたいの……………って、あれ？」

明日菜はネギと刹那が居ない事に気付く。

ナウス

「アノ二人ナラ、モウ行ッテシマイマシタヨ。」

明日菜

「あゝ！もゝ！何か凄く悔しい……………!!」

明日菜は悔しそうに激しくじだんだを踏む。

木乃香

「明日菜ったら……。」

のどか

「相当悔しかったんですね……。」

木乃香とのどかは明日菜の様子を見て苦笑いする。

〈惑星ベノム・上空〉

その頃、スターフォックスが操る五つの戦闘機はアパロイドの群れに突っ込もうとしていた。

スリッピ

「フォックス、これからどうするの?。」

フォックス

「俺とファルコが基地へ乗り込むんで黒幕を倒してくる、他三人はアパロイドを始末してくれ！」

アマンダ

「了解！」

クリスタル

「フォックス……………無事に帰って来てね。」

フォックス

「あ、ああ……………。」

フォックスはクリスタルの言葉に頬を微かに赤く染める。

ファルコ

「おいおい、惚気てる場合かよ……………。」

フォックス

「ハッ！？い、いかにいかに……………改めてスターフォックス出動！
！」

そう言うと、フォックスとファルコの戦闘機はそのまま真っ直ぐ進

み、スリッピーとクリスタルとアマンダの戦闘機はアパロイドの群れへ突っ込んでいく。

ネギ

「フォックスさ〜ん！ファルコさ〜ん！」

フォックス&ファルコ

「ん？」

フォックスとファルコが声に反応して同時に振り向くと、ネギが杖に跨がってフォックス達に接近してくる。

フォックス

「ネギ！君はクリスタル達と一緒にアパロイドを……………」

ネギ

「いえ、そっちは刹那さんに任せてありますので心配いりません。」

ファルコ

「刹那って、あの刀を持った姉ちゃんか？」

フォックス

「だが、幾ら何でも空中のアパロイド相手じゃ……………なっ!?!？」

ふと横を向いたフォックスは何かを発見して目を見開いて驚愕する。

ファルコ

「どうした？」

フォックス

「ア、アレを見てみるよ……………」。

ファルコ

「何だっつてんだよ……………おっ！？」

ファルコはフォックスの指さす方を見てみると、翼を生やした刹那が夕凧でアパロイドをやっつけていた。

ファルコ

「……………おい、何であいつの背中に翼が生えてんだ？」

ネギ

「あ、いや、それはですね……………」。

オイッコニー

「ハハハハハハ！呑気にお喋りしてる場合か？」

フォックス

「!？」

全員オイッコニーの声に反応して前の方を向くと、ネギ達の目の前に巨大な右手と左手とオイッコニーの顔型のロボットが立ち塞がっていた。

ネギ

「わっ!？い、いつの間にこんな物が……。」

ファルコ

「何だ？前に惑星フォーチュナで乗ってたロボと同じじゃねえのか？」

フォックス

「同じロボを使ってくるとは………芸が無いな、オイッコニー！」

オイッコニー

「う、嫌い！コイツは前より数倍もパワーアップしているのだ!！」

フォックス

「じゃあ、そのパワーアップしたロボの実力ってのをを見せてもらおうか?」

ファルコ

「やめとけて、どうせ時間の無駄だ。」

オイッコニー

「き、貴様ら〜!!」

オイッコニーのロボの頭から湯気が沸いてくる。

オイッコニー

「そこまで言うなら、嫌という程味あわせてくれるわー!!」

そう叫ぶと、巨大な右手がネギ達に向かって振り下ろされていくが……。

ボカアーーーーッ!!

全員

「!?!」

何者かの攻撃により、巨大な右手が破壊される。

フォックス

「今の攻撃は……………ファルコか？」

ファルコ

「いや、俺はまだ何もしてねえが……………」

ネギ

「僕もまだ何もしてませんが……………」

フォックス

「じゃあ、一体誰が……………」

ヒューーーン！！

すると、アーウィンと同じ形の三つの赤い装飾の戦闘機がネギ達の前に現れる。

ファルコ

「ウ、ウルフェン！？」

フォックス

「まさか……………スターウルフなのか!？」

?

「フォックス、こんな弱っちい猿と遊んでる場合じゃねえだろ。」

ウルフエンと呼ばれる真ん中の戦闘機に乗った、左目に眼帯のような物を付けた狼の男性が吐き捨てるように言う。

フォックス

「ウルフ……………どうしてお前達が此処に？」

ネギ

(えっ!?!あの人ウルフさん?)

ネギはフォックスの言葉に耳を傾ける。

ウルフ

「俺達が縄張りになっていたサルガッソーが虫共によって荒らされてな……………コイツらの出所を調べたら此処に辿り着いたって訳だ。」

?

「ククク、別にお前らを助けに来た訳ではないからな。」

ウルフェンの左側の戦闘機レインボーデルタに乗った、カメレオンのような男性がウルフの言葉を付け加えるように呟く。

？

「まあ、俺が助ける相手は愛しのクリスタルだけなんだがな。」

今度はウルフェンの右側の戦闘機ブラックローズに乗った、黒豹のような男性が囁くように言う。

ファルコ

「何甘ったるい事言ってやがんだ……………胸糞悪いぜ。」

？

「黙れ、鳥。」

ファルコ

「んだとお！？」

ファルコは黒豹の男の言葉に怒り出す。

オイッコニー

「お、おいコラ！私を無視して勝手に盛り上がるんじゃないー！」

オイッコニーの顔のロボが更に湯気を沸いて出てくる。

ウルフ

「おっと、どうやらお喋りはおしまいのようだ……フォックス！此処は俺達に任せて先へ進め！」

フォックス

「……………いいのか？」

ウルフ

「くどい！俺の気が変わらねえ内にさっさと行けー！」

フォックス

「分かった……………ネギ！ファルコ！先へ進もうー！」

ファルコ

「おう！」

そう言うと、フォックスのアーウィンとファルコのスカイクローは先へ進んでいく。

ネギ

「あの、ウルフさん！」

ウルフ

「あ？」

ウルフはネギに声を掛けられてネギの方を向く。

ネギ

「ウルフさんに渡したい物があるのですが……………」。

カモ

「おい兄貴！早く行かねえと置いてかれちまうぞ！」

ネギ

「で、でも……………」。

カモ

「バッチなんて後で渡せばいいじゃねえか！」

ネギ

「わ、分かったよ……………ウルフさん！話はまた後で……………」。

そう言い残すと、ネギは慌ててフォックス達の後を追いつけていく。

そう言い残すと、ネギは慌ててフォックス達の後を追いつけていく。

ウルフ

(何だ？あのガキは……………。)

ウルフは怪訝そうな目付きでネギを見つめる。

オイッコニー

「チッ、逃がしたか……………まあいい、まずは貴様らから始末してやる
！！」

ウルフ

「フン！俺達がただ威張り散らしてただけのテメエに負ける訳ねえ
だろ……………レオン！パンサー！行くぞ！！」

レオン

「フツ、たっぷり痛ぶってから料理してやる。」

パンサー

「アンタが元スターウルフの先輩であるうがなかるうが、俺の赤い薔薇を見た奴は死ぬぜ！」

ウルフのウルフエンとレオンのレインボーデルタとパンサーのブラックローズはオイッコニーのロボに向かって突っ込んでいく。

くグレートフォックス内部く

明日菜

「……………心配だなあ。」

明日菜は辺りをウロチョロしながら呟く。

木乃香

「なあ明日菜、少し落ち着いたらどうや？」

ナウス

「ハイ、オ茶ヲドウゾ……………」

のどか

「あ、ありがとうございます。」

のどかは木乃香と一緒に正座をしながらナウスが沸かしたお茶を受け取る。

明日菜

「これが落ち着ける訳ないじゃない……………それより、こんな時によくお茶なんか飲めるわね。」

木乃香

「これでも凄く心配してるんやけどなあ……………」

のどか

「はい、私もネギ先生が危険な目に遭っていると思う……………」

その言葉の途中で、のどかと木乃香はお茶を口に含んで……………。

木乃香&のどか

「ハア……………」

二人して同時に大きな溜め息をつく。

木乃香

「ナウスはん、このお茶渋くて美味しいわ〜。」

ナウス

「ソ、ソウデスカ？ソウ言ッテ頂ケルト私モ沸カシタ甲斐ガアリマス。」

のどか

「あ、あの……………お代わりしてもいいですか？」

ナウス

「ハイハイ、ドンドンオ代ワリシテモ構イマセンヨ。」

木乃香

「ほなら、ウチもお代わりや〜。」

明日菜

（……………本当に心配してるのかしら？）

明日菜は木乃香達の光景を見て頭を抱える。

〔惑星ベノム・最深部〕

その頃、ネギとフォックスとファルコはベノムの奥深くまで来ていた。

フォックス

「……………大分奥まで来たな。」

ファルコ

「そろそろ何か出て来そうじゃねえか？」

そう言いながら進んでいくと……………。

ネギ

「ん？前方に何か見えてきました。」

そう言うと、フォックスとファルコはネギの指さす方を見てみると……。

フォックス

「な、何だアレは!？」

三人が近付いてみると、目の前に外壁のような物に覆われた巨大な顔のコンピュータが浮かび上がっていた。

ファルコ

「オイッコニーの野郎、こんな物まで作りやがって……………」

?

「いえ、これは僕が作ったんですよ。」

全員

「!？」

全員声が聞こえてきた方を向くと、青い翼が特徴の戦闘機がこちらに接近してくる。

フォックス

「アレは……アッシュのモンキーアロー!？」

ファルコ

「って事は、まさか……。」

?

「フォックスさんにファルコさん……お久しぶりですね。」

モンキーアローという戦闘機に乗った、バイザー付きのヘルメットを被った白い猿の男の子がフォックス達を待っていたかのように言う。

フォックス

「アッシュ!まさか、本当に君がこれを作ったのか？」

アッシュ

「そうですね……貴方達スターフォックスを倒す為に、祖父であるアンドルフの顔を元に開発した『メインコントロールブレイン』です。」

ファルコ

「俺達を倒すだと?」

フォックスとファルコはアッシュの言葉に耳を疑った。

フォックス

「何故なんだ……………君は俺達に憧れてたんじゃなかったのか!？」

アッシュ

「ええ、憧れてましたよ……………ついこの前まではね。」

ファルコ

「何だと？」

アッシュ

「僕が祖父の意思を継いで、このライラット系の全惑星を支配しようとする野望に目覚めた時……………貴方達が非常に邪魔な存在に変わったんですよ。」

ネギ

「そ、そんな事って……………」

フォックス

「……………」

アッシュの言葉を聞いたフォックスは下へ俯いてしまう。

アッシュ

「さて、お喋りはここまでにして……この『メインコントロールブレイン』の餌食になって頂きましょうか。」

ゴオーーーーーッ!!

突然メインコントロールブレインが動き出して、ネギ達に接近してくる。

ファルコ

「フォックス！落ち込んでる場合じゃねえぞ！」

ネギ

「今はあの機械を壊しましょう！」

フォックス

「そ、そうだな……よし！『メインコントロールブレイン』を破壊して、アッシュの目を覚ませよう！」

ネギ

「はい……！」

ファルコ

「フツ……その粹だけ、リーダー。」

ファルコはフォックスの言葉を聞いて微かに笑う。

フォックス

「みんな！行くぞ！！」

フォックスの掛け声と共に、全員メインコントロールブレインに向かって飛んでいく。

第三十六話、悪の科学者の最後、（前書き）

アッシュと対決する事になったネギとフォックス&ファルコですが、果たして結果は……………。

第三十六話 悪の科学者の最後

惑星ベノム

ボツカーーーン!!

オイッコニー

「アンドルフ叔父さあーんんんんん!!」

オイッコニーの叫び声と共に、ロボがスターウルフによって破壊されていく。

ウルフ

「ケツ、無駄な闘いだっただぜ。」

レオン

「ククク、奴の叫び声はいつ聞いても心地良いものだな。」

パンサー

「レオン、それはアンタだけだろ……。」

レオンの危ない発言にパンサーは苦笑いする。

ウルフ

「レオン、パンサー、お前らはアパロイド共の相手をしている。」

パンサー

「それはいいけど、ウルフはどうするんだい？」

ウルフ

「俺は少しばかり用を済ませてくる……………後は任せたぞ。」

そう言い残すと、ウルフはウルフェンと共に飛び去っていく。

レオン

「フン、あんな恐怖を感じない虫ケラを始末してもつまらん……………。」

パンサー

「まあ、そう言っつな……………それじゃ、一丁やりますか。」

そう言うと、レオンのレインボーデルタとパンサーのブラックローズはアパロイドの群れへと突っ込んでいく。

刹那

「斬岩剣!!」

ズバアアアツ!!

その頃、刹那はスリッピー達と共にアパロイドを倒していた。

スリッピー

「うひゃ〜、あの子凄いなあ……………」

アマンド

「ええ、殆ど休まずにアパロイドを倒してるしね……………」

クリスタル

「私達も彼女を見習って頑張りましょう!」

そう言うと、それぞれ三機の戦闘機は再びアパロイドに攻撃を開始

する。

〈惑星ベノム・最深部〉

ネギ

「魔法の射手 連弾・光の29矢!!」

ドドドドドドドドッ!!

一方、ネギはメインコントロールブレインに光の矢を放つが……。

ネギ

「駄目だ、ヒビ一つ入ってない……。」

カモ

「相当頑丈に出来てるようだな……。」

ファルコ

「フン、幾ら頑丈でもコイツを撃ち込めれば一発で壊せるだろ。」

そう言うと、ファルコは懐から真ん中にBのマークが刻まれた丸い物体を取り出す。

ネギ

「それは何ですか？」

ファルコ

「これはスマートボムといってな、起爆すると広範囲に爆風を巻き起こすように爆発するんだ。」

カモ

「そんな物があるなら、さっさとそれを投げ込んでやればいいじゃねえか。」

フォックス

「そうはいかないんだ……スマートボムは俺とファルコが一個ずつ持つてるので最後なんだ。」

ネギ

「それじゃ、失敗は許されませんね……………」

アッシュ

「さっきから何をコンコンと話しているのか分からりませんが……
…どう抵抗しようかと無駄ですよ!」

バアーーーーーッ!!

突然メインコントロールブレインが板状の物体を口から沢山吐き飛ばす。

ファルコ

「な、何だ!? 口から何か吐き出しやがった!」

フォックス

「全力で避けるんだ!」

ネギ

「は、はい!」

ネギ達は板状の物体に当たらないように俊敏に避ける。

アッシュ

「まだまだ！命中するまで飛ばしますよ！」

アッシュの言葉の通りに、メインコントロールブレインはネギ達を
追い掛けるように板状の物体を吐き飛ばす。

ファルコ

「くそっ！これじゃ近付けやしねえ！」

ネギ

（しかも、かなりの確に僕達を狙ってる……。）

フォックス

「アッシュ！もうこんな事はやめるんだ！！」

アッシュ

「そうはいきませんよ……僕は祖父の意思を継がなければなら
ないんです。」

ファルコ

「何でそこまでアンドルフにこだわるんだ！？」

アッシュ

「それは勿論、僕が偉大なる祖父であるアンドルフ様の……うっ

「!!」

アッシュはそう言い掛けると、急に頭を片手で押さえながら苦しむ。

フォックス

「ど、どうしたんだアッシュ!?!」

アッシュ

「な、何でもありません………それより、他人の心配よりも自分の心配をしてはいかがですか?」

ガツーーーーーン!!

ファルコ

「うおっ!?!」

ファルコのスカイクローの翼部分が板状の物体に衝突する。

ネギ

「ファルコさん!大丈夫ですか!?!」

ファルコ

「あ、当たり前だ……あんな攻撃なんて素麵すめんみたいなモンだぜ。」

ネギ

「えっ！？そ、素麵………ですか？」

ネギはファルコの言葉に耳を傾ける。

フォックス

「……ファルコ、それ例えが可笑しくないか？」

ファルコ

「……………」。

ファルコはフォックスのツッコミに言葉を詰まらせる。

アッシュ

「うっ！ま、またか……………」。

アッシュは再び片手で頭を押さえながら苦しむ。

フォックス

（やはりアッシュの様子が変だな……………一体どうしたと言っただ？）

フォックスはメインコントロールブレインの攻撃を避けながらアッシュの様子を伺う。

ネギ

「あの、フォックスさん……僕、気付いた事があるんですが……」

フォックス

「ん？何だ？」

ネギ

「僕があのコンピュータの攻撃を避けようとアッシュさんの方へ移動したら……何故かそこだけ攻撃してこなかったんです。」

フォックス

「何だつて？」

フォックスとはネギの言葉に耳を疑った。

ファルコ

「おい、そりゃ本当か？」

ネギ

「はい、間違いありません。」

フォックス

「どついう事だ……………ファルコ、ネギの言つ通りにしてみよう。」

ファルコ

「おいおい、マジでやるのかよ……………」

そう言いながらも、ファルコを含む三人はアッシュのモンキーアローがいる方へ接近していく。

？

(マ、マズイ！これでは攻撃出来ない……………アッシュよ！奴らから離れるのだ！！)

アッシュ

「りょ、了解……………」

アッシュはバイザー付きのヘルメットから聞こえてきた何物かの声の指示に従ってフォックス達から離れていく。

ファルコ

「おい！俺らから離れていくぞ！？」

フォックス

「追い掛けるんだ！」

三人がアッシュのモンキーアローを追跡しているところ……。

ピシッ……

ネギ

「……………ん？」

ネギは何かの音に気付いて一瞬よそ見をする。

カモ

「兄貴、どうした？」

ネギ

「いや、さっきあのコンピュータの外壁に微かにヒビが入ったよう
な気がして……………」

カモ

「ヒビ？まさか兄貴の攻撃が今になって効いてきたんじゃ……………」

ネギ

「そうかな……………」

ネギがカモの言葉に納得がいわずに首を傾げた瞬間……………」

？

「やめろ……………直ちにアツシユを追い掛けるのは……………やめろ。」

ネギ

「!？」

ネギは何処からか聞こえてきた声に反応して辺りを見回す。

カモ

「兄貴、今度は何だ？」

ネギ

「今、何処からか声が……………」

ネギはそう言い掛けると、ふと何かを思い付く。

ネギ

(一か八かやってみよう……。)

ネギは懐から小さな杖を取り出す。

ネギ

「魔法の射手・光の一矢!!」

ドンッ!!

アッシュ

「うわっ!?!」

ネギが放った一本の光の矢が、アッシュのモンキーアローの翼部分に命中する。

フォックス

「ネ、ネギ!アッシュに攻撃しては駄目だ!!」

ネギ

「大丈夫です、魔力をかなり抑えましたから支障はありません……
…それより、アレを見て下さい。」

ファルコ

「アレ？」

フォックスとファルコはネギが指さす方を見ると……。

ピシピシッ！

メインコントロールブレインに先程より大きなヒビが入っていた。

フォックス

「ヒ、ヒビが……。」

ファルコ

「一体どういう事だ？」

ネギ

「僕もよく分からないんですが……アッシュさんを攻撃したら、
コンピュータが壊れていくんじゃないでしょうか？」

フォックス

「うーん、やってみる価値はありそうだな……ファルコ！アッシュのモンキーアローに当たらないように攻撃するんだ！」

ファルコ

「何だそりゃ？そっちの方が逆に難しいぜ。」

フォックス

「いいから早く！」

ファルコ

「へいへい………そんじゃ、攻撃開始！」

ドドドドドドドドドドッ！！

フォックスとファルコの戦闘機は同時に、アッシュのモンキーアローに命中しない程度に攻撃を繰り返す。

ピシピシピシッ！

すると、メインコントロールブレインの外壁がどんどんヒビ割れていく。

「やめる……………今すぐ攻撃を中止しろ……………」
？

それと同時に、再び怪しい声が聞こえてくる。

ネギ

（またあの声だ……………一体何処から声が……………。）

ネギは怪しい声の出所を探るように周りを見回す。

ファルコ

「フォックス！いつまでこんな事やってればいいんだ？」

フォックス

「もうちよつとだ！」

そう言って、二人は攻撃を続けていると……………。

バリイイイイイン！！

ネギ

「!？」

?

「やめると言っておるだろー！ー！ー！ー！ー！ー！」

突然メインコントロールブレインの外壁が全て割れて、中から巨大な猿の老人のような顔と巨大な手の平が現れてフォックス達に襲い掛かる。

ファルコ

「な、何だ!？」

フォックス

「とにかく避ける!！」

フォックスとファルコは巨大な手から間髪を逃れる。

ネギ

「あ、あのコンピュータの中にこんなに大きな顔が入ってたなんて……………」

カモ

「一体何々だ?この馬鹿デカイ顔は……………」

フォックス

「き、貴様は……………アンドルフ!!」

アンドルフ

「久しぶりだな、スターフォックスよ……………」

アンドルフという名の猿は怪しい笑みを浮かべながらフォックス達を見つめる。

ファルコ

「何でデメエが今頃になって現れやがんだ!」

アンドルフ

「それは私にも分からない……………だが、この機会に今度こそライラック系の全惑星を支配しようとする色々と手を打ったのだ。」

フォックス

「手を打った?では、アパロイドが復活したのも、アッシュが可笑しくなったのも……………」

アパロイド

「いや、アパロイドは私と共に復活していた……………だから、私はコ

イツらを利用しようと『アパロイド・コントロール装置』を開発して、アパロイド共を意のままに操っていたのだ。」

ファルコ

「じゃあ、アッシュは……………」

アンドルフ

「アッシュは私の意思を受け入れてはくれなかった……………困惑した私は『洗脳ヘルメット』でアッシュを操り、アッシュをライラット系の支配者にしようと企てたのだ。」

ネギ

「自分の孫まで巻き込むなんて……………貴方は間違ってますよ!！」

フォックス

「ネギの言う通りだ!アッシュは俺達のようになりたいと一生懸命努力して立派なパイロットを目指していたんだ!！」

ファルコ

「それを、テメエは自分勝手な欲望であいつを巻き込みやがって……………絶対に許せねえ!！」

アンドルフ

「フン、弱者が幾ら喚いても無駄な事だ……………アッシュよ、奴らを

お前の手で始末するのだ。」

アンドルフがそう言うと、アツシュのモンキーアローはゆっくりとフォックス達に接近してくる。

フォックス

「アツシュ！目を覚ますんだ！！」

アンドルフ

「無駄だ、『洗脳ヘルメット』を被ってる限りは私の言いなりだ……さあアツシュ、早くスターフォックス共を倒すんだ。」

アツシュ

「…………お断りします。」

全員

「！？」

全員アツシュの発言に耳を疑った。

アンドルフ

「い、今何と言っ……………なっ！？」

アンドルフはアッシュの目を覆っていたバイザーが割れている事に気付いて驚愕する。

アンドルフ

「ば、馬鹿な！『洗脳ヘルメット』が壊れて、アッシュの洗脳が解けたというのか!？」

ネギ

(そうか、僕があの時攻撃した衝撃で……………。)

ネギはアンドルフの言葉を聞いて、自分の行動を思い出しながら納得する。

アッシュ

「僕は……………僕は貴方の野望に加担するつもりはありません!この惑星ベノムを人が住める環境の良い星にしようと決めたんです!!」

フォックス

「アッシュ……………。」

ファルコ

「フッ、よく言ったぜ……………。」

フォックスとファルコはアッシュの言葉に感激する。

アンドルフ

「お、おのれ……こうなれば、また洗脳して二度逆らえないようにしてくれるわ！」

そう言うと、アンドルフの巨大な手がアッシュを捕まえようと振り下ろしていく。

シュンツ！！

アンドルフ

「ムッ！？」

アンドルフの巨大な手がアッシュのモンキーアローを捕まえようとした瞬間、ネギが瞬動でアンドルフの前に立ち塞がる。

ネギ

「そんな事は絶対にさせません！！」

フォックス

「ネギ！？」

ファルコ

「あの馬鹿……………」

アンドルフ

「小僧、私の邪魔をするつもりか……………ならば、まずは貴様から始末してやる!!」

そう叫ぶように言うと、アンドルフの巨大な二つの手がネギに襲い掛かってくる。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル!! 来たれ雷精 風の精!!」

バアアアアツ!!

ネギが呪文を唱えてる最中に、右手が黄色い光に覆われていく。

アンドルフ

「な、何!?!」

ネギ

「雲を纏いて吹きすさべ南洋の嵐……………雷の暴風!!」

ズドオオオオオツ!!

アンドルフ

「ぐわあああつ!?!」

ネギの強力な雷の魔法がアンドルフの巨大な両手を破壊する。

アッシュ

(す、凄い……………)。

フォックス

(い、一撃でアンドルフの両手を……………)。

ファルコ

(……………あの小さな体の何処にそんな力があるってんだ?)

フォックスとファルコとアッシュはネギの魔法の威力に驚愕していた。

アンドルフ

「うぐぐぐ……」
「こんな小僧に舐められてたまるものかああっ
！！」

ゴオオオオオツ！！

突然アンドルフが息を深く吸い込み始める。

ネギ

「うっ！す、凄まじい吸引力だ……」

カモ

「このままじゃ、全員吸い込まれちゃうぜ！」

ファルコ

（よし、これを待ってたのさ！）

ファルコのスカイクローは自らアンドルフに向かって飛び出してい
く。

アッシュ

「あっ！ファルコさんが……」

フォックス

「大丈夫！これは作戦通りだから……………」

ネギ

「作戦？」

ネギとアッシュはフォックスの言葉に首を傾げる。

ファルコ

「これでも喰らいやがれ！！」

ビビュッ！！

次の瞬間、ファルコはアンドルフの口を目掛けてスマートボムを発射させる。

ボガアアアアアツ！！

アンドルフ

「ぎゃあああぁっ！！」

すると、アンドルフの口の中に入ったスマートボムが大爆発を起す。

カモ

「やった！これで奴もおしまいだな。」

フォックス

「……いや、まだだ。」

ネギ

「え？」

ネギがフォックスの言葉に耳を疑いながらアンドルフの方を見ていると……。

アッシュ

「ア、アレは!？」

そこには、巨大な脳みそと巨大な二つの目玉が浮かんでいた。

フォックス

「アレがアンドルフの正体さ……。」

ネギ

「あんな姿になってもまだ意思があるなんて……………」

カモ

「もう完全に化け物だな……………」

ネギとカモは変わり果てたアンドルフの姿を見て唾然とする。

アンドルフ

「ライラット系を支配するのは、偉大な頭脳を持つこの私……………誰にも邪魔はさせん！」

ビビュッ！！

ネギ

「わあっ！？」

ネギは目にも止まらぬ速さで突っ込んできたアンドルフの目玉に驚いてバランスを崩して、そのまま落下してしまう。

フォックス

「ネギ！！」

ファルコ

「くそっ！今行っても間に合わねえ……………」

カモ

「兄貴〜！何とかしてくれよ〜！〜！」

ネギ

「そ、そんな事言ったって……………」

ネギが成す術が無く、そのまま落下していくと……………」

ドサツ！！

ネギ

「……………あ、あれ？」

気が付くと、ネギはウルフェンの翼の上に着地していた。

ファルコ

「お、おい……………アレってまさか……………」

フォックス

「ああ、ウルフェンに間違いない。」

ネギ

「あ、ありがとうございます！お蔭で助かりました……………」。

ネギは操縦席に居るウルフに向かって深くお辞儀する。

ウルフ

「勘違いするな、お前が勝手に俺のウルフェンの上に落ちて来たんだろつが。」

ネギ

「えっ？そ、そうなんですか？」

ウルフ

「そんな事より、いつまで乗っかってるつもりだ？」

ネギ

「あ！す、すいません……………すぐに降ります。」

そう言うと、杖がネギの元へ近付いてきて、ウルフェンから降りて杖に跨がる。

ウルフ

「フォックス、あの目玉は俺が破壊する……………お前は本体を破壊する。」

フォックス

「分かった……………ファルコとアッシュはもう片方の目玉を破壊してくれ！」

アッシュ

「分かりました！」

ファルコ

「仕方ねえ、本体はお前に譲ってやる。」

フォックス

「ネギ、君は俺と一緒に来てくれ！」

ネギ

「は、はい！」

ネギが返事をする、ネギとフォックスのアーウィンはアンドルフ・ブレインに向かって飛び立っていく。

アンドルフ

「来たな、命知らずの愚か者共め……………私に近付く者は死あるのみだ！」

そう言うと、アンドルフ・ブレインの下部から触手のような物体が伸びてくる。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………風の精霊11人 縛鎖となりて敵を捕まえる！魔法の射手・戒めの風矢！！」

ドオオオオオオツ！！

ネギは拘束魔法でアンドルフの動きを全て封じる。

アンドルフ

「な、何だこれは！？全然動けん……………。」

フォックス

「これで終わりだ！アンドルフ！！」

そう言うと、フォックスはアンドルフに向けてスマートボムを発射する。

ボガアアアアアツ！！

アンドルフ

「ぐわあああああああああああつ！！」

スマートボムが爆発し、アンドルフは爆発に巻き込まれてしまう。

カモ

「よっしゃ！今度こそやつつけたぞ！！」

フォックス

「ああ、これにて任務完了だな……………」

？

「それはどうかな？」

ネギ&フォックス

「！？」

ネギとフォックスは声に反応して振り向くと、アーウィンの翼部分に黒コートの人物が立っていた。

ネギ

「あ、貴方は……………」

フォックス

「い、いつの間に……………お前は何物だ!？」

?

「私の事より、一刻も早く此処を出た方がいいのではないか？」

ネギ

「どついつ事ですか？」

?

「アパロイドがどんどん増殖して、外にいる君達の仲間が苦戦しているハズだ。」

フォックス

「何だつて!？」

フォックスとネギは黒コートの人物の言葉に耳を疑った。

「早く行かないと、全員アパロイドの餌食になってしまうぞ……………」。

「スッ……………」

そう言い残すと、黒コートの人物はその場から消えてしまう。

アッシュ

「フォックスさ〜ん！」

その時、アッシュを含む三機の戦闘機がネギ達に接近してくる。

ファルコ

「こっちは片付けたぜ……………」。

フォックス

「そうか……………みんな！急いで此処が出て、残りのアパロイドを始末しに行くぞー！！」

アッシュ

「わ、分かりました。」

ウルフ

「ケツ、いっちょ前に命令しやがって……………」

ウルフがそう吐き捨てる、全員その場から飛び去っていく。

数時間後、スリッピー達と合流したネギ達はアパロイドを全て始末したのであった……………。

スリッピー

「……………ふう〜っ、何とか全部やつつけたね。」

クリスタル

「途中からフォックス達に来てくれて助かったわ。」

アマンダ

「本当ね、私達だけだったらどうなったか……………」

フォックス

「とにかく、みんな無事で何よりだ。」

そう言いながら、フォックスが胸を撫で下ろした時……………。

アッシュ

「み、皆さん……………僕、皆さんに謝らなければなりません……………」

アッシュが下に俯いたまま呟くように言う。

ファルコ

「何言ってるんだよ、お前はただアンドルフに操られてただけだろ？」

アッシュ

「で、でも……………」

フォックス

「アッシュ、いつまでも過ぎた事を悔やんでいてもしょうがないよ……………大事なのは、これからどうやって償っていくのが問題なんだよ。」

アッシュ

「フォックスさん……………」

アッシュはフォックスの言葉を聞いて感極まる。

アッシュ

「……………僕、これからも惑星ベノムを平和で住み良い星にする為に頑張って開拓していきます！」

フォックス

「そう、その意気だアッシュ！」

そう言うと、フォックスはアッシュに向かってガッツポーズをする。

カモ

「ところで兄貴、何か忘れちゃいないかい？」

ネギ

「え？忘れてるって……………あっ！そうだ！！」

ネギは慌ててウルフェンに近付く。

ネギ

「ウルフさん！これを受け取って下さいー！」

ネギはウルフにバッチを渡す。

ウルフ

「……………おい、一体どういっつもりだ？」

ネギ

「え？何が……………」

ウルフ

「スターウルフの俺にスターフォックスの紋章のバッチを渡すってのはどういっつもりだって聞いてんだよ！」

ネギ

「ひいっ！？そ、そう言われましても……………」

ネギは怯えながらも、ウルフにこれまでの経緯を簡単に説明した。

ウルフ

「……………じゃあ、お前らはこのバッチを俺らに渡す為に、他の奴ら
の世界にも行ったり来たりしてるってのか？」

ネギ

「はい、そういふ事になります。」

ウルフ

「……………」。

ウルフはネギの目をジューッと見つめる。

ネギ

「な、何でしょうか?」

ウルフ

「……………フン、お前の目は奴と同じ目をしてやがるぜ。」

ネギ

「え? 奴って誰の事ですか?」

ウルフ

「さあな、自分で考えな……………レオン、パンサー、そろそろ行くぞ
!」

レオン

「坊や、次に会う時は私が遊んであげよう。」

パンサー

「あの翼を生やしたお嬢ちゃんに宜しくな。」

そう言い残すと、スターウルフは何処かへ飛び去っていく。

アッシュ

「それでは、僕も惑星ベノムへ戻りますので……………」。

フォックス

「ああ、またいつか会おうな！」

そう言うと、アッシュのモンキーアローは惑星ベノムに向かって飛び去っていく。

ファルコ

「さて、俺達もグレートフォックスへ帰るか！」

フォックス

「そうだな……………よし！全機帰還せよ！！！」

クリスタル&アマンダ

「了解！」

スリッピ

「はあ〜っ、オイラもうクタクタだよ……………」

フォックスの掛け声で、スターフォックスの戦闘機はグレートフォックスに向けて発進していく。

刹那

「ネギ先生、私達も参りましょう。」

ネギ

「そうですね、明日菜さん達も心配してますし……………」

そう言って、ネギと刹那もフォックス達と共にグレートフォックスへ戻っていくのであった……………。

第三十七話、人気の電気ネズミ（前書き）

フォックスの世界から帰って来たネギー一行が次へ行く世界とは？

第三十七話、人気の電気ネズミ

大乱闘の館・中庭

フォックスの世界から帰ってきて翌日、ネギー行はいつものように中庭に集合していた。

ネギー

「皆さん、おはようございます!」

明日菜

「ふわぁ、おはよう……。」

木乃香

「ネギー君、おはよう……。」

のどか

「お、おはようございます……。ふぁっつ。」

刹那

「おはようございます。」

刹那以外の三人は、まだ眠たそうにネギに挨拶を返す。

マスターハンド

「ん？この三人は寝不足かな？」

明日菜

「いや、そういう訳じゃないんだけど……………」

木乃香

「昨日は中々寝付けなくてなあ……………」

のどか

「私も少し遅くまで本を読んできて……………」

ネギ

「もう、あんまり夜更かししちゃ駄目ですよ。」

明日菜&木乃香&のどか

「は〜い……………」

ネギの言葉に明日菜達は力無く返事をする。

マスターハンド

「それはともかく、まずはボールのような形をしたバッチを九個出してくれ。」

ネギ

「はい、ボールの形したバッチですね……………」

ネギは懐から丸いボールの形した九個のバッチを取り出す。

マスターハンド

「今回は見た通り数が多いのだが、このバッチをピカチュウ、プリン、ピチュー、ルカリオ、ミュウツー、ポケモントレーナーとそのパートナーであるポケモンのゼニガメ、フシギソウ、リザードンに渡してほしい。」

明日菜

「えっ！？ピカチュウって、あのポケモンのピカチュウ？」

マスターハンド

「ああ、そうだが……………」

のどか

「じゃあ、私達が次に行く世界は……………ポケモンがいる世界って事ですか？」

マスターハンド

「そういう事になるな……………」。

木乃香

「ほなら、はよう行くで〜!」

明日菜

「あ!木乃香ったら、一人で先に行かないでよ〜!!」

のどか

「ま、待って下さい……………」。

明日菜、木乃香、のどかの三人は一足先にワイプ土管へと入ってしまふ。

カモ

「……………兄貴、姐さん達どうしたんだ?」

ネギ

「さあ……………何だか、急にやる気が出て来たって感じだね。」

刹那

「……………」と、とにかく私達も行きましよう。」

ネギ

「そうですね……………それでは、行って来ます！」

そう言うと、ネギと刹那もワープ土管へと入っていく。

マスターハンド

（やはりポケモンの人気は凄まじいな……………。）

くカントー地方・マサラタウンく

ネギー行は数軒の民家や大きな研究所らしき建物がある小さな町にやって来た。

ネギ

「…………見たところ、小さな町のようですね。」

明日菜

「何か、今までジャングルや宇宙とかだったから、こういう場所に
来ると逆に新鮮な感じがするわ。」

カモ

「そりゃ、ごもつともだな…………。」

カモは明日菜の言葉に賛同する。

刹那

「それより、此処はどういう町なんでしょうっか？」

のどか

「あっ！これに何か書いてます…………。」

そう言いつつ、のどかは一つの看板に指をさす。

のどか

「えっ」と、何々…………『マサラタウンへようこそ！』って書いてあ
るようです。「」

明日菜

「マサラタウン？どっかで聞いたような……。」

明日菜は腕を組みながら首を傾げる。

木乃香

「ウチ知つとる！オーキド博士が住んどる町や〜。」

ネギ

「オ、オーキド博士って誰ですか？」

木乃香

「ネギ君ったら知らへんの？ポケモンに詳しい有名な博士やん。」

明日菜

「……………木乃香、アンタ結構詳しいわね。」

刹那

「実は、お嬢様は最近ポケモンにハマってます……………。」

のどか

「それで色々詳しいんですか……………。」

ネギ、明日菜、のどかは刹那の言葉に苦笑いしながら納得する。

ネギ

「ま、まずは手掛かりを探しましょうか……。」

明日菜

「そうね、ピカチュウとか何処に居るか分かんないしね……。」

木乃香

「ほなら、オーキド博士に聞いてみたら？」

明日菜

「え？何で？」

木乃香

「だって、ポケモンの事やったら何でも知ってるから何か分かるかもしれないへんやろ？」

ネギ

（うん……確かに、木乃香さんの言う事も一理あるかもしれないな。）

ネギは木乃香の言葉を聞いて深く考え込む。

ネギ

「そうですね、そのオーキド博士に色々聞いてみましょう。」

刹那

「でも、その人はこの町の何処に居るんでしょうか？」

のどか

「あの、こっちの看板に『右側はオーキド研究所』って書いてますけど……。」

そう言っと、のどかは先程とは別の看板に指さす。

ネギ

「では、まずはそのオーキド研究所ってさ所に行ってみましょう。」

こうして、ネギ一行は看板の矢印通りに進んでいくのであった……。

（オーキド研究所前）

ネギ一行は看板に『オーキド研究所』と書かれた建物の前に立っていた。

明日菜

「此処がオーキド研究所のようね。」

ネギ

「早速入ってみましょうか……………」

コンコン！

ネギはオーキド研究所の玄関の扉を叩く。

ネギ

「ごめんください！誰かいませんか？」

ガチャッ

？

「はいはい、どちら様ですか？」

扉が開かれると、白衣を着た白髪混じりの老人が出て来る。

ネギ

「もしかして、貴方がオーキド博士ですか？」

？

「いかにも、私がオーキド・ユキナリじゃが……………」

木乃香

（うわゝ、本物のオーキド博士やゝ。）

木乃香は目を輝かせながらオーキドを見つめる。

ネギ

「実は、オーキド博士にいくつか聞きたい事があるのですが……………」

「

オーキド

「うむ……………まあ、立ち話も何だから中へ入りなさい。」

刹那

「それでは、お邪魔します……………」。

ネギー一行はオーキドに招かれて、研究所の中へと入っていく。

〈オーキド研究所内部〉

オーキド

「成程、君達はポケモンの生息について調べる為に私の所へやって来たんじゃないかな？」

ネギー

「は、はい……………ポケモンに詳しいオーキド博士なら何か知っているんじゃないかと思って、この町へやって来たんです。」

カモ

(流石は兄貴、上手いこと言いくるめたな……………。)

カモがネギの肩の上で感心していると……………。

オーキド

「ん？君の肩に乗っているポケモンは……………」

全員

「えっ!？」

ネギ一行はカモに注目したオーキドにギョツと目を丸くする。

オーキド

「見たところ、オオタチやマツグマに似ておるな……………」

ネギ

「いや、あの、これはですね……………」

明日菜

「お、おもちゃです！ただのおもちゃですよ！」

そう言いながら、明日菜は摘むようにカモの尻尾を掴む。

カモ

(あ、姐さん……………俺っちをあまり振り回さないでくれよ……………。)

明日菜に時計の振り子のように揺られながら掴まれてるカモは心の中で文句を言う。

オーキド

「そうか……………ところで、何の話をしてたんだったかな？」

のどか

「ピカチュウ、プリン、ピチュー、ルカリオ、ミュウツীর居場所について知りたいんです。」

オーキド

「おお、そうじゃったな……………まず、ピカチュウは『トキワの森』に生息しておるハズじゃ。」

明日菜

「『トキワの森』？」

オーキド

「この『マサラタウン』から北へ真つすぐ進めば『トキワシティ』という町があつて、その町を抜けたところにある森が『トキワの森』じゃ……………確か、ピチューもその森に生息していると最近噂で聞いたな。」

ネギ

「成程、『トキワの森』ですね……………」

ネギは懐からメモ帳とペンを取り出して、そのままメモをする。

オーキド

「プリンは『トキワシティ』より更に進んだ先にある『ニビシティ』という町を抜けた所にある『お月見山』という洞窟の近くで発見したと聞いたな。」

ネギ

「うむうむ……………」

ネギはオーキドの言った事を聞きながら淡々とメモをする。

オーキド

「ルカリオとミュウツーについては……………残念じゃが、未だに何処に生息しておるのか不明なんじゃ。」

ネギ

「そうですか……………それから、最後に一つだけ質問いいですか？」

オーキド

「何かな？」

ネギ

「えつ」と……………木乃香さん、ポケモントレーナーさんのポケモンの名前は何でしたっけ？」

ネギは困惑した表情で木乃香の方を向いて聞き出す。

木乃香

「あんな、確かゼニガメとフシギソウとリザードンやったような……………」

ネギ

「そう！それです……………その三匹のポケモンを手持ちになっているポケモントレーナーをご存知ありませんか？」

オーキド

「ゼニガメとフシギソウとリザードンを手持ちにしてるポケモントレーナーか……もしか、彼の事かもしれんのお。」

刹那

「何か、心当たりでもあるんですか？」

オーキド

「うむ、数年前に私の研究所の近くの家に住んでいた男の子が私の孫と共にポケモンマスターを目指す為に旅に出たんじゃが……確か、ポケモンリーグを制覇した時にその三匹のポケモンも含まれていたな。」

ネギ

「成程……それで、その人は今何処にいるか分かりますか？」

オーキド

「さあ……私もポケモンリーグで一度会って以来、彼とはそれつきり会っておらんのお……。」

ネギ

「そうですか……色々教えて頂いて、ありがとうございます！」

ネギはオーキドに向かって深くお辞儀する。

オーキド

「いやいや、こちらこそお役に立てて光荣じゃよ。」

明日菜

「ネギ、まずは『トキワの森』へ行ってみましょ。」

ネギ

「そうですね、距離的にもそこが一番近いですし……。」

木乃香

「ほなら、早速レッツゴーやー！」

オーキド

「ちよつと待ちなさい……。」トキワの森『へ行くなら、これを持ってくといい。』

オーキドはネギにスプレー缶のような物を渡す。

ネギ

「これは何ですか？」

オーキド

「これは『虫よけスプレー』といって、これを吹き掛けると虫ポケモンが寄ってこなくなるんじゃない。」

ネギ

「何から何までありがとぅございます……皆さん、『トキワの森』へ向かいますよー!」

ネギの掛け声と共に、ネギ一行はオーキド研究所を後にする。

オーキド

(あの子どもポケモンが好きなんじゃない……。)

オーキドは優しく微笑みながらネギ達を見送る。

トキワの森

ネギ一行はトキワの森へとやって来た。

明日菜

「此処が『トキワの森』ね……………」

ネギ

「それでは、早束手分けして捜したいと思うのですが……………」

刹那

「……………ネギ先生、どうかしましたか？」

ネギ

「ピカチュウって、一体どういう姿をしてるんですか？」

ネギ&カモ以外全員

「ええっ!？」

明日菜達はネギの言葉に耳を疑った。

明日菜

「……………アンタ、ピカチュウを見た事ないの？」

ネギ

「は、はい……………」

ネギはかなりバツが悪そうに答える。

明日菜

（まあ、マリオさんやカービィを知らなかったくらいだからね……………）

木乃香

「えつとな、簡単に言えば……………黄色いネズミやな。」

ネギ

「き、黄色いネズミ……………ですか？」

ネギは木乃香の説明を聞いて首を傾げる。

刹那

「お、お嬢様……………その説明では、ネギ先生が勘違いするのでは……………」

明日菜

「でも、間違っちゃいないんだけどね……………」

明日菜と刹那は木乃香の説明に苦笑いする。

ネギ

「では、姿が判明したところで……改めてピカチュウさんを探しましょう!」

そう言うと、それぞれ散らばって探索していく。

のどか

(あう、私も早くピカチュウに会いたいなあ……でも、先に虫ポケモンが出て来たらどうしよう……正直、虫は苦手だし……) だけど、オーキド博士がくれた『虫よけスプレー』を吹き掛けたから大丈夫だよね?)

のどかはそう思いながら、少しオドオドしながら探していると……

ガサガサッ!!

のどか

「!?!」

のどかは突然動き出した草むらに驚いて、そのまま立ち止まる。

のどか

(な、何？何かいるのかな……………。)

のどかが恐る恐る草むらに近付いて、覗き込んだ瞬間……………。

バツ!!

のどか

「きゃあああつ!?!」

突然草むらから何かが飛び出してきて、のどかは驚きのあまりに悲鳴に似た声を上げながら、勢い良く腰を降ろしてしまう。

ネギ

「のどかさん!?!どうしました……………た?」

?

「ピカチュ?」

?

「ピチユピチユ？」

ネギがのどかの悲鳴に反応して駆け出してみると、のどかの前に首を傾げながら立っていた黄色い肌で頬に大きな赤い斑点があり、先端が黒くて長い耳に稲妻のようなギザギザの尻尾を持った生物と、その傍らにいる小柄な体型で頬にピンク色の小さな斑点があり、三角形のように先端が尖った耳が特徴の生物と目が合ってしまう。

カモ

「兄貴、まさかアレが……………」

ネギ

「さあ、見たところネズミには見えないし……………」

ネギとカモが首を傾げながら二匹のポケモンを見つめていると……………。

明日菜

「ネギ！今本屋ちゃんの悲鳴が聞こえて……………って、あつ!？」

急いで駆け付けて来た明日菜がネギと同じように二匹のポケモンと目が合ってしまう。

ネギ

「明日菜さん、もしかしてあの生物が……………」。

明日菜

「そつよ！本物のピカチュウとピチューよ！！」

そう言うと、明日菜はピカチュウとピチューの方へ近寄っていく。

刹那

「ネギ先生、遅くなりました！」

刹那と木乃香が少し遅れてから、ネギの方へ駆け付けて来た。

ネギ

「あ！刹那さんに木乃香さん……………」。

木乃香

「あれ？明日菜、そんな所で何してるん？」

明日菜

「見てよ二人共！ピカチュウとピチューだよ！！」

明日菜は少し興奮気味に木乃香と刹那にピカチュウとピチューを見る。

木乃香

「あ！ホンマやー！ウチも近くで見たいわー！！」

そう言うと、木乃香はピカチュウ達の方へ駆け出していく。

木乃香

「あーん、メツチャ可愛ええわー。」

明日菜

「本当にねー。」

ピカチュウ

「ピ、ピカピ……………」。

ピカチュウは明日菜と木乃香にマジマジと見られて、少し困惑するが……………。

ピチュー

「ピッピチュー」

ピチューはピカチュウとは逆に、可愛い仕草をしながら明日菜に近付いていく。

明日菜

「この子、スツゴク人懐っこいわ。」

そう言いながら、明日菜はピチューの小さな頭を優しく撫でる。

木乃香

「明日菜ったらエエな〜……………ウチもピカチュウちゃんの頭を撫でたるわ。」

そう言うと、木乃香も負けじとピカチュウの頭を優しく撫でる。

ピカチュウ

「ピカ……………ピカピカチュ〜。」

ピカチュウは一瞬抵抗したが、木乃香の柔らかくて温かい手の感触に思わず気持ち良さそうに首を曲げる。

木乃香

「うわ〜、このピカチュウちゃんもメツチャ人懐っこいわ〜。」

のどか

「あ、あの……………わ、私も撫でていいですか？」

明日菜

「本屋ちゃんったら、何遠慮してんのよ……………ほら、本屋ちゃんも撫でてみたら？」

のどか

「は、はい!」

のどかは嬉しそうに明日菜達の方へと近付く。

ネギ

「……………す、凄い人気だね。」

カモ

「何でい、ちょっとばかり可愛いからってよお……………。」

啞然とした表情で明日菜達の光景を眺めるネギの肩に、カモは悪態を付きながら煙草を吹かす。

刹那

「無理もありませんよ……………何せ、ピカチュウはポケモンの中で一番人気があるんですから……………」。

刹那は横目で明日菜達の方をチラ見しながらネギに説明する。

ネギ

「そうなんですか……………刹那さんは明日菜さん達と一緒に頭を撫でたりしないんですか？」

刹那

「えっ！？わ、私は別に……………」。

刹那はネギの言葉に激しく動揺する。

木乃香

「せつちゃん！せつちゃんもピカチュウちゃん達の頭撫でてみいひん？」

刹那

「は、はい！今参ります！！」

刹那は急いで木乃香達の方へ駆け出していく。

カモ

「ったく、刹那姉さんも素直じゃねなあ……………」

ネギ

「ア、アハハ……………」

苦笑いを浮かべるネギの肩の上で、カモは更に悪態を付く。

明日菜

「ネギー！アンタもこっち来なさいよー！」

ネギ

「は、はい！今行きまーすー！」

ネギも慌てて明日菜達の方へ駆け出していく。

カモ

（やれやれ、結局兄貴も撫で撫でしたかったのか……………。）

カモはネギの行動を見て呆れ返るのであった……………。

第三十七話、人気の電気ネズミ（後書き）

ピカチュウとピチューに夢中になっていたネギー行ですが、果たして残りのポケモンと対面出来るのか？

第三十八話〈風船ポケモンと波導の勇者〉（前書き）

ピカチュウとピチューに出会ったネギー行ですが……。

今回の話にはアニメでお馴染みのキャラが少しだけ登場します。

第三十八話 風船ポケモンと波導の勇者

トキワの森

ネギ一行が飽きるまでにピカチュウとピチユウを撫で回した後、ネギは二匹にこれまでの経緯を説明していた。

ネギ

「……………という訳なのですか、ご理解して頂けましたか？」

ピカチュウ

「ピカピカチュウ！」

ピチユウ

「ピチユウ？」

ピカチュウはネギの説明を理解したように頷くが、ピチユウは訳が解らずに首を傾げる。

カモ

「……………何か、ちっこい方はまだ理解出来ないみたいだぜ。」

明日菜

「しょうがないんじゃない？ピチューはまだ子供なんだから……………」

ネギ

「それでは、バッチを受け取って下さい。」

そう言うと、ネギはピカチュウとピチューにモンスターボール型のバッチを渡す。

ピカチュウ

「ピカピカ〜？」

ピカチュウはネギに渡されたバッチを上に掲げて不思議そうに覗き込む。

木乃香

「コレはな、胸元に付けるモンやで。」

ピチュー

「ピチュピ……………」

ピチューは木乃香に言われた通りに、バッチを胸元に付けると……………

…。

ピチュー

「ピッチュ」

ピチューは嬉しそうに辺りを走り回る。

刹那

「フフ、どうやら気に入ったようですね。」

のどか

「あんなに嬉しそうに走り回って……………」

ネギー一行は陽気に走り回るピチューを微笑みながら眺める。

ピカチュウ

「ピカピカ……………」

そんな中、ピカチュウは胸元にバッチを付けるのに夢中だった。

カモ

「兄貴、そろそろ次の所へ行こうぜ。」

ネギ

「そ、そうだね…………えつくと、確か『お月見山』だっけ？」

ピカチュウ

「ピカッ!？」

どうにかバッチを付けたピカチュウは、ネギの言葉に反応するかのようには両耳をピクンと立たせる。

明日菜

「あれ？何かピカチュウが反応したみたいだけど……………」

木乃香

「ひょっとして、『お月見山』を知ってるのかな？」

ピカチュウ

「ピカピカッ！」

ピカチュウは木乃香の言葉に答えるかのように頷く。

刹那

「どつやら、知っているようですね。」

のどか

「それでしたら、ピカチュウちゃんに『お月見山』を案内してもらいます?」

ネギ

「そうですね…………ピカチュウさん、もし宜しければ『お月見山』まで案内して頂けますか?」

ピカチュウ

「ピツカア!」

ピカチュウはネギの提案に迷う事無く頷く。

カモ

「……………あっさり承諾したな。」

明日菜

「いいじゃない、こっちにしてみたら好都合だし……………」

ピカチュウ

「ピカッ……………」

ダッ!!

ピカチュウは勢い良く駆け出していく。

木乃香

「あっ!ピカちゃんが……………」

ネギ

「皆さん、ピカチュウさんを見失わないように後を追い掛けますよ
う!」

刹那

「はい!」

ネギ一行は急いでピカチュウの後を追い掛ける。

くニビシテイ〜

ネギー一行はピカチュウの案内で、マサラタウンよりも少し大きな町へとやって来た。

木乃香

「ハアハア……ピカちゃん、メツチャ速いわ〜。」

のどか

「わ、私の足じゃ絶対に追い掛けないです……。」

ネギー一行は少し息を切らしながらピカチュウを追い掛けていた。

ガッ!!

ピカチュウ

「ピカッ!?!」

バターーーーッ!!

すると、ピカチュウは石に躓いてしまい、勢い良く転んでしまつ。

刹那

「あっ!？」

明日菜

「ピカチュウが転んじゃった!」

カモ

「あんなに急いで突っ走るからだよ……………」

ネギ

「カモ君、それはちょっと言い過ぎだよ……………」

カモの冷たい言葉にネギは苦笑いしながらツッコミを入れる。

のどか

「それより、足を怪我してるかもしれない。」

木乃香

「そやな、早く手当てせんと……………」

ネギ一行が慌ててピカチュウに近付こうとした時……………。

？

「どうした？何処か怪我でもしたのか？」

ネギー行よりも、アーミーベストを着用したギザギザの短い茶髪で細目の男の子が早くピカチュウに駆け寄る。

木乃香

（あれ？あの人は……………。）

木乃香は男の子の顔を見た途端、首を傾げながら考え込む。

ネギー

「あ、あの……………。」

？

「ん？君がこのピカチュウの飼い主か？」

ネギー

「えっ！？いや、まあ……………」

ネギーは男の子の問い掛けに曖昧に答える。

？

「大丈夫、自分はポケモンブリーダーでもある……………さあ、ちょっと見せてもらえん。」

ピカチュウ

「ピ、ピカ……………」

男の子は一通りにピカチュウの手足を見つめる。

？

「おや？右足が少し擦り剥いてるな……………よし、『傷薬』を塗ってやろう。」

そう言うと、男の子は懐から『傷薬』と書かれた道具を取り出して、ピカチュウの右足に塗り付ける。

？

「これでよしと……………あまり走り回るんじゃないぞ。」

ピカチュウ

「ピカ、ピカピ……………」

男の子は笑顔でピカチュウの頭を撫でる。

明日菜

「へえ〜……………アンタ、結構手慣れてるのね。」

？

「ああ、これでもブリーダーでありジムリーダーだからな。」

刹那

「ジムリーダー？」

木乃香

「あっ！思い出したわ！！」

突然大声を発した木乃香に全員驚く。

ネギ

「こ、木乃香さん？急にどうしたんですか？」

木乃香

「この人、アニメでサトシと一緒に旅をしとるタケシや！やっと思い出したわ！！」

タケシ

「い、いかにも自分はタケシだが……………」

タケシと呼ばれた男の子は興奮気味の木乃香に苦笑いする。

木乃香

「わく、アニメと瓜二つや！握手してもええですか？」

タケシ

「じ、自分で良ければ……………」

そう言うと、木乃香はタケシと握手を交わす。

ネギ

「……………木乃香さん、この世界に来てから興奮しっぱなしですね。」

刹那

「ええ、何せお嬢様はポケモンが大好きなもので……………」

明日菜

「そう言えば、アニメも毎週欠かさず見てたわね……………」

明日菜と刹那は木乃香のポケモン好きを改めて思い出しながら苦笑
いする。

明日菜

「ところで、さっきから気になってただけど……………ピチューは何
処に居るの？」

のどか

「ピチューちゃんなら、さっきから私の頭の上に居ますけど……………」
「

ピチュー

「ピッチュ」

明日菜はのどかの頭上を見てみると、ピチューがのどかの頭の上に
乗っかっていた。

明日菜

「ほ、本当だ……………」

ネギ

「どつやら、のどかさんの頭の上が気に入ったんですね。」

のどか

「そ、それはいいんですけど……す、少し頭が重くて……。」

のどかはピチューを落とさないように、頭を少しだけ傾けながら答える。

木乃香

「……………あゝあ、行ってもうた。」

ネギ

「あれ？木乃香さん、さっきの人はどうしたんですか？」

木乃香

「それがな、通り掛かった女の人を見た途端、その人の後を追い掛けて行ってもうたんよ。」

明日菜

「そ、そういうところもアニメと同じね……。」

明日菜は木乃香の言葉を聞いて苦笑いしながら納得する。

カモ

「兄貴、そろそろ先へ進もうぜ。」

ネギ

「あ！そうだったね……………ピカチュウさん、引き続き案内をお願いします。」

明日菜

「でも、あまり走り過ぎるとさっきみたいに転ぶから気をつけてね。」

ピカチュウ

「ピカピッカ！」

明日菜の言葉を理解して頷いたピカチュウは、先程よりも小走りで駆け出していく。

刹那

「明日菜さんの言う事をしっかりと理解したようですね。」

木乃香

「ホンマにええ子やな……………」。

カモ

「ケツ、ちょっとばかり賢いからって何でい……………」。

そう呟きながら、カモはネギの肩の上で再び悪態をつく。

ネギ

「カモ君、さっきから何ふて腐れてるの？」

カモ

「いや何、ちょっとしたジエラシーってやつさ……………」。

ネギ

「ジエラシー？」

ネギはカモの言葉に首を傾げる。

明日菜

「ネギー、早くしないと置いてくわよー!」

ネギ

「あっ!?!いつの間に……………ちょっと待ってアオのいよっ!」

ネギは先へ行ってしまった明日菜達に向かって急いで駆け出していく。

くお月見山付近く

ネギ一行はピカチュウの案内によって、『お月見山』の入口付近へ辿り着いた。

ネギ

「この洞窟が『お月見山』のようですね……。」

木乃香

「ほなら、この辺りにプリンちゃんがおるんやな。」

明日菜

「だったら、また手分けして捜しま……。」

ピカチュウ
「ピッカーツー!!」

ネギ一行がプリンを捜し出そうとした途端、突然ピカチュウが誰かに呼び掛けるように大声を上げる。

のどか

「きゅ、急にどうしたんでしょうか？」

刹那

「まるで、誰かを呼んでいるような……………」

ガサガサッ!

?

「……………プリ？」

すると、近くの草むらからピンク色の丸い体形で目が大きなポケモンが出て来る。

ネギ

「あー草むらからポケモンが……………」

木乃香

「あの子がプリンちゃんや〜!」

ピカチュウ

「ピカピカ〜!」

プリン

「プ!~?プリプリ〜!」

プリンは嬉しそうにピカチュウの元へ駆け出していく、お互いに両手を握り合う。

明日菜

「何だか、久しぶりに友達と再会したって感じね。」

ネギ

「ええ、あんなに嬉しそうに笑い合ってます。」

プリン

「プリ?プリ、ププリプ?」

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ……………」。

プリンがネギ達の方を向いて不思議そうに顔を傾げると、ピカチュウが何かを説明するかにようにプリンに語り始める。

のどか

「……………何か、ピカチュウちゃんが語り出しましたね。」

刹那

「ひょっとして、私達の事を説明してくれてるのでしょうか？」

ネギ

「もし、そうでしたら僕としては非常に助かります。」

木乃香

「そやな、いつもネギ君が説明してるもんなあ〜。」

プリン

「……………プリプリン！」

プリンがピカチュウの説明を聞き終わると、相槌をうちながら納得する。

明日菜

「ネギ、あの子理解したみたいよ。」

ネギ

「そのようですね……………では、プリンさんにもこのバッチをお渡ししますね。」

そう言うと、ネギはプリンにバッチを渡す。

プリン

「プリ、プリプ……………」

ネギからバッチを受け取ったプリンは、バッチを髪飾りのように左耳の付け根辺りに付ける。

プリン

「プリプリ〜〜」

プリンは風船みたいに地面に弾みながら嬉しそうに飛び跳ねる。

木乃香

「プリンちゃん、バッチを気に入ってくれたみたいやな。」

刹那

「そのようですね。」

プリン

「……………プリン！」

プリンは飛び跳ねるのをやめると、何処からか小さなマイクのような物を取り出す。

ネギ

「ん？何か取り出しましたね……………」

明日菜

「それって……………マイク？」

木乃香

「あ、思い出した！プリンちゃんは歌が上手なんや。」

のどか

「歌が上手……………ひょっとして、私達の為に歌を歌ってくれるんでしょうか？」

プリン

「プリッ！」

プリンは軽く頷く。

明日菜

「それじゃ、一曲歌ってよ。」

ピカチュウ

「ピカツ!？」

ピカチュウは明日菜の言葉に耳を疑う。

木乃香

「どないしたん?ピカちゃん。」

ピカチュウ

「ピカ!ピカピカチュウ!!」

ピカチュウはネギ達に向けて、両手を左右に激しく振りながら顔を横に振る。

ネギ

「……………何か言いたそうですね。」

刹那

「何でしょうか？」

ネギ達はピカチュウが何を訴えてるのか理解出来ず、ただ首を傾げる。

プリン

「プ〜プルル〜プ〜プリ〜プ〜プリン〜〜プ〜プルル
〜プ〜〜プリ〜プ〜……………」。

木乃香

「あゝ、何て綺麗な歌声なんやろか。」

刹那

「はい、とても心に響きますね……………」。

ピチュー

「ピッチュ〜」

ピチューはのどかの頭の上で、無邪気に手拍子をする。

ネギ

「でも……………何だか急に……………眠気が……………」

のどか

「わ、私も……………」

明日菜

「だ、駄目……………もう……………限……………界……………」

ピカチュウ

「ピ……………ピカ……………」

プリンの歌に聴き入っていたネギ一行とピカチュウ&ピチューは、その場から崩れ落ちてしまい眠ってしまった。

〜数分後〜

プリン

「……………プリン？」

歌い終えたプリンは、ネギー行とピカチュウ達が眠っている事に気付く。

プリン

「プギューーイッ！！」

プクーーーーッ！！

怒り出したプリンは、頬を風船のように膨らませる。

キュポン！

すると、プリンはマイクの先を外して、油性マジックペンをネギ達に突き付けなが近付いていき……………。

キュッキュッキュッ

プリンは気持ち良さをそつに眠っているネギの顔に落書きをしていく。

↳更に数分後↳

ネギ

「う、うん……あれ？僕、いつの間に眠ってたんだろ……。」

明日菜

「ふわぁ〜、よく寝た〜……。」

目を覚ましたネギは眠い目を擦りながら欠伸あくびをする明日菜の顔を見
ると……。

ネギ

「うわっ!?!あ、明日菜さん!その顔はどうしたんですか!?!」

ネギは満面無く落書きをされてる明日菜の顔に驚愕する。

明日菜

「何って……………なっ！？そう言うアンタこそ、その顔は何々なのよ
！！」

明日菜も同じく顔に落書きされてるネギの顔を見て驚愕する。

木乃香

「ムニヤムニヤ……………一体何の騒ぎなん？」

刹那

「な、何かあったんですか？」

のどか

「というか、私いつ眠ったんだっけ……………」

ネギと明日菜の声に残りの三人が一斉に起き上がると……………。

刹那

「お、お嬢様！？その顔は……………」

木乃香

「えっ？……わっ！？そう言っせっちゃんこそ、どなたんや！？」

木乃香と刹那はお互いの顔に落書きされているのに驚愕する。

のどか

「あっ！？ピ、ピカチュウちゃん達まで……。」

ピカチュウ

「ピカ……。」

ピチュー

「ピツチュ？」

自分の顔にも落書きされた事に気付いていないのどかは、ピカチュウとピチューの顔にも落書きされていた事に気付いて驚愕する。

刹那

「お、おのれ〜！一体何処の愚か者が美しいお嬢様の顔に落書きを……。」

明日菜

「せ、刹那さん……少し落ち着こ？」

明日菜は夕凧を取り出そうとしている刹那を宥める。

カモ

「それにしても、誰がこんな悪戯イタズラを……………」

同じように顔中に落書きされたカモは、ネギの肩の上で腕を組みながら考え込む。

？

「プリンプリンの仕業だ。」

全員

「!?!」

全員声が聞こえた方を向くと、ふて腐れてるプリンの隣に犬のような頭部に手の甲にトゲ状の角を一本ずつ付いてて、後頭部に四つの房を持ったポケモンが立っていた。

？

「お前達がプリンが歌っている最中に眠ってしまったから、機嫌を損ねたプリンはお前達の顔に落書きを……………」

木乃香

「あーっ！波導ポケモンのルカリオやー！！」

木乃香はルカリオというポケモンの説明の途中で、少し興奮気味に近付いていく。

ルカリオ

「お、おい……………」

木乃香

「わ〜！映画と全く同じや……………ウチ、『ミュウと波導の勇者ルカリオ』を見てからファンになってもうたんよ〜。」

そう言いながら、木乃香は食い入るようにルカリオを見つめる。

ルカリオ

「……………おい、誰かこの女を何とかしてくれ。」

明日菜

「木乃香、ちょっとこっちへ……………」

明日菜は完全に興奮状態の木乃香を引つ張り出していく。

ネギ

「あの、貴方がルカリオさんですね？」

ルカリオ

「ああ、そうだ……。お前達の事はプリンから聞いた。」

ネギ

「そうですね……。それでしたら、早速これをお渡しします。」

ネギはルカリオにバッチを渡す。

ルカリオ

「コレが例のバッチか……。確かに受け取ったぞ。」

プリン

「……………プリ。」

プリンは膨れっ面のまま小さな足で地面を蹴る仕草をする。

のどか

「何か、プリンちゃんが怒ってますけど……。」

明日菜

「まあ、歌ってる最中に誰かが眠ってたなら腹が立つわね。」

刹那

「でも、どうしてあの時眠ってしまったんでしょうか？」

ルカリオ

「プリンの歌声には一種の催眠効果のようなものがあった、そのせいで強い眠気が襲ってきたのだろう。」

木乃香

「そう言われてみればそうやったな……歌の途中で眠ってしもつてゴメンな。」

プリン

「プイッ！」

木乃香の謝罪の言葉も空しく、プリンはそっぽを向いてしまう。

カモ

「こりゃ、完全にご立腹だな。」

ルカリオ

「心配いらない、しばらくすれば機嫌を直す。」

ネギ

「それならいいのですが……ところで、ルカリオさんに色々聞きたい事があるのですが……。」

ルカリオ

「ん？聞くのは構わないが……顔の落書きを消さなくていいの？」

ネギ一行

「えっ!？」

ピカチュウ

「ピカツ!？」

ネギ一行とピカチュウはルカリオの言葉で顔の落書きを思い出す。

明日菜

「しまった、すっかり忘れてたわ!」

ネギ

「皆さん、早く消さないと油性ですから消え難くなりますよ!」

木乃香

「あ〜ん、全部消えなかつたらどないしょ〜!」

ピカチュウ

「ピカピカチュウ!」

ネギ一行とピカチュウは両手で勢い良く顔を拭き始める。

ルカリオ

(やれやれ、騒がしい連中だな……………。)

ピチュー

「ピチュウ?」

軽い溜め息を付くルカリオを見たピチューは首を傾げるのであった……………。

第三十九話〈ハナダシティのお転婆人魚〉（前書き）

プリンに顔を落書きされて、ルカリオにも出会ったネギー行ですが……。

タイトル通りですが、あのキャラが登場します。

第三十九話　ハナダシティのお転婆人魚

（お月見山・洞窟内部）

ネギー一行とピカチュウ達は『お月見山』の洞窟の内部へと進んでいた。

ルカリオ

「……………成程、ポケモントレーナーとミュウツウの居場所を知りたいのか。」

ネギ

「はい、ルカリオさんは何かご存知ありませんか？」

ルカリオ

「そうだな…………トレーナーが今何処に居るか分らんが、ミュウツウの居場所なら知ってるぞ。」

木乃香

「ホンマに？」

ルカリオ

「ああ……………この『お月見山』を抜けた所に『ハナダシティ』とい

う町があり、その町外れにある『ハナダの洞窟』に潜んでいると聞いた事がある。」

ネギ

「『ハナダの洞窟』ですね……………まずはその洞窟へ行ってみましょう！」

明日菜

「あっ！ネギ……………」

ネギが勢い余って駆け出していくが……………。

バサバサバサツ！！

ネギ

「わー！な、何ですかコレは……………!?!?」

突如ネギの前に無数の蝙蝠のようなポケモンが群がるように横切っていく。

ルカリオ

「蝙蝠ポケモンのズバツトだ……………ズバツトは、こつこつ洞窟に沢山生息しているんだ。」

明日菜

「でも、こんなに群がってちゃ先へ進めないじゃない……………」

のどか

「きゃっ！噛み付ついてくる……………」

ネギー一行がズバットの群れに苦戦していると……………。

ピカチュウ

「ピカ……………ピ……………カ……………チュ……………ー……………ッ……………！」

バリバリバリッ！！

突然ピカチュウが飛び上がり、体中から電気を放出してズバットの
大群に浴びせる。

ズバット

「キュ……………ッ……………。」

ピカチュウの電気を浴びたズバット達は次々と地面へと落下して
いく。

刹那

「い、一体何が起こったんでしょうか？」

ルカリオ

「ピカチュウが電撃でズバットを一掃したんだ。」

木乃香

「そか、ピカちゃんがウチらを助けてくれたんやな。」

ネギ

「ありがとうございます、お蔭で助かりました！」

ピカチュウ

「ピ、ピカチュ……。」

ネギにお礼を言われたピカチュウは、右手で頭を掻きながら照れてしまう。

カモ

「それより、早く此処を出ねえとさっきの蝙蝠野郎共が出て来るぜ。」

「

ネギ

「そつだね、急いで先へ進もう……………」。

そつ言つと、ネギ一行は出口を目指して先へ進んでいく。

くハナダシティく

『お月見山』から抜け出たネギ一行とピカチュウ達はハナダシティへとやって来た。

ネギ

「此処がハナダシティですか……………」。

明日菜

「ねえ、さっき言つてた『ハナダの洞窟』って何処にあるの?」

ルカリオ

「……………すまない、私はカントー地方についてはあまり詳しくないので、何処にあるかまでは分からない。」

ネギ

「そつですか……………」。

ネギはルカリオの言葉に少し凹んでしまう。

カモ

「じゃあ、何で『お月見山』に居たんだ？」

ルカリオ

「……………私は時々、波導を極限まで極める為に『お月見山』へ修行しに来てるのだ。」

刹那

「波動というと、物理学とかによく出て来る波動ですか？」

ルカリオ

「いや、私の言う波導は気やオーラのようなものだ……………人やポケモンには誰しも波導を持っているのだ。」

木乃香

「ほなら、ウチらにもその波導ってモンがあるん?」

ルカリオ

「勿論、ほんの微かだがな……………」。

のどか

「そうなんですか……………あれっ?」

突然のどかが何かに気が付いて、辺りを見回す。

ネギ

「のどかさん、どうかしましたか?」

のどか

「プリンちゃんが……………プリンちゃんは何処にも居ないんです!」

全員

「えっ!?!」

全員のどかの言葉に耳を疑った。

明日菜

「一体何処へ行ったのかしら……………」。

ピチュー

「ピ！？ピツチュ！」

木乃香

「ピチューちゃん？急にどないし……………あつ！あそこにおるわ！」

ピチューの指さす方を見た木乃香はプリンの後ろ姿を発見する。

ネギ

「あんな所で何やってるんでしょうか？」

明日菜

「とにかく、あそこまで行ってみましょ。」

ネギ達はプリンが立っている所まで駆け出す。

木乃香

「プリンちゃん、勝手に何処かへ行ったらアカンやろ？」

プリン
「プリユ……………」

プリンは木乃香の言葉など上の空という感じで、目をキラキラと輝かせながら一軒の大きな建物を眺めていた。

刹那

「あの建物に何かあるんでしょうか？」

ルカリオ

「…………… プリンの事だから、あの建物をコンサート会場か何かだと勘違いしているんだろう。」

のどか

「そ、そうなんですか？」

ネギ一行はルカリオの言葉に啞然となる。

ネギ

「それにしても、あの建物は何でしょうか？」

ルカリオ

「アレはポケモンジムといって、この町のジムリーダーが住んでい

るんだ。」

明日菜

「ジムリーダーって、さっきのタケシみたいな……………」

木乃香

（あれ？確かこの町のジムリーダーって……………」

木乃香は腕を組んで深く考え込んでしまう。

刹那

「お嬢様、どうかなさいましたか？」

木乃香

「えっ？あ、いや、何でもあらへんよ……………」

木乃香は刹那に声を掛けられて思わず慌ててしまう。

のどか

「あの、私思ってたんですけど……………この町のジムリーダーさんなら、『ハナダの洞窟』について何か分かるんじゃないでしょうか？」

ネギ

「うーん、のどかさんの言う通りかも……よし、この町のジムリーダーさんに聞いてみましょう！」

そう言うと、全員ポケモンジムに向かって駆け出していく。

くハナダシティジム前く

コンコン！

ネギ

「ごめんください！」

ネギはポケモンジムのドアをノックする。

ガチャ

？

「はーい、どちら様？」

ポケモンジムのドアが開かれると、ショートヘアーを左上に結んだ独特の髪型に白い競泳水着の上に着用を羽織った少女が顔を出してきた。

ネギ

(わっ！？み、水着姿……………。)

ネギは少女の水着姿を見て、顔を真っ赤に染めながら焦る。

木乃香

「あーっ！？この人は……………」

再び大声を上げた木乃香の声に全員驚く

明日菜

「な、何よ木乃香！？急に大声出して……………」

木乃香

「だって……………だってこの人、カスミにそっくりなんやもん！」

カスミ

「失礼ね…………あたしは真正銘このハナダシティジムのジムリーダー、通称『お転婆人魚』のカスミちゃんよ。」

カスミと名乗る少女は、木乃香の言葉に少し不機嫌になる。

木乃香

「わ〜！またアニメのキャラに会えたわ〜…………握手させて下さい！」

カスミ

「え、ええ、いいわよ…………。」

木乃香は嬉しそうにカスミと握手を交わす。

ルカリオ

「…………あの子、かなり嬉しそうだな。」

ネギ

「はい、さつきからあんな調子で…………。」

刹那

「でも、私はお嬢様の嬉しそうな顔を見てるだけで幸せです……………」

ピカチュウ

「ピカピ？」

ピカチュウはポクツとしながら木乃香を見つめる刹那を見て首を傾げる。

カスミ

「ところで、貴方達も挑戦者なの？」

のどか

「ちよ、挑戦者って？」

カスミ

「決まってるじゃない！ジムリーダーであるこのあたしとポケモンバトルしに来たんでしょ？」

ネギ

「ち、違います！僕達は『ハナダの洞窟』について色々聞きたくて此処へ来たんです。」

カスミ

「あら？そつなの……………とにかく、詳しい話はジムの中で聞くから入って。」

カスミがジムの中へ招くと、全員ジムの中へ入っていく。

くハナダシティジム内く

ネギー一行はカスミの案内で、ハナダシティジムの内部にあるプールサイドらしき広場へとやって来た。

明日菜

「へえく、此処ってまるでプールね……………。」

ピカチュウ

「ピカピくカ。」

明日菜とピカチュウは興味津々にプールサイドを眺める。

カスミ

「……………要するに、貴方達は『ハナダの洞窟』に行きたいけど、その洞窟が何処にあるか分からないからあたしに聞きに来たって訳ね。」

「

ネギ

「はい、その通りです。」

カスミ

「ふうん……………よっしゃ！あたしが『ハナダの洞窟』まで案内するわ！」

ネギ

「本当ですか！？ありがとうございます！」

ネギはカスミの言葉に感激して、深く頭を下げる。

カスミ

「ところで、貴方達は水タイプのポケモン持ってる？」

ネギ一行

「……………え？」

ネギ一行はカスミの言葉を聞いて一瞬固まる。

カスミ

「……………どうやら、この子達だけのようね。」

ピチュー

「ピチュー〜？」

カスミは溜め息を零しながら、ピカチュウ達を見つめる。

ネギ

「……………木乃香さん、水タイプのポケモンってどういう意味ですか？」

木乃香

「あんな、ポケモンにはそれぞれタイプっちゅうもんがあんねん……例えば、ピカちゃんとかピッチちゃんは電気タイプで、プリンちゃんはノーマルタイプのポケモンなんや。」

ルカリオ

「因みに、私は格闘と鋼の二種類だ。」

ルカリオは付け加えるかのようにサラリと言う。

カスミ

「しょうがないわね………いいわ、あたしに任せて！」

〈町外れの川〉

ネギー一行はカスミに連れられて、町外れの川へやって来た。

カスミ

「『ハナダの洞窟』は、この川を渡らなきゃ行けないの。」

ネギ

「川を渡るって、ボートか何かあるんですか？」

カスミ

「そんなのより、もっといい方法があるのよ………それっ!!」

「パァーッ!!」

?

「グオオオツ!!」

カスミが川に向かってモンスターボールを投げると、中から巨大な竜のようなポケモンが出て来る。

明日菜

「わあっ!?!な、何か出て来た………。」

カスミ

「どお?あたしの自慢のギャラドスよ。」

のどか

「まさか、これに乗って川を渡るんですか?」

カスミ

「そっよ………安心して、この子は見掛けによらず大人しいから。」

カモ

(本当かよ……………。)

ネギ達はしばらく目を丸くしたままカスミのギャラドスを見つめる。

カスミ

「さあさあ、早く乗った乗った！」

ネギ達はカスミに勧められるがままに、ギャラドスの背中に乗る。

カスミ

「全員乗ったー？」

ネギ

「は、はい!!」

カスミ

「それじゃ、出発進行!!」

カスミの掛け声に合わせて、ネギ達を乗せたギャラドスはどんどん進んでゆく。

木乃香

「わゝ、結構速いなあゝ！」

ピチュー

「ピチューピチュー！」

バシャーッ！！

プリン

「プリユッ！？」

突然大きな水しぶきがプリンに顔面に掛かる。

のどか

「だ、大丈夫？」

プリン

「プギューイ！！！」

プクーーッ！！

プリンは風船のように頬を膨らませながら怒り出す。

刹那

「また怒っちゃいましたね……………」

ピカチュウ

「ピカピ……………」

カスミ

「みんな、そろそろ『ハナダの洞窟』に到着するわよ！」

全員カスミの声に反応して顔を上げると、遠くから小さな陸地と洞穴が目に入る。

ルカリオ

（アレが『ハナダの洞窟』か……………」

木乃香

「あの洞窟の中にミュウツーが居るんやな……………」早く会いたいわあ。

「

カモ

（木乃香姉さん、ご機嫌だな……………」

カモは満面の笑みを浮かべる木乃香を見て啞然とする。

カスミ

「はい！『ハナダの洞窟』の入口に到着〜！！」

ネギ

「皆さん、川に落ちないように降りて下さい。」

そう言うと、カスミ以外の全員がギャラドスの背中から降りる。

カスミ

「じゃあ、あたしはジムに戻るけど………大丈夫？」

ネギ

「はい！此処まで送って頂いてありがとうございます〜！」

ネギはカスミに向かって深くお辞儀する。

カスミ

「いいのよ、困った時はお互い様だし………それじゃ、気をつけてね。」

カスミがウインクしながら言うと、ギャラドスと共にその場から去っていく。

カモ

「兄貴、あの嬢ちゃん良い奴だったな。」

ネギ

「うん、お蔭で助かったよ。」

明日菜

「そんじゃ、早速洞窟の中へ入りますか！」

ピカチュウ

「ピッピカチュ！」

こうして、ネギ一行とピカチュウ達は『ハナダの洞窟』へ入っているのであった……………。

第四十話 悪の組織と最強の遺伝子ポケモン (前書き)

ハナダの洞窟にやって来たネギー行とピカチュウ達に待ち受けるものとは……………。

第四十話 悪の組織と最強の遺伝子ポケモン

ハナダの洞窟・内部

ネギー行とピカチュウ達は、『ハナダの洞窟』の内部を進んでいた。

ネギ

「……………何だか、『お月見山』よりも複雑な構造ですね。」

刹那

「ええ、まるで迷路のようですね……………」

ルカリオ

「うむ、波導を極めるのに最適の場所だな。」

木乃香

「あ、早くミュウツーに会いたいな。」

それぞれ思った事を口に出しながら進んでいくと……………。

ピカチュウ

「……………ピカッ？」

明日菜

「どうしたの？ピカチュウ。」

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ。」

ルカリオ

「何？』向こうから誰かの話し声が聞こえる』だと？」

全員

「えっ!？」

ネギ一行はピカチュウの代わりに答えたルカリオの言葉に耳を疑う。

のどか

「ま、まさか私達の他にも誰か居るんでしょうか？」

ネギ

「そうかもしれないね……とにかく、声がする方へ行ってみましょう!」

ネギ一行とピカチュウ達は、話し声が聞こえる所へ向かって歩き出
す。

（数分後）

ネギ

（っ！？み、皆さん！ストップ！！）

しばらく進んでいると、先頭を歩いていたネギが小声で他のみんな
の歩みを止める。

明日菜

（きゅ、急にどつしたのよ！？）

ネギ

（あそこに誰か居ます……………それも数名です。）

明日菜

（えっ！？どれどれ……………。）

明日菜達はネギの前方を覗くように見ると、黒いベレー帽を被って胸元にRのマークが描かれた黒装束のような服を着た三人の男性と一人の女性が居た。

ルカリオ

（ん？あのRのマークは……………。）

ルカリオは謎の集団の服装の胸元に描かれてる赤いRのマークを見て何かに気付く。

のどか

（あの人達、この洞窟で何をしてるんでしょうか？）

ネギ

（僕、ちょっと聞いてみま……………。）

ルカリオ

（待て！！）

ネギが謎の集団に声を掛けようとするが、ルカリオに制止される。

木乃香

（ルカ君、どないしたん？）

ルカリオ

（ル、ルカ君！？）

ルカリオは木乃香の呼び方に耳を疑った。

ルカリオ

（……………そ、それより、奴らに関わらない方がいい。）

明日菜

（どうして？）

ルカリオ

（恐らく奴らは……………ロケット団だ。）

ネギ&カモ

（ロケット団？）

ネギとカモはルカリオの言葉を聞いて首を傾げるが……………。

明日菜

（ロケット団！？あいつらが……………。）

木乃香

（でも、ムサシとコジロウとニヤースがおらへんよ？）

刹那

（お嬢様、それはアニメの話ですよ……………。）

木乃香の発言に刹那は苦笑いしながらツツコミを入れる。

ネギ

（えっ！？皆さんはロケット団を知ってるんですか？）

明日菜

（勿論よ！アニメでも有名な悪い奴らなんだから……………。）

木乃香

（でも、アニメに登場するムサシとコジロウとニヤースの三人は何処か憎めなくて面白いんやげとな。）

ネギ

（は、はあ……………よく分かりませんが、要するにあの人達は悪者って事ですね。）

ルカリオ

（しかし、妙だな……………ロケット団は解散したと聞いたんだが……………）

ルカリオが腕を組みながら深く考え込んでいると……………。

ロケット団員A

「おい、居たか？」

ロケット団員B

「いや、何処にも居ない……………。」

ロケット団員C

「こっちにも居なかったわ……………。」

ロケット団員D

「くそっ！一体何処に居るんだ……………あの最強ポケモンのミュウツーは。」

全員

(ミ、ミュウツー！？)

ネギ達はロケット団員Dの言葉に耳を疑った。

ロケット団員B

「それにしても、本当にこの洞窟の中にミュウツーが居るのか？」

ロケット団員A

「ああ、間違いない……………この洞窟でミュウツーを発見したって噂が後を継たないしな。」

ロケット団員D

「でも、こんなに広い洞窟じゃあ探すのに一苦労だぜ……………」

ロケット団員C

「しっかりしなさいよ！落ちぶれた私達が再び脚光を浴びる為ですよ？」

ロケット団員A

「その通り……………俺達が最強のポケモンであるミュウツーをゲットすれば、世界は再び我々ロケット団のものになるのだ！」

ロケット団全員

「ハーーーーハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

ロケット団達の馬鹿笑いが洞窟中に響き渡る。

明日菜

(……………あいつら、今時世界征服とか言ってるわね。)

ネギ

(それに、あの人はミュウツーさんを狙ってるみたいですね。)

ルカリオ

(ああ、奴らよりも早くミュウツーを見つけなければ……………)。

のどか

(あ、あれ？ピチューちゃんが…………)。

のどかはピチューが居ない事に気付き、辺りを見回していると……………。

ロケット団員D

「うおっ！？な、何だコイツは……………」

ピカチュウ

(ピカッ!?)

カモ

(兄貴、アレ見てみるよ!)

ネギ

(え?.....あっ!?)

ネギ達は驚いたような声を上げる。ロケット団員Dの方を見ると、ロケット団員達の足元にピチューが居た。

のどか

(ピ、ピチューちゃんがあんな所に.....。)

ルカリオ

(マズいな.....。)

ピチュー

「ピチュー?」

ピチューはロケット団員達の顔を見るなり、訳が分からず首を傾げ

る。

ロケット団員C

「あら、随分可愛らしい子ね。」

ロケット団員B

「おい、ひよつとしてコイツ……………誰かのポケモンじゃないか？」

ロケット団員A

「もしそうだとしたら、トレーナーが近くに潜んでいるハズだ……………それっ!!！」

パアーーーーッ!!！」

？

「シャーボック!!！」

ロケット団員Aがモンスターボールを投げ付けると、中から腹部が恐ろしげな顔のような模様があるコブラのポケモンが現れる。

ロケット団員A

「いいか、よく聞け！何処かに隠れているのは分かってるんだ！今すぐ出て来ないとこのチビを俺のアーボックの餌食にするぞ!!！」

アーボック
「シャ〜ッ!」

ピチュー
「ピ、ピチュ……………」

アーボックが牙を剥き出ししながらピチューを睨み付けると、ピチューは今にも泣き出しそうな顔になる。

刹那
（何て卑怯な……………）

木乃香
（このままじゃピッチちゃんが……………）

ルカリオ
（ピカチュウ、プリン、ピチューを助けに行くぞ!）

ピカチュウ
（ピツカチュ!）

プリン
(プリュ！)

ネギ
(では、僕達も……。)

?
「待て！！」

全員
「！？」

ネギ達が声に反応して見てみると、ロケット団の前に赤い帽子を被りリュックサックを背負った少年が姿を現した。

ロケット団員A
「お、お前は！？」

ロケット団達は少年を見るなり驚愕する。

ルカリオ
(あいつがこの洞窟に居たとはな……。)

ピカチユウ

(ピカピ……………。)

ネギ

(あの人を知ってるんですか?)

ルカリオ

(知ってるも何も……………あいつがお前達が探しているポケモントレーナーだ。)

ネギ一行

(ええっ!?)

ネギ一行はルカリオの言葉に耳を疑った。

トレーナー

「ロケット団!懲りずにまだこんな事をしていたのか!?!」

ロケット団員D

「う、嫌い!俺達ロケット団は不滅なんだ!」

ロケット団員C

「それに、元はと言えばアンタのせいでロケット団は解散したんだからね！」

トレーナー

「当たり前だ！お前達が各地で悪い事ばかりしてたからだ！」

ロケット団員A

「コイツ、言わせておけば……アーボック！そのチビを噛み砕いてしまえ！！」

アーボック

「シャーボック！！」

ロケット団員Aが指示を出すと、アーボックが大きな口を開けながらピチューに襲い掛かっていく。

トレーナー

「ゼニガメ！君に決めた！！」

パアーン！！

？

「ゼーンツ！！」

トレーナーがモンスターボールを投げ付けると、中から大きな亀の
ようなポケモンが現れる。

トレーナー

「ゼニガメ！水鉄砲だ！！」

ゼニガメ

「ゼニーンツ！！」

ブシユユツ！！

アーボック

「シャーンツ！！」

ゼニガメは口から勢い良く水を出して、アーボックを吹き飛ばす。

ピチュー

「ピチュ、ピチュピツピチュ！」

ピチューは慌ててトレーナーに近づく。

トレーナー

「ピチュー、怪我は無かったかい？」

ピチュー

「ピッチュー！」

ピチューはトレーナーの言葉に答えるかのように元気良く返事をす
る。

ロケット団員A

「お、おのれ……………お前達もポケモンで応戦しろ！」

ロケット団員B～D

「了解！」

パアーンツ！！

？

「ドガース！」

？

「ニューラ！」

？
「ヤミツ！」

ロケット団員達が一齐にモンスターボールを投げ付けると、ボールのように丸い体形で鬍髯どくろのような模様があるポケモンと鋭い爪を持った黒猫のようなポケモンと三角帽子に似た頭部に箒カラスみたいな尻尾を持つ鳥カラスのようなポケモンが現れる。

トレーナー

「三対一なんて卑怯だぞ！」

ロケット団員D

「フン、これが俺達のやり方なんだよ！」

ロケット団員C

「ニューラ！乱れ引っ掻きよー！」

ニューラ

「ニューラッ！」

ロケット団員B

「ヤミカラス！翼で打つ攻撃だー！」

ヤミカラス

「ヤミヤミッ！」

それぞれの指示を聞いたニューラとヤミカラスはゼニガメに向かって襲い掛かってくる。

トレーナー

「出て来い！フシギソウ！！」

パアーツ！！

？

「フツシ〜！」

再びトレーナーがモンスターボールを投げ付けると、中から背中に蓄を付けた蛙のようなポケモンが現れる。

トレーナー

「フシギソウ！痺れ粉で相手の動きを封じるんだ！！」

フシギソウ

「フシフツシーー!!」

パアアアツ

トレーナーの指示を聞いたフシギソウは、背中の蕾から粉を噴出させる。

ニューラ

「ニュー、ニュー……。」

ヤミカラス

「ヤミ、ヤミヤミ……。」

粉を浴びたニューラとヤミカラスは、その場から動けなくなる。

トレーナー

「今だ!二匹揃って体当たりだ!!」

ゼニガメ

「ゼニゼニーツー!!」

フシギソウ

「フツシートッ!!」

ドガアアアッ!!

ニューラ

「ニヤ~~~~ッ!!」

ヤミカラス

「ヤミ~~~~ッ!!」

ゼニガメがニューラに体当たりして、フシギソウはヤミカラスに体当たりを繰り返す。

ロケット団員C

「あっ!? 私のニューラが……………」

ロケット団員B

「俺のヤミカラスも……………」

ロケット団員D

「くそ~~~~っ……………ドガス! 毒ガス攻撃だ!!」

ドガス
「ドガス！」

ドガスがゼニガメ達に向かって大きな口を開けた瞬間……。

トレーナー
「フシギソウ！つるの鞭だ！」

フシギソウ
「フシッ！！」

パツシーーン！！

ドガス
「ドガ~~~~ッ！！！」

フシギソウの『つるの鞭』でひっ叩かれたドガスは駒のように回転していく。

ピタッ！

ロケット団全員

(ゲッ!?)

しばらくすると、ドガースはロケット団達の方を向いた状態で回転が止まり……………。

ブワーーーーッ!!

ドガースの口から毒ガスが吐き出され、ロケット団達は毒ガスに包み込まれる。

ロケット団員D

「ゲホツゲホツ……………し、しまった……………」

ロケット団員A

「だ、誰か……………この毒ガスを……………」

ロケット団達はドガースの毒ガスで噎せてしまう。

トレーナー

「よし、仕上げはリザードンだ!」

パアーーーーッ!!

?
「グオオオツ!!」

更にトレーナーがモンスターボールを投げ付けると、蝙蝠のような翼を生やして体が橙色で頭部に二本の角があり長い尻尾の先端が赤色の外炎と黄色の内炎の炎を灯したドラゴンのようなポケモンが現れる。

トレーナー

「リザードン! 火炎放射だ!!」

リザードン

「グワアアアツ!!」

ゴオオオオツ!!

リザードンがロケット団達に向けて、口から炎を勢い良く放射させる。

ロケット団員A

「あちゃちゃ! ……み、みんな! 退却だ!!」

そう言いつと、ロケット団は急ぎ足で逃げ出していく。

トレーナー

「よし……みんな、よくやったぞ!」

ゼニガメ

「ゼニガメガ〜」

フシギソウ

「フシ、ソウソウ」

リザードン

「グウウッ。」

トレーナーはゼニガメ達の頭を一匹ずつ撫で回す。

ルカリオ

「トレーナー、お前のポケモンも一段と強くなったな。」

トレーナー

「えっ?」

トレーナーが声に反応して後ろを向くと、ネギ一行とピカチュウ達が居た。

ピチュー

「ピッチュ〜！」

ピカチュウ

「ピカピカ〜！」

ピチューは小走りでピカチュウの方へ駆け寄っていく。

トレーナー

「ル、ルカリオにピカチュウ達……………どうして此処に？」

ルカリオ

「その事については彼に聞いてくれ。」

そう言うと、ルカリオはネギを指さす。

トレーナー

「君達は？」

ネギ

「僕達はですね……。」

ネギはトレーナーに今までの経緯を簡単に説明した。

トレーナー

「………そっか、僕らの為に色々な世界を巡って来たって訳か。」

ネギ

「はい………それから、これをお渡しします。」

ネギはトレーナーにバッチを四つ渡す。

トレーナー

「四つって事はゼニガメ達の方だね………どうもありがとう!」

ネギ

「いいえ、どう致しまして………。」

明日菜

「後はミュウツーを捜し出すだけね………。」

トレーナー

「えっ！？この洞窟にミュウツーが居るの？」

ルカリオ

「居るのって……お前、知らなかったのか？」

トレーナー

「うん……僕はただ、ポケモントレーナーとして頂点を極める為にこの『ハナダの洞窟』で修行してたんだ。」

木乃香

「ふん……要するに、ルカ君と同じ事考えてたんやな。」

ルカリオ

「……だから、その呼び方はやめてくれ。」

ルカリオは木乃香の呼び方に不満を抱きながらツッコミを入れる。

トレーナー

「それだったら、僕達も一緒に捜すよ。」

ネギ

「本当ですか！？ありがとうございます！」

明日菜

「よし、みんなで一斉にミュウツーを捜して……………」

？

「その必要は無い。」

スーッ

全員

「！？」

突然ネギ達の目の前に、尻尾が長くて太腿が太いミュータントのよ
うなポケモンが姿を現わす。

ルカリオ

「……………ミュウツーじゃないか。」

ネギ

「えっ！？いきなり……………」

木乃香

(わく、本物のミュウツーや……。)

木乃香は目を輝かせながらミュウツーを見つめる。

明日菜

「ほらネギ、早速バッチを渡しなさいよ。」

ネギ

「は、はい……。」

ネギがミュウツーにバッチを渡そうと近付いた時……。

ミュウツー

「……何故私の住家に人間が居る？」

ネギ

「えっ？」

クイツ!

ネギ

「う、うわぁっ!?!」

ミュウツーが左手を上げた瞬間、ネギの体がゆっくりと上昇していく。

明日菜

「ネ、ネギ!?!」

のどか

「ネギ先生!?!」

ルカリオ

「お、おいミュウツー! 一体何の真似だ!?!」

ピカチュウ

「ピカ! ピカピカ!?!」

ミュウツー

「人間は直ちにこの洞窟から出て行け……さもなければ、お前達を殺す!」

そう言うと、ミュウツーは鋭い眼光でネギ達を睨み付ける……。

第四十話 悪の組織と最強の遺伝子ポケモン (後書き)

突然ネギ達に襲い掛かるミュウツーに何が起こったのか!?

次回もお楽しみ!

第四十一話、姿が変わった！？（前書き）

ハナダの洞窟でポケモントレーナーとミュウツーに出会ったネギー
行ですが、突然ミュウツーがネギに襲い掛かってきた！？

第四十一話 姿が変わった!??

ハナダの洞窟・奥部

ネギ

「う……………う……………」

ミュウツ

「人間は直ちにこの洞窟から出て行け……………さもなければ、お前達を殺す!」

ミュウツは左手を掲げたまま超能力でネギを持ち上げながら、鋭い眼光で明日菜達を睨み付ける。

明日菜

「ちよつと!ネギを下ろしなさいよ!」

ミュウツ

「……………フン!」

スッ!

ネギ

「わぁーーーーっ!!」

バシーーーーッ!!

ミュウツーが掲げていた左手を勢い良く下ろすと、ネギは物凄い勢いで壁に叩き付けられる。

刹那

「ネギ先生!!」

明日菜達は慌ててネギの元へ駆け寄る。

のどか

「ネギ先生、大丈夫ですか?」

ネギ

「は、はい……………何とか……………」。

ネギは片手で頭を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

ルカリオ

「ミュウツー……何故こんな事をするんだ!？」

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ!」

ミュウツー

「……………何故だと?」

ルカリオの言葉を聞いたミュウツーは、ピカチュウ達の方を睨み付ける。

ミュウツー

「お前達もポケモンなら分かっているはずだ……………人間は我々ポケモンをまるで道具のように扱っている、私はそんな人間共をこれ以上野放しにするのが耐えられないのだ。」

トレーナー

「そんな……………全部の人間がそうとは限らないよ!」

ミュウツー

「黙れ!」

ブワッ!!

トレーナー

「わあっ!?!」

ミュウツーが左手を突き出した瞬間、トレーナーは何かを押されたかのように後ろへ倒れる。

ゼニガメ

「ゼニ、ガメガメ!」

フシギソウ

「フシフシー!」

ゼニガメとフシギソウは慌ててトレーナーの元へ駆け寄る。

リザードン

「グウツ…………グオーーーーーッ!」

ゴオオオオオツ!!

雄叫びを上げた後、リザードンはミュウツーに向けて口から炎を吹

き出す。

パァーッ！！

ところが、ミュウツールの周囲にバリアーのような物が現れて、リザードンの攻撃を全て防ぐ。

ミュウツール

「トレーナーの指示も無しに攻撃するとは……………随分しつけの悪いリザードンだな。」

木乃香

（今の台詞、映画でも言ってたような……………って、今はそんな事を考えてる場合やない！）

そう言い聞かせながら、木乃香は顔を左右に振る。

ミュウツール

「さて、お遊びは此処までだ……………ハァッ！！」

ミュウツールが右手を突き上げると、空間が歪んで大きな穴が開かれる。

ブワァーッ!!

ルカリオ

(何だ?あの穴は……………。)

ミュウツー

「私にはやらなければならない事があるので……………さらばだ。」

シューーッ!!

ミュウツーが穴の中に入っていくと、穴はすぐに消えてしまう。

ルカリオ

「き、消えた……………。」

プリン

「プリ、プリプリ?」

ピカチュウ

「ピカピカチュ。」

プリン問い掛けにピカチュウは左右に首を振る。

ピチユー

「ピチユ……………」

ピチユーは悲しそうな表情を浮かべながら顔を下へ俯く。

トレーナー

「一体ミュウツーはどうしたっていつんだ？」

カモ

「兄貴、あのミュータントみてえな奴は誰かに操られてる可能性があるぜ。」

ネギ

「うん、僕も同じ事を考えてたよ……………」

明日菜

「それにしても、一体何処に行ったんだらう？」

？

「知りたいか？」

全員

「!?!」

全員声に反応して振り向いてみると、そこには黒コートの人物が立っていた。

ルカリオ

「何物だ!?!」

ピカチュウ

「ピカピツ!?!」

明日菜

「また現れたわね……………いい加減正体を現わしなさいよ!」

?

「……………フツ。」

明日菜

「あっ!?!また鼻で笑ったでしょ!?!」

ネギ

「あ、明日菜さん……………。」

刹那

(このやり取り、前にもあったような……。)

黒コートの人物に嘲笑われて激怒する明日菜に刹那はふと考え込む。

？

「そんな事より、彼が何処へ行ったか知りたくないか？」

ネギ

「えっ！？貴方は知ってるんですか？」

？

「勿論だ……。まず、彼はもうこの世界には居ない。」

トレーナー

「この世界？」

プリン

「プリユ？」

黒コートの人物の言葉にトレーナーやポケモン達は理解出来ずに首

を傾げる。

ネギ

「じゃあ、ミュウツーさんは何処に……………」。

？

「彼が向かったのは……………ポケモンの世界だ。」

全員

「……………はい？」

全員黒コートの人物の言葉に耳を疑った。

木乃香

「え、えっと……………言ってる意味がよう分からへんねんけど……………」。

「

明日菜

「そつよ！大体この世界自体がポケモンの世界じゃないの!？」

？

「人の話は最後まで聞くものだぞ……………私が言ってるのは、人間が一人も存在しないでポケモンだけが存在している世界の事だ。」

ルカリオ

「人間が存在しないで、ポケモンだけが存在している世界……だと？」

ルカリオは黒コートの人物の発言に耳を傾ける。

トレーナー

「そんな……人間が一人も居ないなんて有り得ないよ！」

？

「では、確かめてみるか？」

パチッ！

ブワーーーーッ！！

黒コートの人物が指を鳴らすと、先程ミュウツーが出した穴と同じ穴が現れる。

？

「この穴に入れば、ミュウツーが逃げ出した世界へ行けるぞ。」

カモ

「兄貴、騙されるなよ……こりゃきつと畏だ。」

ネギ

「そ、そうかな……。」

ピチュー

「ピチュ……ピッチューーッ……！」

次の瞬間、走り出したピチューが穴の中へと飛び込む。

のどか

「ピ、ピチューちゃんが……！！！」

ルカリオ

「何て無茶な……。」

ピカチュウ

「ピカ！ピカピカ……！」

更に、ピカチュウがピチューに続くように穴へと飛び込む。

木乃香

「ピカちゃんまで……………」。

ネギ

「……………皆さん！僕達も行きましょう！！」

カモ

「お、おい！何言ってるんだよ兄貴！？」

ネギ

「確かに畏かもしれないけど……………ピカチュウさん達が入ってしまった以上見過ごす事なんか出来ないよ！」

明日菜

「そうね！例え畏だったとしても、みんなで力を合わせれば全然平気よ！！」

刹那

「そうと決まれば、早速入りましょう！！」

ネギ一行もピカチュウ達に続けるように穴へ入ろうと駆け出すが…

……………。

？

「ちょっと待て。」

ネギ

「えっ？」

黒コートの人物が呼び止めると、ネギ一行は動きを止める。

明日菜

「何よ！？急に呼び止めて……………」

？

「一つだけ警告しておく……………お前達が向こうの世界へ行くと、空間の影響で姿が変わるかもしれんぞ。」

ネギ

（姿が……………変わる？）

ネギは黒コートの人物の意味深な言葉に首を傾げる。

トレーナー

「よ、よーし！僕達も行こうー！！」

ゼニガメ

「ゼニーツー！！」

フシギソウ

「フッシューッー！！」

リザードン

「グオオッー！！」

トレーナーの掛け声と共に、トレーナーと三匹のポケモンはそのまま穴の中へ入っていく。

ルカリオ

「行くしかないな……………プリン！私達も行くぞー！！」

ガシッ！！

プリン

「プリッ！？」

ルカリオはプリンの頭を掴みながら穴の中へ入っていく。

明日菜

「ネギ！私達も行くわよ！！」

ネギ

「は、はい！」

そして最後に、ネギ一行が穴の中へ入っていく。

シューーン！！

すると、穴は閉じるように消えていく。

？

「せいぜい頑張るんだな……………ポケモンだけの世界でな……………」

スーッ……………

そう言い残すと、黒コートの人物は姿を消してゆく。

とある海岸

ネギ

「う、うん……あれ？僕は一体……。」

ネギがうつすらと目を開けると、辺り一面に海岸が目に入る。

ネギ

（確か僕達は、あの黒コートの人が開けた穴に入って………それよ
り、此処は何処なんだろう？）

カモ

「………ふわぁ、よく眠ったぜ。」

ネギが海岸を眺めていると、砂浜で気絶していたカモが目を覚ます。

ネギ

「あ！カモ君、そこに居たんだ……………」

カモ

「ああ、いつの間にか眠っちまって……………って、うえあっ!？」

ネギの姿を見たカモが、腰を抜かすような感じで驚愕する。

ネギ

「ど、どうしたのカモ君？」

カモ

「だ、誰だオメエは!？」

ネギ

「だ、誰って……………僕はネギだよ。」

カモ

「嘘つけ！ネギの兄貴はそんなチュパカブラみてえな面してねえぞ
!！」

ネギ

（チュ、チュパカブラって……………一体どういう事？）

ネギはカモの発言に疑問を持ち、波打際の水面を覗いてみると……

ネギ

「ええー……っ!？」

ネギは水面に写った自分の姿（『ネギま!？』のスカモード）を見て驚愕する。

ネギ

（な、何で!?!どうして僕、こんな姿に……。）

明日菜

「うっん、煩いわね……。」

ネギ

「あ、明日菜さん！実は大変な事に……ふえあつ!？」

ネギが眠たそうな声を上げる明日菜の方を見てみると、まるで猪のような着ぐるみを着た三等身の明日菜（同じく『ネギま!？』のスカーモード）の姿を見て驚愕する。

明日菜

「なっ！？こ、こんな所にチュパブラが……………」

明日菜もネギの姿を見て腰を抜かす。

ネギ

「そ、その声はもしかして……………明日菜さん！？」

明日菜

「な、何でチュパブラが私の名前を知ってんのよ！？」

ネギ

「違いますよ！僕はネギですよ！！」

明日菜

「ネ、ネギ？」

ネギの言葉を聞いた明日菜は、信じられないような表情でネギを見つめる。

カモ

「この野郎！まだ兄貴の名前を騙りやがるか！！」

ネギ

「だから、僕は正真正銘のネギ・スプリングフィールドだってば」

ネギは目から涙を流しながらカモに反論する。

明日菜

(確かに、この声と喋り方は……まさか、本当にネギなの?)

明日菜は確信が無いが、『あのチュパブラはネギなんじゃないかな』と思うようになる。

明日菜

「じゃあ、聞くけど……私とネギが初めて出会った日、私が高畑先生の事で落ち込んでた時にアンタは何て言ってくれたか覚えてる？」

ネギ

「も、勿論ですよ……『魔法は万能じゃない、僅かな勇気が本当の魔法だ。』って言いました。」

明日菜

「ネ、ネギーやっぱりアンタはネギなのね!!」

ネギ本人だと確信した明日菜は、ネギの近くへと駆け寄る。

カモ

「そ、そんな馬鹿な……………それじゃ、俺っちと兄貴がどうやって出会ったか言ってみろ！」

ネギ

「僕が五歳の時、罨に掛かったカモ君を僕が助けてあげたからだよね。」

カモ

「せ、正解だぜ……………兄貴……………！」

ネギ

「カモく……………ん……………！」

ネギとカモは涙を流しながら抱き合う。

木乃香

「ふあ……………よう眠ったわ……………。」

刹那

「うーん、いつの間にか眠ってたのか……………」

のどか

「お、おはようございます……………」

ネギと明日菜は木乃香達の方を見てみると……………。

ネギ&明日菜

「!?!?」

ネギと明日菜は、コアラのような着ぐるみを着た三等身の木乃香と鶴のような着ぐるみを着た三等身の刹那とオットセイのような着ぐるみを着た三等身ののどか（いずれも『ネギま!?!?』のスカモード）の姿を見て目を疑った。

明日菜

「ま、まさか……………木乃香と刹那さん、それに本屋ちゃんなの?」

木乃香

「あや?こんな所にポケモンが……………でも、何だかネギ君と明日菜に似てるなあ。」

刹那

「お、お嬢様が居ない……………まさか、木乃香お嬢様の身に何かあったのでは……………」

のどか

「ネ、ネギ先生！何処行っただんですか？」

木乃香は興味津々にネギと明日菜を見つめるが、刹那とのどかは愛しい人を一生懸命探していた。

ネギ

「み、皆さん！とにかく落ち着いて下さーい！！」

ネギは木乃香達を落ち着かせて、お互いの姿が変わっている事から説明した。

木乃香

「わー、ホンマにウチも姿が変わったとるー」

波打際の水面で自分の姿を確認した木乃香は何故か嬉しそうに驚く。

のどか

「あうー、何だか私オットセイみたいですー。」

のどかは木乃香と違い、自分の姿を見て涙を流す。

刹那

「それにしても、一体何故こんな事になってしまったのでしょうか？」

ネギ

「そう言えば、あの黒コートの人が言っていました……………」

？

『お前達が向こうの世界へ行くと、空間の影響で姿が変わるかもしれんぞ。』

明日菜

「じゃあ、私達は空間の影響でこんな姿になってしまったって訳？」

カモ

「そうとしか考えられねえな……………」

木乃香

「あれ？ところで、ピカちゃん達は何処やる？」

のどか

「そう言えば、姿が見えませんか……………」。

ネギー一行はピカチュウ達を見つけようと辺りを見渡すと……………。

明日菜

「あつ！居た居た！！」

明日菜の指さす方を見ると、ピカチュウ達が波打際で倒れていた。

ネギ

「あんな所に……………行ってみましょう！」

ネギの言葉を合図に、ネギー一行はピカチュウ達の方へ駆け寄って行く。

木乃香

「ピカちゃん、しっかりして！」

木乃香は倒れているピカチュウを軽く揺さぶる。

明日菜

「……………こうして見てみると、今の私達とピカチュウ達と同じ大きさになってるのね。」

刹那

「そ、そうですね……………」

ピカチュウ

「ピ、ピカ……………」

木乃香がしばらく揺さぶっていると、ピカチュウが目を擦りながら目覚める。

木乃香

「あ！ピカちゃんが目を覚めました。」

ピカチュウ

「ピカッ！？ピカピカチュウ？」

ピカチュウは木乃香の姿を見るなり、少し警戒しながら後退りする。

木乃香

「どないしたん？そないに警戒して……………」

のどか

「やっぱり、私達だって事が分からないんですよ。」

カモ

「そりゃそつだろつなあ……………」

ルカリオ

「ん…………ん……………」

プリン

「プリン……………」

ピチュー

「ピッチュ……………」

更に続いて、ルカリオとプリンとピチューが目覚めます。

ネギ

「ルカリオさん達も起きたようですね。」

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ！」

ピカチュウは目を覚ましたルカリオ達に何かを伝える。

ルカリオ

「何？見た事無いポケモンだった？」

プリン

「プリプリ？」

ピカチュウの言葉を理解したルカリオ達はネギ達を食い入るように見つめる。

ネギ

「あの、信じてもらえないかもしれませんが……僕はネギなんです！」

ルカリオ

「何だった？じゃあ、他の連中は……」。

カモ

「ああ、皆さん達だ。」

木乃香

「ホンマなんよ……………信じて？ルカ君。」

ルカリオ

（！？そ、その呼び方は……………。）

ルカリオは木乃香の呼び方に耳を疑った。

ルカリオ

「……………失礼。」

ネギ

「えっ？」

ルカリオ

「……………。」

ルカリオはネギの額に手を乗せて、目をつむりながら黙り込んでしまっ

ルカリオ

「うむ、確かにこの波導はネギだ……………どうやら本当のようだな。」

ピカチュウ

「ピカピ？」

ルカリオ

「ああ、姿が変わっているが……………彼らは間違いなくネギ達だ。」

プリン

「プリユ!？」

ルカリオの言葉を聞いたプリンとピカチュウは耳を疑った。

木乃香

「流石ルカ君や……………波導で相手を見極めるなんてな……………」

ネギ

「波動つて、凄いですね……………」

ネギ一行は改めて波導の凄さに感心する。

ルカリオ

「……………それより、どうしてそんな姿になってしまったんだ？」

刹那

「私達もよく分からないのですが……………どうやら、空間の影響だと思われるんです。」

ピチュー

「ピチュー〜？」

ピチューは刹那の言葉が理解出来ずに首を傾げる。

ゼニガメ

「ゼニ、ガメガメ……………」

フシギソウ

「フ、フシ……………」

リザードン

「グウウ……………」

すると、ピカチュウ達の後ろで倒れていたゼニガメ、フシギソウ、リザードンが目を覚ます。

明日菜

「あーアンタ達も起きたようね……………」。

ルカリオ

「ん？トレーナーの姿が見えないが……………」。

ゼニガメ

「ゼニ！？ゼニゼニ？」

ポケモントレーナーが居ない事に気付いたゼニガメが辺りを見回す。

フシギソウ

「フシ、フシフッシ！」

フシギソウが指さす方向を見ると、波打際に赤い帽子が流れていた。

ルカリオ

「あの帽子はトレーナーの……………」。

のどか

「まさか、何かあったんでしょっか……………」。

ネギ

「皆さん！手分けしてトレーナーさんを探しましょうー！」

そう言つと、全員その場から散り散りになっていく。

〔数時間後〕

ネギ一行とピカチュウ達は、先程の海岸よりも少し離れた十字路へとやって来た。

ネギ

「海岸をあれだけ探しても居なかったって事は………何処かへ行ってしまったんでしょうか？」

ルカリオ

「うむ………もしそうだとしても、そう遠くへは行ってないはずだ。」

「

ゼニガメ

「ゼニ……………」

フシギソウ

「フシ……………」

リザードン

「グウウ……………」

ゼニガメ達はトレーナーが心配で落ち込んでしまつ。

木乃香

「元気出して、きっと見つかるから……………」

明日菜

「そつそつ……………あれ？」

刹那

「どつかしました？」

明日菜

「あんな所に建物があるけど……。」

明日菜の指さす方向を見ると、坂道の頂上に建ってる小さな建物があつた。

木乃香

「ホンマや……何か、屋根の部分がプリンちゃんに似てるなあ。」

プリン

「プリ？」

プリンは木乃香の言葉に一瞬耳を傾ける。

ルカリオ

「いや、アレはむしろ進化形のプリンだろ。」

ネギ

「とにかく、あそこで色々聞いてみましようか。」

カモ

「ああ、まずは情報収集だ。」

そう言つと、ネギ達は小さな建物に向けて歩き出していく。

く小さな建物前く

ネギ達は小さな建物の近くへとやって来た。

刹那

「……………随分変わった建物ですね。」

木乃香

「そかな？めっちゃ可愛ええやん。」

ネギ

「では、早速入ってみましょう……………」

そう言つて、ネギが地面に敷き詰められた金網部分に足を入れた瞬

間……。

？

「ポケモン発見！ポケモン発見！！」

ネギ

「うわっ！？」

ネギは突然何処から聞こえてくる声に驚く。

明日菜

「な、何！？何処からか声が……。」「

？

「誰の足形？誰の足形？」

？

「足形は……。えーっと……。うーんと……。」「

？

「デイグダ、早く応答しろ！」「

ルカリオ

(デイグダ?)

ルカリオは声の主の言葉に耳を傾ける。

デイグダ

「えっ」とね……………わ、分からない……………」

?

「何!? 分からないってどういう事だ!?!」

デイグダ

「だ、だって……………こんな足形のポケモンなんて見た事無いもん。」

?

「何を情けない事を……………足の裏の形を見て、どのポケモンか見極めるのが見張り番であるお前の仕事だろ!」

デイグダ

「そ、そんな事言ったって……………分からないものは分からないよ。」

「

ネギ

「……………何だか、揉めてますね。」

ネギ達はこの状況に困惑する。

？

「……………まあいい、とにかく入ってもらえ。」

ガアーーツ！！

すると、建物の入り口を塞いでいた柵が開門される。

明日菜

「あ、柵が開いた。」

のどか

「……………入ってもいいって事でしょうか？」

ルカリオ

「多分そうだろう……………気が変わらない内に入った方がいい。」

ネギ

「そ、そうですね……………皆さん、入りましょう。」

そう言つと、ネギ達は建物の中へ入ってゆくのであった……。

第四十一話　姿が変わった！？（後書き）

怪しげな建物に入ったネギ達に待ち受けるのは？

因みに、文中でもお伝えしたように、今のネギ達は『ネギま！？』のスカモードの姿になっています。

更に、ネギ達が辿り着いた世界は……… 皆さん分かりますよね？

第四十二話　ギルドのポケモン達（前書き）

ギルドの基地にやって来たネギー行とピカチュウ達に待ち受けるのは？

第四十二話　ギルドのポケモン達

　ある建物・地下一階

ネギー行とピカチュウ達は小さな建物の地下一階へとやって来た。

ネギ

「へえ、中は意外と広いですね。」

ピカチュウ

「ピカピカ。」

？

「おい、お前達。」

明日菜

「えっ？」

ネギ達は声がした後ろの方を向くと、そこには顔の部分が音符の形したオウムのようなポケモンが居た。

木乃香

「あつ！音符ポケモンのペラップや。」

ペラップ

「ほお、私も有名になったものだな……いかに私がプクリン親方率いる『ギルド』の一番弟子の一人ペラップである」

全員

「……………」。

ネギ達は信じられないような表情でペラップを見つめる。

ペラップ

「……………ど、どうした？私の顔に何か付いてるか？」

明日菜

「……………な、何でポケモンが喋ってんのよ？」

ルカリオ

（おいおい……………それを言うなら、私とミュウツーはどいつする？）

ルカリオは心の中で明日菜にツッコミを入れる。

ペラップ

「は？何を可笑しな事を言ってるんだい？」

明日菜

「いや、だって……………むぐっ！？」

木乃香

「な、何でもあらへんよ。」

木乃香は明日菜が喋っている最中に両手で口を塞ぐ。

ペラップ

「そ、そうか……………それより、我がギルドへ何しに来たんだい？勧誘やアンケートだったらお断りだよ。」

ネギ

「ち、違いますよ……………僕達はただ、人を探してまして……………。」

ペラップ

「ヒト？ヒトとはヒトデマンの事か？」

刹那

「いえ、そうではなくて……………私達はこの帽子の持ち主である人間

を探してるんです。」

刹那はゼニガメが大事そうに抱き抱えながら持っているトレーナーの帽子に指さす。

ペラップ

「に、人間だつて!？」

ペラップは刹那の言葉に耳を疑った。

ペラップ

「ハ……………ハハ……………アハハハハハハハハハハ!!」

しばらく黙り込んだ後、ペラップは腹を抱えながら笑い出す。

明日菜

「な、何よ!？何が可笑しいっていうのよ!？」

ペラップ

「だ、だつて……………お前達があまりにも可笑しな事を言うから……………アハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

そう言うと、ペラップは再び笑い出してしまふ。

ルカリオ

「では、此処には人間は居ないと？」

ペラップ

「当たり前だ！第一、もし本当に人間が居たら今頃大騒ぎになっているぞ。」

全員

「……………」

ネギ達はペラップに聞こえないようにひとかたまり一塊になって話し始める。

カモ

「兄貴、どうやらあの黒コートの奴が言った事は本当のようだな。」

ネギ

「うん、そのようだね……………」

明日菜

「じゃあ、この世界にはポケモンしか居ないって事？」

ルカリオ

「そういう事だな。」

木乃香

「へえ、何かロマンチックやな。」

刹那

「お嬢様、そんな呑気な事を言ってる場合ではありませんよ……………」

刹那は木乃香の呑気な発言に苦笑いする。

のどか

「あの、私思ったんですけど……………」

ネギ

「何ですか？」

のどか

「ひょっとしたら、トレーナーさんも私達と同じように姿が変わってるかも……………」

ゼニガメ&フシギソウ&リザードン

「!?!」

のどかの言葉を聞いたゼニガメ達は耳を疑った。

ルカリオ

「うむ、それは有り得るな……もしペラップの言う通りに人間であるトレーナーがうろついてたら大騒ぎになる。」

ネギ

「そうですね……でも、本当に姿が変わってたとしたら探すのが困難になりますね。」

ピカチュウ

「ピカチュウ……。」

ネギ達は更に困惑した状況に頭を抱える。

ペラップ

「……おい、さっきから何をコソコソと話してるんだ?」

?

「ペラップ〜、セカイイチはまだ〜？」

すると、地下二階へ続く梯子からプリンより少し細長くて耳が長いポケモンが現れる。

ペラップ

「お、親方様！しばらくお待ちを……………」

ペラップはプリンそっくりのポケモンを見るなり動揺する。

木乃香

「あっ！今度はプリンちゃんの進化形のプクリンちゃんや。」

プリン

「プリ……………」

プリンは複雑そうな表情でプクリンを見つめる。

プクリン

「ん？……………ねえペラップ、この子達は誰？」

ペラップ

「え？あ、ああ！それがですね……………」

プクリン

「あ、待って！まだ言わないで。」

ペラップ

「へ？」

ペラップはプクリンの発言に首を傾げる。

プクリン

「この子達が誰なのか、僕が見事に当ててみせるよ。」

そう言うと、プクリンは大きな瞳でネギ達を食い入るように見つめる。

ネギ

「あ、あの……………僕達は……………」

プクリン

「大丈夫、ちゃんと当てるから……………うんとね……………」

明日菜

(な、何なの？このポケモンは……。)

明日菜はプクリンの行動に少し呆れる。

プクリン

「あ！分かった……君達は立派な探検隊になりたくてこの『ギルド』へ修行しに来たんじゃ？」

全員

「えっ!？」

全員プクリンの言葉に耳を疑った。

ペラップ

「え？そうだったの？」

明日菜

「そんな訳ないでしょ！大体何で私達が探検隊なんて……。 」

ルカリオ

「待て、明日菜。 」

明日菜が誤解を解こうとするが、突然ルカリオが制止する。

明日菜

（な、何よ？）

ルカリオ

（プクリンを見てみる。）

ルカリオに言われた通りにプクリンの方を見ると、先程まで笑顔だった表情が険しくなっていた。

ネギ

（な、何か凄く怒ってるみたいですね……………。）

ルカリオ

（あのプクリンから凄まじい位の波導が秘められている……………だから、これ以上あまり気に障るような発言は裂けた方がいい。）

明日菜

（そ、そうね……………しかも、プクリンの隣に居るペラップが酷く怯えてるし……………。）

明日菜の言う通りに、ペラップは体を震わせながら怯えていた。

ルカリオ

（それに、探検隊というのも悪くないと思うぞ。）

刹那

（えっ？どついう事ですか？）

ルカリオ

（探検隊というのは、未知の場所や宝が眠る危険な洞窟を探検すると聞いた……………トレーナーやミウツウがそういった場所に居るとしたら、探検隊という肩書きが色々と役立つかもしれない。）

ネギ

（成程、手掛かりを得られるには絶好のチャンスって訳ですね。）

プクリン

「……………ねえ、さっきから何コソコソ話してるの？」

プクリンが少し不機嫌そうな感じでネギ達に問い質す。

ネギ

「……………そうです！僕達は一人前の探検隊になりたくて此処へやっ

て来ました。」

プクリン

「……………そっか、やっぱりね」

ネギの答えを聞いたプクリンは、先程とは打って変わって笑顔になる。

ペラッブ

「何だ、それならそうと早く言えばいいのに」

プクリン

「それじゃ、みんな付いて来て。」

ネギ達はそのままプクリン達の後を付いて行く。

↳地下二階・プクリンの部屋↳

ネギ達は地下二階にあるプクリンの部屋へとやって来た。

プクリン

「まず、君達にこれを渡しとくね。」

そう言うと、プクリンはネギに箱らしき物を渡す。

ネギ

「これは何ですか？」

プクリン

「いいから開けてごらん。」

プクリンに言わせて、箱を開けてみると……………。

木乃香

「わゝ、何かいっぱい入ってる。」

プクリン

「まずバッチみたいなものがあるでしょ？それは『探検隊バッチ』と
いって、探検隊の証なんだ。」

ネギ

「探検隊の証……………ですか。」

ネギ達はモンスターボールに羽根が付いたようなバッチ（探検隊バッチ）を眺める。

プクリン

「次に此処ら辺の地形が印されてるのが『不思議な地図』で、鞆みたいな物が『トレジャーバツク』だよ。」

ルカリオ

「地図と道具を入れる鞆か……………確かに探検には必需品だな。」

プクリン

「さて、探検隊セットも渡したし……………君達のチーム名を教えて？」

ネギ

「えっ！？チ、チーム名ですか？」

ネギ達はプクリンからチーム名について聞かれて困惑するが……………。

明日菜

「はい！それなら私考えましたー！！」

全員

「えっ！？」

全員明日菜の発言に耳を疑った。

刹那

「ほ、本当ですか？」

明日菜

「勿論よ！たつた今思い付いたの。」

ルカリオ

「ほお……………それじゃ、聞かせてもらおうか。」

ピカチュウ

「ピカピカツ！」

明日菜

「私達のチーム名は……………ネギポケ探検隊よ！」

全員

「……………？」

今度は全員明日菜の考えたチーム名に啞然とする。

明日菜

「どお？良いセンスでしょ？」

ネギ

「は、はあ……………」

木乃香

（何か、ネギ君の名前とポケモンという単語を張ってくっつけただけって感じやな……………」

ルカリオ

（何の捻りも無いな……………」

ピチュー

「ピッチュ〜！」

パチパチパチッ！

全員唾然とする中、何故かピチューだけが嬉しそうに拍手する。

明日菜

「うんうん、ピチューは気に入ってくれたようね」

そう言いつと、明日菜はピチューの頭を撫でながら上機嫌になる。

プクリン

「ネギポケ探検隊か……うん、良い名前だね」

明日菜

「でしょ？ やっぱ、私ってセンスあるわ〜。」

全員

「……………」。

全員明日菜の自信過剰な態度に呆れ返る。

プクリン

「それじゃ、早速登録登録　っど……………」。

そう言いかけると、プクリンは大きく息を吸い込んで……………。

プクリン

「たぁー……っ!!」

全員

「!?!」

プクリンの大きな声が部屋中に響き渡る。

プクリン

「おめでとう!これで今日から君達は探検隊だよ」

ネギ

「そ、そうですね……ありがとうございます。」

カモ

（ってか、今のは一体何だったんだ!?)

カモを含む一部のメンバーは先程のプクリンの大声に疑問を持つ。

プクリン

「でも、最初は見習いだから頑張って修行してね……………ペラップ、後は頼んだよ。」

ペラップ

「はい、分かりました……………お前達、私に付いて来なさい。」

ネギ

「は、はい！」

そう言うと、ペラップはプクリンの部屋から出て行き、ネギ達もその後を付いて行く。

プクリン

（何だか、此処もまた賑やかになりそうだなあ……………友達 友達）

ネギ達が出て行くのを見送ったプクリンの表情が自然と笑顔になる。

↓地下二階・広場↓

ネギ達はペラップに案内されて、地下一階と同じ広さの場所へとやって来た。

ペラップ

「今からこの『ギルド』で修行してるお前達の先輩達を紹介するから、少しの間だけ此処待っていてくれ。」

そう言い残すと、ペラップは地下一階へ続く梯子へと登っていく。

木乃香

「うーん……………」

明日菜

「どうしたの木乃香？何か考え込んでるけど……………」

木乃香

「ウチ、プクリンちゃんの声聞いててな……………さっきから何か引っ掛かるんや。」

のどか

「引っ掛かるって……………何がですか？」

木乃香

「それが分からへんのや……………」

そう言うと、木乃香は腕を組んで深く考え込む。

刹那

「お嬢様、そう深く考え込まないでもっと軽い気持ちになった方が……………」

木乃香

「あっ！分かった！！」

突然木乃香は刹那の言葉の途中で大声を上げる。

ネギ

「な、何が分かったんですか？」

木乃香

「せつちゃんの声を聞いたらピーン！と来たんや……………プクリンちゃんの声とせつちゃんの声が似てるって事をな。」

全員

「……………はい？」

全員木乃香の発言に目を丸くする。

明日菜

「あ！でも、言われてみれば確かに似てるわね……………」

木乃香

「せやろ？あの声はどう聞いてもせつちゃんの声やったわ。」

刹那

「……………そ、そうですか？そんなに似てました？」

明日菜&木乃香

「うん、似てた！」

刹那の問いに明日菜と木乃香は同時に頷く。

刹那

「は、はあ……………」

ルカリオ

(それは、ただ単に声質が似てるだけなのでは……………。)

ルカリオが心の中で、そう思っていると……………。

ペラップ

「みんな、待たせたな。」

ペラップが数匹のポケモンを連れて戻ってきた。

?

「何だ何だ？見慣れないポケモンもいるぞ。」

?

「きゃー！でも、とっても可愛らしいですわー！」

ペラップ

「「」から、静かにせんか！」

ペラップがそう言うと、ポケモン達は静かになる。

ペラップ

「え、それでは改めて紹介しよう……彼らは、ついさっきギルドに入門した新入り達だ。」

ネギ

「よ、宜しく願います……。」

ネギはいつものように深くお辞儀する。

？

「ハイハイ！礼儀正しい子だねえ。」

？

「感心でゲスね。」

ギルドのポケモン達はネギの礼儀正しさに感心する。

ペラッブ

「それじゃ、みんなも軽く自己紹介するんだ。」

？

「よし！まずはワシから……ワシは入り口の門番を担当してる下
ゴームだ、宜しくな！」

最初に頭の上にスピーカーカーのような耳に大きな口を持つポケモンがネギ達に自己紹介する。

？

「ハイハイ！オイラはハイガニってんだ。」

次にザリガニのような姿をしたポケモンが自己紹介する。

？

「私はチリーンといいます、どうぞ宜しく。」

その次に風鈴のような風貌のポケモンが丁寧に自己紹介する。

？

「私はキマワリですわ、困った事があればいつでも声を掛けて下さいます。」

ネギ

「あ、ありがとうございます。」

そのまた次にヒマワリのような姿をしたポケモンが自己紹介する。

？

「グヘヘヘ、ワシはこの地下二階でトレード店を運営してるグレッグルだ。」

ネギ

「ト、トレード店って何ですか？」

グレッグル

「気になるなら、後で大きな壺が置いてある所へ来な。」

そう言うと、グレッグルと名乗る青い蛙の姿をしたポケモンは不気味に笑う。

ディグダ

「ぼ、僕はギルドの入口の見張り番を担当してるディグダです！」

ルカリオ

「では、入口で声を発してたのはお前だな？」

ディグダ

「はい、僕は金網の上に立ってるポケモンの足形を見てポケモンを判別するのが僕の仕事なのですが………残念ながら、貴方の足形は判別出来ませんでした。」

ディグダという名前で、地面から筒形の顔したモグラのようなポケモンはネギの顔を見るなり俯いてしまう。

明日菜

「まあ、ネギや私達の足形が分からないのはしょうがないと思うけどね……………」

木乃香

「そやなく、ウチらポケモンやないし……………」

ペラップ

「ん？何か言ったか？」

明日菜

「い、いえ！別に何も……………」

明日菜はペラップの問いに何とかごまかす。

？

「次は私だな……………私はディグダの父であり、掲示板の更新作業を担当しているダグトリオだ。」

次に自己紹介したのは、まるでディグダの頭が三つあるような姿のポケモンであった。

のどか

「掲示板って何の事ですか？」

ペラップ

「ああ、その事については明日説明するから。」

？

「えっと、最後はあつしでゲスね……あつしはビツパでゲス。」

最後に丸々とした体に大きく突き出した前歯に太い尻尾を持つポケモンが自己紹介する。

ペラップ

「以上がこのギルドで修行してるポケモン達だ……分からない事があったら、私や彼らに聞くといい。」

ネギ

「はい、分かりました！」

ピカチュウ
「ピツカチュ！」

ネギが返事した後、ピカチュウも同じように返事をする。

ペラップ

「では、次にお前達の寝所を案内するから付いて来なさい。」

ネギ達は再びペラップの後を付いて行くのであった……。

ビツパ

「うっ……うっ……。」

すると、突然ビツパが泣き出しそうになる。

ドゴーム

「お、おいビツパ！急にどうしたんだ！？」

ビツパ

「い、いや……久しぶりに後輩が出来て……嬉しくて涙が……。」

キマワリ

「……………相変わらず涙もろいですわね。」

キマワリはビツパの涙もろさに呆れる。

ハイガニ

「ところで、あいつら此処ら辺じゃ見慣れないポケモンだけど何処から来たんだろうな？」

チリーン

「きつと、此処よりずっと遠い所から来たんですよ。」

ダグトリオ

「そうだな……………特にあの五匹（ネギ、明日菜、木乃香、刹那、のどか）は見た事が無いぞ。」

デイグダ

「僕だって、あんな足形は今まで見た事無いよ。」

グレッグル

「グヘヘヘ、そんなに気になるなら明日本人に聞けばいいじゃないか。」

ギルド全員

「うっ……………」

グレッグルの一言で、ドゴーム達は言葉を詰まらせる。

キマワリ

「で、でも……………もし何か事情があったら悪いですし……………」

ヘイガニ

「そ、そうそう！あまり詮索するってのもな……………」

グレッグル

「まあ、あいつらが何物であろうとワシには関係無いがな、グへへへへ……………」

そう言い残すと、グレッグルは不気味な笑い声と共に立ち去っていく。

ドゴーム

「……………さて、ワシらも仕事に戻るか。」

ビツパ

「それでゲスね……………」

他のメンバーもその場から立ち去ってくた……。

「ギルド・弟子の部屋」

ネギ達はペラツプの案内で、草藁くわらがベッドのように地面に敷かれた部屋へとやって来た。

ペラツプ

「此処がお前達が寝泊まりする部屋だ……とは言っても、この部屋だと最低でも三人位しか寝れないな。」

明日菜

「……………ねえ、これがベッドなの？」

明日菜は草藁のベッドを不満げに指さす。

ペラッブ

「ああ、そうだけど……どうかした？」

明日菜

「いや、どうかしたって……むぐっ!？」

ルカリオ

「何でも無い、話を続けてくれ。」

明日菜が文句を言おうとした瞬間、ルカリオが咄嗟に明日菜の口を防ぐ。

ペラッブ

「わ、分かった……部屋はまだあるから、自分達で部屋の割り当てとかを決めといてくれ。」

ネギ

「分かりました。」

ペラッブ

「それじゃ、私はこれで……。」

ペラップはその場から立ち去っていく。

明日菜

「あゝあ、こんな草のようなベッドで眠るなんて……………」。

木乃香

「別にええやん、コレはコレで素敵やし……………」。

ネギ

「それより、部屋の割り当てを決めましょう。」

〈数分後〉

話し合いの結果、部屋の割り当ては『ネギ・明日菜・ピカチュウ・ピチュー』『木乃香・刹那・のどか・プリン』『ルカリオ・ゼニガメ・フシギソウ・リザードン』という結果になった。

ネギ

「……………ふう、やっと決まりましたね。」

明日菜

「それにしても、お腹空いたわね……………」。

チリンチリーン！

突然鈴のような音色が響き渡る。

刹那

「何の音でしょうか？」

チリーン

「皆さん、ご飯ですよー！」

木乃香

「お、丁度ええな。」

ネギ

「それでは、早速食堂へ向かいますでしょうか。」

ピカチユウ
「ピツカア！」

ネギ達はそのまま食堂へと向かうのであった……………。

くとある夜道

ギルド基地から遠く離れた夜道で、一つの人影が立っていた。

？

「おのれ……………奴は一体何処へ……………だが、何処へ隠れようとも……………必ず見つけ出してやる……………」

スッ！！

すると、人影がその場から姿を消していった。

第四十二話〜ギルドのポケモン達〜（後書き）

こうして、探検隊となったネギ達はその後どうなるのか？

最後にどうでもいい捕捉ですが、『ポケモンサンデー』内で放送されたアニメ版『ポケモン不思議のダンジョン』でプクリンの声を担当したのは、『魔法先生ネギま！』で桜咲刹那の声を担当した小林ゆうさんです。

第四十三話　ネギポケ探検隊の初仕事（前編）　（前書き）

ギルドで修行する事になったネギー行とピカチュウ達ですが、果たしてポケモントレーナーとミュウツウの行方は？

第四十三話、ネギポケ探検隊の初仕事（前編）

「ギルド・弟子の部屋」

ネギ

「すう……すう……。」

明日菜

「ムニヤムニヤ……うん、まだ後五分……いや、十分
十五分……二十分……。」

ピカチュウ

「チュウ……チュウ……。」

ピチュー

「パイ……パイ……。」

早朝、ネギ達は気持ち良さをそくに眠っていた。

ドゴーム

「やっぱりまだ眠ってるな、すう……。」

ネギ達の部屋へやって来たドゴームは、大きく息を吸い込んで……。

ドゴーム

「おおー……い！起きろおー……！朝だぞおー……」

ドゴームの大きな声が部屋中に響き渡る。

ネギ

「う……う……あ、頭が痛い……。」

明日菜

「な、何て馬鹿デカイ声なの……。」

ピカチュウ

「ピ、ピカチュ……。」

ピチュー

「パイ……パイ……。」

ネギ達は頭を押さえながら起き上がるが、ピチューだけが気持ち良さそうに眠り続けていた。

ドゴーム

「早く起きろ！朝の朝礼が始まるぞー！」

ネギ

「ちょ、朝礼ですか？」

ドゴーム

「そうだ！お前も早く来いよ……さて、他の奴らも起こしてくるか。」

そう言つと、ドゴームはネギ達の部屋から出て行く。

明日菜

「あゝ、まだ耳がキーンってなる……。」

ネギ

「とにかく、急いで支度しましょう。」

ピカチユウ

「ピカ……ピカピカ。」

ピチュー

「ピ、ピチュー？」

ピカチュウが眠っているピチューを優しく揺さぶると、ピチューは目を擦りながら起き上がる。

明日菜

「あんな馬鹿デカい声で起きないなんて……この子、別の意味で凄いわね。」

カモ

「た、確かに……。」

明日菜はピチューの（別の意味での）凄さに苦笑いする。

くギルド・地下二階

ネギ達は急いで部屋を出ると、ギルドのポケモン達や木乃香達が集まっていた。

ネギ

「み、皆さん……………おはようございます。」

木乃香

「お、おはようさん。」

木乃香は頭を押さえながらネギに挨拶する。

ネギ

「どうしたんですか？頭でも痛いんですか？」

木乃香

「いや、実はなあ……………」

刹那

「先程、ドゴームさんの大きな声で起こされました……………」

のどか

「お蔭で目が覚めたのですが、あまりにも大きな声だったので少し頭痛が……………」

プリン

「プリユ……………」

刹那達も木乃香と同じように頭を押さえる。

ルカリオ

「うう……………ま、まだ耳鳴りが……………」

ゼニガメ

「ゼニゼニ……………」

フシギソウ

「フツシ……………」

リザードン

「グウウ……………」

ルカリオ達も同じように頭を押さえていた。

明日菜

（やっぱり、他のみんなもあいつに起こされたんだ……………。）

明日菜は頭を押さえる木乃香達を見て苦笑いする。

ペラッパ

「親方様、全員揃ったところで一言お願いします。」

プクリン

「ぐぐぐぐぐ……ぐぐぐぐぐ……」。

プクリンはパツチリと目を開けたまま寝息を立てながら眠っていた。

ネギ

（……………何か、眠ってるみたいですね。）

明日菜

（まさか、だって目開いてるし……………。）

ペラッパ

「……………寝ておられる。」

ズルッ！！

ペラップの言葉を聞いた明日菜は、その場で勢い良くすっ転ぶ。

明日菜

(う、嘘……………。)

木乃香

(やっぱり眠ってたんや……………。)

ルカリオ

(ある意味器用だな……………)。

明日菜達はプクリンの器用さ(？)に啞然とする。

ペラップ

「そ、それでは最後にいつもの誓いの言葉を言うよ！せーの……………」
「

ギルドメンバー全員

「一つ！『仕事は絶対サボらない！』」

二つ！『脱走したらお仕置きだ！』」

三つ！『みんな笑顔で明るいギルド！』」

ペラップ

「さあ、みんな！仕事に掛かるよ」

ギルドメンバー全員

「おおー！ー！ー！ー！ー！」

そう言つと、ギルドのポケモン達はそれぞれの持ち場へと駆け出していく。

ネギ

「……………他の皆さん、行っちゃいましたね。」

のどか

「私達はこれからどうすればいいんでしょうか？」

ペラップ

「おい、お前達は私に付いて来なさい。」

そう言わせて、ネギ達はペラップの後を付いて行くのであった。

「ギルド・地下一階」

ネギ達はペラップに連れられて、地下一階の左側にある掲示板の前にやって来た。

刹那

「この掲示板は何ですか？」

ペラップ

「これは『依頼掲示板』といって、各地のポケモン達の依頼が此処に集まってるんだ。」

木乃香

「ほなら、その依頼の中から好きなのを選んで探検するって事やな？」

ペラップ

「まあ、簡単に言えばそういう事だな……どれ、お前達はまだ初心者だから私が選んでやるう。」

そう言っていると、ペラップは依頼掲示板を食い入るように見つめる。

ペラップ

「うむ、どれがいいかな……………お！コレがいいな。」

ペラップは一枚の依頼書をネギ達に見せる。

ネギ

「え〜っと、何々……………」
『お願いします！キザキの森で迷子になった息子のキャタピーを探して下さい！バタフリーより』と書いてあります。」

明日菜

「……………って、これってただ迷子のポケモンを探すだけ？」

ルカリオ

「内容的に言えば、そういう事だな。」

明日菜

「え〜、何かつまんな〜い……………」

木乃香

「そやなく、探検隊いうたら宝探しとか未知の場所へ行くっちゅう

イメージがあるし……………」

ペラップ

「何言ってるの！見習いには下積みが必要なんだから、今のお前達にはピッタリの仕事だよ！」

明日菜&木乃香

「うう〜っ……………」

明日菜と木乃香はペラップの言葉を聞いて不満げになる。

のどか

「でも、一つの依頼で私達全員で行くっていうのもどうかと……………」

「

ペラップ

「う〜む、それもそうだな……………じゃあ、お前達は全員で十二匹いるから四匹ずつに分かれて三チームで別行動すればいいじゃないか

「

ネギ

「成程、それはいいアイデアですね！」

明日菜

「アンタ、意外と頭いいわね〜！」

ペラップ

「意外って何だい！私は親方様の一番弟子だよ！？」

ペラップは明日菜の言葉に怒り出す。

ネギ

「では、四人ずつという事なので部屋割りの時に決めたメンバーで宜しいですか？」

明日菜

「いいんじゃない？」

ルカリオ

「それでは、次に先程の依頼を誰が受けるか決めなくては……………」。

木乃香

「せやったら、ウチらがその依頼を引き受けてもええやるか？」

ネギ

「僕は構いませんけど、他の皆さんはどうですか？」

明日菜

「意義無し！」

ピカチュウ

「ピカピカ！」

明日菜とピカチュウが答えると、他のメンバーも頷く。

ネギ

「という事で、この依頼は木乃香さん達にお任せします！」

木乃香

「やったあ」

木乃香は嬉しそうに飛び跳ねながら喜ぶ。

ペラップ

「よし、残り二チームの依頼も私が選んであげよう………あ！コレ
なんかいいんじゃないか？」

そう言うと、ペラップはもう一通の依頼書をネギに渡す。

ネギ

「何々……」 「大変なんです！私の大事な真珠を無くしてしまったんです！場所は湿った岩場だと思っておりますが、私の代わりに大事な真珠を探し出して頂けないでしょうか？お願いします！！バネブーより」 と書いてあります。」

カモ

「やれやれ、今度は物探しの依頼かよ……。」

ネギの肩で依頼書を眺めていたカモは内容に呆れ返る。

ルカリオ

「この依頼は誰が受ける？」

ゼニガメ

「ゼニツ！」

ゼニガメが勢い良く手を挙げる。

ルカリオ

「ゼニガメが手を挙げたって事は、私達のチームか……私は構わないが、フシギソウとリザードンはどうだ？」

フシギソウ

「フシフツシー！」

リザードン

「グオオオツ！」

フシギソウとリザードンは威勢良く答える。

ルカリオ

「そうか、問題無しか……………ネギ達もそれでいいか？」

ネギ

「はい、僕達は他の依頼を受けますから大丈夫です。」

ペラップ

「さてと、他に簡単そうな依頼は……………」

ペラップが再び掲示板を見た時……………。

？

「あの、すみません……………」

ピカチュウ

「ピカ？」

ネギ達が声かした方を向いてみると、大きな耳とハネツ毛が特徴で尻尾の先端が星のような形をしてる四足歩行のポケモンが居た。

木乃香

「あっ！閃光ポケモンのコリンクや！」

明日菜

（出た、木乃香の『歩くポケモン図鑑』が……………。）

そう思いながら、明日菜は横目で木乃香を見つめる。

コリンク

「突然で申し訳ありませんが、貴方達は探検隊ですか？」

ネギ

「え？ええ、一応……………。」

コリンク

「そうですね………お願いします！妹を助けて下さい！！」

コリンクはネギの言葉を聞いた途端、まるで土下座するかのようにはしゃがみ込む。

明日菜

「ちょ、ちょっと！？いきなり何なのよ？」

プクリン

「どうしたの？何だか騒がしいけど………」

突然プクリンが顔を傾げながら現れる。

ペラッパ

「あ！親方様………実は、このコリンクがいきなり『妹を助けてくれ』『』と言い出しまして………」

プクリン

「という事は、依頼人だね………ねえ君、もうちょっと詳しく話してくれるかな？」

コリンク

「は、はい………僕の妹が重い病気になってしまい、医者はこのま

までは死んでしまうとされたんですが、解毒作用に効果があるという『ガバイトの鱗』があれば助かると聞いたんです。」

プクリン

「成程、要するに『ガバイトの鱗』を取ってきてほしいんだね……
…勿論この依頼引き受けるよね？」

そう言うと、プクリンはネギ達の方を見る。

ネギ

「はい！その依頼、僕達が引き受けます！」

明日菜

「でも、その『ガバイトの鱗』って何処に行けば手に入るの？」

プクリン

「それだったら心配いらないよ、『迷宮の洞窟』に居るガバイトから鱗を貰えばいいよ。」

ペラップ

「め、『迷宮の洞窟』ですと！？」

プクリンの言葉を聞いたペラップは驚愕する。

ペラッブ

「親方様、まだ見習いの彼らに『迷宮の洞窟』は厳しいのでは……
…それに、あそこのガバイトは非常に気性が荒いと聞いております。」

プクリン

「うーん、そうだね……じゃあ、キマワリと一緒に連れて行かせれば問題無いんじゃない？」

ペラッブ

「それはいいアイデアですね！何せ、キマワリはあの『不死身のゴースト』を捕らえた優秀な探検隊員ですからな。」

ペラッブはプクリンのアイデアに納得する。

ペラッブ

「という訳で、お前達の探検には先輩のキマワリと同行してもらおうからな？」

ネギ

「は、はい！」

くギルド・入口前く

ネギ達はペラップから事情を聞いたキマワリと対面していた。

キマワリ

「話はペラップから聞きましたわ、私が一緒に居れば鬼に金棒ですわ」

明日菜

「は、はぁ……………」

明日菜はキマワリの明るさに苦笑いする。

ネギ

「と、とにかく今日一日宜しく願います。」

そう言つと、ネギはキマワリに向かって深々とお辞儀する。

キマワリ

「きゃー！何て礼儀正しい子ですのー！食べちゃいたいですわー！」

カモ

（きゃーきゃーうるせえな……………。）

異様に興奮するキマワリにカモは少し不愉快になる。

刹那

「で、では私達は『不思議な地図』を頼りに『キザキの森』へ向かいますので……………」

ルカリオ

「我々も『湿った岩場』に向かう……………ここからは別行動だな。」

ネギ

「そうですね、また後で会いましょう。」

こうして、木乃香チームとルカリオチームはそれぞれの場所へ向かって行く。

明日菜

「それじゃ、私達も行きますか！」

ネギ

「はい！」

キマワリ

「おっと、その前に私達は寄る所がありますわよ。」

ピカチュウ

「ピカピ？」

キマワリの言葉にピカチュウは首を傾げる。

キマワリ

「トレジャータウンのカクレオンが経営してる商店で必要な道具を調達しに行くのですわ。」

明日菜

「トレジャータウン？」

ネギ

「それって何処にあるんですか？」

キマワリ

「すぐそこですわ。」

そう言いつと、キマワリは歩み始める。

ネギ

「あ、待って下さい！」

ネギ達はキマワリの後を追いつけるように駆け出していく。

くトレジヤータウン・カクレオン商店前く

？

「……し……し……し……」

トレジャータウンにある沢山ある店の中で、カメレオンの姿をした
緑と紫の体色のポケモンがネギ達に挨拶する。

キマワリ

「此処がカクレオン商店ですわ。」

ネギ

「では、この店で買い物をするんですか？」

キマワリ

「そういう事ですわ……………ところでご主人、商売は繁盛していますの
？」

カクレオンA

「ええ！お蔭様で儲かっていますよ。」

カクレオンB

「ところで、今日は何をお買い上げになります？」

キマワリ

「そうですね……………それでは、『パワーバンドナ』一つと『防御
スカーフ』二つずつと『幸せリボン』二つずつくださいませ。」

カクレオンA

「は〜い、毎度ありがと〜ございませ〜す!」

そう言うと、緑色のカクレオンはキマワリが注文した商品を全て渡す。

キマワリ

「はい、貴方達にはコレをお渡ししますわ。」

キマワリはネギと明日菜に『防御スカーフ』を渡す。

明日菜

「……………何これ?ただのスカーフじゃない。」

キマワリ

「いいえ、違いますわ……………コレは『防御スカーフ』といって、このスカーフを付けていると防御力がアップするんですよ。」

ネギ

「つまり、このスカーフを付けていると敵の攻撃を防いでくれるんですね?」

キマワリ

「まあ、そういう事ですわね……………ほら、早速首に巻き付けてみて
」

明日菜

「え、ええ……………」

ネギと明日菜は首元に『防御スカーフ』を巻き付ける。

キマワリ

「きゃー！二人共、よく似合ってますわー！」

ネギ

「そ、そうですか？」

ネギと明日菜はキマワリに絶賛されて苦笑いする。

キマワリ

「さてと、貴方達には『幸せリボン』をお渡ししますわ。」

そう言いつと、キマワリはピカチュウとピチューに『幸せリボン』を渡す。

ピカチュウ
「ピカチュウ？」

ピカチュウは首を傾げながら『幸せリボン』を覗き込むように見る。

キマワリ

「これは『幸せリボン』といって、敵にダメージを与えられた分だけ経験値が得られるんですのよ。」

ネギ

「……………え〜っと、要するに敵にダメージを受けた分だけ強くなるって事ですか？」

キマワリ

「そうですね！貴方は礼儀正しいだけでなく、理解力もあるんですわね〜」

ネギ

「い、いえ……………ただ、何となくですよ……………」

ネギはキマワリに褒められて、頬を少し紅く染める。

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ。」

ピチュー

「ピッチュ。」

ピカチュウとピチューは『幸せリボン』を首元に付ける。

キマワリ

「きゃー！……っちも可愛らしいですわー！」

ピチュー

「ピピッチュ〜」

キマワリに絶賛されたピチューは嬉しそうに走り回る。

明日菜

「……………ねえ、そろそろ出発しない？」

キマワリ

「そ、そうですね……………それでは、『迷宮の洞窟』へ向けて出発ですわよ〜」

ネギ

「は、はい！」

こうして、ネギ達は『迷宮の洞窟』へ向けて出発するのであったが……。

？

「ククククツ……おい、今の聞いたか？」

？

「へへっ、勿論ですぜ。」

？

「ケツ、あいつら『迷宮の洞窟』へ行くらしいな……。」

ネギ達が去った後、物陰から三匹のポケモンが現れる。

？

「ところで、ズバットにドガースよ……此処ら辺じゃ見掛けねえポケモンも混じってたみてえだが……。」

スカンクのような姿をしたポケモンが蝙蝠ポケモンのズバットと毒ガスポケモンのドガースに問い掛ける。

ズバット

「何でも、昨日ギルドに入門したばかりの新入りみたいですぜ。」

ドガース

「ケツ、新入りのクセに『迷宮の洞窟』に行くなんて生意気だよな。」

？

「全くだ……そうだ！俺達が一足先に『迷宮の洞窟』に行つて、俺達がガバイトをやっつけて『ガバイトの鱗』を頂いちまおうぜ。」

ズバット

「成程！奴らの手柄を俺達『ドクローズ』が横取りするんですね。」

ドガース

「そりゃ、いい考えだ……流石はスカタンクの兄貴だぜ。」

スカタンク

「ククククツ、まあな……よし！そうと決まれば、奴らより先に『迷宮の洞窟』に向かうぞ！！」

ズバット&ドガース

「おおーっ！っ！」

『ドクローズ』と名乗るポケモン達は、そのまま勢い良く駆け出していくのであった……。

第四十三話　ネギポケ探検隊の初仕事（前編）　（後書き）

ガバイトの鱗を手に入れる為に迷宮の洞窟へ行く事になったネギチ
ーム&キマワリに何が待ち受けるのか？

第四十四話〜ネギポケ探検隊の初仕事（後編）〜（前書き）

コリンクの依頼を引き受けたネギ・明日菜・ピカチュウ・ピチュー
は『ガバイトの鱗』を手に入れる為にキマワリと一緒に『迷宮の洞
窟』へ向かうのであった……………。

第四十四話、ネギポケ探検隊の初仕事（後編）

「 迷宮の洞窟」

ネギチームとキマワリは『迷宮の洞窟』へとやって来た。

キマワリ

「此処が『迷宮の洞窟』ですわ……………」

明日菜

「この奥にガバイトっていうポケモンが居るのね……………」

ピチュー

「ピ、ピチュ……………」

ピカチュウ

「ピカ……………」

ピチューは震えながらピカチュウの背中へと回り込む。

ネギ

「皆さん、ここから先は気をつけて進みましょう。」

明日菜

「そうね……………よし！ネギポケ探検隊出動よー！！」

ピチュー

「ピッチュー！」

明日菜の掛け声を合図に、ネギ達はそのまま進んでいく。

↓ 迷宮の洞窟・中部 ↓

明日菜

「あ！そう言えば……………」

しばらく進んでいると、突然明日菜が何かを思い付く。

ネギ

「どろしたんですか？」

明日菜

「今思ったんだけど……アンタ、こんな姿でも魔法を使えるの？」

ネギ

「あ！そう言われてみれば……。」

明日菜

「それに、私も『ハマノツルギ』を呼び出せるかどうか……。」

カモ

「だったら、試しに呼び出してみれば？」

明日菜

「それもそうね……アデアット……！」

パァー……ッ……！

明日菜がいつものように呪文を唱えると、光と共に『ハマノツルギ』が現れる。

キマワリ

「きゃー！い、いきなり何ですの〜!？」

先頭を歩いていたキマワリは、突然の異変に困惑する。

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ！」

すると、ピカチュウが激しく動揺するキマワリを落ち着かせる。

明日菜

「あっ！出た出た……………けど、何だか小さくなってるような……………」

「

明日菜の言う通り、『ハマノツルギ』は猪のような明日菜の姿に合スカモードわせて一回り小さくなっていた。

ネギ

「た、確かに……………」

カモ

「うーん……………でも、一応使えるんじゃないか？」

明日菜

「そうかなあ……………じゃあ、試しにあの岩を壊してみるわ。」

そう言うと、明日菜は大きな岩場を指さす。

明日菜

「それじゃ、行くわよ……………とりゃー！！！」

ガッシャー————ン！！

明日菜が岩場に向けて『ハマノツルギ』を勢い良く振り下ろすと、岩は木っ端微塵に粉碎される。

キマワリ

「きゃー！きゃー！今度は何事ですの〜！？」

キマワリは更に大きな衝撃音に困惑する。

カモ

「す、凄え……………破壊力はそのままかよ……………。」

ネギ

「さ、流石は明日菜さん……………」

ピチューー

「ピチューピッチュ〜」

パチパチッ！

ネギとカモは明日菜の馬鹿力に啞然とするが、ピチューは嬉しそうに拍手をする。

明日菜

「は〜っ、何だかスッキリした〜！」

明日菜はスッキリしたような表情でネギ達の元へ戻ってくる。

キマワリ

「あ、貴方達！さっきから一体何を騒いでますの!?!？」

キマワリは少し怒ったような表情でネギ達に怒鳴り付ける。

ネギ

「す、すみません……………ちょっと試したい事があったので……………」

キマワリ

「……………まあ、その素直さに免じて許してあげますわ。」

そう言つと、キマワリの表情が笑顔に変わる。

ネギ

「あ、ありがとうございます！」

明日菜

「そんじゃ、急いで先へ進みましょう！」

ピカチユウ

「ピツカチユー！」

再び明日菜の掛け声を合図に、ネギ達は洞窟の奥へと進んでいく。

〈迷宮の洞窟・最深部〉

キマワリ

「……………変ですわね。」

しばらく進んでいくと、キマワリがポツリと呟く。

明日菜

「変って何が？」

キマワリ

「さっきから進んでいるのに、ポケモンが一匹も出て来ないんですの。」

ネギ

「え？こんな暗い洞窟にポケモンが出て来るんですか？」

キマワリ

「ええ……………でも、こういうダンジョンに出て来るポケモンは探検隊である私達に襲い掛かってくるんですの。」

明日菜

「だったら、出て来ない方がいいんじゃないの？」

キマワリ

「それはそうなんだけれど……………一匹も現れないなんて、あまりにも奇妙ですわ。」

カモ

（兄貴、ひよっとしたら俺達以外に誰かがこの洞窟に潜んでいるんじゃない……………。）

ネギ

（ま、まさか……………。）

ネギとカモがキマワリに聞こえないように話していると……………。

？

「うっ……………うっ……………」。

ピカチュウ

「ピカッ？」

明日菜

「い、今……………呻き声が聞こえなかった？」

ネギ

「はい、あっちの方から聞こえましたね……………」

キマワリ

「行ってみましょう！」

そう言っつて、ネギ達がしばらく進んでいくと……………。

全員

「あっ!?!」

ネギ達の目に写ったのは、全身ボロボロで倒れてるズバット、ドガース、スカタンクの三匹だった。

キマワリ

「あっ! 貴方達は『ドクローズ』の……………」

キマワリはスカタンク達を見て驚愕する。

ネギ

「その怪我はどうしたんですか？」

ドガース

「ケツ……ガバイトにやられちゃった……。」

明日菜

「ガ、ガバイトに!？」

明日菜はドガースの言葉に耳を疑った。

ズバット

「へへっ……ガバイトに『鱗をよこせ!』って言ったら『バトルに勝つたらくれてやる!』って言われて……そしたら、この様さ……。」

キマワリ

「ん? ちょっと待って! 何で貴方達が鱗の事を……。」

ズバット

「あっ……。」

キマワリの言葉にズバットは真っ青になる。

スカタンク

(この馬鹿……………。)

キマワリ

「まさか、貴方達……………『ガバイトの鱗』の事を聞いて、この子達の仕事を横取りしようとしていたんじゃない……………」

スカタンク

「ククククツ、バレちゃったか……………そうさ、お前らみたいな新入りが『迷宮の洞窟』へ行くつてのが無性に気に入らなかつたからな……………」

明日菜

「な、何ですって!?!」

ネギ

「明日菜さん!落ち着いて下さい……………」

ネギはスカタンク達を『ハマノツルギ』で叩こうとしてる明日菜を必死で制止する。

キマワリ

「やっぱり貴方達って、ペラップの言う通りで最低のチームですわ

ね……………それに、臭いし……………」

ズバット

「へへっ、最低のチームか……………」

ドガース

「ケッ、俺達にしてみれば褒め言葉にしか聞こえないぜ……………」

スカタンク

「だが、臭いってのは余計だな……………」

スカタンクはキマワリの最後の言葉について愚痴を零す。

スカタンク

「お前ら、悪い事は言わねえ……………」
『ガバイトの鱗』は諦めて帰った方がいいぜ。」

ピカチュウ

「ピカッ!？」

ピカチュウはスカタンクの言葉に耳を疑った。

スカタンク

「何せ、奴は俺とドガースの『毒ガススペシャルコンボ』を難無く避け切れた程の強敵だからな……………新入りのお前らじゃ手も足も出ねえぜ。」

ネギ

「それでも……………」

スカタンク

「何？」

ネギ

「……………それでも、僕達は先に進みます！コリンクさんの妹の為にも！！」

明日菜

「ネギ……………」

ピカチュウ

「ピカピ……………」

明日菜とピカチュウはネギの言葉に心打たれる。

キマワリ

「よく言いましたわ！その意気ですわよー！」

スカタンク

「ククククツ、好きにшина………せいぜい俺達のようにスタボロにされねえようにな………」。

明日菜

「フン！私達はアンタ達とは違うのよ………ネギ！早く行くわよー！」

ネギ

「は、はい！」

ネギ達はそのまま奥へと進んでいく。

スカタンク

「………何だか、あいつらを見ると奴らを思い出すな。」

ズバット

「へへっ、それって『ポケダングズ』の事ですかい？」

ドガース

「ケツ、言わせてみれば似てるかもな………」。

そう呟きながら、スカタンク達は何処か懐かしい気分でネギ達を見送る。

〈迷宮の洞窟・奥底〉

ネギ達は洞窟の更に奥へとやって来た。

キマワリ

「そろそろガバイトが現れるはずですわ……。」

？

「おいおい、また来たのか？」

全員

「!?!?」

ネギ達が声がした方を向くと、背中や腕に鮫の鱭のような器官を持った小型の肉食恐竜のような姿のポケモンが高い岩場の上に立っていた。

キマワリ

「きゃー！ガ、ガバイトですわ〜！」

ガバイト

「ん？さっきの連中とは違うようだな……………」

ガバイトはネギ達を食い入るよう見つめる。

ネギ

「ガ、ガバイトさんお願いします！貴方の鱭を分けて下さい！」

ピカチュウ

「ピカピカ！」

ガバイト

「やれやれ、またかよ……………」

ガバイトは呆れたような表情を浮かべる。

ネギ

「お願いします！コリンクさんの妹の命が掛かってるんです！」

ガバイト

「そんなの俺の知った事か！ドイツもコイツも『鱗くれ！』『鱗くれ！』ってよ……ったく、冗談じゃねえつつうの……！」

明日菜

「何よ！その言い方……鱗の一枚や二枚くらい分けてくれたっていいじゃない……！」

ガバイト

「何度言われようと答えはNOだ！……どうしても鱗が欲しかったら、俺とバトルして勝ったら鱗をくれてやらあ……！」

ドッシー……ン……！」

次の瞬間、ガバイトは勢い良く地面へと着地する。

キマワリ

「四人共！来ますわよ……！」

明日菜

「ネギ、やるしかないようね……………」。

ネギ

「そのようですね……………」。

ピカチュウ

「ピカピッカ!!」

ネギ達は一斉に戦闘体制へと移る。

ガバイト

「へっ、そこなくっちゃな……………喰らえ! 『砂地獄』!!」

ザアーーーーッ!!

ガバイトがネギ達に向けて大量の砂を放つと、まるで竜巻のようにネギ達を囲む。

明日菜

「な、何コレ!?!」

キマワリ

「きゃー！『砂地獄』ですわー！！」

ピチュー

「ピチュ……………」

ピチューは怯えながらピカチュウに寄り添う。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル！逆巻け春の嵐 我らに風の加護を……………風花旋風・風障壁！！」

ブオー……………ツ！！

ガバイト

「な、何！？」

ネギが呪文を唱えると、竜巻のような巨大な風の障壁が砂の竜巻を吹き飛ばす。

ビュウウウツ……………

しばらくすると、風の障壁が静かに消えていく。

キマワリ

「きゃー！あんな強力な『風起こし』は見た事ありませんわー！！」

キマワリは先程の風の障壁に興奮状態になる。

ガバイト

「ほお、結構やるじゃねえか………そんじゃ、そろそろ本気出すか！！」

そう言うと、ガバイトはネギ達に向かって突っ込んでくる。

ピカチュウ

「ピ~~~~カ~~~~チュウウウツッ！！」

バリバリバリバリッ！！

ピカチュウはガバイトに『十万ボルト』を放つが……………。

ガバイト

「フン！俺に『十万ボルト』なんか効かねえよ！！」

ピカチュウ

「ピカピッ！？」

ガバイトはピカチュウの攻撃を微動だにせず、そのまま突っ込んでいく。

明日菜

「な、何でピカチュウの攻撃が効いてないのよ！？」

キマワリ

「ガバイトはドラゴンタイプと地面タイプのポケモン……地面タイプのポケモンに電気技は通用しませんわ。」

ネギ

「じゃあ、僕の雷魔法も……………」

ガバイト

「そついう事だ！』『ドラゴンクロー』！！」

ドガァー……ッ……！！

ピカチュウ

「ピカーーッ!!」

ガバイトの攻撃が命中して、ピカチュウは吹っ飛ばされる。

キマワリ

「ピカチュウ!!」

明日菜

「この〜!よくもピカチュウを!!」

明日菜は『ハマノツルギ』を持ちながらガバイトに向かって突っ込んでいく。

ガバイト

「次は貴様だ!『ドラゴンクロー』!!」

ネギ

「明日菜さん!危ない!!」

ドガアッ!!

ガバイトの攻撃が明日菜に命中するが……………。

明日菜

「……………あ、あれ？そんなに痛くなかった。」

キマワリ

「きつと『防御スカーフ』のお蔭で、ダメージを半減されたんですわ！」

ガバイト

「な、何だと!?!」

キマワリの言葉を聞いてガバイトは驚愕する。

明日菜

「へえ〜、コレって便利ねえ……………さてと、今度は私の番よ!?!」

パツシーーーーーッ!!

ガバイト

「ぐおおおおっ!?!」

明日菜が咄嗟に『ハマノツルギ』でガバイトに強力な一撃を加える。

キマワリ

「私も負けてられませんわ……………『葉っぱカッター』!!」

バシューーーーーッ!!

ガバイト

「がああああッ!!」

キマワリの『葉っぱカッター』がガバイトに直撃する。

ガバイト

「な、何だ……………この威力は……………」

キマワリ

「これが『パワーバンダナ』の力ですわね」

明日菜

「そんじゃ、これで終わらせてあげるわ!!」

そう言うと、明日菜はガバイトに攻撃を繰り返す……。。

ガバイト

「マ、マズイ……………」 『メロメロ』! !」

パァー……ッ!!

明日菜

「うわっ! ?」

ガバイトが放ったハート型の光弾が明日菜に命中する。

キマワリ

「い、今の攻撃はまさか……………」。

キマワリ

「そら! 貴様も喰らうがいい! !」

パァー……ッ!!

キマワリ

「きゃっ!？」

キマワリにもガバイトが放ったハート型の光弾が命中する。

ネギ

「だ、大丈夫ですか？」

ネギが慌てて明日菜達に駆け寄った瞬間……。

キマワリ

「きゃー！よく見たらガバイト様って魅力的ですわ〜!!」

明日菜

「た、高畑先生よりも渋くて素敵かも……。」

明日菜とキマワリは目をハートにしてガバイトを見つめる。

ネギ

「ど、どうしちゃったんですか？」

ガバイト

「俺の『メロメロ』で、コイツらは俺にメロメロ状態になり戦闘不能になっちまったんだよ。」

カモ

「な、何だって!？」

ネギとカモはガバイトの説明を聞いて耳を疑う。

ガバイト

「さうて、コイツらが『メロメロ』から覚めない内に残りの奴らを始末するか……………」。

すると、ガバイトの視線がピチューへと向けられる。

ピチュー

「ピチュー?」

ネギ

「ま、まさか……………」。

ガバイト

「決めた!まずはあのチビから仕留める!」

そう言うと、ガバイトはピチュー目掛けて突っ込んでいく。

ネギ

「やっぱり！あんな小さい子まで……………」

ネギは咄嗟に背中に背負わせてる杖（原寸大よりも一回り小さい）を取り出す。

ネギ

（お願い！いつものように飛んで……………」

ビビュッ！！

ネギが杖に跨がった瞬間、杖はガバイトに向けて飛び出していく。

ネギ

「やった！飛んだ！！」

カモ

「兄貴！そんな事よりアレを……………」

ネギ

「え？……………あっ！！」

ガバイト

「喰らえ！『ドラゴンクロー』！！」

ガバイトはピチューに攻撃を繰り返して来るが……………。

シュン！！

ガバイト

「！？」

ガバイトが鋭い爪を降ろした瞬間、ピチューはその場から姿を消す。

ネギ

（い、今のはまさか……………瞬動？）

ガバイト

「ど、何処へ行きやがった！？」

ピチュー

「ピッチュ！」

すると、突然ピチューが三匹になってガバイトの横に現れる。

カモ

「な、何だ！？あいつ三匹に増えてるぞ!？」

ガバイト

「チツ、『影分身』か……………チビのクセに舐めた真似してくれるじやねえか!！」

ガバイトはピチューに向けて鋭い爪を振り下ろすが、分身したピチューが軽々と避ける。

ガバイト

「くそっ！ちょこまかと……………」

ガバイトが攻撃に気を取られていると……………。

ピカチユウ

「ピッカーーーッ!！」

ドガアーーーッ!！」

ガバイト

「ぐふっ!？」

ピカチュウの頭突きがガバイトの顔面に命中して、ガバイトは勢い良く吹っ飛ばされる。

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ？」

ピチュー

「ピチューピ〜！」

ピカチュウは心配そうにピチューの安否を尋ねると、ピチューは元気良く答える。

ネギ

「ふう〜っ、どつやら無事みたいだね……………」。

ピカチュウ達の元へ駆け付けたネギはホッと胸を撫で下ろす。

ガバイト

「うぐぐ……………さっきの『ロケット頭突き』は効いたぜ……………」。

ガバイトは顔を押しさえながらゆっくりと立ち上がる。

ピカチュウ

「ピカッ!!」

すると、突然ピカチュウがガバイトに向かって駆け出していく。

ガバイト

「ちくしょ〜!調子に乗るんじゃないねえ!!」

ガバイトがこちらへどんどん向かってくる。ピカチュウに攻撃を仕掛けようとするが……………。

ネギ

「風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ……………魔法の射手・戒めの風矢!!」

ズバァー……ッ!!

ネギが放った魔法弾がガバイトに命中する。

ガバイト

「な、何だこれ!? 『金縛り』か?」

ガバイトはネギの拘束魔法で身動きが取れなくなる。

ピカチュウ

「ピツカーーツ!!」

バツシーーーーーン!!

ガバイト

「ぐわあああつ!!」

ピカチュウの強力な体当たりがガバイトの腹部に直撃する。

ガバイト

「い、今のも……………効いたぜ……………」

ボタン!!

次の瞬間、ガバイトはそのまま倒れ込む。

カモ

「よっしゃー！ やっつけたぜー!!」

ピチューー

「ピッチュ〜」

パチパチッ！

ピチューーはいつものように嬉しそうに拍手する。

キマワリ

「きゃー！ ガバイトが倒れてるわー!!」

明日菜

「アンタ達、いつの間にかっつけたの？」

ガバイトの『メロメロ』から目覚めた明日菜とキマワリが啞然とした表情でネギ達の方へ近寄ってくる。

カモ

「おっ！ 姐さん達も目を覚ましたようだな。」

明日菜

「え？何の事？」

ネギ

「覚えてないんですか？さっきバイトさんの技でメロメロに……
……」

カモ

（兄貴！ちょっと待った！！）

ネギが説明しようとしたら、カモが小さい声で制止する。

ネギ

（な、何？）

カモ

（好きでもない奴にメロメロになってたなんて知ったら、姐さん達はショックを受けちゃうよ。）

ネギ

（そ、そうなの？）

カモ

(ああ……………だから、黙つといた方がいいぜ。)

ネギ

(うん、分かった……………)。

ネギは渋々とカモの意見に承諾する。

明日菜

「ちよつと、何コソコソ話してるのよ?」

ネギ

「い、いえ!何でもありません!」

明日菜

「?」

明日菜は訳が分からず首を傾げる。

キマワリ

「それより、早く『ガバイトの鱗』を……………」。

ネギ

「あー！そうでした……………って、あれ？」

ネギがガバイトの方を見ると、倒れていたハズのガバイトの姿が無かった。

ネギ

「可笑しいなあ、さっきまで此処に倒れてたのに……………」

ガバイト

「俺は此処に居るぞ。」

全員

「!?!」

ネギ達が声に反応して後ろを向いてみると、そこにはガバイトが立っていた。

ピカチュウ

「ピカッ！」

明日菜

「コイツ、まだやる気なの!？」

ネギ達は再び戦闘体制へと移るが……………。

ガバイト

「もう身構えなくていいぞ……………ほら、受け取りな。」

そう言うと、ガバイトは一枚の鱗をネギに渡す。

ネギ

「え? いいんですか?」

ガバイト

「最初に言っただろ? バトルに勝ったら鱗をやるってな。」

明日菜

(何だ、コイツって意外と紳士的じゃない。)

明日菜はガバイトの紳士的な態度に感心する。

ネギ

「あ、ありがとうございます!」

ガバイト

「こつちこそ久々に良いバトルが出来たぜ！」

ガバイトにお礼を言ったネギは『迷宮の洞窟』を後にした……………。

↓ギルド・地下一階↓

ギルドに帰って来たネギ達は、コリンクに『ガバイトの鱗』を渡した。

コリンク

「ありがとうございます！これで妹の病気も治ります！！」

コリンクは深々とお辞儀しながらネギ達にお礼を言う。

コリンク

「あの、お礼にこの『レントラーの牙』を受け取って下さい。」

そう言うと、コリンクはネギに『レントラーの牙』渡す。

ネギ

「そんな、別にお礼なんて……………」

コリンク

「遠慮しないで受け取って下さい！これが報酬のようなものですか
ら……………」

明日菜

「そう？じゃあ、遠慮無く……………」

ペラップ

「ちょっと待った！」

次の瞬間、ペラップがネギから『レントラーの牙』を取り上げる。

明日菜

「ちよっと！何すんのよ！？」

ペラップ

「こついうお宝は親方様に預けるのがギルドのしきたりだ……だから、この『レントラーの牙』も預かっておくぞ」

そう言うと、ペラップは『レントラーの牙』を持ったままプクリンの部屋へ飛び立っていく。

明日菜

「ムカつく〜！私達の報酬なのに……。」

ネギ

「まあまあ、しきたりなら仕方ないですよ……。」

ネギは今にも怒り出しそうな明日菜を必死に宥める。

木乃香

「みんな〜！」

ネギ達は声がした方を向いてみると、木乃香やルカリオ達がこちらへ駆け寄って来た。

ネギ

「皆さん、先に帰ってたんですね。」

のどか

「は、はい……………」

のどかを含むネギ・明日菜・ピカチュウ・ピチュー以外のメンバーは何故か浮かない表情をしていた。

明日菜

「みんな、どうしたの？何かあったの？」

ルカリオ

「……………これを見れば分かる。」

そう言うと、ルカリオは『依頼掲示板』とは反対側にある掲示板に指をさす。

ネギ

「あの掲示板は？」

刹那

「ペラップさんの話によると、様々な悪事を働いたポケモンが張り出されている『お尋ね者ポスター』だそうです。」

のどか

「そのお尋ね者のポケモンを捕まえるのも私達の仕事みたいなんです。」

ネギ

「そうなんですか……ところで、この掲示板がどうかしたんですか？」

ルカリオ

「とにかく、目を凝らして掲示板を見てくれ。」

ネギ達はルカリオに言われて、掲示板を見てみると……。

ピカチュウ

「ピ、ピカッ!?!」

ネギ

「こ、これは……。」

明日菜

「嘘でしょ……。」「

ネギ達は『お尋ね者ポスター』にミュウツーの指名手配書を見つけて目を疑った。

木乃香

「ウチらもコレを見た瞬間ビックリしたわ……………」

カモ

「何々……………」この凶悪ポケモンは各ダンジョンに出没しては、探検隊のポケモンを徹底的に痛めつけてから去っていくという恐るべき犯行を繰り返している』と書いてあるな……………」

ネギ

「どうして、こんな酷い事を……………」

ルカリオ

「……………奴の身に一体何が起こったんだ？」

ピカチュウ

「ピカピ……………」

ネギ達はしばらくの間、掲示板の前で立ち尽くしていた……………。

第四十四話、ネギポケ探検隊の初仕事（後編）（後書き）

ミュウツーが指名手配されている事を知ったネギ達はショックを隠せなかった……………。

第四十五話、チャームズと宝探し（前書き）

ミュウツーがお尋ね者になっていたと知ったネギ達はどつするの？

タイトル通りに、今回は彼女が登場します！

第四十五話くチャームズと宝探し

くギルド・地下二階く

全員

「三つ！『みんな笑顔で明るいギルド』！..」

ペラッ

「さあ、みんな！仕事に掛かるよ」

全員

「おおー！..」

いつものように朝の朝礼が終わると、ギルドのポケモン達はそれぞれの持ち場へと散らばっていく。

ルカリオ

「それにしても、我々がこのギルドで修行して五日位経ったな.....」
「.....」

ネギ

「そうですね.....でも、トレーナーさんの行方やミュウツーさんの居所も未だに分からず仕舞いですし.....」

明日菜

「困ったわね……………」

ピカチュウ

「ピカ……………」

ネギは未だにミュウツーやトレーナーの手掛かりを掴んでいない状況に落ち込んでしまう。

ヘイガニ

「ヘイ！そんな所で何やってんだい？」

のどか

「えっ？」

ネギ達は声が出た方を向くと、そこにはヘイガニとダグトリオが居た。

ダグトリオ

「少し元気が無いようだが……………何か悩み事でもあるのか？」

ネギ

「い、いえ………ちょっと考え事を………」

ヘイガニ

「ヘイヘイ！考え事なら落ち着ける場所の方がいいんじゃないか？」

木乃香

「落ち着ける場所？」

ヘイガニの提案を聞いた木乃香は首を傾げる。

ダグトリオ

「それだったら、『パッチールのカフェ』なんかがいいんじゃないか？」

明日菜

「カフェ？この辺りにそんな所があるの？」

ヘイガニ

「ああ、ギルドから出て坂を下ると交差点があるだろ？そこに開いた穴の中に『パッチールのカフェ』があるんだ。」

ネギ

「穴？そんなのありましたっけ？」

刹那

「さ、さあ……………」

ネギ達は確信が無く、一斉に首を傾げる。

ヘイガニ

「ヘイ！何だったら今からでも行って来いよ。」

ネギ

「で、でも……………」

ダグトリオ

「仕事だったら一日くらい休んでも問題無い……………それに、休息も必要だぞ？」

木乃香

「ネギ君、ヘイガニはん達がそう言うところから、みんなでカフェへ行ってみよ？」

ネギ

「うーん……………そうですね！息抜きにみんなでカフェへ行きましょう」

う。」

プリン

「プリプリ」

ピチュー

「ピッチュ」

ネギの言葉に感激したプリンとピチューは嬉しさのあまりに飛び跳ねる。

明日菜

「そんじゃ、早速行ってみましょ！」

そう言うと、ネギ達は一階へ続く梯子へと登っていく。

ダゲトリオ

「……………ヘイガニ、あの子達を見ていると彼らを思い出さないか？」

ヘイガニ

「ん？彼らつてもしかして…………『ポケダンス』の事か？」

ダグトリオ

「ああ、何語にも一生懸命に取り組むところかな……………」

ヘイガニ

「そう言えばそうだな……………あいつら、今頃何処に居るんだろうなあ。」

ダグトリオ

「さあな……………」

そう言うと、ヘイガニとダグトリオは遠い上の空のような表情で天井を見上げる。

くパッチールのカフェく

ネギ達は交差点にある穴に入ると、客らしき数匹のポケモンや木製のテーブルが左右に四つずつ備えてある小さなカフェがあった。

ネギ

「交差点の地下にこんなカフェがあったなんて……………」

明日菜

「全然気付かなかったわ……………」

ピカチュウ

「ピカピ……………」

ネギ達は交差点の地下に存在していた『パッチールのカフェ』にしばし啞然とする。

？

「いらっしやいませえ〜！」

突然左側のカウンターから体中に渦巻きのような目に体中に斑点のような模様があるパンダのような姿をしたポケモンがネギ達に声を掛けてくる。

？

「ん〜？ひょっとして皆様はこのカフェへ来るのは初めてですかあ〜？」

ネギ

「え？は、はい……。」

？

「やっぱりいゝ、初めて見る顔だからそうじゃないかなあ〜と思ったから……初めましていゝ、手前はこの『ドリンクスタンド』を運営するパッチールと申しますいゝ。」

ネギ

「こゝ、こちらこそ初めまして……。」

パッチールと名乗るポケモンが軽くお辞儀すると、ネギもつられてお辞儀する。

パッチール

「あ、因みに反対側のカウンターに居るポケモンは『探検リサイクル』と『ビッグトレジャー』を運営しているソーナノとソーナンスですいゝ。」

ソーナノ

「宜しくナノいゝ」

ソーナンス

「ソーナンス！」

右側のカウンターに居るソーナノという名前の小さな体形のポケモンと、ソーナンスという名前のがたい体形のポケモンがネギ達に向かって軽くお辞儀をする。

パッチール

「ところでお客様、何か木の実とか持ってませんかあ〜？」

ネギ

「え？どうしてですか？」

パッチール

「手前の『ドリンクスタンド』は食材を渡して下さると、それを元にしたドリンクを作って、お客様にお出しするのがこの『ドリンクスタンド』の特徴なんですう〜。」

木乃香

「へえ〜、何か面白いなあ〜。」

明日菜

「それじゃ、私達がそれぞれ手に入れた食材で作ってもらいませよ。」

ネギ

「そうですね……皆さん、それぞれ好きな食材をパッチールさんに渡して下さい。」

そう言うと、全員それぞれ好きな食材をパッチールに渡す。

パッチール

「それでは、少々時間が掛かりますので、テーブルの方でお待ち下さうい。」

ネギ

「はい、分かりました。」

ネギ達はパッチールに言われた通りにテーブルの方へと歩み寄る。

？

「ねえ、君達。」

ネギ

「え？」

ネギ達は声が出た方を向いてみると、耳の部分と額からトゲのよう

な三本の突起がある大きな尻尾の先に水色のラインが特徴の白いリスのようなポケモンが居た。

木乃香

「あつ！電気リスポケモンのパチリスや。」

明日菜

「え〜っと、確かパチリスって……………ヒカリのポケモンだよね？」

木乃香

「そやで！それに、その愛くるしさでヒカリとロケット団のムサシでパチリス争奪戦が起こったんやで〜。」

ルカリオ

「……………一体何の話をしているんだ？」

刹那

「あまり気にしないで下さい……………」

刹那は苦笑いしながらルカリオの質問に対して、はぐらかすように答える。

パチリス

「…………あの、話を進めていいかな？」

ネギ

「は、はい！どうぞ……………」

啞然としながら質問するパチリスにネギは慌てて答える。

パチリス

「さっきマスターの話聞いてただけど、君達はこのカフェへ来るのは初めてなんだよね？」

ネギ

「そ、そうですね……………」

パチリス

「実は僕、このカフェの常連なんだけど……………此処のドリンクは本当に美味しいよ。」

のどか

「本当ですか？」

パチリス

「本ただよ 僕と同じ常連客のオクタンやバリヤードも絶賛してる

「よ。」

明日菜

「ふうん、それは楽しみね……………」

ネギ達はパチリスの言葉に少しだけ期待が膨らむ。

パッチール

「よし！出来た……………リオルくん！このドリンクをお客様の所に運んでえ〜。」

？

「は、はい！只今……………」

パッチールが誰かを呼び掛けるように声を上げると、腰元にエプロンを巻いて金属のおぼんを持ったルカリオそっくりの小型のポケモンが現れる。

ネギ

「あれ？あのポケモン……………ルカリオさんに似てますね。」

木乃香

「そらそうや、あのポケモンはルカ君の進化前のポケモンで、名前

は確か……………」

ルカリオ

「波紋ポケモンのリオルだ。」

木乃香の代わりにルカリオが答える。

リオル

「お待たせしました。」

ドリンクが入ったカップを乗せたおぼんを持ったリオルがネギ達に差し出す。

ネギ

「あ、どうも……………」

明日菜

「おっ、来た来た。」

最初に明日菜がドリンクが入ったカップを取ろうと手を伸ばした時……………」

リオル
「!?!」

ゼニガメ
「ゼニ?」

リオルはトレーナーの帽子を被ったゼニガメを見て目を大きく見開きながら驚愕する。

ガッシャーーーーーン!!

更にリオルは手に持っていたおぼんを離して、そのまま下に落とすてしまう。

明日菜

「あっ!?!ちよっと!何やってんのよ!?!」

プリン

「プリプリ!プギューイ!?!」

リザードン

「グガアアアッ!?!」

明日菜とプリンとリザードンは一斉に怒り出す。

リオル

「ハッ！？も、申し訳ありません！」

リオルは明日菜達の怒声で我に帰り、深々と頭を下げる。

パッチール

「リオル君！お客様の事は手前に任せて、君は片付けでもしててえ
〜！」

リオル

「は、はい！」

リオルは急いでネギ達の元へ駆け付けたパッチールに言われて、先程落としたおぼんや割れたカップを拾い始める。

パッチール

「本当にすいませんでしたあ……………何せ、彼は最近入ったばかりの
新人なものでえ……………」

ネギ

「い、いえ……あまり気にしないで下さい。」

ルカリオ

「……………」

ルカリオは鋭い目付きで後片付けをしてるリオルを見つめる。

木乃香

「ルカ君、そんな怖い目付きであの子を睨まなくても……………そんなに飲みたかつたん？」

ルカリオ

「い、いや……………そういう訳では……………」

パッチール

「お詫びと言っては何ですがあ、手前が一番オススメするドリンクを皆様に奢らせて下さい。」

明日菜

「ま、まあ……………そこまで言われたら許すしかないわよね？」

プリン

「プリプリ。」

リザードン

「グウウツ。」

明日菜の言葉にプリンとリザードンも納得する。

パッチール

「そ、それでは急いで作りますので少々お待ちを……………」

そう言うと、パッチールはカウンターへと戻っていく。

パチリス

「いや、大変な目にあっちゃったね……………あの子は五日前からこの店で働いてるんだけど、あんな失敗するなんてねえ。」

ルカリオ

（五日前……………確か、我々がこの世界へ来たのも五日前だったな……………）

ルカリオは横から口を挟むように話し掛けるパチリスの話を聞いて深く考え込む。

ネギ

「いつもはあんなミスはしないんですか？」

パチリス

「うん、いつも真面目に働いてたよ。」

ルカリオ

(あのリオル、まさか……。)

フシギソウ

「フシフシ？」

フシギソウは顎に手を当てて考え込んでいるルカリオを見て首を傾げる。

パッチール

「はい、お待たせしましたあ！」

突然パッチールが十二個のカップを乗せたおぼんを持って現れる。

明日菜

「えっ！！も、もう出来たの？」

パッチール

「はい、早くて上手いのが『ドリンクスタンド』のモットーなんですよ。」

ピカチュウ

「ピ、ピカピ……………」

パッチール

「それでは、ごゆっくりい〜。」

パッチールはおぼんをネギ達が使ってるテーブルに置くと、そのままカウンターの方へ戻っていく。

？「マスター、また来たわよ〜。」

すると、カフェの入口から兎のような姿で耳が長くて人間の女性に似たグラマラスな体型で頭部と腕と脚部にリストバンドとブーツのように毛を生やした魅力的なポケモンと、同じく人間の女性に近い体型で手足が長くて胸背にピンク色の逆三角形の板状の器官がある神秘的なポケモンと、同じく人間に近い姿で下半身はハーレムパンツみたいに膨らんでいるズボンを履いた個性的なポケモンが現れる。

パッチール

「あっ！いらっしやいませえ〜！いつもご来店ありがとうございます〜！」

パッチールは来店してきた三匹のポケモンを見るなり笑顔を浮かべる。

パチリス

「う、嘘……………もしかして、あの有名な探検隊『チャームズ』なの！？」

逆にパチリスは、三匹のポケモンを見て啞然とした表情で見つめる。

明日菜

「どうしたの？あのポケモン達がどうかした？」

パチリス

「えっ！？君達、あの超有名な『チャームズ』を知らないの？」

ネギ

「は、はい……………そんなに有名なんですか？」

パチリス

「勿論！『チャームズ』は『強く・賢く・美しく』をモットーに狙

ったお宝を確実に、そして華麗にゲットする魅惑のトレジャーハンターだよ。」

木乃香

「へえ、そうなんや。」

ネギ達はパチリスの説明を聞いて、『チャームズ』と名乗るポケモン達を興味津々に見つめる。

パチリス

「因みに、あの耳の長いゴージャスなポケモンがミニミロップで、その右隣りに居るおしとやかそうなポケモンがサーナイトで、更にミニミロップの左隣りに居るポケモンがチャーレムだよ。」

プリン

「プリ……。」

プリンはパチリスの説明も聞かずに、険しい表情でミニミロップ達を見つめる。

ミニミロップ

「マスター、コレでいつものヤツをお願いね。」

そう言うと、ミニロップは『白いグミ』と『金色グミ』と『橙色グミ』をパッチールに渡す。

パッチール

「はい、畏まりましたあ〜……『白いグミ』と『金色グミ』と『橙色グミ』入りましたあ〜！」

ソーナンス

「ソオオオーーーナンスッ！！」

パッチールが隣のカウンターに向かって声を上げると、ソーナンスが大声で答える。

パッチール

「あ、それ！ほ、それ！くるくる〜つと……出来上がり！」

パッチールが何回かシェイクした後でくるくる回転すると、シェイクした飲み物をカウンターに置いてあったカップに注いでいく。

チャーレム

「おお〜！相変わらず早いねえ〜。」

サーナイト

「それでは、いただきます。」

ミニロップ達がドリンクを入れたカップに口を付けると……………。

ミニロップ

「うん、やっぱりマスターが作るドリンクは美味しいわね」

サーナイト

「ええ、とても幸せな気分になるわ。」

チャーレム

「そうそう！やっぱり此处が一番だよ。」

パッチール

「ありがとうございます。」

パッチールはミニロップ達に自分が作ったドリンクを絶賛されて深くお辞儀する。

ミニロップ

「ところでマスター、そろそろアレについて教えてくれない？」

パッチール

「あゝ、そうですねえ……………皆様は『シェイミの里』をご存知ですか？」

木乃香

(えっ！？『シェイミの里』？)

パッチールの話を聞き耳を立てていた木乃香が耳をピクツ！とそそり立てながら反応する。

サーナイト

「『シェイミの里』……………噂でしか聞いた事ありません。」

パッチール

「『シェイミの里』は、名前の通りにシェイミという幻のポケモンが住んでいる場所で、その里に『空の頂き』というダンジョンがあって何処かにお宝があるという噂を聞いた事があります。」

チャーレム

「『シェイミの里』だね……………マスター、その里が何処にあるか教えてくれるかい？」

パッチール

「はいはい、場所はですね……………」

そう言いかけると、パッチールはミミロップ達にしか聞こえない位の小声で話す。

木乃香

「あ〜ん、全然聞こえへんよ〜！」

チャーレム

「なっ!?!」

チャーレムが後ろから聞こえてきた声に驚いて振り向いてみると、そこには木乃香が立っていた。

刹那

「お、お嬢様！」

明日菜

「木乃香ったら、何してんのよ!」

その後から明日菜達が慌てて木乃香に駆け寄ってくる。

サーナイト

「あ、貴方達は誰ですか？」

ネギ

「す、すみません！僕達はギルドで修行してる者です……」。

ミミロップ

「ギルド？」

ネギ

ミミロップはギルドという単語に反応する。

ミミロップ

「という事は、プクリンの所で修行してるのね。」

「え？プクリンさんを知ってるんですか？」

ミミロップ

「勿論よ。だって、私達とプクリンは昔一緒に冒険した仲間ですもの。」

ルカリオ

「ほお、あのプクリンとな……」。

ルカリオはプクリンとミニロップ達が昔の仲間と聞いて興味深そうに頷く。

木乃香

「それより、お願いがあります！ウチらも『シェイミの里』へ連れてって下さい！！」

サーナイト

「えっ!?!」

チャーレム

「な、何だって!?!」

木乃香の言葉を聞いたサーナイトとチャーレムは耳を疑った。

ネギ

「こ、木乃香さん！急にどうしたんですか!?!」

チャーレム

「ま、まさか！あたい達よりも早くお宝を手に入れようと企んでるんじゃない……。」

木乃香

「ちゃいます！ウチはただ……シエイミに会いたいただけなんです
！！」

全員

「……………へ？」

全員木乃香の発言に一瞬固まってしまう。

木乃香

「ウチ、一目でいいからシエイミを生で見たいんや……………せや
から、お願いします！一緒に連れてって下さい！！」

そう言うと、木乃香はミニロップ達の前で土下座をする。

刹那

「お、お嬢様！土下座なんてやめて下さい！！」

それを見た刹那は、慌てて木乃香の顔を上げようとする。

サーナイト

「どっするっ…ミニロップ。」

ミミロップ

「うん……。」

ミミロップは腕を組みながらしばらく考え込む。

ミミロップ

「……………いいわよ」

明日菜&チャーレム

「えっ!?!」

木乃香

「ホ、ホンマ?」

ミミロップ

「ええ、私達と一緒に行きましょ」

木乃香

「わーい!ホンマにありがとうございませ〜す!〜!」

そう言つと、木乃香はその場で「ヨン。ヨンと飛び跳ねる。

チャーレム

「ミミロップ！本当にいいのかい？」

ミミロップ

「だって、みんなで行った方が楽しいじゃない」

サーナイト

「フフ、ミミロップらしいわね……………」

サーナイトはミミロップらしい言葉に思わず微笑む。

ミミロップ

「それに、あの子達を見ていると彼らを思い出しちゃって……………」

チャーレム

「彼らって…………『ポケダンス』の事かい？」

サーナイト

「そう言われてみれば、『ポケダンス』もあの子みたいに私達に一生懸命お願いしてたわね。」

ミミロップ

「そうなの…………あの時の『ポケダンス』の目と私達に一生懸命お

願っていたあの子の目が同じだったからね……………」

サーナイト

「成程ね……………」

チャーレム

「まあ、ミニロップがそう言うならあたいはもう何も言わないよ。」

ミニロップ達はネギ達を『ポケダンス』と重ねながら見つめる。

ネギ

「それでは早速、探検に向けて色々準備しましょう！」

ピカチュウ

「ピツカア！」

こうして、ネギ達は『チャームズ』と共に『シェイミの里』へ向かう事になったのであった……………」

第四十五話、チャームズと宝探し（後書き）

チャームズと一緒に『シエイミの里』へ行く事になったネギ達ですが、果たしてこの後どうなるのか？

第四十六話、ミュウツーの目的（前書き）

シエイミを一目見ようとチャームズと一緒に『シエイミの里』へ行く
こととするネギ達ですが……。

第四十六話、ミュウツーの目的

「パッチールのカフェ」

ヘイガニ

「あれ？あいつがいねえな……………」

ヘイガニとダグトリオはネギ達の様子を見ようと『パッチールのカフェ』へとやって来た。

ダグトリオ

「もしかして、入れ違いになったかな？」

ヘイガニ

「まさか……………」

？

「オヤ、ぎるとノへいがにサンとだくとりおサンジャアリマセンカ。」

ヘイガニとダグトリオが声に反応して振り向いてみると、所々に磁石やネジが付いている UFO のような外見のポケモンが宙に浮かんでいた。

ヘイガニ

「ヘイ！ジバコイル保安官じゃないか。」

ダグトリオ

「今からこのカフェでこー服ですかな？」

ジバコイル

「イイエ、チヨット警告シニ来タノデス。」

ヘイガニ&ダグトリオ

「警告？」

ヘイガニとダグトリオはジバコイルの言葉に耳を傾げる。

ジバコイル

「実ハ、指名手配中ノみゆうつーガ『空ノ頂キ』ニ現レタツイウ通
報ヲ受ケマシタノデ、皆サンニ警告シニ言イ回ッテルンデス。」

ダグトリオ

「何だつて！？あのミュウツーが……………」

パッチール

「あ、あのお〜。」

ジバコイル

「ん？」

ジバコイルは声が出た方を向いてみると、顔色が真っ青になってる
パッチールが立っていた。

パッチール

「い、今『空の頂き』って言いましたよねえ？」

ジバコイル

「ハ、ハイ……………ソレガ何カ？」

パッチール

「た、大変だあ〜！あそこにはチャームズの皆さんとピカチュウさ
ん達が向かってますう〜！！」

ヘイガニ&ダグトリオ

「な、何だってえ！？」

ヘイガニとダグトリオはパッチールの言葉を聞いて驚愕する。

ジバコイル

「コ、コウシチャイラレナイ！急イデ応援ヲ呼バナケレバ……………」

ヘイガニ

「オ、オイラ達も親方様達に報告しなきゃな！」

ダグトリオ

「ああ、急いとうー！」

そう言うと、ヘイガニ達は急いでカフェから出て行く。

パッチール

「うーん、心配だなあ……………あれ？ところで、リオル君は何処？」

ソーナノ

「皆さんの話を聞いた途端、血相変えて出て行ったみたいナノ。」

ソーナンス

「ソーナンス！」

パッチール

「な、何ですとおー！？？」

パッチールはソーナノ達の説明を聞いて更に目を回す。

「シエイミの里」

木乃香

「わあ〜！シエイミがいつぱいやわ〜！！」

ピチュー

「ピチュピッチュ〜！」

『シエイミの里』へやって来たネギ達とチャームズだが、木乃香とピチューは側頭部に小さな花を咲かせてる緑色のハリネズミのようなポケモンの群れを見て興奮していた。

ルカリオ

「シエイミは幻のポケモン的一种と聞いていたが、こんなに沢山生

息していたとは……………」

明日菜

「まさに『シェイミの里』って感じね……………」

？

「『シェイミの里』へようこそ。」

ネギ

「えっ？」

ネギが声が出た方を向いてみると、そこには一匹のシェイミが居た。

シェイミ

「初めまして、私はシェイミと申します……………といっても、この里に居るのはみんなシェイミなんですけどね。」

ネギ

「……………丁寧にごつても……………」

ネギは丁寧に自己紹介してきたシェイミに向かって軽くお辞儀する。

シエイミ

「ひょっとして、貴方達はこれから『空の頂き』へ登られるのですか？」

ミミロップ

「ええ、そうですよ。」

シエイミ

「そうですか……もし良ければ、私が頂上まで案内しましょうか？」

サーナイト

「宜しいのですか？」

シエイミ

「勿論、それが私の役目みたいなものですから。」

チャーレム

「そりゃ、有り難いねえ……じゃあ、お願いしようかな。」

シエイミ

「それでは、私に付いて来て下さい。」

そう言つと、シエイミは『空の頂き』に向かつて歩き出していく。

明日菜

「木乃香、そろそろ行くわよ！」

ピカチュウ

「ピツカア〜！」

木乃香

「え？あつ！みんな待って〜！！」

ピチュー

「ピチューピ〜！！！」

明日菜とピカチュウの呼び掛けに反応した木乃香とピチューは急いで後を追いつける。

「ギルド・地下二階」

その頃、プクリンのギルドでは……………。

ペラップ

「な、何だって！？あの指名手配中のミュウツーが『空の頂き』に現れて……………そこにチャームズとネギポケ探検隊が居るだってえ！？」

ペラップ達がハイガニとダグトリオから事情を聞いて驚愕する。

キマワリ

「きゃー！それは大変ですわー！！！」

ドゴーム

「ど、どうすりゃいいんだあ！？」

チリーン

「みんなで助けに行きましょうー！」

ディグダ

「で、でも……………相手は凶悪なポケモンだって聞くし……………。」

ビツパ

「あっし……………ちょっと怖いでゲス……………」

そう言いながら、ギルドのポケモン達が騒いでいると……………。

プクリン

「たあ……………!!」

全員

「!?!」

プクリンの一言で、ギルドのポケモン達は一斉に大人しくなる。

プクリン

「みんな、落ち着いて!みんなで行けば大丈夫だから……………それに、何よりも大事な友達であるチャームズとネギ達がピンチなんだよ!友達に何かあつたら助け合つのが友達でしょ?」

ダグトリオ

「お、親方様……………」

ギルドのポケモン達はプクリンの言葉を聞いて心を強く打たれる。

ヘイガニ

「ヘイヘーイ！親方様の言う通りだぜ！！」

ドゴーム

「そうだ！ネギ達は俺達の仲間だ！！」

キマワリ

「ええ！仲間を見捨てられませんか！！」

ビツパ

「その通りでゲス！！」

チリーン

「それに、みんなで行けばお尋ね者なんて怖くないわ！！」

ディグダ

「そ、そうですよね！！」

ブクリン

「どつちら、みんなの思いが一つになったよつだね……………スラップ
！！」

ペラッ

「は、はい……みんな！今から全速力で『空の頂き』へ行つて、ネギポケ探検隊とチャームズを助けに行くよ！！」

全員

「おおーっ！！」

こうして、プクリン率いるギルドのポケモン達は『空の頂き』へ向けて駆け出していく。

（空の頂き・五合目）

その頃、ネギ達とチャームズはシェイミの案内で『空の頂き』の五合目までやって来た。

のどか

「はぁ……はぁ……ちょ、ちょっと待って下さい……。」

ネギ達は息切れしてるのどかに呼び止められて、その場で足を止める。

ネギ

「どつしました？」

のどか

「す、少しだけ此处で休ませて下さい……………」

木乃香

「さ、賛成……………」

プリン

「プリユ……………」

のどかの言葉に木乃香とプリンが手を挙げる。

ミミロップ

「そう言えば、あれから結構進んだわね……………」

シェイミ

「それでは、此処ら辺で少し休憩しましょう。」

シェイミがそう言つと、各自それぞれ地面へと腰掛ける。

チャーレム

「ふう、此処まで来たけどお宝は見当たらないねえ……………」。

サーナイト

「やはり、お宝は頂上にあるのかしら？」

ミミロップ

「ねえシェイミ、後どれ位進めば頂上へ辿り着けるの？」

シェイミ

「えっと、十合目まで行けば着きますよ。」

ネギ

「という事は、残り五合進めばいいんですね。」

明日菜

「……………何だか、富士山に登ってる感じね。」

ピカチュウ
「ピカチュウ？」

ピカチュウは明日菜の言葉に首を傾げる。

ミミロップ

「さて、そろそろ出発しましょう。」

シェイミ

「そうですね……皆さん、後もう少して頂上ですから頑張ってください。」

木乃香

（でも、後五合もあるんよね……）。

のどか

（私、頂上まで登れる自信無いなあ……）。

木乃香とのどかが浮かない表情をしてる中、全員立ち上がって先へ進もうとする。

くシエイミの里く

その頃、ギルドのポケモン達は『シエイミの里』で別のシエイミに事情を伺っていた。

シエイミ

「え？その方達でしたら『空の頂き』へ登られましたけど……………」。

ペラップ

「そうか、どうもありがとう……………親方様、やはりネギ達は『空の頂き』へ登られたようです。」

プクリン

「やっぱりね……………みんな！急いで『空の頂き』へ向かうよ……………」

全員

「おお……………」

プクリンの掛け声を合図に、『空の頂き』へ向かおうとするが……………

…。

シェイミ

「あ！そう言えば……………」

シェイミの言葉にギルドのポケモン達は動きを止める。

ペラッパ

「どうした？何か気になる事でも……………」

シェイミ

「貴方達の前にも、一匹のポケモンが貴方達と同じような質問をしてきて同じように答えたら『空の頂き』へ登られたのですが……………」

「

プクリン

「えっ？僕達の前にも誰かが……………」

プクリンはシェイミの言葉に耳を疑った。

ビッパ

「一体誰なんでゲスかね……………」

プクリン

「うーん……とにかく、今はネギ達を追い掛けよう！」

ペラッパ

「はい！それでは、改めて出発！」

そう言つと、ギルドのポケモン達は『空の頂き』へと突入していく。

く空の頂き・九合目く

ネギ達とチャームズはシェイミの案内で、『空の頂き』の九合目までやって来た。

シェイミ

「さて、そろそろ此処ら辺で休憩しましょう。」

木乃香&のどか

「はあ……………はあ……………さ、賛成……………」

シェイミの提案に木乃香とのどかが激しく息を切らしながら手を挙げる。

チャーレム

「え、もうちょっとで頂上なのに……………」

サーナイト

「チャーレムったら、この子達の事も考えてあげないと……………」

ネギ

「あの……………僕達は此処で少し休んでますから、ミニロップさん達は先に進んで下さい。」

ミニロップ

「でも……………」

ルカリオ

「心配いらない、休んだらすぐに追い掛ける。」

ミニロップ

「そう、そこまで言うなら私達は先へ行くけど……あまり無理しないだね。」

そう言うと、ミニロップ達は先へ進もうとするが……。

サーナイト

「あ！シェイミさんはこの子達と一緒に居てあげて下さい。」

シェイミ

「で、でも……皆さんだけで大丈夫ですか？」

チャーレム

「大丈夫！あたいらチャームズは完全無欠さ。」

ミニロップ

「その通り！私達に不可能は無くってよ。」

そう言うと、ミニロップ達はそのまま先へと進んでいく。

のどが

「す、すみません……私達の為に……。」

ネギ

「いいえ、気にしないで下さい。」

明日菜

「そうよ、私達はチームなんだし……………」

木乃香

「みんな……………」

木乃香はネギ達の温かい言葉に涙目になる。

？

「お……………い!!」

ピカチュウ

「ピカ？」

全員声をした方を向いてみると、リオルが血相を変えて駆け寄って来る。

明日菜

「あっ！？アンタはカフェの所に居た……………」

刹那

「どうして此処へ？」

リオル

「ぜえ……………ぜえ……………た、大変なんです……………お尋ね者の……………
ミユウツーが……………この辺に……………潜んでいるみたい……………なんで
す。」

全員

「ええっ!？」

ネギ達はリオルの説明を聞いて耳を疑う。

ルカリオ

「それを伝える為に此処まで追い掛けて来たというのか？赤の他人である我々の為に……………」

リオル

「そ、それは……………」

リオルはルカリオの言葉に俯いてしまう。

木乃香

「ルカ君、そないな言い方せんでも……………」

リオル

「自分でもよく分からないんです…………でも、ゼニガメ達やその帽子を見ていると何故か懐かしい気持ちになって、危ない目に遭っているかと思うと居ても立ってもいらなくなってきたんです。」

そう言うと、リオルは何処か悲しげな表情で帽子を被ってるゼニガメ・フシギソウ・リザードンを見つめる。

ゼニガメ

「ゼニゼニ？」

フシギソウ

「フツシイ？」

リザードン

「グウウツ？」

ゼニガメ達は何かを察知したかのようにリオルを見つめ返す。

ルカリオ

「やはりお前達も気付いたか……流石はお互いパートナーなだけはあるな。」

ネギ

「え？そ、それってまさか……………」

明日菜

「ちょ、ちょっと！さっきから何言ってるのか私には分からないわよ！」

ルカリオ

「つまり、このリオルが……………我々がお探しのポケモントレーナーだ。」

明日菜

「……………え？」

全員

「ええ……………!？」

全員ルカリオの言葉を聞いて驚愕する。

明日菜

「ほ、本当に？」

ルカリオ

「ああ、このリオルにはトレーナーと同じ波導を持っている……それに、ゼニガメが被っていたトレーナーの帽子を見た時のあの反応やパッチールのカフェへ働き始めたのが我々がこの世界へやって来た日付と同一という事を考えれば間違いない。」

木乃香

「でも、どうしてもリオルになっ たんやろ？」

ネギ

「それは、僕達の姿が変化したようにトレーナーさんも僕達と同じように姿が変化したんだと思います。」

リオル

「ち、違う……ぼ、僕はリオル……ポケモントレーナーなんかじゃ……うっ……！」

突然リオルは両手で頭を押さえながら屈み込む。

ゼニガメ

「ゼニゼー!?」

フシギソウ

「フシフシ!？」

リザードン

「グガアアツ!？」

ゼニガメ達は慌ててリオルに駆け寄る。

のどか

「ど、どうしたんでしょうか？」

ルカリオ

「トレーナーはこの世界へ来た時に時空の影響で記憶喪失になってしまった……恐らく、自から思い出そうとしてるんだろう。」

刹那

「成程、必死で自分と闘ってるんですね……。」

全員が心配そうにリオルを見つめていると……。

ミミロップ

「きゃあーっ……!？」

遠くからミミロップの叫び声が響き渡る。

ネギ

「い、今の声はもしかしてミミロップさん？」

明日菜

「まさか、何かあったんじゃないか……。」

刹那

「行ってみましょう！」

のどか

「でも、トレーナーさんが……。」

シェイミ

「それなら心配いりません！はあっ……！」

パアーーーーーッ！！

次の瞬間、光に包まれたシェイミは先程のハリネズミのような姿から耳と四肢が伸びた小型犬のような姿へと変化する。

プリン

「プリッ!？」

ネギ

「シエ、シエイミさんの姿が変わった!？」

木乃香

「わ〜!シエイミちゃんがランドフォルムからスカイフォルムへと変化したわ〜!！」

ネギ達は姿を変えたシエイミに驚愕するが、木乃香だけが興奮していた。

シエイミ

「私がリオルさんを八合目に居るデンリュウさんの所へ連れて行きますので、皆さんはそのまま先へ進んで下さい!！」

ネギ

「わ、分かりました!！」

シエイミ

「リザードンさん、リオルさんを私の背中へ乗せて下さい。」

リザードン

「グ、グウウツ……。」

リザードンはリオルを優しく包み込むように両手で持ち上げて、そのままシェイミの背中へと乗せる。

ルカリオ

「お前達三匹はシェイミと一緒に八合目に行け……。トレーナーの側に居てやれ。」

フシギソウ

「フ、フシフツシ！」

フシギソウを含む三匹のポケモンはルカリオの提案に頷く。

シェイミ

「それでは、お気をつけて……。」

そう言った瞬間、リオルを乗せたシェイミは走り出すかのように飛行しながら下山していく。

ゼニガメ
「ゼ、ゼニゼニ！」

ゼニガメ達も慌てながらシェイミの後を追い掛けていく。

ネギ
「では、僕達も行きましょう！」

ピカチュウ
「ピッカチュ！」

ネギ達も頂上を目指して進んでいく。

く空の頂き・頂上く

ミミロップ
「じゅじゅ……は、離して……。」

頂上には地面へ倒れ込んでるサーナイトとチャーレムの傍らで、片手を掲げたミュウツーが超能力でミニロップを宙に吊し上げていた。

ミュウツー

「もう一度だけ聞こう……『星の洞窟』でジラーチに会った探検隊とはお前達の事か？」

ミニロップ

「だ、だから……『星の洞窟』なんて……知らないって……言ってるでしょ。」

ミュウツー

「そうか……ならば、もうお前達に用は無い。」

ミニロップ

「うっ！？あ、頭が痛い……。」

ミュウツーがもう片方の手を挙げると、ミニロップは両手で頭を押さえながら苦しみます。

サーナイト

「ミミロップ……。」

チャーレム

「た、頼む……ミミロップを……離してやってくれよ……。」

ミュウツー

「フン、心配するな……後でお前達にもコイツと同じ苦しみを味あわせやる。」

ミミロップ

「な、何て卑劣な……うあっ!!」

ミミロップがより一層苦しみだした瞬間……。

ルカリオ

「波導弾!!」

ドンッ!!

ミュウツー

「づくっ!?!」

駆け付けて来たルカリオが放った波導の塊がミュウツーに命中する。

ミミロップ

「きゃあっ!!」

それと同時に、ミミロップはそのまま落下していくが……………。

ルカリオ

「おっと!!」

ガシッ!!

ルカリオがミミロップを抱き抱えるようにキャッチする。

ミミロップ

「あ、貴方は……………」

ルカリオ

「大丈夫か？怪我とかはしていないか？」

ミミロップ

「え、ええ……………助けてくれてありがとう。」

ミミロップは頬を紅く染めながらルカリオにお礼を言う。

ネギ

「ルカリオさん！」

その時、ネギ達が遅れてやって来る。

ネギ

「ミミロップさん達は無事ですか？」

ルカリオ

「ああ、ミミロップは無事だが……サーナイトとチャーレムは重傷のようだ。」

木乃香

「ほなら、ウチの出番やね……アデアッド……！」

パァー……ッ……！！

木乃香は『コチノヒオウギ』と『ハエノスエヒロ』を呼び出す。

木乃香

「そ〜れっ!!」

木乃香が『コチノヒオウギ』をサーナイトとチャールムに向けて扇ぐと、二匹の怪我が癒されていく。

サーナイト

「……………あら？怪我が治っていくわ。」

チャールム

「こ、これは一体……………」

サーナイトとチャールムは木乃香の能力に気付かずに困惑する。

刹那

「これが木乃香お嬢様の力なんです。」

チャールム

「そうか……………アンタ達には借りが出来ちまったようだね。」

サーナイト

「本当に、何とお礼を言えばよいか……………」

木乃香

「別にお礼なんてええよ。」

木乃香はサーナイトとチャーレムにお礼を言われて少し照れてしま
う。

明日菜

「……………ところで、いつまで抱いてるつもり？」

ルカリオ

「何？……………あっ！？」

ルカリオは明日菜に指摘されて自分がミニロップをお姫様抱っこし
ている状態だと気づき、ゆっくりとミニロップを降ろす。

ルカリオ

「す、すまない……………」

ミニロップ

「い、いえ……………」

ミミロップは顔を真っ赤にしながらルカリオから目を反らす。

木乃香

(あれ？これはひょっとして……………。)

木乃香はルカリオとミミロップを交互に見つめながら怪しい笑みを浮かべる。

のどか

(何だか、木乃香さんがハルナみたいになってきてるような……………。)

のどかは怪しく微笑む木乃香を見て、親友の早乙女ハルナと重ね合わせる。

ミュウツー

「ううっ……………まさか、この世界にまでやって来るとはな……………」

そんな中、ミュウツーが片手で頭を押さえながらゆっくりと起き上がる。

ネギ

「ミュウツーさん！もうこんな事はやめて下さい！…！」

ピカチュウ

「ピカピカッ!」

ミュウツー

「フン、やめてほしければ力付くでやめさせてみる……………」

…。
そう言つと、ミュウツーがネギ達に攻撃を繰り出そうとするが……

?

「お……………」

全員

「!?!」

全員声がした方を向いてみると、ギルドのポケモン達がネギ達の方へ駆け寄って来る。

明日菜

「ど、どうしてみんなが此処へ!?!」

プクリン

「勿論、君達を助けに来たんだよ」

ペラップ

「お前達も我々ギルドの仲間だから」

キマワリ

「そうですね！仲間の為なら何処にでも行きますわ！」

ネギ

「み、皆さん……………」

ネギ達はギルドのポケモン達の温かい言葉に思わず涙ぐむ。

ドゴーム

「それじゃ、みんなでミュウツーを捕まえるぞ……！」

ヘイガニ

「ハイハイ！みんなで掛ければ怖くないぜ……！」

そう言つと、ギルドのポケモン達はミュウツーに向かってそれぞれ身構える。

ミュウツー

「……………流石にこの数が相手だと私の方が不利だな。」

ルカリオ

「ミュウツー、お前は何の為に探検隊のポケモン達を襲っているんだ？」

ミュウツー

「知りたいか？ならば教えてやろう……………私は『星の洞窟』を探しているのだ。」

ビッパ

（ほ、『星の洞窟』でゲスト！？）

ビッパはミュウツーの言葉に耳を疑った。

ルカリオ

「その『星の洞窟』には何かがあると言っただ？」

ミュウツー

「『星の洞窟』には、何でも願いを叶えてくれるポケモン・ジラーチが居ると聞いた……………。」

木乃香

(ジ、ジラーチ!?)

次に木乃香がミュウツターの言葉に耳を疑った。

ビツパ

「ど、どうしてジラーチの事を……あっ!」

ビツパは思わずミュウツターに質問するが、慌てて口を塞ぐ。

ミュウツター

「ほお、何か知っているようだな……ふんっ!」

フワーーーーッ!!

ビツパ

「あわわわっ!」

ミュウツターが片手を挙げた瞬間、突然ビツパが宙に浮かびながらミュウツターの方へ引き寄せられる。

ダグトリオ

「ビツパ!!」

ミュウツー

「悪いが、一緒に来てもらっぞ……………はっ!!」

ビツパ

「わっ! た、助けてくれでゲスッ!!」

シュン!!

ビツパが宙に浮かびながら手足をばたつかせた瞬間、ミュウツーとビツパはその場から姿を消した。

ドゴーム

「ビ、ビツパが……………」

キマワリ

「連れてかれましたわ……………」

ディグダ

「そ、そんな……………」

ギルドのポケモン達はあっという間の出来事にただ啞然とする。

プクリン

「うう……………ううう……………ううう……………」。

ペラップ

「お、親方様!?!」

ゴゴゴゴゴゴゴッ!!

プクリンが怒りに震えた瞬間、周りが地震のように揺れ動く。

明日菜

「な、何!?!」

ネギ

「地震でしょうか?」

チリーン

「いえ、恐らく親方様が……………」。

プクリン
「ビツパーーーーーッ……ッ……！」

プクリンの怒声混じりの大声が『空の頂き』の頂上から数十メートルの山々まで響き渡っていくのであった……。

第四十六話、ミュウツリーの目的（後書き）

ビッパがミュウツリーに連れてかれて困惑するネギ達はこの後どうするの！？

第四十七話、星の洞窟のジラーチと暗黒ポケモン（前書き）

ビッパがミュウツーに連れられてしまい、ネギ達はどつするの？

第四十七話、星の洞窟のジラーチと暗黒ポケモン

（ギルド・地下一階）

ネギ達はギルドのポケモン達と共にギルドの基地へ帰って来ていた。

ネギ

「まさか、こんな事になるなんて……………」

明日菜

「ミュウツーは何の目的でビッパを連れてったんだろっ?」

ルカリオ

「恐らく、『星の洞窟』とやらに案内させる為だろう。」

木乃香

「ほなら、ミュウツーはんはジラーチに願いを叶えてもらおうとしてるんやろか?」

刹那

「そう考えた方が妥当でしょうね……………」

のどか

「でも、一体何の願いをするんでしょうか？」

ルカリオ

「さあな……………今のあいつは何を考えているか分からんからな……………」

ピカチュウ

「ピカ……………」

ネギ達がミュウツীর目的やビッパの安否について考え込んでいると……………」

ドゴーム

「おい！親方様が全員地下二階へ集合しろって言ってるぞ！！」

ネギ

「えっ？あ、はい！分かりました！」

地下二階からやって来たドゴームはネギ達に伝言を伝えると、また二階へと戻っていく。

明日菜

「どっぴでまいいけど、あいつの声って本当に煩いわね……………」。

刹那

「と、とにかく行ってみましょう!」

そう言いつと、ネギ達は梯子で地下二階へと降りていく。

〈ギルド・地下二階〉

ネギ達が地下二階へ降りて来ると、ギルドのポケモン達が整列していた。

のどか

「皆さん、もう既に集まっていますね……………」。

木乃香

「何が始まるんやろ?」

ペラッパ

「お？お前達も来たか……………さあ、早くいつものように並んで。」

ネギ

「は、はい……………」

ネギ達は朝礼の時と同じように並び始める。

ペラッパ

「親方様、全員揃いました。」

ブクリン

「よし……………みんな！単刀直入に言うからよく聞いてね！」

全員

「はい！」

ブクリン

「今から『星の洞窟』へ行って、ビツパを救出するよ！！」

ギルドメンバー全員

「おおー！ーっ！！」

ネギ一行

「えっ！？」

ギルドのポケモン達はプクリンの発言に賛同するが、ネギ達は思わず耳を疑う。

ネギ

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

プクリン

「ん？どうしたの？」

プクリンはネギに呼び止められて不思議そうに尋ねる。

ネギ

「い、今から行くって………『星の洞窟』が何処にあるの知ってるんですか？」

プクリン

「うん、勿論知ってるよ。」

ペラップ

「それに、『星の洞窟』の存在を知っているのは我々ギルドとごく一部の探検隊だけなんだよ。」

明日菜

「じゃあ、今からでも早く行かないと……………」。

ディグダ

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

すると、入口の見張りをしていたディグダが声を上げる。

ドゴーム

「ん？こんな時に誰だよ……………ディグダ！誰の足形だ？」

ディグダ

「足形はリオル！足形はリオル！」

明日菜

「えっ！？リオルってまさか……………」。

ネギ

「行ってみましょう！」

ネギ達は急いで梯子へと登っていく。

ペラップ

「こ、こら！まだ話は終わってないぞ！？」

〈ギルド・入口前〉

ネギ達が入口までやって来ると、そこにはリオルの他にもゼニガメとフシギソウとリザードンも居た。

ネギ

「やっぱり、トレーナーさんだったんですね！」

ルカリオ

「もう起きても大丈夫なのか？」

リオル

「うん、もう平気………みんな、心配掛けてゴメンね。」

ピカチュウ

「ピカッ!？」

ピカチュウを含む全員が頭を下げて謝るリオルの言葉に耳を疑った。

ネギ

「も、もしかして記憶が戻ったんですか？」

リオル

「ああ、目が覚めたら何もかも思い出したよ。」

木乃香

「そか、ゼニ君達も良かったなあ。」

ゼニガメ

「ゼニゼニ。」

フシギソウ

「ソウソウ。」

リザードン

「グウウツ。」

木乃香の言葉にゼニガメ達は嬉しそうに頷く。

リオル

「ところで、今からみんなに会わせたいポケモンがいるんだけど……いいかな？」

明日菜

「私達に会わせたいポケモン？」

ネギ達はリオルの言葉を聞いて耳を傾ける。

リオル

「そう、今はある場所に隠れてるんだ。」

刹那

「その場所とは何処なんですか？」

リオル

「今から案内するから付いて来て。」

ネギ

「は、はい……………」

ネギ達はそのままりオル達の後を付いて行くのであった……………。

（星の洞窟・最奥部）

ビツパ

「っ、着いたでゲス……………」

ビツパとミュウツィは『星の洞窟』の最奥深さいおくがに居た。

ミュウツィ

「此処にジラーチが居るんだな？」

ビッパ

「そ、そうでゲスよ……………」

ビッパは怯えながらミュウツターの質問に答える。

ミュウツター

「そうか……………ジラーチよ！姿を現せ！！」

？

「ふあ……………誰？僕を呼ぶのは……………ムニヤムニヤ……………」

パア……………ッ！！

突然ミュウツター達の目の前に、お腹にまぶたや羽衣のような羽根に星型の頭から七夕の枝に掛ける短冊のような物を垂れ下げているポケモンが眠っている状態で現れる。

ビッパ

「ジ、ジラーチ！」

ミュウツター

「フッフ、ついに姿を現したか……………」

ビッパはジラーチの姿を見て驚愕するが、ミュウツィは怪しい笑みを浮かべる。

ジラーチ

「ムニヤムニヤ……………君は誰なの？」

ミュウツィ

「私はミュウツィだ……………ジラーチよ、お前は何でも願いを叶えられるそうだな？」

ジラーチ

「うん、そうだよ……………でも、今はそれどころじゃないんだ……………ぐうぐう……………」

ミュウツィ

「何だと？」

ジラーチの言葉を聞いたミュウツィは鋭い目付きで睨み付ける。

ジラーチ

「僕、今とても眠いんだ……………ムニヤムニヤ……………だから、寝相が悪くて君に攻撃したら……………ゴメンね……………ぐうぐう……………」

ビッパ

(……………あつしが前に来た時も同じ事を言ってたでゲスね。)

ビッパはジラーチの寝言のような言葉を聞いて苦笑いする。

ミュウツー

「そうか、それなら……………その眠気を覚まさせてやる!!」

バツ!!

ジラーチ

「うっ!?!あ、頭が痛いよ……………」

ミュウツーが片手を挙げた瞬間、ジラーチは苦しそうな表情で頭を押さえる。

ビッパ

「そ、そんな事したらジラーチが可哀相でゲスよ!」

ミュウツー

「嫌い!!」

ブワッ！！

ドオーーーーー！

ビッパ

「ぐわっ！！」

ミュウツーがもう片方の手をビッパに向けると、ビッパは衝撃波で壁に叩き付けられる。

ミュウツー

「さあ、ジラーチよ！私の願いを叶える為に早く目覚めるのだ！」

ジラーチ

「ぐああああっ！！」

ミュウツーの強力な念力でジラーチは更に苦しみ出すが……………。

？

「ちょっと待った！！」

ミュウツー

「ん？」

ミュウツーは声に反応して振り向いてみると、そこにはネギ達とギルドのポケモン達が居た。

ビッパ

「み、みんな！来てくれたんでゲスね！！」

ミュウツー

「フツ、やはり来たか……………」

ビッパはネギ達の姿を見て嬉しそうに目に涙を浮かべるが、ミュウツーは何故か怪しい笑みを浮かべる。

ブクリン

「ミュウツー！大人しく降伏するんだ！」

ミュウツー

「フン、もう手遅れだ……………そこで私の願いが叶うのをじっくりと見ているんだな。」

そう言つて、ミュウツーは再びジラーチの方を向くが……。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……風の精霊十一人縛鎖
となりて敵を捕まえる！魔法の射手・戒めの風矢！」

ズバァー……ッ！！

ミュウツー

「ムッ!？」

ネギの放った光の矢がミュウツーの動きを封じる。

ルカリオ

「もはや、これまでのようだな……ミュウツーの偽物よ。」

ギルドメンバー全員

「!？」

ルカリオの言葉を聞いたギルドのポケモン達は耳を疑った。

ペラッ

「な、何だつてえ!？」

ドゴーム

「に、偽物つて……………一体どついつ事だよ!？」

ネギ

「そのままの意味です……………今此処に居るミュウツーさんは偽物なんです。」

ギルドメンバー全員

「ええ……………っ!？」

ギルドのポケモン達はネギの言葉を聞いて更に驚愕する。

ミュウツー

「フツ、何を言い出すかと思えば……………では、私が偽物だという証拠でもあるのか？」

リオル

「勿論あるさ!」

スツ!!

ミュウツー&ギルドメンバー全員

「!?!」

リオルの言葉の後に、全員の目の前に突然ミュウツーが現れる。

キマワリ

「きゃー!ミュウツーが二匹居ますわー!?!」

ヘイガニ

「へい!こりゃ一体どうなってんだ!?!」

ネギ

「実は、僕達が『星の洞窟』へ向かう前なんですけど……」。

くサメハダ岩く

今から数時間前、ネギ達はリオル達に連れられて海が見渡せる崖の上へとやって来た。

リオル

「此処だよ。」

木乃香

「わ〜！此処は海を眺められるのに最適だな。」

ピチュー

「ピッチュ〜。」

木乃香とピチューは崖の上から見える海の光景に見入ってしまう。

ネギ

「それで、僕達に会いたいというポケモンは何処に居るんですか？」

リオル

「ちょっと待って……………みんなが来たよ。」

リオルが草むらに向かって小声で呼び掛けると……………。

ガサガサッ!!

全員

「!?!」

草むらからミュウツーが現れて、ネギ達は目を疑った。

明日菜

「な、何でミュウツーが此処に!?!」

刹那

「お嬢様!私の後ろへ……………」

ネギ達は素早く戦闘体制へと移る。

リオル

「ま、待って!みんな落ち着いて……………」

リオル達が慌ててネギ達を落ち着かせようとした時……………。

ピチュー

「ピチュピ〜」

ピチューが嬉しそうにミュウツーへ駆け寄っていく。

木乃香

「あっ！？ピッチャーが……………」

明日菜

「危ないから戻って来て！！」

ピカチュウ

「ピカピカッ！！」

明日菜達が必死でピチューを呼び止めようとした時……………。

ミュウツー

「……………久しぶりだな、ピチュー。」

全員

「……………え？」

ネギ達は少し柔らかい口調でピチューに語り掛けるミュウツーに目を丸くさせる。

明日菜

「い、今何て……………」

ミュウツー

「みんな、話はトレーナー（リオル）とゼニガメ達から聞いた……
…色々迷惑掛けてすまなかつたな。」

そう言うと、ミュウツーはネギ達に向かって軽く頭を下げる。

ネギ

「こ、これは一体どういう事ですか？」

リオル

「僕もゼニガメ達から事情を聞いて、君達と合流しようとした時に偶然ミュウツーと出会って……………そこで、ミュウツーに色々話を聞いたんだ。」

ルカリオ

「そうか……………ミュウツー、私達にも話してくれないか？」

ミュウツー

「ああ、勿論だ……………まず、お前達が会っていたミュウツーは偽物

だ。」

全員

「ええっ!？」

ネギ達はミュウツウの言葉を聞いて耳を疑う。

（星の洞窟・最奥部）

ネギ

「……………という訳で、本物のミュウツウさんは僕達に色々と話してくれました。」

ギルドメンバー全員

「……………。」

ネギの説明を一部始終聞いたギルドのポケモン達はしばらく啞然と

した表情になる。

チリーン

「じゃ、じゃあ……………私達の目の前に居るのが本物のミュウツーで、あそこに居るのが偽物のミュウツーって事ですか？」

ルカリオ

「ああ……………つまり、あの偽物はミュウツーに化けて探検隊のポケモン達を襲っていた張本人だ。」

ミュウツーA

「さあ、いい加減正体を現したらどうだ？」

ミュウツーB

「……………フッ。」

ミュウツーBは嘲笑うかのように鼻で笑う。

明日菜

「な、何が可笑しいのよ？」

ミュウツーB

「……………正体を現さなければいけないのは貴様の方ではないのか？」

ミュウツーA

「何だと？」

全員ミュウツーBの発言に耳を傾ける。

ミュウツーB

「貴様は彼らと上手く接触して自分が本物のミュウツーだと言いくるめて信用させたようだな。」

ミュウツーA

「フン、馬鹿な……………変な言い掛かりはよせ。」

ディグダ

「で、でも……………その可能性も無くは無いよね？」

ダグトリオ

「確かに……………こちらが偽物だって事も有り得る。」

ミュウツーBの言葉を聞いたギルドのポケモン達は、ミュウツーAにも疑いの目で見つめる。

ルカリオ

「私達も最初はみんなと同じように疑った……………だが、私達はこのミュウツーが本物だという確信を得た。」

ミュウツーB

「ほお……………なら、そいつが本気で私が偽物だという証拠を見せてもらおうか？」

ネギ

「分かりました……………のどかさん。」

のどか

「はい……………アデアッド……………」

パァ……………ッ……………!

のどかは原寸大よりも一回り小さな『いどのえにつき』を呼び出す。

キマワリ

「きゃー！何が出て来ましたわ……………!……………」

ドゴーム

「そ、そりゃ何だ？」

明日菜

「本物と偽物のミュウツーを見極める為の唯一の証拠品よ。」

ヘイガニ

「ヘイ！そんな物でどうやって本物か偽物かって分かるんだ？」

木乃香

「見れば分かるえ。」

ネギ

「のどかさん、ミュウツーさんに質問する前に他の誰かで試してみてください。」

のどか

「はい、それでは……………ビッパさん。」

ビッパ

「へっ！？あ、あっしでゲスか？」

ビッパは急にのどかに呼び掛けられて少し意表を付かれる。

のどか

「昨日の夕食の後、何をしていましたか？」

ビツパ

「な、何って……すぐに自分の部屋で眠ったでゲスよ。」

ビツパがのどかの質問に答えた後、のどかはゆっくりと『いどえにつき』のページを開く。

ネギ

「では、読み上げて下さい。」

のどか

「はい……』でも、眠っている途中でドゴームの煩い軒こひで目覚めちゃって……それに、少し腹が減ってきたから食堂にある食べ物をおよっただけつまみ食いしたんでゲスよね。」

ビツパ

「な！？何であっしの考えてる事が……。」

ビツパはのどかに自分が考えていた事を全て『いどえにつき』に読み上げられて驚愕する。

ペラッパ

「ビッパ！お前はまた食堂にある食べ物をつまみ食いしたんだね！」

ドゴーム

「それに、ワシの鬨が煩いってのはどづいつ意味だ！？」

キマワリ

（どづいつ意味って、そのまんまの意味に決まっていますわ……………。）

ビッパ

「ひい〜！す、すまないでゲス〜〜！！」

ビッパはペラッパとドゴームに怒られて思わず体を丸くしながら謝る。

刹那

「このように、宮崎さんの本は相手の思考を絵日記のようにつけて出す事が出来るんです。」

のどが

「はい、こんな風に……………」

そう言うと、のどかは『いどのえにつき』に描かれている絵（軒をかいて眠っているドゴームと隣で苦しそうな表情で耳を塞いでいるビツパの絵と食堂でこっそりと食料をつまみ食いしているビツパの絵）と先程のどかが読み上げたビツパの台詞が書いてあるページを全員に見せる。

デイグダ

「す、凄い……………」

ダグトリオ

「これだったら、どちらが本物のミュウツーが見極める事が出来るな。」

ネギ

「そういう事です……………のどかさ、そろそろ始めて下さい。」

のどか

「はい、分かりました。」

のどかは『いどのえにつき』をゆっくりと閉じて、ミュウツー達の方を見る。

のどか

「それでは、お二人に質問します……………貴方は本物のミュウツーさ

「んですか？」

ミュウツーA

「ああ、そうだ……。」

ミュウツーB

「……………勿論だ。」

二匹のミュウツーがのどかの質問に答えた後、のどかは『いどのえにつき』を開く。

プクリン

「……………どう？どっちが偽物分かった？」

のどか

「はい、偽物は……。」

ヘイガニ

「偽物は？」

のどか

「……………貴方ですね？」

ミュウツーB

「!?!」

そう言いながら、のどかはミュウツーBに指さす。

のどか

「この『いどのえにつき』には、こちらのミュウツー(A)さんの思考が写し出されましたが……貴方(ミュウツーB)の思考は一切写し出されてませんでした!」

カモ

「この本は、名前が判からねえ奴の思考は写し出されねえんだ。」

ネギ

「つまり、偽物は貴方だという事を証明してるんですよ!」

ルカリオ

「さあ、今度はもう言い逃れは出来ないぞ。」

ピカチュウ

「ピカピカチュウ!」

ドゴーム

「で、でも……………確かダークライは『ポケダンス』に倒されたんじや……………」

ダークライ

「フツ、それは違うな……………私は『ポケダンス』に負けて時空ホールを作り出して過去か未来へ逃げようとしたが、突如現れたパルキアが時空ホールへ飛び込んだ私^も諸とも攻撃を繰り出してきて、その衝撃で私は記憶を失ったのだ。」

ルカリオ

「記憶を失った……………では、何故今は記憶が戻っている？」

ダークライ

「黒いコートのような服を着た者が私の記憶を取り戻してくれたのだ。」

ネギ

(やっぱり、あの人……………)

ネギはダークライの言葉を聞いて俯いてしまう。

ダークライ

「そして、記憶を取り戻した私は『星の洞窟』に潜むジラーチの噂を耳にして、この世界を暗黒の世界に変えるという私の願いを叶え

てもらおうと思いついたのだ。」

ミュウツー

「……その為に貴様は私に化けて、探検隊のポケモン達から『星の洞窟』の居場所を聞き出していたのか？」

明日菜

「何て卑劣な奴なの……………」

木乃香

「う、嘘や……………映画で活躍したダーククライと全然違う……………こんなウチが知つとるダーククライやない……………」

刹那

「お、お嬢様！お気を確かに……………」

刹那は地面にへたり込む木乃香を見て慌てた表情で軽く揺さぶる。

ネギ

「とにかく、今の貴方は身動きが取れない状態なんです……………だから、このまま大人しく降参して下さい！」

ダーククライ

「……………」

ダークライはそのままネギを食い入るように見つめる。

明日菜

「ちょっと、何とか言いなさいよ！」

ダークライ

「……………気に入った。」

全員

「えっ？」

ダークライの突然の発言に全員が耳を傾ける。

ダークライ

「私と手を組んでみないか？」

プリン

「プリッ!？」

全員ダークライの発言に耳を疑った。

ルカリオ

「手を……組むだと？」

ダークライ

「そうだ、お前達には勇気や行動力ある……だから、私と共に暗黒の世界を支配してみないか？」

リオル

「ぼ、僕達がダークライと組んで……世界を支配するだって？」

ダークライ

「私とお前達ならそれが出来る……どうだ？悪い話ではないだろうか？」

ネギ

（僕達が……世界を支配する……）。

ネギはダークライの言葉を聞いて黙り込んでしまつたのであつた……。

第四十七話、星の洞窟のジラーチと暗黒ポケモン（後書き）

ダークライの悪魔の誘いを聞いてしまったネギ達はとう切り抜けるのか？

第四十八話　ダークライとの決戦（前書き）

ダークライの怪しい誘いを聞いてしまったネギ達はどうするのか！？

第四十八話　ダークライとの決戦

（星の洞窟・最奥部）

ダークライ

「どうだ？私と共に暗黒の世界を支配してみないか？」

ネギ

「せ、世界を支配するなんて……………そんな事……………」

ネギ達はダークライの誘いに戸惑っていた。

ミュウツー

「……………フン、くだらんな。」

ルカリオ

「全くだ……………我々が貴様の企みに手を貸すと思っていたのか？」

リオル

「そつだ！そんなのこつちから願ひ下げだ！！」

ピカチュウ

「ピツカチュ！！」

プリン

「プリプリン!!」

ピチュー

「ピッチュ!!」

ゼニガメ

「ゼニゼニツ!!」

フシギソウ

「フツシイ!!」

リザードン

「グガアアツ!!」

ブクリン

「僕達も世界征服なんて興味無いよ!!」

ギルドメンバー全員

「そつだそつだ!!」

ダークライ

「……………」

ダークライはピカチュウ達の反対の意見を聞いて一瞬だけ鋭い目付きになる。

ダークライ

「そうか、なら仕方ないな……………ところで、お前達はどつする？」

ネギ一行

「!？」

ダークライはネギ達の方を向き直して、再び聞き出す。

ダークライ

「よその世界へやって来たお前達なら理解してくれるはずだ……………それに、私達が組めば世界を支配する事もたやすいぞ？」

明日菜

「……………それもそうね。」

ネギ

「あ、明日菜さん!？」

ネギは明日菜の言葉に耳を疑った。

明日菜

「だって、世界を支配するなんて凄いじゃない……………私、ダークライと手を組むわ。」

そう言うと、明日菜はダークライの方へと近寄っていく。

木乃香

「ウチもダーク様に付いて行く……………」

刹那

「お嬢様がそうするのでしたら私も……………」

更に木乃香と刹那もダークライの方へと近寄っていく。

ネギ

「こ、木乃香さんや刹那さんも!？」

のどか

「わ、私も……………私も付いて行きます……………」

そして、のどかもダークライの方へ近寄っていく。

ネギ

「そ、そんな……………のどかさんまで……………どうして……………」。

ネギはあまりのショックで地面にへたり込んでしまう。

ダークライ

「フッフ、お前は賢い選択を選んだな……………さて、お前はどつする？」

ネギ

「ぼ、僕は……………」。

そう呟くと、ネギはゆっくりと立ち上がる。

カモ

「騙されんなよ兄貴！これはきつと何かの罠に決まってるぜ！！」

ネギ

「わ、分かってるよ！分かっているけど……………」。

のどか

「……………ネギ先生もこっちへ来て下さい。」

ネギ

「えっ!?!?」

ネギはのどかの言葉に息を呑んだ。

明日菜

「そうよ、アンタも一緒に来てくれないと……………私達、ダークライに殺されちゃうのよ。」

木乃香

「そやで……………ウチ、そんなん嫌やわ……………。」

刹那

「お願いします……………お嬢様の為に……………私達の為にも……………決心して下さい。」

ネギ

「み、皆さん……………。」

明日菜達の言葉を聞いたネギはダーククライの方へ近付こうとする。

ルカリオ

「お、おい!？」

リオル

「ネギ君!行っちゃ駄目だよ!！」

ピカチュウ

「ピカピカッ!！」

ミュウツー

「……………」。

ピカチュウ達はネギを呼び止めようとするが、ミュウツーはただ何も言わずに険しい表情で見つめていた。

ダーククライ

「さあ、どうする?私達と共に世界を支配してみないか?」

明日菜

「ネギ、暗黒の世界は素晴らしいわよ……………」。

木乃香

「そやで、何にも怖がる事はあらへんよ……。」

刹那

「お二人の言う通りです……恐れずに闇を受け入れて下さい……」

のどか

「ネギ先生………お願いです………一緒に来て下さい………。」

ネギ

(ぼ、僕はどうするねば………。)

ネギは明日菜達の言葉を聞いて、両手で頭を抱えながらしゃがみ込んでしまう。

ダークライ

「ほら、仲間達もこう言っているぞ………私と手を組もうではないか。」

カモ

「駄目だ兄貴！そんな奴の言葉を聞きちゃいけない！！！」

ネギ

「……………う、煩い!!」

ビビュッ!!

カモ

「わあ~~~~つ!!」

ネギは耐え切れない状態で思わずカモを掴んで、後ろの方へ投げ飛ばすが……………。

ピチュー

「ピ、ピチュー!」

ピチューがカモを上手くキャッチする。

ダークライ

「よし、それでは改めて答えを聞かせてもらおうか……………私と一緒に世界を支配するか?」

ネギ

「ぼ、僕は……………貴方と……………一緒に……………」

ネギが途切れ途切れの言葉でダークライに答えようとした瞬間……。

明日菜

（ネギ！駄目よ！騙されちゃ駄目！！）

ネギ

（い、今の声は……………明日菜さん！？）

ネギは何処からともなく聞こえてきた明日菜の声に反応して、思わず辺りを見回す。

木乃香

（ネギ君！そっちへ行ったらアカン！！）

刹那

（お気を確かに持って下さい！！）

のどか

（ネギ先生……………目を覚まして下さい！！）

ネギ

(目を覚ます?.....そうか.....これは現実じゃない.....悪い
夢なんだ!!)

ダークライ

「ムッ!?!」

そう自分に言い聞かせると、ネギは大きく目を見開いてダークライ
を睨み付ける。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル.....闇夜切り裂く一条の光
我が手に宿りて敵を喰らえ!白き雷!」

ズバァー.....ツ!!

ダークライ

「ぐおおおおっ!!」

ネギは掌から雷を放ち、ダークライに浴びせる。

明日菜

「ネギ!!」

木乃香

「良かった……気が付いたみたいやな。」

ネギ達が気が付くと、ダークライの傍らに居たハズの明日菜達がピカチュウ達の側に居た。

カモ

「あ、あれ？何で姐さん達が此処に……。」

ミュウツー

「どうやら、我々はダークライに幻覚を見せられてたようだ……。」

「

ネギ

（やっぱり……危ないところだった……もし明日菜さん達の声が聞こえてなかったら……。）

そう考えながら、ネギはホッと胸を撫で下ろす。

ダークライ

「お、おのれ……それが貴様の答えか!？」

ネギ

「当たり前です！明日菜さん達はあんな事絶対言わないし、世界を支配しようとする悪いポケモンと手なんか組めません
！！」

ダークライ

「フツ、それなら仕方がない……………お前達には消えてもらおうか。」

？

「ウィーーーーッ！！！」

突然物陰から目にダイヤモンドを、胸にはルビーのような宝石を付けた紫色の小柄なポケモンが沢山現れる。

ルカリオ

「こ、こんなに沢山のヤマミラミが潜んでいたとは……………」

ミュウツー

「やはりな……………こんな事だろうと思ってたぞ。」

ダークライ

「フフフ、何度でも言う方がいい……………お前達を始末して私は暗黒世

界の王となるのだ……皆の物！掛かれえ！！」

ヤミラミ達

「ウーーーーーッ！！」

ダークライの掛け声を合図に、ヤミラミ達はネギ達に向かって一斉に襲い掛かってくる。

プクリン

「みんな！行くよ！！」

ギルドメンバー全員

「おおーーーーっ！！」

ルカリオ

「私達も行くぞ！！」

ピカチュウ

「ピツカア！！」

ネギ

「皆さん！気をつけて下さいね！！」

明日菜

「OK！アテアッド！！」

パァー……ッ！！

明日菜が『ハマノツルギ』を呼び出した後、全員がヤマミラミ達と激しくぶつかり合う。

ダークライ

「フツ、せいぜいヤマミラミ達と遊んでいるがいい……その隙に私はジラーチを目覚めさせよう。」

そう言うと、ダークライは未だに眠っているジラーチの方へ振り向く。

ダークライ

「さあ、ジラーチよ！その目を覚まし、私の願いを叶えよ！！」

ジラーチ

「うぐっ！ま、また頭が……。」

ダークライが両手を掲げた直後、ジラーチは苦しそうな表情で頭を

押さえる。

ルカリオ

「マズイ！ダークライが『悪夢』でジラーチの体力を削っている……」

ピカチュウ

「ピカピ……………」

ピカチュウは慌ててダークライの方へ駆け寄ろうとするが……………。

ヤミラミA

「おっと、ダークライ様の所へは行かせないぜ！」

ヤミラミB

「どうしても通りたかったら俺達を倒してみな！」

二匹のヤミラミがピカチュウの前に立ち塞がる。

ピカチュウ

「ピ……………」

ピカチュウが二匹のヤミラミを『十万ボルト』で攻撃しようとしたが……。

プリン

「プリューーッ!!」

パッチィーーン!!

ヤミラミA

「ぐえっ!!」

ピチュー

「ピッチュー!!」

ガブツ!!

ヤミラミB

「いててて!!」

突然プリンがヤミラミAにビンタで攻撃し、更にピチューがヤミラミBの顔に飛び移って鼻に噛み付く。

ルカリオ

「ピカチュウ、ヤミラミ共は私達に任せろ……………ハアッ!!」

ドンッ!!

ヤミラミC

「ぐわぁーっ!!」

ミュウツー

「お前はダークライを阻止するんだ……………フンッ!!」

ヤミラミD

「うっ!?!か、体が動かない……………」

ルカリオは『はっけい』でヤミラミCを吹っ飛ばし、ミュウツーは『金縛り』でヤミラミDの動きを封じる。

ピカチュウ

「ピカ……………ピカピカチュッ!!」

ピカチュウはルカリオ達に後押しされた感じで、ダークライの方へと駆け出していく。

ネギ

「あつ！一匹だけじゃ危険過ぎる……………」

ヤミラミ達に囲まれたネギはダークライに接近していくピカチュウを発見する。

明日菜

「ネギ！アンタはピカチュウと一緒に行きなさい……………とりゃー！！！」

パッシー……………ン！！

ヤミラミ達

「つぎや……………っ！！！」

刹那

「この場は私達にお任せ下さい……………秘剣・百花繚乱！！！」

ズシャー……………ッ！！

ヤミラミ達

「ぎえ……………っ！！！」

次の瞬間、ネギを囲んでいたヤミラミ達を明日菜が『ハマノツルギ』で、刹那が夕凧（原寸大よりも一回り小さい）で吹き飛ばす。

ネギ

「あ、ありがとうございます……では、行って来ます！」

そう言うと、ネギは杖に跨がってピカチュウの方へと飛び出していく。

ダークライ

「ん？私を阻止しに来たか……だが、邪魔はさせんぞ！」

そう言うと、ダークライはネギ達の方へと向き直して真っ黒なエネルギー弾を作り出す。

ダークライ

「喰らえ！『ダークボール』！！」

ブワッ！！

ダークライはピカチュウに向けて『ダークボール』を放つ。

ピカチュウ

「ピカッ!？」

ネギ

「危ない!風楯!!」

次の瞬間、ネギが瞬動でピカチュウの前まで現れて魔法の楯を発生してダークライの攻撃を防ぐ。

ピカチュウ

「ピカ、ピカチュウ!」

ピカチュウはネギに向かって深くお辞儀する。

ネギ

「ど、どう致しまして……………それより、少し耳を貸して下さい……………」

ピカチュウ

「ピカ?」

ピカチュウは首を傾げながらネギに聞き耳を立てる。

ダークライ

「フツ、何を話しているか知らんが……何処からでも掛かって来い
！！」

そう言つと、ダークライは再び『ダークボール』を作り出そうとする。

ネギ

「……………という事で、お願いしますね。」

ピカチュウ

「ピカピカッ！」

ピカチュウがネギの作戦に納得すると、ダークライに向かって一斉に駆け出していく。

ダークライ

「今度こそ喰らえ！『ダークボール』！！」

ブワッ！！

ダークライは再びピカチュウに『ダークボール』を放つが……。

ピカチュウ

「ピツカアー!!」

シュツ!!

ピカチュウは目にも止まらぬ素早さでダークライの攻撃を避ける。

ダークライ

「くそつ、『高速移動』で避けたな……………」

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……………」

ダークライ

「ムツ!?!」

ダークライはネギが呪文を唱える事に気付き、咄嗟にネギの方を振り向いた瞬間……………。

ネギ

「風精召喚 剣を執る戦友！迎え撃て！！」

バアーーーーッ！！

ネギが紹介した精霊達がダークライに向かって突っ込んでいく。

ダークライ

「な、何だこの技は！？『影分身』にしては数が多過ぎるぞ！！」

ダークライはネギが召喚した精霊達の数に一瞬だけ怯む。

ピカチュウ

「ピィ〜カア〜……。」

バチバチバチッ！！

一方、ピカチュウはダークライの背後で全身から電気を溜めていた。

ダークライ

「このっ！全員^な薙ぎ払ってくれるわ！！」

ダークライはピカチュウに気付かず、ネギが召喚した精霊達を素手で振り払っていた。

ピカチュウ

「ピイ〜〜カア〜〜チュウウウウウツツ!!」

バリバリバリバリツ!!

ダークライ

「!?!」

ダークライ気配に気付いて後ろを向いてみると、全身が電気の玉に包まれたピカチュウが突っ込んで来た。

ダークライ

「くそっ! 『ボルテッカー』か……………だが、受け止めてくれるわ!」

そう言うと、ダークライは体ごとピカチュウの『ボルテッカー』を受け止める。

ダークライ

「うぐぐつ……………」

ダークライは全身痺れながらも、ピカチュウの『ボルテッカー』を押し出していく。

ネギ

「今だ！……………ラス・テル マ・スキル マギステル！！来たれ雷精 風の精！！」

ダークライ

「な、何っ！？」

ダークライは背後で呪文を唱え始めているネギに気付く。

ネギ

「雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！雷の暴風！！」

ズドオー…………ツ！！

ダークライ

「ぐ、ぐわあ……………っ！！」

ネギが放った稲妻魔法がダークライの背中に命中し、ピカチュウの『ボルテッカー』と挟まれる状態になった。

ダークライ

「ば、馬鹿な……………この私が……………また負ける……………のか……………」

ドオーーーーーーン!!

ダークライが二つの電撃に押し潰された瞬間、大きな爆発が起きる。

ヤミラミ達

「ウ、ウイッ!?!」

明日菜

「な、何が起こったの!?!」

全員が大きな爆音に反応して見てみると……………。

ダークライ

「う……………う……………」

ネギ

「か、勝った……………」

ピカチュウ

「ピ、ピカピ……………」

そこには全身黒焦げ状態で倒れ込んでるダークライと激しく息切れしているネギとピカチュウが居た。

ヤミラミA

「ダ、ダークライ様がやられてる!？」

ヤミラミB

「に、逃げろ〜!!」

ダークライの倒された姿を見たヤミラミ達は急いで逃げ出していく。

ミュウツー

「フン、逃げ足の速い奴らだな……………」

ブクリン

「それより、ネギとピカチュウは大丈夫かな？」

プクリンがそう言つと、全員ネギとピカチュウの方へと駆け寄る。

のどか

「ネギ先生、大丈夫ですか？」

ネギ

「は、はい……ちょっと疲れただけです……」

カモ

「まあ、この姿であんな強力な魔法を使つちまつたから無理もねえか……」

ピチュー

「ピチュピ？」

ピチューはピカチュウの背中を優しく撫でながら安否を聞く。

ルカリオ

「心配するな、ピカチュウも少し疲れてるだけだ。」

プリン

「プリプリ……」

ルカリオの言葉を聞いたプリンとピチューはホッと胸を撫で下ろす。

ジラーチ

「ふあ〜っ、何だか騒がしいなあ……………」

全員

「!?!」

すると、ジラーチが大きな欠伸をしながら目を覚ます。

木乃香

「あつ、ジラーチちゃんが起きた〜!」

ミュウツー

「さっきの爆発音で目を覚ましたようだな。」

ジラーチ

「う〜ん……………あれ? ビツパさんだよね?」

ビツパ

「そ、それでゲス……………久しぶりでゲスね。」

ジラーチに声を掛けられたビツパは軽く頭を下げる。

ジラーチ

「ところで、このポケモン達は………ビツパさんの友達？」

ビツパ

「そ、それでゲス！みんなあっしの友達であって仲間でもあるでゲス。」

ジラーチ

「ふん………。」

ジラーチは興味津々でネギ達を見つめる。

明日菜

「ね、ねえ………ちょっと聞いていい？」

ジラーチ

「ん？何？」

明日菜

「何でも願いを叶えてくれるって………本当なの？」

全員

「!?!」

全員明日菜の突然の発言に一瞬耳を疑った。

ジラーチ

「うん、本当だよ。」

明日菜

「そ、それだったら私ね……………」

木乃香

「あゝ！明日菜ったら、自分だけ願いを叶えてもらおうとしてる……!?!」

キマワリ

「きゃー！自分だけずるいですわー!?!」

ドゴーム

「ワシだってジラーチに願いを叶えもらいたいぞー!?!」

ヘイガニ

「ヘイヘイ！オイラだって……………」

こうして、誰が先にジラーチに願いを叶えてもらえるか揉めていると……………」

のどか

「あっ！？アレは……………」

ネギ

「のどかさん？どつしまし……………！？」

ネギ達が声を上げるのどかの方を見ると、のどかの視線の先にはダーククライが辺りを見回しながら立っていた。

ルカリオ

「しまった！ダーククライが目覚めた！！」

ペラップ

「な、何だって！？」

全員が一斉にダーククライの方を向いて、素早く身構えるが……………」

ダークライ

「……………此処は何処だ？」

全員

「……………へ？」

ダークライの意味不明な発言に全員が首を傾げる。

ダークライ

「私は何故こんな所に居る……………それに、私は一体誰なんだ？」

刹那

「……………何だか様子が変わですね。」

ミュウツー

「恐らく、ピカチュウ達の攻撃のショックで記憶喪失になってしまったのだろう。」

明日菜

「マ、マジで？」

ルカリオ

「つむ、ミュウツীর言う通りかもしれない……………」。

そう言うと、ルカリオはダークライの額に左手を乗せる。

ルカリオ

「ダークライから秘められてた悪の波導が完全に消えている……………」。

プクリン

「それじゃ、ダークライとも友達になれるかもね」

チリーン

（さ、流石は親方様……………誰でも友達にしちゃうのね……………）。

ギルドのポケモン達はプクリンの発言に啞然とする。

ジラーチ

「……………ねえ、願い事はまだ？」

ジラーチが少し待ちくたびれたような表情でネギ達に聞く。

明日菜

「あ、そうだった！えっくとね……………」。

ネギ

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！」

明日菜達が願い事を何しようか考えていると、突然ネギが声を上げる。

木乃香

「ネギ君？急にどないしたん？」

ネギ

「コホン！皆さん、何か大事な事を忘れてませんか？」

明日菜

「だ、大事な事って？」

明日菜達はネギの言葉に首を傾げる。

ネギ

「トレーナーさん達を元の世界へ戻さなきゃいけないでしょ？」

明日菜&木乃香

「あ……………」

ネギの言葉に明日菜と木乃香はハッと気が付く。

リオル

「ネ、ネギ君……………」

ピカチュウ

「ピカピ……………」

明日菜

「そ、そう言えばそうだったわね……………」

木乃香

「ウチ、何だか自分が恥ずかしいわ……………」

ピカチュウ達はネギの言葉に感激するが、明日菜と木乃香は少し落ち込んでしまう。

ペラッ

「ちょ、ちょっと待ってくれ……………お前達が何を言っているのか全然分からないんだが……………」

ネギ

「じ、実はですね……………」

ネギはギルドのポケモン達に全てを説明する。

ペラッブ

「つ、つまり話を整理するとだな…………お前達は別の世界からやって来たポケモンと人間であって、ジラーチの願いで元の世界へ帰ろうと……………こういう訳だな？」

ネギ

「は、はい……………」

ディグダ

「で、でも…………まさか貴方達が人間だったなんて……………」

ダグトリオ

「ああ、とても信じられない……………」

ギルドのポケモン達は少し複雑そうな表情でネギ達を見つめる。

刹那

「…………やはり皆さん、少し動揺してますね。」

ネギ

「はい…………でも、無理も無いかもません…………。」

ビツパ

「そ、それでも…………。」

のどか

「え？」

ネギ達はビツパの言葉に耳を傾ける。

ビツパ

「それでも、ネギ達はあつしらの仲間でゲス！」

キマワリ

「そ、そうですね！ビツパの言う通りですね！！」

ドゴーム

「そうだ！仲間にポケモンも人間も関係ない！！」

ハイガニ

「ハイハイ！ギルドの絆は固いぜー！」

ネギ

「み、皆さん……………」

ギルドのポケモン達の温かい言葉を聞いたネギ達は思わず涙ぐむ。

プクリン

（……………みんなも仲間というのが何なのか少し分かってきたようだね。）

そう思いながら、プクリンは優しく微笑む。

明日菜

「じゃあ、願い事はピカチュウ達を元の世界へ戻すって事でいいわね？」

木乃香

「ええよ〜。」

ピカチュウ

「ピ、ピカピ……………」

突然ピカチュウが恐る恐る右手を挙げる。

のどか

「あれ？どうしたの？」

ピカチュウ

「ピカ、ピッピカチュ……………」

ルカリオ

「何だつて？」

ピカチュウの言葉を聞いたルカリオは思わず聞き返してしまつ。

木乃香

「ルカ君、ピカちゃんは何て言うたん？」

ルカリオ

「……………ピカチュウはこの世界に残って、ギルドで修行を続けたいと言っている。」

全員

「ええっ!？」

ネギー一行とギルドのポケモン達は耳を疑った。

プリン

「プリプリッ！」

ピチュー

「ピッチュー！」

すると、プリンとピチューもピカチュウと同じく右手を挙げる。

のどか

「も、もしかしてプリンちゃんやピチューちゃんも？」

ルカリオ

「ああ、ピカチュウと同じ意見だ……ち、因みに私も……。」

そう言うと、ルカリオも右手を恥ずかしそうに少しだけ挙げる。

木乃香

「ル、ルカ君も!？」

ネギ

「でも、どうしても残りたいたいんですか？」

ピカチュウ

「ピカピカ、ピッピカピカチュウ！」

ルカリオ

「ピカチュウによると、『この探検隊という活動は自分に合っているような気がして、最初に依頼してきたコリンクのような困ったポケモン達がいたら助けてあげたい！』と言っている。」

明日菜

「ピカチュウ……………」

明日菜はピカチュウの決意に感心してしまふ。

ネギ

「そうですね、それでしたら僕達は何も言いませんが……………ギルドの皆さんはどうでしょうか？」

プクリン

「勿論、僕達は全然構わないよ……………ね？みんな。」

ギルドメンバー全員

「おおー！ーっ！！！」

ギルドのポケモン達はプクリンが質問した後で一斉に返事をする。

ネギ

「良かった……ところで、ミュウツーさんはどうするんですか？」

ミュウツー

「私か？私は探検隊になる気など無いが……この世界には興味が
あるので、私もこの世界に残る事にしよう。」

ルカリオ

(フツ、ミュウツーらしいな……。)

ルカリオはミュウツーの言葉を聞いて鼻で笑う。

明日菜

「それなら、元の世界に戻るのはトレーナーとゼニガメ達だけって
事ね。」

リオル

「そ、そついつ事になるね……………なあゼニガメ、フシギソウ、リザードン。」

ゼニガメ

「ゼニ？」

フシギソウ

「フシ？」

リザードン

「グウウツ？」

ゼニガメ達はリオルに呼ばれて首を傾げる。

リオル

「お前達がそう望むなら……………この世界に残ってもいいんだよ？」

ゼニガメ&フシギソウ&リザードン

「！？」

ゼニガメ達はリオルの言葉を聞いて耳を疑った。

リオル

「ほ、ほら……やっぱりポケモンはポケモンの世界で暮らすのが一番だと思うし……ゼニガメ達がそうしたいのなら僕は何も……」

リザードン

「グワアアアッ!」

リオル

「!?!」

リオルはリザードンの大きな怒声に一瞬驚いてしまう。

木乃香

「ル、ルカ君……リザちゃんは何て言ったの?」

ルカリオ

「リザードンはリオルに『馬鹿野郎!』って言ったのだ。」

リオル

「リ、リザードン?」

リオルは鳩が豆鉄砲を喰らったような表情になる。

刹那

「……………トレーナーさんは通じてるみたいですね。」

ミュウツー

「今はトレーナーもポケモンだからな……………」

フシギソウ

「フツシ！フシフシソウソウ！！」

ルカリオ

「フシギソウは『自分達はトレーナーのお蔭で此処まで強くなれたんだ！！』と言ってる。」

ゼニガメ

「ゼニゼニ！ガメゼニゼニガメ！！」

ルカリオ

「更にゼニガメは『だから、自分達はトレーナーと一生付いて行く！！』と言っている。」

リオル

「フシギソウ……………ゼニガメ……………」

ゼニガメとフシギソウの言葉を聞いたリオルは感動して涙を流す。

ゼニガメ

「ゼニゼニ。」

すると、ゼニガメはリオルに赤い帽子を手渡す。

リオル

「ぼ、僕は……………お前達のパートナーで……………本当に良かった……………」

そう言つと、目元が見えないように帽子を深く被る。

ネギ

「ううっ……………パートナーって素晴らしいね……………」

カモ

「ああ……………まるで俺っちと兄貴のようだぜ……………」

ネギとカモはリオル達を見つめながら目から滝のような涙を流す。

ジラーチ

「ふぁ〜っ、早く願い事を言わないと……………僕また眠っちゃっよ？」

ジラーチは小さな口で大きな欠伸をしながら眠い目を擦る。

明日菜

「わ〜！すぐ言うから寝ないで〜！！」

ジラーチ

「本当？じゃあ、願い事は何かな？」

ネギ

「トレーナーさんとそのパートナーであるポケモン達を元の世界へ戻してあげて下さい。」

ジラーチ

「分かった！では、早速……………」

リオル

「あ！ちょっとだけ待って！！」

そう言つと、リオルはネギ達と向き合つたよつに見つめる。

リオル

「みんな、本当にどうもありがとう……君達のお蔭でゼニガメ達と再開出来たし、記憶も取り戻せたよ……君達はこれからまだ大変な旅をするんだろうけど、決して諦めないでね！」

ネギ

「トレーナーさん……ありがとうございます！トレーナーさんも頑張って下さいねー！」

リオル

「ありがとう……あ！因みに僕はトレーナーじゃなくて本当の名前は……。」

ジラーチ

「もういいよね？それじゃ、早速……。」

パチッ！

ジラーチが指を鳴らした瞬間、リオル達はその場から姿を消した。

ミュウツー

「……………行ってしまったな。」

ピカチュウ

「ピカ……………」

明日菜

「……………ネギ、私達もそろそろ帰ろっか！」

ネギ

「そうですね、早く帰らないとマスターハンドさんも心配しますし……………」

プクリン

「……………そっか、君達ともお別れなんだね。」

プクリンを含むギルドのポケモン達は悲しげな表情を浮かべる。

ネギ

「あ、あの……………最後に僕達からギルドの皆さんに言いたい事があります。」

プクリン

「ん？何？」

ネギ

「少しの間でしたが、お世話になりました!!」

ネギが深くお辞儀をした後、明日菜達もネギに続いてお辞儀する。

キマワリ

「な、何だか照れますわね……………」

ヘイガニ

「ま、全くだぜ……………」

ギルドのポケモン達は思わず照れてしまう。

ペラッパ

「もし、ギルドへ来る機会があれば遊びに来いよ」

プクリン

「そうそう、いつでも歓迎するよ……………友達 友達」

ネギ

「あ、ありがとうございます……………それでは、またいつか会いましょー!」

ルカリオ

「ああ、またいつかな……………」

ピカチュウ

「ピ〜カ〜チュ〜!」

こうして、ネギ達はギルドのポケモン達に温かく見送られながら館へと帰って行くのであった……………」

ダークライ

「……………」ところで、私はこれからどうすればいいのだ?」

グレッグル

「グへへへ、もし良ければワシのトレード店で働いてみないか?」

ドゴーム

「グ、グレッグル!? お前居たのか?」

グレッグル

「ワシはさっきからずっと居たぞ? グへへへ……………」

グレッグルの不気味な笑い声が『星の洞窟』内に響き渡るのであつた……………。

第四十八話『ダークライとの決戦』（後書き）

こうして、ネギ達はポケモンの世界を後にするのであった……。

さて、長かった『ポケモン編』がやっと終わりました……正直こんなに長くなるとは思いませんでした……次回は誰へ行くのかお楽しみ!!

第四十九話『レッドキャニオンでのタイムンレース』(前書き)

ポケモンの世界から帰って来たネギー行ですが、次は誰の世界へ行くのだろうか？

第四十九話〈レッドキャニオンでのタイムンレース〉

〈大乱闘の館〉

ネギー一行は久しぶりに『大乱闘の館』へと帰って来た。

マスターハンド

「おお、帰って来たか……………中々帰って来なかったから心配したぞ。」

ネギ

「はい、思ったより時間が掛かってしまいました……………」

明日菜

「そうそう、今まで冒険してきた中で一番大変だったわ……………」

木乃香

「そかな？ウチは色んなポケモンと出会えたから満足やったな。」

木乃香はニコニコと笑顔を浮かべながら答える。

刹那

「それにしても、この館へ帰って来たと同時に、私達の姿が元に戻って良かったですね……………」。

のどか

「そうですね……………私、一生あの姿のままなんじゃないかと不安でした……………」。

のどかは前の世界で変化した自分の姿を想像しながら苦笑いする。

マスターハンド

「うむ、かなり大変な目に遭ったようだな……………とにかく、今日はゆっくり休みなさい。」

ネギ一行

「は〜い……………」。

そう言うと、ネギ一行は各自部屋へと戻っていく。

マスターハンド

（やはり、思ったたよりもタフなようだ……………このまま彼らに任せ
ても問題は無さそうだな。）

〱三日後・中庭〱

ネギ

「皆さん、おはようございます!」

明日菜

「おっはよー。」

三日後の早朝、ネギ一行はいつものように中庭に集合していた。

マスターハンド

「さて、三日の間に体を休められたかな?」

刹那

「はい、お蔭様で……………」

明日菜

「私、二日間も眠りっぱなしだった……………」

木乃香

「明日菜、幾ら何でも寝過ぎやで……………」

明日菜の発言に木乃香が苦笑いしながらツッコミを入れる。

マスターハンド

「では、今回もバッチを渡して貰いたいのだが……………羽根を拡げた鳥の形したバッチを取り出してくれ。」

ネギ

「は、はい……………」

ネギは懐からマスターハンドに言われた通りのバッチを取り出す。

マスターハンド

「そのバッチをキャプテン・ファルコンという人物に渡してほしい。」

ネギ

「キャプテン・ファルコンさんですね……………分かりました！」

明日菜

「それじゃ、早速行きましょう!」

そう言つと、ネギー行はいつものようにファーブ土管へと入っていく。

くレッドキヤニオンく

ネギー行は茶褐色の岩山だらけの峡谷かきへとやって来た。

ネギー

「……見たところ、此処は岩山のようですね。」

明日菜

「こんな誰も居ない所じゃ聞き込みも出来ないわね……………」

明日菜がふと大きな溜め息を付いた時……………。

?

「おうおう！俺達のマジトをうつろついでんのは誰だ！！」

ネギ一行

「!?!」

突然高い崖の上から数十名の男達が勢い良く降りてくる。

木乃香

「きゅ、急に人がいっぱい現れたわ……………」

ネギ

「あ、あの……………貴方達は……………」

?

「俺達は、この『レッドキャニオン』をマジトにしている名高き宇宙盗賊団だ！！」

のどか

「と、盗賊団!?!」

ネギ一行は腰に日本刀を付けて、大きな字で『激』と書かれた白いシャツを着た大柄の男の言葉に耳を疑った。

？

「俺達のアジトに足を踏み入れた奴はタダでは帰さないぜ……………野郎共！コイツらの身ぐるみを全て剥いでやれ！！」

子分達

「へいつ！！」

大柄の男の指示を聞いた周りの男達が、どんどんネギ達に近付いてくる。

刹那

「お嬢様、私の後ろへ隠れて下さい……………」

木乃香

「う、うん……………」

木乃香は刹那の背後の方へ回ると、小さく身を隠す。

明日菜

「ネギ、どっちらやるしかなさそうよ……………」

ネギ

「そ、そのようですね……………」。

ネギ達が男達に向かって戦闘体制へと移った時……………。

？

「待て！サムライ・ゴロー！！」

全員

「！？」

全員声がした方を向いてみると、青いボディの大きな乗り物の近くで赤いヘルメットを被り、首に黄色いマフラーを巻いた男が立っていた。

ゴロー

「お、お前は……………キャプテン・ファルコン！？」

ネギ

（えっ！？あ、あの人が……………。）

ネギはサムライ・ゴローと呼ばれた男の言葉に耳を疑った。

ファルコン

「その子達はまだ子供じゃないか……だから、解放してやってくれ！」

ゴロー

「フン！正義の味方気取りか？本当は俺の獲物を横取りするつもりなんだろ！？」

ファルコン

「違う！俺はお前みたいに盗賊紛いな真似はしない！！」

そう言つと、ファルコンとゴローはお互い激しく睨み合つ。

ゴロー

「じゃあ、こつしよう……俺とお前でレースをして、お前が勝つたらコイツらを解放してやる。」

ネギ

(……………レース?)

ネギはゴローの言葉に耳を傾ける。

ゴロー

「ただし、俺が勝つたらお前の『ブルーファルコン』を戴くからな
！」

ファルコン

「……………いいだろう。」

ゴロー

「よし、お前とはいずれ決着を付けたいと思っていたところだった
からな……………とうっ！！！」

ファルコンが承諾したと同時に、ゴローはバック転しながらピンク
色のマシンが置いてある所まで近付いていく。

ゴロー

「俺様の『ファイアステイングレイ』の凄さを思い知らせてやる！
！」

ファルコン

「フン、それはこっちの台詞だ！」

そう言つと、ファルコンとゴローはお互い自分のマシンの中へと乗

り込んでいく。

ゴロー

「野郎共！コイツらを連れてゴールへ先回りしてろ！」

子分達

「へーい！！！」

ゴローの指示を聞いた子分達はネギ達の肩を掴みながら連れて行くとする。

明日菜

「ちょ、ちょっと！離してよ……………」

明日菜は子分達の手を振り払おうと抵抗するが……………。

ネギ

「明日菜さん、此処は下手に抵抗しない方がいいですよ……………」

刹那

「ネギ先生の言う通りです……………この連中はまだ私達に手出しはしないハズですから……………」

明日菜

「そ、それもそうね……………」

ネギ

「それに、今はあの人を信じましょう……………」

子分A

「おい！さっさと歩け！！」

一人の子分がネギの肩を掴んだまま押し出すと同時に、ネギ一行そのままゴール地点へと連れて行かれる。

ゴロー

「さてと、俺達も準備をするか……………」

ファルコン

「そうだな……………」

ファルコンの『ブルーファルコン』とゴローの『ファイアスティン
グレイ』はそのままスタート地点へとスタンバイする。

ゴロー

「ファルコン！準備はいいか？」

ファルコン

「ああ！」

ゴロー

「それじゃ、レディー……………ゴロー！…！」

ブオーーーーーーッ…！

ゴローが合図した瞬間、二台のマシンは目にも止まらぬ速さで走り出していった。

2012

くレッドキャニオン・ゴール地点付近く

ネギー行とゴローの子分達はゴール地点付近で待機していた。

ネギ

「……あれからかなり時間が経ちますけど、何にも見えてきませんね。」

明日菜

「そうね……あれ？」

木乃香

「どないしたん？」

明日菜

「向こうから何か見えてくるわ……。」

明日菜の指さす先を見ると、遠く離れた場所から一台のマシンが見えてくる。

木乃香

「あっ！ホンマや。」

のどか

「でも、あのマシンは……。」

子分A

「よっしゃ！アレは親分の『ファイアステイングレイ』だ！！」

子分B

「流石は親方だぜ！！」

ゴールへと向かってくるマシンが『ファイアステイングレイ』だと認識した子分達は歓喜を上げる。

刹那

「ファルコンさんはどうしたんでしょうか？」

ネギ

「あっ！もう一台見えてきましたよ！！」

ネギの言う通りに、『ファイアステイングレイ』の後ろから物凄いスピードで『ブルーファルコン』が追い上げてきた。

子分C

「チッ、ファルコンの『ブルーファルコン』も来やがったか……………」

「

カモ

「「りゃ、デッドヒートだな……………」」

全員がそうこう言ってる中、二台のマシンがお互い追い越し合いながらどんどんゴールへ近付いていく。

ゴロー

(くそっ！だが、勝つのはこの俺様だ！！)

ブオーーーーーッ！！

すると、『ファイアステイングレイ』がいきなりスピードを上げて『ブルーファルコン』を追い越してしまう。

明日菜

「あっ！？追い越されちゃった！」

子分D

「いいぞ〜！親分！」

ファルコン

(……………今だ！)

ブオオooooooooooooッ!!

更に、『ブルーファルコン』が物凄いスピードを上げて、一気に『ファイアステイングレイ』を追い越してしまう。

明日菜

「は、速っ!?!」

木乃香

「凄〜い! F-1より迫力あるわ〜!!」

ネギー行がマシンの速さに興奮していると、『ブルーファルコン』はトップのままゴールへと突き進んでいく。

子分E

「お、親分が負けた……………」

子分達が落胆すると同時に、『ファイアステイングレイ』が二位の状態でゴールしていく。

ファルコン

「ゴロー、ブーストは最後まで大事に取っておくもんだぜ?」

ゴロー

「く、くそ……。」

二人がマシンから降りると同時に、ゴローはファルコンの言葉を聞いて無性に悔しがる。

ファルコン

「さあ、約束通りにこの子達を解放してもらおうか？」

ゴロー

「畜生！ 次のグランプリまで覚えてろよ……野郎共！ 引き上げだ！……」

子分達

「へ、へいっ！」

サムライ・ゴロー率いる盗賊団達はそのまま立ち去っていった……。

のどが

「……………い、行っちゃいましたね。」

木乃香

「結局、あの人達は何やったんやろ？」

明日菜

「さあね……………」

ネギー一行はあつという間に立ち去ったゴロー率いる盗賊団に啞然とする。

ファルコン

「君達、奴らに酷い事されなかったか？」

ネギ

「は、はい……………助けて頂いて、ありがとうございました。」

ファルコン

「いや、俺はただ奴らのやり方が気に入らなかったただけ……………」

カモ

（くうく、まさに男の中の男だぜ！）

カモはファルコンの言葉に感激する。

ファルコン

「それより、この『レッドキャニオン』は物騒だから早く立ち去った方がいい……………では、さらばだ。」

そう言うと、ファルコンは『ブルーファルコン』へと乗り込んでいく。

ネギ

「ま、待って下さい！貴方にお話が……………」

ブオー……………ッ！！

ネギの言葉も虚しく、ファルコンを乗せた『ブルーファルコン』は物凄いスピードで走り去って行った。

明日菜

「あゝあ、行っちゃった……………」

カモ

「何やってんだよ兄貴！絶好の機会だったのに……………」

ネギ

「そ、そんな事言ったって……………」

ネギはカモに責められて落ち込んでしまう。

刹那

「困りましたね……………今から追い掛けようにも、あんな速い乗り物を人間の足で追い付くのは不可能です……………」

木乃香

「そやなく、タクシーでも通らへんかなあ……………あや？」

のどか

「どうかしました？」

木乃香

「向こうから何か近付いてくるんやけど……………」

明日菜

「え？どれどれ……………」

全員木乃香の指さす方を見てみると、大きな黄色いマシンが目についた。

明日菜

「あ、本当だ……。」

ネギ

「ファルコンさんのマシンと同じような形してますね。」

木乃香

「でも、ひょっとしたらタクシーかもしれないよ……。へい、タクシー
ー！」

木乃香はこちらに近付いてくるマシンに向かって左手を大きく挙げる。

明日菜

「ちよっと、もしタクシーじゃなかったらどうすんのよ？」

キーンッ！！

すると、黄色いマシンはネギ一行の前で停止する。

明日菜

「ほら、止まっちゃったじゃない……。」「

ネギ

「まあまあ……………どちらにせよ、運転手さんに乗せてくれるか聞いてみましょう。」

木乃香

「そうそう……………すいませ〜ん、ちょっとええですか？」

ウィーーン

？

「はい、何でしょ〜？」

全員

「!?!」

黄色いマシンの操縦席の窓が開かれると、黒くて大きな目をした宇宙人みたいな姿の運転手が顔を出す。

のどか

(……………う、宇宙人?)

木乃香

「あ、あのお……………コレってタクシーですか？」

？

「はい、その通りッスよ。」

明日菜

「えっ！？嘘でしょ？」

明日菜は宇宙人の言葉に思わず耳を疑った。

木乃香

「ほら、ウチの言った通りやったろ？」

明日菜

「そ、そうね……………」

明日菜は少し悔しそうな表情を浮かべながら頷く。

？

「もしかして、お客さんッスか？」

ネギ

「は、はい……………この道を真つすぐ進んで行ったファルコンさんのマシンを追い掛けてほしいのですが……………」。

？

「ファルコンって……………キャプテン・ファルコンの事ツスか？」

刹那

「ご存知なんですか？」

？

「知ってるも何も……………彼はFエフIEROゼロ界では有名人ツスよ。」

ネギ

「FエフIEROゼロ？」

ネギ一行は運転手の言葉に首を傾げる。

？

「あれ？もしかして知らないツスか？あの超有名なレースを……………」。

「

明日菜

「レースって……さっきファルコンさん達がやってたアレの事かな？」

ネギ

「そうかもしれませんね……………」。

ネギと明日菜は運転手に聞こえないように小声で話す。

？

「因みに、僕もF ZEROに出場しているッスよ。」

のどか

「え？タクシーの運転手じゃないんですか？」

？

「そうッス、僕はタクシーの運転手でありF ZEROの出場者でもあるッス。」

木乃香

「へえ〜、そうなんや〜。」

木乃香が運転手の言葉を聞いて納得していると……………。

のどか

「あ、あの……………皆さん……………」

明日菜

「ん？どうしたの？」

のどか

「今、気付いたんですけど……………タクシー代は誰が払うんですか？」

全員

「あ……………」

ネギ達はのどかの言葉を聞いて、一瞬固まってしまっ。

明日菜

「そう言えば、私……………お金持ってきてなかったっけ……………」

木乃香

「ウ、ウチもや……………」

刹那

「私もです……………」

ネギ

「ぼ、僕……………五円しか持ってません……………」。

カモ

「ハア、これじゃタクシーに乗れねえな……………」。

ネギ一行は深く溜め息をつきながら落ち込んでいく。

？

「もしかして、タクシー代が無いツスか？それだったら、タダでいいツスよ。」

全員

「えっ!?!」

ネギ一行は運転手の言葉に耳を疑った。

ネギ

「タ、タダって……………本当にいいんですか?」

？

「いいッスよ……………実を言うと、昨日タクシー会社の社長とまた喧嘩して謹慎処分仕事を休んだッスよ。」

カモ

「兄貴、此処はお言葉に甘えさせてもらおうぜ。」

ネギ

「そ、そうだね……………本当にありがとうございます！」

ネギ一行は運転手に向かって深くお辞儀する。

？

「お礼なんていいッスよ……………さあ、早く乗るッスよ。」

明日菜

「それじゃ、遠慮なく……………」

最初に明日菜がマシンの乗り込もうとするが……………。

？

「あ！しまったッス！」

のどか

「ど、どうしたんですか？」

？

「この『グルービータクシー』は四人までしか乗せられないッス…」

木乃香

「えっ！？ほなら、一人だけ乗られへんって事なん？」

刹那

「そういう事になりますね……………」

ネギー行がこの状況に困惑していると……………。

明日菜

「それなら大丈夫よ。」

全員

「えっ！？」

明日菜の一言に全員が耳を傾ける。

明日菜

「私達四人がタクシーに乗って、ネギは飛んで行けばいいんじゃない？」

ネギ

「あ！そっか……………」

カモ

「姐さんってば、『バカレンジャー』のクセに頭いいなあ。」

明日菜

「『バカレンジャー』は余計よ……！」

明日菜はカモの一言に怒り出す。

木乃香

「ほなら、早速タクシーに乗るか」

刹那

「そうですね。」

そう言つと、明日菜達は『グルービータクシー』へと乗り込む。

？

「あれ？あの子はどつするッスか？」

明日菜

「あ、いいのいいの 構わず進んで下さい。」

？

「でも……っ!？」

運転手はルームミラーで杖に跨がり、どンドン上昇していくネギを見て目を疑った。

？

「と、飛んだッス……。」

明日菜

「だから言ったでしょ?？」

？

「そ、そうッスね……じゃあ、このまま真っすぐ進んでいいッスね?？」

刹那

「はい、お願いします。」

？

「では、出発するツスよ！」

ブウウウッ！！

運転手は『グルービータクシー』にエンジンを掛ける。

？

「あー申し遅れたけど………僕の名前はPJピージェイ、宜しくツス！」

のどか

「よ、宜しくお願いします………。」

PJ

「それでは、出発進行ツス……！」

ブオー………ン………！！

PJの『グルービータクシー』は物凄いスピードで走り出していく。

ネギ

「うわー、本当に速いなあ……………」。

カモ

「兄貴、見取れてねえで早く行こつぜ。」

ネギ

「あーそ、そうだったね……………」。

ネギは慌てて『グルービータクシー』の後を追い掛けて行くのであった……………。

第四十九話　レッドキャニオンでのタイムンレース（後書き）

PJのタクシーに乗車したネギー行だが、果たしてキャプテン・フアルコンと再会出来るのか？

第五十話　キャプテン・ファルコンの行方（前書き）

キャプテン・ファルコンを見つける為にPJのタクシーに乗り込んだネギー行ですが、果たしてファルコンは見つかるかどうか……。

第五十話　〜キャプテン・ファルコンの行方〜

〜ミュートシティ・夜〜

ネギー一行を乗車させたPJの『グルービータクシー』は、夜でも賑やか大都会のような町へとやって来た。

明日菜

「うわ〜、何だか賑やかな町ねえ。」

木乃香

「ホンマやなあ、まるでラスベガスに来たみたいや〜。」

キーーーーッ!!

突然『グルービータクシー』がある建物の前で停止する。

ネギ

「あれ？あそこに停止した……………僕も降りないと。」

そう言うと、上空で飛んでいたネギがゆっくりと下降していく。

PJ

「うーん、ごくたまにこの店に来てるって聞いたッスけど………今日は来てないみたいッスね。」

のどか

「PJさん、此処はどういう店なんですか？」

PJ

「この店は、どのFIZEROMシンが一番速いかを賭けて競い合う所ッスよ。」

刹那

「成程、私達の世界で言う競馬のようなものですね。」

明日菜

「取り合えず、この店で色々聞いてみない？」

木乃香

「そやね……PJはん、ウチらは此処で降りるわ。」

PJ

「そうッスか……では、今窓を開けるッス。」

ウィーン

く。PJがボタンを押すと、『グルービータクシー』の窓が開かれてい

明日菜

「それじゃ、どうもありがとうございました！」

PJ

「どう致しまして……ファルコンが見つかるといいッスね。」

木乃香

「はい！ほな、おおきに……。」

PJ

「さよならッス……。」

ブォーーーーーッ……！！

く。『グルービータクシー』は窓が閉じた瞬間、そのまま走り去って

ネギ

「……………やっぱり速いですね。」

明日菜

「本当、F-1なんて目じゃないわね……………」。

ネギ一行はあまりの速さに『グルービータクシー』を目で追っていた。

刹那

「取り合えず、あの店で情報収集しましょう。」

ネギ

「そ、そうですね……………では、早速入ってみましょうか。」

ネギ一行はそのまま店の中へと入ってくが……………。

ネギ

「わあっ!?!?」

しばらくすると、ネギ一行は店員らしき男性に追い出されてしまう。

明日菜

「ちよっと！いきなり何するんですか！？」

店員

「この店は子供が来る所じゃないよ……………さあ、帰った帰った！」

そう言っと、店員は店の中へと戻っていく。

木乃香

「ウチら、閉め出されてもうたね……………」

のどか

「どうしましょうか……………」

ネギ

「うーん……………」

ネギ一行が深く考え込んでいると……………。

カモ

「兄貴、俺っちにいいアイデアがありませんぜ！」

ネギ

「えっ！？本当に？」

カモ

「本当でさあ！ちよいと耳を……………」

カモはネギの耳元で小さな声で話す。

ネギ

「あゝ、成程ね！」

カモの話聞き終えたネギは納得する。

明日菜

「ちよつと、アンタ達だけで何コソコソ話してんのよ？」

ネギ

「皆さん、此处では何ですの……………こちらへ来て下さい。」

刹那

「えっ！？ど、何処へ行くのですか？」

ネギ

「いいからいいから……………」。

のどか

「せ、先生……………あまり強く押さないで下さい……………」。

ネギは明日菜達の背中を押しながら、その場を後にする。

〈FIZEROMマシン賭けレース場内〉

ガチャ

しばらくすると、二十歳のネギと二十五歳の明日菜達が店の中へ入って来た。

のどか

「な、何だか……………恥ずかしい……………／／／」

明日菜

「それにしても、よくあんな物（赤い飴玉・青い飴玉年齢詐称薬）持ってたわね……………」。

ネギ

「は、はい…………カモ君に言われるまで忘れてたんですよ……………」。

木乃香

「はあく、大人になったせつちゃん…………いつ見ても綺麗やなあく。」

刹那

「こ、このちゃん……………／＼／＼」

刹那は木乃香の褒め言葉を聞いて、顔を真っ赤に染める。

ネギ

「それでは、この店に来てる人達にファルコンさんについて詳しく聞いてみましょう。」

明日菜

「そつね…………じゃあ、それぞれ別れて行動しようよ。」

木乃香

「そやな、その方が手っ取り早いし……………」

刹那

「では、後程……………」

そう言つと、ネギー行はそれぞれ散り散りになって行動開始する。

のどか

「あ！ちよ、ちよつと待って下さい……………」

他のみんなより出遅れたのどかは慌てて駆け出そうとするが……………」

ドンッ！！

のどか

「きゃっ！？」

のどかは何者かと肩をぶつける。

？

「痛たた……何処見て歩いてるダ〜」?

のどか

「す、すいませ……っ!？」

のどかは謝ろうとぶつかった相手の顔を見ると、まるで蛸のよ
うな姿をした人物が立っていた。

のどか

(た、蛸〜〜っ!?)

のどかは蛸人間を見て、顔を真っ青にしながら目を疑った。

?

「ん?急に顔が悪くなったけど……どうしたダ〜」?

のどか

「え!?!あ、いや、その……。」

?

「ムッ!さては、このオクトマンに会えて驚いてるダ〜」ね?、「

のどか

「は、はい？」

のどかはオクトマンと名乗る蛸人気の突拍子の無い言葉に耳を疑う。

オクトマン

「いや、これだから人気者は辛いダ〜コね……………そんなじゃ、記念に握手をしてあげるダ〜。」

ニユルニユル……

のどか

「ひいっ!?!」

オクトマンは蛸のような細長い手をのどかに差し出す。

のどか

「わ、私……………急いでるので失礼します！」

のどかはオクトマンと握手を交わす事無く、慌ててその場から立ち去っていく。

オクトマン

「……………あゝあ、行っちゃったダ〜」。

オクトマンは少しがっかりしながらその場を去っていく。

一方、木乃香は……………。

木乃香

「わあゝ、色んな人がおるなあ……………誰に話してみようかなあ?」

?

「ねえ、その美しい彼女。」

木乃香

「えっ?」

木乃香は声を掛けられて後ろを向くと、赤い手袋を履いて青い服を

着た金髪の男性が立っていた。

木乃香

「う、美しい彼女って……ひょっとして、ウチの事？」

？

「勿論さ、君以外の誰が居ると言うんだい？」

木乃香

「そ、そんな……ウチなんて……／＼／」

木乃香は男性の言葉に頬を赤く染めながら照れてしまう。

？

「そんな美しい君には特別に僕のサインをあげよう。」

キュツキュツキュツ

そう言つと、男性は色紙とペンを取り出して名前を書き始める。

？

「はい、とひびく。」

木乃香

「あ、ありがとう……。」

男性が『ジャック・レビン』と書かれた色紙を木乃香に渡すと、木乃香は苦笑いしながら受け取る。

ジャック

「ところで、君は今一人なのかい？」

木乃香

「え？いや、友達と一緒にやけど……。」

ジャック

「そう……もし良かったら、僕と少し飲まないかい？」

木乃香

（えっ！？の、飲むってもしかして……お酒？）

木乃香はジャックの誘いの言葉に耳を疑う。

木乃香

「で、でもウチ……友達が居るし……それに、お酒はちょっと……。」

ジャック

「大丈夫、本当に少しだけだから……ね？」

そう言いつて、ジャックが木乃香の手を握った瞬間……。

刹那

「私の大事な人に何か御用でしょうか？」

ジャック

「ん？……ひっ!？」

ジャックが声が出た方を向くと、鋭い目付きで睨んでいる刹那が立っていた。

木乃香

「せ、せっちゃん!」

ジャック

「い、いやぁ……この子と少しだけ話したいなぁと思ってね……。」

刹那

「お話？本当にそれだけですか？」

刹那はより一層睨み付けながら問い質す。

ジャック

「も、勿論だよ……そ、それじゃ僕はこの辺で……じゃ、じゃあね。」

ジャックは慌ててその場から逃げるように立ち去っていく。

刹那

「全く……お嬢様、ご無事ですか？」

木乃香

「ぶ、無事も何も……ウチは何もされてへんから……。」

刹那

「そうですね……それを聞いて安心しました。」

木乃香の言葉を聞いて刹那は心底一安心する。

木乃香

「……………そ、それより何か分かったん？」

刹那

「いえ、まだ何も……………それより、これからは私と一緒に行動しませんか？」

木乃香

「え？ウチは別にええけど……………」

刹那

「ありがとうございます……………木乃香お嬢様を誘惑しようとする輩やからは、この桜咲刹那が成敗致しますのでご安心下さい！」

木乃香

「あ、ありがとう……………」

木乃香は刹那の言葉に苦笑いしながらお礼を言う。

木乃香

「ほなら、気を取り直して誰かに聞かんと……………あっ！あの人に決めたっつと。」

刹那

「お、お嬢様！お待ち下さい……………」。

木乃香が何かを発見して駆け出していくと、刹那も慌てて後から付いて行く。

木乃香

「すいませ〜ん、ちょっとええですか〜？」

？

「あ〜？何だ〜？」

木乃香が声を掛けたのは、胸元と肩に鎧のような物を装備した鰐^{ワニ}みたいな顔した男だった。

木乃香

「ワニさんにちょっと聞きたい事があるんやけど……………」。

？

「俺は鰐じゃねえ！肉食恐竜のバイオ・レックス様だ！！」

木乃香

「ひゃ〜！」「ごめんなさい……………」。

木乃香は大きな口を開けて怒り出すバイオ・レックスと名乗る男に怯える。

刹那

「お嬢様！……………おのれえ〜、木乃香お嬢様を怖がらせるとは何て無礼な……………斬る！！」

木乃香

「せ、せつちゃん！それはアカンて……………」。

木乃香は慌てて、おもむろに夕風を取り出した刹那を宥める。

レックス

「ところで、お前ら俺に何か用か？」

木乃香

「は、はい……………ウチら、ファルコンはんを探してるんやけど……………」。

「

レックス

「ファルコン？そう言えば、最近この店には来てねえな……………」。

木乃香

「そ、そうですか……………」

レックス

「……………」

レックスは無言のまま、木乃香を食い入るよう見つめる。

木乃香

「な、何？ウチの顔に何か付いとる？」

レックス

「い、いや……………ただ、美味そうだなあ〜と思ってな……………」

木乃香

「……………へ？」

刹那

「な、何い〜っ！？」

木乃香と刹那はレックスの言葉に耳を疑った。

刹那

「こ、この獣め……このちゃんを食べるつもりか!？」

刹那は再び怒り出して、夕凧を取り出して身構える。

木乃香

「こ、これ以上はアカン……ほな、失礼しました〜!」

刹那

「は、離して下さい!」

木乃香は刹那の手を引っ張りながら、その場から去っていく。

レックス

「……………あいつら、何だったんだ?」

レックスは啞然とした表情で木乃香達を見送る。

一方、明日菜は……。

明日菜

「あの、すみません……。」

？

「はい、何でしょう？」

明日菜は全体が白くて丸っこい体型の髭を生やした男性に声を掛けていた。

明日菜

（ん？この人の顔……マリオさんに似てるような……。）

そう思いながら、明日菜は男性の顔を見つめる。

？

「あ、あの……」のMr・EADに何かご用でしょうか？」

ミスター・イー・エー・ディー

明日菜

「えっ？あゝ、えっと、その……………ファルコンさんを見掛けませんでしたか？」

EAD

「ファルコンというと、キャプテン・ファルコンの事ですね？」

明日菜

「え、ええ……………」

EAD

「うーん……………残念ながら、ここ最近彼には会ってませんね……………」

明日菜

「そ、そう……………どうもありがとうございます……………」

EAD

「いえいえ、こちらこそお役に立てずに申し訳ありません……………では、私はこれで失礼します。」

そう言つと、EADは軽くお辞儀しながらその場から立ち去っていく。

明日菜

「ハア、また誰かに聞かないと……………」

そう呟いた後、明日菜もその場から立ち去っていく。

一方、ネギは……………。

ネギ

「それにしても、この店には色んな人が来てるなあ……………」

カモ

「全くだぜ……………宇宙人やロボットとかも居るしなあ……………」

？

「ぬお〜！また負けてしもつた〜！！」

ネギ
「ん？」

ネギは声がした方を向いてみると、額にゴーグルを掛けて白髪混じりの髪に白くて長い髭を生やした老人がフラフラしながら歩いていた。

？

「何てこった……………もうコインが一枚しか残っとらんわい……………」

チャリーーン！

ネギ

「あっ！コインが……………」

ネギは咄嗟に老人が落とした一枚のコインを拾う。

ネギ

「お爺さん、落としましたよ。」

？

「ん？おお、すまんのぉ……………」

そう言つと、ネギは老人にコインを手渡す。

？

「いや、今のワシにはコイン一枚は貴重じゃからのお……………」。

ネギ

「あの、さっき何だか悔しがってたみたいだけど……………何かあったんですか？」

？

「あ、ああ……………あそこのカウンターで話してやろう。」

老人はネギを連れて、二人はカウンターへと腰を降ろす。

？

「実はのお、さっき二百万賭けてレースに出場したんじゃが……………見事にボロ負けして、二百万が全てパーになつてしまつたんじゃよ。」

ネギ

「に、二百万!？」

ネギは老人の発言に耳を疑った。

？

「かつては『鉄人シルバー』と呼ばれたワシも年波には勝てぬか……このシルバー・ニールセンも落ちぶれたもんじゃな……。」

そう呟くと、シルバー・ニールセンと名乗る老人は物思いに老けるかのように落ち込み気味になる。

ネギ

「げ、元気出して下さい……それより、さっき言ってたレースとこののは？」

ニールセン

「ん？決まっておるじゃろ……FIZERROのレースじゃよ。」

ネギ

「やっぱり……という事は、お爺さんもレーサーなんですか？」

ニールセン

「何を言っとる！ワシなんか若い頃から何百回も『FIZERROグランプリ』に出場してるんじゃぞ。」

ネギ

「そ、そうなんですか……………」

ネギはニールセンの言葉に呆気に取られる。

ネギ

「では、ファルコンさんをご存知ですよね？」

ニールセン

「勿論じゃ……………とは言っても、ワシも奴の全てを知ってる訳ではないがお。」

ネギ

「どついう意味ですか？」

ニールセン

「キャプテン・ファルコンは経歴や素性が一切不明な男なんじゃ……………普段はバウンティハンターとして活躍しとるらしいがお。」

ネギ

「バウンティハンター……………要するに、賞金稼ぎって事ですね？」

ニールセン

「そうじゃ……………それに奴は、何処かの秘密基地で秘かにレースの特訓をしているという噂を聞いた事があるのお……………」

ネギ

「秘密基地……………」

ネギはニールセンの言葉を聞いて深く考え込む。

ニールセン

「まあ、あくまで噂じゃから本当かどうかは分からんしのお……………」

ネギ

「そうですか……………他に何か知りませんか？」

ニールセン

「うむ……………残念じゃがワシが知るのそれはそれ位じゃな……………すまんのぉ。」

ネギ

「い、いいえ……………色々教えて頂いて、ありがとございました。」

そう言うと、ネギはニールセンに向かって深くお辞儀する。

ニールセン

「いやいや、こちらこそ貴重なコインを拾ってくれたからお互い様じゃ。」

ネギ

「それでは、僕はこれで失礼します。」

ネギはニールセンに一礼すると、その場から立ち去っていく。

ニールセン

「……………それにしても、まだ若いのにFIZERROを知らんとは珍しいのぉ。」

ニールセンは立ち去っていくネギの姿を目で追いながら呟く。

〈数分後・店の外〉

ネギ一行は店の外で集合していた（因みに、姿は大人のままである）。

明日菜

「……………結局、手掛かりは無しって訳ね。」

ネギ

「ええ……………他の場所で情報を集めましょう。」

刹那

「そうですね……………姿はこのままの方がいいですね。」

木乃香

「そやな、子供の姿じゃ大人の人から聞き出せへんし……………」

のどか

（わ、私……………この姿はちょっと恥ずかしい……………）。

のどかは少し恥ずかしそうに俯いてしまう。

明日菜

「本屋ちゃん、どうかした？」

のどか

「い、いえ……………何でもありません……………」

ネギ

「それでは、夜の町は物騒ですから慎重に行きましょう。」

そう言うと、ネギ一行はその場から駆け出していくのであった……………。

↓ FIZEROMASHIN 賭けレース場内 ↓

？

「……………本当にそいつらはキャプテン・ファルコンを探してたんだな？」

レックス

「ああ、間違いねえ。」

その頃、レックスが何者かとネギ達の事を話していた。

？

「それで、そいつらは今何処に居る？」

レックス

「さっきまで居たと思ったんだが、もう店から出ちゃったみてえだな……。」

？

「そうか……教えてくれてありがとよ。」

そう言つと、その者は急ぐように立ち去っていく。

？

（フツ、これはファルコンをおびき寄せられるチャンスだな……ま
ずは、ファルコンを探してる連中とやらを探すとするか……。）

そして、その者は店から姿を消していった……。

第五十話、キャプテン・ファルコンの行方、(後書き)

ネギー行を追跡する謎の人物の正体は？

第五十一話 殺し屋からの脅迫状 (前書き)

ファルコンを探し続けるネギー行ですが、ネギー行には怪しい影が
忍び寄る……………。

第五十一話 殺し屋からの脅迫状

（ミュートシティ・町外れ）

ネギー一行は『ミュートシティ』から少し離れた町外れへとやって来た。

明日菜

「ちよつと、町から少し離れちゃったよ。」

ネギ

「あ！本当だ………少し戻りましょう。」

そう言つと、ネギー一行は来た道に戻ろつと歩き出すが………。

？

「きゃあーっ！っ！」

全員

「！？」

突然何処からか女性の叫び声が響き渡る。

のどか

「い、今の悲鳴は……………」

木乃香

「あっちの方から聞こえたえ！」

刹那

「行ってみましょう！」

ネギ

「はい！」

ネギ一行は叫び声が聞こえた方へ駆け出していく。

？

「……………レックスの話によると、ファルコンを探してる連中はあいつらのようだな。」

ネギ一行が駆け出した直後、亀のような姿をした謎の人物が物陰から現れる。

？

「あいつらの後を付いて行けば、いずれファルコンに会えるな……
…よし、このまま尾行を続けるか。」

そう呟くと、謎の人物はネギー一行に見つからないように後を付けて行く。

（ミュートシティ・裏通り）

？

「や、やめて下さい……………」

『ミュートシティ』の裏通りで、へそ出しルックの服装にハート型のサングラスを額に付けた少女が数十人の柄の悪い男達に囲まれていた。

？

「そうはいかねえよ……………お嬢ちゃんが俺達『ブラディーチェーン』の縄張りに入り込んだら駄目だからな。」

『ブラディーチェーン』と名乗る暴走族のリーダーらしき大柄の黒

人男性が代表して少女に話す。

？

「そ、そんな……………私はただ、夜の町を散歩してただけよ。」

？

「フツ、そんな格好で夜の町をうろついてたら誘ってると思われるぜ。」

？

「べ、別に私は誘ってる訳じゃ……………。」

？

「どつちにしろ、俺達の縄張りに足を踏み入れたからにはタダでは帰せねえな……………おい、コイツの服を脱がせ！」

暴走族員

「へいつ！」

リーダーらしき男の命令を聞いた暴走族員達は、じわじわと少女に近付いていく。

？

「い、嫌……………来ないで……………だ、誰か助けて……………」

少女が迫り来る暴走族達から離れようと後退りした時……………。

明日菜

「待ちなさい!!」

全員

「!?!?」

明日菜の声に動きを止めた暴走族達が後ろを振り向いてみると、そこにはネギー一行が立っていた。

?

「何だ？オメエらは……………」

明日菜

「私達の事なんかどうでもいいのよ……………それより、一人の女の子相手にこんな複数の男達が押し寄せるなんて大人げないと思わないの？」

暴走族員 A

「あんだとお!?!?」

明日菜の言葉に一人の暴走族員が怒り出す。

？

「まあ、そう興奮するな……………姉ちゃん、この俺が宇宙暴走族『ブラディーチェーン』のヘッドのマイケル・チェーンと知っててそんな事言ってるのか？」

木乃香

「『ブラディーチェーン』って、何かコーヒーみたいな名前やな……………」

木乃香は『ブラディーチェーン』という名前に苦笑いする。

明日菜

「アンタ達が暴走族だろうと何だろうと関係無いわ……………その女の子を離しなさい！」

マイケル

「ほお、どうやら俺達の恐ろしさを分からせた方が良さそうだな……………お前ら、地獄のパーティーを見せてやれ！」

暴走族員

「へーっ！っ！っ！」

マイケルと名乗るリーダーの指示を聞いた暴走族員達は明日菜達の方へ歩み寄っていく。

ネギ

「明日菜さん、喧嘩はいけませんよ……………」

明日菜

「じゃあ、アンタはあの子があいつらに襲われもいって言うの？」

ネギ

「そ、そういう訳では……………」

マイケル

「今更ゴチャゴチャ言っても遅いぜ……………そら！一斉に掛かれー！っ！」

マイケルの掛け声を合図に、暴走族員達はネギ達に向かって一斉に襲い掛かって来る。

明日菜

「ほら！来るわよ！っ！」

ネギ

「あわわ……………」

迫って来る暴走族達に明日菜は身構えるが、ネギはオロオロした表情を浮かべる。

（数分後）

暴走族員B

「う……………う……………」

暴走族員C

「な、何て奴らだ……………痛たたた……………」

暴走族達はネギ達にスタボロにされて、全員倒れ込んでいた。

ネギ

「ふう、流石にこの人数はきつかった……………」

カモ

「でも、殆ど姐さんがやつつけちまったけど……………」

ネギとカモは苦笑いしながら勝ち誇ったような表情を浮かべる明日菜を見つめる。

マイケル

「ば、馬鹿な……………こんな奴らにボコボコにされちまうなんて……………」

マイケルは啞然とした表情で、倒された手下達を眺める。

明日菜

「どうすんの？まだやるつもり？」

暴走族員D

「じよ、冗談じゃねえ……………逃げる……………」

一人の暴走族員が逃げ出した瞬間、残りの暴走族達も一斉に逃げ出

していく。

マイケル

「お、おい！お前ら何処へ行くんだ！？」

マイケルも慌てて手下達の後を追いつけるように逃げ出していく。

木乃香

「あゝあ、みんな行ってもうたなあ……………」

明日菜

「本当、口程にも無い連中だったわ。」

？

「あ、あの……………」

ネギ

「ん？」

ネギが声がした方へ振り向くと、そこには先程の少女が立っていた。

？

「ありがとうございます……お蔭で助かりました。」

ネギ

「ど、どう致しまして……それより、怪我とかはしてませんか？」

？

「ええ、お姉さん達が助けてくれたから怪我もしませんでしたわ。」

ネギ

「そうですね、それは良かった……。」

ネギは少女の言葉にホッと胸を撫で下ろす。

明日菜

「ところで、貴女は何でさっきの連中に絡まれてたの？」

？

「そ、それが……城からこっそり抜け出して、夜の町を散歩していたら先程の人達に囲まれてしまったんです。」

のどか

「えっ？お、お城って……。」

？

「あ、申し遅れました……………私の名はプリンシア・ラモード、マジカール星のデザート王国という国の姫です。」

ネギ

「えっ！？お、お姫様……………なんですか？」

ネギー一行はプリンシア・ラモードと名乗る少女の自己紹介を聞いて耳を疑った。

刹那

「……………ち、因みに今は何歳ですか？」

プリンシア

「十六歳です！」

明日菜

「じゅ、十六歳！？」

更にネギー一行はプリンシアの年齢に再び耳を疑った。

木乃香

(十六歳いうたら、ウチらより一歳しか違わないんやな……………。)

カモ

(それにしても、十六歳にしちゃあ随分スタイルいいよなあ。)

カモは嫌らしい目付きでプリンシアの豊満な胸を見つめる。

プリンシア

「そういう貴方達も、こんな真夜中に何をしているのかしら？」

ネギ

「ぼ、僕達はただファルコンさんという方を探してるだけでして……………」

プリンシア

「ファルコンって、あのキャプテン・ファルコンの事？」

明日菜

「そうだけど……………何か知ってるの？」

プリンシア

「ええ、実は私……………彼の住み家を見つけたの。」

ネギ一行

「ええっ!?!」

ネギ一行はプリンシアの一言でまたまた耳を疑った。

ネギ

「そ、それは本当なんですか?」

プリンシア

「本当よ、もし良かったら案内してあげましょうか?」

明日菜

「えっ!?!いいの?」

プリンシア

「勿論 助けてくれたお礼もしたいし……私に付いて来て。」

そう言つと、プリンシアはその場から駆け出していく。

ネギ

「あーちよっと待って下さい……。」「

ネギー一行は慌ててプリンシアの後を追いつけていく。

？

「……………ほお、ファルコンの住み家をねえ。」

しばらくすると、再び謎の人物が姿を現す。

？

「このまま後を追いつければ確実にファルコンと接触出来るが……
…一応この事を奴に連絡しておくか。」

そう言うと、謎の人物は懐から携帯電話を取り出してボタンを押す。

？

「もしもし、俺だ。」

？

『ピコか……………どうした？ファルコンを見つけたのか？』

ピコ

「いや、さっき話した連中がファルコンの住み家へ向かっているんだが……………まだ尾行を続けるか？」

？
『ああ、そうしてくれ……………それと、お前にもう一つ仕事を頼みたい。』

ピコ

「ん？何だ？」

？

『ファルコンを探している連中の一人を誘拐して、ゾーダに引き渡してほしい。』

ピコ

「誘拐って……………おいおい、俺は殺し屋だぜ？幾らこの仕事の報酬が高いからって、そんな悠長な真似は……………」

？

『勿論、もし他の連中が追って来たら殺しても構わんが……………ファルコンだけは殺すなよ。』

ピコ

「……………分かった、このまま仕事を続行する。」

？

『フフフ、やはりお前を雇って正解だった……ゾーダが待ち伏せしてる場所は後程連絡を入れて伝える……では、頼んだぞ。』

ピッ！

しばらく話した後、ピコと呼ばれた人物は携帯電話の電源を切る。

ピコ

「……さてと、仕事を再開するか。」

そう呟くと、ピコは再びネギー一行を追い掛け始める。

〈ミュートシティ・街中〉

ネギー一行はプリンシアの案内で、『ミュートシティ』の街中へとやって来た。

明日菜

「ねえ、大分歩いたけどまだ着かないの？」

プリンシア

「もうちょっとだから………あつた！此処よ。」

そう言つて立ち止まり、プリンシアは大きな建物と建物の中の路地に指さす。

のどか

「えっ？こ、此処………ですか？」

刹那

「こんな狭い路地のような通路の先にファルコンさんの住み家があるんですか？」

プリンシア

「だって、彼がこの路地へ入って行ったのを私はしっかりと見たの………それに、彼は数時間経つてもこの路地から出て来なかったから間違いないわ。」

ネギ

「成程、それは確かに怪しいですね……………」。

明日菜

「それじゃ、早速入ってみよっか！」

明日菜の言葉を合図に、ネギー行とプリンシアは狭い路地へと入っていく。

木乃香

「うーん、何か暗くて怖いなあ……………」。

そう呟くと、木乃香も後から路地へ入ろうとしたが……………」。

？

「おい、その姉ちゃん。」

木乃香

「えっ？」

木乃香は声に反応して後ろを振り向きつつしたが……………」。

カチャッ！

木乃香

「!?!」

ピコ

「おっと、それ以上動くな。」

突然ピコが後ろを振り向こうとした木乃香の後頭部に拳銃を突き付ける。

木乃香

「そ、それってひょっとして……………本物なん?」

ピコ

「そつち……………一応言っておくが、これは玩具おもちゃじゃないぜ?」

震えるような声で質問する木乃香に対して、謎の人物は楽しんでい
るかのように答える。

ピコ

「いいか?下手に動いたり助けを呼んだりしたらすぐに撃つからな。」

木乃香

「……………ウ、ウチをどうする気なん？」

ピコ

「答えは簡単……………お前をファルコンをおびき寄せせる餌に使うのさ。」

「

木乃香

「そ、そんな……………んんっ!?!」

木乃香が反論しようと口を開いた瞬間、ピコが後ろから布のような物で木乃香の口元を覆う。

ガチャン!!

更にピコは、手錠を取り出して木乃香の両手に掛ける。

ピコ

「それじゃ、俺と一緒に来て貰おうか。」

木乃香

「んー!んんー!!!」

木乃香はそのままピコによって連行される。

木乃香

（せっちゃん……………助けて……………。）

木乃香の心の叫びも虚しく、ピコは木乃香を手首を掴みながらどんどん離れていく。

ネギ

「……………結局、何もありませんでしたね。」

しばらくすると、ネギー行とプリンシアが肩を落としながら路地から一斉に出て来る。

明日菜

「奥の方まで進んでみたけど、行き止まりだったし……………。」

プリンシア

「可笑しいわねえ……………確かにこの路地だと思ったんだけど……………。」

「

のどか

「あれ？ところで、木乃香さんは？」

刹那

「えっ!？」

のどかの言葉にネギ達は木乃香の姿がない事に気付く。

明日菜

「そう言えば、さっきから姿が見えないわね……………」。

ネギ

「何処へ行ったんでしょうか？」

刹那

「ま、まさか……………お嬢様の身に何か……………」。

のどか

「そ、そんな……………あれ？」

のどかはふと下を見ると、地面に落ちてた一枚の紙切れを見つ
ける。

のどか

「紙に何か書いてある……………っ!？」

更にのどかは、紙切れに書かれた文章を読んで顔色を真っ青に染める。

ネギ

「のどかさん?どうしました?」

のどか

「……………」お前達の仲間は俺が預かった、返してほしければキャプテン・ファルコンに発電所前まで来いと伝える……………サーキットの殺し屋より。『』

全員

「!？」

のどかが読み上げた文章の内容に全員が耳を疑った。

のどか

「この辺りに落ちてた紙切れに書いてありました。」

明日菜

「そ、それってもしかして……………脅迫状？」

ネギ

「じゃあ、木乃香さんは……………誘拐された？」

刹那

「お、お嬢様が……………このちゃんが……………誘拐された……………だって？」

そう呟くと、刹那は落胆しながら地面へと崩れ落ちる。

ネギ

「せ、刹那さん!？」

刹那

「くそっ！私が付いていながら何て様だ!！」

明日菜

「刹那さん！少し落ち着いて……………」

明日菜は激しく自分を責める刹那を落ち着かせようとす。

ネギ

「それにしても、一体誰がこんな事を……………」。

？

「俺に心当たりがある。」

全員

「!?!」

全員声がした方を見ると、路地の間からファルコンが出て来る。

ネギ

「あ、貴方は……………ファルコンさん!?!」

プリンシア

（変ね、この先は行き止まりだったのにどうして……………。）

そう思いながら、プリンシアはファルコンを見つめる。

ファルコン

「話は全部聞かせてもらった……………君達の仲間はこの俺が必ず救い出してみせる。」

ネギ

「えっ！？ほ、本当ですか？」

ファルコン

「ああ、勿論だ……それに、俺をおびき寄せただけに無関係な人を巻き込む奴らの卑劣なやり方が許せん！」

そう言うと、ファルコンは拳を強く握り締める。

明日菜

「ところで、さっき犯人について心当たりがあるって言ったけど……一体誰が木乃香を誘拐したんですか？」

ファルコン

「うむ、犯人は恐らくピコに違いない。」

刹那

「ピコ………そいつがお嬢様を………。」

刹那は犯人の名前を聞いた瞬間、夕凧を握る力を強める。

ネギ

「そのピコって人はどんな人物なんですか？」

ファルコン

「ピコは俺と同じくFIZEROの出場者なんだか……裏では殺し屋をやっている危険な男だ。」

のどか

「こ、殺し屋……。」

ネギー一行はファルコンの説明を聞いて、一瞬顔色を変える。

明日菜

「な、何で殺し屋が木乃香を誘拐したんだろう……。」

ファルコン

「恐らく、ピコは高い金で誰かに雇われたんだろう……。」

ネギ

「では、一体誰がそんな事を……。」

ファルコン

「そこまでは流石に俺も分からない……何せ、俺を狙う奴らは沢

山いるからな……とにかく、後は俺に任せてくれ！」

そう言い残すと、ファルコンはその場から勢い良く駆け出していく。

プリンシア

「あっ！行っちゃった……………」

刹那

「……………ネギ先生、私達も行きましょう。」

ネギ

「勿論ですよ！木乃香さんは僕の生徒であり大事な友達ですから。」

明日菜

「そうよね！それじゃ、みんなで木乃香を助けに行くわよ！！」

明日菜の言葉を合図に、ネギ一行もその場から勢い良く駆け出していく。

プリンシア

「……………わ、私はどうしようかなあ……………あっ！そつだー！！」

プリンシアは何かを思い付くと、ネギ達とは別の方向へと走り出していくのであった……。

第五十一話 殺し屋からの脅迫状 (後書き)

ピコによって誘拐された木乃香……果たしてネギー行はファルコンと共に木乃香を救い出せるのか？

第五十二話 殺し屋VS神鳴流剣士 (前書き)

木乃香がピコに誘拐されてしまい、ファルコンとネギー一行は救出し
に向かうのであった……………。

今回の話は、いつもより短めです。

第五十二話 殺し屋VS神鳴流剣士

くライトニングく

ネギー一行はファルコンを追い掛けて、暗雲が覆っていて発電所が多数建てられている地域へとやって来たが……。

ネギー

「弱ったなあ、此処まで来てファルコンさんを見失うなんて……。」

「

明日菜

「どうしよう……これじゃ、木乃香が何処に囚われてるかも分からないわ……。」

のどか

「せめて、木乃香さんが捕われてる発電所の場所さえ分かればいいのですが……。」

刹那

「このちゃん……。」

ネギ達は辺りを見回しているが、刹那だけが下へ俯きながら落ち込

んでいた。

ネギ

「せ、刹那さん！元気出して下さい！！」

明日菜

「そうよ！今は刹那さんがしっかりしなきゃ駄目でしょ！！」

刹那

「あ、明日菜さん……………」。

明日菜の言葉を聞いた刹那は、今まで俯いていた顔を上げる。

刹那

「そうですよね、私がすっかりしないといけないのに……………ありがとうとぅございませす！お蔭で目が覚めました！！」

明日菜

「そうそう！それでこそ刹那さんよ！！」

明日菜は元気を取り戻した刹那を見て笑顔を浮かべる。

ネギ

(良かった……………刹那さんにやる気が戻って……………。)

ネギがホッと胸を撫で下ろした時……………。

ドオー……ン!!

全員

「!?!」

ネギ一行は銃声に驚いて素早く身を屈める。

ネギ

「い、今のは……………銃声!?!」

明日菜

「って事は、もしかして……………。」

?

「そうさ、俺だ!」

ネギ一行が声が出た方を向いてみると、そこには拳銃を持ったピコ

が立っていた。

ネギ

「貴方が……………ピコさんですね？」

ピコ

「ああ、いかにも。」

明日菜

「じゃあ、アンタが木乃香を……………」。

明日菜がそう言いかけると、ネギ一行はピコを睨み付ける。

刹那

「お嬢様を……………木乃香お嬢様を返してもらおうか。」

ピコ

「フツ、残念だったな……………あの姉ちゃんなら、もうゾーダに渡しちゃったよ。」

のどか

「ゾーダ？」

ネギ一行はピコの言葉に耳を疑った。

ネギ

「木乃香さんは、そのゾーダって人と一緒に居るんですか？」

ピコ

「ああ、今頃は発電所へ向かってるハズだぜ。」

明日菜

「発電所って言っても、この辺は発電所が沢山建てられてるし……
…一体どの発電所なのよ？」

ピコ

「さあな……例え知ってても教えないけどな。」

刹那

「何だと………ふざけるな！お嬢様の居場所を教えるー！」

そう言つと、刹那は夕風を取り出す。

ピコ

「フン、教えたところで何の意味も無い………何故なら、お前達は

この場で死ぬんだからな。」

カチャッ

ピコは刹那に向けて拳銃を構える。

ピコ

「さて、まずは刀を持ったお前から死んでもらおうか……………」。

ネギ

「せ、刹那さん！」

刹那

「大丈夫です……………私に任せて下さい。」

そう言うと、刹那はピコに向かってゆっくりと歩き出そうとする。

ピコ

（馬鹿な女だ……………自分から死に行くような真似を……………）。

ピコが近付こうとする刹那を見て、怪しい笑みを浮かべた瞬間……………

ドオーーーーーッ！

ピコが持っていた拳銃から銃声が響き渡る。

ピコ

（決まった……額には見事な穴が……なっ！？）

ピコは刹那の方を見て、額に弾丸が命中してない事に目を疑った。

ピコ

（ば、馬鹿な……確かに額を狙って撃ったはずだが……よし、今度は心臓を狙ってやる！）

ドオン！ドオン！

次にピコは刹那の心臓に向けて銃を二発撃つが…………。

シュシュッ！

刹那が目にも止まら速さで夕凧を取り出して、弾丸を切り刻んでいく。

ピコ

（な、何だと！？）

ピコは刹那の素早い剣裁きに目を疑った。

刹那

「その程度の腕では、私を撃ち抜く事は出来んぞ。」

ピコ

「く、くそお…………俺の銃の腕を舐めるなあ！！」

バババババババン！！

ピコは刹那に向けて銃を乱射させるが、刹那は全ての弾丸を切り刻んでいく。

ピコ

(畜生おゝ！当たれ当たれ当たれえゝゝ！！)

カチツカチツ！

しばらく乱射していると、銃の弾を全て撃ち尽くしてしまふ。

ピコ

(し、しまった！弾切れか……………。)

ピコは慌てて拳銃に弾を入れようとするが…………。

刹那

「隙あり！！」

ピコ

「！？」

その隙に刹那が夕凧の刃先をピコに突き付ける。

ピコ

「……………俺の負けだ。」

そう言つと、ピコは持っていた拳銃を投げ捨てる。

刹那

「もう一度だけ聞こう……………木乃香お嬢様を何処へやった？」

ピコ

「フン、最初に言つたる……………お前達に教えるつもりはないってな。」

「

明日菜

「頑固な奴ねえ……………」

明日菜はピコの頑固さに呆れ返る。

ネギ

「……………のどかさん。」

のどか

「はい、分かりました……………アデアット……………」

パァー……ッ!!

ネギに呼ばれた直後、察知したのどかは『いどのえにつき』を呼び出す。

のどか

「……ピコさん、木乃香さんが連れて行かれた発電所は何処ですか?」

ピコ

「何度も言わせるな! 教えるつもりはない!!」

のどか

「……………」

ピコが答えた直後、のどかは『いどのえにつき』を見つめる。

のどか

「……………ネギ先生、場所が分かりました。」

ピコ

「な、何? それはどついつ……………」

ドスッ！！

ピコ

「ぐふっ！？」

ピコが慌てた表情を浮かべながら問い質そうとした瞬間、刹那が夕凧で峰打ちをする。

バタッ！！

そして、ピコはそのまま崩れ落ちる。

刹那

「……もしお嬢様に手を出していたら、この程度では済まなかったぞ。」

刹那は先程よりも鬼のような目付きで悶絶するピコを睨み付ける。

ネギ

「刹那さん、そろそろ行きましょっ。」

刹那

「そうですね……………宮崎さん、案内をお願いします。」

のどか

「は、はい……………」

のどかはネギ達より一足先に駆け出して、その後からネギ達も駆け出していく。

ピコ

（く、くそ……………あいつら一体何者なんだ？）

ピコは悶絶しながらネギ一行を見つめ続ける。

くとある発電所前く

？

「遅い……ゾーダは何をやっている？」

ある発電所の前で、シマウマのような模様のスーツを着た大柄の初老男性が苛立ちながら立っていた。

キーーーーーッ！！

すると、初老男性の前に青と水色のマシンが立ち止まる。

？

「フン、やっと来たか……。」

そう呟くと、マシンの中から怪人のような風貌の男が身動きが取れない状況の木乃香を引っ張り出しながら出て来る。

？

「ゾーダ、遅かったじゃないか。」

ゾーダ

「まあ、こつちも色々大変だったんだからそう言つなよ……ドン・ジーニーさんよ。」

ジーニー

「まあいい……ところで、その小娘が餌か？」

ジーニーと呼ばれた初老男性は片手で木乃香の顎を掴みながら見つめる。

木乃香

「んー！んんーっ！！」

木乃香は勢い良く顔を振って、ジーニーの手から逃れる。

ジーニー

「ほお、威勢がいい小娘だ……。」

ゾーダ

「ところで、アレの準備は出来たか？」

ジーニー

「ああ、もうとっくに仕掛けたぞ……。」

ジーニーはゾーダの質問に怪しい笑みを浮かべながら答える。

ゾーダ

「そうか……そんなじゃ、仕上げにコイツをあそこに縛り付けて来るか。」

木乃香

「んんーっ!!」

ゾーダは木乃香を引っ張りながら発電所へと向かっていく。

ジーニー

「それにしても、奴も随分大それた事を考えたもんだな……。」

そう言いながら、ジーニーは発電所を眺めるのであった……。

第五十二話 殺し屋VS神鳴流剣士 (後書き)

ゾーダに発電所の中へ連れてかれた木乃香の運命は……………。

更新についてですが、最近『キングダムハーツ バースバイスリープ』を買ったのでいつもより更新が遅れる可能性がありますのでご了承ください。

第五十三話　恐怖のカウントダウン（前書き）

誘拐された木乃香を救出する為に発電所へ向かって走って行くネギ一行ですが、先にか駆け出したファルコンは……。

第五十三話　恐怖のカウントダウン

とある発電所前

キーーーーーッ!!

木乃香が捕らえられた発電所前にファルコンの『ブルーファルコン』が勢い良く立ち止まる。

ファルコン

「脅迫状に書いてあった発電所は此处だな。」

そう言つて、ファルコンがマシンから降りた時……。

?

「よお、待つてたぜ!」

ファルコン

「!？」

ファルコンが声がした方を向いてみると、そこにはゾーダとジーニーが立っていた。

ファルコン

「ゾーダにドン・ジーニー……………お前達の仕業だったのか。」

ジーニー

「そんな事より、早くお嬢ちゃんを助けに行った方がいいのではないか？」

そう言っつて、ジーニーは発電所の方を指さす。

ファルコン

「どういう意味だ？」

ゾーダ

「あの発電所に時限爆弾を仕掛けたのさ！」

ファルコン

「な、何だと!？」

ファルコンはゾーダの言葉に耳を疑った。

ジーニー

「さあ、早く助けに行かないと後五分で爆発するぞ。」

ファルコン

「……………くそっ!！」

ブオーーーーーーッ!!

ファルコンは急いで『ブルーファルコン』に乗り込んで、発電所に向かって走り出していく。

ゾーダ

「へへへ、上手くいったな……………」

ジーニー

「ああ、後は奴に任せるとしよっ……………」

そう言いつつ、ゾーダとジーニーはその場から立ち去っていく。

（発電所内部）

ファルコン

「大分奥まで進んだな……………ムッ!?」

しばらく進んでいると、ファルコンは柱に縛り付けられた木乃香を発見する。

ファルコン

「見つけた……………とうっ!」

ファルコンは勢い良く『ブルーファルコン』から降りて、木乃香の方へと駆け出す。

木乃香

「んー!んんー!」

ファルコン

「安心しろ、君の友達に頼まれて助けに来た……………今縄を解いてやる。」

そう言って、ファルコンが木乃香を縛ってある縄を解こうとした時
……。

？

「ハアアアツ！！」

バリバリバリッ！！

ファルコン

「うわっ！？」

突然ファルコンの背後から何者かが巨大な光の弾を放ち、ファルコンは上半身全体を光の縄で縛られて身動きが取れない状態となった。

？

「フフフ、油断したな……………キャプテン・ファルコンよ。」

全身真っ黒な衣装で牛のような鋭い角を付けた男がファルコンの前に現れる。

ファルコン

「お、お前は……………ブラック・シャドー！？」

シャドー

「ほお、我輩の事を覚えていたとはな……………」。

ブラック・シャドーと呼ばれた男はファルコンの驚いた表情を見て怪しい笑みを浮かべる。

ファルコン

「な、何故だ…………お前は俺を倒すのに失敗して、デスポーンに始末されたハズでは……………」。

？

「私が彼を蘇られた。」

ファルコン&木乃香

「!？」

ファルコンと木乃香は声が出た方を見てみると、いつの間にか黒コートの人物が立っていた。

木乃香

（あ、あの人は…………。）

ファルコン

「い、いつの間に……それに、蘇らせたといつのはどいつの意味だ？」

？

「言葉通りの意味だ……私がブラック・シャドーを再びこの世へと導いたのだ。」

シャドー

「その通り……しかも、この者は我輩の計画を手伝ってくれたのだよ。」

ファルコン

「計画だと？」

ファルコンはシャドーの言葉に耳を傾ける。

シャドー

「決まってるだろ？今度こそ貴様を亡き者にする為の計画だよ。」

ファルコン

「その為にお前はピコを使って、この子を誘拐して俺を此処へおびき寄せたという訳か……相変わらず卑怯な真似を……！」

シャドー

「卑怯？とても心地良い響きだ……とにかく、身動きが取れない貴様は此処で爆発に巻き込まれて死ぬのだ！」

そう言うと、シャドーは近くに止めてあった真っ黒なマシンに向かって歩き出す。

ファルコン

「ま、待て！せめて、彼女だけでも助けてやってくれ！」

木乃香

「!?!」

木乃香はファルコンの言葉に思わず耳を疑った。

シャドー

「フン、こんな状況でも正義のヒーロー気取りか……悪いが、貴様の頼みなど聞けんな！」

ファルコン

「な、何だと!?彼女は元々無関係なんだぞ!!」

シャドー

「そんなの我輩の知った事か！そのまま二人揃って死ぬがいい！！」

そう吐き捨てるように言っていると、シャドーはマシンへと乗り込む。

ファルコン

「お、おい！！」

ブオーーーーーーッ！！

ファルコンの呼び掛けも虚しく、シャドーを乗せたマシンはそのまま走り出してしまふ。

？

「爆発まで約三分後……………せいぜい助けか来てくれる事を祈るんだな……………」

スッ！！

そう言い残すと、黒コートの人物はその場から姿を消してしまふ。

ファルコン

「くそっ！何て事だ……………」

ファルコンは縄から抜け出そうと必死にもがく。

ファルコン

「こんな所で死んでたまるか！彼女だけでも救わなければ……………」

木乃香

（この人、自分よりもウチの事を第一に考えとる……………せつちゃん、みんな、ウチらを助けて……………」

木乃香は必死にもがくファルコンを見つめながらただ祈るしかなかった……………」

（発電所前）

その頃、ネギー一行は発電所前へとやって来た。

ネギ

「この発電所に木乃香さんが居るんですね？」

のどか

「はい、間違いありません。」

刹那

「木乃香お嬢様……………今助けに行きます！」

ネギ一行が発電所に入ろうとした時……………。

？

「おい、そこで何をしている？」

全員

「!？」

ネギ一行は声がした方を向くと、紫色のヘルメットに赤い衣装を着ているファルコンらしき男性が立っていた。

明日菜

「ビ、ビツクリした……………ファルコンさんじゃない。」

ネギ

（あれ？可笑しいな……………ファルコンさんの服、あんな色してたっけ？）

刹那

「……………。」

ネギと刹那はファルコンらしき男の服装を目を凝らしながら見つめる。

ファルコン？

「俺の事より、此処へ何しに来たんだ？」

明日菜

「な、何しに………木乃香を助けに来たに決まってるじゃない。」

ファルコン？

「ほお、それは感心するなあ……………。」

そう言つと、ファルコンらしい男はどんどん明日菜の方へ近付いて

来る。

ネギ

「あ、明日菜を……。」

刹那

「明日菜さん！その男から離れて下さい……！」

明日菜

「え？何で……。」

ガシッ！！

明日菜

「うぐっ！？」

明日菜が刹那の言葉に耳を傾けた瞬間、ファルコンらしき男が明日菜の首を強く掴み上げる。

のどか

「あ、明日菜さん！？」

刹那

「やはりファルコンさんの偽物が……………」

ネギ

「貴方は一体何者なんですか!？」

ファルコン?

「俺の名はブラッド・ファルコン……………キャプテン・ファルコンの遺伝子から生み出されたクローンだ!」

刹那

「ク、クローンだと?」

ネギ達はブラッド・ファルコンと名乗る男の言葉に耳を傾ける。

明日菜

「く、苦しい……………」

ネギ

「あ、明日菜さんを放して下さい!」

そう言っつて、ネギはBファルコンベニシロコに近付くつもりだが……………。

Bファルコン

「おっと！それ以上近付くな……………さもないと、この女の首をへし折るぞ！」

刹那

「ひ、卑怯な……………」

キーーーーーッ！！

その時、シャドーを乗せたマシンがネギ達の前で急停止する。

Bファルコン

「お？どつやら準備完了のようだな……………」

ネギ

「準備？」

ネギがBファルコンの言葉に耳を傾けていると、マシンの中からシャドーが出て来る。

シャドー

「ブラッド・ファルコンよ、コイツらは何者だ？」

Bファルコン

「俺もよく分かんが、この辺りをうろついてたんだ。」

シャドー

「ほお、という事は……………あの女の仲間だな。」

刹那

「女……………木乃香お嬢様の事か!？」

シャドー

「やはりな……………」

シャドーは刹那の取り乱したような表情を見て確信する。

ネギ

「木乃香さんは無事なんですか?それに、ファルコンさんも……………」

「

シャドー

「ああ、今のところ無事だ……………」

のどか

「今のところ？」

ネギ達はシャドーの言葉に耳を傾ける。

シャドー

「あの発電所には爆弾が仕掛けられてて、もうじき爆発するぞ。」

刹那

「な、何だっつて!？」

ネギ達はシャドーの言葉を聞いて驚愕する。

ネギ

「で、では……………二人はまだ発電所に……………」

刹那

「た、大変だ……………早く助けに行かなければ!」

そう言つて、刹那は発電所へ向かおうと走り出そうとするが……………。

Bファルコン

「おい！さっき動くなって言っただろ？」

明日菜

「ぐっ……………」

Bファルコンは明日菜を首を更に強く掴む。

Bファルコン

「それとも、この女を見捨てて助けに行くか？」

明日菜

「せ、刹那さん……………私の事はいいから……………早く木乃香を……………」

ネギ

「明日菜さん……………」

刹那

（わ、私はどうすれば……………木乃香お嬢様は私にとって大切な人だ……………でも、明日菜さんも私にとって大事な仲間だから見捨てるなんて事は……………しかし、このままではお嬢様が……………）

刹那は明日菜の苦しそうな声を聞いて、激しく葛藤する。

シャドー

「どつやら、もう助けに行く時間は無さそうだ……後五秒で爆発する。」

ネギ

「あ、後五秒!？」

のどか

「そんな……………」

刹那

「お、お嬢様!」

シャドー

「五……………四……………三……………二……………一……………一……………一……………0。」

ボカアーーーーー！！！！

ネギ&刹那&のどか

「！！！！」

シャドーがカウントを言い終えたと同時に、発電所が大爆発を起す。

のどか

「う、嘘……………」

ネギ

「ま、まさか……………木乃香さんが……………」

明日菜

(木乃香……………)

刹那

「こ、このちゃん……………このちゃん……………ん
！！！！」

刹那の悲痛な呼び声が辺りに響き渡っていくのであった……………。

第五十三話、恐怖のカウントダウン（後書き）

大爆発した発電所だが、果たして木乃香とファルコンの生死は？

最後に一言、こんな終わり方ですいません……。

第五十四話 決死の追跡 (前書き)

木乃香とファルコンが入ったままの発電所が大爆発……果たして
二人の運命は？

第五十四話 決死の追跡

「発電所跡地」

のどか

「う、嘘……………」

ネギ

「ま、まさか……………木乃香さんが……………」

ネギ達は呆然としながら燃え盛る発電所を眺めていた。

明日菜

（こ、木乃香……………」

明日菜はBファルコンに首を掴まれたまま、発電所の方を見つめる。

刹那

「こ、このちゃん……………このちゃん……………」

刹那の悲痛な呼び声が辺りに虚しく響き渡る。

シャドー

「ハーツハハハハハハ！遂にキャプテン・ファルコンを倒したぞ！
！」

Bファルコン

「ああ！お前達の仲間と共になー！！」

刹那

「き、貴様ら……………」

刹那が夕凧を構えながらシャドー達を睨み付けた時……………。

？

「誰が死んだって？」

全員

「!?!」

全員声が出た方を向いてみると、そこには気を失ってる木乃香を抱き抱えたファルコンが立っていた。

ネギ

「ファ、ファルコンさん!!」

刹那

「木乃香お嬢様!!」

ファルコン

「彼女なら心配無い、気を失っているだけだ。」

のどか

「良かった……………」

ネギ達はファルコンの言葉を聞いて、ホッと胸を撫で下ろしながら
一安心する。

シャドー

「ば、馬鹿な……………あの状況でどうやって脱出したんだ!？」

ファルコン

「彼女が助けてくれたのさ……………」

そう言つて、ファルコンの指さす方を見ると『ブルーファルコン』の近くで頭に大きなレンズのサングラスを付けて、ビキニの上

に羽織った黄緑色のジャケットにハートだらけのジーパンを着用した銀色のショートヘアの少女が居た。

シャドー

「お、お前は何者だ？」

？

「私はリリー・フライヤー……………銀河宇宙連邦予備軍の一員よ。」

Bファルコン

「ぎ、銀河宇宙連邦予備軍だと!？」

シャドーとBファルコンはリリーと名乗る少女の言葉に耳を疑った。

リリー

「もつすぐ銀河宇宙連邦の人達が貴方達を逮捕しに此処へやって来る……………だから、大人しく降伏しなさい！」

Bファルコン

「う、嫌い!こっちには人質が居るのを忘れ……………。」

ボカッ!!

Bファルコン

「あがつ!?!」

突然明日菜がBファルコンの股間に強い蹴りを入れる。

Bファルコン

「ぬお~~~~っ!?!」

明日菜

「うっ…………ゲホッゲホッ!?!」

Bファルコンが激しく悶絶すると、明日菜の首を掴んでいた手を放す。

ネギ

「あ、明日菜さん!大丈夫ですか!?!」

明日菜

「え、ええ……………何とかね……………」

ファルコン

「どうやら、形勢逆転のようだな……………ブラック・シャドー!」

シャドー

「うぬぬ……………」

シャドーは自分の立場が逆転した事に動揺して、思わず後退りする。

シャドー

「このまま捕まってたまるものかぁー！！！！」

そう叫ぶように言うと、近くに停車させてあった自分のマシンに向かって走り出す。

ファルコン

「お、おい待て！」

ファルコンは木乃香をゆっくりと地面に降ろすと、シャドーに向かって駆け出していく。

刹那

「お、お嬢様！」

その後、刹那が木乃香の元へ駆け寄る。

シャドー

「後は任せたぞ！ブラッド・ファルコン！！」

ブオーーーーーーッ！！

自分のマシンに乗り込んだシャドーは、物凄いスピードで走り去っていく。

リリー

「しまった！逃げられた……………」

ファルコン

「奴は俺が捕まえる！君は此処を頼む！！」

そう言うと、ファルコンは『ブルーファルコン』に乗り込む。

ファルコン

（ブラック・シャドーめ……………絶対に逃がさんぞ！）

ブオーーーーーーッ！！

次の瞬間、『ブルーファルコン』も物凄いスピードで走り出している。

のどか

「行ってしまいましたね……………」。

ネギ

「…………僕、ファルコンさんと一緒に行きます。」

明日菜

「えっ！？でも、あのマシンに追い付けるの？」

ネギ

「分かりませんが、とにかく行って来ます！」

ブワーーーーーッ！！

ネギが杖に跨がった瞬間、『ブルーファルコン』に向かって勢い良く飛び出していく。

のどか

「ネギ先生も行ったやいましたね……………」。

明日菜

「あいつ、大丈夫かなあ？」

明日菜とのがかがどンドン遠くへ飛んでいくネギを見送っていると……。

Bファルコン

「お、おのれ……………さっきはよくもやってくれたな。」

Bファルコンが股間を手で押さえながらゆっくりと立ち上がる。

Bファルコン

「よくも男の急所を狙ってくれたな……………この痛みを何十倍にして返してやる!」

明日菜

「上等じゃない!」つちこそ首をきつく締め付けたお返しをしてあげ……………」

リリー

「ちよっと待った!」

突然リリーが明日菜とBファルコンの間に割り込んでくる。

リリー

「この子の代わりに、私が相手をするわ！」

明日菜

「ええっ!？」

明日菜はリリーの発言に耳を疑った。

Bファルコン

「フッ、いいだろう……誰か相手だろうと蹴散らしてやる!！」

リリー

「訓練で鍛えた腕を見せてあげる!！」

リリーがそう言った後、お互い正面に向かって突っ込んでいく。

次の瞬間、『ブラックブル』は更にスピードを上げて走行していく。

ファルコン

「俺から逃げ切れると思うなよ……………ブースト発動!!」

ブワァー……ッ!!

『ブルーファルコン』もスピードを上げて、『ブラックブル』と同じ位置まで走行してくる。

シャドー

「お、おのれ……………我輩の横に並ぶな!!」

ガッン!!

ファルコン

「ぐっ!!」

『ブラックブル』が『ブルーファルコン』の方へ突っ込んでくる。

ネギ

「あっ!ファルコンさんが危ない……………」

すると、杖に跨がったネギが二台のマシンの後方からやって来る。

ネギ

「魔法の射手・光の一矢!!」

ドンツ!!

ネギは小さな杖を取り出して、『ブラックブル』に向けて光の魔法弾を放つ。

ボンツ!!

シャドー

「ぐわっ!?!」

ネギが放った魔法弾が『ブラックブル』に命中すると、マシンはバランスを崩してしまう。

ボカアーーーーーン!!

そして、『ブラックブル』はそのままガードレールに激突してしま
う。

ファルコン

「ブラック・シャドーー!!」

キーーーーーッ!!

ファルコンは『ブルーファルコン』を急停止させて、慌てて『ブル
ーファルコン』から出て来る。

ネギ

「ファルコンさん!大丈夫ですか!?!」

ファルコン

「あ、ああ……………俺は平気だが……………」

ガシャン!!

ネギが急いでファルコンの元へ駆け寄った時、炎上する『ブラック
ブル』からシャドーが出て来る。

シャドー

「よ、よくも……よくも我輩をここまでコケにしてくれたな……」

ファルコン

「ブラック・シャドー！もう無駄な抵抗はやめろ！！」

シャドー

「黙れ！貴様だけは許さんぞお————！！」

そう言うと、シャドーはファルコンに向かって突っ込んでくる。

ネギ

「あ、危ない！」

ファルコン

「心配いらない！すぐに片付ける………ハアアツ！！」

ファルコンが気合いを入れると、ファルコンの拳が炎に包まれる。

シャドー

「死ねえ————！！」

ファルコン

「ファルコンパンチ!!」

ボガアーーーーッ!!

シャドー

「ぐおおおおっ!!」

ファルコンの強力なパンチがシャドーの腹部に命中して、勢い良く吹っ飛ばされる。

ネギ

「す、凄い……………」

カモ

「ああ、一発でノックアウトだぜ……………」

ネギとカモはファルコンのパンチ力に驚愕する。

ファルコン

「ふう、これで一件落着だな……………」

ファルコンは再び『ブルーファルコン』に乗り込もうとする。

カモ

「兄貴、今がチャンスだぜ！」

ネギ

「そ、そうだね……ちょっと待って下さい！」

ファルコン

「ん？」

ネギに呼び止められたファルコンは、そのまま立ち止まる。

ネギ

「少しだけ僕の話聞いて下さい……。」

こうして、ネギは今までの経緯をファルコンに説明した。

ファルコン

「そうだったのか……では、『レッドキャニオン』で俺が助けたあの少年達が……。」

ネギ

「はい、あの時にこれを渡そうと思いましたが……それでは、改めてバッチをお渡しします。」

ネギは懐からバッチを取り出して、そのままファルコンに手渡す。

ファルコン

「ありがとうございます……わざわざ手間を掛けさせてすまなかったな。」

ネギ

「い、いえ……あまり気にしないで下さい。」

カモ

「ん？こっちに何か近付いて来るぜ。」

ネギ

「えっ？」

カモが指さす方を見ると、数台のマシンがネギ達の方へ向かって走行してくる。

ネギ

「アレは何でしょうっ..」

ファルコン

「フツ、どつやらやっとな銀河宇宙連邦のお出ましのようだ.....」。
ファルコンはこちらへどんどん近付いてくる数台のマシンを見ながら鼻で笑う。

隊員

「さあ、来るんだ!」

シャドー

「く、くそお.....」。

シャドーは銀河宇宙連邦の隊員達に連行されていく。

明日菜

「ネギ、アンタ大丈夫だった?」

ネギ

「はい、僕は平気です……………そっちはどうでしたか？」

のどか

「はい、私達も大丈夫です。」

明日菜

「何せ、あのリリーって子が一人でファルコンさんの偽物をボッコボコにしちゃったからね……………」

ネギ

「そ、そうですね……………」

カモ

（あの嬢ちゃんが一人でな……………。）

ネギとカモは明日菜の説明を聞いて苦笑いする。

？

「ファルコン、また貴方には借りを作ってしまったわね。」

ファルコン

「ん？ああ、ジヨデイか……………」

連行されるシャドーを見つめるファルコンの背後から、ジヨデイという名前の長い茶髪の女性が声を掛けてくる。

ジヨデイ

「それにしても、またブラック・シャドーを倒すなんて流石ね……………私、また貴方を見直したわ」

ファルコン

「い、いや……………今回は俺一人の力では……………」

？

「オッホン！」

ファルコンがジヨデイに弁解しようとした時、短髪で大柄の男性が大きく咳込みながら割り込んでくる。

ジヨデイ

「ちょっと、急にどうしたの？」

？

「い、いや……………別に何も……………」

ジヨデイ

「……変なタナカね。」

ジヨデイはタナカという名の男性の不可解な行動に首を傾げる。

タナカ

「ところでファルコン、ブラック・シャドーがピコの他にも高い金で依頼した奴らがいると聞いたのだが……。」

ファルコン

「ああ、それはゾーダとドン・ジーニーだ……奴らも捕まえねば……。」

？

「いや、その心配は無用だ！」

全員

「!?!」

全員声がした方を向いてみると、そこにはゾーダを捕らえた全身茶色の衣装を身に纏った男性とジーニーを捕らえた少々筋肉質の金髪女性がいた。

タナカ

「き、君はスーパー・アローじゃないか！」

ジヨディ

「それに、妻のミセス・アローも……………」

タナカとジヨディはアロー夫妻の姿を見て思わず目を疑う。

アロー

「ご覧のように、ゾーダ達は私と愛しのハニーが捕らえた。」

Mrs.アロー

「悪は絶対に逃がしたりしませんわ。」

タナカ

「ご、ご協力ありがとうございます……………おい、誰かこの二人も連れていけ！」

隊員

「は、はい！」

タナカの指示を聞いた二人の隊員は、そのままゾーダとジーニーを連行する。

明日菜

「……………どつやら、悪い奴らは全員捕まったみたいね。」

ネギ

「そのようですね。」

ファルコン

「……………それにしても、銀河宇宙連邦がよくこの事件を察知出来たな。」

ジヨディ

「ええ、プリンシアが通報してくれたお蔭よ。」

ファルコン

「プリンシアが?。」

ファルコンはジヨディの言葉に思わず耳を疑った。

ジヨディ

「そうよ、彼女が通報してくれなかったら私達は出動してなかったわ。」

ファルコン

「そうか……………今度あの子に会ったら、お礼を言わなければな……………」

ファルコンは口元に少し笑みを浮かべながら呟く。

ネギ

「あれ？ところで、刹那さんと木乃香さんは？」

のどか

「木乃香さんは意識が戻らないので、銀河宇宙連邦の人達がスチュワートという人が働いてる病院へ運んで行きました。」

明日菜

「刹那さんも木乃香の付き添いで一緒に行ったの。」

ネギ

「そうだったんですか……………僕達もそこへ行きましょう！」

ファルコン

「俺も行こう……………彼女の事が心配だ。」

ジヨディ

「それじゃ、早速隊員達のマシンで……………」

アロー

「ちょっと待ったー！」

突然アローがジヨディの言葉を遮るように大声を上げる。

アロー

「わざわざ銀河宇宙連邦の手を貸す必要は無い……………我々夫婦のマシンに乗っていくがいい！」

ネギ

「えっ！？でも、本当にいいのですか？」

Mrs・アロー

「ええ、これも正義の味方の務めですわ。」

ファルコン

「二人共、感謝する……………ネギ、君達はアロー夫妻のマシンに乗ってくがいい。」

ネギ

「分かりました……………明日菜さんとかさんも乗って下さい！」

のどか

「は、はい…!」

明日菜

「勿論よ!」

こうして、ネギー行とファルコンは木乃香と刹那が居る病院へと目指すのであった……。

くスチュワートの病院く

数分後、ネギー行とファルコンは病院の病室へとやって来た。

ネギ

「木乃香さん!」

木乃香

「あ！ネギ君、それにみんなも……………」

ネギ達が病室へ入ると、頭に包帯を巻いてベットで横になつてゐる木乃香とパイプ椅子に座つてゐる刹那と黄色い衣装の上に白衣を羽織つた男性が目に見えた。

ファルコン

「スチュワート、彼女の具合は？」

スチュワート

「大丈夫、大きな怪我は無いし……………二・三日も入院すれば退院出来るよ。」

ネギ

「そうですか、良かった……………」

ネギ達はスチュワートの言葉を聞いて、ホッと胸を撫で下ろす。

刹那

「先生、本当にありがとうございました。」

刹那はスチュワートに向かって深く頭を下げる。

スチュワート

「いやいや、私は医師として当然の事をしただけさ……………」

木乃香

「せっちゃん、ファルコンはんにもお礼を言わな……………ウチの事を命懸けで助けようとしたんやから。」

刹那

「はい、勿論です……………この度は木乃香お嬢様を命懸けで助けて頂き、本当にありがとうございます。」

木乃香

「ホンマにありがとうございます。」

ネギ

「僕達からお礼を言います……………ありがとうございます！」

明日菜&のどか

「ありがとうございます！」

ネギー一行はファルコンに向かって一斉に頭を下げる。

ファルコン

「い、いや……………俺は人として当然の事をしただけで……………」

スチュワート

「ファルコン、さっき私が言った事と少し似ていないか？」

ファルコン

「そ、そうか？」

全員

「ハハハハハハハハ。」

ネギ一行の楽しい笑い声が病室内へと響き渡るのであった……………。

第五十四話 決死の追跡 (後書き)

こうして、ネギー一行は木乃香が退院するまでゆっくり体を休めるの
であった……………。

第五十五話〜フタマスクとPSI少年〜（前書き）

『FIZERRO』の世界から帰って来たネギー行ですが、今回は何処の世界へ行くのか？

第五十五話 ㄱﾌﾀﾏｽｸとPSSI少年ㄱ

ㄱ大乱闘の館・中庭ㄱ

ｷﾞｱﾌﾟﾃﾝ・ﾌﾞｱﾙｺﾝの世界から帰って来た翌日の朝、ﾈｷﾞ一行はいつもように中庭に集合していた。

ﾈｷﾞ

「皆さん、今日も張り切って行きますよ！」

木乃香

「おーっ！」

ﾈｷﾞの掛け声に、木乃香が元氣一杯に返事する。

明日菜

「刹那さん、どうやら木乃香は完全に治ったようね……………」

刹那

「ええ、そのようですね……………」

のどか

「本当に良かったですね……………」。

明日菜達は木乃香に聞こえないように小さな声で話す。

マスターハンド

「ところで、今日は地形のような模様がある丸いバッチをネスとリユカに渡してほしい。」

ネギ

「ネスさんとリユカさんですね……………その二人について特徴とか何かありませんか？」

マスターハンド

「そうだな……………簡単に言えば、ネギ君と同じ位の子供かな。」

明日菜

「こ、子供!？」

ネギ一行はマスターハンドの説明を聞いて耳を疑った。

マスターハンド

「勿論、ただの子供ではない……………二人共PSIという能力を使えるのだ。」

木乃香

「サイって何なん？」

マスターハンド

「君達の世界で言う超能力の名称だ。」

刹那

「超能力と言いますと、サイコキネシスとかテレポーテーションとか……そういうのですよね？」

木乃香

「せっちゃん詳しいなあ。」

刹那

「い、いえ……私が知っているのはこれくらいですので……。」

刹那は木乃香に褒められて少し真っ赤になる。

ネギ

「とにかく、次の世界へ行きましょう！」

そう言いつと、ネギー行はいつものようにワープ土管へと入っていく。

くイーグルランド・オネットく

ネギー行はのどかでアメリカな雰囲気の町へとやって来た。

のどか

「見たところ、ごく普通の町ですね。」

明日菜

「そうね、まるでアメリカの小さな町みたい。」

ネギ

「取り合えず、まずはこの町でネス君とリュカ君を探してみま……
…。」

？

「きゃーーーーっ……！」

全員

「!?!」

突然遠くから女の子の叫び声が響き渡る。

刹那

「い、今の悲鳴は……。」

木乃香

「向こうから聞こえてきたえ……。」

ネギ

「行ってみましょう!」

ネギ一行は叫び声が聞こえてきた場所に向かって駆け出していく。

「こ、怖いよ…………お兄ちゃん…………。」

「大丈夫、僕が付いてるから…………。」

ネギー一行が居た場所より少し離れた場所で、赤い帽子を被った少年と金髪でピンク色の服を着た少女が豚のような覆面を被った数人の男達に囲まれていた。

「小僧、お前が持つてる『音の石』を渡してもらおうか？」

「嫌だ！誰がお前達のような怪しい奴らに渡すもんか！！」

「チツ、仕方ない…………じゃあ、力付く奪うまでだ！！」

そう言うと、豚の覆面男達は少年に向かって襲い掛かってくる。

明日菜
「待ちなさい!!」

全員
「!?!」

豚の覆面男達は明日菜の声に反応して後ろを振り向いてみると、そこにはネギ一行が立っていた。

?
「何だ?お前らは……………」

ネギ
「僕達の事より、その子達を解放して下さい!」

明日菜
「そうよ!大人のクセに変な格好して、子供に襲い掛かるなんてどうかしてるんじゃない?」

?
「な、何だとお!?!」

?

「よくも俺達を侮辱してくれたな!!」

豚の覆面男達は少年に代わって、ネギー一行に襲い掛かるつもりとする。

明日菜

「アデアット!!」

パアーーーーッ!!

次の瞬間、明日菜が咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出す。

?

(ハ、ハリセン!?)

?

「凄い!あのお姉ちゃん、いきなりハリセンを出したよ。」

少年は『ハマノツルギ』を見て驚愕するが、逆に少女は大喜びしながら驚く。

明日菜

「うおりゃーーーー!!」

パツシーーーーーン!!

?

「あ~~~~れ~~~~!!」

明日菜は『ハマノツルギ』で、一人の豚の覆面男を遠くへ吹っ飛ばす。

?

「な、何て馬鹿力な女だ……………」

?

「ど、どうする?」

?

「ア、アレだ! 『豚戦車』を用意しろ!!」

?

「わ、分かった!」

そう言つと、豚の覆面男の一人が何処かへ駆け出していく。

木乃香

「あ！逃げた……………」

明日菜

「逃がすもんですか！」

明日菜は逃げ出した豚の覆面男を追い掛けようとするが……………。

？

「おっと！こっから先は通さないぞ！」

残り三人の豚の覆面男が明日菜を通せん坊する。

明日菜

「ちよっと！邪魔しないでよ……………」

明日菜は通せん坊する豚の覆面男達を薙ぎ払おうとしたが……………。

ゴゴゴゴゴゴゴッ！…！

のどか

「な、何の音？」

ネギ

「あれ？向こうから何か近付いてくる……。」

？

「おっ！来たな……。」

騒音と共に、全体が真っ白な巨大戦車がやって来る。

刹那

「せ、戦車！？」

明日菜

「しかも、真っ白……。」

ネギ一行は真っ白な巨大戦車に啞然とする。

？

「これでお前らを始末してやる……よし！発射用意！！」

一人の豚の覆面男がそう言うと、戦車の発射口がネギ達に向けて動き始める。

木乃香

「あわわ！きっと大砲を発射するんや……………」

のどか

「ど、どつすねば……………」

？

「僕に任せて！」

ネギー一行が動揺しだした時、赤い帽子の少年が戦車の前に立ち塞がる。

明日菜

「ちょ、ちょっとアンタ……………」

？

「大丈夫……………PKフラッシュ！！！」

少年が技名を言った時、頭上から緑色の光が発生して戦車の中へ侵入させる。

？
「ハアッ！！」

ボツカーーーーン！！

？

「どひゃ~~~~っ！！」

更に少年が体を広げた瞬間、戦車が大爆発を起こし乗車していた豚の覆面男が上空へ吹っ飛ばされる。

ネギ

「い、今のは……………魔法？」

カモ

「いや、さっきの技に魔力を感じなかった……………ひよっとして、マスターの旦那が言ってたPSIっていう力かもな……………」

木乃香

「え？ほなら、あの子が……………」

「コ、コイツら強すぎる……………一先ず退却だ〜!!」
?

豚の覆面男達はその場から慌てて退却していく。

「お兄ちゃん!」
?

「わあっ!?!」
?

すると、いきなり少女が少年に抱き着いてくる。

「トレーシー、怪我とか無かったか?」
?

トレーシー

「うん、お兄ちゃんが悪い豚さん達をやっつけてくれたからね!」

「そっか、良かったあ……………」
?

少年はトレーシーという名前の少女の言葉を聞いて一安心する。

トレーシー

「それと、このお姉ちゃんもカッコよかったよ！」

そう言いつつ、トレーシーは明日菜に指さす。

明日菜

「わ、私？」

木乃香

「あれ？明日菜ったら、顔が少し赤くなってるえ〜。」

明日菜

「へ！？そ、そう？」

木乃香の言葉に明日菜は少し動揺する。

？

「どうもありがとう！お蔭で僕と妹のトレーシーも助かりました。」

トレーシー

「ありがとう、お姉ちゃん！」

明日菜

「い、いやぁ……………それ程でも……………」

明日菜は深々と頭を下げながらお礼を言う少年とトレーシーに思わず照れる。

刹那

「ところで、君の名前は……………」

？

「僕？僕はネス、妹のトレーシーと一緒にこの『オネット』に住んでいます。」

ネギ

「やっぱり……………それと、さっき使った力はPSIだね？」

ネス

「そ、そうだけど……………どうしてPSIの事を知ってるの？」

ネギ

「実は僕達……………」

ネギはネスにこれまでの経緯を詳しく説明した。

ネス

「そうだったんだ、僕達の為に……………」。

ネギ

「はい、これがそのバッチだよ。」

ネギはバッチをネスに手渡す。

ネス

「どうもありがとう。」

明日菜

「ところで、さっきアンタ達に襲い掛かってきた豚の奴らは何なの？」

ネス

「僕もよく分からないんだ……………でも、あいつら『音の石』を狙ってたみたいだった。」

のどか

「『音の石』？」

ネス

「これだよ。」

ネスは懐から『音の石』を取り出す。

刹那

「見たところ、普通の石みたいですが……………」

ネス

「この石に八つの音を染み込ませると、不思議な力が湧いて来るんだ。」

木乃香

「不思議な力？」

ネギー行はネスの説明に耳を傾ける。

ネス

「でも、この『音の石』は前に僕が持っていたのと何処か違うんだ……………前に訪れた八つの場所に言っても何の反応も無かったし……………」

…。」

ネギ

「え？前に持ってたって事は、これは君が持っていた『音の石』じゃないの？」

ネス

「うん、前に持ってたやつは音を全て集めた時に消えちゃったからね……これは、最近僕の前に現れたんだ。」

明日菜

「現れた？」

ネス

「そう、昨夜に強い光と共に僕の家の前に現れて……もしかして、また未来で何かが起こってるのかも……。」

ネスはどんどん小声になりながら独り言のように呟く。

カモ

「兄貴、どうやらまた何かが起こってるみてえだな……。」

ネギ

「うん、そのようだね……………」。

ネギとカモがネスに聞こえないように話していると……………」。

トレーシー

「わあ〜、イタチさんだ〜！可愛い〜〜！！！」

トレーシーは嬉しそうにネギの肩に乗っかってるカモを指で軽く突く。

カモ

（お、おい！あんまりつつつくなよ……………」。

ネギ

「あ、あははは……………」。

ネギはトレーシーにつつつかれるカモを見て苦笑いする。

？

「た、助けてえ〜！！！」

ネス

「ん？」

ネスは声がした方を向くと、金髪で少し太めのトレーシー位の歳の少年が慌てて駆け出してくる。

ネス

「ピッキーじゃないか、そんなに慌ててどうしたの？」

ピッキー

「ハアハアツ……………さ、さっき裏山でブタマスクのおじさん達に襲われたんだよ……………ゼエゼエ。」

ピッキーという名の少年は息を切らしながらネスに説明する。

明日菜

「ブタマスクのおじさん達って……………さっきの連中の事じゃない！？」

刹那

「まだこの辺りをうろついてたのか……………」

ネギ

「被害者が出る前に追い払いましょー！」

ネス

「僕が案内するよ……………トレーシーは急いで家に帰るんだ！」

トレーシー

「お、お兄ちゃんは？」

ネス

「僕はネギ達と一緒に裏山へ行ってくる……………じゃあね！」

そう言い残すと、ネスはネギ一行と共に裏山へ向かって駆け出していく。

トレーシー

「お兄ちゃん……………気をつけてね。」

ピッキー

（ネス、ゴメンね……………。）

トレーシーは不安そうな表情でネス達を見送るが、ピッキーは少し申し訳なさそうな表情でネス達を見送る。

第五十五話〜ブタマスクとPSI少年〜（後書き）

ブタマスク達を追い払う為に裏山へと目指すネギー一行とネスですが
……………。

因みに、この小説でのMOTHERの世界観についてですが……………
ネスとリュカは同じ世界に住んでいるという設定にします（『MOTHER2』に登場したジェフの父・アンドーナッツ博士が『MOTHER3』にも登場していたので問題無いかと……………）。

ご了承下さい……………。

第五十六話、音の石の秘密（前書き）

ピッキーがブタマスク達に襲われたと聞いて裏山へやって来たネギ一行とネスですが……………。

第五十六話 音の石の秘密

くオネット・裏山付近

ネギー行とネスは『オネット』から少し離れた裏山へとやって来た。

ネス

「此処が裏山だよ。」

明日菜

「でも、ブタマスクの奴らが見当たらないわね……………」

刹那

「何処かに潜んでいるのではないのでしょうか？」

ネギ

「皆さん、辺りを注意して下さいね……………」

そう言っつて、ネギが一步足を踏み出した瞬間……………」

ズボッ！！

全員

「わあっ!?!」

突然地面が崩れて、全員穴の中へ落ちてしまう。

ネギ

「な、何ですか!?!コレは……………」

のどか

「も、もしかして……………落とし穴?」

刹那

「今時落とし穴とは……………」

木乃香

「でも、引つ掛かるウチちらもどつかと思っえ……………」

明日菜

「ちよつとネギ!変なところ触らないでよ!?!」

ネギ

「ほ、僕じゃないですよ!?!」

ネス

「み、みんな……………少し落ち着いて……………」

ネギー一行が落とし穴の中で騒ぎ始めると、ネスが冷静に宥めようとする。

？

「わはははは！こんな幼稚な罠にまんまと引っ掛かるとはな！！」

？

「あの小太りのガキを利用して、落とし穴を作った甲斐があったぜ！！」

すると、落とし穴の上から先程のブタマスクの三人が覗き込んできた。

明日菜

「このお〜！正々堂々と戦いなさいよお〜！！」

ブタマスクA

「フン、何とでも言え！俺達はその小僧が持つてる不思議な力を秘めてる『音の石』が目当てなんだからな。」

ネス

「ど、どうしてお前達が『音の石』の事を……………」。

？

「私ガ彼ラニ教エテアゲタノダ。」

ブタマスク達の中に、全身真っ白で顔が小さくて手足が細長い生物が現れる。

木乃香

「な、何やの？あの宇宙人みたいな生物は……………」。

ネス

「ス、スターマン!？」

ネスはスターマンという生物を見て驚愕する。

スターマン

「ソウダ、私ハ以前才前ニ倒サレタ『すたーまんノ息子』ダ。」

ネス

「ど、どうして今頃になって……………それに、何でそいつらと一緒に……………」

のどか

「ネス君、少し落ち着いて……………」

のどかは状況が理解出来ずに困惑するネスを優しく宥める。

スターマン

「ドウヤラ混乱シテルヨウダナ……………マア、何セ私自身モ何故蘇ツタノカ不思議ニ思ツテル位ダカラナ。」

ネス

「何だつて？」

スターマン

「デモ、コノ機会ヲ利用シテ『音ノ石』ノ不思議ナ力デギーぐ様ヲ復活サセヨウト私ワ彼ヲト手ヲ組ンダノダ。」

ネス

「ギ、ギーグを復活させるだつて!？」

ネスはスターマンの発言に耳を疑った。

木乃香

「ネス君、ギーグって何なん？」

ネス

「ギーグは地球征服を企んでいた宇宙人んだけど……あの姿を思い出すと今でもゾツとするよ……。」

ネスは体を震わせながら木乃香の質問に答える。

明日菜

「そ、そのギーグって奴はそんなに恐ろしいのね……。」

刹那

「そうですね、あの怯え方は尋常じゃない……。」

明日菜と刹那はネスの尋常じゃない怯え方に少し動揺する。

スターマン

「トニカク、『音ノ石』ハ我々が頂イタゾ。」

そう言うと、スターマンはネスが持っていたハズの『音の石』を取

り出す。

ネス

「えっ!?!い、いつの間に……………」

ネスはスターマンに『音の石』が取られた事に動揺する。

スターマン

「ソレニシテモ、ぶんぶーんノ一族モ無駄ナ事ヲシタナ……………」

ネス

「ブンブーンノ一族?じゃあ、僕に『音の石』を送ったのは……………」

スターマン

「ソウ、カツテオ前ニ『音ノ石』ヲ授ケタぶんぶーんノ一族ナノダ……………
奴ラハ、ぎーぐ様ノ復活ヲ阻止シヨウト悪アガキヲシタノダ

ネス

「そ、そうだったのか……………」

ネスはスターマンの説明に納得する。

明日菜

「でも、ネスの話だと確か……………八つの場所に行っても何の反応も無かったんだよね？」

ネス

「う、うん……………」

木乃香

「せやったら、その悪い宇宙人が復活する事は無いんちゃう？」

スターマン

「ふっ、才前達八何モ分カツテナイナ……………」

スターマンは明日菜達の言葉を聞いて鼻で嘲笑う。

ネギ

「どういう意味ですか？」

スターマン

「コノ『音ノ石』八前ノ『音ノ石』ト違ッテ、アル場所ノ七ツノ音ヲ染ミ込マセナイト力ヲ發揮出来ナイノダ。」

ネス

「七つの音……それに、ある場所って『イーグルランド』じゃないの？」

ブタマスクB

「そうさ！コイツの話によると、その場所は俺達の根城がある『ノ
ーウェア島』だそうだ！」

ブタマスクC

「ば、馬鹿……。」

ブタマスクCは慌ててブタマスクBの口を塞ぐ。

ネス

「『ノーウェア島』って……リユカが住んでる島だ！」

ネギ一行

「えっ!?!」

ネギ一行はネスの発言に耳を疑った。

スターマン

「トニカク、我々ハコレカラぎく様ノ復活サセル為ニ」のーうえあ島へ向カウ。」

ネス

「待て！そんな事はさせないぞ……………」。

ネスは急いで落とし穴から這い上がるつもりが……………。

スターマン

「邪魔ハサセン！PKファイアー（アルファ）！！！」

ネス

「!?!」

ネギ

「あ、危ない……………」。

ポワーーーーッ！！

スターマンがネス達に向かって念動力を放つと、落とし穴の中は激しい炎で燃え上がっていく。

ブタマスクA

「いいぞー！スターマン！」

ブタマスクB

「これであいつらもおしまいだ！」

ブタマスクC

「それに、もう俺達の邪魔をする奴もいなくなったぞ！」

ブタマスク達はネス達を始末した事に喜びながら飛び跳ねるが……
…。

ネス

「誰がおしまいだった？」

ブタマスク達

「!?!」

ブタマスク達は声に反応して動きを止めると、目の前に何故かネギ一行とネスが居た。

スターマン

「シ、シマッタ！てれぽーとデ移動シタカ………。」

スターマンは再び攻撃を仕掛けようとするが……。

ネス

「今度はこっちの番だ！PKファイアー（ベータ）！！」

ボワァー……ッ！！

スターマン

「ゲオオオツ！！」

ネスが素早く放った念動力が命中し、スターマンは炎に包まれていく。

ポロツ……

すると、『音の石』がスターマンの手元から落ちる。

ネス

「『音の石』は返してもらおうよ。」

そう言うと、ネスは地面に落ちた『音の石』を拾う。

ブタマスクA

「ち、畜生……………再び退却だあゝゝ!!」

ブタマスク達はその場から再び慌てて立ち去っていく。

スターマン

「ワ、私ヲ倒シテモ……………ぶたますく達ガ既ニ……………動イテイル……………今度こそ地球ハ……………ぎーぐ様ノ手ニ……………」

そう言い掛けた瞬間、スターマンは炎に包まれたまま消滅していく。

カモ

「……………兄貴、今回も骨が折れそうだな。」

ネギ

「そうだね……………でも、このままじゃ大変な事になっちゃうよ。」

ネス

「うん、さっきのブタマスクって奴らもまた『音の石』を狙ってくるだろうし……………」

明日菜

「そりゃそつね……………ところで、これからどうしてよじつ…」

明日菜の言葉に全員深く考え込む。

木乃香

「……………ほなら、ウチらも『ノーウェア島』に行ってみいひん？」

全員

「えっ？」

全員木乃香の発言に耳を疑う。

木乃香

「だって、その島にはリュカ君がおるし……………それに、ウチらが先に『音の石』で音を集めれば悪い宇宙人も復活出来ひんちゃうかな？」

のどか

「な、成程……………それは良いアイデアですね。」

明日菜

「それに、リュカって子にも会えるし……………まさに一石二鳥ね。」

ネギ

「木乃香さん、今日は何だか冴えてますね。」

刹那

「流石は木乃香お嬢様……………この桜咲刹那も感服致しました!」

木乃香

「い、いやあ……………そないに褒めんといてよ……………//」

木乃香はネギ達にベタ褒めされて照れまくる。

ネス

「あ、あの……………一ツいいかな?」

明日菜

「え?何?」

ネス

「『ノーウェア島』へ行くって言うけど……………その島が何処にあるか分かるの?」

ネギ一行

「……………へ？」

ネギ一行はネスの質問に耳を傾ける。

明日菜

「ア、アンタ……………島へ行った事無いの？」

ネス

「うん、リュカと対面出来るのは『大乱闘の館』へ来た時だけだし……………この『オネット』へ帰って来てからリュカの姿を見てないんだ。」

木乃香

「そ、そか……………ええアイデアやと思ったんやけど……………。」

木乃香はネスの説明を聞いてガツクリと肩を落とす。

刹那

「お、お嬢様！そんなに落ち込まないで下さい……………ドンマイですよ！」

刹那は少し落ち込み気味の木乃香を励ます。

のどか

「それなら、この地域で島まで出せる船とか無いでしょうか？」

ネス

「え〜っとね……………この『イーグルランド』の東側にある『フォギーランド』という国に『サマーズ』という観光地に隣接する『トト』という町だったら船を出してくれると思うけど……………」

ネギ

「では、取り合えずその『トト』という町へ行ってみましょうか……………もしかしたら、『ノーウェア島』まで出してくれる船があるかもしれませんし。」

刹那

「そうですね……………ネス君、この町から『トト』までの距離はどれ位ですか？」

ネス

「う〜ん、この『オネット』からだとかかなり距離があるなあ……………でも大丈夫、僕のテレポートを使えばすぐに『トト』へ行けるよ。」

明日菜

「テレポートって、さっきのスターマンって奴の攻撃から回避する

時に使った技よね？」

ネス

「そう……それに、僕のテレポートは一度来た場所だったらその場所へ行く事が出来るんだ。」

カモ

「へえ………何だかPSIって魔法と似てるなあ。」

ネス

「魔法？」

ネスはカモの言葉に耳を傾ける。

明日菜

「言い忘れてたけど、ネギは魔法使いなのよ。」

ネス

「えっ！？そ、そうだったの？」

ネギ

「う、うん……。」

ネギはネスの驚いた表情を見て、少し気まずくなる。

ネス

「じゃあ、お姉さん達も魔法使いなの？」

カモ

「いや、姐さん達は兄貴のパートナーなんだ。」

ネス

「パートナー……それって、ポケモントレーナーのゼニガメ達みたいにサポートするって事？」

ネギ

「まあ、そういう事だね……。」

カモ

「だが、兄貴のパートナーになるには……むぐっ!？」

明日菜

「それは言わなくていいの!」

カモが説明しようとした時、明日菜が慌ててカモの口を塞ぐ。

ネス

「ど、どうしたの？」

明日菜

「な、何でもないわよ……………」

明日菜は苦笑いしながらネスに答える。

ネギ

「と、とにかく今は『トト』という町へ行ってみましょう。」

木乃香

「ほなら、早速ネス君のテレポートで……………」

ネス

「あ、あの……………その前にちょっといいかな？」

突然ネスがネギ達の話に恐る恐る割り込む。

のどか

「どっしたの？」

ネス

「『トト』へ行く前に、ママに声を掛けてもいいかな？」

明日菜

「ママ？そつねえ……………別にいいんじゃない？」

ネギ

「そうですね、しばらくこの町には帰って来られないかもしれませ
んし……………」

ネス

「ありがとう……………それじゃ、まず僕の家に行こう。」

そう言うと、ネスは自分の方へと歩き出してネギ一行も後から追い
掛けていく。

ネスの家の前

？

「ネス、大丈夫かしら……………」

『オネット』のとある一軒家の前で、金髪で赤い洋服を着た女性が誰かを待っていた。

ネス

「ママ〜！」

しばらくすると、ネスとネギー一行がこちらへとやって来る。

ママ

「ネス！トレーシーから話を聞いたわ……………豚みたいな人達に酷い事されなかった？」

ネス

「だ、大丈夫だよ……………ネギ達が居たからね。」

そう言うと、ネスはネギー一行に指さす。

ママ

「あら？ひょっとして、ネスの新しい友達？」

ネギ

「え？は、はい……。」

ママ

「やっぱり、この町じゃ見掛けない顔だからね……。ネスと仲良くしてあげてね」

明日菜

「も、勿論……。」

ネギと明日菜はネスのママに対して、少し戸惑い気味に答える。

ネス

「と、と……ママ……。」

ママ

「ん？何？」

ネス

「じ、実は……ママに言いたい事があって……。」

ママ

「……………言わなくても分かってるわ。」

ネス

「えっ？」

ネスはママの一言に耳を傾けた。

ママ

「また何処かへ行くんでしょ？ママは何もかもお見通しよ。」

ネス

（マ、ママは相変わらず勘が鋭いなあ……………。）

ネスはママの勘の鋭さに感服する。

ママ

「ママはこれ以上何も言わないわ……………気をつけて行ってらっしゃい！」

ネス

「ありがとう、ママ。」

ネスがお礼を言うと、ママはネスの頭を優しく撫でる。

ネギ

（お母さんか……………何だか、羨ましいなあ……………。）

ネギは少し羨ましそうな表情でネスとママを見つめる。

カモ

「どうしたんだ兄貴？さっきから浮かねえ顔してるけどよお……………。」

ネギ

「い、いや……………何でもない……………。」

明日菜

「……………ネギ、アンタにはお姉さんが居るでしょ？」

そう言うと、明日菜はネギの頭を軽く叩く。

ネギ

「明日菜さん……………そうですね、僕にはお姉ちゃんが居るから何にも寂しくありませんよね。」

そう言つて、ネギは笑顔で明日菜の方を見る。

ママ

「それじゃ、ネスの事をお願いしますね……………ネス、あまり友達に迷惑を掛けちゃ駄目よ?」

ネス

「わ、分かってるよ……………じゃあ、行って来ます!」

ママ

「はい、行ってらっしゃい!」

ボタン!

すると、ママは安心して家の中へと入っていく。

ネス

「よし!早速『トト』へ行こう……………みんな、輪になるよに手を繋いで。」

木乃香

「わ、分かったえ。」

ネギ一行とネスは輪の形になるようにお互いの手を繋ぎ合う。

明日菜

（な、何だかコレ……………宇宙人を呼び出す時の格好みたいね……………）

そう思いながら、明日菜は一人だけ苦笑いする。

ネス

「それじゃ、行くよ……………テレポート!!」

スッ!!

次の瞬間、ネギ一行とネスはその場から忽然と消えてしまった。

第五十六話、音の石の秘密（後書き）

こうして、ネギー行とネスはノーウェア島を目指してトトという港町を目指すのであった……………。

第五十七話 仮面の男 (前書き)

オネットからワープしようと思ったネギー一行とネスだが、果たした目的地に辿り着けるのか？

第五十七話 仮面の男

（フォギーランド・港町トト）

ネギー行はネスのレポートで『フォギーランド』という国にある『トト』という港町へとやって来た。

ネス

「ふう、無事に着ついて良かった……………」

明日菜

「それにしても、テレポートって便利ねえ。」

木乃香

「そやなく、やっぱりPSIって凄いなあ。」

カモ

「そうかあ？超能力より魔法の方がスゲーと思うけどなあ……………」

ネギ

「カ、カモ君……………」

ネギは慌てて愚痴を零すカモの口を塞ぐ。

ネス

「それじゃ、僕は『ノーウェア島』まで出航してくれる船を探して
くるから此処で待ってて。」

そう言つと、ネスはその場から走り去っていく。

のどか

「……………それにしても、いい天気ですねえ。」

明日菜

「そうね、港町だから海を見渡せるし……………」。

木乃香

「あゝあ、水着でも持ってくれば海で泳げたのに……………なあ？せつ
ちゃん。」

刹那

「え？は、はい……………そうですね……………」。

刹那は木乃香の水着姿を想像しながら慌てて答える。

ネギ

「木乃香さんだったら、遊びに来た訳じゃないんですから……………ん？」

突然ネギは何か気付いたかのように辺りを見回す。

明日菜

「ネギ、どうしたの？」

ネギ

「……………何か、音楽が聞こえてきませんか？」

のどか

「音楽……………ですか？」

木乃香

「どれどれ……………」

明日菜達はその場で耳をすましてみると……………。

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

木乃香

「あーホンマや……聞こえてくるわ。」

刹那

「でも、一体何処から……。」

明日菜

「あつ！？上を見て！」

明日菜が指さす上空を見上げると、全体真っ白な巨大戦艦が飛行していた。

のどか

「……………ア、アレは何でしょうか？」

刹那

「よく分かりませんが、何かの飛行物体かと思われるのですが……」

ネス

「みんな、何処の船も『ノーウェア島』まで出してくれないって……あれ？どうしたの？」

戻ってきたネスは、上を見上げてるネギ一行に首を傾げる。

木乃香

「ネス君、アレを見てみて。」

ネス

「えっ？あっ！？何アレ……………」

ネスも上空を見上げて、謎の飛行物体を見て唖然とする。

明日菜

「怪しいわね……………追い掛けてみよっか！」

ネギ

「あ、明日菜さん！？」

明日菜は謎の飛行物体を追い掛けて行く。

刹那

「ネギ先生、どうします？」

ネギ

「うーん……………僕達も行きましょー!」

そう言つと、ネギ達も明日菜に続くように追い掛けて行く。

〔港町トト・町外れの海岸〕

ネギ一行とネスは謎の飛行物体を追い掛けて、港町『トト』からかなり離れた町外れの海岸へとやって来た。

明日菜

「みんな、こっちこっち……………」

ネギ達より先に追い掛けていた明日菜が、ネギ達を手招きする。

ネギ

「明日菜さん、さっきの飛行物体は……………」

明日菜

「あそこに着地してるわ……………」。

明日菜の指さす方を見ると、海岸付近で着地させてる白い戦艦を発見する。

ネス

「何で、こんな所に着地させたんだろう?」

明日菜

「多分、あいつらを迎えに来たんだと思う……………あっちの方も見てみて。」

ネギ

「あいつらって……………あつ!?!」

更に明日菜が指さす方を見ると、ネギ達を取り逃がした三人のブタマスクを発見する。

のどか

「あの人はさっきの……………」。

明日菜

「きつと、本拠地へ帰るつもりなのよ。」

木乃香

「ほなら、アレに忍び込めば『ノーウェア島』へ行けるんじゃない？」

刹那

「お、お嬢様！それは、幾ら何でも危険ですよ！」

ネギ

「そうですよ！もし敵に見つかったら……………」。

明日菜

「大丈夫よ、ネスのレポートを使えば簡単に忍び込めるじゃない。」

┌

ネス

「えっ！？ぼ、僕？」

ネスは明日菜の言葉に思わず耳を疑った。

カモ

「成程、そうすりゃ敵にも気付かれねえしな……………」。

ネス

「た、確かに僕のテレポートなら簡単に忍び込めるけど……あの
中の中の場所にテレポートするかまでは僕にも分からないよ。」

ネギ

「そ、それは危険です！もし到着した場所に敵が居たら大変な事に
……………」

のどか

「あ！あの人達が船の中に入っていきます。」

のどかの言う通り、ブタマスク達はハッチが開かれた戦艦の中へと
入っていく。

明日菜

「ちょっと、あいつらがあの船に乗ったら発進しちゃうんじゃない
？」

ネギ

「うーん……………危険だけど、『ノーウェア島』へ行くにはあの船に
忍び込むしかなさそうですね……………」

ネス

「分かった……じゃあ、またみんなで手を繋いで。」

ネギー一行はネスの言われた通りに、輪の形になるようにお互いの手を繋ぎ合う。

ネス

「それじゃ、行くよ……ハッ!」

スッ!!

次の瞬間、ネギー一行はネスのテレポートで、その場から姿を消す。

ゴォー……ッ!!

それと同時に、戦艦がどんどん上昇しながら飛行していく。

く豚母艦・内部く

スッ！！

ネギー一行はネスのテレポートで、ロッカーが沢山並んでる部屋へとやって来た。

ネス

「ふう、どうにか侵入出来たみたいだ……………」

刹那

「それに、この部屋に敵が居なくて良かったですね。」

ネギ

「でも、これからどうすれば……………」

ネギはそのまま腕を組んで深く考え込む。

明日菜

「それにしても、このロッカーに何が入ってんだろ？」

そう言っつて、明日菜は一つのロッカーを開けてみると……。

明日菜

「あっ！コレは……。」

木乃香

「どないしたん？」

明日菜

「ちよつと、見てみてよ……いい物を見つけたわよ。」

のどか

「いい物……ですか？」

ネギ達は首を傾げながら明日菜が開けたロッカーを覗いてみると……。

ネギ

「あっ！？この衣装は確か……。」

ネギ達はロッカーに入ってあったブタマスクの制服と覆面を発見する。

明日菜

「そう、あいつらが着ていた制服と覆面よ。」

ネス

「ねえ、コレを着ればあいつらにバレないんじゃない？」

木乃香

「せやな、変装にも調度ええし……。」

刹那

「では、早速着てみましょう。」

そう言うと、全員ブタマスクの制服を試着し始める。

〈豚母艦・通路〉

更衣室でブタマスクの覆面と衣装を身に纏ったネギ一行とネスは戦艦内の通路を歩いていた。

明日菜

「……………ねえ、この服重くて動きにくくない？」

木乃香

「うん、まるで太ったみたいな感じやな……………」

のどか

「わ、私……………歩くのが精一杯です……………」

そう言っつて、木乃香とのどかは少し息を切らしながら歩き続ける。

刹那

「どつやら、この制服は肉襦袢にくじゅばんのようになってるんですね。」

ネギ

「という事は、この服を着てる人が太ってる訳じゃなかったんですね。」

カモ

「そんな事より、よく子供サイズの服が都合良く置いてあったよな

あ。
」

ネス

「僕もそう思った。」

ネスがカモの言葉に苦笑いしながら歩いていると……………。

？

「おい、お前達！」

全員

「!?!?」

ネギー一行とネスは突然水色の覆面と制服を着たブタマスクに呼び止められる。

ブタマスク

「こんな所で何をしているんだ？」

ネギ

「い、いやあの……………ぼ、僕達ですな……………。」

ブタマスクの質問にネギが答えようとするが……。

ブタマスク

「ひょっとして、お前達が今日入隊した新入りか？」

ネギ

「え？は、はい！そうです……僕達が今日新しく入隊した新入りです！」

ブタマスク

「そうか！やっぱりな……何か分からない事があったら遠慮なく言ってくれよ！じゃあな！」

そう言つと、ブタマスクはその場から立ち去っていく。

明日菜

「……………あいつ、何か勘違いしてるみたいね。」

ネギ

「でも、そのお蔭で助かりました。」

刹那

「この調子で、奴らにバレないように慎重に進んで行きましょう。」

ネス

(あの連中だったら、慎重に進む必要は無いと思うけどね……………。)

木乃香

「あや？この扉は何やろ……………」

突然木乃香が『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた小さな看板を掲げた扉に目を奪われる。

刹那

「お嬢様、どうかなさいましたか？」

木乃香

「いや、この扉が何なのか気になって……………」

？

「馬鹿者共……………!!」

全員

「!?!」

全員扉の向こうから聞こえてきた怒声に驚く。

のどか

「む、向こうに誰か居るんでしょうか？」

明日菜

「よし、ちょっとだけ覗いてみよっと。」

ネギ

「あ、明日菜さんったら……………」。

全員ゆっくりと扉を少し開けて、僅かな隙き間から覗き込んでみる。

？

「全く！お前達は一体何しに行つて来たんだ！？」

ブタマスク達

「も、申し訳ありません……………ヨクバ様。」

ネギ達が覗き込んだ隙き間から、三人のブタマスクがヨクバと呼ばれたアラビアの商人みたいな格好した髭の男に怒られている光景が目に見えた。

ネス

「あいつら、きつと『オネット』で僕達に襲い掛かって来た奴らだ。」

「

木乃香

「何で怒られてるんやろ？」

刹那

「恐らく、ネス君が持つてる『音の石』を奪えなかったからでしょう。」

明日菜

「成程……でも、いい気味だね。」

そう言つと、明日菜は見下すような目でブタマスク達を見つめる。

ヨクバ

「さて、お前達の失敗を司令官に報告してくるか……………」。

ブタマスクA

「そ、そんな！」

ブタマスクB

「それだけは勘弁して下さい！」

ブタマスクC

「今度こそ必ず上手くやります！」

ブタマスク達はヨクバの言葉を聞いて動揺を隠せなくなる。

ヨクバ

「……………その言葉、本当だな？」

ブタマスクA

「はい！勿論です！！！」

ブタマスクB

「今度こそ『音の石』を奪ってみせます！！！」

ブタマスクC

「お任せ下さい！！！」

ブタマスク達はヨクバに向かって敬礼しながら答える。

ヨクバ

「よし、お前達に最後のチャンスをやろう……だが、もしまた失敗したら司令官だけでなくキング様にも報告するからな。」

ブタマスク達

「ひい~~~~っ!!」

ブタマスク達はヨクバの言葉を聞いて震え上がる。

ネス

「司令官とキング様……か。」

カモ

「兄貴、どうやらそいつらが黒幕のようだな。」

ネギ

「うん、そうだね。」

ヨクバ

「ところで、確か五人で向かったはずだが……残り二人はどうした？」

ブタマスクA

「そ、それがですね……………」

ブタマスクAは周りに聞こえないように、ヨクバの耳元で小声で話
す。

ヨクバ

「何っ！？不思議な力を持ったガキ共に倒されただど！？」

ブタマスクA

「は、はい……………」

ヨクバ

「不思議な力……………まさか……………PSIか？」

ネス

(えっ！？あ、あのおじさん……………どうしてPSIの事を……………)。

？

「おいコラ！此处で何を……………」

全員

「！？」

全員声に驚いて後ろを振り向いてみると、筋肉ムキムキで体格のいいブタマスクが立っていた。

明日菜

（わっ！？な、何か怖そう……………。）

ネギ

「あ、貴方は……………？」

ブタマスク？

「俺か？俺は他の連中から『コワモテブタマスク隊長』と呼ばれているんだ。」

のどか

（コ、コワモテ……………。）

ネス

（怖いのは分かるけど、モテるといっつのはちょっと……………。）

ネギー行とネスは通称コワモテブタマスクの説明を聞いて啞然とする。

コワモテブタマスク

「おっと、そんな事より此処で何やってるんだ？この看板に『関係者以外立ち入り禁止』って書いてあるだろ？」

ネギ

「す、すみません……………実は僕達、新入りなものでして……………」

コワモテブタマスク

「新入りい〜？」

クンクン……………

コワモテブタマスクはネギ達に近付いて、臭いを嗅ぎまくる。

明日菜

（な、何コイツ？人の臭いを嗅いで……………。）

コワモテブタマスク

「お前ら、何だかがきくせえし女くせえな……………ちょっと覆面を取ってみる。」

全員

（えっ!?!）

全員コワモテブタマスクの発言に耳を疑った。

刹那

(マ、マズイ……………このままでは正体がバレてしまう……………。)

木乃香

(ど、どないしょ……………。)

コワモテブタマスク

「何をグズグズしてる？早くマスクを取れ！」

ネギ

(こ、こうなったら……………。)

次の瞬間、ネギが咄嗟に杖を取り出す。

コワモテブタマスク

「な、何だ!？」

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル…………… 大気よ水よ白霧とな

れ 彼の者らに一時の安息を……眠りの霧!」

バファツ!!

ネギが呪文を唱えた後、白い霧がコワモテブタマスクの周りに発生する。

コワモテブタマスク

「な、何だか……急に……眠気が……。」

バタン!!

コワモテブタマスクは目を擦りながら、そのまま眠ってしまう。

ネス

「す、凄い……完全に眠ってる……。」

ネスは完全に熟睡しているコワモテブタマスクの頭を指で突きながら啞然とする。

ヨクバ

「誰だ!?!外で騒いでるのは……。」

明日菜

「ヤバイ！今度はこっちから来るよ……………」。

ネギ

「急いでこの場から離れましょうー！」

そう言いつつ、全員その場から急いで駆け出していく。

〈数時間後〉

アナウンス

「間もなく、『ノーウェア島』へ到着します。」

ネギ一行とネスが先程の場所から離れてしばらく通路を歩いていると、艦内全体からアナウンスが流れる。

明日菜

「ネギ、今のアナウンス聞いた？」

ネギ

「はい、もうすぐで『ノーウェア島』へ到着するみたいですね。」

ネス

「じゃあ、この船が『ノーウェア島』へ着地したら僕のテレポータルで脱出しよう。」

？

「それはさせんぞー！」

全員

「!?!」

全員声に反応して見てみると、ネギ達から見て後ろ側の通路にヨクバと沢山のブタマスク達が立ち塞がっていた。

ヨクバ

「又へへへ、上手くアレに成り済ましたつもりだろうけど私の目はごまかせんぞ。」

刹那

(マズイ！完全にバレてる……………。)

明日菜

(ネギ、こっとなったらやるしかないわ！)

ネギ

(そのようですね……………。)

ブワッ！！

次の瞬間、全員ブタマスクの制服と覆面を全て剥ぎ取る。

ブタマスクA

「あーっ！？お前達はあの時の……………。」

ブタマスクB

「ヨクバ様！コイツらが先程話したガキ共です！」

ブタマスクC

「そして、あの赤い帽子を被ったガキが『音の石』を持ってるので
す！」

ヨクバ

「ほお、コイツらが例のガキ共か……………」

そう呟くと、ヨクバは興味津々にネギ達を見つめる。

ヨクバ

「それにしても、無謀にも敵陣に忍び込んでくるとは……………飛んで火に居る夏の馬鹿とはまさにお前達の事だな。」

明日菜

「だ、誰が馬鹿ですって!?!」

ネギ

「明日菜さん、敵の挑発に乗っちゃ駄目ですよ……………」

ネギはヨクバの挑発で怒り出す明日菜を宥める。

ヨクバ

「ところで、赤い帽子のガキよ……………我々に『音の石』を渡してもらおうか?」

ネス

「そ、そんな事……。」

ヨクバ

「勿論、渡してくれたらお前達の命は助けてあげよう。」

ネス

「うっ……。」

ネスはヨクバの提案を聞いて動きを止めてしまう。

明日菜

「ネス！騙されちゃ駄目よ!!！」

カモ

「そっだ！こりゃきつと罠だぜ!!！」

ネス

「で、でも……この状況じゃ僕達の方が不利だよ……。」

ネギ

「大丈夫、チャンスはまだあるよ!!！」

そう言うと、ネギはヨクバ達の前に立ち塞がる。

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……逆巻け春の嵐 我らに風に加護を……風花旋風 風障壁！」

ブワァー……ッ！！

ヨクバ

「!？」

ネギが呪文を唱えた後、巨大な風の障壁がヨクバ達の前を塞ぐ。

ネギ

「この障壁は二三分しか持ちません！皆さん、急いでこの場から逃げましょう！」

のどか

「は、はい…」

刹那

「……どつちら、それは無理みたいですよ。」

明日菜

「えっ？どっし……………なっ！？」

明日菜は反対側の通路を見てみると、そこにはヘルメットのような仮面を被った少年のような男が立っていた。

ネギ

「い、いつの間に……………」

刹那

「ネギ先生、此处は私にお任せ下さい。」

そう言うと、刹那は夕凧を構えながら仮面の男に近付いていく。

木乃香

「せつちゃん、気をつけてな……………」

仮面の男

「……………」

仮面の男は無言のまま、近付いてくる刹那を見つめる。

刹那

「悪いが、此処を通させてもらっぞ。」

仮面の男

「……………」。

仮面の男は刹那の問い掛けに答えずに、ライトセーバーのような剣を取り出す。

刹那

「やはり、すんなりと通す気は無いようだな……………では、力付くで通させてもらっぞ……………」。

そう言うと、刹那は素早い動きで仮面の男に切り掛かるが……………。

ガキーーーーン……！

仮面の男

「……………」。

刹那

(な、何！？)

仮面の男の剣が刹那の剣を受け止める。

明日菜

(う、嘘……………刹那さんの剣を受け止めた?)

バシーーーーン！！

刹那

「わっ！？」

次の瞬間、仮面の男がその場で刹那を弾き返す。

木乃香

「せ、せっちゃん！！」

木乃香は慌てて刹那の方へ駆け寄りつつするが……………。

バツ！！

仮面の男が素早い動きで刹那に切り掛かろうと接近してくる。

刹那

（し、しまった!?!）

木乃香

「せつちゃん!はよう逃げて!?!」

木乃香の声も虚しく、仮面の男が刹那にどンドン接近してきた時……。

ネス

「PKサンダー!?!」

バリバリバリッ!?!

仮面の男

「!?!」

ネスが放った電気の塊が仮面の男のヘルメットに命中して、ヘルメットを遠くに吹っ飛ばす。

木乃香

「せつちゃん！大丈夫？」

刹那

「は、はい……ネス君のお蔭で助かりました。」

ネギ

「良かったあ……………」

ネギ達は刹那の安否を聞いてホッと胸を撫で下ろす。

明日菜

「さ……あの仮面男をやっつけちゃいま……………あれ？」

明日菜が仮面の男の方を見てみると、そこには寝癖が目立つ茶髪の少年の顔が目に見えた。

明日菜

「あの仮面男、まだ子供だったのね……………」

ネス

「……………リュカ？」

ネギ

「えっ!?!」

ネギ一行はネスの言葉に思わず耳を疑った。

ネス

「ね、ねえ……………君、リュカだね?」

ネスは恐る恐るリュカらしき少年に近付こうとするが……………。

ブタマスク達

「司令官殿————!!」

全員

「!?!?」

全員ブタマスク達の声に驚いて後ろを向いてみると、そこにはヨクバとブタマスク達が立ち塞がっていた。

ネギ

「し、しまった!障壁が……………。」

ヨクバ

「妙な真似しやがって……もう容赦しないからな!!」

そう言うと、ヨクバとブタマスク達はどんどんネギ達に接近してくる。

ネス

「みんな、僕の肩に掴まって!」

明日菜

「ど、どつするの?」

ネス

「ちょっと危険だけど………テレポートして、この場から脱出するんだ!」

ネギ

「わ、分かりました………皆さん、ネス君の肩を掴んで下さい!」

ネギの言われた通りに、明日菜達は一斉にネスの肩を掴む。

ヨクバ

「一斉に掛かれー!!」

ブタマスク達

「おおー！ー！っ！！」

ネス

「今だ………テレポート!!」

スッ!!

ブタマスク達

「!?!」

ブタマスク達が一斉に襲い掛かろうとした時、ネギー行はネスのレポートでその場から消えてしまう。

ブタマスクA

「き、消えた………。」

ヨクバ

「チッ、逃げられたか………。」

仮面の男

「……………リュ……………カ……………」

仮面の男は今までネギ達が立っていた場所を見つめたまま立ち尽くしていた。

第五十七話 仮面の男 (後書き)

豚母艦からワープで脱出したネギー行とネスだったが、果たして彼らの運命は……………。

第五十八話　ひまわり畑の女性　（前書き）

ネスのテレポートで豚母艦から脱出したネギー行ですが……。

第五十八話　ひまわり畑の女性

　　ひまわり高原

ネギとネスは辺り一面がひまわりだらけの高原で気を失っていた。

カモ

「兄貴、目を覚ましてくれよ……兄貴ってば！」

ネギ

「う……う……ん……。」

カモに起こされたネギは、眠い目を擦りながらゆっくりと起き上がる。

カモ

「やれやれ、やっと目を覚ましたか……。」

ネギ

「あ、あれ……僕は一体……。」

カモ

「あのネスって小僧のレポートで、豚共の戦艦から脱出したんだろ？」

ネギ

「あ！そうだった……ところで、他のみんなは？」

カモ

「皆さん達は見掛けてねえけど、小僧ならあそこで眠ってるぜ。」

ネギはカモが指さす方を見ると、ネスがネギと同じように気を失っている光景が目に入った。

ネギ

「ネス君！しっかりして……。」

ネス

「う、うん……。」

ネスの方まで駆け寄ったネギが軽く揺さ振りながら呼び掛けると、ネスは目をゆっくり開けながら起きる。

ネス

「あれ？此処は……。」

ネギ

「僕も分からない……………それに、明日菜さん達も居ないし……………」

ネス

「えっ！？本当に？」

ネスはネギの言葉を聞いて思わず耳を疑った。

ネス

「……………やっぱり、咄嗟的にテレポートを発動したせいで、みんなそれぞれ違う場所へテレポートしちゃったんだ……………」

ネギ

「それじゃ、明日菜さん達は……………」

ネス

「うん、何処かの場所へ辿り着いてると思う……………ネギ、ゴメンね。」

そう言うと、ネスは深く頭を下げながら謝る。

ネギ

「そ、そんな！謝る必要なんて無いよ……むしろ、君にお礼を言いたいくらいだよ。」

ネス

「え？どうして？」

ネギ

「だって、もしあの時レポートしなかったら僕達全員捕まっていた……君のレポートのお蔭で僕達は捕まらずに済んだんだから……本当にありがとう。」

ネス

「ネギ……。」

ネスはネギの感謝の言葉に思わず照れてしまう。

カモ

「兄貴、ひよつとしたら姐さん達もこのひまわり畑の何処かに居るんじゃないか？」

ネギ

「そつだね、一応探してみよう。」

ネス

「僕も一緒に探すよ。」

そう言うと、ネギとネスはその場から歩き始める。

〈数分後〉

ネギとネスは明日菜達を探しながら、ひまわり畑を歩いていた。

ネギ

「……………ところで、一つ聞いていい？」

ネス

「何？」

ネギ

「戦艦の中で会ったあの仮面の子をリュカって呼んでたみたいだけど……………本当にあの子がリュカ君だったの？」

ネス

「う、うん……………髪の色は違うけど、あの顔と髪型はどう見てもリュカだったよ。」

ネギ

「そう……………でも、どうして僕達に襲い掛かって来たんだろう？」

カモ

「こりゃ多分、あの豚共に乗られてるんじゃないかねえか？」

ネス

「そんな……………リュカが敵になるなんて……………」

ネスはカモの言葉を聞いて落ち込んでしまう。

ネギ

「元気出して……………例えリュカ君が敵に乗られてたとしても、僕達が必要救い出してみせるよ。」

ネス

「ネギ……ありがとう、少し元気が出て来たよ。」

ネギの励ましの言葉を聞いたネスは思わず笑顔になる。

カモ

「それにしても、このひまわり畑は一体何処まで続くんだ？」

ネギ

「そう言えばそうだね……さっきから歩いてても、ひまわりしか見えてこないし。」

ネス

「まるで、ひまわりの国に来たみたいだね。」

カモ

「ん？あそこに誰か居るみてえだぞ。」

ネギ&ネス

「えっ？」

ネギとネスはカモが指さす方を見てみると、ひまわり畑の向こうに茶色の長い髪に赤い洋服を着た女性の後ろ姿が目についた。

ネス

「本当だ……あの人に聞いてみよう。」

ネギ

「うん、そうしよう。」

そう言うと、ネギとネスは女性の方へ近付いていく。

ネギ

「あの、ちょっと直しいでしょうか……。」

？

「……………」

女性はネギの声に気付いたかのようにゆっくりと振り向く。

ネギ

「僕達、人を探してるんですけど……中学生位の女の子達を見掛
けませんでしたか？」

？

「……………」

女性はネギの質問に何も答えずに、笑顔を浮かべたまま駆け出していく。

ネス

「あ！待って……………」

ネス達は慌てて女性の後を追いつける。

（更に数分後）

ネギ

「ハアハア……………」

ネス

「ゼエゼエ……………」

ネギとネスはひまわり畑でまだ女性を追い掛けている。

カモ

「しっかりしろよ、全然追い付いてねえぞ。」

ネギ

「そ、そんな事言ったって……………」

ネス

「な、何であの人に追い付けないんだろう……………」

そう言いながら、しばらく女性を追い掛けていると……………」

？

「……………」

突然女性が立ち止まり、ネギ達の方を振り向く。

ネス

「や、やっと追い付いた……………」

ネギ

「ぼ、僕達はただ人を探してるだけですよ……………」

？

「……………クラウド。」

ネギ&ネス

「えっ？」

ネギとネスは女性の言葉に耳を傾ける。

？

「クラウドがまた……………悪い人に利用されてる……………お願い……………クラウドを救って……………リュカと一緒に……………」

ネギ&ネス

「!？」

更にネギとネスは女性の発言に耳を疑う。

ネス

「お、おばさん！リュカを知ってるの？」

？
「……………」

女性は何も答えずに、そのまま後ろの方へ下がっていく。

ネス

「ちょ、ちょっと待って……………」

ネスは女性を追い掛けようと駆け出すが……………。

ネギ

「ネ、ネス君！危ない！！」

ネス

「え……………っ!？」

ネスはネギの声に反応して下を見ると、ネスは崖の外に立っている状態だった。

ネス

「う、嘘……………うわぁ……………」

ネスはそのまま勢い良く落下していく。

ネギ

「ネス君!!」

ビビュッ!!

ネギは咄嗟に杖を取り出して、杖に跨がると同時に勢い良く下降していく。

く???.???.

明日菜

「うっ……うっ……。」

一方、明日菜は何処かの森で気絶していた。

？

「ウツキヤ！」

明日菜

「んん……………だ、誰？」

明日菜が鳴き声に気付いて目を開けると、目の前に一匹の猿が立っていた。

明日菜

「何だ、猿か……………ん？何持ってるの？」

猿

「ウキウキッ！」

猿は手に持っていた物を明日菜に見せる。

明日菜

「！？」

明日菜は猿が持っている下着パンツを見て、目を丸くしながら固まる。

明日菜

(そ、そのパンツ……………まさか……………。)

すると、明日菜はゆっくりと自分のスカートに触れる。

明日菜

(や、やっぱり……………。)

明日菜は自分の下着が猿に盗られた事に気付く。

猿

「ウキキッ……………」

次の瞬間、猿は明日菜の下着を持ったまま駆け出していく。

明日菜

「あ！コラー！私のパンツ返せ……………!!」

明日菜はスカートを押さえながら猿を追い掛けていく。

く???.???

のどか

「うう……………ネ、ネギ先生……………」

一方、のどかは煙突がある木製の家の前で気絶していた。

ガチャ！

？

「よし、今日もワシがお前に泥棒としての技術を……………ぬっ!？」

家の中から初老の男性が出て来て、気絶してるのどかを発見する。

？

「ウエス、どうしたんだ？」

ウエスという名前の男性の後から、茶髪で髭を生やした青年が首を傾げながら出て来る。

ウエス

「どうしたもこうしたも無いわい！ワシらの家の前で女の子が倒れてるんじゃない！」

？

「何だって!？」

ウエスの言葉を聞いた青年は、慌ててのどかの方へ駆け寄る。

？

「おい、大丈夫か？しっかりするんだ！」

のどか

「う……う……う……。」

青年が軽く揺さぶりながらのどかを起こそうとするが、のどかは全く目を覚ます気配は無かった。

？

「駄目だ、全然起きない……………」

ウエス

「ダスター、その娘を急いで家の中へ入れて手当てするぞ！」

ダスター

「ああ、分かった！」

ダスターという名前の青年は、のどかを抱き抱えながら家の中へと入っていく。

く??????

刹那

「んっ……………っ、此処は……………」

一方、刹那は意識を取り戻して墓場のような場所に居た。

刹那

「どつやら墓場みたいだな……とここで、他のみんなは何処に……。」

木乃香

「きゃあーっ!!」

刹那

「!?!」

突然木乃香の叫び声が響き渡る。

刹那

「い、今のは木乃香お嬢様の声……今参ります!!」

そう言うと、刹那は夕風を掲げながら木乃香の叫び声が聞こえた方向へ駆け出していく。

木乃香

「だ、誰か……………助けて……………」

一方、木乃香は墓場らしき場所で三体のゾンビ達に囲まれていた。

刹那

「木乃香お嬢様!!」

すると、すぐに刹那が木乃香の元へ駆け付けて来た。

木乃香

「あっ!せつちゃん……………」

ゾンビ達

「ギ……………ギギ……………」

刹那に気付いたゾンビ達は、ゆっくりと刹那の方へ歩み寄って来る。

刹那

「このゾンビ共!よくもこのちゃんを……………喰らえ!百列桜華斬!

「！」

バシューーーーーッ!!

刹那は夕風で三体のゾンビを吹き飛ばしていく。

木乃香

「せつちゃん!!」

刹那

「わっ!?!」

突然木乃香が刹那に抱き着いて来る。

木乃香

「ウチ、ホンマに怖かった……………」

刹那

「こ、このちゃん…………… / / /」

刹那は顔を赤くしながら木乃香を抱き返すが……………。

ズボッ！！

刹那

「!?!」

地面から次々とゾンビが現れて、木乃香と刹那の周りに群がっていく。

木乃香

「ひゃっ!?!」

刹那

「ま、まだこんなに……………」

刹那が木乃香を背中の方に寄せて、再び夕凧を取り出した時……………。

?

「PKスターストーム!!」

ズドォー……………!!

ゾンビ達

「ギャアアアアッ!!」

突如巨大な流れ星の大群が落下して、ゾンビ達の頭上に直撃する。

刹那

「い、今は一体……………」

?

「おい、大丈夫か？」

木乃香

「えっ？」

木乃香と刹那の前に赤色のショートヘアの少女が現れる。

刹那

「もしかして、貴女が助けてくれたのですか？」

?

「そっだ…………あ、因みに俺の名はクマトラだ。」

木乃香

「初めまして、ウチは近衛木乃香や。」

刹那

「桜咲刹那です……先程は助けて頂き、ありがとうございます。」

刹那はクマトラと名乗る少女に向かって深く頭を下げる。

クマトラ

「べ、別にお礼なんかいいって……それより、またゾンビ共が現れない内に急いでこの場から離れようぜ。」

刹那

「そ、そうですね。」

刹那と木乃香はクマトラに連れられるように墓場から立ち去っていく。

く??????

その頃、ネギとネスは小さな村で歩いていた。

ネギ

「……………ふう、一時はどうなるかと思った。」

ネス

「ありがとう、ネギのお蔭で助かったよ。」

カモ

「でも、あれは危機一髪だったぜ……………何せ、兄貴がギリギリのところまで小僧を受け止めたんだからな。」

ネス

「もお！僕は小僧じゃないってば……………。」

ネスはカモの呼び方が気に入らずに、ムツと頬を膨らませる。

ネギ

「あははは……………それにしても、此処は何処なんだろう?。」

ネス

「うーん……………多分、此処が『ノーウェア島』じゃないかな？」

カモ

「じゃあ、皆さん達はこの島のどっかに居るって訳か……………」

？

「ワンワン！」

突然ネギ達の前に茶色の小さな犬が現れる。

ネギ

「あ！犬だ……………」

ネス

「可愛いね……………僕もチビっていう名前の犬を飼ってるんだ。」

ネギ

「チビか……………何だか、可愛らしい名前だね。」

？

「ボニー、急にどうしたの……………」

ポニーと呼ばれた犬の前に金髪で寝癖が目立つネス位の少年が駆け寄って来る。

ネギ

(あれ?この子……。)

ネス

「あっ!?!リュカ!」

リュカ

「えっ?……………あっ!?!ネ、ネス!」

リュカと呼ばれた少年はネスの顔を見て思わず目を疑った。

ネス

「久しぶりだね!元気だった?」

リュカ

「ど、どうしてネスが此処に……………」

?

「おい、リユカー！ボニー！」

リユカが困惑していると、カウボーイハットのような帽子を被った男性がこちらへ近付いてくる。

リユカ

「あ！お父さん……。」

？

「そろそろ家に帰るぞ……おや？この達は？」

ネス

「は、初めまして……僕はリユカの友達のネスです！」

ネギ

「ぼ、僕はネギ・スプリングフィールドです！」

ネギとネスはリユカの父親に向かって丁寧に挨拶しながら自己紹介する。

？

「そうか、君がネス君か……こちらこそ初めまして、俺はリユカの父親のプリントだ。」

フロントと名乗るリュカの父親も軽くお辞儀しながら自己紹介する。

リュカ

「ところで、何でネスが『ノーウェア島』に？」

ネス

「ああ、その事についてはネギが説明するよ。」

カモ

「ほら兄貴、いつもの説明タイムだぜ。」

ネギ

「せ、説明タイムって……………」

ネギはネスに説明したように、リュカにもこれまでの経緯を簡単に説明していく。

ネギ

「……………」という訳で、コレがそのバッチだよ。」

そう言つと、ネギはリュカにバッチを手渡す。

リュカ

「あ、ありがとう……僕なんかの為にこの島までやって来て……
…迷惑掛けちゃったね。」

ネギ

「そ、そんな！迷惑だなんて……それに、僕達も好きでやっている事だし……。」

カモ

「そういう事だから、あまり気にすんなよ。」

リュカ

「わっ！？ネ、ネズミが喋った……。」

カモ

「俺たちはネズミじゃねえ！オコジヨ妖精でい！！」

カモは自分をネズミ呼ばわりしたリュカに怒り出す。

ネス

「……ところでリュカ、一体どうしたの？」

リュカ

「え？何の事？」

ネス

「だって、豚の覆面を被った悪い奴らと一緒に居たでしょ？」

リュカ

「豚の覆面……それってまさか、ブタマスクの事！？」

フロント

「ま、まさか……。」

リュカとフロントはネスの説明を聞いた途端、何かを察するように困惑する。

ネス

「ど、どうしたの？そいつらに何か心当たりがあるの？」

フロント

「……因みに、その悪者と一緒に居たリュカに何か特徴とか無かったかい？」

ネス

「え？え〜つと確か…………ヘルメットのような仮面を被ってて、光る剣を持ってて…………それに、あの時のリュカの髪の色は茶髪だったような…………。」

リュカ&フリント

「!?!」

ネスの説明を聞いたリュカとフリントは、心底驚いたような表情を浮かべる。

フリント

「ヘルメットのような仮面に光る剣…………それに、茶髪でリュカそっくりの顔…………。」

リュカ

「そ、そんな…………まさか…………。」

ダッ!!

突然リュカは何処かへ走り出していく。

フリント

「リュカ!!」

ボニー

「ワンワン!!」

ネス

「何処へ行くの!?!」

ネギ

「とにかく、追い掛けてみよう!!」

ネギ達は急いでリュカの後を追い掛けていく。

〈ノーウェア島・ミンシレ墓場〉

ネギ

「ハアツハアツ……や、やっと追い付いた……。」

ネギ達はリュカを追い掛けて、丘の上にある一つの墓石の前までやって来た。

ネス

「ゼエゼエ……リュカ、急にどうしたの？」

リュカ

「……………コレを見て。」

リュカの指さす先を見ると、墓石の前の地面が何者かに掘り起こされていた。

ネギ

「こ、これは……………」

カモ

「ひでえなあ……………墓荒らしか？」

ネス

「でも、此処は誰のお墓だろう？」

フリント

「……………此処はリュカの母・ヒナワと双子の兄・クラウドの墓なんだ。」

ネギ&ネス

「えっ!?!」

ネギとネスはフリントの説明を聞いて耳を疑った。

カモ

(待てよ、クラウドって確か……………あのひまわり畑に居た女が言っていた名前だったような……………)。

ネス

「そう言えば、前にリュカから聞いた事がある……………」
『僕のお母さんと双子の兄は事故で死んだんだ』って……………」

ネギ

「そうだったんだ……………」

リュカ

「お、お父さん……………ううっ……………」

リュカは今にも泣き出しそうな表情でフロントに抱き着く。

フロント

「リュカ、どうした？」

リュカ

「……………クラウド兄ちゃんの遺体が……………無くなってた……………」

フロント

「な、何だって!？」

フロントはリュカの言葉を聞いて驚愕する。

ネギ

「それじゃ、あの船で僕達に襲い掛かってきたのは……………」

ネス

「リュカの……………お兄さん……………」

カモ

「おいおい、マジかよ……………」

ネギ達は噉り泣きながプリントに抱き着くリュカをただ見つめるし
かなかった……。

第五十八話　ひまわり畑の女性　（後書き）

果たして、リュカの亡き兄・クラウドは仮面の男なのか？

第五十九話 偶然な再会 (前書き)

リユカは死んだ双子の兄クラウスが再び仮面の男として復活していると聞いてシヨックを受けていた……。

第五十九話 偶然な再会

「タツマイリ村・リュカの家」

ネギとネスはフロントに連れられて、リュカの家に来て来た。

フロント

「さあ、遠慮せずに入ってくれ。」

ガチャ

ネギ&ネス

「お、お邪魔します。」

ネギとネスは少し遠慮しがちにリュカの家の中へ入っていく。

フロント

「あまり広くはないが、ゆっくりしてってくれ。」

そう言うと、フロントは家の外へと出て行く。

リュカ

「……………」。

リュカはずっと下に俯いたまま落ち込んでいた。

カモ

「あの小僧、全然喋らなくなったな……………」。

ネギ

「無理も無いよ、死んだ兄さんが敵として復活したんだから……………」。

「

ネス

「どうにかして元気付けてやりたいな……………」ん？」

ネスはテーブルの上に置いてある写真立てに目を奪われる。

ネス

「この写真は……………」あっ!？」

ネスは写真を見て思わず声を上げる。

ネギ

「ど、どうしたの？急に大きな声出して……。」

ネス

「ネギ、この写真を見てみて……。」

ネギ

「写真？……あっ!？」

ネギはリュカとフリントの他に、ひまわり畑で出会った女性と『豚母艦』で出会ったリュカそっくりの少年が写ってる写真を見て思わず目を疑った。

ネギ

「こ、この人……ひまわり畑で会った……。」

リュカ

「え？……お母さんに会ったの!？ねえ!」

リュカは取り乱しながらネギに問い質す。

ネス

「リュ、リュカ!少し落ち着いて……。」

リュカ

「あ…………ゴ、ゴメン…………。」

リュカはネスの言葉に正気を取り戻して大人しくなる。

ネギ

「え、えつとね…………ひまわりがいっぱい咲いてた高原で出会ったんだ。」

リュカ

「ひまわりがいっぱい咲いてる高原…………。」

ネス

「何か心当たりがあるの?」

リュカ

「うん…………実は、僕も前にその高原でお母さんに会ったんだ。」

ネギ&ネス

「ええっ!?!」

ネギとネスはリュカの言葉に耳を疑った。

（オソへ城前）

その頃、木乃香と刹那は大きな古城の前でクマトラに色々説明していた。

クマトラ

「……………そっか、リュカを探しに来ただけど、途中で仲間とはぐれちゃったって訳か。」

刹那

「は、はい……………ところで、クマトラさんはリュカ君をご存知なんですか？」

クマトラ

「まあな……………俺とリュカは凄い冒険をした大切な仲間なんだ。」

木乃香

「そうなんや……クマトラちゃん、ウチらをリュカ君の家へ案内してくれへんかな？」

クマトラ

「いいぜ、あいつの家には何度も遊びに行った事もあるし………付いて来なよ。」

そう言つと、クマトラはそのままリュカの家に向かって歩き出そつとするが………。

？

「ウッキ〜ッ！」

クマトラ

「ん？」

クマトラは声が出た方を向いてみると、一匹の小さな猿がこちらに近付いてくる。

クマトラ

「おお！サルサじゃないか………久しぶりだな〜。」

サルサ

「ウキキ〜。」

クマトラは懐かしそうにサルサという名前の猿の頭を撫で回す。

木乃香

「この猿、めっちゃ人懐っこくて可愛ええな〜。」

クマトラ

「ああ、コイツが悪い奴に利用されてたところを俺が助けてやったんだ……それ以来、すっかり俺に懐いちゃまったんだ。」

刹那

「そうだったんですか……ん？手に何か持ってるようですが……」

クマトラ

「え？……っ！？」

クマトラはサルサの手に持っている女性の下着パンツを見て目を丸くさせる。

木乃香

「そ、それって……パ、パンツ？／＼／」

クマトラ

「お、お前……こんな物何処で拾った？／＼／」

明日菜

「待て〜！この変態猿〜！！」

クマトラ達が下着を見て顔を真っ赤にしながら唾然としていると、明日菜が激怒しながらこちらへ駆け寄って来る。

サルサ

「ウ、ウキキ……。」

それと同時に、サルサが怯えながらクマトラの足元へ隠れる。

刹那

「あ、明日菜さん！？」

木乃香

「明日菜！無事やったんやな。」

明日菜

「こ、木乃香！？それに刹那さんも……………」

明日菜は木乃香と刹那に気付いて少し啞然とする。

クマトラ

「どうやら、木乃香達の仲間みたいだな……………ところでサルサ、俺の足元に隠れてどうしたんだ？」

サルサ

「ウキウキ……………」

サルサはクマトラの質問に答えずに、ただ隠れながら身を縮こまっていた。

明日菜

「その変態猿が私の下着を取ってったのよ！」

クマトラ

「何だって！？……………本当なのか？」

サルサ

「ウ、ウキ……………」

サルサは微かに頷く。

クマトラ

「おいおい、いつからそんなに手癖が悪くなったんだよ……………とにかく、その下着を彼女に返すんだ！」

サルサ

「ウキ、ウキウキ……………」

サルサは落ち込み気味で明日菜に下着を返す。

明日菜

「全くもつ……………」

クマトラ

「すまない、普段はこんな事をする奴じゃないんだが……………」

サルサ

「ウキキ……………」

サルサは明日菜に向かって土下座するように深々と謝る。

明日菜

「ま、まあ……………そこまで謝るなら……………取り合えず、向こうでレ（下着）履いてくるわ。」

そう言うと、明日菜は下着を持って何処かへ立ち去っていく。

木乃香

「……………それにしても、明日菜も災難やったな。」

刹那

「はい、動物に下着を盗られるなんて……………。」

クマトラ

「でも、そのお蔭でこうして会えたから何とも言えないな……………。」

そう言いながら、三人で苦笑いしながら話していると……………。

明日菜

「お待たせ！」

しばらくして、明日菜が急いで駆け寄って来る。

木乃香

「あ、戻って来た。」

剎那

「明日菜さん、この人は私達を助けて下さった……………」

クマトラ

「クマトラだ、宜しくな。」

明日菜

「は、初めまして！私は神楽坂明日菜よ。」

そう言つと、明日菜はクマトラに向かって軽く頭を下げる。

木乃香

「ほなら、お互い自己紹介が済んだところで……………明日菜も一緒にリュカ君の家に行く？」

明日菜

「え？…どういつ事？」

刹那

「クマトラさんがリュカ君の家へ案内してくれるそうです。」

明日菜

「本当！？勿論私も一緒に行くけど……ネギや本屋ちゃん達はど
うしようか……。」

木乃香

「あ！そう言えばそやな……。」

明日菜達はネギ達の安否について深く考え込んでしまう。

クマトラ

「大丈夫だって！他の仲間も無事に決まってるよ……木乃香達が
無事だったようにな。」

刹那

「……クマトラさんの言う通りですね、私達だけでもリュカ君に
会いに行きましょう。」

明日菜

「そうね、その後でネギ達を探しましょう。」

木乃香

「ほなら、改めて出発しよ！」

サルサ

「ウツキーツ！」

この場に居た全員が、リュカの家に向けて歩き出していく。

く　タツマイリ村く

数分後、明日菜達はクマトラの案内で『タツマイリ村』へとやって来た。

明日菜

「……………この村、ネスが住んだ町と雰囲気が違うね。」

木乃香

「そやな、ネス君の町は何処となくアメリカンな雰囲気やったから。」

刹那

「クマトラさん、リュカ君の家まで後どれ位ですか？」

クマトラ

「もう少しで着くけど……その前に、ちょっと寄り道してってもいいかな？」

刹那

「ええ、構いませんよ。」

木乃香

「何処へ行くん？」

クマトラ

「ちょっと昔の仲間に出会いたくなってな……そいつの家に行くんだ。」

明日菜

「ふん……それじゃ、まずそっちへ行きましょ。」

そう言いつと、明日菜達はそのままクマトラの後を付いていく。

くダスター & ウエスの家前く

明日菜達はクマトラに案内されて、一軒家の前にやって来た。

明日菜

「べつやら、この家のようね……………」。

クマトラ

「おい、ダスター！ウエス爺！居るか？」

ガチャ！

クマトラが大声で呼び掛けると、家の中からダスターとウエスが出て来る。

ウエス

「おお！クマトラ姫ではありませんか。」

ダスター

「相変わらず元気そうじゃないか。」

クマトラ

「そう言っお前もな。」

ダスターの言葉にクマトラは笑顔で答える。

木乃香

「あれ？さっきクマトラちゃんの事を姫って言わへんかった？」

刹那

「はい、私もそう聞こえました……………」

ウエス

「ところで姫、この子達は誰ですか？」

明日菜

「あっ！また姫って言った……………」

明日菜達はウエスの言葉に耳を傾ける。

クマトラ

「ああ、ついさっき知り合ってた……どうやら、リュカに会いたいらしいんだ。」

ダスター

「リュカに？」

ダスターはクマトラの言葉に思わず耳を傾ける。

刹那

「あ、あの……。」

クマトラ

「ん？何だ？」

刹那

「先程、クマトラさんの事を姫と呼んでましたが……もしかして……。」

ウエス

「そうじゃ、この方は『オソへ城』の姫君である。」

明日菜&木乃香

「ええー！ーっ!？」

明日菜達はウエスの発言におもいつきり驚愕する。

クマトラ

「じ、爺！俺はもう姫じゃないって前にも言っただろ！」

ウエス

「そ、そうでしたな……………」

そう言っつて、ウエスが申し訳なさそつに謝っている……………。

ガチャ

？

「い、今……………明日菜さん達の声がしたよつな……………」

そう言いながら、家の中からのどかが出て来る。

明日菜

「ほ、本屋ちゃん!!」

のどか

「あ!やっぱり明日菜さん達だった……………」

明日菜達は思わぬ所でのどかと再会出来て驚いたが、逆にのどかは嬉しそうな表情を浮かべる。

ダスター

「あれ?もしかして、さっき話した友達かい?」

のどか

「は、はい!そうです。」

ウエス

「何と……………こりゃ何とも奇妙な偶然じゃな。」

クマトラ

「全くだぜ……………こつちもまさか、明日菜達の仲間がダスター達の所に居たなんて夢にも思わなかったよ。」

そう言つと、ウエスとクマトラは奇妙な偶然に思わず溜め息を付いてしまう。

刹那

「それより、宮崎さんはどうしてダスターさん達の家に住たのですか？」

のどか

「実は、私がこの家の前で気を失つてるところをダスターさんとウエスさんが看病してくれたんです。」

クマトラ

「へえ、いい事したじゃん。」

ダスター

「い、いや……俺達は人として当然の事をしただけさ。」

ダスターは少し照れ臭そうに答える。

木乃香

「ところで、ネギ君とネス君とは一緒やないの？」

のどか

「え？明日菜さん達と一緒にじゃないんですか？」

明日菜

「え、ええ……………」

そう答えると、明日菜は肩を落とすように少しだけ落ち込み気味になる。

木乃香

「大丈夫やて、きっとネギ君達もウチらみたいに元気であるハズだよ。」

明日菜

「……………そうね、そうに決まってるわ！」

明日菜は木乃香の励みの言葉に元気を取り戻す。

クマトラ

「そんじゃ、改めてリュカの家へ行こう！」

のどか

「え？何の話ですか？」

刹那

「後で説明しますので、取り合えず一緒に来て下さい。」

のどか

「は、はぁ……………」。

のどかはあまり理解出来ないまま納得する。

ダスター

「そう言えば、最近リュカに会ってないな……………クマトラ、俺も付いてっついていいか？」

クマトラ

「ああ、構わないぜ。」

ウエス

「ダスターよ、お前も行くならコレを持っていくがよい。」

そう言うと、ウエスは何かが入ったバックを渡す。

ダスター

「コ、コレはまさか……………」。

ウエス

「きつと、何かの役に立つじゃろ……………何も言わずに持ってけ。」

ダスター

「……………分かったよ、親父。」

ダスターは微笑みながらバックを受け取る。

クマトラ

「ダスター、用意はいいか？」

ダスター

「ああ、いつでも出発していいぞ。」

明日菜

「それじゃ、早速レッツゴー！」

こうして、明日菜達は再びクマトラの案内でリュカの家へ向かうのであった……………。

（リュカの家）

その頃、リュカはネギとネスに自らの体験（ヒナワとクラウスの悲惨な死、七本の針によって島全体に封印されてた闇のドラゴン、ポーカーの悪巧みによってクラウスが仮面の男として復活した等）を全て話していた。

ネス

「そ、そんな……………ポーカーがリュカのお兄さんを……………」

ネスはリュカの話の聞き終えると、激しく落ち込んでしまう。

ネギ

「どうしたのネス君？」

リュカ

「実はね……………そのポーカーって人は、昔ネスの家の隣に住んでいたって。」

ネギ

「えっ!?!」

ネギはリュカの言葉に思わず耳を疑った。

カモ

「兄貴、どうやらそのポーキーって奴が今回の事件の黒幕のようだな……………」

ネギ

「うーん……………でも、まだそうだと決まった訳じゃないし……………」

ネス

「…………いや、僕もポーキーが黒幕だと思うよ。」

ネギ

「え?どうして……………」

ネス

「ポーキーは僕の友達を誘拐して人質にしたり、ギーグのような強い奴にすぐ肩入れして僕達を困らせていたんだ……………元々意地悪なだけの奴だったのに、どうしてあんな悪い奴になったのか今でも分からないよ……………」

ネギ

「ネス君……………」

ネスは再び落ち込んでしまい、ネギはただ同情するしかなかった。

リュカ

「げ、元気出して！僕も元気出すから……………」

ネス

「う、うん……………」

ネスはリュカに励まされて、取り合えず顔を上げる。

リュカ

「えつとね、ネス達の話聞いて考えたんだけど……………僕にも協力させてほしいんだ。」

ネス&ネギ

「えっ？」

ネギとネスはリュカの意外な発言に思わず耳を疑った。

リュカ

「勿論、悪い人達を倒したいっていうのもあるけど……また悪い人達に利用されてるクラウス兄ちゃんを助けたいんだ。」

ネギ

「リュカ君……。」

ネス

「……分かった！一緒に悪い奴らをやっつけて、リュカのお兄さんを助けてあげよう！！」

リュカ

「ネス……ありがとう。」

リュカがネスの言葉に感激して、今にも泣き出しそうになった時……。

ガチャ！

突然フロントが家の中に入って来る。

フロント

「リュカ、取り込み中かもしれないが……ちょっといいか？」

リュカ

「え？何？」

フロント

「ダスターとクマトラが来てるんだが……初めて見る子達を連れてるぞ。」

リュカ

「本当に？それじゃ、挨拶しなきゃ……。」

ネス

「ネギ、僕達も行ってみよ。」

ネギ

「え？う、うん……。」

リュカに続いて、ネギとネスも外へ飛び出していく。

ダスター

「リュカ！久しぶりだな。」

クマトラ

「元気だったか？」

リュカ

「うん、元気だよ！」

ダスターとクマトラの顔を見たリュカは笑顔を浮かべるが……………。

ネギ&ネス

「ああー！ーっ！？」

明日菜

「あっ！？ネギ！！」

木乃香

「それに、ネス君も一緒や！」

刹那

「これで全員揃いましたね。」

のどか

「良かった……………」

ネギとネスは明日菜達との思いもよらない再会にしばし啞然とする。

〈数分後〉

ネギと明日菜達はお互いに先程の出来事を説明していた。

明日菜

「……………という訳で、私達は再会出来たの。」

ネギ

「そうだったんですか……………凄く偶然ですね。」

木乃香

「ホンマやな……………ウチらもまさかネギ君達がリュカ君と一緒にやなんて思ってたわ。」

のどか

「でも、こうして無事に再会出来て本当に良かったですね。」

刹那

「ええ、本当に……。」

ネギー一行が無事に再会出来た事を喜んで……。。

クマトラ

「なあ、ちょっといいか？」

ネギ

「え？な、何でしょうか？」

クマトラ

「さつき、リュカから色々聞いたんだけど……そのネスって子が持ってる『音の石』で、この島の七つの音を探してるんだよね？」

ネス

「う、うん……そうだけど……。」

クマトラ

「そうか……実は俺達、その七つの音の場所について心当たりがあるんだ。」

ネギー行

「ええっ!?!」

ネギー行はクマトラの発言に思わず耳を疑った。

ネギ

「ほ、本当ですか?」

ダスター

「ああ……リユカから『闇のドラゴン』を封印していた七つの針については聞いただろ?俺達はその針が刺さった場所だと思っているんだ。」

ネス

「成程……確かに、可能性としては高いかもしれない……。」

明日菜

「それじゃ、早速その場所へ行ってみましょう!」

ネギ

「ちよ、ちよっと待って下さいよ！」

ネギは慌てて張り切り始める明日菜を制止する。

明日菜

「な、何よ？」

ネギ

「もつ日が暮れてしまいそうですから、今日はもつにねくらいにしましょう。」

刹那

「そうですね、明日から探索しましょう。」

木乃香

「ほなら、何処か泊まる所を探さんと……………」。

のどか

「リュカ君、この村に宿泊出来る所あるかな？」

リュカ

「は、はい！良かったら案内しますけど……………」。

明日菜

「本当？じゃあ、お願いするわ。」

リュカ

「それじゃ、僕に付いて来て下さい。」

そう言うと、リュカはネギ達を連れて村の方へ歩き出して行く。

クマトラ

「……………なあ、ダスター。」

ダスター

「ん？何だい？」

クマトラ

「ひょっとして、お前も俺と同じ事を考えてないか？」

ダスター

「フツ、多分な……………」

ダスターはクマトラの質問に対して何かを察したように微笑む。

クマトラ

「……勿論行くよな？」

ダスター

「ああ、リユカ達だけじゃ心配だからな……。」

クマトラ

「やっぱりな……まあ、もし行かないって言っても俺がお前を引っ張ってでも連れてくがな。」

ダスター

「ハハハ、そういうところも相変わらずだな……。」

ダスターはクマトラの強気な発言に苦笑いする。

ボニー

「ワンワン！」

ダスター

「ん？どうしたんだボニー？」

クマトラ

「……………分かった、お前も一緒に行きたいんだな？」

ボニー

「ワンツッ!!」

ボニーはクマトラの質問に答えるかのように強く吠える。

リュカ

「みんな、ただいま〜!」

すると、ネギ達を宿泊所まで案内してきたリュカが帰って来た。

ダスター

「お！丁度いいところに……………」

クマトラ

「リュカ、ちょっと話があるんだ。」

リュカ

「え？何？」

こうして、クマトラ達はリュカに自分達の思いを打ち明けるのであ

つ
た
……
。

第五十九話 偶然な再会 (後書き)

七つの場所について手掛かりを得たネギー行は全ての首を集める事が出来るのか？

第六十話 七つの音を集めよう(前編) (前書き)

ネギー行とネスはリュカと共に音を集めようとするのだが……。

第六十話〜七つの音を集めよう（前編）〜

〜タツマイリ村〜

翌朝、ネギー一行とネスは村の中央にある井戸に集合していた。

ネギー

「皆さん、出発の準備は整いましたか？」

明日菜

「ええ、バッチリよ！」

ネス

「後はリュカが来るのを待つだけだね。」

木乃香

「あつ！来た……………」

全員木乃香が指さす方を見てみると、リュカの他にダスターとクマトラとボニーがこちらへ駆け寄って来る。

刹那

「あれ？クマトラさん達も一緒のようですね。」

のどか

「私達の見送りに来たんでしょうか？」

リュカ

「ハアハア……お、お待たせ……。」

リュカが息を切らしながらネギ達に声を掛ける。

ネス

「リュカ、おはよう……ダスターさん達も見送りに来てくれたんだね？」

ダスター

「いや、俺達は見送りに来たんじゃない。」

ネギ

「え？どういう事ですか？」

クマトラ

「決まってるだろ？俺達も一緒に付いて行くのさ。」

ネギー行&ネス

「ええっ!?!」

ネスとネギー行はクマトラの発言に耳を疑った。

明日菜

「っ、付いて行くって……本気で言ってるの?」

クマトラ

「勿論さ!このまま黙って待ってるだけなんて性に合わねえしな。」

ダスター

「それに、ブタマスクの奴らも『音の石』を狙ってるから、一人で多くいた方が奴らに対抗出来るんじゃないか?」

刹那

「た、確かに……………」

のどか

「ネギ先生、どうします?」

ネギ

「うん……。」

ネギは腕を組みながら深く考え込む。

リュカ

「お願いします！ダスターさんは『泥棒グッズ』で助けてくれるし、クマトラ姉ちゃんは僕よりPSIが使えるし、ボニーの鼻は色々役に立つし……だから、みんなも連れてって下さい！」

ネス

「リュ、リュカ……。」

ネスとネギ一行は一生懸命に懇願するリュカを見て少し戸惑う。

ネギ

「……分かりました！一緒に行きましょう！」

クマトラ

「よっしゃー！」

ボニー

「ワンワン！」

クマトラとボニーはネギの言葉に大喜びする。

ネス

「それじゃ、早速『音の石』が反応するかもしれない場所へ案内して。」

リュカ

「うん、分かった！」

クマトラ

「じゃあ、この村から一番近い『オソへ城』から行ってみるか。」

ダスター

「よし、行き先が決まったところで出発を……………」

？

「ちよ〜つと待った！」

全員

「!?!」

突然聞こえてきた声全員が辺りを見回す。

ネギ

「だ、誰ですか？」

？

「チツチツチツ……………お前ら、何か大切な事を忘れてないか？」

ネス

「わ、忘れてるって……………何を？」

？

「だ〜から〜！こついつた冒険には、この俺が必要不可欠じゃないかって言ってるんだよ。」

明日菜

「ちよっと！さっきから訳分かんない事ばかり言ってる……………まずは姿を現わしなさいよ！」

？

「フッフ、そう慌てるな……………俺は既にお前らのすぐ近くに居るぞ？」

木乃香

「え！？ホンマに？」

ネギ一行とネスは更に辺りを見回す。

ネギ

「い、一体何処に居るんですか？」

ダスター

「みんな、落ち着いて……………声の正体はコイツぞ。」

グニユツ！！

？

「わ〜！急に引っ張るな〜！！」

ダスターが懐から何かを引っ張るように取り出すと、胴体が長い真っ赤な蛇が出て来る。

のどか

「ひいっ！へ、蛇！？」

リュカ

「ヒモヘビ！久しぶりだね。」

ヒモヘビ

「あ、ああ……………亜空軍の事件と大乱闘の館で会って以来だな。」

リュカは嬉しそうにヒモヘビという名前の蛇と会話する。

ネス

「あっ！よく見たら、リュカが大乱闘の時によく使ってた蛇だ……………」

ヒモヘビ

「お？そう言うお前は、リュカやクマトラと同じくPSIが使える野球小僧じゃないか。」

ネス

「だ、だから僕は野球小僧じゃなくてネスだって……………」

ネスはヒモヘビが自分の名前を覚えていなかった事に呆れ返る。

ダスター

「そんな事より、何で付いて来たんだ？」

ヒモヘビ

「な、何でって……俺だってお前らの役に立ちたいんだよ！」

クマトラ

「でも、いつも失敗してるじゃないか。」

ヒモヘビ

「うっ………そ、それは……。」

ヒモヘビはクマトラの一言で少し落ち込み気味になる。

リュカ

「そ、そんな事ないよ！大乱闘の時なんか凄く役に立ってるよ。」

ヒモヘビ

「リュ、リュカ……。」

ヒモヘビはリュカの優しい言葉に思わず涙ぐんでしまう。

明日菜

「………ねえ、そろそろ話を進めない？」

ネギ

「そ、そうですね……………」

ネス

「リュカ、君のテレポートで連れてって。」

リュカ

「う、うん……………テレポートにはあまり自信が無いけど、やってみるよ。」

クマトラ

「心配すんなって、俺も付いてるからな。」

そう言いつつ、全員輪の形になるようじにお互いの手を繋ぎあわす。

リュカ

（お父さん……………行って来ます。）

スッ！！

次の瞬間、全員その場から姿を消してしまふ。

？

「……………行ってしまったか。」

すると、フリントが物陰から現れる。

フリント

「リュカ、頑張れよ……………きっと母さんもお前を見守ってくれるだろう。」

フリントはリュカ達が立っていた場所を見つめながら呟く。

くオソへ城・中庭く

ネギ達はリュカとクマトラのテレポートで『オソへ城』の中庭へとやって来た。

リュカ

「……………ふう、上手く移動出来て良かった。」

木乃香

「あや？確かこの城って……………」

クマトラ

「そうさ、昨日俺達が避難した城だよ。」

刹那

「やはりそうでしたか……………ところで、例の針が刺さっていた場所というのは何処ですか？」

リュカ

「えっと、確か……………あ！あそこにあった。」

全員リュカが指さす方向を見ると、真ん中に小さな穴が開いてあった。

ネギ

「あの穴の所に針が刺さってたの？」

リュカ

「うん……………でも、先に針を抜いたのはクラウドス兄ちゃん（仮面の

男) だけどね。」

ダスター

「とにかく、もう少し近付いてみよう。」

そう言うと、全員穴が開いてある所へ近付いていく。

ネス

「あ！そうだ……………」

ネスが何かを思い出して、リュックサックから『音の石』を取り出した時……………。

~~~~~

全員

「!?!」

突然何処からともなく音色が辺りに響き渡る。

明日菜

「な、何？この音……………」

のどか

「何だか、懐かしい感覚が……………」

木乃香

「不思議な音色やな……………」

しばらくの間、全員不思議な音色に聴き入っていく。

刹那

「……………音が止まりましたね。」

ネス

「今ので、『音の石』にさっきの音が記憶されたんだけど……………」

ネギ

「けど？」

ネス

「前に記憶した音とは全然違ってたんだ。」

ネギ一行

「えっ!？」

ネギー一行はネスの言葉に耳を疑った。

明日菜

「お、音が違っって……………どういう事？」

ネス

「僕にも分からないけど……………多分、石が違っから記憶される音も違っのかも。」

木乃香

「うっん、そんなもんかなあ……………」

ネギ達はネスの言葉にあまり納得出来ず、思わず首を傾げてしまっ。

クマトラ

「どっちにしろ、先へ進むしかないだろ。」

刹那

「そうですね……………次は何処へ行くんですか？」



リユカ

「えっと、それじゃ……………僕が初めて針を抜いた『ムラサキの森』にしようかな。」

ダスター

「よし、そうと決まればテレポートの準備だ。」

そう言いつと、全員いつものように手を繋ぎ合う。

スッ！！

そして、いつものようにその場から姿を消してしまう。

くムラサキの森く

ネギ達はリユカとクマトラのテレポートで『ムラサキの森』という森へとやって来た。

ネギ

「此処が『ムラサキの森』ですか……………」

ネス

「リュカ、針は何処に刺さってたの？」

リュカ

「えっとね、あの大きな穴の中だよ。」

リュカの指さす方を見ると、小さな池の隣に開いてある大きな穴が目に見る。

木乃香

「わあ、大きな穴やなあ。」

明日菜

「本当ね……………隣の池と同じ位の大きさだわ。」

クマトラ

「元々この大きな穴の方が池だったんだけど、針を抜く為に池の水を隣の穴に移したのさ。」

ネギ

「う、移したって……どうやったんですか？」

クマトラ

「アンドーナッツ博士が造った『キマイラ』で池の水を全て吸い取って、隣の大きな穴に移したんだよ。」

ネス

「ア、アンドーナッツ博士だって!？」

ネスはクマトラの説明を聞いて思わず耳を疑った。

のどか

「きゅ、急にどうしたの?」

ネス

「あ、いや……僕の友達のお父さんの名前が出て来たからつい……」

ヒモヘビ

「そんな事より、早く音を集めた方がいいんじゃないかねえのか?」

ダスター

「そ、それもそうだな……………ネス、頼んだよ。」

ネス

「う、うん……………それっ!!」

ネスは大きな穴に向かって勢い良く飛び込んでいく。

ネス

「あっ!この小さな穴は……………」

ネスは穴の中で、針が刺さってたであろう小さな穴を発見する。

ネス

「此処に針が刺さってたんだな……………それじゃ、早速『音の石』を……………」

そう言うと、ネスは『音の石』を取り出す。

~~~~~

すると、再び何処からともなく音色が響き渡る。

刹那

「ま、また音色が……………」。

明日菜

「でも、さっきとは違う音だわ……………」。

全員しばらく音色に聴き入っていると、音色は静かに止んでいく。

リュカ

「……………音が止んだ。」

ネス

「おゝい、終わったよ〜！」

クマトラ

「そんじゃ、次の場所へ行こうぜ！」

ダスター

「その前にネスを引き上げないと……………ヒモヘビ、出番だぞ！」

ヒモヘビ

「よっしゃ！任せとけ！！」

ビビュッ！！

ダスターは穴の中に居るネスに向けてヒモへビを差し出す。

ダスター

「ネス、ヒモへビに捕まって！」

ネス

「あ、ありがとう………よいしょと！」

ネスがヒモへビを掴んだ瞬間、ダスターはゆっくりとヒモへビを引き上げる。

ネス

「ふう、助かった………」

ヒモへビ

「へっへ〜ん！俺も大蛇としてどんどん成長しつつあるって感じだなあ〜。」

カモ

「ケツ、たかが紐のクセによく言っぜ……………」。

ヒモへビ

「んっ！？今俺の悪口を言ったのは誰だ!？」

ヒモへビがカモの悪口を耳にして辺りを見回した瞬間、カモは素早くネギの懐に隠れる。

ネギ

「カ、カモ君……………」。

ネギはカモの素早い動きにただ啞然としていた。

リュカ

「ネギ君、どうしたの?」

ネギ

「い、いや……………何でも無いよ……………」。

クマトラ

「それよりリュカ、次は何処へ行くところか?」

リュカ

「うん、次は……。」

「シログネ山」

ネギー行とネス達が次に訪れた場所は、大きな雪山だった。

木乃香

「わあ〜！雪山や〜。」

のどか

「ううっ……………さ、寒い……………」

木乃香は雪山の景色に大喜びだが、のどかは寒そうに震えてしまう。

リュカ

「この山のウサギさん達は元気にしてるかな……………」。

ネス

「え？ウサギって……………」。

のどか

「きゃっ！？」

ネギ

「の、のどかさん！？」

全員のどかの悲鳴に似た声に反応して振り向いてみると……………。

のどか

「か、可愛い……………」。

のどかは満面の笑みで小さくて白いウサギ達の頭を撫でていた。

木乃香

「あゝ！ウサギちゃんがいっぱいやゝ！！」

木乃香が興奮気味でウサギ達の方へ駆け出してくが……………。

ダダッ!!

ウサギ達は逃げ出すようにしてその場から駆け出してしまっ。

のどか

「あ、逃げちゃった……………」

木乃香

「あ〜ん、待ってえ〜。」

木乃香は滝のような涙を流しながらウサギ達を目で追っていく。

明日菜

「木乃香ったら……………あんなに勢い良く近付こうとするから、ウサギ達も驚いて逃げちゃうのよ。」

リュカ

「でも、ウサギさん達が元気そうので安心した。」

クマトラ

「そうだな……………」

リュカ達は元気良く走っていくウサギ達を見て笑顔を浮かべる。

ダスター

「ところで、針が刺さってたのは何処だったかな……………」

ボニー

「ワンワン！」

リュカ

「ボニー？どうしたの……………あっ！あつた！！」

リュカがボニーの方を見てみると、針が刺さってた小さな穴を発見する。

クマトラ

「お手柄だぞ、ボニー。」

ボニー

「クウーン。」

ボニーはクマトラに頭を撫でられてご機嫌になる。

ネス

「じゃあ、早速……。」

ネスが『音の石』を取り出して、穴の方へ近付いていくと……。

~~~~~

再び何処からともなく辺りから音色が響き渡る。

ネギ

「!?!」

突然ネギが驚いたような表情を浮かべる。

明日菜

「ネギ、どうかした?」

ネギ

「い、いえ……何でもありません……。」

明日菜

「そ、そう。」

ネギ

(い、今……………一瞬だけど、父さんから杖を授かった時の光景が見えたような……………。)

そう思っていると、音色が静かに止んでいく。

ネス

「よし、残りは後四つか……………。」

クマトラ

「この調子でどんどん音を集めよう!」

リュカ

「それじゃ、次は何処へ行こうかな……………。」

くどせい谷く

次にネギ達が訪れた場所は、小さな小屋のような家が数軒建てられてる村だった。

ネギ

「どつやら、此処は村のようですね。」

明日菜

「村にしても、家が小さ過ぎない？」

リュカ

「そ、それは……………」

？

「ぼえーん！」

全員

「!？」

全員声が出た方を見ると、ネギ達の足元に乳肌色の丸っこい体格で大きな鼻と猫のような髭が生えて太めの眉毛に頭の毛が一本だ

け生やして赤いリボンが結び付けつある奇妙な生物が居た。

明日菜

「な、何なの！？このヘンテコリンな生き物は……………」

ネス

「あ！どせいさんだ。」

どせいさん

「はて？みかけないかおのしょうねんが、どうしてわたしのなまえをしってるでござますか？」

どせいさんという名前の生物は不思議そつにネスの顔を見つめる。

ネス

「だって、僕が住んでる『イーグルランド』という国の『サターンバレー』って村にもどせいさんがいっぱい生息してるからね。」

どせいさん

「さたんばね……………きいたことないです。」

ネス

「……………そりゃそつだよね。」

ネスはどせいさんの言葉に苦笑いする。

どせいさん

「それよりりゅかさん、ひとつきいていいですか？」

リュカ

「え？何？」

どせいさん

「かぜのうわさできた、りゅかさんたちがどせいさんたちをなげとばしたりしていると。」

リュカ

「えっ！？そ、そんな事ないよ……ね？ネス。」

ネス

「も、勿論……。」

リュカとネスは苦笑いしながらどせいさんの質問に答える。

どせいさん



「そうですね……それならいいです、みーんみーん。」

のどか

「……かなり個性的ですね。」

木乃香

「そかな？めっちゃ可愛ええやん。」

明日菜

「ど、どこが？」

明日菜は木乃香の発言に思わず耳を疑う。

ダスター

「どせいさん、俺達またゴマフ火山へ行きたいんだけど……またアレをお願いしていいかな？」

どせいさん

「はい、いいですよ……すこしだけおまちください、ばえーん。」

そう言いつつ、どせいさんは何処かへ駆け出していく。

ネギ

「ダスターさん、アレって何の事ですか？」

ダスター

「ん？まあ、見ていれば分かるよ。」

クマトラ

「お？来た来た。」

しばらくすると、五匹のどせいさんがこちらへ駆け寄って来る。

明日菜

「い、一体何が始まるの？」

木乃香

「楽しみやな」

どせいさん

「それでは、ただいまよりはしごっこをかいしします。」

刹那

「は、梯子じゅうじゅう？」

どせいさん達

「それーっ!」

五匹のどせいさん達は次々と積み重なるように合体していく。

ネス

「ど、どせいさんが積み重なった……………」

ダスター

「よし、では早速……………」

次の瞬間、ダスターは積み重なったどせいさんを梯子のように登っていく。

ネギ

「そ、そんな事して大丈夫なんですか?」

どせいさんA

「へーきへーき。」

どせいさんB

「ちやうへっちやうへ。」

どせいさんC

「どせいさん、ごつみえてがんじょう。」

どせいさんD

「でも、はなをつままれるとくしゃみです。」

どせいさんE

「ぼてんしゃる。」

ネギ

「そ、そうですね……………」

ネギは一斉に答えを返されるとせいさん達にタジタジにされる。

ダスター

「さて、この『壁ホチ』を使うのも久しぶりだな……………それっ!!」

ザクッ！ザクッ！

ダスターは『壁ホチ』という両方の先端が尖った金属を取り出して、次々と壁に打ち付けながら梯子のように登っていく。

ダスター

「さあ、みんなも登って来てくれ！」

のどか

「で、でも……………」

ネギー一行は困惑したような表情でどせいさん達を見つめる。

クマトラ

「大丈夫だって、どせいさん達は簡単に崩れたりしないさ。」

明日菜

「そ、そついう問題じゃないんだけど……………」

ネス

「そ、それじゃ……………登るよ……………」

ネスが登っていくのを合図に、残りのメンバーも次々と登っていく。

どせいさんA

「くずれるー、おもしろーいー！」

そう言つと、どせいさん達は崩れ落ちていく。

リュカ

「どせいさん、どうもありがとー!」

どせいさん A

「おきをつけてー、ぽえーん。」

そう言い残すと、どせいさん達は村の方走り去っていく。

明日菜

「……………可笑しな奴らだったわね。」

ネギ

「でも、お蔭で助かりましたね。」

クマトラ

「そんじゃ、早速『ゴマフ火山』に向かって進もうぜ!」

そう言つと、ネギ達は入口らしき洞穴へと入っていく。

？

「又へへへ、やっと見つけたぞ……………」。

物陰から現れた一人の人影がネギ達に見つかからないようにこっそりと入口へと入っていくのであった……………。

第六十話 七つの音を集めよう (前編) (後書き)

ゴマフ火山へ入っていくネギ達だが、背後には怪しい影が忍び寄る……。



第六十一話く七つの音を集めよう（後編）く（前書き）

どせいさん達の協力でゴマフ火山へやって来たネギ達だったが、そこには怪しい影が……………。

第六十一話く七つの音を集めよう（後編）く

くゴマフ火山・最深部く

ネギ達は『ゴマフ火山』の奥深くまでやって来た。

ネギ

「ふっつ、やっぱり火山は暑いなあ……………」

ネス

「リュカく、まだ着かないのく？」

リュカ

「も、もう少しだと思っ……………」

ボニー

「ワンワン！」

ボニーが一足先に駆け出した場所には、針が刺さってあっただろう小さな穴があった。

木乃香

「や、やっと着いたようやな〜……………」。

のどか

「わ、私……………あまりの暑さで倒れるところでした……………」。

ネス

「それじゃ、早速音を記憶させなきゃ……………」。

ネスが『音の石』を取り出して、穴の方へ近付こうとするが……………。

？

「又へへへ、そこまでだ!!」

全員

「!?!」

全員下品そうな声に反応して後ろの方へ振り向いてみると、そこにはヨクバが立っていた。

ダスター

「お、お前はまさか……………」。

明日菜

「あー！戦艦で会ったオツサンじゃない！！」

クマトラ

「インチキ野郎のヨクバ……………何でお前が此処に居るんだ？」

ヨクバ

「これはこれは、クマトラ姫がこのインチキ野郎の名前を覚えていてくれるとは光栄ですな……………パクツ、モグモグ。」

ヨクバは懐からバナナを取り出して、皮を剥いて一口食べる。

ヨクバ

「さて、本題に入ろう……………お前達が持っている『音の石』を素直に渡してもらおうか。」

ネス

「嫌だ！誰がお前のような悪人に渡すもんか！」

ヨクバ

「フツ、これを見てもまだそんな強がり言ってるかな……………こっちへ来い！馬鹿猿！！」

ポイツ！

ヨクバが先程食べたバナナの皮を投げ捨てる、誰かを呼び掛けるように大声を上げる。

サルサ

「ウ、ウキ……………」

全員

「!?!」

ヨクバの後ろ側から首輪を付けたサルサが落ち込んでる状態で現れる。

クマトラ

「サ、サルサ……………」

ネギ

「……………これは一体どういう事ですか？」

ヨクバ

「今から教えてやる……………それっ！」

ポチッ！

バリバリバリバリッ！！

サルサ

「ウキヤーーッ！！」

全員

「！！！！」

ヨクバが懐から取り出した小さな機械のスイッチを押すと、サルサの身体中に電気が走る。

ヨクバ

「又へへへへ、どうだ？この電撃も懐かしいだろ？」

サルサ

「ウ、ウキキ……………」

サルサは全身真っ黒焦げの状態で返事をする。

明日菜

「ちよつとオッサン！その子に何をしたの！？」

ヨクバ

「ん？そうか、お前達は初めてだったな……………今俺が持っているこの機械のスイッチを押せば、この馬鹿猿の首に付いてる首輪から強力な電撃は放出されるのさ。」

クマトラ

「この野郎、またそんな汚ねえ真似を……………」

のどか

「酷過ぎる……………」

全員険しい目付きでヨクバを睨み付ける。

ヨクバ

「さあ、この馬鹿猿の命を助けたかったら大人しく俺に『音の石』を渡せ！」

リュカ

「びびびびびび……………」

ネス  
「……………分かった。」

ネギ  
「ネ、ネス君!？」

ネギ達はネスの発言に思わず耳を疑う。

ヨクバ  
「よし、物分かりのいい子だ……………じゃあ、『音の石』を手に持ってこっちに来るんだ。」

ネス  
「……………。」

ネスは何も答えずに俯くと、リュックから『音の石』を取り出してゆっくりとヨクバの方へ歩み寄っていく。

ダスター  
「こ、こんな時はどうすれば……………ん？」

ネギ  
「な、何とかしないと……………あれ?）」



ネギとダスターは何か気付いたような反応をする。

ヨクバ

「来たな……それでは、『音の石』を渡してもらおうか。」

ネス

「その前に、サルサの首輪を外してやってよ。」

ヨクバ

「駄目だ、石を渡すのが先だ。」

ネス

「くっ……………」

ネスはヨクバの言葉に下唇を軽く噛み締める。

ヨクバ

「いいか？少しでも余計な事をしてみる……………今度は真っ黒焦げだけでは済まされんぞ。」

そう言いながら、ヨクバは持っている機械をちらつかせるように見

せる。

ネス

「分かったよ……………」

そう言つて、ネスが『音の石』を持っている方の手を上げようとした時……………。

カモ

「ちょっと待ちな!!」

ヒモヘビ

「石は渡さねえぞ!!」

ネスの右肩からカモが飛び出してきた、更に左肩からはヒモヘビが飛び出してきた。

ヨクバ

「な、何だ!?お前らは……………」

カモ

「これでも喰らえ!オコジヨフラッシュ!!」

カッ！！

ヨクバ

「ぬおっ！？」

カモが持っていたライターとマグネシウムで強い光が発生して、ヨクバは反射的に目を覆ってしまう。

ヒモヘビ

「今がチャンスだ！！」

ガブツ！！

いつの間にかサングラスを掛けているヒモヘビがヨクバの持っていた機械を奪い取り、そのまま火口の方へ投げ捨ててしまう。

ネス

「サルサ！こっちへ……………」

サルサ

「ウキッ！」

その隙にネスはサルサの手を引つ張りながらネギ達の方へ駆け寄って行く。

ヨクバ

「し、しまった！」

ダスター

「いいぞ！ヒモヘビ！！」

ネギ

「カモ君もお手柄だよ！」

カモ

「へっへーん！全て俺たちの作戦通りさ。」

ヒモヘビ

「おい、ちょっと待て！先に提案したのは俺だろ！？」

カモ

「何言つてやがんでい！オメエはただ俺たちに合わせただけじゃねえか！」

ヒモへビ

「何だと！？この毛むくじやらのイタチ野郎！」

カモ

「言いやがったな！ただ胴体が長いだけのニヨロニヨロの紐野郎！  
！」

カモとヒモへビはネスの肩の上で口喧嘩を始める。

ネス

「ちょ、ちょっと！僕の肩の上で喧嘩しないでよ……………」。

ダスター

「ヒモへビ、いい加減にしないか！」

ネギ

「カモ君も喧嘩はいけないよ。」

ネギはカモを摘み上げ、ダスターはヒモへビを摘み上げてネスの肩から引き剥がす。

ヨクバ

「うぬぬぬ……………お、おのれえ〜！」

明日菜

「どつやら形勢逆転のようね。」

クマトラ

「大人しく降参しろ！」

リュカ

「もうこんな事は止めよう、ヨクバさん……いや、マジプシーの  
ロクリアさん。」

ヨクバ

「!？」

ヨクバはリュカの発言に耳を疑った。

刹那

「マジプシー？」

木乃香

「それって何なん？」

クマトラ

「マ、マジプシーってのは……………」。

ヨクバ

「ち、違う！俺はもうマジプシーのロクリアじゃな……………」。

ツルツ！！

ヨクバ

「う、うわぁ……………」！！

ヨクバがおぼつかない足取りで後ろへ下がろうとした時、先程自分が捨てたバナナの皮で足を滑らせて火口の底へ落下してしまう。

リュカ

「ヨ、ヨクバさん！！」

ダスター

「……………駄目だ、もう助からない。」

リュカ

「そ、そんな……………」。

リユカは小さな肩を落として深く落ち込んでしまっ。

ネギ

「……………あの、一つ聞いてもいいですか？」

クマトラ

「ああ、分かってる……………マジプシーについて聞きたいんだろ？」

ネギ

「は、はい。」

クマトラ

「まあ、簡単に言えば……………『闇のドラゴン』を封印していた七つの針を守っていた番人みたいなもんかな。」

ネス

「番人？」

ネギ一行とネスはクマトラの説明に耳を傾ける。

明日菜

「じゃあ、一つの針に一人の番人が居て……………さっきのヨクバって



「いうオッサンもマジプシーの一人だって事？」

ダスター

「そついう事だな。」

木乃香

「ほなら、他のマジプシーの人達は今どうしてるん？」

クマトラ

「……………消えちまったのさ。」

ネギー行&ネス

「えっ!？」

更にネギ達はクマトラの一言に耳を疑った。

のどか

「き、消えたって……………どついう事ですか?」

ダスター

「マジプシーは針を抜かれると使命を終えて消滅してしまうんだ。」

ネス

「そうなんだ……何か、悲しいね……。」

リユカ

「でも、マジプシーの人達はあまり悲しんで無かった……むしろ、『使命を終えたから』と言って潔く消えていったよ。」

クマトラ

「そう言えば、俺を育ててくれたイオニアもそんな感じだったな……。」

クマトラは少し寂しそうな表情を浮かべる。

ダスター

「クマトラ、イオニアの事を思い出したのか？」

クマトラ

「ま、まあな……それより、早く音を記憶させた方がいいんじゃないか？」

ネス

「あ！すっかり忘れてた……それじゃ、早速始めるよ。」

ネスは『音の石』を持ったまま穴の方へ近付いた時……。

~~~~~

いつものように、辺りに音色が響き渡る。

クマトラ

「!?!」

リュカ

「どうしたの?」

クマトラ

「い、いや……一瞬だけど、小さい頃の俺とイオニアの姿が見えた気が……。」「

木乃香

「ウ、ウチも……小さかった頃のウチがせっちゃんとして初めて出会った時の光景が見えたような……。」「

刹那

「ほ、本当ですか?」

木乃香

「うん、本当に一瞬やったけど……………」。

そういった話をしていると、そういった話をしていると、音色は静かに止んでいく。

ネス

「……………よし、これで残りの音は後二つだね。」

明日菜

「やっと半分つてところね……………」。

ネギ

「そうですね……………そろそろ次の音の場所へ行きましょう。」

クマトラ

「サルサ、お前は恋猿こいざるの所へ帰りな。」

サルサ

「ウキッ！」

サルサは一礼をした後、その場から急いで立ち去っていく。

くタネヒネリ島く

ネギ達はリュカとクマトラのテレポートで森が覆い茂る小さな島へとやって来た。

ネス

「……………どうやら、また森のようだね。」

リュカ

「針が刺さってた穴は、この森を抜けた先の丘の上にあるよ。」

明日菜

「それじゃ、まずはこの森を抜けなきゃね。」

そう言つと、全員丘を目指して歩き始める。

ネギ

「……………それにしても、さっきのヨクバって人はどうして悪い人になっちゃったんだろう?」

リュカ

「それは僕達にも分からない……………でも、マジプシーだった頃は良い人だったらしいよ。」

木乃香

「そうなんや……………人って変われば変わるもんなんやなあ。」

ネス

(変われば変わるか……………ポーキーもどうしてあんなに変わったやつたんだろう……………。)

ネスは少し悲しげな表情を浮かべながら歩いていく。

カモ

「……………ん? ありや何だ?」

しばらく進んでいると、カモが何かを発見する。

ネギ

「カモ君、どうかした？」

カモ

「いやあ、アレは何かな〜と思ってな……………」。

ネギ

「えっ？どね？」

カモ

「ほら、あそこにあるだろ？」

ネギはカモが指さす方向をじっくり見ていると……………。

ネギ

「あっ！？何これ？」

ネギは木の根元に沢山生えてる紫色のキノコを発見する。

カモ

「うゝむ、見たところキノコにも見えなくもねえが……………」。

ネギ

「でも、コレがキノコだったら絶対毒キノコか何かだよ……………」。

リュカ

「ネギ君、どうかしたの……………あっ!？」

ネギの方を見たリュカは紫色のキノコを見た途端顔色が真っ青に変わる。

リュカ

「ネ、ネギ君!そのキノコ食べちゃ駄目!！」

ネギ

「!？」

ネギはリュカの大声に思わず驚いてしまう。

明日菜

「な、何々!？何かあったの？」

ダスター

「どうしたんだ!？」

他のメンバーもリユカの大声に反応して駆け寄って来る。

リユカ

「あ、ゴメン……………大声なんか上げちゃって……………」

明日菜

「ちよつとネギ！リユカに一体何したのよ？」

ネギ

「ぼ、僕はただあのキノコを見てただけで……………そしたら、急にリユカ君が……………」

クマトラ

「キノコだと？」

ダスター

「ま、まさか……………」

ボニー

「ガールル……………」

ネギの説明を聞いたダスターとクマトラの顔が真っ青になり、ボニー

「は警戒するように唸り声を上げる。」

ネギ

「……やっぱり、コレは毒キノコなんですか？」

クマトラ

「いや、毒ではないが……コレを食べると、幻覚を見るようになってしまうんだ。」

のどか

「げ、幻覚？」

ダスター

「そう……しかも、ただ幻覚が見えるだけじゃない……食べた人の心の傷や弱い部分を搔き^{むし}るような幻聴が聞こえてくるんだ……。」

刹那

「幻覚や幻聴……まるで麻薬のようですね。」

リュカ

「僕達、この島の針を抜こうと訪れた時にそのキノコをすっかり食べちゃって……それ以来、しばらく軽いトラウマ状態になっちゃったんだ。」

カモ

「……………兄貴、食べなくて良かったな。」

ネギ

「い、いや……………僕は食べるなんて一言も……………」

明日菜

「要するに、そんな危ないキノコは食べない方がいいって事ね……………
さあ、そろそろ先へ進みましょう！」

そう言つと、全員再び丘を目指して歩き始める。

刹那

「……………ところで、丘の上まで後どれ位ですか？」

ダスター

「もうそろそろだと思つが……………」

クマトラ

「ほら！見えてきた。」

クマトラの指さす方を見てみると、海を見渡せる丘が目に見えた。

ネス

「わあ、此処からだと言えねえね。」

木乃香

「ホンマや、海で泳ぎたいなあ。」

明日菜

「……………木乃香ったら、毎回海を見る度にそんな事言っていない？」

明日菜は木乃香の発言に少し呆れ返る。

ボニー

「ワン！」

ボニーは一足先に駆け出して、針が刺さっていた穴の所までやって来て吠え始める。

ネス

「あそこか……………よし、早速五つ目の音を記憶させよう。」

そう言っつて、ネスが『音の石』を取り出して穴の方へ近付いていく。

~~~~~

すると、いつものように辺りに音色が響き渡る。

明日菜&リュカ

「!?!」

ダスター

「二人共、どうした？」

クマトラ

「まさか、何か見えたのか？」

リュカ

「う、うん……………お父さんとお母さんがまだ赤ん坊の僕とクラウド兄ちゃんを嬉しそうに抱きしめてる光景が見えた気がした……………」

刹那

「明日菜さんは？」

明日菜

「わ、私はね……………幼い頃の私がネギのお父さんと楽しそうにお話してる光景が見えたわ……………」

ネギ

「そ、それって前に明日菜さんが自分の事を思い出す前にいつも夢で見ていた光景と一緒に事ですか？」

明日菜

「そ、そう！まさにその通りよ！」

全員でそうこう言っていると、音色はいつものように静かに止んでいく。

ネス

「……………終わったよ。」

のどか

「残りの音は後二つですね……………」

木乃香

「リュカ君、次は何処へ行くん？」

リユカ

「えっと、次は……。」

く チュピチュピヨイ神殿前く

ネギ達が次に訪れた場所は、全体がツタで覆われた石で出来た建物の前だった。

のどか

「随分古そうな建物ですね……。」

ネギ

「この中に針が刺さってたんですか？」

ダスター

「ああ、イオニアっていうマジプシーが守っていた神殿だ。」

ネス

「イオニアって、さっきクマトラさんが言った……………」

クマトラ

「そうさ、そのイオニアがずっと前から此処で針を守ってたのさ…  
…。」

そう言つと、クマトラは何処か切ない表情で神殿を見つめる。

クマトラ

「……………おっと！辛気臭い話は此処までにして、早く中へ入ろうぜ。」

明日菜

「そ、そうね……………」

ネギ達はそのまま神殿の中へと入っていく。

ボニー

「ワンワンー！」

ボニーがネギ達より先に駆け出して行くと、台座がある場所で立ち



止まる。

リュカ

「あの台座に針が刺さってたんだ。」

刹那

「いかにも大事に守られたって感じですね。」

ネス

「とにかく、六つ目の音を記憶させよっと……。」

そう言うと、ネスは台座へと続く階段へ駆け上がっていく。

ネス

「よし……。」

~~~~~

ネスが台座の所まで到着すると、『音の石』を取り出して神殿内に音色が響き渡る。

カモ

「……………兄貴、ちょっといいかい？」

ネギ

「ん？どうしたの？」

カモ

「今さっき、俺っちと兄貴が初めて出会った光景が見えたような……」

ヒモヘビ

「ダスター、俺もアンタと運命的な出会いをした瞬間が見えたぜ。」

ダスター

「う、運命的……………」

ダスターはヒモヘビも大袈裟な発言に苦笑いを浮かべる。

ネス

「音が止んだ……………みんなの所へ戻ろう。」

音色が止むと同時に、ネスはそのまま階段を駆け降りていく。

ネギ

「これで残りの音は後一つだけですな。」

明日菜

「やれやれ、やっと此処までやり遂げたって感じね……………」。

刹那

「でも、本番は此処からだと思いますよ。」

ダスター

「ああ、刹那の言う通りだ。」

のどか

「どついつ事ですか？」

クマトラ

「最後の針が刺さってた場所ってのがな……………敵の本拠地と言っても過言ではない場所なんだ。」

ネギ一行

「ええっ!？」

ネギ一行はクマトラの言葉に耳を疑った。

ネス

「みんな、お待たせ……あれ？どうかしたの？」

戻って来たネスはネギー一行の驚いたような表情を見て首を傾げる。

木乃香

「……………ウチらが次に行く場所は敵の本拠地みたいなんやて。」

ネス

「えっ！？本当に？」

リュカ

「う、うん……………」

ネスの言葉にリュカが気まずそうに俯く。

刹那

「……………という事は、今までよりも慎重に進まないといけませんね。」

「

明日菜

「そのようね……………」

ネギ

「皆さん、もしかしたら闘いになるかもしれませんが……………気を引き締めて向かきましょう。」

のどか

「は、はい！」

リュカ

「それじゃ、いつものように手を繋ぎ合って。」

そう言うと、全員が輪の形になるようにお互いの手を繋ぎ合わせる。

木乃香

「みんな手を繋いだえ。」

クマトラ

「よし……………リュカ、準備はいいか？」

リュカ

「うん、いいよ。」

クマトラ

「そんじゃ、ニューポークシティに向けて……………テレポート!」

ネス

(えっ!?ニューポークシティって……………。)

シュン!!

ネスがクマトラの言葉に耳を傾けたのと同時に、全員がその場から姿を消してしまうのであった……………。

第六十一話く七つの音を集めよう(後編)く(後書き)

ネギ達は最後の音を集める為にニューポークシティへと目指すので
あった……………。

第六十二話、メイドロボと豚王（前書き）

ニューポークシティを目指してテレポートを開始したネギ達だが……。

第六十二話　メイドロボと豚王

「ニューポークシティ」

ネギ達はリュカとクマトラのテレポートで、大都会のような町へとやって来た。

ネギ

「こゝ、此処が……………敵の本拠地ですか？」

明日菜

「どう見ても大きな都市にしか見えないけど……………」

ネス

「リュ、リュカ……………此処って、マスターハンドが用意してくれたステージと全く同じだね。」

リュカ

「……………やっぱり、ネスならそう言つと思つてたよ。」

リュカはネスの言葉を聞いて苦笑いする。

ダスター

「……何だか、此処へ来るのも懐かしいなあ。」

クマトラ

「俺はあまり来たくなかったがな……。」

苦笑いするダスターにクマトラは少し浮かない表情をする。

刹那

「ところで、針が刺さってた場所というのは何処なんですか？」

ダスター

「ああ、確か……『エンパイアポーカービル』という超高層ビルの地下深くに最後の針が刺さってたな。」

のどか

「『エンパイアポーカービル』？」

クマトラ

「ほら、あのビルさ。」

ネギー一行はクマトラの指さす方を見ると、雲を突き抜ける程の巨大な超高層ビルが目に見えた。

木乃香

「わあ〜！メツチャ高い建物やなあ……………雲で頂上が全然見えへんわ。」

リュカ

「え〜っと、確か百階まであるって聞いたけど……………」

明日菜

「ひゃ、百階!?!」

ネギ一行はリュカの発言に思わず耳を疑う。

ネス

「一体何の為にこんな物を……………」

ネギ

「とにかく、その『エンパイアポーカービル』へ行ってみましょう。」

「

そう言つと、全員『エンパイアポーカービル』に向かって駆け出していく。

ブタマスク

「居たぞ！捕まえる！！」

全員

「！？」

全員走りながら後ろを向いてみると、ブタマスクの大群がネギ達を
追い掛けていた。

クマトラ

「チツ、追っ手があんなに……………」

ダスター

「……………クマトラ、一先ずコイツらを片付けるか。」

クマトラ

「ああ、そうだな。」

そう言うと、ダスターとクマトラはブタマスクの方を向いて戦闘体
制へと移る。

リュカ

「えっ！？ま、まさか……………」

リュカは急に立ち止まった。ダスターとクマトラを見て自分も思わず立ち止まってしまおう。

ダスター

「リュカ！俺達が奴らを引き付けるから、お前はネギ達と一緒に先へ進め！」

リュカ

「で、でも……………」

クマトラ

「大丈夫！こんな連中すぐに片付けてやるさ！」

ダスター

「急げ！俺達を信じろ！！！」

リュカ

「……………分かった。」

そう言うと、リュカは再び走り出そうとする。

ネス

「リュカ、ダスターさん達だけで大丈夫かな？」

リュカ

「きっと大丈夫、あの二人は強いし……それに、僕はあの二人を信じてる。」

ネス

「リュカ……………」

ネギ

「でも、やっぱり二人だけっていうのは……………」

明日菜

「じゃあ、私がサポートするわ……………アデアット!!」

パァー……ッ!!

明日菜が咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出して、ダスターとクマトラの方へ歩み寄っていく。

ネギ

「明日菜さん、お願いします……………では、先へ進みましょう!!」

刹那

「はい！」

ネギ達は三人を残して、『エンパイアポーカービル』に向かって駆け出していく。

ダスター

「ん？どうしてリュカ達と一緒に行かなかったんだい？」

明日菜

「決まってるでしょ？二人のサポートをする為に自ら残りました。」

クマトラ

「そいつは有り難いが………そんなただ馬鹿デカいハリセンだけで大丈夫なのか？」

明日菜

「それは見てれば分かるって………。」

ブタマスク

「掛かれえー！ー！！！」

一人のブタマスクの掛け声を合図に、沢山のブタマスクが飛び掛かって来る。

明日菜

「とりゃーっ！！」

パッシーーーン！！

ブタマスク達

「ブヒ~~~~ッ！！」

明日菜が大きく『ハマノツルギ』を振り回すと、飛び掛かって来たブタマスク達を吹っ飛ばしてしまう。

クマトラ

「わあ、スゲエな……………」

ダスター

「これは負けてられないぞ……………」

ブタマスク

「ひ、怯むなあー！どんだん掛かれえー！！」

そう叫ぶように言うと、一斉にブタマスク達が襲い掛かって来る。

ダスター

「来たな……………そりゃーっ!!」

バシーーーーン!!

ブタマスク達

「ブヒャッ!!」

ダスターの強力な回し蹴りがブタマスク達を蹴散らす。

クマトラ

「PKファイアー!!」

ポオーーーーッ!!

ブタマスク達

「あちゃちゃちゃ!!」

クマトラが放った炎のPSIでブタマスク達の衣類に燃え広がる。

明日菜

「まだまだ行くわよ！」

こうして、三人は襲い掛かるブタマスク達を次々と蹴散らしていくのであった……………。

くエンパイアポーカービル前く

ネギ達は『エンパイアポーカービル』の入口前へとやって来た。

ネス

「遂に此処まで来たね……………」

ネギ

「皆さん、この中で何が起こるか分かりません……………気を引き締め

「て入りましょう。」

のどか

「は、はい！」

全員がビルの中へ入ろうとした時……。

？

「すとーっつぷー！」

全員

「！？」

突然ビルの中からメイド服を着た金髪の少女のようなロボットがネギ達の前に立ち塞がる。

リユカ

「あっ！？あの子は……。」

ボニー

「ガールルルル……。」

リユカはメイドロボットを見て顔色が真っ青になるが、ボニーは唸り声を上げながら警戒する。

ネギ

「あ、貴女は誰ですか!？」

？

「私ノ名ハましゅまるチャン、御主人様ヲ守リスルめいどろぼデス。」

ネス

「メ、メイドロボ?」

木乃香

「へえ、まるで茶々丸さんみたいやなあ。」

木乃香はマシユマロちゃんと名乗るメイドロボをクラスメートの絡繰茶々丸と重ね合わせながら見つめる。

ネギ

「あの、僕達はこのビルの中に入りたいんですけど……。」

マシユマロ

「駄目デス！」

ネギ

（そ、即答！？）

のどか

「ど、どうしてですか？」

マシユマロ

「御主人カラ『このビルに誰一人として入れるなよ！』ト申シ付ケラレタカラデス。」

木乃香

「そんな、ウチらはどうしても中に入らなアカンのに……………」

マシユマロ

「駄目ナ物ハ駄目デス！オ降り下サイマセ！！」

そう言うと、マシユマロちゃんはそのままネギ達を押し出そうとする。

ボニー

「ワンワン！！」

マシユマロ

「!?!」

すると、突然ボニーがマシユマロちゃんの顔面に向かって飛び掛かっていく。

リュカ

「ボ、ボニー!?!」

ツルツ!!

ゴロゴロゴロゴロツ!!

次の瞬間、マシユマロちゃんはバランスを崩してボニーと一緒に階段から転げ落ちてしまう。

リュカ

「ボニー!大丈夫!?!」

ボニー

「ワ、ワン……………」

下の方まで転げ落ちたボニーはリュカの問いに答えるかのように吠える。

マシユマロ

「ウウツ……………ヨ、ヨクモヤツテクレマシタネ……………」

それと同時に、マシユマロちゃんが全身に電気をパチパチと鳴らしながらゆっくりと起き上がる。

マシユマロ

「御主人ニ逆ラツタリシタラ……………私、怒リマス！怒リマス！！怒リマスウ……………ッ！！！」

ジャキーーン！！

マシユマロちゃんは左腕をドリル、右腕を鋏ハサミへと変形させる。

ネギ

「う、腕が変形した！？」

リュカ

「このままじゃ、ボニーが危ない……………」。

刹那

「……………私が助けに行きます！」

ダツ！！

刹那は目にも止まらぬ速さで駆け出して行く。

木乃香

「せ、せつちゃん!?!」

マシユマロ

「覚悟オーーーーツ!!」

マシユマロちゃんの鋭いドリルがボニーに迫って来るが……………。

刹那

「ハアーーーーツ!!」

ガツキーーーーン!!

マシユマロ

「!?!」

刹那が夕風でマシユマロちゃんのドリルを弾き返す。

ボニー

「クウ〜ン……………」。

ボニーは刹那にお礼を言うかのように刹那の足を擦り寄せる。

刹那

「さあ、早くこの場から離れて……………」。

マシユマロ

「ムツカー！モウ完全ニ怒ツチャッター!!」

刹那はボニーを逃がそうとしたが、マシユマロちゃんが刹那に向かって勢い良く駆け出していく。

ガキイーーーーッ!!

刹那

「くっ!!」

刹那は咄嗟的に夕風でマシユマロちゃんの体当たりを防ぐ。

ネギ

「刹那さん！今助けに……………」

刹那

「大丈夫です！この場は私に任せて、皆さんは先へ進んで下さい！」

木乃香

「そ、そんな……………」

刹那

「ご、ご安心を……………倒したらずぐに駆け付けますので……………さあ、急いで！」

ネギ

「……………分かりました。」

木乃香

「ネ、ネギ君!？」

木乃香はネギの発言に思わず耳を疑った。

ネギ

「木乃香さん、刹那さんなら大丈夫ですよ……此処は刹那さんを信じましょう。」

木乃香

「ネギ君……分かった、ウチもせっちゃんを信じる。」

リュカ

「ボニー!刹那さんのサポートをしてあげて!」

ボニー

「ワン!」

ボニーはリュカに答えるかのように元気良く吠える。

ネス

「それじゃ、行こう!」

そう言うと、ネギ達は刹那とボニーを残してビルの中へ入っていく。

刹那

「……………よし、これで心置きなく闘える。」

マシユマロ

「御主人ニ逆ラウ者ハ全テ排除シマス！」

マシユマロちゃんはドリルと鋏を振り回しながらゆっくり接近してくる。

ボニー

「ガールル……………」

刹那

「それでは……………いざ、参るー!」

次の瞬間、刹那とボニーはマシユマロちゃんに向かって駆け出していく。

（エンパイアポーカービル内部）

ネギ達がビルの中へ入ると、まるでフロントのような風景が目についた。

ネス

「リュカ、此処から地下へ行くにはどうすればいいの？」

リュカ

「エレベーターに乗れば地下へ行けるよ。」

ネギ

「エレベーターか……では、早速乗り込みましょう。」

そう言うと、ネギ達は近くにあったエレベーターに乗り込んでいく。

のどか

「でも、このエレベーターで本当に地下へ行けるのでしょうか？」

木乃香

「さ、さあ……………」

ネギ

「とにかく、この『地下』って書いてあるボタンを押してみまじょう……………」

ポチッ！

そう言つて、ネギが『地下』と書かれたボタンを押すと……………。

ガツシャー……………！！

全員

「!?!」

ゴォ……………ッ！！

全員

「わあ……………ッ!」

エレベーターの扉が閉じたと同時に、ネギ達を乗せたエレベーター

が物凄い勢いで下降していくのであった……。

くニューポークシティ・映画館内部く

？

「行け！頑張れ！！！」

誰も居ない映画館の中で黒コートの人物が映写機から写し出されるスクリーンに向かって叫んでいた。

？

「おいおい、映画館の中で大声出すなよ……。」

？

「別にいいじゃない、私達以外誰も居ないんだし……。」

？

「まあ、そりゃそうなんだけどよお……………」。

何処からともなく聞こえてくる声に黒コートの人物は軽く遇うように返答する。

？

「……………此処に居たか。」

？

「！？」

突然聞こえてきた声に驚いて振り向くと、そこには同じ黒いコートを着てフードで顔を隠した人物が立っていた。

黒コートの女

「ビ、ビックリしたあ……………もお、脅かさないでよ！」

黒コートの男

「ビックリしたじゃない……………こんな所で一体何をしてる？」

黒コートの女

「何って……………映画館に来たんだから映画を見てたに決まってるじゃない。」

黒コートの子

「ハアッ……。」

黒コートの子は黒コートの子の言葉を聞いて深い溜め息を付く。

謎の声

「旦那、いつも苦勞を掛けさせてすまねえな。」

黒コートの子

「いや、あまり気にするな……それに、こういふ事には少しだけ慣れた。」

黒コートの子

「ところで、私に何か用なの？」

黒コートの子

「ああ、この子達をこの町まで連れて来てほしいのだが……。」

そう言つと、黒コートの子は懐から三枚の写真を取り出して黒コートの子に渡す。

黒コートの女

「あれ？この子達って、この映画の……………」。

黒コートの男

「そういう事だ……………頼んだぞ。」

黒コートの女

「任せて」

黒コートの女はその場から立ち去るつとすが……………。

黒コートの男

「待て。」

黒コートの女

「ん？何？」

黒コートの男

「分かってるかもしれんが、くれぐれも慎重に行動するように……………
…さもないと、我々は奴に消されてしまうからな。」

黒コートの女

「ええ、分かってるわ……………それじゃ、またね」

黒コートの女は黒コートの男に向かって手を振りながら立ち去って
いく。

黒コートの男

（不思議な子だ……………自分も危険な目に遭うというのに、私に協
力してくれるとは……………。）

スッ!!

次の瞬間、黒コートの男はその場から姿を消してしまう。

くエンパイアポークービル・地下く

ガッシャー————ン!!

全員

「うわぁっ!?!」

その頃、エレベーターで『エンパイアポーカービル』の地下の最下層までやって来たネギ達は、放り出されるようにエレベーターから出て来る。

ネギ

「い、痛たたたた……皆さん、大丈夫ですか?」

のどか

「な、何とか……。」

木乃香

「ウチも無事や……。」

ネス

「ぼ、僕も……リユカは大丈夫?」

リユカ

「だ、大丈夫……。」

ネギ

「……………どつやら全員無事みたいですね。」

ネギはネス達の安否を聞いて一安心する。

ネス

「それにしても、此処は薄暗くてあまり見えないね……………」。

リュカ

「でも、この先に針が刺さってた場所があるよ。」

木乃香

「ほなら、早速そこへ行こか。」

ネギ

「そうですね……………皆さん、少し視界が悪いので気をつけて進みましょう!」

のどか

「はい!」

ネギ達は奥の方を目指してそのまま進んでいく。

〈数分後〉

しばらくの間、ネギ達は奥を目指してただ歩き続けていた。

木乃香

「ハアハア……………ま、まだ着かへんの？」

リュカ

「も、もう少しなので頑張ってください。」

木乃香

「わ、分かった……………」

そう言うと、木乃香は少し息を切らしながら進み出す。

ネギ

「それにしても、ビルの地下にこんなに広い洞窟があるなんて……………」

……。」「

ネス

「この洞窟もポーキーが作ったのかなあ……。」「

リュカ

「あつ！あそこだ。」「

リュカが指さす方を見ると、針が刺さってたであろう小さな穴の周りだけにうっすらと光っていた。

のどか

「ほ、本当だ……。あそこだけ、うっすらと光ってる……。」「

ネス

「行ってみよう！」「

そう言って、ネギ達は穴の方へ駆け寄っていくが……。。

？

「スト、スト、スト、スト、スト、ストッピだよん。」「

全員

「!?!」

全員が何処からともなく聞こえてきた声に反応して、警戒しながら辺りを見回す。

ネス&リュカ

(い、今の声は……。)

ネギ

「だ、誰ですか!?!」

?

「あは、あは、あははははははは………僕が誰だか知りたいのかい?」

ネス

「ポーキー!何処に居るんだ!?!出て来てよ!」

ドシーン!ドシーン!

突然足音のような地響きが聞こえてくる。

木乃香

「じ、地震やるか？」

ネス

「いや、これは恐ろしく……………」。

ドシーン…ドシーン！

のどか

「お、音がどんどん近付いて来ます……………」。

のどかの言う通りに、地震がどんどん近付いてきてるようつに大きくなっていく。

ネギ

「……………お、音が止んだ。」

リュカ

「みんな、敵は後ろに居るよ……………」。

木乃香

「う、後ろ？」

ネギ一行がゆっくり後ろを振り向くと……………。

ネギ一行

「!？」

そこには王冠を被ってパチンコと本を持った小太りの子供も姿をした巨大な石像が立ち塞がっていた。

のどか

「い、いつの間にこんな大きな石像が……………」

リュカ

「キ、キングの像……………」

ネギ

「キングの像？」

ウィーーーーーン

ネギ一行がキングの像と呼ばれた石像を見ていると、キングの像の頭上からスピーカーが出て来る。

ポーキー

「ゴホンゴホン……………ネスにリュカよ、随分久しぶりじゃないか。」

ネス

「ああ、亜空軍の事件以来だね……………」

リュカ

「でも、あの時にネスが倒したハズなのに……………」

ポーキー

「前に言ったハズだよ？このポーキー様は死なないってね……………ゼエゼエ、ハアハア。」

ネギ

「……………ネス君、この声の主が前に君が話してたポーキーって子なの？」

ネス

「う、うん……………この石像も昔のポーキーの姿そのものだよ。」

ネスはネギ達だけに聞こえるように話す。

ポーキー

「ちよつとちよつと、僕をほったらかしにして何をくっちゃべってるんだい……ん？よく見たら、その三人の顔は初めて見るな……ゲホツゲホツ！」

ネギ

「は、初めまして……僕達はネス君とリュカ君の友達です。」

ポーキー

「何だつて？ネスとリュカの友達？……わは、わは、わははははは！」

ポーキーはネギの言葉を聞いた途端に笑い出す。

木乃香

「な、何が可笑しいん？」

ポーキー

「ハアハア、ゼイゼイ……お前達も運が悪いよねえ、こんな弱虫のネスとリュカの友達じゃなくてこのポーキー様の手下になれば良かったのに……そうすれば、お前達も死なずに済んだのにさ……」

のどか

「し、死なずに済むって………どういう意味ですか？」

ポーキー

「ネスが持つてる『音の石』の不思議な力を使って、ギーグを復活させて世界を滅ぼさせちゃって訳さ………ゲホッゲホッ。」

ネギ

「な、何ですって!？」

ネギ達はポーキーの発言に耳を疑った。

ネス

「ギ、ギーグを復活って………本気なの？」

ポーキー

「あははははは！このポーキー様はいつでも本気さ………でも、どうしても邪魔すると言っなら容赦しないよ？」

リュカ

「あっ!？」

リュカがふと後ろの方を向くと、いつの間にか仮面の男が立っ

た。

仮面の男

「……………」

リュカ

「ク、クラウド……………兄ちゃん……………」

ピッシャー——ン!!

リュカ

「わあっ!!」

仮面の男が持っていた光の剣をリュカに向けて振りかざした瞬間、リュカの近くに雷が命中する。

ネス

「リュカ!大丈夫!？」

リュカ

「う、うん……………完全に当たった訳じゃないから……………」

リュカはゆっくりと立ち上がりながら答える。

ポーキー

「わは、わは、わははははははは！素直にその『音の石』を渡せば命だけは助けてやるよ……さあ、どつするっ。」

ネス

「渡さないよ！ギーグは絶対に復活させない！！」

ポーキー

「ふう〜ん……………やっぱりね、馬鹿なネスだったらそつ言つと思つたよ……………ゴホンゴホン。」

ドッシー————ン！！

次の瞬間、キングの像が動き始める。

ネギ

「木乃香さんにのどかさん！此処から少し離れて下さい！！」

木乃香

「わ、分かった……。」

のどか

「ネギ先生、お気をつけて……………」

木乃香とのどかは今居る場所から少し離れる。

リュカ

「ネスとネギ君……………僕がクラウドス兄ちゃんの相手をするから、二人はキングの像をお願いね。」

ネス

「で、でも……………一人で大丈夫？」

リュカ

「分からないけど、僕がクラウドス兄ちゃんを止めなきゃ……………」

ネス

「リュカ……………分かったよ、こっちは任せて。」

リュカ

「……………ありがとう。」

ネス

「ネギ！行こう！！」

ネギ

「うん！！」

ネギとネスはキングの像に向かって走り出す。

リュカ

「……………クラウドス兄ちゃん、僕が絶対に救ってみせるからね。」

仮面の男

「……………。」

仮面の男が無言のまま剣を構えると、リュカもバットを取り出して身構える。

リュカ

「それじゃ、行くよ！」

ダッ！！

リュカと仮面の男は同時に面と向かって駆け出してくのであった…

⋮
○

第六十二話、メイドロボと豚王（後書き）

果たして、ネギ達はポーキー&仮面の男に勝てるのか!?

第六十三話、最愛の兄との別れ……（前書き）

ポーキーと仮面の男を相手にネギとネスは勝てるのか！？

第六十三話 最愛の兄との別れ……

「エンパイアポーカービル前」

刹那

「ハアハア……………」

刹那は少しボロボロ状態で息を切らしながらマシユマロちゃんを睨み付ける。

マシユマロ

「樺毛鳴カズバ撃タレマイニ……………人間ばんじー塞翁ガ馬……………ト
ンカツ食ツテ美味カタ……………貴女ノ才掛ケニナツタ電話番号八西
カラ東デス……………壊レチャツタ壊レチャツタ壊レチャツタヨ〜ン！」

ポーーーーーン!!!

バタン!!!

マシユマロちゃんは頭から煙を上げながら、そのまま倒れ込んでしまっ

刹那

(見掛けによらず強敵だった………一歩間違えれば私がやられたかもしれない。)

ボニー

「ワンワン！」

突然ボニーが刹那の元へ駆け寄ってくる。

刹那

「でも、君がサポートしてくれたお蔭で奴を倒す事が出来た………
どうもありがとう。」

ボニー

「クウーン。」

刹那は笑顔を浮かべながらボニーの頭を撫でる。

明日菜

「おい、刹那さん！」

すると、遠くから明日菜とダスターとクマトラが駆け寄ってくる。

刹那

「あ、明日菜さん！それにダスターさんやクマトラさんも……………」

ダスター

「思ったより苦戦してしまってね……………」

クマトラ

「ところで、リュカ達は何処だ？」

刹那

「先にあのビルの中へ入って行きました。」

刹那はネギ達が入って行った『エンパイアポーカービル』に向けて指をさす。

明日菜

「それじゃ、私達もビルの中へ入りましょう！」

そう言うと、明日菜達は『エンパイアポーカービル』の中へと入っていく。

くエンパイアポーカービル・地下洞窟く

ネギ

「魔法の射手 連弾・雷の二十七矢!!」

ネス

「PKサンダー ！！」

バリバリバリバリッ！！

その頃、ネギとネスはそれぞれの電気系の攻撃でキングの像に攻撃を繰り返していた。

ポーカー

「わは、わは、わははははは……その程度の攻撃じゃ、このポーカー様の石像は壊せないよ?」

ネギ

「な、何て頑丈な石像なんだ……………」

ネス

「僕達の攻撃が全然効いてない……………」

リュカ

「うわぁーっ！！」

ネギ&ネス

「!?!」

ネギとネスはリュカの叫び声に反応して振り向いてみると、ボロボロの状態で倒れ込んでるリュカとそれをただ黙然と見ている仮面の男が目についた。

ネス

「リュ、リュカ!?!」

ネスは慌ててリュカの方へ駆け出そうとするが……………。

ブワッ!!

ネギ

「危ない!!」

ネス

「!？」

突然ネス目掛けてキングの像の巨大な腕が振り下ろされるが、ネギが咄嗟的にネスを引っ張ったお蔭でキングの像の攻撃から逃れる。

ネス

「た、助かった……………ありがとう、ネギ。」

ネギ

「どう致しまして。」

ネギはネスにお礼を言われて照れ隠しする。

ポーカー

「ゴホンゴホン……………一体何処へ行く気だったんだい？今は僕と遊んでるってのに……………」

ネス

「あ、遊びつて……………これは遊びじゃないんだよ!」

ポーキー

「何言ってるの？僕にしてみれば全て遊びなのさ……………ハアハア、ゼイゼイ。」

ネギ

「す、全て遊び……………」

カモ

「……………何処までもふざけたガキだぜ。」

ネギとカモは険しい表情でキングの像を睨み付ける。

リュカ

「う……………う……………」

すると、リュカがバットを杖代わりにしてゆっくりと立ち上がる。

仮面の男

「…………………………」

仮面の男はリュカを待っているかのように、ただリュカを見つめな

がら立ち尽くしていた。

リュカ

「ま、まだまだ……お父さんと約束したんだ……クラウドス兄ちゃんを正気に戻すって……。」

〈リュカの家〉

音探しを始める直前の早朝、リュカは鏡の前に立っていた。

リュカ

『うん、やっぱり寝癖が目立っちゃうなあ……。』

そう言って、リュカは普段より飛び出てる寝癖を弄り始めた時……。

フリント

『……………リュカ。』

リュカ

『えっ？』

リュカが声に反応して後ろを向いてみると、そこにはフリントが立っていた。

リュカ

『お父さん……………どうしたの？』

フリント

『少しだけ話せるか？』

リュカ

『う、うん……………いいよ。』

リュカは少し首を傾げながらフリントを見つめる。

フリント

『すまないな……………お前にこんな事を押し付けられるような形になってしまつて……………本当は父親である俺がやらなければならぬのに……………』

リュカ

『そ、そんな……お父さんだって、クラウド兄ちゃんが行方不明になった時は必死で捜し回ったじゃない……僕なんか、お母さんのお墓の前で泣いてただけだったし……。』

フリント

『だが、あの時はお前をほったらかしにしてクラウドを捜し回ってばかりだった……あの時の俺はクラウドを捜し出す事しか頭に無かった……俺は本当どうしようもない父親だな。』

リュカ

『お父さん……。』

そう呟くと、リュカはフリントの手を強く握る。

リュカ

『お父さん、僕だって……僕だってあの時、勇気があつたらお父さんみたいにクラウド兄ちゃんを捜し回ってたよ……見つかるまで何度も何度もね。』

フリント

『リュカ……。』

リュカ

『だって、僕はお父さんの子供だもん……勿論、クラウド兄ちゃんもね。』

フリント

『お前は本当に優しい子だ……流石は母さんの子だな。』

フリントは笑顔を浮かべながらリュカの頭を撫でる。

リュカ

『あつ！そろそろ行かきゃ……みんなが待ってるし……。』

フリント

『そうか、気をつけてな……クラウドの事は任せたぞ。』

リュカ

『うん！それじゃ、行って来まーす！！』

リュカは元気良く家から飛び出していくのであった……。

く回想終了く

リュカ

「だから、だから僕は……………絶対に負けられない!!」

そう言うと、リュカはバットを強く握りながら仮面の男に向かって駆け出していく。

ガツキーーーーン!!

すると、リュカとバットと仮面の男の剣が激しくぶつかり合う。

リュカ

「クラウドス兄ちゃん!お願いだから正気に戻ってよ!!」

仮面の男

「……………。」

バシユツ!!

リュカ

「わあっ!!」

次の瞬間、仮面の男がリュカのバットを弾き返してしまう。

ピッシャー————ン!!

リュカ

「ぐわあ——————っ!!」

仮面の男が剣をリュカに突き付けると、剣から電気が流出してリュカの体中を電気が流れていく。

のどか

「リュ、リュカ君!!」

木乃香

「このままやとリュカ君が……………」

ネス

(一体どうすればリュカのお兄さんの記憶を取り戻せるんだろ……
… あ！ そうだ！！)

ネスはズボンのポケットから『音の石』を取り出す。

ネス

(この『音の石』から流れる不思議な音色を聞けば、リュカのお兄さんは記憶を取り戻すかも……。)

そう思いながら、ネスは穴の方へ駆け寄ろうとするが……。

ドッシーーン！！

ネス

「！？」

突然キングの像がネスの前に立ち塞がる。

ポーキー

「さっきも言っただろ？ まだ僕との遊びは終わってないからね……
ゴホンゴホン。」

ネス

「邪魔しないでよ！リュカを助けなきゃ……。」

ポーキー

「何だって？あは、あははははは……自分の事より人の心配をするなんて相変わらずだねえ……昔と全然変わらないや。」

ネス

「そりゃ悪かったね……それより、早くそこをどいてよ！」

ポーキー

「嫌なこった！まずはお前を始末しなきゃならないしね……。」

ブワッ！！

次の瞬間、キングの像の本を持ったままの方の手がネスに向かって振り下ろしてくるが……。

ネギ

「雷を纏いて吹きすすべ南洋の嵐……雷の暴風！！」

ズドオooooooooooooッ！！

ポーカー

「う、うおっ!?!」

ズッシーーーーーン!!

ネギが放った雷の攻撃がキングの像の顔面に命中して、キングの像はそのまま後ろの方へ倒れ込んでしまう。

ネギ

「ネス君!大丈夫?」

ネス

「う、うん!また助けてくれてありがとう。」

ネギ

「い、いやあ……………」

ネギはまたネスにお礼を言われて照れてしまう。

ネス

「あ!それより急がないと……………」

ネスは慌てて穴の方へ駆け出していくが……。

ネス

「わっ!?!」

ドスッ!!

ネスは途中で躓いて転んでしまい、手に持っていた『音の石』が穴の中へと入ってしまった。

ネス

「あっ!?!音の石が……。」

ネギ

「穴の中に入っちゃった……。」

カモ

「くっ、万事休すか……。」

リュカ

「ぐわあ――――――!」

ネギ達がこの危機的状況に落胆していると、リュカの叫び声がより一層響き渡る。

ネス

「リュカ!!」

ネギ

「早くリュカ君を助けなきゃ……………」

そう言っつて、ネギは杖を構えながら攻撃を繰り出そうとした時………

~~~~~

地の底から今まで集めた七つの音色が一つ音色として洞窟内に響き渡る。

仮面の男

「!?!」

すると、仮面の男は攻撃の手を止めて辺りを見回す。

のどか

「音色が……地面の下から聞こえてくる。」

木乃香

「それに、この音色……今まで聞いてきた音色が一つに纏まって流れとる感じや……。」

ネス

「やっぱり……前の冒険で音を集めた時も八つの音色が一つの曲として流れたんだ……でも、やっぱり前の曲と全然違う……。」

ネギ

「それにしても、何回聞いても懐かしい感じがする……。」

リュカ

「う……う……。」

ネギ達が地の底から響き渡る音色に聴き入っていると、リュカがゆつくりと立ち上がろうとする。

ポーカー

「痛たたたた……ん？この耳障りな音色は何だ？」

勢い良く立ち上がったキングの像は地の底から響き渡る音色に戸惑いながら辺りを見回す。

仮面の男

「……………」。

仮面の男の視線がリュカに入った時、仮面の男は再びリュカに攻撃を繰り返そうとするが……………。

？

(……………クラウド。)

仮面の男

「!?!」

仮面の男は頭の中から聞こえてきた女性声に驚いて、再び辺りを見回す。

リュカ

「ク、クラウド兄ちゃん？」

リュカはそんな仮面の男の様子を見て、思わず首を傾げる。



?

(クラウドス、聞こえる?.....私はヒナワ、貴方の母親よ。)

仮面の男

「.....母さん?」

リュカ

「えっ!?!」

リュカは仮面の男の一言に耳を疑った。

ヒナワ

(もうこんな事は止めて.....貴方とリュカは掛け買いの無い兄弟なのよ.....私とお父さんの可愛い子供なのよ!)

仮面の男

「.....お母さん.....お父さん.....リュカ.....ううっ!」

仮面の男は突然頭を両手で押ながら苦しみ出す。

リュカ

「に、兄ちゃん……どうしたの？頭が痛いの？」

リュカは恐る恐る仮面の男の方へ歩み寄ろうとするが……。

仮面の男

「……！」

ビビュッ……！

リュカ

「ひ、ひいつ！？」

次の瞬間、仮面の男がリュカに向けて剣を投げ付ける。

ネギ

「あ、危ない……！」

ネス

「リュカ！逃げて……！」

ネギとネスが慌てて駆け出そうとするが……。

ザシュッ!!

全員

「!!」

ポーキー

「あは、あは、あははははは………何これ？」

リュカ

「え?………あっ!？」

リュカが目を開けて後ろの方を向いてみると、そこには先程仮面の男がリュカに向けて投げ付けたハズの剣を額に突き刺されてるキングの像が立っていた。

バリバリバリバリッ!!

ドッカーーーーン!!

ポーキー

「うぎゃーーーっ!!」

すると、剣から大量の電気が放出されて、キングの像は木っ端微塵こっぱみじんに吹き飛んでしまう。

ネギ

「せ、石像が粉々に……………」

カモ

「しかも、ただあの剣が突き刺さって電気が流れただけで……………」

ネス

「そ、相当凄い武器なんだね……………」

ネギ達は仮面の男の剣の威力に啞然となる。

リュカ

「ク、クラウド……………兄ちゃん？」

仮面の男

「……………リュカ。」

ゴトツ！

全員

「!?!」

仮面の男が今まで被っていたヘルメット型の仮面を外して投げ捨てると、茶髪でリュカそっくりの顔の少年・クラウスの顔が露になった。

のどか

「リュ、リュカ君にそっくり……………」

木乃香

「えっと、確かリュカ君の双子のお兄さん……………やったっけ？」

ネギ

「は、はい……………そうなんです……………」

リュカ

「兄ちゃん……………もしかして、僕の事を思い出してくれたの？」

クラウド

「ああ、何もかも全部な……………それから、ゴメンな。」

そう言うと、クラウドはリュカに近付いて優しく抱き締める。

リュカ

（懐かしい……………クラウド兄ちゃんの匂いだ。）

リュカはクラウドに抱き締められたまま、クラウドの匂いを思い出す。

クラウド

「またポーキーなんかには操られて、お前を傷付けてしまった……………リュカ、本当にゴメン。」

リュカ

「ううん、もういいよ……………僕はまたクラウド兄ちゃんとこうして会えただけで嬉しいよ……………」

クラウド

「リュカ……………僕だって、こんな形だけど……………リュカとまた会えて凄く嬉しいさ……………」

リュカ

「兄ちゃん……………ううっ……………」

リュカはクラウドに抱き締められたまま思わず泣き出してしまっ。

クラウド

「ハハ、リュカは相変わらず泣き虫だなあ。」

リュカ

「だ、だってえ……………」

ネス

「……………リュカ、何だか嬉しそうだね。」

ネギ

「そりゃそっだよ……………亡くなった兄との再会なんて、こんなに嬉しい事は無いよ。」

木乃香

「そやなあ……………」

ネギ達はリュカとクラウドの楽しそうな光景に思わず笑みを浮かべるが……………。

クラウド

「っ！？……………リュカ！危ない！！」

ドンツ！！

リュカ

「わあっ！？」

突然クラウドがリュカを強く押し倒す。

ビーーーーーッ！！

クラウド

「ぐわあ……………っ！！」

全員

「！？」

次の瞬間、クラウド目掛けてレーザーらしき光線が命中する。



リュカ

「ク、クラウドス兄ちゃん!!」

クラウドス

「うぐっ……………」

リュカは慌ててクラウドスの方へ駆け寄っていく。

ポーカー

「わは、わは、わははははははははははは！感動的な対面で悪いけど……………  
…流石のポーカー様も完全に怒っちゃったよ〜ん。」

ネギ達が咄嗟的に声がした方を向いてみると、先端が鋭い脚を沢山生やしてるベッドのような形の機械の中で横たわっている老人みたいにヨボヨボな少年が目についた。

カモ

「な、何でい！？あの変な機械の中に入ったガキは……………」

ネス

「……………アレがポーカーさ。」

ネギ

「えっ！？あ、あの子が……………」

ネギ達はポーキーの本来の姿を見て思わず目を疑った。

ポーキー

「ゴホンゴホン……………そうさ、この僕が誰よりもお利口でチャーミングで悪戯っ子なポーキー・ミンチ様です！」

カモ

「……………コイツ、ふざけてるのか？」

ネス

「ポーキーは昔からこういう奴なんだ……………」

ネスはカモの質問に少し呆れながら答える。

ポーキー

「それにしても、僕の可愛い奴隷ロボットが裏切るなんて……………飼  
い犬に手を噛まれたというのはまさにこの事だな……………ハアハア、  
ゼイゼイ。」

ネギ



ネス

「コレ全部、ポーカーのロボットだ……………」

ポーカー

「その通り……………お前達はこのキュートなポーカー様のロボット達に始末されるのさ……………ハアハア。」

ネギ

(い、幾ら何でも数が多過ぎる……………)。

ポーカー

「ゼイゼイ……………それじゃ、一気に掛かれえ……………」

ポーカーの言葉を合図に、ポーカーロボ達は一斉にネギ達の方へ近付いていくが……………。

ポツカー……………ン!!

全員

「!?!」

突如、小さなミサイルが何処からともなく発射されて大半のポーカー

「ロボを破壊していく。」

のどか

「な、何が起こったの……………」

ネス

「い、今は……………まさか……………」

？

「そう、僕が発明したペンシルロケットさ。」

？

「ネス、大丈夫？」

？

「俺達が来たからもう安心していいぞ。」

突然ネギ達の前にピンク色の服に金髪で赤いリボンが特徴の少女と黄緑色の服に同じく金髪で眼鏡を掛けた少年と白い道着に弁髪のような髪型の少年が現れた。

ネギ

「ポーラ！それにジエフとプーまで……………どうして此处に居るの！

「？」

ポーラ

「私達の前に黒いコートのような服を着た女性が現れて、私達を此処へ導いてくれたの。」

ネギ

（く、黒いコート！？）

カモ

（しかも、女性だと？）

ネギとカモはポーラの言葉に耳を傾ける。

ジェフ

「フードを被ってたから顔は確認出来なかったけど……。」

ネス

「じゃあ、どうしてその人が女性だって分かったの？」

プー

「声を聞いて分かったんだよ……あの声はどう聞いても女性だったし、喋り方だって明るい感じだったし……。」

ポーキー

「おーい！このポーキー様を完全に無視するんじゃない！  
！ハアハア、ゼイゼイ……。」

ポーキーは機械の脚部分をバタつかせながら暴れ始める。

プー

「おっと、話は後にしとくか……。」

ジェフ

「そうだね、まずはポーキーを何とかしよう。」

ネス

「みんな、気をつけてね……今のポーキーは強いよ。」

ポーラ

「大丈夫よ……私達が力を合わせれば必ず勝てるわ。」

ポーキー

「あは、あはははは！このポーキー様に勝つなんて絶対に有り得  
無いよ……さあ、可愛い口ボ達よ！どんどん行けえー！  
ーっ！ー！」

そう言うと、残りのポーキーロボ達がネギ達に襲い掛かってくる。

リュカ

「クラウドス兄ちゃん、ちょっとだけ待っててね……………」

そう言うと、リュカはクラウドスをゆっくりと地面に寝かせる。

カモ

「兄貴！来るぜー！」

ネギ

「分かってるよ……………魔法の射手 連弾・雷の三十二矢！」

ドオー…………ツ！！

ネギが放った攻撃で、数十体のポーキーロボが破壊されていく。

ポーラ

「わあ、凄い……………あの子もPSIを持っているのね。」



プー

「あんな強力なPKサンダーは見た事が無い……………」

ネス

（実際は魔法なんだけどね……………」）

ネスはポーラとプーが思わず呟いた言葉を聞いて苦笑いする。

ジェフ

「僕達だって負けられないよ……………ペンシルロケット発射!!」

ビビューーッ!!

ボツカーーーン!!

ジェフが発射させたペンシルロケットもポーキーロボを破壊していき。

プー

「PKサンダー（ガンマ）!!」

バリバリバリッ!!

ポラ

「PKファイアー（オメガ）！！」

ポワァー……ッ！！

ネス

「PKフラッシュ！！」

ブワァー……ッ！！

リュカ

「PKフリーズ！！」

カッチャー……ン！！

ネス・リュカ・ポラ・プーの攻撃系のPSIでポッキーロボを次々と破壊していく。

ポッキー

（マ、マズイ……ロボの数がどんどん減っていく……。）

明日菜

「ネギー！お待たせー！！！」

ポーカーがこの危機的状况に困惑していると、明日菜・刹那・ダスター・クマトラ・ボニーが駆け寄ってくる。

ネギ

「明日菜さん！それに刹那さんや皆さんも……………」。

刹那

「申し訳ありません、思ったたよりも遅くなってしまって……………」。

明日菜

「ところで、あの可笑しいな機械に乗ってる子は誰？」

ダスター

「ま、まさかあいつは……………」。

クマトラ

「ポーカーじゃないか！」

ボニー

「ガールルルル……………」

明日菜はポーキーを見て首を傾げるが、ダスター達は顔色を真っ青に変えてしまう。

ポーキー

「ゴホンゴホン……………全く、次から次へとお邪魔な奴らが出て来ちゃってさあ……………もう完全に怒っちゃったもんね〜!!」

ゴオー……………ツ!!

次の瞬間、ポーキーは頭上に巨大な炎の塊を作り出す。

明日菜

「な、何かとんでもなくデカイ物を作ってるんだけど……………」

ポーキー

「わは、わは、わははははははは!この巨大な火弾かきゅうでお前達を丸焼けの灰だらけにしてやるからね!!」

そう言うと、ポーキーは巨大な炎をネギ達に向けて投げ付けようとするが……………。

ネギ

「そうはさせません！ラス・テル マ・スキル マギステル……  
風の精霊十一人縛鎖となりて敵を捕まえる……魔法の射手・戒め  
の風矢！！」

ズバァー……ッ！！

ポーキー

「な、何コレ？う、動けない……。」

ネギの攻撃を受けたポーキーは動けなくなってしまった。

プー

「ネス、今だ！アレをやるっ……。」

ネス

「アレ……ああ！分かった！！」

クマトラ

「リュカ、俺達もやるっぜ！」

リュカ

「うんー!!」

ネス・プー・リュカ・クマトラの四人はポーキーの前に立ち塞がる。

ポーキー

「い、一体何をするつもりだ……。」「

ネス

「いくよ、せーの……。」「

ネス&プー&リュカ&クマトラ

「PKスターストーム!!!」

ズドオーーーーーーン!!!

ポーキー

「うぎゃーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

ネス達が技の名前を一齐に発声すると、無数の流れ星がポーキー目掛けて落下して、全ての流れ星がポーキーに命中する。

カモ

「ス、スゲエ……………」

ネギ

「あ、あんなに沢山の星を落下させるなんて……………」

のどか

「ビ、ビツクリです……………」

ネギー一行は『PKスターストーム』の威力にただ唾然とする。

ポーキー

「ゴ、ゴホンゴホン……………な、何て事だ……………このポーキー様がまた……………やられるとは……………ゼエゼエ……………」

ネス

「ポーキー、もう諦めて降参しなよ……………その機械だって、もう壊れて動かないだろ？」

ポーキー

「降参？このポーキー様が？……………あは、あは、あはははははははは！」

ポーキーはまるで開き直ったかのように笑い出す。

明日菜

「ちよつと！何がそんなに可笑しいのよ!？」

ポーキー

「降参するのはお前達の方さ………何故なら、この洞窟内には強力な時限爆弾を仕掛けてあるからね。」

ヒモヘビ

「な、何だつてえ!？」

全員ポーキーの爆弾発言に耳を疑った。

アナウンス

「爆発マデ後一分。」

ダスター

「た、たったの一分だと!？」

ポーキー

「ハアハア………こんな事もあるつかと前もって仕掛けてあったのさ。」



クマトラ

「コイツ、俺達を纏めて吹き飛ばす気が……。」

ネス

「でも、そしたらポーカーはどうするんだ？機械が壊れてるから逃げられないんじゃない……。」

ポーカー

「あははははははは！自分の心配より人の心配かい？……心配！無用！僕にはコレがあるからね。」

ドスン！！

突然ポーカーの前に巨大な丸っこい機械が落下してくる。

ジエフ

「そ、その機械はもしかして……。」

リュカ

「『絶対安全カプセル』！？」

ポーカー

「そうさ！僕はこの機械の中へ入って難を逃れるって寸法さ……だから、爆発に巻き込まれるのはお前達だけって訳さ。」

そう言うと、ポーカーを乗せてる機械がゆっくりと『絶対安全カプセル』の方へ近寄っていく。

ジエフ

「ま、待て！その中に入ったら……。」

ポーカー

「じゃあね！ネス……もしこの状況で生きて帰れたら、いつかまた遊ぼうね……ハアハア。」

ネス

「ポ、ポーカー……！」

ネスはポーカーの方へ駆け出していくが……。

ガツシャー……ン……！！

『絶対安全カプセル』のフタが開き、ポーカーはその中へ入ったと同時にフタが閉じてしまった。

ポーラ

「は、入っちゃった……………」

明日菜

「……………ねえ、この機械って本当に安全なの？」

ジェフ

「うん……………確かに、あの機械に入れば外からの攻撃を全て防いでくれるんだけど……………」

刹那

「けど？」

ジェフ

「一度あの中に入ったら、二度外へ出られないんだ……………」

木乃香

「えっ！？ほなら、あの子は……………」

プー

「ポーキーは二度外に出られないって事が……………」

のどか

「……………何だか、可哀相ですね。」

ネス

「……………ポーキー。」

全員悲しげな表情で、ポーキーが中に入った『絶対安全カプセル』を見つめる。

アナウンス

「爆発マデ後三十秒。」

ダスター

「しまった！この洞窟は爆発するんだった！！」

クマトラ

「みんな！レポートで脱出するから、急いで手を繋ぎ合っただ！！」

ネギ

「は、はい！！」

クマトラの言葉を合図に、全員が輪の形になるように手を繋ぎ合わ

せる。

リュカ

「あ！待って……………クラウド兄ちゃんも一緒に連れてかないと……………」

そう言うと、リュカは繋いだ手を離してクラウドが倒れている方へ駆け出していく。

ダスター

「リュカ！急げー！」

リュカ

「わ、分かってる……………クラウド兄ちゃん、急いで此処から脱出しよう。」

リュカはクラウドの起こして肩を抱き抱えながらネギ達の方へ歩み寄っていく。

アナウンス

「爆発マデ後二十秒。」

クラウド

「リュ、リュカ……………僕の事はいいから……………早くみんなで脱出するんだ……………」

リュカ

「嫌だ！兄ちゃんを置いて行けないよ！！」

クラウド

「どうせ僕はこのまま死ぬんだ……………だから早く……………僕を置いて逃げる……………」

リュカ

「そんな事言わないで！クラウド兄ちゃんも一緒に脱出するんだから！！」

クラウド

(……………リュカ。)

クラウドはリュカの言葉を聞いて、目から一筋の涙を流す。

アナウンス

「爆発マデ後十秒。」

クマトラ

「リュカ！早くー！！」

リュカ

「も、もうちよつとだから……………」

クラウド

「……………」

ドンッ！！

リュカ

「うわっ！？」

突然クラウドがリュカの背中を強く押し出す。

リュカ

「に、兄ちゃん！？」

ダスター

「ほらー！早く手を……………」

クマトラ

「急げ!!」

リユカはクラウスの方を向こうとしたが、ダスターとクマトラが急いでリユカの手を掴む。

クラウス

「リユカ、さようなら……………お父さんと仲良く暮らせよ……………」

リユカ

「い、嫌だ……………兄ちゃん!クラウス兄ちゃん!!」

アナウンス

「五……………四……………三……………二……………一……………」

クマトラ

「行くぞ!テレポート!!」

シュン!!

アナウンス

「……………0。」



ボツカー——————ん！！

全員がレポートでその場から消えてアナウンスのカウントが全て言い終えたと同時に、地下洞窟に設置された時限爆弾が大爆発を起こして、地上にある『ニューポークシティ』も全て崩壊されていくのであった……………。

くヒナワとクラウスの墓前く

フロント

(……………ヒナワ、どうかリユカ達を見守ってくれ。)

フロントはヒナワとクラウスの墓の前で手を合わせながら祈っていた。

パッ！！

ネギ

「わあっ!?!」

フロント

「!?!」

フロントの背後にテレポートしたネギ達が見れる。

明日菜

「……あ、あれ? 私達、助かったの?」

刹那

「そ、そのようですね……。」

木乃香&のどか

「良かったあ〜!」

ネギー一行は自分達が無事だと理解して、ホッと胸を撫で下ろす。

フロント

「な、何だ……誰かと思ったらリユカ達じゃないか……。」

フリントは胸を押さえながら驚いたような表情を浮かべる。

ボニー

「ワンワン！」

フリント

「おお、ボニー！よく帰って来たな。」

ボニーが嬉しそうに駆け寄ると、フリントはボニーの頭を撫で回す。

リュカ

「うっ……うっ……」。

フリント

「ん？リュカ、どうしたんだ？」

リュカ

「お、お父さん……うわぁー……ん……」

リュカは大きな声で泣き出しながらフリントに抱き着く。

フリント

「い、一体何があったんだ？」

ネス

「じ、実は……………」

〈数分後〉

フロントはネス達から全て聞いて、リュカと二人っきりでヒナワとクラウドの墓前でしゃがみ込んでいた。

フロント

「……………そうか、クラウドはお前達を助ける為に自らを犠牲にしたのか。」

リュカ

「う、うん……………僕、クラウド兄ちゃんを助ける事が出来なかったよ……………」

フロント

「そんな事は無いぞ……お前はちゃんとクラウドを助けたじゃないか。」

リユカ

「えっ？」

リユカはフロントの言葉に耳を傾ける。

フロント

「お前はクラウドの洗脳を解いてあげたじゃないか……きっと、クラウドはそれだけでも嬉しかったハズさ。」

リユカ

「で、でも……クラウド兄ちゃんは……。」

フロント

「リユカ、クラウドは死んだ訳じゃない……天国に居る母さんの所に帰っただけさ。」

リユカ

「お父さん……ありがとう！少しだけ元気が出て来たよ。」

フリント

「そうか、それは良かった……………」

リュカとフリントは思わず笑顔を浮かべてしまう。

フリント

「それじゃ、母さんにクラウドが帰って来た事を報告しよう。」

リュカ

「うん！」

リュカとフリントは手を合わせながらヒナワとクラウドの墓を見つめる。

リュカ

（……………お母さん、クラウド兄ちゃんと天国で仲良く暮らしてね……………僕もお父さんとボニーの三人で楽しく暮らすよ……………）

リュカは目を閉じて手を合わせたまま、天国に居るヒナワとクラウドに思いを伝える。

ネス

「……………リュカ、大丈夫かな？」

ネス達はリュカとフリントより少し離れた場所で見守っていた。

ダスター

「きつと大丈夫さ……………な？クマトラ。」

クマトラ

「ああ、リュカなら絶対に乗り越えられるさ！」

ボニー

「ワン！」

ネス

「……………うん、そうだね！」

ネスはダスター達の言葉に安心したかのように自然と笑顔になる。

ポーラ

「……………ねえ、ネス。」

ネス

「ん？何？」

ポーラ

「あの子がいつもネスが話してたリュカなの？」

ネス

「うん、そうだよ。」

ジェフ

「そうか、彼がリュカか……………」

プー

「ネス、後でリュカに俺達の事を紹介してくれよ。」

ネス

「ああ、勿論だよ！」

ネスは楽しそうにポーラ達と話を続ける。

明日菜

「……………ネギ、私達もそろそろ行くっか。」



ネギ

「そうですね……僕達、何となくお邪魔みたいですし……。」

刹那

「いえ、それは無いと思いますが……。」

そう言いながら、ネギー行はその場から静かに立ち去ろうとするが……。

ネス

「あ、待って！」

のどか

「え？」

ネギー行はネスに呼び止められて、その場で立ち止まってしまっ。

ネス

「もう行っちゃうんだね……。」

ネギ

「うん……僕達には、やらなければならない事があるからね……。」

ネス

「そっか……………またいつか会えるよね？」

木乃香

「勿論や……………きっといつか会えるよ。」

ネス

「そっだね……………それじゃ、またね！」

ネギ

「リュカ君にも宜しくって伝えてね！」

こうして、ネギ一行とネス達はお互いに別れを惜しみながら、手を大きく振って別れていくのであった……………。

「家族……………か。」

ネギ達が居る場所よりかなり離れた場所から、黒いコートのような服を着て白っぽいクリーム色の内巻きカールのロングヘアの少女が立っていた。

？

「リリー、どうした？……………ひょっとして、また昔の事を思い出したのか？」

リリーという名の少女の肩の上から、薔薇の花を背負わせた全身トゲだらけの小さなドラゴンが現れる。

リリー

「ええ、さつき島中に流れていた音色を聞いてたらちよつとね……………」

？

「そうか……………実は俺もあの音色を聞いてたら、初めてリリーと出会った時の事を思い出しちゃった……………」

リリー

「へえ、がばねも昔の事を思い出しちゃったんだ……………本当に不思議な音色ね。」

リリーはがばねという名のドラゴンの言葉を聞いて途方にくれてしまふ。

がばね

「……………ところで、旦那は何処に行っちゃったんだ？」

リリー

「ああ、あの人はね……………あいつに呼び出されたから、あそこへ行って来るんですって。」

がばね

「そうか、ついに奴から呼び出されちゃったか……………」

がばねは少し心配そうな表情を浮かべる。

リリー

「心配ないって、あの人だったら、きっと上手く言いくるめて帰って来るわよ。」

がばね

「そつだといいたがな……………」

リリー

「……………さて、そろそろあたし達もこの世界から出ましょ。」

がばね

「ああ、そつだな……………リリー、次に俺達が行く世界は分かっているだろうか？」

リリー

「当たり前じゃない！ちゃんとあの人が聞いたんだから……………」。

がばね

「よし、それじゃ早速行こうぜ！」

リリー

「ええ」

そつ言つと、リリーとがばねはその場から立ち去ってくのであった……………。

## 第六十三話、最愛の兄との別れ……（後書き）

ネギ達はネスとリュカ達の世界を後にするのであった……。

因みに、最後に登場したりリー&がばねというキャラは、myuーmyuさんという人がリアルルイージさんという人が書いてる小説に登場させる為に考えたオリキャラです。

自分の小説の感想にもmさんと共にちよくちよく登場してるので、この二人組を非常に気に入った自分はmさんにこの小説に登場させていいかと頼んだところ、快く承諾して下さいだったので登場させました。

なお、この二人組について詳しく知りたい人はmさんとリアルルイージさんの小説と感想を読んでみて下さい！

今回は『ファイアーエムブレム』偏です！

第六十四話、傭兵団の若き団長（前書き）

ネス&リュカの世界から帰って来たネギー行が次に行く世界は？

第六十四話 傭兵団の若き団長

（大乱闘の館）

ネギー一行はネス達の世界から、いつもように館へと帰って来た。

ネギ

「……………只今帰りました。」

マスターハンド

「お帰り……………ん？何か気持ちが沈んでるようだが……………」

明日菜

「うん、ちょっと色々あってね……………」

マスターハンド

「そうか……………今日も一日ゆっくり休みなさい。」

ネギー一行

「は〜い……………」

ネギー一行は元気の無い返事をする、自分達の部屋へと戻っていく。



く???.???

全体真っ黒で何も見えない部屋で、二つの影が何かを話し合っていた。

?

「……………どうだ、種は撒き終えたか？」

?

「はい、順調でいじめます……………」。

?

「そうか……………ところで、少し気になる噂を耳にしたのだが……………」。

?

「何でじよひつ？」

「お前、最近仲間を作ったそうだな？」

「……はい。」

「何故だ？お前一人でも仕事は出来るだろうに……。」

「いえ、この仕事は幾ら私でも荷が重過ぎます……ですから、やむを得ず私は優秀な人材を見つけて協力させているのです。」

「ほお、お前にそんな感情がな……まあいい、我々の計画がより早く進むのであれば問題無い。」

「お許しを頂き感謝致します……。」

「……ところで、そいつは使えるのか？」

「はい、実力もそれなりにあります。」  
?

「そうか……………もしそいつが使い物にならなくなったらどうするつもりだ？」  
?

「……………迷う事無く始末致します。」  
?

「うむ、それでいい……………もう下がっていいぞ。」  
?

「はい……………では、失礼致しました。」  
?

その言ひや、一つの影がその場から姿を消していく。

「……………フン、仲間など必要無いと思っがな。」  
?

「翌日」

早朝、ネギー一行はいつものように中庭に集合していた。

ネギー

「皆さん、今日も頑張りましょうね！」

明日菜

「はいはい。」

マスターハンド

「さて、今回は剣の形したバッチをマルス・ロイ・アイクの三人に渡してほしい。」

刹那

「マルスさんとロイさんとアイクさんですね……分りました。」

木乃香

「ほなら、早速出発しよ〜！」

そう言いつと、ネギー行はいつものようにワープ土管へと入っていく。

くクリミア王国・とある森の花畑く

ネギー行は湖を見渡せる花畑へとやって来た。

のどか

「わあ〜、綺麗なお花畑ですね。」

木乃香

「ホンマやなあ……………それに、綺麗な湖もあるえ〜。」

木乃香とのどかは綺麗な湖と自然豊かな花畑に見取れてしまう。

カモ

「でも、こんな場所じゃ情報収集なんて出来やしねえな。」

ネギ

「そうだね、誰か居ないかなあ……………」。

明日菜

「あれ？あそこに誰か居るよ？」

明日菜の指さす方を見ると、茶髪でショートヘアの少女が鼻歌を歌いながら花を摘んでいた。

カモ

「お！丁度良いところで人が居たな。」

ネギ

「あの人にちょっと聞いてみましょう。」

そう言つと、ネギ一行は少女の方へ歩み寄っていく。

？

「  
} }  
} }  
} }  
」

ネギ

「あの、すみません……。」

？

「!?!」

少女は背後からネギに声を掛けられて、驚きながらネギ達の方を向く。

？

「ビ、ビックリした……ごめんなさい、誰も居ないと思って……。」

ネギ

「い、いえ……僕の方こそ急に声を掛けてすみません……。」

ネギは申し訳なさそうな表情で少女に謝る。

？

「ところで、私に何かご用ですか?」

ネギ

「は、はい……………僕達、人捜しをしてるんですけど……………マルスさんとロイさんとアイクさんという人をご存知ありませんか？」

？

「アイク？……………ひょっとして、お兄ちゃんの知り合いですか？」

刹那

「アイクさんをご存知なんですか？」

？

「ええ……………だって、アイクは私のお兄ちゃんなんです。」

木乃香

「へえ、そうなんや……………ほなら、そのお兄さんに会わせてくれん？」

？

「いいですよ……………それじゃ、私に付いて来て下さい。」

そう言うと、少女は立ち上がって歩き始める。

ネギ



「あの、ところで……………貴女のお名前は？」

？

「あ！忘れてた……………私の名前はミストです。」

ネギ

「ミストさんですね……………僕はネギ・スプリングフィールドです。」

明日菜

「私は神楽坂明日菜よ。」

木乃香

「ウチは近衛木乃香や。」

刹那

「桜咲刹那です。」

のどか

「み、宮崎のどかです……………宜しくお願いします。」

ミスト

「こちらこそ宜しくね。」

ネギー一行が自己紹介を終えると、ミストと名乗る少女の後を付いて行く。

「グレイル傭兵団の砦」

ネギー一行はミストの案内で、小さな砦と二つの小屋が建てられている場所へとやって来た。

ネギー

「此処にアイクさんが居るんですか？」

ミスト

「そうよ……実は此処、私達傭兵団の本拠地なの。」

刹那

「傭兵団……ですか？」

刹那はミストの説明に耳を傾ける。

明日菜

「……………ネギ、傭兵って何？」

ネギ

「傭兵というのは、金銭等の利益で雇われたりして直接に利害関係の無い戦争に参加する兵の集団です。」

明日菜

「うーん……………分かったような分からないような……………」

明日菜はネギの説明を理解出来ずに、思わず首を傾げる。

木乃香

「要するに、お金とかで雇われて自分達とは全く関係無い戦争に参加する人達の事やね？」

刹那

「……………まあ、簡単に言えばそういう事ですね。」

刹那は木乃香の言葉を聞いて苦笑いする。

ミスト

「でも、うちの団は少し変わってるんだ………貧しい人からはお金を取らないし、高額な報酬を貰っても気に入らない依頼は絶対に引き受けないの。」

明日菜

「へえ、何かカッコイイわね。」

カモ

「でも、それじゃ商売にならねえよな。」

ネギ

「カ、カモ君！」

ネギは慌ててカモの口を塞ぐ。

？

「あ、ミストちゃん！お帰り〜〜!!」

すると、緑色の短髪で小さな弓矢を持った少年がミストの方へ駆け寄って来る。

ミスト

「ヨファ、ただいま。」

ヨファ

「あれ？その人達は？」

ミスト

「お客様よ………ところで、お兄ちゃんが今何処に居るか分かる？」

ヨファ

「アイクさんだったら、向こうでボーレと訓練してたよ。」

そう言いつつ、ヨファという名の少年は皆の方を指さす。

ミスト

「そう、ありがとう。」

ミストはヨファにお礼を言うと、ネギー一行を連れて皆の方へと歩き出す。

のどか

「あ、あの………もしかして、あの子も傭兵団の一員なんですか？」

ミスト

「うん、ヨファも私達の立派な仲間よ。」

木乃香

「へえ、まだ小さいのに凄いやな。」

ネギ

「それに、歳も僕と同じ位ですね……………」

ネギ一行がヨファに感心しながら歩いている……………」

?

「とっ！はっ！」

?

「おりゃー！」

砦の前で大きな剣を持った赤いマントを羽織った青年と斧を持った体格の良い男性が互いの武器をぶつけ合っていた。

ミスト

「あ！居た居た……お兄ちゃん！！」

？

「ん？ミストか……。」

剣を持った方の青年がミストの方を見た瞬間……。

？

「隙あり！！」

斧を持った方の男性が素早く攻撃を仕掛ける。

？

「おっと！」

ところが、剣を持った青年が素早い動きで斧を持った男性の攻撃を難無く避ける。

？

「ありゃ~~~~~！？」

バッターーーーン！！

斧を持った男性はそのまま転んで、地面に叩き付けられてしまう。

ミスト

「あゝあ、ボーレったらまたお兄ちゃんにやられちゃった。」

ボーレ

「ち、違う！ちょっと油断しただけだ！」

ボーレという名の男性はミストの言葉に動揺する。

？

「それよりミスト、後ろに居る連中は誰だ？」

ミスト

「えっとね、お兄ちゃんに会いたって言ってたお客様だよ。」

？

「俺に客だって？」

剣を持った青年はミストの言葉に耳を傾ける。



ネギ

「は、初めまして……………失礼ですが、貴方がアイクさんですね？」

アイク

「ああ、俺が『グレイル傭兵団』団長のアイクだ。」

明日菜

「あれ？アイクさんが団長なら、何で団の名前が『グレイル傭兵団』なの？」

アイク

「グレイルというのは俺の親父の名前だ……………俺は死んだ親父の後を継いで団長をやっている。」

明日

「そ、そうだったの……………変な事を聞いてごめんなさい。」

明日菜は申し訳なさそうな感じでアイクに謝る。

アイク

「いや、別にいいんだ……………そんな事より、俺に何か話があるんじゃないのか？」

ネギ

「じ、実は……………」

アイク

「待った……………此処じゃ話し難いだろうから、場所を変えて話そう。」

「

そう言つて、アイクはネギ一行を皆の中へ案内しようとするが……………。

ポーレ

「お、おいおい！ちょっと待てよ……………まだ俺との訓練の途中だぞ！？」

アイク

「仕方ないだろ、ポーレ……………訓練だったら他の奴とやってくれ。」

ポーレ

「ちえっ、分かったよ……………」

ポーレは少し不満げな表情を浮かべながら、その場から立ち去っていく。

アイク

「ああ、すまない……………それじゃ、俺に付いて来てくれ。」

ネギ

「は、はい……………」

ネギー一行はアイクに連れられて砦の中へと入っていく。

〈グレイル傭兵団本部・応接室〉

ネギー一行はアイクに連れられて、砦の中の応接室へとやって来た。

アイク

「……………さて、早速聞かせてもらおうか？」

ネギ

「はい、実は僕達……………」

ネギはこれまでの経緯をアイクに説明した。

ネギ

「……………という訳なんです、信じてもらえますか？」

アイク

「……………正直言って半信半疑だが、アンタ達が嘘を言っているようには見えないし……………それに、その見慣れない服装を見たら信じるしかないな。」

ネギ

「ありがとうございます……………それから、このバッチもお渡しします。」

そう言うと、ネギはアイクにバッチを手渡す。

アイク

「確かに受け取った。」

刹那

「それから、アイクさんに一つ聞きたい事があるのですが……………」

アイク

「ん？何だ？」

アイク

「私達、マルスさんとロイさんを捜しているのですが……お二人が何処に居るかご存知ですか？」

アイク

「マルスとロイに会いたいのか……それはかなり難しいな。」

のどか

「え？どういう事ですか？」

アイク

「そもそも、その二人はこの国……いや、この『テリウス大陸』には居ないんだ。」

ネギー一行

「えっ！？」

ネギー一行はアイクの発言に耳を疑った。

木乃香

「ほ、ほなら……二人は何処に居るん？」

アイク

「うむ、ちょっとコレを見てくれ……。」

そう言うと、アイクは沢山の大陸が描かれた世界地図を取り出す。

アイク

「此処が俺達が居る『テリウス大陸』で……此処がマルスが居る『アカネイア大陸』で、そしてロイが居る『エレブ大陸』が此処だ。」

アイクは地図に記されてる地形を指をさしながらネギ達に説明する。

明日菜

「え！？その二つの大陸って、此処からこんなに離れてるの？」

アイク

「そうだ、俺も初めて知った時は思わず目を疑った……。」

ネギ

「となると、船か何かで渡るしかないですね。」

アイク

「それはいい考えだが……アンタ達は船を買える程のお金があるのか？」

ネギ

「お、お金……ですか？」

ネギはアイクの言葉を聞いて思わず固まってしまつた。

カモ

「兄貴、どうするんだ？」

ネギ

「ど、どうするって言われても……。」

アイク

「うむ、何とかしてやりたいが……最近仕事の依頼が少ないから、こちらにも船を買える金なんて無いしな……。」

ネギ一行とアイクがどうするか深く考え込んでいると……。

トントントン！

？

「アイク、ちょっといい？」

アイク

「ん？その声はティアマトか……………ああ、入っていいぞ。」

ガチャ

扉が開かれると、長い赤髪の女性が入ってくる。

ティアマト

「あら？先客がいらしてたのね……………」

ネギ

「あ、いえ……………どうぞお構いなく……………」

アイク

「すまない、少しだけ待っていてくれ……………ティアマト、どうかしたのか？」



ティアマト

「それが、仕事の依頼が二つも来たのよ。」

アイク

「一気に二つもか……それで、仕事の内容は？」

ティアマト

「一つ目は、『港町タルマ』に出没したラグズとの共存を拒む団体を一人残らず捕まえてほしいという依頼よ。」

アイク

「まだそんな事を思ってる奴が居るのか……それで、残りの依頼は？」

ティアマト

「二つ目の依頼は……エリンシア女王様からよ。」

アイク

「何だつて？」

アイクはティアマトの言葉に思わず耳を傾ける。

ティアマト

「はい、王女様から貴方宛の手紙よ。」

そう言うと、ティアマトはアイクに一通の手紙を渡す。

アイク

「あ、ありがとう……えっと、何々……」

拝啓

アイク様

それと傭兵団の皆様、お元気ですか？

私は一刻も早く『クリミア王国』を再興させる為に日々努力してま  
す。

ところで、非常に申し上げ難いのですが、アイク様を含む傭兵団の  
皆様にお願ひがあります。

『アカネイア大陸』の東部に位置する『タリス王国』という国の王  
女は私の古い友人なのですが、その彼女から私宛に手紙が届いたの  
です。

手紙の内容によると、同君連合した『アリティア王国』という国が  
何者かによって略奪されてしまったようなのです。

アリティア軍とタリス軍が一致団結して敵陣に攻め込んだのですが、敵の勢力があまりにも強力で苦戦しているらしいのです。

それで彼女は古い友人である私に戦力になる者達をこちらに派遣してほしいという内容の手紙を送ってきたのです。そこで、皆様にお願ひがあります……………私の代わりに『アカネィア大陸』へ行つて、

『アリティア王国』を救つて頂けないでしょうか？

勿論、私が行けば済む話なのですが……………私は今やこの『クリミア王国』を治めている身分ですので、この国を離れる訳にはいかないのです。

もしも、こんな無茶な依頼を引き受けて下さるのでしたら、今日中に手紙を送つて返事をお聞かせ下さい。

それでは、返事をお待ちしております……………。

エリンシアより

……………成程。」

明日菜

「……………ねえネギ、さっきの手紙で書かれてた『アカネィア大陸』ってまさか……………」

ネギ

「ええ、マルスさんが居るとおっしゃってた大陸ですね……………」

アイク

「それだけじゃない……………マルスは敵に略奪された『アリティア王国』の王子なんだ。」

ネギ一行

「ええっ!?!」

ネギ一行はアイクの発言に耳を疑った。

ティアマト

「どうするの? 一つ目の依頼はともかく、二つ目の依頼はかなり大変だと思っつわよ?」

アイク

「勿論、どちらの依頼も引き受けるぞ。」

ティアマト

「やっぱりね……………アイクなら、そう言っと思っただわ。」

ティアマトはアイクの答えを聞いて思わず微笑む。

アイク

「ティアマト、後でエリンシアに返事の手紙を書いて送ってほしいのだが……………」

ティアマト

「ええ、分かったわ。」

ネギ

「あ、あの……………」

アイク

「ん？」

ネギ

「ぼ、僕達もその『アリティア王国』へ連れてって下さい！」

アイク&ティアマト

「!?!」

アイクとティアマトは突拍子の無いネギの発言に耳を疑った。

ティアマト

「ちょ、ちょっと君……………それ本気で言ってるの?」

ネギ

「はい!お願いします!」

ネギ以外全員

「お願いします!」

ネギ一行はアイクとティアマトに向かって深く頭を下げる。

アイク

「マルスが心配なのは分かるが……………アンタ達を戦場となっている場所へ連れていく訳には……………」

ティアマト

「そつよ……………それに、私達は遊びに行くんじゃないよ。闘いに行くの……………だから、下手すれば死ぬかもしれないのよ。」

カモ

「ちょっと待った!兄貴達を甘く見てもらっちゃあ困るせ!」

ネギ

(カ、カモ君!?)

ネギは突然喋り出したカモに驚愕する。

アイク

「な、何だ？イタチが喋ってるぞ……………」

カモ

「イタチじゃねえっつーの！俺たちはオコジヨ妖精でい!!」

カモは啞然とした表情で見つめるアイクに向かって怒り出す。

ネギ

「カモ君、少し落ち着いてよ……………」

カモ

「おっと、そうだった……………実はな、こつ見えてもネギの兄貴は魔法使いなんだぜ？」

アイク

「魔法使い？」

ティアマト

「それって、魔導士の事かしら？」

カモ

「ま、まあ……………そう呼ばれたりもするな……………」

カモはティアマトの質問に一瞬言葉を詰まらせてしまう。

アイク

「それじゃ、他の連中も……………」

カモ

「おうよ！姐さんと刹那姉さんは剣を使って敵を薙ぎ倒すし、木乃香姉さんは負傷した相手を回復してくれるし、のどか嬢ちゃんなんか相手を思考を読み取る事が出来るんだぜ！」

明日菜

「ちょ、ちょっと言い方がオーバーなんじゃない？」

明日菜達はカモの少し大袈裟な発言に困惑する。

アイク



「……………よし、だったらいいよ。」

ネギ

「な、何でしょうか？」

アイク

「さっきティアマトが言った『港町タルマ』での仕事をアンタ達にも手伝ってもらって、その腕を見て俺達と同行させるかどうか決めさせてもらう。」

刹那

「成程、私達を試すって訳ですね……………」

アイク

「そういう事だ……………ティアマト、それでいいか？」

ティアマト

「そうね、私もそれでいいと思うわ。」

ネギ

「……………分かりました！僕達もアイクさん達に同行します！..」

アイク

「そうか……じゃあ、後五分で出発するから準備しておけよ。」

そう言うと、アイクとティアマトはその場から立ち去っていく。

カモ

「兄貴、こりゃ気合い入れて掛からねえとな。」

ネギ

「そうだね、折角のチャンスだし気を抜けられないよ。」

明日菜

「みんな！気を引き締めて行くわよ！！」

木乃香

「おっっ！」

刹那

「はい！全力で行かせて頂きます！」

のどか

「わ、私も精一杯頑張ります！」

こうして、ネギー行はアイク達に認められるようにいつも以上に  
気合を入れるのであった……。

## 第六十四話〈傭兵団の若き団長〉（後書き）

果たして、ネギー一行はアイクに認められるのだろうか？

最後にお知らせです！

ファイアーエムブレムの『暗黒竜と光の剣』・『封印の剣』・『蒼炎の軌跡』に登場したキャラの中でこの小説に登場させたいキャラがいたら感想欄で書いて下さい！

何せ、ファイアーエムブレムに登場するキャラは多過ぎるので困ってます（汗）………かと言って、リクエストされたキャラが必ずしも登場する訳ではありませんのでご了承下さい。

第六十五話〈ラグズとの共存を拒む者達〉（前書き）

ネギー行はアイクに認めてもらえる為にある依頼を受けるのだが……。

第六十五話〈ラグズとの共存を拒む者達〉

〈港町タルマ〉

ネギー一行はアイクとティアマトと共に小さな港町へとやって来た。

ネギ

「……………此処が依頼された場所ですか。」

アイク

「ああ、そつだ。」

刹那

「ところで、その依頼の内容というのは？」

アイク

「そう言えば、まだ話してなかったな……………簡単に言えば、ラグズとの共存を拒んでいる団体を全員取り押さえればいいんだ。」

木乃香

「ラグズ？」

木乃香を含む全員がアイクの言葉に耳を傾ける。

アイク

「まず、この『テリウス大陸』にはラグズとベオクという二種類の種族が存在している……ベオクというのは俺達人間の別の名称で、ラグズは獣の特徴を持っている種族なんだ。」

明日菜

「獣って事は、ラグズの人達は動物みたいな姿をしているの？」

アイク

「いや、普段は人の姿で生活をしている……ラグズは必要な時だけ獣の姿になるんだ。」

のどか

「そうなんですか……ところで、さっきアイクさんがおっしゃってたラグズとの共存を拒む団体というのは？」

アイク

「昔はラグズを半獣はんじゅうと読んで差別していたんだが、一年ぐらい前から差別が無くなってラグズとベオクは共存するようになった……ところが、困った事に未だラグズを差別する奴らが後を断たないというのが今の現状なんだ。」

木乃香

「何で、差別なんかするんやろ……………」

刹那

「恐らく、自分達とは見た目とかが全く違う存在とは一緒に共存するのに抵抗感があるのでしょうか……………」

ネギ

(……………刹那さん。)

ネギは思い詰めたような表情で語る刹那に気に掛ける。

ティアマト

「みんな、お待ちせ。」

すると、遠くからティアマトがアイク達の元へ駆け寄ってくる。

アイク

「ティアマト、状況はどうなってる？」

ティアマト

「思ってたよりも悪いわ……………依頼主の話によると、もう五日間も港を占拠してるみたいよ。」



明日菜

「五日間も!?!」

明日菜を含むネギー一行はティアマトの説明に思わず耳を疑った。

アイク

「それで、奴らは何を要求している?」

ティアマト

「それがね……『今すぐ半獣共と共存する制度を取り止める!この要求に答えぬ限り我々はこの港から一生離れない!』なんて言うてるわ。」

ネギ

「……………かなり無茶な要求ですね。」

アイク

「全く、どういっつもりなんだか……………」

ネギー一行とアイクは無茶な要求に呆れ返る。

ティアマト

「とにかく、今は自警団じけいだんの皆さんが交渉中だから港の方へ行ってみましょう。」

そう言うと、全員港の方へ駆け出していく。

〈タルマ・港方面〉

自警団長

「『反ラグズ共存団体』の皆さん！今すぐ船から降りて大人しく降伏しなさい！！」

自警団と呼ばれた団体が大きな船を占拠している『反ラグズ共存団体』に降伏するように呼び掛けていた。

反ラグズ団員 A

「黙れ！こんな馬鹿げた制度を早く放棄しろと言ってるんだ！！」

アイク

「……………どうやら、話し合いで解決しそうにないな。」

自警団長

「あ！貴方はグレイル傭兵団の……………皆！アイクさんに敬礼！！」

自警団全員

「はっ！！」

アイクの顔を見た途端、自警団の団員達はアイクに向かって敬礼する。

ネギ

「……………す、凄く尊敬されてますね。」

ティアマト

「一年ぐらい前に『テイン王国』という国の国王に侵略されたこの『クリミア王国』を私達を取り戻した事があったの……………それ以来、私達傭兵団はこの大陸全土で知らない者は居ない位有名になったのよ。」

のどか

「そ、そうだったんですか……………」

ネギー一行はアイクに向けて敬礼をしている自警団達を見つめながら  
啞然とする。

アイク

「……………とにかく、後は俺達に任せてくれ。」

自警団長

「はい！申し訳ありませんが、宜しくお願いします！！！」

そう言うと、自警団長は再びアイクに向けて敬礼をする。

アイク

「ティアマト、此処は例の作戦で行くか？」

ティアマト

「そうね、特に問題は無いでしょう。」

刹那

「例の作戦とは何ですか？」

アイク

「最初にティアマトが先陣を務めて、ある程度数が減ったら俺達で一気に奴らを抑えらるんだ。」

ネギ

「成程、それはいい作戦ですね。」

ティアマト

「それじゃ、私が合図したらみんなで一気に突っ込んで来てね……」

そう言うと、ティアマトは斧のような武器を掲げなら敵が独占して船の梯子を渡っていく。

反ラグズ団員A

「おっ！？女が攻めて来たぞ！！」

反ラグズ団員B

「たかが女一人で怯むな！俺達の邪魔する奴は誰であろうと根絶やしにするんだ！！」

反ラグズ団員達

「おおーーーーっ！！」

『反ラグズ共存団体』の団員達の掛け声と共に、一気に船の中が騒がしくなる。

木乃香

「……………あの人、一人で大丈夫やるか？」

アイク

「心配はいらない、ティアマトはグレイル傭兵団の副団長を務めるだけあって相当強いんだ。」

明日菜

「へえ、ティアマトさんって副団長なんだ。」

のどか

「どつりですっかりしてますよね……………」。

ネギー一行がティアマトに感心していると……………。

ティアマト

「みんな！来ていいわよ！…！」

アイク

「おっと、どつりやらお呼びのようだ……………よし！一気に行くぞ！…！」

ネギ

「は、はい！」

ネギー行とアイクはティアマトの合図をきっかけに、一斉に船の梯子を渡って行く。

反ラグズ団員C

「こ、この女……………かなり強いぞ。」

反ラグズ団員D

「えーい！どんどん掛かれえー！！！」

反ラグズ団員E

「……………ん？あそこにガキが居るぞ？」

数十人の『反ラグズ共存団体』の団員達が一斉にティアマトに襲い掛かるうとしたが、一人の団員がネギ達に気が付く。

ネギ

「うわぁ……………殆どの人が倒されてますね。」

明日菜

「……………まさか、コレ全部ティアマトさんが倒したの？」

アイク

「だから言っただろ？ティアマトは強いって。」

ネギー一行は船の上で沢山倒れてる『反ラグズ共存団体』の団員達を見て啞然とする。

反ラグズ団員F

「おい、あのガキ共も仲間じゃないのか？」

反ラグズ団員G

「だったら、あいつらを人質にするぞ！」

反ラグズ団員H

「よし！早速引っ捕らえようぜ！！」

そう言うのと、『反ラグズ共存団体』の団員達は一斉にネギ達の方へと駆け寄って来る。

のどか

「あわわ……………みんなしてこっちへ来る……………」



カモ

「……………兄貴、相手は今までと違って人間だから少し手加減しろよ。」

ネギ

「わ、分かってるよ。」

アイク

「おい、お喋りはそこまでにしとけ……………行くぞ!」

そう言うと、アイクは一足先に反ラグズ団員の方へ駆け出ししていく。

明日菜

「それじゃ、行きますか……………アデアット!」

パア……………ツ!!

次の瞬間、明日菜が『ハマノツルギ』を呼び出す。

ネギ

「皆さん!相手は人間ですから、手加減して下さいね!」

明日菜

「分かってるわよ……………刹那さん、行くよ!」

刹那

「はい!……………お嬢様と宮崎さんは何処か隅の方へ隠れて下さい!」

木乃香

「わ、分かった……………」

ネギ・明日菜・刹那はアイクに続いて反ラグズ団員達の方へ駆け出していく。

アイク

「はあっ!!!」

ガツキーーーーーン!!

アイクは自前の大きな剣で反ラグズ団員が持っていた斧を弾き飛ばす。

明日菜

「うおりゃーーーー!!」

パッシーーーーーン!!

反ラグズ団員達

「わあーーーーっ!!」

明日菜が大きく『ハマノツルギ』を振るって、数名の反ラグズ団員達を吹っ飛ばす。

反ラグズ団員I

「大人しく捕まれえ!!」

体中に鎧を重装備した一人の反ラグズ団員が刹那に襲い掛かるが……。

刹那

「斬甲剣!!」

スパーーーーーッ!!

反ラグズ団員I

「なっ!?!」

刹那が夕凧で反ラグズ団員の鎧だけを真っ二つにする。

木乃香

「いやぁーっ!?!」

刹那

「!?!」

刹那が木乃香の叫び声に反応して振り向いてみると、木乃香が複数の反ラグズ団員達に取り囲まれていた。

刹那

「こ、木乃香お嬢様!?!」

バツサーーーーーッ!!

次の瞬間、刹那は背中から白い翼を出して木乃香の方へ飛び立っていく。

反ラグズ団員J

「な、何だ!？」

ガシッ!!

刹那は素早く木乃香の抱き抱えながら反ラグズ団員達から離れる。

木乃香

「せ、せっちゃん!？」

刹那

「お嬢様……………もう大丈夫ですよ。」

そう言つと、刹那はゆっくりと木乃香を降ろす。

反ラグズ団員K

「こ、このガキ……………鳥の半獣だったのか!？」

反ラグズ団員L

「みんな!此処に居る半獣を叩きのめせ!！」

反ラグズ団員達

「うお—————!!！」

反ラグズ団員達は殺気立たせながら一斉に刹那の方へ駆け出している。

ネギ

「刹那さん！ラス・テル マ・スキル マギステル…………… 大気よ水よ白霧となれ 彼の者らに一時の安息を…………… 眠りの霧！」

バファアツ！！

すると、ネギが反ラグズ団員達に向けて相手を眠らせる霧を発生させる。

反ラグズ団員M

「な、何だ！？この霧は……………」

反ラグズ団員N

「それに…………… 何だか…………… 眠気が……………」

反ラグズ団員O

「ふわぁ…………… もう駄目……………」

そう言うと、反ラグズ団員達は次々と倒れ込んで眠ってしまふ。

刹那

「ネギ先生……………助かりました。」

ネギ

「いえ、どう致しまして……………それより、のどかさんは？」

木乃香

「それが、さっきまで一緒やったんやけど……………」

のどか

「は、離して下さいー！」

ネギ

「!?!?」

ネギがのどかの声に反応して振り向いてみると、のどかが反ラグズ団員の一人に手首を掴まれている。

反ラグズ団員P

「えーい！大人しくしろー！」

のどか

「い、嫌あ！だ、誰か助けて……………」

ネギ

「のどかさん！！」

シュン！！

ネギは咄嗟に瞬動でのどかに近付く。

反ラグズ団員P

「何！？い、いつの間に……………」

カモ

「テメエの相手は俺っちでーい！！」

ガブツ！！

反ラグズ団員P

「あだだだだ！！」



カモは反ラグズ団員の顔に飛び掛かり、団員の鼻先に噛み付く。

ドスッ!!

反ラグズ団員P

「うっ!?!」

すると、アイクが後ろから反ラグズ団員を殴り倒す。

アイク

「……………つたく、気絶させるだけってのも骨が折れるな。」

ネギ

「のどかさん、怪我とかされてませんか?」

のどか

「はい、大丈夫です。」

カモ

「へへっ、それもこれも俺っちのお蔭だな。」

ネギの肩の上に戻ったカモは、大きく胸を張りながら威張る。

アイク

「……………どうやら、全員片付けたようだな。」

ティアマト

「そのようね……………では、後は自警団の人達に任せましょう。」

そう言つと、全員船の上から立ち去っていく。

くタリス・町方面く

自警団長

「ありがとうございます！皆様のお蔭で反逆者達は一人残らず捕らえられましたー！！」

アイク

「いや、俺達はただ依頼されてた仕事をしたただけだ。」

自警団長

「それでも、我々は皆様に感謝しております！」

そう言うと、自警団達はアイク達に向かって一斉に敬礼をする。

アイク

「……………ティアマト、そろそろ帰るか。」

ティアマト

「そうね、依頼した人から報酬を貰った事だし……………」

自警団長

「それでは、我々もこれで失礼します！」

自警団達は全て捕らえた反ラグズ団員達を連行しながら立ち去っていく。

明日菜

「……………ふう、何だか私達も疲れちゃったわね。」

ネギ

「そうですね、今日はもう休みましょうか……………」。

ティアマト

「……………ところで、貴方達はこれから何処で休むの？」

木乃香

「え？まだ決めてへんけど……………」。

アイク

「だったら、俺達の所で休んでいくといい。」

刹那

「えっ！？で、ですが……………」。

アイク

「遠慮するな、団のみんなにアンタ達を紹介しなきゃならないし……………」。

のどか

「紹介するって、どういう意味ですか？」

アイク

「アンタ達の闘い振りを見てて決心した……………アンタ達も俺達と一緒に

に『アリティア王国』へ連れて行く事にした。」

ネギ

「ほ、本当ですか!？」

ティアマト

「勿論よ、快く歓迎するわ。」

カモ

「兄貴! やったな!！」

ネギ

「う、うん!……本当にありがとうございます!！」

ネギ以外全員

「ありがとうございます!！」

ネギ一行はアイクとティアマトに向かって深くお辞儀する。

ティアマト

「いいえ、こちらこそ宜しくね。」

アイク

「それじゃ、そろそろ帰ろつか……………」

そう言うと、ネギー行とアイク達は皆を指して進んでいく。

〈グレイル傭兵団本部・食堂〉

その夜、アイクは食堂に傭兵団のメンバーを全員集めてネギ達を紹介していた。

ティアマト

「……………という訳で、今度の依頼には彼らも一緒に同行する事になったの。」

アイク

「みんな、一人ずつ軽く自己紹介してくれ。」

？

「では、まず私から……………私の名はオスカーだ、宜しく。」

最初に緑色の短髪で糸目の男性・オスカーがネギ達に自己紹介する。

ポーレ

「俺はポーレ！昼間に会ったかもしれないが、改めて宜しくな！」

ネギ

「は、はい……………宜しくお願いします。」

ポーレが元気良く自己紹介すると、ネギは思わず返事をしてしまう。

？

「僕はキルロイ、少し病弱なのが玉にキズだけど宜しくね。」

次に茶髪で白い衣装を着た男性・キルロイが自己紹介する。

？

「……………俺はシノンだ。」

次に薄い紫色の髪をポニーテールのように縛った少し無愛想な男性・

シノンが自己紹介する。

？

「俺の名はガトリー！お嬢ちゃん達、困った事があつたら何でも俺に言ってくれ！」

のどか

「は、はい……………」

シノン

「……………つたく、お前は相変わらず女には甘いな。」

シノンは鎧のような物を見に纏った茶髪の男性・ガトリーの態度に呆れ返る。

？

「セネリオです……………僕達の仲間になるからには、しっかりと働いてもらいますよ。」

明日菜

(き、きっ……)。

明日菜はセネリオと名乗る額に印のような物が刻まれてる黒い髪の



少年の厳しい言葉に苦笑いする。

？

「あたしはワユ！宜しくね〜！！」

額に白い鉢巻きのような物を巻いた長い紫色の髪の少女・ワユがネギ達に対して明るく感じて自己紹介する。

ヨファ

「僕はヨファ、こう見えても僕もれっきとした傭兵団の一員なんだ。

」

最後にヨファが少し緊張した面持ちでネギ達に自己紹介する。

ティアマト

「……………以上で紹介した人達が私達『グレイル傭兵団』のメンバーよ。」

アイク

「改めて宜しくな。」

ネギ

「こ、こちらこそ宜しくお願いします！」

ネギー一行はアイク達に向かって深くお辞儀する。

ティアマト

「……ところでアイク、さっきエリンシア王女様からの手紙が届いたんだけど……。」

アイク

「何！？本当か？」

ティアマト

「ええ、コレよ……。」

ティアマトはアイクに一通の手紙を手渡す。

アイク

「えっと、何々……」

拝啓

アイク様と傭兵団の皆様

先程頂いた手紙の返事、早速読ませて頂きました……………本当にありがとうございます。

こんな無理難題とも言つべき依頼を引き受けて下さるなんて……………私は感謝の気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいです。

出発についてですが、明日の早朝に『港町トハ』で『アカネイア大陸』行きの船を用意します。

皆様はその船で『アカネイア大陸』まで出航して下さい。  
それでは、明日『港町トハ』へ来て下さい。

エリンシアより

……………『港町トハ』か。」

明日菜

「……………どつやら、明日船に乗るみたいね。」

木乃香

「そやな……それに、船に乗るなんて猫目のリンク君の世界で海賊船に乗って以来やな。」

明日菜と木乃香はアイク達に聞こえない程度な声で話す。

ティアマト

「………という事は、明日は早いから食事が終わったらすぐに就寝した方がいいわね。」

アイク

「ああ、そうしよう………ところで、晩飯はまだなのか？」

ミスト

「は〜い！お待たせ〜！！！」

すると、ミストが食事を乗せた大きなおぼんを持ったまま現れる。

ポーレ

「お！やっとな晩飯か。」

ワユ

「あたし、もうお腹ペコペコ……………」。

アイク

「……………一応アンタ達に言っておぐが、ミストの作った食事は少し覚悟しといた方がいい。」

ネギ

「え？それはどついつ……………」。

ミスト

「ちょっとお兄ちゃん！それってどついつの意味!？」

ミストはアイクがネギ達に言った言葉を聞いて怒り出す。

アイク

「いや、一応忠告しておこうと思ってな。」

ミスト

「失礼しちゃうなあ……………それに私、最近料理の腕上げたんだからね。」

アイク

「そ、そうだったな……ところで、肉料理はあるのか？」

ミスト

「残念でした！今日も肉料理はありません。」

アイク

「そ、そうか……。」

アイクはミストの言葉を聞いて落ち込んでしまう。

ヨファ

「ねえ、早くご飯食べようよ。」

ミスト

「そうね……さあ、ネギ君達も食べましょ。」

ネギ

「は、はい！」

こうして、ネギ一行はグレイル傭兵団のメンバーと一緒に食事をするのであった……。



第六十五話　ラグズとの共存を拒む者達（後書き）

グレイル傭兵団の一員となったネギー行だが、果たして『アカネイ  
ア大陸』へ行けるのか？

因みに、リクエストはまだ続いてます！



## 第六十六話〈盗賊の少年と暁の巫女〉（前書き）

ネギー行とイク率いるグレイル傭兵団はエリンシアが用意したという船を目指して『港町トハ』へ向かうのだが……。

今回はタイトル通り、あのキャラが登場します！

ファイアーエムブレムシリーズのファンなら分かると思います。

第六十六話　盗賊の少年と暁の巫女

「港町トハ」

早朝、ネギー一行はグレイル傭兵団と共に「港町トハ」へとやって来た。

アイク

「さあ、着いたぞ。」

ネギ

「此処が『港町トハ』ですか……………昨日行った『港町タリス』より大きい町ですね。」

明日菜

「そ、そうね……………ふわぁっ。」

突然明日菜は大きな欠伸をし始める。

木乃香

「明日菜ったら、まだ眠そうに欠伸なんかして……………ふわぁっ。」

更に木乃香も明日菜に続くように小さな欠伸をする。

明日菜

「何よ、そう言う木乃香だって欠伸してるじゃない……………」

木乃香

「だってえ、こないに朝早く起こされるなんて思わなかったんやもん。」

刹那

「それでも、明日菜さんは毎朝新聞配達をしてるので慣れてらっしゃるのでは？」

明日菜

「そりゃそうだけど、眠たいものは眠たいのよ……………ふわぁ〜っ。」

明日菜は再び大きな欠伸をしてしまう。

ポーレ

「おいおい、さっきから欠伸ばかりして……………そろそろしゃきつとした方がいいんじゃないか？」

オスカー

「確かにしゃきつとしないとな……でも、移動の最中に居眠りしながら歩いてたのは誰だったかな？」

ボーレ

「あ、兄貴！余計な事言うなって！！」

ボーレはオスカーの発言に動揺してしまう。

ネギ

「ボーレさんとオスカーさんって兄弟なんですか？」

キルロイ

「ええ……困みに、ヨファもオスカーとボーレの弟なんだよ。」

のどか

「という事は、兄弟三人で傭兵をやってるんですね……。」

木乃香

「凄いなあ……。」

ネギ一行はオスカー・ボーレ・ヨファを見ながら感心してしまう。

シノン

「……………それにしても、アイクも副団長も何であんなガキ共を仲間にしたんだ？」

ガトリー

「いいじゃないツスか、女の子が増えたから賑やかになるし……………」。

「

ワユ

「そうそう　うちの団って男の人が多から話す相手があまり居なかったし……………出来れば、あの子達と楽しくお喋りでもしたいなあ」。

ミスト

「私もお喋りしたい」。

ヨファ

「僕もネギ君と遊んだりしたいな」。

シノン

「……………ったく、どいつもこいつも呑気な奴らだぜ」。

シノンはガトリー達の会話を聞いて呆れ返ってしまふ。

ティアマト

「みんな、アレが私達が乗船する船よ。」

そう言ってティアマトが指さす方を見てみると、港に浮上させてある大きな船が目に入った。

明日菜

「うわあ、デッカい船ね……。」

セネリオ

「大陸一つ渡るのなら、これ位大きい船でなければ話になりませんよ。」

ネギ

「た、確かに……。」

ティアマト

「ちょっとそこで待っていて、今この船の船長と話をしてくるから……。」

そう言いつつ、ティアマトは船の中に続く梯子へと渡っていく。

アイク

「セネリオ、船で『テリウス大陸』を出て『アカネイア大陸』に到着するまでどれ位掛かる？」

セネリオ

「そうですね、『クリミア王国』から『ベグニオン帝国』まで約二ヶ月程掛かりましたから……………最低でも一年以上は掛かるでしょう。」

ネギー一行

「い、一年!？」

ネギー一行はセネリオの発言に耳を疑った。

カモ

「おいおい、冗談だろ……………」

明日菜

「一年間も船に乗ってなきやいけないの？」

刹那

「幾ら何でも長過ぎますよ……………」

ネギ

「でも、マルスさんが居る大陸へ行くには船に乗るしかないし……」

ティアマト

「みんな、お待たせ。」

ネギー一行がアイク達に聞こえないように話していると、ティアマトが戻ってくる。

アイク

「それで、すぐに出航出来るのか？」

ティアマト

「それが、これから食料とかの積み荷を船内に沢山積みなきゃならないからまだ時間が掛かるそうよ。」

アイク

「そうか………全部積み終わるまでどれ位掛かるんだ？」

ティアマト

「船長の話によると、最低でも三時間後までには終わらせると言っていたわ。」



アイク

「三時間か……………よし、それまで各自自由行動としよう。」

ポーレ

「そんじゃ、俺はちょっと町の方へ行つて来よつと！」

ヨファ

「あ、僕も……………」

ポーレとヨファが町の方へ歩いていくと、他のメンバーも別々に町の方へと足を進める。

ネギ

「……………殆どの皆さん、町の方へ行っちゃいましたね。」

明日菜

「ねえ、私達も町の方へ行ってみる？」

木乃香

「でも、ウチらだけやったら迷子になってまうよ。」

ワユ

「だったら、あたし達が案内してあげよっか？」

刹那

「えっ？」

ネギー行がワユの声に反応して後ろを向いてみると、そこにはワユとミストが居た。

のどか

「い、いいんですか？」

ワユ

「勿論！それに、貴方達の事をもっと知りたいし……………」。

ミスト

「お兄ちゃん、私達でネギ君達を案内して来ていいでしょ？」

アイク

「ああ、構わないが……………時間までに帰って来いよ。」

ミスト&ワユ

「はっい！」

二人が元気良く返事をする、ネギー一行を連れて町の方へと駆け出していく。

アイク

「……………あいつら、何だか嬉しそうだな。」

ティアマト

「そりゃそうよ、ほぼ同年代の女の子達が増えたんだもの。」

アイク

「そういつもんかな……………ん？」

ティアマト

「どうしたの？」

アイク

「あそこに居るのは……………サザじゃないか？」

アイクが指さす方を見ると、緑色の髪に灰色のスカーフのような物を首に巻いてる少年が周りを見回しながら何かを探していた。

ティアマト

「あら、本当だわ……………何だか様子が変わね。」

アイク

「何かあったのかもな……………おい、サザ！」

サザ

「!?!」

サザという名前の少年は突然後ろからアイクに声を掛けられて、思わず慌てて後ろを向く。

サザ

「な、何だ……………アンタ達か……………驚かさないでくれ。」

アイク

「それは悪かったな……………ところで、お前はまた盗賊みたいな真似をしようとしてたのか？」

サザ

「ち、違う!……………捜してたんだ……………人を……………。」

アイク

「人?……………もしかして、俺と初めて会った時にお前が言ってた大事

な家族の事か？」

サザ

「ああ、この町に来てるって噂を聞いてな……………なあ、一緒に捜してくれないか？」

アイク

「……………分かった、船の準備が終わるまで捜してやるう。」

サザ

「あ、ありがとう！恩に着るよ！！！」

サザはアイクに向かって深く頭を下げながらお礼を言う。

アイク

「ところで、そいつの特徴とかを教えてくださいませんか？」

サザ

「あいつの特徴は……………。」

〔港町トハ・町方面〕

のどか

（ど、どうしよう……みんなと逸れちゃった……）

その頃、のどかはネギ達と逸れてしまい町の広場でポツンと立たず  
んでいた。

のどか

（あう、私がちょっとよそ見をしたばかりに……早くネギ先  
生達と合流しなきゃ……）

小鳥

「ピョピョッ。」

のどか

「えっ？」

のどかの右肩に赤毛の小さな小鳥が止まる。

のどか

「わあ、可愛い小鳥……それに、とっても人懐っこい感じね。」

のどかが人差し指で小鳥の頭を優しく撫よつとした瞬間……。

？

「ユンヌ、こつちへいらっしやい。」

ユンヌ

「ピヨピヨッ！」

のどか

「あっ……………」

ユンヌと呼ばれた小鳥はのどかの肩から離れていき、のどかの後ろに居た銀色の長い髪の少女の方へと飛び立っていく。

？

「ごめんなさい、ユンヌったら急に飛び立ってしまったから……………」

「

のどか

「い、いえ……その小鳥は貴女のですか？」

？

「ええ、ユン又は私の大事な友達です。」

少女がそう言うと、ユン又は少女の右肩に止まる。

のどか

(この人の声、何処となく夕映の声に似てるような……。)

？

「……あの、私の顔に何か付いてます？」

のどか

「えっ！？あ、いえ……ただ、声が友達と似てるなあと思って……。」

？

「そ、そうですね……。」

少女はのどかの言葉を聞いて思わず首を傾げる。



？

「……………とじろで、一つ聞いてもいいですか？」

のどか

「な、何でしょうか？」

？

「この町で、私より少し年上で緑色の髪少年を見掛けませんでしたか？」

のどか

「え、えっと……………すみません、そういった人は見掛けてません。」

？

「そうですね……………一体何処へ行ってしまったのかしら……………」

そう言うと、少女は少し俯きながら落ち込んでしまふ。

のどか

「……………その人、貴女にとって大事な人なんですね。」

？

「え、ええ……………彼は私にとって家族のような存在です……………」

のどか

「家族……あの、私、あまり上手く言えませんが……信じて  
いれば大事な人にも必ず会えますよ！」

？

「……ありがとうございます、貴女の言葉を聞いてたら元気が出て来ました。

」

のどか

「そう、良かった……。」

のどかは少女の笑顔を見てホッと胸を撫で下ろす。

？

「……それでは、私はこれで失礼します。」

少女はのどかに一礼した後、その場から立ち去ろうとする。

のどか

「あ！待って……貴女の名前は？」

？

「私の名前は……ミカヤです。」

のどか

「ミカヤさん……私はのどかです……」

ミカヤ

「のどか……素敵な名前ですね……では、またいつか会いましょう。」

のどか

「は、はい！いつか必ず……。」

ミカヤと名乗る少女はそのまま走り去っていく。

のどか

（行っちゃった……ミカヤさん、とても不思議な人だった……。）

ネギ

「のどかさん……」

すると、ネギー行とミスト達が慌ててのどかの方へ駆け寄って来る。

のどか

「ネ、ネギ先生！それにみんなも……………」。

明日菜

「もお、一体何処行つてたのよ？」

木乃香

「心配してたんやで。」

刹那

「でも、ご無事で何よりでした。」

のどか

「す、すみません……………心配を掛けてしまつて……………」。

のどかは申し訳なさそうにネギ達に向かって深く謝る。

ワユ

「もういいって、ごうして無事に再会出来たんだからさ」

ミスト

「そうそう……じゃあ、船の方へ戻りましょ。」

ネギ

「そうですね、そろそろ三時間になりますし……。」

ワユ

「そんなじゃ、港まで競走しよー！」

そう言うと、ワユが一足先に港に向かって駆け出していく。

明日菜

「あーずるーいー!!」

ネギ一行とミストもワユを追い掛けるようにして港に向かって走り出していく。

〈港町トハ・港方面〉

アイク

「……………結局見つからなかったな。」

サザ

「あ、ああ……………」

アイクとサザは町の方へ行って人を捜しに出ていたが、結局見つからずに船の方へと戻って来た。

サザ

「くそつ、一体何処へ行ってしまったんだ……………」

アイク

「……………サザ、すまないが俺はもう行かなければならない。」

サザ

「そつか……………アンタにも手を煩わせてしまって悪かったよ。」

アイク

「いや、それは別に構わないが……………俺の方こそ、あまり役に立てなくてすまなかつたな。」

サザ

「いいや、そんな事ないさ……………むしろ、一緒に捜してくれて感謝してるくらいだ。」

アイク

「そう言ってくれると有り難いな……………」

アイクはサザの言葉に少しだけ笑みを零す。

サザ

「……………それじゃ、俺ももう少し捜してみる。」

アイク

「そうか……………いつか見つかるといいな。」

サザ

「ああ、見つかるさ……………必ず見つけてみせる。」

そう言い残すと、サザは町の方へと走り去っていく。

アイク

（それにしても、サザが捜してる銀色の髪の少女は一体何処に……………

∴。  
)

明日菜

「やった〜！私が一番よ〜〜！！」

アイク

「ん？」

アイクが明日菜の声に反応して振り向いてみると、そこには息を切らせてるネギー行とワユ達が居た。

ワユ

「ハアハア……………明日菜って足速いんだね。」

明日菜

「ゼエゼエ……………そう言うワユちゃんこそ結構速かったよ。」

木乃香

「ど、どっちもええ勝負やった……………」

ミスト

「ほ、本当にね……………」



木乃香達は息を切らしながら明日菜とワユに感心する。

アイク

「……………みんな、息を切らしてるが大丈夫か？」

ネギ

「は、はい……………ちよつと走つたもので……………」

アイク

「そうだったか……………もうみんな船に乗り込んでるだろうから、俺達も急いで船に乗ろう。」

刹那

「そうですね、積み荷も全て運び終えたようです……………」

明日菜

「それじゃ、私達も船の中に入りませよ！」

そう言うと、全員が船の梯子に渡るうとするが……………。

？

「アイク様！」

アイク

「ん？今の声は……。」

アイクが声がした方を向いてみると、そこにはペガサスのような翼を生やした馬に乗った緑色の長い髪の美しい女性が居た。

のどか

「あの人はい？」

ミスト

「あ、あの方は……エリンシア王女様よ。」

刹那

「お、王女様！？」

明日菜

「な、何で王女様がこんな所に……。」

木乃香

「それに、ペガサスに乗っとるし……。」

ネギー一行はミストからペガサスに乗った女性がエリンシア王女だと

聞いて驚愕する。

アイク

「エリンシア、どうして此処に……………」。

エリンシア

「じ、実は……………どうしても皆様の見送りがしたくて……………城からこっそり抜けて来てしまいました。」

ネギ

「……………随分行動力のあるお姫様ですね。」

ミスト

「もしかしたら、お兄ちゃんの影響かも……………」。

ネギー行とミストは苦笑いしながら話す。

アイク

「……………それだけの為にわざわざ来てくれたのか？」

エリンシア

「は、はい……………ひょっとして、」迷惑でしたか？」

アイク

「そんな訳無いだろ？……ありがとうな。」

エリンシア

「ア、アイク様……。」

エリンシアはアイクからの感謝の言葉に思わず感極まる。

アイク

「おっと、そろそろ行かないとマズイな……それじゃ、行って来る！」

エリンシア

「ア、アイク様！私の代わりに敵をぶっ飛ばして差し上げて下さいね！」

明日菜

「ぶ、ぶっ飛ばすって……。」

カモ

「とてもお姫さんの発言とは思えねえな……。」

ミスト

「これもお兄ちゃんの影響かも……………」

ネギー一行はエリンシアの意外な発言に啞然とし、ミストは思わず苦笑いしてしまう。

アイク

「ああ！俺達に任せとけ！！」

そう言うと、全員が船の梯子へと渡っていく。

バツシャー————ン！！

その直後、船がそのまま東を目指して出航していく。

エリンシア

（アイク様……………どうかご無事で……………。）

エリンシアは船を目で見送りながらアイクの無事を祈る。

くアカネイア大陸・アリティア王国く

？

「フッフ、この国は『クリミア』と同じで他愛も無いわ。」

大きな城の内部にある玉座の間で、大きな赤いマントを纏った大柄の男性が怪しい笑みを浮かべながら玉座に座っていた。

？

「王よ、もはやこの『アリティア』は完全に貴方様の物です。」

緑色の厚い衣装を着た初老の男性が王と呼ばれた男性の正面でひざまづきながら怪しく告げる。

？

「フツ、それもこれもあの見慣れない黒い服装の奴らと出会い……  
…お前を臣下として私の配下に加えたお蔭だな。」

？

「王からの勿体無きお言葉……有り難き幸せでございます。」

？

「この調子なら、全ての国を……いや、全ての大陸を支配する事もたやすいわ……クククク。」

王の名乗る男性の不気味な笑い声がに響き渡るのであった……。

## 第六十六話〈盗賊の少年と暁の巫女〉（後書き）

こうして、ネギー行とグレイル傭兵団は船で『アカネイア大陸』を目指すのであった……………。

ところで、この話に登場したミカヤはアイクが活躍する『蒼炎の軌跡』の続編『暁の女神』に登場したキャラです。

このミカヤはサザと再会する前（『暁の女神』より前）という設定で登場させました。

それから、作中にもあったようにミカヤの声優は『魔法先生ネギま!』の綾瀬夕映役の桑谷夏子さんです！



第六十七話　若き獅子とロルカ族の女剣士（前書き）

ネギー行とアイク率いるグレイル傭兵団を乗せた船は『アカネイア大陸』をを目指すのだが……。

今回は『烈火の剣』のあのキャラが登場します。

## 第六十七話　若き獅子とロルカ族の女剣士

とある海上

ネギー一行とグレイル傭兵団を乗せた船が『テリウス大陸』を出航して一週間が経っていた。

ネギー

「……僕達が出航してから、もうかれこれ一週間ぐらい経ちましたね。」

明日菜

「あゝ！もゝ！一体いつになったら到着するのよゝゝ！！！」

木乃香

「まさか、ホンマに一年ぐらい掛かるんやろか？」

刹那

「だとしたら、『アカネイア大陸』に到着するまでまだまだ掛かりますね。」

のどか

「そ、そんな……………」

アイク

「……………そんな所で何をしている？」

ネギー一行が落ち込んでいると、少し顔色が悪いアイクが現れる。

ネギ

「アイクさん……………いえ、ちょっと退屈だったもので……………」

のどか

「それより、何だか顔色が悪いみたいですけど……………大丈夫ですか？」

アイク

「あ、ああ……………どうやら船酔いしたみたいでな……………」

木乃香

「それは災難やな……………」

カモ

「でも、アイクの旦那は船酔いする程繊細な男には見えねえが……………」

ネギ

「カ、カモ君！アイクさんに失礼だよ……………」。

アイク

「……………それ、前にミストにも言われたぞ。」

アイクはカモの皮肉っぽい言葉に思わず顔が引き攣こってしまっつ。

明日菜

「ところで、もっと速く船を進められないの？」

アイク

「無茶言っな……………船というのは帆ほが風に押されて進んでるから、強い風が吹かない限り速く進むのは不可能だ。」

刹那

「確かに……………台風のような強い風が起きないと無理ですね。」

ネギ

「では、このまま目的地に到着するまで待つしかありませんね……………」。

？

「フツ、随分暇を持て余してるようだな。」

全員

「!?!」

全員声がした方を向いてみると、船の外の海上で黒コートの男とリリーを乗せてる巨大化したがばねが浮かんでいた。

アイク

「な、何だ!?!あの巨大な竜は……………」

カモ

「そ、それに兄貴……………同じ黒コートを着た奴がもう一人いやがるぞ。」

ネギ

「う、うん……………もしかして、前にネス君の友達が言った……………」

リリー

「は、いいアンタ達と会うのは初めてよね……………あたしの名はリリー、宜しくね。」

がばね

「俺はがばねだ、宜しくな！」

のどか

「ド、ドラゴンが喋った……………」

明日菜

「それに、もう一人の黒コートの奴……………妙にノリが軽くない？」

ネギー一行とアイクは初めて対面したりリーとがばねに啞然とする。

黒コートの男

「それより、お前達は今『アカネイア大陸』を目指して船で旅をしてるらしいな……………」

明日菜

「だ、だったら何なのよ？」

リリー

「その旅、あたし達が目茶苦茶にしちゃおっかなろ。」

刹那

「どついつ意味だ？」

がばね

「つまり、こついつ事だ……スウ〜ツ。」

すると、がばねが大きく息を吸い込んでいき……。

ネギ

「ま、まさか……口から炎を吐き出すのでは……。」

木乃香

「う、嘘……。」

ブワァー……ッ!!

全員

「うわぁ……!!」

バツシャー……ッ!!

次の瞬間、がばねが大きく吹いた強風のような息でネギ達を乗せた船が物凄いスピードで一直線に吹き飛ばされていく。

がばね

「ふう……………旦那、こんな感じでいいのか？」

黒コートの男

「ああ、上出来だ。」

リリー

「でも、これで上手くいくのかしら？」

黒コートの男

「残念だが、我々の役目は此処までだ……………がばね、そろそろ行くぞ。」

がばね

「あいよー！」

バツサー……………ッ！！

そう言いつと、がばねは何処かに飛び去っていく。



〔数時間後〕

がばねの大きな息で数百メートル位まで吹き飛ばされた船は、やっとの事で速度を落として停止させていた。

ネギ

「……………や、やっと止まった。」

アイク

「みんな、大丈夫か？」

明日菜

「な、何とか……………」

明日菜は髪がボサボサな状態でアイクの質問に答える。

ティアマト

「アイク！それにみんなも大丈夫！？」

すると、ティアマトを含む傭兵団のメンバーが血相を変えながら駆け寄って来る。

アイク

「ああ、俺達は無事だ……………」

ティアマト

「そう、良かった……………ところで、さっきの衝撃は何だったのかしら？」

ポーレ

「まるで、地震みたいだったな……………」

アイク

「実はさっき……………」

アイクは先程の出来事をティアマト達に説明した。

オスカー

「成程、巨大な竜に乗った怪しい二人組か……………」

シノン

「そんな奴らが居たんなら俺が一発で仕留めてやったのにな。」

キルロイ

「でも、そのドラゴンに吹き飛ばされたのによく無事でしたね……」

ティアマト

「それもそうね……船が少し傷いたんでしまったけど、みんなが無事で何よりだわ。」

ガトリー

「本当ですよね、俺達って本当に運がいいッスね。」

アイク

(運がいい……か。)

アイクは腕を組んで深く考え込んでしまう。

セネリオ

「アイク、どうかしましたか？」

アイク

「いや、ちょっと気になる事が……。」

木乃香

「あ！向こうから陸地が見えてきたえ！」

ワユ

「えっ！？どれどれ？」

全員が木乃香の指さす先を見ると、水平線の向こうから陸地を  
発見する。

ネギ

「まさか、アレが『アカネイア大陸』ですか？」

セネリオ

「いや、違います……アレは『エレブ大陸』です。」

アイク

「『エレブ大陸』だって!？」

アイクはセネリオの言葉に思わず耳を疑った。

アイク

「セネリオ、本当にアレが『エレブ大陸』なのか？」

セネリオ

「はい、この地図によれば『テリウス大陸』から東の方角へ一直線に進んだ先にある地形に『エレブ大陸』と記されてるので間違いありません。」

そう言つて、セネリオは世界地図を取り出して丁寧に説明する。

ティアマト

「確かに、この船はずっと東に向かって進んでたから間違いなく『エレブ大陸』のようね。」

アイク

「そうか……だが、『テリウス大陸』から『エレブ大陸』までかなり距離があつたのに何故たつたの一週間で……。」

ネギ

「恐らく、先程のドラゴンが吐いた息で此処まで吹き飛ばされたからじゃないでしょうか？」

刹那

「となると、この船は最低でも数百メートルも吹き飛ばされたとい

う事になりますね……………」

明日菜

「……………でも、よく船がバラバラにならずに済んだものね。」

のどか

「た、確かに……………」

明日菜の言葉に殆どのメンバーが苦笑いをしてしまう。

アイク

「ティアマト、船長に頼んで『エレブ大陸』へ向かうようにしてくれ。」

全員

「!?!?」

全員がアイクの一言に耳を疑った。

ティアマト

「ど、どうして？ 私達が向かうのは『アカネイア大陸』でしょ？ 『エレブ大陸』に何の用が……………」

アイク

「特に用事は無いが、さっきの衝撃で船があちこち傷んでるだろうから修復させた方がいいと思ってな……………」。

セネリオ

「アイクがおっしゃってる事も一理ありますね……………もし、途中で船が沈没でもしたら全員海の底へ沈んでしまいます。」

ティアマト

「……………分かったわ、一応船長と話してくるわ。」

そう言うと、ティアマトはその場から立ち去っていく。

明日菜

「ふう、久しぶりに船から降りられるわねえ。」

木乃香

「そう言えばそやね、この一週間ずっと船の上やったし……………」。

アイク

「……………なあ、ちょっといいか？」

ネギ

「はい？何でしょうか？」

突然アイクが傭兵団のメンバーに気付かれないようにネギ達に話し掛ける。

アイク

「前も言ったと思うが、あの『エレブ大陸』の何処かにロイが居るんだ。」

ネギ一行

「えっ!？」

ネギ一行はアイクの言葉に耳を傾ける。

明日菜

「そ、そう言えば私達が初めてアイクさんと出会った時にもそんな話を言ってたような……………」

ネギ

「じゃあ、僕達にロイさんを会わせる為にあんな事を？」

アイク



「ま、まあな……………」

アイクはネギの質問に少し照れ臭そうに答える。

ネギ

「そうでしたか……………僕達の為にありがとうございます。」

アイク

「い、いや……………俺はただ……………」

ミスト

「……………ねえ、さっきからみんなで何話してるの？」

明日菜

「な、何でも無いわよ。」

途中からミストが聞き耳を立ててきたので明日菜が慌てて話を逸らす。

ティアマト

「アイク、お待たせ。」

すると、ティアマトがアイクの元へと戻って来る。

アイク

「それで、船長は何て言ってた？」

ティアマト

「船長もアイクの意見に賛成するって言って、直ちに『エレブ大陸』に上陸させるそうよ。」

アイク

「そうか、それは良かった……………な？」

ネギ

「は、はい！」

こうして、ネギ達を乗せた船は『エレブ大陸』へ向かって行くのであった……………。

くエレブ大陸・リキア地方のとある港町く

船を港に止めたネギ達は取り合えず船から降りていた。

アイク

「ティアマト、船の修復はどれ位で終わる？」

ティアマト

「そうね……………確か船長の話だと、最低でも五時間以上は掛かるって言ってたわ。」

アイク

「五時間以上か……………それまでにロイを見つけないとな……………」

ネギ

「でも、そう簡単に見つかるでしょうか……………」

明日菜

「とにかく、この町の人達に聞いてみましょう！」

そう言うと、ネギ一行とアイクは町の方へ駆け出していく。

ミスト

「あれ？お兄ちゃん達……………一体何処へ行くんだろう？」

ポーレ

「きつと町の方へ行く気だな……………よし、俺もちょっと行って来るか！」

ヨファ

「あっ！僕も……………」

シノン

「そんじゃ、ちよつくら酒場で一杯飲んで来るか……………ガトリー、お前の奢りでな。」

ガトリー

「え〜っ！？また俺の奢りッスか〜！？」

ワユ

「あたしは町の武器屋でいい剣があるかどうか見て来よ〜っど！」

殆どのグレイル傭兵団のメンバーはそれぞれの目的の為に町の方へ歩き始める。

セネリオ

「……………全く、これから闘いに行くというのに呑気なものですね。」

ティアマト

「まあ、いいじゃない……………そうやって楽しくやっていられるのも今の内なんだから……………」。

キルロイ

「そうですね……………」『アカネイア大陸』に着いたらすぐに闘いが待ってますからね……………」。

オスカー

「果たして、どんな闘いになるのか……………」。

そう言うと、オスカーは真上に昇っている太陽を静かに眺める。

その頃、ネギー行とアイクは……………。

ネギ

「お爺さん、どうもありがとうございます！」

老人

「いいえ、どう致しましてじゃ……………」。

小さな町の広場でネギは老人からロイについて聞き終えていた。

のどか

「あのお爺さんの話によると、ロイさんはこの町から北にある『フエレ侯爵家』のお城に居るみたいですね。」

明日菜

「お城に居るって事は……………ロイって人も王子様か何かなの？」

アイク

「ああ、そうだが……………言わなかったか？」

刹那

「はい、初めて聞きました……………」。

刹那はアイクの言葉に苦笑いしながら返答する。

木乃香

「という事は、マルスはんとロイはんは二人揃って王子様っちゅう事なんやな。」

カモ

「でも、それに引き換えアイクの旦那はただの傭兵団の団長なんだよなあ……………全くの偉い違いだぜ。」

ネギ

「カ、カモ君！」

ネギは慌ててカモの口を塞ぐが……………。

アイク

「いや、別にいいんだ……………それに、俺は貴族とかより傭兵団の方が性に合ってるしな。」

ネギ

「そ、そうですか……………それより、早速ロイさんが居る『フェレ候爵家』のお城へ行ってみましょうー！」

明日菜

「そうね、あまり時間が無いしね。」

アイク

「よし、急いで出発だ！」

そう言いつと、ネギー行とアイクは『フェレ候爵家』の城を目指して駆け出していく。

〈フェレ候爵家の城前〉

数分後、ネギー行とアイクは『フェレ候爵家』の城の前までやって来た。

木乃香

「わあ、立派なお城やなあ。」



明日菜

「この城にロイって人が居るのね……………」

アイク

「よし、早速入ってみるか……………」

？

「あの、どちら様でしょうか？」

ネギ

「えっ？」

ネギ達は声に反応して後ろを向いてみると、そこには本を持った長い青色の髪の子が立っていた。

ネギ

「ぼ、僕達はロイさんに会いに来たのですが……………」

？

「ロイに会いに……………ひょっとして、ロイのお知り合いですか？」

アイク

「ああ、一応な……………そういうアンタは誰だ？」

？

「あー申し遅れました……………私の名はリリーナ、ロイとは小さい頃からの幼なじみなんです。」

そう言うと、リリーナと名乗る少女はネギ達に向かって軽くお辞儀する。

ネギ

「そうですか、ロイさんの幼なじみの方でしたか……………」

明日菜

「あれ？という事は、ロイって人は私達と同年って事？」

刹那

「そういう事になりますね……………」

のどか

「私達と同じ歳で王子様だなんて……………凄いですね……………」

明日菜達はロイが自分達と同年だと聞いて啞然とする。

？

「お〜い！リリーナ〜！！」

アイク

「ん？今の声は……。」

ネギ達が声が出た方を見ると、青い胸と肩の鎧を身に付けた赤い髪の少年がこちらへ駆け寄って来る。

リリーナ

「あ！ロイ！！」

ネギ

「えっ！？あの人がロイさん？」

木乃香

「……………ホンマにウチらと同じ歳やな。」

ロイ

「あれ？貴方はもしかして……………アイクさん！？」

アイク

「ああ、久しぶりだな。」

ロイはアイクの姿を見て一瞬目を疑ったが、逆にアイクは微かに笑いながらロイを見つめる。

ロイ

「どうしてアイクさんが此処に？」

アイク

「その事なら、このネギ達から聞いてくれ。」

そう言うと、アイクはネギ一行を指さす。

ロイ

「君達は誰？」

ネギ

「僕達ですネ……………」

ネギがロイにこれまでの経緯を説明していく。

ロイ

「そうだったのか……………僕達の為にそんな苦勞を……………」

ネギ

「どうかお気になさらないで下さい……………それより、コレが先程お話ししたバッチです。」

そう言うと、ネギはロイにバッチを手渡す。

ロイ

「ありがとう、君達が苦勞して届けてくれたバッチ……………有り難く受け取らせてもらつよ。」

明日菜

「……………何だか、そう言ってくれると逆に恥ずかしいわね。」

刹那

「そ、そうですね……………」

ネギ一行はロイの感謝の言葉に思わず照れてしまう。

アイク

「さて、ロイにバッチを渡した事だし……………そろそろ船に戻るか。」

ネギ

「は、はい。」

ネギ一行とアイクはそのまま立ち去ろうとするが……………。

ロイ

「あ！ちょ、ちょっと待って……………」

アイク

「ん？どうかしたか？」

ロイ

「さっきネギ君が話してたマルスさんの国が敵に侵略された件についてなんだけど……………僕も一緒に闘いたいんだ！」

全員

「！？」

その場に居た全員がロイの発言に耳を疑った。

リリーナ

「ちょっとロイ、急に何を言い出すの？」

ロイ

「だって、マルスさんは僕の大切な仲間の一人なんだ……だから、僕もアイクさん達と一緒に付いて行ってマルスさんの国を救いたいたいんだよ！」

リリーナ

「ロ、ロイ……。」

リリーナはロイの固い決意に何も言えなくなってしまった。

木乃香

「……ロイ君って、とっても正義感が強い子なんやね。」

ネギ

「そうですね……僕、何だか尊敬してしまいます。」

ネギ一行もロイの決意に感心してしまう。

アイク

「……分かった、お前の事は俺が話しといてやる。」

ロイ

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！」

ロイはアイクに向かって深く頭を下げる。

リリーナ

「でもロイ……………おじ様に黙って行ってしまふ訳には……………」。

ロイ

「分かってる……………今から父上に会って、直々をお願いしてくるよ。」

「

そう言うと、ロイは城の入ろうとする。

アイク

「なあロイ、俺達も付いてっていいか？」

ロイ

「はい、いいですよ……………父上にアイクさんを紹介させたいですし……………」。

リリーナ

「あ、待ってロイ！」



「こうして、その場に居た全員が城の中へと入って行くのであった……。」

↳フェレ候爵家城内・王室↳

ネギー行とアイクはロイとリリーナの後を付けて、王室の前までやって来た。

アイク

「おい、此処って王室じゃないのか？」

ロイ

「はい………実は、父上は重い病のせいで療養中の為に殆ど寝込んでおられるのです。」

明日菜

「お父さん、病気なんだ……。」

リリーナ

「ええ、だからロイがおじ様に代わってフェレ軍を統率しているの。」

「

ネギ

「そうなんですか………本当にロイさんって凄いですね。」

カモ

「ああ、それでこそ男の中の男だぜ！」

ネギ一行は更にロイに対して感心してしまう。

ガチャ！

ロイ

「父上、失礼します！」

ロイが王室に入っていくと、ネギ達もロイに続いて入っていく。

？

「ん？おお、ロイか。」

王室にはベツトで横たわっているロイと同じ赤い髪の男性の他に緑色の長い髪をポニーテールのように縛った女性が居た。

ロイ

「あ！お客様がいらっしやってたんですか……………」。

？

「いや、いいんだ……………彼女は私の昔の仲間で……………」。

？

「へえ、貴方がエリウツドの息子のロイね……………よく見ると、若い頃のエリウツドにそっくりだわ。」

そう言いながら、女性はまじまじとロイを食い入るように見つめる。

ロイ

「ち、父上……………この人は一体……………」。

エリウツド

「ああ、彼女は二十年ぐらい前に私とヘクトルとで『エレブ大陸』を救ったリンデイスだ。」

ロイ&リリーナ  
「ええっ!？」

ロイとリリーナはロイの父・エリウツドの言葉に思わず耳を疑った。

ロイ  
「あ、貴女が父上達と一緒に闘ったリンデイスさんですか……………」

リン  
「そうよ……………でも、私の事はリンって呼んでね。」

そう言うと、リンデイスという名の女性はロイ達に向けて笑顔を示かべる。

アイク  
「……………なあロイ、あのリンデイスっていう名前の女の服装や髪型とかがアシストフィギュアのリンに酷似してるな……………」

ロイ  
「いえ、酷似してるも何も……………この人があのアシストフィギュアのリンさんなんですよ。」

アイク

「本当か？フィギュアと見比べると実物の方が老けて見えるが……」

明日菜

「……………二人して何の話をしてるのかしら？」

ネギ

「さ、さあ……………」

ネギー一行はアイクとロイのヒソヒソ話に首を傾げる。

リン

「それと、貴女はヘクトルの娘のリリーナちゃんね。」

リリーナ

「は、はい……………初めまして、リリーナと申します。」

リン

「あら、随分礼儀正しい子ね……………とてもあのヘクトルの子供とは思えないわ。」

リンは丁寧に挨拶するリリーナに思わず感心してしまふ。

リリーナ

「あの、リンさん…………お父様はもう…………。」

リン

「ええ、それもエリウッドから聞いたわ……………一目でいいから彼にも会いたかったわ…………。」

そう言うと、リリーナとリンは少し気持ちが沈んでしまう。

木乃香

「ロイ君、リリーナちゃんのお父様って…………。」

ロイ

「うん、ヘクトル様はベルン軍との闘いの中で致命的な傷を負って、僕の目の前で息を引き取ったんだ…………。」

ネギ

「そうでしたか…………。」

ネギ一行もロイの話聞いて少し気持ちが沈んでしまう。

エリウッド

「……………ところでロイ、私に何か用があったんじゃないのか？」

ロイ

「そ、そうでした……………実は、父上にお願ひがあります！」

ロイはエリウッドに先程ネギ達が話した事を簡単に説明した。

エリウッド

「成程……………分かった、フェレ家を継ぐ者として見事に闘って来い！」

ロイ

「あ、ありがとうございます！」

ロイはエリウッドの返答に思わず感激してしまふ。

エリウッド

「ただし、マリナスにも同行してもらつぞ。」

ロイ

「はい、分かりました。」

エリウッド

「マリナス！居るか？」

マリナス

「はっ！お呼びでしょうか？」

エリウッドが誰かを呼び掛けるように声を掛けると、頭の上の部分が禿げてて後ろだけ青い髪の毛を生やしてる青い髭の初老の男性が駆け付けて来る。

エリウッド

「ロイがしばらくこの地から旅立つ……そこで、お前も一瞬にロイと同行してくれ。」

マリナス

「はっ、畏まりました……。」

リリーナ

「おじ様！私も……私もロイと一緒にいきたい！」

ロイ

「な、何だっ……？」



ロイはリリーナの発言に耳を疑った。

ロイ

「で、でも……………リリーナも一緒に来たら『オステイア』の城はどうするの?」

リリーナ

「大丈夫よ!城にはオステイア重騎士団が居るし……………それに、ロイが一緒だったら私……………」

ロイ

「え?何?」

リリーナ

「う、ううん!何でもない……………お願い、私も一緒に連れてってよ。」

ロイ

「ううん……………」

ロイは腕を組んで深く考え込んでしまっ。

ロイ

「……………分かった、一緒に来ていいよ。」

リリーナ

「本当！？やったあ〜！」

リリーナは嬉しさのあまり思わず飛び跳ねてしまう。

ロイ

「……………すみません、こんな事になってしまっ……………」

アイク

「いや、別に構わないが……………それに、闘いは多いに越した事が無いしな……………」

リン

「だったら、私も一緒に行ってもかしら？」

全員

「えっ!?!」

その場に居た全員はリンの発言に耳を疑った。

ロイ

「と、という事は……リンさんも僕達と一緒に闘ってくれるんですね？」

リン

「勿論！貴方達の話聞いてたらウズウズしちゃって……それに、エリウッドとヘクトルの子がどれ位強いのか見てみたくなってね。」

アイク

「随分極端な理由だな……だが、一緒に行く事には反対しない。」

リン

「そう、ありがとう。」

リンはアイクの返答を聞いて笑顔でお礼を言う。

ネギ

「アイクさん、話が纏まったところでそろそろ船へ戻りましょう。」

アイク

「そうだな、船の修復も終わってる頃だろうし……。」

ロイ

「それでは父上、行って参ります！」

エリウッド

「ああ、気をつけてな。」

ネギー一行とアイクはロイ達を連れて王室から出ようとするが……………。

エリウッド

「あ！アイク殿、お待ちを……………」

アイク

「ん？」

アイクはエリウッドに呼び止められて、その場で立ち止まる。

エリウッド

「ロイとリリーナが世話になるかもしれないが……………あの二人を宜しくお願いします。」

アイク

「ああ、任せてくれ。」

そう言うと、アイクは再び足を動かして、全員城を後にするのであった……。

〈数分後〉

ネギー行とアイクは修復を終えた船の上で傭兵団のメンバーに口  
イ達を紹介していた。

アイク

「……………という訳で、ロイ達も一緒に闘ってくれるそうだ。」

ロイ

「皆さんのお役に立てるように一生懸命闘いますので、宜しく願  
いします！」

リリーナ

「お願いします！」

ロイとリリーナは傭兵団のメンバーに向かって丁寧に挨拶をする。

ティアマト

「こちらこそ宜しくね。」

ミスト

（あの子達、私とほぼ同じ年っばいなあ……………後で色々お話してみようかな。）

ガトリー

（あのリンって女、いい女だなあ……………よし！後で絶対声を掛けてやるぞ〜！〜！）

シノン

「……………ガトリー、お前大丈夫か？」

シノンは一人だけ鼻息を荒くしてるガトリーを見て啞然とする。

アイク

「ところでセネリオ、この『エレブ大陸』から『アカネイア大陸』まではどれ位掛かるんだ？」

セネリオ

「そうですね……………地図によると『エレブ大陸』と『アカネイア大陸』の距離はそれ程離れてませんので、最低でも二ヶ月は掛かりま

すね。」

明日菜

「って事は、二ヶ月はまた船の中で待たなきゃならないのね……………」

刹那

「そういう事ですね……………」

ネギ一行はまた船に缶詰状態になるのかと思いきや苦笑いしてしまう。

ネギ

「で、でも一年掛かるよりはマシですよね？」

木乃香

「まあ、それもそやな……………」

ティアマト

「さて、そろそろ船を出発させましょうか。」

そう言つと、ティアマトは船の中へと入っていく。



アイク

「俺達も中へ入るか……………」

ネギ

「そうですね。」

その場に居た全員も船の中へ入っていく。

バツシャー……ン!!

それと同時に、船が『アカネイア大陸』に向けて再び出航して行くのであった……………。

第六十七話〈若き獅子とロルカ族の女剣士〉（後書き）

ロイ達も船に乗せてネギ達は再び『アカネイア大陸』を目指すのであった……………。

因みに、今回登場したリンデイスは三十五歳という設定です。

何故なら、リンデイスが登場した『烈火の剣』は『封印の剣』よりも二十年前の話であり、初登場の時は十五歳という事で三十五歳にしました。

## 第六十八話 四駿の復活 (前書き)

ネギー行とアイク率いるグレイル傭兵団はロイ達も連れて『アカネ  
イア大陸』を目指していくが……。

## 第六十八話 四駿の復活

とある海上

ネギ達を乗せた船が『エレブ大陸』を出てから丁度二ヶ月が経っていた。

明日菜

「はあ〜っ、退屈ねえ……………」

木乃香

「そやなあ……………」

ネギ一行は船の甲板で暇を持て余していた。

ロイ

「あ！こんな所に居た……………」

すると、ネギ一行の前にロイとマリナスが現れる。

木乃香

「あ、ロイ君……………」

マリナス

「これ！ロイ様に対して失礼じゃぞー！」

ロイ

「マリナス、僕は別に気にしてないから……………それより、こんな所で何してるの？」

ネギ

「いえ、ちょっと暇を持て余してまして……………」

ネギはロイの質問に少し気まずそうに答える。

明日菜

「ところで、リリーナちゃんとリンさんは？」

ロイ

「リリーナはアイクさんの妹のミストさんと一緒に楽しそうに話してて、リンさんもティアマトさんとお話ししてたよ。」

木乃香

「お話かぁ……………ウチらも交ぜらせてもらおかなあ〜。」

刹那

「ですが、途中で私達が参加するといつのもどうかと……………」。

のどか

「あっ!？」

突然のどかが船の外を見て声を上げる。

ネギ

「ど、どうしました？」

のどか

「向こうから大陸が見えてきました……………」。

明日菜

「ほ、本当に!？」

のどか

「はい、あそこです……………」。

のどかが指さす方向を見てみると、水平線の向こうから大陸を発見する。

マリナス

「おお！ もしや、アレが『アカネイア大陸』では……………」

ロイ

「そうかもしれない……………僕、みんなに知らせてくる！」

そう言うと、ロイは船の中へと入っていく。

カモ

「兄貴、やっと目的地に到着したな。」

ネギ

「うん……………でも、それと同時に闘いが僕達を待っている……………」

ネギはどんどん近付いてくる『アカネイア大陸』を険しい表情で見つめながら呟く。

くアカネイア大陸・ガルダの港く

船を港に止めて、全員が船から降りていた。

アイク

「……ふう、やっと『アカネイア大陸』に着いたか。」

ポーレ

「それにしても、長い間船の中に居たから体が鈍っちゃったぜ。」

ヨファ

「僕も待ちくたびれちゃったよ……。」

ポーレとヨファは深い溜め息を付きながら軽く愚痴を零す。

ネギ

「アイクさん、これからどうすんですか？」

アイク

「ああ、今からエリンシアの古い友人だという『タリス王国』の姫に会いに行くんだ。」



ロイ

「その『タリス王国』というのは何処ですか？」

セネリオ

「今まさに僕達が居るこの場所こそ『タリス王国』ですよ。」

セネリオは地図を取り出して広げると、『タリス王国』と記された地形に指さす。

リン

「それなら、今からそのお姫様が住んでるお城へ行きましょう。」

ティアマト

「そうね……………まずは、この国の人に『タリス』の城が何処に建てられてるか聞きましょう。」

アイク

「よし！城の場所が分かっただらすぐにそこへ向かうぞ！」

傭兵団メンバー

「おおーーーーっ！！！」

こうして、ネギ達は『タリス』の城を目指して進み出すのであった……。

〔タリス王国・タリスの城前〕

『タリス』の人から城の事を聞いたネギ達は『タリス』の城の前へとやって来た。

オスカー

「コレが『タリス』の城か……。」

セネリオ

「『クリミア』の城と比べると、随分小さな城ですね……。」

明日菜

「……あのセネリオって子、絶対に物事をはっきりと言うタイプね。」

のどか

「そ、そうですね……………」

明日菜達はセネリオに聞こえないように小さな声で話す。

？

「おい！お前達は何者だ！？」

すると、鎧や甲冑を被った二人の兵士がネギ達の前に現れる。

アイク

「この城の兵士か……………俺達は『クリミア王国』のエリンシア王女の代わりに『テリウス大陸』からやって来たグレイル傭兵団という者だ。」

タリス兵 A

「な、何と！？」

タリス兵 B

「あ、貴方達が……………シーダ様がおっしゃってた……………」

二人のタリス兵はアイクの言葉に思わず耳を傾けてしまう。

ティアマト

「早速ですが、この城の王女様に会わせてもらいたくないでしょうか？」

タリス兵 A

「は、はい！」

タリス兵 B

「では、我々に付いて来て下さい！」

ネギ達は二人の兵士の案内で、城の中へと入っていく。

〈タリス城・王座の間〉

ネギ達は二人の兵士達の案内で、『タリス城』の王座の間へとやって来た。

タリス兵A

「シーダ様！『テリウス大陸』から派遣された傭兵団の皆様が参りました！」

一人の兵士が王座に腰掛けてる長い青色の髪に可憐な容姿の女性にネギ達の事を説明する。

ヨファ

（あの人が『タリス』のお王女様……………綺麗な人だなあ……………。）

ガトリー

（う、美しい……………俺、この人だったら一緒付いて行けそうだぜ……………。）

ごく一部のメンバーはシーダの可憐な容姿に思わず見取れてしまう。

シーダ

「初めまして、私がこの『タリス王国』の王女シーダです……………この度は、私と『アリエティア王国』の為に『テリウス』から遠く離れたこの『アカネイア』まで来て頂いた事を誠に感謝しております。」

アイク

「いや、別にいいんだ……俺は『アリティア』の王子とは、ちょっとした知り合いだからな。」

シーダ

「え？マルス様をご存知なんですか？」

シーダがアイクの言葉に耳を傾けると……。

？

「シーダ！」

突然シーダの前に青い短髪に青いマントを羽織った青年が駆け寄って来る。

シーダ

「あー！マルス様……。」

ネギ

（えっ！？）

明日菜

（あの人がマルス？）

ミスト&ワユ&リリーナ

(……………カ、カツコイイ。)

一部の女性陣はマルスの整った顔立ちに思わず見取れてしまう。

マルス

「さっきこの城の兵士から聞いたんだけど、『テリウス』からやって来た人達が来たって……………あっ!？」

マルスはロイとアイクの顔を見るなり思わず目を疑ってしまふ。

ロイ

「マルスさん、お久しぶりです!」

アイク

「マスターハンドの館で会って以来だな。」

マルス

「アイク!それにロイまで……………本当に久しぶりだね!」

そう言うと、マルスは嬉しそうにアイク達の方へ駆け寄っていく。

マルス

「ひよつとして、『テリウス大陸』から来た傭兵団ってアイク達の事だったの？」

アイク

「そうだ……役に立てるかどうかわかんが、俺達グレイル傭兵団も『アリティア』を取り戻す為に闘わせてもらっぞ。」

マルス

「ありがとう……その言葉だけでも嬉しいよ。」

マルスはアイクの心強い言葉に感極まる。

マルス

「……………ところで、この子達は？」

マルスはネギ一行を見て首を傾げる。

ネギ

「は、初めまして！僕達は……………」

ネギはマルスに自分達の事や今までの経緯を説明した。



マルス

「そうか……………君達にも色々苦労させたったようだね……………」

ネギ

「い、いえ……………それより、マルスさんにもバッチをお渡しします。」

「

そう言うと、ネギはマルスにバッチを手渡す。

マルス

「どうもありがとう……………君達の苦労は決して無駄にはしないよ。」

ネギ

「あ、ありがとうございます……………」

明日菜

「……………マルスさんって、とっても紳士的なのね。」

のどか

「そ、そうですね……………」

ネギー一行はマルスの紳士的な性格に感心してしまふ。

木乃香

「あのく、ちょっと聞いてもええですか？」

マルス

「ん？何だい？」

木乃香

「マルスほんとシーダはんって、どついう関係なんですか？」

マルス&シーダ

「えっ!？」

マルスとシーダは木乃香の突拍子の無い質問に思わず耳を疑った。

マルス

「ど、どついう関係って言われても……………その……………」

シーダ

「な、何て言ったら良いのぢやう……………」

ワユ

「……………ひょっとして、既に将来を誓い合っちゃってるのか？」

マルス&シーダ

「!?!」

マルスとシーダはワユの発言に固まってしまふ。

ワユ

「あれ〜?もしかして凶星ですか〜?」

キルロイ

「ワユ、お二方が困ってるじゃないか……………」。

キルロイは慌ててニヤニヤしながら言葉を続けるワユを制止させる。

ミスト

「将来を誓い合った仲か……………私もいつか、そういう人と出会える  
といいなあ……………」。

ポーレ

(ミスト……………)。

ボーレは少し複雑そうな表情でミストを見つめる。

ヨファ

「どうしたのボーレ？さっきから変な顔でミストちゃんを見つめて……。」

ボーレ

「へー？い、いや……何でもねえ……。」

ヨファ

「……変なボーレ。」

ヨファは激しく動揺するボーレを見て首を傾げる。

リリーナ

「……ねえ、ロイ。」

ロイ

「何？」

リリーナ

「ロイもさ……マルスさんのような立派な王子になったら……」

私と……………その……………」

ロイ

「え？何だった？」

リリーナ

「な、何でもない！」

ロイ

「？」

ロイは何故かそっぽを向いたリリーナの態度に理解出来ず首を傾げる。

マリナス

(……………二人共、まだ若いのお。)

マリナスはロイとリリーナのやり取りを見て思わず微笑む。

アイク

(……………さっきから一体何の話をしてるんだ？)

アイクは周囲の話の内容が理解出来ず首を傾げる。

？

「王子！大変です！！」

すると、紫色の重装備の鎧を身に纏った白髪の男性がマルスの前まで駆け出してくる。

マルス

「ジェイガン、そんなに慌ててどうしたんだい？」

ジェイガン

「敵の將軍の一人がマルス王子に話があるところらまで押し寄せて来ましたぞ！」

マルス

「な、何だって！？」

マルスを含む全員がジェイガンという名の男性の言葉に耳を疑った。

マルス

「……………分かった、今すぐ行こう！」

シーダ

「あーマルス様……。」

マルスはジェイガンと共にその場から駆け出していく。

アイク

「……………俺もちょっと行って来る。」

ロイ

「ぼ、僕も行きます！」

ミスト

「お、お兄ちゃん!？」

リリーナ

「ロイ!」

マルスの後からアイクとロイも駆け出していく。

ネギ

「……………僕も行って来ます!」

明日菜

「あ！ちよつとネギ！！」

更にネギもマルス達に付いて行くように駆け出していく。

↳タリス城前↳

？

「……………フツ、随分ちつちやな城だねえ。」

『タリス城』の前で、緑色の長い髪に黒い軽装備の鎧を身に纏った女性が黒い馬に乗馬しながら呟いていた。

ジェイガン

「王子、こちらです！」



すると、ジェイガンと共にマルス達が城の前に到着する。

？

「お？やっとなたか。」

アイク

「なっ！？お、お前は……『四駿<sup>ししゆん</sup>』のプラハ！？」

アイクはプラハという名の女性の姿を見て驚愕する。

プラハ

「ん？そついうお前は……あの傭兵団のガキじゃないか！？」

プラハもアイクの姿を見て同じく驚愕する。

マルス

「アイク、この女を知っているの？」

アイク

「あ、ああ……『デイン王国』の『四駿』っていう強い奴らの一人だ……だが、この女は『オルリベス大橋』で死んだハズだ……」

ロイ

「えっ！？死んだ？」

ロイを含む全員がアイクの言葉に耳を疑った。

カモ

「兄貴、こりゃひよっとして……………」

ネギ

「うん、恐らくあの黒コートの人達の仕業だと思う……………」

ネギとカモはマルス達に聞こえない程度に話す。

プラハ

「クククク、あたしも最初はビックリしたさ……………だって、死んだハズのあたしが再びこの世に存在してるんだからねえ。」

そう言うと、プラハは不気味な笑みを浮かべる。

アイク

「待てよ、お前が此処に居るって事は……………まさか奴も……………」

プラハ

「そうさ、我が元『デイン王国』の国王……アシュナード陛下もこの世に君臨しておられる。」

アイク

「や、やはり……。」

アイクはプラハの言葉を聞いて俯いてしまう。

ロイ

「アイクさん、アシュナードとは一体……。」

アイク

「アシュナードはかつて『デイン王国』を治めていた奴だ……だが、奴のせいで大陸全土を巻き込む程の戦乱が起こってしまったんだ。」

マルス

「つまり、この女はそいつの手下という訳か……それで、僕に何の用だ？」

マルスはすぐに剣を取り出せる体制でプラハに問い質す。

プラハ

「そんなに身構えなくても、今日は戦いに来たんじゃないんだ……  
…アンタに一つ忠告しようと思ってね。」

マルス

「忠告？」

プラハ

「明日の早朝に『アリティア』の王女……つまり、アンタの姉を  
公開処刑する事になった。」

マルス

「何だって！？姉上を……。」

マルスはプラハの忠告に驚愕する。

ロイ

（姉上って事は……マルスさんのお姉さんが……。）

アイク

（くそっ、人質が居るのか……。）

ネギ

(お、お姉さんを国の人達の前で処刑するなんて……………。)

マルス

「や、止める！そんな事直ちに止めさせる！！」

マルスは剣を抜いて、プラハの首に突き付ける。

ジエイガン

「お、王子！少し落ち着いて下さい！！」

プラハ

「そう、その爺さんの言う通りだ……………それに、姉上を救えるかはアンタ次第だよ。」

マルス

「どういう意味だ？」

プラハ

「アンタが姉上の代わりに処刑されるんだ……………そしたら、アンタの大事な姉上は自由の身さ。」

全員

「!？」

全員がプラハの発言に度肝を抜いた。

ネギ

「そ、そんな……………マルスさんが代わりに……………」

ロイ

「マルスさん！これはきつと罠です!!」

アイク

「そつだ！奴らはお前の姉を返す気なんて無いんだ!!」

マルス

「だ、だけど……………」

プラハ

「まあ、そう焦らなくてもまだまだ時間がある……………もし姉上を助けたかったら、明日の早朝『アリティア』の城前まで一人で来るんだよ。」

そう言うと、プラハを乗せた馬がその場から駆け出していく。

マルス

「ま、待て！」

プラハ

「それじゃ、明日は楽しみに待ってるよ！」

そう言い残すと、プラハを乗せた馬はどんどん遠ざかっていく。

マルス

「……………姉上。」

マルスはそのまま深く落ち込み気味になってしまふ。

ジェイガン

「王子、お気を確かに……………こういう時こそ王子がしっかりせねばなりませんぞ。」

アイク

「その通りだ……………それに、お前の姉はまだ死んではいない。」

ロイ

「そうですよ！落ち込むのはまだ早いですよ。」

マルス

「みんな……そうだね、こういう時こそ僕がしっかりしないとね。」

マルスはアイク達の励ましの言葉に少しでも元気を取り戻す。

ネギ

「取り合えず、皆さんが居る所まで戻りましょう。」

アイク

「そうだな、みんなにもこの事を言わないとな……。」

そう言つと、ネギ達は城の中へと入っていく。

〈タリス城・王座の間〉



シーダ

「そんな……………エリス様を……………」

シーダを含む全員がマルスの口から先程の出来事を全て聞いていた。

明日菜

「それにしても、公開処刑なんて馬鹿げてるわ……………」

ミスト

「それに、国の人達の前で処刑するなんて酷過ぎるよ……………」

アイク

「ミスト……………」

アイクは今にも泣き出しそうなミストを見て困惑気味になってしま  
う。

オスカー

「人質が居るとなれば、こちら側の方が明らかに不利だ……………」

ヨファ

「だったら、先に人質を救出すればいいんじゃないの？」

シノン

「おいおい、簡単に言ってくれるな……………」。

シノンはヨファの発言に呆れ返ってしまつ。

ティアマト

「それに、相手は『テイン』の『四駿』……………人質を救出するにも骨が折れそうね。」

アイク

「セネリオ、何か良い策略は無いか？」

セネリオ

「……………」。

セネリオはしばらく何も言わずに深く考え込んでしまつ。

マルス

「やはり、僕が姉上の代わりに……………」。

ジェイガン

「王子！それだけはいけませぬ！」

シーダ

「そうですね……そんな事してもエリス様や『アリティア』の人は喜びません。」

マルス

「じゃあ、どうすれば……。」

セネリオ

「……少し危険が伴いますが、良い考えを思い付きました。」

アイク

「何だ？是非聞かせてくれ。」

セネリオ

「では、今から僕の考えた作戦を心して聞いて下さい……。」

そう言うと、セネリオはネギ達に自ら考え抜いた作戦を説明していくのであった……。

## 第六十八話 四駿の復活 (後書き)

果たして、ネギ達はマルスの姉・エリスの公開処刑を食い止める事が出来るのか？

第六十九話く公開処刑を食い止める！く（前書き）

マルスの姉・エリスが公開処刑される事となりネギ達はどつやって  
食い止める事が出来るのか？

第六十九話 公開処刑を食い止める！

アリティア王国・アリティアの城前

プラハ

「……………そろそろ時間だね。」

？

「うっ……………うっ……………」

『アリティア』の城の前で、絞首台で両手を縛られて首に縄を掛けられた長い青髪の美しい女性の傍らにプラハと赤い髭と髪を生やした黒い重装備の鎧を身に纏った男性と目元を半仮面で隠してる緑色の髭を生やした黒い鎧を身に纏った男性が立っていた。

住民A

「やめろー！エリス様を離せー！！」

住民B

「そつだそつだ！公開処刑なんて今すぐ中止しろー！！」

住民C

「お前らのような反逆者は直ちに出て行けー！！」

『アリエティア』の住民達は敵の兵士達に塞がれながらも必死で罵声を浴び続ける。

プラハ

「チツ、ウザったい愚民共だねえ……………」

？

「無理もあるまい……………この国の王女が公衆の面前で処刑されてしまっただけだからな。」

？

「……………」

プラハが住民達の罵声に舌打ちするが、残り二人の男性は住民達をただ眺めているだけだった。

プラハ

「ところでブライス殿、聞くところによると臣下の座をあの怪しげな司祭に奪われたんだってねえ？」

ブライス

「っ！？……………だ、誰から聞いた？」

プラハ

「さあ、あたしは噂で聞いたただだから……ねえ？ベウフォレス。」

ベウフォレス

「……………」

ベウフォレスと呼ばれた兜を被った男性は何も答えずにただ黙り込む。

プラハ

「フツ、相変わらず何を考えてるか分からない男だねえ……………」

プラハは何も答えないベウフォレスに呆れ返る。

ブライス

「……………例え臣下の座を降ろされても、ワシは『四駿』の一人として最後まで陛下にお仕えする。」

プラハ

「ほお、良い心掛けなこと……………流石は先々代の王からずっと仕えていた男だねえ。」



プラハはプライスの固い決心に感服する。

ベウフォレス

「……………『アリティア』の王子……………遅いな……………」。

プラハ

「そう言えばそうだねえ……………もつそろそろ来ても良い頃だが……………」。

エリス

「……………マルスは絶対に来ません。」

プライス

「ん？」

プライス達は息苦しそうに話すエリスの言葉に耳を傾ける。

エリス

「マルスは今や『アリティア』を治める立場……………そんな彼が私なんかの為に来るはずがありません。」

ブラハ

「フン、たいした自信じゃないか……だが、あの王子だったら絶対来るよ。」

エリス

「……………何故そう言い切れるのです?」

ブラハ

「あの王子は見るからに自分の事よりも身内の方を優先的に考えるタイプだからね……………だから、来ないなんて有り得ないよ。」

エリス

(確かに、彼女の言う通りかもしれない……………あの子なら迷わず……………)

ベウフォレス

「……………来たぞ。」

エリス

「えっ!?!」

エリスがベウフォレスの言葉に反応して顔を上げると、マルスがゆっくりとこちらへと歩み寄って来る。

住民A

「お、おい！アレってマルス王子様じゃないか！？」

住民B

「マルス様！エリス様を助けて下さい！！」

住民C

「こんな奴ら、さっさとやっつけて下さい！！」

マルス

「……………」

マルスは住民達に何も答えずに、そのまま歩み続ける

プラハ

「ほらね、あたしの言った通りだったろ？」

エリス

（マルス……………）

エリスはマルスの姿を見た途端、思わず涙を一筋だけ流してしまう。

マルス

「さあ、約束通り一人で来たぞ……………早く姉上を解放してくれ！」

プラハ

「その前に、アンタも姉上と同じようにこの縄を首に掛けな……………  
そしたら、姉上は解放してやるよ。」

そう言うと、プラハはエリスの左隣りに吊してある輪の形に縛った縄をマルスに見せる。

エリス

「マルス！来てはいけません！！この者達は私達諸とも処刑するつもりです！」

マルス

「……………分かった。」

エリス

「マルス！？」

マルスはエリスの言葉を無視するかのように、ゆっくりと絞首台に向かって歩き出す。

マルス

(姉上、しばらくお待ちを……………。)

ヨファ

「……………シノンさん、本当に大丈夫なの？」

シノン

「心配すんなって、俺に任せときな。」

その頃、エリスが縄で吊されてる絞首台から数メートル離れた場所の木の上でヨファとシノンが待ち伏せていた。

ヨファ

「でも、あんなに離れた所から王女様の首に掛かっている縄を弓で射止めるなんて幾らシノンさんでも……………」

シノン

「情けねえ事言ってるじゃねえよ……それに、お前に弓を教えた  
やったのは誰だったか忘れちゃったのか？」

ヨファ

「そ、それは……………」

ヨファはシノンの言葉に何も言えなくなってしまつた。

シノン

「さて、早くしねえと他の連中が身動きが取れねえからやるか……  
……………」

そう言うと、シノンは背中から弓と矢を取り出して、エリスの首を  
吊してる細い縄に標準を合わせながら構える。

シノン

「いいか？<sup>まはた</sup>瞬きすんなよ……………今から俺様の達人技を見せてやっか  
らよ。」

ビュッ……

そう言い終わると、シノンは弓矢を発射させる。

ブチッ！！

エリス

「あっ！？」

次の瞬間、エリスの首に掛けられていた縄がシノンが数メートル先から発射させた弓矢によって切断されて、そのまま後ろの方へと倒れていく。

ブライス&ベウフォレス

「！？」

プラハ

「な、何！？」

マルス

「姉上！！」

ガシッ!!

プラハ達が思い掛けない出来事に戸惑う中、マルスは素早く駆け寄ってエリスを受け止める。

ブライス

「い、一体何が起こったというのだ?」

プラハ

「あ、あたしが知る訳ないだろ………兵士共!コイツらを始末しな  
!」

兵士達

「はっ!」

プラハの指示を聞いた数名の兵隊達がマルス達に襲い掛かろうとするが………。

アイク

「……ロイ!今だ!」



ロイ  
「はい!!」

住民の群れの中に潜んでいたアイクとロイが一斉に飛び出していく。

ロイ  
「エクスポーション!!」

アイク  
「噴火!!」

バツシーーーーン!!

兵士達  
「うわぁーーーーっ!!」

ロイとアイクの必殺技が決まり、マルスに襲い掛かろうとした兵隊達を吹き飛ばす。

ブライス  
「お、お前はガウエインの息子の……………」



セネリオ

「感心してる場合じゃありませんよ……僕達も魔法で敵の数を減らないと……。」

リリーナ

「そ、そうだったね……よし、私達も頑張らなくっちゃ！」

そう言うと、リリーナとセネリオはそれぞれ一冊の本を取り出す。

ブワァー……ッ！！

兵士達

「わぁ……ッ！！」

二人が持っていた本を開いたと同時に、竜巻のような風が発生して兵隊達を吹き飛ばしていく。

刹那

「神鳴流奥義・百烈桜華斬！！」

ズツシャー……ッ！！

兵士達

「ぐわあーっ!!」

刹那が夕風で兵隊達を切り付けていく。

ワユ

「へえ、あの刹那って子意外にやるじゃん。」

リン

「ええ、私達も負けてられないわね。」

ワユ

「そうだね………そんなじゃ、一丁やりますか!」

そう言うと、ワユとリンもそれぞれ剣を構えながら兵隊の群れに突っ込んでいく。

ブライス

「落ち着け!体制を立て直すんだ!!」

プラハ

「いいかい!一人足りとも逃がすんじゃないよ!!」

兵士達

「おおーっ！っ！」

城内から敵の兵隊が次々と出て来る。

ティアマト

「オスカー！行くわよ！！」

オスカー

「了解！」

シーダ

「私達も参りましょう！！」

ジエイガン

「はい！」

ティアマト・オスカー・ジエイガンは馬で、シーダはペガサスに乗ってそれぞれ武器を構えて兵隊の群れに突っ込んでいく。

ボーレ

「おりゃーっ！！」

ガッシャーっ！！

兵士A

「ぐわぁーっ！！」

ポーレは持ち前の馬鹿力で斧を振り回し、敵の兵士をぶっ飛ばす。

明日菜

「たぁーっ！！」

ガッキーっ！！

兵士B

「どわぁーっ！！」

明日菜もポーレに続くように『ハマノツルギ（大剣形態）』を振り回して敵の兵士をぶっ飛ばす。

ガトリー

「とりゃっ！！」

ザシュッ!!

兵士C

「ぐはっ!!」

更にガトリーが鋭い槍で敵の兵士を切り付ける。

シノン

「ヨファ、俺達も援護するぞ!」

ヨファ

「うん!」

ビュッ!!

シノンとヨファはその場から弓を構えて、敵の兵隊に向けて弓矢を発射させる。

アイク

「ミスト!キルロイ!マルスの姉を安全な所へ避難させてくれ!」

ミス

「わ、分かった！」

キルロイ

「任せてくれ！」

ネギ

「木乃香さんとのどかさんもお願いします！」

のどか

「は、はい！」

木乃香

「分かったえ！」

マルス

「では、姉上を頼みます……………」

そう言うと、マルスは今まで抱き抱えていたエリスをミス達に託する。

ミス



「エリス様、私達と一緒に来て下さい……………」

エリス

「あ、ありがとうございます……………何とお礼を言えばよいのでしょうか……………」

キルロイ

「いえ、気にしないで下さい……………僕達はただ、貴女様の弟に頼まれただけの傭兵団ですから。」

エリス

「傭兵団？」

マリナス

「さあ、此処は危険です……………急いで安全な場所へ避難しましょう。」

そう言うと、マリナスの案内でミスト達はそこから立ち去っていく。

ブラハ

「ええい！たかが十数人の傭兵ごときに何をてこずってんだい！！」

ブライス

「こうなれば、我々『四駿』の恐ろしさを思い知らせてくれる!!」

ベウフォレス

「……………」

ブラハ達は絞首台から降りて、それぞれ武器を取り出して戦闘態勢へと移る。

ブライス

「……………そう言えば、さっきから奴の姿が見えないな。」

ベウフォレス

「……………奴は……………城の中で……………待機してる……………」

ブラハ

「フン、あの男が居なくなっただってあたしら三人が居れば十分さ。」

アイク

（そうか、やはり奴も居たか……………城の中だな……………よし!）

ブライス達の話聞いていたアイクは、隙を見て城の中へと入っていく。

ネギ

( あっ！？アイクさんが城の中へ……………。 )

アイクが城の中へ入っていく光景を目にしたネギは思わずアイクの後を追いつけていく。

ブライス

「ムッ！？ガウェインの息子と魔導士の小僧が城の中へと入って行きおった！」

プラハ

「チツ、舐めた真似を……………城の中には行かせないよ!!！」

プラハ達は慌てて城の中へ入ろうとするが……………。

マルス

「待て!!！」

突然マルス・ロイ・リンの三人がプラハ達の前に立ち塞がる。

ロイ

「この先は絶対に行かせない!!」

リン

「その代わりに、私達が貴方達の相手をするわ!」

ブライス

「フツ、いいだろう……では、相手をしてくれますか?」アリエ  
「アア』の王子よ……。」

マルス

「望むところだ!」

そう言うと、マルスとブライスは場所を変える為にその場から離れていく。

プラハ

「それじゃ、あたしの相手は……。」

リン

「私が相手よ!」

リンは刀を取り出してプラハを挑発する。

プラハ  
「ククク、別にあたしは構わないさ……………ところで、アンタは半生と黒焦げとどっちがいい？」

リン  
「は？一体何の話？」

プラハ  
「あたしが持つてる『フレイムランス』はね、どんな物でも一瞬で焼き尽くしてしまう魔法の槍なのさ。」

そう自慢げに言うと、プラハは真っ赤な長い槍をリンに見せ付ける。

リン  
「そう、それは凄そうね……………でも、私はそう簡単には焼かれないわよっ。」

プラハ  
「ほお、随分言ってくれるじゃないか……………だったら、灰になるまで焼き尽くしてやるよー!!」

そう言うと、プラハとリンも場所を変える為にその場から離れていく。

ロイ

「……………どうやら、貴方の相手は僕のようなだ。」

ベウフォレス

「……………滅びよ……………滅……………。」

そう呟くと、ベウフォレスは剣を抜き取る。

ロイ

「悪いけど、僕もそう簡単にはやられる訳にはいかない……………。」

ロイもベウフォレスに対抗するように剣を抜き取る。

ベウフォレス

「……………私……………を……………。」

ロイ

「え？」

ベウフォレス

「……………私を……………殺せ……………私……………を……………。」

ロイ

「何だって？」

ロイはベウフォレスの意味深な発言に耳を疑った。

ロイ

（この人、正気を失ってるのかな？）

ベウフォレス

「グ…………グ…………グオオオオオオツ！！」

ロイ

「!？」

ガツキーーーーーン！！

ロイは間一髪でベウフォレスの攻撃を受け止める。

ロイ

「やはり様子が可笑的…………ブレイザー！！」

ブワァー……ッ!!

ベウフォレス

「グオツ!？」

次の瞬間、ロイがジャンプしながら剣を突き上げてベウフォレスの剣を弾き返す。

ロイ

「出来れば正気を取り戻してあげたいな……。」

ベウフォレス

「グオオオオオツ!!」

ベウフォレスは再びロイに向かって襲い掛かっていく。



「アリテイヤ城・城内」

アイク

「はあっ!」

ガツシャーーン!!

兵士達

「ぐわあーっ!!」

その頃、アイクは剣で兵隊達を薙ぎ倒しながら城の奥へと突き進んでいた。

ネギ

「アイクさーん!」

アイク

「ん?」

アイクはネギの声に反応して後ろの方を向いてみると、ネギがこちらに向かって走っていた。

アイク

「ネギか………何で俺に付いて来たんだ？」

ネギ

「いや、アイクさんが一人で城の中へ侵入して行ったから心配で…  
…。」

アイク

「………おいおい、今は自分の身を心配しろよ。」

アイクはネギの性格に少し呆れ返ってしまつ。

カモ

「まあまあ、ネギの兄貴はそういう男なのさ。」

アイク

「まあいい、だが気をつける………恐らく、この城にはまだ奴が待ち構えているハズだ。」

ネギ

「奴？それは一体誰なんですか？」

アイク

「そいつは『四駿』の中でも最強の強さを誇り、漆黒の鎧を身に纏った男……そして、俺の親父を殺した張本人だ。」

ネギ

「えっ！？アイクさんのお父さんを……。」

ネギはアイクの発言に思わず耳を疑った。

アイク

「そうだ……そして、奴はこう呼ばれている……。」

？

「漆黒の騎士……とな。」

ネギ&アイク

「!?!」

ネギとアイクは何者かの声に驚いきながら振り向いてみると、そこには赤いマントを羽織って全身が漆黒の鎧に身を纏った人物が立っていた。

アイク

「やはり現れたな……漆黒の騎士!!」

漆黒の騎士

「随分久しいな……………ガウエインの息子よ。」

ネギ

「ガウエイン？アイクさんのお父さんの名前はグレイルでは……………。」

アイク

「ガウエインというのは親父が『テイン王国』の將軍だった頃に使用していた名前だ……………そして、その時の親父の弟子が漆黒の騎士という訳だ」

ネギ

「で、では……………この人は自分の師匠<sup>マスター</sup>を……………。」

漆黒の騎士

「そう、私が自らの手で殺したのだ……………父親を心配して慌ててやって来た息子の目の前でな。」

アイク

「き、貴様……！」

アイクは漆黒の騎士の言葉に怒り、素早く剣を抜き取って身構える。

ネギ

「アイクさん！僕も一緒に……………」

アイク

「いや！奴は俺が倒す……………それに、奴にはこの『ラグネル』の攻撃しか通用しないんだ。」

ネギ

「そ、そんな……………」

カモ

「兄貴、この場はアイクの旦那に任せようぜ。」

ネギ

「う、うん……………」

ネギはカモの意見に渋々承諾する。

漆黒の騎士

「さあ、そろそろ始めようか……………」

アイク

「……………言っておくが、俺はあの時よりも数倍も強くなってるぞ。」

漆黒の騎士

「ほお、それは楽しみだ……………では、その力を私に見せてみる!!」

アイク

「ああ！行くぞ!!」

アイクはラグネルを構えながら漆黒の騎士に向かって駆け出していく。

くアリティア城・王座の間く

?

「アッシュナード陛下、奴らがこの城に侵入したみたいです。」

アシュナード

「そうか……………ガーネフよ、お前が我の為に授けた竜を用意しろ。」

ガーネフ

「はっ、直ちに……………」

ガーネフと呼ばれた緑色の衣装を身に纏った初老の男性は王座に腰掛けているアシュナードの命令を聞いて、その場から立ち去ろうとするが……………。

ガーネフ

「……………ところで、陛下に一つだけお願いがあります。」

アシュナード

「何だ？申してみよ。」

ガーネフ

「私に『アリティア』の王子の首を取らせて頂きたいのですが……………。」

アシュナード

「フッ、好きにせよ……………こんな弱国の王子の首など我は興味無い。」

「

ガーネフ

「有り難き幸せ……………」

そう言い残すと、ガーネフはその場から立ち去っていく。

アシュナード

「……………ガーネフの奴、あの王子に対して相当な憎悪を内側に秘めてると見た……………それを力としてどのように発揮出来るかも見物だな……………」

アシュナードはマルスに対して憎しみを抱くガーネフに興味を持っていくのであった……………。



第六十九話く公開処刑を食い止める！く（後書き）

果たして、アイク達は『四駿』に打ち勝つ事が出来るのか……………。

因みに、ネギ達がエリスの公開処刑を食い止めるというシーンは『暁の女神』のムービーにて、アイク率いるグレイル傭兵団がルキノの公開処刑を食い止めるシーンを参考にしました。

……………ファンの人は分かって頂けたでしょうか？

第七十話 狂王と悪の司祭の最後 (前書き)

マルス達はそれぞれ『四駿』のメンバーと戦う事になるが、果たして勝利の行方は……。

第七十話 狂王と悪の司祭の最後

「アリティア城・城前」

マルス

「ハア…………ハア…………。」

ブライス

「うぐっ…………ば、馬鹿な…………。」

マルスはブライスとの闘いに終止符を打ったところだった。

ブライス

「ワ、ワシの…………最強の槍…………『ゼーンズフト』が…………敗れるとは…………その剣…………ただの剣では…………ないな…………。」

マルス

「この剣は『ファルシオン』といって、ナーガというmammothの牙から制作された剣だ。」

ブライス

「mammoth…………かつてこの地に…………生息していた…………竜の種族か…………成程…………それでは勝てぬ…………ハズ…………だ…………。」

「

ボタン！！

ブライスはそのまま倒れ込んで、息を引き取ってしまう。

マルス

（『四駿』の将ブライス……………手強い相手だった……………。）

マルスは息を引き取ったブライスを眺めながらファルシオンをしま  
う。

マルス

（ところで、ロイとリンさんはどうしてるかな……………。）

？

「きゃあーっ！！」

マルス

「！？」

突然向こう側から女性の叫び声が響き渡る。

マルス

(い、今の悲鳴は……まさかリンさんじゃ……。)

そう思いながら、マルスは叫び声がした方をゆっくり向いてみると……。

プラハ

「へ、陛下……お許しを……どうか……お許しを……。」

バタンー！

リン

「……ふう、何とか勝った……。」

髪や服とかに少し焦げ目が付いてるリンの前でプラハが膝から崩れるように倒れ込む光景がマルスの目に写った。

マルス

「……良かった、リンさんが勝ったようだ。」

マルスはリンが勝利した事に一安心する。

マルス

「さて、残るはロイだけだが……………」。

ロイ

「うわぁーっ！！」

マルス

「!?!」

マルスがロイの叫び声に反応して振り向いてみると、ロイがベウフオレスに追い込まれていた。

マルス

「マズイ！ロイの方はピンチだ……………」。

ベウフオレス

「グオオオオオツ！！」

次の瞬間、ベウフオレスが両手で剣と槍を構えながらロイに襲い掛かる。

マルス

「あ、危ない!!」

マルスは咄嗟にフルシオンを取り出して、慌ててロイの方へ駆け出していくが……。

ロイ

「……カウンター!!」

ガツキーーーーーン!!

ベウフォレス

「グオツ!?!」

ロイがベウフォレスの攻撃を受けたと同時に、素早く反撃して二つの武器を弾き返す。

ロイ

「今だ! エクスプロージョン!!」

ドオーーーーーン!!

ベウフォレス  
「グオーーーーーッ!!」

次の瞬間、ロイの強烈な必殺技がベウフォレスに命中する。

ベウフォレス

「ガ……………ガア……………」

バタン!!

ベウフォレスはそのまま倒れ込み、静かに息を引き取ってしまう。

ロイ

「……………結局、あの人の正気を取り戻す事が出来なかった……………」

そう呟くと、ロイは少し落ち込んだように顔を俯いてしまう。

マルス

「ロイ!!」

マルス

「あ、マルスさん……………」



ロイはマルスの声に反応して顔を上げると、マルスがこちらに駆け寄って来る。

マルス

「どうやら、『四駿』は全員倒したようだね。」

ロイ

「はい……………それより、アイクさんとネギ君が城の中へ……………」

マルス

「ああ、僕達も城の中へ行ってみよう。」

ロイ

「でも、まだ敵の兵士があんなに……………」

ロイが指さす方を見ると、明日菜達が未だに敵の兵士達と激闘を繰り広げていた。

マルス

「そうだね……………」  
「………」

兵士達

「うぉーっ！！」

すると、敵の兵士達がマルス達に向かって襲い掛かって来る。

リン

「はぁーっ！！」

ガッシャーっ！

兵士達

「ぬわぁーっ！！」

次の瞬間、リンが敵の兵士達の前に立ち塞がり剣を大きく振って攻撃を繰り返す。

ロイ

「リ、リンさん!?!」

リン

「この場は私に任せて、貴方達は城の中へ入って!」

マルス

「……………分かりました。」

ロイ

「マ、マルスさん……………」

マルス

「ロイ、此処はリンさんとか人が沢山居るけど、城の方はアイクとネギ君の二人しか居ない……………だから、僕達だけでも城へ行ってみよう！」

ロイ

「……………そうですね、僕達は城へ行きますよ！」

そう言うと、マルスとロイは城に向かって駆け出していく。

リン

「さあ、覚悟なさい……………これで決める！！！」

リンはマルス達が城の中へ入ったのを確認すると同時に、そのまま敵の兵士達に向かって駆け出していく。

（アリティア城・内部）

アイク

「ハアハア……………」

その頃、アイクは激しく息を切らしながら漆黒の騎士と対峙していた。

ネギ

「……………す、凄い闘いだね。」

カモ

「ああ、強さもお互いほぼ互角だしな……………」

ネギとカモはアイクと漆黒の騎士との闘いを少し離れた場所で観戦していた。

漆黒の騎士

「ほお、どうやら口先だけではなかったようだ……確かに、あの時とは比べものにならない位一段と強くなったな。」

アイク

「今頃気付いたか……だが、今更後悔しても遅い！」

そう言うと、アイクは剣を振りかざしながら漆黒の騎士に向かって駆け出していく。

ガッキーーーーン！！

すると、漆黒の騎士が持っていた剣でアイクのラグネルを受け止める。

漆黒の騎士

「後悔などしていない……ただ、貴様とまたこうして剣を交える事を期待していた。」

アイク

「何だと？」

アイクが漆黒の騎士の言葉に耳を傾けた瞬間……。

漆黒の騎士

「はあっ!!」

ガキーーーーーン!!

アイク

「!?!」

ネギ

「あっ!?!」

漆黒の騎士がラグネルをアイクの頭上へと弾き返してしまふ。

漆黒の騎士

「そろそろ止めをさしてやるっ!!」

そう言つと、漆黒の騎士はアイクに向けて剣を振り下ろそうとする。

アイク

「そうはいくか!!」

バツ!!

漆黒の騎士

「何っ!?!」

次の瞬間、アイクはそのまま頭上に向けて高くジャンプする。

アイク

「喰らえ!天・空!」

ズバァー!ー!ー!ツ!!

漆黒の騎士

「ぐおお!ー!ー!っ!!」

アイクは吹っ飛ばされたラグネルを空中でキャッチして、そのまま勢い良く下降しながら漆黒の騎士を切り付ける。

カモ

「スゲェ〜!見事に決まっただぜ!!」

ネギ

「それに、あんなに大きな剣を軽々と扱えるなんて……アイクさん

って相当の力持ちなんだね。」

ネギとカモはアイクの必殺技が見事に決まり思わず感心してしまう。

漆黒の騎士

「ふう……………まさか、あのタイミングで『天空』を発動させるとは……………褒めてやろう……………」

アイク

「そりゃどうも。」

漆黒の騎士

「フフフフ、次に会うのが楽しみだ……………」

アイク

「何？それはどういう意味だ？」

漆黒の騎士

「いずれ分かる日が来るだろう……………」

ガッシャー—————！！



そう言い残すと、漆黒の騎士はそのまま膝から倒れ込んでしまう。

アイク

「お、おい！今の言葉は一体……っ！？」

倒れ込んだ漆黒の騎士の方へ駆け寄ったアイクは何かに気付いて言葉  
を失ってしまう。

ネギ

「アイクさん？どうしました？」

アイク

「……………コレをしてみる。」

ネギ

「えっ……………コ、コレは！？」

ネギはアイクが指さす先を見ると、甲冑かっちゅうが外れて鎧よろいの中身が空から  
っぽになって倒れ込んでる漆黒の騎士が目に見えた。

ネギ

「な、中身が……………無い？」

アイク

「一体どういう事だ？」

カモ

「うーん……………これは俺たちの推測だが、恐らく生身の奴は魔法のような力で鎧に精神を転移させて別の場所で操ってたんだろ。」

アイク

「じゃあ、俺が前に『ナドウス城』で奴と闘った時も……………」

そう言い掛けると、アイクは顔を少し俯いてしまう。

ネギ

「ア、アイクさん……………」

アイク

（漆黒の騎士……………次に会った時は必ず決着を付けてやる……………）

そう思いながら、アイクがゆっくりと顔を上げた時……………。

？

「おーいー！」

ネギ

「え？」

ネギとアイクが声がした方を向いてみると、向こうからマルスとロイがこちらへ駆け寄って来る。

ネギ

「マルスさん！それにロイさんも……………」

ロイ

「ふう、二人に追い付いて良かった……………」

マルス

「此処から先は僕達も同行させてもらおうよ。」

アイク

「ああ、頼む……………俺達二人だけじゃアシュナードに勝てないからな。」

ネギ

「……………そのアシュナードって人はそんなに強いんですか？」

アイク

「そつだ……………何せ、奴は狂王キョウオウと呼ばれる程戦いくはを誰よりも好む男だ。

」

マルス

「戦を好む狂王アシュナード……………その男を倒さない限りこの戦いは終わらないという事が……………」

ロイ

「……………とにかく、先へ進みましょう！この戦いを終わらせて『ア  
リティア』を救う為に……………」

アイク

「そつだな……………よし！一気に進むぞ！！」

ネギ

「は、はい！」

ネギ達はそのまま城の奥を目指して突き進んでいくのであった……………  
…。

くアリティア城・王座の間前く

しばらく進み、ネギ達は『王座の間』へと通じる扉の前までやって来た。

ロイ

「この扉の向こうにアシユナードが……………」

マルス

「きつと、僕達が此処まで来る事を予測して待ち構えているに違いない。」

ネギ

「だとすると、むやみに入るのは危険では……………」

アイク

「いや、どうせ俺達が来るのを分かっているなら、このまま突入するぞ！」

ガチャンー!!

そう言うと、アイクが一足先に扉の向こうへと入っていく。

ネギ

「あーちよつと……。」

カモ

「……………行っちゃまったな。」

ロイ

「アイクさん、相変わらずですね……………」

マルス

「とにかく、僕達も行ってみよう!」

アイクに続いて、ネギ達も扉の向こうへと入っていく。

アッシュナード

「クククク、よくぞ此処まで来れたな……………」

扉の向こうに入ったネギ達の前に、巨大なドラゴンのような真っ赤

な生物に跨がり巨大な剣を掲げたアシュナードが待ち構えていた。

ロイ

「あの男が……………狂王アシュナード……………」

マルス

「そして、祖国『アリティア』を侵略した張本人……………」

アイク

「……………変だな。」

ネギ

「な、何がですか？」

アイク

「奴が乗っている竜……………前に乗っていた竜とは全然違うんだ。」

カモ

「おいおい、今はそんな事どうでもいいじゃねえか……………」

カモはアイクの言葉に呆れ返る。

？

「フオッフオッフオッフ……………マルス王子よ、待っておったぞ。」

マルス

「そ、その声は……………まさか！？」

マルスが突然聞こえてきた声に反応すると、アシユナードが乗っている竜の傍らにガーネフが姿を現す。

マルス

「ガ、ガーネフ！？何故お前が此処に……………」

ガーネフ

「フッフ、地獄の底から蘇ったのさ……………貴様を地獄へと迎える為にな！」

ブワッ！！

全員

「！？」

次の瞬間、ネギ達の前におよそ数十人程のガーネフが姿を現わす。



ネギ

「こ、これは……………分身？」

マルス

「そう、全部ガーネフが作り出した分身だ。」

ロイ

「こ、こんなに沢山……………」

ロイは数十体ものガーネフの分身に驚愕する。

アイク

「マルス、ロイ、ネギ、すまないがコイツらの相手は任せた……………俺はアシュナードを倒す！」

そう言うと、アイクはアシュナードに向かって駆け出していく。

アシュナード

「ほお、たった一人だけで我に挑むとは何とも無謀な……………まあよい！掛かって参れ！！」

アイク

「行くぞ！天・空！！」

アイクはラグネルをアシュナードの頭上に投げ付けて、勢い良くジャンプしてラグネルをキャッチして『天空』を繰り出すが……。

ガツキーーーーン！！

アシュナード

「……………フツ、それで攻撃したつもりか？」

アイク

「な、何！？」

アシュナードはアイクの攻撃を直に受けたにも関わらず、平然と怪しい笑みを浮かべていた。

アシュナード

「片腹痛いわあー！！」

ズツシャーーーーーツ！！

アイク

「ぐわぁーっ!!」

アイクはアシュナードが持った剣によって吹っ飛ばされてしまっ。

ロイ

「アイクさん!!」

ロイ達は慌ててアイクの方へと駆け寄る。

ネギ

「大丈夫ですか?」

アイク

「あ、ああ……………俺は平気だが……………奴に俺の攻撃が効かなかった……………」

マルス

「何だって?」

マルス達はアイクの言葉に思わず耳を疑った。

アシュナード

「クククク、流石はガーネフが生成した暗黒魔法マフー………これ程の強力な魔法とはな。」

マルス

「マ、マフーだと!？」

更にマルスはアシュナードの発言に耳を疑った。

ネギ

「マルスさん、そのマフーというのはどういう魔法なんですか？」

マルス

「マフーとは、ガーネフが闇のオーブを盗んで自ら生成した悪霊を呼ぶ暗黒魔法………ガーネフはそのマフーの力を使ってアシュナードを守っているんだ。」

カモ

「………あのガーネフって野郎、そんなとんでもねえ魔法を作りやがったのか………」

ガーネフ

「フフフ………このワシを倒さぬ限りマフーが解けぬどころか、アシュナード王を打ち勝つ事も出来ぬぞ!」

アシユナード

「更には言えば、貴様らは我に傷一つ付けられる事も不可能だ！」

アイク

「マフーか……………かなり厄介だな。」

ロイ

「まずは、ガーネフを倒さないと……………。」

ガーネフ

「それも無理だな……………何故ならワシ自身もマフーによって守られておるのだ……………さあ、行け！我が分身達よ！！！」

そう言うと、ガーネフの分身達がネギ達に向かって襲い掛かって来る。

アイク

「仕方ない……………先に奴らを片付けるぞ！」

ロイ

「はい！」

ガーネフ分身A

「はぁーーーーっ!!」

ポオーーーーッ!!

次の瞬間、一人の分身が掌から炎を放つ。

ネギ

「危ない!風楯!!」

ブワーーーーッ!!

ネギが咄嗟に魔法の楯を発生させて、分身の炎の攻撃を防ぐ。

マルス

「ありがとう、助かったよ……」

ネギ

「いえ、どう致しまして……」

アイク

「よし、この調子で一気に行くぞ!」

そう言うと、アイク達は剣を振りかざしながら分身達の方へ駆け出していく。

マルス

「ドルフィンスラッシュュ!!」

ズツシャーーーーーッ!!

ガーンフ分身A

「ぎゃあーーーーッ!!」

ロイ

「ブレイザー!!」

ボワアーーーーッ!!

ガーンフ分身B

「ぐおーーーーッ!!」

アイク

「居合い斬り!!」

ズバァー！ー！ー！ー！ー！

ガーネフ分身C

「がはぁー！ーっ！！」

マルス・ロイ・アイクが次々とガーネフの分身をそれぞれの剣で切り付けていく。

ガーネフ

（フッフ、せいぜい精魂尽き果てるまで分身共と戦ってるがよい……邪魔な王子共を始末したら、あの狂王をワシの意のままに操って全大陸を支配する事もそう遠くは無いわ……。）

ガーネフは分身達に紛れ込みながら怪しい笑みを浮かべる。

アイク

「……………それにしても、幾ら切り付けてもキリが無いな……………。」

ロイ

「ええ、全然数が減ってないようだし……………。」



そう言いながら、ロイ達がガーネフの分身を次々と切り付けていると……………。

アシュナード

「おっと！我の事を忘れては困るぞ！」

ロイ

「!?!」

ロイがアシュナードの声に反応して後ろを向いてみると、そこにはドラゴンに跨がったアシュナードが居た。

ロイ

「し、しまった……………」

アシュナード

「さあ、竜よ！この愚かな反逆者を骨の随まで焼き尽くせ!!」

ゴォー……………ッ!!

ドラゴンはロイに向けて口から炎を吐き出す。

マルス

「ロイ！危ない！！」

ガシッ！！

ロイ

「わっ！？」

すると、マルスが手を伸ばしてロイの手を掴んだと同時に勢い良く引っ張って炎を間髪避ける。

マルス

「ふう……………ロイ、大丈夫だったかい？」

ロイ

「は、はい……………うっ！！」

ロイは先程の炎で火傷してしまった右足を押さえる。

マルス

「足を火傷したのか……………すぐに手当てをしなくては……………」

ガーネフ

「そんな暇は無いぞ！」

マルス

「!？」

ガーネフ

「暗黒魔法マフーの力を思い知るがよい!！」

ズドオーーーーーン!!

次の瞬間、ガーネフがマルスに向けて掌から黒い魔力<sup>マフー</sup>を放つ。

ネギ

「風楯!！」

ところが、ネギがマルスの前に現れて、魔法の楯を発生させてガーネフの攻撃を防ぐ。

ネギ

「マ、マルスさん……………ロイさんを連れて今の内に逃げて下さい……………」

マルス

「わ、分かった！」

マルスはロイの肩を抱きながら、その場から離れていく。

ガーネフ

「ほお、貴様も魔導士のような……だが、その程度の結界では我がマフーを防ぎ切れぬぞ！」

ネギ

「ううっ……………」

ネギはガーネフの攻撃にどんどん押されていく。

カモ

「だ、駄目だ兄貴！これ以上は危険だ！！」

ガーネフ

「もう遅い！はあ……………」

ネギ

「うわあ……………」

楯が破られ、ネギはガーネフの攻撃を全て受けてしまう。

アイク

「ネギーーーーーッ!!」

アイクは急いでネギの方へ駆け出そうとするが……………。

アシュナード

「待て! 貴様の相手はこの我であるぞ!」

アイク

「くそっ! 邪魔するな!!」

アイクは行く手を阻まれたアシュナードに攻撃を仕掛けていく。

ネギ

「う……………う……………。」

次の瞬間、ネギがその場からゆっくりと立ち上がる。

カモ

「兄貴、大丈夫かよ？」

ネギ

「あ、あまり大丈夫じゃ……………ないかも……………」

カモ

「そつだよなあ……………あんな強力な魔法をまともに喰らっちゃったからな……………木乃香姉さんさえ居ればなあ……………」

ネギ

「そ、それより……………マルスさん達が苦戦してる……………何とかしないと……………」

カモ

「あ、兄貴！こんな時にまで人の心配を……………」

？

(……………少年よ。)

ネギ

「えっ！？だ、誰？」

ネギは何者かの呼び掛けに反応して辺りを見回す。

カモ

「兄貴？どうした？」

ネギ

「い、今誰かが僕を呼んだ声が……………」

？

（魔導士の少年よ、ワシの声が聞こえるか？）

ネギ

「ほ、ほら！また聞こえた……………」

カモ

「……………誰も兄貴を呼んでねえぞ？」

カモはネギの言葉に呆れながら答える。

？

（……………残念じゃが、ワシの声はお前さんにしか聞こえんのじゃよ。

）

ネギ

「そ、そうなんですか……ところで、貴方は一体誰なんですか？」

？

（ワシの事は後で話そう……それより、お前さんに授けたい物があるんじゃない。）

ネギ

「僕に授けたい物……それって何ですか？」

？

（スターライトとってな、ガーネフが生成したマフーの力を無効にする事が出来る道具じゃ。）

ネギ

「えっ！？そ、それは本当ですか？」

カモ

「……………兄貴、さっきから誰と話してんだよ？」

カモは一人で話し掛ける（ように見える）ネギの姿に啞然とする。

？



（じゃが、このスターライトを使えるかはお前さん次第じゃ……………。）

ネギ

「僕次第……………ですか？」

？

（そうじゃ……………それでも使ってみるか？）

ネギ

「……………はい、お願いします！」

？

（そうか……………では、スターライトをお前さんに授けよう！）

パァー……………ッ！

全員

「…!?」

強い光が発せられた後、ネギの前に星の形をした物体が現れる。

ガーネフ

「ま、まさかアレは……………スターライト!？」

マルス

「ど、どうしてネギ君の前に……………」

ネギ

「コレがスターライト……………コレをどうすればいいんですか?」

?

(スターライトを手にとって掲げて、お前さんの魔法の始動キを唱えた後で『スターライト・エクスプロージョン』と唱えるのじゃ。)

ネギ

「分かりました!」

ネギが謎の声に対してお礼を言うと、スターライトを持ってガーネフの方に視線を向ける。  
マルス

(ま、まさか……………)

ガーネフ

「フ、フフフ……………こんな小僧にスターライトを扱えるものか……………」

「。」

ネギ

「ラス・テル マ・スキル マギステル……闇から生まれし暗黒の力 清き光で全てを照らせ……スターライト・エクスペローションー！」

パアーーーーーッ！！

ネギが呪文を唱えた後、スターライトから強力な光が部屋全体から放たれる。

アイク

「うっ!？」

アシュナード

「な、何だ!？」

ロイ

「こ、この強い光は一体……。」

マルス

「これは正しく……スターライト・エクスペローション……。」

「

ガーネフ

「ば、馬鹿な……………何故こんな小僧ごときが……………」

マルス達が強い光で目を詰むっていると、ガーネフの分身達が一人残らず消滅していく。

ネギ

「マルスさん！今の内に……………」

マルス

「あ、ああ！分かった……………」

マルスは光が止んで来たと同時に、ガーネフの方へと駆け出していく。

マルス

「ガーネフ！覚悟……！」

ガーネフ

「し、しまった！」

マルス

「喰らえ！シールドブレイカー！！」

ザシュツ！！

ガーネフ

「がはっ……………」

次の瞬間、マルスはファルシオンをガーネフの心臓に突き刺す。

ガーネフ

「フ、フフフフ……………またスターライトによって……………打ち負かされるとは……………仕方ない……………再び地獄の底で……………お前達が……………やって来るのを……………期待すると……………しよう……………」

ボタン！！

そう言い残すと、ガーネフはそのまま倒れ込んで息を引き取っていく。

ロイ

「マルスさん、やりましたね……………」

マルス

「……………いや、まだ終わってない。」

そう言うと、マルスは視線をアシュナードの方へと向ける。

アイク

「さあ、これでマフーとやらの力が消えたな……………今度こそ覚悟しろ！狂王アシュナード！！」

アシュナード

「……………ククククク、マフーの力があるのが無かるのが我には無関係だ……………この竜と共に貴様らを始末してくれるわ！！」

そう言いながら、アシュナードが剣を大きく掲げた瞬間……………。

バツター————ン！！

アシュナード

「な、何！？」

突然アシュナードが乗っていたドラゴンがそのまま倒れ込んでしま

う。

ロイ

「い、一体どうしたんだろう……。」「

マルス

「さあ、分からない。」「

アシユナード

「チツ、役に立たぬ化け物だ……。もうよい！我のグルグランドで八つ裂きにしてくれようぞ！！」

そう言うと、アシユナードはドラゴンの背から降りてグルグルランドという武器を掲げながらアイクに襲い掛かって来る。

アシユナード

「死ねえーーーーー！！！」

アシユナードはそのままアイクに向けてグルグランドを振り下ろすが………。

バツ！！

アシュナード

「何っ!?!」

アイクがその場で高くジャンプしてアシュナードの攻撃を避ける。

ネギ

「コ、コレってまさか……………」

カモ

「ああ、間違いねえ……………アイクの旦那はアレをやるつもりだ。」

アイク

「これで終わりだ……………天・空!」

ズツシャー……………!

アシュナード

「ぐお……………!」

アイクはそのままアシュナードの真下に向けて落下していくと同時に、天空でアシュナードを切り付けていく。



ロイ

「や、やった！」

マルス

「これで……これで遂に『アリティア』が救われた……。」

そう囁くように言うと、マルスはその場で膝を地面に付けてしまう。

アシュナード

「クク……良い……良いぞ……実に良い……もっと……  
もっとだ……この至上の時は……まだ……まだ……。」

ボタンー！！

その言葉を最後に、アシュナードはそのまま倒れ込み静かに息を引き取っていく。

アイク

「……ふう、これでお前の国は救われたな。」

マルス

「ああ……みんな、本当にありがとう……。」

マルスはゆっくりと立ち上がり、アイク達に向けて深くお辞儀をする。

ネギ

「マルスさん、本当に良かったですね……………」

ロイ

「ネギ君、さっきの魔法は凄かったけど……………大丈夫？」

ネギ

「は、はい……………少し疲れましたけど……………」

カモ

「無理もねえよ、あんなに強力な魔法を放ったんだからな……………それにしても、あの呪文は何処で覚えたんだ？」

ネギ

「え？えつとね……………」

ネギがカモに詳しく説明しようとしたが……………。

アイク

「……………なっ!?!」

マルス

「ど、どうしたの?」

アイク

「……………アシュナードが乗っていた竜が段々女の子の姿になっていく。」

ロイ

「えっ!?!」

アイクの言葉に耳を疑ったマルス達がドラゴンが倒れてた場所を見てみると、そこには緑色のロングヘアに薄いピンク色の衣装を身に纏った少女が倒れ込んでいた。

ロイ

「ほ、本当だ……………。」

マルス

(あれ?この子もしかして……………チキ?)

マルスは少女の姿を見て思わず目を疑った。

？

「う、うん……………」

すると、少女が目を開けてそのままゆっくりと起き上がる。

ネギ

「あ、起きたみたいですね……………」

？

「……………貴方達は誰？」

アイク

「だ、誰って……………それはこっちの台詞だ。」

少女は首を傾げながらネギ達を見つめる。

マルス

「ねえ、君はチキ……………じゃないの？」

？

「チキ？違う……………私の名はナギ……………」

ネギ

（ナ、ナギ！？父さんと同じ名前だ……………。）

ネギはナギと名乗る少女の名前に耳を疑った。

ロイ

「この子、マルスさんの知り合いなんですか？」

マルス

「い、いや……………ただ、顔や髪型とかが知り合いの子と非常に似てたからつい……………」

アイク

「ところで、お前は何でアシユナード達に従ってたんだけ？」

ナギ

「分からない……………私、自分の名前以外何も覚えてないの……………」

そう言うと、ナギは両手で頭を抱えたまま地面にしゃがみ込んでしまっ

マルス

「だ、大丈夫かい？」

カモ

「それにしても、この嬢ちゃんは一体何者なんだ？」

？

「その子はワシらと同じマムクートじゃよ。」

アイク

「だ、誰だ！？」

アイク達は警戒しながら声がした方を向いてみると、そこには長い白髭を生やした老人が立っていた。

マルス

「ガ、ガトー様！？」

ガトー

「うむ、久しいのおマルス。」

マルスはガトーという名の老人を見て思わず驚愕する。

ロイ

「……………どうやら、マルスさんの知り合いのようですね。」

マルス

「ああ、ガトー様は『カダイン』という魔導士の学園都市を設立させた偉大なお方なんだ。」

ガトー

「いやいや、偉大と言う程では……………」

ネギ

(あれ?この声は……………)

ネギはガトーの声を聞いてて何かに気付く。

ネギ

「あのく、ひよっとして貴方が僕にスターライトを授けて下さった……………」

ガトー

「そうじゃ、ワシがお前さんの心の中に語り掛けてスターライトを授けたんじゃよ。」

ネギ

「や、やっぱり……………先程はありがとうございます！」

ネギはガトーに向かって深くお辞儀をする。

ガトー

「これこれ、頭を上げなさい……………それに、感謝するのはワシの方じゃよ。」

ネギ

「え？」

ガトー

「お前さんのお蔭で『アリティア』が救われたようなものじゃからのお……………だから、感謝するのはお互い様じゃ。」

ネギ

「そ、そんな……………僕はただ無我夢中で……………」

ネギはガトーの感謝の言葉に照れてしまう。



アイク

「ところで、話を元に戻すが……アンタがさっき言ってたマムク  
ートってのは何々だ？」

ガトー

「おお、そうじゃったのお……マムクートというのは、かつてこ  
の大陸全土に生息していた竜の種族じゃ。」

ロイ

（マルスさんの国にもマムクートが生息していたのか……。）

アイク

（という事は、『ゴルドア王国』に住んでる『竜鱗族』みたいなも  
のか……。）

ロイとアイクはガトーの説明に納得する。

ガトー

「因みに、ワシもマムクートの一人なんじゃ。」

ネギ

「えっ！？ほ、本当ですか？」

ロイ

「し、信じられない……………」

アイク

「……………人は見掛けによらないって本当だな。」

ネギ達はガトーの発言に思わず耳を疑った。

マルス

「それよりガトー様、このナギって子は一体……………」

ガトー

「おっと、忘れとった……………ワシも詳しくは知らんが、恐らくこの子はこの世界とは全く別の次元の何処かで眠っていたところをガーネフによって目覚めさせられて操られていたのである……………」

ロイ

「操られていた……………可哀相に……………」

ロイ達は悲しそうな眼差しでナギを見つめる。

ナギ

「あ、あの……………私、皆様に何かご迷惑な事をしてしまったのでし

ようか？」

マルス

「い、いや！もういいんだ……………何もかも全て終わったんだ。」

そう言うと、マルスは笑顔を浮かべながらナギの頭を優しく撫でる。

ナギ

（この人、とても優しい……………私、何だかドキドキしてきちゃった……………。）

そう思いながら、ナギは微かに頬を紅く染めながらマルスを見つめる。

マルス

「……………ガトー様、この子をしばらく此処に置いてても宜しいでしょうか？」

ガトー

「うむ、別に問題は無いからいいじゃろう。」

マルス

「ありがとうございます。」

マルスがガトーの言葉に感謝していると……………。

明日菜

「お〜い！ネギ〜！！」

シーダ

「マルス様ー！！」

リリーナ

「ロイ〜〜！！」

ミスト

「お兄ちゃんー！！」

遠くから明日菜達の呼ぶ声が響き渡る。

ネギ

「あ！明日菜さん達だ……………。」

ガトー

「さあ、お前さん達の大切な者達が呼んでおる……………早く会いに行

ってあげなさい。」

マルス

「はい！分かりました！！」

ロイ

「アイクさん！早く行きましょう！！」

アイク

「ああ、分かってる……………」。

そう言いつと、ネギ達はその場から一斉に駆け出して行く。

こうしてネギ達はそれぞれ大切な人達との再会を果たし、その後のネギー行とアイク率いるグレイル傭兵団＋ロイ達は『アリティア王国』の国民達に讃えられながら『アカネイア大陸』を後にするのであった……………。

## 第七十話〜狂王と悪の司祭の最後〜（後書き）

……最後の閉めが少々強引で申し訳ありませんでした。

もう台詞やネタとかが浮かばなかったもので……（汗）。

因みに、ラストで登場したナギというキャラは『新・暗黒竜と光の剣』に登場したキャラで、チキというマムクートの少女が死亡した時だけ仲間に来るキャラです。

この小説の世界では、チキが生存するという設定なのでこういう形でナギを登場させました。

という訳で、次回は『ワリオ編』なのでお楽しみに〜！

第七十一話『ダイヤモンドシティの住人達』（前書き）

マルス達の世界から館へ帰って来たネギー行が次に行く世界は……  
…。



## 第七十一話〈ダイヤモンドシティの住人達〉

〈翌日・大乱闘の館〉

マルス達の世界から帰って来て翌日の早朝、ネギー行はいつものように中庭に集合していた。

マスターハンド

「さて、今回はアルファベットのWの形をしたバッチをワリオに渡してほしいのだが……………」

ネギ

「ワリオさんですか……………何だか、名前がワリオさんと似てますね。」

明日菜

「そりゃそうよ、ワリオってワリオさんの世界のキャラだもの。」

カモ

「何でい、またワリオの旦那の世界に行くのかよ……………」

カモは明日菜の言葉を聞いて呆れ返ってしまう。

マスターハンド

「……………す、すまないがそうしてほしい。」

木乃香

「ウ、ウチらは別に構わへんよ……………ね？せつちゃん。」

刹那

「も、勿論ですよ！」

マスターハンド

「そうか、そう言ってくれと非常に助かる。」

のどか

（……………マスターハンドさんって、浮き沈みが激しいですね。）

のどかはマスターハンドの浮き沈みの切り替えの早さに啞然とする。

ネギ

「では、そろそろ行きましょうか。」

そう言つと、ネギ一行はいつものようにワープ土管へと入っていく。

「ダイヤモンドシティ」

ネギー行はビルのような大きな建物とかが数軒建てられる近代的な町へやって来たのだが……。

明日菜

「わあ〜っ！随分都会的な町ねえ……ね？ネギ……って、あれ？」

明日菜はネギの方を向いたが、そこには誰も居なかった。

明日菜

「ネギ達が居ない……おい！みんなー！！」

明日菜は懸命に辺りを見渡しながらネギ達を呼び掛ける。

明日菜

「……………はあゝっ、みんなどうしたんだろう……………もしかして、私だけがこの世界に来ちゃったのかしら？」

ネギ

( 皆さん！聞こえますか！？ )

明日菜

「ネ、ネギ！？」

明日菜は突然念話で呼び掛けてきたネギの声に反応する。

ネギ

( 僕は今、念話で皆さんに語り掛けてますが……………皆さんの方から僕に語り掛けてもこっちから皆さんの声は一切聞こえませんのでご理解下さい。 )

明日菜

「そ、そっか……………でも、少なくともネギは無事のようね。」

明日菜はネギの声を聞いて一先ず一安心する。

ネギ

（出来れば、今から皆さんを捜しに行きたいのですが……こんな大きくて広い町を宛ても無く歩き回ったら僕も迷う恐れがあるので、今僕が居る場所を合流地点にしたいと思います。）

明日菜

「成程ね……それで、アンタは今何処に居るのよ？」

ネギ

（因みに、僕は町から少し外れた所にある洋館みたいな古い建物の門の前に居ます。）

明日菜

「洋館みたいな古い建物ね……分かったわ！」

ネギ

（それでは、僕は皆さんが無事に辿り着ける事を心から願ってます………気をつけて下さいね。）

明日菜

「大丈夫だって！ちゃんと合流するから………って、私の声はネギに聞こえないんだっけ……。」

明日菜は思わずネギの言葉に答えてしまって苦笑いする。

明日菜

「さてと、早速その洋館を捜さないと……でも、何処にあるんだろ  
うっ？」

？

「それじゃ、行って来ま〜す！」

明日菜

「ん？」

明日菜は声が出た方を向いてみると、ピザ屋らしき店からオレンジ色のロングヘアーで高校生位の少女が元気良く出て来る。

明日菜

「そつだ！あの人に聞いてみよつと……。」

そう言つと、明日菜は少女の方へと駆け寄って行く。

明日菜

「あ〜、ちょっといいですか？」

？

「はい？何でしょうか？」

明日菜

「ちよつと道を教えてほしいんだけど……………」。

？

「あゝ、ごめんなさい……………あたし、これからバイトでピザの配達をしなきゃならないの。」

明日菜

「そ、そうですか……………」。

？

「Hey！モナちゃん、またピザ配達のバイトを始めたのかい？」

突然青いアフロのような髪型にサングラスを掛けて音符のような髭を生やした男性がモナという名の少女に声を掛ける。

モナ

「あージミーさん、丁度良いところに……………実は、お願いがあるの。」

ジミー

「何だい？僕で良かったら何でも相談に乗るYO<sub>よ</sub>。」

モナ

「あたしの代わりに、この子を道案内してほしいんだけど……い  
いかな？」

ジミー

「OK！丁度エアロビクスのインストラクターの仕事を終えたから  
何処でも案内してあげるYO。」

モナ

「ありがとう！助かったわ……それじゃ、あたしは配達があるか  
らもう行くね。」

ブローローツ！！

そう言うと、モナは小さくて真っ赤なバイクに乗ってその場から去  
っていく。

ジミー

「………ところで嬢ちゃん、何処を案内してほしいんだい？」

明日菜

「え？え〜と確か……町外れにある洋館のような古い建物があ



る場所へ行きたいんですけど……。」

ジミー

「町外れの洋館と言えばあそこか……。OK！僕に付いて来なYO  
！！」

明日菜

「お、お願いします……。」

明日菜は啞然とした表情でノリノリな雰囲気以案内してくれるジミーに付いて行くのであった。

◇ダイヤモンドシティ・ゲームセンター前◇

一方、木乃香はゲームセンターらしき建物前でさ迷いながら歩いていた。

木乃香

「……………それにしても、ネギ君がおるっちゅう洋館って何処にあるんやろ？」

そう言いながら、木乃香は周りを見回しながら歩いていると……………。

？

「ねえねえ、あのゲーム面白かったよね。」

？

「ああ、また明日もやってみたいとね。」

木乃香

「ほえ？」

木乃香はふと声がした方を向いてみると、ゲームセンターの中からパトランプ付きのヘルメットを被った小柄の少年と黄緑色のジャージを着てサングラスを掛けた大柄の男性が出て来た。

木乃香

「そや、あの親子連れの人に道を聞いてみよ！」

そう言うと、木乃香は親子連れらしき二人組の方へと駆け寄ってい

く。

木乃香

「すいませ〜ん、ちょっとええですか〜？」

？

「え？僕ちん達？」

？

「何ですと？」

木乃香

「ウチ、洋館みたいな古い建物を搜してるんやけど……………心当たりとか無いやろか？」

？

「洋館みたいな古い建物って…………『ホラーマンション』の事かな？」

？

「きつとそつたい。」

親子らしき二人はお互いに顔を見合わせながら場所を確かめる。

木乃香

「もし知ってたら、道を教えてくれへんかな？」

？

「うーん、困ったなあ……………今から、僕ちんの家でエイティーンポルトと一緒にゲームしようと思ってたのに……………なあ？」

18（エイティーン）ポルト

「でも、このお姉さん困ってるみたいやから仕方ないよね。」

木乃香

「……………あれ？二人は親子とちゃうの？」

18ポルト

「違いますたい、俺っちとナインポルトは『ダイヤモンド小学校』の同級生ですたい。」

9（ナイン）ポルト

「でも、僕ちん達って、よく親子と間違われるよね？」

木乃香

「そ、そやったんや……………間違えてごめんね。」

木乃香はかなりバツが悪そうにエイティーンボルトという名の少年に謝る。

18ボルト

「もうええですたい、いつもの事だから……。」

9ボルト

「そうそう、だからあまり気にしないでよ。」

木乃香

「う、うん……。」

9ボルト

「あ！ちよつと待って……。」

突然ニンボルトは何かを発見して道路沿いの方まで駆け出し、く。

9ボルト

「ハイ！タクシー……！」

キーーーーーッ……！！

ナインボルトが左手を挙げると、一台のタクシーが急ブレーキを掛ける。

？

「何や、誰かと思ったらナインボルトはんでっか。」

タクシーの運転席の窓が開かれると、ブルドックのような犬の顔した運転手が顔を出す。

木乃香

(わぁ！犬の運転手さんや……………)。

木乃香は目を輝かせながら運転手を見つめる。

9ボルト

「どお？最近仕事の方は順調？」

？

「いやあ、最近お客が来ないから暇で仕方ないんですわ。」

9ボルト

「そっか……だったら、僕ちんがお客さんを紹介してあげよっか？」

？

「え！？ホンマでっか？」

9  
ボルト

「うん、あのお姉ちゃんだよ。」

そう言うと、ナインボルトは木乃香を指さす。

？

「おお！久しぶりのお客さんや……さあ、早よう乗って下さい！」

木乃香

「いや、あの……。」

18  
ボルト

「ん？どないしたと？」

木乃香

「じ、実はウチ……お金持ってへんねん。」

全員

「ええー！ーっ！？」

ナインボルト達は木乃香の発言に耳を疑った。

？

「うーん、煩いなあ……………ドリブル、何をそないに騒いどんねん？」

ドリブルと呼ばれた運転手の隣の助手席で今まで眠っていた黄色い猫のような顔した小柄の男性が眠い目を擦りながら目を覚ます。

ドリブル

「スピッツはん！居眠りしとる場合ぢやいまっせ……………久しぶりのお客さんでっせ。」

スピッツ

「何！？ホンマかいな？」

ドリブル

「で、でも……………お金を持つとらんそうなんですわ……………」。

スピッツ

「……………へ？」



スピッツと呼ばれた猫の男性はドリブルの言葉に目を丸くさせる。

スピッツ

「……………なあドリブル、そういうのをお客さんと言えるか？」

ドリブル

「うへん……………言われへんとちゃいます？」

スピッツ

「せやろ？そのお客さんには悪いけど、ワシらのタクシーに乗せる訳にはいかへんなあ……………」

9 ボルト

「何だよ、一回ぐらいタダで乗せてやってもいいじゃん。」

スピッツ

「そない言つても、こっちも商売やから……………」

木乃香

「ええよ、ウチはナインボルト君達から道を聞いたら、そのまま歩いて行くから……………」

18ボルト

「姉ちゃん……………」

ナインボルトとエイティーンボルトは哀れむような表情で木乃香を見つめる一方で、睨むような目付きでドリブルとスピッツの方も見つめる。

ドリブル

「……………スピッツはん、これじゃまるでワテら患者みたいでんな。」

スピッツ

「せ、せやな……………」

ドリブルとスピッツはナインボルト達の痛い視線に困惑してしまっ。

9ボルト

「お姉ちゃん、此処から『ホラーマンション』までかなり距離があるよ。」

18ボルト

「そつたい、車とかに乗ってけば十分位で着けるだとも……………」

ドリブル&スピッツ

「……………」

ドリブルとスピッツはナインボルト達の言葉を聞いて何も言えなくなってしまう。

スピッツ

「あゝも〜！ワシらの負けや……………お嬢ちゃんは今だけ特別に夕  
ダで乗せてあげたるわ！」

木乃香

「えっ……………ホ、ホンマにええの？」

ドリブル

「勿論や！男に二言はあらへん！」

9ボルト

「やったね！お姉ちゃん。」

木乃香

「う、うん……………どうもありがとうございます！」

木乃香はドリブル達に向かって深くお辞儀する。

ドリブル

「お礼なんてええから、早よう乗った乗った！」

木乃香

「は、はい！」

そう言うと、木乃香はタクシーの中へと入っていく。

9 ボルト

「じゃあね、お姉ちゃん！」

18 ボルト

「気をつけて行くとよ。」

木乃香

「うん、ナインボルト君とエイティーンボルト君もありがとう！」

そう言いながら、木乃香はナインボルト達に向かって手を左右に振る。

スピッツ

「ところでお客様、行き先は何処ですか？」

木乃香

「『ホラーマンション』っていう場所まで行って下さい。」

ドリブル

「『ホラーマンション』でんな……………」

ブロロロロッ!!

次の瞬間、ドリブルが車のキーを回してエンジンを掛ける。

スピッツ

「お客様、シートベルトをしたら何かに掴まって下さいね。」

木乃香

「え？それってどういう……………」

ドリブル

「ほなら、全速力で行きまっせ……………」

ブオー……………」

木乃香

「あれ~~~~っ!？」

ドリブルが勢い良く車のアクセルを踏んだ瞬間、目にも止まらぬ速さでタクシーが発進していく。

18ボルト

「……………あの姉ちゃん、堪えられるかいな？」

9ボルト

「さ、さあ……………」

ナインボルトとエイティーンボルトはその場で啞然とした表情のまま物凄いスピードで発進して行ったタクシーを見つめていた。

◇ダイヤモンドシティ・パール広場◇

一方、刹那は道沿いが芝生になってる広場で辺りを見回しながら駆け抜けるように走っていた。

刹那

(一刻も早くネギ先生や木乃香お嬢様達と合流しなければ……それにしても、一体何処に洋館のような古い建物があるんだ……。)

そう思いながら、刹那は走るスピードを緩める事無く進んでいると……。

?&?

「待って！それ以上進んぢや駄目!!」

刹那

「!?!」

突然誰かに呼び止められた刹那は、そのまま勢い良く立ち止まる。

刹那

(い、今の声は何処から……っ!?)

刹那は声の主を捜そうと前を向いてみると、刹那の足元の前方には  
沢山のマキビシが撒き散らされてあった。

刹那

「コ、コレはマキビシじゃないか……………一体誰がこんな物を……………」

?

「しめんなさい……………」

?

「それ、あたち達がやったの……………」

刹那

「え？」

刹那は二つの幼い声が聞こえた方を見ると、そこにはそれぞれ  
ピンク色とオレンジ色のショートヘアで幼稚園児位の二人の小さな  
少女が居た。

刹那

「……………き、君達は？」



？

「私たちはカット、『ダイヤモンド幼稚園』の幼稚園生です。」

？

「私たちはアナ、同じく『ダイヤモンド幼稚園』の幼稚園生でカットお姉ちゃんの妹です。」

カットとアナと名乗る双子の姉妹は刹那に向かって軽く自己紹介をする。

刹那

「そ、そう………ところで、本当にこのマキビシは君達がやったの？」

カット

「はい、あたちとアナが忍術の修行ちゆの為にバラ撒いたの……。」

アナ

「本当にごめんなさい……。」

そう言つと、カットとアナは申し訳なさそうに深々と頭を下げる。

刹那

「いや、それはいいけど……こんな危ない物を遊びで使っちゃ……」

カット&アナ

「遊びぢやありませんー!」

刹那

「!?!」

刹那はカットとアナの大声に驚いてしまう。

カット

「あたち達の父上は伊賀忍者の子孫だつたの……」。

アナ

「だから、あたち達も大きくなつたら立派なくノーになる為に此処で修行ちてたの……」。

刹那

(忍術の修行か……この子達、鳴滝姉妹の風香さんと史伽さんに似てるな……)。

そう思いながら、刹那はカットとアナをクラスメートの鳴滝風香と

鳴滝史伽と重ね合わせながら見つめる。

カット

「……………あの、何ですか？」

アナ

「あたち達の顔に何か付いてますか？」

刹那

「い、いや！何でも無い……………ところで、君達に聞きたい事があるんだけど……………」

カット&アナ

「え？何々？」

カットとアナは興味津々な面持ちで刹那の話に聞き耳を立てる。

刹那

「実は私、洋館のような古い建物へ行きたいんだけど……………心当たりとかあるかな？」

アナ

「洋館のような古い建物……………」

カット

「それって、『ホラーマンション』の事かな？」

刹那

「何か知ってるの？」

刹那はカットの言葉に聞き耳を立てる。

カット

「うん、あたち達が通ってる幼稚園がある町の少子離れた場所にあるよ。」

アナ

「もち良かったら、あたち達が案内ちてあげまちょうか？」

刹那

「え？でも、今は修行中なんじゃ……………」

カット

「いいの、もう修行は終わったち……………」

アナ

「あたち達、帰る時にそこを通るから付いて来ていいよ。」

刹那

「そう……ありがとう、助かるよ。」

カット

「それぢゃ、あたち達に付いて来てね。」

そう言つと、カットとアナは歩き出すと同時に刹那も二人の後を付いていくように歩き始める。

？

「とつとつ！やあつ！！」

刹那

「ん？」

刹那は掛け声がした方を向いてみると、広場の中心で青いチャイナ服を着た青年と紫色のチャイナ服を着た小柄の老人が妙なポーズをしながら立っていた。

刹那

「あの二人は……………」

カット

「ん？……………あ！アレはクリケット殿とマンティス殿だよ。」

刹那

「ひょっとして、二人の知り合い？」

アナ

「うん、何でもウィー拳という拳法を極める為にあたち達の町にやって来たみたい……………それに、クリケット殿はあたち達と一緒いっしょに修行してくれたりするの。」

刹那

(ウィー拳……………古菲が聞いたら興味津々に習いそうだな……………)

刹那はカットとアナの話を聞いて、クラスメートの古菲くふえいの事を思い出す。

クリケット

「あれ？あそこに居るのは……………おい、カットちゃん！アナちゃん！」

カッター達を発見したクリケットという名の青年はカッターとアナを元  
気良く呼び掛けながら大きく手を振る。

カッター

「クリケット殿〜！今日もマンティス殿と修行ちてるの〜？」

クリケット

「そうさ！一日も早く師匠みたいに強くなりたいとね。」

アナ

「修行頑張ってる〜！」

クリケット

「ああ！ありがと……………」。

マンティス

「隙有り！〜！」

ポカッ！！

マンティス

「痛っ！！〜！」

すると、突然マンティスがクリケットの頭にチョップを繰り出す。

マンティス

「クリケットよ、まだまだ修行が足りぬな。」

クリケット

「ち、畜生……師匠！もう一度お願いします！！」

マンティス

「うむ、何処からでも掛かって来るがよい。」

クリケット

「うおーーーーっ！！」

クリケットはマンティスに向かって素早く攻撃を繰り出すが、マンティスはクリケットの攻撃を全て俊敏に避ける。

刹那

（あの二人、相当出来るようだ……。）

刹那はクリケット達の動きに何かを悟り、驚愕しながら二人の修行を眺めていた。



カット

「ねえ、どっちなの？」

アナ

「早く行きまちょ。」

刹那

「え？あ、ああ……。」

そう言うと、刹那はカットとアナの後を付いて行きながら進んでいく。

〈ダイヤモンドシティ・ダイヤモンドアカデミー前〉

一方、のどかは屋根の部分に巨大なアンテナを付けた大きな建物の前でウロウロしていた。

のどか

「あう、此処は一体何処なんだろう……早くネギ先生が言った洋館のような古い建物を捜さなきゃ……。」

そう呟きながら、のどかが未だに辺りをウロウロしていると……。

？

「あ、う、すみません……。」

のどか

「あうっ！？」

のどかは突然背後から声を掛けられて慌てて振り向いてみると、そこには茶髪で三つ編みのような髪型をして眼鏡を掛けた中学生位の少女が立っていた。

のどか

「あ、あの……私に何かご用でしょうか？」

？

「い、いえ……さっきからそこでウロウロしてるから気になったもので……どうしたんですか？」

のどか

(え?わ、私……………そんなにウロウロしてたなんて……………あう、これじゃまるで不審者みたいですよ……………。)

のどかはあまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら両手で顔を隠してしまふ。

?

「……………本当にどうしたんですか?」

のどか

「あ、いや、その……………私、洋館のような古い建物を探してたんです。」

?

「洋館のような建物ですか……………ひょっとして、『ホラーマンション』の事でしょうか?」

のどか

「え?ご存知なんですか?」

?

「はい、実際に行った事はありませんが、場所は知ってます。」

のどか

「そうですか……………もし宜しければ道を教えて頂けないでしょうか？」

？

「ええ、いいですけど……………」

？

「ペニー、こんな所で何をしておる？」

のどか達は声が出た方を向いてみると、そこには頭の部分と手足が機械化して黄色いレザースーツを着用してる男性と頭にスピーカーのようなボディに二つのマイクを付けた目付きの悪いロボットが立っていた。

ペニー

「お、お爺ちゃん！」

？

「こんな所で油を売っとる場合ではないぞ？早く準備をしないと間に合わなくなってしまうぞい。」

のどか

「間に合わないって……………何かあるんですか？」

ペニー

「はい、私が通ってるこの『ダイヤモンドアカデミー』で私とお爺ちゃんとの発明の対決をするんです。」

のどか

「発明……………じゃあ、貴女は科学者なんですか？」

ペニー

「はい！と言っても、まだ科学者の卵なんですけどね……………」

のどか

（……………この子、何だか葉加瀬さんに似てます。）

のどかはペニーを同じクラスメイト葉加瀬聡美と重ね合わせながら見つめる。

ペニー

「因みに、私のお爺ちゃんのクライゴアは立派な科学者なんですよ。」

「

クライゴア

「オッホン！」

クライゴアという名の男性はわざとらしく咳払いをする。

クライゴア

「それよりペニー、早く試合会場へ行くぞ。」

ペニー

「で、でも……………この人に道を教えてあげないといけないし……………」

クライゴア

「それなら、マイクに案内させればよからう……………マイク、あの娘から行きたい場所を聞いて道案内するのじゃ。」

マイク

「了解デ、アリマス。」

そう言つと、マイクという名のロボットはのどかの方へと歩み寄る。

マイク

「初メマシテ、まいくと申シマス。」

のどか

「は、初めまして……………宮崎のどかです……………」

のどかは思わずマイクに向かって軽くお辞儀をする。

マイク

「トコロデ、ノドカサンハ何処へ行キタイノデ、アリマスカ？」

のどか

「え、えっと……………『ホラーマンション』へ行きたいのですが……………」

……………」

マイク

「『ほらーまんしょん』デスネ……………了解デ、アリマス。」

そう言つと、マイクはそのまま歩き出していく。

のどか

「あーちょ、ちょっと待って下さい……………」

のどかは慌ててマイクを追い掛けるように駆け出していく。

ペニー

「……………お爺ちゃん、マイクだけに案内させて大丈夫かな？」

クライゴア

「心配なかるう、マイクは私が作った発明の中でも優秀じゃからな……………そんな事より、急いで会場の方へ行くぞ。」

ペニー

「う、うん……………」

ペニーとクライゴアはそのまま『ダイヤモンドアカデミー』の中へと入っていく。

マイク

「ソウダ、道案内シテル間ニ一曲ダケ歌ツテモイイデ、アリマスカ？」

のどか

「歌ですか……………はい、是非聞かせて下さい。」

マイク



「アリガトウゴザイマス……………ソソジャ、早速歌ノ準備ヲ……………」

そう言うと、マイクは頭に付けてるマイクを手に持ち始める。

マイク

「まいくがまいくがまいくがすぎゝ まいくでゝ まいくでゝ  
ゝ まいくがすぎゝ すぎゝ」

のどか

(あう……………す、凄い歌声……………)

のどかはマイクの音痴な歌声に耐え切れずに両手で耳を塞ぎながら  
『ホラーマンション』へ向けて歩いていくのであった。

第七十一話　ダイヤモンドシティの住人達（後書き）

果たして、ネギー行は無事に合流する事が出来るのだろうか？

第七十二話　洋館に住む魔法使いの少女（前書き）

明日菜・木乃香・刹那・のどかの四人は『ダイヤモンドシティ』の  
住人達の案内で『ホラーマンション』へ向かうのだが……。

第七十二話 洋館に住む魔法使いの少女

「ダイヤモンドシティ・ホラーマンション前」

ネギとカモは明日菜達と合流する為に『ホラーマンション』の門の前で待機していた。

ネギ

「……………明日菜さん達、中々来ないね。」

カモ

「もしかして、皆さん達の身に何かあったんじゃない？」

ネギ

「ま、まさか……………」

ネギがカモの言葉を聞いて不安になっていると……………。

ボツカアーーーーン！！

ネギ&カモ

「!?!」

突然『ホラーマンション』の方から大きな爆発音が響き渡る。

ネギ

「い、今の爆発音は一体……………」

カモ

「あの洋館の方から聞こえたようたぜ。」

ネギ

「じゃあ、あの中に誰か居るのかな？」

カモ

「よし！ちよっくら俺っちが見に行つて来るぜ。」

そう言うと、カモはネギの肩から飛び出して地面へと着地する。

ネギ

「あ！僕も一緒に……………」

カモ

「いや、兄貴は此処で待つててくれ。」

ネギ

「え？どうして？」

カモ

「だって、途中で皆さん達が此処に来るかもしれないだろ？」

ネギ

「あ、そっか……でも、カモ君だけで大丈夫？」

カモ

「心配すんなって、ちょっと洋館の中を見て来るだけだからさ……  
…そんなじゃ、行って来るぜ！」

そう言い残すと、カモは門を抜けて『ホラーマンション』の扉の隙間からこっそりと入っていく。

ネギ

（……………本当に大丈夫かな？）

ネギは不安そうな表情でカモが入った『ホラーマンション』を眺める。

（ホラーマンション内）

カモはとても広くて長い廊下を歩きながら『ホラーマンション』の住人を捜し回っていた。

カモ

（それにしても、随分広い屋敷だなあ……………本当にこんなお化け屋敷みてえな所に人が住んでるのか？）

？

「あゝあ、また失敗してもうたなあ……………」

カモ

（ん？あの部屋から声が……………）

カモは何者かの声が聞こえてきた部屋の前までやって来て、半分開きっぱなしの扉から少しずつ覗き込んでみると……………。

？

「まあまあ、そないに落ち込まんと……俺がまた新しい材料を調達してくるさかい。」

？

「……………うん。」

部屋の中には、おさげのような髪型に赤い服を着た少女と頭に二つの小さな角を生やした真つ赤な小悪魔のような小柄な生物が大きな煙を上げてる金属製の大鍋の前に立っていた。

カモ

(どうやら、あいつらがこの屋敷の住人みてえだな……………しかし、あの小鬼みてえな奴は何だ？)

カモが食い入るように小悪魔の方を見ていると、大鍋から大きく上げていた煙がカモの辺りを覆っていく。

カモ

「ぶえっ！？な、何だ？この強烈な臭いは……………堪んねえ〜！〜！」

？



「……………誰？」

カモが煙の臭いに堪えられずに思わず声を上げると、少女が半分開けっぱなしの扉の方を睨むように見つめる。

カモ

（マ、マズイ！見つかったまう……………）。

カモは咄嗟的に、扉の左側に設置してある甲冑の上へと登っていく。

？

「アシユリー、今の声は……………もしかして、泥棒とちやうやるか？」

アシユリー

「分からない……………レッド、見て来て。」

レッド

「お、俺が！？」

レッドと呼ばれた小悪魔は、アシユリーという名の少女の言葉に思わず耳を疑った。

アシユリー

「……………駄目？」

レッド

「い、いや……………分かった、ちょっと見に行つて来るわ……………」

そう言つと、レッドは洪々と扉を開けて辺りを見回す。

レッド

「……………可笑しいなあ、誰もおらんようぢや。」

カモ

(ふう〜、危ねえ……………もうちょっとで見つかるどころだったぜ……………)

そう思いながら、カモは甲冑の上で「安心して」と……………。

ガクン!!

カモ

「あれ……………つわぁ——————っ……………」

レッド

「わっ！？な、何や？」

突然甲冑の頭の部分だけが崩れ落ちて、カモはそのままレッドの顔面に落下してしまう。

カモ

「ヤベエ！急いで逃げろおーーーーーっ！！」

レッド

「あ！こら待て！！」

カモはその場から急いで逃げ出すが、レッドがカモを捕まえようと追い掛けて来る。

カモ

「畜生！付いて来んじゃねえよ！！！」

レッド

「待たんかい！このお喋りネズミー！！！」

カモ

「俺っちはネズミじゃねえやい！由緒正しいオコジヨ妖精でい！！！」

レッド

「そんなんどつちでもええねん！大人しく捕まらんかー！ーい  
！！」

そう言い合いながら、カモとレッドは屋敷中の隅から隅まで追い掛  
けっこを繰り返して行く。

（ホラーマンション前）

一方、ネギは『ホラーマンション』の門の前でカモが戻って来るの  
を待っていた。

ネギ

（カモ君、遅いなあ……………もしかして、何かあったのかな……………。）

ネギはそう思いながら、『ホラーマンション』の方を眺めていると  
……………。

ズツドオーオーツツ!!

ネギ

「!?!」

『ホラーマンション』の中庭に豚の顔の形した円盤が落下してくる。

ネギ

「な、何だ?急に空から何か落ちてきたみたいだけど……………」

ネギは円盤が不時着した場所に向かって駆け出していく。

?

「痛タタタ、マタ着地ヲ失敗シテしまッタ……………」

すると、円盤の中から体中が真っ白で黒いマントとサングラスを付けた小柄な謎の生物が出て来る。

ネギ

「あ、あの……………大丈夫ですか?」

?  
「ン?.....おワッ!？」

謎の生物は背後から突然ネギに声を掛けられて思わず驚いてしまう。

?  
「び、びっくりさせないで下サイ.....心臓が止まるカト思イマシ  
タ。」

ネギ  
「す、すいません.....それより、さっきの衝撃で怪我とかしてま  
せんか？」

?  
「怪我デスか?私ナラ大丈夫デすヨ。」

ネギ  
「そうですね、それは良かった.....。」

ネギな謎の生物の安否を知って思わず安心して胸を撫で下ろす。

?

「トコロデ、貴方ハ誰デスカ？コノ町デは見慣れない顔デすが……」

ネギ

「え？ぼ、僕ですか？」

ネギは謎の生物の質問に思わず聞き返してしまつ。

ネギ

「僕の名前はネギです……実は、この町にはさっき来たばかりなんです。」

？

「ソウでシタか……ア！因ミに私ハ、宇宙人ノおーびゆるんと申します。」

ネギ

「う、宇宙人！？」

ネギはオービュロンと名乗る宇宙人の発言に思わず耳を疑った。

ネギ

「し、失礼ですが……オービュロンさんは本当に宇宙人なんです

か？」

オービュロン

「ハイ、ソウです……………コノ星ヲ征服スル為ニ約千年ちよット前カラヤツテ来マシタ。」

ネギ

(こゝこの星を征服！？それに、千年前に来たって……………。)

ネギはオービュロンの数々の発言に度肝を抜かされてしまう。

オービュロン

「ソレヨリねぎサン、アノ洋館ニ何カ用ガアルノデスカ？」

ネギ

「い、いえ……………特にありませんが……………」

オービュロン

「悪い事八言イマセン、コノ洋館ニハ近付カナイ方ガイイデスよ。」

ネギ

「え？どうしてですか？」



オービュロン

「コノ洋館ニは、トテも恐ロシイ魔女ト悪魔ガ住ンでイルカラデス。」

ネギ

「魔女と悪魔？」

ネギはオービュロンの意味深な言葉に耳を傾ける。

オービュロン

「私ガ以前、コノ洋館ノ前ヲ通ツたら誰カトぶツカリ顔ヲ見テみルと、アノ魔女ガ恐ろシイ形相デ私ヲ睨ンでイタノデス……………私ハ必死ニ謝リながら逃ゲテツたノデスが、魔女ノ使イ魔ラシキ悪魔ガ私ヲ薬ノ材料ニシヨウと追ツ掛ケテ来たノデス。」

ネギ

「く、薬の材料に……………オービュロンさん、その話は本当なんですか？」

オービュロン

「ハイ、間違イアリませン。」

ネギ

(それじゃ、カモ君が危ない……………。)

ネギは『ホラーマンション』に向けて急いで駆け出していく。

オービュロン

「チヨ、チヨットねぎサン！急ニ何処へ行くのデスカ!？」

オービュロンはただ訳が分からずにネギを目で見送るしかなかった。

〈ホラーマンション内〉

その頃、カモは……………。

レッド

「ハアツハアツ……………アシュリー、犯人を捕まえたで。」

カモ

「ち、畜生……………今すぐ離しやがれ〜！〜！」

レッドに体を掴まれたカモは逃げ出そうとジタバタと暴れまくる。

アシュリー

「……………レッド、それ何？」

レッド

「俺もよう分からへんねんけど、多分ネズミの仲間とちゃうかな？」

カモ

「だ〜か〜ら〜！俺っちはオコジヨ妖精だって言ってるだろーが  
！〜！」

レッドの言葉に激怒したカモは更にジタバタと暴れまくる。

レッド

「あ〜、ギヤーギヤーと煩いやっちなあ……………アシュリー、コイツどないする？」

アシュリー

「……………薬の材料にしましょ。」

カモ

「な、何だと!？」

カモはアシュリーの発言に度肝を抜かされてしまう。

レッド

「そっか……………ほなら、早速鍋の中に放り込むとするか!」

そう言っていると、レッドはカモを掴んだまま大鍋の方へと歩み寄っている。

カモ

「や、止めてくれ!俺っちなんか材料のタシにもならねえよ〜〜!」

レッド

「ホンマに煩いやっちなあ……………ちょっと熱々の風呂に入ると思えばあっと言つ間に終わるて。」

カモ

「そんなの無理に決まってるだろ〜!〜!」

カモがレッドに鋭いツッコミを入れた時……………。

ガチャッ！！

ネギ

「カモ君！！」

アシュリー&レッド

「！？」

突然ネギが勢い良く扉から出て来る。

カモ

「あ、兄貴！俺っちを助けに来てくれたのか？」

ネギ

「当たり前だよ、だって……………カモ君は僕の大事な友達なんだから。」

「

カモ

「兄貴……………。」

カモはネギの言葉に感極まってしまう。

アシュリー

「……………貴方は誰？」

レッド

「そや！勝手にアシュリーの家に入って来るなんて不法侵入やで  
！！」

ネギ

「僕は貴女と同じ魔法使いです……………カモ君を助けに来ました。」

レッド

「な、何やて！？」

アシュリー

「……………アシュリーと同じ、魔法使い？」

アシュリーとレッドはネギの発言に思わず耳を疑った。

ネギ

「お願いします！カモ君を返して下さい！！」

そう言つと、ネギはアシユリー達に向かつて深く頭を下げながら懇願する。

レッド

「アシユリー、どないする?」

アシユリー

「……………一つだけ、聞いていい?」

ネギ

「な、何でしょうか?」

ネギはアシユリーの言葉に聞き耳を立てる。

アシユリー

「……………貴方にとって、この子は何?」

ネギ

「それは……………」

ネギはアシユリーの質問にほんの一瞬だけ言葉を詰まらせるが……………

…。

ネギ

「カモ君は僕にとって大事な親友の一匹です……………僕の勘が正しければ、貴女達と同じですよ。」

レッド

「な！？何で俺とアシュリーの関係を……………」

アシュリー

「……………そう。」

レッドはネギの言葉に戸惑うが、アシュリーは納得したかのように一瞬だけ笑みを浮かべる。

レッド

（あれ？今一瞬だけアシュリーが笑ったような……………。）

アシュリー

「……………レッド、離してあげて。」

レッド

「え？わ、分かった……………」



レッドはアシユリーの言葉に耳を疑いながらも、カモを掴んでいた手を緩める。

カモ

「うお〜！兄貴〜！！！」

カモは嬉し涙を流しながら勢い良くネギに抱き着いていく。

ネギ

「カモ君！どうやら無事みたいだね……………」

カモ

「勿論でい！ネギの兄貴が俺っちの為に助けに来てくれたお蔭でさあ！」

ネギ

「そ、そんな……………ちょっと大袈裟だよ……………」

ネギはカモの感謝いっぱい言葉に思わず照れてしまう。

レッド

「それにしても、アシュリーもええところあるなあ……………俺、ちょっとだけ見直したわ。」

アシュリー

「……………レッド、後で覚えてなさい。」

レッド

「ひえ〜！堪忍してえ〜！〜！」

レッドはアシュリーの一言に酷く怯えてしまう。

ネギ

「ありがとうございます……………それでは、僕達はこれで失礼します。」

そう言いつつ、ネギはその場から立ち去っていく。

レッド

「行ってもうたか……………あいつ、ちょっと変わった魔法使いやったな。」

アシュリー

「……………。」

アシュリーはレッドの言葉に何も答えずにただ頷く。

レッド

「ところでアシュリー、薬の材料はどないする？」

アシュリー

「……………大丈夫、レッドが居るから……………」。

レッド

「そっか、それなら安心……………って、俺が材料なんかいい!？」

レッドはアシュリーの言葉に思わずシッコミを入れてしまう。

〈ホラーマンション前〉

カモ

「いや、兄貴のお蔭で本当に助かったよ……俺、兄貴に一生付いて行くぜ！」

ネギ

「カ、カモ君つたら……。」

『ホラーマンション』の中から出たネギはカモにベタ褒めされて照れ臭くなってしまう。

明日菜

「おい！ネギー！！！」

ネギ

「え？」

ネギは明日菜の声に反応して振り向いてみると、遠くから明日菜達が駆け寄って来る。

ネギ

「あ、明日菜さん！それに木乃香さんや刹那さんにのどかさんも無事だったんですね！」

木乃香

「ウチらはこの通り無事だよ。」

刹那

「ネギ先生もご無事で何よりです。」

カモ

「でも、姐さん達だけでよく此処まで来れたな。」

のどか

「実は私達、それぞれバラバラになってたんですけど……私を含む全員が、この町の人達の案内によって此処まで来れたそうなんです。」

ネギ

「そうだったんですか……その案内して下さった町の人達は？」

明日菜

「それが、すぐに帰っちゃったみたいで……。」

ネギ

「そうですね……一言お礼を言いたかったのに……。」

ネギは明日菜達を案内してくれた町の住人にお礼が言えなくて少しかっかりしてしまふ。

木乃香

「それよりネギ君、明日菜がワリオはんの居場所を突き止めたみたいだよ。」

ネギ

「え！？本当ですか？」

明日菜

「まあね！」

そう言つと、明日菜はポケットから一枚の地図を取り出す。

明日菜

「この地図はね、私を此処まで案内してくれたジミーって人から貰つただけど……私がジミーさんにワリオさんの居所とか知らなかって聞いてみたら『僕とワリオは幼馴染みだから家の場所ぐらいい知ってるYO！』と言って、この地図を渡してくれたの。」

カモ

「成程なあ……流石は姐さん！大手柄だぜ！！」

明日菜

「へっへーん！どお？ちょっとは見直した？」

カモ

「ああ、馬鹿力だけが取り柄だと思ったが……………」

グニャツ！！

カモ

「ぐふえっ！？」

明日菜

「一言多い！！」

カモの一言に起こった明日菜は、片手でカモの胴体を力一杯握り締める。

ネギ

「……………」と、とにかく明日菜さんが入手した地図を頼りにワリオさんの家へ行ってみましょう。」

刹那

「そ、そうですね……………」

そう言うと、ネギー一行は（明日菜以外）苦笑いしながら『ホラーマンシヨン』を後にするのであった……………。

くダイヤモンドシティ・大通りく

モナ

「こちら モナピザく 熱々出来た〜て〜 愛情を込め〜て〜  
お届けします〜」

モナは楽しそうに歌いながら愛車のバイクで道路を進んでいた。

モナ

「さてと、バイトが終わったら急いでバンドの練習をしなくちゃ…  
…。」



ブワッ！！

モナ

「きゃっ！？」

すると、モナの頭上から大きな網が覆い被さる。

モナ

「な、何コレ！？全然動けない……………」

?A

「ヤリクリ部隊！女を引つ捕らえろー！！」

ヤリクリ達

「おおー……………」

モナ

「きゃあ……………」

次の瞬間、ヤリクリと呼ばれた頭にバンダナを巻き付けて一本の槍を持った二等身ぐらいの大きさの人物(?)達がモナを押しさえ付ける。

ヤリクリA

「よし！そのまま縄で巻き付けろー！！」

そう言うと、ヤリクリ達はモナの体中を縄で巻き付けてしまう。

モナ

「だ、誰か助け……。」

ペタッ！！

モナ

「んー！んんー！！」

モナが助けを呼ぼうとした瞬間、一匹のヤリクリがモナの口元にガムテープを着けてしまう。

ヤリクリA

「よし、早速キャプテンに報告だ……。」

そう言うと、ヤリクリAが携帯電話を取り出して誰かと連絡し始める。

ヤリクリA

「……………もしもし、こちらヤリクリ部隊です。」

？

『どう？人質は捕らえられたかい？』

ヤリクリA

「ヘイ、たった今女子高生ぐらいの女を引っ捕らえました。」

？

『よし、よくやった……………こちらもたった今例のアジトを占拠したところだから、すぐに人質を連れてアジトへ来な。』

ヤリクリA

「ヘイ、分かりました！」

そう言い終わると、ヤリクリAは携帯電話の電源を切る。

ヤリクリA

「野郎共！例のアジトへ引き上げるぞー！ー！」

ヤリクリ達

「おおーっ！っ！」

ヤリクリ達は体中を縄で巻き付けられたモナを引っ張りながら何処かへ立ち去ろうとする。

モナ

(……………ワリオのおじ様……………助けて……………)。

そう思いながら、モナはヤリクリ達に引っ張られるように連れて行かれるのであった……………。

第七十二話　洋館に住む魔法使いの少女（後書き）

ワリオの家を目指すネギー一行だが、モナを誘拐した謎の集団は一体……。

第七十三話〈占拠されたワリオカンパニー〉（前書き）

『ホラーマンション』を後にしたネギー行はワリオの家を目指して  
進んでいく。

第七十三話　占拠されたワリオカンパニー

「ダイヤモンドシティ・ワリオの家の前」

ネギー一行はジミーから貰った地図を頼りに、ワリオの家と思われる一軒家の前までやって来た。

ネギー

「……………此処がワリオさんの家みたいですね。」

明日菜

「そうね、屋根にWの形した看板みたいな物を付けてるし……………」

刹那

「とにかく、この家の中にワリオさんが居るか確かめてみましょう。」

「……………」  
そう言うと、ネギー一行はワリオの家の玄関前まで近付いていく。

「コンコン！」

ネギー

「すいませ〜ん！誰かいらっしやいますか〜？」

シ〜〜〜ン……………

のどか

「……………返事がありませんね。」

木乃香

「ひよっとして、お留守なんかな？」

ネギ

「弱ったなあ……………ごめん下さ〜い！！」

ドンドン〜！！

ネギは先程よりも大きな声で呼び掛けながら玄関の扉を叩いた時……。

ガチャン〜！！

？

「やかましいわ〜！さっきからドンドンって……………折角気持ち良く



昼寝してたのに目が覚めてしまったではないか〜!!」

突然扉が勢い良く開かれて、中からバイカー風の帽子と服装に大きな鼻とお尻のような顎に稲妻みたいにジグザグな髭を生やした太り気味の男性が怒りながら出て来る。

ネギ

「す、すみません……………ところで、貴方はワリオさんでしょうか？」

ワリオ

「あ〜？この俺様を知らないってか……………そうだよ！俺様があこの有名なワリオ様だ!!」

カモ

（自分で有名とか言うなよな……………。）

ネギー一行はワリオと名乗る男性の破天荒な性格ぶりに啞然としてしまつた。

ワリオ

「……………そんな事より、俺様に何か用か？」

ネギ

「は、はい！僕達ですな……………。」

ネギは今までの経緯をワリオに説明していく。

ネギ

「……………という訳なんですよ。」

ワリオ

「あっそ、そいつはご苦労だったな。」

ワリオは退屈そうに鼻糞をほじりながらネギの言葉を軽く受け流す。

明日菜

「な、何よ！その言い方は……………」

木乃香

「まあまあ……………」

明日菜はワリオのそっけない一言に怒り出そうとするが、木乃香が何とか宥めようとする。

ネギ

「……………という訳で、バッチをお渡しします。」

そう言うと、ネギはワリオにバッチを手渡す。

ワリオ

「……………おい！何だコレは！？」

ネギ

「え？何って、先程お話ししたバッチですが……………」

ワリオ

「それぐらい分かってるわ！俺様が言ってるのは、何でWが頭文字のワリオ様にマリオの頭文字でもあるMのバッチを俺様に渡すんだ！と聞いておるのだ！！」

ワリオはネギ一行にWの形したバッチを逆さまに見せながら怒り出す。

ネギ

「あ、あの……………ワリオさんが持っている方は逆さまで……………本当はWの形したバッチなんです。」

ワリオ

「何！？逆さまだと？」

そう言うと、ワリオは持っていたバッチをひっくり返して本当はWの形したバッチだったと認識する。

ワリオ

「……………ガッハハハハ！勿論最初から分かっておったわ！少しお前らをからかったただけだ！！」

カモ&明日菜

(……………絶対にワザとじゃない。)

ワリオのワザとらしい態度に明日菜とカモは疑いの目でワリオを見つめる。

ワリオ

「……………ところで、他には何か無いのか？」

ネギ

「え？何がですか？」

ワリオ

「このバッチの他にくれる物は無いのかと聞いてるのだ！例えば、コイン百万枚とか金塊きんかい十トンとかニンニク一年分とか……………」

ネギ

「い、いえ……………そのような物は……………」

ワリオ

「何だ、つまらん……………これだから貧乏人は嫌なんだ。」

明日菜

「な、何ですって!?!」

刹那

「明日菜さん、少し冷静に……………」

明日菜はワリオの言葉に再び怒り出すが、刹那が素早く明日菜を宥める。

ネギ

「ところで、ワリオさんに一つ聞きたい事があるのですが……………」

ワリオ

「あ?何だ?」

ネギ

「最近、何か変わった事とかありませんでしたか？」

ワリオ

「変わった事？うん……………あつ！あるぞー！」

ネギ

「な、何ですか？」

ワリオ

「最近、何だか便秘気味でな……………いつもトイレに行ってもウンが全開に出て来ないんだよ。」

ネギ一行

「……………へ？」

ネギ一行はワリオの発言に思わず耳を疑った。

ワリオ

「それと、お菓子を食べてたら奥歯が虫歯になってしまったり、昼寝をしてたらゴキブリが俺様の鼻の中に入ってしまったりとか……………」

ネギ

「い、いえ……………そういう事ではなくて……………例えば、前にやっつけた悪者がまた悪い事をしてるとか……………」

ワリオ

「何だ、そんな事か……………そんなヘナチヨコな奴らが現れたら、このワリオ様がギツタギタのメッタメタにしてくれるわ！ガツハハハハハハハ！！」

ワリオは自慢げに言い切ると、まるで馬鹿笑いに似た大声で笑い出す。

カモ

「……………兄貴、そろそろ帰ろうぜ。」

ネギ

「えっ！？で、でも……………」

明日菜

「そうね、この世界は大丈夫そうだしね……………」

ネギ

「明日菜さんまで……………」

郵便屋

「ワリオさ〜ん！お手紙で〜す！」

ワリオ

「お？さては、俺様宛てのラブレターが来たようだな……………今行くぞ〜！」

そう言つと、ワリオはご機嫌な気分郵便屋さんから一通の手紙を受け取る。

ワリオ

「よ〜し、早速読んでみるか……………」

ワリオは手紙の封を切つて、手紙を読んでみると……………。

ワリオ

「えつ〜と、何々……………んなつ！？」

ネギ

「ど、どうしました？」

ワリオ



「な……………なな……………ななな……………」

ワリオは驚いたような表情で手紙を見つめたまま愕然としていた。

木乃香

「ひょっとして、ホンマにラブレターやるか？」

カモ

「いや、それは有り得ねえな……………」

明日菜

「そうそう。」

そうこう言いながら、ネギ一行が話していると……………。

ワリオ

「何だつてえ——————！！！」

ネギ一行

「!?!」

ワリオの大声が家の周囲まで響き渡る。

のどか

「な、何て大きな声……………」

明日菜

「か、顔だけじゃなくて声も大きいのね……………」

ワリオ

「おのれ、あのヘナチヨコ海賊団め……………フィンガア……………」

ガチャン!!

ワリオはその場から勢い良く家の外へと出て行ってしまふ。

ネギ

「あつ!?ま、待って下さい……………」

木乃香

「……………行ってしまった。」

刹那

「この手紙に一体何が書いてあるのでしょうか……………」

そう言うと、刹那は先程ワリオが読んで投げ捨てた手紙を拾って読んでみると……………」。

刹那

「っ！？コ、コレは……………」

手紙を一通り読んだ刹那は思わず目を疑った。

ネギ

「刹那さん、手紙には何て書いてるんですか？」

刹那

「『欲張りで意地汚いワリオへ

アンタがゲームを制作して建てたっていう会社はアタイらが占拠した、返してほしかったらアンタが前に奪ったアタイらのお宝を返しな。

ブラックシュガー団の美しい首領 キャプテン・シロップより』

……………」と書かれています。」

のどか

「そ、それって……………」脅迫状ですよね？」

ネギ

「ほら、やっぱり事件が起こったじゃないですか！」

明日菜

「そ、そうね……………」

明日菜はネギの言葉に思わず苦笑いしてしまう。

木乃香

「でも、会社とか奪ったお宝って何の事やる？」

明日菜

「そう言えば、ちょっと気になるわね……………」

ブロロロロッ！！

ネギ一行が脅迫状の内容について考え込んでいると、外の方からエンジン音が響き渡る。

刹那

「何の音でしょうか？」

ネギ

「外へ出てみましょう。」

ガチャン！

ネギ一行が家の外へ出てみると、家の前には大型バイクに跨がったワリオが居た。

ネギ

「わあ、立派なバイクですね……………」。

ワリオ

「そうだろ？クライゴアっていう変わった科学者が作ってくれたんだ。」

のどか

（クライゴアって、さっき会ったあの人かな？）

のどかはワリオの言葉に首を傾げながら考え込む。

ワリオ

「そんな事より、急いで俺様の会社に行かなければ……………レッツゴー！！！」

ブオーーーーーーッ!!

ワリオを乗せたバイクはその場から勢い良く発進していく。

明日菜

「あっ!?!ちよつと待ちなさいよ!」

ネギ

「皆さん!僕達も行きましょう!」

ネギー行はワリオの後を追い掛けながら走り出していく。

〈ダイヤモンドシティ・ワリオカンパニー前〉

ネギ

「ハアハア……や、やっと追い付いた……。」

ネギー行は息を切らしながら、大きなビルのような会社の前までやって来た。

ワリオ

「……………」。

ネギー行より一足先に到着していたワリオは、会社の方を見て大きく口を開けながら愕然としていた。

刹那

「ど、どうしました？」

ワリオ

「お、俺様の『ワリオカンパニー』が……………」。

ネギー行はワリオが指さす先を見ると、『ワリオカンパニー』と呼ばれた会社の頂上に髑髏どくろマークが記された小さな旗と『ブラックシュガーカンパニー』と書かれた大きな看板が飾られていた。

明日菜

「『ブラックシュガーカンパニー』？」

ネギ

「どつやら、本当に会社を占拠されたようですね。」

ワリオ

「ち、畜生！ブラックシュガー団め…………許さあ————ん  
！！」

そう叫ぶように言うと、ワリオは会社の入口に向かって突っ走って  
いく。

バリバリバリバリッ！！

ワリオ

「あぎゃ~~~~っ！！」

ネギ一行

「!?!」

ワリオが入口の硝子扉の取っ手を掴んだ瞬間、ワリオの体中から高  
圧電流が流れ込む。



ワリオ

「あががが……………」

ボタン！！

ワリオは黒焦げ状態になり、そのまま倒れ込んでしまう。

ネギ

「ワ、ワリオさん!?!」

ネギ一行は慌ててワリオの方へ駆け寄っていく。

のどか

「ど、どつして電気が……………」

刹那

「恐らく、扉に触れると電気が流れるように細工されてるのでしょ  
う。」

ネギ

「木乃香さん!急いでワリオさんを回復させて下さい!」

木乃香

「わ、分かった……。」

木乃香は急いで『コチノヒオウギ』を呼び出そうとするが……。

ワリオ

「フンガアーーーーー……」

ネギー行

「!?!」

突然ワリオが真っ黒焦げのまま起き上がる。

明日菜

「お、起きた……。」

カモ

（タフなオッサンだなあ……。）

ネギー行はワリオのタフさに啞然とする。

ワリオ

「勝手に俺様の『ワリオカンパニー』に変な改造しやがって……  
もう許さん!!」

そう言つと、ワリオは懐から携帯電話を取り出して誰かに連絡をする。

ワリオ

「もしもし!ジミーか?今すぐに『ワリオカンパニー』まで来てくれ……えっ?何でだと?いいから今すぐ来い!!」

ワリオは一旦携帯電話の電源を切ると、次の相手に連絡しようと電話番号を打ち始める。

ネギ

「……………どつやら、誰かを呼び出しているみたいですね。」

木乃香

「一体誰を呼ぶんやる?」

ワリオ

「もしもし!クライゴアか?実はな……………」

ワリオはこの行動を繰り返しながら、次々と誰かに連絡をしていく。

（数十分後）

しばらくすると、『ワリオカンパニー』の前にはジミー、ナインボルト、エイティーンボルト、ドリブル、スピッツ、カット、アナ、クリケット、マンティス、ペニー、クライゴア、マイク、オービュロンが来ていた。

ネギ

「あっ！？オービュロンさん！」

オービュロン

「おお！ねぎサンジヤありませんカ。」

ネギはオービュロンの姿を見て驚きの声を上げるが、逆にオービュロンは喜びの声を上げる。

ジミー

「HeeIo!明日菜ちゃん、また会えて嬉しいYO!」

明日菜

「ど、どつも……………」

ジミーは陽気な気分で明日菜に声を掛けるが、明日菜は苦笑いしながらジミーに答える。

9 ボルト

「あつ!あの時のお姉ちゃんだ!」

18 ボルト

「また会えるとは思わなかったとよ。」

木乃香

「ホンマやわぁ……………それと、ドリブルはんとスピッツはんも奇遇やなぁ。」

ドリブル

「全くでんな!何だが、SFチックみたいなモンを感じますわぁ。」

スピッツ

「いや、全然SFチックやあらへんがな……。」

スピッツはドリブルの言葉に苦笑いしながらツッコミを入れる。

カット

「刹那殿、お友達に会えて良かったね。」

アナ

「そうそう、本当に良かったね。」

刹那

「ああ、二人が案内してくれたからね……。」

刹那はカットとアナの言葉を聞いて思わず笑みが零れる。

マンティス

「……………」

クリケット

「師匠？どうしたツスか？」

マンティス

「……………あの娘、出来る。」

クリケット

「え？何が？」

マンティス

「いや、何でもない……………」

クリケット

「？」

クリケットはマンティスの意味深な言葉に思わず首を傾げる。

のどか

「ペニーちゃん、あの時は本当にありがとう。」

ペニー

「い、いえ……………お礼なら、お爺ちゃんとマイクに言って下さい。」

クライゴア

「オッホン！私達は人として当然の事をしただけじゃ。」

マイク

「ソノ通りデ、アリマス。」

そう言うが、クライゴアとマイクは満更でもないような感じで自慢げに胸を張る。

ネギ

「……………それにしても、僕達が出会った人達がワリオさんの会社の社員だったなんて……………」

明日菜

「本当、凄い偶然よね……………」

ワリオ

「うぬぬ……………何故だ！何故モナと連絡が取れないんじゃ……………！！」

ワリオは携帯電話を振り回しながら大声を上げる。

ジミー

「落ち着きなYO、きつとモナちゃんは色々忙しいのさ。」



9 ボルト

「そうだよ、モナってバイトの他にバンドやチアリーダもやってるみたいだし……………」

ワリオ

「いかん！『ワリオカンパニー』の社員たるものそんなバイトだがバンドだとかに浮かれてどうする!?!」

スピッツ

( 無茶苦茶な言い分やなあ…………… )

スピッツを含む『ワリオカンパニー』の社員達はワリオの言い分に呆れ返る。

ワリオ

「よし、もう一度モナに連絡をしよう……………」

そう言うと、ワリオはモナに連絡しようとして再び携帯電話のボタンを押す。

ブルルルル……………

ガチャッ

？

『もしもし？』

ワリオ

「おいモナ！一体何をやってるんだ！？今、俺様の会社がとんでもない事になってるんだぞ！！」

？

『知ってるさ、ブラックシュガー団に会社を乗っ取られちゃったんだろ？』

ワリオ

「な、何！？何故それを……………ってか、お前本当にモナか？」

？

『いや、残念だがハズレだね……………アタイの声に聞き覚えは無いかい？』

ワリオ

「待てよ、その声は……………ま、まさかお前は！？」

？

『やっと気が付いたか……そうさ、アタイはブラックシユガー団のキャプテン・シロップだよ!』

ワリオ

「や、やっぱり……だが、何でお前がモナの携帯電話に……。」

シロップ

『決まってるだろ?そのモナって子は、アタイらが人質として捕らえてるからさ。』

ワリオ

「な、何だつてえー……!?!?」

ワリオはシロップと名乗る女の言葉に思わず大声を上げてしまう。

ネギ

「……な、何かあったんでしょっか?」

オービュロン

「サ、サあ……。」

ネギ達は少し戸惑いながらワリオの様子を伺う。

シロツプ

『な、何て馬鹿デカイ声なんだろうねえ……とにかく、人質を返したてほしかったら以前アンタが奪っていったアタイらのお宝を返しな。』

ワリオ

「ふざけるな！誰がそんな要求を……そもそも、お前だって俺様が苦勞して手に入れた『デルデルの財布』を途中で横取りしやがったクセに！！」

シロツプ

『変な言い掛かりはやめとくれ……アレはアタイの策略の一つで、アンタはその策略に引っ掛かっただけさ。』

ワリオ

「な、何だと……!?!?」

グシャツ!!

ワリオはあまりの怒りに思わず携帯電話を握り潰してしまふ。

クリケット

「ワ、ワリオさん？一体何があつたんすか？」

ワリオ

「……………モナがブラックシュガー団の奴らに人質にされたそうだ。」

全員

「ええー！ーっ!?!?」

その場に居た全員がワリオの言葉に耳を疑った。

カット

「モ、モナ殿が……………」

アナ

「ひ、人質に……………」

ペニー

「何て酷い事を……………」

18ボルト

「絶対に許せんたい!」

クライゴア

「うむ……ワリオ君の会社はどうでもよいが、モナ君が人質にされてるのなら何とか助けたいものじゃない……。」「

ワリオ

「何だと！？俺様の『ワリオカンパニー』はどうなってもいいと言いたいのか？！？」

ワリオはクライゴアの言葉にまたしても怒り出してしまふ。

ネギ

「お、落ち着いて下さい……それより、今はそのブラックシュガー団という悪者達を何とかしないと……。」「

ワリオ

「おっと、そうだったな……とにかく、ブラックシュガー団の奴らを俺様の会社から追い出すぞ！」「

全員

「おおーっ！っ！っ！」「

こうして、ブラックシュガー団によって占拠された『ワリオカンパニー』と人質となったモナを奪還する為のチームが今この場で結成されたのであった……。

（ダイヤモンドシティ・ホラーマンション内）

アシュリー

「……………」。

その頃、アシュリーとレッドはワリオ達の様子を水晶玉で眺めていた。

レッド

「何だか大変な事になってもつたなあ…………アシュリー、俺らも行った方がええのんとちゃうか？」

アシュリー

「……………行かない。」

レッド

「えー!?何でや？」

アシユリー

「……アシユリーには、関係無いもん……。」

レシド

「そ、そろそろやけど……仲間が困ってんねんで？」

アシユリー

「……アシユリー、仲間いらない……。」

そう言つと、アシユリーはその場から立ち去っていく。

レシド

「ア、アシユリー！ちょっと待ってえな……。」

レシドもアシユリーの後を追いつけるように、慌ててその場から立ち去っていく。



第七十三話〈占拠されたワリオカンパニー〉（後書き）

果たして、ネギ達は『ワリオカンパニー』とモナを奪還する事が出来るのか！？

第七十四話、最上階を目指して……（前編）（前書き）

ネギー行とワリオ達はブラッククシュガー団に占拠された『ワリオカ  
ンパニー』に侵入しようと試みるが……。

第七十四話 最上階を目指して……（前編）

「ダイヤモンドシティ・ワリオカンパニー前」

ネギー行とワリオ率いる『ワリオカンパニー』の社員達はブラックシュガー団に占拠された『ワリオカンパニー』の前に居た。

ワリオ

「よし、早速敵の本拠地へ殴り込むぞ！」

ネギ

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

ネギは勢い良く突っ込もうとしたワリオを慌てて制止させる。

ワリオ

「な、何々だよ!？」

ネギ

「いきなり敵の陣地に乗り込むのは危険ですよ！」

刹那

「それに、あの会社の扉に触れると高圧電流が流れ込むので、むやみに触れたら危険です。」

ドリブル

「それやったら、あの扉ごとぶち壊せばええのんとちゃいますっ？」

のどか

「そ、そんな無茶な……………」

スピッツ

「……………それや！」

ドリブルの提案にスピッツは思わず声を上げる。

スピッツ

「ドリブル、ちょい耳貸せ。」

ドリブル

「へ？耳なんてどないして貸すんでっか？」

スピッツ

「ちやうわい！ワシの話を聞けって言ってるんや！」

ドリブル

「へ、へい……。」

ドリブルは渋々とスピッツの話に耳を傾ける。

ドリブル

「……えっ！？そ、そないに危険な事を？」

スピッツ

「モナはんの為やる！男やったら一発ドカーンと打ち噛ましたれ！  
！」

ドリブル

「……そつでんな！一丁派手にやつたるで！！」

そう言うと、ドリブルとスピッツは急いで近くに駐車させてあった  
自分達のタクシーへと乗り込んでいく。

木乃香

「二人共、何をするつもりやる？」

ネギ

「まさか……………」

全員が不安げな表情でドリブルとスピッツが乗車したタクシーを見守っていると……………」。

ドリブル

「ほな！行きまっせえ……………！！」

ブォ……………ッ！！

次の瞬間、ドリブルが強くアクセルを踏んだと同時にタクシーが『ワリオカンパニー』の入口の扉に向けて勢い良く発進していく。

9ボルト

「このまま突っ込むつもりだ！」

ジミー

「Oh！それは幾ら何でも危険だYO！！」

ガッシャー……………！！

みんなの制止も虚しく、ドリブルとスピッツを乗車させたタクシー

は入口の扉を破壊していく。

刹那

「な、何て無茶な事を……………」

カモ

「でも、これで中へ入れるぜ。」

ワリオ

「ドリブルにスピッツ……………お前らの死は決して無駄にはしないぞ。」

スピッツ

「……………って、ワシらはまだ死んでへんがな!!」

そうツツコミを入れながら、扉に突っ込んで壊れたタクシーの中からドリブルとスピッツが頭から少し流血してる状態で作て来る。

木乃香

「あっ！頭から血流してるやん……………」

ドリブル

「え！？ホ、ホンマでっか？」

スピッツ

「あっ！？ホンマや……………ううっ……………」

すると、ドリブルとスピッツは片手で頭を押さえながら膝を地面に着けるように倒れてしまう。

のどか

「だ、大丈夫ですか！？」

ドリブル

「あ、あまり大丈夫やあらへんかも……………」

スピッツ

「な、何だか目まいが……………」

木乃香

「そらアカンわ！早よう手当てせんと……………」

そう言って、木乃香とのどかはドリブルとスピッツを手当てしようとした時……………。



ドリブル

「み、皆はん……………ワテらに構わず先に進んだって下さい……………」

ネギ

「えっ！？で、でも……………」

スピッツ

「さっきの衝撃で敵がやって来るハズや……………せやから、いつまでも此処に居たら危険でっせ……………」

クリケツト

「だけど、そしたら二人も此処から逃げないと……………」

木乃香

「そやったら大丈夫や、ウチら二人がドリブルはん達を何処かへ避難させるから……………」

ネギ

「……………分かりました、お二人にお任せします。」

ワリオ

「そんじゃ、早速中へ入るぞ……………!!」

ワリオの言葉を合図に、残りのメンバーが『ワリオカンパニー』の中へと突入していく。

木乃香

「ほなら、二人を安全な場所へ連れてこ。」

のどか

「は、はい！」

ドリブル

「す、すみません……………」

スピッツ

「お、おおきに……………」

木乃香はドリブルに肩を寄っ掛かからせてる状態で、のどかはスピッツを抱き抱えるようにその場から離れていく。

くワリオカンパニー内く

その頃、ネギ達は『ワリオカンパニー』の内部へとやって来た。

ワリオ

「さてと、シロップの奴は一体何処に居やがるんだ？」

ネギ

「やはり、この会社の社長室とかに潜んでいるのでしょうか？」

ヤリクリA

「侵入者だ！引っ捕らえろーーーー！！！」

全員

「!?!?」

突然ヤリクリの大群がネギ達に向かって突っ込んでくる。

ワリオ

「よし、あのへナチヨコ共に聞いてみるとするか……そりゃ〜  
!?!?」

ワリオは両腕をブンブン振り回しながらヤリクリ達に突っ込んでいく。

カット

「アナ！あたち達も行くよ！」

アナ

「うん！」

カットとアナは小さな小刀を取り出して、ワリオに続くように駆け出していく。

クリケツト

「師匠！俺も行って来るッス！」

マンティス

「うむ、油断するでないぞ。」

クリケツト

「オッス！！！」

更にクリケツトも三人の後からヤリクリ達に向かって駆け出してい

く。

明日菜

「ネギ！刹那さん！私達も行くわよ！！」

ネギ&刹那

「はい！」

明日菜

「アデアット！！」

パァー………ッ！！

明日菜は『ハマノツルギ』を呼び出した直後に、ネギと刹那と共に駆け出していく。

〈数分後〉

ワリオ

「パワフルアターック!!」

ボツカアーーーーッ!!

ヤリクリ

「ぐわあーーーーっ!!」

ワリオの強力な体当たりによって、最後のヤリクリ軍団が倒されていく。

明日菜

「……………ふっつ、何とか全滅させたみたいね。」

ネギ

「ええ、意外と苦労しましたね……………」

カット

「それにちても、刹那殿ってあたち達より剣の腕が優れてるのね。」

アナ

「刹那殿、是非あたち達の師匠になって。」

刹那

「えっ！？い、いや……………私は剣士ではあるが、忍術はちょっと……………それに、私は師匠と呼ばれる器では……………」

刹那はカットとアナの言葉に思わず照れ隠しをする。

ジミー

「いや、明日菜ちゃんも大きなハリセンで敵を薙ぎ倒してカッコ良かったYO！」

明日菜

「そ、それはどうも……………」

9ボルト

「それと、ネギってアシユリーと同じ魔法使いなんだね……………僕ちん達よりちょっとしか年が離れてないのに凄いね。」

ネギ

「そ、それ程でも……………」

明日菜はジミーの言葉に苦笑いするが、逆にネギはニンボルトの

言葉に照れてしまふ。

ペニー

「ところで、モナさんは何処に居るんでしょうか？」

クライゴア

「うむ、恐らくキャプテン・シロップとやらと一緒にいるハズじゃ  
る。」

フリオ

「そんなじゃ、早速シロップが何処に居るか聞いてみるか……………」

そう言うと、フリオは気絶してる一匹のヤリクリを片手でわし掴み  
にして持ち上げる。

ヤリクリ

「な、何だよ？」

フリオ

「答える、お前らのボスは今何処に居るんだ？」

ヤリクリ

「フン！誰がお前らなんかに答えるか！！」



ワリオ

「そうか、そんな生意気な奴はこつしてやるか……………おらおらおらあ—————!!」

ヤリクリ

「あわ~~~~っ!!」

ワリオはヤリクリをシェイクするように、両手でヤリクリの頭を掴んで上下に激しく動かす。

ワリオ

「さあ、吐け!吐くんだあ—————!!」

ヤリクリ

「お……………おえっ……………ほ、本当に吐きそうだ……………」

ヤリクリ

「馬鹿野郎!本当に吐いてどうすんじゃー!!」

ヤリクリ

「どわ~~~~っ!!」

ワリオはヤリクリを更に激しく上下に動かす。

ネギ

「も、もうその辺にしろいた方が……。」「

明日菜

「そうよ、じゃないと本当に口から何か出てきそうよ……。」「

ワリオ

「まあ、それもそうだな……。おい！いい加減にシロップの居所を  
言いやがれー！」「

ヤリクリ

「わ、分かった……。キャプテンは……。この会社の社長室に居る  
……。」「

ワリオ

「社長室って事は最上階か……。よし！最上階へ向かっぞー！」「

バツシィー……ン……！

ヤリクリ

「ぐえっ!!」

ワリオはそのままヤリクリをそこから辺に投げ飛して、ヤリクリは壁に激しく叩き付けられる。

ヤリクリ達

「待てー！ーっ!!」

全員

「!?!」

すると、新たなヤリクリの大群が再びネギ達に向かって駆け寄ってくる。

ワリオ

「チッ、またヘナチョコ共が来やがったか……………」

クリケット

「……………皆さん!この場は俺に任せて先へ進んで下さい!!」

そう言うと、クリケットは一人だけ果敢にヤリクリの群れに突っ込んでいく。

カット

「クリケット殿だけじゃ危険過ぎる!」

アナ

「あたち達も一緒に加勢するわ!」

更にカットとアナが同時にクリケットの後からヤリクリの群れに突っ込んでいく。

刹那

「あつ!待って……。」

刹那はを不安げな表情でカットとアナが突っ込んでいく光景を見送る。

ネギ

「……………刹那さん、行ってあげて下さい。」

刹那

「えっ!?!?で、ですが……………」

明日菜

「そうしたらっだって、何だかあの双子の子達を気に掛けてるみたいだし……………」

刹那

「は、はい……………あの子達は幼稚園児とは思えないぐらい剣の腕が優れてますが、やはり若干隙があるので何かあったらと思うと……………」

ネギ

「やはりそうでしたか……………では、此处は刹那さんにお任せしますね。」

刹那

「ありがとうございます……………それでは、行って参ります！」

そう言うと、刹那はヤリクリ達の群れに向かって突っ込んでいく。

マンティス

「……………どれ、ワシも少し腕を振るってくるか。」

更にマンティスも刹那の後からヤリクリ達の群れに突っ込んでいく。

カモ

「あれだけの人数が居れば此処は安全だな。」

ワリオ

「よし！俺様達は最上階へ向かうぞ！！」

そう言うのと、残りのメンバーはエレベーターの方へ駆け寄っていく。

クリケット

「はぁーーーーっ！！」

ボカアーーーーッ！！

ヤリクリ達

「ぐわーーーーっ！！」

クリケットは強力な足蹴りでヤリクリ達をぶっ飛ばす。

クリケット

「……ふう、幾ら倒してもキリがないな……。」

クリケットがそう言いながら一息付いた瞬間……。

ヤリクリ

「隙有り!！」

クリケツト

「!？」

一匹のヤリクリがクリケツトの背後から槍を突き出しながら突っ込んでくるが……………。

マンティス

「とりゃ!！」

ボツカア————ツ!!

ヤリクリ

「ぐえ————っ!！」

突然マンティスがクリケツトに突っ込んで来たヤリクリを飛び蹴りでぶっ飛ばす。

クリケツト

「し、師匠!？」

マンティス

「クリケットよ、あれ程油断するなど言っておいたであろうに……」

クリケット

「す、すみません……それから、助けて頂いてありがとうございます！」

マンティス

「礼など後でよい……今はこの連中を一匹残らず退治せねば……」

クリケット

「はいッスー！」

そう言うと、クリケットとマンティスは二人で一斉に他のヤリクリ達の群れへと突っ込んでいく。

カット

「とっ！はっ！……」

アナ



「ほいーっりゃー!」

カットとアナは次々とヤリクリ達を切り付けていく。

アナ

「ゼエゼエ……………す、少ちだけ疲れちゃった……………」

カット

「アナ!大丈夫?」

カットが息を切らして立ち止まってしまったアナに近付いた時……。

ヤリクリ

「そこまでだ!」

カット&アナ

「!?!」

カットとアナがヤリクリの声に反応して周りを見ると、沢山のヤリクリ達に囲まれていた。

カッ

「ち、ちまった……。」

アナ

「取り囲まれちゃった……。」

ヤリクリ

「掛かれえー！ー！ー！」

一匹のヤリクリの掛け声を合図に、ヤリクリ達が一斉にカッとアナに向かって突っ込んでくる。

カッ

（も、もう駄目……。）

カッとアナが顔を両手で覆い隠した瞬間……。

刹那

「神鳴流奥義・百列桜華斬！ー！」

ズッシャー！ー！ー！

ヤリクリ達

「わぁー……っ!!」

次の瞬間、瞬動でカットとアナの前に現れた刹那が夕風でヤリクリ達を吹き飛ばしていく。

カット

「……………せ、刹那殿？」

刹那

「二人共、怪我は無い？」

アナ

「う、うん……………どうもありがとう……………」。

カットとアナは刹那に向かって深々とお辞儀する。

刹那

「それより、今は奴らを何とかしないと……………」。

アナ

「おっと！そっでちた……………」。

カット

「それでは、いざ参りまぢよー!!」

そう言うと、刹那とカットとアナはヤリクリの群れに向けて駆け出していく。

チーーーーーン!

すると、ネギ達が待っていたエレベーターの扉がゆっくりと開く。

明日菜

「あー! やっとエレベーターが来た……………」

ワリオ

「よっしゃー! 早速乗り込むぞー!!」

そう言って、残りのメンバーが一斉にエレベーターの中へと乗り込むが……………。

ブーーーーーッ!!

アナウンス

「重量オーバーです。」

ワリオ

「な、何いっつ!？」

ワリオを含む全員がエレベーターに搭載されてるアナウンスの言葉に耳を疑った。

シミー

「No〜!これじゃ最上階へ行けないYO〜!」

9ボルト

「絶対にワリオが重たいからだよ!」

ワリオ

「何だとお!?俺様よりエイティーンボルトの方が明らかに重いだろ!」

18ボルト

「お、俺っちはただ体が大きいだけたい!」

ペニー

「み、皆さん！言い争ってる場合にはありませんよ……………」。

明日菜

「そつよ！どうにかしてエレベーターを動かさない……………」。

カモ

「だったら、何人がエレベーターから降りねえ……………」。

ワリオ

「そっか！その手があったか。」

ワリオはカモの提案に納得する。

ワリオ

「という訳で……………お前らが降りろ！」

バシン！！

ワリオはジミーとオービュロンを押し出してエレベーターから追い出す。

オービュロン

「ソ、ソんナ〜!」

ジミー

「それは幾ら何でもあんまりだYO!」

ガーーーーーッ!

ジミーとオービュロンがエレベーターから出たと同時に、エレベーターの扉がゆっくりと閉まっていく。

ワリオ

「よし!これでやっと最上階へ行けるぞ。」

明日菜

(な、何て奴なの……………。)

カモ

(ああ、仲間を平気で犠牲にしやがった……………。)

ネギ

(で、でも刹那さん達が居ますから大丈夫でしょう……………。)

明日菜とカモはワリオの行動に啞然とするが、ネギは何故か苦笑いを浮かべる。

9 ボルト

「それじゃ、最上階までのボタンを押すよ。」

ポチッ！

ナインボルトはエレベーターの扉の左側に搭載されてる最上階行き  
のボタンを押すが……………。

9 ボルト

「……………あれ？エレベーターが動かないよ？」

18 ボルト

「まさか、故障しとるとかね？」

ワリオ

「な、何だって！？冗談じゃない！此処まで来てそれは無いぞ！！」

ワリオが全然作動しないエレベーターに怒り出した時……………。



アナウンス

「お乗りのお客様に申し上げます、最上階へ行くには出題されるクイズに全て答えて下さい。」

ネギ

「ク、クイズ？」

ワリオ

「ふざけるな！さっさと俺様達を最上階へ連れて行け！！」

バリバリバリバリッ！！

ワリオ

「ぐぎゃ~~~~っ！！」

突然ワリオは高圧電流を浴びせられてしまう。

アナウンス

「文句がある人は高圧電流の餌食になって頂きます。」

ワリオ

「ま、またビリビリかよ……………」

ボタン！！

ワリオは真っ黒焦げの状態のまま倒れ込んでしまつ。

ネギ

「ワ、ワリオさん！」

クライゴア

「心配せんでもよい、ワリオ君はこの程度では死にはせん。」

明日菜

「た、確かに……………」

明日菜達はクライゴアの言葉に納得する。

アナウンス

「さて、早速第一問です……………」

任天堂の看板的なゲームキャラクターであるマリオがゲームデビューしたファミコン作品は？

1：マリオブラザーズ

2：ドンキーコング

3：スーパーマリオブラザーズ

4：ドンキーコングJr

……さあ、正解はこの四つの選択肢の内のどれでしょうか？」

ネギ

「マ、マリオさんのデビュー作……明日菜さんは分かります？」

明日菜

「わ、分かる訳ないでしょ……大体、ファミコンなんて私が生まれる前にあったゲームだし……。」

カモ

「でも、マリオの旦那だったら答えは一番か三番じゃねえか？」

9ボルト

「……いや、答えは二番の『ドンキーコング』だよ。」

ネギ&明日菜

「えっ？」

ネギと明日菜は自信満々に答えるニンボルトの発言に一瞬耳を疑ったが…………。

ピンポーン！

アナウンス

「正解！」

18ボルト

「やったと！見事当たったとー！」

9ボルト

「こんなの基本中の基本だよ……………因みに、このゲームの内容はドンキーコングに誘拐されたレディという女性をマリオが救出するというアクションゲームなんだよ。」

明日菜

「……………あの子、やけに詳しいわね。」

ワリオ

「ニンボルトは任天堂マニアだから……………」

カモ

「俗に言つとゲームオタクってやつか……………」。

ネギー一行はニンボルトのマニアっぷりに苦笑いする。

アナウンス

「それでは、一問正解したので二階へ参ります！」

ガーーーーーッ……!!

アナウンスの言う通り、エレベーターは一階から二階へと進んでいく。

ネギ

「あれ？ちよつと待って下さい……………一問正解する事に一階ずつ進んでいくって事は……………」。

アナウンス

「はい、最上階へ行くには問題を全て答えて頂きます……………ただし、一問でも答えを間違つと一階ごと下がってしまうので注意して下さい。」

ワリオ

「おいおい！そんな悠長な事してないでさっさと最上階へ……………」

バリバリバリバリッ！！

ワリオ

「ぐお……………っ！！」

再びワリオの体中から高圧電流が浴びせられてしまう。

アナウンス

「文句等は一切受け付けません。」

ワリオ

「ち、畜生……………これで三回目……………」

ボタン！！

ワリオは再びその場で倒れ込んでしまう。

明日菜

「……………これで本当に死なないってのが不思議よね。」

カモ

「全くだぜ……………」

クライゴア

「ワリオ君はともかく、此処はナインボルト君に任せるしかあるまい。」

ペニー

「ナインボルト君！頑張つてね！」

マイク

「ふねーふねーデ、アリマス。」

9ボルト

「うつつ……………何だかプレッシャーを感じるなあ……………」

18ボルト

「心配いらんたい、辛くなったら俺っちが代わりに答えるたい。」

9ボルト

「ありがとう、エイティーンボルト。」

ナインボルトはエイティーンボルトが嬉しくて思わず笑顔を浮かべる。

アナウンス

「それでは、次の問題に参りたいと思います。」

9ボルト

「よし！何でも来い！！」

こうして、エレベーター内でのクイズ大会が開始されるのであった……。



第七十四話、最上階を目指して……（前編）〜（後書き）

果たして、ネギ達は最上階へ辿り着けるのだろうか？

第七十五話 最上階を目指して…… (後編) (前書き)

ネギ達は最上階を目指してクイズに正解しないと上昇しないエレベーターに乗り込んでしまおうが……。

第七十五話 最上階を目指して……（後編）

〜ワリオカンパニー・エレベーター内〜

ネギ達は最上階を目指してエレベーターのアナウンスから出題されるクイズに次々と答えていた。

明日菜

「…………ネギ、あの子達凄いわね…………。」

ネギ

「は、はい…………あれから一問も答えを間違わずに進んでってますね…………。」

9 ボルト

「ハアハア…………。」

18 ボルト

「ゼエゼエ…………。」

ネギ達が見守る中、ナインボルトとエイティーンボルトは息を切らしながら汗をかいていた。

ワリオ

「あいつら、何で問題に答えてるだけで汗をかいたり息を切らしてんだ？」

クライゴア

「あの二人は任天堂マニアとして全てを賭けておるのじゃ……………もし一問でもハズレたらそこで終わりだと覚悟を決めて挑んでおるハズじゃ。」

ペニー

「ま、まさか……………」

ペニーはクライゴアの言葉に思わず苦笑いをしてしまう。

アナウンス

「それでは、最後の問題です。」

18ボルト

「おお！やっとラストだがね……………」

9ボルト

「よーし、絶対に答えるぞ！」

ナインボルトとエイティーンボルトは最後の問題と聞いて意気込みを入れる。

アナウンス

「それでは、最終問題はこれです……………」

1980年に任天堂が初めて開発して発売した携帯ゲーム機『ゲーム&amp;ウオッチ』の記念すべき第一作目のソフトのタイトル名は何でしょうか？

1：ファイア

2：バーミン

3：シエフ

4：ボール

……………さあ、正解はどれでしょうか？」

9ボルト

「えっ！？えっつと……………な、何だったっけ……………」

18ボルト

「うっん……………最後の最後にして超難しい問題たい……………」

ナインボルトとエイティーンボルトは最後の問題に頭を抱えてしま  
う。

ネギ

「あの二人がこんなに考え込んでるって事は相当難しい問題なんで  
しょうねえ……………」

明日菜

「そ、そうね……………それに私、『ゲーム&ウォッチ』自体知らなか  
ったし……………」

ワリオ

（『ゲーム&ウォッチ』……………どっかで聞いた事あるような……………  
）

ワリオは『ゲーム&ウォッチ』という単語について考え込んでしま  
う。

9ボルト

「うーんと……………確か『ファイア』か『ボール』だったような……………  
どっちだっけなあ……………」

アナウンス

「さあ、残り時間は後僅かですよ。」

18ボルト

「わ、分かってるとよ!」

エイティーンボルトはアナウンスの言葉に思わず焦ってしまつ。

ワリオ

「絶対に間違つなよ!もし間違つたら、また一階からやり直しさせられちまうんだからな!」

ネギ

「ワ、ワリオさん……少し冷静に……。」

明日菜

「そうよ!あまりプレッシャーを掛けちゃ答えられないじゃない……。」

ネギと明日菜は興奮気味にナインボルト達にプレッシャーを掛けるワリオを宥める。

18ボルト

「……………ナインボルト、答えは分かったと?」

9ボルト

「うん、最初は少し悩んだけど……僕ちんの勘が『これだ!』っていう答えが一つだけ絞られたよ。」

18ボルト

「それは偶然だがね……実は俺っちも答えを一つに絞ったとよ。」

9ボルト

「そうなんだ……それじゃ、答え合わせのついでに一緒に答えを言っちゃおうよ。」

18ボルト

「でも、もしどちらかが間違ってたら……。」

9ボルト

「心配ないさ!僕ちんはエイティーンボルトを信じてるから、エイティーンボルトも僕ちんを信じてよ。」

18ボルト

「ナインボルト……。」

エイティーンボルトはナインボルトの思いやりのある言葉に思わず



感極まってしまう。

アナウンス

「さあ、そろそろ答えて下さい！」

9ボルト

「よし、せいの『でー』に答えよう！」

18ボルト

「おう！」

9 & 18ボルト

「せいの……四番の『ボール』！」

アナウンス

「……………」。

しばらくの間、エレベーター内はアナウンスから答えを待つ為に静まり返ってしまふ。

アナウンス

「……………大正解！」

9 & 18 ボルト

「やったーっ!!」

ナインボルトとエイティーンボルトはアナウンスの言葉を聞いた途端に大喜びしながら思わず声を上げる。

ワリオ

「よっしゃ!お前らよくやったぞ!!」

アナウンス

「全問正解おめでとございませう!それでは、最上階へと参りませう!」

ゴーーーーッ!!

エレベーターは最上階へと上昇していく。

チーーーーン!!

アナウンス

「お待ちせしました、最上階でございませう!」

ガーーーーーッ!!

最上階へ到着したと同時に、エレベーターの扉がゆっくりと開かれていく。

ワリオ

「やっとこのエレベーターから出られるぜ!」

カモ

「兄貴、早く此処から出ようぜ!」

ネギ

「分かってるよ。」

ネギ達はエレベーターから出ようとするが……。

9ボルト

「ちょ、ちょっとタンマ……。」

18ボルト

「も、もう限界ばい……。」

そう言うと、ナインボルトとエイティーンボルトはそのままグツタリと座り込んでしまう。

明日菜

「ど、どうしたの!？」

18ボルト

「す、少し集中しすぎて疲れたと……。」

9ボルト

「僕ちん達、此処で少し休んでくから先行つてて……。」

ネギ

「でも、それはちょっと危険では……。」

クライゴア

「うむ、それならマイクも此処に残ってもらおう……マイク、彼らの事を頼んだぞ。」

マイク

「了解デ、アリマス。」

こうして、マイクはニンボルト達と一緒にエレベーターの内部に残る事になった。

9ボルト

「それじゃ、また後でね……………」

18ボルト

「少し休んだら俺っち達も行くだよ……………」

マイク

「皆サン、才気ヲツケテ……………」

ガーーーーーッ！！

次の瞬間、ニンボルト達を乗せたエレベーターの扉がゆっくりと閉じていく。

ワリオ

「よし、このまま社長室まで突っ走るぞ！！」

明日菜

「わ、分かったからそんなに大声を出さないでよ……………」

明日菜はワリオの大声に思わず両手で耳を塞いでしまう。

ヤリクリ達

「居たぞー！ー！ー！！」

全員

「！？」

ネギ達は声がした方を向いてみると、ヤリクリの大群がこちらに向かって突っ込んでくる。

ワリオ

「くそっ！しつこい奴らだ……………」

明日菜

「……………ネギ、私がコイツらの相手をしてから後は頼むわよ。」

ネギ

「えっ！？で、でも明日菜さん一人だけじゃ……………」

明日菜

「大丈夫よ！修学旅行の時に戦った鬼達に比べたら、あんな奴ら楽勝だって……………じゃあ、ちょっと行って来るから！」

そう言うと、明日菜は『ハマノツルギ』を掲げながらヤリクリ達の群れに突っ込んでいく。

ワリオ

「……………あの女、かなり無鉄砲な性格だな。」

クライゴア

「君にだけは言われたくないな……………」

ワリオの言葉にクライゴアが冷静にツツコミを入れる。

カモ

「兄貴、今の内に先へ進もうぜ！」

ネギ

「う、うん……………」

ネギはあまり浮かない表情のまま先へ進もうとするが……………。

クライゴア

「待った！」

突然クライゴアがネギ達を制止させる。

ペニー

「お爺ちゃん、急にどうしたの？」

クライゴア

「向こうから何か近付いて来るぞい……………」

ワリオ

「何だと？」

ガガガガガ……………」

ネギ

「な、何の音でしょうか？」

そう言って、音がする方を見てみると、ヤリクリの姿をして大きな槍を持ったロボットが立ち塞がっていた。

ペニー

「ア、アレってまさか……………ロボット!？」



ワリオ

「ありゃヤリクリ型ロボのメカクリじゃないか!？」

クライゴア

「ほお、奴らが作ったロボットか……………」

クライゴアは興味津々にメカクリというロボットを見つめる。

ガアーーーーッ!!

すると、メカクリがネギ達に向かって勢い良く突っ込んでくる。

ネギ

「あ、危ない!!」

ネギ達は間一髪メカクリの体当たりを避ける。

ガッシャーーーーーン!!

メカクリはそのまま壁に追突してしまう。

ワリオ

「こらー！俺様の会社の壁を壊すんじゃねー！！」

ガツンッ！！

ワリオはメカクリを後ろから殴り付けるが……。

ワリオ

「いで~~~~っ！！」

ワリオはメカクリを殴った方の拳をもう片方の手で押さえながら地面に転げ落ちる。

クライゴア

「ほお、ワリオ君の馬鹿力でもびくともせんとは……あのロボのボディはかなりの強度で出来ておるに違いない。」

ペニー

「お爺ちゃんったら、敵のロボに感心してる場合じゃないでしょ……」

ペニーはクライゴアの言葉に少し呆れ返ってしまつ。

ガアーーーーッ!!

すると、メカクリが再びネギ達に突っ込んでくる。

カモ

「また来やがったぜ！」

ネギ

「魔法の射手・戒めの風矢!!」

ズバーーーーッ!!

ギギギッ……

ネギがメカクリに向けて拘束魔法を放つと、メカクリの動きが次第に停止していく。

ペーーーー

「な、何……ロボの動きが止まった？」

クライゴア

「おっ！？これはチャンスじゃ……………」

そう言うと、クライゴアは完全に動きを封じられたメカクリの背後へと回り込む。

ペニー

「お、お爺ちゃん！？何をするつもりなの？」

クライゴア

「このロボを改造して、私達の味方になってしまうのじゃ！」

ネギ

「そ、そんな事が出来るんですか！？」

クライゴア

「この私に不可能は無い……………ネギ君！もう少しだけこのロボの動きを封じておいてくれたまえ！」

ネギ

「わ、分かりました！」

クライゴア

「よし、では早速……………」

ガシャンー!!

クライゴアは何処からともなくスパナやドライバーを取り出して、メカクリの背中部分の開いて機械をいじくり回す。

クライゴア

「ふむ、思ったたよりも複雑な構造じゃな……………こりゃ、少し骨が折れそうじゃわい。」

ギギギギツ……………

クライゴアがメカクリの内部の機械をいじくり回してる最中、今すぐにもメカクリが動き出そうとしていた。

ワリオ

「お、おい！今にも動き出しそうだぞ!？」

カモ

「マズいなあ……………あのポンコツ、兄貴の拘束魔法を打ち破ろうとしてやがるぜ……………」

ネギ

「それじゃ、すぐに改造しないとクライゴアさんが……………」

ペニー

（お爺ちゃん……………」

ダッ！！

次の瞬間、ペニーがクライゴアの元へと駆け寄ってくる。

ペニー

「お爺ちゃん！私も手伝う！」

クライゴア

「ペ、ペニー！？危ないから下がっておれ！」

ペニー

「嫌よ！もしお爺ちゃんの身に何かあったら私……………」

クライゴア

「ペニー……………」

クライゴアはペニーの思いやりの言葉に感極まってしまった。

クライゴア

「……………分かった、ペニーも手伝ってくれ！」

ペニー

「うん、任せて！」

そう言うと、ペニーもクライゴアと一緒にメカクリの内部の機械をいじくり回す。

ギギギギギギッ……………

カモ

「ヤベエ！そろそろ限界だぜ！！」

ネギ

「ど、どうすれば……………」。

ワリオ

「お〜い！まだ改造出来ねえのか〜！？」

クライゴア

「後少しじゃ！」

ペニー

「えーっと、後はコレをこつすれば……………」

そう言いながら、ペニーが最後の仕上げに取り掛かっていると……………。

ガアーーーーーッ！！

クライゴア

「おわっ!?!」

ペニー

「きゃっ!?!」

突然メカクリが動き出して、再びネギ達に突っ込んでいく。

カモ

「き、来やがった!!」



ネギ

「ラ、ラス・テル マ・スキル……………」

ワリオ

「うおー……っ!!」

ガシッ!!

すると、ワリオがメカクリの前に立ち塞がり、持ち前の馬鹿力だけで押さえ込みながらメカクリの動きを封じる。

ネギ

「す、凄い……………」

カモ

「……………まさに馬鹿力だな。」

ネギとカモはワリオの馬鹿力に啞然とする。

ワリオ

「お、おい……………今の内に早く……………」

ペニー

「は、はい！」

ペニーとクライゴアは急いでメカクリの方へと駆け寄る。

クライゴア

「後はコレをこつすれば完璧じゃ……………それっ！！」

ガチャン！！

クライゴアが最後の仕上げを済ませた瞬間、メカクリの動きが完全に停止する。

ワリオ

「……………ふっつ、やっと止まったぜ。」

ネギ

「もうこれで大丈夫なんですね？」

クライゴア

「ああ、もはやこのロボは私の意のままに操る事が出来るのじゃ！」

ペニー

「凄い！流石は私のお爺ちゃんね！」

クライゴアはメカクリの頭の上で胸を張りながら自慢げに発言する。

ヤリクリ達

「見つけたぞー！」

次の瞬間、ヤリクリの大群がネギ達に向かって突っ込んでくる。

クライゴア

「フッフ、どうやら早速カモが来たようじゃわい……………行くぞー！私のメカクリよー！」

ペニー

「あ！待って……………」

クライゴアの合図でメカクリがヤリクリ達に向かって突っ込もうとした時、ペニーが慌ててメカクリにしがみ着く。

ガーーーーーッ！！

ヤリクリ達

「ぐわあーっ！っ！」

メカクリはヤリクリ達を吹っ飛ばした直後、そのまま廊下を突っ走っていく。

ネギ

「ワ、ワリオさん！クライゴアさん達が行っちゃいましたけど……」

ワリオ

「そんなの気にするな！俺様達は社長に向かうぞ！」

ネギ

「あっ！？ちょ、ちょっと……」

ネギはメカクリが向かった方向とは別の方へと突っ走っていくワリオに慌てて追い掛けていく。

（ワリオカンパニー・社長室内）

シロップ

「……………そう、教えてくれてありがとう。」

モナ

「……………。」

その頃、社長室で紫色のバンダナを頭に巻き付けてる女海賊・シロップが縄で体中を縛り付けて口にガムテープを張り着けてるモナから何かを聞き出していた。

シロップ

「さて、アレの在り家が分かった事だし……………後は例の物が届くの  
を待つだけだね。」

コンコン！

突然扉の向こう側からノックをする音が響き渡る。

シロップ

「おや、噂をすれば何とやらだね……入りな。」

ガチャ！

リリー

「失礼します！」

扉が開かれると、黒コートの人物と謎の少女・リリーが社長室に入ってくる。

シロップ

「随分時間が掛かっちゃったようだねえ……。」

リリー

「何よ、その言い方……こっちは探すのに苦労したんだからね！」

がばね

「リリー、少し落ち着け……。」

リリーの左肩からがばねが登ってきて、冷静にリリーを宥める。

シロップ

「フッ、まあいい……………とこるで、例の物は？」

？

「心配するな、ちゃんと手に入れた……………」

そう言うと、黒コート的人物は懐から髑髏マークが付いたランプを取り出して、そのままシロップに手渡す。

シロップ

「へえ、確かに本物のようだ……………どうやって探し出したんだい？」

リリー

「へっへっ、それはね……………」

？

「機密事項だ。」

ズルッ！！

リリーは自慢げな態度でシロップに説明しようとしたが、黒コート的人物の一言で遮られてしまい思わずコケてしまう。

シロップ

「そうかい……それはさておき、ランプを探し出してくれた報酬を支払わないとねえ。」

リリー

「えっ！？報酬？それじゃ、あたしはね……。」

？

「折角だが、報酬はいらない。」

リリー

「ちょっと！少しはあたしの意見も聞いてよ……。」

ガシャーーーーー！！

ワリオ

「フンガアーーーー！！」

すると、突然ワリオとネギが勢い良く社長室に入ってくる。

モナ



(ワ、ワリオのおじ様……………来てくれたのね！)

シロップ

「おやおや、ノックぐらいしてほしいねえ。」

ワリオ

「何言ってやがる！此処は俺様の会社じゃ！！」

ワリオはシロップの皮肉っぽい言葉に怒り出す。

カモ

「兄貴！例の黒コートの奴らが居るぜ。」

ネギ

「う、うん……………」

リリー

「は、い、お久しぶりねネギっ。」

ネギ

「ネ、ネギっっ？」

ネギはリリーに独特なあだ名で呼ばれて思わず首を傾げてしまふ。

カモ

「おいコラ！兄貴に変なあだ名を付けるな！！」

リリー

「何よ、別にいいじゃない……………カモ鍋のクセに生意気よ！」

カモ

「カ、カモ鍋って……………俺たちは鍋物の仲間じゃねえぞ！！」

ネギ

「カモ君、挑発に乗っちゃ駄目だよ……………」

ネギはリリーに変なあだ名を付けられて怒り出したカモを宥める。

？

「さて、大分騒がしくなって来たな……………リリー、帰るぞ。」

リリー

「は〜い……………それじゃ、バイバイ！」

パチッ！

黒コートの人物が指を鳴らした瞬間、二人はその場から消えてしま  
う。

カモ

「チッ、行っちゃったか……あいつら、一体何しに来やがったん  
だ？」

シロップ

「アタイにコレを届けてくれたのさ。」

そう言うと、シロップは先程黒コートの人物が届けてくれたランプ  
をネギ達に見せる。

ワリオ

「何だ？ただのランプじゃないか。」

シロップ

「フッフ、コレはただのランプじゃない……アンタにも見覚えが  
あるハズだよ？」

ワリオ

「俺様にも見覚えがあるだつて？………フン！人より数倍も記憶力抜群の俺様が覚えてないのに知ってる訳がないだろ。」

シロップ

「そう、だったら思い出させてやるよ………いでよ！デンプー！！」

キュッキュツ！

突然シロップが持っていたランプを擦り始める。

ブワァー………ツ！！

ネギ&ワリオ

「!？」

すると、ランプの中から大柄の太った男性が煙のように出て来る。

ネギ

「ラ、ランプの中から魔人が………。」

カモ

「おいおい、まさにアラビアンナイトじゃねえか………。」

ネギとカモはランプから出て来た魔人・デンプーに啞然とする。

シロツプ

「どう？これで思い出したかい？」

ワリオ

「……………う、煩い！俺様はそのランプを見た時から分かってたんだ  
！！！」

ネギ

「え？でも、さっきは見覚えがないと……………」

ワリオ

「あ、あれはだな……………わざとだ！わざと見覚えのないフリをして  
敵を油断させようとな……………」

カモ

（本当かよ……………。）

カモはワリオの言い訳っぽい発言に疑いの目で見つめる。

デンプー

「お呼びですか？御主人様。」

シロップ

「デンプーよ、今からアタイの言う事をよく聞くんだよ……………」。

そう言うと、シロップはデンプーの耳元でネギ達に聞こえない位の  
小声でデンプーに何かを伝える。

デンプー

「……………畏まりました。」

シロップ

「じゃあ、後は頼んだよ……………」。

シロップはその場から立ち去ろうと社長室から出ていく。

ワリオ

「お、おいコラー！何処へ行くつもりだ!？」

ワリオは急いでシロップの後を追いつけようとするが……………。

デンプー

「待て！この先へは行かせんぞ！！」

突然デンプーがワリオの前に立ち塞がる。

ワリオ

「このっ！邪魔すんな！！」

デンプー

「御主人様からの命令だ……………お前達の相手をしると申し付けられた。」

ネギ

「……………どうやら、闘うしかないみたいだね。」

カモ

「兄貴、油断すんなよ……………」

こうして、ネギ&ワリオとデンプーとの闘いの幕が今まさに上げられようとしていた……………。

第七十五話、最上階を目指して……（後編）（後書き）

果たして、ネギとワリオはデンプーに勝てるのか!?



第七十六話、デンプーの六変化？（前書き）

果たしてネギとワリオはデンプーを倒す事が出来るのか！？

## 第七十六話、デンプーの六変化？

（ワリオカンパニー・社長室内）

デンプー

「御主人様の命令だ！お前達を通す訳にはいかない！！」

デンプーは物凄い迫力でネギとワリオの前に立ち塞がる。

ワリオ

「ハッ、笑わせるな！前に俺様と闘って見事にボロ負けしたクセに勝てると思ってるのか！！」

デンプー

「確かに、このまま普通に闘っても勝てない………だが、御主人様の提案を参考にすれば勝てるハズだ。」

ネギ

「提案？」

ネギはデンプーの言葉に耳を傾ける。

デンプー

「それでは、始めよう……まず最初は『トゲブロスの甲羅』だ！  
！」

パチッ！

ボンッ！！

デンプーが指を鳴らした瞬間、デンプーの背中がトゲが数本生えた  
亀の甲羅に包まれる。

カモ

「何だありゃ？アレじゃ亀みてえじゃねえか。」

ワリオ

「待てよ、あの甲羅は昔どっかで見たような……。」

デンプー

「この甲羅は『キッチン島』の『ライスビーチ』という海岸を占拠  
していたトゲブロスの甲羅をモチーフにしている。」

ワリオ

「『キッチン島』……あゝ！俺様がシロップ達から巨大な黄金像

を奪い損ねちまったあの島か!！」

ワリオは『キッチン島』という島の名前を聞いて思わず声を上げる。

ワリオ

「にしても、シロップの奴め……そんな昔にやっつけたヘナチヨコの攻撃方法で俺様を倒せると思ってんのか？」

デンプー

「それだったら、試してみよう……それっ!！」

すると、デンプーがまるで亀のように首と手足を引っ込める。

ネギ

「あれ?首と手足を引っ込めましたけど……。」

ワリオ

「おいおい、これってまさか……。」

デンプー

「喰らえ!——!——!——!」

ギューイーーーーン!!

次の瞬間、デンプーが勢い良く回転しながら物凄いスピードでネギ達の方へ突っ込んでくる。

ネギ

「わっ!?!」

ネギは瞬動でデンプーの体当たりを間髪避けるが……………。

ドガアーーーーッ!!

ワリオ

「ぐわあーーーーっ!!」

ワリオだけがデンプーの体当たりを受けて、勢い良く吹っ飛ばされてしまう。

ネギ

「ワ、ワリオさん!大丈夫ですか!?!」

ワリオ

「いででで……あ、当たり前だ！こんな掠り傷程度に過ぎんわ……。」

ワリオは片手で頭を押さえながら荒々しくネギの質問に答える。

カモ

「危ねえ！またこっちに来るぜ！！」

ギューイーーーーン！！

カモの言う通り、デンプーが再び勢い良く回転しながらネギ達に向かって突っ込んでくる。

ネギ

「魔法の射手 連弾・雷の十七矢！！」

ズバーーーーーッ！！

次の瞬間、ネギがデンプーに向けて数十本の雷の矢を放つ。

カモ

「いいぞ！今のはモロに命中したぜ！！」

ワリオ

「いや、あれじゃ駄目だ……………」

ネギ

「えっ!?!」

ワリオの言う通り、デンプーはネギの攻撃に全く堪えてないかのよう  
に平然と引っ込めていた首と手足を出す。

ネギ

「そ、そんな……………確かに命中したはずなのに……………」

ワリオ

「トゲブロスって奴は甲羅に入ってる間だけどんな攻撃も効かねえ  
……………だから、今のデンプーも甲羅に入ってる間は無敵なんだよ。」

デンプー

「そういう事だ……………それでは、次に『ビーフンの角』で攻撃だ!」

パチッ!

ボンツッ！！

デンプーが指を鳴らした時、デンプーの頭部に牛のような鋭い二本の角が生えてくる。

カモ

「見る！今度は角が生えてきやがったぞ！？」

ワリオ

「今度はあのポットみてえな形した山に居た牛野郎の力かよ……………」

「

ワリオはデンプーの角を見た途端、思わず呆れ返ってしまふ。

デンプー

「今度はこの角で串刺しにしてやる……………とお—————っ  
！！」

次の瞬間、デンプーは二本の角をネギ達に向けた状態で突っ込んでいく。

ネギ

「ワリオさん！また来ますよ！！」



ワリオ

「分かってらあ！そう何度も攻撃を喰らってたまるか！！」

そう言うのと、ネギとワリオはデンプーの角を間一髪避ける。

ザクッ！！

すると、デンプーの角がそのまま壁に突き刺さってしまふ。

デンプー

「し、しまった！角が壁に刺さって抜けない……………」

そう言いながら、デンプーが壁に突き刺さってしまった二本の角を抜こうとして必死にもがくが……………。

ワリオ

「よーし！今だ……………パワフルパンチ！！」

ネギ

「崩拳！！」

バツコオーーーーーン！！

デンプー

「ぐふっ！？」

ガツシャーーーーーン！！

ネギとワリオの強力なパンチがデンプーの腹部に命中して、その勢いで吹っ飛ばされて壁に叩き付けられてしまう。

カモ

「よっしゃー！決まったぜー！！」

ワリオ

「ネギ坊主、お前魔法だけじゃなく腕っ節の方も結構あるじゃないか。」

ネギ

「は、はい……………これも僕に中国拳法を伝授して下さいました老師のお蔭でして……………」

因みに、ネギの言う老師というのは、明日菜達と同じクラスメイト

の古菲くふいの事である。

ワリオ

「まあ、俺様から見ればまだへナへナのへナチヨコだがな……………」

カモ

「何言つてやがる！兄貴がちょこつと本気を出せばオメエみてえなメタボ親父なんて相手にもならねえぜ！！」

ワリオ

「メ、メタボだとお！？このお〜！丸焼きにして豚の餌にしてやるうか！？」

カモ

「上等でい！やれるものならやってみやがれってんだ！！」

ネギ

「ふ、二人共！こんな時に喧嘩なんて……………」

ネギは口喧嘩をするカモとワリオを必死で宥めようとするが……………」

デンプー

「うぐぐ……………お、おのれえ……………」

デンプーが手で腹部を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

ワリオ

「んが？まだやるつもりなのか？」

ネギ

「どつやら、そうみたいですな。」

デンプー

「い、今のダブルパンチは効いたな………では、パンチにはパンチでお返しするでしょう………この『ヒンヤリのグローブ』でな……！」

パチッ！

ボンッ！！

デンプーが指を鳴らした瞬間、デンプーの両手が四つのトゲが付いたボクシンググローブに覆われる。

ワリオ

「ゲッ！？あのグローブはめっちゃ寒い島に居たペンギン野郎の……」

「…。」

カモ

「あんな物でパンチされたら一堪りひとたまもねえな……………」

デンプー

「そう、コレで殴られたらトゲに刺されたりして無事で済むハズがない……………覚悟っ!!」

ブンッ!!

ワリオ

「ぬおっ!?!」

ネギ

(は、速い!?)

ネギとワリオはデンプーの素早いパンチをギリギリで避ける。

デンプー

「ほらほら!避けてばかりじゃ勝てないぞ!!」

ワリオ

「畜生お〜！調子に乗りやがって……………」

ネギ

「挑発に乗ったら駄目です！敵はそう言ってわざと相手を怒らせてから隙を見て攻撃しよう……………」

ボガツ！！

ネギ

「ぐはっ！？」

ネギがワリオに忠告している最中にデンプーの一撃がネギの腹部に命中して、その勢いで吹っ飛ばされてしまう。

ワリオ

「ネギ坊主！！」

ドガツ！！

ワリオ

「ドガツ！！」

ワリオ

「がぼっ!?!」

ドツカアーーーーッ!!

ワリオの姿勢がネギに向けられた瞬間、デンプーがワリオの顔面に強力な一撃を与えたと同時に勢い良く壁まで叩き付けてられる。

カモ

「あ、兄貴!大丈夫かよ!?!」

ネギ

「う、うん……………少し効いたけど、幸いトゲには当たってないみたい……………」

そう答えると、ネギは腹部を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

ワリオ

「く、くそお……………さっきのフニヤタレパンチで前歯が二本も折れちまった……………」

そう言うと、ワリオは前歯が二本折れた状態でゆっくりと立ち上が

る。

デンプー

「まだ立ち上がれるようだな……………続いては『フンフンの顔』に変化だ!」

ボンッ!!

次の瞬間、デンプーの顔がまるで鬼のような恐ろしい形相へと変化する。

ネギ

「こ、今度は顔が変化した……………」

ワリオ

「その顔も見覚えがあるぞ……………確か、溶岩が流れていた谷に潜んでた顔だけの化け物だったような……………」

デンプー

「その通り……………では、攻撃も覚えているハズだ……………フンッ!!」

ブワッ!!



すると、フンフンの顔へと変化したデンプーの鼻の穴から燃え上がった大量の岩を吹き出す。

カモ

「危ねえ！あの野郎、鼻から燃えた鼻糞を出しやがった！！」

ネギ

「ち、違うよカモ君！アレは鼻糞じゃなくて岩だよ！」

ポオーーーーーーッ！！

ワリオ

「あちゃ~~~~っ！！」

ネギがデンプーの鼻から吹き出した岩を避けていると、燃え上がった岩の炎がワリオの尻へと燃え移ってしまう。

デンプー

「コレで止めだ！！」

シュッ！！

ネギ

「!?!」

次の瞬間、デンプーがネギに向けて固い舌を伸ばして突き刺さそうとするが……………。

ワリオ

「だ、誰か火を消してくれ……………!!」

ゴオー……………ッ!!

デンプー

「あぢゃっ!?!」

全身火だるま状態のワリオがネギの前に現れて、デンプーの舌がワリオを覆っていた炎に触れてしまい舌は火傷をしてしまう。

ネギ

「あ、ありがとうございます!お蔭で助かりました……………」

ワリオ

「そんな事より、早く火を消してくれ……………!!」

ネギ

「は、はい！」

ネギは慌ててワリオの火を消そうとするが……。

デンプー

「あちちち……おのれえ〜！そんなに火を消してほしいなら消してやるうじゃないか……いでよ！」『ボウボウの翼』……！」

ボンツ！！

次の瞬間、デンプーの背中から大きな翼が現れる。

カモ

「何だ！？まるで刹那の姉さんみてえじゃねえか！」

ワリオ

「あ、あの翼は……海賊船に居た大きな鳥野郎の……。」

デンプー

「この翼から強風を起こして火を消してやる……それ……っ」

「!!」

ブワァー……ッ!!

デンプーが翼を羽ばたかせた瞬間、強風が発生してワリオの炎を消していく。

ワリオ

「ふう〜、やっと火が消え……わあ〜!?!」

ドツカァー……ッ!!

火が完全に消し去られたワリオは喜ぶ間もなく吹っ飛ばされて壁に叩き付けられてしまう。

カモ

「な、何て強風だ……。」

ネギ

「ぜ、全然前に進めない……。」

ネギはデンプーの方へ近付こうとするが、強風の為に立っているの

が精一杯である。

デンプー

「さて、そろそろ終わりにしてやるっ……この『ゼニスキーの財布』で……！」

ボンッ！！

次の瞬間、デンプーの腹部に蝦蟇がまぐち口型の巨大な財布が現れる。

ワリオ

「お！？もしかあの財布は、森のお化けが持っていた財布じゃ………」

デンプー

「そう、コレでお前の大好物を出してやるっ……そらっ！！！」

ジャラジャラ……

デンプーは財布の中から次々とコインを取り出して辺りにばら巻く。

ワリオ

「ぬお〜！俺様の大好きなコインじゃないか〜！！」

ワリオが急いでコインの方へ駆け寄った瞬間……………。

ボンツ！？

ネギ&ワリオ

「！？」

次の瞬間、大量のコインが小柄なチビデンプーへと姿を変える。

デンプー

「チビデンプー達よ！一斉攻撃だ！！」

ビー……………ッ！！

ワリオ

「ぐぎぎや……………！！」

チビデンプー達はデンプーの言葉を合図に、ワリオに向けて掌から光弾を放つ。

ボタンー！！

すると、ワリオはそのまま倒れ込んでしまう。

ネギ

「ワリオさんー！！」

ネギは慌ててワリオの方へ駆け寄りつつするが……………。

デンプー

「さあ、残るはお前だけだな……………」

ネギ

「くっ……………」

デンプーとチビデンプーの大群がネギの前に立ち塞がる。

ワリオ

（ち、畜生……………ダメージを受け過ぎたか……………せめて、ニンニクでもあれば……………んっ！？）

ワリオは何かの臭いに気付き、大きな鼻をヒクヒクと動かす。

ワリオ

（この臭いは……………ニンニクだ！……………だが、一体何処から……………。）

ワリオは芋虫みたいに体をくねらせなが臭いの元まで移動していく。

ワリオ

（此処からニンニクの臭いがする……………んが？）

モナ

「んー！んんー！！」

ワリオが臭いも元まで辿り着いて顔を上げてみると、そこには口にはガムテープを貼られて体中には縄で縛られて動けない状態のモナが居た。

ワリオ

（ニンニクの臭いはモナから……………まさか！？）

ビリッ！！



モナ

「ぷはっ！苦しかった……………」

突然ワリオは立ち上がって、モナの口に貼ってあったガムテープを勢い良く剥がす。

ワリオ

「おいモナ！お前、ニンニク持ってるだろ！？」

モナ

「え？う、うん……………ジョー店長がニンニクピザを作るって言うから買って来たけど……………」

ワリオ

「そうか！早くそのニンニクをよこせ！！」

モナ

「そ、そうしたいんだけど……………縄で縛られてて身動きが取れないの……………」

ワリオ

「ったく、世話が焼けるな……………フンッ！！」

ブチッ!!

ワリオはモナの体中を縛ってる縄を物凄い馬鹿力で引きちぎる。

モナ

「さ、流石ワリオのおじ様……………」

モナはワリオの馬鹿力に唾然とする。

ワリオ

「そんな事より、早くニンニクをよこせ!」

モナ

「は、はい!」

モナはワリオに綱に三個入ったニンニクを手渡す。

ワリオ

「よし!コレさえあれば……………あ~~~~ん!」

ゴクッ!!

ワリオはニンニクを三個いっぺんに口の中に入れて、そのまま飲み込んでしまう。

モナ

（おじ様だったら、ちゃんと噛んで食べなきゃ……………。）

そう思いながら、モナは思わず苦笑いをしてしまう。

ワリオ

「うおー！力が漲るぜえ……………！」

そう叫ぶように言うと、ワリオはデンプーに向かって突っ込んでいく。

ネギ

（ワ、ワリオさん！？）

デンプー

「また来たか……………チビデンプー達！もう一度攻撃だ！！」

ビ……………ッ！！

チビデンプー達はワリオに向けて再び光弾を放つが……………。

ワリオ

「こんなの痛くも痒くもないわぁ……………!!」

バコォ……………ン!!

チビデンプー達

「わぁ……………っ!!」

ワリオはチビデンプー達の攻撃を全くモノともせず、チビデンプー達を吹っ飛ばしていく。

デンプー

「な、何!？」

ワリオ

「これでも喰らえ! パワフルアターック!!」

ボツカァ……………ッ!!

デンプー

「がはっ!?!」

ガッシャーーーーン!!

ワリオの強力な体当たりで吹っ飛ばされたデンプーは、そのまま勢い良く壁に叩き付けられてしまう。

ネギ

「す、凄い……………」

ネギはワリオの強力な体当たりを目の当たりにして、思わず啞然としてしまう。

ワリオ

「おい、ネギ坊主!今から俺様の言う事をよく聞いとけ。」

ネギ

「な、何でしょうか?」

ワリオ

「いいか、奴の弱点は頭だ……………だから、俺様がタイミング良く奴

の弱点に向けてお前を投げ飛ばすから、奴に強力な一撃を打ち嘯ま  
してやれ。」

ネギ

「え？それってどっいつ意味で……………」。

デンプー

「ぬお————っ！！」

ネギがワリオの言葉に耳を傾けた時、デンプーが勢い良く立ち上がる。

ワリオ

「よし！来るぞ！！」

ガシッ！！

ネギ

「えっ！？」

次の瞬間、ワリオは片手でネギを持ち上げる。

デンプー

「もう容赦せんぞお！喰らえーーーー！！！」

ブンッ！！

デンプーはワリオに向けてトゲ付きグローブを振り下ろすが……。

ワリオ

「とおっ！！！」

デンプー

「……………あれ？」

ワリオはネギを持ち上げたままその場でジャンプして、デンプーの攻撃を避ける。

ワリオ

「そんじゃ、打ち噛まして来ーーーーい！！！」

ブンッ！！

ネギ

「わあ~~~~っ!？」

ワリオはデンプーの頭目掛けて勢い良くネギを投げ飛ばす。

ネギ

(ほ、本当だ……確かに頭上目掛けて投げてる……よし!)

デンプーの頭上へ向けて的確に投げ飛ばされると確信したネギは咄嗟に身構える。

ネギ

「魔法の射手・雷の一矢……攫打頂肘!！」

ドオooooooooooooッ!!

デンプー

「ぐがつ!？」

ネギが魔法の呪文を唱えたと同時に、強力な肘攻撃をデンプーの頭に打ち込む。

カモ



「よっしゃ！決まったぜ兄貴！！」

デンプー

「うぐぐぐ……………」

ネギが上手く床に着地すると、デンプーは体中に電気を浴びてる状態でおぼつかない足付きで立ち尽くす。

ワリオ

「まだまだ！この程度で終わらせんぞー！！」

ガシツ！！

次の瞬間、素早く駆け出したワリオは逃げられないようにデンプーの腹部を両手で掴む。

ワリオ

「おらおらおら〜！！」

ブンブンブンブンッ！！

デンプー

「ぬわあ~~~~っ!!」

ワリオはシェイクするかのよう<sup>に</sup>デンプーを左右に激しく揺さ振る。

ワリオ

「とりゃーっ!!」

ガッシャーーーン!!

すると、ワリオはそのまま天井に向けてデンプーを投げ飛ばして、天井に頭を激しく打ち付けてしまう。

デンプー

「も、もう勘弁……。」

そう言い掛けると、デンプーは天井から落下してしま<sup>う</sup>。

ワリオ

「いいや!絶対に勘弁ならんわい!!」

ガシッ!!

ワリオは落下してきたデンプーを持ち上げる形で両手でキャッチする。

ワリオ

「これで止めだ！パイルドライバー……！！」

ギューイー……ン……！！

ドッカァ……ン……！！

デンプー

「ぐわぁ……っ……！！」

ワリオがデンプーを持ち上げたまま高くジャンプすると、デンプーの頭を床に向けた状態にして高速回転させながら勢い良く床に叩き付ける。

デンプー

「や、やはり……敵わなかった……」

シュー……ッ……

そのまま倒れ込んだデンプーは、ランプの中に吸い込まれるかのよ  
うに戻っていく。

ワリオ

「ガッハハハハハハハ！このワリオ様を倒すなど一億万年早いわ！  
！」

モナ

「キヤー！ワリオのおじ様カッコイイー！！！」

カモ

「チッ、あの親父が手柄を全部持っていつちまったぜ。」

ネギ

「まあまあ、別にいいじゃない……………」

ネギはワリオの高笑いを聞いて不機嫌な状態になってるカモを宥め  
る。

ネギ

「ところでワリオさん、さっきの女海賊さんを追っ掛けないと……  
……………」

ワリオ

「あーそうだった……シロップの奴は一体何処に行きやがったんだ！？」

モナ

「そ、それが……。」

突然モナが恐る恐るワリオの発言に割り込む。

ワリオ

「何だ？何か心当たりでもあるのか？」

モナ

「う、うん……おじ様達が此処に来る前にね……海賊の人に会社の金庫がある場所を教えちゃったの……。」

ワリオ

「な、何い……っ！？」

ワリオはモナの言葉を聞いて思わず大声を上げてしまう。

ワリオ

「あの金庫には俺様のへそくりが……………金庫室へ向かっぞぉー！ー！ー」

ネギ

「あっ！？ま、待って下さいー！」

モナ

「あ、あたしも！」

ワリオが社長室から出ていくと、ネギとモナもワリオの後から駆け出していく。

↳ワリオカンパニー・金庫室↳

ワリオ

「ハアハアツ……………や、やっと着いた……………」

数分後、ワリオ達は金庫室の扉の前までやって来た。

ワリオ

「お、俺様のへそくりは……………」。

ガチャツ！

ワリオが金庫室の扉を開けた瞬間……………。

ワリオ

「あ……………っ……………！」

突然ワリオが社内に響き渡るようなとてつもない大声を上げる。

カモ

「な、何て馬鹿デカい声だ……………」。

ネギ

「ど、どうしたんですか？」

ワリオ

「ど、どうしたもこうしたも……アレを覚えてみる！」

ワリオの指さす方を見ると、そこには開けっ放しで空っぽの大きな金庫があった。

モナ

「き、金庫の中が空っぽ……。」

カモ

「どうやら、手遅れだったようだな。」

ネギ

「……あれ？金庫の中に手紙が入ってる。」

そう言うと、ネギは金庫の中に入ってた手紙を拾う。

カモ

「何て書いてあるんだ？」

ネギ

「えっとね……」



ワリオへ

アタイらから盗んだ財宝の代わりに、アンタのへそくりを全て頂いていくよ……その代わりと言っては何だけど、アタイからのプレゼントを受け取っておくれ

キャプテン・シロップより

……と書いてある。」

ワリオ

「フンガアーーーー！ふざけるなあーーーー！」

ワリオはシロップが残した手紙の内容に怒り出してしまつ。

カモ

「……ところで兄貴、そのプレゼントってのはコレの事じゃねえか？」

ネギ

「えっ？」

ネギはカモの方を見てみると、カモがプレゼント用にラッピングされた箱の上に乗っかっていた。

ネギ

「この箱には何が入ってるんだろう?」

カモ

「開けてみようぜ!」

ネギ

「あっ!?カ、カモ君……………」

カモがリボンを外して箱を開けてみると……………。

カモ

「……………何だこりゃ?」

箱の中には髑髏のマークが付いてる黒くて大きなボールのような物が入ってた。

ネギ

「何だろっ?ボールか何かかな……………」

ネギが箱から黒いボールのような物を取り出してみると……………。

ジューーーーッ!!

黒いボールから導火線のような縄が点火した状態で垂れ下がっていた。

ネギ

「あれ？この縄は何だろう……。」

カモ

「あ、兄貴……ソレってまさか……爆弾じゃねえのか？」

ネギ

「ば、爆弾!？」

ワリオ

「何だつて!？」

モナ

「う、嘘でしょ……。」

ネギ達はカモの発言に耳を疑った。

ワリオ

「ネ、ネギ坊主！それを持って急いで外へ出る！！」

ネギ

「で、でも……………その後コレはどうすれば……………」

カモ

「と、とにかく落ち着け兄貴！！」

ネギ達がパニック状態に陥っていると……………。

バァー……………ツ！！

全員

「！？」

突然ネギが持っていた爆弾に光線が浴びせられ、爆弾はそのままネギの手元から消えてしまう。

ネギ

「ば、爆弾が消えた……………」

カモ

「い、一体どうなってんだ？」

？

「……………ふう、危なかった……………」

ワリオ

「だ、誰だ！？」

ワリオ達は声が出た方を向いてみると、そこには小さな魔法の杖を持ったアシュリーが立っていた。

モナ

「ア、アシュリーちゃん！」

ボンツ！！

レッド

「俺もおるで〜！」

アシュリーが持っていた小さな杖がレッドへと姿を変える。

ネギ

「も、もしかして……………アシュリーさんが爆弾を瞬間移動して下さったのですか？」

レッド

「そやで！アシュリーはこっそりとみんなの後を付けたりして、魔法でみんなのサポートをしてたんやで……………」。

アシュリー

「……………レッド、後で覚えてなさい……………」。

レッド

「ひえ〜〜！か、堪忍してえ〜〜〜……………」。

レッドはアシュリーの言葉を聞いて酷く怯える。

明日菜

「ネギーー……………」

すると、明日菜を含む残りのメンバー全員がこちらへ向かってくる。

ネギ

「あ！皆さん……………無事だったんですね！」

刹那

「ネギ先生こそご無事で何よりです。」

ジミー

「Hey！モナちゃんも無事みたいだYO！！」

モナ

「はい！おじ様達のお蔭でね。」

ネギ達は再会の喜びに浸っているが……………。

ワリオ

「感動の再会に喜んでいる場合じゃない！！」

突然ワリオが叫ぶような大声で発言する。

クリケット

「モ、モナさん……………ワリオさんはどうしたッスか？」

モナ

「そ、それが……………海賊の人達にへそくりを取られちゃったからこ  
立腹みたいなの……………」。

オービュロン

「へ、へそくりですト!？」

ワリオカンパニーの社員達はモナの言葉に思わず耳を疑った。

スピッツ

「そないなモンがあるんやったらワシらに給料払ってくれたらええ  
やんか!」

ドリブル

「せや!ワテら一度も給料貰った事ありませんで!」

ワリオ

「う、嫌い!今は給料なんてどうでもいいだろ!」

9ボルト

「そんなの無茶苦茶だよ!」

18ボルト



「俺っち達も一応社員ばってん払うもんは払ってほしかよ！」

ワリオ

「あゝ！もゝ！ゴチャゴチャ喚くなゝゝゝ！！！」

ワリオはドリブル達と給料の事で揉め始める。

カット

「ペニー殿、へそくりって何？」

アナ

「栗の親戚？」

ペニー

「え！？えゝつとね……………」

クライゴア

「簡単に言えば、内緒でこっそりと貯めてたお金の事じゃな。」

マンティス

「まあ、ある意味間違っではおらんのお……………」

マンティスはクライゴアの答えを聞いて微かに苦笑いしてしまう。

カモ

「……………兄貴、そろそろ帰ろうぜ。」

ネギ

「そ、そうだね……………この世界はもう大丈夫みたいだし……………」

明日菜

「はあ、何だか一気に疲れてきたわ……………」

そう言うと、ネギー一行はワリオ達に気付かれないようにこっそりと『ワリオカンパニー』を後にしていく。

レミド

「……………ところでアシュリー、あの爆弾を何処へ瞬間移動させたん  
？」

アシュリー

「……………アシュリーにも分からない……………」



「ダイヤモンドシティ・ワリオの家」

その夜、自分の家に帰って来たワリオは……………。

ワリオ

「……………な、何じゃこりゃ……………!?!?」

ワリオは何かの衝撃で破壊されて跡形も無くなってる自分の家を目の当たりにして、思わず大声を上げてしまうのであった……………。

## 第七十六話、デンプーの六変化？（後書き）

こうして、ネギー行はダイヤモンドシティを後にして次の世界へど目指していく。

因みに、今回の話でデンプーが『ワリオランド』のボスキャラの一部に変化して攻撃するというネタは、自分が小さい頃に読んでいた『コロコロコミック』で現在も連載されてるマリオのギャグ漫画『スーパーマリオくん』を参考にしました！

今回は『パルテナの鏡 + 編』です！

第七十七話 天空界の若き隊長と女神様 (前書き)

ワリオ (厳密に言えばマリオ) の世界から帰って来たネギー行だが  
……。

第七十七話 天空界の若き隊長と女神様

く???.???)

全体真っ黒で何も見えない部屋で、二つの影がまた何かを語っていた。

?

「.....さて、報告を聞かせてもらおうか？」

?

「はい、指示通りにアレを設置して参りました。」

?

「そっか.....」苦勞、もう下がってもよいぞ。」

?

「.....その前に、一つお聞きしても宜しいでしょうか？」

?

「ん?何だ?」

?  
「何故アレを仕掛けようと思いついたのですか？」

?  
「目的？別に深い意味など無いが……ただ、少しでも早くこの茶番劇を終わらせようと思ってな。」

?  
「茶番劇……ですか。」

?  
「……どうした？不服か？」

?  
「いえ、滅相もない……では、失礼します。」

スッ！！

もう一方の影はそのまま姿を消していく。



〔大乱闘の館・中庭〕

翌日の早朝、ネギー一行はいつも通り中庭に集合していた。

マスターハンド

「……………さて、君達に行ってもらう世界は残り七つだけとなった。」

ネギ

「後七つですか……………」

明日菜

「へえ、もう半分以下じゃない。」

木乃香

「後もう一息やね。」

刹那

「そうですね、残りの世界でも精一杯頑張らしましょう。」

マスターハンド

「うむ、その調子で頑張ってくれ……………」

マスターハンドは少し沈み込んでいるような声でネギー一行を励ます。

のどか

「あゝ、どうかしたんですか？」

マスターハンド

「う、うむ……………実は、大変な事が起こってしまっ……………」

ネギ

「大変な事？」

マスターハンド

「ああ、先程話した残り七つの世界の内の三つの世界が……………亜空間に飲み込まれたようなのだ。」

ネギー一行

「えっ!？」

ネギー一行はマスターハンドの発言に耳を疑った。

ネギ

「ほ、本当ですか!？」

マスターハンド

「ああ、間違いない……………恐らく例の黒コートの人物の仕業だろう。」

「

明日菜

「あいつが……………」

カモ

「あの野郎、遂にそんな卑劣な真似を……………」

刹那

「許せませんね……………」

ネギ一行の表情が先程よりも険しくなる。

木乃香

「ほなら、その世界の人達はどっとなったん？」

マスターハンド

「安心してくれ、亜空間に飲み込まれた世界の住人達は生きている。」

のどか

「良かった……………」

ネギー一行はマスターハンドの話聞いて一安心する。

マスターハンド

「だが、ある別の世界に飛ばされたらしい。」

ネギー

「別の世界……………ですか？」

マスターハンド

「そう、その世界は奇しくも君達がこれから行く事になってる世界なんだ。」

カモ

「へえ、そりゃまさに奇遇だな。」

マスターハンド

「そこで、君達にお願いがあるのだが……………その世界に行って、彼

らの安否を確かめてほしい。」

ネギ

「……………分かりました！任せて下さい！！」

マスターハンド

「そうか……………本当にありがとう。」

マスターハンドは少し申し訳なさそうな低い声でネギにお礼を言う。

マスターハンド

「それと、もし彼らを見つけて無事だと分かったら、いつものようにバッチを渡してほしい。」

ネギ

「はい、分かりました……………ところで、その渡す相手の名前とバッチの形は何ですか？」

マスターハンド

「うむ……………茄子の形したバッチをアイスクライマーと名乗る二人組に、小さなベルを持った人の横顔のような形したバッチをMr.ゲーム&ウオッチに、駒のような形したバッチをロボットに渡してくれ。」

ネギ

「えっと……アイスクライマーさん達とMr.ゲーム&ウォッチさんとロボットさん……で宜しいですね？」

ネギは少し不安げな表情でマスターハンドに問い掛ける。

マスターハンド

「ああ、その通りだ……それから、弓矢の形をしたバッチをこの世界の住人であるピットに渡してほしい。」

ネギ

「ピットさんには弓矢の形のバッチですね……はい！了解しました  
！！」

ネギは復唱すると同時にマスターハンドの頼みを全て引き受ける。

明日菜

「それにしても、ゲーム&ウォッチって変わった名前ね……。」

木乃香

「そやね……でも、ロボットって名前も結構変わってると思わへん？」

刹那

「た、確かに……………それから、アイスクライマーというのはコンビ名か何かなんでしょうか？」

のどか

「コンビ名って……………何だか、お笑い芸人みたいですね。」

ネギ

「み、皆さん！そろそろ出発しますよ！！！」

明日菜

「え？あ、ああ！そ、そうね……………」

突然ネギに声を掛けられた明日菜達は急いでワープ土管へと入っていく。

くエンジェルランド・天空界く

ネギ一行は雲の上に浮かぶ何処か神秘的な雰囲気漂う場所へとや  
つて来た。

明日菜

「わゝ、見て見て！私達雲の上に居るわよ！」

木乃香

「あ！ホンマやゝ！！！」

ネギ一行は周りの景色に思わず見とれてしまう。

カモ

「兄貴、こりゃかなりの絶景ポイントだな。」

ネギ

「本当だね……………何せ、雲の上の景色なんて滅多に見れないし……………」

刹那

「それにしても、此処に人なんて住んでいるのでしょうか？」



のどか

「さ、さあ……………」

ネギー一行が人を捜す為に辺りを見回してみると……………。

？

「おい！そこの者達！！」

ネギー一行

「！？」

ネギー一行は何物かの声に反応して見上げると、上空にはギリシャ神話に出て来る兵士のような格好に小さな羽根を生やしたヘルメットのような兜を被った小柄な男達が弓矢を構えていた。

明日菜

「な、何！？アンタ達は誰なの？」

？

「我々はパルテナ親衛隊を務めるイカロス部隊だ！」

刹那

「パルテナ……………親衛隊？」

ネギー一行はイカロスと名乗る集団の言葉に耳を傾ける。

イカロスA

「お前達こそ何物だ！？それに、羽根も無いのにどうやってこの『天空界』へ侵入した！？」

ネギ

「ぼ、僕達は決して怪しい者ではありません！ただ、ピットさんという方に会いたくて……………」。

イカロスB

「何っ！？ピット隊長に会いたいだと？」

イカロス達はネギの発言に耳を疑った。

イカロスC

「も、もしか……………ピット隊長の知り合いか？」

ネギ

「え？あ、いや……………知り合いという程ではありませんが……………」。

明日菜

「そ、そう！私達、ピット隊長のちょっとした知り合いなの！」

ネギ

（あ、明日菜さん！？）

明日菜

（いいじゃない！どうせこれから知り合いになるんだから……それにも、もしかしたらピットって人が居る場所まで案内してくれるかもしれないじゃない。）

ネギ

（そ、それはそうかもしれませんが……。）

ネギと明日菜はイカロス達に聞こえない位の小声で揉め始める。

イカロスD

「し、失礼致しました！どうか我々のご無礼をお許し下さい！」

そう言うのと、イカロス達は構えていた弓矢を引っ込めて、ネギ一行に向けて敬礼をする。

明日菜

「ほら、上手くいったじゃない！」

ネギ

「は、はぁ……………」

ネギは明日菜の嘘に引っ掛かったイカロス達に思わず啞然としてしまつ。

木乃香

「ほなら、ウチらをピットはんが居る所まで案内してくれへん？」

イカロスE

「はっ！お任せを……………それでは、我々に付いて来て下さい！」

そう言つと、イカロス達は何処かに飛び立とうとする。

ネギ

「あつ！？ま、待って下さい……………」

ネギ一行は慌ててイカロス達の後を追いつけていく。

〈天空の神殿前〉

ネギー一行はイカロス達の案内で、大きな神殿の扉の前へとやって来た。

明日菜

「随分大きな建物ね……………」

ネギ

「この中にピットさんが居るんですか？」

イカロスA

「はい、恐らくピット隊長はパルテナ様の所に居ると思われませう。」

木乃香

「パルテナ様って？」

イカロスB

「この『エンジェランド』を治めておられる光を司る女神様です。」

のどか

「め、女神様!？」

ネギー一行はイカロスの言葉に耳を疑った。

刹那

「……………という事は、私達はこれから神様に会いに行く訳ですね?」

ネギ

「そ、そういう事ですね……………」

カモ

「姐さん、神様の前で可笑しな事を言うなよ?」

明日菜

「な、何ですって!？」

明日菜はカモの皮肉っぽい助言に怒り出す。

イカロスC

「と、とにかくパルテナ様の前では無礼の無いようにお願いします。」

ネギ

「わ、分かりました。」

イカロスD

「それでは、神殿の中へどうぞ……………」。

ギーーーーーッ!!

神殿の大きな扉が開いたと同時に、ネギ一行はイカロス達と一緒に神殿の中へと入っていく。

〈天空の神殿内〉

ネギ一行はイカロス達に案内されながら神殿の内部を進んでいた。

ネギ

「……それにしても、中も結構広いですね。」

イカロスA

「ええ、何せパルテナ様が住んでおられるので……それに、この神殿に入れるのは我々パルテナ親衛隊だけなのです。」

刹那

「では、私達をこの神殿に入れて大丈夫なのですか？」

イカロスB

「大丈夫ですよ、皆様はピット隊長の知り合いだから特別です。」

明日菜

「うっ……。」

明日菜はイカロスの言葉に度肝を抜かされる。

ネギ

(ど、どうすんですか？明日菜さん……。)

カモ



(そうだけ！もしコイツらに俺っち達がピットって奴の知り合いじゃねえって分かったら……。)

明日菜

(だ、大丈夫だって！ちゃんと説明すればきっと分かってくれるわよ。)

木乃香

(そやつたらええんやけど……。)

ネギ達は明日菜の根拠の無い言葉に不安げな気持ちになる。

？

「あれ？みんな揃ってどうしたの？」

イカロスC

「あ！ピット隊長！！」

ネギ一行

「えっ！？」

ネギ一行がイカロスの言葉に反応して振り向いてみると、そこには背中に大きな羽根を生やして真っ白な衣装に身を包みスパッツのよ

うな黒い短パンを掃いた茶髪の少年が立っていた。

ネギ

（あ、あの人がピットさん？）

明日菜

（嘘でしょ？隊長って呼ばれてるぐらいだから、もっと大人の人か  
と思ったけど……………。）

木乃香

（ウチらとほぼ同じぐらいの歳の子やな……………。）

ネギー行はピットの姿を見て少し愕然とする。

イカロスD

「ピット隊長、隊長の知り合いだという人達を連れてきました。」

ピット

「え？僕の知り合い？」

そう言つと、ピットはネギ達の顔を食い入るよう見つめる。

ピット

「うーん……僕、君達と何処かで会ったかな？」

イカロス達

「えっ!？」

イカロス達はピットの言葉を聞いて、一斉にネギ一行の方を見つめる。

明日菜

「あゝ、えーっと……詳しい事はネギが説明するわ！」

ネギ

「えっ!？ぼ、僕がですか？」

カモ

( 姐さん……上手く逃げたな……。 )

カモは明日菜がネギに上手くバトンタッチした事に思わず感心してしまう。

ネギ

「ぼ、僕達はですね……。」

ネギはこれまでの経緯をピットに説明する。

ピット

「ちょ、ちょっと待って……………まず最初に、君達は僕達にバッチを渡す為に色々な世界を巡ってる訳だね？」

ネギ

「はい、コレがそのバッチです。」

そう言うと、ネギはピットにバッチを手渡す。

ピット

「あ、ありがとう……………それから、アイスクライマーの二人とゲム&ウォッチさんとロボットさんがこの世界にさ迷ってるって本当なの？」

ネギ

「はい、マスターハンドさんがそうおっしゃってました。」

ピット

「そうなんだ……………イカロス部隊！！」

イカロス達

「は、はい！」

ピットに呼ばれたイカロス達は一斉に整列しながら返事をする。

ピット

「直ちに『天空界』と『地上界』のありとあらゆる場所を搜索して、アイスクライマーの二人とゲーム&ウォッチさんとロボットさんを見つけ出すんだ！」

イカロスA

「了解！」

イカロスB

「……………その前に、その方々の特徴とかを教えてくださいませんか？」

ピット

「あ、そうだった……………アイスクライマーの二人は厚着を着た子供の姿をして、ゲーム&ウォッチさんは全身真っ黒で平面な人の姿をして、ロボットさんは……………多分見れば分かると思うよ。」

イカロスC

「た、隊長……………イマイチ分からないのですが……………特に、二番目

と最後の方の説明が……………」

他のイカロス達も同意するかのよう頷く。

ピット

「と、とにかく！その四人を見つけたら僕にすぐ知らせてね！！」

イカロス達

「わ、分かりました！」

イカロス達が敬礼しながら答えると、そのまま勢い良く飛び立っていく。

ピット

「……………さてと、イカロス達が戻って来るまでさっきの話をもっ少しだけ聞かせてくれるかい？」

ネギ

「は、はい。」

明日菜

「……………ねえ、その前にちょっといい？」

ピット

「え？何？」

明日菜

「その背中の羽根って……本物なの？」

ピット

「……………へ？」

ピットは明日菜の突然の発言に一瞬耳を疑った。

カモ

「あ、姐さん……………急に何を言い出すんだ？」

明日菜

「だ、だって……………さっきから気になっちゃって……………」。

明日菜はかなり照れ臭そうに答える。

ピット

「ほ、本物だよ？」

明日菜

「じゃ、じゃあ……ちょっと触ってもいい？」

ピット

「えっ!？」

木乃香

「あ〜!明日菜だけずるいわあ……ウチも触りたい!」

刹那

「お、お嬢様まで……。」

明日菜と木乃香の突拍子もない発言に他のメンバーは少し呆れ返ってしまふ。

ピット

「べ、別にいいけど……。」

明日菜

「ほ、本当?それじゃ、早速……。」

わしゃっ……



ピット

「ひゃっ!?!」

明日菜がピットの羽根を触った瞬間、ピットは思わず変な声を上げてしまう。

明日菜

「……………うん、この感触は確かに本物の羽根ね。」

木乃香

「ホンマに? ほならウチも……………えいつ!」

もふっ…………

ピット

「わひゃっ!?!」

更に木乃香は明日菜が触っている方の羽根とは反対側の方の羽根で自分の顔を押し付ける。

木乃香

「ホンマや〜！せつちゃんの羽根と全く同じ感触やわ〜。」

明日菜

「でしょ？それに臭いも同じみたいだし……。」

ピット

（な、何だか……羽根を弄られてくすぐったいような恥ずかしいような複雑な気分……。）

ピットは明日菜と木乃香に羽根を触られたり顔を押し付けられたり臭いを嗅がれたりして、かなりくすぐったそうな表情を浮かべる。

カモ

「あゝあ、何やってんだか……。」

ネギ

「も、もうその辺にしておさいね……。」

のどか

「でも、何だか本当に気持ち良さそうです。」

刹那

「だけど、触られてる方は本当にくすぐったいんですね……。」

刹那は未だにくすぐったそうな表情を浮かべてるピットを見て自然と複雑そうな表情になってしまう。

〔数時間後〕

イカロスA

「ピット隊長！只今、全員帰還しました！！」

しばらくすると、イカロス達がピット達の所へと戻って来た。

ピット

「ご苦労様……それで、見つかった？」

イカロスB

「それが……『天空界』と『地上界』を隈無く搜索したのですが、全く見つかりませんでした。」

ピット

「そっか……それじゃ、みんなは一体何処に……。」

イカロスC

「ひよっとしたら、『冥府界』へと迷い込んでしまったのではない  
でしょうか？」

ピット

「ま、まさか……でも、その可能性もあるかもしれない……。」

ピットはイカロスの言葉を聞いて不安げな表情を浮かべる。

明日菜

「ねえ、その『冥府界』ってどんな所なの？」

ピット

「生前に悪事を働いた人達が必ず行く死後の世界……それと同時に、  
恐ろしい魔物達が住み着いてる世界でもあるんだ。」

のどか

「ま、魔物……。」「

木乃香

「そないな所におるんやったら早よう助けに行かんと……………」。

ピット

「…………僕、ちよつと『冥府界』に行つて来る！」

イラストD

「た、隊長!？」

ピットはその場から立ち去るつとするが……………。

?

「お待ちなさい、ピット。」

ピット

「え?」

ピットは声かした方を向いてみると、そこには全身が金色の光に包まれている緑色の長い髪の女性が立っていた。

ピット

「パ、パルテナ様!？」

ピットとイカロス達はパルテナという名の女性の姿を見た途端、その場で一斉に跪ひざまずいてしまう。

ネギ

「あ、あの人がパルテナ様!？」

イカロスE

「そうですよ!さあ、皆様も頭を下げて……。」

刹那

「は、はい!」

ネギ一行もピット達の真似するかのようにその場で跪ひざまずく。

パルテナ

「そんなに畏まらなくても結構ですよ……顔を上げなさい。」

ピット

「は、はい……。」

ピットとイカロス達は恐る恐る顔を上げる。

パルテナ

「ところで、先程の話を全て聞いてました……………『冥府界』へ行くのは非常に危険です。」

ピット

「で、ですが……………僕の大切な仲間達が迷い込んでいるのかもしれないのです！幾らパルテナ様のご命令でもこれだけは……………」

パルテナ

「落ち着きなさい……………誰も『行くな』とは言ってません。」

ピット

「え？で、では……………」

パルテナ

「その代わりに、コレを持って行きなさい。」

パァー……………ッ！！

次の瞬間、パルテナの掌から大きな弓が光に包まれながら現れる。

ピット

「そ、それはもしや……………パルテナの神弓<sup>しんきゆう</sup>？」

パルテナ

「コレがあれば、魔物達を蹴散らす事が出来るでしょう……………さあ、受け取りなさい。」

そう言うと、パルテナはピットにパルテナの神弓を手渡す。

ピット

「あ、ありがとうございます！パルテナ様！！」

パルテナ

「ピット、くれぐれも気をつけてね……………。」

ピット

「はい！……………それでは、行って参ります！……」

そう言って、ピットはそのまま駆け出そうとするが……………。

ネギ

「あっ！？ちょ、ちょっと待って下さい……」



ピット

「え？な、何？」

ネギ

「僕達も『冥府界』へ連れてって下さい！」

ピット&イカロス達

「ええっ!？」

ピットとイカロス達はネギの発言に耳を疑った。

イカロスA

(し、信じられない……あの恐ろしい『冥府界』行きを自ら志願するとは……………。)

イカロスB

(この人達、絶対『冥府界』の恐ろしさを分かっていない……………。)

イカロスC

(ゆ、勇氣あるなあ……………。)

イカロス達はネギ達に聞こえないように小声で話し合う。

ピット

「だ、駄目だよ！さっきも言ったように、『冥府界』には恐ろしい魔物達が住み着いてるから危険なんだ。」

明日菜

「それなら大丈夫！こう見えても私達は結構強いんだから……………」

カモ

「おうよ！魔物なんてネギの兄貴と姐さん達がチヨチヨイっと簡単にやっつけちまうぜ。」

ピット

「し、しかし……………」

ネギ

「お願いします！僕達も『冥府界』へ連れてって下さい！！」

そう言うと、ネギ一行がピットに向かって一斉に頭を下げながら懇願する。

ピット

「…………分かった、僕が責任を持って君達を『冥府界』へ連れて行く

「よ。」

ネギ

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！」

ネギー一行はお礼を言いながら、再びピットに向かって深々と頭を下げる。

イカロスA

「隊長、本当に宜しいのですか？」

ピット

「大丈夫、僕が付いてるから……それより、みんなに頼みがあるんだ。」

イカロスB

「何でしょうか？」

ピット

「ちょっと耳を貸して……………」

ピットはイカロス達を集めて、小声でイカロス達に何かを伝える。

イカロスC

「え！？わ、我々は『天空界』で待機……………ですか？」

ピット

「そう、あまり大勢で行くと魔物達に気付かれる恐れがあるから……………でも、僕が合図を送ったら一斉に突撃して来てほしいんだ。」

イカロスD

「……………分かりました、隊長がそうおっしゃるのでしたら……………」

イカロス達は少し不安げな表情を浮かべながらもピットの指示を引き受ける。

木乃香

「ピット君、話は終わったん？」

ピット

「え？あ、うん……………今話終えたところだよ。」

ネギ

「そうですか……………それでは、そろそろ『冥府界』への案内をお願いします。」

ピット

「うん、任せて……………パルテナ様！改めて行って参ります！！」

パルテナ

「ええ、気をつけて行ってらっしゃい……………」

こうして、ネギー行とピットは『冥府界』へと目指して『天空の神殿』を後にするのであった……………。

第七十七話、天空界の若き隊長と女神様（後書き）

果たして、ネギー行とピットはアイスクライマーの二人とMr.ゲ  
ーム&ウォッチとロボットを見つけ出す事が出来るのか？

第七十八話 怒りのアイスクライマー (前書き)

ネギー行とピットはアイスクライマーの二人とMr.ゲーム&ウォッチとロボットを捜し出す為に『冥府界』へと目指していく……。

## 第七十八話 怒りのアイスクライマー

（冥府界）

ネギー一行はピットの案内もあって、『冥府界』と呼ばれる夜みたいに薄暗い世界へとやって来た。

ネギー

「……ピットさん、此处が『冥府界』ですか？」

ピット

「そつだよ……気をつけてね、この世界には恐ろしい魔物達が住んでるから……。」

のどか

「あう……確かに、今にも魔物が出て来そうな雰囲気ですね……」

木乃香

「せつちゃん、ウチ怖いわあ……。」

刹那

「大丈夫ですよ、お嬢様の身はこの桜咲刹那が命に代えてもお守り



致します。」

木乃香

「せつちゃん……………」

明日菜

「はいはい、そろそろ先へ進みましょう……………」

そう言っつて、明日菜が先へ進もうとした時……………」

？

「ウォー……………」

全員

「!?!」

突然ネギ達の方に背中に小さな羽根を生やした小悪魔のような複数の生物達が襲い掛かって来る。

カモ

「おっと、早速その魔物のお出ましみたいだぜ。」

ピット

「アレはコビルといって、そんなに厄介な奴じゃないけど……。」

明日菜

「なぐんだ、それなら私が一気に片付けるわ……アデアット……！」

パア………ツ………！！

ピットの説明を聞いた明日菜は、咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出す。

ピット

（ハ、ハリセン！？）

ピットは明日菜の『ハマノツルギ』を見て唾然とする。

明日菜

「おりゃ……っ……！！」

パッシー………ン………！！

コビル達

「ウギャ~~~~ッ!!」

明日菜が『ハマノツルギ』を大きく振り回すと、襲い掛かって来たコビル達を吹っ飛ばしていく。

コビル達

「ウォーーーーッ!!」

すると、残りのコビル達が明日菜の背後へと回り込んで一斉に襲い掛かって来る。

ピット

「危ない! パルテナアロー!!」

ビビュッ!!

コビル達

「グギャーーーーッ!!」

ピットが咄嗟にパルテナの神弓から光の矢を射ぬくと、曲線を描きながら全てのコビルを仕留めていく。

明日菜

「え！？な、何？」

コビル達の叫び声に驚いた明日菜は、素早く後ろの方を向いて辺りを見回す。

カモ

「姐さん、後ろの方ががら空きだったぜ？」

ネギ

「でも、ピットさんが明日菜さんの後ろに居た敵をやっつけてくれたんですよ。」

明日菜

「そ、そうだったんだ……どうもありがとう。」

ピット

「い、いせ……。」

明日菜にお礼を言われたピットは思わず照れ隠ししてしまう。

木乃香

「それにしても、今のは凄かったわぁ……まるで矢が生きてるみ

たいに曲線を描いてたなあ。」

ピット

「実はね、このパルテナの神弓から放たれた光の矢は射ぬいた者の意思によって軌道を変える事が出来るんだ。」

のどか

「そ、そうなんですか……… 本当に凄い武器なんですね。」

ピット

「それだけじゃないんだ、こうやって弓の真ん中の部分を外すと………」

そう言つて、ピットはパルテナの神弓の真ん中の部分を外して、まるで双剣そうけんのように持ち構える。

明日菜

「へえ、それって剣にもなるのね。」

ネギ

「便利ですね。」

刹那

「それに、そのような武器を簡単に扱えるピットさんも凄いですね。」

ネギー一行はパルテナの神弓とピットの腕前に思わず感心してしまふ。

ピット

「……………そ、そろそろ先へ進もうか。」

ピットはネギ達に褒められて恥ずかしさを隠すかのように、先へ進もうと一歩足を踏み出そうとする。

ネギ

「あーま、待って下さーい……………」

ネギー一行も慌ててピットの後を追い掛けていく。

〈数分後〉

？

「ピギー……ッ!!」

ネギー行とピットがしばらく進んでいると、大きな一つ目にクラゲのような姿をした生物達に上空から囲まれていた。

明日菜

「な、何なのコイツら………気持ち悪いわね。」

ピット

「モノアイといって、集団で集まって来て空中からどんどん接近してくる厄介な奴らなんだ。」

刹那

「………皆さん、この場は私にお任せ下さい。」

ダッ!!

次の瞬間、刹那はその場で勢い良くジャンプをする。

刹那

「神鳴流奥義・斬眼剣!!」

ズツシャーシューツ!!

モノアイ達

「ピギャーシューツ!!」

刹那が夕凧でモノアイの大群を一掃する。

ピット

(す、凄い……………まるでリンクさんやメタナイトさん並だ……………。)

ピットは刹那の剣技を見て驚愕してしまう。

シュタツ!!

すると、刹那がそのまま着地したと同時に夕凧を鞘ひざに収める。

木乃香

「流石せつちゃんや〜! あっという間に倒してもうたわ〜!」



明日菜

「何だか、私より決まってるかも……………」

カモ

「ああ、姐さんの時は天使の小僧に助けられたからな。」

明日菜

「う、煩いわね!」

明日菜はカモに痛い所を突かれて思わず怒り出してしまつ。

ネギ

「あ!?!せ、刹那さん!まだもう一匹残ってますよ!」

刹那

「えっ!?!」

モノアイ

「ギピャー……!」

刹那はネギの言葉を聞いて咄嗟に振り向くと、一匹のモノアイが物凄いスピードでこちらへ近づいてくる。

刹那

(し、しまった!?)

刹那は素早く鞘から夕風を取り出そうとするが……………。

?

「アイスショット!」

ガッキーーーーーン!!

モノアイ

「グギャツ!!」

全員

「!?!」

突如、何処からともなく降ってきた大きな氷の塊がモノアイに命中する。

木乃香

「い、一体何が起こったんやろ?」

明日菜

「よ、よく分かんないけど……………あの氷の塊が化け物に命中して…  
…」

そう言うと、明日菜はモノアイに命中した大きな氷の塊を指さす。

ピット

(氷……………まさか、あの二人が……………。)

?

「ふう〜っ、危ないところだったね……………」

?

「お姉さん、大丈夫？」

刹那

「え？」

刹那は二つの声がした方を向いてみると、茶色の手袋に薄紫色の厚いコートを着て木製の大きなハンマーを持った背の低い少年と同じく茶色の手袋に薄ピンク色の厚いコートを着て少年と同じようなハンマーを持った背の低い少女がこちらに歩み寄ってくる。

刹那

「……も、もしかして君達が助けてくれたの？」

？

「そつだよ！ね？ナナ。」

ナナ

「うん！私とポポがお姉さんを助けたの。」

刹那

「そ、そつ………どうもありがとう。」

刹那は半信半疑ながらもポポという少年とナナという少女に向かって軽く頭を下げる。

ピット

「ポポ！ナナ！！」

ポポ&ナナ

「え？………あーっ！？ピットだー！ー！！」

ポポとナナはピットの顔を見た途端、元氣一杯にピットの方へと駆

け出していく。

ポポ

「久しぶりだね〜！」

ナナ

「でも、どうしてピットが此処に……。…」

ピット

「いや、どうしてって言われても……。…」

ピットはナナの質問に思わず困惑してしまつ。

ネギ

「ピットさん、この子達は知り合いですか？」

ピット

「え？あゝ、そうそう……。…」この子達が君達のお探しのアイスクラ  
イマーだよ。」

ネギ一行

「……。…」

ネギー一行はピットの言葉を聞いて一瞬だけ固まってしまふ。

ネギ

「……………ほ、本当ですか？」

明日菜

「いや、きつとギャグよ……………」。

カモ

「そうそう、まさかこんなちっちゃなガキンちょ共が……………」。

ポポ

「ムカツ！僕達ガキンちょじゃないもん！！」

ナナ

「そうよ！私達は正真正銘のアイスクライマーだもん！！」

カモの言葉に怒り出したポポとナナは、頬を膨らませながら自分達がアイスクライマーだと名乗りを挙げる。

ネギー一行

「ええ……………つ！？」

ネギー一行はポポとナナの二人がアイスクライマーだと知り、思わず大声を上げてしまう。

のどか

（こ、こんなにちっちゃい子達が……………。）

刹那

（きつと、この子達もネス君やリュカ君のように不思議な力を秘めてるのかもしれない……………。）

木乃香

（それにしても、可愛ええ子達やなあ……………後で頭を撫で撫でしたいわぁ。）

明日菜

（……………あんな厚いコートなんか着てて暑くないのかしら？）

ネギ

（この子達がアイスクライマーか……………僕が思ってたイメージとは全然違ってた……………。）

そんな事を思いながら、ネギー一行はポポとナナを食い入るように見

つめる。

ポポ

「な、何だか僕達……………スツゴく見られてるような気がする……………」

ナナ

「……………ピット、この人達は誰なの？」

ピット

「えっとね……………」

ピットはポポとナナにネギ達について簡単に説明をしていく。

ピット

「……………という訳なんだ。」

ポポ

「そうなんだ、僕達の為に……………」

ナナ

「お姉さん達、私達の為にどうもありがとう。」



ポポとナナはネギ達に向かって深々とお辞儀をする。

のどか

「ど、どう致しまして……………」

木乃香

「ポポ君とナナちゃんは礼儀正しい子やなあ。」

ネギ

「はい、コレがそのバッチだよ。」

そう言うと、ネギは茄子の形した二つのバッチをポポとナナに手渡す。

ポポ

「わあ、茄子の形したバッチだ！」

ナナ

「しかも、ポポとお揃いだね！」

ネギからバッチを受け取ったポポとナナは嬉しさのあまりにその場で元気良く飛び跳ねる。

明日菜

「フフツ、やっぱり子供ね……………」

刹那

「そうですね……………」

ネギー一行は無邪気に喜ぶポポとナナを見て思わず笑みを浮かべる。

ポポ

「……………ところで、此処は一体何処だろう?」

ナナ

「確か私達、『アイシクルマウンテン』でいつものように山登りしてたら巨大な物体に吸い込まれて……………」

ポポ

「そうそう!それで、気が付いたらこんな薄気味悪い場所に居ただよね。」

明日菜

（この子達、まだ何にも知らないのね……………）

ネギ

(そうみたいですわね……………。)

ネギと明日菜はポポとナナに聞こえないように小声で話す。

ピット

「ポポ、ナナ……………此処は『冥府界』といって、怖い魔物達が住み着いてる世界なんだよ。」

ポポ

「め、『冥府界』？」

ナナ

「私達、どうしてそんな所に……………」

ピット

「実はね……………」

ピットは今の状況をポポとナナに出来るだけ簡単に説明をする。

ピット

「……………という訳なんだ。」

ポポ

「そ、そんな……………僕達の世界が……………」

ナナ

「う、嘘でしょ……………」

ポポとナナはピットの説明を聞いてショックを受けてしまう。

木乃香

「相当ショックを受けたみたいやな……………」

明日菜

「無理も無いわよ……………自分達の世界が飲み込まれちゃったんだもの。」

ネギー一行はショックを受けて落ち込み気味のポポとナナを見て暗い気持ちになってしまう。

ポポ

「じゃあ、僕達の世界に居たトッピーやホワイトベア達は……………」

トッピー

「恐らく、二人みたいに『冥府界』の何処かに迷い込んでいるのかもしれない……………」

ナナ

「……………ポポ！急いでトッピー達を捜しに行こう！」

ポポ

「う、うん！」

ダダッ！！

次の瞬間、ポポとナナがいきなり何処かへと走り出していく。

明日菜

「ちょ、ちょっと！何処へ行くの！？」

ピット

「むやみに走り回ったら危険だよ！」

ネギ

「とにかく、二人を追い掛けましょう！」

ネギ一行とピットは急いでポポとナナの後を追い掛けていく。

〈数分後〉

ネギ

「……………どうやら、見失ってしまったようですな。」

しばらく進んでいると、ネギ一行とピットはポポとナナを見失なってしまう。

木乃香

「一体何処へ行ってしまったんやろ……………」

のどか

「……………あ！居た！！」

のどかの指さす先を見ると、そこにはポポとナナが立ち尽くし

ていた。

ピット

「良かった、魔物に襲われてなくて……………」

刹那

「ともかく、二人の方へ行ってみましょう。」

ネギー一行とピットは急いでポポとナナの方へと近付いていく。

明日菜

「ちょっとアンタ達！勝手に何処かへ行っちゃ駄目じゃない！」

ポポ&ナナ

「……………」

ポポとナナは明日菜の怒声にも反応せずに、ある一点だけ見つめながら立ち尽くしている。

ピット

「ど、どしたの？」

ポポ

「…………アレを見て。」

ネギ

「え？」

ポポが指さす先を見ると、前方に沢山の青い海豹アザラシのような生物と黒いサングラスにピンク色のパンツを掃いた白熊が血塗れで倒れていた。

刹那

「こ、これは…………。」

のどか

「可哀相…………みんな血塗れで倒れてる…………。」

ピット

「あの白熊、確か『大乱闘の館』でマスターハンドが用意した『頂上』のステージに居た…………。」

ナナ

「そう、私達の世界に住んでるトッピーやホワイトベア達よ…………。」



ネギ

「……………とにかく、もう少し近付いてみましょう。」

そう言うと、ネギ達はトッピーという海豹とホワイトベアという白熊達が倒れてる方へと近付いていく。

明日菜

「それにしても、酷い事するわね……………」。

カモ

「こりゃ死んでも可笑しくねえな……………」。

ネギ

「カ、カモ君！」

トッピー

「キ、キュッ……………」。

すると、一匹の血塗れのトッピーがゆっくりと体を起しそつとする。

ポポ

「あ…？このトッピーはまだ生きてる…！」

ピット

「いや、他のトッピーやホワイトベア達も微かに息をしてるよ。」

ナナ

「ほ、本当に!?!」

ピットの言葉を聞いたポポとナナは少しだけ元気を取り戻す。

ピット

「でも、早く手当てをしないと大量出血で死んでしまうかも……………」

木乃香

「ほなら、ウチの出番やな…………アデアット!!」

パア……………ツ!!

木乃香は咄嗟に『コチノヒオウギ』を呼び出す。

ポポ&ナナ

「な、何!?!何なの?」

ポポとナナは木乃香が呼び出した『コチノヒオウギ』を見て、少し混乱気味になってしまふ。

明日菜

「落ち着いて、アレは怪我を治す道具だから。」

ポポ&ナナ

「えっ！？本当に？」

ポポとナナは明日菜の言葉に思わず耳を傾ける。

木乃香

「ほなら、早速やるえ……………それ……………」

パァ……………

木乃香が『コチノヒオウギ』を一扇ひらぎすると、トッピーの傷口がど  
んどん塞がっていく。

ピット

「け、怪我が治っていく……………」

ポポ&ナナ

「わあ〜！お姉さん凄〜い！！」

パチパチパチパチッ！！

ピットは木乃香の能力に啞然とするが、ポポとナナはあまりの嬉しさに思わず拍手をしてしまう。

木乃香

「えへへ……さてと、他の子達も怪我を治さなアカンな……。」

そう言つと、木乃香は他に重傷なトッピーやホワイトベア達の方へと歩み寄っていく。

ネギ

「これで、あの海豹さんや白熊さん達も助かりますね。」

明日菜

「そうね。」

刹那

( ……それにしても、一体誰があんな惨い事を……………。 )

?

「グルルルル……………」

全員

「!?!」

全員が何物かの唸り声に反応して後方を向くと、そこには二つの頭を持った巨大な犬のような生物が居た。

明日菜

「な、何!?!あの頭が二つある化け物は……………」

ピット

「ア、アレは『冥府界』の番人を務めるツインベロスだ!」

カモ

( ツインベロス……………まるで地獄の番犬・ケルベロスみてえな奴だな。 )

そう思いながら、カモはツインベロスという名前の生物を見つめる。

ポポ

「ひょっとして、トッピー達を傷付けたのはあいつなんじゃ……………」

「

ピット

「きつとそうだ……………トッピー達の傷口を調べてみたら、噛まれた跡や爪で切り裂かれたような傷があちこちに付いてたから……………」

ナナ

「あいつがトッピー達に酷い事を……………許せない。」

そう言うと、ポポとナナは持っていたハンマーを強く握り締める。

明日菜

「刹那さん！こんな奴、一気にやっつけちゃいませよ！！！」

刹那

「はい！！！」

そう言って、明日菜と刹那がそれぞれの武器を構えながらツインベロスに向かって突っ込もうとしたが……………。

ポポ&ナナ

「待って!!」

明日菜&刹那

「!？」

突然ポポとナナが明日菜と刹那の前に現れる。

ポポ

「……………コイツは僕達がやっつける!!」

明日菜

「えっ!?!な、何を言ってるの?」

ナナ

「大丈夫!私達、こっ見えても結構強いから!!」

刹那

「いや、そういう事じゃなくて……………」。

ポポ

「ナナ!行くよ!!」

ナナ

「うん!」

そう言うと、ポポとナナはツインベロスに向かって駆け出していく。

明日菜

「ちょ、ちょっと待ちなさい!」

刹那

「……………行ってしまいましたね。」

ネギ

「ピットさん、あの子達だけで大丈夫でしょうか?」

ピット

「多分、大丈夫だと思うけど……………もし危なくなったら、すぐに助けに行こう。」

そう言うと、ピットはパルテナの神弓を構える。

ツインベロス

「グガアー……ッ!」



ポォー……ッ!!

すると、ツインベロスが二つの頭の口からポポとナナに向けて無数の火の玉を吐き出す。

のどか

「あ、危ない!!」

ポポ&ナナ

「ブリザード!!」

ブワァー……ッ!!

ポポとナナが掌から氷の霧を出して、ツインベロスが吐き出した火の玉を全て凍らせてしまっ。

ポポ

「まだまだ行くよ……アイスショット!!」

スコォー……ン!!

ゴツツーーーーーッ!!

ツインベロス

「グオーーーーーッ!!」

次にポポは先程凍らせた無数の火の玉をハンマーで打って、全てツインベロスに命中させる。

ツインベロス

「グウウ……………グガアーーーーッ!!」

次の瞬間、ツインベロスがポポとナナに向かって勢い良く突っ込んでくる。

ポポ

「ナナ!準備はいい?」

ナナ

「うん、いいよ!」

ツインベロス

「グオーーーーーッ!!」

ポポとナナの目の前まで近付いて来たツインベロスは、二人を噛み砕こうとするが……………。

ポポ

「よし！今だ！！」

ナナ

「ゴムジャンプ！！」

ポイツ！！

ピョーーーーー！！

ポポがナナを勢い良く真上へ投げると、ナナがいつの間にか取り出していた白いゴム紐でポポを引っ張り上げてツインベロスの攻撃を避ける。

ポポ

「そして、お次は……………」

ナナ

「せーの……………」

ポポ&ナナ

「W杭打ち————!!」

バツコオ————ン!!

ツインベロス

「グギャツ!?!」

ポポとナナはそのまま勢い良く急降下しながら、ツインベロスの二つの頭をハンマーでおもつきり叩き付ける。

ツインベロス

「グガガガ……………」

ツインベロスはそれぞれの頭に大きなタンコブを作りながら目を回してしまふ。

ポポ

「ナナ!あいつの後ろの方へ……………」

ナナ  
「分かった！」

そう言うと、ナナはツインベロスの背後へと回り込んでいく。

ポポ  
「それじゃ、行くよ！」

ナナ  
「OK！」

ポポ&ナナ  
「ブリザード!!！」

ブオーーーーーーッ!!

ツインベロス  
「ガ……ガガ……。。。」

カチカチカチ……

ツインベロスの前方に居たポポと後方へと回り込んだナナが掌から

氷の霧を出して、ツインベロスをどんどん凍り付けにしていく。

ナナ

「ポポ！上手くいったよ！！」

ポポ

「よし、最後の仕上げに取り掛かるよ！」

ナナ

「OK！」

そう言うと、ナナはポポの方へと駆け寄っていく。

ポポ

「ナナ！アレで決めるよ！！」

ナナ

「いいよ！せーの……………」。

ポポ&ナナ

「トルネードハンマー！！」

ガッシャーーーーン！！

ポポとナナは自分達を軸にして、手にハンマーを持ったまま竜巻のように回転させながら突っ込んでいき凍り付いたツインベロスを粉砕していく。

ポポ

「やったー！やったぞー！！！」

ナナ

「やったね！ポポ！！！」

パシン！！

ポポとナナは自分達の勝利の嬉しさに思わずハイタッチをする。

カモ

「……………兄貴、あのチビ共意外と強いな。」

ネギ

「う、うん……………」

明日菜

「……………刹那さん、私達の出る幕が全く無かったわね……………」

刹那

「そ、そうですね……………」

ネギ達はポポとナナの強さに啞然としてしまう。

木乃香

「み、みんな…………… たった今、この子達の治療を終えたえ……………  
……………」

トッピー達

「キュウキュウツ！」

ホワイトベア達

「ガオーーツ！」

木乃香の能力で治療されたトッピーやホワイトベア達は元気いっぱいにはしゃいでいたが、木乃香は魔力を使い過ぎて地面に座り込んでいた。

刹那



「お、お嬢様！大丈夫ですか！？」

木乃香

「う、うん……………ちょっとだけ疲れてもったけど……………」

カモ

「無理もねえな……………あれだけの数の動物を治療したんだからな。」

明日菜

「それじゃ、木乃香の体力が回復するまでしばらく此処で休憩しましょ。」

木乃香

「そ、そんなんええよ……………ウチは大丈夫だから……………」

刹那

「いえ、明日菜さんの言う通りです！此処でしばらく体を休めて下さい。」

木乃香

「わ、分かった……………」

木乃香は渋々と明日菜と刹那の提案を受ける。

ピット

「それじゃ、その間に僕は『天空界』に戻って、イカロス部隊を呼びに行ってくるよ。」

ネギ

「どうしてですか？」

ピット

「トッピー達を『天空界』へ運び出す為にね、いつまでも『冥府界』に居たらまた魔物達に襲われるかもしれないから……………」

ポポ

「あ！そっか……………」

ナナ

「ピット、トッピー達の為にありがとう！」

ピット

「どう致しまして……………じゃあ、ちょっと行って来るから！」

バツサア————ツ——！！

次の瞬間、ピットは羽根を広げながらそのまま飛び立っていく。

ピット

（……………）それにしても、以前倒したハズのツインベロスがどうして……………）。

そう思いながら、ピットは『天空界』を目指して飛行していくのであった……………）。

第七十八話 怒りのアイスクライマー (後書き)

アイスクライマーの二人と対面したネギ達は、ゲーム&ウォッチとロボットにも会えるのだろうか？

第七十九話、Mr. ゲーム&ウォッチと謎の石像？（前書き）

アイスクライマーの二人を捜し出したネギ達だが、残りのゲーム&ウォッチとロボットは何処に居るのか？

第七十九話〈Mr.ゲーム&ウォッチと謎の石像〉

〈冥府界〉

ピット

「……………それじゃ、頼んだよ！」

イカロス達

「了解!!！」

ピットによって集結されたイカロス達はトッピーやホワイトベア達を『天空界』まで運んでいく。

ポポ

「ピット、トッピー達の為に本当にありがとう！」

ナナ

「私達、本当に感謝してるの！」

ピット

「いや、僕はただ当然の事をしただけだよ。」

ピットは謙遜しながらポポとナナの感謝いっぱい言葉を受け取る。

ネギ

「ピットさん、そろそろ先へ進みましょう。」

ピット

「そうだね、早くゲーム&ウォッチさんとロボットさんを捜さない  
と……………」

ナナ

「え？ゲーム&ウォッチとロボットもこの世界に居るの？」

明日菜

「そうよ、アンタ達みたいに何処かに迷ってるのかもしれないわ。」

ポポ

「それは大変だ！急いで二人を見つけ出さなきゃ……………おい！！！」

ピット

「ちょ、ちょっと待った！」

ピットは大声でゲーム&ウォッチ達を呼び掛けようとするポポを慌  
てて制止させる。

ポポ  
「な、何？」

ピット  
「此処は怖い魔物が住み着く『冥府界』なんだから、そんな大声を出したら魔物達に気付かれちゃうよ。」

ポポ  
「あ！そっか……………ごめんね。」

ポポは先程よりもかなり小声でピットに謝る。

刹那  
「やはり、魔物達に気付かれないように慎重に行動しながら捜すしかないですね。」

ネギ  
「そうですね、もし見つかってしまったら面倒な事に成り兼ねません。」

ピット  
「それじゃ、もう少し奥の方へ進んでみよう。」



ポポ&ナナ

「よーし！出発進行ー！！！」

全員

「シーーーーーッ！！！」

言ってる側から大声を上げるポポとナナに、その場に居る全員が人差し指を口元に添えながら静かにするように注意する。

ポポ&ナナ

「ご、ごめんなさい……………」

ポポとナナは申し訳なさそうに小声で謝る。

ネギ

「それでは、改めて先へ進みましょう。」

そう言うと、ネギ達は更に『冥府界』の奥へと進んでいく。

くそれから数分後く

ゴオーーーーーーッ!!

しばらく進んでいると、ネギ達は火の池がある場所までやって来た。

木乃香

「うわぁ……………血の池地獄やなくて火の池地獄や……………」

ピット

「みんな、火の中に落ちないように気をつけてね。」

ナナ

「ポポ、此处はかなり熱いね……………」

ポポ

「そ、そうだね……………何たって、近くに火があるからね……………」

明日菜

(いや、それだけじゃないと思うんだけど……………。)

カモ

(そんな厚い格好をしてっからだろ……………。)

そんな事を思いながら、明日菜とカモは汗だく状態になってるポポとナナを苦笑いしながら見つめる。

のどか

「……………あれ？」

ネギ

「のどかさん、どうかしました？」

のどか

「向こうの方に人影のような物が見えます。」

刹那

「人影？」

ネギ達はのどかが指さす先を見てみると、遠く離れた場所から複数  
の人影が佇んでいる光景が目についた。

木乃香

「ホンマや……しかも、あんなに沢山おる……。」

ネギ

「取り合えず、あそこに行ってみましょう。」

ネギ達が複数の人影が佇んでいる所まで駆け出していく。

ピット

「じ、これは……。」

ネギ達が複数の人影が佇んでいた所まで近付いてみると、そこには人の形をした薄っぺらな石像が沢山置かれていた。

ポポ

「な、何これ……。」

ナナ

「何だか不気味ね……。」

ネギ

「見たところによると、石像みたいですね。」

明日菜

「石像にしちゃあ、随分薄っぺらくない？」

刹那

「確かに……………それに、幾ら何でも数が多過ぎる……………」。

ネギ達が複数の石像を眺めていると……………。

木乃香

「きゃっ!?!」

突然、木乃香が驚いたような表情を浮かべながら叫び声にも似た声を上げる。

刹那

「お、お嬢様!?!どうなさいましたか？」

木乃香

「い、今……………あの石像が……………動いた……………」。

のどか

「せ、石像が？」

明日菜

「ま、まさか……………」

ネギ達が木乃香が震えながら指さす先を見てみると……………。

ピロロロロロッ！

ネギ一行

「！？」

そこには全身真っ黒で平面の人間が真っ黒で大きな平面のベルを鳴らしながら立っていた。

ポポ&ナナ

「あつ！？ゲーム&ウォッチだ！！」

ネギ一行

「ええっ！？」

ネギ一行はポポとナナの発言に耳を疑った。

ピット

「本当だ！久しぶりだね……………」

ピピッ！ピッ！ピッ！

ゲーム&ウォッチと呼ばれた平面人間は独特な効果音を鳴らしながら嬉しそうにピット達の方へと駆け寄っていく。

カモ

「あ、兄貴……………アレって、何だと思う？」

ネギ

「よ、よく分からないけど……………平面の人間に見えるけど……………」

明日菜

「……………そもそも、アレは人間なの？」

木乃香

「さ、さあ……………ウチに聞かれても……………」

刹那

「何とも不可解ですね……………」

のどか

「スマッシュブラザーズって、本当に色々な人達がいるんですね……………」

ネギー一行はゲーム&ウォッチのルックスを見て啞然となってしまう。

ピピッ！ピピッ！

すると、ゲーム&ウォッチは首を傾げながらネギ達を指さす。

ポポ

「え？あの人達は誰かって？」

ナナ

「え〜っとね……………まず何かから話せばいいんだろう？」

カモ

「ほら、兄貴の出番だぜ！」



ネギ

「う、うん……………初めまして、僕達はですね……………」

ネギは今までの経緯をゲーム&ウォッチに説明する。

ネギ

「……………という訳で、理解して頂けました？」

ピッ！ピッ！

ゲーム&ウォッチはネギの話を理解したかのように効果音を鳴らしながら頷く。

カモ

「……………どうやら、話の内容を理解出来る程の知能はあるみてえだな。」

ネギ

「それは良かった……………それから、コレが先程話したバッチです。」

そう言うと、ネギはバッチをゲーム&ウォッチに手渡す。

ピュピュピュッ！

ネギからバッチを受け取ったゲーム&ウォッチは嬉しそうに辺りを走り回る。

木乃香

「あんなに喜んだら……こっつて見ると、結構可愛ええなあ。」

明日菜

「……………そ、そう？」

明日菜は木乃香の発言に思わず苦笑いしてしまう。

ピュピュピュッ……………

しばらくすると、ゲーム&ウォッチは足の動きを止めて顔を俯けてしまう。

ネギ

「あれ？急に動きが止まってしまいましたね。」

のどか

「どっしたんでしょっか？」

ポポ

「何だか、落ち込んでるみたい……………」

ナナ

「嫌な事でも思い出しちゃったのかな？」

ピット

「……………ゲーム&ウォッチさん、どっしたの？」

ピピッ！ピピピピッ！

ゲーム&ウォッチはネギ達に何かを伝えようと身振り手振りをする。

ナナ

「うんうん……………」

ポポ

「成程ねえ……………」

ポポとナナはゲーム&ウォッチが何を言ってるのか理解してるかの

よつに何度も頷く。

明日菜

「それで？彼は何て言ってるの？」

ポポ&ナナ

「……分かんない！」

ズルツッ！！

ポポとナナの言葉に思わず全員がズッコケてしまう。

明日菜

「わ、分かんなかったら紛らわしい事しないでよ……。」

ポポ

「しゅしゅめん……。」

ナナ

「ねえ、ピットは何を言ってたか分かった？」

アッピッ

「…………いや、僕も全然分からない。」

木乃香

「困ったなあ…………。」

ネギ達がゲーム&ウオッチの言葉が理解出来ずに悩んでいると………。

カモ

「あ！そうだ……………のどか嬢ちゃんの『いどのえにつき』だったら、コイツの思考を読み取る事が出来るんじゃないかねえか？」

ネギ

「そっか！その手があったね……………のどかさん、早速やって頂けますか？」

のどか

「は、はい……………アデアット…………！」

パァ……………ツ……………！！

次の瞬間、のどかは『いどのえにつき』を呼び出す。

ポポ&ナナ

「わ〜！？今度は何？」

ピット

「そ、それって本？」

ピット達はのどかの『いどのえにつき』を食い入るように見つめる。

ネギ

「それでは、始めて下さい。」

のどか

「分かりました……………ゲーム&ウォッチさん？」

ピピッ！

ゲーム&ウォッチはのどかに呼ばれて、のどかの方に顔を向ける。

のどか

「何やら、落ち込んでたようですけど……………何かあったんですか？」

ピピッーピピピピッー！

ゲーム&ウォッチはのどかの質問に答えるかのように先程と同様に身振り手振りで何かを伝えようとする。

ポポ

「ねえ、あの本でゲーム&ウォッチが何を言ってるのか分かるの？」

明日菜

「そうよ、本屋ちゃんあの本で彼の頭の中で考えてる事を全部読み上げるって寸法よ。」

ナナ

「へえー、そんな事が出来るなんて凄ーい！」

ポポとナナが明日菜の説明を聞いて感心していると……。

のどか

「……………えっ!?!」

突然、のどかが『いどのえにつき』を見て驚愕する。

木乃香

「どないしたん？」

刹那

「まさか、宮崎さんの能力でも分からなかったのですか？」

のどか

「い、いえ……ゲーム&ウォッチさんの表層意識は写し出されたのですが……。」

明日菜

「じゃあ、どうしたって言うのよ？」

のどか

「……………本によると、ゲーム&ウォッチさんは自分が住んでた世界の住人達が全員石にされてしまって、それを思い出して落ち込んでたみたいなんです。」

のどか以外全員

「えっ!?!」

全員がのどかの言葉に耳を疑った。



明日菜

「そ、それじゃ……………私達の周りにあるこの石像が……………」

ネギ

「ゲーム&ウォッチさんの世界の住人達……………という事ですね。」

そう言うと、ネギ達は改めて石になってしまった住人達を見渡す。

ナナ

「でも、一体誰がこんな酷い事を……………」

ポポ

「決まってるよ！きっと魔物達の仕業だよー！」

ピット

（まさか……………いや、そんなハズは無い……………。）

そう思いながら、ピットは深く考え込んでしまう。

ネギ

「……………ピットさん、どうかしましたか？」

ピット

「え？い、いや……。」

？

「シャー……ッ！！」

全員

「！？」

全員が何物かの鳴き声に反応して振り向いてみると、先程の火の池から長い首だけの真っ赤な竜のような魔物が現れる。

明日菜

「ま、また何か出た〜！？」

ピット

「ア、アレはヒュードラー……………奴も前に倒したはずなのに……………」

ポポ

「そうか！きつとコイツがみんなを石にした張本人だ！！」

ナナ

「そうよ！そうに決まってるわー！！」

そう言くと、ポポとナナはヒュードラーという名の魔物に向かって突っ込んでいく。

ヒュードラー

「シャーーーーーッ！」

すると、ヒュードラーは高くジャンプするよつに避けて、ポポとナナから素早く逃れる。

刹那

（は、速い！？）

ピット

「これでも喰らえー！！」

ピュュッ！！

次の瞬間、ピットはヒュードラーに向けて光の矢を射る。

ガツンッ！！

光の矢はヒュードラーの長い首の部分に命中するが、頑丈過ぎて弾かれてしまう。

ネギ

「あれ？今、確かに命中したのに……………」

ピット

「ヒュードラーは頭が弱点なんだ……………だから、頭を攻撃しないと倒せないんだ。」

明日菜

「でも、あんな素早い動きじゃ頭に攻撃出来ないよ……………」

ヒュードラー

「ガアーーーーッ!!」

すると、ヒュードラーが大きな口を開けながらネギ達に突っ込んでくるが……………。

プシュー・プシュー・プシュー！

ドカツ！ボカツ！ゴツ！

ヒュードラー

「ガアッ!？」

突然ゲーム&ウォッチが高い場所から黒いフライパンを振り上げて、魚や肉等の食材を次々とヒュードラーの顔にぶつけていく。

ポポ

「あつ!？あんな所にゲーム&ウォッチが……………」

ナナ

「い、いつの間に……………」

ヒュードラー

「シャー……ッ!！」

怒ったヒュードラーは、更に大きな口を開けながらゲーム&ウォッチに向かって突っ込んでいく。

木乃香

「危ない!！」

ピョーーーーーン!!

次の瞬間、ゲーム&ウォッチは高くジャンプしてヒュードラーの頭の上に飛び移ってしまう。

ピッ!ピッ!ピッ!

ガッン!ガッン!

すると、ゲーム&ウォッチは大きなベルを取り出して、ヒュードラーの頭を何度も叩き付ける。

ポポ

「いいぞ〜!もっともっと攻撃しちやえ〜!!」

ヒュードラー

「ガアーーーーッ!!」

ゲーム&ウォッチの攻撃に耐え切れなくなったヒュードラーは頭を左右に激しく振り回す。

ピロロロロロッ!...

ゲーム&ウォッチは振り落とされないように、しっかりとヒュードラーの頭を掴む。

ナナ

「た、大変！このままじゃ振り落とされちゃう……………」。

ネギ

「魔法の射手・戒めの風矢！！」

ドォォォォォォン！！

すると、ネギが拘束魔法を放ってヒュードラーの動きを封じ込める。

ピット

「い、今のは？」

カモ

「ネギの兄貴が拘束魔法で奴の動きを封じ込めたのさ。」

ポポ

「魔法！？」

ナナ

「凄い！ゼルダ姫みたいに魔法が使えるなんて……………」

そう言うと、ポポとナナは尊敬のような眼差しでネギを見つめる。

ヒュードラー

「ググググ……………」

すると、ヒュードラーが今にも動き出そうと全身を震えさせる。

ネギ

「マズイ……………また動き出す前に倒さない……………」

ピット

「それじゃ、今の内に奴の頭に射止めないと……………」

そう言って、ピットはパルテナの神弓を構えようとするが……………。

ピット



ポカッ!!

ゲーム&ウォッチが数字の一と書かれた大きな札を出しながら真っ黒なハンマーをヒュードラーの頭目掛けて振り下ろす。

ピピッ!

ゴンッ!!

更にゲーム&ウォッチは数字の二と書かれた札を出しながら、再びヒュードラーの頭に向けてハンマーを振り下ろす。

明日菜

「……………ねえ、あいつはさっきから何をしてるの?」

ポポ

「何って、あの魔物に攻撃してるんだよ。」

木乃香

「そっなん?とてもそんな風には見えへんけど……………」

刹那

「そうですね……………敵もあまりダメージを受けてないようですし……………」

ナナ

「そうなのよねえ……………あの攻撃って、札の数字が大きくないと全然効果が無いの……………」

ネギ達は未だに小さな数字の札を上げながらヒュードラーの頭に攻撃してるゲーム&ウォッチを見て啞然としてしまう。

ヒュードラー

「ウググ……………ガア……………」

すると、ヒュードラーがネギの拘束魔法を打ち破ってしまう。

ネギ

「し、しまった！拘束魔法が破られた……………」

ピット

「マズイ！早く仕留めないと……………」

ネギ達が一斉にそれぞれの武器を構えながら攻撃を繰り返そうとしたが……………。

ピピッ！

ガッキーーーーーン！！

ヒュードラー

「グオーーーーッ！！」

ゲーム&ウォッチが数字の九と書かれた札を出しながらハンマーを当てると、ヒュードラーはそのまま勢い良く吹っ飛ばされていく。

ドツカアーーーーーン！！

そして、ヒュードラーはそのまま頭から岩壁に激突して倒れ込んでしまう。

ピッ！ピッ！ピッ！

ゲーム&ウォッチは嬉しさのあまり何度も何度も飛び跳ねる。

明日菜

「……………い、一体何が起こったの？」

ポポ

「きつと、一番大きな数字が出たんだよ。」

ナナ

「だから、あの魔物は勢い良く吹っ飛んだんだね。」

のどか

「そ、そうなの……………」

ネギー一行はゲーム&ウォッチの掴み所の無い強さに啞然としてしま  
う。

木乃香

「でも、これで石になってもうた人達も……………あれ？」

刹那

「どうしました？」

木乃香

「……………ま、まだ石になってる……………」

木乃香の言う通り、ゲーム&ウォッチの世界の住人達はまだ石になつていた。

ポポ

「ほ、本当だ……………どうしてだろう?」

ナナ

「魔物はやつつけたのに……………」

ピット

「……………メデューサ。」

ピット以外全員

「……………え?」

全員がピットの言葉に耳を傾ける。

ピット

「恐らく、この人達を石にしたのはメデューサに違いない。」

のどか

「メデューサって、よくギリシャ神話とかに出て来る怪物の事です

か？」

カモ

「いや、多分そのメドゥーサとは違うだろ。」

ネギ

「ピットさん、そのメデューサというのは何物なんですか？」

ピット

「メデューサは元々、パルテナ様と共に『エンジニアランド』を治めていた闇を司る女神だった……だが、人間に対して酷い仕打ちをしたメデューサはパルテナ様によって醜い姿に変えられてしまい『冥府界』へと追放された……ところが、『冥府界』の魔物達と手を組んだメデューサは『エンジニアランド』に奇襲を掛けて、全てを闇の世界にしようとしたんだ。」

明日菜

「……………そ、それで？その後はどうなったの？」

ピット

「パルテナ様が最後の力で、『冥府界』に幽閉させられていた僕を解放してくれた……………そのお蔭で僕はメデューサを倒す事が出来たんだ。」

ポポ

「そうだったんだ……でも、そのメデューサって奴はピットが倒したんだよね？」

ナナ

「そうそう………それなのに、何でまた出て来たんだろう？」

カモ

(………兄貴！きつとあの黒コートの奴らが蘇らせたに違いねえ！)

ネギ

(そ、そうだね……。)

ネギとカモはピット達に聞こえない位の小声で話し、ネギはカモの言葉を聞いて何故か浮かぬ表情をする。

ピット

「とにかく、まだメデューサが復活したとは決まってる……まずはロボットを捜し出そう！」

ポポ

「そ、そうだね！—先ず全員集合してから考えよう。」

ナナ

「……………あれ？ゲーム&ウォッチは何処？」

ナナ以外全員

「えっ!？」

ナナの発言を聞いて、全員が必死で辺りを見回す。

木乃香

「あ！あんな所におるわ!!！」

木乃香の指さす先を見ると、ゲーム&ウォッチが此処から遠く離れた場所まで進んでいた。

明日菜

「な、何よあいつ！勝手に進んじゃって……………」

ネギ

「と、とにかく僕達も急いで進みましょう!！」

そう言うと、ネギ達は急いでゲーム&ウォッチの後を必死に追い掛けていくのであった……………。





第七十九話、Mr.ゲーム&ウォッチと謎の石像？（後書き）

果たして、ネギ達はロボットを見つけ出す事が出来るのだろうか？

第八十話〜HVCI012を直せ！（前編）〜（前書き）

ネギ達は残りのメンバーのロボットを捜してるのだが……。

今回はこれまでの話よりもかなり短いです。

第八十話 冥府界を直せ！（前編）

冥府界

ネギ達は後残り一人であるロボットを捜し出す為に『冥府界』をさま迷っていた。

ネギ

「……あれからずっと捜し回ってますが、全然見つかりませんね。」

「

ピット

「そうだね……一体、ロボットさんは何処に居るんだろう。」

ポポ

「まさか、ロボットの身に何かあったのかな……。」

ナナ

「ポポ！縁起の悪い事言わないでよ……！」

ポポ

「……。」

ナナに怒られたポポは、申し訳なさそうに謝る。

明日菜

「……………それにしても、此処って本当に気味が悪い所ねえ。」

木乃香

「そやな……………いつまで進んでも真っ暗なままやし……………」

ピット

「そりゃそうさ……………この『冥府界』は光なんて一切存在しない闇の世界だからね。」

刹那

「成程……………魔物達や闇の女神メデューサにとっては何とも住み心地の良い世界なんでしょうね。」

ピピピピッ！

突然、ゲーム&ウォッチが何かを訴えるかのように遠くの方を指差しながら効果音を響かせる。

のどか

「ど、どつしたの？」

ネギ

「向こう側に誰か居るんでしょうか？」

そう言つて、全員がゲーム&ウォッチの指差す先を見渡してみると……。

ナナ

「あっ！？あそこに誰か居るよ……。」

ナナの言う通り、ゲーム&ウォッチの指差す先には動く二つの人影が目に見える。

ポポ

「ほ、本当だ……もしかして、魔物かな？」

ピット

「みんな、ちょっと此处で待ってて……。」

そう言つと、ピットはパルテナの神弓を構えながら二つの人影に近づいていく。

ピット

「動くな!！」

?

「ひいつ!？」

?

「な、何じゃ!？」

ピットがパルテナの神弓を構えたまま声を上げると、白衣のような衣装を身に纏った白い髭を生やした禿げ頭の初老の男性と赤い衣装を身に纏った白衣の男性と同じような顔付きの初老の男性が驚愕しながら両手を挙げる。

ピット

「あれ?よく見たらこの人達は……人間?」

そう言つと、ピットはパルテナの神弓をゆっくりと下ろす。

ネギ

「ピットおっさん!」

すると、ネギ達が慌ててピットの方へと駆け寄ってくる。

木乃香

「あや？その人達は……………」

ピット

「どうやら、人間みたいなんだ……………でも、どうしてこの『冥府界』に人間が……………」

カモ

「ひょっとして、この爺さん達も雪ん子ブラザーズみたいにこの世界に迷い込んだんじゃないかねえか？」

ナナ

「ゆ、雪ん子ブラザーズって……………私達の事？」

ポポ

「そうみたいだね……………僕達、兄妹じゃないのにね……………」

そう言いながら、ポポとナナは思わず苦笑いをしてしまう。

ネギ

「……………ところで、貴方達は誰ですか？」



？

「ワ、ワシらか？ワシの名前はヘクター……………そして、こっちは双子の弟のベクターじゃ。」

そう言うと、ヘクターと名乗る白衣の男性は双子の弟だと言つベクターという名前の男性に向けて指を差す。

明日菜

「双子？……………あゝ！道理で顔が似てると思ったわ。」

明日菜はヘクターとベクターの顔を交互に見比べながら納得する。

ヘクター

「それより、君達の方こそ何物なんじゃ？」

ベクター

「そうじゃ！まさか、あの恐ろしい化け物共の仲間ではあるまいな……………」

ピット

「ち、違いますよ！僕達は……………」

ピットはヘクターとベクターに自分達の事を簡単に説明していく。

ピット

「……………という訳なんです。」

ヘクター

「成程、仲間を捜しにこんな所まで……………」

ベクター

「何とも勇敢な子達じゃのお……………」

ピットの説明を聞いたヘクターとベクターは思わず感心してしまう。

のどか

「ところで、お爺さん達は どうしてこんな所に居るんですか？」

ヘクター

「ワ、ワシらは……………何て説明すればいいんじやろうか……………」

ヘクターは何処か言い難そうに言葉を詰まらせてしまう。

刹那

「……何やら、複雑な事情があるようですね。」

ポポ

「もしかして、お爺さん達も亜空間に飲み込まれたの？」

ベクター

「あ、亜空間じゃと!？」

ヘクターとベクターはポポの言葉に耳を傾ける。

ヘクター

「き、君！亜空間を知っておるのかね!？」

ベクター

「知っておるなら、ワシらに詳しく教えてくれ!！」

ポポ

「あわわわ……………」

ヘクターとベクターはポポの肩を掴みながら激しく揺らす。

ナナ

「ちょ、ちょっと！それじゃポポが話せないでしょ！！」

ヘクター

「ス、スマン……………つい年甲斐も無く興奮してしまった……………」

そう言うと、ヘクターとベクターはポポの肩を掴んでいた手を離す。

ヘクター

「確かに、ワシら兄弟は亜空間に飲み込まれてしまい……………気が付いたら、こんな所に放り出されてたんじゃ……………」

ベクター

「そして、その衝撃でHVC-012が壊れてしまったんじゃ……………」

明日菜

「えいちぶいし……………」

木乃香

「……………ゼロワンツ……………」

ネギ達はベクターの言葉に耳を傾ける。

ヘクター

「ワシら兄弟が作ったロボットの型番及び名称じゃ……ベクター、こつちまで運んできてくれ。」

ベクター

「ああ、分かった。」

そう言うと、ベクターは近くにあった大きな岩の後ろ側へと潜り込んでいく。

ベクター

「よいしょ、よいしょ……。」

ピット&ポポ&ナナ

「あぁっ!?!?」

ピュピュッ!

ピット達はベクターが押しながら運んできた頭部にレンズのような二つの目と前方に二本の腕が突き出ている胸部と台座のような脚部が特徴のロボットを見て思わず目を疑った。

ピット

「ロ、ロボットさん！」

ポポ

「ねえナナ、アレってロボットだよね？」

ナナ

「うん、間違いないわ！」

ピッ！ピッ！ピッ！

ピット達は思わずロボットの方へと駆け寄っていく。

ネギ

「ロボットさんって……名前だけじゃなくて、見た目もロボットだったんですね……。」

明日菜

「……………何か、かなりやっこしいわね。」

ネギ一行は少し複雑そうな表情でロボットを見つめる。

ヘクター

「も、もしか君達は………HVCI012がいつも言ってたスマな  
んとかの人達じゃな？」

ビット

「は、はい………僕達がスマッシュブラザーズの一員ですけど……  
…まさか、お二人がロボットさんを作った人だったとは………」

ナナ

「ロボット、何か喋ってよ！」

ポポ

「お〜い！」

ピピピピッ！

ポポ達はロボットに声を掛けるが、ロボットは目を閉じたまま何も  
答えない。

ベクター

「無駄じゃ………さっきも言ったように、亜空間に飲み込まれた衝  
撃で壊れてしまったんじゃない。」

ポポ

「そ、そんな……………」

ピピピピ……………」

ベクターの言葉を聞いたポポとナナとゲーム&ウォッチは少し落ち込んでしまつた。

ナナ

「……………お爺さん達がロボットを作つたんでしょ？勿論直せるよね？」

ヘクター

「いや、ワシらも直してやりたいんじゃないが……………修理道具をスミツク達に奪われてしまつてのお……………」

ピット

「スミツク？」

ピットを含む全員がヘクターの言葉に耳を傾ける。

ベクター

「ワシらの研究の邪魔ばかりする厄介な生物じゃ……………ワシらが何



処の世界へ行っても、奴らは必ずワシらの前に姿を現すんじゃない。」

ネギ

「え？何処の世界へ行ってもって………どついう意味ですか？」

ヘクター

「うむ、話せば長くなるが……ワシら兄弟は『エインシャント島』  
という浮き島でロボットの開発をしていた………」

ピット

（何だって！？『エインシャント島』？）

ポポ

（ナナ、『エインシャント島』って確か………）

ナナ

（うん、ロボットが仲間達と一緒に住んでた島だよ………でも、今はもう無くなっちゃったって聞いたけど………）

ピットはヘクターの言葉に思わず耳を疑ったが、ポポとナナはみんなに聞こえないように小声で話し合う。

ヘクター

「そして、大量の試作品を作った後に完成したのがHVC1012  
という訳じゃ……。」

そう言いながら、ベクターはロボットを指差す。

ヘクター

「それから、ワシら兄弟は『エインシャント島』をHVC1012  
と試作品達に託して、研究の為にしばらくの間だけ島を離れた……  
……。」

ベクター

「そして、島に帰って来たワシらは愕然とした……何故なら、そ  
こに浮いていたハズの島が跡形も無くなってしまったのじゃから……  
……。」

のどか

「し、島が……消えた？」

明日菜

「そんな馬鹿な……。」

ピット&ポポ&ナナ

「……………」

ネギー一行はヘクターの話に思わず耳を疑ってしまつが、ピット達は何も言わずにただ黙っていた。

ヘクター

「その後、ワシらは偶然にもHVC1012と再会した………そして、ワシらが居ない間に『エインシャント島』で何が起こったのか全て聞いた………タブーという悪者が率いる亜空軍が『エインシャント島』を侵略した事や、大量の亜空間爆弾が爆発して『エインシャント島』と沢山の仲間達が亜空間に飲み込まれてしまった事をな………」

ネギ

(タブー………確か、以前マスターハンドさんが言ってた亜空間の支配者………)

ベクター

「そこで、ワシら兄弟とHVC1012は亜空間に飲み込まれた『エインシャント島』と仲間達を捜す旅に出たのじゃ………様々な世界を巡り合いながら………」

明日菜

「そうだったの………でも、一体どうやって色々な世界に行ってるの?」

ヘクター&ベクター

「それは企業秘密じゃ！」

明日菜の質問にヘクターとベクターがほぼ同時に答える。

ピット

「……………」と、とにかく今はスミツクという奴らを捜して、修理道具を取り返さないと……………」。

ネギ

「そうですね、ロボットさんを直してあげる為にも……………」。

明日菜

「はあ、此処に葉加瀬が居ればすぐに直せるのにねえ。」

木乃香

「そやなあ……………」何せ、茶々丸さんを作ったぐらいやから……………」。

剎那

「でも、幾ら葉加瀬さんでも道具が無くては修理すら出来ませんよ。」

「

ヘクター

「その通り！どんな天才科学者でも、道具が無ければ何も出来ないのじゃ。」

ベクター

「まあ、ワシらもあまり偉そうに言える立場では無いのだが……………」

「

そう言うと、ヘクターとベクターは思わず苦笑いをしてしまう。

ポポ

「それじゃ、僕達がスミツクから修理道具を取り返してあげるよ！」

ナナ

「それまで、お爺さん達は何処かに隠れててね。」

ベクター

「うむ、そうさせて貰おうかのぉ……………」

そう言うと、ベクターはロボットを押し出しながら先程の岩壁の方へと隠れていく。

ヘクター

「そうじゃー！コレを持っていくといいじゃろ。」

そう言って、ヘクターが何かが沢山入ってる一つの袋をピットに渡す。

ピット

「コレは何ですか？」

ヘクター

「この袋の中にはカブラという野菜が沢山入っておる。」

明日菜

「カブラ？」

ヘクター

「スミツクの好物じゃ……………コレでスミツク達をおびき出せるハズじゃ。」

ネギ

「成程、それは便利ですね……………どうもありがとうございます。」

ヘクター

「いやいや、ワシが出るのはこれくらいじゃからのぉ……………」。

ピット

「それじゃ、早速スミツクを捜そう！」

そう言うと、ピット達はそのまま奥の方へと進んでいく。

ヘクター

「気をつけてな〜！」

ヘクターはネギ達を見送りながら手を振っていくのであった……………。

第八十話〜HVCI012を直せ！（前編）〜（後書き）

果たして、ロボットを直す事が出来るのか！？

因みに、今回の話に登場したヘクターとベクターというキャラは、ロボットが周辺器具として活躍するゲーム『ブロックセット』と『ジャイロセット』に登場するプレイヤーキャラ（ベクターは2Pキャラ）です。

それと同様に、スミックも『ジャイロセット』に登場する敵キャラです。

尚、ヘクターとベクターの兄弟が『エインシヤント島』を開拓した等という設定は自分が勝手に作った設定なので御了承下さい！



第八十一話くHVCI012を直せ！（中編）く（前書き）

ネギ達はヘクター達に頼まれて、ロボットを修理する道具を盗んだ  
スミツク達を捜してるのだが……………。

第八十一話〈HVCI012を直せ！（中編）〉

〈冥府界〉

ネギ達はロボットを直す為に、修理道具を盗んだスミツク達を捜し回っていた。

ネギ

「……………中々見つかりませんねえ。」

ピット

「うーん、このままじゃ埒らちが明ないなあ……………」

明日菜

「……………あ！そつだ！！」

突然、明日菜が何かを思い付いたかのように大声を上げる。

木乃香

「き、急にどないしたん？」

明日菜

「良い事を思い付いちゃったの……………ねえ、それ貸して!!」

ピット

「あっ!?!」

明日菜はピットが持ってたカブラ入りの袋を横取りしてしまう。

のどか

「それをどろするんですか?」

明日菜

「じじするのよ……ほいっ!」

ポトポトッ……

すると、明日菜が袋を逆さまにして、袋の中に入ってた真つ赤な野<sup>カ</sup>菜<sup>ブラ</sup>を全て地面に撒き散らしてしまう。

ポポ&ナナ

「あっ!?! 勿体ない!」

カモ

「姐さん、一体何をやってんだ?」

明日菜

「見れば分かるでしょ？こっやってカブラを地面にバラ撒いて、スミツク達が近寄って来るのを待ち伏せるのよ！」

刹那

「成程………こちらから捜し出すよりも、誘き出した方がいいって訳ですね。」

ネギ

「さ、流石明日菜さん！」

カモ

「姐さんにしては、かなり知恵を絞ったなあ。」

明日菜

「だ〜か〜ら〜！アンタは毎回毎回一言多いってば！〜！」

明日菜はカモの余計な一言に怒り出してしまっ。

プジュン！

すると、ゲーム&ウォッチが地面に落ちてる二つのカブラを拾い上げる。

木乃香

「あ！拾ったモンを食べたらアカンよ……………」。

ピッ！ピッ！ピッ！

次の瞬間、ゲーム&ウォッチはカブラをボール代わりにしてジャグリングをしながら遊び始めてしまう。

明日菜

「……………ねえ、彼は何をしてるの？」

ポポ

「多分、遊んでるんじゃないかな……………」。

ナナ

「……………でも、正直言うと私達もゲーム&ウォッチが何を考えてるのか未だに分からないよね？」

ピット

「た、確かに……………」。

全員が啞然とした表情でジャグリングをするゲーム&ウォッチを見つめる。

ネギ

「……………そ、それより何処かに隠れて様子を見ましょう。」

刹那

「そうですね、あの岩の陰に隠れましょう。」

そう言うと、ネギ達は大きな岩の方へと歩み寄っていく。

ポポ

「よし、後はスミツクがカブラの方に近寄って来るのを待つだけだね。」

ナナ

「早く来ないかなあ。」

ネギ

「いや、そう簡単には来ないと思うよ……………」

明日菜

「そうそう、此処は辛抱強く待たないとね。」

そう言いながら、ネギ達は岩壁から少し覗き込みながら様子を伺う。

↳三十分後↳

ネギ達は未だにスミツク達が現れるのを辛抱強く待っていた。

ネギ

「……………中々出て来ませんね。」

明日菜

「そ、そうね……………」。

ポポ

「ふわあ〜っ、何だか眠くなってきちゃったなあ……………」。

ナナ

「ポポったら、眠っちゃ駄目！」

そう言うと、ナナは眠そうな表情を浮かべるポポを軽く揺さ振る。

ピット

「……………あ！何かが近付いて来るよ。」

明日菜

「え！？どれどれ……………」

ピットが指差す先を見ると、緑色の小さな生物達がカブラにゆつくりと近寄って来る。

のどか

「アレがスミツクという生物でしょうか？」

ネギ

「ええ、恐らく……………」

ガブツ！



ムシャムシャ……

すると、スミツク達はカブヲを喰るように喰べ始める。

木乃香

「あんなに美味そうに食べてるえ……………」

刹那

「どうやら、間違い無くスミツクの様子ですね。」

ネギ

「では、僕の拘束魔法で動きを……………」

ポポ

「ナナ！行くよ！！」

ナナ

「OK！！」

そう言つと、ポポとナナが岩壁から勢い良く飛び出していく。

ネギ

「あっ！？ちょ、ちょっと……。」

スミツク達

「！？」

カブラを食べていたスミツク達が一斉にポポとナナを方を向いた瞬間……。

ポポ&ナナ

「ブリザード！！」

ブワァー……ッ！！

カチカチカチ……

ポポとナナがスミツク達に向けて掌から氷の霧を出して、スミツク達を一匹残らず凍り付けにしてしまう。

ナナ

「やったあ〜！上手くいったね！！」

ポポ

「うん！ナナのお蔭だよ！！」

パシンー！！

ポポとナナは嬉しそうにハイタッチをする。

明日菜

「……………ネギ、完全にあの子達に先を越されちゃったわね。」

ネギ

「は、はい……………」

明日菜の言葉にネギは少しだけ凹んでしまつた。

ピット

「とにかく、修理道具を取り返そう……………」

そう言うと、全員が岩壁から出て来て凍り付けになったスミツク達に近付いていく。

ネギ

「……………あれ？可笑しいなあ……………」

明日菜

「どっしたの？」

ネギ

「どのスミツクも修理道具らしき物を持ってないみたいなんですよ。」

ピット

「そんなハズは無いと思うけど……………」

木乃香

「あーっ！？みんな、アレを見てー！」

木乃香が指差す先を見ると、そこには大きな木箱を掲げるように持ち上げてる二匹のスミツクが居た。

ネギ

「あの箱はもしかして……………」

カモ

「ああ、きつと修理道具が入ってるんだぜ！」

ポポ

「よし、もう一回ブリザードで凍らせてやる……………」。

ダダッ！！

ポポが攻撃を仕掛けようとした時、一匹のスミックが木箱を持ち上げたまま逃げ出していく。

ナナ

「あ！逃げちゃった！！！」

ピット

「追い掛けよう！」

ネギ達は慌てて追い掛けようと駆け出していくが……………。

？

「ちょっと待て！！！」

全員

「!？」

突然、ネギ達の前にフードを纏って大きな鎌を持った髑髏のような顔の魔物と先端に茄子が刺さってるような杖を持った丸坊主の魔物が立ち塞がる。

ピット

「お、お前達は……死神しにがみとナスビ使いじゃないか!？」

死神

「ケケケ、お前達だな?この『冥府界』を荒らし回ってるのは……  
……。」

刹那

「荒らし回ってるだって?」

ネギ

「そんな……僕達は別にそんな事……。」

ナスビ使い

「惚けても無駄だ!お前達以外に誰が居る!？」

明日菜

「……………どつでもいいけど、早くそこをどきなさいよ！」

死神

「そうはいかん！此処でお前らを八つ裂きにしてやる！！」

ナスビ使い

「いやいや、全員茄子にした方がいい！！」

そう言うと、死神とナスビ使いはネギ達に向けてそれぞれの武器で身構える。

ネギ

「……………どうやら、闘うしかないみたいですね。」

明日菜

「そのようね……………アデアット！！」

パァー……………ッ！！

次の瞬間、明日菜が咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出す。

トッピ。

「これだけの人数を相手に勝てると思ってるのか？」

死神

「確かに、我々二人だけでは勝ち目は無い……………いでよ！我が子供達よー！！」

ブワァー……ッ！！

刹那

「……………ムッ！？ア、アレは！？」

刹那が何かの気配に気付いて上を見上げると、上空から小さな鎌を持った複数の小柄な死神達が接近してくる。

ピット

「しまった！死神が子死神達こしにかみを呼び出したか……………。」

死神

「さあ！みんなで一斉に八つ裂きにしてしまえー！！」

子死神達

「おおー……っ！！」



死神の言葉を合図に、子死神達は一斉にネギ達に襲い掛かろうとする。

ポポ

「わ〜！いつぱい来た〜！！」

ナナ

「いやあ〜！こっち来ないで〜！！」

そう言つと、ポポとナナは左右に激しくハンマーを振り回す。

ピッ！ピッ！ピッ！

ゲーム&ウォッチはフライパンを取り出して食材を投げ付けるが、子死神達は素早い動きで避けてしまう。

明日菜

「このお〜！本当にすばしっこいなあ〜！！」

明日菜は苛々しながら子死神達に向けて『ハマノツルギ』を振り回す。

子死神達

「うおー！ー！っ！！」

木乃香

「いやあ〜！こっちに来る〜！！」

子死神が木乃香に向かって一斉に襲い掛かる。……。

刹那

「神鳴流奥義・百烈桜華斬！！」

ズツシャー！ー！ツ！！

子死神達

「ぎえー！ー！っ！！」

次の瞬間、刹那が夕風で子死神達を一掃させる。

刹那

「お嬢様！大丈夫でしたか！？」

木乃香

「う、うん……………いつもありがとう、せっちゃん。」

刹那

「い、いえ……………木乃香お嬢様の為なら私は……………。」

刹那は木乃香にお礼を言われて、頬を真っ赤に染めながら段々と小声になっていく。

カモ

「兄貴！向こうからも来るぜ！！」

ネギ

「わ、分かった！……………魔法の射手 連弾・雷の十七矢！！」

ズドォー……………ツ！！

子死神

「ぐわぁ……………っ！！」

ネギはカモが指摘した方向に魔法を放って、子死神達を一掃させる。

死神

「……………あいつら、中々やるな。」

ナスビ使い

「ああ、特にあの妙な魔法を使う小僧はな……………」

そう言っていると、死神とナスビ使いは揃ってネギの方を見つめる。

死神

「ケケケ、俺の鎌で八つ裂きにしてやる……………」

そう言っつて、死神は鎌を持ちながらネギに向かってゆっくりと接近しようとするが……………。

ナスビ使い

「これでも喰らえ!!」

ポイツ!!

突然、ナスビ使いがネギに向けて茄子を投げ付ける。

カモ

「あ、兄貴！危ねえ！！」

ネギ

「えっ！？」

次の瞬間、カモがネギの肩から飛び出して、ネギを庇うようにナスビ使いが投げた茄子を受け止める。

ボンッ！！

ネギ

「！？」

すると、カモが茄子の姿になってしまう。

ネギ

「カ、カモ君が……………茄子に……………」

ネギは震える手で茄子になってしまったカモを持ち上げる。

死神

「何をする！？あの小僧は俺の獲物だぞ！！」

ナスビ使い

「喧やかましい！八つ裂きにするより茄子にした方が良いわ！！」

死神

「お前は相変わらず茄子しか頭に無いんだな！」

ナスビ使い

「そう言う貴様こそ、鎌を振り回すしか脳が無いクセに！！！」

死神

「何だとお！？」

ナスビ使い

「やるか！？」

死神とナスビ使いが、お互いに物凄い形相で睨み合っていると……  
…。

ドンッ！！

死神

「ぬおっ!?!」

突然、瞬動で死神達の近くまで移動したネギが勢い良く死神を押し出していく。

ガシッ!!

ナスビ使い

「うぐぐっ!?!」

更にネギは鋭い目付きでナスビ使いの胸倉を掴んで持ち上げていく。

ネギ

「……………カモ君を元の姿に戻して下さい!」

ナスビ使い

「うぐぐぐ……………む、無駄だ……………私を倒しても呪いは解けぬ……………」

ネギ

「じゃあ、どうすれば呪いが解けるんですか?」

ナスビ使い

「フフツ、教えるものか……………」

ネギ

「くっ……………」

ネギがナスビ使いの言葉に苛立っていると……………。

死神

「小僧お！後ろがガラ空きだぞおー！ー！ー！ー！」

のどか

「ネ、ネギ先生！危ない……………」

突然、死神がネギの背後から勢い良く鎌を振り下ろそうとするが……………。

ネギ

「ラス・テル マ・ステル マギステル……………闇夜切り裂く一条の光 我が手に宿りて敵を喰らえ……………」

ガシツ！！



死神

「がつ！？」

ネギが呪文を唱えてる最中、そのままの体勢で片方の手だけで死神の顔を掴んだ時……………。

ネギ

「白き雷！！」

ズツバアーーーーッ！！

死神

「うぎゃーーーーーッ！！」

ネギが死神の顔を掴んでいた掌から強力な電撃を放って、死神は体中から電気を浴びてしまう。

死神

「が……………が……………」

バツタアーーーーン！！

すると、死神はそのまま地面に倒れ込んでしまう。

ナスビ使い

(……………な、何て凄まじい力だ……………。)

ナスビ使いはネギに倒された死神を啞然とした表情で見つめる。

ネギ

「……………どうですか？教える気になりましたか？」

ナスビ使い

「わ、分かった……………呪いを解くには『天空界』の住人に解いても  
らうしかない……………」

ネギ

「本当ですね？」

ナスビ使い

「あ、ああ……………本当だ……………」

ネギ

「……………」

しばらくの間、ネギはナスビ使いの必死に訴えてるような目を見つめる。

ネギ

「……分かりました。」

ナスビ使い

(……な、何?)

ネギはナスビ使いの胸倉を掴んでいた手を離して、相手に背を向けながら立ち去ろうとする。

ナスビ使い

(ば、馬鹿な奴め……まだ動ける敵に背を向けるとは……お前も茄子にしてやるぞ!……)

ポイツ!!

ナスビ使いはネギに向けて勢い良く茄子を投げ付ける。

ピッ  
ト

「危ない!!」

すると、ピットが慌ててネギの前に現れて、鏡のような大きな盾を取り出してナスビ使いが投げ付けた茄子を跳ね返す。

ナスビ使い

「し、しまっ……………」

ボンッ!!

ナスビ使いはピットが跳ね返した茄子に命中してしまい、自分も茄子に変化してしまう。

ネギ

「あ、ありがとうございます……………」

ピット

「いや、お礼なんかいいよ……………それより、敵に背を向けるなんてあまりにも無謀な行為だよ。」

ネギ

「す、すみません……………それよりも、カモ君が茄子に……………」

ピット

「ああ、ナスビ使いの呪いに掛かったんだね……………大丈夫、『天空界』の病院に行けば呪いを解いてくれるよ。」

ネギ

「ほ、本当ですか！？良かったあ……………」

ネギはピットの言葉を聞いて一安心する。

明日菜

「ネギ、あのちっこい奴らは倒したわよ！」

そう言いながら、明日菜達がネギとピットの方へ駆け寄ってくる。

刹那

「どうやら、ネギ先生の方も片付いたようですね。」

ネギ

「は、はい……………ですが……………」

木乃香

「ん？どないしたん？」

ネギ

「じ、実は……………」

ネギはカモが茄子になってしまった事を明日菜達に説明していく。

明日菜

「ええーっ！？エロガモが茄子になっちゃったの!？」

ネギ

「はい、このように……………」

ネギは掌に乗せてある茄子カモを明日菜達に見せる。

木乃香

「コ、コレがカモ君？」

刹那

「な、何とも変わり果てた姿に……………」

のどか

「可哀相……………」

ポポ

「……………美味そう。」

ナナ

「ポ、ポポったら！ヨダレ出てるよ……………」

ピピピピッ！

ポポ以外は哀れむような表情で茄子<sup>カモ</sup>を見つめる。

ネギ

「でも、『天空界』の病院に行けば治せるみたいなんです。」

明日菜

「び、病院って……………そんな物があるんだ……………」

明日菜はネギの説明を聞いて思わず苦笑いをする。

刹那

「ともかく、カモさんの事も心配ですが……………今は修理道具を持って行ってしまったスミックを追い掛けるのが先決かと思うのですが

……。」

ネギ

「……そうですね、カモ君には申し訳ないけど……まずは僕達  
がやるべき事をやらないといけませんね。」

明日菜

「それはいいけど、そのスミツクが何処へ行ったのかが問題ね……  
……。」

ネギ達がこの状況に困惑していると……。

ガッシャーーン!!

全員

「!?!?」

突然、遠くから物凄い爆発音が響き渡る。

ナナ

「な、何?今の物音は……。」



ポポ

「あっちの方から聞こえてきたよつな……………」。

ピット

「行ってみようー!」

そう言いつと、ネギ達は急いで物音がした方へと駆け出していく。

↳更に数分後↳

ネギ

「こ、これは……………」。

ネギ達が物音がしたと思われる場所まで来てみると、そこには二匹のスマック達が持つて行ったハズの木箱と沢山の花びらが撒き散らされていた。

刹那

「この花びらは一体……………」

ポポ

「それに、何で此処にスミツク達が持ってた木箱があるんだろう？」

ナナ

「でも、コレをヘクターさん達の所まで持って行けばロボットを直せるよね？」

ピット

「そうだね、急いでヘクターさんが居る所まで戻ろう！」

明日菜

「でも、何処の場所だったか覚えてないわよ？」

のどか

「あ、それなら私覚えてます……………」

木乃香

「それやったら安心だな。」

ネギ

「では、急いで戻りましょう………のどかさん、案内をお願いします。」

のどか

「は、はい…」

そう言つと、のどかを先頭に全員がその場を後にしていく。

？

「……………やっと行つたみたいね。」

すると、大きな岩壁からいつものように黒いコートを着て顔をフードで隠したリリーが百合の花のような形した柄の鋭い剣を持ちながら出て来る。

がばね

「それにしてもよお、たがが雑魚相手にやり過ぎだったんじゃないか？」

リリー

「別にいいじゃん ライオンだって一頭の兎を捕らえる為に全力を出すじゃない。」

がばね

「まあ、そりゃそつだけとさあ……………」。

？

「……………此処に居たか。」

突然、黒コートの人物がリリー達の前に現れる。

がばね

「おっ！旦那じゃねえか……………今まで何処に行ってたんだ？」

？

「ああ、少し野暮用でな……………それより、君達こそ何をしてたんだ？」

リリー

「え〜つとね、この世界の魔物達と闘ってた」

？

「フツ、相変わらずだな……………」。

黒コートの人物はリリーの言葉を聞いて思わず鼻で笑ってしまふ。

がばね

「ところで旦那、さっき例の魔法使いのガキ共を見掛けたんだか……これからどうする？」

リリー

「折角だから、ネギっこ達に会ってきたら？」

？

「……………そうだな、挨拶ぐらいして来ようか。」

スッ！！

そう言つと、黒コートの人物はその場から消えてしまう。

リリー

「……………さうと、あたしは魔物達と闘つて来ますか」

がばね

「おいおい、まだやる気がよ……………」

リリー

「当たり前じゃない！あたしはまだまだやれるんだから……」  
あ、行くわよ！」

がばね

「へいへい……」。

「うして、リリー達もその場を後にしていくのであった……」。

第八十一話、HVC1012を直せ！（中編）（後書き）

無事に修理道具を取り返したネギ達だが、果たしてロボットは復活するの？

因みに、ゲームでのナスビ使いの呪いを解いてくれる病院は各ステージのボスが潜む砦の近くにあるのですが、何故『冥府界』に病院があるんだ？って話になったらかなりややこしくなるので『天空界』の病院のみという設定にしました……悪しからず（汗）。

第八十二話、HVC1012を直せ！（後編）（前書き）

ネギ達はスミツクから修理道具を取り返したのだが……。



第八十二話　＼HVCI012を直せ！（後編）＼

＼冥府界＼

ネギ達はスミツク達に盗まれた修理道具を取り返して、ヘクター達が居る所まで戻って来ていた。

ヘクター

「おお～！そうそう、コレじゃコレ～！」

ベクター

「コレがあればHVCI012を修理する事が出来るぞい！」

ピット

「そうですか、良かった……。」

ピットを含む全員がヘクターとベクターの言葉を聞いて一安心する。

ヘクター

「それでは、これからHVCI012の修復作業を始めるとするか。

」

ベクター

「少し時間が掛かるかもしれないが、此処で待っていてくれんかのぉ。」

ネギ

「はい、分かりました。」

ヘクターとベクターは道具を持って、ロボットを隠してある岩壁の方へと歩み寄っていく。

明日菜

「……………さてと、修理が終わるまでどうする？」

ネギ

「取り合えず、休憩がてら此処で修理が終わるのを待ちましょう。」

ピット

「そうしよう、下手に動き回って魔物達に見つかったらマズイしね。」

ポポ

「それじゃ、しばらく此処で一休みしよう。」

そう言って、全員がそこから辺の岩に腰掛けようとするが……………。

刹那

「……………」

刹那は何かを探すかのように辺りを見回している。

木乃香

「せつちゃん、急にどないしたん？」

刹那

「い、いえ……………先程から誰かに見られているような気がしたもので……………」

明日菜

「えっ！？本当に？」

そう言うと、ネギと明日菜も辺りを見回してみる。

ネギ

「……………特に気配とかも感じませんね。」

明日菜

「刹那さんの気のせいじゃないの？」

刹那

「そうみたいですわね……………」

そう言っつて、刹那も岩に腰掛けようとした時……………」

ナナ

「きゃっ！…！」

全員

「！！？」

突然、ナナが何かに突き飛ばされたかのように地面に倒れ込んでしまっつ。

ポポ

「ナ、ナナ！大丈夫！？」

ナナ

「痛たたた……………う、うん……………」

ナナはゆっくりと起き上がりながらポポの質問に答える。

ピット

「何があったの？」

ナナ

「私もよく分からなかったけど……何かに体当たりされたみたいなの。」

明日菜

「何ですって!？」

ネギ達は再び辺りを隈なく見回す。

ネギ

「……………やっぱり、誰も居ないようですね。」

明日菜

「そうね、一体何がどうなって……………。」

ドゥンッ……!

のどか

「きゃっ!！」

全員

「!？」

全員が何かがぶつかる音に反応して、のどかの方を向いてみると先程のナナのようにのどかが倒れ込んだ。

明日菜

「ほ、本屋ちゃん！大丈夫!？」

のどか

「は、はい……………何とか……………」

ネギ

「良かった……………さあ、僕の手を掴まして下さい。」

のどか

「あ、ありがとうございます……………」

のどかは頬を赤く染めて照れ隠しをしながらネギが差し出した手を握りながらゆっくりと起き上がる。

刹那

「……………どつやら、やはりこの辺りには何か潜んでいるようですね。」

ピット

「そつみただね……………みんな！周りに注意してね！！」

そう言うと、全員が辺りを警戒しながら周りを見回していく。

刹那

(……………それにしても、あれだけ攻撃を仕掛けてきたにも関わらず全く気配を感じさせないとは……………相当出来る奴のようだ……………)。

ドンッ！！

全員

「！？」

全員がぶつかる音に反応して振り向いてみると、ゲーム&ウォッチが空高く打ち上げられていた。

ネギ

「あつ！？ゲーム&ウォッチさんが……………」

木乃香

「このままじゃ地面に激突してまう……………」

ネギ達が落下していくゲーム&ウォッチを見ていると……………。

バサアーーーーッ！

ネギ一行

「……………へ？」

ネギ一行はゲーム&ウォッチが背中のパラシュートを開いて、ゆっくりと下降していく様子を見て啞然とする。

明日菜

「……………パ、パラシュート？」

のどか

「い、いつの間にあんな物を……………」

ポポ



「でも、いつも背中からパラシュートが出て来るよね？」

ナナ

「うん。」

ネギ

「そ、そんなんですか……………」

ネギー行が左右に揺らされながらパラシュートでどんどん下降してくるゲーム&ウォッチを未だに啞然とした表情で眺めていると……………。

ストツ！

全員

「!?!?」

ゲーム&ウォッチが何も無い空中に着地して、まるで宙に浮いている状態になってしまう。

木乃香

「……………う、浮いてる?」

ネギ

「す、凄い！空中浮遊も出来るんですね。」

ピット

「い、いや……そんな事は出来ないはずだけど……。」

刹那

「もしかして、あそこには目には見えない何かがいるのでは……。」

？

「ウォーーーーッ!!」

全員

「!?!」

不気味な呻き声と共に、ゲーム&ウォッチの下から大きな丸い顔だけの魔物が姿を現わす。

のどか

「ほ、本当に何か居た……。」

ピット

「ア、アレはパンドーラ……………コイツも前に倒したハズなのに……………」

ネギ

「ピットさん、あの魔物は強いのでしょうか？」

ピット

「いや、コイツはそんなに強くはないけど……………さっきみたいに姿を消して体当たりしてくるから厄介なんだ……………」。

パンドーラ

「ウオー……ッ……ッ！」

ポンッ！ポンッ！

次の瞬間、パンドーラと呼ばれた魔物が口からシャボン玉のような二つの大きな玉を吐き出す。

ドンッ！ドンッ！

ジュジュジュ……

全員

「あっ!?!」

すると、二つのシャボン玉がパンドーラの頭上に乗っかっていたゲーム&ウオッチを突き飛ばしてしまう。

ピット

「危ない!!!」

バッサアーーーーッ!!

次の瞬間、ピットが羽根を広げながら勢い良く飛び出して、落下していくゲーム&ウオッチを抱き抱えるように見事にキャッチする。

ポポ

「やった〜!見事にナイスキャッチした〜!!」

ナナ

「流石ピットね!」

ピット

「……………ふう、危機一髪だった。」

ピットは一安心しながら地面に着地して、ゆっくりとゲーム&ウォッチを降ろす。

ピット

「よくもゲーム&ウォッチさんを……………許さない！」

ピュッッー！

ピットはパルテナの神弓を取り出して、パンドーラに向けて光の矢を射るが……………。

スッ……………

パンドーラはピットが射ぬいた矢を避けたと同時に、再び姿を消してしまう。

明日菜

「あっ！？また消えちゃった……………」

ネギ

「皆さん！あのシャボン玉みたいな物にも注意して下さいねー！」

そう言つと、二つのシャボン玉が勢い良くネギ達に向かって突っ込んでくる。

ポポ

「こんな物、ハンマーで壊してやる〜！」

ポポは勢い良くジャンプして、二つのシャボン玉に向けてハンマーを振り下ろそうとするが……。

ドンッ！！

ポポ

「わあっ！！！」

ポポがハンマーを振り下ろす寸前に、姿を消したパンドーラの体当たりによって勢い良く吹っ飛ばされてしまう。

ナナ

「ポポ！！！」

木乃香

「ナナちゃん！あっちに行ったら危険やえ！！！」

ナナ

「でも、ポポが……。」

ナナはポポの方へ駆け寄りうつとするが、木乃香に両肩を掴まれて制止させられてしまう。

刹那

（確かに、ピットさんの言うようになり厄介だな……奴は姿だけではなく気配までも完全に消している……。）

ネギ

（それと、あのシャボン玉みたいな物も何とかしないと……。）

ネギ達は姿を消したパンドーラと二つのシャボン玉に警戒しながら辺りを見回す。

ベクター

「……………兄さん、何やら向こう側の方が騒がしいようじゃが……………」

「

ヘクター

「ベクター、今はHVCI012を修理する事に専念するんじゃ！」

ベクター

「そ、そうじゃな……………」

ヘクター

(もう少しじゃ……………後もう少しで修復完了じゃ……………)

ヘクターとベクターはネギ達の方を気にしながらもロボットの修理を続ける。

明日菜

「とりゃー……っ……!」

ブンッ……!

明日菜は二つのシャボン玉に向けて『ハマノツルギ』を振り回すが、二つのシャボン玉は難無く避けてしまう。

ピッ……ピッ……ピッ……!

次にゲーム&ウォッチがフライパンを上下に振って食材を撒き散らす。それでも二つのシャボン玉は命中しなかった。



ピット

「駄目だ、全然狙いが定まらない……………」

そう言って、ピットがパルテナの神弓で光の弓を射止めようとした時……………。

ドクッ！

ピット

「ぐわっ！？」

ピットは背後から姿を消したパンドーラによって体当たりされて、前方に倒れ込んでしまう。

刹那

「ピットさん！大丈夫ですか！？」

刹那が慌ててピットの方へ駆け寄ろうとするが……………。

ドクッ！

刹那

「うぐっ!?!」

姿を消したパンドーラは今度は刹那の腹部に体当たりを繰り返す。

木乃香

「せつちゃん!?!」

刹那

「だ、大丈夫……………これ位平気です……………」

そう言いながら、刹那は腹部を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

ネギ

(このままじゃ埒が明かない……………何とかして敵の姿を見つけ出さ  
いと……………)。

のどか

「ネギ先生!後ろ!?!」

ネギ

「えっ!?!」

ネギがのどかの声に反応して振り向いてみると、二つのシャボン玉が勢い良く突っ込んできていた。

ネギ

（し、しまった！この距離じゃ呪文を唱えてる時間が……………。）

そう思いながら、ネギが咄嗟に身を守るつと両腕を隠した時……………。

ビー————ツ！！

全員

「!?!」

突然、真横から一筋の赤い光線が放射されて二つのシャボン玉を破壊してしまふ。

ネギ

「……………あ、あれ？」

明日菜

「い、一体何が起こったの？」

ピット

(今の技は……………もしかして……………。)

?

「皆サン、大丈夫デスカ？」

全員が片言のような声に反応して見てみると、そこには修理を終えて完治したロボットが居た。

ポポ

「ロボット！治ったんだね！！」

ナナ

「良かったね！！」

ピピピピピッ！！

ポポとナナとゲーム&ウォッチはロボットの姿を見て思わず大喜びする。

ロボット

「話八へくたー博士トべくたー博士カラ聞キマシタ……………私ノ為ニ  
本当ニアリガトウゴザイマシタ。」

ピット

「いや、お礼なんて……………つて、今はそんな話をしてる場合じゃないんだ！」

ロボット

「ハテ？何かアツタノデスカ？」

今の状況が理解出来ていないロボットは首を傾げながらピット達に質問をする。

ポポ

「魔物が姿を消して僕達に襲い掛かってるんだ！」

ナナ

「私達、その魔物に手を焼いてたところなの！」

ロボット

「ソウダッタノデスカ……………分カリマシタ！コノ場八私ニ才任せ下  
サイー！」

全員

「えっ!?!」

ネギ達はロボットの言葉に思わず耳を疑った。

ピット

「ま、任せろって……………本当に大丈夫なの?」

ロボット

「ハイ、大丈夫デス……………ソレデハ、探索致シマス!」

ギュイーーーーン!!!

ロボットは駒のような小さな物を取り出して、勢い良く回転させながら首だけを動かして辺りを見回す。

ネギ

「……………ピットさん、あの駒のような物は何ですか?」

ピット

「さ、さあ……………ロボットは『ジャイロ』だって前に言ってたけど……………」。

ピットはネギの質問に、かなり曖昧に答える。

ロボット

「……………ソコダー！」

ビシュッ！！

ドカッ！！

パンドーラ

「グオーーーーーッ！！」

ロボットがジャイロと呼ばれた物を回転させたまま横に投げ付けると、パンドーラに命中して苦痛な表情を浮かべながら姿を現わす。

明日菜

「う、嘘！？何で分かったの？」

ロボット

「へくたー博士が私ノ目ノれんずヲ赤外線対応ニシテクレタノデス。」

明日菜

「……………ネギ、赤外線って何？」

ネギ

「え、えっと……………簡単に言うと、目には見えない赤い電磁波ですよ。」

明日菜

「うーん……………分かったような分からないような……………」

明日菜はネギの言葉を聞いても、あまり理解出来ずに首を傾げてしまふ。

パンドーラ

「ウォー……ッ……！」

すると、パンドーラがロボットに向かって物凄いスピードで突っ込んでいく。

木乃香

「あ、危ないえ……！」



ロボット

「ろばばーなー発動!!」

ゴオーーーーーーッ!!

ドツカアーーーーッ!!

次の瞬間、ロボットは足(?)から炎を噴出させて上昇しながらパンドーラの体当たりを避けて、パンドーラは地面に勢い良くぶつかってしまう。

のどか

「す、凄い……………」

ネギ

「まるで茶々丸さんみたいですね……………」

明日菜

「そりゃ、彼もロボットだからね……………」

明日菜はネギの言葉に対して、冷静にツッコミを入れる。

ロボット

「コレデ止メダ……………ろほびーむ発射!!」

ビー————ツ!!

パンドーラ

「グワァ————!!」

ボォ————ン!!

ロボットが目から発射された赤い光線がパンドーラを貫いて、そのまま爆発してしまう。

木乃香

「ホンマに凄〜い!あつという間にやっつけてしもたわ〜!!」

刹那

「た、確かに……………お見事です!」

パチパチパチパチツ!!

ネギー一行はロボットの闘いぶりに思わず拍手をしてしまう。

ロボット

「イ、イエ……………ソレ程デモ……………」

ロボットは照れているかのように下に俯いてしまつ。

ヘクター

「本当によくやったぞ、HVCI012よ。」

ベクター

「流石はワシら兄弟が作り上げた最高傑作じゃな。」

そう言いながら、ヘクターとベクターが岩壁から出て来る。

ピット

「いやあ、ロボットさんのお蔭で本当に助かったよ……………どうもありがとう!」

ポポ&ナナ

「ありがとう!」

ピット

ピット達はロボットに向かって深々とお辞儀をする。

ロボット

「ワ、私ハ当然ノ事ヲシタダケデス…………ソレヨリぴっとサン、コノ方達ハ誰デスカ？」

ロボットはネギー一行の方を見ながらピットに質問をする。

ピット

「あゝ、ネギ君達はね…………。」

ピットはネギ達についてロボットに簡単に説明していく。

ロボット

「…………ソウデシタカ、ゴ苦労ヲオ掛ケシテ申シ訳アリマセンデシタ。」

そう言つと、ロボットはネギー一行に向かって深々と頭を下げる。

ネギ

「そ、そんな！頭を上げて下さい…………それから、バッチを受け取っ

て下さい。」

ネギは駒の形したバッチをロボットに手渡す。

ロボット

「アリガトウゴザイマス……………ソレニシテモ、ドウシテコンナ事ニ  
ナツテシマッタノデシヨウ。」

ポポ

「僕達にも分からないんだ……………もしかしたら、亜空軍が復活した  
のかもしれない……………」

ナナ

「それじゃ、タブーも復活したって事？」

ポポ

「た、多分……………」

ロボット

「ソナ……………私達が苦勞シテ倒シタアノたぶーガ……………」

そう言うと、ロボットは再び下に俯いてしまふ。

ピット

「で、でも！まだタブーが復活したと決まった訳じゃないし……だから、元気出そうよ！」

ロボット

「ハ、ハイ……。」

ロボットはピットの励ましの言葉に少しだけ元気を出して、ゆっくりと顔を上げる。

明日菜

「……ねえネギ、彼らに本当の事を話した方がいいんじゃない？」

ネギ

「僕もそう思いますけど……マスターハンドさんが秘密にしてほしいって言われましたから……。」

？

「ほお、マスターハンドがそう言ったのか？」

全員

「！？」

全員が声がした方を向いてみると、そこには黒コートの人物が立っていた。

ピット

「な、何物だ!？」

ナナ

「ひょっとして、また魔物かな……………」。

ポポ

「そんな〜、さっき倒したばかりなのに……………」。

ピットは黒コートの人物に向けてパルテナの神弓を構えるが、ポポとナナは不安げな表情を浮かべる。

明日菜

「また現れたわね!今度という今度は許さないんだから!！」

?

「……………何をそんなに怒っているんだ?」

明日菜

「怒るのも当たり前でしょ！？アンタがポポ達の世界を亜空間に飲み込ませた張本人だって事は知ってるんだからね！！」

ポポ&ナナ

「ええっ！？」

ロボット

「ナ、何デスツテ！？」

ピュピュッ……

ポポ達は明日菜の言葉を聞いて愕然となる。

？

「……………マスターハンドから聞いたのか？」

ネギ

「はい、マスターハンドさんは全て知っていました。」

？

「そうか、やはりな……………」



そう言つと、黒コートの人物は腕を組んで黙り込んでしまふ。

ピット

「何故だ！？何故ポポ達の世界を……………」

？

「……………答えるつもりは無い。」

ピット

「ふざけるな！！」

ピット

ピットは黒コートの人物に向けて光の矢を射止めるが……………。

バツシーーーーーン！！

全員

「！？？」

黒コートの人物は払い除けるかのように光の矢を片手で弾き返す。

刹那

(か、片手だけで弾き返した……………。)

ピット

(そ、そんな馬鹿な……………。)

ネギ達は黒コートの人物の実力に愕然となってしまう。

?

「……………悪いが、私はお前達と闘うつもりも無い。」

明日菜

「な、何ですって!?!」

?

「いや、闘う必要が無いと言った方がいいな。」

明日菜

「ムキーツ! もう我慢ならぬわ!?!」

ネギ

「あ、明日菜さん! 少し冷静になって……………。」

明日菜は『ハマノツルギ』を掲げながら黒コートの人物に向けて振り下ろそうとするが、ネギが慌てて明日菜を制止させる。

？

「私なんかより、メデューサと闘った方がいいのではないか？」

ピット

「メデューサだって？」

ピットは黒コートの人物の言葉に耳を傾ける。

？

「メデューサは再び『エンジェランド』全土を征服して、闇の世界にしようとする企んでいる……早くメデューサを倒さないと取り返しのつかない事になってしまうぞ？」

ピット

「そ、そんな事は絶対にさせない！させて堪<sup>たま</sup>るか！！」

？

「そう、その意気だ……メデューサはこの先に建てられている『冥府の神殿』に居る。」

そう言うと、黒コートの人物は遠くから神殿らしき建物が見渡せる方の道を指差す。

ネギ

「ピットさん！『冥府の神殿』に行きましょう！！」

ピット

「ああ！勿論だよ！！」

ロボット

「へくたー博士トべくたー博士ハ此処デ待ッテテ下サイ。」

ベクター

「やはりお前も行くのか……………」

ヘクター

「気をつけてな……………」

ヘクターとベクターは再び岩壁の方へと隠れていく。

明日菜

「さあみんな！行くわよ！！」

ポポ&ナナ

「おおー！ー！ー！ー！」

ネギ達はそのまま黒コートの人物が指差した道を駆け出していく。

？

（もうすぐだ……………もうすぐ全てが終わる……………）。

スッ！！

次の瞬間、黒コートの人物がその場から姿を消してしまふ。

第八十二話、HVC1012を直せ！（後編）（後書き）

果たして、ネギ達はメデューサの野望を食い止める事が出来るのか  
！？

第八十三話、人間を憎む闇の女神（前書き）

復活したロボットと共に、ネギ達はメデューサを倒す為に『冥府の神殿』を目指していく……………。

## 第八十三話 人間を憎む闇の女神

冥府の神殿前

ネギ達はメデューサが潜んでいるという『冥府の神殿』の前までやって来た。

ピット

「此処が『冥府の神殿』か……………見た目は『天空の神殿』とあまり変わらないな……………」

ネギ

「確かに、ピットさん達が居た神殿と瓜うりふた二つですね。」

明日菜

「という事は、此処にメデューサが居るって訳ね……………」

ポポ

「よっし！早速乗り込むぞっし！！！」

ピピピッ…！



突然、ポポとゲーム&ウォッチが勢い良く『冥府の神殿』に入っていく。

ナナ

「あっ！？ポポったら、待ってよー！」

ロボット

「げーむ&うおっちサンモムヤミニ神殿ニ入ッたら危険デスヨ！」

木乃香

「あゝあ、完全に入ってしまったわ……………」

刹那

「仕方ない、私達も神殿の中に入りましょう！」

そう言うと、ネギ達もポポ達の後に続くかのように『冥府の神殿』の中に入っていく。

（冥府の神殿・内部）

ネギ達は『冥府の神殿』の奥深くの広い部屋までやって来た。

のどか

「ず、随分奥まで入っちゃいましたね……………」

明日菜

「それに、少し真つ暗で何も見えないわ……………」

ピット

「気をつけて、メデューサが何処かに潜んでいるかもしれないから

……………」

ポポ

「おゝい！隠れてないで出て来い！！」

ナナ

「ちょ、ちょっとポポ！！」

ポポ

「んぐっ！？」

ナナは慌てて大声を上げる。ポポの口を両手で塞ぐ。

ロボット

「敵ニ呼ビ掛ケルナンテアマリニモ無謀デスヨ！」

明日菜

「そつよ！もし気付かれたら……。」

？

「誰に気付かれたら困るといふのだ？」

全員

「!?!」

ネギ達は何処からともなく聞こえてきた声に反応して、警戒しながら辺りを見回す。

刹那

「い、今の声はまさか……。」

トビ

「ああ、間違いない……………メデューサ！何処に居る！？」

メデューサ

「そう喚わめくな……………私は先程からお前達のすぐ傍そばにおるぞ。」

明日菜

「な、何ですって！？」

ネギ

「すぐ傍そばって……………一体何処に……………。」

メデューサ

「此処じゃ……！」

ドゥシー……………ン……！！

全員

「！？」

ネギ達が足踏みのような大きな音に反応して見ると、ネギ達の目の前に髪の毛の代わりに無数の蛇を頭に生やした巨大で一つ目の醜い化け物が立っていた。

ポポ&ナナ

「ぎゃ〜！お化け〜！〜！」

ポポとナナはメデューサの容姿を見て、思わず抱き合いながら絶叫してしまう。

ネギ

「ピ、ピットさん……………もしかして、この人が……………」

ピット

「そう、闇を司る女神メデューサだよ……………」

ピュピュッ！！

ゲーム&ウォッチはメデューサの恐ろしい容姿を見て、素早くロボットの背中に隠れてしまう。

メデューサ

「ん？誰かと思えば、この『冥府界』に幽閉したにも拘わらず最後まで私に逆らった『天空界』の忌ま忌ましい小僧か。」

メデューサはピットの姿を見て、思い出したかのように不機嫌そう

な表情を浮かべる。

ピット

「メデューサ、貴女はまた『エンジェランド』全土を征服しようと企んでるのか？」

メデューサ

「フツ、答えるまでもあるまい……私をこんな醜い姿に変えたパルテナを戒める<sup>いまし</sup>為にもな。」

ピット

「それは、貴女が人間達に対してあまりにも酷い仕打ちをしたからじゃないか!!」

メデューサ

「黙れ！私は人間が憎いのじゃ……自分勝手にエゴの塊みたいな愚かで汚らわしい貧弱な存在の人間にな!!」

ネギ

「違います！人間は貴女の言う愚かな存在なんかじゃありません！」

メデューサ

「何っ!？」

明日菜

「ネギ……………」

メデューサを含む全員がネギの発言に耳を傾ける。

ネギ

「確かに、人間には貴女が言うような人達がいるかもしれない……でも、人間の中には困った事や悩んだ事があつたら、お互い助け合つたり励まし合つたりして生きています!!」

メデューサ

「フン、そんな綺麗事を……………人間は自分の事しか考えない醜い存在に過ぎんわ!!」

ネギ

「そんな事ありません!人間には相手を思いやる心で支え合っています……………そんな人間の素晴らしい部分を全く理解しようとするな貴女の心の方が一番醜いです!!」

メデューサ

「なっ!?!」

メデューサはネギの発言に思わず耳を疑った。

メデューサ

「こ、小僧……見た目だけでなく、中身の醜いだと……許さん！私を侮辱した罪は万死ばんじに値するぞ……！」

ピット

「みんな！来るよ……！」

ピットの言葉を合図に、ネギ達はそれぞれの武器を取り出して身構える。

メデューサ

「タナトス達よ！この愚かな反逆者共を一欠ひたかけらの骨も残らずに喰らってしまえ……！」

タナトス達

「シャー……ッ……！」

次の瞬間、タナトスと呼ばれたメデューサの頭の蛇達がネギ達に向かって一斉に飛び出していく。

明日菜



「あ、頭の蛇がいつぱい飛び出して来た!？」

木乃香

「せつちゃん、ウチ怖いわぁ……………」

刹那

「大丈夫です、木乃香お嬢様は私が命に代えてでもお守り致します  
!」

木乃香

「せつちゃん……………」

ナナ

「……………」

ナナは木乃香と刹那のやり取りを見て、羨ましそうな表情を浮かべる。

ナナ

「……………ねえポポ。」

ポポ

「え?何?」

ナナ

「私、怖いわ……………」

ポポ

「えっ!?!ここ、怖いって……………急にどうしたの?熱でもあるの?」

そう言うと、ポポは驚いたような表情を浮かべながらナナの額に手を当てる。

ナナ

「もお!そんなんじゃないもん!」

ポポ

「な、何で怒るの?」

ポポは頬を膨らませながら怒ってしまったナナを見て思わず首を傾げてしまう。

ロボット

「皆サン、才喋リシテル場合デハアリマセンヨ!」

ビーーーーーッ！！

タナトス

「ギャーーーーッ！！」

次の瞬間、ロボットがビームを放射して、一匹のタナトスを撃破する。

ポポ

「おっと！そうだった………ナナ！行くよ！！」

ナナ

「うん！！」

ポポ&ナナ

「トルネードハンマー！！」

ドガガガガガッ！！

タナトス達

「ギエーーーーッ！！」

ポポとナナはハンマーを持ったまま高速回転しながらタナトス達を吹っ飛ばしていく。

ピッ！ピッ！ピッ！

ゲーム&ウォッチはフライパンを振り上げながら食材を投げ飛ばしてタナトス達にダメージを与える。

明日菜

「コレでも喰らいなさーいーい！！」

バツシーーーーーン！！

タナトス達

「ギャアアーーーーッ！！！」

刹那

「神鳴流奥義・斬蛇剣！！！」

ズツシャーーーーーッ！！

タナトス達

「ギーーーーーッ！！」

明日菜と刹那の剣技がタナトス達を次々と切り刻んでいく。

メデューサ

「ハハハハ！無駄じゃ！タナトスは幾らでも無限に出て来るからな  
！！」

メデューサの言う通り、メデューサの頭からタナトスが次々と出て来る。

ピット

「これはかなり厄介だな………よし！援軍を呼ぼう！！」

ピュッッ！！

すると、ピットが真上に向けて光の矢を射る。

メデューサ

「馬鹿め！何処を狙っておる！？」

ピッピ

「これでいいんだ！数分後にはイカロス達が一斉に此処へやって来るー！！」

メデューサ

「フツ、笑止！あんな役にも立たぬ連中が来たところで何も変わらんわー！！」

ネギ

「そんな事、やってみなきゃ分からないじゃないですかー！！」

メデューサ

「黙れ黙れ！まずは先程から喧やかましい貴様から始末してくれるわー！！」

ビーーーーーーッ！！

次の瞬間、メデューサがネギに向けて目から銀色の光線を放つ。

ピット

「ネギ君！危ないー！！」

ネギ

「！？」

シュンー！

ネギは瞬動でメデューサが放った光線を間一髪避ける。

ネギ

「危なかった……………」

ピット

「気をつけて！メデューサの目から放つ光線を浴びたら石になってしまうから……………」

ネギ

「それじゃ、ゲーム&ウォッチさんの世界の住人達はあの光線を浴びて……………」

メデューサ

「そう言えば、確かにその連中を石にした記憶があるぞ……………あま  
りにもピコピコと煩くて耳障りだったからな。」

ネギ

「なっ……………」

ピット

「……………何だつて？」

ネギとピットはメデューサの冷酷な言葉を聞いて表情が険しくなる。

メデューサ

「何じゃ？その反抗的な目付きは……………気に入らん！貴様らも石に変えてくれようぞ…！」

ビー—————ッ…！

メデューサは再びネギとピットに向けて光線を放つ。

ピット

「それっ…！」

すると、ピットが鏡の盾を取り出してメデューサが放った光線を跳ね返してしまふ。

メデューサ

「な、何と…？」



メデューサは予想外の出来事に驚きながらもピットが跳ね返した光線を間髪避ける。

メデューサ

「うぬぬ、まさか私の攻撃を跳ね返すとは……………もはや泣いて喚いても絶対に許さんぞ!!」

ピット

「望むところだ!!」

バツサアーーーーッ!!

ピットは大きく羽根を広げながら、メデューサに向かって勢い良く飛び出していく。

ネギ

「ピットさん！僕も一緒に行きます!!」

ブワアーーーーッ!!

更にネギも杖に跨がってピットの後が続くかのように飛び出していく。

メデューサ

「何処からでも掛かって来るがよい！私の可愛いタナトス達の餌食にしてくれようぞ！！」

タナトス達

「シャーーーーーッ！！」

メデューサの頭からタナトス達がネギ達に襲い掛かるように一斉に飛び出していく。

ピット

「エンジェリング！！」

ギユイーーーーン！！

タナトス達

「ギエーーーーッ！！」

ピットは双剣を回転させながらタナトス達を切り刻んでいく。

ネギ

「魔法の射手 連弾・雷の十七矢！！」

ドオーーーーーーッ！！

タナトス達

「ガアーーーーッ！！」

更にネギの放った雷魔法がタナトス達を真っ黒焦げにしていく。

メデューサ

（フッフ、せいぜい力尽きるまで闘っているがよい……………疲労で動きを完全に止めた瞬間が貴様らの最後だ！）

そう思いながら、メデューサは次々と飛び出してくるタナトス達を倒し続けていくネギ達を見つめながら怪しい笑みを浮かべる。

ピット

「ハアハアッ……………こ、これじゃキリが無い……………」

ピットが少し息を荒くしながら動きを止めた瞬間……………。

メデューサ

（……………今だ！！）

ビーーーーーッ!!

メデューサはピットに向けて光線を放つ。

ピット

「ハッ!?し、しまった……………」

ピットが気付いた時には光線は既に目の前まで迫って来ていた。

ネギ

「ピットさん!危ない!!」

シュン!!

ピット

「!?!」

次の瞬間、ネギが瞬動でピットの前に現れて光線を浴びてしまいネギはたちまち石化してしまう。

ピット

「ネ、ネギ君!」

ヒューーーーーッ!!

すると、石化したネギがそのまま下へ落下していく。

メデューサ

「フン、愚かな小僧じゃ……………他人を助ける為に自らを犠牲にするとはな……………」

ピット

「……………ネギ君は愚かなんかじゃない!一番愚かなのは卑怯な真似をした貴女の方だ!」

メデューサ

「ま、またしても無礼な口振りを……………タナトス達よ!この生意気な天使を喰らってしまえ!」

タナトス達

「シャーーーーーッ!!」

メデューサの言葉を合図に、複数のタナトス達がピットに向かって

一斉に襲い掛かってくが……。

グサッ!!

タナトス達

「ギャーーーーッ!!」

すると、ピットに襲い掛かって来たタナトス達の額に小さな弓矢が突き刺さる。

ピット

「い、今の攻撃は……まさか……。」

?

「ピット隊長!!」

ピットは声が出した方を向いてみると、沢山のイカロス達が小さな弓を構えながら、こちらに向かって飛行していた。

ピット

「み、みんな!!」

イカロスA

「隊長！遅くなってしまい申し訳ありませんでした！！」

ピット

「いや、来てくれ助かったよ………みんな！すぐに突撃の準備だ！！」

イカロス達

「了解！！」

イカロス達はピットの言葉を合図に、突撃の準備を始める。

メデューサ

「ええい！弱者が何匹集まっても無駄だと言っのに………行け！タナトス達よ！！」

タナトス達

「シャー……ッ！！」

ピット

「今だ！全軍突撃！！」

イカロス達

「おおーっ！っ！！」

タナトス達が一斉に飛び出したと同時に、ピットの掛け声を合図にイカロス達もタナトスに向かって勢い良く突っ込んでいく。

メデューサ

「……………さて、私はあの生意気な天使の小僧を始末するか……………」

そう言っつて、メデューサはピットに向かって歩み寄ろうとするが……………。

パシィーっ！っ！！

メデューサ

「！？」

突然、メデューサの足元から巨大な魔法陣が現れて、メデューサの体中が拘束魔法によって動きを封じ込まれてしまう。

メデューサ

「な、何じゃコレは！？体が動かない……………」



ネギ

「捕縛結界で貴女の動きを封じ込めたんです！」

ピット&メデューサ

「!?!」

ピットとメデューサはネギの声に反応して下の方を向いてみると、そこには石化したハズのネギが立っていた。

ピット

「ネ、ネギ君!?!」

メデューサ

「な、何故じゃ……………石化したハズなのに……………」

ネギ

「木乃香さんの能力のお蔭で石化から回復出来たんですよ……………それよりピットさん!今の内に攻撃して下さい!」

ピット

「わ、分かった!」

そう言いつつ、ピットはメデューサの目に向けてパルテナの神弓を構



そう言い残すと、メデューサはゆっくりと消滅していく。

ピット

「……………か、勝った。」

イカロスA

「やったー！ピット隊長がメデューサを倒したぞー！！！」

イカロス達

「うおー！！！！！！」

イカロス達はピットの勝利に思わず大きな歓声を上げる。

明日菜

「……………ふっつ、何とか片付いたわね。」

ネギ

「あー皆さん……………どつやら全員く無事みたいですね。」

刹那

「はい、あの蛇は私達が一匹残らず始末しました。」

ポポ

「僕、もう疲れちゃったよ……………」

ナナ

「わ、私も……………」

ピピピッ！

ゲーム&ウォッチもポポとナナの意見に合わせてるように疲れたような感じで地面にへたれ込んでしまう。

ロボット

「マア、何ハトモアレ勝ッテ良カッタデスネ。」

ネギ

「それもこれも、木乃香さんが石化した僕を治してくれたお蔭ですよ。」

木乃香

「そんな、ウチはただ……………」

木乃香はネギの言葉に思わず照れてしまう。

のどか

「……………あ！そうだ！！」

突然、のどかが何かを思い付いたように大声を上げる。

ネギ

「ビ、ビックリした……………急にどうしたんですか？」

のどか

「今思っただんですけど……………木乃香さんの能力だったら、石化したゲーム&ウオッチさんの世界の人達や茄子になったカモさんを戻せるんじゃないでしょうか？」

のどか以外全員

「……………あ。」

のどかの発言に全員が目を丸くしてしまふ。

明日菜

「……………そ、そう言われてみればそうね……………」

刹那

「た、確かに……………」

木乃香

「何でその場で気付かなかったんやろ……………」

ネギ

「と、とにかく！まずは茄子になったカモ君を元の姿に戻して下さい。」

木乃香

「そ、そやね……………アデアッ……………」

ガシッ！！

ピッ！ピッ！ピッ！

木乃香

「……………あ、あれ？」

木乃香が『ハエノスエヒロ』を呼び出そうとした時、ゲーム&ウオッチが木乃香の手を掴んだまま何処かへ駆け出していく。

明日菜

「ちよ、ちよつと！木乃香を連れて何処へ行くの！？」

ポポ

「もしかして、石にされた人達を治す為に連れてっちゃんじゃ…  
…。」

ナナ

「きつとそつよー！」

ネギ

「そ、そんな……………ちよつと待って下さ〜い！」

ネギ達はゲーム&ウォッチを引き止めようと慌てて追い掛けていく。

数分後、木乃香の能力で石化したゲーム&ウオッチの世界の住人達や茄子になったカモを無事に治して、ネギ達は『天空の神殿』にやって来てパルテナに今までの経緯を説明していた。

ピット

「……という訳で、みんなのお蔭でメデューサを倒す事が出来ました。」

パルテナ

「そうでしたか……皆様には感謝しなければなりませんね。」

ネギ

「い、いえ……僕達は別に……。」

ネギはパルテナの言葉に思わず謙遜してしまう。

カモ

「……それにしても、俺っちが茄子になってたなんてまだ信じられねえよな……。」

明日菜

「信じられなくても、アンタが茄子にされたってのは事実なの。」



カモ

「うーん、そう言われてもなあ……………」。

カモは複雑そうな表情を浮かべながら首を傾げる。

ピット

「ところで、パルテナ様にお問い合わせがあるのですが……………」。

パルテナ

「何ですか？」

ピット

「ポポ達の世界が亜空間に引きずり込まれてしまったようなんです……………」  
「そこで、しばらくの間だけでもポポ達の世界の住人達を『天空界』に住わせて頂きたいのです！」

ロボット

「私達カラモ才願イシマス！」

ポポ&ナナ

「お願いします！！」

ピットピット……

ゲーム&ウォッチもピット達の後から深く頭を下げながら懇願する。

パルテナ

「……………取り合えず、頭を上げなさい。」

ピット

「は、はい……………」

ピット達は頭をゆっくりと上げる。

パルテナ

「ピット、貴方は本当に仲間思いですね……………私はつくづく感服しました……………それから、私が断るとでも思っていたのですか？」

ピット

「い、いえ！そういう訳では……………」

ロボット

「ソ、ソレデハ……………」

パルテナ

「ええ、私は快く貴方達を迎え入れましょう。」

ポポ&ナナ

「わーい！やったー！！」

ピッ！ピッ！ピッ！

ポポとナナとゲーム&ウォッチはパルテナの言葉に思わず喜びながら飛び跳ねてしまう。

ピッ

「あ、ありがとうございます……！」

ロボット

「コレデへくたー博士トベくたー博士モ安心出来マスネ……。」

ナナ

「それと、トッピーやホワイトベア達もね！」

ポポ

「本当にありがとう……おぼさん……！」

パルテナ

(お、おば……………!?)

ピット

「ポ、ポポ！パルテナ様に失礼だよ！！」

ピットはパルテナをおばさん呼ばわりしたポポに対して怒り出す。

ピット

「ほ、本当に申し訳ありません！！」

パルテナ

「い、いえ……………大丈夫です……………」。

カモ

(……………あゝあ、ありゃかなり気にしてるな。)

ネギ

(アハハハ……………)。

ネギ一行はかなりショックを受けてるパルテナを見て、思わず苦笑いしてしまう。

明日菜

「……………ネギ、私達もそろそろ帰ろっか。」

ネギ

「そうですね、マスターハンドさんが心配しますし……………」。

そう言っつて、ネギ達は立ち去ろうとするが……………。

ピット

「あ！ちょっと待って。」

ネギ

「え？」

ネギ一行はピットに呼び止められて、その場で立ち止まる。

ピット

「マスターハンドさんに会ったら、僕達の代わりにポポ達の世界を何とかしてつて頼んでくれないかな……………多分、あの人だったら何とか出来るかもしれないから……………」。

ネギ

「成程………分かりました！必ず伝えます！！」

ピット

「ありがとう………それじゃ、これからも気をつけてね！」

ポポ&ナナ

「また会おうね〜！！」

ロボット

「私達八皆サンノ旅ノ無事ヲ祈ツテマス！」

ピピピピピッ……！！

ピット達はその場から立ち去っていくネギ一行を手を振りながら暖かく見送って行くのであった………。

第八十三話、人間を憎む闇の女神（後書き）

こうして、ネギー行は次の世界へと突き進んでいくのであった……

因みに、次回は『ピクミン』編なのでお楽しみに！

第八十四話、不思議な生物に変化！？（前書き）

ネギー行はピットの世界から館に帰って来るのだが……。



## 第八十四話 不思議な生物に変化！？

（大乱闘の館）

ネギー一行はピットの世界から館へと帰って来た。

ネギ

「只今帰りました！」

マスターハンド

「おお！帰ったか……………それで、彼らの安否は？」

ネギ

「安心して下さい、皆さんは無事でしたよ。」

マスターハンド

「そうか、それを聞いて安心した……………」

そう言うと、マスターハンドは軽く溜め息を付きながら一安心する。

ネギ

「それから、ピットさんから伝言なんですけど……………亜空間に飲み

込まれたポポ君達の世界を何とかしてほしいとの事です。」

マスターハンド

「うむ、私も出来れば一刻も早く彼らの世界を復元してあげたいのだが……この館に閉じ込められた今の状態では満足に力を発揮させる事が出来ないのだ。」

カモ

「あゝ、そう言えば前にそのような事を言ってたなあ……。」

マスターハンド

「でも、力を取り戻す事が出来たらすぐにも彼らの世界を復元してみせよう。」

ネギ

「そうですか……僕達からもお願いします！」

そう言うと、ネギ一行はマスターハンドに向かって深く頭を下げる。

マスターハンド

「……それより、今日はゆっくり休むといい。」

明日菜

「はい、そうします！今回も色々あったから疲れちゃった……。」

木乃香

「そやな、ウチも石にされた人達を治療するのにいっぱい力を使<sup>こ</sup>ったからメツチャ疲れてもうたわぁ……。」

刹那

「では、すぐに部屋でお休みになりましょう。」

マスターハンド

「ああ、そうした方がいい……疲れが完全に取れるまで休んでいなさい。」

のどか

「は、はい……それでは、失礼します……。」

ネギー一行は各自の部屋へと戻っていく。

〈数日後〉

早朝、ネギ一行はいつものように中庭に集合していた。

ネギ

「皆さん、出発の準備は整いましたか？」

明日菜

「ええ、バッチリよ！」

木乃香

「いつでもOKやえ。」

ネギ

「僕達が行く世界は残り三つだけですが、どんな事件が起こるか分かりませんので決して油断をなさらないで下さいね！」

刹那

「はい！分かりました！」

マスターハンド

「それでは、今回君達に行ってもらおう世界についてだが……………」。

そう言い掛けると、マスターハンドは何かを捜すかのように辺りを見回す。

のどか

「あの、どうかしました？」

マスターハンド

「いや、何でもない……………えっと、花の形をしたバッチをキャプテン・オリマーという者に渡してほしい。」

ネギ

「分かりました！では、早速行って来ま……………」。

カモ

「あ、兄貴！！」

ネギ

「ど、どうしたのかモ君？」

カモ

「あ、あれ……………」。

明日菜

「あれって何よ？」

ネギー行は驚いたような表情を浮かべるカモの指差す先を見ていると……。

？

「……………おはよう。」

リリー

「おっは〜！みんな、朝早いね〜。」

がばね

「リリー、その挨拶は古いぞ……………」。

ワイプ土管の前には、黒コートの人物とリリー&がばねが立ち塞がっていた。

ネギ

「あ、貴方達は！？」

ネギー一行は黒コートの人物達の姿を見て驚愕する。

明日菜

「な、何でアンタ達がこんな所に……………」

リリー

「そんな事より、これから新しい世界に行くんでしょ？」

剎那

「な、何故それを……………まさか、私達の妨害をするつもりか!？」

がばね

「とんでもねえ……………今回は俺達が、これからお前らが行くところと  
てる世界に連れてってやろうと思ってな……………」

のどか

「ど、どついう意味ですか？」

？

「言葉通りの意味だ……………だが、ただ普通に連れてくのも味気無あじけなしい  
な……………」

パチッ!

ブワァー……ッ!!

全員

「!?!」

黒コートの人物が指を鳴らした瞬間、ネギー一行の目の前に大きくて真っ黒な穴が現れる。

木乃香

「こ、この穴って……。」

明日菜

「確か、ポケモンの世界であの黒コートの奴が出した……。」

ネギ

「ま、まさか……。」

?

「では、次の世界へ行くがいい……。」

リリー



「バイバイ」

ゴォー……ッ!!

全員

「うわぁ……っ!!」

次の瞬間、ネギ一行は黒コートの人物が出現させた真っ黒な穴に吸い込まれてしまう。

マスターハンド

「……………」。

？

「……………何か？」

マスターハンドの視線に気付いた黒コートの人物は、何事も無かったかのようにマスターハンドの方を振り向くのであった……………。

く???.???)

ネギ

(ん……ん……ぼ、僕は一体……。)

ネギは目を開けると、辺りが真っ暗で何も見えなかった。

ネギ

(そうだ！僕達は確か、あの黒コートの人が出した穴に吸い込まれて……ところで、此处は何処？それに、明日菜さん達は……。)

ネギは真っ暗な中で体を動かそうとするが、まるで金縛りに掛かったかのように動けなかった。

ネギ

(か、体が動かない………一体僕はどっしっちゃったんだろう……。)

ネギがこの状況に困惑していると……。

ガシッ！！

ネギ

(！？)

突然、ネギの頭部から何かに掴まれてるような感覚が全身に伝わる。

ネギ

(な、何？誰かが僕の頭を掴んでるような……………。)

ギユ……………ッ！！

ネギ

(い、痛い！今度は誰かが僕の頭を引っ張ってる……………。)

ネギは何物かに頭部を引っ張られてるような痛みに顔を歪めてしま  
う。

ギユギユ……………ッ！！

ネギ

(痛たたたた！頭が引き千切れそうだ……………。)

ネギの頭部はどんどん何物かに強く引っ張られていき……………。

スポンツ！！

ネギ

「わあっ!？」

次の瞬間、ネギはまるで地面から引っっこ抜かれた野菜のような感じで地面から勢い良く出て来る。

？

「ふっつ、やっと引っっこ抜けたよ……………」

ネギ

(……………え?)

ネギが何物かの声に反応してゆっくりと目を開けてみると、宇宙服のような物を着込んでアンテナのような先端を付けたヘルメットを被った頭部に二本だけの茶色い毛髪を生やした大きな丸い鼻の人物がネギの視線に入る。

？

「……さてと、残りのピクミンも全て引っこ抜くとするか！」

そう言うと、謎の人物はネギの頭部を離して何処かへ歩み出そうとする。

ネギ

「……あ、あの！ちょっと待って下さい！！」

？

「……………え？」

謎の人物はネギに呼び止められてネギの方へと振り向く。

？

「可笑しいなあ……………さっき誰かに呼ばれた気がしたんだが……………」

「

謎の人物はネギの方を見ずに、不思議そうに辺りを見回す。

ネギ

「此処です！此処を見て下さい！！」

？  
「え？此処って……………んなっ！？」

謎の人物はネギの方を見て、目を見開いて腰を抜かしながら驚愕する。

？  
「ま、まさか……………ピクミンが喋れるなんて……………」。

ネギ  
「ピ、ピクミン？」

ネギは謎の人物が何を言ってるのか理解出来ず、思わず首を傾げる。

ネギ  
「し、失礼ですが……………ピクミンと一体何の事でしょうか？」

？  
「な、何って……………ピクミンとは自分の事じゃないか……………」。

ネギ  
「いえ、だから、ピクミンというのは一体……………えっ！？」

ネギはふと近くの地面に突き刺さった巨大なガラスの破片を見てみると、ガラスには全身が真っ赤で頭には小さな葉っぱを生やした小柄な生物の姿が写し出されていた。

ネギ

「ま、まさかコレが……僕の姿……嘘だぁー……」

ネギは変化した自分に思わず叫び声に似た大声を上げてしまう。

？

（変なピクミンだなあ……取り合えず、残りのピクミンを引っこ抜くか……）

そんな事を思いながら、謎の人物は地面に生えてる四本の真っ赤な付け根の葉っぱを地面から抜こうとする。

ネギ

（……どうしてこんな姿に……まさか、あの黒コートの人が……）

ネギは未だに自分の変わり果てた姿を眺めながら唾然としている。

スポンツ!!

?

「痛っ!!」

ネギ

「!?!」

ネギは何か引っこ抜かれた音と聞き慣れた少女の声に反応して振り向いてみると……………。

明日菜?

「ちよっと!いきなり髪の毛を引っ張るなんてどういつつもりなの!?!」

?

「い、いや……………というか、またピクミンが喋ってるし……………。」

謎の人物が先程引っこ抜いたネギと同じ姿のピクミンと呼ばれてる生物が凄まじい迫力で謎の人物に詰め寄っていた。



ネギ

(まさか、その喋り方と声は……明日菜さん?)

そう思いながら、ネギは明日菜らしきピクミンに近付いていく。

ネギ

「あ、あの……明日菜さん?」

明日菜?

「えっ?……っ、うひゃっ!?!?」

ネギの呼び掛けに反応した明日菜らしきピクミンは、ネギの姿を見て腰を抜かしながら驚愕する。

ネギ

「や、やっぱり……やっぱり明日菜さんですね!?!?」

明日菜

「ちょ、ちょっと待って……何で見ず知らずの生き物が私の名前を知ってるのよ!?!?」

ネギ

「僕ですよ!ネギ・スプリングフィールドですよ!」

明日菜

「ネ、ネギ!？」

何故かピクミンの姿となった明日菜は、同じくピクミンの姿へと変化していたネギの言葉に耳を疑った。

明日菜

「そ、そんなまさか……………ど、どうしてそんな姿に……………」

ネギ

「そう言う明日菜さんこそ……………」

そう言うと、ネギは先程自分の姿を確認したガラスの破片を指差す。

明日菜

「……………嫌あーっ!?!何これえー!?!?!」

明日菜はガラスに写し出された自分の変わり果てた姿に叫び声に似た(ネギよりもかなり大きい)大声を上げる。

?

(い、一体何々だ？このピクミン達は……。)

謎の人物はネギと明日菜の様子を見て啞然とする。

明日菜

「な、何でこんな姿に……。これじゃ、ポケモンの世界の時に変化したあの姿の方がまだマシだったわ……。」

明日菜は未だに変わり果てた自分の姿を見つめながら涙を流している。

ネギ

「明日菜さん、お気持ちは分かりますが……。木乃香さん達も僕達のような姿に変わってるかもしれないので、まずは木乃香さん達を捜しましょうよ。」

明日菜

「そ、それもそうね……。急いで木乃香達を捜しましょ！」

そう言っつて、明日菜が涙を拭いた時……。

スポンッ!!

？

「痛い！！」

スポンツ！！

？

「うわっ！？」

スポンツ！！

？

「あうっ！？」

ネギ&明日菜

「！？」

ネギと明日菜が聞き慣れた声に反応して振り向いてみると、謎の人物が連続で黄色のピクミン一匹と青色のピクミン二匹を地面から引っっこ抜いていた。

木乃香？

「あたたた……いきなり髪の毛を引っ張るなんて酷いわぁ……」。

「  
木乃香と同じ声と喋り方をする青色のピクミンは両手で頭を押さえながら泣き出しそんな表情を浮かべる。」

刹那？

「い、一体何がどうなってるんだ？」

刹那と同じ声と喋り方をする黄色のピクミンは警戒しながら辺りを見回す。

のどか

「……………ネ、ネギ先生や明日菜さん達は何処？」

のどかと同じ声と喋り方をする青色のピクミンはオロオロしながら辺りを見回す。

明日菜

「ネ、ネギ……………アレってもしかして……………」

ネギ

「はい、木乃香さんと刹那さんとのどかさんに間違いありません。」

明日菜

「やっぱりね……………そうと分かれば、早速木乃香達に訳を話さなきゃ……………」

そう言うと、ネギと明日菜は木乃香達の方へと駆け寄って今の状況を説明していく。

～数分後～

のどか

「……………こ、これが私……………ですか？」

木乃香

「わあ、ウチら全員ピクミンになつとる！」

刹那

(……………私はともかく、あの可憐で美しい木乃香お嬢様があのよう

なお姿に……………」

のどかと刹那はガラスで写し出された自分（と親友）の変わり果てた姿を見てショックを受けるが、逆に木乃香は大喜びしながら飛び跳ねていた。

ネギ

「……………」ようやく理解してくれましたね。」

明日菜

「そうね、木乃香達が今の状況を完全に理解してくれるまで結構時間が掛かったもんね……………」

ネギと明日菜は木乃香達が现阶段の状況を把握してくれて一安心する。

木乃香

「……………」ところで、カモ君は何処におるん？」

ネギ

「え？そう言えば……………」おい！カモくん！！」

ネギは大声でカモを呼び掛けながら辺りを見回す。

？  
「あの、お取り込み中申し訳ないんだが……。」

明日菜

「ん？」

明日菜は声を掛けられて振り向いてみると、そこには先程ネギ達を引っこ抜いた謎の人物が不思議そうな表情で立ち尽くしていた。

？

「君達は一体何物なんだい？ピクミンにしては実に人間らしい行動や喋り方をしてるし……。」

明日菜

「あ、いや、私達はそのお……。」

木乃香

「ウチら、オリマーさんって人を捜してるんやけど……ご存知ありません？」

？

「え？いや、知ってるも何も……私がオリマーだけど……。」



ネギ以外全員

「……………ええっ!？」

明日菜達は自らオリマーと名乗る人物の発言に思わず耳を疑った。

明日菜

「……………ほ、本当に？」

オリマー

「あ、ああ……………はい、コレが名刺……………」

そう言つと、オリマーは明日菜達に名刺を渡す。

明日菜

「え〜つと、何々……………『ホコタテ星ホコタテ運送社員キャプテン・オリマー』ですって?」

刹那

「どつちやら、間違いなく本人のようですね。」

ネギ

「はっつ、カモ君が何処にも居なかった……。」

明日菜達が名刺を読み上げると、ネギが深い溜め息を付きながら明日菜達の方へと近寄ってくる。

木乃香

「あ、ネギ君！オリマーはんを見つけたえ。」

ネギ

「あゝ、そうですか……えっ！？本当ですか？」

のどか

「は、はい……この人です。」

そう言つと、のどかはオリマーに向けて指差す。

ネギ

「あ、貴方がオリマーさんですか……僕達はですね……。」

ネギはオリマーに今までの経緯や自分達がピクミンという生物の姿になってしまった事等を全て説明する。

ネギ

「……………という訳なんです。」

オリマー

「ちょ、ちょっと待ってくれ……………君達が僕達の為にバツチを渡し  
ているというのは大体理解出来たけど……………君達が人の姿からピク  
ミンになってしまったというのはどうも理解しがたいのだが……………」

ネギ

「それについては僕達も困惑しています……………それから、コレが先  
程お話したバツチです。」

そう言うと、ネギはオリマーにバツチを手渡す。

オリマー

「あ、ありがとう……………それにしても、どうしてピクミンの姿なん  
かに……………」

明日菜

「決まってるわ！きっとあの黒コートの奴らの仕業よ……………今度会  
ったらタダじゃおかないんだから！！」

刹那

「明日菜さん、お気持ちは分かりますが……少し落ち着いて下さい。」

木乃香

「そうそう、ウチは寧ろピクミンになれて嬉しいわぁ。」

ネギ

（アハハハ、木乃香さんは相変わらずだなぁ……………。）

ネギは木乃香の呑気な発言に苦笑いしてしまう。

のどか

「それより、これからどうしましょうか？」

ネギ

「勿論、カモ君を捜し出さないと……………」。

木乃香

「そやな、カモ君もピクミンになってしもつたんかなぁ……………」。

明日菜

「とにかく、エロガモを捜しに行きましょう！」

そう言って、ネギー行はその場から駆け出そうとするが……………。

オリマー

「ちょ、ちよつと待った！」

突然、オリマーが慌ててネギー行を制止させる。

ネギ

「何でしょうか？」

オリマー

「その姿で歩き回るのは危険過ぎるよ……………この辺りには原生生物達が生息しているしね。」

刹那

「原生生物？」

ネギー行はオリマーの言葉に耳を傾ける。

オリマー

「簡単に説明すると、ピクミンを食べてしまう巨大な生物達の事さ……………だから、今の君達だけでこの辺りを歩き回るのはあまりにも危

「険なんだ。」

明日菜

「ご心配なく！私達には不思議な力があるから……アデアット！」

シ〜〜ン……

明日菜は咄嗟に『ハマノツルギ』を呼び出そうとするが何も出て来ない。

明日菜

「……………あ、あれ？」

のどか

「何も出て来ませんね……………」

明日菜

「そ、そんな馬鹿な……………アデアット……！」

シ〜〜ン……

明日菜はもう一度『ハマノツルギ』を呼び出そうとするが、やはり何も出て来ない。

明日菜

「う、嘘でしょ……『ハマノツルギ』が出て来ない……。」「

木乃香

「ほ、ほならウチらも……アデアット……！」

のどか

「ア、アデアット……！」

シ~~~~ン……

木乃香とのどかもそれぞれのアーティファクトを呼び出そうとするが、それでも何も出て来なかった。

のどか

「や、やっぱり何も出て来ない……。」「

木乃香

「何でやる？不思議やなあ……。」「

明日菜

「そんな他人事みたいに言わないでよ！」

木乃香の他人事のような言葉に明日菜が思わずツッコミを入れる。

ネギ

「……………あれ？ところで刹那さん、刀はどうしたんですか？」

刹那

「えっ？そ、そう言えば……………な、無い！？」

刹那はネギの言葉に自分が夕凧を所持していない事に気付く。

明日菜

「ネギ、そう言うアンタこそ杖はどうしたのよ？」

ネギ

「え！？ま、まさか……………。」

ネギは慌てて杖を捜そうと辺りを見回すが……………。



ネギ

「無い！お父さんから授かった大事な杖が無うい！！」

そう言うと、ネギは肩の力をガツクリと落としながら落ち込んでしまふ。

のどか

「ネ、ネギ先生……………元気出して下さい。」

木乃香

「そ、そやで……………ところでネギ君、魔法は使えるん？」

ネギ

「え？は、はい、やってみます……………ラス・テル マ・スキル マギステル……………光の精霊十一柱 集い来たりて敵を射て……………魔法の射手！！」

シ〜〜〜〜ン……………

ネギが魔法の矢を放つ呪文を唱えるが、全くと言っていい程何も起こらなかった。

ネギ

(ま、魔法が……使えない……?)

刹那

「や、やはり……。」

明日菜

「どうすんのよー！魔法やアーティファクトが使えないなんて、かなりヤバいんじゃない!？」

のどか

「こ、これからどうすればいいんでしょうか?」

木乃香

「と、とにかく今は落ち着かんと……。」

ネギー一行は今までに無い危機的状況にパニック状態になってしまつ。

ピピィー……ッ!!

ネギー一行

「!?!」

オリマーが笛を吹いた瞬間、ネギー一行はオリマーの前に整列する。

ネギ

(……………あ、あれ?)

明日菜

(可らしいわね……………あの笛を聞いた瞬間、体が勝手に動いたよう  
な……………) )

ネギー一行は自分達の行動に腑ふに落ちないのか、思わず首を傾げてしまっ  
まう。

オリマー

「君達、何があったのか私にはよく分からないが……………とにかく、  
今は落ち着いて話し合おう!」

刹那

「……………確かに、オリマーさんの言う通りですね。」

明日菜

「そうね、慌ててたって何も始まらないものね……………」

オリマーの励ましの言葉に、ネギー一行は少しだけ冷静さを取り戻す。

ネギ

「オリマーさん、僕達を落ち着かせてくれてありがとうございます。」

オリマー

「いや、私は別に……それに、私も前に宇宙船が惑星に不時着した時はパニック状態になったから、君達の気持ちは嫌という程分かるよ。」

木乃香

「え？何の話なん？」

オリマー

「うむ、話せば長くなるが……。」

？

「オリマー先輩〜！」

オリマーがネギ一行に自らの体験談を語ろうとしたが、遠くからオリマーと同じ宇宙服を着込んだ縦長の顔の人物が駆け寄ってくる。

のどか

「あの人は？」

オリマー

「ああ、彼は私と同じ運送会社に勤務している後輩のルーイ君だよ。」

オリマーはルーイという名前の人物に聞こえないように小声でのどかの質問に答える。

ルーイ

「先輩、こんな所で何やってるんスか？」

オリマー

「い、いや別に……それより、何か用かい？」

ルーイ

「はい、さっき社長が呼んでましたけど……。」

オリマー

「社長が？……分かった、今行くから先に行っててくれ。」

ルーイ

「分かりました。」

そう言うと、ルイーは何処かへと駆け出していく。

オリマー

「さて、ちよっくら行って来るか……………」。

ネギ

「あ、あの……………僕達も一緒に行ってもいいですか？」

オリマー

「ああ、構わないけど……………社長の前では絶対に喋らないようにね。」

木乃香

「どして？」

オリマー

「何せ、今の君達はピクミンだからね……………もしピクミンが喋ったりしたら、二人共気絶してしまうかもしれないしね。」

刹那

「な、成程……………」。

ネギ

「……………分かりました、その二人の前では絶対に喋りません。」

オリマー

「そうしてくれると助かるよ……………それじゃ、私に付いて来てくれ。」

「

ネギ一行

「はい！」

ネギ一行は一列に並びながらオリマーの後を付いて行くのであった……………。

第八十四話 不思議な生物に変化！？ (後書き)

果たして、ピクミンになってしまったネギー一行の運命は！？



第八十五話く運ぶ・戦う・増える・そして……（前編）く（前書き）

ピクミンに変化してしまったネギー行はオリマーと一緒に社長が居る場所へと向かうが……。

今回の話は今までよりもかなり短いです……。

第八十五話へ運ぶ・戦う・増える・そして……（前編）へ

くとある惑星へ

？

「うむ、オリマー君はまだかのお……………」

緑が豊かな広い場所で、ロケットのような形をした巨大な宇宙船の前でルイーと緑色の宇宙服を着込んで大きな鼻の下に数本の髭を生やした小太りの人物がオリマーを待っていた。

ルイー

「社長、少し落ち着いた方が……………」

社長

「ルイー君！これが落ち着いていられると思っっているのかね!？」

社長と呼ばれた人物は、少しピリピリした面持ちでルイーに注意をする。

社長

「我が『ホコタテ運送』は不況のせいで経営のピンチに陥っており……………そのせいで、スポンサーからも資金提供をストップされてし

まったのじゃ……………」

ルイー

「だからまたこの惑星に来て、再びお宝をいっぱい集めて資金を貯めるって訳ッスね？」

社長

「そういう事じゃ！きつと取り損ねたお宝の数々がまだまだ何処かにあるハズじゃー！」

オリマー

「社長！お待たせしましたー！！！」

社長がルイーに熱く語っていると、オリマーとピクミンになってしまったネギー一行が慌てて駆け寄って来る。

社長

「お！やっと来たか……………オリマー君！一体何をしておったのじゃ！？」

オリマー

「すいません、色々あったもので……………ところで、何かご用でしょうか？」

社長

「おお、そうじゃったのお……………先程も言ったように、ルーイ君と一緒にお宝の探索に向かってほしいのじゃ。」

ネギ

（お、お宝？）

明日菜

（ねえ、今の聞いた！？お宝があるみたいよ！）

木乃香

（そやなあ、どんなお宝があるんやろ？）

ネギー一行はオリマー達に聞こえないように小声で話す。

オリマー

「で、ですが社長……………そのお宝を運ぶのはピクミンですので、今日はピクミンを増やす事に専念した方が宜しいのではないのでしょうか？」

社長

「うむ、それもそうじゃな……………よし！今回はピクミンを増員する事に専念しよう……！」

ルイー

(どっちにしる、面倒な事になりそうだなあ……………。)

そんな事を思いながら、ルイーは不満げな表情を浮かべる。

社長

「それじゃ、最低でもそれぞれ五十匹以上を目安にピクミンを増員させるのじゃぞ！よいな？」

そう言うと、社長は何処かへと駆け出そうとする。

ルイー

「社長？何処へ行くんスか？」

社長

「なぐに、そこら辺にお宝が無いか散歩がてら探索しに行くだけじゃ。」

オリマー

「それでしたら、ピクミンを数匹ぐらい連れて行った方が宜しいのでは……………」

社長

「心配は要らん、あの巨大な生物には絶対に近付かんから安心せい……じゃあ、今日の夕方までにはピクミンを増やしておくんじやぞ！」

そう言い残すと、社長はその場から立ち去っていく。

ルイー

「あゝあ、行っちゃった……………」。

オリマー

「仕方ない、夕方までにピクミンをいっぱい増やすか……………ルイー君、此処はいつものように別々に行動しよう！」

ルイー

「そうツスね、その方がいっぱい増やせそうだし……………それじゃ、お先に失礼します！」

そう言うと、ルイーは宇宙船の方へと歩み寄っていく。

ネギ

「……………あのゝ、オリマーさん……………」。

オリマー

「ん？何だい？」

ネギ

「さっきピクミンを増やすって言ってましたけど……どうやってピクミンを増やすんですか？」

オリマー

「ああ、その事が……まずはアレを見てごらん。」

ネギ一行がオリマーの指差す先を見ると、花の形したプロペラに三つの足が付いた玉葱たまねぎのような形のそれぞれ赤・青・黄色の三つの物体が目に見える。

のどか

「アレは何ですか？」

オリマー

「アレはオニオンといって、それぞれの色の中にその色のピクミンが沢山入ってるんだ。」

明日菜

「へえ、そうなの……それにしても、あの形は玉葱に似てるわね。」

「

ネギ

「そうですね、オニオンという名前も玉葱を英語にただけですし  
……………」

明日菜

「へ？そうなの？」

明日菜以外全員

「……………えっ!？」

明日菜のお馬鹿な発言にネギ達は思わず耳を疑ってしまふ。

明日菜

「……………な、何よ!？知らなかったんだから仕方ないでしょ!」

ネギ

（し、知らなかったからって……………僕の授業でもちゃんと教えたはずなのに……………。）

木乃香



(……………流石は馬鹿レンジャーやな。)

明日菜の言葉に木乃香達は苦笑いを浮かべるが、ネギだけが涙を流していた。

オリマー

「……………そ、それじゃ、試しに赤いオニオンから赤ピクミンを呼び出してみるか……………」

そう言うと、オリマーが真っ赤な光が照らされてる赤いオニオンの真下まで歩き出していく。

オリマー

「え〜っと、どうしようかな……………よし！赤ピクミンは二十四匹でいいや。」

スポポポポポポッ！！

オリマーが言った直後、赤いオニオンを支えてる二つの足の隙間の穴から赤ピクミンが続々と出て来る。

木乃香

「わあ〜！赤ピクミンがいっぱい出て来たわ〜！！！」

刹那

「す、凄い……………一体あの中にピクミンが何匹入ってるのでしょうか？」

のどか

「さ、さあ……………」

木乃香以外のメンバーは啞然とした表情でどンドン出て来るピクミンを見つめる。

オリマー

「よし、全員出て来たな……………ついでに黄ピクミンと青ピクミンも二十匹ずつ出しておくか。」

そう言うと、オリマーは青いオニオンと黄色いオニオンの方へと駆け寄って、先程と同じような行動を行って黄ピクミンと青ピクミンをそれぞれのオニオンから二十匹ずつ出す。

ネギ

「うわぁ、あっという間にピクミンだらけになっちゃいましたね……………」

明日菜

「そ、そうね……………」

そんな事を言いながら、ネギー一行はピクミンの群れに再び啞然としてしまう。

ルイー

「オリマー先輩、お先に失礼します。」

オリマー

「ああ、行ってらっしゃ……………っ!？」

オリマーはルイーが他のピクミンよりも幅があって大きい紫色のピクミンと逆にとても小さくて真っ赤な目をした白いピクミンをそれぞれ三十匹ずつ引き連れている光景を見て思わず目を見開きながら驚愕してしまう。

木乃香

（あっ!?!紫ピクミンと白ピクミンや!）

明日菜

（い、一体何種類いるのよ……………）

ネギ

(あれ？あの人、あのピクミン達を何処から出したんだろう？)

明日菜は興味津々に紫ピクミンと白ピクミンの群れを眺めるが、ネギだけが疑問を持ちながら首を傾げる。

オリマー

「お、おいおい……………紫ピクミンと白ピクミンは貴重なんだから、その二種類のピクミンは出来るだけあまり連れて行かないでほしいな……………」

ルイー

「いいじゃないツスカ、紫ピクミンは普通のピクミンよりも力があるし……………それに、白ピクミンが居れば原生生物なんてイチコロツスよ。」

オリマー

「そ、それはそうだけど……………あまり数を減らさないようにな。」

ルイー

「了解ツス……………それじゃ、行って来ます。」

そう言い残すと、ルイーは複数の紫ピクミンと白ピクミンを引き連れて何処かへ駆け出していく。

オリマー

「やれやれ……………さて、我々も行くとするか。」

ネギ

「あっ！？ちょ、ちょっと待って下さいー！」

ネギー行は慌てて複数のピクミンを引き連れたオリマーの後を追いつけていく。

明日菜

「オリマーさん、こんなに沢山のピクミンを連れて何処に行くの？」

オリマー

「いや、特に行き先は無いけど……………ピクミンをもっといっぱい増やす為に探索してるんだ。」

刹那

「でも、一体どうやって？」

オリマー

「それはね……………あっ！丁度見つけた。」

ネギー一行はオリマーが指差す先を見ると、そこには茎が長く、数字の一と書かれた花のような植物が生えていた。

のどか

「ア、アレは……………お花ですか？」

オリマー

「いや、ちょっと違うな……………アレはペレット草といって、ピクミンを増やす為の固形こけいと言ったところだ。」

ネギー

「言ってる意味がよく分からないのですが……………。」

オリマー

「まあ、そりゃそうだろう……………それじゃ、よく見ててね。」

ポイツ！！

次の瞬間、オリマーがペレット草に向けて一匹の赤ピクミンを投げ付ける。

ドカッ！ドカッ！

すると、オリマーに投げ付けられた赤ピクミンがペレット草の茎に強力な頭突きを繰り返す。

明日菜

「あ、あの子は何やってるの!？」

オリマー

「ペレット草に攻撃をしてるんだ。」

ネギ

「何の為にですか?」

オリマー

「見てれば分かるよ。」

ポトツ!!

赤ピクミンがひたすらペレット草の茎に頭突きをしていると、数字の一と書かれた丸くて真つ赤な固形だけを残して茎が勢い良く地面に引っ込んでいく。

木乃香

「わっ！何か落としてったえ！」

オリマー

「ペレット草がピクミンを増やす元もととなるペレットを落としたんだ。

」

オリマーがネギー行に説明すると、赤ピクミンが赤いペレットを持ち上げたまま何処かへと運んでいく。

ネギ

「あれ？何処かに運んで行っちゃいましたけど……………」

オリマー

「それじゃ、後を付けてみよう。」

ネギー行はオリマーとピクミン達と共にペレットを運んでゆく赤ピクミンを追い掛けていく。

シュー……………ッ！！

スポン！！



赤ピクミンが真っ赤な光が照らされてる赤いオニオンの真下まで足を運ぶと、ペレットがオニオンに吸い寄せられるように吸収される。

明日菜

「な、何？まるで吸い寄せられたように見えただけ……………」。

オリマー

「オニオンがペレットを吸収したんだよ。」

刹那

「きゅ、吸収……………ですか？」

ネギー行がオリマーの説明を聞いて首を傾げていると……………。

ポン！ポン！

オニオンの頂上から二つの赤い種が吹き出され、そのまま地面へと植え付けられていく。

木乃香

「今度は種みたいなものを出したえ！」

オリマー

「オニオンが吸収したペレットの栄養分でピクミンを生み出したんだ。」

のどか

「それじゃ、あの赤い種がピクミンなんですか？」

オリマー

「そついつ事……ほら、そろそろピクミンの頭の部分が生えてくるよ。」

ニユツ！ニユツ！

オリマーの言う通りに、種が植え付けられた地面から赤ピクミンの頭部が二つ生えてくる。

明日菜

「ほ、本当だ！」

オリマー

「さて、早速引っこ抜くいてみるか……………」

スポン！スポン！

オリマーは手慣れた感じで地面から二匹の赤ピクミンを素早く引っこ抜いていく。

ネギ

「成程、こんな感じでピクミンをどんどん増やしていくんですね？」

オリマー

「その通り……………それでは、改めて出発するでしょう！」

そう言うと、オリマーはピクミンの大群とネギ一行を引き連れて走り出していくのであった……………。

第八十五話く運ぶ・戦う・増える・そして……（前編）く（後書き）

果たして、オリマーは夕方までにピクミンを増やせるのか？

第八十六話く運ぶ・戦う・増える・そして……（後編）く（前書き）

ネギー行はオリマーと一緒にピクミンを増やす為に出掛けるのだが……。

第八十六話へ運ぶ・戦う・増える・そして……（後編）へ

くとある惑星へ

ネギー一行はオリマーとピクミンの大群と共に草や花等が生えている道を歩いていった。

ネギー

「……………それにしても、此处は緑が豊かで良い場所ですね。」

オリマー

「ああ……………だが、この惑星の酸素は猛毒が含まれてるから、私達ホコタテ星人は生命維持装置が無いととても生きていけないんだ。」

3405

明日菜

「そうなの？こんなに美しい景色なのに……………」

木乃香

「そやなく、何だか勿体ないわあ……………」

木乃香は辺りを見回しながら深い溜め息を付く。

オリマー

「お！ペレット草を発見したぞ。」

そう言うと、オリマーはそれぞれ青と黄色の二つのペレット草が生えてる場所へ近付いていく。

オリマー

「それっ！それっ！」

ポイツ！ポイツ！

すると、オリマーが青のペレット草に青ピクミンを、黄色のペレット草に黄ピクミンを一匹ずつ投げ付ける。

ボカツ！ボカツ！

ボコツ！ボコツ！

青ピクミンと黄ピクミンがそれぞれのペレット草に頭突きを繰り返していくと……。

ポトツ！ポトツ！

しばらくすると、それぞれのペレットが地面に落下して、二匹のピクミンはそれぞれの該当した色のペレットを持ってオニオンの方まで運び出していく。

刹那

「あのまま放っておいても大丈夫なんですか？」

オリマー

「ああ、後は勝手にやってくれるからね。」

のどか

「へえ、ピクミンって頭がいいんですね。」

ネギー一行はピクミンの賢さに思わず感心してしまつ。

オリマー

「さて、そろそろ先へ進もうか……………」。

そう言つと、オリマー達は止めた足を再び進ませていく。

ネギ

「……………それにしても、この辺りにはペレット草が全然生えてません



ね。」

オリマー

「うむ、どつやらの辺りはペレット草に適應した環境ではないか  
もしれないな……………」。

明日菜

「それじゃ、ピクミンを増やせないんじゃない……………」。

オリマー

「大丈夫、ピクミンを増やすのは何もペレットだけじゃない……………  
あつ！噂をすれば発見した。」

オリマーが指差す先を見ると、その先には蝸牛かたじむづみたいに飛び出  
た一對の目にクリーム色の大きな口と小さな二つの後脚と背中に当  
たる部分に赤の地に白い斑点のような模様がある三匹の小さな生物  
が草を食べていた。

木乃香

「わあ〜！可愛ええ生き物やなあ〜！」

明日菜

「そ、そう？」

木乃香の発言に明日菜は苦笑いを浮かべる。

オリマー

「アレはチャッピーといって、この惑星に沢山生息しているイヌムシ科の生物なんだ。」

ネギ

「よ、よく分かりませんが……あの生物がどうかしたんですか？」

オリマー

「あのチャッピーを含むこの惑星の原生生物達の死骸もピクミンを増やす栄養元となるんだ。」

のどか

「し、死骸って……まさか、殺すんですか？」

オリマー

「ま、まあ……悪く言えばそういう事になるな……。」

オリマーはのどかの質問に対して、かなり気まずい感じで答える。

木乃香

「そんな……………殺すなんて可哀相や……………」

木乃香は悲しげな表情を浮かべながらチャッピーという生物達を見つめる。

オリマー

「い、いや……………そう言うけど、原生生物達はピクミンを補食するから退治しておかないと厄介なんだ。」

刹那

「お嬢様、お気持ちは分かりますが……………今は私達もピクミンですから、そういう意味でも退治しておいた方が私も賢明だと思います。」

木乃香

「そ、そやな……………」

木乃香は渋々ながらも刹那の言葉に納得する。

オリマー

「それじゃ、早速チャッピー退治といこうか……………それそれっ!!」

ポイツ！ポイツ！！  
ポイツ！ポイツ！！

次の瞬間、オリマーは三匹のチャッピーに向けて次々とピクミンを投げ付ける。

チャッピー達

「ギャッピーーッ！！」

チャッピー達はピクミン達の突然の襲撃に混乱しながらもピクミン達を振り払うように体を激しく揺らし始める。

ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！

それでもピクミン達は必死でチャッピー達に頭突きを喰らわせる。

明日菜

「す、凄い……………ピクミンって、意外と攻撃的なのね……………」

オリマー

「ピクミンは接触した物体によって自ら判断して行動する高度な知能を持っているんだ。」

ネギ

「へえ、まるで昆虫の蟻ありのようですね……………」。

ネギー行はピクミンの賢さに再び感心してしまつ。

チャッピー達

「ピギャー……ッ!!」

バタンッ!!

しばらくすると、チャッピー達は雄叫びを上げながら地面に転がるように倒れ込んでしまつ。

明日菜

「…………し、死んだの?」

そう言いながら、明日菜は恐る恐るチャッピーの死骸を指で突く。

オリマー

「大丈夫、ちゃんとピクミンがやつつけたからね……………さあ、このチャッピー達を運んで!」

オリマーの指示通りに、赤・青・黄色のピクミンがそれぞれ三匹ずつに散って、チャッピーを死骸を持ち上げでオニヨンの方へと運び出していく。

のどか

「行っちゃいましたね……………」

ネギ

「……………それにしても、どうしてピクミンはオリマーさんの指示に忠実に従うんだろう？」

オリマー

「うーん、これはあくまで私の推測だが……………ピクミンは自分達を引き抜いた物、或いはそれに属する者をリーダーだと認識しているのだと思う。」

刹那

「鳥類や哺乳類に見られる刷り込みとは違うんですか？」

オリマー

「私も最初はそう思ったのだが……………ピクミン達は地面から引き抜いた私だけではなく、ルーイ君や社長にもリーダーとして見ているよ  
うなんだ。」

木乃香

「よう分からんけど、ピクミンちゃん達ってホンマに賢いんやな」

「

そう言うと、木乃香は嬉しそうに一匹の赤ピクミンの頭（花びら）を優しく撫でる。

オリマー

「さてと、まだ他に原生生物は居ないかな……………」

ネギ

「あつ！？あそこに何か居ます！」

ネギの指差す先を見ると、そこには灰色の蚊取り線香の豚型のケースのような体格の口が小さい生物が歩いていた。

明日菜

「ア、アレって何か……………豚に似てない？」

刹那

「た、確かに……………」

明日菜と刹那は思わず苦笑いをしてしまう。

オリマー

「アレはブタドッキリといって、あの小さな口から火炎放射のように炎を吹き出すんだ。」

ネギ

「では、迂闊に近付けませんね……………」。

オリマー

「いや、その心配は無用だよ……………行け！赤ピクミン達よ！！」

オリマーがそう言うと、赤ピクミン達が一斉にブタドッキリの方へと駆け出していく。

ポオooooooooooooッ！！

すると、ブタドッキリが赤ピクミンに向けて口から炎を吹き出す。

のどか

「あっ！？あれじゃピクミンが燃えちゃうー！」



オリマー

「だから大丈夫だってば……………」。

ボカッ！ボカッ！！

ボカッ！ボカッ！！

オリマーの言う通りに、赤ピクミン達は炎をもとめせずにそのままブタドックリに攻撃を繰り返す。

木乃香

「……………あや？全然効いてへんみたいや。」

オリマー

「赤ピクミンは炎に対する耐性があるから平気なんだ。」

明日菜

「へえ、だから赤ピクミンだけ行かせたのね？」

オリマー

「そういう事……………それから、赤ピクミンは攻撃力が一番高いからすぐに片付くと思っよ。」

ボタンー！！

オリマーが言った直後、ブタドックリが赤ピクミン達によって倒されてしまい地面に倒れ込んでいく。

ネギ

「ほ、本当にすぐ片付いた……………」。

オリマー

「ほらね、私の言った通りだっただろ？」

そう言うと、七匹の赤ピクミンがブタドックリの死骸を運び出して行き、残りのピクミンはオリマーに近付いていく。

オリマー

「はてさて、他にも原生生物が居ないかな……………」。

そう言いながら、オリマーが辺りを見回していると……………。

木乃香

「あっ！？あの水辺の方に何か居るえ〜！」

今度は木乃香が指差す先を見てみると、とても浅い水辺に黄色い卵のような体型の大きな蛙が飛び跳ねていた。

明日菜

「…………刹那さん、アレって何に見えると思う？」

刹那

「は、はい…………私は蛙に見えます。」

明日菜

「やっぱり？私も蛙にしか見えないわ。」

オリマー

「イモガエルか…………よし、此処は青ピクミンの定番だ！」

そう言っていると、オリマーは青ピクミンだけを連れて水辺に入っていく。

ネギ

「ま、待って下さい！僕達も…………。」

そう言っつて、ネギも慌てて水辺に入ろうとした時…………。

ネギ

「わ、わっぷ！うおっぷ！？」

バチャバチャ！！

ネギはまるで溺れているかのように浅い水辺の中で激しくもがく。

明日菜

「ちょ、ちょっと！そんな浅い水辺で何溺れてんのよ……………」

明日菜もネギを助けようと水辺に入ろうとするが……………。

明日菜

「あ、あれ……………あっぷ！おっぷ！？」

明日菜もネギと同じく浅い水辺で溺れてしまう。

木乃香

「あ、明日菜まで溺れてもった！？」

刹那

「こ、これは一体……………」

のどか

「こ、このままじゃ二人揃って溺れてしまいます……………」。

そう言い掛けると、のどかが慌てて水辺に入っていく。

刹那

「み、宮崎さん!？」

木乃香

「ア、アカン!のどかまで溺れてまう……………」。

木乃香と刹那はのどかの行動に驚愕するが……………。

のどか

「ネ、ネギ先生!明日菜さん!大丈夫ですか!？」

明日菜

「あっぷあっぷ!ほ、本屋ちゃん……………」。

ネギ

「の、のどかさんは平気なんですか?」

のどか

「は、はい、何とか……………とにかく、水辺から上がりましょう!」

そう言うと、のどかはネギと明日菜の手を引っ張りながら岸へと上がっていく。

明日菜

「ハアハア……………た、助かった……………」

ネギ

「のどかさんのお蔭で助かりました……………ありがとうございます!」

のどか

「い、いえその……………」

のどかはネギにお礼を言われて、まるで赤ピクミンのように真っ赤になってしまう。

刹那

「……………それにしても、ネギ先生と明日菜さんは水に入っただけで溺れたのに宮崎さんは平気だったのでしょうか?」

オリマー

「青ピクミンは他のピクミンと違って水に対して耐性力があるからだよ。」

ネギー行がオリマーの声に反応して振り向くと、水辺からオリマーとイモガエルの死骸を運び出している青ピクミン達が近付いてくる。

木乃香

「ほなら、ウチも水に入っても平気なんやね？」

ピチャ！ピチャ！

次の瞬間、木乃香が楽しそうに水辺に入ってしまう。

刹那

「お、お嬢様！？な、何を……………」

木乃香

「アハハハ！ホンマに平気やったわ〜。」

パシャ！パシャ！

木乃香が水辺で跳ね回っていた時……………。

ガシッ！！

全員

「!?!」

突然、二つの触角で空を飛行している足が無い大きな虫が木乃香の頭部を掴んで何処かへと飛び去ろうとする。

刹那

「こ、木乃香お嬢様!!」

明日菜

「な、何なの!?!あの変な虫は……………。」

オリマー

「サライムシだよ!ああやってピクミンを捕まえては土に埋めてしまっ少々厄介な奴なんだ!」

ネギ

「どちらにせよ、急いで木乃香さんを助けましょう!」



そう言うと、ネギ達は木乃香を連れ去ったサライムシを追い掛けていく。

木乃香

「せつちゃん！助けて〜！！」

刹那

「ご、ご安心を！すぐに助けますから……………」。

オリマー

「よし！此処は黄ピクミンの出番だな……………そらよつと！！」

ポイツ！ポイツ！

オリマーが複数の黄ピクミンをサライムシに向けて投げ飛ばすと、黄ピクミンが物凄く高く飛んでそのままサライムシに張り付く。

ポカッ！ポカッ！！

ポカッ！ポカッ！！

黄ピクミン達はそのままの体勢でサライムシに頭突きを繰り返す。

バツタアーーーーン!!

すると、サライムシは耐え切れなくなり勢い良く地面に落下してしまふ。

刹那

「お、お嬢様!!」

木乃香

「あたたた……た、助かったわあ……。」

木乃香は頭を押さえながらサライムシの手から逃れる。

オリマー

「それー! 一気に掛かれえー!!」

ボカッ! ボカッ!!

ボカッ! ボカッ!!

オリマーの言葉を合図に、黄ピクミンが一齐にサライムシに襲い掛かる。

刹那

「お、おのれ……………よくも木乃香お嬢様を連れ去ろうとしたな……………  
…私も加勢致します!!」

ネギ

「せ、刹那さん!？」

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

すると、刹那も一緒にサライムシに攻撃を繰り出す。

明日菜

(刹那さんったら、相当頭に来たようね……………)。

ネギ達は他の黄ピクミンと同じように必死でサライムシに攻撃をする刹那を見て啞然とする。

オリマー

「もついいだろう……………ストップ!!」

ピ—————ッ!!

刹那

「……………ハッ!？」

オリマーが吹いた笛を合図に、黄ピクミンと刹那はサライムシからの攻撃の手を止めて、オリマーの方へと駆け寄って来る。

刹那

「……………ふう、何だかスッキリしました。」

明日菜

「ス、スッキリしたって……………あんなに何回も頭突きなんかして大丈夫なの?」

刹那

「はい、思ってた以上に痛くありませんでした。」

木乃香

「ホ、ホンマに?」

ネギ達は刹那の言葉に思わず耳を疑ってしまふ。

オリマー

「まあ、何にしても無事で良かった……さあ、さっき倒したサライムシを運んで！」

オリマーがそう言うと、三匹の黄ピクミンがサライムシの死骸をオニヨンの方へと運び出していく。

オリマー

「ふうっ、後は大物をもう一つだけ持ち帰りたいが何か居ないかな……あっ！あつた！！」

？

「ぐう……ぐう……。」

オリマーが指差す先を見ると、一回りも巨大なチャッピーが居眠りをしていた。

明日菜

「あ、あんな大きな奴を仕留める気なの！？」

ネギ

「無茶ですよ！あんなに大きな生物に小さいピクミンが立ち向かうなんて……。」

オリマー

「そう、確かにピクミン一匹だけの力じゃ絶対に無理だが……突撃い………っ!!」

次の瞬間、オリマーが残りのピクミン達を引き連れてチャッピーの背後へと回り込む。

オリマー

「そりゃそりゃそりゃそりゃ………っ!!」

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

更にオリマーはチャッピーの背中に向けて次々とピクミンを投げ付ける。

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

チャッピー

「!?!」

チャッピーはピクミン達の頭突きで目を覚まして勢い良く起き上がる。

ブンブンッ!!

すると、チャッピーが体を左右に激しく揺らしながら数匹のピクミンを振り落とす。

パクッ!!

ムシャムシャ……

そして、チャッピーは振り落とした複数のピクミンを大きな口で食べってしまう。

のどか

「ピ、ピクミンが食べられて……。」「

木乃香

「む、惨い光景や……。」「

明日菜

「ちよっと！あれじゃピクミンが一匹残らず食べられちゃっつじゃない！」

刹那

（夕風があれば簡単に倒せるのに……。）

ネギ

（僕も魔法さえ使えれば……。）

そう思いながら、ネギー行はピクミン達が次々とチャッピーに食べられる光景を目の当たりにする。

オリマー

「まだまだこれからだよー！」

ポイツ！ポイツ！！  
ポイツ！ポイツ！！  
ポイツ！ポイツ！！  
ポイツ！ポイツ！！  
ポイツ！ポイツ！！  
ポイツ！ポイツ！！  
ポイツ！ポイツ！！



オリマーは残りのピクミンをチャッピーの背中にどんどん投げ付ける。

ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！

それと同時に、ピクミン達の上と下からの攻撃が激しさを増していく。

チャッピー

「ピギャー……ッ……！」

バッタア……ン……！！

しばらくすると、チャッピーがその場で正座をするような体勢で倒れ込んでしまう。

オリマー

「やったー！ やったぞー！！」

オリマーとピクミン達は嬉しさのあまりにその場で飛び跳ねてしま  
う。

明日菜

「う、嘘……………本当に倒しちゃった……………」

ネギ

「す、凄い……………あの小さなピクミン達があんな大きな生物をやっ  
つけるなんて……………」

ネギはピクミン達の活躍に感動するが、明日菜達はまだ信じられな  
いのか啞然としている。

オリマー

「ピクミンは一匹一匹の力は非常に弱いけど、沢山のピクミンが力  
を合わせれば思い掛けない力を発揮する……………昔、私もそのピクミ  
ンの思い掛けない力によって助けられたんだ……………」

のどか

「……………オリマーさん？」

オリマー

「おっと、つい昔を思い出してしまった……さあ、そろそろ元の場所へ戻るつか！」

オリマーがそう言うと、ピクミン達がチャッピーの死骸を運び出そうとする。

ネギ

「……………僕も手伝います！」

オリマー

「えっ？」

オリマーがネギの発言に耳を疑った瞬間、ネギが他のピクミンと一緒にチャッピーの死骸を持ち上げる。

明日菜

「そんじゃ、私も！」

木乃香

「ウチも運ぶ〜！」

刹那

「お、お嬢様もやるのでしたら私も……………」

のどか

「っ、ついでに私も……………」

明日菜達もネギに続くようにチャッピーの死骸を持ち上げる。

オリマー

「フツ、まあいいか……………よし！出発進行！！」

ネギ一行

「はーいー！！」

ネギ一行の元気の良い返事を合図に、オリマー達は元の場所へと目指して歩き始める。

木乃香

「……………引っこ抜かれて〜 貴方だけに〜付いて〜ゆ〜」

明日菜

「どつしたの木乃香？急に歌い出して……………」

木乃香

「いやあ、今この歌を歌いたい気分やねん……今日も運ぶ  
戦う、増える、そして食べられる。」

オリマー

「……その歌、何だかピクミンの気持ちになって歌われてるようだ  
ね。」

ネギ

「木乃香さん、もっと歌ってみてください。」

木乃香

「ええよ……ほったかさされて、また会って、投げられて  
でも、私たち貴方に従い尽くします……。」

こうして、木乃香による『ピクミン・愛の歌』は目的地に到着する  
まで歌われるのであった……。

第八十六話く運ぶ・戦う・増える・そして……（後編）く（後書き）

ある程度ピクミンを増やしたネギー行とオリマーはこの後どうなるのか？

第八十七話 地下洞窟でお宝探査? (前書き)

ピクミンを増やしたオリマーとネギー行なのだが……。

第八十七話 地下洞窟でお宝探査？

とある惑星

社長

「……………おお！随分いっぱい増えたのお。」

社長はオリマーとルーイの後ろに並んでいる約百匹以上の赤・青・黄色のピクミンを見て思わず感心する。

ネギ

（……………それにしても、オリマーさんが増やしたピクミンを合わせても凄い数ですね。）

明日菜

（そ、そうね……………これだったら小さな国を一つぐらいは造れるんじゃない？）

刹那

（そ、そんな大袈裟な……………。）

ネギー一行はピクミン達の列の中でオリマー達に聞こえないようにお喋りをしていた。



社長

「うむ、これだけのピクミンが居れば明日の宝探しは楽勝じゃな。」

ルイー

「でも、本当にまだ回収してないお宝が残ってるんですかねえ？」

社長

「フッフッフ、ルイー君は相変わらず考えが甘いのお……………」。

社長はルイーの言葉に思わず不気味な笑い声を上げる。

オリマー

「じゃ、社長？一体どうしたんですか？」

社長

「ん？実はのお…………… オリマー君達がピクミンを増やしてる最中にワシは地下へと通じる洞窟を発見したんじゃよ。」

オリマー&ルイー

「ええっ!？」

オリマーとルイーは社長の発言に目を見開きながら驚愕する。

ルイー

「で、でも……………その洞窟って前に僕達が入った所じゃないツスカ？」

社長

「いや、それは無い……………以前、ワシらがお宝を全て回収した洞窟の入口の近くには印として赤い旗を立てておいたじゃろ？その旗が立てられて無かつたんじゃよ。」

オリマー

「本当ですか？可笑しいなあ……………此処ら辺の洞窟は全て制覇したハズだけど……………」

社長

「きつと一つだけ見逃してたんじゃろ……………さてと、日が完全に沈んでしまつ前にドルフィン初号機の中へ避難しよう。」

そう言うと、社長は近くに着地させてあるドルフィン初号機と呼んだ巨大なロケットの内部へと入っていく。

ルイー

「……………先輩、僕達も中へ入りましょうよ。」

オリマー

「ああ、先に入ってきてくれ……………私はピクミン達をオニヨンの中に入れてから入るから……………」

ルイー

「分かりました……………」

ルイーは社長に続いてドルフィン初号機の中へと入っていく。

オリマー

「……………さて、ネギ君達をどうするかだが……………」

ネギ

「あの、僕達はそのオニヨンの中でも構いませんよ。」

オリマー

「えっ！？で、でも……………オニヨンの中がどういう構造になってるのか私にも分からないし……………」

木乃香

「多分平気やと思うえ？だって、今はウチらもピクミンやし……………」

「

オリマー

(そういう問題じゃないと思うのだが……………。)

そう思いながら、オリマーは木乃香の言葉に思わず苦笑いしてしまう。

明日菜

「それに、あれだけの数のピクミンが入ってるんだから狭いなんて事は絶対に無いんじゃない？」

オリマー

「まあ、それは確かだな……………それじゃ、ネギ君達も他のピクミンのようにオニヨンに入ってもらってもいいかな？」

ネギ

「はい、大丈夫です！」

オリマー

「わ、分かった……………では、翌朝までオニヨンの中に入れてもらおうよ。」

ピ—————ッ!—!

オリマーが笛を吹いた瞬間、ピクミン達は一齐にオニヨンの中へと入っていく。

刹那

(何故だろう？あの笛のを聞くと体が勝手に動いてしまう……………。)

そんな事を思いながら、ネギー一行もそれぞれ該当するオニヨンの中へと入っていく。

オリマー

「……………よし、私もドルフィン初号機の中へ避難しよう。」

そう言うと、オリマーもドルフィン初号機の内部へと入っていく。

その頃、カモは……………。

カモ

(う、うん……………。)

目を覚ましたカモは、そのままゆっくりと起き上がる。

カモ

「ふわぁ〜、よく眠った気分だぜ……………」

そう言うと、カモは大きな欠伸をする。

カモ

「それより、此処は何処なんだ？」

そう言うと、カモは目を凝らしながら辺りを見回す。

カモ

「真っ暗でよく分からねえが……………恐らく、何処かの野原みてえだな……………あれ？ところで兄貴達は!？」

カモはようやくネギ達が居ない事に気付いて、必死で辺りを走り回る。

ネギ

「おーい！兄貴ー！姐さーん！みんな何処に居るんでえーい！？」

カモが無我夢中でネギ達を探し回っていると……。

カモ

「どわあ~~~~っ!？」

バツチャーーーン!!

カモは浅い水辺の中で勢い良く転げ落ちてしまう。

カモ

「うひい〜！冷てえな……ん？」

次の瞬間、カモがふと水面を覗いてみると……。

カモ

「な、ななな……何じゃこりゃーっ!？」

カモは水面に写った自分の変わり果てた（チャッピー）姿に驚愕する。

カモ

「い、一体何でい！？この俺っちの姿は……あの男前だったアルベール・カモミールの面影が何処にも残ってねえじゃねえかー！ー！ー！ー！」

そう叫びながら、カモはそのまま勢い良く走り出していく。

ガッ！！

カモ

「うへっ！？」

すると、カモは地面に空いてある大きな穴の近くに転がってる小石に躓いてしまう。

カモ

「あ、兄貴い！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

そして、カモはそのまま穴の中へと落下してしまふ。



（翌朝）

ルイー

「ふわあゝ、まだ眠いなあ……………」。

オリマー

「ああ、何もこんな朝早くから出発しなくてもいいのに……………」。

翌日の早朝、オリマーとルイーは大きな欠伸をしながら五種類（赤・青・黄・紫・白）のピクミンの大群を整列させていた。

木乃香

「ふわあゝ、ウチもまだ眠いわあ……………」。

明日菜

「ちよつと木乃香、立ったまま眠らないですよ？」

明日菜は眠い目を擦りながら今にも居眠りしそうな木乃香に注意する。

社長

「さあて、諸君！これから地下の洞窟に隠されてる宝を回収しに向かう！その洞窟にはどんな生物が待ち伏せているか分からんから、決して気を抜くでないぞ！」

のどか

（あの人、かなり張り切ってますね……………。）

オリマー

（……………まあ、何せ自分の会社の危機を回避する為の宝探しでもあるからね。）

オリマー達は社長達に聞こえないように小声で話す。

社長

「それから、今回もワシの愛機であるドルフィン初号機がワシらをサポートしてくれるぞい。」

？

「皆さん、今回も宜しくお願いします！」

明日菜

(えっ!?!い、今誰が喋ったの?)

ネギー一行は突然聞こえてきた声に戸惑う。

オリマー

(落ち着いて、今喋ったのは社長の宇宙船だよ。)

ネギ

(え?宇宙船というとアレの事ですか?)

そう言つと、ネギはドルフィン初号機に向けて指差す。

オリマー

(そう、ドルフィン初号機は私達をナビゲートしてくれたり、上の部分の探査ポッドを分離させて私達が発見したお宝を回収してくれるんだ。)

明日菜

(へえ)、便利な宇宙船ね……でも、随分とオンボロじゃない?)

オリマー

（しょうがないよ、この宇宙船は私が勤めてる『ホコタテ運送』の  
設立時から活躍してたって話だからね……………。）

ドルフィン

「ん？今誰か私の事をオンボロだとか言いませんでしたか？」

オリマー

「い、いや……………誰もそんな事言っていないよ！」

明日菜

（じ、地獄耳……………。）

明日菜はドルフィン初号機の地獄耳に啞然とする。

社長

「さて、そろそろ出発するか……………ワシが穴がある場所まで案内する  
から付いて来るんじゃないぞ！」

ルイー

「は〜い。」

オリマー

「それじゃ、ネギ君達は私に付いて来て。」

ネギ

「はい、分かりました！」

そう言うと、ネギー一行は他のピクミンの大群に混じりながらオリマ  
ー達の後を付いて行くのであった……………。

〈数分後〉

社長

「諸君、この橋を渡ると洞窟の入口に……………って、おや？」

しばらく歩いていると、社長が大きな木の塊のような物体がある水  
辺の前で立ち止まって首を傾げる。

ルイー

「社長、どうしたんスか？」

社長

「可笑しいのお……………此処に橋が掛かっていたハズなんじゃが……………」

オリマー

「恐らく、ウジンコ達が橋を壊したんでしょう……………社長、少しだけ時間を下さい。」

社長

「どうするのかね？」

オリマー

「ピクミン達に橋を作らせます……………それっ！」

トントーン！トントーン！トントーン！トントーン！

オリマーが合図すると、ピクミン達が一斉に木の塊に向けて金づちを打ち付けるかのように頭突きを始める。

ネギ

「……………オリマーさん、ピクミン達は何をしてるんですか？」

オリマー

「さっきも言ったように橋を作ってるのさ。」

剎那

「は、橋を!?!」

ネギー一行はオリマーの発言に思わず耳を疑う。

木乃香

「あ、あそこまでやったら結構時間が掛かるんじゃない?」

オリマー

「大丈夫、あれだけの数のピクミンだったら後五秒で完成するだろう。」

明日菜

「そ、それは幾ら何でも……………」

ルイー

「先輩、ピクミン達が橋を完成させましたよ。」

ネギ一行

(う、嘘っ!?)

ルイーの言う通り、ピクミン達によって木の橋が完成されていた。

明日菜

(そ、そんな馬鹿な……………。)

ネギ

(たったの数秒で橋を完成させるなんて……………やっぱり、ピクミン  
って凄いんだなあ……………。)

ネギ一行は啞然とした表情を浮かべながら改めてピクミンの凄さに  
感心する。

社長

「よし、早速橋を渡ろう!」

そう言うと、オリマー達はピクミン達が作った木の橋を渡っていく。

社長

「ほれ、アレがワシが発見した洞窟の入口じゃ!」



社長が指差す先を見ると、そこには地下へと続く大きな穴があった。

ルイー

「……………これが例の入口か……………」

オリマー

「確かに、何処にも旗が立てられてないな……………」

オリマーとルイーは穴の周りに旗が立てられてるかどうかが確認する。

社長

「何はともあれ、早速入ってみるぞい！」

そう言うと、社長は一番先に地下洞窟の入口へと入っていく。

ルイー

「あっ!?!? ちょっと待って下さいよ〜！」

ルイーも社長の後に行くかのように入口に入っていく。

オリマー

「……………さあ、私達も入ろうか。」

のどか

「ほ、本当にこの中に入るんですか？」

そう言いながら、のどかは少し戸惑い気味で入口を覗き込む。

オリマー

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。」

ネギ

「そうですね、僕達も一緒ですから……………ね？」

のどか

「……………はい、分かりました！」

オリマー

「それじゃ、行くよ！」

ネギ一行

「はい！…！」

そして、オリマーとネギー一行も含むピクミン達が一斉に入口の中に入っていく。

く地下洞窟・一階く

全員

「わあ~~~~~っ!!」

シュタツ!!

入口から入ったネギ達は最初の地下洞窟へと上手に着地する。

オリマー

「うむ、見た感じだと今までの地下洞窟とあまり変わらないな……  
……。」

そう呟きながら、オリマーは周りが岩壁だけの洞窟を見回す。

プロロロロロロッ！！

ネギ

（ん？何の音だろう………あっ！？）

ネギがプロペラ音のような音に反応して見上げてみると、ネギ達が入ってきた入口の真上からドルフィン初号機の探査ポッドがゆっくりと下降してくる。

刹那

（オリマーさん、アレってあの宇宙船の………）

オリマー

（そう、ドルフィン初号機の探査ポッドだ………あのポッドから出てる光の中にお宝を入れれば自動的に回収してくれるんだ。）

木乃香

（へえ、便利なんやねえ………）

ドルフィン

「ん？誰ですか？今、私の事を便利だとおっしゃったのは………」

ルイー

「え？別に何も言っていないけど……………」。

明日菜

（や、やっぱり地獄耳だわ……………」。

明日菜はドルフィン初号機の地獄耳に再び啞然とする。

社長

「よし、まずはこの階のエリアを徹底的に探査するぞい！」

オリマー

「気をつけて下さい、この洞窟にはどんな原生生物が潜んでいるかわかりませんし……………」。

社長

「心配は要らん、どんな生物が現れてもピクミンが蹴散らしてくれるからのお……………」。それでは、後でまた会おう！」

そう言い残すと、社長は数十匹のピクミンを引き連れて奥の方へと進んでいく。

ルイー

「それじゃ、僕はこっちの方に行きます。」

ルイーも数十匹のピクミンを引き連れて、社長とは別の方角へと進んでいく。

オリマー

「……………さてと、私達も進むとしよう。」

更にオリマーもネギー一行を含む数十匹のピクミンを引き連れて、社長とルイーとは逆の方角へと進んでいく。

ネギー

「……………ところで、一つ聞いてもいいですか？」

オリマー

「ん？何だい？」

ネギー

「オリマーさん達が探してるお宝というのは、どれ位の価値があるんですか？」

オリマー

「うーん、そうだなあ……私達が回収したお宝は最低でも全て十ポコ以上の価値があったな。」

木乃香

「ポ、ポコ？」

刹那

「ず、随分変わった単位ですね……。」

ネギー行はポコという『ホコタテ星』の通貨の基本単位に思わず苦笑いしてしまう。

オリマー

「ん？……ちょっと待った！」

そう言うと、オリマーはその場で立ち止まる。

のどか

「ど、どうしたんですか？」

オリマー

「今、あっちの方から何か物音が聞こえたような気がして……ちよっと様子を見て来るから、みんなは此处で待機してくれ。」

そう言い残すと、オリマーはネギ達を残して何処かに歩き出していく。

明日菜

「あゝあ、行っちゃった……………」。

ネギ

「取り合えず、オリマーさんが戻って来るまで待ちましょう。」

のどか

「は、はい……………あっ!？」

木乃香

「どないしたん?」

のどか

「アレを見て下さい。」

ネギ達はのどかが指差す先を見ると、そこには紫と白の二つの大きな花が地面に咲いていた。



明日菜

「わあ〜！大きな花ね！」

そう言っと、明日菜は紫の花の近くまで駆け寄って行く。

のどか

「本当に大きいですね……………私、この白い方の花が好きです。」

そう言って、のどかは白い花の方へと近付いていく。

ネギ

「でも、何でこんな地下の洞窟に花なんか咲いてるんでしょうか？」

刹那

「確かにそうですよね、地下には太陽光や水が無いのに……………」。

木乃香

「ひょっとしたら、コレがお室かもしれんよ？」

明日菜

「マ、マジで？じゃあ、もうちよっと詳しく調べてみないと……………」。

「

そう言いながら、明日菜が紫の花の花びらの上に乗った瞬間……。

パクッ！！

明日菜

「ひゃっ！？」

全員

「！？」

突然、紫の花の花びらが閉じるようにして明日菜を飲み込んでしま  
う。

のどか

「あ、明日菜さん！？」

のどかが先程の光景に驚愕しながら思わず白い花に触れた瞬間……  
…。

パクッ！！

のどか  
「きゃっ!?!」

全員  
「!?!?!」

突如、白い花も紫の花と同じように花びらを閉じるようにしてのどかを飲み込んでしまう。

ネギ  
「あ、明日菜さんとのどかさんが花に食べられちゃった?!?!」

刹那  
「そ、そんな馬鹿な……。」

木乃香  
「オリマーはぐん!早よう戻って来て〜!?!」

ネギ達はこの思い掛けない状況にパニック状態になってしまう。

オリマー  
「……………ふう、結局何も居なかったなあ。」

すると、オリマーが軽く溜め息を付きながらネギ達の方に戻って来る。

ネギ

「オ、オリマーさん！大変なんです！！」

オリマー

「ど、どうしたんだい？そんなに慌てて……。」

木乃香

「明日菜とのどかがお花さんに食べられてもつたんや〜！！」

オリマー

「何だつて？花に？」

オリマーがネギ達の話の内容を理解出来ずに、二つの花が咲いている所を見てみると……。

プツ！プツ！

突然、紫の花からの紫の種を一つ吐き出し、白い花からも白い種を一つ吐き出してそのまま地面に植え付けられる。

刹那

「コ、コレは……種でしょうか？」

オリマー

(ひょっとして……。)

次の瞬間、オリマーは二つの種が植えられた場所に近付いていく。

ニユツ！ニユツ！

すると、種が植えられた地面から二つの葉っぱが生えてくる。

木乃香

「あ、葉っぱが生えてきた……。」

ネギ

「そ、それってまさか……。」

オリマー

「まあ、見てれば分かるよ……よいしょっと！」

スポンツ！！

明日菜

「痛っ！！」

オリマーは地面から葉っぱを一つだけ引っっこ抜くと、明日菜の声をした紫ピクミンが出て来る。

明日菜

「痛たたた……また頭を引っ張られるなんて思ってもみなかった……。」

ネギ&木乃香&刹那

「……………」

ネギ達は明日菜の変わり果てた姿に啞然としてしまっ。

明日菜

「ん？何？そんな顔してどうしたの？」

木乃香

「だ、だって……明日菜が赤ピクミンから紫ピクミンに変わった

んやもん……………」

明日菜

「は？何を言ってる……………あれっ!？」

明日菜は自分の両手と体を見て思わず目を疑ってしまう。

明日菜

「な、何これ……………一体何がどうなってんのよ!？」

オリマー

「お、落ち着いて……………明日菜ちゃんはムラサキポンガシグサに吸収されて赤ピクミンから紫ピクミンに変化したんだ。」

刹那

「そ、そんな事があるんですか？」

オリマー

「ああ、その証拠にシロポンガシグサに吸収されたのどかちゃんも……………」

スポンツ!!

のどか

「あうっ!?!」

オリマーが残りの葉っぱを引っこ抜くと、のどかの声をした白ピクミンが出て来る。

オリマー

「このように、青ピクミンだったのどかちゃんも白ピクミンへと変化してしまうんだ。」

ネギ&刹那

「は、はあ……………」

木乃香

「わあ〜!何だかおもしろいなあ〜!!」

パチパチパチパチッ!

ネギと刹那はポンガシグサの生態に啞然とするが、木乃香だけが面白そうに拍手をする。

のどか



「あ、あの……私の顔に何か付いてますか？」

明日菜

「いや、あまり気にしない方がいいわよ……。」

のどか

「は、はあ……。」

のどかは明日菜の言葉に思わず首を傾げる。

木乃香

「でも、これでウチら全員が五種類のピクミンに大変身したって訳やな。」

明日菜

「木乃香、アンタは相変わらず呑気でいいわね……。」

明日菜は木乃香の人事のような発言に呆れ返ってしまう。

オリマー

「……何はともあれ、探索を続けようか。」

刹那

「そうですね、特に害は無さそうですね……。」

ネギ

「それでは皆さん、先へ進みましょう！」

明日菜

「はあ、何だかいつもより足取りが重くなった気がするわ……。」

「

のどか

「私は逆に足取りが軽くなったような気がします……。」

木乃香

「赤ピクミンは火に強い、青ピクミンは溺れない、黄ピクミンは高く飛ぶ、紫ピクミンは力持ち、白ピクミンには毒がある。」

そうこう言いながら、ネギ達はお室の探索を再開させるのであった……。

第八十七話 地下洞窟でお宝探査? (後書き)

果たして、ネギ達は地下に眠るお宝を発見出来るのか？

第八十八話 地下に潜む巨大な生物達（前編）（前書き）

明日菜が紫ピクミンになってしまい、のどかが白ピクミンになって  
しまったこの先どうなるのか？

第八十八話 地下に潜む巨大な生物達（前編）

地下洞窟・一階

社長

「……………うむ、結局この階にはお宝は一つも無かったようじゃのう。」

オリマー達はこのエリアを手当たり次第に探査したのだが、結局何も発見出来なかった。

ルイー

「やっぱり、この洞窟のお宝も全部回収しちゃったんじゃないッスか？」

オリマー

「うーん、それにしだって旗を立てられて無かったというのが腑に落ちないな……………」

社長

「そうじゃ！きつともっと下の階にお宝があるハズじゃ！！」

そう言つと、社長は更に次の地下へと続いているであろうと思われ

る入口のような穴を指差す。

明日菜

（ネギ、アレって下に続いている入口じゃない？）

ネギ

（そのようですね……。）

ネギと明日菜はルーイや社長に聞かれないように小声で話す。

社長

「諸君！早速次の階に向けて出発するぞい！！」

ルーイ

（やっぱり先へ進むのか……。）

オリマー

「はい、分かりました！」

そして、ネギ達は次の階へと続いている入口に勢い良く飛び込んでいくのであった……。

↳地下洞窟・二階↳

次の階に続く穴に入ったネギ達は地下洞窟の二階へとやって来た。

オリマー

（此処が地下二階か……………一階と違って、地面が土じゃなくて砂になっっているな。）

社長

「よゝし！早速お宝を探しに行くぞ〜！！」

そう言うと、社長が先陣を切るかのように先に進んでいく。

ネギ

「……………あの社長さん、先に行っちゃいましたね。」

木乃香

「それに、凄く張り切つとるなあ……………」

ネギー一行は真つ先に駆け出して行ってしまった社長の行動に啞然とする。

オリマー

「……………」と、とにかく私達も行くとするか。」

そう言つて、オリマー達も社長の後を追い掛けようとするが……………。

社長

「ひょえ〜！た、助けてくれえ〜！！！」

突然、社長が血相を変えてオリマー達の方へ慌てて戻つて来る。

ルイー

「ど、どうしたんスか？」

社長

「ど、どうしたもこうしたも……………地面からいきなり巨大な生物が現れたんじゃよー！」



オリマー

「何ですって!?!」

オリマーは社長の言葉に思わず耳を疑った。

オリマー

「……………それで、その生物の特徴とかは？」

社長

「え、え〜っと……………確か、鳥のような顔をして蛇みたいな長い胴体じゃったな……………」

明日菜

(と、鳥のような顔をして……………)

ネギ

(……………蛇みたいに長い胴体?)

ネギと明日菜は社長の発言を元にして頭の中で鳥のような顔をして蛇みたいな長い胴体の生物のイメージを浮かべる。

オリマー

「というど、相手はヘビガラスか……………分かりました!私がピクミ

ンを率いて倒して来ます！」

ルイー

「せ、先輩だけで大丈夫ツスか？」

オリマー

「大丈夫、奴とは何度も戦ってるからね……………では、行って来ます  
！」

そう言うと、オリマーは数十匹のピクミンを引き連れて、社長が駆け出した場所まで歩き出す。

のどか

（……………本当に一人で大丈夫なんでしょうか？）

木乃香

（ほなら、ウチらも行ってみよ！）

刹那

（お、お嬢様！一体どちらに！？）

明日菜

（まったく、しょうがないわね……………。）

ネギ

(僕達も行きましょ！)

ネギー行もオリマーの後を追い掛けてゆく。

社長

「おや？あのピクミン達は……。」

ルイー

「変なピクミンだなあ、リーダーの指示も無しに勝手に動くなんて……。」

ルイーと社長はネギ達の行動に首を傾げる。

ネギ

「オリマーさん！」

オリマー

「ネ、ネギ君達！？こんな所に来たら……。」

オリマーがネギの声に反応して振り向こうとした瞬間……。

ズボオーーーーーッ!!

?

「キエーーーーッ!!」

全員

「!?!」

突如、砂の地面から鳥のような白い顔と黄色いくちばし嘴に蛇みたいに青色の長い首の生物が勢い良く出て来る。

オリマー

「し、しまった!ヘビガラスが……………」

刹那

「コ、コレが先程オリマーさん達がおっしゃってた生物……………」

明日菜

「ってか、幾ら何でもデカ過ぎでしょ!?!」

ネギ

「とにかく、今は逃げましょう!」

ネギー一行は慌ててへビガラスから離れていく。

オリマー

「へビガラス! 私達が相手だ!」

そう言うと、数十匹のピクミンを引き連れたオリマーがへビガラスの前に立ち塞がる。

ズボオーーーーーッ!!

すると、へビガラスが勢い良く地面の中に潜っていく。

木乃香

「あや? まだ地面に潜ってしもうた……」

ネギ

「オリマーさん! 今の内に逃げて下さい!」

オリマー

「大丈夫! へビガラスは私とピクミン達でやっつけるから……」

明日菜

「や、やっつけるって……あんなデカイ奴をどうやって……。」

刹那

「きつと、オリマーさんには考えがあるんですよ……此処はオリマーさんに任せてみましょう。」

明日菜

「そ、そうね……。」

ネギー行はオリマー達が居る所から少し離れた場所までオリマーを見守っていく。

オリマー

「……………」。

オリマーはいつでもピクミンを投げ飛ばせる体勢のまま辺りを見回す。

ズボッ!!

オリマー

「……………そこか!!」

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

次の瞬間、ヘビガラスが地面から出て来る音に一早く気付いたオリマーが音の方に向けて素早くピクミン達を投げ付ける。

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

ヘビガラス

「ギエーーーーッ!!」

ヘビガラスの顔周辺に張り付いた複数のピクミン達は、そのままヘビガラスに頭突きを繰り返す。

ヘビガラス

「ギエーーーーッ!!」

ブンブンッ!!

へびガラスは顔を左右に激しく振って、張り付いていたピクミン達を全て振り払ってしまう。

のどか

「あっ!?ピクミン達が……………」。

木乃香

「このままじゃ、全員食べられてまっ!」

ネギー一行はこの危機的状況に居ても立ってもいられない状態になる。

オリマー

「仕方ない、白ピクミンを使うか……………それっ!」

ポイツ!

オリマーが一匹の白ピクミンをへびガラスの口目掛けて投げ飛ばすと……………。



パクッ!!

ヘビガラスは白ピクミンを一口で飲み込んでしまう。

ヘビガラス

「ガァーーーーーーッ!!」

ドゥッシューーン!!

次の瞬間、ヘビガラスは断末魔のような叫び声を上げながら地面に倒れ込んでしまう。

ボボボボボボンッ!!

すると、ヘビガラスは顔の部分だけを残して残りの首の部分だけが消滅していく。

オリマー

「……………ふう、どうにか倒したな。」

社長

「おっっ！流石はオリマー君じゃな！！」

オリマーがヘビガラスの戦いに勝って一安心していると、今まで隅  
つこで隠れていた社長達がオリマーの方へ駆け寄って来る。

ルイー

「やっぱりオリマー先輩は凄いッスね！ピクミンの扱いに慣れてるっ  
ていうか……………」

社長

「ルイー君！そんな事より、この鳥の頭を運び出すんじゃ！」

ルイー

「は、は〜い……………ほいっ」と！」

ドスンッ！！

ルイーがヘビガラスの死骸に向けて一匹の紫ピクミンを投げ付けると、紫ピクミンは一匹だけで軽々とヘビガラスの死骸を探查ポッド  
まで運び出していく。

のどか

「す、凄い……………たった一匹だけであんなに軽々と運んでますね。」

オリマー

「紫ピクミンは他のピクミンの十匹分の力があるからね……………だから、重いお宝を運び出すには紫ピクミンは絶対に不可欠なんだよ。」

ネギ

「へえ、そうなんですか……………じゃあ、明日菜さんにはピッタリじゃないですか。」

明日菜

「……………ネギ、それってどついう意味？」

明日菜はネギの発言に少しだけ頭にきて、ネギを軽く睨み付ける。

ネギ

（……………あ、あれ？僕、何か変な事でも言っちゃったかな？）

木乃香

（ネギ君、ドンマイやな……………。）

木乃香は明日菜に睨まれて戸惑い気味になつてるネギを見て苦笑いを浮かべる。

刹那

「それより、先程の鳥みたいな生物をどうやって倒したんですか？」

オリマー

「ああ、この白ピクミンをへビガラスに食べさせたただだよ。」

そう言うと、オリマーは一匹の白ピクミンをネギー一行に差し出すように持ち上げる。

ネギ

「どづいつ事ですか？」

オリマー

「白ピクミンの体には毒が含まれてるから、一匹でも食べたなら即死してしまつんだ。」

刹那

「な、成程……だから、あの生物は白ピクミンを食べただけで絶命したって訳ですね。」

明日菜

「それじゃ、もし本屋ちゃんもさっきのような生物に食べられちゃったら毒で死んじゃうって事？」

オリマー

「ま、まあ……………そういう事になるな……………」

オリマーはかなり答え難そうに明日菜の質問に答える。

刹那

「あ、明日菜さん……………その質問は宮崎さんにはちょっと……………」

明日菜

「え？あ！いや、その……………本屋ちゃん、さっきのは冗談だからね？」

のどか

「は、はあ……………」

のどかは明日菜の言い訳としか思えない言葉に苦笑いを浮かべてしまふ。

オリマー

「まあ、冗談はともかく……………白ピクミンには、もう一つ特技があるんだ。」

ネギ

「え？何ですか？」

オリマー

「それは……………」

のどか

「……………っ！？」

オリマーが説明しようとした時、のどかが何かに気付いたような素<sup>そ</sup>振り<sup>ぶ</sup>をする。

刹那

「宮崎さん？どうかなさいましたか？」

のどか

「な、何だかよく分からないんですけど……………この下に何か埋まってるような気がします。」

そう言いつつ、のどかは自分が今その場で立っている地面の方を指差す。

木乃香

「埋まってるって……………何が？」

のどか

「さ、さあ……………ただ、何かが埋まってるって事しか……………」

オリマー

「ひょっとして……………白ピクミンは全員集合！」

そう言った直後、複数の白ピクミンがオリマーの前に集結する。

オリマー

「この下に埋まってる物を掘り出してくれ。」

ザッ！ザッ！ザッ！

ザッ！ザッ！ザッ！

次の瞬間、白ピクミン達がオリマーの指示通りに先程のどかが指差した地面を掘り始める。

明日菜

「な、何？急に穴掘りを始めちゃったけど……………」

オリマー

「これが白ピクミンの特技さ………白ピクミンは地面に埋まっているお宝を赤い目で感知して掘り出してくれるんだ。」

木乃香

「ほなら、この下にお宝が埋まってるんやね？」

オリマー

「そういう事………お！？何か出て来た！」

オリマーの言う通りに、全て掘り終えた白ピクミン達が埋まっていた巨大な瓶の蓋のような物を掘った穴から取り出す。

明日菜

「……………コレがお宝？」

ネギ

「……………どう見ても、瓶の蓋ですよね？」

木乃香

「しかも、蓋にはアロピビールって書いてあるえ……………。」



社長

「おお！？遂に見つけたか！」

ネギー一行が巨大な瓶の蓋にしか見えないお宝に唾然としていると、社長が目を輝かせながら話に割り込んでくる。

オリマー

「は、はい！白ピクミン達が地中から掘り出したんです。」

社長

「そうかそうか！では、早速お宝を回収してくれ。」

オリマー

「分かりました……………さあ、お宝を運んで！」

オリマーがそう言うと、白ピクミン達はお宝を探查ポッドまで運び出していく。

明日菜

「……………は、あ、何だかちょっとがっかりしたわ……………あんな何処にでも落ちてそうなビール瓶の蓋がお宝だなんて……………」

刹那

「でも、オリマーさん達にとってはとても価値がある物なんですよ。」

「

ネギ

「き、きつとそうですよー！」

木乃香

「それはそうかもしれへんけど……。」

のどか

「……と、とにかく私達も行ってみましょう。」

そう言つと、ネギー一行は探査ポッドが設置されてる場所まで駆け出つていく。

ビョー………ッ！

チャリイ………ン！！

ピクミン達がお宝とへビガラスの死骸を探査ポッドの真下まで運んだ時、探査ポッドが二つの品物を吸い込むかのように回収していく。

ドルフィン

「はい、お宝と生物の死骸を回収しました！」

社長

「よしよし、この調子でどんどんお宝を手に入れよう！」

そう言うと、社長を先頭に次の階へと続いていると思われる入口の穴に向かって駆け出していく。

木乃香

「ねえオリマーはん、あの鳥さんの頭も一緒に回収してたようやけど………何でなん？」

オリマー

「ああ、この惑星に生息する原生生物達は『ホコタテ星』にとっては珍しい生物だからね………死骸だと安い値で引き取ってくれるんだ。」

明日菜

「じゃあ、生け捕りにしたらもっと高い値段で買い取ってくれるの？」

オリマー

「さ、さあ………今まで生け捕りにした事が無いから………」

刹那

「た、確かに……………あの凶暴な生物達を生け捕りするのはかなり骨が折れそうですし……………」。

ネギー行とオリマーがお互いに顔を見合わせながら苦笑いしている……………。

社長

「おい、オリマー君！何をやっとするんだ？」

ルイー

「先に行っちゃいますよ！」

オリマー

「い、今行きま〜す！」

オリマーとネギー行が社長達の方まで急いで駆け寄ると、次の階へと繋がる入口の穴に入っていくのであった……………。

〔地下洞窟・三階〕

オリマー達は二階の入口の穴から次の段へとやって来る。

社長

「さて、早速お宝を……………」。

オリマー

「社長、ちょっと待って下さい！」

社長

「ん？」

突然、オリマーが一足先に駆け出そうとした社長を制止させる。

ルイー

「先輩、急にどうしたんスか？」

オリマー

「……………ルイー君、私と一緒に来てくれ。」

ルイー

「え？は、はい……。」

オリマーはルイーを連れて、このエリアの真ん中だと思われる広い場所まで歩き始める。

ネギ

(……………一体どうしたんでしょうか?)

刹那

(恐らく、何かの気配に気付いたのではないかと……………。)

ネギ一行は不安げな表情を浮かべながらオリマー達を目で見送る。

ルイー

「……………先輩、此処ら辺に何かあるんスか？」

オリマー

「ああ、私の予感だとそろそろ……………。」

二人が広い場所の真ん中の部分まで来て、オリマーがそう言い掛け

た途端……。

ドゥスー……ン！！

ルイー

「うわっ!？」

突然、オリマーとルイーの真上に金属のような気質で茶色っぽい色で胴体が丸くて長い四つの足を持つ巨大な蜘蛛のような生物が落下してくる。

明日菜

（ま、また何か出て来た!？）

のどか

（ま、まるで蜘蛛みたい……。）

社長

「しょえ〜!か、隠れろ〜!！」

ネギー一行が巨大な蜘蛛のような生物の出現に啞然としてみると、社長だけが血相を変えて奥の方へと避難していく。

オリマー

「やはりダマグモが現れたか………ルイー君！急いで沢山の黄ピクミンと紫ピクミンを連れて来るんだ！」

ルイー

「え？な、何で……。」

オリマー

「いいから早く……！」

ルイー

「は、はい……！」

ルイーはダマグモと呼ばれた生物の足を避けながらネギ達が居た場所まで駆け出していく。

ドスン！ドスン！

オリマー

「おっとっと！」

ダマグモがオリマーを踏み潰そうと四つの足で踏み付けようとする



が、オリマーは間一髪で避ける。

ルイー

「え〜っと、確か黄ピクミンと紫ピクミンだったっけ……………」

ピーーーーーッ!!

明日菜

(……………あ、あれ!?)

刹那

(ま、また体が勝手に……………)。

ルイーが笛を吹いた時、明日菜と刹那を含む複数の黄ピクミンと紫ピクミンがルイーに近付いていく。

ルイー

「よ〜し、集まったな……………一斉に行くぞ〜!」

そう言うと、ルイーが複数の黄ピクミンと紫ピクミンを引き連れてオリマーの方へと駆け出していく。

木乃香

(あ、明日菜とせつちゃんも一緒に行ってもうた……。)

ネギ

(……………ぼ、僕達も行きましょう！)

のどか

(は、はい！)

ネギと木乃香とのどかもルイー達の後を追い掛けていく。

ルイー

「先輩！言われた通りに連れて来ました〜！！」

オリマー

「そ、そうか……………それじゃ、紫ピクミンをダマグモの四つの足に三匹ずつ乗せてくれ！」

ルイー

「わ、分かりました！」

ポイ！ポイ！ポイ！

ポイ！ポイ！ポイ！

ポイ！ポイ！ポイ！  
ポイ！ポイ！ポイ！

ドン！ドン！ドン！  
ドン！ドン！ドン！  
ドン！ドン！ドン！  
ドン！ドン！ドン！

ルイーはオリマーの指示通りに、紫ピクミンを三匹ずつ投げ付けて  
ダマグモの平べったい四つの足の上に乗せる。

明日菜

(……………な、何？私はこれから何をすればいいの？)

ダマグモの足の上に乗った明日菜は訳が分からず戸惑ってしまふ。

グググググッ……………

オリマー

(思った通りだ……………紫ピクミンの重さで足が拳げられなくなっ  
た。)

オリマーは紫ピクミン達の重さで四つの足が拳げられないダマグモ

の姿を見て勝ち誇ったような表情を浮かべる。

オリマー

「ルイー君！この隙に黄ピクミンをダマグモの胴体に向けて投げ付けるんだ！」

ルイー

「は、はい！」

ポイ！ポイ！ポイ！  
ポイ！ポイ！ポイ！  
ポイ！ポイ！ポイ！  
ポイ！ポイ！ポイ！

ルイーはダマグモの胴体に向けて次々と黄ピクミン達を投げ付ける。

ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！

すると、黄ピクミン達が一斉にダマグモの胴体に頭突きを繰り返す。

刹那

(よ、よく分からないが私も一応攻撃を……。)

ボカッ！ボカッ！！

ボカッ！ボカッ！！

ボカッ！ボカッ！！

ボカッ！ボカッ！！

刹那は戸惑いながらも他の黄ピクミン達と同じようにダメージモに頭突きを繰り返す。

ブンブンッ！！

刹那

(わぁっ!?)

次の瞬間、ダメージモが全身を激しく揺らしながら黄ピクミン達を払い除ける。

パッカアーーーーッ！！

ドスンッ！！

すると、ダマグモがガラスが割れたかのように消滅していき、胴体もくす玉ように真つ二つに割れて、巨大な単四電池のような物を地面に落とす。

オリマー

「……………よし、上手くいった……………」

オリマーはダマグモをやっつけて心の底から一安心する。

社長

「いや、実に見事だったよ君達！」

社長がいきなり爽やかな表情でオリマーに駆け寄って来る。

社長

「では、早速お宝を回収するかのぉ！」

社長がそう言うと、黄ピクミン達が先程の巨大な単四電池を探查ポイントまで運び出していく。

明日菜

（……………） ったく、いいとこだけ全部持ってっちゃうんだから……………そ

れに、アレってただの電池じゃん。(

刹那

(ま、まあまあ……。)

刹那は小声で愚痴を零す明日菜を冷静に宥める。

木乃香

「せつちゃん!」

ガシッ!!

刹那

「わっ!?!、このちゃん?」

刹那は急に抱き着いてきた木乃香に思わず驚いてしまう。

木乃香

「ウチ、せつちゃんが行ってしまつた時、めっちゃん心配したんよ…」。

刹那

「このちゃん……………」

明日菜

「…………… ちょっと、私はどうでもいい訳？」

明日菜は木乃香が刹那だけしか心配してたような発言に対して不満な表情を浮かべる。

ネギ

「も、勿論僕は明日菜さんの事を心配してましたよ！」

明日菜

「ネ、ネギ……………」

明日菜は真剣に訴えるような表情を浮かべるネギに対して一瞬だけ嬉しそうに微笑むが……………。

明日菜

「…………… フ、フン！別にアンタなんか心配されても嬉しくなんか  
ないわよ！」

ネギ

「そ、そんな……………」



ネギは明日菜の素っ気ない（ように振る舞っている）態度に少し落ち込んでしまう。

オリマー

「な、何はともあれ……お宝も回収した事だし、次の階に進もうか。」

のどか

「そ、そうですね……。」

オリマーとネギ一行は次の階へと繋がっている入口の方へと駆け寄っていく。

ルイー

（……オリマー先輩、さっきから何でピクミンと話してるんだろう？）

ルイーは首を傾げながらオリマー達の後を追いつけていく。

社長

「お、おーい！このワシを置いて先へ進もうとするんじゃない！」

探査ポッドの方へ立ち寄っていた社長も急いでオリマー達の後を必  
死で追い掛けていくのであった……………。

第八十八話　地下に潜む巨大な生物達（前編）～（後書き）

ネギー行とオリマー達はどんどん地下の奥深くへと進んでいくのであつた……………。

第八十九話 地下に潜む巨大な生物達（後編）（前書き）

へビガラスとダマグモを倒したオリマー達は更に下の階へと目指していく……………。

第八十九話 地下に潜む巨大な生物達（後編）

↓ 地下洞窟・四階 ↓

オリマー達は辺りが少し薄暗い地下の四階へとやって来た。

社長

「よし、この階のお宝も全て回収するぞい！」

そう言うと、社長は真っ先に駆け出していく。

ネギ

（また先に行っちゃいましたね……………。）

オリマー

（ああ、今回の社長は本当に張り切ってるなあ……………。）

ネギー行とオリマーは真っ先に駆け出して行った社長に啞然としてしまう。

ルイ

「先輩、一応僕達も行きますか？」

オリマー

「ああ、行かなきゃ社長に怒られるからな……………」。

オリマーとルイーもピクミン達を引き連れて社長の後を追いついていく。

社長

「うひゃ~~~~っ!!」

オリマー

「な、何だ!？」

社長の叫び声を聞いたオリマー達は急いで駆け出していくと……………。

社長

「く、来るな〜!あっちへ行け〜!!」

全員

「!?!」

オリマー達が社長が居る場所までやって来ると、まだ足や斑点みた

いな模様も無いチャッピーのような小さな生物が口をパクパクさせながら怯えている社長にゆっくりと近付いて来ていた。

木乃香

（わあ〜！あの子、めっちゃ可愛ええわあ。）

木乃香はチャッピーのような生物を見るなり目を輝かせながら思わずうっとりしてしまふ。

オリマー

「ベビーチャッピーか……ほいっと！」

ポイツ！

グシャツ！！

ベビーチャツピー

「ギャツ！！」

オリマーが一匹の紫ピクミンを投げ付けると、そのままベビーチャツピーを押し潰してしまふ。

木乃香

(あ…………潰してもうた…………。)

明日菜

(ちよ、ちよっとやり過ぎじゃない？まだ赤ちゃんみたいだったし…………。)

オリマー

(いや、まだ幼生ようせいだからといって油断してはいけない…………ベビーチャッピーは生れつき捕食活動が盛んだから、ピクミンなんてあっという間に食べられてしまうんだ。)

ネギ

(ほ、本当ですか？)

ネギー行がオリマーの言葉に耳を疑っていると…………。

ブリッ！！

のどか

(な、何の音？)

刹那



(あっ！？アレは……………。)

刹那が音がした方を向いてみると、巨大で真っ赤な物体の小さな穴からベビーチャッピーが出て来ていた。

ネギ

(ま、また出て来ましたけど……………)。

オリマー

「やはり奴も此処に居たか……………それっ！！」

ポイツ！

グシャッ！！

ベビーチャッピー

「ギャピッ！！」

オリマーは再び一匹の紫ピクミンを投げ付けて、ベビーチャッピーを踏み潰していく。

ルイー

「せ、先輩……………この大きな物体ってまさか……………」

オリマー

「ああ、間違いない……………クイーンチャッピーだ。」

ネギ

(クイーンチャッピー?)

オリマー

「とにかく、急いで反対側へ行こう!」

そう言うと、オリマー達は慌ててクイーンチャッピーと呼ばれる生物の顔の部分を目指して大きく回り込むように駆け出していく。

明日菜

(……………それにしても、随分と大きな胴体ね……………一体何を食べた  
らこんな風に大きくなれるのかしら?)

明日菜はクイーンチャッピーの長くて図太い胴体を唾然とした表情を浮かべて眺めながらオリマー達に付いていく。

オリマー

「よし、やっと着いたぞ……………」

オリマー達はクイーンチャッピーがベビーチャッピーを生み出して  
いた卵巣の反対側までやって来ると、巨大な胴体の先に普通のチャ  
ッピーと全く同じ顔と小さな二本の足があった。

ネギ

(……………オリマーさん、顔の部分は普通のチャッピーなんですね。)

オリマー

(そう、クイーンチャッピーは体や卵巣等が異常に巨大化している  
んだ……………恐らく、食物の減少や環境の変化が主な原因だろう。)

ルイー

「……………先輩、さっきから何ブツブツ言ってるんスか？」

オリマー

「え？い、いや！何でもない……………」。

オリマーは慌ててルイーに弁解しようとする。

社長

「そんな事より、早くこの巨大生物をやっつけるんじや〜！」

そう言い残すと、社長は慌てて隅っこの方へと隠れるように駆け出していく。

木乃香

(社長はん、また逃げてもうたわ……………。)

明日菜

(……………つたく、逃げてばかりじゃない！)

明日菜は逃げ出すように去って行った社長に呆れ返る。

オリマー

「とにかく、一刻も早くコイツをやっつけないと此処ら一帯がベビ―チャッピーで埋め尽くされてしまうっ!」

ルイ

「そ、それは流石にヤバいッスね……………それそれっ!」

ポイツ!ポイツ!

ポイツ!ポイツ!

ポイツ!ポイツ!

ポイツ!ポイツ!

次の瞬間、オリマーとルーイがクイーンチャッピーの顔面に向けて一斉にピクミンを投げ付ける。

ボカッ！ボカッ！！

ボカッ！ボカッ！！

ボカッ！ボカッ！！

ボカッ！ボカッ！！

更にクイーンチャッピーの顔面に張り付いたピクミン達はそのまま強力な頭突きを繰り返す。

Cチャッピー

「グオーーーーーッ！！」

すると、ピクミン達の攻撃に耐え切れなくなったクイーンチャッピーが体を激しく揺らしながらピクミン達を払い除ける。

オリマー

「い、いかん……………みんな！急いで集合せよ！！」

ピーーーーーッ！！

オリマーが何かを察知して笛を吹くと、ピクミン達が一斉にオリマー達の方へと戻って来る。

ネギ

(き、急にどうしたんですか?)

オリマー

(見てれば分かるさ……………。)

Cチャッピー

「ヴォー……ッ!」

ゴロゴロゴロゴッ!…

ドッシー……ン!!

クイーンチャッピーは自らの体を左側の岩壁の方に向かって勢い良く転がり込んで、そのまま岩壁に激しく衝突する。

明日菜

(す、凄い迫力……………。)

オリマー

（クイーンチャッピーはああやって自分に襲い掛かって来る敵を巨大な体で踏み潰してしまっんだ。）

のどか

（お、恐ろしいですね……………。）

のどかはクイーンチャッピーの攻撃に少しだけ怖じ気づいてしまっ。

木乃香

（あや！？さっきのベビーチャッピーちゃん達がこっちに来るえ！）

刹那

（えっ！？）

木乃香の言う通りに、先程クイーンチャッピーに生み出されたであろう複数のベビーチャッピー達が口をパクパクさせながらオリマー達に近付いて来る。

明日菜

（い、いつの間にあんなに沢山生んだの！？）

オリマー

(クイーンチャッピーは最低でも五十匹以上のベビーチャッピーを生み出す事が可能なんだ。)

のどか

(そ、そんなに!?)

ネギー一行はオリマーの説明を聞いて度肝を抜かされる。

剎那

(どちらにせよ、そのベビーチャッピーがどんどん迫って来ますよ!)

ネギ

(このままでは全員食べられてしまいます!)

オリマー

(いや、それは無いな……………。)

木乃香

(え?何で?)

木乃香がオリマーの言葉に首を傾げた時……………。



「チャッピー」

「ヴォー……ッ……！」

ゴロゴロゴロゴロッ……！

グチャグチャッ……！

グチャグチャッ……！

ネギー行

「!?!」

左側の岩壁に居たクイーンチャッピーが先程と同じように右側の岩壁に向かって勢い良く転がり込んでいき、その勢いで真ん中を通っていた全てのベビーチャッピーを踏み潰してしまふ。

ドッシー……ン……！

そして、クイーンチャッピーはそのまま右側の岩壁に衝突してしまふ。

明日菜

（な、何て奴なの………さっき自分が生んだ子供達を自分で潰しち

やうなんて……………。

木乃香

（惨過ぎるわ……………。）

ネギー一行は先程の悲惨な光景に少しショックを受けてしまう。

オリマー

「やはり、子供にはショックが大きかったか……………」

ルイー

「え？何スか？」

オリマー

「いや、何でも無い……………それより、そろそろコレを使うとするか。」

そう言うと、オリマーが懐から真っ赤な液体が入ったガラス容器のスプレーを取り出す。

ネギ

（それは何ですか？）

オリマー

(後で説明するから……………それっ!!！)

プシューーーーーッ!!

オリマーがピクミン達に向けてスプレーを噴出させて吹き掛けると、ピクミン達の頭の花が真っ赤に染まり息が荒くなってしまふ。

木乃香

(な、何かピクミンちゃん達の様子が変やよ?)

刹那

(ええ、先程よりも息が荒くなりましたね……………。)

ネギー行は謎のスプレーを吹き掛けられたピクミン達の異変に戸惑い気味になる。

オリマー

「ルーイ君！もう一度ピクミンを投げ付けるんだ!!」

ルーイ

「は、はい!!」

ポイツ!ポイツ!!  
ポイツ!ポイツ!!  
ポイツ!ポイツ!!  
ポイツ!ポイツ!!  
ポイツ!ポイツ!!  
ポイツ!ポイツ!!

オリマーとルイーは先程よりも数多くのピクミンをクイーンチャツピーの顔面目掛けて投げ付けていく。

ボカッ!ボカッ!!  
ボカッ!ボカッ!!  
ボカッ!ボカッ!!  
ボカッ!ボカッ!!  
ボカッ!ボカッ!!  
ボカッ!ボカッ!!  
ボカッ!ボカッ!!

すると、クイーンチャツピーの顔面に張り付いたピクミン達が先程よりも強力で凄まじい位の頭突きを繰り返す。

Cチャツピー

「グアーーーーッ!!」

ポオーーーーーッ！！

バタンッ！！

しばらくすると、クインチャッピーが体中から爆発音のような大きな音を上げながら力尽きて倒れ込んでしまう。

オリマー

「……………ふう、やっと倒したか……………」

ルーイ

「な、何か……………自分が戦った訳じゃないのに疲れたツス……………」

そう言いながら、オリマーとルーイは安堵あんどの表情を浮かべる。

明日菜

（……………それにしても、さっきまであんなに大きかった体がこんなにもしほ萎むなんてね……………。）

明日菜は先程とは比べ物にならない位に体が萎んでしまったクインチャッピーの死骸を眺めながら啞然とする。

ネギ

(……………ところで、さっきオリマーさんがピクミン達に吹き掛けたスプレーみたいな物は何だったんですか?)

オリマー

(ああ、アレは『激辛スプレー』といって、コレを吹き掛けられたピクミンは極限の興奮状態になり攻撃力が異状に高くなるんだ。)

刹那

(な、成程……………だからさっきピクミン達の息が荒くなったり、攻撃が激しくなっただけですね。)

オリマー

(そういう事……………それから、その他にも『激苦スプレー』というのものがあって……………。)

社長

「おゝい！あの生物はやつつけたかゝゝ！？」

オリマーが『激苦スプレー』について説明しようとした時、社長がこちらに駆け寄って来る。

ルイー

「はい、この通り見事にやっつけました。」

社長

「そうかそうか………それでは、早速その生物の死骸を探查ポッドまで運ぶんじゃー！」

ルイー

「分かりました。」

ルイーがピクミン達にクイーンチャッピーの死骸を持ち上げさせて運ばせると………。

ポトツ！！

クイーンチャッピーの口の中から黄色い家鴨アヒルの形した大きな玩具が落ちてくる。

社長

「ムムツ！？コ、これは紛れも無くお宝ではないか！！」

オリマー

「しかも、コレは以前回収した『天下一不細工』にそっくりじゃないか！！」

のどか

(て、『天下一不細工』って……………。)

木乃香

(何でそんな名前にしたんやろ?)

明日菜

(……………というか、どう見てもただの家鴨の玩具じゃない。)

ネギー一行は『天下一不細工』と呼ばれたお宝に思わず苦笑いする。

社長

「ルイー君！そのお宝も一緒に運ぶんじゃー!!」

ルイー

「も、勿論……………」

そう言うと、ルイーは複数のピクミン達に『天下一不細工』(と酷似するお宝)を持ち上げさせて探査ポッドまで運ばせる。

パァー……………ッ!!



チャリイーーーーン!!

ピクミン達がクイーンチャッピーの死骸と『天下一不細工』らしきお宝を探查ポッドの真下まで運ぶと、いつものように探查ポッドが先程の二つの品を吸い込むように回収していく。

ドルフィン

「クイーンチャッピーの死骸と『天下一不細工』の模造品と思われるお宝を回収しました!」

社長

「よし、この調子でもっともっとお宝を回収するぞい!」

ルイー

「という事は、まだ先へ進むって事ッスか?」

社長

「当たり前じゃ! 此処まで来たら、この地下洞窟のお宝を全て回収するんじゃない!」

そう言うと、社長が早く次の階へと続く入口の穴に向かって駆け出していく。

ルーイ

(あゝあ、早く『ホコタテ星』に帰りたいなあ……………。)

そんな事を思いながら、ルーイはあまり乗り気でない足取りで社長の後を追いつけていく。

オリマー

「……………さてと、我々も行くとするか。」

ネギ

「は、はい!」

オリマーとネギ一行もルーイの後から入口に向かって駆け出していく。

オリマー達が五階へと続く入口の穴に入ると、今までとは違い機械的な場所へとやって来た。

明日菜

（あれ？何だか、今までの階とは違う感じね。）

刹那

（そうですね、地面が土ではなく鉄で出来ているようですし……。）

ネギー一行は今までの階とは明らかに違う構造に思わず違和感を覚える。

社長

「はてさて、この階にはどんなお宝があるのか楽しみじゃな。」

そう言うと、社長は数匹のピクミンを引き連れながら何処かに駆け出していく。

ルイー

「それじゃ、僕はこっちの方へ行って来ます。」

ルイーも数匹のピクミンを引き連れながら社長とは別の方角へと駆け出していく。

木乃香

「ほなら、ウチらも行くか〜！」

そう言うと、木乃香はオリマー達よりも一足先に駆け出していく。

刹那

「お、お嬢様！一人で先に進んじゃ危険ですよ〜！」

明日菜

「全く、しょうがないわねえ……………」

オリマー

「とにかく、私達も行くでしょう〜！」

オリマー達も慌てて木乃香の後を追い掛けるように駆け出していく。

木乃香

「う〜んと、何かあらへんかなあ……………あや？」

木乃香は何処かにお宝がないか探し回っていると、煙りを上げてる機械のような丸い物体が視界に入る。

木乃香

「……………これは一体何々やる？」

そう言いながら、木乃香は丸い物体に近付いてみると……………。

プッシュューーーーーッ！！

ガシャン！ガシャン！

木乃香

「!?!」

次の瞬間、丸い物体は更に激しく煙りを上げながら地面から細い四つ足の足が出て来る。

木乃香

「え？な、何なんコレ……………。」

オリマー

「危ない！早くそいつから離れて！！」

ガシッ！！

すると、急いで駆け寄って来たオリマーが木乃香の手を握りながら謎の生物から離れようとする。

ウィーーーーン……

ズドドドドドドツ！！

更に謎の生物は下半分からランチャー砲のような長い銃口を出して、オリマー達に狙いを定めながらエネルギー弾を発射させる。

オリマー

「マ、マズイ！撃ってきた……………」

ネギ

「オリマーさん！こっちですよー！！」

オリマーと木乃香が謎の生物の攻撃から逃げていると、ネギが物陰

から顔を出して手招きをする。

木乃香

「ネ、ネギ君！」

オリマー

「わ、分かった！」

オリマーと木乃香は急いでネギ達が隠れていた物陰に入る。

刹那

「お嬢様！怪我はありませんか！？」

木乃香

「う、うん……………ウチは平気や……………」。

明日菜

「全く、あまり心配掛けないでよ……………」。

のどか

「でも、無事で良かったです。」

明日菜達は木乃香の安否を聞いて一安心する。

刹那

「オリマーさん、木乃香お嬢様を助けて頂きありがとうございます！」

木乃香

「ホ、ホンマにありがとうございます！」

そう言うと、刹那と木乃香はオリマーに向かって深く頭を下げる。

オリマー

「いや、今はお礼よりもダマグモキャノンを何とかしなければ……」

ネギ

「ダマグモキャノン？」

オリマー

「先程私達に攻撃してきた生物さ………奴の攻撃が一発でも命中すれば即アウトだ。」

明日菜



「それじゃ、迂闊に近付けないじゃない……。」

オリマー

「……………いや、一つだけ奴を倒す方法がある。」

のどか

「えっ？」

ネギー一行はオリマーの発言に耳を傾ける。

オリマー

「これで奴の動きを封じ込めるんだ。」

そう言うと、オリマーは懐から紫色の液体が入ってる『激辛スプレー』と同一のガラス容器のスプレーを取り出す。

ネギ

「それって、さっきオリマーさんが説明しようとした……………。」

オリマー

「そう、この『激苦スプレー』に吹き掛けられた生物はまるで石みたいに固まってしまふんだ。」

明日菜

「い、石に……それってかなり凄いやない！」

刹那

「ですが、どうやってあの生物に接近してスプレーを吹き掛けるのが問題ですね……………」

オリマー

「大丈夫、私が奴の攻撃を避けながら接近してスプレーを吹き掛ける。」

ネギー行

「ええっ!?!」

ネギー行はオリマーの発言に耳を疑ってしまつ。

ネギ

「そ、それは幾ら何でも危険ですよ!」

オリマー

「心配は要らない、目一杯走り抜けばギリギリ回避出来るハズだから。」

刹那

「じ、しかし……………」

オリマー

「それでは、早速行って来る！」

木乃香

「オ、オリマーはん!？」

オリマーは物陰から出て来て、ダマグモキャノンの向かって勢い良く走り出していく。

ズドドドドドドッ!!

オリマー

「わっつとっ!？」

オリマーはダマグモキャノンの連続攻撃を間髪避けながらどんどん接近していく。

のどか

「あ、危ない!」

明日菜

「頑張つて！後もう少しよ！！」

ネギー一行は物陰から顔を覗かせながらオリマーを応援する。

オリマー

（ハアハア……………そ、そろそろ頃合いだな……………。）

やっとの事でダメグモキャノンの目の前まで接近したオリマーは息遣いを荒くしながら『激苦スプレー』を構える。

オリマー

「喰らえ————っ！！」

プシュー————ッ！！

次の瞬間、オリマーはダメグモキャノンに向かって『激苦スプレー』を吹き掛ける。

ウィ————ン……………

ところが、ダマグモキャノンのランチャー砲がオリマーに狙いを定める。

明日菜

「ちょ、ちょっと！効いてないんじゃない!？」

ネギ

「そ、そんな……………」

ネギ一行がもはやオリマーは絶体絶命だと思った時……………。

カチカチカチ……………

突然、ダマグモキャノンが足の先から頭のとっぺんまでどんどん石になっていく。

木乃香

「ホ、ホンマに石になってく……………」

刹那

「どつやら、上手くいったみたいですね。」

オリマー

「ふう、一瞬失敗したかと思った……………ピクミン集合!」

ピーーーーーッ!!

オリマーが一息付いた後で笛を吹くと、ピクミン達（ネギー行も含む）が一斉に駆け寄って来る。

オリマー

「よし、集まったな……………そろよつと!」

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

ポイツ!ポイツ!!

オリマーは石になったダメージモキャノンに向かってピクミン達を投げ付ける。

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

ボカッ!ボカッ!!

すると、ピクミン達がいつものようにダマグモキャノンに頭突きを繰り返す。

ピキピキ……………

ガッシャー——ン！！

しばらくすると、ダマグモキャノンにビビが入って、そのまま砕け散ってしまふ。

ポトツ！！

更にダマグモキャノンの体内からビー玉のような透明の丸い物が落ちてくる。

木乃香

「わあ、大きなガラス玉や！」

明日菜

「というより、ただの大きなビー玉にしか見えないわね……………」。

のどか

「綺麗……………」

ネギー一行は興味津々にビー玉のような物体を見つめる。

社長

「お〜い！さっきの音は何じゃ〜!？」

すると、向こう側から社長とルイー達がこちらに駆け寄って来る。

ルイー

「あれ？先輩、それって……………」

社長

「おお！流石はオリマー君……………もうお宝を見つけたんじゃない！」

オリマー

「え？ま、まあ……………」

オリマーは社長の質問に思わず曖昧に答えています。



社長

「とにかく、そのお宝を回収するんじゃない！」

ルイー

「は、はい……………」

ルイーは数匹のピクミン達にビー玉らしきお宝を運ばせていく。

ネギ

「……………それにしても、さっきのオリマーさんの行動は凄かったですねぇ！」

明日菜

「本当にね！攻撃してくる敵に向かって勇敢に突っ込んで行かないで……………」

オリマー

「い、いや……………私はただ無我夢中で……………」

オリマーはネギ達の言葉に謙遜しながら照れてしまう。

社長

「おっ、オリマー君！早く次の階に行くぞっ！！」

オリマー

「は、はい！只今……………」。

明日菜

「ま、まだ下に続く階があるの？」

ネギ

「そつみたいですね。」

のどか

「一体何階まであるんでしょうか？」

木乃香

「さあ……………まあ、別にええやん。」

刹那

「お嬢様は相変わらずですね……………それでは、先へ進みましょう！」

オリマー

「ああ、そつしおつし……………」

「いついつて、オリマー達は更に下の階へと進んでいくのであった……」。

第八十九話 地下に潜む巨大な生物達（後編）（後書き）

果たして、次の階にはどんな原生生物が待ち伏せているのか？

第九十話 超戦慄！一体の巨大生物の襲来！？（前書き）

ネギー行とオリマー達は更に下層へと進んでいくのだが……。

第九十話 超戦慄！二体の巨大生物の襲来！？

↓地下洞窟・六階↓

オリマー達は次のお室を目指して、今までの階よりも広くて薄暗い地下の六階へとやって来た。

オリマー

「……どうやら、此处が最後の階のようだな。」

社長

「という事は、この階には物凄く価値があるお室が……よし！張り切って探すぞーいー！」

ルイー

「じゃ、社長！ちょっと待って下さいー！」

社長とルイーはオリマー達よりも一足先に駆け出していく。

明日菜

「あゝあ、また先に行っちゃって……。」

オリマー

「まあいいさ、私達は少しゆっくり進むとしよつ。」

ネギ

「そうですね。」

オリマー達も二人の後をゆっくりと追い掛けていく。

のどか

「……………ん？」

木乃香

「どないしたん？」

のどか

「あの大きな岩みたいな物は何でしょうか？」

そう言うと、のどかはそこから辺に転がってる巨大な丸い岩のような物体に向けて指差す。

木乃香

「何やる……………ひょっとして、アレもお宝とちゃうかな？」

のどか

「それだったら、オリマーさんに知らせなきゃ……………」。

木乃香

「それより、ウチら二人だけで運ばへん？」

のどか

「えっ！？で、でも……………私達二人だけで運ぶのは無理じゃないですか？」

のどか

「大丈夫やて、今はウチらもピクミンやし……………それに、ウチらだけでお宝を回収したらネギ君も見直してくれるかもしれへんよ？」

のどか

「ネ、ネギ先生が？」

のどかは木乃香と二人だけでお宝を回収した後のネギの反応を想像してみると……………。

ネギ

『わあ〜！コレって、のどかさん達だけで回収したんですか！？』



のどか

『は、はい……。』

ネギ

『凄いいじゃないですか！僕、のどかさんの事を見直しちゃいましたよ！』

のどか

「そ、そんな大袈裟な……………／／／」

木乃香

（のどかだったら、すっかり自分の世界に入っとるなあ……………。）

そう思いながら、木乃香は完全に自分の世界に入ってしまったのどかを苦笑いしながら見つめる。

木乃香

「ほなら、早速このお宝を回収しよ？」

のどか

「は、はい！」

そう言つて、木乃香とのどかが大きな岩を運び出そうと近付いた時……。

オリマー

「わあ〜！そ、その岩に触れちゃ駄目〜！！！」

木乃香&のどか

「わひゃっ!？」

木乃香とのどかはオリマーの大声に思わずその場で飛び跳ねてしまふ。

ネギ

「な、何かあつたんですか!？」

ネギ達は何事かと思ひ、オリマーの方へと駆け寄つて来る。

オリマー

「いや、木乃香ちゃん達が『爆弾岩』に触ろうとしたから……………」。

木乃香&のどか

「ば、『爆弾岩』!？」

木乃香とのどかはオリマーの発言に耳を疑った。

オリマー

「そう、この『爆弾岩』にちょっとでも刺激を与えたらすぐに爆発してしまう危険な岩なんだ。」

のどか

「そ、そうだったんですか……………」

木乃香

「もし、オリマーはんが止めてくれへんかったら……………考えただけでもゾクッとするわ……………」

木乃香とのどかは先程の自分達の行動を振り返って顔色が真っ青になる。

明日菜

「まあ、何はともあれ爆発しなくて良かったじゃない。」

刹那

「そうですね、お二人がご無事で何よりです。」

ネギ

「はい、無事に越した事はありませんし……。」

社長

「オリマー君！急いで来てくれ〜！！」

オリマー

「ん？社長が呼びだな……今行きます！」

オリマー達は急いで社長の声が聞こえた方へと駆け出していく。

ネギ

「向こうで何かあったんでしょうか？」

明日菜

「どうせ『また何とか生物が現れたからやつつけてくれ〜！』とか  
『お宝を発見したから運び出すんじゃない？』とか言っんじゃない？」

オリマー

（ハハハ……正にその二つのどれかだな……。）

オリマーは明日菜の社長に対する皮肉っぽい言葉に思わず苦笑いする。

社長

「おっ、い、此処じゃ！」

しばらく走っていると、社長が手招きしながらオリマー達を呼び掛ける。

オリマー

「社長、一体どうしたんですか？」

社長

「うむ、コレを見てくれ。」

オリマー達は社長が指差す先を見ると……。

ネギ&刹那

（あっ！？）

ネギと刹那は地面に埋まっている大きなネギの杖と刹那の夕凧を見て驚愕する。

ネギ

（な、何で僕の杖がこんな所に！？）

刹那

（それに、私の夕凧まで……………。）

明日菜

（……………あれ？杖や刀の他にも何か埋まってない？）

木乃香

（え？どれどれ……………。）

ネギ達は明日菜が指差す先を見ると、杖や夕凧の他にもアカコチャッピーが半分程埋まっていた。

のどか

（ほ、本当だ……………アレって、チャッピーという名前の生物でしたっけ？）

ネギ

（はい、確かそんな名前でしたね……………。）

オリマー

「うーん、あのアカコチャッピーはともかく……この二つのお宝は今まで見た事ありませんね。」

社長

「そうじゃろ？きつと今までのお宝よりもずっと価値があるに決まってる……さて、早速ピクミン達に運ばせるとするか！」

そう言つて、社長が引き連れていたピクミン達がネギの杖等に近付こうとした瞬間……。

アカコチャッピー？

「……………た、助けて……………くれ……………」

社長

「オ、オリマー君！今、あのチャッピーが喋ったぞい！？」

オリマー

「そ、そんな馬鹿な……………」

オリマーと社長は今にも死にそんな声で弱々しく喋るアカコチャッピーに驚愕する。

明日菜

(ネ、ネギ……………今の声って……………。)

ネギ

(ま、まさか……………。)

ネギ一行はアカコチャツピーの聞き慣れた声に耳を傾ける。

アカコチャツピー？

「助けてくれ……………兄貴……………姐さん……………みんな……………何処に居るんだよ……………。」

ネギ一行

「!?!?」

更にネギ一行はアカコチャツピーの発言に耳を疑った。

ネギ

「カ、カモ君……………カモ君だよね？」

オリマー

(ネ、ネギ君?)



社長

「な、何じゃ！？このピクミンも喋りおったぞ！」

社長は突然喋り出したネギに再び驚愕する。

ネギ

「カモ君！僕は此処に居るよ！！」

そう行つて、ネギがカモに近付こうとした時……。

ズボツ！ズボツ！！

全員

「！？」

突如、地面から蜘蛛の足のような四つの長い物体が勢い良く出て来る。

明日菜

「い、一体何なのコレ！？」

オリマー

(も、もしかしたら……………。)

ズボォー……ッ!!

そして、カモ達が埋まっていた地面の真下から蟹のような二つの長い鉄を持った巨大な蜘蛛らしき生物が顔を出す。

社長

「どひゃ〜!で、出た〜〜!!!」

社長は叫び声を上げながら勢い良く逃げ出してしまつ。

のどか

(く、蜘蛛お〜〜!?)

木乃香

「せつちゃ〜ん!ウチ、蜘蛛は苦手やわ〜!!!」

刹那

「い、ご安心下さい!木乃香お嬢様は私が命に変えても……………。」

ネギ

「オリマーさん！この蜘蛛みたいな生物は一体……………」

オリマー

「ああ、コイツの事は嫌という程知っている……………ヘラクレスオオヨロビグモだ！」

ルイー

「オリマー先輩……………」

突然、ルイーが血相を変えてオリマー達の方へ駆け寄って来る。

オリマー

「こ、今度は何だ！？」

ルイー

「じ、実はさっき……………小さな小山のような物体があって、近付いてみたら地面からあいつが現れて……………」

そう言って、オリマー達はルイーの指差す先を見ると……………。

？

「ヴワァ……………」

そこには背中に茸のような物を生やして、岩みたいな硬い皮膚に覆われたアカチャツピーのような顔をした巨大な生物がヨダレを垂らしながら凄まじい雄叫びを上げていた。

明日菜

「ま、また別の巨大生物が……………!？」

オリマー

「な、何という事だ……………こんなに巨大なダイオウデメマダラまで居たとは……………」

オリマーはほぼ同時に出現した二体の巨大な原生生物に思わず顔色が真っ青になってしまう。

スッパア……………ン!!

ピクミン達

「キュー……………ッ!!」

次の瞬間、ヘラクレスオオヨロビグモが背中に背負っていた夕風を片方の鋏で持って近くに居たピクミン達を次々と切り付けていく。

刹那

(あ、あいつ！私の夕風で……………。)

刹那が自分の愛用してる刀をヘラクレスオオヨロヒグモに使われている事に驚いていると……………。

ドオーーーーーーッ！！

更にヘラクレスオオヨロヒグモが同じく背中に背負っていたネギの杖をもう片方の鉄で持つと、ネギと同じように光の魔法弾を放ってピクミン達に命中させる。

ネギ

(なっ！？ぼ、僕と同じ魔法を……………しかも、呪文も唱えずに……………。)

ネギも刹那と同じような表情で驚愕してしまっ。

ベロオ~~~~~ッ！！

ゴクッ！！

そして、ダイオウデメマダラは粘着力のある長い舌で近くに居た複

数のピクミン達を搦め捕るようにして、そのまま一気に飲み込んでしまおう。

木乃香

「ピ、ピクミンちゃん達が食べられてもった!」

明日菜

「どうすんの!?!このままじゃ、全員切り裂かれちゃうか魔法の餌食になっちゃうか食べられちゃうわよ!!!」

ルイー

(ピ、ピクミンが喋ってる!?)

ルイーは思わず喋り出してしまった明日菜達に目を見開きながら驚愕する。

オリマー

(こ、これは史上最大のピンチだ………巨大なボス級の原生生物が同時に二体も出現するとは………こんな事は今まで一度も無かった………一体どうすればいいんだ!?)

そう思いながら、オリマーはこの危機的状態を回避する術を知恵を振り絞りながら深く考え込む。

ネギ

「……………オリマーさん！オリマーさん！！」

オリマー

「……………ハッ！？」

考え込んでいたオリマーは、ネギに呼び掛けられて我に返る。

ネギ

「あの生物達はどうすれば倒せるんですか？」

オリマー

「あ、ああ……………まず、あのダイオウデメダラは背中が岩のように硬い皮膚に覆われているから顔の部分を攻撃しないと倒す事が出来ない。」

刹那

「では、あの蜘蛛のような生物は？」

オリマー

「ヘラクレスオオヨロヒグモは身体を攻撃すれば倒せるが……………あの刃物ような物があるから迂闊に接近出来ないな。」

明日菜

「じゃあ、さっきの何とかスプレーを使って石にしちゃえば……………」。

「

オリマー

「それが、『激苦スプレー』と『激辛スプレー』は後一回しか使えないんだ……………」。

木乃香

「あ、後一回!？」

オリマー

「だから、スプレーは最低でもそれぞれの敵に一回ずつしか使用出来ないと考えた方がいいだろう。」

ネギ

「そ、そうですね……………」。

ルイー

「せ、先輩!僕達、すっかり取り囲まれちゃいましたよ!!」

ルイーの言う通りに、オリマー達はダイオウデメマダラとヘラクレ  
スオオヨロヒグモの間に取り囲まれてしまっていた。



オリマー

(し、しまった！話し込んでいて全然気付かなかった……………。)

シャキーーーーーン!!

ヘラクレスオオヨロヒグモは刹那の夕風を今にも振り翳そうとしながらゆっくりとオリマー達に近付こうとする。

ピョーーーーーン!!

それと同時に、ダイオウデメマダラがオリマー達を踏み潰そうとする。その場で物凄く高くジャンプをする。

刹那

(な！？あの体型であんなに高く飛び上がるとは……………。)

オリマー

「マズイ……………みんな！急いで逃げろー!!」

そう言うと、オリマー達は二体の巨大生物の間から慌てて逃げ出していく。

ドゥッシーーーーーン!!

そのまま勢い良く下降してきたダイオウデメマダラの踏み付け攻撃を回避出来て一安心  
オヨロヒグモを踏み付けながらどうにか着地をする。

オリマー

「ふう〜、危ないところだった……………」

オリマーはダイオウデメマダラの踏み付け攻撃を回避出来て一安心  
する。

明日菜

「あの蜘蛛みたいな奴、あのデカい奴に潰されちゃったんじゃない  
?」

ネギ

「そんな……………じゃあ、カモ君は……………」

オリマー

「カモ君?」

オリマーはネギの言葉に耳を傾ける。

木乃香

「カモ君はネギ君の大切な友達なんやけど……あの蜘蛛さんの中に入ってるみたいなんよ。」

オリマー

（それじゃ、さっきのアカコチャッピーが……。）

オリマーは木乃香の説明を聞いて納得をする。

ガシャン！ガシャン！

次の瞬間、ヘラクレスオオヨロヒグモが覚束ない足取りで辺りを歩き回る。

のどか

「……………どうしたんでしょうか？」

オリマー

「恐らく、さっきダイオウデメマダラに踏み付けられたショックで混乱してしまったのだろっ。」

明日菜

「そんじゃ、この隙にあのデカイ奴を先にやっつけちゃいませよ！」

ルイー

「でも、確かあいつの舌は粘着力があるから、ちょっと触れただけでもすぐに獲物を舌で搦め捕ってそのまま食べちゃうんだよなあ……」

刹那

「では、迂闊に近付くのは危険ですね……」。

明日菜

「だからって、このまま何をしないよりは……ん？」

そう言い掛けると、明日菜はそこから辺に転がってる『爆弾岩』に目を奪われる。

ネギ

「あ、明日菜さん？」

明日菜

「……………そうだ……！」

明日菜は何か閃いたような表情をした後、ダイオウデメマダラに向かって走り出していく。

オリマー

「お、おい！一人だけじゃ危険過ぎるよ！！」

ネギ

「明日菜さーん！待って下さーい！！」

オリマーとネギは慌てて明日菜の後を追いついていく。

ダイオウデメマダラ

「……………ヴウツ？」

ダイオウデメマダラはこちらに近付いて来た明日菜に気が付く。

明日菜

「やーいやーい！此処までおいでー」

そう言いつつ、明日菜は慌ててその場から立ち去っていく。

ダイオウデメマダラ  
「ヴワアー……ッ!!」

すると、ダイオウデメマダラが明日菜の挑発に乗ったかのように明日菜を追い掛け始める。

ネギ

「ゼエゼエ……い、一体明日菜さんは何をしようとしてるんだろっ?」

オリマー

「さ、さあ……。」

ネギとオリマーは息遣いを荒くしながら明日菜を追い掛け続ける。

明日菜

（ハアハア……この姿だと体が重いから走るのも一苦労だわ……  
……。）

そんな事を思いながら、明日菜はダイオウデメマダラに捕まるまいと必死に走り続ける。

明日菜

( や、やっと着いた……。 )

しばらくすると、明日菜は『爆弾岩』が転がってる所で急に立ち止まる。

ダイオウデメマダラ

「ヴォー……ッ!!」

明日菜の近くまで追いついてきたダイオウデメマダラは舌を伸ばそうと口を大きく開ける。

明日菜

( ……よし!今だ!! )

ドンッ!!

次の瞬間、明日菜は近くに転がっていた『爆弾岩』をダイオウデメマダラに向かって押し出していく。

ベロ~~~~~ン!!

ゴクッ!!

ダイオウデメマダラはそのまま『爆弾岩』を舌で搦め捕り、一気に飲み込んでしまう。

ドツカアーーーーン!!

ダイオウデメマダラ

「キユ~~~~ツ……………」

すると、『爆弾岩』がダイオウデメマダラの中で爆発して、ダイオウデメマダラは前にのめり込むように倒れて目を回してしまう。

明日菜

「よっしゃ！上手くいったわ!!」

ネギ

「す、凄いじゃないですか明日菜さん!!」

オリマー

「それにしても、『爆発岩』をこんなに上手く使いこなすとは……  
…黄ピクミンよりも凄いな。」



そう言いながら、ネギとオリマーが明日菜にゆっくりと駆け寄って来る。

明日菜

「オリマーさん！今の内にあのデカイ奴を片付けちゃいませよー！」

オリマー

「ああ、そうしよーじょ。」

そう言って、オリマーが笛で残りのピクミン達を呼び集めようとしたら……。

ネギ

「あ、危ない！急いで逃げませよー！」

明日菜&オリマー

「えっ？」

明日菜とオリマーはネギの突然の発言に首を傾げる。

ドオーーーーーーン！！

すると、正気を取り戻したヘラクレスオオヨロヒグモが遠距離でネギ達に向けて雷の魔法弾を放つ。

明日菜

「う、嘘でしょ!?!」

オリマー

「に、逃げろおー!!」

ネギ達は慌ててその場から全力疾走で駆け出していく。

ズツバアーーーーン!!

ダイオウデメマダラ

「グオーーーーッ!!」

バタンツ!!

ヘラクレスオオヨロヒグモが放った雷の魔法弾は全てダイオウデメマダラに命中して、ダイオウデメマダラはそのまま絶命してしまう。

オリマー

「き、危機一髪だった……………」

明日菜

「……………アンタ、よくあいつが攻撃してくるって気付いたわね。」

ネギ

「は、はい……………微かに魔力を感じたので……………」

ルイー

「先輩……………」

突然、ルイーと木乃香達が慌ててオリマー達の方に駆け寄って来る。

木乃香

「三人共、怪我とかしてへん？」

明日菜

「ええ、今のところはね……………」

刹那

「そうですね、それを聞いて安心しました。」

刹那達は明日菜の言葉に取り合えず一安心する。

オリマー

「だが、安心するのはまだ早い……まだヘラクレスオオヨロヒゲモが残っている。」

ネギ

「そ、そうですね……しかも、あの生物は僕の杖と刹那さんの刀を武器にしていますし……。」

明日菜

「そこがかなり厄介なのよねえ……。」

ガシャン！ガシャン！  
ガシャン！ガシャン！

次の瞬間、ヘラクレスオオヨロヒゲモがこちらにどんどん近付いて来る。

のどか

「こ、こっちに向かって来ます！」

ネギ

「皆さん！気をつけて下さいね！！」

ネギ達はヘラクレスオオヨロビグモの接近に警戒しながら身構える。

ガシャンッ！！

ところが、ヘラクレスオオヨロビグモがダイオウデメマダラの死骸の前で急に立ち止まる。

木乃香

「……………あや？止まった？」

ルイー

「どっしたんだろっ？」

オリマー

「ひょっとして……………」

ネギ

「何ですか？」

オリマー

「ヘラクレスオオヨロヒグモはダイオウデメマダラの死骸を背負おうとしてるんだ。」

オリマー以外全員

「えっ!?!」

ネギ達はオリマーの言葉に思わず耳を傾ける。

剎那

「どついう事ですか?」

オリマー

「ヘラクレスオオヨロヒグモは元々シヨイグモ科の仲間だから、自分よりも数十倍の大きな死骸でも動かせる物なら何でも背負わせるという習性があるんだ。」

明日菜

「じゃあ、あいつはあの死骸を背負おうとしてるの?」

オリマー

「ああ……マズいな、あんな物を背負ってしまったらダイオウデメマダラの硬い皮膚に守られてヘラクレスオオヨロヒグモに攻撃出来なくなる。」

ネギ

「そ、そんな……………」

ネギ達は更に敵側が優勢になってしまう危機的状况に困惑してしま  
う。

ルイー

「……………そうだ!！」

オリマー

「き、急にどうした?」

ルイー

「先輩! コレをちょっと借りますよ!！」

オリマー

「え? お、おい!？」

突然、ルイーはオリマーから『激苦スプレー』を奪うように取って  
いき、ヘラクレスオオヨロビグモに向かって駆け出していく。

ネギ

「あの人、一体何をするつもりなんでしょうか？」

オリマー

「さ、さあ……………彼の考えてる事は私にもあまり分からない。」

オリマー達は不安げにルーイの行動を眺める。

ルーイ

「よ、よし！着いたぞ……………それっ！！」

プシュー……………ッ！！

次の瞬間、ルーイはダイオウデメマダラの死骸に向けて『激苦スプレー』を吹き掛ける。

ズボオ……………ッ！！

その直後、ヘラクレスオオヨロヒグモは杖と夕凧を持ったままダイオウデメマダラの死骸を持ち上げて自らの背中に背負わせていく。

ルーイ

（頼む！上手くいってくれ……………。）



そう思いながら、ルーイが祈っていると……。

カチカチカチ……

突如、ヘラクレレスオオヨロヒグモに背負われたダイオウデメマダラの死骸がどンドン石になっていく。

グッシャー……ッ!!

すると、ヘラクレレスオオヨロヒグモは石になったダイオウデメマダラの重さに耐え切れずに地面へとめり込んでしまう。

ルーイ

「やった〜！上手くいった〜!!」

ルーイは嬉しさのあまりその場で勢い良く飛び跳ねてしまう。

オリマー

「お〜い、ルーイ君！」

その時、オリマー達が急いでルーイの方へと駆け寄って来る。

ルーイ

「先輩！ほら、上手くいきましたよ！！」

オリマー

「ああ、全部見てたよ……まさかダイオウデメマダラの死骸をヘラクレスオオヨロビグモに背負わせる前に『激苦スプレー』で石にして、その重さで奴の動きを封じ込めるとは……流石の私も思い付かなかったよ。」

明日菜

「アンタ、意外と頭良いじゃない！」

木乃香

「うち、ルーイはんの事を見直したわ！」

ルーイ

「い、いやぁ……。」

ルーイはみんなに褒められて思わず照れてしまう。

コノコノコノコノコノコノッ……

すると、ヘラクレスオオヨロヒグモが石になったダイオウデメマダラを持ち上げようと四つの足で必死で踏ん張ろうとする。

オリマー

「おっと、早いところ奴を倒さないと……………残りのピクミンは全員集合せよ！」

ピーーーーーッ！！

オリマーが笛を吹いた瞬間、この階に居た全てのピクミン達が一斉に集結する。

ルイー

「先輩、最初の時と比べてかなり減っちゃいましたね……………」

オリマー

「そうだな……………だが、まだコレが残ってる。」

そう言うと、オリマーは懐から『激辛スプレー』を取り出す。

オリマー

「コレを使えば、この数でも奴をあっという間に倒せるだろう……」

そう言い掛けて、オリマーがピクミン達に『激辛スプレー』を吹き掛けようとした時……。

ネギ

「待って下さい！」

オリマー

「ん？どうした？」

ネギ

「僕も一緒に戦います！！！」

オリマー＆ルイー

「ええっ！？」

オリマーとルイーはネギの発言に耳を疑った。

オリマー

「し、しかし……」。

ネギ

「お願いします！僕、自分の手でカモ君を救い出したいんです！！！」

ルイー

「……………先輩、どうします？」

オリマー

「……………。」

オリマーは必死に訴えるネギを真剣な表情で見据える。

オリマー

「分かった！ネギ君がそこまで言うなら……………」

ネギ

「あ、ありがとうございます！！！」

ネギはオリマーに向かって深く頭を下げる。

明日菜

「待ちなさい！！！」

ネギ

「えっ？」

明日菜に呼び止められたネギは思わず首を傾げる。

明日菜

「アンタだけに戦わせる訳にはいかないでしょ？勿論、私達も一緒に戦うわよ！」

刹那

「無論、私も戦います！」

木乃香

「ウチもやるえ〜！」

のどか

「お、及ばずながら私も……………」

ネギ

「み、皆さん……………」

ネギは明日菜達の決意に思わず涙ぐんでしまう。

オリマー

「それじゃ、話が纏まったところで……準備はいいかい？」

ネギー行

「はい!!」

オリマー

「じゃあ、吹き掛けるよ……それっ!!」

プシューーーーーッ!!

次の瞬間、オリマーはネギー行やピクミン達に向けて『激辛スプレ』を吹き掛ける。

ネギ

(……………うっ!?)

明日菜

(な、何これ？凄く興奮してきた……………。)

刹那

(何て強力なんだ………理性を抑えるのが精一杯だ………。)

ネギー行はあまりの興奮状態に戸惑いながらも、頭の花が真っ赤に染まっていく。

オリマー

「よし！全てのピクミンを一匹残らずへラクレスオオヨロヒグモの身体に投げ付けるぞー！」

ルイー

「はいー！」

ポイツ！ポイツ！！

ポイツ！ポイツ！！

ポイツ！ポイツ！！

ポイツ！ポイツ！！

ポイツ！ポイツ！！

ポイツ！ポイツ！！

オリマーとルイーはネギー行とピクミン達を地面に半分だけ埋もれているへラクレスオオヨロヒグモの身体に向かって勢い良く投げ付ける。

ボカッ！ボカッ！！



ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！  
ボカッ！ボカッ！！

そして、興奮状態のネギー行とピクミン達は物凄い迫力でヘラクレ  
スオオヨロヒグモに強力な頭突きを繰り返す。

オリマー

（みんな、頑張ってくれ……………これが最後のチャンスなんだ！）

ネギ

（カモ君、待っててね……………後もう少しの辛抱だから！）

そう思いながら、ネギー行とピクミン達が激しい攻撃を続けている  
と……………。

ボコボコボコッ……………

ヘラクレスオオヨロヒグモの身体から泡がどんどん溢れ出てくる。

ルイー

「せ、先輩！アleetてもしかして……………」

オリマー

「ああ、後もう少して倒せる！」

ネギ

（カモ君……………もう少して……………もう少しだから……………絶対に死なないでね！）

更にネギ一行とピクミン達が溢れ出てくる泡に気にせず攻撃を続けていると……………。

ブツシャー————！！

次の瞬間、ヘラクレスオオヨロビグは泡となって飛び散るよつに消滅していった。

ルイー

「やったあ！とうとう倒したぞ！！」

オリマー

（……………みんな、よくやったな。）

ルイーは普段と違って盛大に大喜びして、オリマーは感激のあまり嬉し涙を流してしまう。

ポトツ！！

すると、アカコチャッピーの姿になってしまったカモが落下してくる。

ネギ

「カ、カモ君！！」

ネギは慌ててカモの方へと駆け寄っていく。

ネギ

「カモ君！大丈夫！？しっかりして！！」

カモ

「うっ……うっ……」。

ネギが激しく揺らすと、カモが微かに弱々しい声を上げる。

刹那

「……………どうやら、気を失っているだけのようですね。」

ネギ

「そ、そうですか……………良かった……………」

ネギは刹那の言葉を聞いて心底から一安心する。

社長

「いやあ〜！本当によくやってくれたのお〜〜！！」

突然、社長が満面の笑みを浮かべながらオリマー達の方へと駆け寄って来る。

社長

「さてと、早速その高価そうなお宝を回収するのでしょうか！」

そう言って、社長は地面に落ちてるネギの杖と刹那の夕凧を指差す。

刹那

（し、しまった！私の夕凧が……………。）

ネギ

( ぼ、僕の杖も……。 )

オリマー

「い、いや……その二つのお宝はネギ君達の大事な物みたいなので……此処は見逃して頂けないでしょうか？」

社長

「な、何じゃと!? ワシらがあれだけ苦労して戦ったというのに、このまま回収せずに大人しく帰ると言うのか？」

明日菜

( だ〜か〜ら〜! アンタは何にもやってないでしょうがぁ〜!! )

明日菜は社長の身勝手な発言に我慢の限界を迎えていた。

ルイー

「で、でも……これまでいっばいお宝を回収したし……だから、もういいじゃないツスカ。」

社長

「何を言っておる! ワシらは、こつこつ高価そうなお宝を回収する為に進んできたんじゃないぞ!？」

オリマー

「で、ですが……………」。

社長

「いいから、つべこべ言わずに回収するんじゃ！それとも、君達はワシの命令が聞けないとでも言うのかね？」

ルイー

「うっ……………」。

オリマーとルイーが社長の言葉に困惑していると……………。

明日菜

「あゝも〜！いい加減にしなさ〜い！！」

グシャッ！！

社長

「ふみゅっ！？」

突然、遂に堪忍袋の緒が切れてしまった明日菜が社長を踏み付けてしまう。

社長

「う、うん……………」。

社長は明日菜の重さに耐え切れずに、そのまま気絶してしまつ。

オリマー

「じゃ、社長!？」

ネギ

「明日菜さん! な、何て事を……………」。

明日菜

「いいじゃない! あまりにも自分勝手な事ばかり言ってたから頭に来ちゃったのよ!！」

ルイー

「……………まあ、これで社長も少しだけ懲りたんじゃないツスか？」

オリマー

「そ、そうかな……………」?

オリマー達が明日菜の発言に苦笑いしていると……………。

？

(……………みんな！私の声が聞こえるか！？)

ネギー行

「！？」

ネギー行は突然頭の中から聞こえてきた声に一瞬だけ戸惑ってしま  
う。

ネギ

「そ、その声は……………マスターハンドさんですか！？」

オリマー

「えー！？マスターハンドだって？」

オリマーはネギの言葉に反応して、思わず辺りを見回してしまふ。

マスターハンド

( やつと見つけた……………遅くなってすまない、君達を捜すのに手間  
取ってしまった……………今すぐ館までワープさせて、君達を元の姿  
に戻してあげよう。 )



明日菜

「そ、それじゃ……………私達、やっと元の姿に戻れるのね!？」

木乃香

「そか、この姿ともおサラバなんや……………」

刹那

「お、お嬢様……………」

明日菜は元の姿に戻れるのが嬉しいのだが、木乃香は少しだけ名残惜しそうに落ち込んでしまう。

ネギ

「マスターハンドさん、もうちょっとだけ待ってて下さい。」

マスターハンド

(ん?分かった……………)

ネギ

「ありがとうございます……………オリマーさん。」

オリマー

「え？な、何だい？」

オリマーはいきなりネギに呼び掛けられて思わず慌ててネギの方を向く。

ネギ

「……………そろそろ、オリマーさん達とお別れをしなければなりません。」

オリマー

「えっ！？ど、どづいづ事？」

オリマーはネギの唐突な発言に耳を疑ってしまふ。

ネギ

「マスターハンドさんが僕達を館までワープさせてくれるみたいなんです。」

オリマー

「そ、そうか……………それじゃ、君達とは此処でお別れだね……………」

ネギ

「は、はい……………短い間でしたけど、お世話になりました！」

ネギ以外全員

「お世話になりました！！」

ネギー一行はオリマーに向かって深々と頭を下げる。

オリマー

「い、いや……………私の方こそ色々楽しかったよ……………」

ルイー

「……………先輩、もしかして泣いてます？」

オリマー

「そ、そんな事無いよー！」

オリマーはルイーのツツコミに対して涙声で答えてしまっ。

マスターハンド

(……………ネギ君、そろそろいいかな？)

ネギ

「はい、お願いします!」

マスターハンド

(それでは、行くよ……………。)

パチッ!!

シュッ!!

オリマー&ルイー

「!?!」

洞窟内に指を鳴らしたような音が響き渡ると同時に、ネギー行とカモトネギの杖と刹那の夕凧が忽然と消えてしまう。

ルイー

「……………消えちゃいましたね。」

オリマー

「あ、ああ……………。」

オリマーとルイーは突然の出来事に唖然としてしまう。

オリマー

「……………さて、私達もそろそろ『ホコタテ星』に帰ろうか。」

ルイー

「そっすね……………でも、社長はどうします?」

そう言うと、ルイーは未だに気絶している社長に指差す。

オリマー

「あゝ、そうだなあ……………よし、ピクミンで運んで探査ポッドで回収しよう!」

ルイー

「えっ!?そ、そんな事をして後で社長に怒られないッスか?」

オリマー

「大丈夫、その時はその時さ!」

ルイー

「は、はあ……………。」

ルイーはオリマーの少々投げやりの発言に唾然としてしまう。

オリマー

「それじゃ、早速社長を運んでね！」

そう言うと、数匹のピクミン達がオリマーの指示通りに社長を探查ポッドまで運び出していく。

パァー………ッ!!

チャリィ………ン!!

次の瞬間、ピクミンによって運び出された社長が探查ポッドへと回収されていく。

ドルフィン

「お宝ではなく、我が社の社長ことル・チャチョーを回収致しました！」

ルイー

「………それで、社長をお宝とするなら名前と価格はどつなるッスか？」

ドルフィン

「うーん、そうですねえ……………名前は『金の亡者』で、価格はおよそ五ポコですかね。」

オリマー

(ご、五ポコって……………ルイー君の『虫の王』よりかなり安いな……………)

オリマーはドルフィン初号機の判定に苦笑いを浮かべてしまう。

ルイー

「先輩、そろそろこの洞窟から出ましようよ。」

オリマー

「ああ、そうだな……………」

そう言うと、オリマーとルイーは残り数少ないピクミン達を引き連れながら勢い良くお湯が吹き出してる間欠泉かんけつせんに近付いていく。

オリマー

「よし、それじゃ行こうか……………それっ!!」

ルイー

「ほいつとー!!」

ブッシュューーッ!!

オリマー達は間欠泉から勢い良く吹き出すお温に乗って、洞窟から脱出していくのであった……。



第九十話〈超戦慄！一体の巨大生物の襲来！？〉（後書き）

こうして、ピクミンになってしまったネギー一行の宝探しの旅は幕を降ろされるのであった……………。

因みに、残るは『メタルギア編』と『ソニック編』の二つだけです  
が、その前にちよっとした『特別編』を開始したいと思います……  
…：…という内容だとか、話の長さ等とかはまだ未定ですので悪し  
からず（汗）。

という訳で、次回もお楽しみに！

第九十一話くまさかの再会！？（前書き）

ネギー行はマスターハンドのお蔭でピクミンの世界から館へ帰って来たのだが……………。

## 第九十一話　まさかの再会！？

（大乱闘の館）

ネギー一行はマスターハンドの力によって、ピクミンの姿から元の姿に戻っていた。

明日菜

「……………ふっつ、やっと元の姿に戻れたわ。」

木乃香

「あゝあ、ちょっと勿体ない感じじゃわあ……………」

刹那

「お嬢様、そろそろ元気を出して下さい。」

刹那は少し落ち込み気味の木乃香を元気付ける。

ネギ

「それにしても、カモ君が無事で本当に良かったよ。」

カモ

「ああ、俺っちも兄貴達と再会出来て良かったぜ……それに、あんな姿になっちまった時はどうなるかと思ったしよ……。」

明日菜

「あら、アンタ結構似合ってたじゃない？」

カモ

「お、おいおい！冗談はよしてくれよ。」

ネギ

「あははは……。」

ネギはカモと明日菜のやり取りに思わず苦笑いをしてしまう。

のどか

「ところで、マスターハンドさんに聞きたい事があるんですけど……」

マスターハンド

「ん？何かな？」

のどか

「私達をピクミンにしたあの黒コートの人達はあの後どうしたんで

すか？」

マスターハンド

「ああ、あいつらの事が……私は奴らを捕まえようとしたのだが、まんまと逃げられてしまったね……。」

ネギ

「そうですね……。」

カモ

「……兄貴、何かホツとしてねえか？」

ネギ

「へー？い、いや……そんな事ないよ！」

ネギはカモのツツコミに思わず動揺してしまう。

明日菜

「結局、あいつらは何をしたかったのかしら？」

マスターハンド

「分からない……だが、奴らは君達を狙っていたというのは確かだ。」

木乃香

「何でやる？ウチら、あの人達に何か悪い事でもしてしもうたかな？」

剎那

「恐らく、奴らの邪魔ばかりしてる私達を目障りだと思ったのでしよう。」

のどか

「それじゃ、あの人達はまた此処にやって来るのでしょうか？」

マスターハンド

「いや、それは無いだろう……この館の周辺に強力な結界を張ったから奴らは二度館にはやって来ないだろう。」

明日菜

「それなら安心だわ……ね？ネギ。」

ネギ

「は、はい……。」

ネギは少し残念そうな表情を浮かべながら明日菜に返答する。

カモ

「兄貴、一体どうしちゃったんだよ……………今度は何だかガツカリしてるみたいだしよ……………」

ネギ

「そ、そういう訳じゃないけど……………僕、一度でいいからあの人達と話をしてみたいんだ。」

ネギ以外全員

「ええっ!?!」

その場に居た全員がネギの思い掛けない発言に耳を疑ってしまふ。

明日菜

「ア、アンタ何言ってるの!?!あいつらは私達の敵なのよ?」

ネギ

「そ、それは分かってますけど……………僕はどうしてもあの人達が敵だとは思えないんです。」

刹那

「どっしりですか?」

ネギ

「確かに、僕も最初は怪しいと思いました…………でも、あの人の行動を見ていると、何だか僕達に助言したり手助けをしているような気がしてならないんですよ。」

木乃香

「助言…………あ！そう言われてみればそうやな。」

木乃香はネギの説明を聞いて同意するかのようにならぬように声を上げる。

木乃香

「ほら、ポケモンの世界に行った時にあの人がポケモンだけの世界に通じる穴を出した事があったやろ？あれって何だかウチらをその世界に導いたって感じもせえへん？」

のどか

「そ、そう言われてみると確かに…………。」

明日菜

「ちょ、ちょっと！木乃香達までそんな事を…………。」

マスターハンド

「まあ、奴らの行動は未だに不可解な部分が多いが…………奴らには決して気を許さない方がいいだろう。」



剎那

「はい、それは勿論承知しています。」

マスターハンド

「よし………では、積もる話はまた今度にしよう。」

明日菜

「そんじゃ、そろそろ部屋に戻って休もっか。」

ネギ

「そ、そうですね。」

そう言つと、ネギ達は各自の部屋へと戻っていくのであった………。

（翌朝）

ネギ達はいつものように中庭に集合していた。

ネギ

「皆さん、おはようございますー！」

木乃香

「おはようさんー！」

明日菜

「おはよう、アンタは相変わらず朝起きるの早いわねえ……………」。

明日菜は眠い目を擦りながらネギの早起きに呆れる。

ネギ

「僕達が行く世界は残り二つだけになりましたが……………この先、一体何が起こるか分かりませんので決して油断をしないで下さいね！」

刹那

「はい！」

マスターハンド

「うむ、その事なのだが……………」。

そう言い掛けると、マスターハンドは少しの間だけ黙り込んでしま  
う。

のどか

「ど、どうかしたんですか？」

明日菜

「まさか、また何とか爆弾のせいで世界が無くなっちゃったとか！  
？」

マスターハンド

「い、いや！そういう訳ではないが……………」

木乃香

「ほなら、他に何か問題でもあるん？」

マスターハンド

「ああ、実は……………残り二つの世界は今までのようにそう簡単に行  
く事が出来ないのな……………」

ネギ

「え？？どうい事ですか？」

ネギー一行はマスターハンドの言葉に耳を傾ける。

マスターハンド

「その二つの世界は君達が今まで行った世界よりも少し特別なのだ……だから、その世界へ行くにはワープ土管をそれぞれの世界に繋げる必要があるんだ。」

明日菜

「よ、よく分からないけど……それって、かなり時間が掛かるの？」

マスターハンド

「ああ、それも何時間……いや、何日掛かるかすら分からない。」

カモ

「おいおい、そんないつになるか分からない位の日まで待たなきゃならねえのかよ?」

マスターハンド

「うむ、それもいいかもしれんが……それではあまりにも退屈だろっつから、別のワープ土管で何処かの世界で遊んでくるといいだろっ。」

パチッ！！

マスターハンドが指を鳴らした瞬間、ネギー一行の前に別のワープ土管が現れる。

木乃香

「何だか面白そうやなあ……………ねえねえ、折角やから行ってみいひん？」

明日菜

「そうね、館の中で待ってるよりはマシだわ。」

ネギ

「ところで、この土管は何処の世界に繋がってるんですか？」

マスターハンド

「特に決まってない……………つまり、入ってみてのお楽しみと言ったところだ。」

のどか

「……………何か、ちょっと怖いですね。」

のどかは少し不安げな表情を浮かべながらワープ土管を見つめる。

明日菜

「大丈夫よ！別に危ない所に行く訳じゃないし……………それじゃ、早速行きましょ！」

そう言つと、明日菜はネギ達よりも一足先にワープ土管の中へと入つていく。

木乃香

「あゝ！明日菜つたら先に入って狡いわあ……………」

ネギ

「ちょ、ちょっと待って下さいよ〜!!」

ネギ達の明日菜の後から一斉にワープ土管の中へと入っていく。

マスターハンド

「……………さて、私はワープ土管をスネークとソニックの世界に繋げる作業に取り掛かるとするか……………」

スウーーーーーッ!!

そう言い残すと、マスターハンドはその場からゆっくりと消えていく。

くすま村く

ネギー一行は自然が豊かで小さな木造の家が数軒建てられてる小さな村へとやって来た。

ネギー

「……………どつやら着いたようですね。」

明日菜

「そうね……………それにしても、此処って随分とのどかな村みたいね。」

木乃香

「ホンマやなあ、周りに木や花がいっぱい生えとるし……………。」

刹那

「取り合えず、此処はどうゆう村なのか誰かに聞いてみましょう。」

？

「ねえ君達、この村に来るのは初めてかい？」

のどか

「え？」

ネギー一行は声が出た方を向いてみると、そこには大きな目に服を着た青い猫の男性が立っていた。

明日菜

（ね、猫！？）

木乃香

「わあ〜！猫さんが服を着て喋ってるわ〜！！」

明日菜達は普通にお喋りをする猫の男性に唖然とするが、木乃香だけは大喜びする。



ネギ

「あ、あの……もしかして、この村の住人ですか？」

？

「いや、残念ながら違うよ……俺も君達と同じく別の村からやって来たんだ。」

ネギ

「そ、そうですか……では、この村について色々知っていそうな人が居たら教えて頂けませんか？」

？

「うーん、そうだなあ……あそこにある役場に行けば色々教えてくれるんじゃないかな？」

そう言うと、猫の男性は他の家よりも大きくて丸い時計が付いてる薄紫色の屋根が特徴の建物に向けて指差す。

刹那

「役場か……確かに、あそこでしたらこの村について色々教えてくれるかもしれませぬね。」

木乃香

「ほなら、早速行ってみよ！」

ネギ一行は役場に向かって駆け出していく。

ネギ

「あ！そつだ……………貴方のお名前を教えてください。」

？

「いやあ、名乗る程の者じゃないけど……………みんなは俺の事を『見知らぬ猫』って呼ぶんだ。」

ネギ

「み、『見知らぬ猫』さん……………ですか？」

ネギは見知らぬ猫と名乗る猫の男性に思わず耳を傾ける。

明日菜

「ネギ〜！早く来なさいよ〜！〜！」

ネギ

「は、はい……………見知らぬ猫さん、ありがとうございました〜！」

見知らぬ猫

「いって事を……それじゃ、またね！」

見知らぬ猫は役場に向かって駆け出して行くネギを見送りながら笑顔で軽く手を振る。

明日菜

「ネギ、さっきの猫の人（？）と何を話してたの？」

ネギ

「いえ、ただお礼を言っただけですよ。」

明日菜

「ふうん……それじゃ、役場に入ってみましょ！」

ガチャッ！

ネギ一行は扉を開けて役場の中に入っていく。

ネギ

「あの、すいませ〜ん！」

？

「はい、どつさなされました?」

ネギが大声で呼び掛けると、窓口の方から胸元に大きな白いリボン  
を付けた薄いピンク色の制服を着たペリカンの女性が首を傾げなが  
ら答える。

木乃香

「わあ〜!今度はペリカンさんや〜!」

木乃香はペリカンの女性を見て再び大喜びする。

ネギ

「え、えっと……僕達、この村について色々と聞きたいんですけど  
……………」

?

「え?この村についてですか?……もしかして、貴方達もこの村に  
引越して来たのですか?」

ネギ

「い、いえ!そういう訳ではなくて……ただ、自然が豊かな良い  
村だなぁ〜と思って立ち寄ったものでして……………」

？

「そうでしたか……でも、確かにこの『すま村』はとても良い村ですよ。」

木乃香

「へえ、この村は『すま村』っていうんや。」

カモ

(随分変わった名前の村だな……。)

そう思いながら、カモは微かに苦笑いをしてしまう。

？

「あ！申し遅れました……私はこの役場で昼の間だけ窓口を担当しているペリこと申します。」

ネギ

「……丁寧にどうも……。」

ネギはペリこと名乗るペリカンの女性が自己紹介した後で深々とお辞儀をするのを見て、思わず自分も慌ててお辞儀をしてしまう。

？

「オッホン!!」

明日菜

「ん？今のは……………」

ペリこ

「そ、村長！今開けますから……………」

ペリこは窓口の隣にある台を上げると、顎の下に白い髭を生やして胸元に緑色の小さな蝶ネクタイを付けてる眼鏡を掛けた亀の老人が小さな杖を付きながら出て来る。

のどか

「こ、今度は亀さんが出て来ましたね……………」

木乃香

「ホンマや、この村の人達は可愛ええ動物さんばかりやなんやなあ。」

明日菜

「……………つてか、もう何の動物が出て来ても驚かないわ。」

そうこう言いながら、ネギー一行は村長と呼ばれた亀の老人を見つめ

る。

？

「よつこそ、すま村』へ……………ワシはこの村の村長のコトブキじ  
や。」

ネギ

「そ、村長さんでしたか……………こちらこそ宜しくお願いします！」

ネギはコトブキと名乗る村長の自己紹介に合わせるように深々とお  
辞儀をする。

コトブキ

「ところで、お前さん達に聞きたい事があるんじゃないか……………」

ネギ

「はい、何でしょうか？」

コトブキ

「次のうち、お前さん達が一番尊敬に値する人物を述べよ……………」

一番：村長

二番：村長

三番：村長

四番：村長

「……さあ、どれじゃ？」

刹那

「え、え〜っと……。」

明日菜

「……って、どの選択も村長しかないじゃない！」

コトブキ

「………空気の読めん奴じゃなあ………。」

そう言つと、コトブキはそのまま激しく落ち込んでしまつ。

ペリこ

「『村長さん！』って答えてあげて下さい………コトブキ村長は次の村長選挙の事を凄く気にしているんです。」

木乃香

「あゝ、そういう事やったんやね………。」



ネギ一行はコトブキに聞こえないように小声で話し掛ける。この話を聞いて納得する。

ネギ

「も、勿論村長さんですよ！えつくと、番号は………何番でもいいですよ！」

コトブキ

「おお！そうかそうか………うむうむ、ワシは村長として君達を大いに歓迎するぞい！」

ネギの言葉で元気を取り戻したコトブキは笑顔でネギの手を握る。

ネギ

「あ、ありがとうございます………」

カモ

( …… ) ったく、変な亀の爺さんだぜ。

ネギは苦笑いしながらコトブキの手を握り返し、カモは呆れたような表情でコトブキを見つめる。

コトブキ

「それより、君達のその服装……………」。

そう言いながら、コトブキは明日菜達を食い入るよう見つめる。

のどか

「な、何ですか？」

コトブキ

「いや、最近この村に引っ越して来た子もそんな服を着ていたような気がしてのお……………」。

ネギ一行

「ええっ!？」

ネギ一行はコトブキの発言に耳を疑った（因みに今明日菜達が着てる服装は麻帆良学園の制服である）。

ペリこ

「あ!そう言われてみたら、確かにそのような服を着ていましたね。」

ネギ

「ほ、本当ですか!？」

コトブキ

「うむ、えいっと確かその子の名前は……ペリこ君、何て名前の子じゃったかのぉ？」

ペリこ

「はい、名前は……。」

ガチャツ!

?

「じゅめん下さーい!」

突然、赤っぱい色の短めのツインテールのような髪型の人間の少女が元気良く扉を開けて入って来る。

コトブキ

「おー、あい君じゃないか……相変わらず元気が良いのぉ。」

ペリこ

「こんにちは、今日はどんな用事ですか？」

あい

「都会に居る友達のサリーに手紙を書いたから、手紙を出しに来ました！」

ペリこ

「そうですか………それでは、手紙を右側の窓口に提出して下さいね。」

あい

「はい！」

あいが元気良く返事をする、ペリこは左側から右側の窓口へ移動してあいが親友の為に書いたという手紙を受け取る。

ペリこ

「はい、確かに受け止りました。」

あい

「お願いしま〜す………あれ？」

手紙を出して安心したあいは、ようやくネギー一行の存在に気付いて首を傾げる。

ネギ

「あ、あの……僕達の顔に何か付いてますか？」

あい

「あ、いえ、ごめんなさい！この村では見掛けない顔だったからつい……もしかして、街の方から来た人ですか？」

明日菜

「え？ま、まあね……ところで、貴女もこの村の住人なの？」

あい

「は、はい！去年引っ越して来たんですけど……私の名前はあい、『あいうえお』のあいです！」

木乃香

「あいちゃんかぁ……可愛らしい名前やなあ。」

あい

「そ、そうですか？」

あいは木乃香に名前を褒められて思わず照れてしまう。

コトブキ

「あい君、最近この村に引っ越して来た子を知っておるかのぉ？」

あい

「え？それって、まきちゃんの事ですか？」

コトブキ

「おお！そうそう、まきちゃんじゃー！やっと思い出したわい……………」

「

明日菜

（えー？ま、まきちゃんって……………）。

ネギ

（ま、まさか……………）。

ネギ一行は聞き慣れた名前に思わず耳を傾ける。

ペリこ

「そう言えば、今日は見掛けてませんね……………」。

あい

「それが、たぬきちさんにお使いを頼まれて街の方まで行ってるみたいなんです……もうそろそろ帰って来ると思いますが……」

プップー……ッ！

あい

「あ！帰って来た！！」

ガチャ！

あいは外の方から聞こえてきた車のクラクションを聞いた途端、勢い良く役場から外へ出て行ってしまふ。

のどか

「急にどうしたんでしょうか？」

ペリこ

「きっと、街の方からバスが来たんだと思います。」

木乃香

「ほなら、ウチらも外に出てみよ。」

ネギ

「そうですね、色々と確認してみないといけません……………」。

ガチャ！

ネギ一行もあいの後から一斉に役場から外へと出て行く。

ペリッ

「……………皆さん、行ってしまいましたね。」

コトブキ

「何だか、忙せわしない連中じゃのお……………」。

ペリことコトブキは少し唾然としながらネギ一行が出て行った扉を眺めるのであった……………。



（すま村・バス停前）

プッシュューーーッ！！

その頃、一台の黄色いバスがバス停の前で停止して扉がゆっくりと開かれていく。

？

「さあ、『すま村』に着いただよ。」

？

「はーい！」

バスを運転していた青い帽子と青い服を着た河童のような顔した男性に声を掛けられた。ピンク色の短いツインテールの少女は元気良く返事をする。

？

「フツ、相変わらず元気がええだなあ……オラがタクシーの運転手をやってた時に乗せたあの時のめんこい女子おなこにそっくりだよ。」

？

「え？カッペイさんって前はタクシーの運転手をやってたの？」

カッペイ

「ああ、去年まではな……でも、色々あってクビになってしまっただよ。」

？

「へえ、そうなんだ……もしかして、リストラにされちゃったとか？」

カッペイ

「ま、まあそんなところだよ……。」

カッペイという名前の河童の男性は少女の質問にかなり曖昧に答える。

？

「ふうん、何処も不景気なんだ……それじゃ、私そろそろ降りるね。」

カッペイ

「ああ、またのご利用をお待ちしてるだよ。」

ブオーーーーーーッ!!

少女がバスから降りたと同時に、カップリイが運転するバスはその場から走り去っていく。

あい

「まきちゃん！」

？

「ん？」

まきちゃんと呼ばれた少女が声がした方を向いてみると、あいが元気良く右手を振りながらこちらに駆け寄って来る。

？

「あ！あいちゃん……もしかして、私を迎えに来てくれたの？」

あい

「勿論！だって、私達は友達でしょ？」

？

「あいちゃん……そうだね！私達はもう立派な友達だもんね！」

あいと少女がその場で楽しそうに話をしていると……。

ネギ

「ハアハア……や、やっとあいさんに追い付いた……。」

ネギ一行は息を荒くしながらゆっくりとあいに近いところとするが……。

明日菜

「あれ……ねえネギ、あのあいつと一緒には……。」

ネギ

「え？……あぁっ!？」

ネギを含む全員が、あいと一緒に居る少女の姿を見るなり思わず目を疑った。

のどか

「ど、どうして……。」

刹那

「何故彼女がこの世界に……。」

木乃香

「ネ、ネギ君……………」

ネギ

「はい、間違いありません……………あの人はまき絵さんです。」

そう、あいと一緒に喋っている少女はネギの生徒であり明日菜達と同じ3-Aのクラスメイトでもある佐々木まき絵であった……………。

## 第九十一話 くまさかの再会！？（後書き）

果たして、何故まさ絵が『すま村』に居るのか？

因みに、今回の話の舞台は『どうぶつの森』なのですが、村と住人の設定はほぼ原作ゲームと『劇場版・どうぶつの森』を参考にします。

ただ一つ違うのは、『劇場版』での村の名前は『動物村』だったのですが、本作では『スマブラX』のステージと同じく『すま村』にした事です。

最後にどうでもいい事ですが、『劇場版』の主人公でもあり今回の話にも登場した少女・あいの声優は『ネギま!』のまさ絵と同じ声優の堀江由衣さんです。

第九十二話くすま村で配達？（前編）く（前書き）

果たして、まき絵は何故『どろぶつの森』の世界に居るのか？

第九十二話　すま村で配達？（前編）

すま村・バス停前

まき絵

「それじゃ、私はまだ仕事が残ってるから『狸商店』に行くね。」

あい

「そっか……………じゃあ、また後でね。」

まき絵とあいはお互いに笑顔で手を振りながら別れようとするが……………。

ネギ

「まき絵さーん!!」

まき絵

「え？」

まき絵が聞き慣れた声に反応して振り向いてみると、ネギ一行がこちらに駆け寄って来ていた。



あい

「あ！あの人達はさっきの……………」

まき絵

「あー！ネギ君だー！！それに明日菜達も……………おーい！みんな  
！！」

まき絵はネギ一行の姿を見るなり、嬉しそうに駆け出していく。

ネギ

「まき絵さん！一体どうして此処に……………」

まき絵

「ネギ君！会いたかったよー！！」

ギョツ！！

ネギ

「あうっ！？」

ネギがまき絵に質問しようとした時、まき絵がいきなりネギを抱き  
締めてしまう。

明日菜

「ちょ、ちょっと！まきちゃんったら……。」

木乃香

「よっぽどネギ君に会えて嬉しかったんやな。」

ネギ

「ま、まき絵さん……す、少し落ち着いて下さい……。」

明日菜達はまき絵の大胆な行動に苦笑いして、ネギはまき絵に抱き締められて動揺するも冷静に落ち着かせようとする。

あい

「ま、まきちゃん？」

まき絵

「え？……あ！？ゴ、ゴメンね！急に飛び出しちゃって……。」

まき絵はあいの声に気が付いて、慌ててネギから離れる。

あい

「それより、この人達はまきちゃんの知り合いなの？」

まき絵

「うん、みんな私が通ってる学校のクラスメートだよ……………それに、ネギ君は私達の先生なの。」

あい

「えっ！？せ、先生？」

あいはまき絵の言葉に思わず耳を疑ってしまつ。

まき絵

「あゝ、あいちゃんったら疑ってるでしょ？」

あい

「だ、だって……………こんな小さな子供が先生だなんて信じられないよ……………」

まき絵

「本当だよ！確かにネギ君はまだ子供だけど……………それでも、私達の立派な先生なんだよ！」

ネギ

「ま、まき絵さん……………」

ネギは必死にネギは立派だと発言するまき絵の言葉に照れてしまう。

あい

「そう………分かった！まきちゃんがそこまで言っなら信じるよ」

まき絵

「ありがとう！あいちゃん」

刹那

「………あの二人、とても仲が良いですね。」

木乃香

「そやなあ………それに、何だか性格や声もそっくりみたいやし………」

ネギ一行は笑顔で話し合っているまき絵とあいを見て思わず微笑んでしまう。

ネギ

「ところで、まき絵さんに聞きたい事があるのですが………。」

まき絵

「え？何々？」

そう言つて、まき絵はネギの方を向いて首を傾げる。

ネギ

「まず、まき絵さんはどうしてこの世界……いや、この村に居るんですか？」

まき絵

「え？うーんとね……実は、私にもよく分からないんだよね。」

のどか

「え？分からないって、どついつ事ですか？」

まき絵

「えーっと、何て言えばいいのかなあ……部活が終わった後で裕奈達と一緒に帰ってたら、何か変な物に吸い込まれて、気が付いたらこの村に居たの……。」

刹那

（変な物に吸い込まれた……。）

カモ

(兄貴、こりゃひょっとして……………。)

ネギ

(うん、まき絵さん達も僕達と同じように『亜空間』に吸い込まれたに違いない……………。)

ネギとカモはまき絵とあいには聞こえないように小声で話す。

明日菜

「ちよっと待って、さっき裕奈達って言わなかった？」

まき絵

「え？うん、言ったけど……………」。

明日菜

「じゃあ、裕奈達もこの世界……………じゃなくて、この村に居るの！  
？」

まき絵

「いや、この村に住んでるのは私だけで……………裕奈達は街の方でアルバイトしながら暮らしてるんだって。」

ネギ

「街の方というと、さっきあいさんがおっしゃってた街の事ですか？」

あい

「うん、街には理髪店や劇場とか色々な店や施設があるの。」

木乃香

「ふうん、そこに裕奈達がおるんや……あれ？まきちゃん、さっき『この村に住んでる』って言わなかった？」

まき絵

「そうそう！私、この村で一人暮らししてるんだよ！凄いでしょ？」

ネギ一行

「ええ……っ!？」

ネギ一行はまき絵の発言に耳を疑ってしまふ。

明日菜

「ひ、一人暮らしって……まきちゃん、一人暮らしなんて出来るの？」

まき絵

「ちよつとおく！それってどういう意味！？」

まき絵は明日菜の質問に頬を膨らませながら怒り出してしまふ。

ネギ

「それに、住まいとかはどうしてるんですか？」

まき絵

「え？私、自分の家に住んでるけど……………」。

のどか

「い、家！？」

刹那

「佐々木さん、家を購入したんですか！？」

木乃香

「よくそないなお金があったなあ……………」。

まき絵

「い、いや……………実を言うとね……………」。



まき絵はネギ達の反応に戸惑いながらも説明していく。

く約一ヶ月前のすま村く

あい

『……………ねえ！大丈夫？しっかりして！！』

まき絵

『う、うん……………。』

海辺で気絶していたまき絵があいの必死の呼び掛けに反応して、ゆっくりと目を開けながら意識を取り戻す。

あい

『あーやっと気が付いた……………。』

まき絵

『……………あれ？此処は何処？』

そう言いながら、まき絵は少し戸惑い気味に辺りを見回す。

あい

『あ、あの……………大丈夫？』

まき絵

『え？あ！うん、私なら大丈夫……………それより、此処は何処？』

あい

『此処？此処は『すま村』の海岸だけど……………。』

まき絵

『す、『すま村』？』

まき絵はあいの説明を聞いて啞然としてしまう。

あい

『ところで、貴女は何処から来たの？』

まき絵

『わ、私？私は『麻帆良学園』の女子寮に住んでいて……あ！そうだ！部活が終わったから裕奈達と一緒に帰ってたら、突然変な物に吸い込まれちゃって……それで私、気が付いたら此处で倒れてて……』

まき絵は少々パニック状態になりながらも自ら遭遇した経験をあい  
に説明していく。

あい

『よ、よく分からないけど……』麻帆良学園』なんて聞いた事ない  
『よ。』

まき絵

『えー？う、嘘……それじゃ、どうすれば『麻帆良学園』に帰れる  
の？それに裕奈は？アキラは？亜子は一体何処に居るの！？』

まき絵はあいの言葉を聞いて、再びどんどんパニック状態に陥って  
いく。

あい

『と、とにかく落ち着いて！慌ててたってどうしようもないし……  
……』

まき絵

『う、うん……そうだね……。』

そう言つと、まき絵は段々と落ち着きを取り戻していく。

あい

『……ねえ、もし良かったら少しの間だけこの村に住んでみない？』

まき絵

『え！？で、でも……村の人は私みたいなよそ者なんかを受け入れてくれるかな？』

あい

『勿論！村の人は優しくて本当に良い人達ばかりだし……きつと受け入れてくれるよ！』

まき絵

『そ、そうかな？』

あい

『大丈夫！私も初めてこの村に引っ越して来た時は少し不安だったけど……村の人は私を村の住人として温かく迎えてくれたの。』

まき絵

『な、何か貴女がそう言ってくれると凄く気が楽になってくるよ。』

あい

『それは良かった……………それじゃ、早速貴女が暮らす家を購入しなきゃね。』

まき絵

『えっ!?!?』

まき絵はあいの言葉に一瞬だけ固まってしまふ。

あい

『あ!そう言えば、貴女はお金ってどれ位持ってるの?』

まき絵

『い、いや……………お小遣い程度しか……………。』

あい

『あゝ、そっか……………よし!私がたぬきちさんに頼み込んでみるよ!』

まき絵

『たぬきちさんって？』

あい

『村に店を出してる人なんだけど、不動産屋の仕事もやってるから家の事とかは彼に相談した方がいいの。』

まき絵

『そ、そうなんだ……でも、どうしてそこまでしてくれるの？』

あい

『うーん、何でだろう……私って、困ってる人を放って置けない性分なの……それに、何か貴女と私って色々な意味で似てるような気がして……もしかして、お節介だったかな？』

まき絵

『う、ううん！そんな事全然ないよ……むしろ、凄く嬉しいよ！』

あい

『良かったあ……それじゃ、早速たぬきちさんの店に行こう！』

まき絵

『あ！ちよつと待って……まだ貴女の名前を聞いてなかった。』

あい

『あ！そうだった……私は名前はあい、『あいっえお』のあい！』

まき絵

『あいちゃんか……私は佐々木まき絵だよ！』

あい

『まき絵……まきちゃんって呼んでもいい？』

まき絵

『うん！全然OKだよ！』

あい

『じゃあ、改めて宜しくね！まきちゃん！』

まき絵

『こちらこそ宜しくね！あいちゃん！』

こうして、まき絵とあいは嬉しそうにその場を後にするのであった……。

く回想終了く

まき絵

「……………という訳で、私はあいちゃんのお蔭で家を購入する事が出来たの……………と言っても、代わりにたぬきちさんの店でアルバイトしながら家のローンを返済しなきゃならないんだけどね。」

ネギ

「す、凄いいじゃないですか！それってまさに自給自足の生活ですよ！！」

まき絵

「えへへ、そうかなあ……………」

まき絵は目を輝かせながら褒めまくるネギに思わず照れ隠ししてしまふ。

あい

「あー？そう言えばまきちゃん！確か、これからたぬきちさんの店に行くんじゃないかな？」



まき絵

「え？……あゝっ！そうだった！！」

まき絵はあいの言葉を聞いて一瞬考え込むが、しばらくすると何かを思い出したように大声を上げる。

まき絵

「私、まだアルバイトの途中だったんだよ……みんな！悪いけど、また後でね！！」

そう言い残すと、まき絵は急いで何処かへと駆け出していく。

木乃香

「……まきちゃん、行ってもうたね。」

ネギ

「まき絵さん、一体どんなアルバイトをしてるんでしょうか？」

明日菜

「じゃあさ、私達もそのお店に行ってみる？」

刹那

「そうですね、佐々木さんにはまだ聞きたい事がありますし……。」

あい

「それじゃ、私が案内してあげる」

のどか

「ほ、本当ですか？ありがとうございます。」

ネギ

「では、早速行ってみましょう！」

ネギ一体はあい案内されながら、まき絵がアルバイトしていると、  
いう店に向かって歩き出していく。

〈狸商店〉

？

「……………全く、一体何処で道草を食ってたんだなも？」

まき絵

「う、うめんなさい……………」

その頃、丸く欠けた葉っぱマークがある黄緑色のエプロンを付けたまき絵は『狸商店』と書かれた看板が掲げられてるベニヤ作りの小さな店の内部で紫色の腰エプロンを付けた狸のような男性に怒られていた。

明日菜

（あゝあ、まきちゃんったら怒られてるよ……………）

ネギ

（あいさん、あの狸みたいな人は誰ですか？）

あい

（あの人はたぬきちさんといって、この店の店長さんだよ。）

木乃香

（へえ、あの狸さんが店長さんなんやね。）

ネギ一行とあいは『狸商店』の窓からまき絵の様子を伺っていた。

たぬきち

「まあ、済んだ事はもういいだなも……それより今度は村の人達から品物を配達するだなも。」

まき絵

「は、いい、分かりました！」

たぬきち

「それじゃ、頼むだなも………よいしょっと！」

ドサッ！！

そう言うと、たぬきは荷物がいっぱい入ってると思われる風呂敷を持ち出してきて、勢い良く地面に置く。

まき絵

「えー！？こ、こんなにいっぱい………？」

たぬきち

「そうだなも、ほぼ村人全員の荷物が入ってるんだなも。」

まき絵

「ほ、ほほ村人全員って………こんなにいっぱいある荷物を私一人で配達なんて無理ですよ〜!!」

たぬきち

「それだったら、誰かと協力して配達すればすぐに終わるんだなも。」

」

まき絵

「そ、そんな事言われたって………。」

ネギ

「それなら、僕達がまき絵さんのお手伝いをしますよ!」

まき絵

「えっ?」

まき絵が声が出た方を向いてみると、そこにはネギ一行とあいが立っていた。

まき絵

「ネギ君!それにあいちゃんや明日菜達も………。」

たぬきち

「き、君達は誰なんだなも？」

ネギ

「初めまして、僕達はまき絵さんの友達です！」

そう言つと、ネギはたぬきちに向かって軽くお辞儀をする。

たぬきち

「ふむ、まきちゃんにあいちゃんの他にも友達が居たなんて知らなかったんだなも……それより、さっき手伝つとか言つただなも？」

ネギ

「はい！まき絵さん一人だけじゃ大変だろうから僕達もお手伝いしますよ！」

まき絵

「え？いいの？」

明日菜

「勿論よ！みんなでやればすぐに終わりそうだしね……………」

あい

「だから、みんなで手分けしてやるっよ！」

まき絵

「みんな………うん！みんなでやるっ！！」

たぬきち

「まあ、品物を配達してくれば何でもいいだなも………それじゃ、君達もコレを付けるだなも。」

そう言うと、たぬきはネギ達に向かってまき絵が今付けてるのと同じエプロンを差し出す。

ネギ

「はい、分かりました！」

明日菜

「何だか、ちょっと地味なエプロンね………。」

あい

「わあ〜、このエプロンを付けるの久しぶりな気がするなあ〜。」

そうこう言いながら、ネギ達はたぬきちに渡されたエプロンを付ける。

木乃香

「ほんで？どうやって手分けするの？」

刹那

「そうですね…………やはり二手に分かれるとしても、この村に詳しい佐々木さんとあいさんは一緒にしない方がいいでしょう。」

ネギ

「それだったら、僕と明日菜さんのチームと木乃香さん達のチームにそれぞれまき絵さんかあいさんを加えればいいんじゃないですか？」

あい

「じゃあ、私はネギ君達と一緒に行くー」

まき絵

「えー、私もネギ君と一緒にいいなあ……………ま、いつか！私は木乃香達と一緒に行くこと！」

こうして、ネギと明日菜のチームにはあいが、木乃香と刹那とのかのチームにはまき絵が付いて行く事となった。



ためきち

「さて、話が纏まったところで……早速、配達に行ってほしいな  
も。」

そう言うのと、ためきちはいつの間にか用意してあった、村の住人達  
の品物が乗せられてる荷台付きの自転車を指差す。

明日菜

「そんじゃ、行くとしますか！」

そう言うって、明日菜が一足先に片方の自転車に跨がる。

あい

「だ、大丈夫？ 私達の方が荷物が多いみたいだけど……。」

明日菜

「平気平気！ 私は体力には自信があるからね………それえーっ  
！！」

ギューイーーーーン！！

明日菜が勢い良く自転車を漕いだ瞬間、物凄いスピードで走り出していく。

あい

「は、速い……………」

ネギ

「って、明日菜さん！僕達を置いて先に行かないで下さーい  
！！」

ネギとあいはい明日菜に追い掛けようと慌てて駆け出していく。

木乃香

「……………あははは、明日菜も慌てん坊さんやなあ。」

まき絵

「そ、そろそろ私達も行こっか！」

のどか

「そ、そうですね。」

そう言つと、まき絵は残りの自転車に跨がる。

まき絵

「それじゃ、行って来まーす!！」

たぬきち

「気をつけて配達するんだなもー!！」

まき絵達もたぬきちに見送られながら、ネギ達とは逆にゆったりと走り出していく。

第九十二話くすま村で配達？（前編）く（後書き）

果たして、ネギ達は配達する事が出来るのか？

第九十三話くすま村で配達？（中編）く（前書き）

まき絵のアルバイトの手伝いをする事になったネギー行とあいだが  
.....。

第九十三話 しま村で配達？（中編）

しま村・関所前

ネギ

「……………もお、僕達を置いて先に行くなんて酷いですよ！」

明日菜

「あははは、ゴメンゴメン……………」

ネギは大きな門の前で一足先に自転車で駆け出して行った明日菜を責めていた。

あい

「ま、まあまあ……………」こうして無事に追いついたからいいじゃない。

明日菜

「そ、そうそう！あいちゃんの言う通りだわ！」

ネギ

「そ、そうですね……………」

ネギは渋々ながらもあいの意見に賛同する。

明日菜

「そんな事より、早く配達を終わらせましょ！」

そう言っつて、明日菜が自転車に跨がろうとした時……………。

？

「あいさん、こんにちはであります！」

？

「こ、こんにちは……………」

突然、門の前で棒を持って立っている赤と白の衣装を着てヘルメットを被った犬のような二人の男性があいに声を掛ける。

あい

「あ！門番さん、こんにちは。」

そう言っつと、あいは門番と呼ばれた二人の犬の男性に向かって軽くお辞儀をする。

門番 A

「ところで、その格好は……もしか、また『狸商店』でアルバイトを始めたでありますか？」

門の右側に立っている門番 A があいの格好を見て首を傾げながら尋ねる。

あい

「ううん、そうじゃないの……私達、まきちゃんのお手伝いをしてるだけなの。」

門番 A

「あゝ、成程！まき絵さんのお手伝いでありましたか……それは感心であります！」

門番 B

「あ、あの……ところで、その人達は？」

門の左側に立っているブルドックのような顔の門番 B がおどおどしながらネギ達について尋ねる。

ネギ

「ほ、僕達ですか？え〜っと……。」



明日菜

「わ、私達は街の方から来たんです!」

門番B

「そ、そうでしたか……道理でこの村では見掛けない顔だと思いました………すみません、余計なお世話でしたね。」

明日菜

「いや、別に謝らなくても……。」

明日菜は門番Bのおどとした態度に思わず苦笑いしてしまう。

あい

「それじゃ、私達は配達があるから……。」

門番A

「あ!そうでありました………では、お気をつけて!」

門番B

「い、行ってらっしゃいませ……。」

二人の門番はビシツと敬礼しながら、あい達を見送ろうとする。

ネギ

「あ、ありがとうございます……………」。

明日菜

「じゃあ、犬の門番さん達も見送ってる事だし……………そろそろ出発しますか!」

そう言うと、ネギ達は二人の門番に見送られながら立ち去っていく。

門番A

「……………それにしても、あいさんは相変わらず元気が良いでありますなあ。」

門番B

「は、はい……………私もあいさんみたいにハキハキと喋れるようになりません……………」。

そう言いながら、二人の門番は再び門の前で番兵を続けるのであった。

くブーケの家の前く

数分後、ネギ達はある一軒家の前に立っていた。

ネギ

「此処がブーケさんという人の家ですか？」

あい

「そう、それにブーケは私の親友の一人なの。」

明日菜

「へえく、そうなんだ………そんなじゃ、早速この荷物を渡しましよ。」

トントーン！

ネギ

「ブーケさくん、『狸商店』からお届け物です！」

ネギが家の扉をノックしながら呼び掛けた時……………。

バタン！！

？

「わあ〜！やっと届いたチエキ！！」

ネギ

「わあっ!?!」

突然、家の中から赤いチエックの服を着た紫色の猫の少女が勢い良く出て来て、ネギから品物を奪い取るように受け取る。

ネギ

「あ、あの……………。」

ブーケ

「どお？似合う?」

そう言うと、ブーケという猫の少女は先程ネギから奪い取るように受け取った品物からピンク色のウェイトレスのような服を取り出し

て、自分と重ね合わせながネギに見せ付ける。

ネギ

「は、はい……………とてもお似合いですよ……………」

ブーケ

「はう〜！アタイってやつぱりダイナマイトかなあ……………何を着ても可愛く似合っちゃうなんて罪な女よねえ〜！」

ネギの感想を聞いたブーケは、目を輝かせながら自分の世界に入ってしまう。

明日菜

「……………あの子、ちょっと変わってるわね。」

あい

「う、うん……………でも、そこがブーケの良いところなんだけどね……………」

ブーケ

「ん？……………あ！あいちゃんだチエキ〜！！」

自分の世界から帰って来たブーケは、あいの姿を見るなり近付いて

来る。

ブーケ

「あれ？その格好は……まさか、またアルバイトでも始めたチエキ？」

あい

「そうじゃなくて、まきちゃんのお手伝いだよ。」

ブーケ

「なんだ、そういう事が……ところで、アンタ達は誰チエキ？」

そう言うと、ブーケはネギと明日菜の方を見て首を傾げながら尋ねる。

ネギ

「ぼ、僕達はまき絵さんの友達で……。」

ブーケ

「分かった！アンタ達、この村で駆け落ちしに逃げて来たんでしょ？」

明日菜

「か、駆け落ち!？」

明日菜はブーケの言葉に思わず耳を疑ってしまう。

ブーケ

「ほら、よくドラマとかであるじゃない………彼女が自分よりも年下の男の子に一目惚れして、両親の制止を振り切って二人で何処か小さな村へ駆け落ちするって!」

明日菜

「じよ、冗談じゃないわよ! な、何で私がこんなガキんちよと一緒に駆け落ちしなきゃならないのよ!？」

ブーケ

「あ、ムキになっちゃって………アンタ達、ますます怪しいチエキ。」

明日菜

「だあ、かあ、らあ、! 違つて言ってるでしょ、!」

あい

「お、落ち着いて! ブーケも悪気があった訳じゃないし………。」

あいはブーケの茶化すような発言で顔を真っ赤にして怒り出した明日菜を必死に宥めようとする。

ネギ

(……………カモ君、駆け落ちって何?)

カモ

(ああ、駆け落ちってのはなあ……………。)

カモがネギに駆け落ちについて教えようとした時……………。

あい

「そ、それじゃ私達はまだ配達が残ってるから……………ブーケ、またね」

ブーケ

「うん、また明日ね」

明日菜

「ちょ、ちょっと!まだ話が……………」

あい

「いいからいいから!」



あいはネギと明日菜を無理矢理押し出すように、ブーケの家から離れていく。

ブーケ

「……………あの子、何だか面白いチエキ」

ブーケはどんどん立ち去っていくあい達を見送りながら、先程の明日菜の反応を思い出しながら笑顔を浮かべる。

明日菜

「……………つたく、あの子は一体何なのよ？」

ネギ

「も、もういいじゃないですか……………」

あい

「そうそう、ブーケだって本当は素直で良い子なんだから……………」

ネギとあいは不機嫌そうに自転車を漕いでいる明日菜を苦笑いしながら宥める。

明日菜

「まあ、あのブーケって子も悪気があって言った訳じゃなさそうだったし……しょうがない、許してあげるわ。」

あい

「本当？良かった。」

あいは明日菜の言葉を聞いて一安心する。

ネギ

「ところで、次は何処の家へ配達すればいいんですか？」

あい

「え〜っとね……あ！この辺りはビアンカさんの家が近いから、まずはそこへ行きましょ。」

ネギ

「ビアンカさんの家ですね……分かりました！」

明日菜

「そんじゃ、また案内宜しくね！」

あい

「うん、任せて！」

そう言うと、ネギと明日菜はあい以案内されながら次の配達先の家を目指して進んでいく。

くビアンカの家の前

あい

「ビアンカさん！」

？

「……………ん？」

家の近くに生えてる木の木陰で椅子に座って本を読んでいる紫色のポーター服を着た白い狼の女性があいの声に反応して顔を上げる。

あい

「『狸商店』からのお届け物です!」

ビアンカ

「あら、ありがとうございます……開いてるから、家の中に置いていてちょうだい。」

あい

「はい!」

そう言うと、あいは届け物である小さな段ボール箱を持ったままビアンカの家の中に入っていく。

明日菜

(……あの狼の人、何だか偉そうじゃない?)

ネギ

(……そうですか?僕はとても大人っぽくて綺麗だと思いますが……。)

明日菜

(……ふん、アンタってああいう大人っぽいのがタイプだったんだ?)

ネギ

(い、いや!?!?そうじゃなくて……………。)

ネギと明日菜はビアンカに聞こえないように小声で話し込む。

ビアンカ

「……………ところで、オタク達って見ない顔だけど新入り?」

明日菜

「え?あ、いや、私達は……………」

ネギ

「僕達はまき絵さんの友達で、街の方からこの村へ遊びに来たんです!」

ビアンカ

「ふうん、そうなの……………道理であの子と同じ格好をしてると思ったわ。」

ビアンカは制服姿の明日菜を見つめながら呟く。

ビアンカ

「ねえ、オタク達はこの村をどう思う?」

ネギ

「え？そ、そうですね……………とつても穏やかで、のどかで平和な村だと思えます。」

ピアンカ

「フツ、そうね……………確かに、平和過ぎてちょっと退屈な村だけど、女を磨くのに場所なんて関係ないものね。」

明日菜

「お、女を磨く？」

明日菜はピアンカの意味深な言葉に首を傾げる。

ピアンカ

「あら、どうやら貴女もあの子と同じように何もかもピカピカのようね……………もし良かったら、あたしが女の何たるかを教えてあげましょうか？」

そう言って、ピアンカは明日菜に向かってウインクをする。

明日菜

「へ？い、いやあ……………わ、私は別に……………」

あい  
「お待たせ〜！」

明日菜がビアンカの言葉に動揺していると、あいがビアンカの家から出て来る。

ネギ

「あーあいさんが戻って来ましたね。」

明日菜

「そ、そうね……………じゃあ、そろそろ次のお届け先の家へ行きましょよ。」

あい

「あーちょっと待ってよ……………ビアンカさん、さようなら〜！」

そう言い残すと、あいは先に駆け出したネギと明日菜を追い掛けていく。

ビアンカ

「フッフ、あの子ったらオドオドしちゃって……………素敵ね。」

ビアンカは先程の明日菜の反応を思い出して、思わず微笑んでしま  
う。

明日菜

「……………ねえ、あいちゃん。」

あい

「え？何？」

明日菜

「さっきのビアンカさんって、綺麗な人……………じゃなくて、綺麗な  
狼だよね。」

あい

「やっぱり明日菜もそう思う？……………実は、私も初めてビアンカさ  
んに会った時は思わず見惚れちゃったんだ。」

明日菜

「あゝ、それも分かる！私もビアンカさんにウインクされた時は一  
瞬だけときめいちゃって……………アレが大人の女の魅力ってヤツなの  
ね。」

あい



「はあ、私もビアンカさんみたいな大人の女になりたいなあ。」

明日菜とあいは頬を赤く染めてポツツとしながら次の配達先へと進んでいく。

ネギ

(……………カモ君、明日菜さん達は何の話をしてるんだろう?)

カモ

(さあな……………多分、大人の女の魅力について語り合ってるじゃねえか?)

ネギ

(大人の女の魅力?)

カモ

(……………まあ、まだ兄貴には分からねえだろうなあ。)

カモは訳が分からずただ首を傾げるネギを見て思わず溜め息を吐く。

く仕立て屋・エイブルシスターズ前く

次にネギ達が訪れた配達先は、緑色の屋根に白い扉の上に『A B L E・S I S T E R S』と白い字で書かれた看板と白い服のマークが描かれた小さな看板が掲げられた他の家よりも一回り大きな建物の前だった。

ネギ

「あいさん、此処ってお店か何かですか？」

あい

「此処は『エイブルシスターズ』といって、服や帽子とかが売っている仕立て屋さんなの。」

明日菜

「ふん、つまり服とか欲しい時はこの店に来ればいいのね？」

あい

「そういう事……それじゃ、早速入ろう！」

ガチャッ！

ネギ達が『仕立て屋』の入口の扉を開けて入ってみると……………。

？

「いらっしゃいませ！」

沢山の商品の服が綺麗に並べられてる棚の側で白と緑のギンガム模様のエプロンを付けた青いハリネズミの女性がネギ達に元気良く挨拶をする。

あい

「きぬよさん、こんにちは！」

きぬよ

「あ〜！あいちゃんやないの……………お姉ちゃん、あいちゃんがうちの店に来てくれたよ！」

？

「えっ！？ホ、ホンマに？」

きぬよと呼ばれた青いハリネズミの女性が左側の奥で眠そうな表情でミシンを使って裁縫をしてるピンクと白のギンガム模様のエプロ

ンを付けた鼻先に雀斑そばかすがある赤っぽいハリネズミの女性に話し掛けると、驚いたように勢い良く顔を上げる。

あい

「あさみさんもこんにちは！」

あさみ

「こんにちは！あいさんはいつも元気があってええですね。」

あさみと呼ばれた赤っぽいハリネズミの女性は自分に挨拶を交わしたあいに向かって軽くお辞儀をする。

きぬよ

「ところで、今日はどんな用事で来たん？」

あい

「はい、『狸商店』からお届け物を届けに来ました！」

そう言つと、あいは今まで持っていた筒状の荷物をきぬよに手渡す。

きぬよ

「はい、ご苦労様……それから、その子らはあいちゃんの新しい友達？」

きぬよとあさみはネギと明日菜の顔を見て不思議そうに首を傾げる。

ネギ

「は、初めまして！僕達はまき絵さんの友達で街の方から来ました  
！」

きぬよ

「へえ、街の方からやって来たんやね……こちらこそ初めまし  
て！ウチはこの店で働いてる妹のきぬよで、こっちは姉のあさみで  
す！」

あさみ

「あ、姉のあさみです……………」

妹のきぬよは元気良くネギ達に自己紹介するが、逆に姉のあさみは  
少し恥ずかしそうに自己紹介する。

ネギ

「という事は、お二人は姉妹であって……………このお店の経営者って  
事ですね。」

明日菜

「あ、ねえ見て！この店に売ってる服がどれもこれも可愛いわ。」

そう言っつて、明日菜は棚に並べられてる花柄模様やチェック柄等の可愛らしい服を見て思わず声を上げてしまっつ。

きぬよ

「そっでっしやる？この店の服は全部お姉ちゃんがミシンで縫ったんよ。」

あさみ

「き、きぬちゃん！恥ずかしいから、あまり余計な事は言わないといて……………」

あさみはきぬよの言葉に照れ隠しながら顔を真っ赤に染めてしまっつ。

ネギ

「そっなんですか……………あ！この服なんか特に可愛いですね。」

ネギは他の服と同じように棚に並べられてる服の中からピンク色のスパンコール風の服に注目する。

きぬよ

「ああ、その服はサリーちゃんがデザインしたんよ。」

明日菜

「サリーちゃん？」

あい

「サリーは私の親友の一人で、デザイナーになるのが夢なの。」

ネギ

「へえ、あいさんの友達がデザインした服ですか……そのサリーさんって人は村の何処に住んでるんですか？」

あい

「………今はこの村には居ないの。」

ネギ&明日菜

「えっ？」

ネギと明日菜はあいの言葉に耳を傾ける。

あい

「もう一年ぐらい前になるかな………サリーは一人前のデザイナーになる為に遠い都会に引っ越して行ったの。」

あさみ

「そう言えば、サリーちゃんがこの村を出てからもう一年になるんやね……………」

ネギ

「そ、そうだったんですか……………辛い事を思い出させてしまいました。」

ネギはあいに向かって申し訳なさそうに深々と頭を下げる。

あい

「そ、そんな事ないよ！サリーとは今でも手紙でやり取りしてるから全然寂しくないの。」

明日菜

「じゃあ、役場で私達と初めて会った時に出したあの手紙は……………」

あい

「そう、私は月に一回はサリーに手紙を出してるの……………そして、サリーも月に一回だけ私に手紙を出してくれるんだ。」



ネギ

「そうなんですか……本当に仲が良いんですね。」

ネギはあいの友達の思いやる気持ちに感心してしまつ。

あい

「さてと、そろそろ次の配達先に行かなきゃ……それじゃ、きぬよさん！あさみさん！またいつか来ますね！」

きぬよ

「は〜い、また気軽に立ち寄ってね〜！」

あさみ

「またのご来店をお待ちしてます！」

ネギ達はあさみときぬよに見送られながら『エイブルシスターズ』から出て行くのであった。

くすま村・とある川辺く

？

「……………」。

橋の下の川辺でこのマークが付いてる黄色い服を着たペンギンの男性が一言も喋らずに黙って釣りをしていた。

あい

「ダルマンさん、『狸商店』からお届け物です！」

すると、ダルマンと呼ばれたペンギンの男性の背後からいつの間にか箱を持ったあいとネギと明日菜が立っていた。

ダルマン

「……………」そこら辺に置いていてくれ。」

ダルマンは顔もあいの方に向けずに、そのままの体勢であいに話す。

あい

「は、は、はい……………」。

そう言つと、あいは苦笑いしながら荷物をダルマンの横に置く。

明日菜

(何よ、荷物が届いた時ぐらい釣りなんて中断すればいいのに……  
……)。

あい

(ま、まあね……でも、ダルマンさんはいつも此処で釣りをしてる  
の……)。

ネギ

(よっぽど釣りが好きなんですね……)。

ネギ達はダルマンの背後で聞こえないように小声で話し込む。

ダルマン

「……まだ俺に何か用があるのか？」

あい

「あーい、いえ……それじゃ、釣り頑張つて下さい！」

そう言い残すと、ネギ達はその場から駆け出していく。

ピクッ!!

ダルマン

「!?!」

すると、ダルマンの釣竿が何かに掛かったように上下に激しく揺れ動く。

ダルマン

(掛かったか……………それっ!!)

バツシャー……ン!!

ダルマンが勢い良く釣竿を引き上げると、釣れたのは魚ではなくて大きな埴輪ハニラだった。

ダルマン

「……………これじゃ、また今日も釣れないな……………」

ポチャン!

ダルマンは深く溜め息を付きながら釣り上げた埴輪を取ると、釣り糸を再び川の中に入れるのであった……………。

第九十四話くすま村で配達？（後編）く（前書き）

その頃、まき絵・木乃香・刹那・のどかの四人は……。

第九十四話 〱 すま村で配達？（後編） 〱

〱 すま村・役場前 〱

一方、木乃香・刹那・のどかの三人はまき絵と共に役場へとやって来た。

木乃香

「あや？此処って、さっきウチらが立ち寄った役場やない？」

刹那

「そのようですね……………佐々木さん、最初のお届け先って此処ですか？」

まき絵

「うん、そうだよ……………と言っても、今はまだ昼間だから此処に居るのかどうか私にも分からないんだよね。」

のどか

「え？それって、どうゆう事ですか？」

まき絵

「うーん、何て説明すればいいんだろう……………まあいいや、中に入

ってペリこさんに聞いてみよつと」

ガチャッ！

そう言つと、まき絵達は扉を開けて役場の中へと入っていく。

まき絵

「こんには〜！」

ペリこ

「あら、まき絵さん！それと、貴女達はさっきの……………」

木乃香

「さっきはどうも〜。」

木乃香達は先程お世話になったペリこに向かって軽くお辞儀をする。

まき絵

「あの〜、ペリこさん……………ペリみさんって、今此処に居ますか？」

ペリこ

「え？姉さんなら今仮眠を取ってますけど……………姉さんに用事です



か？」

まき絵

「はい、『狸商店』からペリみさん宛てに荷物をお届けに来ました！」

ペリこ

「あゝ、そうでしたか……それだったら、私から姉さんに渡しておきま……。」

ガチャツ！

？

「ふあゝつ、まだ昼間だったのに目が覚めちゃった……。」

突然、奥の扉からペリこと同じ制服を着た厚化粧をした薄紫色のペリカンの女性が大きな欠伸をしながら出て来る。

ペリこ

「あー！ペリみ姉さん。」

まき絵

「丁度良かった！ペリみさんに『狸商店』から荷物をお届けに来ま

した！」

ペリみ

「え？あたしに荷物？……………あゝ、そう言えば頼んでたっけ。」

そう言うと、ペリみと呼ばれたペリカンの女性はまき絵から小包を受け取る。

ペリみ

「やれやれ……………コレって随分前に頼んでおいた物なんだけど、あまりにも届くのが遅いから完全に忘れちゃってたわ。」

木乃香

(……………まきちゃん、あのペリみさんって誰なん？)

まき絵

(えっとね、ペリこさんのお姉さんだよ。)

木乃香&刹那&のどか

(お、お姉さん！？)

木乃香達はまき絵の発言を聞いて、信じられないような表情でペリみを見つめる。

ペリみ

「な、何よ？人の顔をジロジロと見て……………」

木乃香

「い、いやあ……………姉妹にしては全然似てへんなあ〜と思って……………あっ!？」

…。  
木乃香は思わず本音を言ってしまった、慌てて両手で口を塞ぐが……………

ペリみ

「し、失礼ね！あたしとペリこはれっきとした姉妹だっつーの！  
「!」

ペリこ

「ね、姉さん！少し落ち着いて……………」

ペリこは木乃香の言葉に激怒したペリみを必死に宥める。

ペリみ

「ったく、これだからお子ちゃまは……………あゝ、気分が悪い！もう一眠りして来る!！」

バターーーーーン!!

そう吐き捨てる、ペリみはイライラしながら奥の部屋へと戻っていく。

のどか

「い、行っちゃいましたね……………」。

まき絵

「な、何もあんなに怒らなくても……………」。

ペリこ

「ごめんなさい!きつと姉さんは仕事の為に仮眠を取ってたから、それで寝起きが悪くて……………」。

刹那

「仮眠?何の為にですか?」

ペリこ

「姉さんはこの役場で夜間の受付係を担当しているんです……………あ、因みに私は朝の七時から夜の十時までこの役場の受付係を担当します。」

木乃香

「ほなら、この役場は二十四時間営業なんやね。」

のどか

「しかも、姉妹での交代制って凄いですね。」

木乃香達は役場の営業時間やペリこことペリみの交代制による勤務時間に思わず感心してしまう。

まき絵

「ペリこさん、私達は配達がありますからそろそろ行きますね。」

ペリこ

「あーそ、そうですね………それでは、配達頑張って下さい。」

木乃香

「………それと、ペリみさんに『ごめんなさい』って伝えてもらえますっ？」

ペリこ

「はい、私からちゃんと伝えておきます。」

のどか

「あ、ありがとうございます……では、失礼します。」

そう言い残すと、まき絵達は役場から立ち去っていくのであった。

くアルベルトの家前く

まき絵

「此処が次の配達先の家だよ！」

そう言つと、まき絵はごく普通の一軒家の前で立ち止まる。

木乃香

「ほなら、ウチが届けて来るわ……。」

そう言つて、木乃香が届け物の箱を持って家の扉の方へ歩き出した

時…………。

ズボォー……ッ!!

木乃香

「ひゃっ!?!」

突然、木乃香が落とし穴の中に勢い良く落ちてしまう。

刹那

「お、お嬢様!?!」

刹那達は慌てて木乃香が落ちた落とし穴の近くまで駆け寄っていく。

まき絵

「木乃香!大丈夫!?!」

木乃香

「う、うん……………何とか……………」

刹那

「お嬢様、私の手に掴まって下さい!」

木乃香

「あ、ありがとう……。」

刹那が手を差し出すと、木乃香は刹那の手を掴んで落とし穴から這い出て来る。

のどか

「それにしても、一体誰が落とし穴なんか……。」

ガチャツ！

？

「やったあ〜！上手くいったぞ〜〜！！」

？

「大成功だワニ〜！！」

突然、家の中からマリオと同じようなMのマークが付いてる赤い帽子を被り、赤い服の上に青いオーバーオールを着た人間の少年とMのマークが付いた赤い服を着たたいだい橙色の鱈ワニの少年が嬉しそうに出て来る。



まき絵

「あゝ！ゆう君とアルベルト君！！」

まき絵はゆうという名前の人間の少年とアルベルトという名前の鱈の少年の姿を見て思わず声を上げてしまう。

ゆう

「お？何だ、俺達の落とし穴に落ちたのはまき絵だったのか。」

まき絵

「ち、違うよ！落とし穴に落ちたのは私じゃなくて木乃香だよ！」

そう言つと、まき絵は痛そうに膝を手で押さえてる木乃香に向けて指差す。

アルベルト

「あれ？この子達、この村では見ない顔だワニ。」

ゆう

「もしかして、新入りか？」

のどか

「い、いえ！私達は……………」

刹那

「……………そんな事より、一つだけ聞きたい事があるのですが……………」

ゆう&アルベルト

「……………え？」

ゆうとアルベルトは刹那の言葉に耳を傾ける。

刹那

「この落とし穴を掘ったのは貴方達ですか？」

ゆう

「おお、その通り！俺とアルベルトが『落とし穴の種』を植えて作った屈指くっしの落とし穴だ！」

アルベルト

「化石探しに穴を掘ってたら『落とし穴の種』を偶然見つけて、ゆう君が僕の家を訪ねて来た人を落とし穴に落としとしてやるって言っ……………」

刹那

「ふざけるな！……！」

ゆう&アルベルト

「ひいつ！？」

ゆうとアルベルトは刹那の大きな怒声に一瞬だけ怯んでしまう。

まき絵

「さ、桜咲さん？」

刹那

「そんな軽率的な悪戯のせいで木乃香お嬢様が落とし穴に落ちてしまい、更に足に怪我を負ってしまったではないか……！」

木乃香

「い、いや………ただちょっと膝を擦り剥いただけやから………」。

刹那

「いいえ、擦り剥いただけでも怪我は怪我です！」

アルベルト

「ゆ、ゆう君………あの子、何だか目が怖いワニ………此処は素直

に謝った方が……………」

ゆう

「じよ、冗談じゃない！男がそう簡単に謝るなんて……………大体、そ  
ちが勝手に落とし穴に落ちたのがいけないんじゃないか！」

のどか&まき絵&アルベルト

(な、何て無茶苦茶な言い分……………)

まき絵達はゆうの無茶苦茶な言い分に思わず呆れ返ってしまふ。

刹那

「フン、反省の色は無しか……………潔く謝罪すれば許してやらない事  
もなかったが仕方がない……………斬ります!!」

そう言うと、刹那は夕凧を取り出してゆう達に近付こうとする。

ゆう&アルベルト

(ほ、本物の刀!?)

ゆうとアルベルトは刹那の夕凧を見て思わず腰を抜かしてしまふ。

まき絵

「さ、桜咲さんったら何をしようとしてるの！？って言うか、その刀って本物！？」

木乃香

「アカンよせつちゃん！ウチはもう平気やから……………」。

のどか

「いつもの冷静な桜咲さんに戻って下さ〜い！」

そう言いながら、木乃香達は刹那をゆう達に近付けさせないように三人掛かりで必死に押さえ付ける。

刹那

「は、離して下さい！この無礼で愚かな輩を成敗させて下さい！..」

アルベルト

「ゆ、ゆう君！あの子はマジで僕達を斬るつもりだワニ〜！..」

ゆう

「ま、まさか……………」。

木乃香達に掴まれた刹那がどんどんゆう達に近付こうとした時…………

…。

ズボツ!!

?

「くおらあ——————っ!!」

全員

「!?!」

突然、刹那達とゆう達の間の地面から頭にランプ付きのヘルメットを被って白い服の上にオーバーオールを着たモグラの中年の男性がつるはし鶴嘴を持って物凄い形相をしながら勢い良く現れる。

まき絵

「ゲツ!?!リ、リセットさん……………」

まき絵はリセットという名前のモグラの中年の男性を見た途端に顔色が真っ青になってしまふ。

リセット

「リセットするなって言ってるやろ————!!」

全員

「……………はい？」

その場に居る全員がリセットさんの言葉に首を傾げる。

リセット

「……………あ、しまった！ついいつもの癖で間違っしてしまわ。」

木乃香

(……………何を間違ったんやろ?)

リセットさんの間違ったという発言に木乃香達は更に首を傾げてしまっ。

リセット

「ところで、君ら三人とは初めて会うようやら軽く自己紹介しとか……………ワシはな、この『すま村』のルール違反を決して見逃さん正義の人・リセットさんっちゆう者や。」

のどか

「は、はあ……………」

リセット

「あゝ、それと読者の皆様にも挨拶せなアカンな……えゝ、この度は『魔法先生ネギま・ゲーム世界を巡る旅』の第九十四話を読んで頂き、誠にありがとうございます！作者に成り代わりましてワシ……いや、私が……んゝ、何やったかいなあ……ええゝい！面倒臭い！もうええわー！」

木乃香

（……まきちゃん、あのリセットさんって人……じゃなくて、モグラさんは誰に言うてるんかな？）

まき絵

（さ、さあ……私にもよく分からないよ。）

木乃香とまき絵はリセットさんに聞こえないように小声で話す。

リセット

「まあ、そんな事はどうでもええねん……問題は君なんや！」

刹那

「えー！？わ、私ですか？」

リセットさんが鶴嘴を刹那に向けると、刹那は思わず驚いたような表情を浮かべてしまう。



リセット

「そや！そんな物騒な物をブンブン振り回したら危ないやないかってワシは言いたいねん！！」

刹那

「い、いえ！これには訳が……………」

リセット

「口答えすなあ—————っ！！」

刹那

（うっ！？な、何て大きな怒声……………」

木乃香

（ま、まるで雷が落ちたみたいや……………」

のどか

（み、耳の奥まで響きます……………」

刹那達はリセットさんの大きな怒声に思わず両手で耳を塞いでしま  
う。

リセット

「ったく、これやから最近の若者は……ええか？もし君がその刀で誰かを傷付けたとしよう、そしたら君はその傷付けた人に対して責任取れるか？治療費や慰謝料とか満足に払えるか？」

刹那

「そ、それは……………」

リセット

「無理やる？せやから、そんな危ない真似は止めましょって話をしてんねん。」

刹那

「は、はい……………」

リセット

「うむ、分かってくれたならそれでええねん……………それと、この二人に何か言わなアカンやろ？」

刹那

「そうですね……………先程は感情的になってしまい、申し訳ありませんでした！」

そう言つと、刹那はゆうとアルベルトに向かつて深く頭を下げる。

ゆう

「あ、いや……謝ってくれるなら別にいいんだけど……」。

アルベルト

「それに、僕達も悪かったワニ……」。

リセット

「何っ！？それはどういう意味や？」

アルベルト

（し、しまったワニ！）

ゆう

（ば、馬鹿っ！！）

リセットさんがアルベルトの一言に疑問を持つと、アルベルトは慌てて大きな口を両手で塞ぐ。

まき絵

「そうそう！ゆう君達はね、家の前で落とし穴を掘って悪戯してたんですよー！」

リセット

「な、何やとぉー!？」

リセットさんはまき絵の発言を聞いた途端に頭から湯気が騰がっていく。

ゆう

(マ、マズイ！俺達も怒られない内にこっそり逃げよう……………。)

アルベルト

(そ、そうだワニね……………。)

そっけなき合つと、ゆうとアルベルトがゆっくりとその場から逃げ出す。……。

まき絵

「あー逃がさないよー!ー!」

ビュュー……………ッ!ー!ー!

ゆう&アルベルト

「うわっ!?!」

次の瞬間、まき絵が新体操に使うピンク色のリボンを取り出して、ゆうとアルベルトの体を縄を縛るように引っ捕らえる。

木乃香

「わあ、流石は新体操部やなあ!」

まき絵

「えへへ、まあね……。」「

木乃香に褒められたまき絵は思わず照れながら頭を掻いてしまう。

リセット

「ところで、話は全部聞かせてもろったで!結局の原因は君らうちゆう事らしいなあ!?!」

ゆう

「い、いや……。あの……。」「

アルベルト

「それは……。その……。」「

リセット

「このあほんだらあ………っ！……！」

ゆう&アルベルト

「ひい………っ！？」

ゆうとアルベルトは先程よりもかなり大きなリセットさんの怒声に  
思わず怯んでしまっ。

～三十分後～

それから、ゆうとアルベルトは三十分間ずっとリセットさんの説  
教を聞かされる羽目になってしまった。

リセット

「………という訳で、悪戯も程々にしとかなアカンで？」

ゆう

「は、はい……………」

アルベルト

「分かったワニ……………」

そう言つと、ゆうとアルベルトはげっそりとしたような表情で頷く。

リセット

「ほなら、早速この姉ちゃんに謝まるんや。」

ゆう

「……………」

アルベルト

「ごめんなさいだワニ……………」

ゆうとアルベルトは申し訳ないような表情を浮かべながら木乃香に向かつて深く頭を下げる。

木乃香

「も、もうええよ……………ただ擦り剥いただけやし……………」

リセット

「よっしゃ、これでやっと丸く治まったな……………ほなら、ワシはそろそろ帰るとするかな。」

そう言って、リセットさんが地面に潜ろうとしたが……………。

リセット

「あーせやせや、最後に一言だけ……………寝る前には必ず歯を磨けよ？」

全員

「……………はい？」

その場に居る全員がリセットさんの一言で再び首を傾げてしまう。

リセット

「ほな！ー！」

ズボツ！！

そう言い残すと、リセットさんは入って来た穴の中へと潜ってしま



う。

のどか

「……結局、あの人は何だったんでしょうか？」

まき絵

「あまり深く考えない方がいいよ……リセットさんって、いつもあんな事してるみたいだから……。」

まき絵は啞然とした表情で疑問を抱くのどかに苦笑いしながら答える。

木乃香

「……ところで、ウチらは何をしてたんやったっけ？」

刹那

「え？え〜っと……。」

木乃香と刹那は本来の趣旨を忘れてしまい考え込んでしまう。

まき絵

「ちょ、ちょっと！忘れちゃったの！？私達は配達途中で……。」

「

木乃香

「あーそやったわ……………はい！アルベルト君にお届け物だよ。」

そう言うと、木乃香は今まで持っていた荷物をアルベルトに手渡す。

アルベルト

「ぼ、僕に？何だろう……………ムッ！？この箱から漏れる甘い香りは……………」  
『お芋カステラ』だワニ〜！！」

アルベルトが匂いを嗅いで箱の中身を理解した途端、先程の落ち込んだような表情が満面の笑顔へと変わっていく。

ゆう

「『お芋カステラ』か……………アルベルトは『お芋カステラ』が大好物なんだよな。」

アルベルト

「そつだワニ！僕、この『お芋カステラ』を一口食べただけで体がとろ蕩けちゃいそうな気分になるんだワニ〜！！」

木乃香

「あ、あははは……………よっほど好きなんやね……………」

木乃香はアルベルトの満面の笑みに思わず苦笑いしてしまう。

まき絵

「それじゃ、そろそろ次の家に行く？」

木乃香

「う、うん。」

そう言っつて、木乃香達がその場から立ち去ろうとした時……………。

ゆう

「ちよつと待てよ！」

木乃香

「……………え？」

木乃香達はゆうに呼び止められて、その場で立ち止まる。

ゆう

「さっきは本当に悪かったな……………お詫びの印にコレをやるよ。」

そう言つと、ゆうは木乃香に向かって小さなさくらんぼを差し出す。

木乃香

「さくらんぼ？」

ゆう

「俺が住んでる隣の村に沢山あるんだ……受け取ってくれよ。」

木乃香

「うん、ありがとう。」

木乃香は嬉しそうに笑顔を浮かべながら、ゆうからさくらんぼを受け取る。

アルベルト

「ゆう君、僕の家と一緒に『お芋カステラ』でも食べるワニ！」

ゆう

「おう！今行くよ………そんじゃ、またな！」

バタンッ！！

そう言い残すと、ゆうはアルベルトの家に入っていく。

まき絵

「へえ、珍しいなあ……………ゆう君が人に何かをあげるなんて……………」

木乃香

「……………ゆう君って、ホンマは優しい男の子なんやね。」

刹那

「そ、そうかもしれませんね……………」

刹那は木乃香の言葉に思わず苦笑いしながら同意してしまつ。

まき絵

「……………それにしても、桜咲さんって木乃香の事になると色々な意味で凄いやね。」

刹那

「え！？あ、いや、それは……………」

刹那はまき絵の一言に思わず動揺してしまつ。

まき絵

「それに、ゆう君と桜咲さんってさ……………」。

刹那

「な、何ですか？」

まき絵

「声が似てると思わない？」

刹那

「……………」

刹那はまき絵の発言に呆気に取られてしまう。

木乃香

「あゝ！そう言われてみればそやなあ。」

のどか

「じ、実は私もまき絵さんと同じ事を考えてました……………」。

刹那

「お、お嬢様や宮崎さんまで……………そんなに似てましたか？」

木乃香&まき絵

「うん！」

のどか

「はい。」

刹那の質問に対して、木乃香とのどかとまき絵はほぼ同時に頷く。

刹那

「は、はあ……………ともかく、次の配達先へ行きましょう！」

まき絵

「あ！そうだった……………急いで行かなきゃ！」

こうして、まき絵達はアルベルトの家を後にして次の配達先へと向かうのであった……………。

くアポロの家前く

トントン！

まき絵

「アポロさくん！お届け物でくす！！」

まき絵達は庭に青い薔薇が沢山咲いてる一軒家へとやって来て、まき絵が荷物を持って家の扉をノックしていた。

木乃香

「わあく、青い薔薇なんて珍しいあく。」

のどか

「綺麗ですね……………」

そう言いながら、木乃香とのどかは庭に咲いてる沢山の青い薔薇に見とれる。

まき絵



「……………うん、誰も出て来ないなあ。」

刹那

「ひょっとして、お留守なのでしょうか？」

まき絵

「困ったなあ、この家で最後ののに……………しょうがない、アポロさんが行きそうな場所に行ってみよっか。」

木乃香

「まきちゃん、心当たりでもあるん？」

まき絵

「うん、一応ね……………『純喫茶・鳩の巣』って喫茶店によく行っって聞いた事あるから、まずはそこに行ってみよ！」

そう言っと、まき絵達はその場から立ち去ろうとする。

のどか

「あーま、待って下さい……………」

のどかも慌ててまき絵達の後を追いつけようとするが……………。

ブーーーーー！

のどか

「ひっ！？は、蜂が……きゃあっ！？」

ドッシーーーーーン！！

突然、大きな蜂がのどかの目の前に現れて、驚いたのどかは沢山の青い薔薇が咲いてる方へと勢い良く転んでしまう。

まき絵

「ほ、本屋ちゃん！？」

木乃香

「あらら、転んでもうたんやね……。」「

刹那

「大丈夫ですか？」

のどか

「は、はい……。何とか……。」「

そう言っつて、のどかがゆっくりと立ち上がった時……………。

ズボツッ！！

リセット

「くおらあ——————っ！！」

全員

「!?!」

突如、地面からリセットさんが物凄い形相で勢い良く出て来る。

まき絵

「ま、また出た……………」

リセット

「また出たつて何や！人をお化けみたいに…………つて、よう見たらさ  
っきの姉ちゃん達やないか。」

木乃香

「ど、ど、ど……………」

そう言うと、木乃香は苦笑いしながらリセットさんに挨拶をする。

リセット

「それはともかく、問題はこの庭やな……………」。

のどか

「え？庭……………って、わあっ!？」

のどかは辺りを見回してみると、のどかが転んだ辺りに咲いていた青い薔薇は全て潰れていた。

木乃香

「あちゃ〜、のどかが転んだ所に咲いていた薔薇が全部潰れとるわ……………」。

のどか

「しゅ、しゅめんなさい!」

リセット

「いやいや、ワシに謝ったってしゃあないやろ……………」。

リセットはリセットさんは深く頭を下げて自分に謝るのどかに呆れ

てしまう。

リセット

「まあ、見たところワザとやった訳でもなさそうやし……………説教は勘弁しとくか。」

まき絵

( ホッ、良かった……………。 )

まき絵はリセットさんの言葉を聞いて安堵の表情を浮かべる。

リセット

「……………おい、今さっき心の中で『ホッ』としなかったか？」

まき絵

「へ!?ま、まさか!そんな事ありませんよ。」

まき絵はリセットさんの鋭い勘に動揺を抑えながら必死に弁解をする。

リセット

「そうか、それならええねんけど……………それにしても、よりによってアポロの家の庭を荒らすとは君も運が悪いなあ……………ほな!!!」

ズボッ！！

そう言い残すと、リセットさんは出て来た穴から再び入っていく。

木乃香

「……………リセットさんって、何処にでも現れるんやね。」

まき絵

「う、うん……………悪い事をした人が居たら必ず現れるんだよね。」

刹那

「まさに神出鬼没ですね……………」。

木乃香達はリセットさんが出入りした穴を見つめながら苦笑いを浮かべる。

のどか

「あ、あの……………私、アポロさんに謝りたいんですけど……………」。

まき絵

「あ、そうだったね……………それじゃ、早速『鳩の巣』に行ってみ

よ。」

そう言うと、まき絵達はアポロの家を後にして、『純喫茶・鳩の巣』を目標して歩き出していく。

第九十四話くすま村で配達？（後編）くすま村（後書き）

果たして、アポロはのどかを許してくれるのか？



第九十五話 純喫茶・鳩の巣で謝罪（前書き）

まき絵・木乃香・刹那・のどかの四人はアポロに謝る為に『博物館』へと目指す……………。

第九十五話 純喫茶・鳩の巣で謝罪

すま村・博物館前

まき絵達は全体が煉瓦造りの巨大な建物へとやって来た。

木乃香

「ほえ、大きな建物やなあ。」

刹那

「佐々木さん、此処が『鳩の巣』という喫茶店なんですか？」

まき絵

「違うよ、此処は『博物館』だよ……この『博物館』の地下に『鳩の巣』があるの。」

のどか

「という事は、そこにアポロさんが居るんですね……。」

まき絵

「うーん、居るかどうかわからないけど……とにかく、入ってみよー。」

そう言って、まき絵達が『博物館』に入ろうとした時……。

？

「皆さん！」

木乃香

「ん？この声は……。」

木乃香が聞き覚えのある声に反応して後ろの方を向いてみると、向こうからネギ・明日菜・あいの三人が駆け寄って来た。

まき絵

「あ！ネギ君達だ。」

刹那

「どうやら、ネギ先生達の方は仕事が終わったようですね。」

明日菜

「まあね、木乃香の方は終わったの？」

木乃香

「いやあ、それが……。」

木乃香は今までの経緯をネギ達に全て説明した。

あい

「え〜っ!?!アポロさんの庭に咲いてた青い薔薇を目茶苦茶にしちやっただの?」

のどか

「は、はい……………」

のどかは落ち込み気味で俯いたままあいの質問に答える。

明日菜

「それで、今からそのアポロさんって人に謝る為にこの『博物館』の地下で経営してる喫茶店に行くって訳ね?」

まき絵

「そういう事……………でも、アポロさんっていつも怒ってるような顔してるから、そう簡単に許してくれるかなあ?」

のどか

「うう……………」

のどかはまき絵の言葉を聞いて、より一層不安になってしまふ。

あい

「だ、大丈夫だよ！アポロさんはああ見えても優しいから、ちゃんと謝れば許してくれるよ。」

ネギ

「そ、そうですね！僕達も一緒に付いて行きますから、元気を出して下さいー！」

のどか

「で、でも……………」。

あい

「……………実はね、私も前にアポロさんの庭を目茶苦茶にしちゃった事があったの。」

のどか

「……………えっ!?!?」

のどかを含む全員があいの発言に耳を疑った。

あい

「あ！勿論、ワザとやった訳じゃないけどね……でも、私が庭を目茶苦茶にしたのは事実だったから、私は『鳩の巣』に行つてアポロさんに謝つたの。」

明日菜

「そ、それで？その後はどうなったの？」

あい

「アポロさんは何も言わずに『鳩の巣』から出て行つたの……それ以来、私はアポロさんを怒られてしまったと思つて、ずっと後悔してたの……でも、アポロさんは私が庭の事でまだ悩んでいた事に気付くと、逆に『悪かった』と言つて謝つてくれたの。」

ネギ

「成程、アポロさんは自分のせいであいさんがずっと悩んでいたと思つたから謝つたんですね。」

木乃香

「へえ、ホンマは優しい人なんやね。」

あい

「そう！だから、そんなに落ち込む事なんて無いよ！」

のどか

「あ、あいさん……。」

のどかはあいの励ましの言葉に少しだけ元気を取り戻していく。

のどか

「ありがとうございます……少しだけ気が楽になりました。」

ネギ

「それは良かった……。」

ネギはのどかの言葉に取り合えず一安心する。

木乃香

「ほなら、早速中に入ってみよ！」

ギーーーーーッ!!

木乃香が扉を開けると、ネギ達はゆっくりと『博物館』の中へと入っていく。

ネギ

「お、お邪魔します……………」

明日菜

「うわゝ、中は真っ暗ね……………」

そうこう言いながら、ネギ達は真っ暗な部屋にどんどん入っていく。

バッタアーーーーン！！

のどか

「ひっ!?!」

のどかは突然勢い良く閉じた扉の音に驚いてしまう。

のどか

（ビ、ビククリしたあ……………ん？）

のどかがふと上の方を見上げてみると、暗闇から全体が骨だけの巨大な生物がのどかの目に写し出される。

のどか

「きゃあ……………!!」



パチツッ!!

?

「な、何事ですか!?!」

のどかが大きな叫び声を上げた途端に部屋全体が明るくなり、部屋の奥から胸元に小さな緑色の蝶ネクタイを付けた茶色っぽい梟フクロウの男性と後頭部にピンク色の大きなリボンを付けた赤っぽい梟の少女が慌てて駆け寄って来る。

?

「ホホー? 誰かと思ったら、あいさんとまき絵さんではありませんか。」

あい&まき絵

「こんにちは!」

?

「あら? 初めての人もいらっしやるみたいね。」

梟の少女はネギ達の顔を見て首を傾げながら尋ねる。

ネギ

「ぼ、僕達はまき絵さんの友達で街の方から遊びに来たんです！」

？

「ホホー、まき絵さんの友達でしたか………初めまして、私は『博物館』の館長をしてる学芸員のフータと申します。」

？

「私は『博物館』の二階にある『天文台』を管理してるフータ兄ちゃんの妹のフーコです。」

フータ&フーコと名乗る梟の兄妹は、ネギ達に向かって軽くお辞儀をしながら丁寧に自己紹介をする。

ネギ

「ご、ご丁寧にごつも……。」

フーコ

「………ところで、さっき叫び声を上げたのはどなたですか？」

のどか

「は、はい………私です……。」

そう答えると、のどかはかなり恥ずかしそうにゆっくりと手を上げる。

のどか

「す、すみません……………暗闇の中で恐ろしい物を見たような気がして……………」

フータ

「ホー？その恐ろしい物とは、この恐竜の化石達の事でしょうか？」

明日菜

「え？化石って……………あっ!？」

ネギ達が周りを見渡してみると、広い部屋の周りには沢山の恐竜の化石が展示されていた。

ネギ

「うわあ〜!コレって全部恐竜の化石なんですか!？」

フータ

「はい、全て村の皆様が寄贈ユクギして下さったのです。」

木乃香

「へえ〜、この世界にも恐竜がおったんやね〜。」

まき絵

「え？この世界って？」

刹那

「い、いえ！何でもありませんよ……………」。

まき絵が木乃香の言葉に耳を傾けると、刹那が慌てて話をはぐらかそうとする。

明日菜

「……………ねえ、この『Tレックス』ってティラノサウルスじゃないの？」

フータ

「はい！その通りですー!!」

明日菜

「わあっ!?!」

明日菜が『ドレックス』と書かれた台と巨大な恐竜の化石の前で呟いていると、いきなりフータが目を輝かせながら話に割り込んでくる。

フータ

「そもそも、『ドレックス』とはコウルドサウルス類・ティラノサウルス科・ティラノサウルス属に属し、巨大な歯と顎を武器とした肉食恐竜の一種です……因みに、『ティラノサウルス』という言葉は『暴君の蜥蜴』<sup>トカゲ</sup>という意味で、『ドレックス』は『王』という意味で……。」

フーコ

「……………ごめんなさい、ちょっとこちらに……………」

明日菜

「え？は、はあ……………」

フータが明日菜に向かってティラノサウルスについて延々と説明している、途中でフーコが呆れた表情を浮かべながら明日菜の手を引っ張って、その場から少し離されていく。

フーコ

「全く、お兄ちゃんは相変わらず化石の事になると止まらないんだから……………ところで、何かご用があって此処に来たんじゃないですか？」

ネギ

「は、はい！実は僕達、アポロさんに用事があった『鳩の巣』に居ると聞いて来たのですが……………」。

フーコ

「そうだったんですか……………では、私に付いて来て下さい。」

明日菜

「……………ねえ、お兄さんはあのままでもいいの？」

明日菜は啞然とした表情で未だに延々と説明しているフータを指差しながらフーコに尋ねる。

フーコ

「いいんですよ、いつもの事ですから……………さあ、こちらへどうぞ。」

そう言うと、フーコはネギ達を案内しながら奥の方へと進んでいく。

〔純喫茶・鳩の巣〕

ガチャッ！

ネギ達が扉を開けて店の中に入ると、三個の椅子が並べられてる力ウンターの奥で小さな珈琲コヒキのカップを磨いてる小さな眼鏡を掛けて髭を生やした店の主人と思われる鳩の男性の姿とライブハウスのような広い場所が目についた。

ネギ

「此処が『鳩の巣』ですか……………とても静かな店ですね。」

まき絵

「でも、この店の珈琲がとっても美味しいんだよ。」

明日菜

「あれ？まきちゃんって珈琲飲めたっけ？」

まき絵

「いやあ、前は苦いからミルク入れないと飲めなかったんだけど……………マスターの沸かす珈琲はミルクを入れなくても本当に美味し

「いんだよ。」

ネギ

「へえ、そんなに美味しいんですか……………」

そう呟きながら、ネギがマスターと呼ばれた店の主人を見つめていると……………。

のどか

「あ、あの……………ところで、アポロさんは……………」

ネギ

「あーそうでした……………すっかり忘れてました。」

明日菜

「もう、しっかりしなさいよ……………」

木乃香

「……………なあ、あそこに座つとるゴリラさんとアリクイさんのどちらかがアポロさんちゃうの?」

木乃香が指差す先を見ると、店の隅にある机と椅子に向かい合つて座つてる水色の生地にはAの白い文字が特徴の服を着た左右の頬



に髭を生やしたゴリラの男性と東雲系の落ち着いた服を着た青いアリクイの男性が目についた。

あい

「いいえ、あの二人はアポロさんじゃないよ。」

まき絵

「えーっと、確か……ゴリラの方がアランさんで、アリクイの方がさくらじまさんだよね？」

ネギ

「では、アポロさんはこの店には居ないって事ですか……………」

あい

「ちょっと待って！私、アランさん達に聞いて来るから……………」

そう言いつつ、あいはアランという名前のゴリラの男性とさくらじまという名前のアリクイの男性が座っている机の方へと近付いていく。

あい

「アランさんさくらじまさん、ここにちは……………」

アラン

「ん？おお、誰かと思ったたらあいじゃねえか。」

さくらじま

「あいつもこの店で珈琲を飲みに来たでござるか？」

あい

「いえ、今日はアポロさんに用事があった……………今日、アポロさんには会いました？」

アラン

「アポロ？うーん、今日はまだ一度も会ってねえな……………」

さくらじま

「俺も会ってないでござるな……………」

あい

「そ、そうですか……………」

あいはアランとさくらじまの言葉を聞いて、少し落ち込み気味に俯いてしまう。

さくらじま

「……………アポロと言えば、最近付き合ひやすくなったと思わないでござるか？」

アラン

「ああ、一年位前までは変わり者で付き合いも悪かったのにな。」

ガチャッ！

アランとさくらじまがアポロについて話していると、大きなジツパ  
ーが付いた黒い服を着た大きな黄色い嘴くちばしを持った鷲ワシの男性が店の中  
に入ってくる。

アラン

「お！噂をすれば……………」

あい

「ア、アポロさん！」

のどか

(えっ！？あ、あの人が……………)

のどかはいいがアポロと呼んだ鷲の男性を思わず目を凝らしながら  
見つめる。

アポロ

「マスター、いつもの珈琲を……………」

マスター

「畏まりました……………」

アポロが不機嫌そうにカウンターの椅子に座ってマスターと呼ばれた店の主人に注文すると、マスターは珈琲沸かし機に粉末にした珈琲豆を入れて沸騰させる。

さくらじま

「……………今日は何だか機嫌が悪そうでごわすな。」

アラン

「どうした？アポロ。」

アポロ

「……………誰かが俺の庭を目茶苦茶にしたんだ……………折角咲いた青い薔薇が……………」

のどか

（そ、それってまさか……………」）

のどかはアポロの言葉を聞いて、かなり気まぎれになってしまっ。

カチャッ！

マスター

「……………煎れたてをどうぞ。」

しばらくすると、マスターが煎れたばかりの珈琲を入れてある受け皿に乗せた白いカップをアポロに差し出す。

明日菜

（本屋ちゃん、謝るなら今がチャンスだよ！）

のどか

（で、ですが……………いざとなると勇気が……………。）

ネギ

（大丈夫！僕達も一緒ですから……………。）

のどか

（……………分かりました！私、きちんとアポロさんに謝りますー！）

まき絵

(そうそう！その調子……………あ！そうだ、謝るついでにコレをアポロさん渡して来て。)

そう言つと、まき絵はのどかに小さな箱を手渡す。

刹那

(さ、佐々木さん……………ひょっとしてコレは……………。)

まき絵

(そう 『狸商店』からのお届け物だよ！)

明日菜

(こ、こんな時に何て事を本屋ちゃんに頼んでるのよ!?)

まき絵

(え、だつてえ……………謝った後から渡しても嬉しくないだろうから、謝る前に渡した方がいいと思つて……………。)

木乃香

(そ、それはそうかもしれへんけど……………。)

のどか

( …… 分かりました、謝る前に渡して来ます。 )

そう言うと、のどかはまき絵に渡された荷物を持ちながらゆっくりとアポロに近付いていく。

ネギ

( あ!?! の、のどかさ……。 )

明日菜

( …… アレで大丈夫かな? )

あい

( 大丈夫、アポロさんなら絶対に許してくれるよ! )

木乃香

( せやったらええねんけど…。 )

刹那

( とにかく、まず最初は見守りましょう。 )

ネギ達は各自それぞれ思いながら、アポロに謝ろうとするのどかを少し離れた場所から見守っていく。

のどか

「あ、あの……………」

アポロ

「……………ん？」

丁度珈琲を飲み終えたアポロは、のどかの声に反応して後ろの方を向く。

のどか

「コ、コレ……………お届け物です……………」

アポロ

「届け物？ああ、『狸商店』からか……………ありがとつ。」

そう言うと、アポロはのどかから荷物を受け取る。

アポロ

「……………ところで、君はこの村では見掛けない顔だが……………もしかして、新入りか？」

のどか



「え？あ、いえ……………私は街の方から来まして……………その、えっと……………」

木乃香

（のどか！ファイトやえ！）

あい

（頑張つて！）

明日菜

（そうよ！修学旅行で初めてネギに告白した時みたいに勇気を出して！）

ネギ

（あ、明日菜さん！？）

まき絵

（え！？それって本当？私、初耳んだけど……………）

刹那

（み、皆さん！少し静かにして下さい！）

小さな声でそうこう言いながら、ネギ達はのどかを見守り続ける。

のどか

「あ、あのーじ、実は私……………」。

アポロ

「え？」

のどか

「に、庭の……………庭の……………庭の手入れが好きで……………」。

アポロ

「……………は？」

ズルツ！！

アポロはのどかの意味不明な発言に首を傾げ、ネギ達は思わずズツコケてしまう。

のどか

「い、いえ！そうじゃなくて……………に、鶏が好き……………でもなくて……………その……………」。

アポロ

「……………い、一体何が言いたいんだ？」

あい

(……………あの子、結構口下手なんだね。)

木乃香

(まあ、のどかは普段消極的だから……………。)

ネギ

(のどかさん！後もう一息ですよー!!)

あい達はのどかの口下手に少し苦笑いするが、ネギだけは真剣な眼差してのどかを見守っている。

のどか

「あ、あの……………私……………」

そう言い掛けて、のどかが握り拳を作りながら大きく息を吸った瞬間……………。

のどか

「すいません！お庭を目茶苦茶にしたのは私なんですー!!」

アポロ

「な、何だって？」

ネギ達

（い、言った！！）

アポロは深く頭を下げて謝罪するのどかに一瞬唖然とするが、ネギ達は心の中で喜びの声を上げる。

のどか

「お、お届け物を渡そうとしたらお留守で……その時、大きな蜂が私の前に現れて……そ、それに驚いた私は転んでしまって……庭に咲いていた青い薔薇を踏んでしまい……ほ、本当にごめんなさい！！」

アポロ

「……………」

のどかはもう一度深く頭を下げながら謝罪するが、アポロは何も言わずに険しい表情でのどかを見つめる。

明日菜

（あちゃ〜、アレは相当怒ってんじゃない？）

木乃香

(そやね、さっきよりも目付きが悪くなったみたいやし……。)

ネギ

(……………僕、ちょっと行って来ます!)

まき絵

(ネ、ネギ君!?)

この状況に耐え切れなくなったネギは、急いでのどかの方へと駆け出していく。

ネギ

「お願いします!のどかさんを許してあげて下さい!」

アポロ

「な、何だ?」

のどか

(ネ、ネギ先生!?)

のどかは突然話に割り込んで来たネギに思わず目を疑った。

ネギ

「僕はその場に居なかったから、詳しい状況とかは分からないんですけど……でも、のどかさんは故意に人様の庭を荒らすのようない人じゃないんです！それだけは分かってほしいんです！！」

のどか

(ネギ先生……………。)

のどかは一生懸命に訴えるネギの姿に見取れる。

明日菜

「ネギの言っ通りよ！」

明日菜の言葉と共に、明日菜達もネギ達の方へと近付いて来る。

のどか

「み、みんな……………」

明日菜

「それに、本屋ちゃんの責任は私達の責任でもあるしね。」

木乃香

「せや、ウチらは仲間やもん！」

刹那

「なので、仲間である私達も一緒に謝ります！」

まき絵

「も、勿論私も……。」

あい

「私だって謝るよ！」

ネギ

「み、皆さん………という事で、庭を目茶苦茶にしまして………」

全員

「本当にすいませんでした!!！」

ネギ達は一斉に声を揃えながらアポロに向かって深く頭を下げて謝罪する。

アポロ

「わ、分かった！よく分かったから、頭を上げてくれ……………」

アポロはネギ達の行動に意表を付かれて、思わず動揺をしてしまう。

アラン

（おい、あのアポロが動揺してるぜ……………」

さくらじま

（うむ、流石のアポロも女の子達に頭を下げられたら形無しでござすな……………」

ネギ達のやり取りを一部始終見ていたアランとさくらじまはネギ達に聞こえないように小声で話す。

ネギ

「……………」という事は、のどかさんを許してくれるんですか？」

アポロ

「ああ、悪気があってやった訳でもなさそうだし……………」それに、花はまた植えればいいしな。」

のどか



「あ、ありがとうございます……！」

アポロの言葉にのどかは嬉しさのあまりにお礼を言いながら再び頭を下げた。

アポロ

「だ、だからもう頭を下げなくてもいいんだってば……。」

のどか

「あ！す、すみません……。」

明日菜

「って、また謝ってるし……。」

のどか

「あ……。」

アポロ

「アッハハハハハハ！」

アポロは何度も頭を下げたり謝ったりするのどかに思わず笑い出してしまった。

まき絵

「ふん……。」

アポロ

「……………な、何だ？俺の顔に何か付いてるか？」

まき絵

「いやあ、アポロさんも笑うんだなあ〜と思って……………」

アポロ

「あ、当たり前じゃないか……………」

アポロはまき絵の言葉に苦笑いしながら答える。

アポロ

「さてと、そろそろ帰るとするか……………マスター、珈琲美味かったよ。」

ガチャッ！

アポロはカウンターに二つの金色の通貨を置いて扉を開けて店から出て行く。

アラン

「さくらじま、俺達もそろそろ帰るか。」

さくらじま

「そうでごわすな……………マスター、珈琲代は机の上に置いておくで  
ごわすよ。」

ガチャッ！

アランとさくらじまも机の上にそれぞれ二つずつの通貨を置いて、  
店の扉を開けて出て行く。

明日菜

「……………それじゃ、問題も解決したし私達も店から出ましょ。」

ネギ

「そうですね。」

そう言って、ネギ達が店から出ようと歩こうとするが……………。

まき絵

「ねえ、折角『鳩の巣』に来たんだからさ……少しだけ珈琲でも飲んでいかない？」

刹那

「え？で、ですが……私達は今仕事中心じゃないですか。」

まき絵

「いいじゃん、どうせ全部届け終えたんだし……それに、みんなにもマスターの美味しい珈琲を飲ませてあげたいの。」

木乃香

「うん……まきちゃんがそないに美味しいって言うんだったら、一杯飲んでみたくなるわ。」

明日菜

「ちよ、ちよと待ってよ！簡単に『飲みたい』って言うけど、私達はお金なんて持ってないのよ？」

まき絵

「それだったら大丈夫！私がみんなの分の珈琲代を払うから。」

ネギ

「えっ！？ば、僕達五人分の珈琲代をですか？」

ネギ達はまき絵の発言に思わず耳を疑った。

あい

「ほ、本当に大丈夫？マスターの珈琲は一杯二百ベルだから、五人分だと千ベルは必要だよ？」

まき絵

「えっ！？せ、千ベル？そ、そんなにお金持ってないよ……………」

まき絵はあいの言葉を聞いてショックを受けてしまい、深く反省しながら落ち込んでいく。

のどか

「そ、そんなに落ち込まなくても……………」

ネギ

「そ、そうですね！そのお気持ちだけで十分ですから……………」

まき絵

「でも……………でも……………」

ネギ達は深く落ち込んでるまき絵を必死に励ます。

マスター

「……………それでは、今回だけ一杯百ベルでいかがでしょうか？」

全員

「えっ!?!」

ネギ達はマスターの意外な提案に思わず耳を疑った。

まき絵

「え〜つと、一杯百ベルだから五人分だと……………う〜んと……………五百ベルでいいんだよね？」

ネギ

「はい、正解です!」

まき絵

「ふう〜つ、良かったあ……………。」

まき絵はネギの言葉を聞いて心の底から一安心する。

カモ

(つてか、そんな簡単な問題ぐらい自信持って答えるよな……………)

明日菜

(まあ、まきちゃんも馬鹿レンジャーの馬鹿ピンクだから仕方ないかもね……………。)

いつの間にか明日菜の肩に移動したカモが小声でまき絵にツッコミを入れると、明日菜が苦笑いしながらまき絵をフォロー(？)する。

あい

「で、でも……………本当にいいんですか？」

マスター

「ええ、まき絵さんにはいつもお世話になってますので……………私の囁かなサービスです。」

まき絵

「わーい！マスターったら太っ腹」

ネギ

「あ、ありがとうございます！僕達の為にわざわざ値下げまでして頂いて……………」

マスター

「いいえ、お礼でしたらまき絵さんにおっしゃって下さい。」

木乃香

(……………あいちゃん、マスターってええ人なんやね。)

あい

(うん、マスターは普段無口で口数が少ないけど……………この店に何回か通ってる内に色々な話をしてくれるの。)

木乃香とあいにはマスターに聞こえないように小声で話し合う。

明日菜

「そんじゃ、マスターのご好意に甘えちゃおっと」

のどか

「でも、カウンターには椅子が三つしかありませんね……………」。

木乃香

「ほなら、ウチとせつちゃんは向こうの椅子で座るわ……………せつちゃん、はよ向こうで座る」

刹那



「え？あ、はい……。」

木乃香は嬉しそうに刹那の手を掴み、先程アランとさくらじまが座っていた椅子に向かって行く。

ネギ

「では、僕達も座りましょう。」

そう言うと、ネギ達三人はカウンターの椅子に腰掛ける。

マスター

「それでは、何になさいます？」

ネギ

「え〜っと、それじゃ……………まき絵さんがいつも飲んでいるやつを  
お願いします！」

明日菜

「あ！私も〜」

のどか

「私もそれをお願いします。」

木乃香

「ウチら二人にも同じのをお願いします」

マスター

「畏まりました。」

そう言うと、マスターは珈琲沸かし機に粉末にした珈琲豆を五人分も入れる。

まき絵

（あゝあ、何だか私もマスターの珈琲が飲みたくなっちゃったなあ……………。）

あい

（まきちゃん、今日はネギ君達に飲ませるんだから我慢しなきゃね。）

まき絵

（そ、そうだね……………。）

まき絵とあいにはネギ達に聞こえないように扉の前でこっそりと話す。

カチャッ！

マスター

「この味が最も引き立つ八十点五度……煎れたてをどうぞ。」

しばらくすると、マスターがカウンターの椅子に座っているネギ達三人に珈琲が入ってる受け皿に乗せた白いカップを三つずつ差し出す。

マスター

「おっと、向こうのお二方の分も……。」

まき絵

「あゝ、待って！私とあいちゃんを持ってくから……。」

マスター

「で、ですが……。」

あい

「いいからいいから！」

マスター

「そ、そうですか……では、誠に申し訳ありませんが、お願いしま

す。  
「

まき絵&あい

「は〜い  
「

まき絵とあいが元気良く返事をする、珈琲が入ったカップをそれぞれ一つずつ持ちながら木乃香と刹那が座ってる方へと慎重に歩いていく。

カチャッ！

まき絵&あい

「はい、お待たせ  
「

刹那

「あ、ありがとうございます……………」。

木乃香

「おおきに〜  
「

まき絵とあいほぼ同時に木乃香と刹那が使ってる机にカップを置くと、刹那は思わず苦笑いをして、木乃香は笑顔を浮かべながらお礼を言う。

ネギ

「それでは、いただきます……………」

そう言って、ネギが先にカップに口を付けて珈琲を一口だけ飲んでみると……………」

ネギ

「……………」

明日菜

「……………」  
「どお？」

ネギ

「お……………」

のどか

「お？」

ネギ

「……………」  
「美味しい!!」

ネギは美味しさのあまりその場で勢い良く立ち上がってしまった。

明日菜

「な、何も立ち上がる事ないじゃない……………」。

ネギ

「だって、この珈琲は本当に美味しいんですよ！」

明日菜

「どれどれ……………」。

のどか

「わ、私も……………」。

明日菜とのどかもカップに口を付けて珈琲を一口飲んでみる。

明日菜

「……………本当だ！苦いけど美味しいわ！」

のどか

「はい、私もこの味は好きです！」

木乃香

「へえ、そないに美味しいんかあ……せつちゃん、ウチらも飲んでみよ?」

刹那

「そうですね……では、いただきます。」

木乃香と刹那も明日菜達の後からカップを口に付けて珈琲を飲んでみる。

木乃香

「……はあ、ホンマにミルク入れなくても美味しいわあ!」

刹那

「はい!これ程の美味な珈琲は生まれて初めて飲みました!」

あい

「……どうやら、みんなもマスターの珈琲を気に入ってくれたみたいね。」

まき絵

「やっぱりね……だって、この店の珈琲は本当に美味しいんだもん」

マスター

「……………」。

マスターは白い布巾ふきんでカップを磨きながら、ネギ達ネギ達が自分が沸かした珈琲を美味しそうに飲む光景をただジューツと眺めていた。

（すま村・狸商店前）

その頃、『狸商店』では……………。

たぬきち

「……………もお、一体いつになったら帰って来るだなも？」

たぬきちが『狸商店』の前で苛々しながら、まき絵達の帰りを待っていた……………。





第九十六話 街へ行こうよー (前書き)

全ての配達を終えたネギ達は『狸商店』へと戻るのだが……。

第九十六話 街へ行くよー！

すま村・狸商店

たぬきち

「……………全く、あまりにも帰りが遅かったから心配したんだなも！」

全員

「い、ごめんなさい……………」

『純喫茶・鳩の巣』で一時間程ゆっくりしてから『狸商店』に戻って来たネギ達はたぬきちにこっ酷く怒られていた。

木乃香

（ウチら、この世界に来てから謝ってばかりやね……………。）

刹那

（そ、そうですね……………。）

たぬきち

「でも、仕事はきちんとやってくれたようだし……………今回は大目に見るんだなも。」

まき絵

( ホツ、良かった……。 )

たぬきち

「……………おや？今、ホツとしなかっただなも？」

まき絵

「え！？そ、そんな事ないですよ！」

まき絵はたぬきちの鋭い指摘に思わず動揺してしまう。

たぬきち

「まあ、そんな事より……………はい、今日の分のバイト代だなも！」

そう言つと、たぬきちはお金が入った袋をネギ達に手渡す。

まき絵

「ありがとうございます！」

ネギ

「ほ、僕達も貰っていいんですか？」

たぬきち

「勿論だなも、君達も今日一日頑張ったからバイト代を渡すんだなも。」

木乃香

「わーい！ウチらもバイト代を貰えたえー！」

のどか

「ありがとうございます！」

そう言って、ネギ達はたぬきちに向かって軽くお辞儀をする。

たぬきち

「いやいや、お礼なんていいんだなも……それじゃ、また明日も頼むんだなも。」

まき絵

「はーい……じゃあ、私達は帰りまーす。」

そう言い残すと、まき絵達は『狸商店』を後にするのであった……。

くすま村・関所前く

『狸商店』を後にしたネギ達が関所前を通っていると……………。

門番 A

「あ！皆さん……………今、帰りでありますか？」

あい

「はい、もう日が暮れてきたから……………」

門番 A

「そうですね……………暗くならない内に帰って下さいね！」

門番 B

「で、では……………お気をつけて……………」

まき絵

「は〜い、さようなら〜」

まき絵達は二人の門番に見送られながら関所を通り過ぎて行く。

ネギ

「……………ところで、まき絵さんに聞きたい事があるのですが……………」

「

まき絵

「え？何？」

まき絵はその場で立ち止まり、ネギの方を向いて首を傾げながら尋ねる。

ネギ

「前にまき絵さんが裕奈さん達は街の方で働いてるって言いましたが、その街で働いているのは裕奈さんとアキラさんと亜子さんの三人だけなのですか？」

まき絵

「うん、そうだよ。」

ネギ

「という事は、他のクラスの皆さんは会ってないんですね？」

まき絵

「う、うん……………私が街で会ったのは、裕奈とアキラと亜子の三人だけだよ。」

ネギ

「そ、そうですか……………」

のどか

(……………夕映……………ハルナ……………。)

ネギとのどかはまき絵の言葉を聞いて顔を下に俯いてしまう。

明日菜

「ネギ……………」

ネギ

「……………まき絵さん、明日でも僕達を街まで案内してくれませんか？」

まき絵

「ええっ!?!」



まき絵はゆつくりと顔を上げたネギの唐突的なお願いに一瞬だけ戸惑ってしまふ。

まき絵

「わ、私も案内したいけど……………明日もバイトがあるんだよねえ……………」

明日菜

「あゝ、そっかあ……………でも、まきちゃんが居ないと困るし……………」

あい

「……………それじゃ、明日のバイトは私がまきちゃんの代わりにやるよ……………」

あい以外全員

「ええっ!?!」

その場に居た全員があいの発言に耳を疑った。

まき絵

「で、でも……………幾らあいちゃんでもそんな事……………」

あい

「いいからいいから！たぬきちさんには私から話しておくから、まきちゃんはネギ君達と一緒に街へ行って友達に会っておいでよ。」

まき絵

「あいちゃん……………」。

まき絵はあいの思いやりのある言葉に一瞬感動してしまふ。

明日菜

「ほら、あいちゃんもこう言ってくれてるんだし……………ね？」

まき絵

「そ、そうだね……………あいちゃん、ありがとう！」

あい

「気にしないで、私達は友達なんだから……………それに、友達に会いたいって気持ちは嫌という程分かるんだ……………」。

そう言うと、あいは一瞬だけ寂しそうな表情を浮かべる。

木乃香

「あいちゃん、どないしたん？」

あい

「え？な、何が？」

木乃香

「さっき一瞬だけ寂しそうな顔してたから……………」。

あい

「そ、そう？気のせいじゃない？」

木乃香

「うーん、そかなあ？」

木乃香はあいの言葉に納得が出来ずに思わず首を傾げる。

刹那

「とにかく、明石さん達に会うのは明日からにしましょう。」

ネギ

「そうですね、もう暗くなってきましたし……………僕達も一旦、館へ帰った方がいいですね。」

まき絵

「え？館って何の事？」

まき絵はネギの言葉に疑問を持って首を傾げながら尋ねる。

ネギ

「あ！いや、その……………な、何でもありませんよ！」

明日菜

「そ、それよりさ！明日の待ち合わせ場所とか何処にする？」

まき絵

「え？そ、それじゃ……………さっき通った『関所』の前にバス停があったでしょ？あそこでいいんじゃないかな？」

明日菜

「そ、そうね！そこだったらすぐにバスに乗って街へ行けるからね……………ね？ネギ！」

ネギ

「は、はい！問題は全くありません！」

刹那

「で、では私達はこれで……………失礼します!」

まき絵

「あ!ちよ、ちよっと……………」

まき絵の呼び掛けも虚しく、ネギー行は慌ててその場から立ち去ってしまった。

あい

「……………何だか、その場から逃げるようにして行っちゃったね……………」

まき絵

「う、うん……………それにしても、ネギー達は村の何処で寝泊まりするんだろっ?」

あい

「さ、さあ……………」『すま村』には宿泊出来る所なんて無かったはずだけど……………」

まき絵

「……………まあ、細かい事は別にいいっか」

あい

「え!?!いいの?」

あいはまき絵の楽観的な考えに思わず啞然としてしまう。

まき絵

「それじゃ、明日のバイトはお願いね!」

あい

「う、うん!じゃあ、また明日ね!」

そう言うと、まき絵とあいはお互いに手を振りながら、それぞれの家へと帰って行くのであった。

〈大乱闘の館〉

マスターハンド

「……………何だつて？君達のクラスメイトが『どうぶつの森』の世界に住んでいた？」

ネギ

「は、はい。」

館へと戻って来たネギー一行はマスターハンドに今までの事を説明した。

マスターハンド

「うむ、どうやらその子達も『亜空間』に飲み込まれたせいので、どうぶつの森』の世界へと飛ばされてしまったのであるな……………」

「

ネギ

「では、他のクラスの皆さんも……………」

マスターハンド

「その可能性もあるが……………もしかしたら、全く別の世界へと飛ばさてるかもしれないな……………」

刹那

「全く別の世界……………」

のどか

「そ、そんな……………」

のどかはマスターハンドの言葉を聞いて少し落ち込み気味になってしまふ。

マスターハンド

「だが、もしそうだとしたらかなり厄介だな……………何せ、君達が住んでいる世界とは全く別の『異世界』というのは星の数程……………いや、無限大に存在しているのだ。」

カモ

「おいおい、それじゃあ兄貴のクラスメイト達を探し出すなんて雲を掴むような話じゃねえか。」

明日菜

「そうよねえ、みんなが何処の世界に居るのかも全然見当も付かないし……………」

ネギ

「……………それでも。」

明日菜



「え？」

ネギ

「それでも、僕は諦めません！僕の大切な生徒である3ーAの皆さんが何処かの世界で迷子になってるかもしれないし……だから、僕は3ーAのクラス全員を見つけ出すまで何百回でも探し出してみせます！！」

木乃香

「ネギ君……。」

ネギの固い決心に全員が思わず感服してしまう。

のどか

「ネ、ネギ先生の言う通りです！私も夕映やハルナの安否が心配で……あ！勿論、他のクラスメートの皆さんの事も心配ですよ。」

明日菜

「そ、そりゃ私だっていいんちよ達の事が心配よ……。」

木乃香

「せやなあ……せつちゃんかて龍宮さんとかの安否が心配やろ？」

刹那

「い、いえ……………龍宮は多分大丈夫だと思いますけど……………」

刹那は苦笑いしながら木乃香の質問に答える。

ネギ

「いずれにしても、マスターハンドさんが残り二つの世界へと繋がっている間だけでも色々な世界へ行つて、3-Aの皆さんを一人でも多く捜し出したいと思っています！」

カモ

「それだと、二手に分かれてそれぞれ別々の世界に行つて捜した方が効率がいいんじゃないかねえか？」

刹那

「そうですね、その方が見つけられる確率がほんの僅かでも高くなりますし……………」

木乃香

「でも、そしたらどっちか片方が一人だけになってまうよ？」

のどか

「かと言って、どちらか二人ずつにしたら必ず一人余ってしまいます。」

明日菜

「うっん、流石に一人だけつても厳しいわね……………」

ネギ

「……………でしたら、僕は一人で捜します！」

ネギ以外全員

「ええっ!?!」

明日菜達はネギの思い掛けない発言に耳を疑った。

明日菜

「な、何言ってるのよ!それに、アンタ一人で大丈夫なの?」

ネギ

「僕なら大丈夫です!僕一人と言っても、僕にはカモ君が付いてますし……………それに、三つのチームに分かれれば更に見つかる確率が増えます。」

明日菜

「アンタ、そこまでしてクラスのみんなを……………」

明日菜はネギの『クラスのみんなを一刻も早く見つけ出したい！』  
という思いに心打たれてしまう。

カモ

「兄貴〜！俺たちは兄貴のその心意気にますます惚れちゃったぜ〜  
！！」

ネギ

「カ、カモ君ったら大袈裟だよ……………」

ネギはカモの大袈裟過ぎる褒め言葉に苦笑いしながら照れてしまう。

明日菜

「じゃあ、ネギはエロガモと一緒にして……………私は本  
屋ちゃんと一緒にいくから、刹那さんは木乃香をお願いね？」

刹那

「はい、木乃香お嬢様の事は私にお任せ下さい！」

カモ

「……………どつやら、話は纏まったようだな。」

ネギ

「そうだね……マスターハンドさん、僕達が行く残り二つの世界  
が行き来出来るまでの間だけでも、色々な世界で3-Aの皆さんを  
捜しに行ってもいいですか？」

マスターハンド

「ああ、全然構わないよ……幸い、二つの世界が繋がるまでまだ  
まだ時間が掛かるからね。」

ネギ

「あ、ありがとうございます！」

ネギはマスターハンドに向かって深く頭を下げる。

マスターハンド

「いや、礼など必要無い……出来れば、私も君達のクラスメート  
を捜す手伝いをしたかったのだが……。」

ネギ

「いえ、そのお気持ちだけでも十分嬉しいですよ。」

カモ

「そうそう、旦那は残りの世界を繋げる事に専念してくれ！」

マスターハンド

「そ、そうか……………」。

明日菜

「さてと、明日はまたまきちゃんが居た世界に行って裕奈達に会わなきゃいけないし……………今日はそろそろ休みましょ！」

木乃香

「せやなあ、今日も色々あったから疲れてもうたわあ……………」。

のどか

「それでは、私達は部屋に戻ります……………」。

マスターハンド

「ああ、今日はゆっくり休みなさい。」

そう言つと、ネギー一行は自分達の部屋へと戻って行くのであった……………。

くすま村・バス停前

まき絵

「うーん、ちょっと早く来過ぎたかなあ……。」

翌日、まき絵はバス停の前でネギ達が来るのを待っていた。

まき絵

「あ！そう言えば、何時に此処に集合するか言っていなかったけ……。」

そう言っつて、まき絵は苦笑いを浮かべていると……。

ネギ

「まき絵さーんー!!」

まき絵

「あ！来た来た……。」

まき絵が聞き慣れた声に反応して振り向いてみると、遠くからネギ

一行がこちらに駆け寄って来ていた。

ネギ

「遅れてすいません！ちょっと色々ありまして……………」。

木乃香

「明日菜がいつものように寝坊したんよ。」

明日菜

「ちょ、ちょっと！何もわざわざ言わなくてもいいじゃない！！」

寝癖が目立つ明日菜は木乃香に寝坊した事を暴露されて思わず声を上げてしまう。

まき絵

「だ、大丈夫だよ……………私もさっき来たばかりだし、まだバスも来てないし……………」。

ブロロロロッ……！

まき絵がそうこう言っていると、一台の黄色いバスがやって来てバス停の前で立ち止まる。



のどか

「あ、丁度来ましたね。」

ネギ

「では、早速バスに乗りましょう。」

プッシュューーーッ！！

バスのドアが開いたと同時に、ネギ達は一斉にバスに乗り込んでいく。

まき絵

「カツペイさん、こんにちは〜！」

カツペイ

「お？今日も街の方へ行くだけか？」

まき絵

「まあね〜。」

ネギ一行

（……………か、河童！？）

ネギー一行はまき絵と普通に会話しているバスの運転手のカッペイの姿を見て思わず目を疑ってしまう。

カッペイ

「……………それにしても、今日はやけに人数が多いなあ。」

まき絵

「うん、みんな私の友達なの。」

カッペイ

「友達かあ……………友達が沢山いるってのはいい事だなあ。」

カッペイは何故か納得しながら腕を組んでコクコクッと二回頷く。

ネギー

「そ、そろそろ席に座りましょうか。」

のどか

「は、はい……………」

木乃香

(…………ウチ、河童なんて初めて見たわあ。)

明日菜

(わ、私も……………って言うか、そもそも河童って動物だったっけ?)

刹那

(いえ、古い伝承では河童は川辺に住む妖怪の一種と言われてます。)

各自そうこう言いながら、ネギ達は殆どガラ空きの席に次々と適当に座っていく。

カツペイ

「そんじゃ、出発進行だべ!」

ブオーーーーーーッ!!

ネギ達が席に座ったと同時に、バスが街に向かって走り出していく。

?

「……………やあ、また会ったね。」

ネギ  
「えっ？」

ネギが声がした方を向いてみると、ネギが座った反対側の席に昨日ネギ達に声を掛けた見知らぬ猫が座っていた。

ネギ

「あ！貴方は昨日の……………」

見知らぬ猫

「こんな所でまた会えるなんて奇遇だね。」

ネギ

「そ、そうですね……………それより、昨日はありがとうございました。」

見知らぬ猫

「いやいや、俺はただ役場を教えたあげただけだよ。」

見知らぬ猫はネギにお礼を言われると笑顔と謙虚な態度とで答える。

見知らぬ猫

「……………ところで、バスに乗って何処へ行くの？」

ネギ

「はい、ちょっと街の方へと……………」。

見知らぬ猫

「ふうん、街へ行くのかあ……………あそこには色んな店や施設があるからいいよねえ。」

ネギ

「そ、そうなんですか……………」。

見知らぬ猫

「……………あれ？ひょっとして、街へ行くのは初めて？」

ネギ

「はい、実はそうなんです……………」。

ネギは見知らぬ猫の質問に対して答え難そうに答える。

見知らぬ猫

「な〜んだ、それならそうと早く言ってくればいいのに……………初めて街へ行くんだったら、今からでも凄く楽しみなんじゃない？」

ネギ

「そ、そうですね。」

ネギが見知らぬ猫に合わせるように苦笑いしながら答えると……………。

？

「……………おい、お前はさっきから誰と喋ってた？」

ネギ

「え？」

突然、ネギが座ってる席の後ろ側の席の方から声が聞こえてくる。

見知らぬ猫

「あ、悪い悪い……………昨日『すま村』で会った子達と偶然出会って色々と話をしてたんだよ。」

見知らぬ猫は先程の声の主の質問に軽く謝りながら楽しく答える。

？

「あ、昨日お前が言ってた少し変わった連中の事か……………。」

見知らぬ猫

「おいおい、本人が居るんだから少しは発言を控えろよ……………」

？

「だって、お前が俺にそう話したんじゃないか。」

見知らぬ猫

「そ、そりゃそうだけども……………」

見知らぬ猫は何者かの言葉に何も言い返せなくなってしまった。

ネギ

「あ、あの……………」

見知らぬ猫

「え？あゝ！ごめんごめん……………今、君の後ろの席に座ってる俺の友達と喋ってたんだ。」

ネギ

「友達ですか？」

見知らぬ猫

「そう、今日はそいつと一緒に別の村へ行くつもりと思ってさ……………あ、因みにそいつはみんなに『怪しい猫』って呼ばれてるらしいんだ。」

ネギ

「あ、『怪しい猫』？」

ネギは見知らぬ猫の言葉に疑問を持ちなが思わず首を傾げる。

怪しい猫

「おいおい、そんな変なあだ名で紹介するなよ……………」

見知らぬ猫

「別にいいじゃないか、本当の事なんだし……………」

ネギ

「よ、よく分からないけど……………初めまして！僕は……………」

ネギは怪しい猫と呼ばれた人物に自己紹介しようとするものの席の方を向こうとしたが……………。

怪しい猫

「ま、待て！！」



ネギ

「……………え？」

ネギは怪しい猫に大声で呼び止められてしまい、そのまま動きを止めてしまう。

怪しい猫

「こつちを向く前に一つだけ約束してくれねえか？」

ネギ

「な、何ですか？」

怪しい猫

「そ、その……………俺の顔を見ても絶対に驚くなよ？」

ネギ

「か、顔……………ですか？」

ネギは怪しい猫の言葉に思わず耳を疑ってしまう。

怪しい猫

「そうだ、約束出来るか？」

ネギ

「は、はい。」

怪しい猫

「よし……じゃあ、こっち向いていいぞ。」

ネギ

「分かりました……。」

そう言って、ネギが怪しい猫が座ってる後ろの席の方を向いてみると……。

ネギ

「……なっ!?!」

怪しい猫

「よお、初めましてだな。」

ネギの目に花柄でピンク色の服を着ている目と鼻と口が全く無いのつぺらぼうのような顔をした猫の男性が写し出される。

ネギ

「あ、ああ……………」

怪しい猫

「ん？どうした？」

怪しい猫が段々と顔色が悪くなっていくネギを見て首を傾げると……。

ネギ

「うわぁ————っ！お、お化けえ————っ！  
！！」

まき絵

「ど、どうしたのネギ君！？」

明日菜

「一体何の騒ぎ！？」

刹那

「まさか、敵襲ですか！？」

見知らぬ猫

（あゝあ、やっぱりこうなったか……………。）

カツペイ

「おい、もうちっと静かにしてくんろ〜！」

ネギの大声で大騒ぎとなったバスは、そのまま街に向かって走り続けるのであった……………。

## 第九十六話 街へ行こうよー (後書き)

果たして、ネギ達は街で裕奈・アキラ・亜子の三人に会えるのか？

突然ですが、いつもこの小説を読んでくれる読者の皆様にリクエストを募集します！

もしも、ネギー行に行つてほしい任天堂のゲーム作品があったら感想欄に応募して下さい！

それと同時に3-Aの生徒達が迷い込んでしまったゲーム作品、又は『このゲーム作品はこのキャラと合ってる！』というリクエストもありましたらご応募下さい！

因みに、現段階でまだ行方不明の生徒は……

- ・ 相坂さよ
- ・ 朝倉和美
- ・ 綾瀬夕映
- ・ 柿崎美砂
- ・ 春日美空
- ・ 絡繰茶々丸
- ・ 釘宮円
- ・ 古菲
- ・ 早乙女ハルナ
- ・ 椎名桜子
- ・ 長瀬楓
- ・ 那波千鶴
- ・ 龍宮真名

- ・ 鳴滝風香
- ・ 鳴滝史伽
- ・ 葉加瀬聡美
- ・ 長谷川千雨
- ・ 村上夏美
- ・ 雪広あやか
- ・ 四葉五月
- ・ ザジ・レイニーデー

……かなり多いですね（汗）。

因みに、超鈴音はこの小説の『ネギま!』での設定は『学園祭』の後なので登場しません。

更にエヴァンジェリンはネギの父・ナギに登校地獄の呪いに掛けられて学園内に出らないという設定になっているので登場させるかどうかはまだ検討中です（汗）。

という訳で、感想も含んで皆様のリクエストをお待ちしております  
！！

第九十七話　街で働く住人達（前編）　（前書き）

怪しい猫の顔を見て叫び声を上げてしまったネギは……。

第九十七話 街で働く住人達（前編）

バス内部

ネギ

「……………本当にすみませんでした！」

ネギは怪しい猫に向かって深く頭を下げ、謝罪していた。

怪しい猫

「ったく、あれ程驚くなつて言ったのによ……………」

見知らぬ猫

「まあまあ、顔が無かったら誰だつてビックリするよ。」

見知らぬ猫は凄く不機嫌気味な怪しい猫を穏やかに宥める。

明日菜

「それにしても、顔が無いなんて不気味ね。」

木乃香

「ホンマやね……………ウチ、この猫さんに夜道で出会ったら絶対に叫ん



でまっかもしれへん……………」

のどか

「わ、私も……………」

まき絵

(夜道で出会ったら？うん……………何か引っ掛かるなあ……………)

そう思いながら、まき絵は腕を組んで首を傾げながら深く考え込む。

( 原作『ネギま!』第三巻の冒頭を参照 )

怪しい猫

「そこでよお……………誰でもいいから、俺の顔を書いてくれねえか？」

刹那

「か、顔を……………ですか？」

木乃香

「ほなら、ウチが書いてあげるー」

そう言いながら、木乃香が楽しそうに手を上げる。

明日菜

「だ、大丈夫なの？」

木乃香

「大丈夫やて、ウチが可愛く書いたるえ。」

怪しい猫

「い、いや……………俺は男だから、出来れば格好良く書いてほしいんだが……………」

怪しい猫は木乃香の言葉を聞いて少し不安げになってしまう。

見知らぬ猫

「それじゃ、コレで書いてあげるといいよ。」

木乃香

「おおきに。」

木乃香がお礼を言うと、見知らぬ猫から黒のマジックペンを渡される。

怪しい猫

「い、いいか？格好良く書いてくれよ？」

木乃香

「分かってるで、ウチに任しとき」

そう言うと、木乃香は黒のマジックペンで怪しい猫の顔をノリノリな気分で書いていくのであった……………。

〈数時間後〉

キーーーーーッ……！

しばらくすると、バスが街の外にあるバス停の前でゆっくりと停止する。

カッペイ

「おゝい、街に着いただよ〜！」

まき絵

「は〜い……………みんな、街に着いたって！」

木乃香

「ほなら、早速バスから降りよか？」

刹那

「そうですね。」

明日菜

「プツ……………ククク……………」

ネギ

「あ、明日菜さん！失礼ですよ……………」

明日菜

「だ、だって……………フフフ……………」

そう言うと、ネギ達と必死に笑いを堪えてる明日菜がバスの中から降りていく。

怪しい猫

「……………あいつら、何だか笑ってなかったか？」

見知らぬ猫

「ププツ……………き、気のせいじゃない？」

見知らぬ猫も木乃香によつて書かれた怪しい猫の顔（少女漫画に出て来そうなキラキラした大きな目に形の良い鼻に小さな口元）を見て必死に笑いを堪えている。

怪しい猫

「って、お前まで笑ってるし……………なあ、手鏡とか持ってねえか？」

見知らぬ猫

「い、ごめん……………持ってないんだ……………クククツ……………」

怪しい猫

「あつそ……………つたく、一体どんな風に書いたんだろ？」

怪しい猫はまだ必死に笑いを堪えてる見知らぬ猫に呆れながら不貞腐れてしまう。

カッペイ

「よし、みんな降りただな………そうじゃ、出発進行ー！」

ブオーーーーーーッ！！

次の瞬間、バスが見知らぬ猫と怪しい猫を乗せたまま何処かへと発進していく。

まき絵

「さてと、早速街へ行って………。」

明日菜

「アッハハハハハハ！！」

突然、明日菜が我慢の限界を迎えたかのように笑い出してしまう。

木乃香

「あ、明日菜？急にどないしたん？」

明日菜

「う、ごめん………木乃香が書いたあの顔を思い出したらつい……  
……ククククツ……。」「

そう言うと、明日菜は腹を抱えながら再び必死に笑いを堪える。

ネギ

「明日菜さんったら、幾ら何でも笑い過ぎですよ……………」。

明日菜

「そ、そんな事言ったって……………ププツ……………」。

木乃香

「……………ウチが書いた顔、そないに可笑しかったかな？」

刹那

「い、いえ！そんな事はありませんよ！」

まき絵

「うん、とっても可愛かったよね。」

のどか

（でも、男の人である顔はちょっと……………。）

そう思いながら、のどかも段々と顔が明日菜と同じように笑い出しそうになってしまっ。

ネギ

「それより、早く街へ行きましょう。」

まき絵

「そうだね……じゃあ、私に付いて来て」

ネギ達はまき絵に付いて行く形で街に続いてる横断歩道を渡っていく。

まき絵

「ほら、此处が裕奈達が働きながら暮らしている街だよ！」

ネギ

「わあ~~~~っ！」

明日菜

「へえ〜、此处がねえ……………」

ネギ一行は店や施設と思われる数軒の建物や普通に歩行している数多くの街の住人達に思わず魅入みいってしまう。



木乃香

「ほえ、店や動物さんがいっぱいおるなあ。」

刹那

「やはり、村とは大違いですね……………」

ネギ

「まき絵さん、裕奈さん達は何処に居るんですか？」

まき絵

「え、つとね、昨日亜子から来たメールによると噴水の前で三人で待ってるって……………」

？

「お、い！まき絵！」

まき絵

「あ！この声は……………」

まき絵達が聞き慣れた声に反応して振り向いてみると、街の中心に設置されてる噴水の前に黒髪で刹那と同じサイドテールの少女・明石裕奈と黒髪で先端にややウェーブが掛かっているポニーテールの少女・大河内アキラと薄い青色のショートヘアの少女・和泉亜子の三人が居た。

ネギ

「裕奈さん！亜子さん！アキラさん！！」

ネギは嬉しさのあまり、裕奈達の姿を見るなり一足先に駆け出していく。

明日菜

「あーちよつとネギ……………」

刹那

「……………よっぽど明石さん達に会えた事が嬉しかったんですね。」

木乃香

「せやな……………」

明日菜達は早く駆け出したネギを見て微笑みながらゆっくりと裕奈達の方へと歩き出していく。

裕奈

「わあ〜！本当にネギ君と明日菜達だ〜！！」

亜子

「何だか、みんなに会うのが凄く久しぶりって感じがするわあ。」

ネギ

「本当に久しぶりですねえ……………ところで、皆さんは何処か怪我をしたとかありませんか？」

アキラ

「え？う、うん……………私達なら大丈夫だよ。」

ネギ

「そうですか、それは良かったあ……………。」

ネギはアキラの言葉を聞いて安堵の表情を浮かべる。

裕奈

「それにしても、まき絵からメールが来た時は驚いたにや。」

亜子

「ホンマやね、まさかネギ先生達がこの街にやって来るなんて思わへんかったし……………」

アキラ

「ああ、私達がこの街で初めてまき絵と再会した時と同じ位驚いたよ。」

まき絵

「そうだよねえ、私だって裕奈達やネギ君達と再会出来た時は驚いたと同時に凄く嬉しかったよ。」

ネギ

「はい、僕達もこの世界でまき絵さんに会えるなんて……………」

亜子

「……………へ？この世界？」

ネギの言葉に亜子が一早く首を傾げながら聞き耳を立てる。

ネギ

「あつ！？い、いいえ！何でもありません！！」

裕奈

「き、急にどうしたの？ネギ君……………」

アキラ

「と、とにかく落ち着いて……………」

ネギ

「は、はい……………」

ネギは必死に弁解しようとするが、裕奈とアキラによって宥められてしまう。

明日菜

(……………この馬鹿ネギ！アンタが口を滑らせてどつすんのよ！！)

ネギ

(す、すいませ〜ん！)

明日菜はまき絵達に聞こえないように小さな怒声でネギを叱る。

木乃香

「ところで、まきちゃんから聞いたんやけど……………裕奈達はこの街で働いてるんよね？」

裕奈

「うん、そうだよ！」

ネギ

「そ、それでは皆さんがどんな店で働いているか見せて下さいよ。」

アキラ

「え？べ、別にいいけど……………」。

亜子

「うん、ウチも構わへんよ。」

ネギ

「では、そうと決まれば早速案内して下さい！」

そう言うと、ネギは裕奈達に早く案内を勧めるように急<sup>せ</sup>かしながら噴水から離れていく。

カモ

(……………流石は兄貴、上手くごまかしたな。)

カモはネギの肩の上で思わず感心してしまつ。

アキラ

「……………えっと、まず此処が私が受付として働いてる所だよ。」

最初にネギ達がやって来た所は、昼でもライトアップされてる大きな建物の前だった。

ネギ

「アキラさん、此処はどういうお店なんですか？」

アキラ

「いや、此処はお店じゃなくて『劇場』みたいな所なんだ。」

のどか

「『劇場』というと、映画や演劇を見せる所ですか？」

木乃香

「でも、『みたいな所』ってどういう事なん？」

アキラ

「えっと、何て説明すればいいかなあ……良かったら、中に入ってく？」

ネギ

「え？いいんですか？」

アキラ

「うん…………でも、お客として入るからチケットを買わなくちゃいけないけど…………。」

明日菜

「それだったら大丈夫！私達、丁度お金持ってるんだよね。」

そう言うと、明日菜は昨日たぬきちに渡されたお金入りの袋を取り出してアキラ達に見せる。

アキラ

「それは良かった…………じゃあ、早速入ろうか。」

そう言うと、ネギ達は一斉に『劇場』の中へと入っていく。

〈劇場・観客席〉



受付で入場料を払ったネギ達は、沢山の椅子が設置されてるただっ広い観客席へとやって来た。

明日菜

「わあ、殆どガラ空きじゃない……………」。

刹那

「今日は客足が悪いのでしょうか？」

アキラ

「いや、いつもこんな感じだよ……………」。

裕奈

「え！？マジで？」

裕奈を含む全員がアキラの発言に思わず耳を疑ってしまつ。

木乃香

「……………何でこないに空いてるんやろ？」

まき絵

「よっぽどつまらない映画や劇なのかな？」

ネギ

「ま、まあ折角チケットを買ったのですから、一応見てみましょうよ。」

亜子

「せ、せやね……………」

そう言うと、ネギ達は一番前の席へと座っていく。

アナウンス

『大変長らくお待たせ致しました……………只今より、ししよーによる特別公演『リアクション芸』を披露致します。』

ブウーーーーーッ!!

アナウンスと開始のブザーが鳴り響くと同時に、ステージに下ろされた赤い幕がどンドン上がっていく。

?

「はいーびびもびびも、ししよーでびびります……………ジャンジャ  
ンジャーンー!」

ステージの上でししょーと名乗った青い蝶ネクタイに赤くて丸い斑点のようなマークが沢山付いてる黄色い服を着たアホロートルの男性が元気良く声を上げる。

まき絵

「あ！あの人（？）は……………」

ネギ

「まき絵さんの知っている人（？）ですか？」

まき絵

「うん、前に私が住んでる村に訪れて来た時に偶然会ったんだけど……………何でも、若い頃は売れっ子のお笑い芸人だったらしいよ？」

木乃香

「へえ、芸人さんって事は何か面白いネタとか披露してくるんやね。」

明日菜

「……………それよりネギ、あの動物はウーパールーパーって名前だったっけ？」

ネギ

「はい、一般的ではそう呼ばれてますが……………実際はアホロートル

という名前の生物なんです。」

明日菜

「あ、あほろーとる?」

明日菜はネギの説明を聞いて思わず首を傾げてしまう。

ししよー

「はい、そういう事で今日も頑張っついていかないといけないなあと思いますけど……え、実は僕ね、リアクション芸とかをやらして貰ってるのね。」

ネギ

(リアクション芸?)

明日菜

(ほら、テレビとかで芸人さんがよく体を張って笑わそうとするでしょ?多分あれの事よ。)

ネギはししよーが言った『リアクション芸』という聞き慣れてない単語に首を傾げていると、ネギの隣に座ってた明日菜が小声で簡単に説明する。

ししよー

「ねえ、『リアクション芸』って聞いた事くらいあるでしょ？無い？あ、そう……………じゃあ、今日は折角来てくれたんで、今からやるリアクション芸を覚えて帰ってちょうだいね。」

木乃香

(へえ、何をやるか楽しみやなあ……………。)

ししよー

「え、コホン……………あ！もうネタは始まってるからね。」

カモ

(そんな前置きはいいから、さっさと始めろっつーの！)

カモはししよーの前置きに苛立ちを募らせていく。

ししよー

「それじゃ、始めるよ……………え、あれはまだ僕が小さい頃の話なんだけど、凄く仲の良い女の子の友達が居たのね……………その子は学校に行く時も一緒に、毎日遊んでたの……………最初は僕もただの友達だと思っていたんだけど……………段々と彼女の事が好きになってきてね……………」

裕奈

（あゝ、それって何か分かる気がする……………。）

まき絵

（そういうのってよくあるよね〜。）

ししよーの話聞いた裕奈とまき絵は思わず共感してしまう。

ししよー

「ある時、思い切って彼女に告白したの……………そしたら、彼女はビツクリしてこう言ったの……………」  
『ごめんなさい……………私、貴方の事をそんな風に思ってたの……………でも、その代わりに友達だったらなってあげてもいいよ』ってね……………」

木乃香

（ありゃ〜、フラれてしもつたんやなあ〜。）

のどか

（可哀相ですね……………。）

亜子

（ウチも一年上の先輩に告白してフラれた事があるから、あの人）  
（？）の気持ちは痛い程分かるわあ……………。）

ししよーの話聞いてた一部のメンバーはしんみりとした表情で思わず同情してしまっ。

ししよー

「その時、僕はこう思ったの……『えっ!?!じゃあ、今まで友達ですら無かったのぉ?』ってね……。」

シ~~~~~ン……

ししよーが憂鬱そうな表情を浮かべながらそう言っ、観客席が長い沈黙に包まれる。

ししよー

「……以上、ししよーでした!」

そう言っ、ししよーの前に赤い幕がゆっくりと下ろされる。

明日菜

「って言うか、これで終わりなの!?!」

ネギ

「そ、そうみたいです……。」「

まき絵

「な〜んだ、全然面白くなかったよ〜！」

裕奈

「それに、何だかオチが下手過ぎるよね〜。」

明日菜やまき絵とかはししょーのネタに不満を抱きながらそれぞれ愚痴を零してしまう。

亜子

「でも、ウチも先輩にフラれた時に似たような事を言われた気がするわぁ……………ウチもあんな顔してたんやろか……………」

アキラ

(……………どうやら、亜子だけはさっきのネタに共感したようだ。)

アキラは先程の憂鬱そうな表情をしたししょーと同じ表情を浮かべてる亜子を見て苦笑いをしながら納得する。

ネギ

「……………で、では次に裕奈さんが働いてる店に行ってみましょうか！」



裕奈

「いいよ！それじゃ、今度はあたしが案内するね！」

そう言うと、ネギ達は裕奈に案内される形で『劇場』の観客席を後にするのであった……………。

## 第九十七話 街で働く住人達（前編）（後書き）

果たして、裕奈と亜子は街の何処で働いているのか？

……………何だか、前編や後編が多くて申し訳ありません……………最近、ネタ不足で軽いスランプ状態になってまして……………更新も今までよりも更に遅くなってしまいかもしれません（汗）。

それでも、温かく見守って頂けたら幸いです！

因みに、前回募集したリクエストはまだまだ募集中です！

それと、リクエストについて説明不足だったので少し追加させていただきます！

前にネギー行が行った世界（マリオ達スマブラメンバーの世界）や他社のゲーム世界（KONAMIやセガ等）は除きます。

という訳で、次回もお楽しみに！

第九十八話　街で働く住人達（後編）　（前書き）

ネギ達はアキラが働いてた『劇場』を後にして、裕奈が働いている店へと行くのだが……。

第九十八話　街で働く住人達（後編）

　　グレイシーグレース

裕奈

「ジャーン！此処があたしが働いてるお店だよ！」

ネギ達は裕奈の案内で、高価な家具や服等が販売されてる店の中へとやって来た。

ネギ

「わあ、何だか色々な物が売ってますね。」

明日菜

「それに、どれも高そうな物ばかりね。」

裕奈

「そりゃそうだよ、この店は高級な物しか取り扱ってないんだもん。」

まき絵

「ええ〜っ！？このベットって十二万ベルもするの！？」

まき絵は奥の方に並べられてる赤いベットの値札を見て思わず目を疑ってしまふ。

亜子

「見て！このタキシードなんか七千六百ベルもするで！」

更に亜子も店の真ん中に並べられてるタキシードの値札を見て同じく目を疑ってしまふ。

木乃香

「ほえ〜、こないに値札が高いんやろ？」

刹那

「さあ、このお店の人にも聞いてみないと何とも……………」。

？

「いらっしやいませ！」

アキラ

「ん？」

アキラ達が声がした方を向いてみると、そこには首にカラフルなス

トールを巻いて黒い洋服を着た赤っぱいハリネズミの女性が立っていた。

ネギ

（あれ？この人（？）の顔、何処かで見た事あるような気が……………。）

ネギはハリネズミの女性の顔を見て首を傾げる。

裕奈

「あ！ケイトさん、こんにちは〜！」

裕奈はケイトという名のハリネズミの女性に向かって軽くお辞儀をする。

ケイト

「あら、裕奈ちゃんじゃない……………今日は友達に会うんじゃないの？」

裕奈

「はい、その友達があたしが働いてる店を見たいって言ったので……………もしかして、迷惑でした？」

ケイト

「いいえ、迷惑だなんて……ゆっくりご覧になって下さいね。」

そう言つと、ケイトはネギ達に向けて優しくそんな笑顔を浮かべる。

木乃香

「裕奈、この人（？）は誰なん？」

裕奈

「あ！そうだった……この人（？）はこの店でアシスタントとして働いてるケイトさんだよ。」

ケイト

「皆さん、宜しゅう頼みます……あっ!？」

ケイトは何故か関西弁で喋った直後、慌てて両手で口を塞ぐ。

裕奈

「あ、あれ？ケイトさん……今の喋り方って……。」

亜子

「関西弁……やよね？」

ケイト

「い、いえ！何でもありません！」

ケイトは激しく動揺しながら裕奈達に弁解する。

明日菜

（ネギ、今の喋り方で思い出したんだけど……あの人（？）の顔、  
『仕立て屋』のあさみさんに似てると思わない？）

ネギ

（あ！そう言われてみれば……確かに、顔がお姉さんのあさみさ  
んとそっくりですね！）

まき絵

（……やっぱり、二人もそう思った？）

ネギと明日菜がみんなに聞こえないように小声で話していると、途  
中からまき絵が話に割り込んでくる。

まき絵

（実はね、前にあいちゃんから聞いた事あるんだけど……ケイトさ  
んって本当は『こと』という名前で、あさみさんの妹さんできぬ



よさんのお姉さんなんだって。)

ネギ

(ええっ！？ほ、本当ですか？)

明日菜

(……………道理で似てると思ったわ。)

ネギと明日菜はまき絵の発言に一瞬だけ驚くが、すぐに納得した表情を浮かべながらケイト(ことね)を見つめる。

まき絵

(何でも、このさんってずっと前にあさみさんと大喧嘩して以来、この店で店員として働きながらデザイナーの勉強をしてるんだって。)

ネギ

(大喧嘩……………喧嘩の原因は何々ですか？)

まき絵

(さあ、私もそこまでは……………。)

明日菜

( ……きつと色々複雑な事情があるのよ。 )

ネギ

( な、成程……。 )

そんな事を言いながら、ネギ達三人は哀れむような表情でケイト( こと ) を見つめる。

ケイト

「 ……あの、何か? 」

ネギ

「 あーい、いえ……。 」

まき絵

「 な、何でもありません! 」

ケイト

「 は、はあ……。 」

ケイト( ことね ) はネギ達の話をはぐらかすような態度を見て思わず首を傾げる。

？

「ちょっと、ケイト！」

すると、突然ケイト（ことの）の前に首元に紫色のストールを巻いてお洒落な服を着た麒麟キリンの男性が怒ったような表情を浮かべながら近付いて来る。

ケイト

「せ、先生!？」

ケイト（ことの）は麒麟の男性の姿を見るなり驚いたような表情をしながら姿勢を整える。

木乃香

「……………裕奈、あの麒麟さんは誰なん？」

裕奈

「彼はグレースさんといって、この店の商品を全てデザインしてるオーナーなんだ。」

のどか

「へえ、道理で服装がお洒落ですよ……………」

そう言って、のどかはグレースという名の麒麟の男性の服装を見つめる。

グレース

「貴女、常連のオリビアさんがいらしてるのに一体何やってんのよ？」

ケイト

「えー？す、すみません……今、参りますー!!」

そう言うと、ケイト（ことの）は急いで白い花柄の服を着て赤い手袋と赤いブーツを履いた左目の下に黒子ホクロがある猫の女性の方へと駆け出していく。

ケイト

「い、いらっしやいませ……大変長らくお待たせして申し訳ありませんでした！」

オリビア

「いいえ、それ位どうって事ないわ……そんな事より、今日のオススメはなんやん？」

ケイト

「はい、オススメですね……………こちら等いかがでしょうか？」

ケイト（ことの）はそのままオリビアに店の商品を紹介していく。

グレース

「全く、あの子はいつまで経っても田舎臭さが抜け切れてないんだから！」

グレースは先程のケイト（ことの）とオリビアのやり取りを見て少し呆れながら愚痴を零す。

刹那

「……………何だか、とても厳しそうな方ですね。」

明日菜

「それに、喋り方がオカマっぽいし……………」。

アキラ

（明日菜はそっちの方が気になるんだ……………」。

アキラは明日菜の少しズレた発言に思わず苦笑いしてしまう。

裕奈

「まあ、グレースさんはちょっと辛口なファッションデザイナーとして有名なからね……。」

グレース

「……………あら？」

すると、グレースが裕奈達に気が付いてゆっくりと近付いていく。

グレース

「貴女は確かケイトのアシスタントをしてる子じゃない……………今日は休みを取るって言わなかったかしら？」

裕奈

「は、はい！そうなんですけど……………みんながどうしてもあたしが働いてる店を見てみたいって言うから……………。」

グレース

「ふ〜ん、そうなの……………。」

そう言うと、グレースはネギ達の服装を食い入るように見つめる。

ネギ

「な、何でしょうか？」

グレース

「いや何、貴女達のファッションをチェックしようと思ってね。」

明日菜

「ファ、ファッションのチェック!?」

明日菜はグレースの発言に思わず耳を疑った。

グレース

「まずは貴女達が着てる服ね……………これって制服か何かなのかしら？」

のどか

「は、はい……………」

グレース

「そう……………まず、注目すべき点はジャケット・ベスト・シャツ・スカート・リボン及びネクタイの六点ね……………そして、裏地付のある非常に着心地の良い上着とお手入れが簡単に出来るようにシワになり難い生地を使用してる点も高いわね……………」

グレースは明日菜達の制服姿をマジマジと食い入るように見つめながらブツブツと呟く。

刹那

「あ、あの……………」

グレース

「ん？ああ、ごめんなさいね……………つい夢中になってチェックしてたから……………」

木乃香

「ほんで？結果は？」

グレース

「そうねえ……………まあ、ミーから言わせたら普通ね。」

明日菜

「ふ、普通！？」

明日菜を含む全員がグレースの辛口発言に再び耳を疑ってしまった。

まき絵

（あ、あれだけ夢中にチェックしといて普通だなんて……………。）



裕奈

（だから言ったでしょ？グレースさんのファッションチェックは辛口だって……………」

裕奈はグレースに聞こえないように小声でまき絵に話し掛ける。

グレース

「……………」それと、一番酷いのは貴方なのよ!」

そう言うと、グレースはネギに向けてピシッと勢い良く指差す。

ネギ

「え〜っ!？ぼ、僕がですか?」

グレース

「そうよ!貴方はまだ子供のクセに何でいつちよ前にスーツなんか着てるのよ!？子供だったら子供らしく可愛らしい服を着なさいよ!大体、このスーツだって地味過ぎてミィは見てるだけでも耐えられないし……………」

ネギ

「そ、そんな……………」

ネギはグレースにズバズバと辛口発言を言われてどんどん縮こまっ  
てしまう。

アキラ

(ネギ先生、何だか可哀相……………。)

まき絵

「み、みんな！そろそろ亜子が働いてる店に行ってみようよ！」

亜子

「せ、せやな……………ほな、早速行こか！」

裕奈

「という訳で、あたし達はこれで失礼します！」

明日菜

「ネギ！行くわよ！」

ネギ

「は、はい……………」

グレース

「ちょ、ちょっと！まだ話は終わってないのよ！！」

明日菜達はグレースの制止を振り切って、完全に落ち込んでしまったネギの手を引っ張りながら店を後にするのであった。

くハッピールーム・アカデミー本部く

亜子

「此処がウチが案内係として働いてる所や！」

次にネギ達が訪れた店は受付用の白いデスクと来客用の青い椅子が設置されてる所だった。

明日菜

「……………見たところ、一体どんな店なのか分からないわね。」

亜子

「ウチもよう分からへんけど、此処は『ハッピールーム・アカデミー』の本部らしいよ。」

木乃香

「『ハッピールーム・アカデミー』？」

木乃香は亜子の説明を聞いて思わず首を傾げる。

まき絵

「何でも、会員登録した人の部屋を審査してくれる有名な機関なんだって……あ、因みに私も会員登録してるんだ。」

ネギ

「部屋を審査してどうするんですか？」

まき絵

「得点が高かった人には記念品が貰えるんだって……私は得点が低いから、まだ何も貰ってないんだけどね。」

そう言って、まき絵が少し苦笑いしながら話していると……。

？

「いらつしやいませえ〜！」

突然、奥の部屋の方から赤いスーツを着て四角形っぽい眼鏡を掛けた川獺かわつその男性が慌てて駆け寄って来た。

亜子

「あ！ホンマさんや。」

ホンマ

「おや？誰かと思ったら案内係を勤めてる亜子さんじゃないですか……………今日は休みを取ったハズでは？」

亜子

「はい、ウチの友達がウチの働いてる所を見てみたいって言つので連れて来たんです。」

ホンマ

「そうですね……………いやあ〜、亜子さんが休んでから受付と案内の仕事を両立させないといけないので色々大変なんですよ〜。」

亜子

「す、すみません……………こんな時に休みを取ってしもつて……………」

亜子はホンマさんという名の川瀬の男性の言葉を聞いて、かなり気まずそうに謝る。

ホンマ

「いえいえ、謝る必要などありません！寧ろ、私には忙しい位が丁度良いんですよ……去年まで長く勤めていた仕事と比べたらね。」

亜子

「え？ホンマさんって前は何の仕事をやってたんですか？」

ホンマ

「政府公認の保険アドバイザー兼セールスの仕事ですよ……あちこちの村へと渡り歩いて、村の人に損傷保険と損害保険の加入を勧める仕事をしていたんです。」

明日菜

「うーん……つまり、保険を扱ったセールスマンって事？」

ホンマ

「……まあ、そういう事です。」

ホンマは何故か答え難そうに明日菜の質問に答える。

亜子

「でも、何でその仕事を辞めて今の仕事を？」

ホンマ

「ええ、何と申しましょうか……当時、私は自分のノルマの為だけ考えて相手の都合も考えずに半ば強制的に保険を加入させてました……遂に嫌気がさした私は『このままでは駄目だ!』と思い、長く勤めた会社を自ら辞任しました……そして、この『ハッピールーム・アカデミー』の受付へと転職したのです。」

ネギ

「成程……それで、今の仕事はどうですか？」

ホンマ

「そりゃもう、常に充実しているとでも言いましょうか……とにかく、今は非常にやり甲斐を感じているのです!」

木乃香

「そ、それは良かったなあ……。」

木乃香を含む全員が満面の笑みで答えるホンマさんに思わず苦笑いをしてしまう。

裕奈

「さてと、これであたし達が働いてる店は全て紹介したし……これからどうする？」

ネギ

「うん、そうですねえ……折角ですから、他の店にも立ち寄って行きますか？」

明日菜

「そうね、折角街に来たんだものね……。」

まき絵

「それだったら、ハツケミィさんの占い屋に行ってみる？」

木乃香

「えっ！？占いやて？」

木乃香はまき絵の提案を聞いた途端、目をキラキラと輝かせながら注目する。

まき絵

「う、うん……街外れの方にある店でハツケミィさんが占いをやってるの……。」



木乃香

「ほなら、早速その店に行ってみよ！な？せつちゃん！」

刹那

「え？は、はい！お嬢様がそうおっしゃるのでしたら……………」。

刹那は突然木乃香に呼び掛けられて、意表を付かれながらも返事をする。

アキラ

「どうやら、行き先は決まったようだね。」

裕奈

「あはは、木乃香は占いが好きだからにや〜。」

亜子

「ほなら、みんなでその占い屋へ行こか！」

そう言い残すと、ネギ達は一齐に『ハッピールーム・アカデミー』から立ち去っていく。

ホンマ

「……………ふう、やはり最近の若者は少し苦手ですね……………」。

そう言っつて、ホンマさんは深い溜め息を付くのであった……………。

「ハツケミイの占い屋」

？

「ケツハモルタア、ケツハモヌタア……………」

全員

「……………」

ハツケミイの『占い屋』へ訪れたネギ達は、薄暗い部屋の中で頭に赤い布を被つてる黒豹の女性が水晶玉を怪しい目付きで見つめながら謎の呪文を不気味に唱えている光景に唾然としてしまう。

ネギ

（ま、まき絵さん……………この人（？）が占い師のハツケミイさんです

か？)

まき絵

(そ、そうだよ……………ちょっと変わってるけど、占い師としては本物らしいよ。)

明日菜

(た、確かに……………いかにも占い師って感じよね……………。)

ネギ達はハツケミィという黒豹の女性に聞こえないように話す。

木乃香

「あ、あの……………」

ハツケミィ

「ようこそ、うお座に導かれし星の迷い子よ……………」

木乃香

「えっ!?!? な、何でウチの星座を知ってるん?」

木乃香はハツケミィに星座を見事に当てられて少し驚いてしまう。

ハツケミイ

「このハツケミイは何でもお見通しです……………それより、今日は何を占ってほしいのですかな？」

カモ

（って、何でもお見通しじゃなかったのかよ……………）

カモはハツケミイの少し矛盾した発言に対して、思わず心の中でツッコミを入れる。

木乃香

「えっと、これからのウチとせつちゃんとの相性を占って下さい！」

刹那

「こ、このちゃん……………」

刹那は恥ずかしさのあまり、小さい頃に呼び合っていた木乃香の愛称を呟いてしまう。

ハツケミイ

「分かりました、では早速始めます……………ケツハモルタア、ケツハモヌタア、ルタスリク、バツユマ……………」

しばらくの間、ハツケミイが謎の呪文を唱えていると……。

ハツケミイ

「きえー……い……い……！」

全員

「!?!」

ネギ達は突然叫び声のような奇声を発したハツケミイに度肝を抜かされる。

のどか

(ビ、ビックリしたあ……………。)

明日菜

(全く、心臓に悪いじゃない……………)。

明日菜やのどかは胸に手を当てながら落ち着かせよつとする。

ハツケミイ

「……………見えました。」

刹那

「ほ、本当ですか？」

木乃香

「ほんで、結果は？」

ハツケミイ

「貴女達の相性は……良好と言っていい程に相性がいいでしょう。」

「

木乃香

「ホ、ホンマに！？せっちゃん！今の聞いた！？ウチらの相性は良好やて！」

刹那

「は、はい！私も嬉しいです！！」

木乃香と刹那は占いの良い結果に満面の笑みを浮かべるが……………。

ハツケミイ

「……………ただし！！」

木乃香&刹那

「……………へ？」

突然、ハツケミイの付け足すような言葉に木乃香と刹那は思わず頓狂な声を出してしまう。

ハツケミイ

「確かに、現段階では良好なのですが……………この先、貴女達の相性に関わるとてもない障害が待っているでしょう。」

木乃香

「しよ、障害？」

刹那

「それって、どういう事でしょうか？」

ハツケミイ

「そこまでは教えられません……………というより、これ以上の事は私にも分からないんです。」

木乃香

「そ、そんな……………」

木乃香はハツケミイの警告に似た言葉に少し落ち込み気味になるが

……。

刹那

「大丈夫ですよ、例えどんな障害があっても私がお嬢様をお守り致します。」

木乃香

「せつちゃん……………」

木乃香は笑顔で励ます刹那の表情を見て元気を取り戻していく。

裕奈

「ひゅ〜ひゅ〜！お熱いね〜お二人さん」

刹那

「……………ハッ！？あ、いや、その……………」

木乃香

「あ、あははは……………」

刹那は裕奈に茶化されて気まづくなるが、木乃香はただ苦笑いするしかなかった。



ハツケミィ

「ともかく、貴女達に沢山の幸せが訪れますように……………」。

そう言うと、ハツケミィはゆっくりと目を閉じて両手を揃えながら祈る。

刹那

「あ、ありがとうございます。」

木乃香

「ほなら、早速お金を払わな……………」。

刹那

「あつ！？お、お金でしたら私が払いますよ！」

木乃香

「ええから、誘ったのはウチなんやし……………」。

刹那

「で、ですが……………」。

アキラ

「……………だったら、二人で一緒に払ったら？」

木乃香 & 刹那

「あ……………」

木乃香と刹那はアキラの提案を聞いて思わず啞然としてしまう。

刹那

「そ、そうですね……………そうしましょうか。」

木乃香

「せ、せやね……………」

そう言うと、木乃香と刹那は割り勘でハツケミィに占い料を支払う。

亜子

「さ、流石アキラや……………あっという間に解決させたわ……………」

アキラ

「い、いや……………私は別に思った事を言っただけだから……………」

裕奈

「またまたく、謙遜しちゃってさあ〜。」

そう言いながら、裕奈は茶化すように肘でアキラの背中を突く。

まき絵

「それじゃ、そろそろ次の店に行こっか。」

木乃香

「あれ？みんなは占ってもらわなくてええの？」

明日菜

「いや、私達は遠慮しとくわ……………」。

ネギ

「それでは、僕達はこれで失礼します。」

そう言うと、ネギ達はその場から立ち去っていく。

ハツケミィ

「当たるも八卦、当たらぬも八卦……………まあ、駄目な時は駄目です  
がね……………」。

ネギ達が去った後、ハツケミィは独り言のように呟くのであった……。

（街の噴水前）

ネギ達は噴水前で次の行き先について相談をしていた。

まき絵

「……………さてと、次は何処へ行こうかな？」

裕奈

「うーん、そうだねえ……………」。

？

「あーい、その兄ちゃん！」

ネギ  
「え？」

ネギは声がした方を向いてみると、茶色い帽子にサスペンダー付きのズボンを履いたスカンクの男性が手招きをしていた。

ネギ  
「ぼ、僕ですか？」

？

「ああ、そうさ……ちょっとこっちに来てくんねえか？」

ネギ  
「は、はあ……………」

ネギは未だに話し合いをしている明日菜達を置いて、スカンクの男性の方へと近付いていく。

カモ  
（お、おい兄貴……………そんなに易々と近付いていいのかよ？）

ネギ  
（えっ？どうして？）

カモ

(もしかしたら、怪しい誘いかもしれねえッスよ！)

ネギ

(ま、まさか……………。)

？

「おいおい、そんなに警戒すんなって……………俺はただの『靴磨き屋』だからさ。」

ネギ

「え？く、靴磨き……………ですか？」

ネギは『靴磨き屋』だと名乗るスカンクの男性の言葉を聞いて思わず首を傾げる。

？

「そうさ、俺は此处で靴磨きをしているシャンクっていう者だ。」

ネギ

「そ、そうでしたか。」

カモ

(何でい、ただの『靴磨き屋』かよ……………。)

カモは何故だか期待ハズレみたいに思いながら深く溜め息を付く。

シャンク

「……………ところでよお、靴磨いていかねえか？」

ネギ

「え？靴ですか？」

シャンク

「ああ、最近客足が悪くてなあ……………頼むよ、今回は特別にタダで磨いてやるからさ。」

カモ

(兄貴、タダだったら別にいいんじゃないかねえか？)

ネギ

(うーん、そうだね……………丁度靴も少し汚れているし……………。)

そう思いながら、ネギは少し汚れてる自分が今履いてる靴を見つめ

る。

ネギ

「……………では、お願いします！」

シャンク

「よし来た！久々だから腕が鳴るぜ……………そんじゃ、早速そこに座つてくれ！」

ネギ

「は、はい！」

そう言うと、ネギは先程シャンクが座っていた台に腰掛ける。

シャンク

「じゃあ、ピカピカに磨かせてもらっぜ……………おりゃ————っ  
！——」

キュツキュツキュツ！！

キュツキュツキュツ！！

シャンクが懐から白い布を取り出した途端、シャンクは物凄いスピードでネギの靴を磨いていく。



ネギ

(す、凄い迫力……………ただ靴を磨いてるだけなのに……………。)

カモ

(こりゃ神業だな……………。)

ネギとカモはシャンクの靴磨きの技術に啞然とした表情で見つめる。

シャンク

「……………ふう、終わったぜ。」

しばらくすると、一息付いたシャンクが靴を磨く手を止める。

ネギ

「うわあ〜！本当にピッカピカだあ〜！〜！」

ネギは自分の靴を見てみると、まるで鏡みたいに綺麗に磨かれていた。

シャンク

「どうだ？気に入ったかい？」

ネギ

「はい！本当にありがとうございます！！」

シャンク

「いやいや、礼を言いたいのはこちらの方だぜ……………久しぶりに良い仕事が出来たんだからな。」

明日菜

「ネギ〜！そんな所で何やってんの〜？」

ネギがシャンクにお礼を言うと、遠くから明日菜が大声でネギを呼び掛けてくる。

ネギ

「あ！明日菜さんが呼んでる……………それでは、僕はこれで失礼します！」

シャンク

「おう！またいつか来てくれよな。」

そう言って、シャンクは立ち去っていくネギを笑顔で見送っていく。

明日菜

「もう、勝手に何処行つてたのよ？」

ネギ

「す、すみません……………ちょっと靴を磨いてくれたもので……………」

「

裕奈

「え？靴を磨いてくれたって……………ひょっとして、『靴磨き屋』のシヤンクさんに!？」

ネギ

「は、はい……………こんな感じに……………」

そう言うと、ネギは先程シヤンクが磨いてくれた靴を明日菜達に見せる。

のどか

「す、凄い……………ネギ先生の靴がピカピカに輝いてる……………」

木乃香

「ええなあ、ウチもピカピカにしてもらいたいわあ。」

ネギ

「でしたら、皆さんもシャンクさんに靴を磨いてもらったらいいじゃないですか。」

明日菜

「それもそうね……………じゃあ、私の靴も磨いてもらおうと！」

木乃香

「あ！明日菜だけ狡いわぁ……………せつちゃん！ウチらの靴も磨いてもらおう！」

刹那

「えー？は、はい！」

のどか

「わ、私も……………」

そう言い残すと、明日菜達は一斉にシャンクの方へと駆け出していく。

カモ

「……………姐さん達、行っちゃったな。」

ネギ

「う、うん……………」

そう言いながら、ネギがただ一人だけ佇んでいると……………。

？

「……………ちよいとちよいと、その坊ちゃん。」

ネギ

「……………え？」

ネギは再び声が出た方に向いてみると、たぬきちと同じ色の紅葉もみじマ  
ークが付いた袴はかまを腰に覆った狐の男性が街角からネギに向かって怪  
しく手招きをしていた。

カモ

（兄貴、気をつける……………今度こそ怪しい誘いに決まってるぜ。）

ネギ

（そ、そんな……………カモ君ったら、あまり人を疑っちゃ駄目だよ。）

カモ

（お、おい！？）

ネギはお構い無しに狐の男性の方へと歩き出していく。

？

「いやあ、どうもどうもどうも……あっしはこの街角で『稻荷家具』つちゅう店を経営してる店主のつねきちという者ですわ。」

ネギ

「は、はあ……それで、僕に何かご用ですか？」

つねきち

「そんなにつれない事を言わないで下さいよお……坊ちゃんにウチの店の商品の中でも一番の目玉商品をオススメしようと思ひましてね。」

ネギ

「め、目玉商品……ですか？」

つねきち

「はいはい、それがコレなんですわ！」

そう言つと、つねきちは後ろに隠し持っていた金色のパチンコをネ

ギに見せる。

ネギ

「そ、それってパチンコですか？」

つねきち

「勿論、ただのパチンコではありませんよ……………これは世界で一つしかないという『金色のパチンコ』でつせ。」

ネギ

「き、金色って……………コレ、本物の金なんですか!？」

つねきち

「しーっ!坊ちゃん、ちょっと声が大きいですよ……………。」

ネギ

「あーす、すいません……………。」

ネギは両手で口を塞ぎながら小声でつねきちに謝る。

つねきち

「それに、この『金色のパチンコ』は百発百中という優れ物なんですよお……………どうですか?お一つ買ってみませんか?」

ネギ

「で、でも……世界に一つしかないって事は、コレって相当高いんじゃないんですか？」

つねきち

「確かに、普段なら一万ベル以上はしますが……坊ちゃんには特別にたったの三千五百ベルで売って差し上げましょう！」

ネギ

「い、一万ベルがたったの三千五百ベル!？」

ネギはつねきちの発言に思わず耳を疑ってしまう。

つねきち

「いかがでっか?こんなチャンスは二度と訪れませんよ?」

ネギ

「そ、そうですね……。」

カモ

(騙されんなよ兄貴!この狐野郎の言ってる事は全て嘘に決まってるぜ!!)



ネギ

「うーん……………」

ネギは両手をスリスリさせながら急かそうとするつねきちと声を押し殺しながら説得するカモに板挟み状態になってしまい葛藤していると……………。

ネギ

「……………決めました!!」

つねきち

「お?」

ネギ

「僕はそれを……………」

カモ

（そつだ、そんな物を買っちゃ……………。）

ネギ

「……………『金色のパチンコ』を買います!」

カモ

(な、何だってえ!?)

カモはネギのまさかの発言に思わず耳を疑った。

つねきち

「はい、毎度あり〜」

こうして、ネギはつねきちに三千五百ベルを払って『金色のパチンコ』を購入したのであった。

明日菜

「お〜い！ネギ〜!!」

すると、シャンクに靴を磨いてもらった明日菜達が一斉にネギの方へと駆け寄って来る。

ネギ

「あ！皆さん……………」

まき絵

「見て見てー！私達の靴もピッカピカになったよー」

そう言いながら、まき絵はピカピカになった靴を嬉しそうにネギに見せ付ける。

ネギ

「そうですかー、それは良かったですねー」

裕奈

「ど、どうしたの？何かいい事でもあったのかにゃ〜？」

裕奈は片手に『金色のパチンコ』を持って満面の笑みを浮かべてるネギを見て苦笑いをする。

木乃香

「あや？ネギ君、その手に持ってるのは何？」

ネギ

「コレですか？コレは世界に一つしか無いという『金色のパチンコ』なんですよー」

亜子

「えっ！？き、『金色のパチンコ』やて！？」

亜子を含む女子全員がネギの言葉に思わず耳を疑ってしまう。

まき絵

「う、嘘でしょ！？だって、『金色のパチンコ』って滅多に手に入らない貴重な道具なのに！」

アキラ

「……ネギ先生、それは何処で手に入れたの？」

ネギ

「え？つねきちさんという狐の人（？）から買ったんですよ。」

まき絵&裕奈&亜子

「つ、つねきちさんに!？」

まき絵達三人はネギの言葉に再び耳を疑ってしまう。

ネギ

「つ、つねきちさんがどうかしました？」

裕奈

「ネギ君、はっきり言っけど……その『金色のパチンコ』は偽物だ

「よ。」

ネギ

「……………へ？」

ネギは裕奈の発言に一瞬だけ固まってしまふ。

ネギ

「ちょ、ちょっと待って下さい……………に、偽物ってどういう事ですか？」

裕奈

「いや、どういう事って……………そのまんまの意味だよ。」

明日菜

「……………どれ、ちょっと貸してみ。」

ネギ

「あっ!?!?」

明日菜はネギから素早く『金色のパチンコ』を奪い取って、『金色のパチンコ』に爪を立てて軽く引っ掻いていく。

明日菜

「……………あ！本当に偽物だ……………ほら、その目でよく見てみなさい！」

ネギ

「え？……………あぁっ！？」

ネギは明日菜が爪で軽く引っ掻いた部分だけが肌色に剥<sup>は</sup>げてる『金色のパチンコ』を見て驚愕する。

ネギ

「コ、コレって……………普通のパチンコにただ金色のペンキで塗っただけの……………」

明日菜

「まあ、そついう事ね。」

まき絵

「つねきちさんって、時々偽物の絵とかも売ってるからね……………」

ネギ

「そ、そんな！つねきちさ……………あ、あれ？」

ネギは慌ててつねきちが立っていた方を向くが、そこには既につねきちの姿は無かった。

裕奈

「……………どうやら、店の方に逃げたみたいだね。」

ネギ

「そんなあゝ！騙すなんて酷いですよあゝ！！」

カモ

（だから、俺たちが最初に言ったじゃねえか……………。）

カモは地面に膝を着けて涙を流しながら落胆しているネギを見つめながら呆れ返る。

アキラ

「……………私、ちょっと文句言ってくる。」

そう言いつと、アキラは険しい表情を浮かべながら街角の方へと入っていく。

亜子

「ア、アキラ!？」

裕奈

「ヤバイ!あの時と同じ表情をしてたよ!！」

(詳しくは『ネギま!』の第十八巻・百六十六時間目を参照)

まき絵

「い、急いでアキラを止めなきゃ……………」

そう言って、まき絵達が慌てて駆け出そうとした時……………。

?

「まき絵さーん!！」

まき絵

「……………え?」

まき絵は声がした方を見上げてみると、頭に緑色の帽子を被って郵便屋さんのような緑色の服を着たペリカンの男性が両手の羽根でゆつくりと羽ばたきながら空の上を飛行していた。



まき絵

「あ！ぺりおさんだ。」

刹那

「知り合いですか？」

まき絵

「うん、私の村で郵便屋をやってる人（？）だよ。」

まき絵が刹那達にぺりおという名のペリカンの男性について簡単に説明していると、ぺりおがまき絵達の前でゆっくりと地面に着地する。

ぺりお

「まき絵さん、街にいらしてたんですか……僕、色々な場所で捜し回ってたんですよ。」

まき絵

「え？何かあつたんですか？」

ぺりお

「そ、そんなですよ！村でちょっとした事件が起こりまして……」

全員

「じ、事件!？」

その場に居た全員がペリオの言葉に耳を疑った。

ペリオ

「とにかく、今すぐ『すま村』へ帰って来て下さい!」

まき絵

「で、でも……………」。

裕奈

「大丈夫、アキラの事はあたし達に任せて!」

亜子

「せ、せや!だから、まき絵は安心して村へ帰って!」

まき絵

「裕奈、亜子……………」。

まき絵は裕奈と亜子の友達思いな発言に少し感極まってしまつ。

まき絵

「……ありがとう！やっぱり私達は親友だね！」

裕奈

「当たったり前じゃん！」

亜子

「さあ、そろそろバスが来る時間やから急いで！」

まき絵

「うん！分かった！」

ペリオ

「それでは、僕は先に行きますね！」

そう言うと、ペリオは羽根を羽ばたかせながら飛び立っていく。

木乃香

「ほなら、ウチらも『すま村』へ行こか！」

明日菜

「勿論よ！何の事件なのか気になるしね……ほら！アンタもいつ

までも落ち込んでないで行くわよ!！」

ネギ

「は、はい……………」

ネギ達は急いでバス停の前まで駆け出していく。

亜子

「まき絵〜!また遊びに来てな〜!！」

裕奈

「ネギ君達もね〜!！」

裕奈と亜子が元気良く手を振りながらネギ達を見送っていると……  
…。

つねきち

「つねきち……………!お、お助けえ……………!

!……………」

裕奈&亜子

「……………」

突如、先程アキラが入って行った街角からつねきちの苦痛な叫び声が響き渡る。

裕奈

「た、大変！早くアキラを止めなきゃ！！」

亜子

「アキラ〜！早まったらアカンでえ〜！！！」

そう言って、裕奈と亜子は慌てて街角の方へと入っていくのであった……………。

第九十八話 街で働く住人達（後編）（後書き）

こうして、ネギ達は『すま村』へと急いで帰って行くのであった……。

因みに、リクエストはまだまだ募集中です。

第九十九話く名探偵ゆづの推理？く（前書き）

ペリおから村にちょっとした事件が起こったと聞いたネギ達は『すま村』に帰るのだが……………。

第九十九話 名探偵ゆづの推理？

すま村・バス停前

ブロロロロッ！

ネギ達の乗せたバスが、『すま村』のバス停の前で停止する。

カッペイ

「おい、『すま村』に到着しただよ！」

まき絵

「はい！ありがとうございます！」

ブオーーーーーッ！！

まき絵達が一斉にバスへと下りていくと、バスの扉が閉じてくると同時に発進していく。

ネギ

「……………それにしても、村で一体何が起こったんでしょうか？」



刹那

「まさか、例の黒コートの連中が現れたのでは……………」

まき絵

「え？何か言った？」

明日菜

「い、いや！何でもないわよ！！」

まき絵は刹那の言葉に耳を傾けるが、明日菜が慌てて話をはぐらかす。

のどか

「と、とにかく村の方へ行ってみましょう。」

木乃香

「せやね、村に行けば何か起こったか分かるかもしれへんし……………」

まき絵

「それじゃ、まずは役場へ行ってみよう！」

そう言うと、ネギ達はまき絵を先頭にして役場の方へと駆け出していく。

（すま村・役場前）

まき絵

「もうすぐ役場に着くよ……………あれ？」

ネギ

「まき絵さん、どうしました？急に立ち止まって……………」。

まき絵

「……………アレを見て。」

明日菜

「アレって？」

明日菜達はまき絵の指差す先を見てみると、役場の前に村の住人全員が集結していた。

木乃香

「どないしたんやろ？あんな所でみんな集まって……………」。

刹那

「役場で何かあったのでしょうか？」

まき絵

「とにかく、行ってみよ！」

そう言って、まき絵達は役場の前で集結してる村の住人達の方へと近付いていく。

まき絵

「あいちゃん！」

あい

「あ！まきちゃん！」

まき絵に呼び掛けられたあいはすぐに反応して、その場でまき絵達

の方へと振り向く。

まき絵

「一体何があったの？」

あい

「実はね……………」

ブーケ

「またUFOが墜落したチエキ〜!!」

明日菜

「ゆ、UFO!？」

明日菜達は途中から話に割り込んできたブーケの発言に耳を疑った。

ネギ

「UFOって、宇宙人が乗ってるといふ乗り物の事ですよね!？」

木乃香

「ウチらにも見せて〜!」

明日菜

「ちょ、ちよっと！アンタ達……。」

ネギと木乃香が目を輝かせながら群集を避けて前に進んでいくと……。

？

「Hey！ハヤクワタシのウチュウセンのブヒンをアツメてクダサイー！」

ネギ達の目に写った光景は、傾いた状態で着陸してる円盤の形をした宇宙船の前で宇宙飛行士みたいな格好をした鷗カモメの男性が片言で喚いていた。

ネギ

「……あ、あの人は？」

あい

「あのUFOの持ち主のジョニーさんだよ。」

まき絵

「持ち主って事は、あの人は宇宙人なの！？」

ブーケ

「さあ、何だか嘘っぽくて宇宙人には見えないチエキ。」

明日菜

「た、確かに……………変な片言を喋ってるし……………」

不満げに言うブーケの言葉に、明日菜も同意しながらジョニーという名の鷗の男性を見つめる。

ジョニー

「おネガイシマース！ イツコクもハヤクワタシのウチュウセンのブヒンをすべてアツめないとワタシはおウチにカエれないのデース！  
！」

ネギ

「宇宙船の部品？」

ペリコ

「ジョニーさんの話によると、墜落していく時にUFOに必要な五つの部品がこの村の何処かに落下したそうなんです。」

ペリみ

「その五つの部品をあたし達に捜してくれって言つたのよ……………ったく、かつたるいっただらありゃしないわ。」

ペリ」

「ね、姉さん……………」

ペリは面倒臭そうに言う。ペリみの毒舌に思わず苦笑いしてしまう。

木乃香

「ほなら、その五つの部品を探さな……………」

アポロ

「……………探したさ、村中の隅から隅までな。」

ビアンカ

「でも、一つも見つからなかったのよ……………」

のどか

「えっ！？一つも……………ですか？」

のどかを含むネギ達のアポロとビアンカの発言に耳を疑った。

さくらじま

「それにしても、奇妙でござすなあ……………森の中から海岸まで隈無<sup>くまな</sup>

く探し回ったのに部品の一つも見つからないとは……………」。

アラン

「しかも、この場に居る全員が村の隅々まで探したのにな……………」。

ゆう

「きつと、誰かがUFOの部品を全て盗んだんだ！」

全員

「!?!?」

その場に居る全員がゆうの発言に反応して振り向いてみると、そこにはシャーロック・ホームズを彷彿ほうぼうとさせる灰色の帽子とコートのような衣装を着たゆうがパイプ（偽物）を口にくわえている姿があった。

あい

「ゆ、ゆう……………何？その格好は……………」。

ゆう

「見れば分かるだろ？探偵のコスプレだよ！」

アルベルト



「因みに、僕はゆう君の助手だワニ〜！」

そう言うと、ゆうと同じコスプレをしたアルベルトが途中から割り込むように姿を現わす。

ブーケ

「ア、アンタ達……………今は遊んでる場合じゃないでしょ……………」。

ゆう

「し、失礼な！俺達は遊びでこの格好をしてる訳じゃないんだぞ！？」

アルベルト

「そうだワニ、僕達は真剣なんだワニ！」

明日菜

（ほ、本当かしら？）

明日菜を含む一部の者達は怒りながら胸を張って真剣に発言するゆうとアルベルトを見て思わず苦笑いを濃くしてしまう。

ゆう

「よし！この事件は名探偵ゆう様が見事に解決してみせるぜ！！」

アルベルト

「みせるワニ〜！！」

ジヨニー

「Woh！ジツにタノモしいデース！」

あい

(……………何だか、目茶苦茶不安なんだけど……………)。

ジヨニーはゆうとアルベルトに拍手を送るが、あいを含む全員が不安そうな視線を送る。

ゆう

「それじゃ、まずは此处に居る全員のアリバイを聞いてみよう！」

アルベルト

「了解だワニ〜！」

あい

「ちょ、ちょっと待ってよ！……………もしかして、私達を疑ってるの？」

コトブキ

「怪<sup>け</sup>しからん！この村の住人にそんな不屈<sup>ふく</sup>き者が居るとでも思ってるのか！？」

ゆう

「い、いや……………も、勿論俺だってみんなを疑ってる訳じゃなくて……………ただ、一応みんなのアリバイだけでも聞いておこうかなあ〜  
と…思…っ…て……………な？アルベルト。」

アルベルト

「そ、そうだワニー！」

そう言っつて、アルベルトはゆうに合わせるようにコケコケッと頷く。

ピアンカ

「……………まあ、別にいいんじゃない？この際だから、はっきり白黒着けましょ。」

さくらじま

「そ、そうでしうすなあ……………」

アラン

「心配すんな、俺達は何もしてねえんだからな。」

カモ

（何だが、とんでもねえ事になっちまったなあ……………兄貴、どうする？）

ネギ

（ど、どうするって言われても……………取り合えず、しばらく様子を見てみようか。）

ネギとカモはあい達に聞こえないように小声で話し合って、しばらく様子を見守る事にした。

ゆう

「さてと、みんなのアリバイを確定する為に改めて事情聴取をするか……………じゃあ、まずはあいから聞いてみよう！」

あい

「えっ！？わ、私？」

あいは突然ゆうに指名されて完全に意表を付かれて驚いてしまう。

ゆう

「今日一日この村で何処で何をしていたんだ？」

あい

「な、何って……今日はまきちゃん代わりに『狸商店』でアルバイトをしてたけど……。」

ゆう

「何？まき絵の代わりにアルバイトだって？」

そう言つと、ゆうは素早くまき絵の方へと振り向く。

ゆう

「まき絵、どうして今日に限ってあいアルバイトを代わってもらったんだ？」

まき絵

「そ、それはね……。」

ネギ

「僕達が街を案内してほしいと頼んだからです……そしたら、あいさんが自らまき絵さんの代わりにアルバイトをすると言い出したんです。」

まき絵が答えようとした時、ネギが代わりにゆうに詳しく説明していく。

ゆう

「成程、そういう事か……ところであい、さっき一日中バイトをしてたって言ってたけど、それを証明してくれる人は？」

あい

「しょ、証明って……私が嘘をついてるって言うの！？」

ゆう

「そ、そうじゃないって……ただの確認だよ。」

あい

「そ、そう……それだったら、たぬきちさんに聞いてみたら？」

そう言って、あいは不機嫌そうにたぬきちに向けて指差す。

ゆう

「あ、ああ……たぬきちさん、あい様子はとうだったの？」

たぬきち

「どつって、きちんと働いてただなも……ただ、配達の人に帰りが

ちょっと遅かっただなも。」

ゆう

「帰りが遅かった？」

あい

「ち、違うの！ちょっとブーケとお喋りしてただけだから……。」

あいはためきちの説明を聞いて、付け足すように慌てて発言をする。

ゆう

(どちらにしろ、ずっと店に居たためきちさんには犯行は無理で…

……あいだったらバイトの最中に部品を盗む事も可能だな。)

アルベルト

(成程………ためきちさんは白で、あいちゃんは黒………っと。)

ゆうとアルベルトがみんなに聞こえないように密着しながら小声で話していると、アルベルトが手帳とペンを取り出して先程のゆうの言葉を簡単に復唱しながら手帳にメモを取り始める。

ブーケ

「……………アンタ達、内緒話なんかして一体何の話をしてるチエキ？」

ゆう

「へ？あ！いや！何でもない……………それより、ブーケは一日中村で何をしてたんだ？」

ブーケ

「アタイ？アタイは一日中家の中に居て……………途中からあいちゃんが訪ねてきて、届け物を受け取って少しだけあいちゃんとお喋りしてたチエキ。」

ゆう

「それを証明する人は？」

ブーケ

「いる訳無いでしょ！ずっと家の中に居たんだから……………」。

アルベルト

(ブーケちゃんは黒……………っと。)

ゆうとブーケの会話(事情聴取)を聞いたアルベルトは素早くメモを取っていく。



ゆう

「それじゃ、次はアランさんとさくらじまさんに聞いてみるか……」

さくらじま

「お、俺達でござるか？」

アラン

「俺達はいつものように『鳩の巣』で珈琲を飲みながらだべったぜ。」

ゆう

「成程……因みに、それを証明してくる人は？」

アラン

「そ、そりゃ『鳩の巣』のマスターに聞いてみりゃいいじゃねえか？」

さくらじま

「と言っても、この場にはマスターが居ないでござるが……」。

フータ

「それでしたら、私もアランさん達が『鳩の巣』に入っていく様子をお見掛けしましたが……」。

そう言いながら、フータが恐る恐る手を挙げる。

フータ

「あ！因みに私とフーコは、ずっと『博物館』の中に居ましたよ。」

アルベルト

(うむうむ……この四人は全員白………っと。)

フータの付け足すような発言を聞いたアルベルトは再びメモを取る。

ゆう

「えっと、次はアポロさんとビアンカさんに聞いてみるか………。」

アポロ

「俺はいつものように庭の花に水をあげてたんだが………。」

ビアンカ

「あたしは庭で本を読んでいたわ。」

アルベルト

「という事は、二人にも証人やアリバイが無いワニね？」

アポロ

「あ、ああ……………」

ビアンカ

「まあ、そついう事ね。」

アポロは少し答え難そつに答えるが、逆にビアンカは平然と答える。

ゆう

「さてと、残るは『仕立て屋』のあさみさんときぬよさんと『役場』で働いてるペリこさんとペリみさんだけか……………」

きぬよ

「ええっ!？ちよ、ちよつと待ってえな……………ウチらはずつと店の中に居おったんよ!ね?お姉ちゃん。」

あさみ

「そ、そやね……………きぬちゃんはいつものように商品を並べてたし、あたしもいつものようにミシンを使って服を縫ってたし……………」

ペリこ

「わ、私もずっと『役場』の窓口に座ってました……………ペリみ姉さ

んも営業時間まで別室で仮眠を取ってましたよ。」

ペリみ

「……………ところで、アンタ達はどつなのさ?」

ゆう&アルベルト

「……………へ?」

ゆうとアルベルトはペリみの発言に一瞬だけ耳を傾ける。

ペリみ

「さっきからあたし達を疑ってるけど、アンタ達は今日一日何をしていたのかって聞いてんのよ?」

ゆう

「お、俺達?俺達はいつものように虫取りをして遊んでただけで…  
…な?アルベルト。」

アルベルト

「そ、そうだワニ。」

ペリみ

「ふ〜ん……………それで?それを証明してくれる人は居るっての?」

ゆう

「そ、それは……………」

アルベルト

「……………い、居ないワニ。」

ゆうとアルベルトはペリみの質問に言葉を詰まらせながらも答える。

ペリみ

「ほら、見なさい！自分達だって証人が居ないのに、よく探偵の真似事なんか出来るもんだわ！」

ペリニ

「姉さん！何もそんな言い方しなくても……………」

ゆう&アルベルト

「じゅう……………」

ゆうとアルベルトはペリみの少しキツイ言葉に落ち込んでしまつ。

ネギ

「……あの、もう一度皆さんで村中を探してみたらどうでしょうか？」

全員

「えっ!？」

ネギの発言にその場に居る全員が再び耳を疑う。

アポロ

「お、おいおい……さっきも言ったように、俺達は村の隅々まで探し回ったんだぞ。」

さくらじま

「なのに、また村中を探し回るのでごわすか？」

アラン

「それとも、俺達の探し方が下手だからもう一度探せって言いたいのか？」

ネギ

「い、いえ!そういう事を言ってるのではなくて……。」

?

「……………お取り込み中、失礼するであります！」

その場に居る全員が声がした方を向いてみると、そこには二匹の門番が立っていた。

あい

「あれ？どうして門番さん達が此処に……………」

門番 A

「先程の皆様のお話を聞かせてもらいましたが、少し気になる事があるのですが……………」

ブーケ

「気になる事って何チエキ？」

門番 B

「じ、実はですね…………… UFOが墜落する前にですね……………」  
『すま村』に数名のお客様がいらしたのですが…………… そのお客様達がまだ『すま村』に居るみたいなんです…………… 多分……………」

ピアンカ

「はぁ？それが一体何だって言う……………」

ゆう

「……………それだ!！」

ピアンカが疑問を投げ掛けようとした時、ゆうが何かを思い付いたように大声を上げる。

あい

「ど、どうしたの?急に大声出して……………」

ゆう

「分かったんだよ……………そのお客の誰かがUFOの部品を盗んだ犯人だって事がな!！」

全員

「ええ————っ!?!？」

ペリみ

(駄目だ、全然懲りてないわ……………。)

ゆうの爆弾発言(?)に全員が耳を疑うが、ペリみだけは呆れ返ってしまっ。

ゆう



「よし、そうと分かれば早速容疑者達を此処に集めるか……行  
くぞー！アルベルト！」

アルベルト

「了解だワニ〜！」

そう言い残すと、ゆうとアルベルトはその場から勢い良く駆け出し  
ていく。

ネギ

「……………い、行ってしまいましたね。」

まき絵

「それにしても、ゆう君は何で急に探偵なんか目覚めたんだろう  
？」

ブーケ

「多分、前にアタイがゆうちゃんに貸した推理小説の影響だと思っ  
ちエキ……………随分読み耽ひげってみたいだから……………。」

明日菜

「それで、探偵みたいな真似を……………何だか、迷惑な話よねえ……  
……………」

明日菜はブーケの話聞いて溜め息を付きながら呆れてしまう。

あい

「……………ところで、今日ってどれ位のお客さんが来てるんですか？」

門番B

「あ、はい、それがですね……………」

くすま村・とある川辺

ダルマン

「……………」

その頃、ダルマンはいつもの川辺で釣りをしていた。

ピクッ！！

ダルマン

「おっ!?!」

突然、ダルマンの釣竿が上下に激しく動き出す。

ダルマン

(こいつはきつと大物だな……それっ!!)

ザッパアーーーーン!!

そう思いながら、ダルマンが釣竿を思いっ切り引っ張り上げるが…

……。

ダルマン

「……………」。

ダルマンが釣り上げたのは車のタイヤだった。

ダルマン

(どうせだったら、タイヤじゃなくて魚の鯛が釣れてほしかったな……………)。

ポツチャン！

そんな事を思いながら、ダルマンは再び釣を再開するのであった……。

第九十九話〈名探偵ゆづの推理？〉（後書き）

果たして、ジヨニーのUFOの部品は全て集まるのだろうか!？

第百話 犯人は誰だ!?? (前書き)

果たして、ジョニーの宇宙船の部品は見つかるのか!?

## 第百話　犯人は誰だ！？

　　すま村・役場前

数時間後、『役場』前には村に訪れたお客達が集められていた。

ジヨニー

「ゆうサン、このナカにワタシのウチュウセンのブヒンをヌスンだ  
ハンニンがイルのデスカー？」

ゆう

「ああ、間違い無い！」

ゆうはジヨニーの質問に胸を張りながら何故か自信満々に答える。

あい

「あゝあ、ゆうったらあんなに集めちゃって……………」。

ネギ

「それにしても、こんなに沢山のお客さんが訪れてたんですね……………」。

まき絵

「そうだねえ、いつもだったら一人ずつ訪れる形だったんだけど……。」

明日菜

「それが、今日に限って一斉に訪れて来たって訳ね……………何とも奇妙な偶然だわね。」

木乃香

「それより、ホンマにこの人達の中にUFOの部品の盗んだ犯人がおるんやろか？」

刹那

「さ、さあ……………とてもそういう事をするような人達には見えませんが……………」

各自そんな事を言いながら、ネギ達や村の住人達はゆうの様子を見守る形で見つめていた。

ゆう

「さてと、早速この場に居る全員に事情聴取をするか……………」

アルベルト

「了解だワニ。」



そう言うと、ゆうとアルベルトは最初に背中に大量の白い蕪を積んだ籠かごを背負っててほっかむりを被ってもんぺを履いた猪の老婆の方へと歩み寄る。

ゆう

「カブリバさん、この村に訪問した理由を教えてください。」

カブリバ

「ふえ？いつものように蕪を売りに来たんじゃが……それが何か問題でもあるだかね？」

ゆう

「い、いや！そうじゃなくて……それと、この村で何か変な物を拾ったって事は無いかな？」

カブリバ

「いいや、別に何も拾っとらんけれども……。」

ゆう

「そっかあ……。」

ブーケ

「って言うか、カブリバのお婆ちゃんがそんな事をする訳無いチエキ！」

あい

「まあまあ……………」

ブーケがゆうに対してツツコミを入れると、あいが苦笑いしながらブーケを宥める。

ゆう

「それじゃ、次の人に聞いてみるか……………」

そうやって、ゆうは大きな額縁を持って背中に緑色のリュックサックを背負った海象セイウチの男性の方へと向く。

ゆう

「セイイチさんは何の用でこの村に……………」

ギョルルルル!!

セイイチ

「はあく、腹が減ったでゴワス……………」

セイイチと呼ばれた海象の男性は大きな腹の音を鳴らしながら地面にへたり込んでしまう。

まき絵

「セ、セイイチさんっていつもお腹を空かせてるよね……………」。

あい

「う、うん……………」。

そう言つと、まき絵とあいはず二人で苦笑いを浮かべてしまう。

ゆう

「い、いや…………だから、この村に来た理由を……………」。

セイイチ

「は、腹が減り過ぎてキュッソツソツとなつて限界でゴワス……………何でもないから何か食べさせてほしいでゴワス。」

ゆう

「参つたなあ……………アルベルト、何か食べ物とか持ってないか？」

アルベルト

「え？お芋カステラだったら持つてるけど……………」。

ゆう

「よし、それをセイイチさんにあげるんだ！」

アルベルト

「えっ！？嫌だワニ！コレは今日のおやつなんだワニー！」

そう言つて、アルベルトはお芋カステラを持って慌てて逃げ出そうとするが……………。

ゆう

「いいから！後でいっぱい買ってやるからさ！」

ゆうはアルベルトから素早くお芋カステラを奪い取つてしまつ。

アルベルト

「あっ！？僕のお芋カステラが……………」。

ゆう

「はい！セイイチさん、お芋カステラだよ！」

セイイチ

「おっ！食べ物でゴワス………それでは、ぐっつぁんでえーす  
！！」

パクッ！！

セイイチはゆうが差し出したお芋カステラを一口だけで食べてしま  
う。

セイイチ

「んぐ~~~~~~~~っ！食べた食べたでゴワス！大満足でゴワス！  
！」

アルベルト

（ああ、僕のお芋カステラが………。）

セイイチはお芋カステラを食べて満面の笑みを浮かべるが、アルベ  
ルトはシヨックのあまり深く落ち込んでしまう。

セイイチ

「……………さてと、そろそろ帰るでゴワス。」

ゆう

「え!?! いやいやいや! 帰っちゃ駄目だよ!?!」

ゆうは何語も無かったかのように帰ろうとするセイイチを慌てて止める。

セイイチ

「ん? 何でゴワスか?」

ゆう

「『何でゴワスか?』じゃなくて……セイイチさんに話があるんだよ!」

セイイチ

「お話………でゴワスか?」

セイイチはゆうの言葉に耳を傾ける。

ゆう

「さっきも言ったけど、この村へ来た理由を聞きたいんだ。」

セイイチ

「この村へ来た理由でゴワスか? うん………特に無いでゴワス。」

ゆう

「……………へ？」

今度はゆうがセイイチの発言に耳を傾ける。

セイイチ

「ただ、近くを通ったからついでに寄ってこっただけでゴワス。」

「

ゆう

「そ、そう……………それじゃ、この村で何か変な物を拾ったとかは？」

セイイチ

「うーん、食べ物だったら拾って食べてたでゴワスが……………今日は何も拾ってないでゴワス。」

ゆう

「は、はあ……………。」

ブーケ

「って言うか、拾い食いは駄目チエキ！」

ゆうがセイイチの言葉に啞然とする中、ブーケが思わず的確(?)  
なツツコミを入れてしまう。

ゆう

「……………つ、次の人に聞いてみよう。」

そう言うと、ゆうは次に背中に大量の壁紙や絨毯じゅうたんが入ってる白いリ  
ュックサックを背負ったラクダの男性の方へと振り向く。

ゆう

「ローランさんはどうしてこの村に来たの？」

ローラン

「えっと、いつものように頼まれた商品を配達しに来たですが……  
…この村の地図を何処かに落としてしまって迷ってたです……………」

あい

(ローランさん、また地図を無くしちゃったんだ……………)。

あいはローランと呼ばれたラクダの男性の言葉を聞いて思わず苦笑  
いをしてしまう。

ローラン



「あ！丁度良いから今此処で渡すです…………たぬきちさん、注文した壁紙をお渡しするです。」

たぬきち

「おう、これはこれはどうもだなも…………。」

突然、ローランが思い出したようにたぬきちの方へと歩み寄って注文してたという壁紙を手渡す。

ローラン

「ふう、今回は誰かに頼む事無くアタシ自身の手で届けられて良かったです…………。」

ゆう

「…………あ、あの、もう一つだけ聞いてもいい？」

ローラン

「え？何です？」

ローランは恐る恐る質問をするゆうを見て首を傾げながら尋ねる。

ゆう

「この村で何か変な物を拾わなかった？」

ローラン

「いえ、特に何も……………それに、もし何か拾っても『関所』の門番さんに届けるです。」

ゆう

「た、確かに……………」

あい

「門番（B）さん、落とし物の中でUFOの部品は無かったの？」

門番B

「え？あ、はい……………そのような物は預かってないと思います……………多分……………」

明日菜

「いや、多分って……………」

明日菜はかなり曖昧に答える門番（B）に思わず呆れてしまう。

ゆう

「えっと、次はこちらの親子に聞いてみるか……………」

そう言うと、ゆうは次に親子と思われる白い魚のマークが付いた緑色のエプロンを付けた猫の女性と赤いチューリップのマークが付いた青い服を着た猫の少女の方へと振り向く。

？

「お母さん、早くお家に帰ろうよ。」

お母さん

「はいはい、お話が済んだら帰りましょうねえ。」

お母さんと呼ばれた猫の女性はぐずりそうになる娘を優しく宥める。

お母さん

「……………それで、お話とは何でしょうか？」

ゆう

「え、え〜っと……………まずは、この村へ来た目的を教えてくださいん  
だ。」

お母さん

「目的と言っても、ウチの娘のまいごがこの村へ遊びに行ったつきり帰って来なかったから迎えに行っただけですよ。」

木乃香

「あの子、まいごちゃんって名前なんや。」

明日菜

「そつみたいね……………名前にはちょっと変わってるわね……………」

「

明日菜と木乃香はまいごという名前の猫の少女に少し苦笑いしてしまつ。

ゆう

「それと、この村で何か変な物を拾わなかった？」

お母さん

「いいえ、私や娘も何も拾ってません……………それに、娘にはいつも『そこら辺に落ちている物をむやみに拾ってはいけません！』とつけているんですよ……………ね？」

まいご

「うん！」

まいごちゃんはお母さんの質問に元気良く答える。

ゆう

「成程……そんなじゃ、次の人に聞いてみるか。」

そう言うと、ゆうは次に白いニット帽を被って貝殻付きのネックレスを首に巻いてるサスペンダー付きの青いズボンを履いた赤い<sup>ラッコ</sup>狩虎の男性の方へと振り向く。

ゆう

「ラコスケさんはこの村へ何しに……。」

ラコスケ

「……………一言言っただい？」

ゆう

「え？ど、どつぞ……………」

ラコスケ

「『人を疑うならば、夕闇の中で考えてはいけない』……………なのねん。」

全員

「……………はい？」

その場に居る全員がラコスケという名の獵虎の男性の言葉に耳を傾ける。

ネギ

「……………そ、それってどういう意味ですか？」

ラコスケ

「別に深い意味は無いのねん……………哲学とはそういう物だね。」

ゆう

「て、哲学よりもこの村へ何しに来たのかが聞きたいんだけど……………」

ラコスケ

「いつものように岬でただ立ってただけ……………ただ立ってるだけというのも疲れるものだね。」

ゆう

「じ、じゃあ最後に村で何か変な物を拾ったとかは……………ないよね？」

ラコスケ

「だあね。」

ラコスケはゆうに相槌するかのように答える。

ゆう

「そ、それじゃ最後に……………とたけけさん！」

最後にゆうが指名したのは、とたけけと呼ばれた大きなギターを持った小柄で白い犬の男性だった。

とたけけ

「な、何かな？」

ゆう

「とたけけさんはどうしてこの村へ来たの？」

とたけけ

「それは勿論、いつものように『鳩の巣』でライブをしようと思っ  
て村へ来たんだけど……………」。

ゆう

「じゃあ、村で何か変な物を拾ったとかは？」

とたけけ

「いや、この村に来てから何も拾ってないよ。」

ゆう

（よし、これで全員の事情聴取を一通り終えたが……この中の誰が犯人なのか全く分からない。）

そう思いながら、ゆうは誰が犯人なのかと考えていると……。

ゆう

「あーそうだ………ジヨニーさん！」

ジヨニー

「ナンデスカ？」

ゆう

「ちょっと耳を貸してほしいんだけど………ゴニョゴニョ………」。

ゆうはジヨニーの耳元で他のみんなに聞こえないように小声で何かを話す。

ジヨニー

「Wow！ソレでホントウにワタシのウチュセンのブヒンをヌスンだハンニンがワカルのデスネ！」



ゆう

「ああ、間違い無い！」

まき絵

「……………ゆう君、ジョニーさんと何の話をしてたのかな？」

あい

「さ、さあ……………」

あい達は不安な気持ちを抱えたままゆうとジョニーのやり取りを見守るしかなかった。

ゆう

「それじゃ、早速始めてくれ！」

ジョニー

「OK！おマカセクダイ……………みなさん！ワタシのハナしをキいてクダサイー！！」

カブリバ

「ふえ？何じゃ？」

ローラン

「な、何です?」

カブリバやローラン等の村に訪れた七匹の動物達は突然声を上げる  
ジヨニーに注目する。

ジヨニー

「ワタシはこのウチュセンでトオイホシからこのホシにやってきた  
のデスガ、フリヨのジコでこのムラにツイラクしてシマッタのデー  
ス!」

とたけ

「うむうむ、成程……………」

セイイチ

「それは気の毒でゴフスなあ……………」

まじ

「お母さん、このおじさんも迷子なの?」

お母さん

「そうみたいね。」

とたけけ達はジョニーの訴えるような話を真剣な面持ちで聞いていく。

ジョニー

「ワタシはイッコクもハヤクウチにカエりたいのデスが、ダレかがワタシのウチュウセンのブヒンをスベてヌスんでシマッタのデース！」

カブリバ

「あんれまあ、何て酷い事を……………」

ローラン

「そんな事をする人が居るんですね。」

ラコスケ

「『思いやりの無い人間程、思いやりの無い人間を嫌いがちである』……………なのねん。」

ゆう

(よゝし、もう一息だ……………)。

そう思いながら、ゆうは炎々と語り続けるジョニーを応援する。

ジヨニー

「ウウツ、コノママではワタシはイッショウウチにカエるコトがデキマセーン……ハンニンさん！おネガイデスからジシュしてクダサイー！！」

ジヨニーは目から大量の涙を流しながら、とたけけ達に向かって物凄いい剣幕で訴える。

ブーケ

「ねえ、ゆうちゃん……あれって、もしかして……。」

ゆう

「そうさ、ジヨニーさんが涙の訴えで犯人に自首を勧める……名付けて『ジヨニーさんの泣き落とし大作戦』だ！」

刹那

「な、泣き落とし……ですか……。」

あい

「そんなに上手くいくかなあ……。」

あい達はゆうが考察したという作戦に不安感を持ってしまつた。

ゆう

「大丈夫だつて！きつとすぐにも犯人が自首をして来て……あれ？」

カブリバ

「ほれ、この白蕪をタダであげるから元気を出しなされ。」

セイイチ

「悲しくなると腹が減るでゴワス……食べ物代わりに元気が出て来るデザイン画をあげるでゴワス。」

ローラン

「アタシ、貴方の気持ち痛い程分かります……この絨毯をプレゼントするです。」

お母さん

「ほら、貴女もジョニーおじさんに何かあげなさい。」

まいご

「うん……じゃあ、私が大事にしてるオルゴールをおじさんにあげる！」

ラコスケ

「『人生、山あり谷あり平地あり』……なのねん。」

とたけけ

「僕には何もあげられる物が無いけど……何か好きな曲があれば僕が弾いてあげるよ。」

ジヨニー

「ド、ドウモ……。」

ジヨニーは唾然とした表情を浮かべながら、カブリバ達から様々な品物を受け取る。

ブーケ

「……何だか、自首するどころか逆に同情されて色々な物をプレゼントされてるチエキ。」

明日菜

「という事は、この中に犯人なんて居ないんじゃないの？」

ゆう

「そ、そんなハズは……。」

？

「ハアッ……。」

アポロ

「……………ん？」

アポロが何処からか聞こえてきた溜め息に気付いて振り向くと、ダルマンが魚を入れるバケツを持って俯きながら落ち込んでいた。

さくらじま

「アレはダルマンでござすな……………あんなに落ち込んでどうしたんでござすかな？」

アラン

「どうせ、今日も魚釣りをしてて何も釣れなかったんだろ……………おい、ダルマン！」

ダルマン

「……………ん？」

落ち込んでいたダルマンはアランに呼び掛けに反応してゆっくりと顔を上げる。

アラン

「どうだ？今日は一匹ぐらい釣れたか？」

ダルマン

「駄目だ……………変な物しか釣れなかった……………」

さくらじま

「変な物でこわすか？」

ダルマン

「ああ、コレだ……………」

そう言って、ダルマンはバケツの中に入ってる五個の歯車のような物をみんなに見せる。

あい

「あっ！？コレって、UFOの部品じゃない！」

ネギ

「ええっ！？」

明日菜

「この歯車みたいな物が！？」



ネギ達はあいの発言に思わず耳を疑った。

ゆう

「ど、どうしてダルマンさんが部品を……………まさか、犯人はダルマンさんだったのか!？」

ダルマン

「は、犯人？」

ダルマンはゆうの言葉の内容が理解出来ずに思わず首を傾げる。

ビアンカ

「そうじゃなくて、部品が川に落ちたのを彼が全部釣り上げたのよ。」

「

のどか

「す、凄い偶然ですね……………」

木乃香

「た、確かに……………」

のどかと木乃香はあまりに奇妙な偶然に苦笑いを濃くしてしまう。

ジヨニー

「アリガトウゴザイマス！アナタはワタシのオンジンデース！」

ダルマン

「い、一体何の話だ？」

ダルマンは訳が分からずに、満面の笑みを浮かべながら自身の両手を掴んで上下に激しくブンブン振るジヨニーに翻弄されてしまう。

ブーケ

「何はともあれ、無事に事件が解決して良かったチエキ！」

アルベルト

「……………あれ？ゆう君、何処へ行くだワニ？」

ゆう

「ギクッ！！」

ゆうは誰にも気付かれずにその場から立ち去ろうとしたが、アルベルトに声を掛けられて立ち止まってしまう。

あい

「……………ゆう、もしかして逃げようとしてた？」

ゆう

「へ？あ！いやあ、ちょっと用事を思い出しちゃって……。」

ズボツ！！

リセット

「くおらあ————————っ……！」

ゆう

「わあっ！？」

ゆうはいきなり地面からリセットさんが現れて思いっ切り驚いてしまっ。

リセット

「君なあ！人を散々疑っておいて謝罪もせずにごっそりと逃げ出そうとするってどういっつっちゃ！？」

ゆう

「べ、別に逃げようとした訳じゃ……。」

リセット

「言い訳すなあ——————っ!!」

ゆう

「ひいつ!?!」

ゆうはりセットさんの大きな怒声に思わず怯んでしまう。

リセット

「ええか?もし君が何かの事件に巻き込まれたとしよう、それで真先に君が犯人やと疑れて事件が解決した後、君を疑った奴がこっそり逃げようとしてたらどう思う?」

ゆう

「そ、それは……………」

リセット

「な?嫌な気持ちになるやろ?」

ゆう

「……………はい。」

リセット

「よっしゃ、分かってくれたらそれでええねん……それと、みんなに何か言わなアカンやろ？」

ゆう

「う、うん……みんな、疑ったりしてごめんなさい！」

そう言つと、ゆうはあい達に向かって深々と頭を下げながら謝る。

まき絵

「ゆう君、昨日から謝りっぱなしだね。」

木乃香

「そう言えば、ウチらも昨日はいっぱい謝ったよね？」

刹那

「そ、そうですね……………」

木乃香の言葉に刹那は苦笑いしながら答える。

ジョニー

「……………フウッ、シャッ、ブーンの下ッ、シッ、ケをシュウリョウしてマッ、シッ、タ！」

ブーケ

「え？いつの間に……………」

あい

「じゃあ、もう帰っちゃうんですか？」

ジョニー

「Yes、そろそろカエらナイとカゾクがシンパイシマスカラ…………  
それではミナさん、ホントウにおセワになりマーシタ！See You  
U……………」

そう言い残すと、ジョニーは急いでUFOの中へと入っていく。

ブワァ……………ッ！！

そして、ジョニーを乗せたUFOはそのままどんどん上昇しながら  
何処かへと飛び去っていく。

のどか

「……………あつという間に行ってしまいましたね。」

明日菜

「…………結局、あの人は何だったのかしら？」

ネギ

「さ、さあ…………でも、無事にUFOが直って良かったじゃないですか。」

まき絵

「そうそう」

明日菜

「…………まあ、それもそうね。」

そう言っていると、ネギ達はお互いに笑い合っていく。

とたけけ

「さてと、折角みんなが一斉に集まってる事だし……………どうだろうか？僕は此処で歌を歌いたいと思ってるんだけど…………。」

あい

「えっ！？も、勿論いいですよ！」

ブーケ

「わーい！まさかこんな所でとたけけさんの歌が聞けるなんて思わ

なかつたチエキ〜!!」

あいとブーケはとたけけの言葉を聞いて嬉しそうに飛び跳ねる。

木乃香

「まきちゃん、あのとたけけさんってそんなに歌が上手いの？」

まき絵

「そりゃもう！プロの歌手になっても可笑しくない位に歌が上手だよ！」

明日菜

「へえ〜、そんなに……。」

とたけけ

「それじゃ、少し準備をするからちょっとだけ待ってて……。」

そう言うと、とたけけは持っているギターを弦を弄り始める。

ネギ

「あ！そうだ……まき絵さん、ちょっといいですか？」



まき絵

「え？何？」

まき絵は突然ネギに呼ばれて思わず首を傾げる。

ネギ

「実は、僕達……まき絵さん達のように何処かに迷ってしまった3-Aの皆さんを捜す為に色々と旅をしてるんです。」

まき絵

「えっ！？そ、それじゃ……他のみんなも私や裕奈達みたいに何処かの村や街とかで迷子になってるって事なの？」

ネギ

「ま、まあそういう事です……でも、安心して下さい！僕達が必ず3-Aの皆さんを全員見つけてみせます！！」

まき絵

「ネ、ネギ君……よし、それだったら私も一緒に協力するよ！」

ネギ

「い、いえ！まき絵さんはこの村で僕達が迎えに来るのを待っていて下さい。」

まき絵

「えっ!??ど、どうして?」

まき絵はネギの発言に耳を疑ってしまい、思わず聞き返してしまう。

ネギ

「すみません、あまり詳しい事は言えないんですけど……とても大変な旅なので、まき絵さんを巻き込みたくないんです。」

まき絵

「そ、そんな……どうして明日菜達は良くて私は駄目なの?私が馬鹿ピンクだから?」

ネギ

「そ、そうじゃありませんよ!ただ……。」

まき絵

「ただ?」

まき絵は耳を澄ませながら再びネギに聞き返す。

ネギ

「まき絵さんがこの村の人達とすっかり馴染んでいるようだったの  
で……………だから、僕達がまき絵さん達を迎えに来るまでの間だけで  
も村の人達ともっと仲良くなってほしいと思って……………」

まき絵

「え？そ、それじゃ……………本当に私の為に……………」

そう言い掛けると、まき絵の頬が微かに紅く染まっていく。

ネギ

「は、はい……………もしかして、余計なお世話でしたか？」

まき絵

「う、ううん！全然そんな事無いよ……………寧ろ、凄く嬉しいよ……………  
……………」

そう言つと、まき絵はネギの頭を優しく撫でる。

ネギ

「ま、まき絵さん？」

まき絵

「やっぱりネギ君って大人だよなぁ……………いつも私達の事を考えて

くれてるんだもん。」

ネギ

「い、いえ……………そんな事は……………」

まき絵

「……………分かった！私、ネギ君を信じて待つてみるよ！」

ネギ

「えっ！？ほ、本当ですか？」

まき絵

「うん！実を言つとね、私もまだあいちゃん達と別れたくないしね」。

ネギ

「そ、そうですか……………」

ネギはまき絵の発言を聞いて思わず苦笑いをしてしまう。

まき絵

「それから、裕奈達にも話してネギ君達の事を話しておくから安心して。」

ネギ

「はい、お願いします!」

まき絵

「それとね、ネギ君………一つだけ約束してくれる?」

ネギ

「何でしょうか?」

ネギはまき絵の言葉に首を傾げながら聞き返す。

まき絵

「絶対にみんなを見つけて、みんなで麻帆良学園に帰ろっね?」

ネギ

「は、はい!約束します!」

あい

「二人共!そろそろとたけけさんのライブが始まるよ!」

ネギとまき絵が笑顔で話していると、あいが大声で二人を呼び掛け

る。

まき絵

「それじゃ、行こっか！」

ネギ

「はい!!！」

そう言うと、ネギとまき絵はあい達が居る方へと駆け出していく。

とたけ

「それでは、早速歌いたいと思いますが………何かリクエストはありますか？」

あい

「じゃあ、サリーが好きな『けけボツサ』をお願いします！」

とたけ

「OK………では、『けけボツサ』を歌います。」

ゆう

「いよっ！待ってました!!！」

パチパチパチパチッ！！

みんなの拍手と共に、とたけけのライブが静かに開始されるのであった……………。

## 第百話〜犯人は誰だ!?? (後書き)

こうして、ネギー行は『どうぶつの森』の世界を後にするのであった……………。

ところで、今回でこの小説は記念すべき百話目に突入しました!

更にこの小説を書いたのが去年の七月ぐらいなので、およそ一年目になりますね……………いやあ、長いようで短かった気分です(汗)。

それもこれも、いつもこの小説を読んで下さる読者の皆様のお蔭です!

本当にどうもありがとうございました!!

……………それと、今回で『どうぶつの森』編は終了ですが、次回から本格的に『特別編』を開始したいと思います!

それから、以前応募したリクエストはまだまだ募集中ですので、何か良い案がありましたらどんどん感想欄にご応募下さい!

因みに、自分が未だにどの任天堂ゲーム作品に登場させるか悩んでいるキャラは……………

- ・ 雪広あやか
- ・ 那波千鶴
- ・ 村上夏美
- ・ 絡繰茶々丸
- ・ 春日美空



・葉加瀬聡美

・四葉五月

・ザジ・レイニーデイ

……の方々です(汗)。

という訳で、次回もお楽しみに！

第一百話 星の形の王子様？（前書き）

ネギー一行は行方不明になってしまった3ーAのクラスメート達を捜すのだが…………。

## 第一百一話 星の形の王子様？

（大乱闘の館）

翌日、『すま村』から戻って来たネギー一行は何処かの世界でさ迷っている3-Aのクラスメート達を全員見つけ出す為の旅の用意をしていた。

ネギー

「……………それでは、まずは僕とカモ君とで捜しに行つて来ます。」

明日菜

「ねえ、本当にエロガモだけで大丈夫なの？」

カモ

「心配すんなって！俺っちはがしっかりと兄貴のサポートするからさ。」

明日菜

「本当かしら？ヤバくなったらさっさと逃げ出すんじゃないの？」

カモ

「な、何て事を！俺っちは兄貴を見捨てるような真似はしねえっす

よ！」

ネギ

「カモ君、分かったから落ち着いて……………」

ネギは明日菜の言葉に思わず大声を上げるカモを優しく宥める。

木乃香

「ほなら、気いつけてな……………」

ネギ

「はい、皆さんもそれぞれ気をつけて下さいね。」

刹那

「はい、承知しています。」

明日菜

「OK！」

ネギ

「それでは、行って来ます！」

そう言うと、ネギはカモを連れて一足先にワープ土管へと入っていく。

明日菜

「……………さてと、私達も出発の準備でもしますか。」

のどか

「そうですね。」

そう言って、明日菜達は館の方へと歩き出していく。

く始まりの海く

ネギ

「ふう、やっと着い……………うわぁっ!?!?」

バツシャーリーン!!

ネギは最初の世界に到着した途端、いきなり水の中にダイブする羽目になってしまう。

カモ

「な、何だ!？」

ネギ

「あっぷあっぷ……っ、杖よ!！」

ブワァー……ッ!!

ネギは素早く杖を取り出して、跨がったと同時に勢い良く上昇させる。

ネギ

「ハアツハアツ……ビ、ビックリしたあ〜。」

カモ

「兄貴、一体何が起こったんだよ?」

ネギ

「僕にも分からないよ、着いたと思ったたらいきなり水の中にポチャン！って……………あぁっ!？」

ネギが周りを見渡すと、周り一面は美しい水平線が描かれてる綺麗な海だけしかなかった。

カモ

「おいおい、此処って正に海のご真ん中じゃねえか……………」

ネギ

「ほ、本当だ……………どうしてこんな所に出たんだろう……………」

カモ

「とにかく、此処じゃ人も居ねえだろうから陸地を探そうぜ。」

ネギ

「そうだね……………」

そう言っつて、ネギが杖に乗ったまま何処かへ進もうとした時……………。

？

「フーーーーーッ!！」

ネギ

「え？今のは……………」

ネギは誰かの声に反応して顔を上げようとしたのだが……………。

ゴツチー————ン！！

ネギ

「あぶべっ！？」

突然、ネギの頭上から勢い良く落下してきたと思われる目や口が付いている星みたいな形をした謎の物体と頭を激しく打ち付けられてしまっ。

カモ

「な、何じゃこりゃ！？まだ昼間だってえのに空から大きな星が降ってきたぞ！？」

ネギ

「う、うん……………」

バツシャー————ン！！



ネギは先程の衝撃で目を回しながら気を失ってしまい、そのまま海の中へと再びダイブしてしまう。

カモ

（あ、兄貴！目を覚ましてくれ！じゃないと、俺たち達このまま海の底まで沈んじまうぜ！！）

カモは気を失ってどんどん海中へと沈んでいくネギを必死に起こそうと左右に激しく揺さぶる。

カモ

（だ、駄目だ！水の中だから思うように動けねえ……………ん？）

カモが何かの気配に気付いて後ろを振り向いてみると、大きな口を開けながらこちらに接近してくる巨大な鮫サメの姿が目に見えた。

カモ

（ゲゲツ！？鮫がこっちに来る……………兄貴！頼むから起きてくれえ！！）

カモはさっきよりも必死にネギの肩を左右に激しく揺さぶる。

ガバァー……ッ!!

すると、鯨の大きな口と鋭い牙が段々とネギとカモに接近してくる。

カモ

(も、もう駄目だ!!)

そう思って、カモが強く目を瞑<sup>つむ</sup>った瞬間……。

?

「危ないファイ!!」

ギユイイ……ン!!

ポツカァ……ッ!!

突然、先程ネギの頭に落下してきた星型の生物が勢い良く回転しながら鯨に体当たりを繰り返す。

カモ

(な、何だ!?今の音は……。)

カモが先程の音に反応して目を開けてみると、さっき目の前まで接近していたハズの鯨が慌てて逃げ出していた。

カモ

（ありゃ？鯨が逃げてく………一体何がどうなってんだ？）

カモはこの状況が理解出来ずにただ首を傾げる。

？

「もう大丈夫だフィ、今すぐ陸地まで運んであげるフィ！」

カモ

（ほ、星が喋った！？）

カモが星型の生物が喋った事に驚いていると、星型の生物がネギを持ち上げるように両手でお腹周りを掴んで、物凄いスピードで泳ぎながら何処かへと進んでいく。

（数分後）

カモ

「……………兄貴！しっかりしてくれよ！！」

何処かの海岸の波打ち際でカモが未だに意識を失っているネギを必死に呼び掛けていた。

ネギ

「……………うん。」

すると、ネギがカモの呼び掛けに答えるかのようにゆっくりと目を開ける。

カモ

「あ、兄貴！やっと気が付いたか！？」

ネギ

「あれ？カモ君……………僕は一体どうしたんだっけ……………。」

カモ

「俺つちもよく分からねえんだけどよぉ……………あいつがいきなり兄貴の頭上から落ちてきて、兄貴はそのまま気を失っちまってよぉ……………」

ネギ

「え？あいつって？」

？

「ごめんなさいフィ、全部僕のせいなんだフィ……………」

そう言つて、星型の生物が目には涙を浮かべながらネギに近付いてくる。

ネギ

「ほ、星が喋ってる!？」

カモ

「兄貴、どうやらコイツは星じゃなくてヒトデみたいツスよ？」

ネギ

「ヒトデ？ヒトデって、あの星の形した……………」

カモ

「そうそう！まあ、俺っちも最初は星だと思ったけどな……………」

そう言うと、カモは先程自分も思っていた事を思い出しながら苦笑いを浮かべる。

？

「本当にごめんなさいフィ、僕が『テンカイ』から落っこっちゃったから……………」

ネギ

「『テンカイ』？」

？

「空の上にある王国の名前だフィ……………僕はそこからやって来たフィ。」

カモ

「空の上にある王国だって!？」

ネギとカモは星型の生物の発言に思わず耳を疑ってしまふ。

ネギ

「でも、どうしてその『テンカイ』から落ちたの？」

？

「僕と妹と友達の三人で追いかけてこをしたたファイ……………だけど、外へ逃げていたら躓いて落ちちゃったファイ。」

カモ

「成程、そして兄貴の頭上に落ちてきたって訳だな……………」

カモは星型の生物の説明を聞いて納得する。

カモ

「兄貴、コイツを許してやろうぜ……………コイツのお蔭で俺たち達は鮫の餌食にならずに済んだからな。」

ネギ

「え！？どういう事？」

カモ

「兄貴がコイツと頭をぶつけて気を失った後に一匹の大きな鮫が襲って来たんだけどよお、コイツが見事に追っ払ってくれたんだよ。」

「

ネギ

「そ、そうだったんだ……どうもありがとう！」

？

「い、いやあ……………」

星型の生物はネギにお礼を言われて微かに頬を紅く染めながら照れる。

ネギ

「あ！自己紹介がまだだったよね……僕の名前はネギ・スプリングフィールド、ネギでいいよ。」

カモ

「俺たちはアルベール・カモミールでい！気軽にカモって呼んでくれ。」

？

「僕はスタフィー、さっき話した『テンカイ』の王子だフィー。」

ネギ

「お、王子様？」



ネギはスタファイーと名乗った星型の生物の言葉に思わず耳を疑った。

スタファイー

「……………や、やっぱり王子には見えないファイ？」

ネギ

「い、いや！そういう訳じゃ……………」

？

「兄ちゃん！」

？

「お〜い、スタファイー！」

スタファイー

「ファイ？」

スタファイー達が声がした方を向いてみると、波打ち際の方からスタファイーよりも少し小柄で頭部に小さな赤いリボンを付けたヒトデとオレンジ色のオーソドックスな貝殻に二つの目が付いてる黒い黒い身の入った二枚貝のような生物がこちらに近付いて来ていた。

スタファイー

「スタピー！それにキヨロスケも……………」

スタピー

「もう、『テンカイ』から落つこちた時は心配したんやで！」

キヨロスケ

「だが、どうやら無事みてえだな……………」

スタピーと呼ばれたヒトデとキヨロスケと呼ばれた二枚貝はスタピーの姿を見て一安心をする。

スタピー

「……………ところで、この兄ちゃん是谁なん？」

スタピーはネギの姿を見て首(?)を傾げながらスタフィーに尋ねる。

スタフィー

「さっき知り合いになったネギとカモだフィ。」

ネギ

「は、初めまして……………」

ネギはスタピーとキヨロスケに向かって軽くお辞儀をする。

キヨロスケ

「ほお、人間か……俺様はキヨロスケってんだ、宜しくな！」

スタピー

「ウチはスタフィー兄ちゃんの妹のスタピーやで！」

カモ

「へえ、兄妹なのか……道理で似てると思ったぜ。」

スタピー

「な、何言ってるねん！全然似てへんわ！」

スタピーはカモの言葉を聞いて頬を膨らませながら怒り出してしま  
う。

スタフィー

「……………そ、それよりネギはあんな所で何をしてたフィ？」

ネギ

「え？え？と……あ！すっかり忘れてた！」

ネギはスタフィーの言葉を聞いて一瞬固まるが、すぐに本来の目的を思い出す。

ネギ

「実は僕達、友達を捜してるんだけど……この写真の中で見覚えのある顔はあるかな？」

そう言うと、ネギは懐から3-Aのクラス名簿を取り出してスタフィー達に見せる。

スタフィー

「うん……どの顔も見た事無いフィ〜。」

キヨロスケ

「それにしても、どれもこれも別嬪<sup>べっぴん</sup>な娘ばかりだなあ……ひよつとして、コレ全員オメエの彼女か？」

ネギ

「へっ!?!ち、違いますよ!?!」

スタピー

「アホ<sup>ハマグリ</sup>蛤!何アホな事を言うてんねん!?!」

キヨロスケ

「な、何だよ！ちょっと冗談を言っただけじゃねえかよ！！」

キヨロスケはスタピーのツッコミに頭から湯気を出しながら怒り出す。

スタピー

「……………ごめんフィ、やっぱりどの子も見つた事が無いフィ。」

ネギ

「そ、そう……………この世界には居ないのかな？」

スタピー

「へ？この世界って？」

ネギ

「あ、いや！何でも無いよ……………」

ネギは聞き耳を立てながら尋ねるスタピーに対して慌てて弁解をする。

カモ

「兄貴、もうちょっとだけこの辺りを探してみようぜ。」

ネギ

「そうだね、まだ居ないと決まった訳じゃないしね……………」

スタフィー

「だったら、僕達も一緒に探すフイ！」

ネギ&カモ

「えっ!？」

ネギとカモはスタフィーの思い掛けない発言に耳を疑った。

キヨロスケ

「お、おいおい！僕達って事は……………まさか、俺様やスタピーも数に入ってるのか!？」

スタピー

「ちょっと待ってえな！何でウチらも手伝わなアカンのよ!？」

スタフィー

「だ、だって……………一人でも多く探した方が早く見つかると思って

……それに、『困ってる人は助けてあげなさい』ってパパとママがいつも言ってたファイ！」

ネギ

「スタファイー君……。」

ネギはスタファイーの人を思いやる気持ちに思わず心を動かされてしまふ。

キヨロスケ

「ったく、しょうがねえなあ……分かったよ！このキヨロスケ様も手伝ってやらあ！」

スタピー

「蛤が手伝うって言うんやったら、ウチも人捜しを手伝ったるでえ〜！」

スタファイー

「ふ、二人共……ありがとうファイー！」

スタファイーはキヨロスケとスタピーの言葉を聞いて、思わず感激しながらお礼を言ってしまう。

ネギ

(カモ君、何だか僕達の為に申し訳ないよね。)

カモ

(いいじゃねえか、此処は甘えさせてもらおうぜ……………それに、この世界の事はこの世界の住人に聞いた方が色々と好都合ってモンだぜ。)

ネギ

(た、確かに……………。)

ネギとカモはスタフィー達に聞こえないよう小声で話し合う。

キヨロスケ

「……………おい、さっきから何をコソコソと話してやがるんだ?」

ネギ

「い、いえ!何でもありませんよ!」

スタフィー

「それならいいんだけど……………それじゃ、早速人捜しを始めるフィー!」



全員

「おおー！ーっ！！」

こうして、ネギとカモはスタフィー達と共に3-Aの探索を再開させるのであった……。

〈数時間後〉

カモ

「……………はあ〜っ、結局誰も見つからなかったなあ〜。」

ネギ

「そっだね……………」

もう夕日が沈みそうになる頃、地上を隈無く捜し回ったネギ達は少し落ち込み気味になりながら先程の海岸で佇んでいた。

スタファイ

「……………あれ？ところでスタピーは何処へ行ったファイ？」

キヨロスケ

「ああ、さっき向こうの海辺で休憩するとか言ってたが……………」

スタピー

「きゃあーっ！っ！」

全員

「!?!」

ネギ達は何処からともなく聞こえてきたスタピーの叫び声に反応する。

スタファイ

「い、今のはスタピーの声だファイ!?!」

キヨロスケ

「一体何があったんだ!?!」

ネギ

「とにかく、声が出た方へ行ってみよう!」

そう言うと、ネギ達はスタピーの叫び声が聞こえた方へ駆け出していく。

スタピー

「兄ちゃん！蛤！助けてえ！！」

ネギ達がスタピーの叫び声を便りに駆け出してみると、数メートル離れた沖でスタピーが三匹の鯨に囲まれていた。

ネギ

「ス、スタピーちゃんが鯨に囲まれてる！？」

スタフィー

「ファイ！？よく見たら、昏間僕が追い払った鯨だファイ！」

カモ

「でもよお、何であの鯨共はスタフィーの妹を襲ってんだ？」

キヨロスケ

「恐らく、奴らはスタピーをスタフィーと間違えて襲ってるみてえだな。」

スタファイ

「スタピー！今助けに行くファイー！！」

そう言うと、スタファイは鯨の方に向かって泳ぎながら駆け出していく。

キヨロスケ

「スタファイ！頑張れよ！！」

カモ

「……………おい、オメエは行かねえのか？」

キヨロスケ

「へ！？い、いやあ……………あんな奴らじゃ俺様が出る幕はねえから、全部スタファイに任せるぜ！」

ネギ

「は、はあ……………。」

カモ

（コイツ、さては怖じ気付きやがったな……………。）

ネギはキヨロスケの理屈っぽい言葉に首を傾げるが、カモは溜め息を付きながら呆れてしまう。

ネギ

「……………それより、僕も一緒にスタピーちゃんを助けに行かきゃ！」

ブワアアアアアアッ！！

次の瞬間、ネギは杖に跨がって物凄いスピードで飛び出していく。

キヨロスケ

「……………な、何だ？あいつ、飛んで行きやがった……………」

キヨロスケは杖に跨がって飛んで行ったネギを目で追いながら啞然とする。

鮫A

「ガアアアアアアッ！！！」

スタピー

「ひいつ！？」

一匹の鯨が大きな口を開けてスタピーに襲い掛かろうとした時……

スタフィー

「スピニアタック!!」

ギューイーーーーン!!

ポツカアーーーーツ!!

鯨A

「フガツ!?!」

突然、スタフィーが勢い良く回転しながら鯨に体当たりを繰り返して鯨を吹き飛ばす。

スタピー

「に、兄ちゃん!」

スタフィー

「スタピー! 怪我は無いフィ!?!」

スタピー

「もう！何してたん！？もうちょっとで鮫に喰われるところやったで！」

スタフィー

「ご、ごめんフィ……………」

スタフィーは何故かスタピーに怒られて落ち込んでしまっ。

スタピー

「でも、助けてくれて……………その……………あ、ありがとう……………」

スタピーは頬を微かに紅く染めてモジモジしながらスタフィーに小声でお礼を言っ。

スタフィー

「……………え？今、何て言ったフィ？」

スタピー

「な、何でもあらへん！」

スタフィーは先程のスタピーの言葉を聞き取れなかったのもう一度尋ねるが、スタピーはそっぽを向いてしまっ。

鮫B

「ウガアーーーーッ!!」

スタピー

「に、兄ちゃん!後ろ……………」

スタフィー

「し、しまったファイ!!」

スタフィーが急いで振り向いた時には、二匹目の鮫が大きな口を開けてスタフィーに襲い掛かろうとしたが……………。

ネギ

「波っ!!」

ボツカアーーーーッ!!

鮫

「ゲフツ!?!」

次の瞬間、ネギの強力な拳が鮫の鼻先に命中して鮫を勢い良く吹っ



飛ばしていく。

スタフィー

「……………ネ、ネギ？」

スタピー

「わあ〜！ネギ兄ちゃんが飛んでるで〜！」

スタフィーは一体何が起こったのか理解出来ずに啞然とするが、スタピーは杖に跨がるネギの姿を見て興奮してしまふ。

鮫C

「グワァー……ッ……！」

すると、残り一匹の鮫がまるで意を決するかのように大きな口を開けながらスタフィーに襲い掛かろうと突っ込んで来る。

カモ

「マズイ！もう一匹の鮫も突っ込んで来やがったぜ！？」

スタフィー

「任せるファイ……！」

ピョーーーーーン!!

次の瞬間、スタファイがそのまま鯨の頭上に向かって高くジャンプをする。

スタファイ

「流星アタック!!」

ドツカアーーーーッ!!

鯨

「グガッ!?!」

そして、スタファイは頭を突き出すように勢い良く落下しながら鯨に強力な頭突きを繰り出す。

ザアーーーーッ!!

すると、三匹の鯨はその場から一斉に逃げ出していく。

キョロスケ

「へっへっん、ざま〜みろってんだ!」

スタフィー

「あれ？キヨロスケ、いつの間に……………」

スタフィーを含む全員がいつの間にか近くに居たキヨロスケに唾然とする。

キヨロスケ

「いやあ〜、流石はスタフィーだけ……………やっぱり俺様がわざわざ出る必要は無かったな!」

スタピー

「何言つてんねん!最初っから出る気なんて無かったんやろ!？」

キヨロスケ

「なっ!？そ、そんな事はねえよ……………」

キヨロスケはスタピーの鋭いツツコミに凶星を指されて、あまり言い返せなくなってしまう。

ネギ

「と、とにかく岸の方へ戻りましょう……………」

スタフィー

「そ、そうするフィ……………」

そう言って、ネギ達は岸の方へと戻っていく。

カモ

(……………ところで兄貴、これからどうする?)

ネギ

(うーん、この世界には居ないみたいだし……………仕方ないから別の世界に行ってみよう。)

カモ

(そうだな……………よし、そうと決まれば早速この世界からおさらばしようぜ。)

ネギ

(うん……………あ！その前にちょっとだけ待って。)

しばらくの間、ネギとカモが小声で話し合っていると、ネギがスタフィー達が居る方へと近付いていく。

スタピー

「どないしたん？」

ネギ

「スタフィー君、それにスタピーちゃんやキヨロスケさんも……今日一日、一緒に探してくれてどうもありがとう！」

スタフィー

「い、いやあ……それ程でもないフィ〜。」

スタフィーはネギにお礼を言われて、片手で頭(?)の部分の軽く掻きながら照れてしまう。

キヨロスケ

「………んで、オメエはまだその別嬪な姉ちゃん達を捜しに行くのか？」

ネギ

「はい、別の世界………じゃなくて、別の場所でまた捜してみます。」

スタピー

「そっかあ……堪忍な、ウチら何の役にも立てなくて……。」

ネギ

「そんな事無いよ、みんなが手伝ってくれただけでも僕は嬉しいよ。」

「

そう言いながら、ネギはスタピーの頭(?)を優しく撫でる。

スタフィー

「ネギ、僕……あまり上手く言えないけど……諦めない心を持ち続けて捜し続けたら、きっと友達をみんな見つけられるフィー！」

ネギ

「スタフィー君……ありがとう！僕、その言葉を励みにして頑張っつて捜し続けるよ！」

キヨロスケ

「おう！頑張っつて姉ちゃん達を捜しな！」

スタピー

「ほな、またな〜！」

スタフィー

「さよならフィー〜!!！」

ネギ

「またいつか会おうね〜!!」

ネギとカモはスタフィー達に暖かく見送られながら、この世界を後にするのであった……………。

## 第一百一話「星の形の王子様？」（後書き）

果たして、次の世界では誰かと再会出来るのか!?

……という訳で、『特別編』の一発目にネギが訪れた世界は『伝説のスタフィー』でした!

それから、基本的には今回のように一話で完結する形です。

また、今回のように3-Aの生徒が見つからずに話が終わってしまう場合もあります。

更に登場するキャラも今までと違って、今回のように主人公とごく小数の主要キャラしか登場させません。

あまりにも身勝手な話の流れだとは十分承知しておりますが、どうかご了承下さいませ!(汗)

因みに、登場させてほしい任天堂ゲームのリクエストはまだまだ募集中です!



第三話 小さなお手伝いロボとマネージャーロボ (前書き)

明日菜&のどかが最初に訪れた世界は……。

## 第二二話 小さなお手伝いロボとマネージャーロボ

「サンダースン一家の家」

明日菜

「……………これは一体どういう事？」

のどか

「ぞ、ぞあ……………」

明日菜とのどかは周りにある巨大なソファやテレビ等がある風景に戸惑いながら辺りを見回す。

明日菜

「周りにある家具やら何から何まで全て大きい……………此処って一体どういう世界なのかしら？」

のどか

「ひょっとして、私達が小さくなってしまったのではないでしょうか？」

明日菜

「ま、まっさか！ 幾ら何でもそんな事って……………」

…。  
そう言いながら、明日菜がのどかの発言に苦笑いをしていると……

のどか

「……………あれ？」

明日菜

「本屋ちゃん、どうしたの？」

のどか

「あそこで誰かが倒れてますけど……………」

明日菜

「え？どれどれ……………」

明日菜がのどかの指差す先を見ると、家の隅っこで何物かが仰向けになって倒れていた。

明日菜

「あつ！？本当だ……………本屋ちゃん、行ってみましょう！」

のどか  
「はい！」

そう言うと、明日菜とのどかは倒れている人物の方へと慌てて駆け出していく。

明日菜

「ちよつとアンタ！大丈………夫？」

のどか

「コ、コレって……。」

明日菜とのどかは倒れているのが全身銀ピカで縦長の胴体に細長い手足を持ったロボットのような人物（？）だという事に気付いて啞然とする。

明日菜

「ね、ねえ本屋ちゃん………コレって何に見える？」

のどか

「え？えつと………ロボットですよね？」

明日菜

「やっぱり……でも、何でこんな所でロボットが倒れてるのかしら？」

のどか

「もしかして、壊れてしまったのでしょうか？」

そう言いながら、明日菜とのどかがロボットを見つめながら考えていると……。

？

「ちびロボさ〜ん！」

明日菜&のどか

「!?!」

突然、上空からテレビのような四角い顔で頭にプロペラを付けた小型の機械（？）が明日菜達の前に現れる。

？

「あゝあ、またバッテリーが切れてしまってこんな所で倒れてたんですねえ……………おや？」

謎の機械は明日菜達に気付いて、そのままジ〜ツと見つめる。

？

「あの、失礼ですけど……この家では見掛けない顔ですが、お二人は『サンダーズン家』に新しく来た玩具ですか？」

のどか

「お、玩具？」

のどかは謎の機械の発言に思わず耳を疑ってしまう。

明日菜

「ちよっと！私達は玩具じゃなくて、れっきとした人間なんですけど！」

？

「に、人間！？」

今度は謎の機械が明日菜の発言に耳を疑ってしまう。

？

「う、冗談を……人間にしては随分小さいようですが……。」

明日菜

「は？小さいって……………誰が？」

？

「……………ですから、貴女方お二人がですよ。」

のどか

「わ、私達が……………」

明日菜

「ええ……………！？」

明日菜の叫び声に似た大声が部屋中に響き渡る。

のどか

「……………という事は、私達は本当に小さくなっちゃったんですね。」

明日菜

「そ、そうみたいね……………ところで、アンタは誰？」

？

「あー申し遅れました……………私はちびロボさんのマネージャーを務めるトンピーと申します。」

明日菜

「ちびロボ？マナージャー？」

明日菜はトンピーと名乗る謎の機械の言葉に耳を傾ける。

のどか

「ちびロボって、この倒れてるロボットの事ですか？」

トンピー

「その通り！ちびロボさんと私は『オレンジ社』によって開発された家庭用のお手伝いロボ&マナージャーロボなのです！」

明日菜

「お手伝いロボット？こんなに小さいのに家の手伝いなんて出来るの？」

トンピー

「いやいや！ちびロボさんを甘く見てはいけません！！！」

そう言いながら、トンピーは明日菜の方へと近付きながら力強く発音する。



明日菜

「わ、分かったからそんなに顔を近付けないで……………」

トンピー

「あーし、失礼致しました……………」

そう言つと、トンピーはゆっくりと明日菜から離れる。

のどか

「ところで、このちびロボさんってどうしたら起きるんですか？」

トンピー

「あ！そうでした…………急いでちびロボさんを充電しないといけませんー！」

明日菜

「充電するって、どうすればいいの？」

トンピー

「ちびロボさんの背中部分に黒い電気コード付きのプラグが付いてますでしょ？そのプラグをコンセントに差し込むだけでいいんですよ。」

そう言うと、トンピーはちびロボの背中部分に付いてる黒い電気コードのプラグを指差す。

明日菜

「あーコレをコンセントに差せばいいのね。」

トンピー

「はい、そうなのですが……誠に申し上げ難いのですが、あそこコンセントまでちびロボさんを運んで頂けないでしょうか？」

トンピーはかなり申し訳なさそうに怖ず怖ずと壁の端っこに設置されてるコンセントに指差す。

明日菜

「あー、はいはい！このまま放っておけないしね……よいしょっとー！」

次の瞬間、明日菜がちびロボの細長い両足を持ち上げるように両手で掴む。

のどか

「明日菜さん、一人で大丈夫ですか？」

明日菜

「うん、平気平気！思ってたよりも重くはないし……それじゃ、行きましょー！」

トントン

「はい、お願いしますー！」

こうして、明日菜はちびロボの両足を持ったまま引きずるようじしてコンセントの方までゆっくりと進んでいく。

明日菜

「よいしょっとー！ふうふう……。」

明日菜達がコンセントの近くに到着すると、明日菜がちびロボの両足を掴んでいた両手を離す。

トントン

「ありがとうございます………しいでにプラグをコンセントに差し込んで頂けますでしょうか？」

明日菜

「はいはい、それとー！」

カチャッ！

次の瞬間、明日菜はちびロボに付いて黒い電気コード付きのプラグをコンセントに差し込む。

トンピー

「何から何まで本当にありがとうございます……………これで、しばらくするとちびロボさんは復活するでしょう。」

のどか

「そうですね、それは良かった……………」。

のどかがトンピーの言葉を聞いて「安心していると……………」。

ガシャン！

突然、ちびロボがその場からゆっくりと立ち上がる。

明日菜

「あ！？起きた！」

トンピー

「どうやら、充電が完了したようですね。」

スポン！

明日菜達が復活したちびロボを興味津々に見ていると、ちびロボがコンセントに差し込んでいた自らのプラグを引き抜く。

のどか

「へえ、自分でプラグを引き抜くんですね。」

トンピー

「そりゃもう、ちびロボさんは自ら判断して行動するんですよ！」

明日菜

「ほ、本当に？」

明日菜がトンピーの言葉に耳を傾けると、ちびロボが明日菜達を見つめながら微かに首を傾げる。

トンピー

「あ、こちらのお二人は私の代わりにちびロボさんを充電して下さった方々ですよ。」

のどか

「は、初めまして！宮崎のどかです。」

明日菜

「私は神楽坂明日菜よ、宜しくね！」

ちびロボ

「……………」

明日菜とのどかはちびロボに自己紹介するが、ちびロボはただ黙ったまま明日菜達を見つめる。

明日菜

「……………ちょっと、何とか言いなさいよ。」

トントン

「すみません、ちびロボさんは私と違ってお喋り機能が付いてないので喋る事が出来ないのです。」

のどか

「そうなんですか……………でも、それだったら意思表示が出来ないのではないのでしょうか？」

トンピー

「いえ、それについては心配いりませんよ……………ね？ちびロボさん。」

パカッ！

トンピーがちびロボに問い掛けると、ちびロボの頭部が鍋の蓋みたいに開かれて（丸）の付いたマークの札が出て来る。

明日菜

「な、何！？急に頭が開いたけど……………」

トンピー

「このように、ちびロボさんは ×（バツ）で自らの意思表示を相手に伝えられるのです。」

のどか

「な、成程……………」

のどかは啞然とした表情を浮かべながらトンピーの説明に納得する。

トンピー

「あーちびロボさん、あそこに紙屑かみくずが落ちてますよ？」

そう言うトンピーの指差す先を見てみると、確かに床の上にクシャクシャになってる小さな紙屑が落ちていた。

ちびロボ

「……………」

すると、ちびロボは紙屑が落ちてる場所まで駆け出していく。

クシャッ！

そして、ちびロボは紙屑を持ち上げるように拾って大きなゴミ箱の方へと駆け出していく。

ポイツ！

更にちびロボは紙屑をバスケットのダンクシュートのように投げて、ゴミ箱の中へと投げ込む。

のどか



「す、凄い！ゴミをちゃんとゴミ箱に捨てるなんて……………」

トンピー

「フフフ、それだけではないんですよ。」

明日菜

「あれ？ちびロボが何処かに行っちゃうけど……………」

明日菜の言う通りに、ちびロボはトンピー達の方には戻って来ないで何処かへと駆け出していく。

のどか

「また何かゴミを見つけたのでしょうか？」

トンピー

「ちょっと行ってみましょうか。」

そう言うと、明日菜達は急いでちびロボの後を追いついていく。

トンピー

「ちびロボさん、どうかしましたか？」

ちびロボ

「……………」

ちびロボはただ黙って、足跡で汚れている床を見つめていた。

のどか

「あ！床に大きな足跡が付いてますね……………」

トンピー

「この大きさは恐らくパパさんのようですね……………ちびロボさん、いつものように綺麗にしちゃって下さい！」

パカッ！

次の瞬間、ちびロボの頭部が再び開かれて中から特撮ヒーローのような人物が象られてる大きな歯ブラシが出て来る。

明日菜

「な、何！？頭から歯ブラシを……………って言うか、そんな大きな歯ブラシをどうやってその小さな頭に入れてたのよ！？」

トンピー

「えっへん！ちびロボさんの頭の中はどんな大きな物でも入れれる

んですよ。」

明日菜

(いや、答えになってないから……………。)

明日菜はトンピーの少しズレた答えに苦笑いをしてしまう。

ゴシゴシゴシゴシッ!!

ゴシゴシゴシゴシッ!!

すると、ちびロボが歯ブラシをまるでブラシ代わりに擦って足跡の汚れを消していく。

のどか

「成程、歯ブラシをブラシ代わりにして綺麗にするんですね。」

トンピー

「その通り! こういったちびロボさんの活躍によってサンダーズン家の皆様は毎日がハッピーな気分になるのです!」

明日菜

「へえ〜、色々と頑張ってるんだ……………」

そう言うと、明日菜とのどかは感心しながらちびロボを見つめる。

トンピー

「……………ところで、お二人はどうしてこの家に来たのですか？」

明日菜

「え？……………あーっ！すっかり忘れてた！！」

明日菜はトンピーの質問を聞いて、本来の目的を思い出して思わず大声を上げてしまう。

のどか

「私達、実はクラスメートを捜してるんですけど……………この中に見覚えのある顔はありますか？」

そう言うと、のどかは懐からネギのクラス名簿のコピーを取り出してトンピーに見せる。

トンピー

「うーん、どれも見ない顔ですねえ……………ちびロボさんはどうですか？」

ちびロボ

「……………」

しばらくの間、ちびロボはクラス名簿のコピーを食い入るように見つめるが……………。

パカッ！

次の瞬間、ちびロボの頭が開かれて×マークが付いた札が出て来る。

トントーン

「どつやら、ちびロボさんも見えてないようですね……………」

明日菜

「そ、そう……………」

のどか

（この世界にも夕映とハルナは居ないのかな……………。）

そう思いながら、明日菜とのどかは少し俯きながら落ち込んでしま

トンプー

「でも、ひょっとしたら他の皆様だったら知ってるかもしれないので、私とちびロボさんで聞いてみたいと思います。」

のどか

「ほ、本当ですか？ありがとうございます！」

明日菜

「でも、他の皆様って誰の事なの？」

トンプー

「はい、この家に住んでいる玩具の皆様です！」

明日菜&のどか

「お、玩具！？」

明日菜とのどかはトンプーの発言に思わず耳を疑った。

のどか

「あ、あの………玩具ってどういう事ですか？」

トンプー

「このサンダーズン家の玩具は何故か自分で動いたり話したりする

事が出来るんですよ。」

明日菜

「ま、まさか……………玩具が勝手に動いたり話したりするなんて……………」

？

「いや！そのまさかさー！」

全員

「!?!?!」

その場に居る全員が何処からともなく聞こえてきた声に驚きながら辺りを見回す。

明日菜

「だ、誰!?今喋ったのは……………」

のどか

「あっ!?!?テ、テレビの上に誰か立ってます!」

のどかの言う通りに、テレビの上にヘルメットのような仮面を被った特撮ヒーローのような格好をした大きな人形が立っていた。

？

「誰が決めたか知らないが、正義と悪と言っけれど……何が正義で、何が悪か分からない！」

トンピー

「あ、相変わらずカツコイイ〜!!」

明日菜

「……………ど、何処が？」

明日菜は謎の人形に熱く絶賛するトンピーに思わず苦笑いしながらツッコミを入れてしまう。

？

「夢と希望を心に抱き、愛と勇気で宇宙を包む……………宇宙刑事・ギッチョマン!!」

ポォー……………ン!!

ギッチョマンと名乗る人形がポーズを決めたと同時に、ギッチョマンの背後から二つの小さな爆発が起きる。



のどか

「ほ、本当に玩具が動いたり話したりしてる……………」。

トンピー

「ね？私の言った通りでしょ？」

明日菜

「え、ええ……………」。

明日菜とのどかは未だに戸惑いながらも取り合えず納得をする。

トンピー

「それでは、私とちびロボさんは聞き込みに行つて来ますので……………  
…お二人はこのリビング内で待つて下さいね。」

のどか

「は、はい……………お願いします。」

トンピー

「では、行って来ます！」

そう言い残すと、ちびロボとトンピーは半分開いてある扉の隙間か

ら入っていく。

明日菜

「……………さてと、あの二人が戻って来るまでどうしようかなあ。」

のどか

「そうですねえ……………」

明日菜とのどかがちびロボ達に戻って来るまでどうするか考えていると……………。

ギッチョマン

「とっつっ！…！」

シュタツ！…！

突然、ギッチョマンがテレビの上から勢い良く飛び出して上手く着地をする。

ギッチョマン

「君達、どうやら暇を持て余してるようだね？」

のどか

「え？は、はい……。」

ギツチヨマン

「それだったら、私と一緒にリビング内をパトロールしてみないか？」

明日菜

「パトロールですか？……別にいいですよ。」

ギツチヨマン

「よし！決まりだ……。それじゃ、早速コレに着替えてくれ。」

そう言うと、ギツチヨマンは明日菜とのどかにそれぞれ何かが入ってる丸いカプセルを手渡す。

明日菜

「コ、コレは何ですか？」

ギツチヨマン

「正義の為に必要な正装と言ったところだ……。さあ、それに着替えたらパトロール開始だ！」

のどか

「は、はい……………」

明日菜とのどかはギツチヨマンに言われた通りに手渡された衣装を着替えていくのであった……………。

〔数時間後〕

トンプー

「皆さん！お待たせしました……………し……………た？」

ちびロボ

「……………。」

しばらくすると、ちびロボとトンプーがリビングに戻って来るのだが何故か啞然としていた。

ギッチョマン

「さあ！もう一度やるぞ……………宇宙刑事・ギッチョマンー！」

明日菜

（はあ〜っ、私ら一体何やってんだろ……………。）

のどか

（は、恥ずかしいですう……………。）

ちびロボとトンピーの目には、ギッチョマンと同じ格好をした明日菜とのどかがギッチョマンと同じ決めポーズをしている光景だった。

トンピー

「あ、あのお……………もしかして、お取り込み中でしたか？」

のどか

「へ？あーいやー！これはその……………」

のどかはトンピー達に気付いて動揺しながら弁解をしようとする。

明日菜

「そ、それより！聞き込みはどうだったの？」

トンピー

「あ、はい……………この家の全ての玩具の皆様聞いてきたのですが、どなたもお二人のクラスメートらしき人は見てないそうなんですよ。」

のどか

「そ、そうですか……………」

のどかはトンピーの言葉を聞いて再び少し俯きながら落ち込んでしまふ。

トンピー

「……………それより、ギッチョマンさんと同じ格好をして何をやってたのですか？」

明日菜

「な、何って……………パトロールと言って此処ら辺をウロウロしてたり、決めポーズの練習をさせられたりと色々よ……………」

明日菜はトンピーの質問に呆れ返りながら答える。

トンピー

「そうですか、確か以前ちびロボさんも同じ事をやってましたよ

ね？」

パカッ！

ちびロボはトンピーの質問に対して、頭の蓋を開いて マークの札を出して答える。

明日菜

「……………本屋ちゃん、そろそろ帰ろっか？」

のどか

「そ、そうですね……………」

ギツチヨマン

「おや？もう帰るのか？まだ正義について色々教えなければならぬ事があるのだが……………」

明日菜

「い、いえ！その気持ちだけで結構です！！」

明日菜はギツチヨマンの正義についての説教を必死に断る。

ギツチヨマン

「そうか……ならば、そのギッチョマンの服は記念にプレゼントしよう！」

のどか

「あ、ありがとうございます……。」

のどかはかなり苦笑いを濃くしながらギッチョマンにお礼を言う。

トンピー

「それでは、クラスメート捜し頑張ってください！私とちびロボさんも応援させていただきます……！」

ギッチョマン

「さらばだ！明日菜刑事とのどか刑事よ！」

のどか

「い、色々ありがとうございます！」

明日菜

（はあ、今回は何だか疲れた……。）

こうして、明日菜とのどかはちびロボ達に温かく見送られながらサnderスン家を後にするのであった……。





第三二話 小さなお手伝いロボとマネージャーロボ (後書き)

こうして、明日菜とのかは次の世界へと向かうのであった……………。

……………という訳で、今回は『ちびロボ!』編でした!

因みに、今回の『ちびロボ!』はGC版+ラスボスであるマゼースパイダーを倒した後+デカロボが復活する前という設定です。

それから、リクエストは引き続き募集中です!

第百三話 花の妖精は花粉症！？ (前書き)

ネギー一行は3-Aのクラスメート達を捜す為に各チームで行動するのだが…………。

### 第百三話　花の妖精は花粉症！？

　　ポップルス・花の世界

木乃香と刹那は辺り一面お花畑のような自然豊かな世界へとやって来た。

木乃香

「わあ！綺麗な花がいっぱい咲いとるわあ！！！」

刹那

「はい、まるで此処は花の世界みたいですね。」

そう言いながら、木乃香と刹那はお花畑に見取れてしまう。

木乃香

「せっちゃん、折角やからお花摘んでもええ？」

刹那

「お嬢様、お気持ちは分かりますが………今は一刻も早くクラスの皆さんを見付けなければなりません。」

木乃香

「え、ちょっとぐらい寄り道してもええやん……な？お願いや！」

木乃香は両手を合わせながら刹那に懇願する。

刹那

「……………分かりました、ちょっとだけでしたら構いませんよ。」

木乃香

「わ、い！やっぱりせつちゃんは優しいわあ〜！」

そう言うと、木乃香は嬉しそうに花畑の方へと駆け出していく。

刹那

（あ、やはりこのちゃんには敵わへんなあ……………。）

そんな事を思いながら、刹那も微笑みながらゆっくりと木乃香の方へと歩み寄っていく。

木乃香

「うん、どの花も綺麗やから迷うなあ……………」

木乃香がどの花を摘もうか悩んでいると……………。

？

「えくん！えくん！！」

木乃香 & 刹那

「！？」

突然、何処からともなく女の子の泣き声が響き渡る。

木乃香

「だ、誰かが泣いてるようやな……………」

刹那

「……………あ！あそこに誰か居ます！」

刹那の言う通りに、刹那が指差す先には赤っぱいポニーテールのよ  
うな髪型にピンク色のリボンで纏めてる黄色い服とピンクのスカ―  
トを着た少女が泣きじゃくっていた。

木乃香

「ホンマや！女の子が泣いとる……………」

刹那

「行ってみましょう！」

そう言うと、木乃香と刹那は泣きじゃくる少女の方へと駆け寄っていく。

木乃香

「ねえ、そないに泣いてどないたん？」

？

「ひつく……………えつぐ……………あのね、大事なステッキを無くしちゃったの……………」

刹那

「ステッキ？」

？

「うん、あのステッキが無いと……………あたし……………ううっ……………」

少女が涙声で木乃香達に説明していると、少女は再び泣き出しそうになる。

木乃香

「ま、待って！ウチらもそのステッキを探すのを手伝うからもう泣  
なんといて！な？」

？

「え？ほ、本当に？」

木乃香

「勿論だよ……………ね？せつちゃん。」

刹那

「は、はい！お嬢様がそうおっしゃるのでしたら……………。」

？

「どうもありがとう！親切なお姉ちゃん達！！」

少女は木乃香達の言葉を聞いて嬉しくなり、泣き顔から笑顔へと一  
変して二人にお礼を言う。

木乃香

「あ！自己紹介がまだやったね……………ウチは近衛木乃香やえ。」



刹那

「私は桜咲刹那です。」

？

「あたしはリップ、この『ポップルス』の女王だよ！」

刹那

「じよ、女王様!？」

刹那はリップと名乗る少女の言葉に耳を疑った。

木乃香

「へえ、随分可愛い女王様やね。」

リップ

「えへへ、ありがとう。」

リップは木乃香に褒められて片手で頭を掻きながら照れてしまう。

刹那

「し、失礼しました！女王様とは知らずに……………」

リップ

「わあっ！？そ、そんなに畏まらないですよ。」

木乃香

(せっちゃんったら、相変わらず生真面目さんなんやから……………。)

木乃香はリップの前で素早くひざまずいた刹那を見つめながら苦笑いを浮かべる。

木乃香

「リップちゃん、ウチら二人は初めてこの世界に来たんやけど、此処はどんな所なんかな？」

リップ

「此処？此処は『ポップルス』といって、妖精達が平和に暮らしている世界だよ。」

刹那

「妖精？という事は……………」

リップ

「うん！あたしもお花の妖精なの。」

木乃香

「へえ〜！ウチ、妖精さんなんて初めて見たわあ〜。」

リップ

「ところで、お姉ちゃん達は人間みたいだけど……………どうやって」  
の『ポップルス』に来たの？」

刹那

「え！？そ、それは……………」

刹那はリップの的確な質問に対して言葉を詰まらてしまう。

木乃香

「ほ、ほら！早ようリップちゃんの大切なステッキを探そ！な？」

リップ

「あ！そうだった……………早くあたしのステッキを探さなきゃね！」

刹那

（さ、流石木乃香お嬢様……………上手く話を逸らしましたね……………）。

刹那は上手く話を逸らしてピンチ（？）を打開した木乃香に苦笑いを浮かべながら感心する。

木乃香

「ところで、そのステッキっていつから無くなったん？」

リップ

「うーんとね……………此处でさっき昼寝をしてただけど、起きた時にはもうステッキは無くなってたの……………」

刹那

「成程……………それだったら、リップちゃんが昼寝をしてる間に誰かがステッキを持って行った可能性がありますね。」

リップ

「えっ！？でも、一体誰がそんな事を……………」

リップは刹那の推理に耳を疑いながら思わず絶句してしまふ。

木乃香

「リップちゃん、そないな事をする人に心当たりとかあらへん？」

リップ

「うーん、あたしの友達の妖精達や動物達がこんな事をするとは思えないし……………それに、そんな酷い事をする人なんてこの『ポップル

ス』には居ないと思うし……………」。

ガサツ！

刹那

「……………」ん？」

リップがステッキを盗んだ犯人について考えていると、刹那が微かに音を立てた草花の方へと素早く振り向く。

木乃香

「……………」せつちゃん、どないしたん？」

刹那

「いえ、向こうで何か動いたような気がしまして……………」。

ガサガサツ！！

全員

「！！！？」

次の瞬間、先程よりも草花が音を立てながら激しく動いて、その場

に居る三人は思わず肩をビクツとさせながら驚愕する。

木乃香

「な、何か動いとるよ……………」

リップ

「そ、そこに何か隠れてるのかな？」

刹那

「……………此処は私に任せて、お二人は下がって下さい。」

そう言うと、刹那は険しい表情を浮かべながら音がした草花の方にゆっくりと接近していく。

木乃香

（せつちゃん、気いつけてな……………）

木乃香は不安げな表情を浮かべながら刹那を心配そうに見守る。

刹那

「そこに隠れているのは分かっている！大人しく出て来い！！」

シ〜〜〜〜ン……

刹那が何物かが隠れていると思われる草花に向かって大声を上げるが、何の返事も返って来ない。

刹那

（返事は無しか……だが、この中に何物かが隠れているのは間違いないな……。）

そう思いながら、刹那は身動き一つせずに草花を見据えていると……。

ガサガサッ!!

刹那

「逃げてても無駄だ!!」

バッ!!

刹那が再び激しく動く草花の音と同時に、敵を捕らえるかのように素早く草花の中に片手を突っ込んでいく。

刹那

(……………よし！手応えあり！！)

ズボツ！！

刹那は何かを掴んだと確信すると、そのまま何かを掴んでいる片手を勢い良く引き抜く。

刹那

「さあ！捕まえた……………つて、コレは？」

木乃香

「わあ〜！メツチャ可愛ええ〜っ！！」

刹那は自分の手が掴んでいるのが花のような杖を口にくわえてる丸々として短い足の小さな白い兎だと理解すると一瞬だけ固まるが、逆に木乃香は目を輝かせながら兎を見つめる。

リップ

「あ〜っ！？フリフリがあたしのステッキをくわえてるう〜っ！！」

刹那



「え？フリフリ？」

木乃香

「それに、この兎ちゃんがリップちゃんのステッキを持つとるっちゆう事は……もしかして、この兎ちゃんが犯人なん？」

リップ

「そ、そんな訳ないよ！フリフリはこんな悪い事をする子じゃないもん！！」

リップはフリフリという兎をステッキを盗んだ犯人だと疑う木乃香と刹那に対して頬を膨らませながら怒り出してしまふ。

木乃香

「だ、だって……現にこうしてリップちゃんのステッキをくわえとるし……。」

リップ

「じゃあ、フリフリに直接聞いてみるよ……刹那お姉ちゃん！フリフリを離してあげて！」

刹那

「え？は、はい……。」

刹那はご立腹気味のリップの言われた通りに、フリフリの耳の付け根を掴んでいた手を離す。

リップ

「フリフリ、どうして貴方があたしのステッキを持ってたの？」

リップがフリフリに質問した直後、フリフリはリップの耳元で何かを語り掛けるように口をモゴモゴさせる。

リップ

「うんうん……それで？……そっかあ！そうだったんだあ！！」

しばらくすると、フリフリの話を全て聞いたと思われるリップは大いに納得する。

木乃香

「え？その兎ちゃんの言葉が分かるの？」

リップ

「勿論！だって、あたしとフリフリは大の仲良しだもん！」

リップは何故か胸を張りながら木乃香に自慢をする。

刹那

「……………そ、それより、その兎は何と言ったのですか？」

リップ

「あ！そうだった……フリフリの話によるとね、あたしが昼寝をしている間にステッキを持ち出して遊んでたんだって。」

木乃香

「うむうむ。」

リップ

「すぐに返そうと思ってたけど、刀を持ってる人が居たから怖くて返しそびれちゃったんだって。」

刹那

「か、刀を持った人って……………私の事でしょうか？」

刹那が思わず不安げに言うと、フリフリはまるで刹那の質問に答えるかのように頷く。

木乃香

「そか、せつちゃんの持ってた刀が凶器に見えたから怖くて出て

来れへんかったんやね。」

刹那

「そ、そうでしたか……知らなかったとはいえ、怖がらせてしまつて申し訳ありませんでした！」

そう言つと、刹那はフリフリに向かって謝罪しながら深々と頭を下げる。

リップ

「え？何？うんうん……。」

すると、再びフリフリがリップの耳元で口をモゴモゴさせる。

リップ

「安心して、フリフリは刹那お姉ちゃんの事を許してあげるって言つてるよ！」

木乃香

「そかそか、良かったなあ〜せつちゃん！」

刹那

「は、はい……」

刹那と木乃香はフリフリの通訳をしてくれたリップの言葉を聞いて安堵の表情を浮かべる。

リップ

「フリフリ、もう二度とあたしのステッキを勝手に持ち出しちゃ駄目だからね。」

リップは軽くフリフリを叱ると、フリフリは申し訳なさそうにステッキをリップに返す。

リップ

「わーい！これでやっと魔法が使えるよー」

木乃香

「フフツ、リップちゃん相当嬉しそうやなあ。」

刹那

「そうですね……って、あれ？ちょ、ちょっと待って下さい！？」

刹那は先程のリップの発言に疑問を感じて、慌ててリップに尋ねようとする。

リップ

「えっ？どうしたの？」

刹那

「さっき、『これで魔法が使える』と言いましたか？」

リップ

「うん、言ったよ。」

木乃香

「えっ！？リップちゃんって魔法が使えるん？」

リップ

「そっだよ……………あれ？言ってなかったっけ？」

木乃香

「う、うん……………今初めて聞いたわ……………」

刹那

（それに、魔法についてそんなにあっさりと答えていいのだろうか……………）

木乃香と刹那は魔法について明白あかひなまに答えたリップに対して苦笑いをしてしまう。

リップ

「あ！そうだ……………あたし、お姉ちゃん達にお礼がしたいんだけど……………」。

刹那

「お礼？」

リップ

「だって、こうしてステッキが見つかったのはお姉ちゃん達のお蔭だし……………それに、お姉ちゃん達があたしに声を掛けなかったら、あたしはただ泣いてただけだったかもしれないし……………だから、あたしは色んな感謝の意味を込めてお姉ちゃん達にお礼をしたいの」

木乃香

「リップちゃん……………」

木乃香と刹那はリップの思いやりの言葉に心を動かられてしまう。

刹那

「そのお気持ちは非常に嬉しいのですが、私達はやる事があるので……………」。

リップ

「やる事？」

木乃香

「実はな、ウチらは離れ離れになったクラスメート達を捜す為に色々な世界で旅をしてるんや。」

リップ

「そうだったんだ………あ！そうだ！！」

突然、リップが何かを思い付いたかのように大声を上げる。

木乃香

「き、急にどないしたん？」

リップ

「あたしね、いい事思い付いちゃったの。」

刹那

「何ですか？」



リップ

「あたしの魔法でね、お姉ちゃん達の友達を此処に呼び出してあげようと思ってるんだけど………どうかな？」

木乃香 & 刹那

「ええっ!？」

木乃香と刹那はリップの発言に思わず耳を疑った。

刹那

「そ、そんな事が可能なんですか？」

リップ

「うん、任せてよ!」

木乃香

「そ、そか……ほなら、リップちゃんの好意に甘えさせてもらおかな？」

刹那

「そうですね、本人もこう言ってお下さってますし………それでは、お願いします!」

そう言つと、刹那はリップに向かって軽く頭を下げる。

リップ

「だ、だからそんなに畏まらなくてもいいってば………ところで、お姉ちゃん達が捜してる友達の写真とかあるかな？顔が分からないと呼び出し難いから………」

木乃香

「ちよつと待つて、ネギ君に渡された3ーAのクラス名簿のコピーを渡すから………」

そう言つた直後、木乃香は懐から3ーAのクラス名簿のコピー用紙を取り出して、そのままリップに手渡す。

リップ

「え？こ、こんなに沢山………」

リップは木乃香から手渡されたクラス名簿のコピー用紙を見て、顔色を真っ青に染めていく。

木乃香

「………リップちゃん？顔色が悪くなつとる気がするけど大丈夫？」

刹那

「やはり、流石にクラス全員を呼び出すのは困難でしょうか？」

リップ

「そ、そんな事ないよ！あたしがお姉ちゃん達の友達を全員呼び出してあげるから」

リップは木乃香達に気付かれないようにワザと平然を装いながら自信満々な態度を取る。

リップ

（とは言ったものの………実を言うと、あたしの魔法はまだ完璧じゃないからあまり自信が無いんだよねえ………でも、やるからにはちゃんとやらないとね………よし！）

リップは自分の中で葛藤していると、まるで覚悟を決めたかのようにステッキを高く掲げる。

リップ

「リップルン・ポップルン・ミラクル・ルン………木乃香お姉ちゃん！と刹那お姉ちゃんの友達を此処に呼んで〜！」

ポオーーーーー！！！！

リップがステッキを振り回しながら呪文を唱えると、ステッキを振り翳した場所から爆発音と共に沢山の煙が上がる。

？

「……………ゲホッゲホッ！」

？

「ゴホッゴホッ……………い、一体何が起こったの？」

すると、煙の中から咳払いと共に二つの人影が浮かび上がる。

木乃香

「あっ！？煙の中に誰かおるえ！」

リップ

（やった！上手くいった！！）

刹那

（あれ？でも、今の声って……………。）

リップが心の中でガッツポーズを取って、刹那が先程の何物かの声に首を傾げた時……………。

？

「……あれ？何で木乃香と刹那さんが居るの？」

木乃香

「へ？もしかして……明日菜やの？」

刹那

「それと、宮崎さんも一緒ですね……。」

木乃香と刹那は煙が完全に晴れたので姿を確認しようとする。そこには明日菜とのどかの二人が立っていた。

明日菜

「可笑しいわねえ……私達、次の世界に行こうとしてたんだよね？」

のどか

「はい……でも、気が付いたら何故か此处に居たんですよ……。」

木乃香

（あ、あははは………よりによって呼び出したのが明日菜とのどか

かやなんてな……………。

刹那

（間が悪いというか何というか……………。）

そんな事を思いながら、木乃香と刹那は軽く頂垂うなだれてしまう。

リップ

「どうしたの？ やっとお友達に会えたのに嬉しくないの？」

木乃香

「え？ い、いや！ そんな事あらへんよ……………な？ せつちゃん。」

刹那

「は、はい！ 勿論ですよ！」

そう言って、木乃香と刹那はリップに向かって必死に作り笑いをする。

リップ

「そう！ それは良かったあ……………それじゃ、この調子でお友達をどんどん呼んじゃおう」

そう言っつて、リップは再びステッキを掲げようとするが……………。

リップ

「ふぁ……………ふぁ……………ふぁつくゅ〜ん!!」

突然、リップが鼻をムズムズさせて大きなくしゃみをする。

木乃香

「だ、大丈夫？大きなくしゃみやったけど……………」

リップ

「へ、平気平気……………ふぁつくよん!ふえつくゅん!!」

リップは大きな鼻水を垂らしながら平気だと答えるが、その後も何度も大きなくしゃみをする。

刹那

「……………ほ、本当に大丈夫ですか？」

リップ

「な、何か大丈夫じゃないみたい……………」

木乃香

「ひょっとして、風邪でも引いたんやない？」

リップ

「い、いや……………これは多分……………花粉症のせいだと思っ……………」。

木乃香 & 刹那

「か、花粉症!？」

木乃香と刹那は鼻声で途切れ途切れに説明するリップの言葉に思わず耳を疑った。

リップ

「そ、そう……………実はあたし……………重度の花粉症なの……………ふえっくしゅん!…」

木乃香

「……………せっちゃん、お花の妖精さんでも花粉症になるんやね……………。……………」

刹那

「そ、そのようですね……………」。



木乃香と刹那はリップに聞こえないように小声で話し合う。

リップ

「と、という訳だから……あたし、ママに花粉症を治すお薬を塗ってもらわなきゃいけないから……そろそろ帰ってもいいかな？」

木乃香

「え？あ〜！せやね……早ようお薬塗ってもらわんと花粉症が酷くなるかもしれへんし……。」

リップ

「あ、ありがとう……でも、ごめんね……お友達を二人しか呼び出せなくて……。」

刹那

「私達の事はいいですから、早く帰って安静にして下さい。」

リップ

「わ、分かった……それじゃ、また会おうねー!!」

そう言い残すと、リップはその場から急いで立ち去っていく。

木乃香

「……………せつちゃん、結局クラスメイト捜しは振り出しになってしまったな……………」

刹那

「そ、そうですね……………」

そう言いながら、木乃香と刹那はただ啞然とした表情を浮かべながらただ佇んでいた。

明日菜

「……………本屋ちゃん、結局私達って何だったの？」

のどか

「さ、さあ……………」

そんな中、明日菜とのどかも状況が全く理解出来ずに木乃香達と同じように佇んでいるしかなかった……………。

### 第百三話　花の妖精は花粉症！？（後書き）

結局、この世界には誰も居なかったのです……。。

という訳で、今回はSFC版ソフトのパズルゲーム『パネルでポン！』編でした！

因みに、主人公であるリップの性格や口調等は主に『キャプテンレインボー』から参考にしてます！

勿論、リップが花粉症という設定も『キャプテンレインボー』から参考にしました。

それから、リクエストはまだ募集中だったりします！（苦笑）

それでは、次回もお楽しみに！

第百四話 風船で空を飛べー (前書き)

31Aの生徒達を捜す為に各チームに分かれてゲームの世界を旅するネギ一行だが……。

第一百四話 風船で空を飛べー！

くペンシルバニアく

ネギとカモはとても小さな町へとやって来た。

カモ

「兄貴、こんな小さな町だったら探すのも簡単じゃねえか？」

ネギ

「そつだね……………ん？」

ネギがふと空の方を見上げると、何かを発見して思わず声を出してしまつた。

カモ

「どつした？」

ネギ

「いや、あれは何だろうと思って……………」

カモ

「どれどれ……………」

ネギはカモが目を凝らしながら見てみると、上空で頭に赤いリボンをつけてジャンパースカートのような赤いスカートを着た茶髪の小さな少女が大きな二つの風船に掴んで浮かび上がっていた。

ネギ

「カ、カモ君！お、女の子が風船だけで空を飛んでるよ！？」

カモ

「や、やっぱり兄貴もそう見えるよな……………だが、何で人間の子供が風船で飛んでんだ？」

ネギ

「さ、さあ……………あつ！アレは！？」

次にネギが見たのは、先程の風船で飛んでいる少女が突然接近してきた<sup>カラス</sup>鳥達に周りを囲まれている光景だった。

カモ

「お、おいおい！あれじゃあの鳥共に風船を割られて地面に落下しちまうぜ！？」

ネギ

「大変！早く助けなきゃ……………杖よ！！」

ビビューーーーーッ！！

ネギが杖を取り出した瞬間、素早く杖に跨がって物凄いスピードで少女の方へと飛び出していく。

ネギ

「こらあゝ！あっちに行けえゝゝ！！」

烏

「カアッ！？」

突然接近してきたネギに驚いた烏達はその場から慌てて逃げ出していく。

カモ

「へへっ、あつという間に逃げ出しちまったぜ。」

ネギ

「ふうゝ、風船が割られなくて良かった……………。」

？  
「あ、あのぉ……………」

ネギ

「……………」

少女が恐る恐るネギに声を掛けると、ネギは少女の方へと振り向く。

？

「た、助けてくれてありがとうございます……………」

ネギ

「い、いやぁ〜！それ程でも……………」

ネギは少女にお礼を言われて思わず軽く頭を掻きながら照れてしま  
う。

？

「そ、それと……………」お兄さんはどうしてその棒だけで空を飛んでる  
の？

ネギ

「え？あーいや、これはその……………」



ネギは少女の質問にどう答えたらいいのか分からずに困惑してしま  
う。

？

「もしかして、お兄さんは……魔法使いなの？」

ネギ

「！？」

少女の見事（？）な指摘にネギは完全に言葉を失ってしまふ。

カモ

（……………兄貴、これ以上隠し通すのは無理みてえだぜ。）

ネギ

（そ、そうだね……………。）

ネギとカモが少女に聞こえないように話すと、ネギは意を決してゆ  
っくりと口を開いていく。

ネギ

「えっと、取り合えず場所を変えてから話すよ……………僕に付いて来て。」

？

「う、うん。」

こうして、ネギは少女を連れてその場から飛び立って行くのであった……………。

く とある小さな森く

ネギと少女は町から少し離れた森に着陸して、ネギは少女に自分は魔法使いとか3ーAの生徒達を捜している事を出来るだけ簡単に説明した。

？

「……………そうだったの、友達を捜す為に色々な場所に行ってるのね。」

く

ネギ

「そ、そう………それから、魔法についてはパパやママや友達には内緒にしようってね？」

？

「うん、約束する！」

少女はネギのお願いに対して笑顔で答える。

ネギ

「ところで、君の名前は？」

？

「あ！そうだった………私の名前はアリス、さっきの町で家族四人で暮らしているの。」

ネギ

「アリスちゃんだね………僕はネギ、宜しく。」

アリス

「こ、こちらこそ宜しく！」

アリスと名乗る少女とネギはお互いに自己紹介を終えると、ほぼ同時に行儀良くお辞儀をする。

ネギ

「それより、さっき風船で空を飛んでみたけど……どうしてあんな危ない真似をしたの？」

アリス

「じ、実は……弟のジムを捜してたの。」

ネギ

「え？弟？」

ネギはアリスの説明を聞いて耳を傾ける。

アリス

「私とジムは風船で遊ぶのが大好きで、いつも沢山の風船を空に放って遊んでるの……今日もジムは風船を空にいっぱい放って遊んでたんだけど、私がちょっと目を離れた隙に何処かへ行っちゃったみたいなの。」

ネギ

「成程……それで、アリスちゃんも風船で飛びながら弟のジム君

を捜してたんだね。」

アリス

「うん……でも、途中でジムの風船を見失っちゃって……。」

ネギ

「風船って？」

アリス

「さっきジムが沢山の風船を空に放って遊んでたって言ったでしょ？ ジムはその風船を道標みちしるべのようにして私に居場所を教えてくれるの。」

ネギ

「へえ、ジム君って賢いんだね。」

ネギはアリスの説明を聞いてると、思わずジムに対して感心してしまふ。

ネギ

「とにかく、そのジム君が残してくれた風船を捜してみよう！」

アリス

「え？もしかして、ネギ兄さんもジムを捜すのを手伝ってくれるの？」

ネギ

「勿論！此処まで話を聞いておいて見過ごすなんて僕には出来ない……僕も一緒にジム君を捜すのを手伝うよ！」

アリス

「ネ、ネギ兄さん……。」

アリスはネギの言葉を聞いて、嬉しさのあまり涙目になってしまふ。

カモ

（あゝあ、俺っち達も人捜しをしてんのに人様の手伝いをするなんてなあ……。）

ネギ

（いいじゃない、困ってる人はほっとけないよ……。）

ネギとカモはアリスに聞こえないように小声で話し合う。

アリス

「……ねえ、さっきから誰と話してるの？」

ネギ

「い、いや別に……………それじゃ、早速僕の杖に乗って出発しよう！」

そう言うと、ネギは杖に跨がってアリスも自分の後ろ側に跨がるように手招きをする。

アリス

「わ、私も一緒に乗ってもいいの？」

ネギ

「うん、その方が安全だしね……………さあ、早く僕の後ろに乗って。」

アリス

「う、うん……………」

アリスは頬を少し紅く染めて何故か照れ隠ししながらネギの杖に跨がる。

カモ

（おーこの反応はもしか……………。）

カモはアリスのネギに対する態度を見て何かを悟る。

ネギ

「それじゃ、しっかり掴まっててね……………それっ!!」

ビビューーーーーッ!!

アリス

「ひゃっ!?!」

杖が一気に上昇した時、驚いたアリスが思わずネギの背中を抱き締めるように強く掴む。

ネギ

「大丈夫?怖くない?」

アリス

「だ、大丈夫……………」

アリスは掴んでいた手を離して、ネギの背中から少しだけ離れながら答える。



カモ

（はっはっ、やっぱりあの嬢ちゃんは兄貴に惚れちまったなあ……まあ、年上に憧れるってのはよくある事だな。）

そんな事を思いながら、カモは怪しい笑みを浮かべながらアリスを見つめる。

ネギ

「じゃあ、改めて出発進行！」

そう言うと、ネギとアリスを乗せた杖はそのまま直線へと進んでいく。

ネギ

「………ところでアリスちゃん、ジム君が残した風船は何処で見失ったの？」

アリス

「え、えっと……確か、さっきネギさんが私を助けてくれた辺りだったと思う……。」

ネギ

「と言う事は、僕が最初に訪れた町の方が……よし、まずはそこに行ってみよう！」

こうして、二人を乗せた杖は『ペンシルバニア』に向かって飛び立って行くのであった……………。

↓ペンシルバニア上空↓

数分後、ネギ達は鳥達からアリスを救出した『ペンシルバニア』の上空へとやって来た。

ネギ

「え〜っと……………確か、この辺りだと思ったんだけど……………」

アリス

「あ！？あそこ見て！」

ネギはアリスが指差す先を見ると、そこには一つの小さな赤い風船が浮かび上がっていた。

ネギ

「アレがジム君が残してくれた風船か……もう少し近付いてみよう！」

そう言うと、ネギ達は風船が浮かび上がっている方へと近付いていく。

アリス

「此処にジムの風船があるって事は……この近くにまだジムの風船があるかもしれないわ。」

ネギ

「そうだね、この辺りをもっとじっくりと探してみよう……。」

ネギとアリスは辺りを見回しながら懸命に風船を探していると……

カモ

（あー！兄貴、あそこに風船がいっぱい浮かんでるぜ！）

ネギ

（えー！？どれどれ……あー！本当だー！）

ネギはカモが指差す先を見てみると、赤い風船がまるでネギ達を案内するかのようにつつ浮かび上がっていた。

アリス

「ジムの風船があんなにいっぱい……………」

ネギ

「よし、あの風船の先に行ってみよう！」

そう言うと、ネギ達を乗せた杖はジムの風船を次々と追い抜きながら飛び立っていく。

カモ

（それにしても、よくこんなに沢山の風船を集められたもんだなあ……………）

そう思いながら、カモは次々と追い抜いていく風船を見つめながら軽く溜め息を付く。

ネギ

「……………ん？向こうから何か見えてくるけど……………もうちょっと近づいてみよう。」

そう言っつて、ネギ達を乗せた杖が少し加速させながら進んでいくと……。

アリス

「あっ！？アレは……………」

しばらく進んでいると、二つを大きな風船の吊るしてる紐を掴んで空を飛んでいる緑色の帽子を被ってオーバーオールのような青っぽい服を着た小さな少年の姿を見てアリスが思わず目を疑った。

ネギ

「アリスちゃん、ひょっとしてあの子が……………」

アリス

「うん、間違いなくジムだわ……………ジムー！こっち向いてー！！」

ジム

「……………ん？」

アリスが風船に掴まってる少年が弟のジムだと確信して大声で呼び掛けると、ジムはゆっくりとネギ達の方へと振り向く。

ジム

「あ！お姉ちゃんだ……………おい！アリスお姉ちゃん！！」

ジムはアリスの姿を見た途端に足をバタバタさせながら喜び始める。

ネギ

「あわわ！あんなに暴れたら落っこっちゃう……………」。

アリス

「ジ、ジム！今からそっちに行くから、そこでジッとしてなさい！」

ジム

「は〜い！」

ネギとアリスはいつジムが落下するか分からない状況に慌てふためくが、ジムはアリスの言い付けを笑顔で返事をする。

ネギ

「それじゃ、早速ジム君を救出しよう……………」。

そう言って、ネギはジムの方へとゆっくり近付こうとするが……………。

？

「カァー……ッ!!」

全員

「!?!」

その場に居る全員が鳥の鳴き声に反応して振り向いてみると、遠くから鳥の大群がどんどん接近して来ていた。

ネギ

「か、鳥!?!」

カモ

「兄貴!きつと前に兄貴が追い払った鳥共だぜ!」

アリス

「い、<sup>イタチ</sup>鼬が喋った!?!」

ネギとカモは鳥の大群に驚愕するが、アリスはカモが人の言葉を喋り出した事に驚愕してしまう。

鳥達

「カアーーーーッ!!!」

そんな中、烏達は早くもネギ達に近付いて襲い掛かって来る。

ネギ

「い、痛たたたた!!!」

カモ

「お、おいコラ!俺っちの尻尾を気安く突くんじゃねえ!!!」

アリス

「い、嫌あゝ!髪が乱れちゃうよあゝ!!!」

ネギ達は烏達に何回もしつこく突かれて悪戦苦闘してしまつ。

ジム

「お、お姉ちゃん!助けてえゝゝ!!!」

アリス

「ジ、ジム!?!」

アリスがジムの声に反応して見てみると、ジムの風船が二羽の鳥に



突かれそうになっていた。

アリス

「大変！このままじゃジムが落ちちゃう……。」

ネギ

「な、何とかしなきゃ……でも、これじゃ近付けない……。」

ネギはジムの方へ手を伸ばそうとするが、烏達に前方を塞がれてしまふ。

カモ

「兄貴！俺っちに良い考えがあるぜ！」

ネギ

「ほ、本当に！？でも、どうするの？」

カモ

「こっつするんでいー！」

そう言つと、カモは自らの長い尻尾でネギの鼻を擦り始める。

ネギ

「ふがつ!? な、何を……………ふぁ……………ふぁ……………ふぁつくしゅーん  
!」

ブワァー……………ツ!!

鳥達

「カカァ……………ツ!?」

ネギが大きなくしゃみをした途端、強風が発生して前方を塞いでいた鳥達を一羽残らず吹っ飛ばしていく。

アリス

「す、凄い……………意地悪な鳥さん達を全員吹っ飛ばしちゃった……………  
…。」

アリスは先程の出来事にただ啞然としていた。

カモ

「どうでい? 上手くいったらろ?」

ネギ

「う、うん……………」

そう言いながら、ネギが未だにムズムズする鼻を指一本で摩っていると……………。

パァー————ン！！

全員

「!?!」

その場に居る全員が何かが破裂した音に反応して音がした方を向いてみると、先程ネギが吹っ飛ばした鳥の嘴くちばしが運悪くジムの風船に命中して破裂していた。

ジム

「うわぁ——————っ!!」

アリス

「ジ、ジムウ——————ッ!!」

ジムはそのまま勢い良く落下してしまい、アリスの叫び声に似た呼び掛けが辺りに響き渡る。

ネギ

「た、大変だ！急いで降下しないと……。」

そう言って、ネギ達を乗せた杖はそのまま勢い良く降下していく。

くペンシルバニアく

アリス

「ジムー！何処に居るのジムー！！！」

ネギ

「ジムくーん！！！」

『ペンシルバニア』に着陸したネギとアリスは、一生懸命にジムを捜し回っていた。

カモ

「可笑しいなあ、確か此処ら辺に落下したハズなんだけどなあ……」

アリス

「どうしよう……ジムにもしもの事があつたら……私……。」

そう言うと、アリスは目に涙をいっぱい溜めて今にも泣き出しそうに段々と顔を歪めていく。

ネギ

「だ、大丈夫！きっとジム君は無事だよ……。」

ネギが泣き出しそうになるアリスを必死に宥めようとした時……。

？

「あら、ネギ先生ではありませんか？」

ネギ

「え？今の声は……。」

ネギが聞き慣れた声に反応して声が出た方へ振り向いてみると、そこには気持ち良く居眠りをしてるジムを抱っこしている明日菜達と同じ麻帆良学園の制服を着て、赤っぱい色のロングヘアに左目

の下に泣き黒子ほくろがあるグラマーで少々大人びた少女・那波千鶴が笑顔  
顔を浮かべながら立っていた。

ネギ

「ち、千鶴さんじゃないですか!?!」

アリス

「あっ!?!ジム!?!」

ネギは千鶴の姿を見て驚愕すると、アリスはジムの姿を見るなり千鶴の方へと駆け寄っていく。

千鶴

「あら?貴女はもしかしてこの子のお姉さんかしら?」

アリス

「は、はい!……でも、どうしてジムを?」

千鶴

「ふうん、この子はジム君って名前なのね………実はね、さっきこの子がいきなり空の上から落ちて来たからビックリしてたところなのよ。」

カモ

(……………って、とてもビックリしてる様には見えねえがな……………。)

カモは笑顔のまま冷静な態度で淡々と説明する千鶴を見て啞然とする。

ネギ

「でも、よくジム君を上手くキャッチ出来ましたね……………」

千鶴

「はい、この子が上手い具合に私の胸に落ちて来たので何とか助かったみたいなんです。」

カモ

(成程、その大きな乳がクッション代わりになっただって訳か……………。)

カモは少し嫌らしい目付きをしながら千鶴の豊満な胸を見つめる。

アリス

「あの、ジムは……………ジムは大丈夫なんですか？」

千鶴

「ええ、心配しなくても大丈夫よ……ぐっすり眠ってるだけだから。」

アリス

「よ、良かったあ。」

アリスは千鶴の言葉を聞いて心の底から安心する。

千鶴

「ところでネギ先生、此処は一体何処なのでしょう……確か、私は夏美や小太郎と一緒に寮の中に居たと思ったのですが、気が付いたらこの町で倒れて……。」

ネギ

「はい、その事についてですが……。」

ネギは千鶴にこれまでの経緯（亜空間やゲーム世界の存在は除く）を出来るだけ簡単に説明した。

千鶴

「そうでしたか……では、ネギ先生と神楽坂さん達は私みたいに何処かで迷子になってしまった小太郎や夏美達を捜す為に色々な場所を捜し回っているのですね？」



ネギ

「はい、僕達は必ずクラス全員を見付け出すまで決して諦めません！」

千鶴

「ネギ先生……………」

千鶴はネギの強い決意の言葉を聞いて微笑む。

千鶴

（何だか、あやかがネギ先生にぞっこんになった気持ち少し分かった気がするわ……………」

ネギ

「ち、千鶴さん？僕の顔に何か付いてますか？」

千鶴

「いいえ、ただ……………」

ネギ

「ただ？」

千鶴

「……やっぱり、何でもありません」

ネギ

「？」

ネギは千鶴の言葉に疑問を感じながら首を傾げる。

ネギ

「ところで、千鶴さんはこの町で暮らしてるんですか？」

千鶴

「はい、この町の小さな保育園で住み込みでアルバイトをしています。」

「

ネギ

「へえ、まさに千鶴さんにピッタリじゃないですか！」

千鶴

「そうですね、麻帆良でも保母のボランティアをしてましたし……

……。」「

ジム

「う、うん……。」

しばらくすると、ジムが眠い目を擦りながら千鶴の胸の中でゆっくりと目を覚ます。

アリス

「あ！ジムが起きた。」

千鶴

「あらあら、目が覚めちゃったみたいね……。」

ジム

「……あれ？此処は？」

ジムはまだ寝惚<sup>ねぼ</sup>け眼<sup>まなこ</sup>のまま周りを見回す。

アリス

「ジム！アリスお姉ちゃんは此処よ！」

ジム

「ふえ？……あつ！お姉ちゃん！！」

アリスの声に反応したジムは、千鶴の胸から勢い良く飛び出してアリスに抱き着いていく。

千鶴

「あらあら、ジム君は相当お姉ちゃんが大好きなのね。」

ネギ

「アリスちゃん、ジム君に会えて良かったね。」

アリス

「うん！これもネギ兄さんのお蔭だよ……………本当にありがとう！」

そう言って、アリスはネギに向かって深々とお辞儀をする。

ネギ

「い、いやぁ……………別にお礼なんて……………」

アリス

「それから、千鶴おばさんもありがとう！」

ネギ&カモ

「!!!?」

千鶴

「…………おば…………さん？」

ネギとカモはアリスの言葉に顔色を真つ青に染めて、逆に千鶴は背後から強烈な黒いオーラを放出させながら満面の笑みを浮かべる。

アリス

「え？な、何…………。」

アリスはこのただならぬ状況に困惑してしまう。

ネギ

（コ、コレはマズイ…………。）

カモ

（お、俺っちは知らねえぞ…………。）

千鶴

「…………アリスちゃん、私はまだ十六歳の中学生なのよ？」

そう言いながら、千鶴は黒いオーラを放出させたまま笑顔でゆっくりとアリスに迫っていく。

アリス

「そ、そうだったんですか……………」  
「ごめんなさい……………」

ジム

「お、お姉ちゃん……………このおばちゃん、何だか怖いよお……………」

千鶴

「……………おば……………ちゃん？」

ネギ

(ま、また言ったあ……………つ！?)

カモ

(……………ご愁傷様。)

ネギとカモはジムの言葉を聞いて更に顔色を真っ青に染めて、千鶴は更に黒いオーラと笑顔を濃くしながらジムとアリスにどンドン迫っていく。

千鶴

「……………うふふふ どうやら貴方達には少し礼儀というのを教えた方がいいわね……………」

アリス

「そ、そんな……………」

ジム

「た、助け…………て…………へっ…………へっ…………へっくち！」

突然、ジムが小さくしゃみをしてしまう。

千鶴

「…………あら、風邪を引いたの？だったら、いい物があるのよ……………」

そう言うと、千鶴は何処からともなく葱ネギを取り出す。

千鶴

「風邪の時はお尻に葱を刺すと良くなるらしいわよ……………どお？試してみる？」

アリス&ジム

「ひい…………っ！？」





## 第一百四話 風船で空を飛べー！ (後書き)

こうして、ネギは千鶴を発見したのであった……。

という訳で、今回は『バルーンファイト』編なのですが……舞台はFC版ではなくて、GB版ソフト『バルーンファイトGB』でした！

何故かと言いますと、FC版では特にストーリーが無いし主人公に正式な名前が無いからです。

……とまあ、こんな感じで『バルーンファイトGB』をモチーフにしました(汗)。

因みに、今回は千鶴が見つかりましたが……リクエストはまだまだ募集中です！

第百五話 ちよつとした鬼退治？（前書き）

31Aのクラスメートを捜し出す為にネギー一行はそれぞれのチームに分かれて探索するのであった……………。

第一百五話「ちょっとした鬼退治？」

「長串村」

明日菜とのどかは山奥にある小さな村へとやって来ていた。

明日菜

「……………何だか、随分小さな村に来ちゃったわね。」

のどか

「そうですね……………それに、まるで昔話とかに出て来そうな村ですね。」

明日菜

「うーん、そう言われてみれば見えなくもないわね……………でも、何で村の人が一人も居ないのかしら？」

そう言いながら明日菜とのどかが周りを見回してみると、村には人っ子一人誰も居ない状態だった。

のどか

「この村で何かあったのでしょうか？」

明日菜

「ま、まさか……………」

のどかの言葉に明日菜が不安げな表情を浮かべると……………。

ガタッ！！

明日菜&のどか

「!?!」

突然、一軒の家から大きな物音が鳴って明日菜とのどかは思わずビクついてしまう。

のどか

「い、今の音は……………」

明日菜

「き、きつと村の人が家の中に残ってたのよ……………すみませ〜ん！  
ちよっといいですか〜?」

そう言っつて、明日菜が家の方へと近付こうとした時……………。

ガッシャーーーーーン！！

？

「ウォーーーーッ！！」

突然、家の中から髪が長くて頭に二本の角が伸びている公家くげのような服を纏った二匹の鬼が勢い良く出て来る。

のどか

「き、きやあっ！？」

明日菜

「な、何なのコイツらは！？」

明日菜とのどかは突然現れた鬼に後退りしながら驚いてしまっ。

鬼A

「グワァーーーーッ！！」

すると、一匹の鬼が明日菜に襲い掛かって来る。

のどか

「あ、明日菜さん！危ない！！」

明日菜

「アデアット！！」

パァー………ッ！！

それと同時に、明日菜が素早く『ハマノツルギ』を呼び出す。

明日菜

「とりゃ………っ！！」

パッシー………ン！！

鬼A

「ゲエツ！！」

次の瞬間、明日菜が『ハマノツルギ』で襲い掛かって来た鬼を吹き飛ばしていく。

鬼B

「ウググ……………」

もう一匹の鬼が無表情のまま微かに唸り声を上げると、その場から慌てて逃げ出してしまふ。

鬼A

「グギギギ……………」

明日菜に張り倒された鬼（A）も片手で頭を押さえながらゆっくりと起き上がると、先程逃げ出して行った鬼（B）を追い掛けるように慌てて逃げ出していく。

明日菜

「あっ！？コラー！ツ！待ちなさー！ーい！！！」

明日菜は慌てて逃げ出した鬼達を追い掛けようとするが……………。

？

「待って！！！」

明日菜

「えっ！？！」

明日菜は突然誰かに呼び止められて、その場で立ち止まってしまっ

のどか

「だ、誰ですか？」

のどかが声の主に向かって恐る恐る尋ねると、鬼達が出て来た家とは別の一軒の家の中から前髪で目元が全く見えない青っぽい色でモジャモジャの髪に水色っぽくて少し古臭い服を着た背の低い少年と長い黒髪を後ろに束ねている巫女のような服装をした少年より少し背の高い少女が出て来る。

明日菜

（こ、子供？）

明日菜は少年の少女の姿を見て思わず目を疑ってしまっ

？

「鬼、やっつけちゃ駄目！」

のどか

「え？やっつけちゃ駄目って……。」



明日菜

「ちよつと、それってどづいづ事？」

明日菜とのどかは少年の発言に疑問を持って耳を傾けながら尋ねる。

？

「じ、実は……………あの鬼は私達のお祖父さんとお祖母さんなんです。

」

明日菜&のどか

「ええっ!？」

更に明日菜とのどかは少女の発言に再び耳を疑ってしまふ。

明日菜

「さ、さっきの鬼達が……………アンタ達のお祖父さんとお祖母さんですって？」

のどか

「も、もし良かったら私達に詳しく説明してくれるかな？」

？

「は、はい……………少し長い話になるかもしれませんが……………。」

そう言い掛けると、少女はゆっくりと口を開いて語り始める。

？

「最近、都の方に童が現れて人を鬼にして悪さをしてるんです……その鬼達も町や村を壊したり、人の魂を吸い取って鬼にしているんです。」

明日菜

「成程、そのさっきの鬼達が魂を吸い取られて鬼になってしまったアンタ達のお祖父さんとお祖母さんって訳ね……。」

？

「そっだ！」

明日菜が少女の説明に納得しながら呟くと、少年が元気良く相槌をする。

のどか

「それじゃ、この村の人達も……。」

？

「はい、恐らく一人残らず魂を吸い取られて鬼に……。」

？

「長串村、もう誰も居ない……………居るのは俺とひかりの二人だけ…  
…。」

そう言うと、少年とひかりと呼ばれた少女は下へ俯きながら落ち込んでしまう。

のどか

「何だか、可哀相ですね……………」

明日菜

「そうね……………ねえ、鬼にされた人達を元に戻す方法とかは無いの？」

ひかり

「えっと、金太郎さんの話によると……………『屏風岩』の砦に居る鬼達が持つてる銅鐸どうたくを手に入れば良いと言ってたような……………」

明日菜

「銅鐸？銅鐸って確か……………弥生時代とかに作られた鐘みたいな形したやつだっけ？」

のどか

「はい、そうです。」

明日菜

（ホッ、間違っなくて良かった……………。）

明日菜はのどかの言葉を聞いて、自らの発言が間違っていないと確信して一安心する。

ひかり

「それで、私達は今から『屏風岩』にある鬼達の砦に行つて銅鐸を取りに行くんです。」

のどか

「え！？た、たった二人だけで行くの？」

明日菜

「そんなの無茶よ！それに、道具とかも無いのにどうやってその砦に忍び込む気なの！？」

ひかり

「そ、それは……………」

ひかりは明日菜の言葉に何も言えなくなってしまうが……。

？

「それでも！俺……………お祖父ちゃんとお祖母ちゃんを助けに行く！」

ひかり

「どんべ……………」

ひかりを含む全員がどんべと呼ばれた名前の少年の強い言葉に心を打たれてしまう。

明日菜

「……………よし！分かった！及ばずながら私達も協力してあげるわ！」

のどか

「え？……………ええっ！？」

のどかは明日菜のまさかの発言に思わず耳を疑った。

ひかり

「ほ、本当ですか！？」

明日菜

「ええ！こう見えても私達って結構強いよ〜！」

のどか

「あ、明日菜さん……………そんな簡単に安請け合やすけあいをして……………」。

どんべ

「わ〜い！仲間が増えた〜！！！」

のどかの言葉はどんべの歡喜が混じった大声によって完全に掻き消されてしまう。

のどか

（い、いいんですか？クラスの皆さんを捜さなきゃいけないのに…）

明日菜

（大丈夫よ！何だか岩にある砦に忍び込んで銅鐸を手に入れられるだけだし……………それに、この子達だけじゃ不安だから力を貸してあげましょうよ？）

のどか

（は、はい……………」。

明日菜とのどかはどんべとひかりに聞こえないように小声で話し合  
うと、のどかは渋々納得する。

ひかり

「……………あの、どうかしました？」

明日菜

「な、何でもないわよ！……………それより、まだ自己紹介してなかつ  
たわよね？私は神楽坂明日菜、明日菜でいいわ。」

のどか

「私は宮崎のどか、のどかで結構です。」

どんべ

「俺、どんべ！」

ひかり

「私の名はひかりです、どうぞ宜しくお願いします。」

明日菜とのどかが自己紹介をすると、どんべは元気良く自己紹介を  
してひかりは丁寧にお辞儀をしながら自己紹介をする。

明日菜

「さて、お互い自己紹介を終えた事だし……そろそろ出発しましよー！」

どんべ

「おー！出発進行ー！」

そう言つと、明日菜とどんべは元気良く一足先に駆け出していく。

ひかり

「あ！？どんべ！勝手に引っっちゃ駄目よー！」

のどか

「明日菜さんも待って下さいー！」

その後から、のどかとひかりも慌てて駆け出していくのであった……。



く屏風岩・鬼の砦前く

数時間後、明日菜達は砦で建てられた砦に通じている長い吊り橋の前までやって来た。

明日菜

「ふう、やっと着いたわね……………」。

のどか

「……………アレが鬼達が居る砦のようですね。」

どんぐ

「よし！突入だあ〜！！」

そう言って、どんぐは駆け足で吊り橋を渡るようにするが……………。

ひかり

「ちょっと待ちなさい！」

ガシッ！！

どんべ

「むぐっ!?!」

突然、ひかりがどんべの服の後ろ側の衿えりを掴んで制止させる。

どんべ

「ひ、ひかり……………苦しい……………と言っか、何で止める……………?」

ひかり

「いきなり砦の中に突入して、もし鬼達に見付かったらどうするの?」

のどか

「確かに、見付かったら厄介ですね……………。」

明日菜

「うっん……………あ! そうだわ!」

突然、腕を組んで考え込んでいた明日菜が何かを思い付いたかのよう  
うに大声を上げる。

のどか

「き、急にどうしたんですか？」

明日菜

「どうしたもこうしたもないわよ……私ね、良い事を思い付いちやったのよ！」

ひかり

「本当ですか？」

どんぐ

「早く教えて！」

明日菜

「まあまあ、そんなに焦りなさんな……みんな、ちょっと耳を貸して？」

明日菜がそう言うと、のどか達は明日菜の方へと耳を傾ける。

明日菜

「私が砦の中に居る鬼達を外の方へ誘き出しおびしてる隙に本屋ちゃん達が砦に忍び込んで銅鐸を手に入れるのよ。」

のどか&ひかり

「ええっ!？」

のどかとひかりは明日菜の発言を聞いて思わず耳を疑ってしまつ。

のどか

「そ、それじゃ……………明日菜さんが自ら<sup>おとこ</sup>困こまになるって事ですよね？」

ひかり

「それは幾ら何でも危険ですよ!」

どんべ

「そつだそつだ!」

明日菜

「大丈夫だつて!さっきも言ったけど、こつ見えても私は強いよ……………それに、鬼の扱いには少し慣れてるしね」

(詳しくは『ネギま!』の第六巻を参照)

のどか

「で、でも……………」

明日菜

「とにかく、私が今から砦の方へ行つて鬼達を遠くまで誘き寄せから、本屋ちゃん達はその隙に上手く忍び込んでね!」

そう言い残すと、明日菜は砦に通じる吊り橋を駆け足で渡っていく。

のどか

「い、行っちゃった……。」

ひかり

「明日菜さん、一人だけで大丈夫かしら?」

どんべ

「俺、ちょっと心配……。」

そう言いながら、のどか達が不安げな表情を浮かべていると……。

ひかり

「……あら?何かが近付いて来る……。」

どんべ

「あ!明日菜だ!……!」



明日菜

「鬼さ〜んこちら〜 手の鳴る方へ〜」

明日菜が挑発的に手を鳴らしながら何処かへ逃げ出すと、鬼達が明日菜を捕まえようと必死に追い掛けていく。

ひかり

「……………ほ、本当に大丈夫なんでしょうか？」

のどか

「ええ、明日菜さんは本当に強いから大丈夫だと思うけど……………」

どんづ

「よ〜し、今のうちに皆に忍び込むぞ〜！」

そう言いつと、のどか達三人は皆の方へと続く吊り橋を渡っていく。

く鬼の砦・奥部く

数分後、のどか達三人は一つの大きな銅鐸が無造作むぞうじやうに置かれてる砦の奥まで忍び込んでいた。

どんべ

(あ！銅鐸あった。)

ひかり

(あの銅鐸を手に入ればお祖父さんとお祖母さんを助けられるのね……………。)

のどか

(でも、あの見張りの鬼さんを何とかしないと……………。)

そう思いながら、のどかは銅鐸の前で佇んでいる一匹の鬼を物陰で隠れながら見つめる。

ひかり

(折角目の前に銅鐸があるのに手が出せないなんて……………)。

どんべ



(……俺、鬼と闘う！)

のどか

(え！？ちよ、ちよっと待って……。)

のどかの制止も虚しく、どんべは物陰から勢い良く飛び出す。

どんべ

「うおーーーーっ！！！」

鬼

「！？」

ガバツ！！

次の瞬間、どんべは鬼に向かって高くジャンプをして鬼の顔に思いっ切りしがみつく。

どんべ

「このこのこのお~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ！！！」

ポカポカツ！！

どんべは必死にしがみつながら鬼の頭をポカスカと叩きまくる。

鬼

「ウガア~~~~ツ!!」

すると、堪らず鬼はどんべを振り落とそうと左右に激しく頭を振り始める。

ひかり

(た、大変!このままじゃどんべか振り落されちゃう……………。)

のどか

(ど、ど、ど……………。)

のどかとひかりはこの危機的状況にただ困惑するしかなかった。

ガシッ!!

どんべ

「は、離せえ~~~~!!」

どんべは鬼に背中を掴まれて激しく暴れまくる。

ひかり

「ど、どんべ！………今助けに行くわー！」

のどか

「ひ、ひかりちゃん！」

次の瞬間、ひかりとのどかは慌てて鬼の方へと駆け出していく。

ひかり

「今すぐどんべを離してえ~~~~~！」

のどか

「は、離して下ろさあ~~~~~い~~~~~！」

ドォ~~~~~ッ………

鬼

「ガッ!?」

そう叫ぶように言いつと、ひかりとのどかが鬼に向かって勢い良く体当たりを繰り出す。

ゴツンッ!!

鬼

「ゲガツ!?!」

すると、鬼は堪らず頭から後ろの方へと勢い良く転んでしまい、そのまま気を失ってしまふ。

のどか

「ハアハアツ……………や、やっつけちゃった……………」

ひかり

「どんべ!大丈夫!?!」

どんべ

「う、うん……………俺、平気……………」

鬼の手から何とか逃れて地面に落下したどんべは片手で頭を押さえながらひかりに無事だと告げる。

のどか

「コレがその銅鐸……………近くで見ると結構大きいのね……………」

ひかり

「とにかく、急いで銅鐸を運び出しましょう。」

どんづ

「そつしつめつしつ」

そう言つと、のどか達は三人掛かりで銅鐸を持ち上げて運び出していく。

く鬼の砦・外部く

どんぐ

「よいしょ、よいしょっと……。」

更に数分後、のどか達三人は銅鐸を運びながら吊り橋を渡っていた。

のどか

「も、もう少しで吊り橋を渡り終えるから頑張っ……。」

ひかり

「は、はい……。」

のどか達三人はお互いを励まし合いながらどんどん吊り橋を渡っていくと……。

明日菜

「おい！みんな〜！！」

吊り橋の向こう側から明日菜が駆け足で近付いて来る。

のどか

「あ、明日菜さん！」

ひかり

「鬼達はどうしたんですか？」

明日菜

「大丈夫、上手く逃げ切ったからね……それより、それがその銅

鐸なの？  
「

どんべ

「そうだ。  
「

明日菜

「ふうん、結構大きいのね……それじゃ、私が代わりに運んであげる。」

そう言つと、明日菜は片手だけで銅鐸を持ち上げてしまつ。

ひかり

（か、片手だけで？）

どんべ

「わあゝ、明日菜凄い！」

ひかりは明日菜の怪力に啞然とするが、逆にどんべは大喜びしながら絶賛をする。

明日菜

「さあ、早く吊り橋を渡りましょ！」



のどか

「そ、そうですね……………」。

そう言って、明日菜達は吊り橋を渡るうとするが……………。

ズボツ！！

のどか

「きゃっ!?!」

のどかが足を一步踏み出した時、吊り橋に穴が開いてしまい足が見事にハマってしまふ。

明日菜

「ほ、本屋ちゃん!?!」

のどか

「す、すみません……………足が穴にハマってしまっ……………」。

明日菜

「待って!今引つ張り上げてあげるから動かないでね……………悪いけど、この銅鐸をお願いね。」

ひかり

「わ、分かりました。」

どんべ

「任せとけ!」

明日菜はどんべとひかりに銅鐸を手渡して、のどかの方へと慎重に歩み寄っていく。

明日菜

「ほら、私の手に掴まって!」

のどか

「あ、ありがとございます……………」。

のどかは極力体を動かさずに手を伸ばして明日菜が差し出した手を掴もうとするが……………。

鬼

「ウガアーーーーッ!」

明日菜&のどか

「!?!?」

明日菜とのどかが奇声に似た声に反応して後ろの方を向いてみると、岩側の吊り橋の入口前で頭に大きなたん瘤こぶを付けた鬼が刀を持ちながら立っていた。

のどか

「あーさ、さっきの鬼さん……………」。

明日菜

「ヤ、ヤバイ!早く逃げないと……………」。

そう言って、明日菜がのどかの手を掴んだ瞬間……………。

ザシュツ!!

鬼が持っていた刀で吊り橋を支えていた縄を勢い良く切断してしま  
う。

のどか

「な、縄が……………」。

明日菜

「う、嘘でしょ……。」

明日菜とのかの表情がどんどん真っ青に染まった時……。

ガッシャー——ン——！！

明日菜

「いやあ————————！！」

のか

「きゃああ————————！！」

吊り橋が壊れていくのと同時に、明日菜とのかが叫び声を上げながら崖の下に落下してしまう。

ひかり

「あ、明日菜さん！のかさん——！！」

銅鐸を運びながら吊り橋を渡り終えたどんべとひかりは明日菜とのかかが落下していく光景を目の当たりにして言葉を失ってしまう。

ひかり

「そ、そんな……………」

どんべ

「明日菜あ……………!!のどかあ……………!!」

ひかりはショックのあまり膝を地面に付けて落胆してしまい、どんべは明日菜達が落下した崖に向かって必死に呼び掛けていくのであった……………。

がばね

「……………ふう〜、危ねえ危ねえ……………」

明日菜とのどかが落下した崖の下で、巨大化したがばねが気絶している明日菜とのどかを背中に乗せて溜め息を付きながら一安心していた。

がばね

「まったく、世話が焼ける奴らだぜ……………俺が背中でキャッチしてなきゃ、あのまま地面に叩き付けられておだぶっただったぜ……………」

そう言いながら、がばねは背中に乗せてる明日菜とのどかを見つめながら呆れ返る。

がばね

「……………それにしても、旦那も大それた事だいを考えるよなあ……………こ  
うやってこっそりと隠れながらコイツらを監視するなんてよあ……………  
…あいつに気付かれたら俺やリリーだって無事じゃ済まねえっての  
に……………」

がばねは愚痴を零しながらゆっくりと飛行していく。

がばね

「まあ、俺とリリーもその覚悟の上で旦那に協力してるんだけどな  
……………さて、コイツらを別の世界に送ってやるとするか……………リリ  
ーや旦那もそれぞれの対象者と共に別の世界に向かっているハズだし  
な……………」

バツサアーーーーッ！！

そう言い残すと、がばねは明日菜とのどかを乗せたまま何処かへと  
飛び去っていくのであった……………。





## 第一百五話 ちよつとした鬼退治？（後書き）

こうして、明日菜とのどかは別の世界へと飛ばされていくのであった…………。

という訳で、今回は『ふぁみこんむかし話 新・鬼ヶ島』編でした！  
設定は主に『新・鬼ヶ島』の物語の第二章をモチーフにしています。

因みに、今回の物語の流れとゲーム本編の流れとは全く異なってます（汗）。

どうしても実際の物語の流れを知りたい人はファミコンミニ版の『新・鬼ヶ島』をプレイしてみてください（苦笑）。

実を言うと、本当は『新・鬼ヶ島』のラスボスを倒した後という設定しかなかったのですが…………それだと、ひかりが登場しないし、どんべが成長した後なのでこういう形にしました。

最後にどうでもいい余談ですが、ヒロインのひかりは『キャプテン レインボー』にも登場してますが、容姿や口調が全く異なります。

そして『星のカービィ3』でも、どんべとひかりの二人が特別出演をしています。

…………因みに、どんべとひかりは明日菜とのどかを気に掛けながらも旅を続けるのでご心配なく（苦笑）。

第百六話 金塊探しとウニラ退治 (前書き)

ネギー一行はそれぞれのチームに分かれて、何処かの世界で迷い込んでる3-Aのクラスメート達を捜し出すのであった……。

第六六話 金塊探しとウニラ退治

くクルクルランド

木乃香と刹那は周りに沢山の棒のような細長い物が地面に突き刺さっている広い空間へとやって来た。

木乃香

「……………せつちゃん、此処って何だか不思議な世界やね。」

刹那

「そうですね、辺りには細長い棒のような物があるだけのようですし……………」

そう言いながら、木乃香と刹那は沢山の細長い棒を不思議そうに見つめる。

木乃香

「それにしても、この沢山ある棒は何々やる？」

そう言って、木乃香は二本の細長い棒の間に入って通り抜けていく。

ポオーーーーー！！

木乃香 & 刹那

「！！？」

すると、木乃香が通り抜けた棒と棒の間の地面から六角形の形をした金塊のような物が勢い良く飛び出してきた。

木乃香

「ビ、ビックリしたわぁ……………コレ、何やる？ピカピカと光ってて綺麗やけど……………」

刹那

「コ、コレはもしかして……………金塊ではないでしょうか？」

木乃香

「き、金塊！？」

木乃香は刹那の言葉に思わず耳を疑った。

刹那

「ええ、恐ろしく……………」

木乃香

「へえ、コレが金塊なんや……ピカピカと光ってて綺麗やなあ」。

刹那

「でも、何故地面から金塊が……」。

？

「ターンポストを通過したからじゃないのか？」

木乃香

「え？」

刹那

「だ、誰だ！？」

刹那が突然聞こえてきた声に反応して警戒しながら声が出た方向を向いてみると、丸い球体のような体型に短い手足を持った謎の生物が居た。

木乃香

「わあ、丸っこくて可愛い子やなあ」。

刹那

「お嬢様、迂闊に近付いてはいけません……もしかしたら、とても危険な生物かもしれません。」

そう言いながら、刹那は木乃香を自らの背中で覆わせながら謎の生物を睨み付ける。

？

「おいおい、そんなに警戒すんなよ……別に捕って食おうって訳じゃないんだしさ。」

刹那

「……………本当ですか？」

？

「本当さ！オイラはただ此处で金塊を回収しに来ただけだしな………」

木乃香

「え？金塊ってコレの事？」

そう言うと、木乃香は先程地面から出て来た金塊を拾って謎の生物に見せ付ける。

？

「そうそう！それをオイラに出来ないか？」

木乃香

「え、ええよ……………はい。」

木乃香は謎の生物に恐る恐る金塊を手渡す。

？

「へへっ、サンキュー！」

謎の生物は木乃香から金塊を受け取ると、何処からか取り出した大きな袋の中へと入れる。

木乃香

「……………せつちゃん、どつやら悪い人（？）やないみたいだよ。」

刹那

「そ、そのようですね……………。」

？

「だからさっきからそう言ってるじゃないか。」

刹那

「す、すいませんでした……ところで、此処が何処だか分かりますか？」

？

「此処？此処は『クルクルランド』さ。」

木乃香

「『クルクルランド』？」

木乃香と刹那は謎の生物の言葉に耳を傾ける。

？

「どうやら『クルクルランド』を知らないようだな……よし、ちよっと見てなよ！」

そう言うと、謎の生物は先程ターンポストと呼ばれた細長い棒が沢山突き刺さってる場所に向かって突き進んでいく。

？

「よっとー！」



すると、謎の生物が持ち前の短い手でターンポストを掴んでターンするかのように回って方向転換をしながら進み続ける。

ポオーーーーー！！

そして次の瞬間、謎の生物が通過したターンポストの間から次々と金塊が飛び出してくる。

木乃香

「わあ、金塊が地面からどんどん出て来るわあ！！」

刹那

「ま、まだこんなに沢山の金塊が地面に埋まっていたとは……………」

木乃香は地面から次々と出て来る金塊に大喜びするが、逆に刹那は啞然とした表情を浮かべる。

？

「この『クルクルランド』にある数多くの迷路には沢山の金塊が隠されてるのさ……………オイラはその迷路を全て制覇して金塊を全部集めるのが目的なんだ。」

謎の生物は未だにターンプストを片手で掴んでは通過をして金塊を地面から次々と出しながら色々と説明をする。

？

「……………ところで、さっきから気になってたんだが……………お前達は一体誰なんだ？」

刹那

「あ！申し遅れました……………まず、私は桜咲刹那と申します。」

木乃香

「ウチは近衛木乃香や、木乃香でええよ。」

？

「ふ〜ん、刹那と木乃香か……………オイラの名はグルッピーだ、宜しくな！」

グルッピーと名乗る生物は、木乃香と刹那の前で一旦立ち止まってお互いに軽く自己紹介をする。

刹那

「あの〜、グルッピーさんにお聞きしたい事があるのですが……………。」

グルッピー

「ん？何だ？」

木乃香

「ウチらな、クラスメイトを捜してるんよ……………この中で見覚えのある顔はあらへんかな？」

そう言うと、木乃香が懐から3-Aのクラス名簿を取り出してグルッピーに見せる。

グルッピー

「うん、どの顔も見た事ないなあ……………それに、この『クルクルランド』で人間に会ったのはお前達が初めてだぜ。」

刹那

「そ、そうですか……………」

木乃香

「はあ、この世界にも誰も居らへんのかなあ……………」

木乃香と刹那はグルッピーの言葉を聞いて少し落ち込んでしまう。

刹那

「いえ、まだそうだと決まった訳ではありません……もう少しの辺りを探索してみましよう。」

木乃香

「せやね、せつちゃんの言う通りやわ！」

グルツピー

「そんじゃ、金塊探しは後回しにして……オイラもそのクラスメイト捜しに協力してやるよ！」

木乃香

「え！？ホンマに？」

グルツピー

「勿論さ！『クルクルランド』には何回も来てるからオイラが居れば百人力さ。」

刹那

「あ、ありがとうございます！私達なんかの為に……。」

グルツピー

「いいって、困った時はお互い様さ……それじゃ、早速捜しに行こうぜ！」

刹那

「は、はい！」

こうして、木乃香と刹那はグルッピーと共に3-Aのクラス探索を開始させるのであった……………。

〈数分後〉

刹那達はこの広い迷路のような場所を隈なく探索したのだが……………。

刹那

「……………やはり、誰一人見付かりませんね。」

グルッピー

「うーん、やっぱ『クルクルランド』には居ないのかなあ……………。」

木乃香

「それにしても、此処ってホンマに広い所やね……………あれ？」

すると、木乃香が何かを発見してその場で急に立ち止まる。

木乃香

「アレは何やる？」

そう言うと、木乃香は何処かへと歩き出していく。

刹那

「お、お嬢様？どちらへ行くのですか？」

木乃香

「いや、この穴は何かなあと想着……………」。

グルッピー

（あ、穴……………だと？）

グルッピーが木乃香の言葉に反応すると、木乃香が地面に開いてる青色の穴の前で立ち止まる。

グルッピー

「木乃香！今すぐその穴から離れる！！」

木乃香

「……………え？」

木乃香がグルッピーの言葉に反応して振り向きをした時……………。

ブワァー……………ッ！！

木乃香&刹那

「！？」

突如、穴の中から全身刺々（トゲトゲ）の青い生物が次々と現れる。

木乃香

「あ、穴から何か出て来たあ……………！？」

刹那

「グルッピーさん！あの生物は一体……………。」

グルッピ―

「あいつらはウニラといって、この『クルクルランド』に現れるモンスターだ!」

グルッピ―がウニラについて簡単に説明をしていると、ウニラ達が木乃香の方にゆっくりと接近してくる。

刹那

「あ、危ない!」

シュンツ!!

グルッピ―

「あ、あれ?刹那は何処だ?」

グルッピ―は咄嗟に瞬動した刹那を見失って辺りを見回す。

刹那

「波あー!」

ズツシャー!」



木乃香の前まで移動した刹那は夕風でウニラ達を一刀両断させる。

グルッピ―

「い、いつの間に……………しかも、一撃でウニラを真っ二つにしちまった……………」

グルッピ―は刹那を発見したと同時に啞然とした表情を浮かべる。

刹那

「お嬢様、お怪我はありませんでしたか？」

木乃香

「う、うん……………」

刹那

「そうですね、良かったです……………」

刹那は木乃香の安否を聞いて一安心するが……………。

ブワァー……………ッ！！

刹那

「!?!」

青い穴から再び次々とウニラの大群が現れる。

木乃香

「ま、また出た?!?!」

刹那

「ご、ご安心を!この桜咲刹那が一匹残らず始末致しますので……  
……」

刹那は再び夕凧でウニラを切り付けようとするが……。

ヴォーーーーーッ!!

ウニラ達

「ウギャ~~~~ッ!!」

突然グルッピーが掌から衝撃波のような物を放出させると、ウニラ達が全身の刺を引っ込ませる。

グルッピー

「……………へへっ、コレを使うのは随分久しぶりだなあ。」

刹那

「い、今のは……………衝撃波か何かですか？」

グルッピー

「まあ、そんなところだ……………だが、オイラの衝撃波は一時的に相手の動きを止めるだけなんだけど……………」

木乃香

「それでも凄いわあ……………だって、全身の刺が無くなったし全然動かなくなっでもうたし……………」

グルッピー

「よし、この隙にやっつけちまうか……………それ……………」

次の瞬間、グルッピーが刺を引っ込ませて身動きが取れない状態のウニラ達に体当たりをしてどんどん押し出していく。

グッシャー……………ッ！！

そして、グルツピーはそのままウニラ達を部屋の壁まで押し潰していく。

木乃香

「へえ、ああやって倒せるんや。」

ブアーーーーーッ！！

木乃香がグルツピーに感心していると、ウニラの大群が次々と再び穴から現れる。

刹那

「ま、まだ出て来るのか……………」

グルツピー

「よ、し、一匹残らずやっつけちまおうぜ！」

そう言うと、刹那とグルツピーはウニラの大群に向かって駆け出していくのであった……………。

（更に数分後）

刹那とグルツピーはウニラを全滅させたのだが、結局3-Aの生徒は誰一人見付からなかった。

木乃香

「……………はあ、結局誰も居おらんかったね……………」

刹那

「そうですね……………」

グルツピー

「まあ、そんなに落ち込むなよ……………諦めなけりゃ、誰か一人ぐらいきっと見付かるって！」

木乃香と刹那が落ち込んでいると、グルツピーが励まそうと二人に声を掛ける。

グルツピー

「オイラもさ、初めてこの『クルクルランド』で金塊集めを始めた

時は全ての金塊を集めるのは無理だと思ってた………だけど、オイラは最後まで諦めずに最初の迷路に隠されてた全ての金塊を集める事が出来たのさ！」

木乃香

(………せつちゃん、ひよっとしてグルちゃんはウチらを励ましてくれてるんかな?)

刹那

(ええ、きつとそうですよ………。)

グルツピーが木乃香と刹那に対して懸命に励ましの言葉を掛けていると、二人がグルツピーに聞こえないように小声で話し出す。

グルツピー

「………おい、オイラの話聞いてたか？」

木乃香

「う、うん！勿論だよ………どうもありがとう。」

グルツピー

「へ？何が？」

グルッピ―は突然木乃香にお礼を言われて、頭を指で軽く掻きながら首(?)を傾げる。

木乃香

「だって、ウチらを励ます為にそないな事を言ってくれたんやろ?」

グルッピ―

「え?ま、まあな……………」

刹那

「私からもお礼を申し上げます……………お蔭様で私と木乃香お嬢様は元気を取り戻せました。」

グルッピ―

「そ、そうか?そいつは良かったぜ。」

グルッピ―は刹那の言葉を聞いて安堵の表情を浮かべる。

グルッピ―

「……………それで?二人はこれからどうするんだ?」

刹那

「勿論、私達はまた別の世界……………じゃなくて、別の場所でクラス

の皆さんを捜しに行きます。」

木乃香

「諦めなければ誰か一人は見付かるかもしれへんしね」

グルツピー

「そっか……そんじゃ、頑張りなよ！」

そう言うと、グルツピーは木乃香と刹那に向かってサムズアップをする。

刹那

「それでは、私達はこれで……。」

グルツピー

「……あ！そうだ！ちょっと待ってくれ。」

木乃香と刹那がその場から立ち去ろうとした時、グルツピーが二人を呼び止める。

木乃香

「え？何？」



グルッピ―

「……………まあ、何にも言わずにコレを受け取ってくれよ。」

そう言って、グルッピ―は先程の金塊を木乃香達に差し出す。

刹那

「い、いけません！そんな高価な物を……………」

グルッピ―

「いいから受け取ってくれよ……………これから何かの役に立つかもしれないし……………」

木乃香

「でも、ホンマにええの？」

グルッピ―

「ああ、お前達のお蔭で色々と楽しかったし……………だから、そのちよつとした感謝の気持ちを込めてコレを渡そうと思ってな……………」

刹那

「で、ですが……………」

木乃香

「分かった、有り難く受け取らせてもらうえ」

刹那

「お、お嬢様!？」

木乃香がグルツピーから金塊を受け取ると、刹那は思わず啞然とした表情を浮かべてしまう。

木乃香

「わあ、いつ見ても綺麗やな。」

刹那

(ほ、本当にいいのだろうか……………。)

刹那はうつとりした表情で金塊を眺めている木乃香を見つめながら苦笑いを濃くしてしまう。

グルツピー

「そんじゃ、今度こそお別れだな!」

刹那

「は、はい………それでは、色々ありがとうございますと……いきました！」

木乃香

「ほなら、またね」

そう言うと、木乃香と刹那はその場から立ち去っていく。

グルッピー

「………さてと、オイラは金塊の回収を再開させるとするか。」

そして、グルッピーは再び金塊の回収を開始させるのであった………。

## 第六話 金塊探しとウニラ退治 (後書き)

こうして、木乃香と刹那は次の世界へと向かうのであった……。

という訳で、今回は『クルクルランド』編でした！

……ちょっとマイナーなゲームだったでしょうか？ (汗)

このゲームは特定のストーリーは無いのですが、主人公のグルツピーが『クルクルランド』の各迷路で金塊を全て探し出すという設定を出来るだけ活かしてみせました。

因みに、主人公であるグルツピーの性格や口調等のキャラ設定は全て自分のイメージで書き上げたので悪しからず……。 (汗)

最後にどうでもいい事ですが……最近思うようにネタが浮かばなくて、これから更新が遅れがちになってしまいかもかもしれません……でも、出来るだけ一日も早く更新が出来るように努力はします！

## 第一百七話　オコジヨとモグラの大冒険（前書き）

ネギー一行はそれぞれのチームに分かれて行方不明になった3-Aの生徒を捜す旅に出たのであった……。

## 第一百七話　オコジヨとモグラの大冒険

とある森の中

ネギとカモは辺りに木々や草が生えてる緑豊かな森へとやって来た。

カモ

「……………兄貴、こんな森のど真ん中に兄貴の生徒が居ると思うか？」

ネギ

「それは一通り捜してみないと分からないよ。」

カモ

「まあ、そりゃそうだな……………よっしゃ！たまには俺っちも一肌脱ぐとしますか！」

そう言うと、カモはネギの肩から勢い良く飛び出して地面に着地する。

カモ

「俺っちはあっちの方を捜すから、兄貴はこっちの方を頼むぜ！」

ネギ

「え？ちよつと待って……もしかして、僕とカモ君で二手に分かれて捜すつもりなの？」

カモ

「おつよ！その方が見付けられる確率が少しだけ上がるだろ？」

ネギ

「そ、そうだね……でも、カモ君一匹だけで大丈夫なの？」

カモ

「勿論でさあ！俺たちは由緒正しきオコジョ妖精でもありネギの兄貴の使い魔マッパでい！」

ネギ

「そ、そこまで言うなら僕はこれ以上何も言わないけど………何かあったらすぐに僕に連絡してね？」

カモ

「了解でい！そんじゃ、ちよつくら行って来るぜ！！」

そう言い残すと、カモはネギを残して森の奥へと駆け出していく。

ネギ

「……………カモ君、本当に大丈夫かな？」

そんな事を呟きながら、カモが駆け出して行った方向を見つめていくと……………。

？

「坊主、こんな所で何やってるんだ？」

ネギ

「……………え？」

ネギが何者かの声に反応して振り向くと、そこには大きな袋を抱えている鼻や顎の下に黒い髭を生やして小さい黄色の帽子や緑色の服の上に茶色いオーバーオールを着た農夫のような男性が立っていた。

？

「ひょっとして、迷子にでもなったのか？」

ネギ

「い、いえ……………実は僕、人を捜してるのですが、この中に見覚えのある顔はありませんか？」



そう言つと、ネギは懐からユー・Aのクラス名簿を取り出して男性に見せる。

？

「うん、どれも見ない顔だなあ……………」。

ネギ

「そ、そうですか……………」。

ネギは男性の返事を聞いて少し落ち込んでしまう。

？

「それより、ワシも坊主に聞きたい事があるんだが……………」。

ネギ

「はい、何でしょうか？」

？

「この辺りでモグラを見なかったか？」

ネギ

「モ、モグラ……………ですか？」

ネギは男性の質問に一瞬だけ耳を傾けてしまう。

？

「そつだ、首に赤い布を巻いてサングラスを掛けてる生意気なモグラだ。」

ネギ

「い、いえ……………見てませんけど……………」

？

「そつか……………もし見掛けたらワシに教えてくれ。」

そう言い残すと、男性はその場から立ち去っていく。

モゾモゾッ！

ネギ

「！？」

すると、男性が持っていた袋がモゾモゾと動き出す。

ネギ

(い、今袋が動いたような気がしたけど……何が入ってるんだろ  
う?)

そう思いながら、ネギもその場を後にして3-Aの生徒達を捜して  
いく。

一方、カモの方は……。

カモ

「ふう〜、やっぱり森の中を隈無く捜すのは困難だぜ……ん?」

カモは地面にぽっかりと開いてる小さな穴を発見してその場で立ち  
止まる。

カモ

「あの穴は一体何だ?」

そう言って、カモが地面の方へと歩み寄って覗き込もうとした時……。

ゴツチー……ン！！

カモ

「あだつ！？」

突然、穴の中から何者かが勢い良く出て来て上手い具合に穴を覗き込もうとしたカモの頭とぶつかり合ってしまう。

カモ

「い、いつてえ〜……………い、いきなり何て事をしやがる！？」

？

「そ、それはこっちの台詞だ！そっちが勝手に人の家を覗こうとするから……………」

そう言いながら、穴の中から首に赤いスカーフを巻いて黒いサンダラスを掛けた一匹のモグラが頭に大きなタンコブを生やしなから同じく大きなタンコブを生やしたカモの前に姿を現す。

カモ

「い、家？この穴はお前さんの家なのかい？」

？

「ああ、僕と家族で住んでいるマイホームだ……ところが、その家族である妻や子供達がまた……。」

そう言い掛けると、モグラの男性は下に俯き気味になってしまふ。

カモ

「お、おい……何かあったのか？」

？

「……僕の妻と子供がまた誘拐されてしまったんだ……。」

カモ

「な、何だつてえ！？」

カモはモグラの男性の発言に思わず耳を疑ってしまう。

？

「じんべえという男が僕達モグラを目の敵にしている、僕を誘き寄せる為だけに愛する家族を誘拐したんだ……。」

カモ

「そいつは酷<sup>ひで</sup>え話だな……………それにしても、そのじんべえって野郎は許せねえぜ!」

モグラの男性の説明を聞いたカモは怒りを露にしながら拳を握り締める。

?

「やっぱり、アンタもそう思ってくれるか?」

カモ

「勿論でい!俺っちにも妹が一匹居るから、お前さんの気持ちは痛い程分かるぜ!」

?

「そうか……………それだったら、アンタに頼みがある!」

カモ

「な、何でい?」

?

「僕と一緒に妻や子供達を救出する手伝いをしてほしい!」

カモ

「な、何だつてえ~~~~~」

カモはモグラの男性のまさかの発言に思わず大声を上げてしまう。

？

「勿論、急にこんな無理難題な事を頼まれて困っているのは分かっている………だけど、まずはコレを見てくれ。」

そう言うと、モグラの男性は何かの文章が書いてある一枚の白い紙をカモに手渡す。

カモ

「ん？何だこりゃ？」

？

「じんべえからの脅迫状だ………取り合えず、何も言わずに読んでみてほしい。」

カモ

「お、おう………え〜っと、何々………」

モグラくニヤ君へ

お元気ですか？

突然だが、お前の子供と奥さんは預かった！

返してほしければパワーアップした『じんべえランド』に遊びに来てね

でも、この手紙を読んでから三時間までにワシの所まで来なかったら、お前の妻と子供達を狂暴な野生動物達の餌にするからね。

それじゃ、待ってるよ

じんべえより。

……って、何々じゃ！？この無茶苦茶な要求はあ—————っ  
「！」



ビリビリッ!!

カモは脅迫状に書かれてたあまりにも一方的な内容に先程よりも更に怒りを露にしながら脅迫状を破り捨ててしまう。

モグラ〜ニヤ

「という訳で、今から約三時間以内までに『じんべえランド』へ行って、じんべえが待ち構えている場所まで行かなければならない……。」

カモ

「な、成程……ところで、その『じんべえランド』って何々だ？」

モグラ〜ニヤ

「『じんべえランド』とは、僕を始末する為だけにじんべえが造った最低最悪のテーマパーク……それぞれのステージによって狂暴な動物達や複雑な仕掛けが多数用意されていて、決して簡単にはクリア出来ない……その『じんべえランド』が更にパワーアップしたとなると、今から約三時間までにじんべえの所まで行くのは僕一匹だけじゃ絶対に無理だ……。」

カモ

「そこで、俺たちの力が必要だって事が……。」

モグラ〜ニヤ

「ああ、一匹よりも二匹の方がステージを早くクリア出来る確率が少しでも高くなると思って……………だから頼む！僕と一緒に『じんべえランド』に行つてほしい！！」

そう言うと、モグラ〜ニヤという名のモグラはカモに向かって深々と土下座をしながら懇願する。

カモ

「お、おいおい！何も土下座までしなくても……………」

モグラ〜ニヤ

「僕は真剣なんだ！だから……………だから僕は……………」

カモ

（よ、弱つたなあ……………俺つちにはやらなきゃならねえ事があるんだけどどなあ……………でも、此処まで話を聞いちまったらほっとく訳にもいかねえし……………う〜ん、悩むなあ……………）

しばらくの間、カモはモグラ〜ニヤの頼みを引き受けるか断るかどうか悩んでいるが……………。

カモ

「……………分かつた！このアルベル・カモミール様も一緒に『じん

べえランド』に行つてやろつじやねえか！」

モグラ〜ニヤ

「ほ、本当か!？」

カモ

「ああ!男に二言はねえ!」

モグラ〜ニヤ

「ありがとう!君は本当にいいオコジヨだ!」

そう言いながら、モグラ〜ニヤは嬉しそうにカモの両手を強く握る。

カモ

(フツ、どうやら俺っちもネギの兄貴に感化されちまったみてえだな……………)。

そんな事を思いながら、カモはモグラ〜ニヤに両手を握られながら微かに笑みを浮かべてしまう。

モグラ〜ニヤ

「あ!まだお互い自己紹介してなかった……………僕の名はモグラ〜ニヤだ。」

カモ

「俺たちはアルベル・カモミールでい、カモって呼んでくれ。」

モグラ〜ニヤ

「カモか、いい名前だね……………カモさん、改めて宜しく!」

カモ

「おう、こちらこそ宜しくな!」

そう言うと、カモとモグラ〜ニヤはお互いに握手をする。

カモ

「そんじゃ、早速『じんべえランド』に案内してくれ!」

モグラ〜ニヤ

「分かった!じゃあ、僕が『じんべえランド』まで穴を掘ってくから付いて来てくれ。」

ズボツ!!

次の瞬間、モグラ〜ニヤが地面に潜りながらどんどん進んでいく。

カモ

「ほお、流石モグラだなあ……………よいしょっと！」

すると、カモもモグラニヤが掘った穴に入ってどんどん進んでいく。

ガサガサッ！！

ネギ

「……………あれ？さっきカモ君の声が聞こえたと思ったんだけど……………気のせいかなあ……………」

草むらからネギが出て来て辺りを見渡すが、そのまま何処かへと歩き出していくのであった……………。

くじんべえランド・ステージ1

ガボツ!!

モグラ〜ニヤ

「……………ぷは〜っ! やっと着いたぞ……………」

カモ

「ふう〜っ、よづやく着いたか……………」

数分後、地面を掘りながら進んでいたモグラ〜ニヤとカモが地面から勢い良く出て来る。

カモ

「……………ところで、この迷路みてえな所が『じんべえランド』なのか?」

モグラ〜ニヤ

「ああ、間違いない……………前に一度来た時と全く同じだ……………」

カモとモグラ〜ニヤは木製の壁が沢山ある迷路と思われる場所の辺りをキョロキョロと見回す。

カモ

「それはともかく、あまりが時間が無いからさっさと先へ進もうぜ。」

モグラ〜ニヤ

「ああ、そうしよう。」

そう言つと、カモとモグラ〜ニヤは壁を伝いながら進み始める。

カモ

「……………にしても、よくまあこんな迷路を造つたもんだよなあ。」

モグラ〜ニヤ

「全くだ、幾ら僕達モグラが憎いからってこんな物を造る必要があるのだらうか？」

カモ

「そのじんべえって野郎は相当モグラを目の敵にしてんだな……………あれ？」

カモとモグラ〜ニヤがしばらく話をしながら進んでいると、二匹の目の前に大きな壁が立ち塞がっていた。

カモ

「何だよ、いきなり行き止まりじゃねえか……………」

モグラ〜ニヤ

「大丈夫、穴を掘って壁の向こう側まで掘り進めば問題無いよ。」

ズボツ！！

そう言うと、モグラ〜ニヤは再び穴を掘って壁の下を掘り進んでいく。

カモ

「成程なあ、無理に迷路を進む必要はねえってか……………そらよつと！」

カモもモグラ〜ニヤが掘った穴に入って地面の下へと進んでいくのであった……………。



その頃、ネギは……………。

ネギ

「おゝい、カモくゝん！何処に居るのおゝゝ？」

森の方でネギが大声でカモを呼び掛けていた。

ネギ

「……………カモ君ったら、一体何処に行っちゃったんだろっ？」

そう言いながら、ネギは必死に辺りを見回す。

ネギ

「まさか、カモ君の身に何かあったのかな……………カモ君！お願いだから居たら出て来てよゝゝ！！！」

ネギは更に大声を上げながら森の奥へと駆け出していくのであった……………。

くじんべえランド・ステージ8

カモ&モグラくニヤ

「おりゃくくくっ!!」

ゴロゴロゴロゴロツ!!

あれから約二時間後、カモとモグラくニヤは鉄球のような大きな黒い球を押し転がしながら更に奥へと突き進んでいた。

ガッシャーーン!!

すると、カモとモグラくニヤが押しながら転がしていた黒い球が勢い良く壁に命中する。

モグラくニヤ

「ハアハアツ……………や、やっと此処まで来たか……………」

カモ

「ゼエゼエ……………ああ、殆ど勢いだけで進んじまったからな……………」

「

モグラ〜ニヤ

「だけど、そのお蔭で思ったよりも目的地に早く到着した……………それもこれもみんなカモさんのお蔭だよ。」

カモ

「よ、よせやい！照れるじゃねえか……………」

カモはモグラ〜ニヤに褒められて少し頬を紅く染めながら照れてしまつた。

カモ

「……………それより、じんべえって野郎はこの先に居るのかい？」

モグラ〜ニヤ

「ああ、間違いない……………じんべえはこの先に待ち構えている。」

カモ

「そうか……………よっしゃ！早速じんべえをやっつけて、モグラ〜ニヤの家族を取り戻そうぜ！！」

モグラ〜ニヤ

「おおー！ー！ーっ！ー！」

そう言つと、カモとモグラ〜ニヤは更に奥へと目指して進んでいく。

モグラ〜ニヤ

「……………ストップ！ー！」

カモ

「ふえっ！ー？き、急にどうしたんでい？」

しばらく進んでいると、モグラ〜ニヤが急に立ち止まってカモを呼び止める。

モグラ〜ニヤ

「この先にじんべえが居るハズだ……………だから、此処から先は穴を掘って隠れながら進もう。」

カモ

「成程、そりゃいい考えだ……………そんなじゃ、早速穴を掘ってくれ！」

モグラ〜ニヤ

「はいよー！」

ズボッ！！

モグラノニヤが再び穴を掘って進んでいくと同時に、すぐにカモも穴の中に入って進んでいく。

ノじんべえランド・最深部ノ

？

「……………モグラノニヤめ、そろそろタイムリミットだぞ……………」

『じんべえランド』の最深部には、先程ネギと出会った農夫の格好した男性が大きな鍬くわを肩に乗せながら仁王立ちの状態で立っていた。

ズボッ！！

？

「……………ん？」

次の瞬間、男性の目の前にあたる地面の中からモグラ〜ニヤとカモが勢い良く出て来る。

？

「お！？やっと来たな！しかも、今回は仲間を連れて来おったか………今日こそ決着を付けてやる！！」

カモ

「……………こ、この髭親父がじんべえなのか？」

モグラ〜ニヤ

「そうさ……………そして、僕の愛する家族を誘拐した張本人だ！」

そう言うと、モグラ〜ニヤは鍬を持って高く掲げようとするじんべえと呼ばれた男性に向かって真っ直ぐと指差す。

じんべえ

「さあ、覚悟しろ！！」

そう叫ぶように言うと、じんべえはそのままカモとモグラ〜ニヤに目掛けて鍬を勢い良く振り下ろしていく。

カモ

「あ、危ねえ！逃げるー！！」

モグラ〜ニヤ

「おっとー！！」

ザクツ！！

カモとモグラ〜ニヤが間一髪避けると、じんべえが振り下ろした鍬が地面に突き刺さる。

じんべえ

「逃げてても無駄だー！！」

そう言って、じんべえは再び鍬を高く掲げて勢い良く振り下ろそうとするが……………。

カモ

「そうはいくかよー！！」

ガブツ！！

どんべえ

「あだっ!？」

突然、カモがじんべえの鼻に目掛けてジャンプして噛み付いてしま  
う。

じんべえ

「こ、このぉ!ワシの鼻から離れろ!！」

そう言いながら、じんべえはカモの背中を掴んで引き剥がそうとす  
る。

モグラ〜ニヤ

「今だ!これでも喰らえ!！」

ゴロゴロゴロゴロッ!!

すると、モグラ〜ニヤがじんべえの足元に向かって黒い球を押し出  
しながら転がしていく。

ツルッ!!



じんべえ

「うわぁっ!?!」

バッタアーーーーン!!

じんべえはモグラ〜ニヤが転がした黒い球を踏んでしまい、そのまま後ろの方へと勢い良く転んでしまう。

カモ

「た、助かったぜ!」

この隙にカモはじんべえの手から素早く逃れる。

モグラ〜ニヤ

「カモさん!無事で良かった……………」。

カモ

「ああ、モグラ〜ニヤのお蔭だぜ!」

モグラ〜ニヤ

「それにしても、どうやってじんべえをやっつけようか……………」。

カモ

「……………なあ、俺っちにいい考えがあるんだけどよお……………」

モグラ〜ニヤ

「え？何だい？」

カモ

「実はな……………ゴニョゴニョ……………」

カモはモグラ〜ニヤの耳元でじんべえに聞き取れないように小声で話す。

じんべえ

「痛たたたた……………くそお〜、もう許さん……………」

それと同時に、じんべえが片手で頭を押さえながらゆっくりと起き上がる。

モグラ〜ニヤ

「……………分かった、それでいいっ！ー」

カモ

「そんじゃ、作戦開始と行こうぜ！」

ズボツ！！

二匹が話を終えると、モグラ〜ニヤが素早く地面に潜っていく。

カモ

（さてと、俺たちはモグラ〜ニヤから合図が来るまで奴と鬼ごっこでもするか……………。）

じんべえ

「うおー……っ！！」

カモが振り向いた瞬間、じんべえが再び鍬を大きく掲げてそのまま振り下ろそうとしていた。

カモ

「おっと！危ねえ……………」

ザクツ！！

カモはじんべえが振り下ろした鍬を間一髪避ける。

じんべえ

「おのれ、ちょこまかと……………逃げてばかりいないで正々堂々と闘え！」

カモ

（何が正々堂々だ！そつちは人質……………じゃなくて、モグラ質を取ってるクセによく言っぜ！）

カモは何度も鍬を振り回しながら追い掛けて来るじんべえから逃げ回りながら心の中で思わずツツコミを入れてしまう。

じんべえ

「そりゃーっ！っ！」

ブンッ！！

カモ

「わおっ！？」

次の瞬間、じんべえは鍬をカモに向かって投げ飛ばしてカモの尻尾の先を掠める。

カモ

（こりゃマジで危ねえな……………モグラ〜ニヤ、そろそろ早くしてくれ！）

じんべえ

「待てえーいーい！！」

しばらくの間、カモとじんべえが追い掛けっこをしていると……………。

ズボツ！！

モグラ〜ニヤ

「カモさ〜ん！準備出来たよ〜〜！！」

モグラ〜ニヤが地面から顔を出して、大声でカモに呼び掛ける。

カモ

「おっ！？やっと来たか……………今行くぜ！！」

そう言うと、カモは急いでモグラ〜ニヤの方へと駆け出していく。

じんべえ

「何処へ逃げてても同じじゃー……!」

じんべえもそのままカモの後を追い掛けていく。

カモ

(よし!後もう少しだ……。)

カモは追い掛けて来るじんべえを時々後ろを向いて確認しながらモグラ〜ニヤの方に逃げていく。

モグラ〜ニヤ

(……来た!)

ズボツ!!

すると、突然モグラ〜ニヤが何かを察知したかのように再び穴の中へと潜っていく。

カモ

(……今だ!!)

ピョーーーーーッ！！

じんべえが先程モグラくニヤが掘った穴の上に立った途端、カモが  
じんべえの顔に目掛けて高く飛び上がったいく。

じんべえ

「な、何じゃ!?」

カモ

「喰らえ！オコジョフラーーーーーッシュー!!」

ピツカアーーーーッ!!

じんべえ

「ぐおっ!?ま、眩しい……………」

カモがライターと金属マグネシウムを取り出して強い光を発生させると、じんべえは強い光に怯んでしまう。

カモ

「モグラくニヤ！後は頼んだぜ!!」

ズボツ!!

モグラ〜ニヤ

「任せてくれ!!」

ズボボボボボボツ!!

すると、地面から顔を出したモグラ〜ニヤがじんべえが立っている周りの地面をまるで缶詰の缶切りのような要領でどんどん掘っていく。

じんべえ

「い、一体何がどうなって……………」

ズボォー…………ツ!!

じんべえ

「うお……………っ!!?」

モグラ〜ニヤがじんべえが立ってる周りの地面を全て掘り終えた直後、じんべえはまるで落とし穴に落ちてしまったかのように大きな穴に勢い良く落下していく。



カモ

「よっしゃ！上手くいったぜ！！」

モグラ〜ニヤ

「やったあーっ！！」

パシンッ！！

カモとモグラ〜ニヤは嬉しさのあまりお互いにハイタッチをする。

カモ

「それにしても、こんなに深い穴を掘れるなんて……………モグラ〜ニヤ、アンタは最強のモグラだぜ！」

モグラ〜ニヤ

「い、いやあ……………それ程でも……………」

モグラ〜ニヤはカモの言葉に照れてしまい微かに頬を紅く染める。

ガシッ！！

じんべえ

「うぐぐぐ……。」

すると、穴に落ちたじんべえが地面を掴んで穴から出て来ようとする。

モグラ〜ニヤ

「マ、マズイ！じんべえが穴から出ようとして……。」

カモ

「そうはさせるか……………モグラ〜ニヤ、コレを奴にプレゼントしてやるっぜー！」

そう言うと、カモは近くにある大きな黒い球の方へと駆け寄っていく。

モグラ〜ニヤ

「よし、僕も手伝っようー！」

カモ

「そんじゃ、行くぞ……………そりゃーっ！！」

ゴロゴロゴロゴロッ!!

次の瞬間、カモとモグラ〜ニヤが二匹揃って黒い球を押し出して、そのままじんべえが落ちた穴の中へと入れてしまう。

ゴツチー……ン!!

じんべえ

「ぶべっ!?!」

そして、カモとモグラ〜ニヤが穴の中に落としした黒い球がじんべえの頭に命中する。

4258

カモ

「……………ふう〜っ、これでやっと終結したな。」

モグラ〜ニヤ

「ああ、後は妻と子供達を捜して……………」。

?

「あなた〜!?!」

？

「父ちゃん！！」

カモとモグラ〜ニヤが声が聞こえた方を向いてみると、黄色い玉の模様が付いてる青いほっかむりを被って腰に薄いピンク色のエプロンを巻いたモグラの女性と様々な色のスカーフを首に巻いてる七匹の小さなモグラの子供達がこちらに向かって駆け出して来ていた。

モグラ〜ニヤ

「モ、モグリ〜ナ！それに子供達も……おい！みんな〜！！」

モグラ〜ニヤはモグリ〜ナと呼ばれたモグラの女性と子モグラ達の姿を見た途端、心の底から嬉しそうな表情を浮かべながら駆け出していく。

カモ

（どうやら、俺っちの役目は終わったようだな……それに、折角の家族との再会に俺っちが邪魔しちまったら悪いしな……あばよ、モグラ〜ニヤ……………。）

そんな事を思いながら、カモは何故か茶色い帽子を被って煙草を口にくわえて家族との再会を喜んでいるモグラ〜ニヤを何度も振り向いて見つめながらそっと立ち去っていく。

モグリ〜ナ

「あなた！私達の為にまた助けに来てくれたのね……………」

モグリ〜ニヤ

「勿論さ！僕の大事な家族がピンチなんだから……………」

子モグラA

「わ〜い！流石僕達の父ちゃんだ〜！！」

子モグラB

「しかも、今回も父ちゃんが一匹だけで僕達を助けに来てくれた〜！！」

モグリ〜ニヤ

「い、いや！今回は父ちゃんだけじゃなくてこのカモさんが……………あれ？」

モグリ〜ニヤはカモを家族に紹介しようとして振り向くが、そこにはもうカモの姿は無かった。

モグリ〜ニヤ

「カ、カモさん？一体何処に……………カモさ〜ん！」

モグリ〜ナ

「……………あ、あなた？一体どうなされたの？」

子モグラC

「父ちゃん、早くお家に帰ろうよ〜。」

しばらくの間、モグラ〜ニヤは必死でカモを捜し回ったそうなの……。

その頃、ネギは……………。

ネギ

「カモく〜ん！〜！」

ネギは未だに森の中でカモを捜し回っていた。

ネギ

「これだけ捜しても見付からないなんて……やっぱり、カモ君の身に何かが……。」

カモ

「お〜い！兄貴い〜！！」

ネギ

「……………えっ！？」

ネギが聞き慣れた声に反応して振り向いてみると、森の奥からカモが手を左右に振りながら駆け寄って来ていた。

ネギ

「カ、カモ君！！」

ネギはカモの姿を見た途端、急いでカモの方へと駆け出していく。

ネギ

「もお！カモ君ったら、一体何処へ行つてたんだよ！？僕、ずっとカモ君を捜し回ってたんだからね……………」

カモ

「あ、兄貴……………」

カモは目に涙を浮かべながら必死に訴えるネギの顔を見て心を動かされてしまう。

カモ

「し、心配掛けちまってすまなかったな……ちょっとした人助け……じゃなくて、モグラ助けをしてたんだ。」

ネギ

「モ、モグラ助け？」

カモ

「ああ、実は……。」

カモはこれまでの経緯をネギに詳しく説明する。

ネギ

「……へえ、そんな事があつたんだ。」

カモ

「ああ、俺つちとした事が柄にも無い事をしちまつたぜ……とこゝろで、兄貴の方は誰か見付かったのかい？」



ネギ

「いや、結局誰も見付からなかったよ……………」。

カモ

「そっか……………そんなじゃ、次の世界へ行くとするか！」

ネギ

「う、うん！」

カモがネギの肩の上に乗つかると、その場から立ち去ろうと歩み始める。

ネギ

（……………何だか、今日のカモ君は生き生きしてるよつな気がするけど……………気のせいかな？）

カモ

（……………モグラくニヤ、今頃はあの穴で家族と一緒に楽しく飯でも食ってるんだろうな……………）。

そんな事を思いながら、ネギとカモは次の世界へと目指していくのであった……………。



## 第一百七話〈オコジヨとモグラの大冒険〉（後書き）

という訳で、今回は『モグラ〜ニヤ』編でした！

……多分、このゲームは知らない人が多いと思うので簡単に説明します。（汗）

主人公のモグラ〜ニヤがじんべえに誘拐された妻と子供達を救い出す為に冒険の旅に出るというアクションパズルゲームです。

このゲームは地上と地下を行き来して謎解きやボスを退治しながら進んでいきます。

……とまあ、こんな感じですよ。

この『モグラ〜ニヤ』というゲームはモグラが主人公なので、同じ小動物でもあるカモを主役にしてみました。

……それから、またまた更新が遅れて申し訳ありませんでした……  
……最近こんな状態が続くかもしれませんが、出来れば暖かく見守って下さい。

第百八話 怪獣と悪魔とシスターと…… (前書き)

ネギー一行はそれぞれチームに分かれて、行方不明になってしまった  
31Aの生徒達を探すのであった……。

第八話 怪獣と悪魔とシスターと……

「デビルワールド」

明日菜

「……………う、うん。」

明日菜がゆっくりと目を開けると、まるで迷路のような壁に囲まれた場所で眠っていた。

明日菜

「あれ？可笑しいなあ……………確か、本屋ちゃん達と一緒に銅鐸を手に入れたんだけど……………途中で本屋ちゃんが吊り橋で転んだから私が助けようとして……………そうだ！私達は鬼に吊り橋の縄を切られて、そのまま谷底へ落ちちゃったんだ！！」

のどか

「……………うん。」

明日菜が今までの経緯を思い返して思わず大声を上げると、明日菜の隣で気絶していたのどかが眠い目を擦りながらゆっくりと起き上がる。

明日菜

「あ！？本屋ちゃん！」

のどか

「あ、明日菜さん……………ふわぁ、おはようございます……………」。

のどかは寝ぼけ眼を浮かべながら明日菜に向かって朝の挨拶をする。

明日菜

「いや、おはようございますじゃなくて……………」。

のどか

「……………あれ？此処は何処ですか？確か、私達は吊り橋から落ちたハズでは……………」。

明日菜

「そうなのよ、私も気が付いたらこんな所で気絶してたって訳よ……………」。

のどか

「そ、そうですか……………ところで、どんべ君とひかりちゃんはどうなったんでしょうか？」

明日菜

「あ！そうだった……………急いで二人を捜さない……………」

そう言うと、明日菜が何処かに駆け出していく。

のどか

「あ！？ちよ、ちよっと待って下さ〜い！」

のどかも明日菜の後から慌てて駆け出していく。

？

「……………誰だ？勝手に俺の世界でウロウロしてんのは……………」

怪しい一つの影が上空で駆け出していく明日菜とのどかを見ている……………。

〈数分後〉

明日菜とのどかはまるで迷路のような複雑な場所を手当たり次第に歩き回っていた。

明日菜

「……………ふう〜、結構歩いたけど全然出口に辿り着けないわ……………」

のどか

「そ、そうですね……………あれ？」

明日菜

「どうしたの？」

のどか

「コレは何でしょうか？」

明日菜

「え？コレって……………」

明日菜はのどかが指差す先を見ると、そこには卵のような緑色の丸い物体が転がっていた。



のどか

「コレって何だか……………卵に見えませんか？」

明日菜

「うーん、そう言われれば見えなくもないけど……………」

そう言つて、明日菜が卵みたいな物体を片手で持ち上げた瞬間……………。

ピキピキッ……………

のどか

「えっ!？」

明日菜

「う、嘘……………」

突然、卵から小さなヒビ割れが生じてきて……………。

パツカア————ツ!!

？

「タマゴ~~~~ン!!」

明日菜&のどか

「!!!???」

そして、卵の中から頭部に鶏冠とてんかのような突起物があり耳の部分に羽根を生やして胴体と呼ばれる物が無く顔の下に短い二本の足を生やした恐竜らしき緑色の生物が姿を現わす。

明日菜

「な、何か訳の分からないのが生まれたく!?!」

のどか

「じ、この生物は一体何々でしょうか……………」

明日菜とのどかが恐竜らしき謎の生物を食い入るように見つめてみる……………」

？

「コン~~~~ン!!」

のどか

「きゃっ!?!」

突然、謎の生物がのどかの胸に目掛けて勢い良く飛び込んで来て、まるで抱き着くようにピッタリと引っ付いてしまう。

?

「タマタマ」。

すると、謎の生物はまるで母親に甘えるかのようにのどかの胸に顔をスリスリさせる。

のどか

「ちょ、ちょっと……明日菜さん、何とかして下さい!」

明日菜

「わ、分かったわ……ほいっと!」

?

「ゴン!?!」

次の瞬間、明日菜が謎の生物をのどかの胸から遠ざけるように両手で持ち上げる。

？

「タマタマ〜！ゴング〜ン〜！」

明日菜

「じ、こら！暴れないの……………」。

謎の生物はまるで子供が駄々（だだ）をこねるように暴れまくる。

のどか

「……………ど、どつして明日菜さんと暴れるんでしょうか？」

明日菜

「さ、ああ……………あ！ひょつと……………」。

のどか

「な、何ですか？」

明日菜

「この子、本屋ちゃんの事をお母さんだと思ってるんじゃない？」

のどか

「……………へ？」

のどかは一瞬だけ明日菜が何を言ってるのか理解出来なかったが……。

のどか

「ええ~~~~~っ!?わ、私がですかあ!？」

のどかはあまりの有り得ない展開に思わず大声を上げてしまう。

?

「~~~~~ん!~!」

のどか

「あつっ!~!」

すると、謎の生物が嬉しそうに再びのどかの胸に抱き着くようにピタリと引っ付いてしまふ。

明日菜

「ほら、こんなに本屋ちゃんに懐いてるし……まず間違いないわね。」

のどか

「そ、そんな……………」

のどかは明日菜の言葉を聞いて困惑するが……。

？

「タマタマゴーン。」

のどか

(で、でも……………結構可愛いかも……………)

そう思いながら、のどかは未だに自分の胸で引っ付いてる謎の生物を優しい表情で見つめながら頭を優しく撫で回す。

明日菜

(な〜んだ、本屋ちゃんも満更でもないじゃない……………)

明日菜も自然と笑みを浮かべながらのどかと謎の生物を見つめる。

明日菜

「さてと、しばらくはこの子も一緒に連れてくとして……………」  
「忖」  
の子の名前を考えないとね。」

のどか

「そ、そうですね……………うん、何て名前にしようかなあ……………」。

明日菜とのどかが謎の生物の名前について考えていると……………。

？

「タムゴーン！」

明日菜

「『タムゴーン！』って……………」の子、かなり変わった鳴き声をしてるのね……………」。

のどか

「そう言われてみれば確かに……………それでは、」の子は『タムゴーン』という名前にしませんか？」

明日菜

「『タムゴーン』かあ……………うん！私はそれでいいと思っただ……………」。

？

「ゴーン……………」

突然、謎の生物がまるでのどかが考えた名前を気に入ったかのように高く飛び跳ねながら喜ぶ。

のどか

「……………どうやら、この子も気に入ってくれたみたいですね。」

明日菜

「そんじゃ、アンタの名前は『タマゴン』に決定ね！」

タマゴン

「タマタマゴンー！！！」

タマゴンと名付けられた謎の生物は嬉しさのあまり明日菜とのどかの周りを元気良く走り回る。

明日菜

「……………わ、分かったから少し落ち着きなさい！」

のどか

「でも、よっぽど嬉しかったんでしょうね。」

明日菜



「まあ、気持ちは分かるけどね……………それじゃ、改めて出口を探しましょー！」

のどか

「は、はい……………タマゴンちゃん、行くっー！」

タマゴン

「タマタマ〜ー！」

こうして、明日菜とのどかはタマゴンも一緒に連れて先へ進んでいくのであった……………。

？

「……………フツ、そう簡単にこの世界から抜け出せると思うなよ……………」

そして、先程の怪しい影が上空で怪しい笑みを浮かべながら明日菜達を見つめていた……………。

↳更に数分後↳

明日菜達はあれから何分も歩き回ったが、出口は全く見付けられ  
ていなかった。

明日菜

「……………あゝ！もゝ！いつになったら出られるのよぉ……………」  
「！！」

のどか

「あ、明日菜さん！少し落ち着いて下さい……………」。

のどかは堪らずに癪癪を起した明日菜を宥めようとしたが……………。

タマゴン

「ゴンゴン…」

のどか

「どづしたの？タマゴン……………ひゃっ！？」

のどかはタマゴンが険しい表情を浮かべながら吠えている方へ向い

てみると、まるで何か恐ろしい物でも見たかのように驚きながら地面に思いつ切り尻餅を付いてしまう。

明日菜

「な、何！？一体どうしたの？」

のどか

「ま、また何か変な生物が……………」

明日菜

「えっ！？う、嘘でしょ……………って、本当だ！！」

明日菜はのどかが恐る恐ると指を差す先を見ると、明日菜達が歩いて来た道の方から身体中が巨大な目玉で覆われているような形をしたピンク色で二等身位の生物がいっぱい現れていた。

のどか

「こ、この子達はタマゴンの仲間でしょうか？」

タマゴン

「ガールルル……………」

明日菜

「…………いや、その様子だと違うみたいよ。」

明日菜は不気味な生物達を警戒しながら低い声で唸っているタマゴの姿を見て仲間ではないと確信する。

？

「メダマ〜〜〜ン!!」

すると、不気味な生物達が明日菜達に一齐に襲い掛かって来る。

のどか

「お、襲って来た!？」

明日菜

「こっぴなったら……………アデアット!!」

パアーーーーーッ!!

次の瞬間、明日菜が素早く『ハマノツルギ』を呼び出す。

明日菜

「とじゅーーーーっ!!」

パツシューーーーン!!

?

「ダマダマ〜〜ン!?!」

明日菜は勢い良く『ハマノツルギ』を振り回し、不気味な生物達を吹っ飛ばしていく。

明日菜

「ほらほら!遠くまで吹っ飛ばされたい奴は掛かってらっしゃい!」

?

「ダ、ダマダマ……。」

不気味な生物達は明日菜に怯えながらどんどん後退りしていく。

?

「……………ダマ?」

のどか

「え?ま、まさか……………。」

すると、一匹の不気味な生物とのどかのお互いの視線が合ってしまった。

？

「メダマ〜〜〜ン!!」

のどかに狙いを定めた不気味な生物達は一斉にのどかとタマゴンに襲い掛かって来る。

明日菜

「し、しまった!……本屋ちゃん!逃げて!!」

のどか

「は、はい……………」

のどかはタマゴンを抱き抱えながら逃げ出そうとするが……………。

タマゴン

「ゴンゴ〜〜〜ン!!」

次の瞬間、タマゴンがのどかから勢い良く離れていき、不気味な生物達の方へと駆け出していく。

のどか

「あー!?タマゴンちゃんが……。」

明日菜

「こら!危ないから早く戻って来なさい!」

?

「ダメダメ~~~~!!」

明日菜とのどかの制止も虚しく、不気味な生物達が一斉にタマゴンの周りを囲んで襲い掛かるうとするのだが……。

ゴオー~~~~ッ!!

明日菜&のどか

「!?!?!」

?

「ダメ~~~~ッ!!」

突然、タマゴンが口から勢い良く炎を吐いて不気味な生物達は高温

の炎で焼き尽くされてしまう。

タマゴン

「……………タマゴン！」

タマゴンが炎の吐き終わると、不気味な生物達は全て焼きたての目玉焼きに変化していた。

のどか

「あ、明日菜さん……………今、タマゴンちゃんが口から炎を出しましたよね？」

明日菜

「え、ええ……………まるで怪獣みたいだね……………」

明日菜とのどかは先程の出来事にただ愕然とするしかなかった。

タマゴン

「タマタマゴン！」

すると、タマゴンが嬉しそうにのどかの方へと駆け寄って来る。



のどか

「でも、何はともあれタマゴんちゃんのお蔭で助かりましたね。」

明日菜

「そ、そうね……………それじゃ、また改めて出口を探しに……………」。

？

「出口なんてねえよ。」

明日菜&のどか

「!?!?」

明日菜とのどかは突然何処からか聞こえてきた声に反応して、警戒しながら辺りを見回す。

明日菜

「……………だ、誰？一体何処に居るの!?!?」

？

「フツ、お前らのすぐ真上に居るぜ。」

のどか

「え？ま、真上って……………きゃあっ!?!?」

明日菜

「ど、どうしたの………って、わぁっ!？」

明日菜とのどかがそのまま真上の方を見上げると、上空には背中に巨大な真っ赤な羽根を生やして赤い手袋と赤い靴を装着して赤いパンツを履いた全身が青い色をした身体の魔物らしき生物が浮かび上がっていた。

明日菜

「ア、アンタ！一体何者よ!？」

？

「俺か？俺はデビル、この『デビルワールド』を支配している親玉さー!」

のどか

「デ、『デビルワールド』?」

のどかがデビルと名乗る魔物の言葉に耳を傾けると、デビルがそのままゆっくりと地面に着地する。

デビル

「それにしても、よくメダマン達を倒せたな？」

明日菜

「メ、メダマンって……さっき私達がやっつけた目玉の化け物の事？」

デビル

「ああ、そうさ……お前らを始末させようと俺が差し向けたんだよ。」

のどか

「わ、私達を始末？」

デビル

「そうだ！俺が支配してる『デビルワールド』に易々（やすやす）と侵入した奴は生かして帰す訳にいかねえのさ！！」

パチッ！！

メダマン達

「メダマ~~~~ン！！」

デビルが指を鳴らした瞬間、何処からともなく沢山のメダマンが現

れて明日菜達を取り囲む。

明日菜

「ゲッ!?ま、まだこんなに沢山居るの?」

デビル

「お前達!今度こそコイツらを叩きのめしちまえ!」

メダマン

「ダマダマ〜ッ!」

メダマン達はデビルの合図と共に、一斉に明日菜達に襲い掛かって来る。

明日菜

「こつなったらやるしかないわね……………おりゃ—————っ  
!」

パッシー—————!!

明日菜は襲い掛かって来たメダマン達を『ハマノツルギ』で素早く吹っ飛ばしてしまふ。

ゴォーーーーーッ!!

メダマン

「ギャ~~~~ッ!!」

更にタマゴンが再び炎を吐いてメダマン達を焼き尽くしていく。

デビル

「ほお、思ってたよりもやるじゃねえか……………だが、その調子がい  
つまで続くかな？」

そう言うと、デビルは怪しい笑みを浮かべながらのどかの方へと近  
付いていく。

のどか

「な、何をするつもりですか？」

デビル

「決まってるだろ？見るからにトロそうなお前を人質にすんだよ！」

ガシッ!!



「タマタマー!!」

デビル

「何度でも言ってる！これが俺のやり方だ!!」

のどか

「い、痛っ……………」

のどかは痙攣を起こしたデビルに腕を強く握られてあまり痛みに顔を歪めてしまう。

明日菜

(ど、どうしよう……………下手に動いたら本屋ちゃんの身が危ないし……………)

デビル

「メダマン共、チャンスだ！この隙に奴らを始末してしまえ!!」

メダマン

「ダマダマ〜〜ッ!!」

デビルの合図と同時に、メダマン達が再び明日菜とタマゴンに一斉に襲い掛かるうとするが……………。





を離さない。」

デビル

「う、うるせえ！テメエこそ今すぐこの世界から出て行きやがれ！  
」

デビルは何処か怯えたような引き攣った表情を浮かべながら修道服の少女に怒鳴り散らす。

？

「そつですか、ならば仕方ありません…………アレを取り出して貴方に天誅を下しましょう。」

デビル

「お、おい！アレってまさか…………止める！アレだけは絶対に出すな  
」

更にデビルは修道服の少女の言葉に酷く取り乱しながら怯えてしま  
う。

？

「もう遅い！コレが目に入らぬかあ……………  
」

そう言うと、修道服の少女は懐から小さな十字架を取り出してデビルに見せ付けるよう掲げる。

デビル

「ぐわぁー！ー！ーっ！た、頼むからソレをしまっつけてくれえー！ー！」

デビルは修道服の少女が取り出した十字架を見て酷く怯えてしまう。

明日菜

「タマゴン！今よ！！」

タマゴン

「ゴンゴ~~~~ン！！」

ガブツ！！

デビル

「いってえー！ー！ー！！」

突然、タマゴンが明日菜の掛け声を合図に駆け出して、そのままデビルの手に噛み付く。

明日菜

「本屋ちゃん！今の内に……………」

のどか

「は、はい…」

のどかはタマゴンに手を噛まれて痛がってるデビルの隙を付いて急いでデビルから離れる。

デビル

「し、しまった…！」

明日菜

「人質が居なければこっちのモンだわ……………覚悟お……………」

パツシイ……………」

デビル

「どわぁ……………」

次の瞬間、明日菜が『ハマノツルギ』でデビルを遠くまで吹っ飛ばす。

メダマン達

「ダ、ダメダメ〜!!」

メダマン達はデビルが吹っ飛ばされた光景を目の当たりにして、血相を変えながら慌てて逃げ出していく。

明日菜

「……………ふう〜、あの目玉の化け物達も全員逃げてっちゃったわね。」

のどか

「あ、あの……………助けてくれてありがとうございます!」

のどかは修道服の少女に向かって深々とお辞儀をしながらお礼を言う。

?

「いえいえ、私はただ神の使いとして当然の行いを……………」

のどか

「あれ？この声は……ひょっとして、春日さんですか？」

？

「い、いえ！私は春日さんじゃありません……私はただの通りすがりのシスターですよ？」

明日菜

「いやいやいやいや！アンタは私達のクラスメートの春日美空ちゃんでしょ！？」

美空

「……………いえ、私は春日美空ではありません！」

そう言うと、ネギの生徒の一人である春日美空は真剣な眼差しでサムズアップをしながら明日菜に否定し続ける。

明日菜

「嘘付け！名前だつてちゃんと『美空』って表示されてるじゃない！！」

美空

「え？あつ！？本当だ………つたく、これだから『台本小説』って嫌なんだよね。」

美空がブツブツと文句を言いながら修道服用の帽子を取ると、美空の持ち前であるショートヘアが露になった。

のどか

「あ！やっぱり春日さんだった……………」。

明日菜

「ったく、何が『ただの通りすがりのシスター』よ……………」。

美空

「まあまあ、そんなに怒りなさんなって……………そうやってすぐ怒ると高畑先生に嫌われちゃうよ？」

明日菜

「だ、誰のせいだと思ってんのよお—————！」

明日菜は美空の付け足したような言葉に更に怒り出してしまふ。

のどか

「ま、まあまあ……………こつして春日さんと再会出来たからいいじゃないですか……………」。

明日菜

「まあ、そりゃそうなんだけど……………」

美空

「ところでさ、二人はどうやって此処へ来たの？私は授業が終わってすぐに教会へ行こうとしたら変な物に吸い込まれて……………気が付いたら、こんな訳の分からない場所で倒れてたんだよね。」

明日菜

「あゝ、その事については出来るだけ簡単に説明するわ……………」

そう言うと、明日菜は美空に今までの経緯を出来るだけ簡単に説明していく。

明日菜

「……………という訳なの。」

美空

「ま、待って！まだちょっと理解出来てないんだけど……………つまり、私やクラスみんなはその『亜空間』ってのに吸い込まれちゃって……………私達が住んでる世界とは全く別の世界に飛ばされちゃったって事？」

のどか

「はい、そういう事です。」

美空

(……………有り得ねえー！こんなの絶対有り得ねえー……………！！)

突然、美空はあまりのショックで地面に座り込んでしまい心の中で叫ぶ。

明日菜

「だ、大丈夫？美空ちゃん……………」

美空

「え？あゝ、うん……………それより、もう一つだけ聞いてもいいかな？」

のどか

「な、何ですか？」

美空

「……………さっきからそこら辺をウロウロしているあの変な生き物は何？」

明日菜&のどか



「……………へ？」

明日菜とのどかは美空が指差す先を見てみると、辺りをウロウロしているタマゴンの姿が目についた。

明日菜

「あゝ、あの子は卵から生まれて……………あれ？」

明日菜がタマゴンの方を向いた時、いつの間にかタマゴンの隣にもう一匹の赤いタマゴンが居た。

のどか

「タ、タマゴンちゃんが……………一匹？」

美空

「もしかして、分裂しちゃったとか？」

明日菜

「まさか、エイリアンじゃあるまいし……………。」

？

「タマゴゴン……………」

明日菜達が赤いタマゴンに驚いていると、遠くの物陰から複数の様々な色をしたタマゴン達が身を潜めるようにしながら二匹のタマゴンに呼び掛けていた。

美空

「わあ、まだあんなに沢山居るよー！」

明日菜

「……………もしかして、みんなタマゴンの仲間？」

のどか

「きつとそうですよ。」

緑タマゴン

「タマタマゴ〜ン！」

すると、緑色のタマゴンが赤色のタマゴンと共に様々な色のタマゴン達の群れの方へと嬉しそうに駆け出していく。

のどか

「……………やっぱり、仲間と一緒に居た方が安心するんですね……………」

明日菜

「本屋ちゃん……………」。

明日菜が何処か寂しそうな表情を浮かべながら仲間達と戯れ合っている緑色のタマゴンを見つめているのどかを見ていと……………。

バシンッ！！

のどか

「あうっ！？」

突然、明日菜がのどかの背中を強く叩き始める。

明日菜

「大丈夫だって！その内夕映ちゃんやハルナもきつと見付かるから……………だから、そんなに落ち込まないの！」

のどか

「あ、明日菜さん……………そうですね！私がいっかりしなきゃいけないですね。」

明日菜

「そうそう!」

のどか

(夕映…………ハルナ…………どうか無事でいてね…………。)

そう願いながら、のどかは顔をゆっくりと上の方へと見上げる。

美空

「…………あのく、盛り上がってるところで悪いんだけど…………そろそろ話を戻していいッスか?」

明日菜

「あーそ、そうね…………それじゃ、美空ちゃんが見付かった事だし、そろそろ館に戻るっか?」

美空

「へ?館って何?」

明日菜

「…………美空ちゃん、私の話を最後までちゃんと聞いてた?」

美空

「いやあ、半分位しか…………。」

美空が答え難そうに言うと、明日菜が深い溜め息を付いてしまう。

明日菜

「……………とにかく、館についてはまた後で説明するから、今はこの世界から出ましょ。」

美空

「えー!?マジで?この世界から出られるの?」

のどか

「は、はい。」

美空

「……………良かったあ〜!やっとこんな訳の分かんない世界から出られるんだあ……………思えば、この世界に来てからロクな事が無かったなあ……………あの変な目玉の化け物達に追い掛け回されたりもしたっけ……………唯一の楽しみと言ったら、あの弱虫悪魔を虐めまくったって事ぐらいかなあ……………」

明日菜

(美空ちゃんも色々と苦労してたのね……………)。

明日菜とのどかは滝みたいに涙を流して独り言のように延々（えんえん）と語り出す美空を見つめながら苦笑いを浮かべる。

明日菜

「……………ところで、さっき出て来たあのデビルって奴は何者なの？」

美空

「え？あゝ、あいつね……………あいつはこの辺りを支配してる化け物達の親玉みたいなんだけど、本当は威勢だけ強くててんで弱っちいんだよね。」

のどか

「そ、そうなんですか……………」

明日菜

（確かに、十字架を見せただけで酷く怯えてたわね……………。）

明日菜とのどかは美空の説明を聞いて、苦笑いをしながら納得する。

美空

「そんな事より、早くこの世界から出ようよー！」

明日菜

「そうね……そんなじゃ、私達に付いて来てね。」

美空

「はいよ〜。」

美空が元気良く返事をする、三人はその場から立ち去ろうとするのだが……。

緑タマゴン

「ゴ~~~~ン!~!」

明日菜&のどか

「!?!」

明日菜とのどかがタマゴンの鳴き声に反応して振り向いてみると、緑色のタマゴンが悲しそうな眼差しを浮かべながら他の仲間達と一緒に並んで立っていた。

のどか

「タ、タマゴンちゃん……………」

明日菜

「……………きっと、私達と別れるのが寂しいのね。」

緑タマゴン

「タマタマ……………」

緑色のタマゴンは弱々しく鳴きながら明日菜とのどかを見つめ続ける。

明日菜

「……………本屋ちゃん、此処は笑顔でタマゴンにお別れしましょ。」

のどか

「そ、そうですね……………タマゴンちゃん！元気でね〜！！」

明日菜

「そうよ！アンタにはこんなに沢山の仲間が居るんだから達者で暮らさなさいよ〜！！」

明日菜とのどかは満面の笑みを浮かべながら大声でタマゴンにお別れの言葉を言う。

緑タマゴン

「タマ……………タマゴ……………」



すると、緑色のタマゴンがまるで明日菜とどかに返事をするかのように大きな鳴き声を上げる。

美空

(うひい、何て大きな鳴き声……。)

美空はタマゴンの大きな鳴き声に思わず両目を×(ばつ)印にしながら指先で両耳を塞ぐ。

明日菜

「うん！いい返事だったわ……。そんじゃ、改めてこの世界から出ると思いますか！」

のどか

「はい！」

美空

「お~~~~っ！」

こうして、明日菜とどかは美空を連れて『デビルワールド』を後にするのであった……。



## 第八話 怪獣と悪魔とシスターと…… (後書き)

という訳で、今回は『デビルワールド』編でした！

今回登場したタマゴンのキャラ設定もまるつきり自分が考えたオリジナルでして……しかも、何故かポケモンみたいに自分の名前を鳴き声にしてしまいました(汗)。

因みに、タマゴンには緑色(1P)と赤色(2P)が存在しますが、その他の色のタマゴンはゲームには存在しません。

ついでに、デビルのキャラ設定は少し『キャプテン レインボー』の部分も参考にしています。

……ところで、更新が更に遅れてしまって申し訳ありません……  
……まさか一週間も遅れてしまうとは…… (汗)。

第百九話 飛んで！回って！また回る！?? (前書き)

ネギー一行はそれぞれのチームに分かれて行方不明になってしまった  
31Aの生徒を捜していく……………。

第九話 飛んで！回って！また回る！??

くくるりん村

木乃香と刹那は数軒の小さな家が建てられてる緑豊かな村にやって来た。

木乃香

「わあ、この村って緑がいっぱいあって眺めも抜群やね。」

刹那

「そうですね、まさに平和そうな村ですよ。」

そう言いながら、木乃香と刹那は村の景色を眺め回しながら歩いていく。

刹那

「さてと、早速この村の住人達に色々話を聞いてみましょう。」

木乃香

「せやね、もしかしたら此処にクラスメートの誰かが居るかもしれへんし……。」

？

「はあ〜っ……………」

木乃香 & 刹那

「？」

木乃香と刹那は何処からか聞こえてきた溜め息に気付いて振り向いてみると、額にゴーグルを付けて首に赤いバンダナを巻いたクルクル巻きの長い頭が特徴の青い鳥の姿をした少年が深く落ち込みながら歩いていった。

木乃香

「……………せつちゃん、大きな青い鳥さんが歩つとるよ？」

刹那

「ええ、恐らくこの村の住人だと思われそうですが……………」

木乃香

「ほなら、あの子にちょっと聞いてみよ？」

刹那

「そ、そうですね。」

そう言うと、木乃香と刹那は鳥の少年の方へと近付いていく。

刹那

「あの〜、すみません……………」。

？

「……………え？」

刹那が恐る恐る鳥の少年に声を掛けると、鳥の少年はゆっくりと頭を上げて刹那達の方を向く。

？

「何でしょうか？」

木乃香

「えっと、ウチら友達を捜してんねんけど……………この中に見覚えのある顔とかあらへんかな？」

そう言うと、木乃香は懐からユー・Aのクラス名簿のコピーを取り出して鳥の少年に見せる。

？

「うーん…………どの顔も見ただ事がないなあ…………。」

刹那

「そ、そうですか…………。」

木乃香

「この世界にも居てへんのかなあ…………。」

木乃香と刹那は鳥の少年の言葉を聞いて軽く落ち込んでしまう。

？

「…………あの、僕も二人に聞きたい事があるんだけど…………。」

木乃香

「え？何かな？」

？

「この写真に写ってる、僕の弟と妹達を見なかった？」

そう言うと、鳥の少年は何処からか一枚の写真を取り出して木乃香と刹那に見せる。



木乃香

「どれどれ……わぁ、色々な鳥さんが写つとるわぁ！」

木乃香の言う通り、写真には青い鳥の少年を含む様々な色や体格の鳥達がまるで家族写真のように並んで写っていた。

刹那

「……………ひょっとして、この写真に写っている人(?)達は貴方の家族ですか？」

?

「うん、僕の両親と十人の弟と妹達なんだ。」

木乃香

「へえ、という事は十三人家族なんやね。」

刹那

「ま、まさに大家族ですね……………」

木乃香は家族写真を見て思わず感心するが、刹那は思わず苦笑いをしてしまう。

?

「ところで、僕の弟と妹達は……………」

木乃香

「あゝ、せやったね……………うん、残念やけど君の弟さんと妹さんは見てへんなあゝ。」

刹那

「そうですね……………それに、私達はこの村に来たばかりですし……………」

？

「そ、そっか……………」

鳥の少年は木乃香と刹那の言葉を聞いて再び落ち込んでしまつ。

木乃香

「……………ねえ、もしかして君の弟さんと妹さんは迷子にでもなってるん？」

？

「う、うん……………みんな遊びに行ったきり帰って来なくなつて……………心配になつて捜しに行こうとしたんだけど、何処に行ったか見当も付かなくて困つてたんだ……………」

刹那

「そうだったんですか……………」

木乃香

「何だか、ウチらと同じやね……………」

木乃香と刹那は鳥の少年の落ち込んでる姿をかつてクラスメイト達が見付からずに落ち込んでいた自分達を重ね合わせながら見つめる。

？

「あ！そう言えば、自己紹介がまだだったね……………僕はこの『くるりん村』で家族みんなで暮らしているクルリンだよ。」

刹那

「そうですね、ごく丁寧にどうも……………私は桜咲刹那と申します。」

木乃香

「ウチは近衛木乃香や、木乃香でええよ。」

クルリンと名乗った鳥の少年と木乃香&刹那がお互いに軽く自己紹介をしていると……………。

？

「おや？そこに居るのはクルリンじゃないか。」

クルリン

「……………え？」

クルリンが何者かに呼び掛けられて振り向いてみると、全身に茶色いパイロットスーツを着て目にゴーグルを掛けた兔の男性が立っていた。

クルリン

「あ！うさぎ先生。」

うさぎ

「こんな所で何をしているんだい？」

クルリン

「えっと、実は……………」

クルリンはうさぎ先生と呼んだ兔の男性に弟と妹達が行方不明になっている事を説明した。

うさぎ

「……………成程、君の弟と妹達が見当たらないのか……………」

クルリン

「はい、色々捜し回ったんですけど……………」

うさぎ

「ううん、だとするとあの噂は本当かもしれない……………」

そう言つと、うさぎ先生は腕を組んで考え込んでしまう。

クルリン

「え？何の事ですか？」

うさぎ

「いや、村の人達が噂をしてたんだけど……………何でも、君の弟と妹達は以前君の家族が商店街のくじ引きで当てた『四ヶ国巡り』で行ったあの四つの国の内の一つの『スイートアイランド』に遊びに行つたつて聞いたんだ。」

クルリン

「ええっ！？そ、それって本当ですか！？」

クルリンはうさぎ先生の説明を聞いて、目を丸くしながら耳を疑っ

た。

うさぎ

「ああ、恐らく間違いないだろう……クルリン、早速アレで四つの国に行ってみた方がいいよ。」

クルリン

「わ、分かりました！」

そう言っ、クルリンは慌ててその場から駆け出そうとするが……

木乃香

「あ！ちょっと待って……。」

クルリン

「……………え？」

クルリンは木乃香に呼び止められてそのまま立ち止まって木乃香の方へと顔を向ける。

木乃香

「あんな、クルリン君にお願いがあるんやけど……………ウチらもその

何とかランドに連れてって?」

クルリン

「えっ!?!ど、どうして?」

クルリンは木乃香の発言に耳を疑ってしまい、思わず聞き返してしまふ。

木乃香

「ほら、ウチらさつき友達を捜してるって話したやろ?もしかしたら、友達もその何とかランドに居るかもしれへんと思うて………せやから、ウチら二人も一緒に連れてって!お願いや!」

刹那

「私からもお願いします!」

そう言うと、木乃香と刹那はクルリンに向かってほぼ同時に深々と頭を下げながら懇願する。

クルリン

「わ、分かった!分かったから頭を上げてよ!」

木乃香

「ホ、ホンマ？どつどもありがとっ！」

刹那

「ありがとっ！ございますー！」

更に木乃香と刹那はクルリンの言葉を聞いて、嬉しさのあまり再び深々と頭を下げる。

クルリン

「だ、だから頭を上げてっばー！」

うさぎ

「あ、あはははは……よく分からないけど、アレに乗る時には十分に気をつけるんだよ。」

クルリン

「は、はい。」

うさぎ

「それじゃ、私はこれで……。」

そう言い残すと、うさぎ先生はその場からゆっくりと立ち去っていく。



木乃香

「あゝあ、兔さんが行ってしまった……………」

刹那

「……………ところで、先程の兔さんがおっしゃってたアレとは何ですか？」

クルリン

「え？あゝ、アレはね……………まあ、僕が説明するより実際に乗ってみた方がいいかもしれないね。」

木乃香 & 刹那

「の、乗る？」

木乃香と刹那はクルリンの言葉の内容を理解出来ずに思わず首を傾げる。

クルリン

「とにかく、僕に付いて来て。」

刹那

「は、はい……………」

木乃香

「わ、分かった……。」

木乃香と刹那は未だリアレが理解出来ないまま大人しくクルリンの後を付いて行く。

クルリン

「…………… 此处だよ。」

しばらく歩いていっていると、クルリンはピンク色の屋根が特徴の一軒の大きな家の前で立ち止まる。

木乃香

「わあ、大きなお家やなあ…………… ひょっとして、クルリン君のお家？」

クルリン

「うん、そうだよ。」

刹那

「立派な家ですね。」

クルリン

「まあ、家族が沢山居るからね……………それより、この中に入るよ。」

そう言うと、クルリンは家の前に置いてあるごみ箱のような金属の大きな容器に向かって指差す。

木乃香

「へ？こ、この中って……………ごみ箱の中に？」

クルリン

「いや、コレはごみ箱じゃなくて入口なんだ。」

刹那

「入口？」

刹那はクルリンの言葉を聞いて訳が分からず再び首を傾げてしまう。

クルリン

「とにかく、僕の後に続いてね……………それっ！」

そう言い残すと、クルリンはそのまま大きな容器の中に入っていく。

木乃香

「は、入ってもうた……………」

刹那

「……………」と、取り合えず私達もこの中に入ってみましょう。」

木乃香

「う、うん……………」

木乃香と刹那は恐る恐る大きな容器の中に入っていくと……………。

木乃香&刹那

「わあっ!?!」

ほぼ同時に木乃香と刹那が大きな容器の中に入った瞬間、まるで大きな滑り台に滑っているかのようにどんどん下の方へと滑りながら勢い良く下降していく。

木乃香

「ひゃ〜!まるで滑り台みたいやな〜」

刹那

「そ、そうですね……それにしても、コレっていつまで続くのでしょうか……。」

そうこう言いながら、木乃香と刹那がどんどん滑り落ちていくと……。

ストンッ！

木乃香

「……………あや？もう着いてもうたん？」

刹那

「ふう、どうやらそのようですね……ところで、此処は何処なのでしょう？」

クルリン

「やあ、ようこそ…。」

最後まで滑り落ちて何かの乗り物の内部に到着した木乃香と刹那がクルリンの方を向いてみると、クルリンがまるで操縦席のような椅子に腰掛けていた。

木乃香

「ねえ、此処って何処なん？何かの乗り物の中みたいない感じやけど……。」

クルリン

「ちょっと待ってて、今作動させるから……。」

ガシャン！

ウィーーーーー！！

クルリンが台に設置されてるレバーのような部分を捻ると、まるでモーター音のような物音が辺りに響き渡る。

刹那

「な、何の音ですか？」

クルリン

「『ヘリリン』のプロペラを作動させたんだ。」

木乃香

「へ、『ヘリリン』？」

木乃香はクルリンの言葉を聞いて耳を傾ける。

クルリン

「それじゃ、いよいよ地上に出るよ………発進！」

ポチッ！

ガアーーーーーッ！！

クルリンがレバーの近くに設置されてるボタンを押すと、天井部分がまるで自動ドアのように左右同時に開いていく。

木乃香

「あ！？天井が開いた！」

クルリン

「二人共、何でもいいからしっかり掴まっててね！」

刹那

「え？は、はい！」

木乃香と刹那はクルリンに言われた通りに、周りの物にしっかりと

掴む。

ウィーーーーー！！

すると、クルリン達を乗せた乗り物が地上を目指してどんどん上昇していく。

木乃香

「わあ、どんどん上昇していくー！」

刹那

「クルリンさん、一体この乗り物は何なのですか？」

クルリン

「コレは『ヘリリン』といって、とっても特殊なヘリコプターなんだ。」

クルリンが簡単に説明を終えると、地上の上空でクルリン達三人を乗せた特殊なヘリコプター・ヘリリンが操縦席の部分の左右に設置されてる棒をプロペラのように回転させながら浮遊していく。

木乃香

「ほえ、凄いわあ………ひょっとして、この乗り物で何とかラン



ドに行くん?」

クルリン

「勿論、その為の『ヘリリン』だからね……………それじゃ、早速出発するよ!」

ウィーーーーーーン!!

クルリン達を乗せたヘリリンはそのまま『スイートランド』に向かって飛行していくのであった……………。

くスイートアイランドく

数時間後、クルリン達を乗せたヘリリンはトロピカルなムードが漂う南国の島へとやって来た。

クルリン

「ふう〜、やっと『スイートアイランド』に到着したぞ……………」

木乃香

「わあ〜、まるで南の島みたいやなあ〜！」

刹那

「でも、これだけ広いと探すのも一苦勞ですね。」

クルリン

「とにかく、この島を一通り搜索してみよう！」

そう言うと、クルリンはヘリリンの舵を握ってゆっくりと発進させる。

木乃香

（……………せっちゃん、此処ちょっと狭くない？）

刹那

（そ、そう言われてみれば……………。）

木乃香と刹那がクルリンに聞こえないように小声で話している……………。

クルリン

「あゝ、ゴメンね……………この『ヘリリン』は一人乗り用だからかなり狭いと思うけど、少しの間だけ我慢してね？」

刹那

「い、いえ！そんな滅相も無い……………こちらこそ狭い等と失礼な事を言ってますいませんでした！」

木乃香

「ウチも謝るわ……………」

そう言うと、木乃香と刹那はクルリンに向かって申し訳なさそうに頭を下げる。

クルリン

「いや、いいんだよ……………それより、僕は操縦に専念するから二人は僕の弟妹<sup>ていまい</sup>達や君達の友達が居ないか捜しててくれない？」

刹那

「はい、分かりました！」

木乃香

「了解や！」

クルリンは『ヘリリン』の舵を握って発進させると、木乃香と刹那は操縦席の窓から目を凝らしながら景色を見つめる。

刹那

「……………今のところ、誰も居ないようですね。」

木乃香

「そやね、見える言ったら砂浜ぐらいあらへんし……………」

そう言いながら、木乃香と刹那が辺りの景色を見つめていると……………

ガッシャー————ン！！

木乃香

「きゃっ!?!」

刹那

「な、何だ!?!」

突然、何かが激突したような大きな衝突音と共にヘリリン全体がま

るで地震のように揺れ動く。

クルリン

「ゴ、ゴメン……………プロペラの部分が壁に当たったみたい……………」

クルリンは申し訳なさそうな表情を浮かべながら木乃香と刹那に謝る。

木乃香

「え？壁って……………あれ？ホンマに壁が……………」

木乃香と刹那がクルリンの言葉に耳を疑いながらも真正面の方を向いてみると、操縦席の窓から大きな壁が目に見えた。

刹那

「こ、この壁は一体何なのですか？」

クルリン

「……………恐らく、僕達はいつの間にか迷路に迷い込んでしまったみたい……………」

木乃香

「め、迷路？」

木乃香と刹那はクルリンの言葉に耳を傾ける。

クルリン

「とにかく、一刻も早くこの迷路から抜け出さなきゃ……………」。

刹那

「ですが、くれぐれも慎重に進まなければなりませんね……………」。

木乃香

「クルリン君、この迷路って相当難しいん？」

クルリン

「いや、此処の迷路は難易度が一番低いからゴールへ辿り着くのは簡単だよ。」

木乃香

「そか、それやったら安心やね……………な？せつちゃん。」

刹那

「は、はい……………」。

木乃香はクルリンの言葉を聞いて一安心するが、刹那はほんの少しだけ不安を抱いてしまう。

クルリン

「それじゃ、早速迷路から脱出しよう!」

ウィーーーーーン!!

そう言って、クルリンは舵を握って『へりりん』を発進させるが……。

刹那

「あーちょっと待って下さい……………」

クルリン

「……………え?何?」

突然、クルリンは刹那に呼び掛けられて舵を握ったまま刹那の方を向いた瞬間……………。

ガッシャーーーーーン!!

全員

「わあっ!?!」

ヘリリンのプロペラが再び壁に当たってしまい、先程と同じく衝突音が響き渡ると共に地震のように揺れ動いてしまう。

刹那

「す、すみません！私が声を掛けたばかりに……………」

クルリン

「い、いや！操縦してる最中によそ見をした僕が悪いんだ……………ところで、さっきは何を言い掛けたの?」

刹那

「えっと、この『ヘリリン』の強度はどれ位あるのかと思いましたが……………」

クルリン

「え？強度?うーん……………」この『ヘリリン』はあまり頑丈じゃないから、最低でも三回ぐらい壁にぶつかったら故障するんじゃないかな?」

木乃香

「ほ、ほなら……………もう二回ぶつかってもうたから、後一回ぶつか



っつてもつたら……。」「

クルリン

「……………うん、間違いなく故障して墜落する。」「

木乃香 & 刹那

「……………。」

木乃香と刹那はクルリンのはっきりとした発言を聞いて、顔色を真っ青に染めながら黙り込んでしまう。

クルリン

「だ、大丈夫！さっきよりも慎重に進んで行けばぶつかったりしないから……………それじゃ、改めて再出発するよ！」「

ウィーーーーー！！

そう言うと、クルリンは再び舵を握って『ヘリリン』を発進させる。

全員

「……………。」

先程とは打って変わり、その場に居る全員が緊張感を張り巡らせながら黙り込んでしまう。

木乃香

(……………何か、妙な空気になってもうたなあ。)

刹那

(先程は私がクルリンさんに声を掛けてしまったせいで壁にぶつかってしまった……………だから、此処はクルリンさんの集中力を切らさないように静かにしなければ……………。)

そんな事を思いながら、木乃香と刹那はただ黙って緊張しながら操縦しているクルリンを見守りながら見つめる。

クルリン

「……………よし、ゴールは近いぞ……………」

しばらく進んでいると、クルリンが緊張の糸が解けたかのように安堵の表情を浮かべる。

刹那

(ホッ、どうやら無事に迷路から抜け出せそうだ……………)。

クルリンの独り言を耳にした刹那も安堵と表情を浮かべるが……。

ムズムズッ……

刹那

(ムツ!? マ、マズイ…… 急に鼻がムズムズしてきた…… い、  
いかんいかん! 此処でくしゃみをしてしまったらクルリンさんが驚  
いて操縦を誤ってしまいまた壁に衝突してしまうかもしれない……  
……。)

すると、刹那は咄嗟に両手で口と鼻をしっかりと塞いでしまう。

刹那

(よし、これでくしゃみをする心配は……。)

木乃香

「へっくしゅん! …」

クルリン

「うひゃっ! …?」

刹那

(「うひゃっ! …?」)

突然、木乃香が大きなくしゃみをしてしまい、それに驚いたクルリンは思わず手から舵を離してしまう。

ガツシャーーーーーン！！

全員

「わあっ！！」

すると、クルリンが舵を離してしまいバランスが崩れた『ヘリリン』のプロペラが再び壁に勢い良くぶつかってしまう。

クルリン

「マ、マズイ……………」。

木乃香

「ゴ、ゴメン……………ウチがくしゃみなんかしてもうたから……………」。

刹那

「い、いえ！決してそんな事は……………」。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……

刹那が必死で木乃香を宥めようとした時、『ヘリリン』が震えるように小刻みに動き始める。

クルリン

「こ、このままじゃ爆発する……………」。

木乃香

「そ、そんな……………」。

刹那

「お嬢様！私の手に掴まって下さい……！」

ガシッ！！

刹那が素早く木乃香の手を掴んだ瞬間……………。

ポツカアーーーーーン！！

『ヘリリン』がそのまま大きな大爆発を起こしてしまう。

刹那

「……………ふう、危なかった……………お嬢様、お怪我はありませんか？」

木乃香

「う、うん……………せつちゃんのお蔭だよ……………」

『ヘリリン』が爆発した上空には、白くて大きな翼を生やした刹那が木乃香を抱き抱えながら浮遊していた。

刹那

「そうですね、ご無事で本当に良かった……………」

木乃香

「ウチもせつちゃんが無事でホツとしたわ。」

刹那

「このちゃん……………」

木乃香

「せつちゃん……………」

木乃香と刹那は近距離でお互いに見つめ合いながら頬を紅く染めていく。

木乃香

「……………あれ？そう言えばクルリン君は……………」

刹那

「え？……………あ！そうでした！！」

二人がしばらく見つめ合っていると、木乃香の言葉を聞いた刹那が思わず大声を上げてしまう。

木乃香

「もしかして、さっきの爆発に巻き込まれてしもつたんやろか……………」

刹那

「いえ、恐らく先程の爆風で何処かへと吹き飛ばされたのでしよう……………可能性はかなり低いですが……………」

刹那は後者の言葉を木乃香に聞き取れないぐらいに小さな声で呟く。

木乃香

「せつちゃん！急いでクルリン君を捜そ！！」

刹那

「はい！勿論です！！」

バツサアーーーーッ！！

刹那は木乃香を落とさないように強く抱き抱えながら勢い良く羽根を羽撃かせながら飛び立っていく。

木乃香

「うーん、何処まで飛ばされたんやろ……………」

刹那

「恐らく、あっちの方向だと思いますが……………」

そう言って、木乃香と刹那は周りを見回しながらクルリンを捜している……………。

木乃香

「……………あ！あそこにおった！！」

刹那

「えっ！？」



刹那は木乃香が声を荒げながら指差す先を見てみると、波打ち際の砂浜でクルリンが逆さまの状態で二本の足を突き出していた。

刹那

「あ！あの足は間違いなくクルリンさんです！」

木乃香

「やっぱり……ほなら、急いであの砂浜の方に着地しよ！」

刹那

「はい！」

そう言つて、刹那は急いでクルリンが埋まつてる場所に向かつて着地しようとするが……。

？

「あ！お兄ちゃんが砂の中に埋まつてる……！」

？

「何！？本当か？」

木乃香

(……………あや？誰かがクルリン君の方に近付いて来るよ?)

木乃香の言う通り、クルリンが埋まってる場所に向かって様々な体の色の鳥の少年少女達が慌てて近付いて来る。

刹那

(お嬢様！あの子達は確かクルリンさんが見せてくれた写真に写っていた……………)

木乃香

(そや！クルリン君の弟と妹達やね！)

木乃香と刹那は上空でクルリンの弟妹達を思い出しながらそのまま彼らの様子を眺め続ける。

?

「ほ、本当だ！でも、どうしてこんな所に……………」

?

「きつと、私達を捜して此処まで来たのよ。」

?

「よし、急いで兄ちゃんを引っ張り出そう！」

？

「おおーっ！」

そう言うと、クルリンの弟妹達はクルリンの二本の足を一齐に掴む。

？

「それじゃ、行くぞ……………せーの！！」

ズボーーーーッ！！

弟妹達が一斉にクルリンを引っ張り上げると、クルリンが勢い良く砂から顔を出す。

クルリン

「ゲホッゲホッ……………あれ？此処は……………」

弟妹達によって砂から顔を出せたクルリンは訳が分からずに周りを見回す。

？

「兄ちゃん!!」

クルリン

「え?.....あ!カクリン!ピカリン!チクリン!マリリン!フワリン!ゲキリン!ヒヨコリン!ラブリン!ホヨリン!ポコリンじゃないか!!」

クルリンは総勢十人の弟妹達の姿を見て思わず驚きの声を上げてしまふ。

クルリン

「みんな、こんな所で何してるんだ?」

ラブリン

「何してるって、私達を迎えに来てくれたんでしょ?」

チクリン

「そうそう、僕達が勝手に遊びに行っちゃったから.....」

クルリンの言葉にハート型の頭が特徴で首に水色のバンダナを巻いた濃いピンク色の鳥の少女ラブリンと頭が刺トゲのように尖ってる首に赤色のバンダナを巻いた青色の鳥の少年チクリンが首を傾げながら尋ねる。

クルリン

「う〜ん……………あ！そうだった！！」

カクリン

「も、もしかして……………忘れてたの？」

マリリン

「まあ、お兄ちゃんっいたらしっかりしてよ。」

ピカリン

「そうだよ、僕らの兄ちゃんだからさ。」

クルリンが思い出したように大声を上げると、角々とした頭が特徴で首に濃い青色のバンダナを巻いた薄い紫色の鳥の少年は呆れてしまい、フワツとした髪型が特徴で首に水色のバンダナを巻いた薄いピンク色の色っぽい鳥の少女と稲妻の形をした髪型が特徴で首に紫色のバンダナを巻いたオレンジ色の鳥の少年がクルリンを茶化す。

クルリン

「何を言ってるんだ！元はと言えばお前達がママに内緒で勝手に遊びに行くから……………」

ホヨリン

「い、ごめんなさい……………」

フワリン

「だって、最近パパもママも何処にも遊びに連れてってくれなかったからフワ……………」

クルリンが少し怒って声を張ると、坊主のような丸い頭が特徴で首に紫色のバンダナを巻いた大柄で水色の鳥の少年ホヨリンと頭にピンク色の風船を付けてフワフワと宙に浮いている首に緑色のバンダナを巻いた小柄で黄緑色の鳥の少年がガツカリした表情を浮かべながら俯いてしまう。

クルリン

「た、確かにパパもママも最強は仕事や家事とかで忙しくて遊びに連れてってくれなかったけど……………」

ヒヨコリン

「ねえ、折角だからお兄ちゃんも此処で僕達と一緒に遊ぼうよ!」

クルリン

「えっ!?!」

クルリンは頭に三本の髪の毛を生やした弟妹の中で一番小さな黄色の鳥の少年ヒヨコリンの発言に思わず耳を疑った。

クルリン

「うーん……そうだね！折角来たんだし、みんなで遊んでから帰ろっか！」

ゲキリン

「よーし！これで兄弟全員が揃った事だし、もう一度みんなであいっばい遊ぶぞー！！」

全員

「おお~~~~っ！！」

頭に髪の毛を一つに束ねてホヨリンと同じく大柄な体格で首に青色のバンダナを巻いただいたい橙色の鳥の少年が元氣良く掛け声を上げると、その場に居る兄弟全員が更に元氣良く掛け声を上げる。

クルリン

（それにしても、一つ大事な事を忘れてるような………何だっけ？）

クルリンが困惑したような表情を浮かべながら腕を組んで深く考え込んでいると………。

ポコリン

「……………兄ちゃん、他のみんなもつ向こうに行っちゃったよ？」

クルリン

「え？いつの間に……………それじゃ、僕達も行こっか！」

ポコリン

「うん！行こっ……………わぁっと!？」

クルリンが慌てて駆け出した時、頭にタンコブみたいに丸いコブのような物があって首にピンク色のバンダナを巻いた肌色の鳥の少年<sup>ポコリン</sup>も慌てて駆け出そうとするが、その場で勢い良く転んでしまう。

クルリン

「だ、大丈夫か!？」

ポコリン

「う、うん……………何とか……………」

クルリン

「……………全く、ポコリンは相変わらず転びやすいんだから……………」

ポコリン

「うう……………そ、それより早くみんなの所へ行こっよ!」



クルリン

「うん！行くうー！」

そう言うと、クルリンとポコリンは他の兄弟達の方へと駆け出していく。

木乃香

「……………せつちゃん、ウチらの出る幕無かったね？」

刹那

「そ、そうですね……………お嬢様、これからどうしましょうか？」

木乃香

「そやね……………折角やし、このまま空の上でクラスのみんなを捜すつてのはどうやるか？」

刹那

「えっ！？こゝ、このままの状態……………ですか？」

上空でクルリン達の様子を見ていた刹那が抱き抱えたままの木乃香の発言に思わず耳を疑った。

木乃香

「……………やっぱり、アカンかな？」

刹那

「い、いいえ！そんな滅相も無い……………木乃香お嬢様が良ければ私は全然構いません！」

木乃香

「良かった……………ほなら、早速レッツゴーや」

刹那

「は、はい！」

バツサアーーーーッ！！

刹那と木乃香はお互いに嬉しそうに笑顔を浮かべながら空の彼方へと飛び立っていくのであった……………。

第九九話 飛んで！回って！また回る！??（後書き）

という訳で、今回は『くるくるくるりん』編でした。

『くるりん村』に住むクルリンという鳥の少年が『スマブラX』にもアシストフィギュアとして登場したヘリリンを使って行方不明になった弟妹達を捜し出すというゲームです。

ヘリリンが壁等の障害物に命中しないようにゴールへと目指すというゲームですが、それはまるで『イライラ棒』と思わせられます。

……それはともかく、またしても更新が遅れてしまって本当に申し訳ありません。

今、かなりのネタ切れに大変苦しんでおります……今後、また更新が遅れるかもしれませんが、それでもお付き合い頂けるのでしたら幸いです。

第一百十話　ロボと一体化！？（前書き）

ネギー一行はそれぞれのチームに分かれて行方不明になってしまった  
31Aの生徒達を捜す為にそれぞれの世界に旅立つのであった……  
…。

## 第一百話　くロボと一体化！??

くブレンドパークく

ネギとカモは真ん中に噴水が設置させてる広い公園のような場所へとやって来た。

カモ

「兄貴、どうやら此处は公園のようだな。」

ネギ

「そうみたいだね……………それじゃ、あのベンチでちょっと休もうかな。」

そう言うと、ネギは噴水の前にあるベンチにゆっくりと腰掛ける。

ネギ

「……………ふう、もう色々な世界へ回ってるから疲れちゃった……………」

カモ

「そつだよなあ、そしていつも変な事に巻き込まれちゃうしよお……………おや??」

カモがネギの隣に腰掛けて軽く愚痴を零していると、突然カモが何かを発見してベンチの下の方へと降りていく。

ネギ

「……………あれ？カモ君、どうしたの？」

カモ

「いや何、ベンチの下にこんな物が落ちててな……………」

そう言いながらカモがネギに差し出したのは、何やら青くて四角い形をした物体だった。

ネギ

「何だろう？このルービックキューブみたいな物は……………」

カモ

「きつと誰かが落としてったんだろう。」

ネギ

「それだったら、交番に届けた方がいいかな？」

そう言いながら、ネギが四角い物体を持って色々な角度で見つめて  
いると……。

？

「おい、その坊主。」

ネギ

「……………え？」

ネギが声がした方を向いてみると、そこには全身黒ずくめで仮面の  
ような物を被った二人組の男性が立っていた。

ネギ

「あ、あの……………僕に何かご用ですか？」

男A

「ちよつと聞きたいんだが、お前が今持ってる物は『ロボキューブ』  
じゃないか？」

ネギ

「ロ、ロボキューブ』って……………コレの事でしょうか？」

そう言つと、ネギは首を傾げながら手に持っている四角い物体を男

達に見せる。

男A

「それだ！大人しくその『ロボキューブ』を俺達に寄越よこしな！」

ネギ

「よ、寄越せって……コレってお二人の物なんですか？」

男B

「いいからさっさと寄越せ！！」

そう言うと、一人の男が『ロボキューブ』という物体を持ったネギの手を強く掴む。

ネギ

「痛っ！い、いきなり何をするんですか!?!？」

男B

「うるせえ！早くそれを寄越せってんだ!?!？」

カモ

(この野郎！兄貴に何しやがるんでい!?!?)



ガブツ！！

一人の男がネギの腕を更に強く握った時、カモがネギの肩から飛び出して思いつ切り強く噛む。

男B

「いででで！は、離せよこのお〜〜！！」

男は痛みのおあまりに顔を歪めながら腕に噛み付いてるカモを掴んで引き剥がそうと強く引っ張る。

ネギ

「カ、カモ君！？」

男B

「お、おい！早くこの齧イタチを引き剥がしてくれ！！」

男A

「わ、分かった！」

そう言うと、男Aが男Bの腕に強く噛み付いてるカモを無理矢理引き剥がしてしまう。

カモ

(し、しまった！俺っちとした事が……………。)

ネギ

「カモ君！……………お願いします！カモ君を離して下さい！！」

男A

「返してほしかったら早く俺達にその『ロボキューブ』を渡しな！」

男B

「ほら！さっさと渡せ！！」

そう言つて、男Aはカモの尻尾をぶら下げるように掴んで、男Bはネギから『ロボキューブ』を手渡そうと手を差し出す。

ネギ

「分かりました……………だから、カモ君に酷い事しないで下さいね？」

カモ

(あ、兄貴……………。)

カモはネギの言葉に感極まり、ネギが男Bに『ロボキューブ』を渡そうとするが……………。

？

「ちよつと待った!!」

全員

「!?!」

その場に居る全員が声をした方を向いてみると、そこには金髪で小さな眼鏡を掛けた黒人の青年と長い青色のツインテールのような髪型が特徴の少女が立っていた。

男B

「な、何だ!?!お前らは……………」

？

「俺達は『スタイルハーツ』所属のバウンティハンターさ!」

男A

「ス、『スタイルハーツ』だと!?!」

男Aは金髪の青年の言葉を聞いて一瞬だけ驚愕するが……………。

男A

「…………お前、知ってるか？」

男B

「いや、全然知らねえ。」

ズルツ！！

男達の言葉を聞いた金髪の青年はその場で勢い良くズッコケてしま  
う。

？

「し、知らないだと！？それじゃ、このハリー様の事も知らないっ  
てか！？」

男A&B

「ああ、全く知らねえ。」

ズルツ！！

ハリーと名乗った青年は即答した男達の言葉を聞いて再び勢い良く

ズッコケてしまう。

ハリー

「お、俺も地に落ちたもんだな……………」。

そう言いながら、ハリーは這い上がるようにゆっくりと起き上がる。

？

「ハリー、しっかりして……………彼が居ない今は貴方が頼りなんだから……………」。

ハリー

「おっと！そうだったな……………お前ら！こんな子供からロボを奪い取るうとするなんて恥ずかしくないのか！？」

男A & B

「な、何だとお！？」

二人の男達はハリーの言葉を聞いて怒り出してしまい、男Aは思わずカモの尻尾を掴んでいた手を離してしまう。

ネギ

「カ、カモ君！大丈夫だった？」

カモ

「ああ！どつって事ねえさ……………」

カモが素早くネギの方へと駆け寄ると、ネギが安堵の表情を浮かべながらカモを抱き抱える。

ハリー

「フツ、悔しかったら俺と『カスタムロボ』で勝負するか？」

そう言うと、ハリーは懐からネギが今持ってるのとはほぼ同じ『ロボキューブ』を取り出す。

男A

「ほお、面白い……………やってやるっじゃないか！」

男B

「おつよー！」

二人の男はハリーの言葉を聞いて怪しい笑みを浮かべた後、こちらも同じように懐から『ロボキューブ』を取り出す。

ハリー

「フツ、俺の『ラーバ』に勝てるかな……マーシャ、その子供を安全な場所へ避難させるんだ。」

マーシャ

「うん、分かった。」

マーシャと呼ばれたツインテールの少女はハリーの言う通りにネギの方へと駆け寄っていく。

マーシャ

「……………君、大丈夫？」

ネギ

「え？は、はい……………危ない所を助けてくれてありがとうございませす！」

そう言うと、ネギはマーシャに向かって深々と丁寧にお辞儀をする。

マーシャ

「ど、どう致しまして……………それより、此処は危険だから私と一緒に安全な場所へ行きましょう。」

ネギ

「で、でも……………」

ハリー

「それじゃ、早速ダイブしてバトルしようぜ！」

男A & B

「おう！！！」

ピカアーーーーーッ！！

次の瞬間、ハリーと二人の男が立ってる地面から強い光が発せられる。

ネギ

「な、何が起こってるんですか？」

マーシャ

「彼らは『カスタムロボ』でバトルする為にそれぞれの自分のロボにダイブしたの。」

ネギ

「『カスタムロボ』……………ダイブ……………一体何の事ですか？」



マーシャ

(……………どつやら、この子は『カスタムロボ』について何も知らないようね……………。)

マーシャは聞き慣れない単語に戸惑うネギを見て思わず軽く溜め息を付けてしまう。

マーシャ

「私達コマンダーは『カスタムロボ』を操って他のコマンダー同士と闘うの……………その為には自分が愛機してる『カスタムロボ』とダイク……………つまり、ロボと心を一つにする必要があるの。」

ネギ

「な、成程……………大体の事は理解出来ましたが、その『カスタムロボ』というのは何処にあるんですか？」

マーシャ

「今君が手に持つてる物が『カスタムロボ』よ。」

ネギ

「えっ!?!?」このルービックキューブみたいな物が……………。」

マーシャの言葉を聞いたネギは耳を疑いながら左手に持つてる『ロボキューブ』を見つめる。

マーシャ

「そう、普段はその『ロボキューブ』として収まってるけど、『ホロセウム』に行くと『カスタムロボ』に変型するの。」

ネギ

「『ホロセウム』？」

ネギはマーシャの口から出た聞き慣れない単語に首を傾げてしまう。

マーシャ

「『ホロセウム』とは、私達コマンドーの記憶や思想で作られるバーチャルの世界……そこで『カスタムロボ』同士が激闘を繰り広げるの。」

ネギ

「そ、それじゃ……………今まさに死闘が繰り広げられてる訳ですか……………」

カモ

(……………とても、そうは見えねえけどな……………)

そんな事を思いながら、カモは未だに険しい表情を浮かべながら光っている地面に立ち尽くしているハリーと二人の男達を怪訝そうな表情で見つめる。

ハリー

「……………うぐっ!？」

すると、突然ハリーが目を瞑ったまま苦しそうな表情を浮かべる。

ネギ

「あれ?あの人、何だか苦しそうな顔してるような……………」

マーシャ

「恐らく、ハリーはバトルに苦戦してるのね……………バトル中に『カ  
スタムロボ』がダメージを受けるとダイブしたコマンダーも精神的  
にダメージを受けるの。」

カモ

(成程なあ、正にロボと一心同体って訳か……………)。

そう思いながら、カモが未だに苦痛の表情を浮かべるハリーを見て  
いると……………。

ハリー

「くっ！やはり二対一だとかかなりキツイな……………マーシャ！頼む！加勢してくれ！！」

マーシャ

「分かった！……………君、しばらく此处を動かないでね。」

そう言うと、マーシャは懐からハリー達と同じような『ロボキューブ』を取り出す。

ピカアーーーーーッ！！

ネギ

「うわっ！？」

すると、マーシャが先程まで立っていた地面から急に強い光が発せられる。

ネギ

「……………えっと、『カスタムロボ』にダイブしてホロ何とかって世界に行ったんだっけ？」

カモ

「ああ、この姉ちゃんの説明通りならな……。」

ネギとカモは再び怪訝そうな表情を浮かべながら目を瞑りながら意識を集中させているマーシヤを見つめる。

カモ

「……………兄貴、これからどうするっ？」

ネギ

「うーん、どうするって言われても……………」。

そう言って、ネギがこれからどうするか悩んでいると……………。

マーシヤ

「……………うっ！？」

ネギ&カモ

「！？」

突然、マーシヤが先程のハリーと同じように苦痛の表情を浮かべる。

カモ

「あ、兄貴……」じりゃひょつと……」。

ネギ

「う、うん……きっとお姉さんもバトルに苦戦してるんだ……」。

「

マーシャ

「ハアハア……ああん!!」

更にマーシャは息を荒くしながら喘ぎ声に似た叫び声を上げる。

カモ

「お、おいおい……まるで嫌らしい事をされてるみてえだな……」。

「…」。

ネギ

「な、何を言ってるんだよ!こんな時に……お姉さん!大丈夫で  
すか!?!」

ネギはカモの素っ頓狂な発言に少し動揺するも、すぐに冷静さを取り戻して慌ててマーシャの肩を掴むと……」。

ピカアーーーーッ!!

ネギ&カモ

「！！！？？」

突如、ネギが立っている地面からも強い光が発せられる。

ネギ

（あ、あれ？どうしたんだろう……急に意識が……遠退いて……いく……。）

すると、ネギがマーシャの肩を掴んで『ロボキューブ』を持ったまま虚ろな目で俯いてしまう。

カモ

「お、おい兄貴！急にどうしたんだ！？返事をしてくれよ！！」

カモはネギの異変を感じ取れると、必死にネギの肩を揺らしながら懸命に呼び掛ける。

くホロセウム・チエックメイトエイジく

ネギ

「うーん……………あれ？僕は一体……………」

漸くネギが意識を取り戻すと、長い壁が菱形のようになって所々にベルトコンベアが配置されてる空間のような少し狭い場所に佇んでいた。

ネギ

「此処は何処だろう？それに、僕はどっやって此処へ来たんだっけ……………ん！？」

ネギはふと自分の両手を見てみると、四角い銃口のような形をした右手と大砲のような筒状の形をした左手になっていた。

ネギ

（な、何！？この手は……………僕、一体どうなっちゃったんだだろう？）

ネギは自分の姿が背中に羽根のような赤いパーツを付けて口はマス



クのような物で覆われてる青年のような顔付きのロボット（レイムk？）になっていると気付かずに戸惑っていた。

ネギ

（いや、待てよ……………ひょっとして此処はさっきのお姉さんが言っていたホロ何とかという世界じゃ……………。）

ボツカアーーーーン！！

ネギ

「な、何だ！？」

レイ（ネギ）は突然聞こえてきた大きな爆発音に反応して振り向いてみると……………。

ガツシャーーーーーン！！

突如、緑色の迷彩柄で顔の部分に眼鏡のようなパーツを付けた男性型のロボット（ラーバ）と水色で耳の横に張り出した羽根のようなパーツを付けた女性型のロボット（ミルキーウェイ）が勢い良く地面に倒れ込んできた。

ネギ

(口、ロボット！？……………もしかして、コレがお姉さんが言った  
『カスタムロボ』なのかな？)

？

「ハハハハ！どうだ？もう降参した方がいいんじゃないか？」

すると、先程の二体のロボの前に茶色でゴリラのようなガタイ体格  
のロボット(メタルコング)と緑色と黄色でモヒカンヘアが特徴  
のロボット(メタルベア)が嘲笑いながら姿を現わす。

ラーバ

「う、うるせえ！誰が降参なんかするか！！」

ネギ

(あれ？今の声は……………)

ベルトコンベアで身を隠しているレイ(ネギ)がラーバが発せられ  
た声がハリーではないかと耳を疑っていると……………。

ミルキーウェイ

「そうよ！それに、貴方達が今ダイブしているその『カスタムロボ』  
は他人から無理矢理奪い取った物でしょ？そんな酷い事をする人に  
私達『スティルハーツ』は負ける訳にはいかないわ！！」

ネギ

(?!?.....ま、間違いない！今の声はお姉さんの声だ！！)

レイ(ネギ)はミルクキーウェイから発せられた声の主がマーシャだと確信して思わず飛び出しそうになってしまう。

メタルゴリラ

「そうかい.....だったら、そろそろ終わらせてやるぜ!!」

ギューイーーーーン!!

そう吐き捨てるように言うと、メタルコングが大きな両腕を広げて竹トンボのように回転させながらラーバ(ハリー)とミルクキーウェイ(マーシャ)に向かって勢い良く突っ込んでいく。

ネギ

「あ、危ない!!」

ズドドドドドドドッ!!

レイ(ネギ)はベルトコンベアから出て来て、咄嗟に右手のガンでメタルコンベアに向かって連射をする。

メタルコング

「ぐわぁー！ー！ー！！」

メタルベア

「な、何だ！？」

レイ（ネギ）が放った弾が殆どメタルコングに命中して、メタルベアは突然の出来事に驚愕する。

ラーバ

「い、今の攻撃は……もしかして、あいつが助けに来てくれたのか？」

ミルクィウェイ

「……いえ、どうやら違うみたいよ。」

ラーバ

「何だつて？」

ミルクィウェイ

「アレを見て……」。

そう言つて、ミルキーウェイ（マーシャ）はレイ（ネギ）に向かつて真つ直ぐに指差す。

ラーバ

「アレは一体誰だ？何処と無くあいつが持つてる『レイ01』に見えなくは無いが……………」

ミルキーウェイ

（まさか……………」

ラーバ（ハリー）はレイ（ネギ）の姿を見て首を傾げるが、ミルキーウェイ（マーシャ）は何かを察知しながらレイ（ネギ）を見つめる。

メタルコング

「くそお、あいつは何々だ？途中から割り込んで来やがって……………」

メタルベア

「とにかく、先にあいつを片付けちまおうぜ！」

そう言つと、メタルコングとメタルベアは真つ先にレイ（ネギ）向かつて素早く駆け出していく。

ネギ

(あわわわ！こ、こっちに来る〜！?)

ズドン！ズドン！！

動揺したレイ（ネギ）はこちらに向かって来る二体のロボに向けて咄嗟に左手からミサイル型のボムを発射させる。

ズツドオーーーーン！！

すると、レイ（ネギ）が発射させたボムがこちらにどんどん近付いて来ていた二体のロボの前で大爆発を起こす。

ネギ

(あ、当たった……………のかな?)

そう思いながら、レイ（ネギ）が不安げな表情を浮かべていると……………。

メタルゴリラ

「残念だったなー!!」

メタルベア

「見事に外れてたぜ!!」

ネギ

「!?!」

次の瞬間、メタルゴリラとメタルベアが爆風の中から勢い良く飛び出すようにレイ（ネギ）に向かって再び突っ込んでくる。

ラーバ

「マ、マズイ!このままじゃ奴らの攻撃をモロに喰らっちゃまず!!」

ミルキーウェイ

「逃げて!!」

メタルゴリラ

「もう遅い!これでも喰らええ!」

そう言うと、メタルゴリラはレイ（ネギ）に向かって拳を勢い良く振り下ろしていくが……。

スッ！！

メタルゴリラ

「な、何！？」

メタルゴリラの拳が迫る直前にレイ（ネギ）が瞬移に入って攻撃を避ける。

ネギ

「八極拳・八大招式……………絶招・通天炮！！」

ドンッ！！

メタルゴリラ

「ぐお……………っ！！？」

ガッシャー……………ン！！

メタルゴリラの腹部まで移動したレイ（ネギ）は勢い良く拳を突き出してメタルゴリラを数メートルも吹き飛ばして壁に叩き付ける。

メタルベア



(…………ば、馬鹿な!?)

ラーバ

「…………マーシャ、今何が起こったんだ?」

ミルキーウェイ

「…………彼がメタルゴリラを一撃で遠くへ吹っ飛ばした…………よう  
に見えたけど…………。」

ラーバ(ハリー)は先程の出来事に啞然とするが、ミルキーウェイ  
(マーシャ)は動揺しながらたどたどしくも出来るだけ冷静に実況  
していく。

ネギ

(…………ふう、古老師が教えてくれた拳法がこの世界でも役に立つな  
んて思ってもみなかったよ。)

そう思いながら、レイ(ネギ)が安堵の表情を浮かべていると……  
…。

メタルベア

「こ、これは紛<sup>ま</sup>れだ…………そうだ!そうに違いない!でなけりゃあ  
つがこんなチビに負ける訳がないんだあ!!!」

そう叫ぶように言うと、メタルベアはレイ（ネギ）に銃口を向ける。

メタルベア

「俺の『3ウェイガン』で始末してやる!!」

そう言って、メタルベアがガンを発射しようとした時……。

ドツカアーーーーン!!

メタルベア

「ぐわあーーーー!!」

ネギ

「!?!」

突如、何処からとも無くボムが発射されて全てのボムがメタルベアに命中してしまう。

ネギ

（今の攻撃はもしかして……。）

ラーバ

「フツ、俺達の事をすっかり忘れたのが運の尽きだったな。」

ミルキーウェイ

「もう貴方の負けは確定よ……………これ以上攻撃を受けなくなかったら大人しく降伏しなさい！」

ネギ

( やっぱりね…………… )

レイ(ネギ)はメタルベアに攻撃を仕掛けたのがラーバ(ハリー)とミルキーウェイ(マーシャ)だと確信して再び安堵の表情を浮かべる。

メタルベア

「ち、畜生……………分かったよ！俺達の負けだ！」

そう言うと、メタルベアは両手を上げながら大人しく降伏をする。

くブレードパークく

カモ

「兄貴！いい加減目を覚ましてくれよ！！」

その頃、カモは未だに意識を失ったままのネギを必死に呼び掛けている。

ネギ

「……………ハツ！？」

すると、突然ネギが意識を取り戻して勢い良く顔を上げる。

カモ

「あ、兄貴！？」

ネギ

「あれ？僕、元に戻ったのかな……………」

カモは意識を取り戻したネギに安堵の表情を浮かべるが、ネギは辺りを見回しながら首を傾げる。

カモ

「ったく、心配掛けさせやがって……急に意識を失っちゃったからビツクリしたぜ！」

ネギ

「ゴ、ゴメンねカモ君……僕、ロボットになって闘ってたんだ。」

カモ

「……は？」

カモはネギの発言の内容が理解出来ずに思わず首を傾げてしまう。

ネギ

「本当だって！手に持ってた銃でバンバン撃ったり、ミサイルを発射させたりして……。」

マーシャ

「……ねえ、お取り込み中で悪いんだけど……早くその手を離してくれない？」

ネギ

「……え？」

ネギはマーシャの声に反応して後ろを向いてみると、ネギの左手はいつの間にかマーシャの胸を掴んでいた。

ネギ

「う、うわあ〜っ!?!ご、ごめんなさ〜い!?!」

ネギは顔を真っ赤にして必死に謝りながら慌ててマーシャの胸を掴んでいた左手を離す。

マーシャ

「……………まあ、ワザとやった訳じゃないさそうだからいいけど……………」

マーシャは微かに頬を紅く染めながら聞こえるか聞こえないかぐらゐの小声で呟く。

カモ

（ムフフフ……………兄貴、どうだった?あの姉さんの胸の感触は……………。）

ネギ

（カ、カモ君ったら!変な事聞かないでよ!?!）

カモ

（いいじゃねえか、別に減るもんじゃねえしよお……………なあ、実際触ってどうだったんだよ？）

ネギ

（うーん、ちょっと小振りこびりだったかなあ……………って、何を言わせるんだよ！？）

カモ

（へへへ、やっぱり兄貴はノリがいいよなあ）

ネギ

（カ、カモ君！いい加減にしないと僕本気で怒るよ！！）

ネギとカモがマーシャ達に聞こえないように声を押し殺しながら言い争っていると……………。

ハリー

「……………おい、さっきから一人で何ゴチャゴチャ言ってるんだ？」

ネギ

「え？……………い、いえ！何でもありません！！」

ネギはハリーに声を掛けられて思わず動揺しながら慌てて弁解をする。

ハリー

「そっか、まあいいけど……そんな事より、お前スゲーよな！」

ネギ

「な、何の事ですか？」

ハリー

「決まってるだろ？さっきのバトルの事だよ。」

ネギ

「バトル……あ！いえ、その……アレはもう殆ど無我夢中でやったようなものでして……。」

マーシャ

「そう言えば、確かこの子は『カスタムロボ』について何も知らないって言ってたわ。」

ハリー

「……………へ？」



ハリーはネギとマーシャの発言を聞いて思わず啞然としてしまう。

ハリー

「……………という事は、お前は何も知らないで『カスタムロボ』にダイブしてバトルをしたってのか？」

ネギ

「は、はい……………こちらのお姉さんに触れた途端に一瞬だけ意識を失ってしまって……………気が付いたら僕はロボットになってたんです。」

マーシャ

「……………きつと、ダイブ中だった私に触れたショックでこの子は持っていた『ロボキューブ』とダイブしてしまったのね。」

ハリー

「まあ、マーシャには他の人よりも不思議な力を持つてるからそうなったとしても……………初めて『カスタムロボ』とダイブしたのになに上手くガンやボムを使い熟こなすとはな……………。」

ネギ

「い、いえ！僕は本当に無我夢中でやっただけで……………。」

ネギはあくまで無我夢中でやった事だと必死でハリーに言い聞かせる。

ハリー

「いやいや！例え無我夢中でやったとは言え、お前にはコマンダーとしての才能があるかもしれん……どうだ？お前も『ステイルハーツ』の一員にならないか？」

ネギ

「ええっ!？」

ネギはハリーの意外な発言に思わず耳を疑ってしまふ。

マーシャ

「ちょ、ちよつとハリー……。」

ハリー

「大丈夫だって、所長には俺から説明しとくから……。」

カモ

(……………兄貴、どっつするんでい?)

ネギ

(ど、どうするって勿論断るよ……………だって、僕達にはやらなければならぬ事があるしね。)

カモ

(まあ、そりゃそうだな……………。)

ネギとカモは何やら言い合っているハリーとマーシャに聞こえないように小声で話していると、ネギは意を決したようにハリーの方へと振り向く。

ハリー

「お？どうやら決心したようだな……………どうする？俺達『スティルハーツ』の一員になるか？」

ネギ

「……………申し訳ありませんが、丁重にお断りさせて頂きます。」

ハリー

「そうかそうか！丁重にお断りか……………って、何い……………！！？」

ハリーはネギの思い掛けない答えを聞いて思わず大声を上げてしま

ハリー

「な、何でだよ!? 折角のチャンスを………そりゃ、ウチの所長は酒癖が悪いし金に煩くて給料を出すのを渋ったりするけど………こんなチャンスは滅多に無いと思っぜ!」

ネギ

「き、気持ちは本当に有り難いのですが………僕にはやらなければならぬ事があるんです。」

マーシャ

「やらなければならない事?」

そう言うと、マーシャはネギの言葉に思わず首を傾げてしまう。

ネギ

「はい、あまり詳しい事は言えませんが………行方不明になってしまった友達を色々な世界………じゃなくて、色々な場所へ行って探し回っているんです。」

マーシャ

「行方不明になった友達を………捜してる………」

ハリー

「そんな事情があったのか……………悪かったな、お前の事情も知らずに勝手に勧めちまっ……………」

ネギ

「い、いえ！僕の方こそ折角のお誘いを断って……………」

マーシャ

「気にしないで、悪いのはハリーなんだから。」

ハリー

「お、おいおい！俺だけ悪者かよ!？」

ハリーはマーシャの毒舌に似た発言に思わず困惑した表情を浮かべてしまう。

ネギ

「それでは、僕はこれで失礼します……………」

そう言って、ネギはその場から立ち去ろうとするが……………。

ネギ

「……………あ！そうだ!!！」

突然、ネギが何かを思い出したように大声を上げると、慌ててマーシャの方へと駆け寄っていく。

マーシャ

「どうしたの？」

ネギ

「実はコレ、をこの公園のベンチの下で拾ったんですけど………僕の代わりに交番に届けて頂けないでしょうか？」

そう言うと、ネギは今まで持っていた『ロボキューブ』をマーシャに手渡す。

マーシャ

「………コレ、君の物じゃなかったの？」

ネギ

「はい、きっと誰かが落としたんだと思います………お願い出来ますか？」

マーシャ

「え、ええ………ちゃんと『ポリス隊』に届けておくわ。」

ハリー

(……………待てよ、それじゃコイツは他人の『カスタムロボ』とダイブしてあんなに上手く使い熟してたっつての？……………やはり、コイツにはコマンダーとしての才能があるな……………。)

そんな事を思いながら、ハリーはネギを食い入るようにして見つめる。

ネギ

「……………では、改めて僕は失礼します！」

ハリー

「お、おう！じゃあな……………」

マーシャ

「……………友達が見付かるといいね。」

ネギ

「はい、ありがとうございます！」

そう言い残すと、ネギはその場から今度こそ立ち去っていく。

ハリー

「……………あゝあ、行つちまったなあ……………あいつだったらマジでいいコマンダーになれたかもしれなかったのにな……………」

マーシャ

「フフツ、ハリーったらまだそんな事を言ってるの？」

マーシャはハリーの未練がましい言葉を聞いて思わず笑ってしまう。

ハリー

「……………さてと、俺達も事務所に帰るとするか！」

マーシャ

「その前にやる事があるでしょ？」

ハリー

「おっと！そうだったな……………まずはコイツらを『ポリス隊』に突き出さなきゃならないな。」

そう言うと、ハリーは笑みを浮かべながら縄で体中を巻き付けられてふて腐れている二人の強盗の男達の方を見つめる。



マーシャ

「それと、あの子の代わりにコレを届けてあげなきゃね。」

そう言うと、マーシャは先程ネギに手渡された『ロボキューブ』をハリーに見せる。

ハリー

「ああ、そうだな……よし、そうと決まれば急いで用事を済ませようぜ！」

マーシャ

「そうね、早く事務所に戻らないと所長と彼が心配するものね……」

こうして、ハリーは二人の男達を縛ってある縄を強く引つ張りながら、マーシャはネギに手渡された『ロボキューブ』を大事に持ちながらその場から立ち去っていくのであった……。

カモ

「……………ところで兄貴、さっきの二人に兄貴のクラスメートについて聞かなくて良かったのか？」

ネギ

「え？……………あ！忘れてた！！」

カモ

（やれやれ、これじゃ先が重いやられるぜ……………。）

そう思いながら、カモは深い溜め息を付いてしまつたのであった……………。

## 第一百話 〽ロボと一体化!?? (後書き)

という訳で、今回は『カスタムロボ』編でした！

……と言っても、舞台はリクエストがあつたGC版の『カスタムロボ・バトルレボリューション』です。

自分は『カスタムロボ』シリーズは全くプレイした事が無いので色々調べるのになんか苦労しました(汗)。

実を言うと、それが更新が遅れた理由の一つでもあるのです……  
… (苦笑)。

それから、『カスタムロボ』シリーズをプレイした事がある人は今回の話を読んでみて違和感や納得がいかない部分がありましたら遠慮なく感想欄に書いて下さい。

それと、最後に一言……… まして更新が遅れてしまって申し訳ありませんでした!! (涙)

## 第百十一話くドリルでGOーく（前書き）

ネギー一行は行方不明になった3ーAの生徒達を捜す為にそれぞれのチームに分かれて旅に出るのであった……。

## 第百十一話〈ドリルでGO！〉

〈カラクル遺跡前〉

明日菜とのどかと美空の三人はまるで遺跡のような古い建物の前へとやって来ていた。

のどか

「……明日菜さん、何だか不気味な所ですね。」

明日菜

「そ、そうね……………」

美空

「……………ふあゝ、何で私までこんな所に来なきゃなんないのぉ？」

明日菜とのどかが不気味な雰囲気が漂う遺跡を見回していると、美空が二人の後ろでつまらなさそうな表情を浮かべながら大きな欠伸をする。

明日菜

「何言ってるのよ！私達のクラスメートがバラバラになってるんだから美空ちゃんも手伝うのは当然でしょ？」

美空

「まあ、そりゃ私だってクラスのみんなの事は心配だけどさあ……  
……」

明日菜

「だったら、文句言っていないで大人しく私達と一緒に来なさい！」

美空

「はいはい、分かりましたよ〜っと。」

明日菜

「『はい』は一回……」

美空

「は~~~~~い!!」

のどか

(……………何だか、春日さんが一緒だと変に緊張しないというか落ちて着けるといっか……………。)

そんな事を思いながら、のどかは明日菜と美空のやり取りを苦笑いしながら見つめる。

明日菜

「……………それじゃ、改めて中に入るわよ！」

のどか

「は、はい…！」

美空

「……………はぁっ、もうどうにでもして……………」

明日菜の掛け声を合図にして、三人は遺跡の入口へと入っていく。

ブロロロロッ…！

キーーーーーッ…！

すると、遺跡の前にトレーラーのような巨大な赤い車がブレーキを掛けて立ち止まる。

？

「……………それじゃ、行って来るね！」

トレーラーの中からピンク色でまるで鬼の角のよう二つに丸く纏めた髪型の少女が背中に小さな赤いランドセルを背負って腹部に目や口といった顔の一部があつて両手にはドリルが備えられてる二足歩行のロボットに乗って現れる。

？

「くるり親分、くれぐれも気をつけて下されよ！」

トレーラーの窓から緑色の小さな帽子を被った長い眉毛と髭を生やした老人の男性が心配そうにくるりという名前の少女に声を掛ける。

くるり

「もう、カンブー爺ちゃんだったら………そんなに心配しなくても大丈夫だってば！」

？

「ああ、チビ助の言う通りだぜ………爺さんもいい加減に慣れるよ。」

トレーラーの運転席の窓から鍔つばの長い帽子を深々と被った少年がカンブーという名前の老人に対して皮肉めいた言葉を漏らす。

カンブー



「こりゃメンテ！そのチビ助という呼び方はやめんかい！くるり親分に失礼じゃろうが！！」

メンテ

「へいへい、分かったよ……………それじゃ、気をつけて進めよ？チビ助親分。」

くるり

「大丈夫だつて！此処には前に一度来たからね……………それより、本当にこの『カラクル遺跡』に隠された財宝があるの？」

カンブー

「うむ！間違いありませんぞ……………何せ、ワシの昔の知人がそうおっしゃってましたからのお。」

メンテ

（その知人の証言とやらも怪しいもんだな……………。）

メンテと呼ばれた少年はカンブーの自信満々な発言に何故か疑問を抱いてしまう。

くるり

「ぶ〜ん……………ま、いっか！行ってみれば分かる事だしね……………それ

じゃ、行こ！『ラセンドー8（エイト）』！」

ギューイーーーーン！！

くるりが乗っている『ラセンドー8』と呼ばれたロボットがくるりの呼び掛けに答えるかのように両手のドリルを勢い良く回転させながら遺跡の入口へと入っていく。

カンブー

「……………とうとう行ってしもうたか。」

メンテ

「心配すんなって、チビ助は俺達『レッドリル』の親分なんだからな。」

カンブー

「うむ、くるり親分の父上であり我々『レッドリル』の大親分であるラッセン殿が事故でまたまた大怪我をしてしまったからのお……………今や再びくるり親分が頼りじゃな。」

メンテ

「ああ、俺達はいつものようにこの『ビッグドリル』の中でチビ助をサポートするしかない……………」。

そう言いながら、カンブーとメンテは『ビッグドリル』と呼ばれたトレーラーの中で遺跡に入って行ったくるりを温かく見つめ続ける。

〈カラクル遺跡・内部〉

美空

「……………明日菜、一体何処まで進むの？」

明日菜達が遺跡の中を進んで数時間後、まるでやる気なさそうな表情を浮かべた美空がだらし無い声を上げながら明日菜に質問を投げ掛ける。

明日菜

「美空ちゃん、その台詞もう十回目よ……………」

美空

「だってだって、さっきから進んでも誰も見付かないし……………」

…それに、もう何時間も歩いたからくたびれちゃったし。」

のどか

「確かに、あれから随分歩いてますね……………」

明日菜

「うーん、それもそうね……………そんじゃ、此処ら辺で少し休ませよう。」

美空

「さんせ……………い！」

元気良く返事をした美空は、先程までの表情を一変させて満面の笑みを浮かべながらその場に腰掛ける。

明日菜

「やれやれ……………本屋ちゃん、私達も休みましょ？」

のどか

「は、はい。」

そう言つと、明日菜とのどかも美空に合わせてるようにその場にゆっくりと腰掛ける。

のどか

「それにしても、此処って何だか本当に不気味な所ですね……………」。

明日菜

「た、確かに……………今にも何かが出て来そうね……………」。

美空

「それだったら心配いらないって……………だって、何か出て来ても明日菜が馬鹿力でチャツチャとやっつけちゃうからね。」

明日菜

「ちよつと！馬鹿力は余計でしょ!？」

明日菜が美空の言葉に怒り出そうとした時……………。

ゴロゴロゴロツ……………。

のどか

「……………あれ？」

明日菜

「ど、どうしたの本屋ちゃん？」

のどか

「何か変な音が聞こえませんか？」

美空

「音、どれどれ……。」

そう言っつて、美空が耳を澄ませてみると……。

ゴロゴロゴロゴロッ！！

美空

「あ！本当だ！でも、一体何の音だろう……それに、何だか音が段々と近付いて来てるような……。」

明日菜

「み、美空ちゃん！前！前を見て！！」

美空

「へ？前？」

美空が明日菜に言われた通りに前の方を向いてみると、前方の通路から巨大な丸い岩が物凄いスピードでこちらに転がって来ていた。

美空

「どっぴゃ〜〜〜〜！〜！〜！い、岩があ〜〜〜〜！〜！？」

明日菜

「い、急いで逃げなきゃ……………本屋ちゃん！私に掴まって！〜！」

のどか

「は、はい…！」

そう言くと、明日菜はのどかを体ごと抱き上げてそのままダッシュで駆け出していく。

美空

「ちよ、ちよっと！置いて行かないでよ！〜！」

美空も負けずに明日菜の後からダッシュで駆け出していく。

明日菜

「それにしても、この岩は一体何なのよ！〜？」

美空

「さあね！某アクション映画じゃあるまいし……それより、私は一足先に行かせて貰うからね！」

明日菜

「え！？ま、まさかアンタ……………」

美空

「そついう事！』かそくそーち』！！」

ドドドドドドドドドドドツ！！

次の瞬間、美空はアーティファクトで先程とは全く比べ物にもならない位に物凄いスピードで駆け出していく。

美空

「そんじゃ、おっ先に—————っ」

明日菜

「コ、コラーツ！一人だけ先に逃げるな—————っ  
！！」



明日菜の訴えも虚しく、美空はそのまま物凄いスピードで駆け出していくのであった……。

のどか

「……………春日さん、行ってしまいましたね。」

明日菜

「このお〜！後で覚えてなさいよお〜！！！」

そう言いながら、明日菜は怒りの表情を浮かべてのどかを抱き抱えたままさつきよりももっと速くダッシュしてどンドン迫って来る岩から逃れようと駆け出していく。

のどか

「あ、明日菜さん……………私を抱き抱えたまま走ってて大丈夫なんですか？」

明日菜

「だ、大丈夫……………ほら、私って勉強は出来ないけど運動が得意ですよ？だから……………これぐらい入っちゃらよ……………」。

のどか

（でも、明日菜さんの息遣いが段々激しくなってきたような……………）。

のどかの思った通りに、明日菜の息遣いは走っていく度に段々と激しさを増していく。

明日菜

（ヤ、ヤバイ……………やっぱり本屋ちゃんは軽いけど、いつまでも抱き抱えたまま走ってたら段々息が……………。）

ガッツ！！

明日菜

「わぁっ!?!」

のどか

「きゃっ!?!」

バタア————ツ!!

すると、明日菜が落ちてた小石に躓いてしまい、のどかを抱き抱えたまま前方に転んでしまう。

明日菜

(し、しまったー！)

のどか

(も、もう駄目……。)

そんな事を思いながら、明日菜とのどかが観念したかのように目を瞑った瞬間……。

くるり

「どりゃーっ……！」

ギューーーーーー……！！

明日菜&のどか

「！？」

突然、『ラセンドー』に乗ったくるりが飛び出して来て、両手のドリルを突き出したまま回転させて岩に突っ込んでゆく。

明日菜

(ア、アレは……。)

のどか

(子供……ですよね?)

くるり

「もっとドリルの回転速度を上げなきゃ……………回転速度・レベル2  
!」

ギューイーーーーン!!

明日菜とのどかが唾然とした表情を浮かべながらくるりを見ていると、『ラセンダー』の二本のドリルの回転速度が更に増していき段々と岩に**軋**が生じる。

明日菜

(う、嘘!?岩に軋が……………。)

のどか

(凄い……………あんな小さなドリルだけで……………。)

くるり

「よし、もう一息だ……………回転速度・レベル3!!」

ギューイーーーーン!!

バツカアーーーーン!!

そして、『ラセンダー』の二本のドリルの回転速度が最大限までに達していくと岩が粉々に砕け散っていく。

くるり

「ふう、一丁あがりってね……………ん？」

くるりは地面に上手く着地して軽く一息付いていると、未だに啞然とした表情を浮かべている明日菜とのかと目を合わせてしまう。

くるり

「お姉ちゃん達は誰？こんな所で何してんの？」

のか

「え！？わ、私達はその……………。」

明日菜

「わ、私達は只ただの通りすがりの女子中学生よ……………それより、貴女こそ一体何者なの？」

くるり

「あたし？あたしの名はドリ・くるり、『レッドリル』という盗賊団の親分だよ！」

明日菜&のどか

「と、盗賊団!？」

明日菜とのどかはくるりの爆弾発言(？)に思わず耳を疑ってしま  
う。

くるり

「おっと！盗賊と言っても、あたしら『レッドリル』は貧しい人から物を奪い取ったり傷付けたりしないからね。」

明日菜

「いや、そんな事よりも……本当に貴女が盗賊の親分なの？」

くるり

「本当だよ！そりゃ、今はあたしの父ちゃんが  
大親分なんだけど…  
…将来は立派な『レッドリル』の親分になるんだから！」

のどか

(こ、こんなに小さな女の子が……将来は盗賊の親分になりな  
って普通言っかな?)

明日菜とのかはくるりの将来の夢を聞いて心の中で思わず疑問を浮かべてしまう。

明日菜

「……………ところで、さっきから気になってるんだけど……………そのロボットみたいな乗り物は何？」

くるり

「え？あゝ、コレね……………コレはあたし用にカスタマイズされた『ラセンダー8』という操縦型工業ロボットだよ。」

のどか

「ロボットって……………ロボットの事でしょうか？」

明日菜

「そのようね……………それにしても、その『ラセンダー』ってロボットのドリルは凄い威力だったわね。」

くるり

「そりゃ勿論！あたしの仲間のメンテがいつも整備してくれて……………」

…。

プーッ！ー！プーッ！ー！

ピーッ！ピーッ！

くるりが明日菜とのどかに『ラセンダー』の性能について自慢しているとき、ラセンダーの内部から警報のような音が響き渡る。

のどか

「な、何の音でしょうか？」

くるり

「あーきつとカンブー爺ちゃん達からだ……もしもし、こちらくるり！」

カンブー

『親分、先程から『ラセンダー』に搭載されてるビデオカメラから『ビッグドリル』の内部にあるモニターで様子を伺っておりますが……その娘達にあまり我々『レッドドリル』について話してはなりませんねぞー！』

メンテ

『爺さんの言う通りだぜ……ひょっとしたら、警察の回し者かもしれないからな。』

くるり

「えっ！？そ、そうなの？」



くるりは『ラセンドー』から聞こえてくるカンブーとメンテの言葉を聞いて、耳を疑いながら明日菜とのどかを見つめる。

明日菜

「ち、違うわよ！私達は警察の回し者なんかじゃ……………」。

くるり

「……………それじゃ、お姉ちゃん達も此処の財宝を狙ってんの？」

のどか

「財宝？」

のどかはくるりの発言に「早く耳を傾ける。」

カンブー

『お、親分！財宝については内密に……………』。

メンテ

『……………爺さん、もう手遅れだようだぜ。』

カンブーが慌ててごまかそうとするが、メンテは溜め息を付いて呆れながら観念してしまふ。

明日菜

「ねえ、くるりちゃん……………この遺跡には財宝が隠されてるの?」

くるり

「……………うん。」

そして、くるりも観念したかのように明日菜の質問に対して気まずそうに答えると……………。

美空

「ぎ、財宝!?マジツスか!!?」

明日菜

「わあっ!?!」

突然、アーティファクトを使って一足先に逃げ出したハズの美空が何処からともなく明日菜の横から驚きの声を上げながら割り込むように現れる。

のどか

「か、春日さん……………いつの間に……………」

明日菜

「って言うか、さっきはよくも一人で逃げたわね！」

美空

「まあまあ、過ぎた事をいつまでも言わないの……………それより、その財宝は私らが先に頂いちゃおうよ！」

くるり

「な、何だってえ!？」

くるりは美空の唐突的な発言に驚愕しながら耳を疑ってしまふ。

明日菜

「ちょ、ちょっと!私達は宝探しに来たんじゃないのよ!？」

美空

「え、だってもうクラスメートなんて絶対に見付かりっこないし……………それに、こっちの方が楽しそうじゃん！」

明日菜

「た、楽しそうってアンタねえ……………」

のどか

「あ、明日菜さん！落ち着いて下さい……………」。

のどかは美空の短絡的な考えに我慢の限界を迎えそうになった明日菜を慌てて宥めようとする。

くるり

「言っておくけど、先に財宝を手に入れるのはあたしだからね！」

美空

「じゃあさ、一番先に財宝を発見した人が手に入れるってのはどうよ？」

くるり

「よし、その勝負やってやるうじゃないの！」

カンブー

『親分！そんな挑発に乗ってはいけませぬ！』

くるり

「だ、だって……………」。

美空

「そんじゃ、お先に失礼」

トトトトトトトトトトトト!

くるりがカンブーと話していると、美空が再びアーティファクトを使って目にも止まらぬ速さで駆け出していく。

くるり

「ああ!? 待てえ—————っ!」

すると、くるりも『ラセンドー』に乗ったまま美空に追い付く勢いで慌てて駆け出していく。

明日菜

「ちよ、ちよっと二人共!」

のどか

「ま、また行ってしまいましたね……………これからどうします?」

明日菜

「ど、ど、どとうするもどとうするも……………私達もあの二人を追い掛けるわ

よー！」

のどか

「は、はい！」

こうして、明日菜とのどかの二人も浩浩々と美空達の後を追い掛けていくのであった……………。

〈カラクル遺跡・最深部〉

のどか

「ハアツハアツ……………や、やっと二人に追い付いた……………」

数分後、明日菜とのどかは大きな石の壁の前で腕を組んで深く考え込みながら佇んでいる美空とくるりに追い付いて安堵の表情を浮かべる。

明日菜

「ところで二人共、こんな所で何してんの？」

美空

「いやあ、真っ直ぐに進んでたら行き止まりだったんだよねえ。」

「

明日菜

「行き止まりって……特に分かれ道とか無かったけど……。」

のどか

「何処かに隠し通路とかあるのでしょうか？」

くるり

「……………あれ？」

すると、石の壁を見ていたくるりが何かを発見して思わず声を出してしまっ。

明日菜

「くるりちゃん、どうしたの？」

くるり

「コレを見て。」

明日菜達はくるりが指差す先を見てみると、石の壁に小さな轍が生じていた。

のどか

「あ！この壁、小さな轍が入ってます……………」。

美空

「本当だ……………んで？これが何だったの？」

くるり

「……………ちょっと下がって。」

ギュイーーーーン！！

そう言うと、くるりが乗ってる『ラセンダー』の両手のドリルが勢い良く回転を始める。

明日菜

「え？ま、まさか……………」。



のどか

「か、壁に穴を？」

美空

「だ、大丈夫なの？穴を開けたら壁が崩れ落ちるなんて事にならないよね！？」

くるり

「心配ないって！ちょっと通り道を作るだけだから………それじゃ、『ラセンダー』発進！！」

ズボオーーーーーッ！！

『ラセンダー』が二本のドリルを突き出して壁に穴を開けると、そのまま穴の中へと突き進んでいく。

ガラガラガラガラッ！！

すると、すぐに壁が穴を開けた下の方から段々と崩れ落ちていく。

美空

「ほ、ほら！言わんこっちゃない！！！」

明日菜

「に、逃げなきゃ……………」。

のどか

「あ！？ちょっと待って下さい！」

明日菜と美空はその場から慌てて離れようとしたが、のどかに呼び止められて振り向いてみると、『ラセンダー』がドリルで穴を開けた壁だけが上手く崩れ落ちて先へ進めるようになっていた。

明日菜

「おお〜！壁だけが崩れて道が出来てる！」

美空

「よっしゃ！これで先に進めるぞ〜！」

そう言うと、美空が一足先に壁の向こう側の方へと駆け出していく。

明日菜

「ったく……………本屋ちゃん、私達も行きますよ。」

のどか

「は、はい。」

明日菜とのどかも美空に続くように壁の向こう側に入っていくと……。

？

「動かないで!!」

明日菜&のどか

「!!!!??」

次の瞬間、明日菜とのどかは女性の鋭い声に反応して思わずその場で立ち止まってしまふ。

明日菜

「な、何？一体何がどうなってるの？」

美空

「あ、明日菜……………助けて……………」

くるり

「どつやら、あたし達完全に囲まれちゃったみたい……………」

明日菜とのどかは猫のような目になって小刻みに震えながら両手を上げて美空と『ラセンドー』のドリルを身構えるようになってながら前方を真っ直ぐ見据えているくるりの視線の先を見ると、バイザー付きのヘルメットを被って青い制服を着た複数のポリス達に取り囲まれていた。

？

「うふふふ、遂に追い詰めたわよ……『レッドリル』のドリ・くるりー！」

くるり

「そ、その声は………キャリー警部!？」

くるりが先程の鋭い女性の声に反応すると、ポリス達の間からキャリーと呼ばれた小さな青い帽子を被ったロングヘアースタイル抜群の女性が先陣を切るように現れる。

明日菜

「………ひょっとして、くるりちゃんの知り合いなの?」

くるり

「う、うん………キャリー警部はあたし達『レッドリル』を逮捕しようといつもしつこく追い掛けてくる『盗賊対策本部』の本部長を務めるバリバリのキャリアウーマンなの………警察内では鬼姫と恐れら

ねてるらしいよ。」

キャリアー

「だ、誰が鬼ですってえ!？」

くるりの説明を聞いていたキャリアーは鬼という単語に怒り出してしまつた。

くるり

「あ、聞こえちゃった?.....でも、そんなに怒ると顔が皺しわだらけになつちやうよ。」

キャリアー

「何ですって!?!元はと言えば貴女のせいでしょうが!！」

くるりの一言にキャリアーは先程よりも更に激しく怒り出してしまつた。

ポリスA

「キ、キャリアー警部!少し落ち着いて下さい!！」

キャリアー

「そ、そうね.....ところで、見慣れない子達と一緒に居るけど...  
...もしかして、『レッドリル』の新しい仲間かしら?」

くるり

「え？い、いや……………このお姉ちゃん達は今日たまたま此処で出会って……………」

美空

「その通りツス！私達は盗賊の一味なんかじゃありませんー！」

くるりがキャリーに弁解しようとした時、美空が大声で真つ先に仲間ではないと否定をする。

キャリー

「そ、そう……………じゃあ、『レッドリル』の仲間ではないとすると……………分かったわ！貴女達は『レッドリル』に人質として捕らわれているのね！？」

明日菜&のどか&くるり

「……………はい？」

明日菜とのどか&くるりの三人はキャリーの的外れな発言に思わず首を傾げてしまうが……………。

美空

「そ、そんなんです！私達が弱い女子中学生は凶悪な『レッドリル』に人質にされてるんです！」

明日菜

「ちょ、ちよつと美空ちゃん！急に何を言い出すのよ！？」

明日菜は美空がキャリーの発言に合わせるような爆弾発言(?)に思わず耳を疑ってしまう。

キャリー

「ムムム、まさか人質を取るなんて……見損なつたわよ！くるり！！」

くるり

「だ、だから違つてば！」

キャリー

「問答無用！大人しく投降しなさい！！！」

そう吐き捨てると、キャリーと複数のポリス達がゆっくりとくるり達に歩み寄って来る。

のどか

「……………どんどんしまじゅっ。」

明日菜

「どつするって言われても……………相手は警察だから手を出せないし……」

美空

「いや、警察はあの盗賊の子を狙ってるんだから私達は無関係だし……………」

明日菜

「美空ちゃんは黙ってて!!」

美空

「……………はい。」

明日菜の怒声に美空は遂に押し黙ってしまふ。

くるり

「こつやったら、やるしかないか……………どりゃ……………」

「……………ギューイーン!!」



ポリス達

「わあ~~~~っ!!」

突然、くるりが乗ってる『ラセンダー』の二本のドリルがフル回転させながらポリス達に勢い良く体当たりを繰り返す。

キャリー

「や、やっぱり素直に逮捕される訳が無いか……………こうなりゃ、ロンボにはロンボで対抗よ!」

そう言い残すと、キャリーはその場から何処へと立ち去っていく。

カンブー

『親分!キャリー警部が何処かに行ってしまったぞ!』

メンテ

『恐らく、『ワツパンダー』を持ち出すつもりなんだろう……………チビ助、『ワツパンダー』の壊し方はもう分かってるよな?』

くるり

「勿論!あのロンボとは何度も闘ったし……………」

ポリスB

「おりやつ!!」

ボカツ!!

くるり

「ふみゅっ!？」

くるりがメンテ達と話していると、一人のポリスが警棒でくるりの脳天を思いつ切り強く叩く。

明日菜

「あっ!?!ちよっと!子供相手に何やってんのよ!?!」

美空

「あ、明日菜?まさかとは思っけど……ひょっとして、馬鹿な事を考えてないよね?」

明日菜

「もう頭に来たわ!『アデアット』!?!」

美空

（って、聞いてねえし……。）

パァー……ッ!!

次の瞬間、明日菜は美空の言葉にも聞く耳も持たずに素早く『ハマノツルギ』を呼び出す。

明日菜

「コラー！そのアンタァ……ッ!!」

ポリスB

「へ？」

明日菜

「これでも喰らいなさぁ……い!!」

パッシー……ン!!

ポリスB

「あれえ……っ!!」

明日菜は『ハマノツルギ』でポリスを空の彼方まで吹っ飛ばしてい

く。

美空

（あゝあ、やっちゃったよ……………これじゃ私らまで逮捕されちゃうじゃない……………だけど、私はゴメンだからね……………。）

そんな事を思いながら、美空は忍び足でゆっくりとその場から立ち去っていく。

明日菜

「くるりちゃん！大丈夫！？」

くるり

「はらほろひねはれ〜？」

くるりは両目を渦巻きのようにグルグルと回して素っ頓狂な声を上げながら明日菜の質問に答える。

明日菜

「……………もしかして、頭打って可笑しくなっちゃったの？」

カンブー

『マ、マズイ！親分がこんな調子じゃ『ワッパンダー』には敵わん

ぞ！』

メンテ

『ああ、あのロンボを倒せるのはチビ助が操縦してる『ラセンドー』しか無いしな……………。』

明日菜

「……………分かったわ！私とそのロンボとやらをぶっ壊してやるわ！」

カンブー

『な、何じゃと！？』

カンブーは明日菜の予想外の発言に思わず驚きの声を上げてしまう。

メンテ

『おいおい、気持ちは分からなくも無いが……………人間がロンボに勝てる訳が……………。』

キャリアー

「ちよつと貴女！よくも可愛い部下を吹っ飛ばしてくれたわね！！」

明日菜

「！？？」

明日菜がキャリーの声に反応して振り向いてみると、そこにはパンダのような色と形式をした巨大なロンボ（ロボット）に乗ったキャリーが立ち塞がっていた。

キャリー

「どうやら、人質ってのは嘘だったようね……………こっになったら、貴女達も一緒に逮捕してあげるわ！」

そう言うと、キャリーは『ワッパンダー』に乗ったまま明日菜にゆつくりと近付いていく。

明日菜

「さ、流石に大きいわね……………でも、やるっきゃないわ!!！」

そう言って、明日菜は『ハマノツルギ』を掲げたまま『ワッパンダー』に向かって駆け出していく。

明日菜

「おりゃーっ!!！」

パッシャーっ!!！」

次の瞬間、明日菜が勢い良く振り翳した『ハマノツルギ』が『ワツパルダー』の腹部に命中するが……………。

キャリー

「……………うふふふ、それで攻撃したつもり？」

明日菜

「え！？う、嘘……………全然効いてないの！？」

明日菜は『ワツパルダー』に少しもダメージを与えていない事に驚愕しながら、その場から慌てて後退りをする。

キャリー

「そんな馬鹿デカイハリセンじゃこの頑丈なボディは破壊出来ないわよ！」

明日菜

「そう……………それじゃ、その頑丈なボディを壊せる方法とかはあるの？」

キャリー

「フフッ、それはね……………って、その手には乗らないわよ！！」

明日菜

「チツ、やっぱり駄目か……………本屋ちゃん、アレを使って!」

のどか

「はい!分かりました……………『アデアット』!」

パア……………ッ!!

のどかは明日菜の言葉を合図にして『いどのえにつき』を呼び出す。

キャリー

「な、何?いきなり本みたいなのが……………」

のどか

「キャリー警部に質問します……………そのロボットを破壊するにはどうしたらいいのですか?」

キャリー

「は?いきなり何なの……………さっきも言ったでしょ?その手には乗らないってね!」

のどか



「そうですね、分かりました……。」「

そう言っていると、のどかはゆっくりと『いどのえにっき』のページを開く。

のどか

「……………明日菜さん、そのロボットの弱点は下半身です！下半身を攻撃して下さい！」

キャリー

「ちょ、ちょっと！何故その事を！？」

明日菜

「分かったわ！ありがとう本屋ちゃん！」

キャリーがのどかに『ワッパンダー』の弱点を暴露されて激しく動揺すると、明日菜が再び『ハマノツルギ』を掲げながら駆け出していく。

キャリー

「じゃ、弱点を知ったからって良い気にならないでよね！コレで動けなくしてあげるわー！」

そう言うと、キャリーは『ワツパンダー』を両手を操縦して下半身に取り付けてあった巨大な手錠を明日菜に向かって投げ付ける。

明日菜

「こんな馬鹿デカイ手錠なんかじゃ私の動きを止められないわよ！」

そう言って、明日菜は巨大な手錠を『ハマノツルギ』を一撃で弾き飛ばしてしまう。

キャリー

「う、嘘でしょ!？」

明日菜

「覚悟おーっ!っ!！」

パツシーーーーーン!!

次の瞬間、明日菜は『ワツパンダー』の細長い下半身を『ハマノツルギ』で見事に真っ二つにへし折ってしまう。

明日菜

「よっしや!ー!！」

のどか

「や、やった！流石は明日菜さんです……………」。

明日菜は嬉しさのあまり思わずガッツポーズを取り、のどかは思わず拍手をしてみよう。

キャリー

「ま、まさかこんな子達にロンボを破壊されるとは……………でも、これで終わりじゃないのよ？」

明日菜

「え？……………あっ!？」

明日菜がキャリーの言葉に耳を傾けながら上を見上げてみると、明日菜の真上には上半身だけの『ワッパンダー』が浮かび上がっていた。

キャリー

「あっはっはっはっは！驚いた？この『ワッパンダー』は上半身だけでも機能するのよ!」

明日菜

「そ、そんなのってアリ!？」

キャリー

「大アリよ！いいから大人しく潰されちゃいなさあーーーーーい  
！！」

そうやって、キャリーは明日菜を踏み潰そうとそのまま勢い良く下降して行くのだが……。

ズボッ！！

明日菜&キャリー

「……………え？」

明日菜とキャリーは何かが嵌はまったような音に耳を疑って見てみると、そこには『ワツパンダー』の下半身を繋いでいた穴に『ラセンダー』のドリルを突っ込ませていたくるりが居た。

明日菜

「く、くるりちゃん！？もう大丈夫なの！？」

くるり

「うん！まだちょっと頭がジンジンするけど……………もう大丈夫だよ  
！」

明日菜

「そう、それは良かった……………」。

明日菜はくるりの言葉を聞いて一安心をする。

くるり

「それより、あたしが正気を失ってる間に闘ってくれてありがとう  
」！

明日菜

「え？い、いやあ……………それ程でも……………」。

くるり

「だから、今度はあたしが闘つよ！」

ギューーーーーーン！！

すると、『ラセンダー』のドリルが穴に突っ込んだまま回転していき。

キャリー

「ちょ、ちょっと！止めなさいよ~~~~!!」

くるり

「まだまだ！回転速度・レベル2!!」

ギューイーーーーン!!

キャリアの必死の制止も虚しく、『ラセンダー』のドリルの回転は更に増していく。

キャリア

「だ、駄目よ！これ以上やったら……。」

くるり

「これで止めだよ！回転速度・レベル3!!」

ギューイーーーーン!!

そして、『ラセンダー』のドリルの回転が最高潮に達して、『ワッパンダー』の耐久力が限界に近付いた時……。

ポツカアーーーーン!!

キャリアー

「きゃあー………！っ！！」

遂に限界を迎えた『ワツパンダー』は大爆発を起こして、キャリアーはそのまま空の彼方へと吹き飛んでいくのであった。

ポリスC

「キ、キャリアー警部がやられた………。」

ポリスD

「ぜ、全員退却ー！！」

そう叫ぶように言うと、残りのポリス達はその場から慌てて逃げ出していく。

カンブー

『さ、流石くるり親分！見事にキャリアー警部を撃退させましたな！』

メンテ

『だが、あのキャリアー警部がこれぐらいで諦めるとは思えないがな………。』

くるり

「うん、あたしもそう思うよ……………」。

くるりはメンテの付け足したような発言に苦笑いしながら答える。

カンブー

『さてと、それでは財宝探しの続きを……………』。

くるり

「……………いや、それは無理みたいだよ。」

カンブー

『な、何ですと!?!?』

カンブーはくるりの予想外の発言に思わず耳を疑った。

くるり

「だって、何だか『ラセンダー』の調子が悪いみたいだし……………」。

メンテ

『まあ、あれだけフルパワーで闘ってりゃ無理も無いな……………』。



カンブー

『うむ、それなら仕方あるまい……………親分、今日のところは引き上げましょう。』

くるり

「うん、分かった！遺跡の入口前で合流しよ！」

メンテ

『了解！それじゃ、また後でな……………。』

プツンッ！

くるり

「さて、そうと決まれば早く遺跡から出よつと……………とこるで、お姉ちゃん達はこれからどうすんの？」

明日菜

「そ、そうね……………本屋ちゃん、私達もそろそろ帰ろつか。」

のどか

「そ、そうですね……………此処には本当に誰も居ないようですし……………」

そう言って、明日菜達はその場から立ち去ろうとするが……………。

明日菜

「……………あれ？ところで、美空ちゃんは何処？」

のどか

「え？そう言えば、さっきから姿が見えませんか……………。」

そう言うと、明日菜達は懸命に辺りを見回すのであった……………。

その頃、美空は……………。

美空

「……………此処は一体何処ツスか？」

美空は遺跡の何処かで迷子になっていた……………。



## 第百十一話 ドリルでGOO〜（後書き）

という訳で、今回は『スクリューブレイカー・轟振どりるれろ』編でした！

愛と正義の盗賊『レッドリル』の親分の娘であるくるりが怪我で療養中の父に代わって悪の組織『ドクロラー』から奪われた家宝の『レッドダイヤ』を取り戻す為に『ラセンダー8』に乗って敵を倒しながら突き進んでいくドリルアクションゲームです！

このゲームはドリルを使用すると振動が起きて振動を体感出来るというのが特徴です。

まあ、実際にプレイしてみれば分かりますが……………（汗）。

…………… 因みに、最近更新が遅い理由の一つはネタ切れというのは何度かお伝えしましたが…………… 改めてリクエストを募集したいと思います！

…………… と言っても、リクエストは今なおも募集していたのですが（汗）。

それでは、未だにどの世界に迷ってるのか決まってるのか決まってるのかゲームの生徒は……………

- ・ 雪広あやか
- ・ 村上夏美
- ・ 絡繰茶々丸
- ・ 葉加瀬聡美

・四葉五月

・ザジ・レイニーデー

……の六名です。

という訳で、再び皆様のご応募をお待ちしております！

第百十二話 侍と糸目の忍者少女（前書き）

ネギー一行はそれぞれ行方不明になってしまった3ーAのクラスメイトを捜し出す為にそれぞれのチームに分かれて色々な世界に旅をするのであった……………。

## 第一百十二話 侍と糸目の忍者少女

〔村雨町・城下町〕

木乃香と刹那はまるで江戸時代を彷彿とさせる城下町にやって来ていた。

木乃香

「わあ、此処つてまるで修学旅行の時に行った『シネマ村』みたいやなあ……………ねえ、せつちゃんもそう思わへん？」

刹那

「そうですね、まるで江戸時代へタイムスリップした気分です……………」

そう言いながら、刹那と木乃香は町の人々の視線を集めながら町中へと歩いていく。

木乃香

「……………せつちゃん、ウチらさっきから見られてるような気がするねんけど……………」

刹那

「無理もありません……………私達二人と町の人達の服装が明らかに違いますからね……………」

木乃香

「それはそうかもしれへんけど……………何だか、メツチャ恥ずかしいわぁ……………」

そう言うと、木乃香は無意識に刹那の腕に抱き着くように引っ付く。

刹那

「お、お嬢様!？」

木乃香

「え?どないしたん?」

刹那

「い、いえ……………何でもありません……………」

刹那は木乃香に腕を抱き着かれて一瞬だけ驚愕するがすぐに平静を装う。

刹那

（お、落ち着け!きつと木乃香お嬢様は不安な気持ちでいっぱいな



んだ……だから、私の腕に……その……えっと……だ、だ  
だ……抱き着いて……って、いかんいかん！お嬢様に対して、  
そのような疚やましい感情を抱いては……。（）

刹那が自分の中で激しく葛藤していると……。

木乃香

「あ！せつちゃん、あそこに茶店があるえ！」

そう言って、木乃香は刹那から離れて茶店の方へと駆け出していく。

刹那

「あ………」

刹那は一瞬だけ名残惜しそうな表情を浮かべながら嬉しそう茶店の  
方へと駆け出していく木乃香の背中を見つめる。

木乃香

「せつちゃん！此处でお団子でも食べながらちよつとだけ休も！」

刹那

「え？は、はい………」

木乃香の呼び掛けに気が付いた刹那は慌てて駆け寄ろうとするが……。

ドンッ！！

木乃香

「きゃっ！？」

突然、木乃香が通行人にぶつかって転びそうになってしまう。

刹那

「お、お嬢様！？」

ガシッ！！

すると、刹那が咄嗟に木乃香の手を取って何とか転げ落ちそうになるのを防ぐ。

刹那

「だ、大丈夫ですか？」

木乃香

「う、うん……………せっちゃんのお蔭だよ……………ありがとう。」

刹那

「い、いえ……………」

刹那は木乃香にお礼を言われて微かに頬を紅く染めるが……………。

？

「ぶ、無礼者！！」

木乃香 & 刹那

「！？」

木乃香と刹那は突然発せられた野太い怒声に一瞬驚いて振り向いてみると、そこには長い顎髭を生やした大柄な体格の浪人らしき侍の男性が立っていた。

浪人男

「それがしにぶつかっておいて謝罪の言葉も無しとは不届きな女子おなじ共め！そこへ直れなお！！」

木乃香

「い、いめんなさい……………」

刹那

「…………お言葉を返すようですが、そちらの方から木乃香お嬢様にぶつかっただのではないですか？」

刹那は浪人男の怒声に怯えている木乃香の様子を見て、思わず軽く睨み付けるような表情で言い返してしまう。

浪人男

「な、何だと！？拙者に対してそのような口振りを…………勘弁ならぬ！二人纏めて打ぶった切ぶつてくれるわ！！」

そう言うと、浪人の男は怒りに身を任せるかのように腰に差ししていた刀を取り出して今にも鞘ひを抜ひこうと身構みまえる。

木乃香

「ひいっ!？」

刹那

(くっ！相手を怒らせてしまったか…………斯かくなる上は…………)。)

そう思いながら、刹那も夕風を取り出そうとするが…………。

？

「待て！」

全員

「!？」

その場に居る全員が突然聞こえてきた男性の声に反応して振り向いてみると、少し離れた場所で白い袴はかまに紫色の衣の上に赤い上着のような物を羽織った長い髪を後ろに束ねてる侍らしき風貌の若い男性が立っていた。

浪人男

「何だ？貴様は……。」

？

「いや何、拙者はただの流浪者らうりやうでござる……それよりも、先程の出来事を拝見させて頂いたのでが……こちらの女子達しよも確しかと謝罪を述べてる故許ゆえしてやってはくれぬでござるか？」

浪人男

「何だと？拙者に対して偉そつに指図しおって……ならぬ!！」

浪人の男は自分に対して穏やかに懇願する侍の男性に苛立ちを覚えながら先程の侍の男性の頼み事を否定する。

？

「……………では、どうしろと申すでござるか？」

浪人男

「ならば、銀一枚でこの場を引くが……………どうだ？」

刹那

（ぎ、銀一枚！？何て無茶苦茶な要求を……………。）

刹那は浪人の男の無茶苦茶な要求に対して思わず耳を疑ってしまう。

？

「フツ、たかがぶつかった程度で銀一枚とは何とも虫が良い話でござるな……………」

そう呟くように言うと、侍の男性はゆっくりと浪人の男の方へと真っ直ぐに歩み寄って行く。

？

「……………それにしてもお主、随分と鬚が伸びているでござるな？」

浪人男

「何！？よくも拙者が一番気にしている事を……………許さぬ！！」

浪人の男は侍の男性の一言に怒りを露わにして、刀を鞘から抜こうとして手を掛けた瞬間……………。

シュツ！！

浪人男

「！！？」

次の瞬間、侍の男性が腰に差していた刀から素早く鞘を抜いて浪人の男の首を掠めるように長い顎髭を切り裂いてしまう。

刹那

（は、速い！？）

刹那は侍の男性の素早い剣捌きに思わず驚愕してしまふ。

？

「髭剃り両銀一枚……………といつのはどうつていけるか？」

浪人男

「……………」

浪人の男は侍の男性との実力の差に頭から大量の汗を流しながら黙  
り込んでしまう。

浪人男

「……………い、いやあ〜！拙者も丁度鬚を剃ろうと思っていたところ  
でなあ……………これで貸し借り無しって事で御免！」

そう言い残すと、浪人の男は苦笑いを濃く浮かべながら必死でその  
場から立ち去っていく。

？

「フン、集たかりをする等武士の恥でござるな……………」

木乃香

「わあ〜！まるで時代劇みたいやなあ〜！！！」

パチパチパチパチッ！！



木乃香は先程の出来事に興奮しながら思わず拍手をしてしまう。

？

「……ところでお主達、お怪我はござらぬか？」

刹那

「は、はい！私も木乃香お嬢様も大丈夫です……それよりも、先程は助けて頂いてありがとうございます！」

木乃香

「ホンマにありがとうございます！」

木乃香と刹那は侍の男性に向かって感謝の言葉を述べると、ほぼ二人同時に深々と頭を下げる。

？

「いやいや、拙者は武士として当然の行いをしたまででござる……

…それに、お主達が無事で何よりでござるよ。」

そう言って、侍の男性は持っていた刀を鞘に収めて木乃香と刹那に背を向けるようにゆっくりと立ち去ろうとする。

刹那

「ま、待って下さい！せめてお名前を……………」

？

「名前でござるか？名乗る程の者では無いのでござるが……………拙者の名は鷹丸と申すでござる。」

刹那

「鷹丸さん……………私は桜咲刹那と申します。」

木乃香

「ウチは近衛木乃香だよ。」

鷹丸と名乗る侍の男性が自己紹介すると、木乃香と刹那も鷹丸に軽く自己紹介をする。

木乃香

（あ！そうや……………せつちゃん、鷹丸さんにウチらのクラスメートを見掛けへんかったか聞いてみよ？）

刹那

（そ、そうですね！先程の出来事ですっかり忘れてました……………。）

突如閃いた木乃香が鷹丸に聞き取れないように刹那に小声で提案す

ると刹那は思い出したかのように苦笑いを浮かべながら承諾する。

鷹丸

「……二人共、何を話しておるのでござるか？」

刹那

「い、いえ……鷹丸さん、貴方にお聞きしたい事があるのですが……。」

鷹丸

「ほお、何でござるか？」

刹那

「それは……。」

不思議そうに首を傾げる鷹丸に刹那が訳を話そうと口を開くと……。

鷹丸

「……待った。」

刹那

「え？」

鷹丸

「こんな町の真ん中で立ち話も大儀たいぎであろうし、あちらの茶店で話を聞くでござる。」

そう言うと、鷹町は先程木乃香と刹那が立ち寄りとした茶店に向かって指を差す。

木乃香

「そや！ウチら、あの茶店で一服しようと思ってたんやったわ。」

鷹丸

「ですが、宜しいのでしょうか……実を言うと、私達は一銭いっせんも持って無いんです。」

鷹丸

「何、団子代ぐらい拙者が支払うでござるよ。」

木乃香

「という事は、奢ってくれるん？」

刹那

「そ、そんな滅相ありません！助けて頂いた上に御馳走ごちそうまでして

頂く等……………」

鷹丸

「遠慮せずとも良い、これも何かの縁かもしれないぬでいけるからな……さあ、行くでいける。」

木乃香

「はい！」

刹那

「お、お嬢様!？」

木乃香が嬉しそう鷹丸の後を追うように歩き出すと、刹那も慌てて二人の後を追い掛けるように駆け出していく。

〈数分後〉

鷹丸

「……………成程、木乃香殿と刹那殿は友を捜す為に遙か遠くの異国の地から此処まで来たのでござるか……………道理で見慣れぬ衣類を着てるハズでござる。」

鷹丸は茶店の中で木乃香と刹那の二人から詳しい説明（多少話の内容を変えて）を聞いてお茶を飲みながら納得する。

木乃香

「うーん、それにしてもこの店のお団子は美味しいわあ〜」

刹那

「お、お嬢様……………あまり食べ過ぎると太ってしまいますよ……………」

刹那は美味しそうに団子を食べている木乃香を苦笑いを浮かべながら軽く注意をする。

鷹丸

（うむ、正に色気より食い気でござるな……………。）

そんな事を思いながら、鷹丸は木乃香と刹那のやり取りを見つめる。

鷹丸

「……………ところで、拙者に聞きたい事とは何でござるかな？」

刹那

「あーそ、そうでした……………まずは、こちらをご覧になって下さい。」

「

そう言うと、刹那は懐からユー・Aのクラス名簿のコピー用紙を取り出して鷹丸に見せる。

刹那

「この顔写真の中で見覚えのある顔はありますでしょうか？」

鷹丸

「どれどれ、拝見させて貰うでござる……………」

鷹丸は刹那が差し出したクラス名簿のコピー用紙を食い入るように見つめている……………。

鷹丸

「……………ムッ！？この者は確かあの時の……………」

すると、鷹丸はクラス名簿の下半分に掲載されてるおかつぱ頭によ

うな髪型に糸目の少女の写真に注目をする。

刹那

「え？もしかして、楓に会ったんですか？」

木乃香

「何処で会ったん？」

鷹丸

「うむ、この町の城の付近で気を失って倒れていたところを拙者が偶然発見して軽く手当てをしたでござる。」

刹那

「そ、そうだったんですか……………それで、楓は今何処に？」

鷹丸

「それが、訳を聞くと行く宛てが無さそうだったので一緒に旅をしないかと尋ねたのだが……………何やら仲間と逸れたから捜さなければならぬと言いついて、まるで忍びの如く素早い動きで立ち去って行ったでござる。」

刹那

「そ、そうですか……………。」



刹那は鷹丸の説明を聞いて残念そうな表情を浮かべながら俯いてしまふ。

木乃香

「……せつちゃん、元気出して！楓さんがこの世界に居るって分かっただけでも良かったやん。」

刹那

「お嬢様………そうですね！お嬢様のおっしゃる通りです！後は楓を見付ければいいだけですからね！」

木乃香

「そうそう！ほなら、早速楓さんを捜しに行こ！」

そう言うと、木乃香は勢い良く立ち上がり刹那の手を掴んで店から出ようと急かし始める。

刹那

「お、お嬢様！？何もそんなに急がなくても………。」

木乃香

「何言ってるの？楓さんにもしもの事があつたらどないすんの？」

刹那

「いえ、楓に限ってそんな事は無いと思いますが……………」。

刹那は木乃香の発言に対して苦笑いしながら答える。

鷹丸

「確かに、拙者も少々心配でござるな……………もし良ければ、拙者にも協力させて頂きたいのでござるが宜しいかな？」

木乃香

「え？ほなら、鷹丸さんも一緒に楓さんを捜してくれるん？」

刹那

「そ、そんな！また貴方に世話を掛けさせる訳には……………」。

鷹丸

「いやいや、拙者はただお主達の力になろうと思ってる次第でござる……………それに、拙者もその楓殿とやらの安否が気になって仕方がないのでござるよ。」

刹那

「鷹丸さん……………」。

木乃香

「……………鷹丸さんってホンマに優しい人やね。」

木乃香と刹那は鷹丸の楓を思う優しさに思わず微笑んでしまう。

刹那

「……………分かりました、そこまでおっしゃるのでしたらお願いします。」

鷹丸

「そうか、礼を申す。」

そう言つと、鷹丸は木乃香と刹那に向かって軽くお辞儀を下げる。

木乃香

「ほなら、改めて楓さんを捜しに行こ！」

鷹丸

「その事でござるが、拙者に心当たりがあるでござるよ。」

刹那

「ほ、本当ですか？」

鷹丸

「うむ、そこに案内するので拙者に付いて来るぞいける。」

木乃香

「は〜い！」

こうして、木乃香と刹那は鷹丸に付いて行きながら茶店を後をするのであった……………。

〔村雨城前〕

しばらくすると、木乃香と刹那は鷹丸に連れられて大きな古い城の前にやって来ていた。

木乃香

「わあ〜、大きなお城やなあ〜！」

刹那

「鷹丸さん、随分立派な城ですね。」

鷹丸

「うむ、確かに一見すると立派な城でございますが……以前、この城である事件が起こったのでござるよ。」

刹那

「事件……ですか？」

刹那は鷹丸の言葉に首を傾げながら耳を傾ける。

鷹丸

「この『村雨城』の中に『ムラサメ』という巨大な石像が祀<sup>まつ</sup>られていたのだが……ある嵐の夜、天を引き裂くような雷鳴と共に金色に輝く謎の物体が『村雨城』に落ち、『ムラサメ』に命を与えて城を乗っ取ってしまったのでござる。」

刹那

「そ、そんな事があつたんですか……。」

木乃香

「ほんで？それからどうなったん？」

鷹丸

「城の異変に気付いた幕府が拙者を密かに『村雨城下』に派遣して、災いの根源でもある『ムラサメ』を始末するようと命令されたでござる。」

刹那

（ば、幕府にそんな重要な指命を受けるとは……………道理で剣の腕が人並み以上に優れているハズだ。）

刹那は鷹丸の説明を聞いてて、内心驚きを隠せなくなる。

木乃香

「ほんでほんで？その『ムラサキ』つちゆう悪い生物は倒せたん？」

鷹丸

「それを言うなら『ムラサメ』でござる……………勿論、拙者は『ムラサメ』によって派遣された物の怪もののけや忍者達を薙ぎ倒しながら『村雨城』に乗り込み、激闘の末に漸く『ムラサメ』を退治したでござる。」

「

刹那

「そうだったんですか……………でも、何故私達をそのような場所に連

れて来たんですか？」

鷹丸

「うむ、これは拙者の勘でござるが……先程の『ムラサメ』の話  
を楓殿にもしたところ、何やら微かに笑みを浮かべながら城を眺め  
ていたからまさかと思ってこの城に連れて来たでござる。」

刹那

（成程、確かに楓ならば興味を持って城の中に入る可能性もあるな  
……………）

そう思いながら、刹那は腕を組みながら深々と考え込んでしまう。

木乃香

「ほなら、この城の中に楓さんが居るかもしれへんって事なんやね  
？」

鷹丸

「あくまで拙者の勘でござるが……………」

刹那

「いえ、それでも調べてみる必要はあると思います……………楓はこの  
ような話には興味があるので恐らく城に入っているかもしれません  
……………」

鷹丸

「うむ、それならば早速城の中に入ってみるでござるか……………」。

そう言うと、鷹丸達は『村雨城』に向かってゆっくりと歩き出していく。

刹那

「……………ところで、この城には誰かが住んでいらっしやるのですか？」

鷹丸

「いや、『ムラサメ』を退治して以来は誰も住んでおらぬはずでござるが……………」。

木乃香

「でも、誰も居ない城の中に誰かが住んでたら怖いなあ……………」。

そんな事を言いながら、三人が『村雨城』の中へ入ろうとした時……………。

？

「待てい!…」



全員

「!!!?」

刹那達三人が突然背後から聞こえてきた何者かの声に反応して慌て振り向いてみると、そこには黒い忍び装束を身に纏った複数の男達が三人を取り囲むように立っていた。

木乃香

「わあ〜！忍者さんが沢山おるわあ〜！」

刹那

「お、お嬢様……………そんな呑気な事を言ってられる雰囲気ではないみたいですよ……………」

そう言うと、刹那は周りを取り囲んでいる忍者らしき男達を警戒しながら呑気に喜びの声を上げる木乃香を自身の背に隠すように移動する。

忍者A

「貴様が鷹丸だな？」

鷹丸

「如何にも、拙者が鷹丸でござるが？」

忍者B

「ならば、お命頂戴致す！！」

そう言つて、忍者達は懐から手裏剣や刀等を武器を取り出して鷹丸に向けて一斉に身構える。

刹那

「鷹丸さん、この人達は一体……………」

鷹丸

「恐らく、拙者を幕府の剣客けんきやくだと知つて拙者の命を狙つてる忍びの者達でござろう……………刹那殿、少し下がつてござる。」

鷹丸は刹那に下がつてると伝えると、鞘から刀を取り出して忍者達を睨み付けながら身構える。

刹那

「……………お嬢様、絶対に動かないで下さいね。」

木乃香

「え？う、うん……………」

木乃香が戸惑いながらも刹那の問いに答えると、刹那が鷹丸の隣に移動して夕凧を取り出すと鷹丸と同じように身構える。

鷹丸

「せ、刹那殿！？下がってると申したでござろうっ？」

刹那

「幾ら貴方でも、これ程の人数を相手にするのは困難です……………だから、勝手ながら私も助太刀します！」

鷹丸

「刹那殿……………」

鷹丸は刹那の助太刀したいという心意気に思わず心を動かされてしまふ。

鷹丸

「……………お主、剣の腕の方は？」

刹那

「ご安心下さい、剣に関しては自信あります。」

鷹丸

「ならば問題無し……………では、参るっ!」

刹那

「はい!」

次の瞬間、鷹丸と刹那は意を決して忍者達に向かって駆け出していく。

忍者C

「おっ!?! 奴の他にも妙な格好をした女子も掛かって来るぞ!」

忍者D

「構わぬ! 刃向かう者は纏めて討ち取ってくれるわ!」

すると、忍者達も刹那と鷹丸の方へと駆け出していくが……………。

ズツシャー……………!

全員

「!?!?!」

突然、刹那&鷹丸と忍者達との間の地面に巨大な手裏剣らしき物が  
勢い良く突き刺さる。

忍者E

「な、何だ！？この馬鹿デカい手裏剣は……。」

鷹丸

「まさか、また新たな敵襲か！？」

刹那

「いえ、アレは恐らく……。」

？

「お取り込み中で申し訳ないが、鷹丸殿や刹那殿の代わりに拙者が  
相手をするでござる。」

スッ！！

次の瞬間、手裏剣が突き刺さってる近くに茶色の忍び装束を着た細  
目の少女・長瀬楓が目にも止まらぬ速さで忽然と現れた。

鷹丸

「お、お主は!？」

木乃香

「あ! 楓さんや!！」

刹那

「やはりな……………」

鷹丸は楓の姿を見て思わず驚きの声を上げてしまい、逆に木乃香は喜びの声を上げて、刹那は楓の姿を見て予想通りだと言わんばかりに微かに笑みを浮かべる。

忍者F

「な、何者だ貴様は!？その身形みなりからすると我々と同じ忍びの者か!？」

楓

「はて? 何の事でござろうか…………拙者は忍者ではござらぬ。ニンニン」

楓は忍者の問い掛けに対して軽く口笛を吹きながら、まるで受け流すような感じで答える。

忍者G

「ええい！この際どちらでも良いわ……………直ちにそこを退け！然も無くば貴様も奴らと共に始末してくれる！！」

楓

「そうはいかないでござるなあ……………鷹丸殿には借りがある故に手を出させる訳にはいかないでござるよ。」

忍者H

「そうか……………ならば、貴様の首から先に討ち取ってくれようぞ！！」

そう言うと、忍者達は楓に狙いを定めながら改めてそれぞれの武器を手に取って身構える。

鷹丸

「か、楓殿！急いでその場から離れるでござる！！」

刹那

「大丈夫です、楓は戦闘に関しては人並みに優れていますから……………。」

楓

「あいあい 刹那殿の言う通りでござるよ……………だから、拙者に全

て任せるでござるよ。」

鷹丸

「し、しかし……………」

鷹丸の制止も虚しく、楓は目を微かに開きながら忍者達を見据える。

忍者Ⅰ

「ほお、たった一人で我々に戦いを挑むとは何とも無謀な……………」

楓

「はて？いつ拙者が一人で戦うと申したでござるか？」

そう言った直後、楓の周りから自らの分身達が明らかに忍者達よりも数多く出現する。

忍者達

「な、何!？」

鷹丸

（こゝ、これは……………分身の術!？）



鷹丸と忍者達は多数現れた楓の分身達に思わず目を疑ってしまつ。

楓

「それでは、甲賀中忍・長瀬楓……………いざ、参る!」

そう言つと、楓は分身達と共に忍者達の方へと素早く駆け出していく。

〜数分後〜

忍者A

「つぐぐぐ……………女子のクセに何て強さだ……………」

忍者B

「しかも、あの分身の数は反則だろ……………」

忍者C

「どちらにせよ、我々の完敗だ……………」

しばらくすると、忍者達はボロボロな姿で体中を縄で縛られた状態で悶絶しながら横たわっていた。

鷹丸

「驚いたな……………まさか物の数秒でこれだけの数の相手を軽く薙ぎ倒すとは……………」

楓

「いやいや、ただあの者達が修業不足なだけでござるよ。ニンニン」

刹那

(ただ単に楓が強過ぎただけだと思っが……………)

刹那は楓の呑気な発言に思わず苦笑いを浮かべてしまう。

楓

「……………それにしても、刹那殿と木乃香殿に会うのも随分久しぶりでござるなあ。」

木乃香

「せやね、ウチらも何だか久しぶりに楓さんに会ったって感じがするわぁ……………ね？せつちゃん。」

刹那

「え？そ、そうですね……………」

刹那は木乃香に不意を突かれるように声を掛けられて思わず動揺しながら答えてしまう。

楓

「……………ところで刹那殿、色々と聞きたい事があるのでござるが……………」

刹那

「ああ、分かってる……………だが、その前に私から話してもいいか？」

楓

「あいあい 構わないでござるよ。」

楓が笑顔で答えると、刹那は楓に今までの経緯を全て説明していく。

楓

「……………うむ、思ったたよりも大変な事になっているようござるぞ」

るなあ……………」

楓は刹那の説明を聞いて粗方理解すると、細目のままで口元を微妙に歪ませながら頭を抱えてしまう。

刹那

「まあ、困惑するのも無理は無い……………ただでさえ全く別の世界に  
来てしまったからな。」

楓

「そりゃ初めは少々戸惑ったでござるよ……………だけど、この世界は  
何故か拙者に合っているような感じがした故慣れるまでそんなに時  
間は掛からなかったでござるよ。」

刹那

「や、やはりな……………」

刹那は楓の呑気な発言に再び苦笑いを浮かべてしまう。

木乃香

「楓さん、さっき鷹丸さんに借りがあるって言うってたけど……………それ  
って、どういう意味なん？」

楓

「うむ、拙者がこの世界に飛ばされて気を失っていたところを鷹丸殿が助けてくれたでござるよ。」

鷹丸

「いやいや、拙者は人として当然の行いをしただけでござるよ。」

鷹丸は楓に名前を呼ばれて思わず謙遜的な態度になってしまう。

木乃香

「へえ、ほなら楓さんにとって鷹丸さんは命の恩人みたいなモンやね。」

楓

「あいあい 幾ら恩を返しても返しきれないでござるよ。」

鷹丸

「そ、それは幾ら何でも大袈裟でござるよ……………」

鷹丸は木乃香や楓の言葉に顔を紅く染めながら俯いてしまう。

刹那

「……………そんな事より、鷹丸さんに助けられた後はどうやって暮ら

してたんだ？」

楓

「いや何、拙者は普段から山で生活していた故に何も支障は無かったでござるよ？」

木乃香

「ほなら、楓さんはこの世界でも一人で山で野宿してたん？」

楓

「あいあい」

楓は刹那と木乃香の質問に対して特に気に掛ける様子も無く率直に答える。

鷹丸

「……………それでは、拙者はこれにて失礼するでござるか……………」。

そう言っつて、鷹丸はゆっくりとその場から立ち去ろうとするが……………。

木乃香

「あれ？鷹丸さん、もう行ってしまっくん？」

鷹丸

「うむ、拙者は武士として剣の腕を磨く為に旅を続けるでござる…  
……それに、楓殿が無事に見付かったので拙者も安心して旅立てる  
でござる。」

刹那

「そうですね、あれだけの腕を持ってしてもまだ腕を上げようと旅  
を続けるとは……………」

楓

「まるで誰かさんとそっくりでござるな。」

刹那

「ん？何か言ったか？」

楓

「いや、別に何も」

楓は刹那の質問に対してまるで何も言わなかったかのように再び軽く口笛を吹きながらごまかす。

鷹丸

「もし機会があればまた会えると良いでござるな……………では、これにて然らばでござる！」

そう言い残すと、鷹丸は悠々とその場から立ち去っていく。

木乃香

「鷹丸さ〜ん！ホンマにありがとう〜！〜！」

突然、木乃香が立ち去っていく鷹丸の背中を見つめながら大声でお礼の言葉を発する。

刹那

「……………それでは、私達も帰りましょう！」

木乃香

「せやね、楓さんも見付かった事やし……………。」

楓

「あいあい 拙者も久しぶりにネギ坊主達の顔が見たくなっただでござるよ。」

刹那

「楓、その事について話があるんだが……………。」



楓

「ん？何でござるか？」

楓は真面目な表情で話をしてくる刹那に少し目を開きながら見据える。

刹那

「先程私が話した館へ帰って来てある程度体を休めたら、私達と共にクラスメート捜しを手伝ってくれないだろうか？」

楓

「……………ハハハ、珍しく真剣な面持ちで話を持ち出すから何かと思えばそのような事であったか……………勿論、拙者も協力するでござるよ。」

刹那

「そ、そうか！ありがとうございます……………」

楓

「何、拙者もクラスメートの事が心配でござるから……………」

木乃香

「ほなら、話が纏まったところで改めて帰る！」

そう言うと、木乃香達三人もその場から立ち去ろうとするが……。

木乃香

「あ！せや！！」

突然、木乃香が立ち止まって何かを思い出したかのように大声を上げる。

刹那

「お、お嬢様？急にどうなされてたのですか？」

木乃香

「ウチ、楓さんに聞きたい事があったんやよ！」

楓

「ほお、何でござるかな？」

楓は木乃香に質問があると言われて少し興味津々に耳を傾ける。

木乃香

「楓さんって、鷹丸さんからあの城で起こった事件についての話を聞いたんよね？」

楓

「うむ、確かに聞いたでござるよ……いやあ、中々興味をそそる話でござったなあ。」

楓は木乃香の質問に満面の笑みを浮かべながら嬉しそうに答える。

木乃香

「ほんでな、楓さんはその城に入ったん？」

楓

「む？何故そのような事を聞くでござるか？」

木乃香

「だって、ウチらあの城に入り損ねたんやもん……城の中がどうなってるか気になんねん。」

楓

「成程、それでそのような質問を……。」

楓は木乃香の言葉を聞いて納得したような表情を浮かべる。

木乃香

「ほんで？楓さんはあの城の中に入ったん？」

楓

「うむ、それは……。」

木乃香

「それは？」

楓

「それは……。」

木乃香

「それは？」

楓

「……秘密でしゅる」

ズルッ！！

楓のまさかの答えに木乃香と刹那はその場で勢い良くズッコケてしまふ。

刹那

（さ、散々引つ張っておいて秘密って答えるか普通……。）

木乃香

「あ〜ん！そないな事言わんで教えて〜な！！」

楓

「……さてと、そろそろ帰らないとネギ坊主達が心配するでしゅるよ〜」

そう言い残すと、楓は目にも止まらぬ速さでその場から駆け出していく。

刹那

「か、楓？一体何処へ行くんだ？そっちではないぞ！？」

木乃香

「あゝ！逃げたく！！」

木乃香と刹那は逃げるように駆け出して行った楓の後を慌てて追い掛けていくのであった……………。

## 第一百十二話 侍と糸目の忍者少女（後書き）

という訳で、今回は『謎の村雨城編』でした！

ストーリーは主人公の鷹丸が謎の宇宙生命体『ムラサメ』によって乗っ取られてしまった村雨城に忍び込んで敵を倒していくというアクションゲームです。

『ファミリーコンピュータディスクシステム』の初期に発売されたゲームで同じく発売された『ゼルダの伝説』や『メトロイド』と違ってシリーズ化されなかつたマイナーな部類に入るゲームですが、主人公の鷹丸は『キャプテン レインボー』や『戦国無双3』に特別出演しているので少し有名だと思います。

因みに、鷹丸の口調は前述の『キャプテン レインボー』や『戦国無双3』を参考にしましたが、完全に楓と被ってしまいました（苦笑）。

それから、鷹丸が浪人の男の髭を切るシーン等は某大人気アニメの映画を思いつ切り参考にしてますが………分かりますか？（汗）

リクエストはまだまだ募集中です！

第百十三話 宝島で大搜索（前編）（前書き）

今回はかなり短いです……………。



第一百三十三話 宝島で大搜索（前編）

「キャンプ島」

ネギとカモは沢山のテントが張られてる無人島へとやって来ていた。

カモ

「兄貴、何やらテントがいっぱい張ってあるぜ？」

ネギ

「本当だ……… キャンプでもしてるのかな？」

そう言いながら、ネギとカモが周りに沢山張られてるテントを見つめていると………。

？

「ちよつと、そこの君！」

ネギ

「……………え？」

ネギが女性の声に反応して振り向いてみると、そこには首元に赤い

スカーフを巻いて探検隊のような服装をした茶髪の女性が立っていた。

？

「君、見ない顔だけど……ひょっとして、最近転校してきた子かしら？」

ネギ

「え？いえ、僕は……。」

カモ

（兄貴、何だかよく分からねえけど……此処は話を合わせた方がいいんじゃないか？）

ネギ

（そ、そうかな？）

ネギが女性の言葉に対して否定しようとしたが、カモが女性に聞こえない位の小声でネギに忠告をする。

？

「え？何か言った？」

ネギ

「い、いえ！何でもありません……………そうですね！最近転校して来たネギ・スプリングフィールドと申します！」

？

「そう、ネギ君っていうの……………初めまして、私は教師のジーナよ。」

「

ネギ

「こ、こちらこそ初めましてー！」

ジーナと名乗る女性教師がネギに向かって軽くお辞儀しながら自己紹介をすると、ネギも思わず釣られて深々とお辞儀をする。

4522

ジーナ

「ところでネギ君、君は誰のチームと一緒に行動しているの？」

ネギ

「チ、チーム……………ですか？」

ネギはジーナの言葉の内容が理解出来ずに思わず首を傾げてしまう。

ジーナ

「……その様子だと、まだ決めてないようね。」

ネギ

「は、はい……………」

ジーナ

「分かったわ、私に付いて来て。」

ネギ

「え？あ、あの……………」

ジーナはネギの手を取って何処かへと歩き出していく……………。

〈キャンプ場前〉

ネギはジーナに釣れられて沢山のテントが張られている広場へとやって来た。

ネギ

「あの、ジーナ先生……今日はキャンプか何かですか？」

ジーナ

「そうよ、夏休みになるとこの『キャンプ島』で毎年クラス全員でキャンプをするの。」

ネギ

「『キャンプ島』……随分変わった名前の島ですね……。」

そう言って、ネギは苦笑いを浮かべながら周りを見回す。

？

「ジーナ先生……!!」

すると、ジーナの元に赤いベストを着た小柄で金髪の少年と茶髪で緑色のオーバーオールを着た太めな体型の少年と青い服と青い髪の毛で眼鏡を掛けた背の高い少年が両脇に沢山の薪たきぎを抱えて駆け寄って来た。

ジーナ

「あら、ディオン君にマックス君にジャック君じゃない……丁度

良いところに現れたわね。」

ディオソ

「ジーナ先生、言われた通りに薪をいっぱい集めたきたぜ！」

ディオソと呼ばれた赤いベストを着た金髪の少年が自慢げに両脇に抱えた薪をジーナに見せる。

ジーナ

「あら！随分と沢山集めたわね……………」。

マックス

「はあ、僕もうお腹が減ったよお……………」。

ジーナが三人を褒めていると、マックスと呼ばれた太めの少年がお腹を抱えながら膝を地面に着けてしまう。

ジャック

「おいおい、さっき昼飯食べたばかりじゃないか……………」。

最後にジャックと呼ばれた背の高い少年がマックスの言葉を聞いて溜め息を付きながら呆れる。

ディオオン

「あれ？ジーナ先生、その隣に居る奴は誰だ？」

ジーナ

「転校生のネギ・スプリングフィールド君よ……………君達のチームに入れてほしいんだけどいいかしら？」

マックス

「え？僕達のチームにですか？……………どうする？」

マックスは少し戸惑いながらディオオンとジャックに尋ねる。

ジャック

「僕は全然構わないけど……………ディオオンは？」

ディオオン

「俺もOKさ！一人でも多い方が楽しそうだしな。」

ジーナ

「そう、それは良かったわ……………という訳で、ネギ君はディオオン君達のチームと一緒に行動してね。」

ネギ

「は、はい！分かりました……………皆さん、宜しく申し上げます！」

そう言うと、ネギはディオン達に向かって深々とお辞儀をする。

ディオオン

「おいおい、そんなに畏まるなよ……………」

マックス

「そうそう、これから行動を共にするんだからさ。」

ジャック

「だから、そんなに固くなるなよ。」

ネギ

「は、はい！」

ネギはディオオン達三人の温かい迎え入れの言葉に元気良く返事をす  
る。

ジーナ

「それじゃ、ネギ君はこの島に来るのは初めてだし……………夕ご飯の  
支度が出るまで島を探検しに行つてらっしゃい。」



ディオオン&マックスジャケット

「は~~~~い!!」

ジーナの言葉にディオオン達三人は元気良く返事をする。

ネギ

(…………カモ君、何だかとんでもない事になっちゃったね…………。)

カモ

(うっん…………まあ、隙を見て逃げ出しゃいいんじゃないか?)

ネギ

(そ、そんな…………逃げ出すって…………。)

ディオオン

「…………おい、さっきから何一人でブツブツ言ってんだ?」

ネギ

「い、いえ!何でもありません…………。」

ネギは突然ディオオンに声を掛けられて慌てて弁解しようとする。

ジャック

「それじゃ、早速島の探索を始めようか！」

マックス

「……………その前に何か食べない？」

ディオ

「何言ってるんだよ、夕飯まで我慢しろよ……………ほらネギ、行くぞ！」

ネギ

「あっ！？ま、待って下さい……………」

ディオ達三人が一足先に駆け出していくと、その後からネギが慌てて駆け出していく。

ジーナ

「フッフ、あのネギ君って子も彼らと仲良くなれると良いわね……………」

そう呟きながら、ジーナはどんどん山の方へと駆け出していくネギ達を見送りながら微笑む。



第百十三話 宝島で大搜索（前編）（後書き）

今回は『マーヴェラス・もうひとつの宝島』編なのですが、主人公である三人の少年が海賊に誘拐されたジーナ先生を救出する為に冒険の旅に出るというアドベンチャーゲームです。

因みに、主人公の三人の少年の性格や口調は自分のイメージで描きました。

……それよりも、約一ヶ月ぐらい更新が遅れてしまった事を先にお詫び申し上げます。

別に忙しいから更新が遅れたとかじゃないのですが、他の事に熱中しているというのと自分の知らないゲームを題材にするのがこんなに難しいというのが今になって軽く悩んでいます……。

まあ、あまり言い訳ばかりしてもしようがないのですが……これから更に更新が遅れるかもしれませんが、これからも読んで頂けるのでしたら本当に幸いです。

第百十四話 宝島で大搜索（後編）（前書き）

大変お待たせして申し訳ありません……………それでは、『マーヴェラ  
ス』編の後編をどうぞ！

第百十四話 宝島で大搜索（後編）

く キャンプ島・山道く

ネギ

「……………へえ、この島でそんな事があつたんですか。」

ディオ

「ああ、そして俺達は伝説の海賊キャプテン・マーヴェリックが残した財宝『マーヴェラス』を発見したって訳さ！」

ネギはディオ達三人と共に彼らの昔話を聞きながら『キャンプ島』を探索していた。

4533

マックス

「それにしても、あの冒険から一年以上も経つのかあ……………」

ジャック

「そうそう、今思えば今までの夏休みの中で一番楽しかったよね。」

そんな事を呟きながら、マックスとジャックは昔の事を思い出しながら歩き続ける。

カモ

（本当かよ……こんな何処にでも居そうな小僧共が伝説の海賊の財宝を発見したってか？）

ネギ

（でも、嘘を吐いてるようには思えないけど……。）。

ディオーン

「……………ん？何か言ったか？」

ネギ

「い、いえ！何でもありません……………」

ネギとカモが小声で話していると、ディオーンに声を掛けられてネギは動揺しながらも弁解をする。

マックス

「ところでさあ、さっき夕方まで島を探索するって言ってたけど……………結局何処まで行くの？」

ジャック

「そうだなあ……………折角釣竿を持ってきたから海に行って魚釣りでもするか？」

そう言うと、ジャックはいつの間にか持参していた一本の釣竿をマックス達に見せる。

ディオオン

「って、いつの間に釣竿なんて持ってきたんだよ？」

マックス

「それに、ジャックって本当に釣り好きだよね。」

ジャック

「へへっ、まあね………あ！しまった………。」

ジャックが誇らしげに三本の釣竿を掲げると、いきなり何かを思い付いたかのように声を上げる。

ディオオン

「どうしたんだ？」

ジャック

「今気付いたんだけど、釣竿を三本しか持ってきてなかったんだ……。」



マックス

「それじゃ、一人だけ釣りが出来ないって事が……………」

ディオオン

「残念だなあ、この四人で誰が一番先に魚を釣り上げるか競争しようと思ったのに……………」

そう言うと、ディオオンは残念そうな表情を浮かべながら軽く落胆をする。

ネギ

「あ、あの……………僕は釣りとかがあまりやった事が無いので、皆さんだけで釣りを楽しんで下さい。」

ディオオン&マックス&ジャック

「……………」

ネギの言葉を聞いたディオオン達三人は一瞬だけ驚いた表情を浮かべながらネギを見つめる。

ネギ

(……………あ、あれ?)

ディオオン

「……………おい、今の聞いたか？」

マックス

「うん、何て健気な事を……………」

ジャック

「まだ僕達よりも年下なのに……………」

そんな事を言いながら、ディオオン達は複雑そうな表情を浮かべながらネギを見つめ続ける。

ネギ

「あ、いや、その……………」

ディオオン

「いや、皆まで言うな！俺達三人の誰かが潔く身を引けばいいだけの話なんだからな。」

マックス

「そうそう！でもさ、此処は敢えてジャックに身を引いて貰おうよ。」

ジャック

「ちょ、ちょっと待て！何で僕なんだよ！？」

マックス

「だって、このメンバーの中で一番釣りが上手いのはジャックじゃん。」

ディオ

「そうそう、だからハンデって事で此処は潔く身を引いてくれないか？」

ジャック

「うっ………そ、そういう事なら仕方ないか………。」

ジャックは渋々ながらも自ら身を引く事にした。

ネギ

「な、何だか僕なんかの為にすみません……。」

ディオ

「気にすんなって！お前はまだ新入りだしな。」

マックス

「そついつ事。」

ジャック

（はあ〜っ、僕としてはちょっと残念……………。）

ディオんとマックスがネギに笑顔を見せる中、ジャックだけが浮かない顔をしていた。

ディオ

「そんじゃ、改めて海に向けて出発だぁー!!」

マックス&ジャック

「おおー……っ!!」

ディオん達三人は掛け声と共に海に向けてどンドン歩みを進めていく。

カモ

（兄貴、あいつら結構良い奴らだな……………。）

ネギ

（う、うん……………それにあの人達、とても仲間想いだし……………。）

カモ

(おっと、早くあいつらに付いて行かねえと置いてかれちまうぜ。)

ネギ

(え？ほ、本当だ！早く追いかけないと……。)

ネギは慌ててディオオン達に追いつこうと駆け出していくのであった……。

くキャンプ島・海辺く

数分後、ネギ達は海が辺り一面見渡せる場所へとやって来た。

ディオオン

「よーし、海に到着！」

マックス

「それじゃ、早速釣りの準備だ〜！」

ジャック

「はい、コレはネギ君の釣竿だよ。」

ネギ

「あ、ありがとうございます……ん？」

ネギはジャックから釣竿を受け取ると、何かを発見して海辺の方へと見つめる。

ディオ

「どうかしたか？」

ネギ

「あの船は何でしょうか？」

マックス

「え？船って……あぁっ!？」

マックスはネギが見つめる先を見ると、海岸付近に真っ黒な髑髏マークが印されてる大きな帆を掲げた小さな船が目に入った。

ジャック

「あ、あの船ってまさか……………」。

ディオ

「とにかく、船に近付いてみよう!」

ネギ

「あ!?!ま、待って下さい!」

ディオ達三人が船に向かって駆け出していくと、ネギも慌ててディオ達を追い掛けるように駆け出していく。

マックス

「ねえ、この船はもしかして……………」。

ディオ

「ああ、間違いねえ……………キング・ブルの船だ!」

ネギ

「え?誰の船ですって?」

ディオンは船を見つめて驚きの声を上げるが、ネギは訳が分からず首を傾げる。

ジャック

「ほら、さっきの話の中でジーナ先生を誘拐した海賊の話もしただろ？その海賊の船がコレなんだよ。」

ネギ

「え？という事は……その海賊は今この島に居るって事ですか？」

マックス

「まあ、そういう事になるね。」

ディオ

「でも、何でまたこの島に来たんだろう……。」

そう呟くと、ディオンは腕を組みながら深く考え込む。

ネギ

「もしかしたら、盗んだ宝物をこの島に隠そうとしているんじゃない……。」

ディオ



「そ、それだ!!」

ネギのふと思いついた推測にディオンの思わず大声を上げる。

ジャック

「そっか、そうかもしれないな……………」。

マックス

「うん、あいつも一応海賊だしね……………」。

ディオンの

「よし、それじゃ釣り大会は中止だ！俺達でキング・ブルのお宝を頂いちゃおうぜ!!」

ジャック

「お！それいいね!!」

マックス

「賛成！何だか面白そうだしね!!」

ディオンの提案にジャックとマックスが嬉しそうに賛同する。

ネギ

「ちょ、ちょっと待って下さい！相手は危険な海賊ですよ！？」

ディオソ

「心配すんなって！キング・ブルはそんなたいした事無いしさ。」

ジャック

「それに、ほって置いたらまたジーナ先生や他のみんなが被害に遭うかもしれないし……………」

マックス

「だから、あいつをこの島から追い出す意味でも懲らしめなきゃね！」

ネギ

「で、でも……………」

カモ

（兄貴、こういう連中は一度言い出したら聞かねえからやるしかねえよ……………それによ、いざとなったら兄貴が海賊共をサクッとやつつけちまえばいいぞ。）

ネギ

（そ、そんな！カモ君まで……………。）

ネギとカモがディオン達に聞こえないように再び小声で話している  
と…………。

ディオオン

「よし、決まりだ！今から海賊キング・ブルの宝物を手に入れる  
ぞおー！！」

マックス&ジャック

「おおー……っ！！」

ネギ

「あっ！？ま、待って下さいっば……！！」

ディオオン達三人が元気の良い掛け声と共に駆け出していくと、ネギ  
も慌てて後から駆け出していく。

「キャンプ島・洞窟前」

?

「よし！この洞窟に決めたぞ！」

?

「へい！親ビン！」

『キャンプ島』の山奥にある洞窟らしき入口の前に白い髑髏マークが付いてる赤いバンダナを頭に巻いた髭面で上半身裸のガツチリした体格の大男と大きな箱を掲げた頭に青いバンダナを巻いて左目に黒い眼帯を付けた同じような顔付きで同じ赤と黒の縞模様しまのシャツを着た三つ子らしき三人の小柄な男達が立っていた。

?

「いいか？その箱の中には俺様の大事な宝物が入ってんだからな……

……絶対誰かに見付からねえように隠せよ？」

? A

「へい、分かりました！」

? B

「親ビンのお宝は俺達がきちんと隠しときます！」

?C

「俺達パッチーズに任せといて下さい！」

パッチーズと名乗る三人組は大男に向かって自信満々に胸を張る。

ディオ

(……………おっ！あいつらあんな所に居たぞ。)

その時、パッチーズ達が居る場所から少し離れた所の物陰からディオが顔を出す。

ネギ

(あの人がキング・ブルという海賊ですか?)

ジャック

(そう、そしてあの同じ顔した小さな三人組はキング・ブルの手下のパッチーズさ。)

マックス

(僕達もあいつら一人一人の名前は知らないんだ……………。)

ネギとジャックとマックスの三人もディオの背後から次々と顔を

出して様子を伺う。

ディオーン

(それより、パッチーズ達が持つてるあの箱は何だと思っ?)

マックス

(…………… 宝箱かな?)

ジャック

(うん、恐らく間違いないだろうね……………。)

そう言うと、ディオーン達三人はお互いに顔を見合わせて軽く頷く。

キング・ブル

「…………… そんじゃ、俺は向こうで小便してくっから後は任せたぞ。」

パッチーズ達

「ハイ！了解ッス！」

パッチーズ達が敬礼しながら威勢良く答えると、キング・ブルはその場から立ち去っていく。

ディオオン

(……………よし、キング・ブルの奴が何処かへ行ったぞ！)

ジャック

(残ってるのはパッチーズの三人だけか……………。)

マックス

(よし、一気にやつつけてお宝を奪っちゃお！)

ネギ

(えっ！？そ、それは幾ら何でも……………。)

ディオオン

(ネギはそこから動くなよ！)

そう言い放つと、ディオオン達三人は物陰から飛び出してパッチーズ達の方へと駆け出していく。

カモ

(あゝあ、あいつら行っちゃったぜ……………。)

ネギ

(……………しょうがない、しばらく様子を伺って危なくなったら助けよ

う。）

そう思いながら、ネギはそのまま物陰からディオンを見守り続ける。

パッチーズA

「……………さてと、親ピンが用を済ませてる間にこの箱を洞窟の中に隠すとするか。」

パッチーズB&C

「おう、そうしよう！」

そう言って、パッチーズ達は箱を掲げたまま洞窟の中へ入ろうとするが……………。

ディオンの

「ちよっと待った！！」

パッチーズ達

「な、何っ！？」

パッチーズ達がディオンの声に反応して振り向いてみると、そこにはディオンのマックス・ジャックの三人が仁王立ちの状態で立って



いた。

パッチーズA

「あっ！？お、お前達はあの時の……………」

ディオソ

「よっ！久しぶりだな。」

パッチーズB

「な、何でお前達がまたこの島に居るんだ！？」

マックス

「何でって、僕達はまたこの島でキャンプしてるだけだよ。」

ジャック

「そう言うお前達こそ、何でまたこの島にやって来たんだ？」

パッチーズC

「うっ！そ、それは……………」

パッチーズ達はジャックの質問に思わず顔色を変えてしまう。

ディオーン

「それにさ、その大事そうに掲げてる箱は一体何々だ？」

パッチーズC

「こ、これはその………な、何でもないぞー!!」

パッチーズB

「本当だぞー！親ビンの大事な宝物なんか入ってないぞー!!」

パッチーズA

「ば、馬鹿!!」

パッチーズAは慌ててパッチーズBの口を塞ぐ。

マックス

「ふうん、その箱には大事が宝物が入ってるんだ〜。」

パッチーズC

「チツ、バレちまつたら仕方がない………この箱は命に代えても絶対に渡さないからな!!」

ジャック

「だったら、僕達と勝負してみないかい？」

パッチーズA

「勝負……………だと？」

パッチーズ達はジャックの提案に首を傾げる。

ディオオン

「俺達三人を見事に捕まえる事が出来たらお前らの勝ちで、俺達を捕まえる事が出来ずにやられたらお前らの負け……………ってのはどうだ？」

パッチーズA

「フツ、面白い……………」

パッチーズB

「いいだろう！その勝負……………」

パッチーズC

「……………受けてやるうじゃないか！」

そう言い放つと、パッチーズの三人はその場でゆっくりと箱を地面に置き始める。

そう言い放つと、パッチーズ達はその場でと箱をゆっくりと地面に置く。

ディオーン

「よし！今の内に逃げるぞおーーーーー！！！」

マックス&ジャック

「おおーーーーっ！！！」

ディオンの言葉を合図に三人は勢い良くその場からそれぞれ四方八方へと駆け出していく。

パッチーズC

「あっ！？待て！！！」

パッチーズB

「逃がさないぞ！！！」

パッチーズA

「絶対に一人残らずとっ捕まえてやる！！！」

そう言い放った直後、パッチーズ達はそれぞれ標的を定めながらバ

ラバラに駆け出していく。

ネギ

「……………行っちゃった。」

すると、物陰からゆっくりとネギが姿を現わす。

カモ

「ったく、残された俺たち達はどうすりゃいいんだよ……………」

ネギ

「まあまあ、ディオンスン達が戻って来るまで待つしかないよ。」

カモ

「そつだなあ……………ところで、この箱には一体何が入ってんだろうな？」

そう言うと、カモは先程パッチーズが置いた箱の上に乗っかる。

ネギ

「だ、駄目だよカモ君！勝手に開けちゃ……………」

カモ

「だってよお、気になるじゃないツスカ〜！本当は兄貴だって気になってしょうがねえんだろ？」

ネギ

「そ、そんな事……。」

ネギがカモの追求に言葉を濁していると……。

キング・ブル

「ふい〜っ、スッキリしたぜ……ん？」

ネギ

「……………え？」

キング・ブルが気持ち良さそうな表情をしながら戻って来て、箱の傍で立ってたネギと目が合ってお互い固まってしまふ。

カモ

（ヤ、ヤベエ！あの三つ子共の親分が戻って来やがったぜ！！）

キング・ブル

「……………ハッ！？お、おい小僧！そんな所で何をしてやがる！？」

ネギ

「え？ぼ、僕は別に何も……………」

キング・ブルに疑問を投げ掛けられたネギは冷静を装って説明しようとするが……………。

キング・ブル

「そうか、分かったぞ！さては俺様の大事な宝物を奪い取りに来やがったな！！」

ネギ

「い、いえ！僕はそんなつもりは……………」

キング・ブル

「いいや！きつとそうに違いねえ……………お前みてえなガキにこのキング・ブル様の宝物を渡して堪るかってんだ！！」

ネギ

「だ、だから違いますってば……………」

キング・ブル

「問答無用！子供だからって容赦しねえ……………覚悟しやがれえ！！」

そう言い放つと、キング・ブルは勢い良く地面を蹴ってネギに襲い掛かってゆく……………。

その頃、ディオオン達はどうと……………。

パッチーズA

「ハアツハアツ……………ま、待てえ……………っ!!」

パッチーズAは激しく息切れをしながらディオオンを追い掛けていた。

ディオオン

「へへっ、俺は駆けっここでは誰にも負けた事が無いんだよ!」

パッチーズA

「く、くそお……………も、もう……………駄目……………」



ボタンー！！

すると、遂に限界を迎えたパッチーズAがそのまま倒れ込んでしまった。

ディオ

「あれ？もうダウンしたのか……何だか、張り合いが無くてつまらないなあ。」

パッチーズAが倒れ込んだ事に気付いたディオは立ち止まると同時につまらなさそうな表情を浮かべながら振り向いてみると……

マックス

「ディオーン！助けてえ~~~~~！！！」

ディオ

「……………ん？」

ディオがマックスの叫び声に似た声に反応して見てみると、思いっ切り走って逃げているマックスがパッチーズBに段々と追い付かれようとしている光景だった。

ディオオン

「あちゃ〜、マックスはあの体型だから走るのも遅いんだよなあ〜。」

「

マックス

「そ、そんな呑気な事言っていないで助けてよお……………」

パッチーズB

「へへへ、もう観念するんだな！」

パッチーズBが怪しい笑みを浮かべながらマックスを捕まえようと手を伸ばすが……………。

ディオオン

「マックス！コレを使い！！」

次の瞬間、ディオオンがいつの間にか持ち出したサッカーボールをマックスに向けて投げ付ける。

マックス

「お！サンキュー……………シュートオー……！！」

バッシーーーーーン!!

パッチーズB

「ぐふっ!？」

すると、マックスはディオンの投げたサッカーボールでパッチーズBの顔面に向けて強烈なシュートを命中させる。

パッチーズB

「ナ……………ナイスシュート……………」

バタン!!

そう呟いた直後、パッチーズBはそのまま後ろから倒れ込んでしま  
う。

ディオンの

「やったな、マックス!」

マックス

「うん、ディオンのお蔭だよ!」

パシンー！！

ディオオンとマックスは笑顔でお互いの顔を見つめながらハイタッチする。

ディオオン

「にしても、マックスは本当に見掛けの割にはサッカーが得意だよな。」

マックス

「見掛けの割にってのは余計だよ……………」

マックスはディオオンの言葉に不満げにツッコミを入れる。

ディオオン

「ところで、ジャックは？」

マックス

「え？そう言えば、さっきから見掛けないけど……………」

パッチーズC

「待てえー！ーい！ー！」

ディオオンとマックスはパッチーズCの大声に反応して振り向いてみると、パッチーズCが必死にジャックを追いつけていた。

ジャック

「ほらほら、そんなんじゃないぞ。」

「

パッチーズC

「な、何だと!? 言わせておけば調子に乗りやがってえ~~~~~」

「!!」

パッチーズCがジャックの挑発に怒りを露わにして更に勢いを付けて走り出そうとするが……………。

ジャック

「今だ……………よつと!!」

ピョーーーーーン!!

次の瞬間、ジャックが勢い良くジャンプして木の枝に掴まりそのまま枝にぶら下がる。

パッチーズC

「ゲツ!?と、止まらなあーーーーーい!!」

バツシーーーーーン!!

パッチーズCは勢いを付けて走り出したせいで、ジャックが掴まってる木に勢い良く激突してしまう。

パッチーズC

「と、止まった……。」

バタン!!

そして、パッチーズCはそのまま大の字になって倒れ込んでしまう。

ジャック

「……………ふう、上手くいったみたいだ。」

そう言うと、ジャックは枝を掴んでいた手を放して地面に着地する。

ディオ

「ジャック、今のはナイスジャンプだったぜ!」

マックス

「そうそう、ジャックのジャンプ力は相変わらず凄いよな。」

ジャック

「フツ、まあね。」

ジャックはディオんとマックスに褒められて鼻の下を指で摩りながら微笑む。

ジャック

「あれ？ところで、さっきからネギ君の姿が見えないけど……………」。

マックス

「え？そう言えば何処行っただら？」

ディオント

「……………あ！さっきの場所に置いてったままだ！！」

マックスとジャックがネギの居場所について考えていると、ディオントが一番先に思い出して思わず大声を上げてしまう。

マックス

「そ、そうだった！それに、もしあの場所にキング・ブルが戻って来たら……………」

ジャック

「大変だ！ネギ君が危ない！！」

ディオ

「急いで戻るぞ！！」

そう言うと、ディオ達三人はその場から一斉に猛ダッシュで駆け出していく。

く キャンプ島・洞窟前く

ディオ

「ゼエゼエ……………ネ、ネギー！大丈夫かー！？」



数分後、ディオオン達はネギとキング・ブルが対峙していた洞窟までやって来たのだが……。

ネギ

「あー皆さん……」無事でしたか？」

ディオオン

「……………あれ？」

マックス

「いや、」無事でしたかって……………」

ジャック

「……………っていつか、この状況は一体何？」

ディオオン達はネギが立っている場所の近くでキング・ブルが目を回しながら気絶している光景を目の当たりにして思わず絶句してしまふ。

ディオオン

「……………もしかして、ネギがキング・ブルをやっつけたのか？」

ネギ

「え！？い、いえ！僕は何も……………」

カモ

「『はい！僕がコイツをぶっ倒しました！』」

ネギ

（カ、カモ君！？）

ネギはディオン達に弁解しようとしたが、ネギの肩に乗っかっていたカモが声色を変えてネギの代わりに答えてしまう。

マックス

「マ、マジで！？」

ジャック

「まさか、君が一人でキング・ブルを……………」

ディオオン

「……………お前、チビなのに意外と強いんだな。」

そう言いながら、ディオオン達三人は驚いた表情を浮かべながらネギを見つめる。

ネギ

(カモ君ったら！何であんな事を……………。)

カモ

(いいじゃねえツスカ！実際にあいつをやっつけたのは兄貴なんだからよ……………。)

ネギ

(や、やっつけたって言っても……………あの人がいきなり襲い掛かって来たからちよつとだけ軽く突いただけだよ……………。)

カモ

(だけど、それで奴はダウンしちまったんだろ？だったら、そんなに悲観する事ねえツスよ。)

ネギ

(で、でも……………。)

ディオーン

「……………おい、またさっきから一人で何を言ってるんだ？」

ネギ

「い、いえ！何でもありませんよ！…！」

ネギとカモが再び小声で話していると、ディオんに指摘されてネギは慌てて弁解しながらデジャヴを感じる。

マックス

「……………それより、今の内にあの箱を開けてみようよ！」

そう言うと、マックスはキング・ブルの大事な宝物が入ってるという箱を指差す。

ジャック

「そうだった！すっかり忘れてたよ……………」

ディオ

「そんじゃ、早速開けてみようぜ！」

ネギ

「あーちよつと……………」

ギーーーーーッ……！！

ネギの制止も虚しく、ディオが勢い良く箱の蓋を開けるが……………。

全員

「……………へ？」

その場に居る全員が箱の中身を確認したと同時に一瞬だけ静寂になり、思わず間の抜けた声を出してしまう。

ジャック

「コ、コレが……………お宝？」

マックス

「お宝……………なの？」

ネギ

「さ、さあ……………」。

ディオ

「っていつか、コレの何処がお宝なんだよ!？」

バサアーーーーッ!!

ディオンは箱の中に大量に入ってる様々なポーズを決めているキング・ブルの写真装箱の外にバラ巻きながら大声を上げてしまう。

キング・ブル

「ああっ!?!俺様のカットコイイ姿が写っている写真達があーーーー  
!?!」

突然、いつの間にか目を覚ましたキング・ブルが空中にバラ巻かれて風に乗って飛んでいく数十枚の写真を回収しようと必死に追い掛けていく。

ジャック

「……………まさか、あんな物がキング・ブルの宝物だったなんてね。」

ディオ

「全く、宝物って言う位だから宝石とか金貨とかだと思ってたけど……………とんだくたびれ儲けだったな。」

マックス

「あゝあ、何だか急にお腹が空いてきちゃったなあ……………」

そう言いながら、ディオオン達三人は一気に力が抜けたみたいにくくりと地面に座り込んでしまう。

ネギ

「み、皆さん！元氣出して下さい……………お宝よりも皆さんが無事で良かったじゃないですか！」

ディオオン

「俺達が無事……………か。」

マックス

「そう言えば、去年の冒険の時もこんな感じだったよね？」

ジャック

「ああ、今回の冒険も何だか楽しかったなあ。」

ディオオン

「そうだな……………こんなにワクワクしたのも久しぶりだったし……………それに、何よりも今回もまたお前らと一緒に冒険が出来て楽しかったぜ！」

マックス

「ディオーン……………」

ジャック

「……………何だか、面と向かって言われると恥ずかしいなあ……………」

マックスとジャックはディオーンの感謝を込めた言葉に思わず頬を微かに紅く染めながら照れる。

カモ

（兄貴、上手く纏められたじゃないツスカ！）

ネギ

（そ、そうかな？）

ネギもカモに肘で小突きされながら小声で褒められて頭を掻きながら照れてしまう。

ディオーン

「……………さあ、もう暗くなってきたからキャンプに戻ろうぜ！」

マックス

「そうだね、僕もっお腹ペコペコだよ。」



ジャック

「それに、早く戻らないとジーナ先生やみんなが心配するしね。」

ディオ

「よっしゃ！誰が一番先にキャンプへ辿り着けるか競走しようぜ！」

マックス&ジャック

「おおーっ！っ！！」

そう言うと、ディオ達三人はキャンプ場に向かってその場から勢い良く駆け出していく。

ネギ

「……………カモ君、僕らも戻ろっか。」

カモ

「ああ、そうするか……………。」

そう言い残すと、ネギとカモはその場からゆっくりと立ち去っていくのであった……………。



第百十四話、宝島で大搜索（後編）（後書き）

という訳で、今回で『マーヴェラス』編は完結しました。

今回は主人公である三人の少年の特徴や特技を描写したつもりですが………いかがでしたでしょうか？

それにしても、まさか一つの話を書き上げるのにこんなに時間が掛かるとは思いませんでした（汗）。

それから、また読者の皆様を待たせてしまつて本当に申し訳ありませんでした！

もはや何も言い訳するつもりはありませんが………これからもこの調子で更新されるかもしれませんが、それでも読み続けて頂けるのでしたら本当の本当に幸いです！

第一百五話 巨人が住む島（前編）

バルド島

明日菜とのかの二人は海の真ん中に浮かんでいる小さな熱帯の島にやって来ていた。

明日菜

「ふう……………ねえ、本屋ちゃん。」

のか

「はい？何ですか？」

明日菜

「……………暑くない？」

明日菜は頭から大量の汗を流しながら自分の後ろを歩いている一見涼しそうな表情をしているが明日菜と同じく汗を流しているのどかに声を掛ける。

のか

「そ、そうですね……………確かに、此处はかなり暑いですね。」

明日菜

「でしょ？どつして熱帯の島ってこんなに暑いのかしら……。」

のどか

「そ、そりゃ熱帯って言う位ですから暑いのは当たり前というか……。」

明日菜

「だからって、この暑さは反則でしょー！」

明日菜は汗だくになりながら片手を掲げて大声を上げる。

明日菜

「……………にしても、美空ちゃんったら今日に限ってボイコットするなんて……………」

のどか

「それは仕方がないですよ……………春日さんは前の世界で色々走り回ったそうでクタクタだったんですから……………」

明日菜

「まあ、そりゃそうだけども……………あれ？」

のどか

「どづかしました？」

明日菜

「……………本屋ちゃん、アレって家じゃない？」

のどか

「え？家？」

のどかは明日菜が指差す先を見ると、遠くから赤い屋根の家らしき数軒の建物が目に写った。

のどか

「あ！本当だ……………あそこに村があるんでしょうか？」

明日菜

「うーん、行ってみれば分かるかもしれないわね……………本屋ちゃん、早速行ってみましょ！」

のどか

「はい！」

そう言いつと、明日菜とのどかは村らしき場所に向かって駆け出していく。

数分後、建物に向かって駆け出した明日菜とのどかは集落のよう小さな村に到着して周辺を見回していた。

のどか

「……………見たところ、普通の村のようですね。」

明日菜

「そうね……………そんじゃ、この村の人達に色々聞いてみましょ！」

のどか

「は、はい……………あ！あそこに村人らしき人が……………」

明日菜

「えっどれどれ……………」

明日菜はのどかが指差した方を見てみると、村人と思われる赤いズボンを履いて赤い帽子を被った男性とワンピースのような赤い服を着た女性の二人が楽しそうに話をしながら歩いていた。

明日菜

「あ！本当だ……よし、まずはあの二人に聞いてみよっと！」

そう言うと、明日菜は二人の村人に向かって駆け出していく。

のどか

「ま、待って下さいー！」

のどかも明日菜の後から慌てて駆け出していく。

明日菜

「あのー、ちょっとすいませんーん！」

村人A

「……………え？」

明日菜に声を掛けられた二人の村人は、その場に立ち止まって首を傾げながら明日菜とのどかを見つめる。



村人B

「どちら様ですか？」

明日菜

「え〜っと……………私達、島の外からやって来たんですけど……………」

村人A

「えっ!?!し、島の外から……………」

村人A（男性）と村人B（女性）は明日菜の発言に思わず耳を疑った。

のどか

「それで、お二人に聞きたい事があるんですが……………」

村人B

「な、何でしょうか？」

明日菜

「実は、私達人を捜してるんだけど……………この顔写真の中に見た事がある顔とか無いですか？」

そう言うと、明日菜は二人の村人に3-Aのクラス名簿のコピーを見せる。

村人A

「うーん、この村では見た事が無い顔ばかりだなあ……君はどうだ  
い？」

村人B

「そうね……ごめんなさい、私も全く見た事が無いわ……。」

のどか

「そ、そうですか……。」

のどかは二人の村人の言葉を聞いて思わず俯いてしまう。

明日菜

「うーん、この世界にも居ないのかなあ……。」

のどか

「そんな……もう少しだけこの村で捜してみましょーよー！」

明日菜

「そ、そうね……………それに、まだ居ないって決まった訳じゃないしね。」

村人 A

「それじゃ、僕達も村の人達に聞いてみます。」

のどか

「え？本当ですか!？」

村人 B

「勿論、私達にも協力させて下さい!」

明日菜

「……………ありがとう、本当に嬉しいわ!」

明日菜とのどかは二人の村人の親切な言葉に対して大いに感激する。

村人 A

「さてと、そうと決まったら他の人にも聞いてみるか……………」

?

「うん、困ったなあ……………」

のどか

「……………あれ？」

その場に居る全員が誰かの声に反応して振り向いてみると、そこには村人Aと同じ服装をした中年の男性が腕を組んで何かを考え込んでいた。

村人B

「……………あの〜、どうかしましたか？」

村人C

「いやあ〜、この辺りに家を建てようと思ってるんだけど……………この辺りは緑が少ないから建てる事が出来なくて困ってたんだ……………」

「

村人A

「それだったら、ドシンに頼んでこの辺りに木を植えてもらったらどうですか？」

明日菜&のどか

（ドシン？）

明日菜とのどかは村人Aの言葉に思わず耳を傾ける。

村人C

「そう言えば、ドシンはまだこの村に来てないようだな……………」。

村人B

「もうそろそろこの村にも来ると思いますが……………」。

ドスン！ドスン！

村人達が何やら話し込んでいると、突如地響きのような小さな振動が村の遠くから響き渡る。

明日菜

「な、何！？この振動は……………」。

のどか

「じ、地震でしょうか？」

村人A

「お！噂をすれば……………」。

村人B

「来た来た！」

明日菜とのかは突然の振動に戸惑い気味になるが、村人達は逆に待ち侘びたかのように期待を膨らませていた。

のか

「あの、何でそんなに嬉しそうなんですか？」

村人C

「ん？アンタ達はドシンの事を知らんのかい？」

明日菜

「いや、だからドシンって一体………。」

村人A

「ほら、見えて来た！」

明日菜&のか

「え？」

明日菜とのかは村人Aが指差した先を見ると………。

ドスン！ドスン！！

明日菜&のどか

「！！！？？」

明日菜とのどかの目に写ったのは、体の全体の色が黄色で長い両腕を持つ大きな巨人がまるで地響きのような足音を大きく立てながらこちらにどんどん近付いて来ていた。

明日菜

「……………ねえ、本屋ちゃん。」

のどか

「……………は、はい？」

明日菜

「ア、アレってさ……………何に見える？」

のどか

「え？え〜っと……………巨人……………でしょうか？」

村人A

「お〜い！ドシン〜ン！〜！」

村人B

「きゃ〜！いつ見ても大きいわぁ〜！！」

明日菜とのどかはドシンと呼ばれた巨人の登場に唾然としているが、村人達はドシンの登場に歓喜の声を上げていた。

明日菜

「ド、ドシンってあの巨人の事なの！？」

のどか

「あははは………私、巨人なんて初めて見ました………。」

明日菜

「って、本屋ちゃん！？大丈夫！？気をしっかり持って！！」

明日菜は上の空状態うつろで苦笑いを浮かべているのどかの目を覚ませようと肩を掴んで激しく揺さ振る。

村人C

「やぁドシン、いきなりで悪いんだけど………この辺りに木を植えてくれないか？」



ドシン

「……………」。

ドスン！ドスン！

すると、ドシンは何も言わずに村から少し離れて木がいっぱい生えている場所まで歩き出していく。

のどか

「……………あれ？巨人さんが何処かへ行ってしまったんですけど……………」。

明日菜

「え？あ！本当だ……………どうしたんだろう？」

漸く我に返ったのどかと明日菜はドシンの行動に注目していると……………。

ズボッ！！

次の瞬間、ドシンは一本の木を地面から引っっこ抜いて、その木を持ったまま明日菜達の方へと戻って来る。

明日菜

「ちよつと、木なんか持ってきてどうする気？」

村人A

「まあまあ、見てれば分かるよ。」

ズボツ！！

すると、ドシンが明日菜達の側に持っていた木を植えると今まで赤茶けていた地面が綺麗な緑色に変色していく。

村人C

「おお、ありがとう！これで此処に家を建てられるぞ。」

村人B

「流石ドシン！カッコイイ〜！！」

村人A

「いよっ！『バルド島』の救世主！〜！！」

ドシン

「……………」。

村人達がドシンに対して褒めていると、ドシンの体が少しずつ大きくなっていく。

明日菜

「……………あ、あれ？」

のどか

「明日菜さん、どうかしました？」

明日菜

「いや、あのドシンって巨人が少しだけ大きくなったような感じがしたんだけど……………」

のどか

「え？本当ですか？」

明日菜

「うーん……………いや、多分私の気のせいよ！」

のどか

「は、はあ……………」

のどかは苦笑いしながら気のせいだと言ってる明日菜に対して腑に落ちないような表情を浮かべながら首を傾げる。

ドスン！ドスン！

すると、ドシンは大きな足音を立てながらその場から立ち去ろうとする。

村人A

「おい！もう別の村へ行くのか？」

村人B

「もうちょっとだけでもこの村に居てもいいのに……………」

村人C

「まあ、彼が忙せわしないのはいつもの事だけだな……………」

村人達は立ち去っていくドシンを名残惜しそうに暖かく見送るが……………。

明日菜

「あれ？ちょ、ちょっと待って……………貴方、さっき『別の村へ行く』

って言わなかった?」

村人A

「え?あ、ああ……………この島には僕達が暮らしているこの村の他にも幾つかの集落があるんだ。」

村人B

「きつとドシンは他の村にも行って、さっきみたいに困ってる人達の手助けしに行くのよ。」

のどか

「へえ、そうなんですか……………」

明日菜

(……………という事は、クラスの誰かがその他の村に居る可能性もあるって事よね?)

そんな事を思いながら、明日菜は腕を組んで深く考え込む。

明日菜

「……………よし、決めた!」

のどか

「え?何を決めたんですか?」

明日菜

「だから、他の村にも行ってみてクラスの誰かが居ないかその村の人達にも聞いてみるのよ。」

のどか

「あ！そっか……………もしかしたら、別の村に居るかもしれませんしね。」

明日菜

「そういう事！……………という訳で、今からあのドシンという巨人と一緒に別の村へ行くわよ！」

そう言つと、明日菜は一足先にドシンの後を追い掛けていく。

のどか

「あ！？ちょ、ちょっと待って下さい！」

のどかも慌てて明日菜の後を追い掛けていく。

明日菜

「おーい！ちょっと待ってよー！……！」

ドシン  
「？」

ドシンは明日菜に呼び止められて、その場で立ち止まって明日菜達の方へと振り向く。

明日菜

「アンタ、今から別の村に行くんだったら私達も一緒に連れてってほしいんだけど……………」

のどか

「お願いします！どうか私達も一緒にさせて下さい！」

明日菜が両手を合わせてながら、のどかは深々と頭を下げながらドシンに懇願する……………。

ドシン

「……………」

突然、ドシンが明日菜達の前に大きな両手をゆっくりと差し出す。

明日菜

「え？」「コレって……どういふ事かしら？」

のどか

「……もしかして、この手の上に乗ねって言ってるのでしょうか？」

明日菜

「どういふ事は、一緒に行っても良いって事？」

ドシン

「……………」。

ドシンは明日菜の質問にただ黙って頷いた。

のどか

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！」

明日菜

「よっしやー！そこなくっちゃねー！」

明日菜とのどかはドシンの返答に喜びながらドシンの大きな両手に乗っかる。



ドスン！ドスン！

すると、ドシンは明日菜とのどかを両手に乗せたまま歩み始める。

明日菜

「おお〜！やっぱり下から見る景色と上から見る景色は違うわね〜。

」

のどか

「そ、そうですね……でも、ちょっと怖いです……。」

明日菜はドシンと同じ目線から見てる広大な景色に絶賛するが、のどかはドシンが進む度に揺れ動く不安定な足場に少し緊張してしま

明日菜

「そんじゃ、この調子で他の村へレッツゴー……！」

村人A

「気をつけてな〜！」

村人B

「友達が見付かる事を願ってるからね〜！」

のどか

「ありがとございませ〜す！色々とお世話になりました〜！！！」

明日菜とのどかはドシンと共に村人達に激励されながら村を後にする  
るのであった……………。

第一百五話、巨人が住む島（前編）（後書き）

という訳で、今回は『巨人のドシン』編です。

簡単に説明しますと、バルド島で朝日と共に現れる黄色い巨人・ドシンを操作して島の住人の手助けをしていくというゲームです。

ところで、今回は前回と違ってそんなに待たせてないと思いますが………どうでしょうか？（汗）

それから、以前に『基本的には一話で完結という形で行う』とおっしゃいましたが………これから先は前編と後編が繁盛にやると思いますがお許し下さい（謝）。

第一百十六話 巨人の住む島（後編）

（バルド島・別の村）

明日菜とのどかはドシンと共に青い屋根の家が数軒建てられてる集落へとやって来ていた。

村人 A

「……………うん、どれも見ない顔だなあ。」

のどか

「そ、そうですか……………」

明日菜

「はあ〜っ、この村にも居ないかあ……………」

明日菜とのどかは青い帽子や服を着た村人にクラスメートについて聞いていたが、未だに何の手掛かりを掴めずに軽く項垂うなだれていた。

村人 B

「ねえドシン、この辺りの地面がちょっと盛り上がってるんだけど……………ちょっとだけ下げてくださいないかしら？」

ドシン

「……………」。

村人の女性がドシンに何かを頼んでいると、ドシンは何も言わずに周りよりも少し盛り上がっている地面の前までゆっくりと歩み寄っていく。

グオーーーーーーッ！！

すると、ドシンが両手を地面に向けて下げたと同時に盛り上がった地面がどンドン下がっていく。

村人B

「そうそう、その調子よ……………うん、そんな感じでいいわ！」

ドシンが地面の盛り上がりをどンドン下げてゆくと、村人Bが丁度良い感じのところ止める。

村人B

「どうもありがとう！助かったわ！」

ドシン

「……………」

村人Bがドシンにお礼を言うと、ドシンの体が先程よりも少しだけ大きくなっていく。

のどか

(あっ!?!今、ドシンさんの体が……………)

明日菜

「……………やっぱり本屋ちゃんも気付いた?」

のどか

「え?は、はい……………今確かに少しだけ大きくなりましたよね?」

明日菜

「うん、やっぱり気のせいじゃなかったのね……………」

明日菜とのどかがドシンの異変について話していると……………。

?

(うむ、今日も巨人は島の人々の為に活躍しておるようじゃのう……………)

明日菜

「……………え？だ、誰？」

明日菜は何処からともなく聞こえてきた老人のような男性の声に反応して慌てて辺りを見回す。

のどか

「あ、明日菜さん？急にどうしたんですか？」

明日菜

「いや、さっき男性の声が聞こえたような気がして……………」

？

（ム！？もしかワシの声が聞こえておるのかのお？）

明日菜

「ほ、ほら！また聞こえた！！」

のどか

「は、はい！私にもハッキリと聞こえました！」

明日菜とのどかはまたしても聞こえてきた男性の声に更に戸惑いな

がら辺りを見回す。

？

(やはりお前さん達にはワシの声が聞こえとるようじゃな……………。)

明日菜

「あ、貴方は誰なの？一体何処から話しているの？」

そう言いながら、明日菜は周りを見回しながら謎の声に話し掛ける。

？

(まあ、取り敢えず落ち着きなさい……………それにしても、こうして人と話すのは何十年ぶりじゃろうか……………。)

のどか

「な、何十年？」

？

(さて、まずはワシが何者なのか簡単に説明するとしよう……………ワシの名はソドル、歴史の傍観者じゃ。)

明日菜

「歴史の……………傍観者？」



明日菜とのかはソドルと名乗る謎の声の言葉に耳を傾ける。

のか

「……………えっと、ソドルさんは今何処に居るんでしょうか？」

明日菜

「そ、そうよ！人と話す時くらい姿を見せなさいよ！」

ソドル

（うむ……………残念ながらそれは無理じゃ。）

のか

「ど、どつしてですか？」

ソドル

（ワシの肉体は遠との昔に滅んでしまったのお……………今は生きておるのか死んでおるのかすら分からのじゃ。）

明日菜

「ちょ、ちょっと待って……………肉体が無いって事は……………貴方はひよっとして……………幽霊？」

のどか

「ゆ、幽霊!?!」

のどかは明日菜の言葉に思わず震えてしまふ。

ソドル

(まあ、そう言った方が妥当であろう……じゃが、ワシはお前さん達を祟るつなどこれっぽっちも思っておらんから安心せい。)

明日菜

「は、はあ……………」

ソドル

(それよりも、あの巨人について何か知りたくないかのお?)

のどか

「え?ソドルさんはドシンさんの事を知っているんですか?」

ソドル

(勿論じゃ、ワシは何十年もあの巨人を見てきたからのお……………)。

明日菜

「ふうん……それじゃ、少しだけ聞いていい？」

ソドル

（ああ、答えられる範囲ならば答えてやろう！）

ソドルは明日菜の質問に少し自信満々に答える。

明日菜

「じゃあ、あのドシンって巨人は一体何者なの？」

ソドル

（うむ、流石のワシも巨人の正体までは分からぬな……何せ、あの巨人は突然この『バルド島』に現れたのじゃからのお……。）

のどか

「え？突然現れたって……どういう事ですか？」

ソドル

（うむ、巨人は朝日が昇ると共に海の方から突如として姿を現して島に上陸して来たんじゃないよ。）

明日菜

「朝日が昇ると共に……どうも信じられないわね……。」

そう言いながら、明日菜はソドルの言葉に疑問を持ちながら首を傾げる。

ソドル

（まあ、確かに今すぐ信じろと言っても少々無理があるのぉ……じやが、少なくとも先程ワシが語った事は全て真実じや。）

のどか

「そうですか……あの、私も一つだけ質問しても宜しいでしょうか？」

ソドル

（ああ、勿論いいとも。）

のどか

「さっき、ドシンさんが大きくなったように見えたんですけど………  
…ドシンさんに何が起こってるんですか？」

ソドル

（ああ、その事が………巨人は島の住人の喜びや憎しみを救出する事によって少しずつ大きくなってゆくのだじや。）

明日菜&のどか

「……………へ?」

明日菜とのどかはソドルの言葉に思わず耳を疑ってしまつ。

明日菜

「ちょ、ちょっと待って……………じゃあ、ドシンは島の人達に喜ばれる度にどんどん大きくなっていくって事?」

ソドル

(そういう事じゃな。)

のどか

「……………でも、あれ以上大きくなってどうするんでしょうか?」

ソドル

(さあ、ワシもそこまでは分からぬな……………それに、巨人は自分の意思で巨大化してある訳ではないからのお……………。)

明日菜

「成程ねえ……………って、あれ?そう言えば、ドシンの姿が見えなくなっただけ……………。」

のどか

「え！？本当ですか？」

明日菜とのどかは慌てて辺りを見回しながらドシンを捜していると……。

のどか

「あ！あんな所に居ました！！」

ドシンを発見したのどかが指差す方向を見ると、ドシンは既に村から少し離れた場所をゆっくりと歩いていた。

明日菜

「って、もうあんな所まで……おい！ちょっと待ってよー！！」

のどか

「私達も連れてって下さいー！！」

そう言うと、明日菜とのどかはドシンの方に向かって慌てて駆け出していく。

「別の村」

明日菜

「……………はっ、この村にもクラスの誰も来てないってさ……………」

のどか

「がっかりですね……………」

ドシンと共に別の村を訪れて村人達に一通り聞き込みを終えた明日菜とのどかは、またしても何の収穫も無い状況に深い溜め息を付いていた。

村人C

「やあドシン、ちょっと頼みたい事があるんだけど……………いいかな？」

ドシン

「……………」

すると、一人の男性の村人が少し恐る恐るといった感じでドシンに声を掛ける。

村人C

「近々、この村のモニュメントを建てようと思ってるんだけど……  
…その為に必要な花を持ってきてくれないかな？」

ドシン

「……………」。

村人の頼み事を聞いたドシンは相変わらず何も言わずにその場から立ち去っていく。

明日菜

「……………あれ？何処へ行くんだろう？」

のどか

「さ、さあ……………後を付いてってみましょうか。」

ドシンを発見した明日菜とのどかは何処かへと向かうドシンの後を追いついていく。

ドシン



「……………」

ズボッ！！

すると、木が沢山生えている場所までやって来たドシンが地面から一本の木を引っっこ抜く。

ドシン

「……………」

そして、ドシンはすぐに引っっこ抜いた木を他の木の近くに埋めていく。

ドシン

「……………」

ズボッ！！

更にドシンは木を引っっこ抜いては先程埋めた木の側に何本も埋めるという行為を何度も繰り返す。

明日菜

「……………さっきから一体何をしてるんだろっ?」

のどか

「さ、さあ……………」

ソドル

(恐らく、巨人は沢山の木を一カ所に集めて花を咲かせようとしてるんじゃないかな。)

明日菜&のどか

「えっ?花?」

明日菜とのどかはソドルの説明を聞いて思わず耳を傾ける。

ソドル

(木を一カ所に集めると一輪の真っ赤な花が咲くんじゃ……………その花は村のモニュメントを建てるのに絶対に必要不可欠な代物なんじゃ。)

のどか

「そうなんですか……………でも、あんな事をして本当に花が咲くんですか?」

明日菜

「そうよ、幾ら何でも木を集めたって花が咲く訳が……………」。

ブワァー……ッ!!

すると、突然ドシンが引っこ抜いて埋めた沢山の木々が枯れていき地面から新たな木々が生えてきたと同時に一輪の大きな赤い花が咲き出す。

のどか

「……………は、花が咲きましたね……………」。

明日菜

「う、嘘……………」。

明日菜とのどかはまるで鳩が豆鉄砲でも喰らったかのように啞然とした表情を浮かべる。

ドシン

「……………」。

スポッ!

そして、ドシンはそのまま花を地面から引っこ抜いて先程の村に向かって歩き出していく。

明日菜

「あ！村の方に戻っていくわ……………」。

のどか

「私達も行ってみましょう。」

そう言うと、明日菜とのどかは慌ててドシンの後を追いつけていく。

村人C

「おお！早速花を取ってきてくれたか……………ありがとう！モニュメントが完成したら絶対に見せてやるからな！」

ドシン

「……………」。

ドシンは村人達に花を渡して感謝の言葉を贈られながら相変わらず何も言わずに立ち去っていく。

明日菜

「……………にしても、ドシンって本当に島の人達に慕われてるわね。」

ソドル

（ああ、巨人は基本的に優しくて穏やかな性格じゃからのお………  
じゃが……………。）

のどか

「え？何ですか？」

のどかはソドルの最後に言い掛けた言葉に耳を傾ける。

ソドル

（……………あの巨人にはもう一つの顔があるんじゃないよ……………。）

明日菜

「もう一つの……………顔？」

のどか

「……………それって、どついつ意味ですか？」

ソドル

（うむ、実はのお……………。）

ソドルが明日菜とのかに説明しようとした時……………。

？

「ウォーーーーー……………ッ！！」

明日菜&のか

「！？」

突然、ドシンが歩いて行った方向から雄叫びにも似た叫び声が響き渡る。

ソドル

(い、今のはもしかしたら……………。)

明日菜

「……………本屋ちゃん！行ってみましょ！」

のか

「は、はー…」

そう言つと、明日菜とのかは叫び声の方へと駆け出していく。

〜数分後〜

明日菜

「えっと、この辺りだと思っただけ……って、わぁっ!?!?」

のどか

「ア、アレはもしかして……ドシンさん!?!?」

明日菜とのどかが雄叫びがした方に駆け出していると、目の前に体の色が真っ赤に染まって背中に蝙蝠こうもりのような羽根を生やした目付きの悪いドシンに酷似した巨人が明日菜達の前に立ち塞がる。

ソドル

（や、やはりな……優しい巨人が怒りの巨人へと変化してしまっただ……。）

のどか

「ひ、ひょっとして……さっきソドルさんが言ってたドシンさんの

もう一つの顔って……………」

ソドル

(そうじゃ、巨人は怒りによって姿を変えてしまっのじゃ……………)。

明日菜

「いや、アレは幾ら何でも変わり過ぎでしょ!?!」

明日菜がソドルにツッコミを入れると……………。

ジャシン

「ウォーーーーッ!!」

バンバン!バンバン!!  
バンバン!バンバン!!

ゴオーーーーッ!!

ドシンならぬジャシンは地面を思い切り激しく叩いたり手の先から衝撃波のような物を出しながら暴れまくる。

のどか



「きゅっ！っ、ド、ドシンさんが……………」。

明日菜

「取り敢えず、一旦この場から離れましょー！」

そう言いつつ、明日菜とのはきはジャシンが立っているから離れていく。

ジャシン

「ウオーーーーーッ！」

それでもジャシンは少しも静まる事無くひたすら暴れまくる。

ソドル

（あゝ、暴れておる……………穏やかだった面影が何処にも無いわい……………）。

のはが

「……………それにしても、どうしてドシンさんはあんな風になってしまったのでしょうか？」

明日菜

「何か気に入らない事でもあったのかしら？」

そんな事を言いながら、明日菜達は離れた場所からジャシンを観察しているところ……。

ジャシン

「グオーーーーーッ!!」

突然、ジャシンが背中に両手を伸ばして必死に藻掻もがき始める。

明日菜

「……………ど、どうしたのかしら?」

のどか

「何か、凄く苦しそうですけど……………」

ソドル

(うむ、アレは凄く……………)。

明日菜

「え? 『恐らく』何?」

ソドル

( ……背中が痒いんじやろっな。 )

明日菜&のどか

「……………へ？」

明日菜とのどかはソドルの発言に一瞬だけ固まってしまっ。

明日菜

「……………せ、背中が痒い……………ですって？」

ソドル

( うむ、恐らく背中 of 痒い所が手に届かなくてつい苛々(イライラ)してしまったんじやろっな……………。 )

のどか

「そ、そうなんですか？」

ジャシン

「フオー……ッ……！」

ドスン！ドスン！！  
ドスン！ドスン……！！

ジャシンは今なお飛び跳ねながら激しく暴れまくっている。

のどか

「……………ソドルさん、ドシンさんを元に戻す方法は無いのでしょうか？」

ソドル

（無理じゃな……………巨人が怒りを静めるまで待つしかないだろう。）

明日菜

「マ、マジでー!？」

明日菜はソドルの言葉に思わず耳を疑ってしまう。

ソドル

（それしか方法は無い……………それに、巨人はあの姿で村を壊滅させた事があるしのお……………。）

のどか

「……………それでは、待つしかありませんね。」

明日菜

「そ、そうね……………幾ら私でも、あんな巨人と戦っても勝てるとは思えないし……………」

こうして、明日菜達はジャシンがドシンに戻るまで待ち続けるのであった……………。

〈更に数時間後〉

ドシン

「……………」

夕日が沈み掛ける夕暮れ時、ジャシンはドシンに戻って何事も無かったかのように立っていた。

ソドル

（ふう、やっと落ち着いたよっじやな……………。）

明日菜

「とうかが、もう夕方じゃない……………」

のどか

「あ、そう言えばそうですね……………」

ドシン

「……………」

すると、突然ドシンがまるで吸い寄せられるかのように夕日に向かって歩き出していく。

明日菜

「あれ？今度は何処へ行くのかしら？」

ソドル

（……………どつやら、お別れのようじゃな。）

のどか

「え？どついつ事ですか？」

ソドル

（巨人は夕日が沈むと共に消えてしまつたのじゃ。）

明日菜&のどか

「えっ!?!」

明日菜とのどかはソドルの説明に耳を疑った。

明日菜

「そ、そんな……………消えるって……………」

ソドル

(巨人は朝日と共に現れて、そして夕日と共に消えてゆく……………そして、次の朝を迎えるとまた新たな巨人が現れるんじゃない。)

のどか

「夕日に消えて朝日に姿を現わす……………まるで太陽みたいですね。」

ソドル

(そうじゃ、巨人はまるで太陽のような存在なんじゃ……………)。

明日菜達がしんみりした状態で話していると、ドシンは下半身を海の中に浸りながら夕日に向かって進んでいた。

明日菜

「……本屋ちゃん、私達もそろそろ帰ろっか。」

のどか

「そうですね、早く帰らないとネギ先生達が心配しますし……。」

ソドル

（そうか、君達ともお別れか……もし良かったら、また『バルド島』に来ておくれ。）

明日菜

「ええ、いつかきつとね！」

のどか

「ソドルさん、色々と教えてくれてありがとうございました！」

ソドル

（いや何、こちらこそ久しぶりに人と話せて感謝してる位じゃ……  
…それでは、気をつけて帰るんじゃぞ。）

明日菜

「ええ、そうするわ……それじゃ、私達はもう行くから！」



のどか

「さようなら〜!」

そう言い残すと、明日菜とのどかはその場からゆっくりと立ち去っていく。

ソドル

(行ってしもうたか……さて、ワシも明日から歴史の傍観者として巨人とこの島の行く末を見守るとしよう……)。

ソドルが静かに語ると、ドシンも夕日と共に水平線の彼方へと姿を消してゆくのであった……。

第一百十六話、巨人の住む島（後編）（後書き）

という訳で、『巨人のドシン』編の後編でした。

今回の話も前編・後編として区切ってしまいました……今後も前編・後編と話を区切ってしまうかもしれませんが悪しからず（汗）。

第一百七話 蛙になった王子様！？（前編）（前書き）

今日も今日とてネギー一行は行方不明になった3ーAのクラスメイト達を見付ける為に旅をするのであった……………。

第一百七話 蛙になった王子様！？（前編）

ミルフィーユ王国・城下町アラモード

木乃香・刹那・楓の三人はまるでお祭りのように賑わっている城下町にやって来ていた。

楓

「はて？随分賑わっておるようじゃござるなあ。」

刹那

「ああ、何かの祭りでも始まるのだろうか？」

木乃香

「ウチ、ちょっと町の人に聞いてみるわ。」

そう言うと、木乃香は一人の男性の町人に近付いていく。

木乃香

「すいませうん、今日は何かあるんですか？」

町人 A

「え？何って……これから我が国の姫であるティラミス姫様と『サブレ王国』の王子様との結婚式が始まるんだよ。」

楓

「ほお、結婚式でござるか……道理で町が賑やか雰囲気にも包まれているハズでござる。」

木乃香

「結婚式かあ……ええなあ、ウチもいつか相手を見付けて結婚式を挙げたいわあ。」

刹那

(こ、木乃香お嬢様がご結婚を……)。

木乃香の独り言を聞いた刹那は何故かショックを受けてしまう。

楓

「……刹那殿？どうかしたでござるか？」

刹那

「え？……あ！いや！何でもない！！」

楓

「本当でござるか？何やら思い付めていたようにござったが……。」

刹那

「だ、だから何でも無いと言っているだろー！」

楓

「あ、あいあい……分かったから少し落ち着くでござるよ……。」

楓は刹那の剣幕した態度に思わず一瞬だけ啞然としてしまう。

刹那

「す、すまない……つい興奮してしまっ……。」

楓

「あいあい 別に拙者は気にしてないでござるよ。」

木乃香

「あや？二人共、そないに見つめ合っ……何かあったん？」

刹那

「へー？いえ、あの、えっと……。」

楓

「いや何、ちょっと刹那殿と世間話をしてただけでござるよ」

刹那は木乃香の質問に対して思わず動揺してしまい、代わりに楓が冷静に答える。

木乃香

「え、ウチだけ除け者にして狡いわあ……ウチも仲間に入れてな。」

刹那

「め、滅相もございません！木乃香お嬢様を除け者にするなんて事は……。」

刹那が慌てて木乃香に弁解しようとするが……。

町人B

「た、大変だあ〜!!」

突然、男性の町人が大声を上げながら慌てて駆け出してきた。

町人A

「そ、そんなに慌ててどうしたんだ？」

町人B

「そ、それが……今日テイラミス姫様と結婚される予定の『サブレ王国』の王子様が行方不明になったみたいなんだ！」

町人全員

「ええーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！？」

町人Bの衝撃的な発言を聞いた町の人達は度肝を抜かされて思わず大声を上げてしまう。

町人C

「おいおい、マジかよ……………」

町人D

「それは本当なのか？」

町人B

「本当さ！俺はこの耳で聞いたんだ……………何でも、王子様は今朝から『エクレア宮殿』にて突然行方をくらませたらしい。」

町人E



「何て事だ……………」

町人F

「まさか、結婚が嫌になって逃げ出したんじゃ……………」

町の人達がこの非常事態に色々と話していると……………」

？

「いや、彼はそんな臆病な男ではない！」

全員

「!?!」

町の人達が何者かの声に反応して振り向いてみると、そこには青いマントを羽織って前髪が少し撥ねてる青い髪の少年が気品に満ちた面持ちで立っていた。

町人G

「あ！あの方は『カスタード王国』のリチャード王子様だわ！」

町人H

「きゃ〜！カツコイ〜！！！」

女性の町人達はリチャードという名前の少年の姿を目にした途端、目をハートマークにしながら黄色い声を上げる。

リチャード

「『ミルフィーユ王国』の民よ！聞いてくれ……彼はティラミス姫やこの国の人々だけではなく、蛙にされた僕と我が『カスタード王家』に仕える優秀な兵士達を救う為にあの憎きデラーリンを退治した事を忘れてはいないだろうか？」

町人A

「そ、それは……………」

リチャードの言葉に町の人達は言葉を詰まらせてしまう。

リチャード

「それに、ティラミス姫は僕と彼にとつては理想の女性であった……だから、彼が姫を捨てて逃げ出すなんて絶対に有り得ないんだ！」

町人B

「そ、そうだ！リチャード王子の言う通りだ！」

町人C

「あの王子様がティラミス姫様を見捨てる訳が無い！」

町人D

「きつと、何か事情があつて姿を消したんだ！」

町の人達はリチャードの説得により考えを改めていく。

リチャード

「そこで、皆に頼みがある……もし彼を見掛けたら、真っ先に僕か『エクレリア宮殿』の兵士達に報告してほしい！」

町人E

「は、はい！分かりました！！！」

リチャード

「よし、それじゃ僕は早速彼を捜しに行くとするか……。」

そう言い残すと、リチャードはその場から颯爽と立ち去っていく。

木乃香

「……何か、大変な事になつとるみたいやね。」

刹那

「そのようですね。」

楓

「うぬ、先程の町の者達の話によると……この国の姫と何処か余所よその国の王子が結婚式を挙げる予定であったが、新郎である王子が不在になってしまい結婚式が挙げられなくて困っているという訳でござるな。」

木乃香

「その王子様は何処に行ってもうたんやろか……。」

刹那

「やはり、王子様の身に何かあったのでしょうか？」

楓

「いや、もしかしたら本当に怖じ気付いて結婚から逃げ出したという可能性も……。」

？

「無礼者！私はそんな薄情な男ではない！！」

全員

「!?!?」

刹那と楓は突然聞こえてきた何者かの声に素早く反応して頻りに辺りを見回す。

刹那

「……………可笑しいな、確かに何者かの声が聞こえたと思ったのだが……………」

楓

「いや、拙者も確かに耳にしたでござる……………しかし、姿どころか気配すら確認出来なかったのは妙でござるな……………」

？

「何処を見てる？私は此処に居るぞ！」

刹那&楓

「!?!」

更に刹那と楓は再び聞こえてきた何者かの声に反応して、先程よりも頻りに辺りを見回す。

楓

「……………やはり、声はすれど姿が見えぬでござるな……………」

刹那

「ど、何処に居る！？隠れてないで姿を見せろ！」

？

「何を言ってる？私は既に君達の近くに居るぞ。」

刹那

（な、何だって！？）

楓

（既に拙者達の近くに……………どうやるよ！…）

刹那と楓が何者かの言葉に耳を疑っていると……………。

木乃香

「きゃ————っ！！」

楓

「！？」

刹那

（し、しまった！木乃香お嬢様が……………。）

木乃香の叫び声に素早く反応した刹那と楓は慌てて木乃香の方に振り向いてみると、木乃香は内股気味になって何か恐ろしい物でも見たかのように目を瞑って震えながら立ち尽くしていた。

刹那

「お、お嬢様！どうなさいました!？」

木乃香

「し、下、下……………」

そう言いながら、木乃香は震えるような声で下の方に向けて指を差す。

楓

「下？下に何が……………」

刹那

「まさか！敵はお嬢様の足元に……………」

そう言って、刹那と楓がゆっくりと木乃香が指差した方を見ていると……………。

楓

「なっ!?!」

刹那

「……………え?」

まず刹那は木乃香の足元に居る赤いマントを羽織った二足歩行で立っている一匹の小さな蛙を見て唖然とするが、楓の方は逆に蛙の姿を目にした途端に片方の糸目を僅かに開きながら驚愕する。

刹那

「コ、コレって……………蛙?」

蛙?

「やれやれ、やっと私に気付いたようだな。」

木乃香

「ふえ!?!か、蛙が喋って……………」

木乃香は突然蛙が人の言葉で喋り出したので驚こうとしたが……………。



楓

「うぎゃー……っ！か、蛙でうぎるう……」

次の瞬間、楓は悲痛な叫び声を上げながら物凄いスピードでその場から何処かへ駆け出してゆく。

刹那

「あつ！？ま、待て！楓！！」

刹那の呼び掛けも虚しく楓の姿は全く見えなくなってしまった。

木乃香

「……楓さん、あつという間に行ってもうたね……」

刹那

「……まあ、楓は蛙が大の苦手なので無理も無いと思います……」

そう言いながら、木乃香と刹那は啞然とした表情を浮かべながら楓が物凄いスピードで駆け出して行った方向を見つめる。

蛙？

「お〜い！私の事を忘れてはもらぬか〜？」

木乃香&刹那

「……………へ？」

木乃香と刹那は蛙に呼び掛けられて、漸く我に帰って再び蛙の方へと顔を向ける。

木乃香

「あ！せやっ たわ……………楓さんに気を取られてて、この蛙の事をすっかり忘れとったわ……………」

刹那

「そ、そうでしたね……………」

蛙？

「全く、私はさっきから君達に声を掛けておるといのに……………まあ、この姿では致し方あるまいな……………」

蛙は木乃香と刹那の二人に自らの存在に漸く気付いたと分かる、何やら一人で呆れ返りながらブツブツと独り言を呟く。

刹那

「……………あの、唐突で申し訳ありませんが幾つか質問しても宜しいでしょうか？」

蛙？

「ん？何だ？答えられる範囲までだったら答えてやるぞ。」

刹那

「それでは、まず最初に……………貴方は一体何者ですか？」

蛙？

（うゝむ、やはり私の事について聞いてきたか……………どうする？この者達に私の正体を明かすか？いや、此処は敢えて正体を隠した方がいいか？うゝん……………）。

蛙は刹那の質問に対して深く考え込んでしまつ。

刹那

「……………あの、もしかして答え難い質問でしたか？」

木乃香

「答えたくないんやったら、無理して答えるでもええよ？」

蛙？

「……………」。

木乃香と刹那の言葉を聞いた蛙はジューツと二人の顔を見つめる。

木乃香

「どないしたん？さっきからウチらの顔を見つめたりして……………ひよっとして、ウチらの顔に何か付いとる？」

蛙？

「い、いや！そうじゃなくて……………どうやら、君達なら正直に話しても問題は無さそうだな……………」。

刹那

「え？それって、どういう意味ですか？」

蛙？

「いや、別に深い意味は無い……………それでは、まずは私が何者なのか正直に話そう。」

そう言くと、蛙は一旦軽く深呼吸をしてからゆっくりと語り始める。

蛙？

「信じて貰えないかもしれないが……………私は『サブレ王国』という

国の王子なのだ！」

木乃香 & 刹那

「ええっ!？」

木乃香と刹那は『サブレ王国』の王子だと名乗る蛙の言葉に一瞬だけ耳を疑ってしまう。

刹那

「お、王子様……………だったのですか？」

木乃香

「……………あれ? 『サブレ王国』って確か……………さっき町の人達が噂しとったお姫様の結婚相手の……………」

王子

「そう! この私がティラミス姫の結婚相手となる……………ハズだった王子なのだ……………」

王子は語尾しひの部分しひを弱々しく言いながら下に俯しひひいてしまう。

刹那

「……………えっと、失礼な事を聞くようですが……………何故、王子様で

ある貴方がそのような姿になってしまったのですか？」

王子

「うむ、話せば少し長くなるのだが……以前、私はある魔女に渡された『怪しい薬』を飲んでしまった……それ以来、私は水に触れただけで蛙に変身してしまう体質になってしまったのだ。」

木乃香

「水に触っただけで蛙になってしまっくん？それって凄く不便やなあ……。」

王子

「ああ、だから私は蛙にならないように普段から色々と注意をしていた……だが、結婚式という日の今日に限って橋の上で足を滑らせて川に落ちてしまったのだ……弱ったな、こんな姿では結婚式になんかとても出られない……。」

そう言うと、王子は深く落ち込んでしまい再び下に俯いてしまう。

刹那

「……………」と、取り敢えず元気を出して下さい。」

木乃香

「せや、せつちゃんの言う通りやよ……………何か、元の姿に戻る方法

とかは無いん？」

王子

「蛙の姿から人の姿へと手っ取り早く戻る方法が一つだけある……それは、『幸せの果実』という実を食べる事だ。」

木乃香 & 刹那

「幸せの果実？」

木乃香と刹那は王子の言葉に思わず耳を傾ける。

王子

「一口食べるだけで幸せな気分になって気絶してしまう恐ろしい木の実だ……その実を食べるとすぐに元の姿に戻る。」

刹那

「では、その『幸せの果実』という実は何処にあるんですか？」

王子

「確か、『ババロア山』という山の奥深くに『幸せの果実』が沢山成っている木が一本だけ生えているのを覚えているな……。」

木乃香

「ほなら、その山に行けば『幸せの果実』つちゆう実を手に入れらるんやね?」

王子

「だが、この姿では『ババロア山』へ行くにも時間が掛かってしまつて結婚式に出席出来なくなつてしまつ………うん、困つたなあ………」

そう言つと、王子は両手で頭を抱えながら深く考え込んでしまつ。

木乃香

「……せつちゃん、ウチらもその『幸せの果実』つちゆう実を探すのを手伝つてあげよ?」

刹那

「そうですね、困っている人はほつて置けませんし………」

木乃香

「ほな、決まりやね………ねえ王子様、ウチらが手伝つてあげよか?」

王子

「………えつ?」



王子は木乃香の言葉を聞いて一瞬だけ啞然となってしまう。

王子

「……………いいのか？こんな私の為に手伝ってくれるのか？」

木乃香

「勿論やよ、ウチらは困った人がおるとほって置けへん性分なんよ。」

刹那

「はい、ですから私達にも手伝わせて下さい。」

王子

「う、ううっ……………ありがとう、私は君達のご好意に嬉し過ぎて感動してしまった……………」

そう言いながら、王子は目に溢れ出てくる涙を自らのマントで拭き取る。

木乃香

「ほらほら、泣いてる暇なんかあらへんよ……………早よう元の姿に戻らんとお姫様が待つとるえ？」

王子

「おっと、そうであった……よし、急いで『ババロア山』へ行く  
としよう！」

刹那

「それでは、早速『ババロア山』まで案内して下さい。」

王子

「ああ、任せてくれ！それじゃ、出発進行！！」

そう言うと、王子は木乃香と刹那を引き連れる形で『ババロア山』  
に向けて歩き出していく。

くゲロベツプ温泉郷前く

楓

「ハアツハアツ……ここ、此処まで来れば大丈夫でござろう……ん  
？」

蛙（王子）を見て走るだけ走って遂に息を切らせながら立ち止まった楓はある町の入口前に建てられてる看板に目が入る。

楓

「何々……」この先は無料で温泉に入れるミルフィーユ王国一の温泉街・ゲロベツ温泉郷です！疲れを癒したい人は是非一度いらして下さい』でござるか……。」

看板に書かれてる内容を一通り読み終わると、楓は腕を組んで考え込んでしまう。

楓

「うむ、走ってたせいで汗を掻いてしまったから入りたいでござる……いや、まずは刹那殿達と合流しなくては……。」

そんな事を言いながら、楓は腕を組んだまま考え込んでいると……。

楓

「……まあ、刹那殿が居れば大丈夫でござろう」

楓はあっさりと結論を出すと、そのまま『ゲロベツ温泉郷』に向

かつて歩き出していくのであった……。

第一百七話〜蛙になった王子様！？（前編）〜（後書き）

という訳で、今回は『カエルの為に鐘は鳴る』編です！

サブレ王国の王子とカスタード王国のリチャード王子がいつものように決闘をしていると、二人の憧れの女性であるティラミス姫が治めるミルフィーユ王国が謎の侵略者・ゲロニアン軍によって征服を聞いて助けに向かうが……とある理由でサブレ王国の王子は蛙と蛇に変身出来てしまいます。

そして、蛙や蛇に変身しながら進んで行ってボスであるデラーリンを倒していくというアドベンチャーゲームです。

因みに、主人公であるサブレ王国の王子の名前はプレイヤーが好きに名前を付けられるのですが、この小説では敢えて名乗らせません（苦笑）。

それから、一応ゲーム本編クリア後の設定となっております。

という訳で、後編もお楽しみに！

第百十八話　蛙になった王子様！？（後編）

ミルフィーユ王国・ババロア山奥地

木乃香

「……………へえ、この国でそないな事件があったんやね。」

王子

「ああ……………だけど、私は最後まで諦める事無く親友であるリチャードやこの『ミルフィーユ王国』の人々の力を借りて我が宿敵・デラリンの野望を打ち砕いたのだ。」

『ババロア山』の奥深くまでやって来た木乃香と刹那は王子から語られる自らの武勇伝を聞きながら『幸せの果实』が成っているという木を目指して歩いていた。

木乃香

「ほなら、その事件がきっかけでティラミス姫と結ばれたんやね？」

王子

「ま、まあそついう事になるかな……………」

王子は木乃香の質問に対して少し頬を紅く染めながら答える。

木乃香

「あゝ、王子様だったら真っ赤になつとるえゝ。」

王子

「え！？あ、いや、その……………そ、そなたの気のせいであろう！」

刹那

「……………フッフ。」

刹那は木乃香と王子のやり取りを見て思わず口元を緩ませながら微笑んでしまう。

刹那

「……………ところで、話を元に戻しますが、『幸せの果実』が成っている木が生えてる場所はまだでしょうか？」

王子

「え？あ、ああ……………確か、この辺りだと思ったんだけど……………」

木乃香

「あ！あの木ちゃうかな！？」

木乃香が指差す先を見てみると、奇妙な模様が描かれてる果物の実が沢山成っている一本の木が生えていた。

王子

「ア、アレだ！あの木に成っている実が『幸せの果実』だ！」

王子は『幸せの果実』を目にした途端、刹那の肩に乗ったまま手足をバタバタさせながら喜ぶ。

刹那

「お、落ち着いて下さい……………そんなに暴れられると私の肩から落ちてしまいますよ！」

王子

「そ、そうだな……………私とした事がつい興奮してしまった……………」

木乃香

「まあ、これでやっと元の姿に戻れるんやから興奮するのも無理ないと思うえ？」

刹那

「それもそうですね……………ともかく、あの木に近付いてみましょう。」



そう言うと、剎那達はゆっくりと『幸せの果実』が成っている木に近付いていく。

木乃香

「ふうん、コレが『幸せの果実』なんや……………変な模様があつてあまり美味しくなさそうやね。」

王子

「ああ、確かに美味しくはない……………だが、コレを食べなければ私はいつまでも元の姿には戻れないのだ。」

剎那

「そうですね、ティラミス姫様も王子様の事を今でもお待ちしているに違いありませんよ。」

木乃香

「ほなら、早くこの実を食べて元の姿に戻らなアカンね?」

そう言うと、木乃香が背伸びをして木に成っている『幸せの果実』を一つだけ筆<sup>むし</sup>り取る。

木乃香

「はい、王子様。」

王子

「う、うむ……………で、では早速食べるとしよう……………」

王子は木乃香から『幸せの果実』を受け取ると、刹那の肩から飛び降りて地面に着地する。

王子

（うーん、この実を口にするのも随分久しぶりだな……………またあの奇妙な高揚感<sup>こうようかん</sup>を味わう事になるとは思いもよらなんだ……………。）

そんな事を思いながら、王子は小さな両手で『幸せの果実』を掴んだままジューツと見つめながら躊躇<sup>ためら</sup>っていた。

木乃香

「……………せつちゃん、よっぱどあの実を食べるのが嫌なんやね……………」

刹那

「そ、そうみたいですわ……………」

木乃香と刹那は苦笑いを浮かべながら王子に聞こえないように小声で話し合う。

王子

(よし！此処は一思いにガブツと……………えい！)

ガブツ！！

そして、意を決した王子が『幸せの果実』に勢い良く噛ぶり付く。

木乃香

「あ、食べた……………」

刹那

「はい、これで王子様は元の姿に……………」

王子

「……………つつつ。」

すると、突然王子が目を虚ろにして体を左右に揺らしながら両手で口を押さえる。

木乃香

「あや？何や王子様の様子が可笑しいえ？」

刹那

「ど、どうかしたのでしょうか？」

木乃香と刹那は王子の変化に気付いて、心配そうに王子を見つめる。

王子

（き、来た……………この痺れるような舌の感覚……………そして、段々と意識が朦朧<sup>もろうとう</sup>として目が霞んでゆく感覚……………でも、ちよっぴり……………気持ち……………良い……………。）

バタン！！

次の瞬間、王子は目を回した状態になりながらそのまま後ろの方に倒れ込んでしまう。

木乃香

「あ！？王子様が……………。」

刹那

「だ、大丈夫ですか！？」

木乃香と刹那が慌てて王子に近付こうとするが……。

ボンッ！！

木乃香 & 刹那

「!?!」

突如、王子の周りからボンッという音と共に煙が発生する。

木乃香

「……………な、何が起こったんやろ?」

刹那

「ひょっとして……………」

木乃香は一体何が起こったのか理解が出来ずに困惑しているが、刹那は逆に何かを察知して王子を包んでいる煙を手で軽く払おうとする。

木乃香

「あ……………っ!?!」

刹那

「…………やはりそうだったか。」

木乃香と刹那の目に写った光景は、煙が晴れた中で先程の蛙の姿の王子と同じ色の真つ赤なマントを羽織って赤い洋服を着たショートヘアで茶髪の少年が気を失って横たわっていた。

木乃香

「せっちゃん、ひょっとしてこの人は…………。」

刹那

「はい、先程の蛙の王子様ですよ…………どうやら、無事に元の姿に戻ったようですね。」

木乃香

「そか、倒れた時はどないなると思ったけど…………元に戻れてホンマに良かったなあ。」

刹那

「そうですね、後はティラミス姫様の所へ連れて行くだけですな。」

木乃香

「あ！せや！まだそれが残ってたわ…………王子様！いつまでも眠ってんと起きなアカンよ！」

木乃香は人間の姿に戻って未だに眠ってる王子の肩を左右に激しく揺らしながら起こそうとする。

王子

「ん……んんっ……。」

すると、王子が目を開けたと同時にそのままゆっくりと起き上がる。

木乃香

「あ！やっとなきた。」

王子

「うーん、やはり気絶を失ってしまったか……それより、私は元の姿に戻れたのだろうか？」

刹那

「はい、自身目で確認してみてください。」

王子は刹那に言われた通りに自身の体を一通り手で触りながら確認する。

王子

「おお！どつやら元に戻ったようだ……よし！早速ティラミス姫の元へ急いで戻らなければ！！」

そう言って、王子はその場で勢い良く立ち上がろうとするが……。

王子

「う、うう……。」

木乃香&刹那

「あ、危ない！！」

突然、王子が立ち眩くらみを起こして地面に倒れそうになるが、木乃香と刹那が咄嗟に王子の肩を抱き抱えるような形で倒れるのを防ぐ。

木乃香

「ふう〜、間一髪やったわ……。」

刹那

「大丈夫ですか？急に倒れそうになって……。」

王子

「あ、ああ……すまない、ちょっとした立ち眩みのようだ……。」



「

そう言いながら、王子がゆっくりと立ち上がろうとするが……。

？

「王子！見付けたぞ！！」

全員

「！！？」

その場に居る全員が声が出た方を見ると、そこには厳しい面持ちでこちらを睨んでいるリチャードが立ち塞がっていた。

4672

木乃香

「あ！あの人は町で見掛けた……。。」

王子

「リ、リチャード！？」

リチャードの姿を認識した王子は思わず驚きの声を上げてしまう。

王子

「な、何故君が此処に……………」

リチャード

「君が行方不明になったと聞いて我が国の兵士達と共に君の行方を搜索していたんだ……………それなのに、君は他の娘と駆け落ちしようとしていたとはな！見損なつたぞ！！」

全員

「……………へ？」

王子を含むその場に居る全員がリチャードの意味不明な発言に思わず首を傾げる。

王子

「……………リチャード？一体何を言っておるのだ？」

リチャード

「この期じに及んでまだしらはつくれるつもりか……………しかも、一人では飽き足らずに二人の娘を手出しするとは君も随分と大胆だな！！」

王子

「いや、だから一体何言っ……………」

リチャード

「問答無用!!」

全員

「!?!」

次の瞬間、リチャードが腰に付けてあった短剣を取り出して王子に切り掛かろうと勢い良く突っ込んで来る。

ガッキイーーーーン!!

すると、王子が同じように腰に付けてあった短剣を取り出してリチャードの短剣を間髪防ぐ。

木乃香

「お、王子様!!」

刹那

「ま、待って下さい!王子様は元の姿に戻る為に……………」

王子

「そつだ!まずは我々の話を聞いてくれ!!」

リチャード

「煩い！もはや聞く耳など持たぬわ！！」

カンッ！キンッ！！

カンッ！キンッ！！

王子とリチャードはお互いの剣と剣を激しく交わせながら闘いを始める。

木乃香

「あわわわ……何か大変な事になってしもた……。」

刹那

「……仕方ない、私があの人を止めてみます。」

そう言つて、刹那が夕凧を構えて駆け出そうとするが……。

ガッキイーン！！

木乃香 & 刹那

「！？」

次の瞬間、王子が素早い剣捌きでリチャードの短剣を弾き飛ばす。

リチャード

(ま、まさか……………。)

リチャードは先程の王子の行動に驚愕しながら戸惑ってしまふ。

王子

「リチャード！頼むから私達の話聞いてくれ！！」

リチャード

「……………わ、分かった。」

〈数分後〉

王子達はリチャードに今までの経緯を出来るだけ事細かく説明した。

王子

「……………という訳なのだ。」

リチャード

「そうだったのか……………どうやら、僕とした事がとんだ勘違いをしていたようだったね……………」

木乃香

「ようやくと誤解が解けて良かったね。」

刹那

「はい、一事はことごとくなるかと思いましたが……………」

木乃香と刹那はリチャードとの誤解が解けて心の底から一安心する。

リチャード

「……………王子、本当にすまなかった!」

そう言つと、リチャードは王子に向かって深々と頭を下げながら謝罪する。

王子

「い、いや！もういいんだ……それに、私の方こそ少々手荒な真似をしまして申し訳なかったと思ってる。」

リチャード

「え？何の事だい？」

リチャードは王子が何故そんな風に思っているのか分からずに思わず首を傾げる。

王子

「ほら、先程私が剣でリチャードの剣を弾き飛ばしたであろう？」

リチャード

「ああ、アレの事が……僕は別に何とも思っていないから安心してくれ。」

王子

「だ、だけど……。」

リチャード

「……寧ろ、僕は嬉しかったと思ってる位だ。」

王子

「えっ？」

今度は王子がリチャードが何故嬉しいと思っているのか理解出来ずに耳を傾ける。

リチャード

「覚えているかい？君があのだらりんを倒した後、僕と君とでどちらがティラミス姫の妻……つまり、『ミルフィーユ王国』の国王に相応しいか決める為に決闘場で行ったあの決闘の日の事を……」

王子

「も、勿論！忘れる訳ないじゃないか！」

リチャード

「ならば、あの時僕が君に言ったあの言葉も覚えているだろ？」

王子

「あ、ああ……『時には守るべき者の為に優しさを捨てる勇気がこの国の国王には必要なのだ』と……君は僕に言ってくれた。」

リチャード



「フツ、自分で言った台詞とは言え少し気障キザっぽかったな。」

そう言つと、リチャードは恥ずかしそうに少し跳ねている前髪を払う。

王子

「だが、その事と今の事と何の関係が……………」。

リチャード

「まだ分からないようだね……………あの決闘の時、君は僕に止めとどめを刺そうとしたが君はその『優しさ』のせいで躊躇ちゅうじゆつてしまい僕に剣を弾き飛ばされてしまった……………ところが、今回はどうだい？」

王子

「……………あ！」

リチャードの言葉を聞いた王子は何かを思い出したかのように思わず声を上げてしまう。

リチャード

「そう、今回は君が僕の剣を弾き飛ばした……………今まで一度も僕に勝てなかった君が『勇気』を出して『優しさ』を捨てて僕に勝ったんだ……………それでこそ、この国の国王に相応しいのさー！」

王子

「リチャード……。」

王子はリチャードの思いやりのある言葉に感極まってしまう。

王子

「ありがとう、君は私にとって最高の友人だ！」

リチャード

「フツ、その面と向かって言われると流石の僕も照れてしまうな……。」

ガシッ！！

王子とリチャードはお互いの手と手を固く握り合っただけであった。

刹那

「……………あのく、お取り込み中申し訳ないんですけど……………そろそろ姫様の居る所へ戻らないといけないのでは？」

王子&リチャード

「……………え？」

刹那が王子とリチャード話に恐る恐る割り込んで疑問をぶつけてみると、二人の王子は一瞬だけ固まってしまふ。

王子

「そうだった！すっかり忘れていた！！」

リチャード

「だ、大丈夫！今から急いで『エクレア宮殿』に向かえばまだ間に合うハズだ！！」

王子

「そ、そうだな……………よし！今から全速力で『エクレア宮殿』に向かおう！！」

そう言って、王子とリチャードはその場で駆け出そうとするが……………。

王子

「おっと、その前に……………木乃香殿！刹那殿！今日は本当にありがとう！いつの日か必ずお礼をさせてもらうから、いつかまた会おう！！」

刹那

「え！？お、お礼なんてそんな……………」

木乃香

「ウチらの事はええから早ようお姫様の所へ行っただげてや。」

王子

「か、忝かたじけない……………それでは、急いそぐー！」

リチャード

「ああ、そつしよー！」

そして、王子とリチャードはそのまま目にも止まらない速さで勢い良く駆け出してゆく。

刹那

「……………あつという間に行ってしまったね。」

木乃香

「せ、せやね……………せつちゃん、これからどうする？」

刹那

「そ、そうですね……………まずは楓を捜さないといけませんね。」

楓  
「いや、その必要は無用でござるよ。」

木乃香 & 刹那  
「!?!」

突如、木乃香と刹那の前に頭から微かに湯気を挙げている楓が颯爽と姿を現わす。

木乃香  
「あ！楓さんや!?!」

刹那  
「楓！一体今まで何処へ行ってたんだ？」

楓  
「いやあ、申し訳ない……………ちょいとばかりし温泉でゆったりして  
いたでござる。」

刹那  
「お、温泉？」

刹那は楓の説明を聞いて啞然としてしまう。

木乃香

「え、楓さんだけ温泉に入って狡いわあ。」

楓

「ならば、木乃香殿も温泉に入るでござるか？」

木乃香

「勿論やよ！せっちゃんも一緒に入る？」

刹那

「へ！？で、ですが……私達にはやらなければならない事が……。」

楓

「うむ、確かにそうでござる……だが、たまには疲れを取らなければ体が持たないでござるよ。」

木乃香

「そういう事や ほなら楓さん、その温泉がある場所へ案内してや。」

楓  
「あいあい」

刹那

「お、お嬢様！お待ち下さいー！」

こうして、木乃香と刹那は楓の案内を頼りに『ゲロベツ温泉郷』へと目指すのであった……。

第百十九話　応援で人を救う者達？（前書き）

ネギー一行は今回も行方不明になった。3-Aのクラスメートを見付け出す為に各世界を飛び回るのであった……。



第百十九話　～ 応援で人を救う者達？ ～

～ 夕日町 ～

ネギとカモが次にやって来た世界はごく平凡な町並みが備わっている平和な町だった。

カモ

「兄貴、こんな何処にでもありそうな町に兄貴の生徒が居ると思うか？」

ネギ

「……………さあ、どうだろうねえ……………」

カモの質問に対してネギはかなり低めのテンションで答える。

カモ

「お、おいおい……………何でい？その気の抜けた返答はよお……………」

ネギ

「だって、今まで色々な世界へ行ってきたのにまだ三人しか見付かってないし……………こんな調子で本当に3ーAのクラス全員を見付けられるのかなあと思ってね……………」

カモ

「まあ、確かにそうだけだよ……そんな弱気な事を言うなんてネギの兄貴らしくねえッスよ！」

ネギ

「そうかなあ……僕、何だかクラスの皆さんを見付け出す自信が無くなってきちゃったなあ……。」

そう言うと、ネギは深く俯きなが大きな溜め息を付いてしまう。

カモ

（マズイなあ……いつも元気な兄貴が今回は何だかネガティブになっちまってるぜ……。）

ネギ

「ハアッ……ん？」

ネギは顔を上げると、目の前に貼り紙が貼られている小さな立て札に目を奪われる。

カモ

「兄貴？どうかしたか？」

ネギ

「いや、この貼り紙に何か変わった事が書いてあって……………」

カモ

「どれどれ、俺っちにも読ませてくれ。」

そう言うと、ネギが自らの左肩に乗っかってるカモを立て札に近付ける。

カモ

「え〜っと、何々……………」 『何か困った事があったり元気が無い時は大きな声で『応援団!』と叫んでみて下さい』 だと?」

ネギ

「応援団って、桜子さん達がやってるチアガールみたいに応援する人達の事だよな?」

カモ

「そうツスね……………兄貴、この際だからその『応援団』ってのを呼んでみますかい?」

ネギ

「え?何で?」

ネギはカモの提案に対して思わず首を傾げながら何故かと尋ねる。

カモ

「そんなの決まってるじゃないツスか！ネガティブな兄貴を応援で元氣付けてあげるんスよ！」

ネギ

「そ、そんな……………僕は別にネガティブになんか……………」

カモ

「いいからいいから！物は試してね……………おーい！応援だーん！！」

ネギ

「カ、カモ君！？」

ネギの制止も虚しく、カモが発した大声が辺りに響き渡る。

ネギ

「……………。」

カモ

「……………」

ところが、しばらく時間が経っても誰一人もやって来なかった。

ネギ

「……………カモ君、誰も来ないね……………」

カモ

「そ、そうツスね……………こりゃひょっとしてガセだったか？」

そんな事を言いながら、ネギとカモは何も起こらない状況に呆れていると……………。

？

「押……………っ忍……………!!」

ネギ&カモ

「!!!??」

突如、ネギの前に頭に赤い鉢巻きを巻いて学ランのような黒い制服を着た三人の男達が現れる。

カモ

(な、何だ！？コイツらは……………。)

ネギ

「あ、あの……………皆さんが『応援団』の人達……………なんですか？」

？

「その通り！我々は『夕日町応援団』又は『孤高の応援団』と呼ばれている……………この『夕日町』の困っている人々にエールを送るのが我々の使命なのだ！」

ネギが『応援団』と思われる男達に恐る恐る質問すると、ちよんまげ丁髷とリゼントを融合させたような独特の髪型をした男性が代表して答える。

？

「さて、まずは軽く自己紹介でもしておくか……………俺は『孤高の応援団』の団長を務めている百目鬼ひゃくめき魁かいだ。」

まず最初に自己紹介したのは、靴の代わりに下駄ゲタを履いて学生帽を被って顎髭を生やした大柄な男性・百目鬼魁が応援団の団長だと名乗る。

？

「俺は『孤高の応援団』のリーダーを務めている一本木龍太だ。」

次に自己紹介したのは、先程ネギに説明した男性が一本木龍太と名乗る。

ネギ

(……………カモ君、団長とリーダーってどう違うんだろう?)

カモ

(さ、さあ……………どっちも同じようなもんじゃねえか?)

ネギとカモは応援団達に聞こえないように小声で話し合う。

？

「じ、自分は新人の田中一たなか はじめと申します!」

最後に丸坊主の上に学生帽を被って鏡を掛けた男性・田中一が新人らしく何処かぎこちなく名乗る。

百目鬼

「尚、メンバーは他にも斎藤と鈴木っていう奴らが居るんだが……………あの二人はちょっとした野暮用とかで今は不在だ。」

ネギ

「は、はあ……………」

龍太

「ところで君、何か困った事があって我々を呼んだんじゃないのかい？」

ネギ

「えー？い、いえ……………それは、その……………」

ネギは龍太の質問に対してどう答えればいいのか分からず戸惑ってしまう。

百目鬼

「どうした？何か話せない事情でもあるのか？」

ネギ

「そ、そういう訳ではないんですけど……………」

カモ

（兄貴、折角だからこの暑苦しい連中にも兄貴の生徒について一応聞いてみたらどうでい？）



ネギ

(そ、そうだね……。)

龍太

「ん？何か言ったか？」

ネギ

「な、何でもありませんよ！……えっと、少し話が長くなってしましますけど……。」

そう言うと、ネギは応援団達に粗方あらかたの事情を説明をする。

〈数分後〉

ネギ

「……………という訳なんですよ。」

龍太

「……………な、なんて。」

ネギ

「え？」

応援団達

「何て素晴らしいんだぁ—————っ!!!!!!」

ネギが説明を終えると、龍太を含む応援団達が大量の涙を流しながら大声を上げる。

ネギ

（す、凄い大声……………。）

カモ

（な、何て馬鹿でけえ声を上げやがんだ……………。）

ネギとカモはあまりの大声に思わず両手で耳を塞いでしまう。

百目鬼

「一本木！田中！今の話聞いてたか！？」

龍太

「はい！勿論です！！」

田中

「自分も最初から最後まで聞いてました！！」

百目鬼

「うむ、それでいい……それにしても、まだこんな小さな子供が先生をやってて行方不明になった生徒を捜す為に世界各地を旅しているとは何て健気なんだ……因みに、君は今いくつなんだ？」

ネギ

「か、数えで十歳ですけど……」。

龍太

「数えで十歳！？という事は、まだ九歳ではないかぁー……っ  
！！」

百目鬼

「くぅ~~~~~！ますます立派な少年だな！！」

田中

「はい！この応援団に入部するまでエリートコースを進んでいた自分とは大違いです！！」

応援団達はネギに対して再び大量の涙を流しながら猛烈に感動してしまつ。

カモ

（つたく、本当に暑苦しい連中だな……………。）

ネギ

「な、何もそこまで感動しなくても……………」

百目鬼

「いいや！これが感動せずにはいられようか!？」

龍太

「その通り！俺が九歳の頃とはまるで比べ物にもならない!!」

田中

「ああ〜っ！自分が恥ずかしいッス!!」

そう叫ぶように言うと、応援団達は二度目の涙を大量に流しながら

感動する。

カモ

(……………兄貴、この暑苦しい連中を何とかしてくれよ。)

ネギ

(そ、そんな事言われても……………。)

百目鬼

「よし、こうなったら……………一本木！田中！今から全力でネギ君を応援するぞ！！」

龍太&田中

「押—————っ忍！！」

龍太と田中は百目鬼の提案に対して大いに賛成しながら大声で威勢良く返事をする。

ネギ

「え？い、いいですよ！僕なんかの為に皆さんにご迷惑をお掛けする訳には……………」

龍太

「な、何と！？純粹なだけではなく誠実で謙虚とは……………うお〜  
！立派過ぎるぜーっ！っ！！」

百目鬼

「俺もますます見直したぞおーっ！っ！！」

田中

「自分も人生の先輩として見習いたいッスー！！」

カモ

（いや、先輩が後輩に見習っちゃ駄目だろ……………。）

カモは田中の少し矛盾した発言に対して心の中でツッコミを入れる。

ネギ

（……………カモ君、どうしよっか？）

カモ

（別にいいんじゃないっスか？あいつらだって兄貴を応援したいっ  
て言ってるんだし……………。）

ネギ

（そ、そうだね……………。）

ネギが小声でカモと話していると、すぐに応援団達の方へと振り向く。

ネギ

「あ、あのぉ……………こんな僕で良ければ、宜しくお願いします。」

百目鬼

「おお！そうか……………よし！ネギ君のお許しが出たぞ！今から全力で応援するぞ！！」

龍太&田中

「押————っ忍——！」

龍太と田中が威勢良く返事をして、応援団三人は一斉に応援をする姿勢を取るが……………。

龍太

「あ！そつだ……………団長！自分に良い考えがあります！」

百目鬼

「ん？何だ？言ってみろ。」

龍太

「折角だから彼女達にも応援に加わせた方が華があっというかと思  
いますが……………如何いかでしょうか？」

百目鬼

「彼女達か……………うむ！そうしよう！！」

田中

「では、自分が彼女達を呼びに行きます！」

そう言うと、田中はその場を後にして勢い良く駆け出していく。

ネギ

「あの、先程の彼女達というのは？」

百目鬼

「うむ、我々『孤高の応援団』と同様にこの『夕日町』で応援活動  
をしている三人のチアガールの事だ。」

ネギ

「三人のチアガール……………もしかして、その三人ってこんな顔して  
ますか！？」



そう言つと、ネギは慌てて3-Aのクラス名簿を取り出して『椎名桜子』と名前が記されてるオレンジ色の短いツインテールのような髪型の少女の写真と『柿崎美砂』と名前が記されてる紫色のロングヘアの少女の写真と『釘宮円』と名前が記されてる黒いショートヘアの少女の写真を指差しながら百目鬼に見せる。

百目鬼

「いや、全く違う顔だな……………それに、彼女達はこの『夕日町』にずっと住んでいて我々応援団とも顔見知りなんだ。」

ネギ

「そ、そうですか……………すみません、僕の早とちりでした……………」

そう言つと、ネギはまるでガツカリしたかのように俯いてしまつ。

カモ

（兄貴、幾ら何でも三人揃つてこの世界に居るなんて偶然があると  
は思えねえッスよ……………。）

ネギ

（そ、そつだよね……………でも、三人のチアガールって聞いたら真っ先に桜子さん達の顔が頭に浮かんじゃつて……………。）

田中

「団長！リーダー！お待たせしました〜！！」

しばらくすると、田中が青を基調としたチアガールの衣装を身に纏った三人の女性を引き連れて急いで戻って来る。

龍太

「お！やっと戻って来たか……………」

百目鬼

「よし、それでは早速本題に入ろう……………チアガールズの諸君！君達を呼んだのは他でも無いのだが……………」

？

「はい！詳しい事情は田中君から聞きました！」

百目鬼がチアガール達に事情を説明しようとしたが、チアリーダーと思われる茶髪でポニーテールの髪型の女性がハツキリと元気良く発言する。

龍太

「そうか、それは手間が省けて助かる……………それでは、君達チアガールズにもネギ君の応援に力を貸して貰えないだろうか？」

？  
「勿論ですよ！それが私達の使命みたいなモンですからね。」

？  
「私達も全力で彼を応援させて貰うわ。」

龍太の頼みに対して、残り二人のメンバーである薄いピンク色で青いリボンが付いているツインテールの髪型に眼鏡を掛けた女性と金髪で少しウェーブが掛かったロングヘアの外人女性が答える。

百目鬼

「では、君達もネギ君に軽く自己紹介をしておいた方がいいだろう。」

？  
「それじゃ、まず最初は私から……初めまして！私はこのチアリーダーズのチアリーダーを務めてる雨宮沙耶花よ！」  
あめみや さやか

百目鬼に促されて、一番最初に茶髪でポニーテールの女性が雨宮沙耶花と名乗った。

？

「私は神田葵、ちょっとドジなのが偶に傷だけど宜しく」

次に自己紹介したのは、ツインテールで眼鏡の掛けた女性が神田葵と名乗った。

？

「アンナ・リンドハーストよ……宜しくね、坊や。」

最後に自己紹介したのは、少しウェーブが掛かった金髪の外人女性がアンナ・リンドハーストと名乗った。

ネギ

「こ、こちらこそ宜しくお願いします……」。

カモ

（うひょ、あの金髪の姉ちゃんは中々のナイスバディじゃねえか！）

ネギはチアガール達に軽く頭を下げながら挨拶して、カモはアンナのスタイル抜群な体を嫌らしい目付きで舐め回すように見つめる。

龍太

「よし、これで役者は揃ったな……団長！そろそろ始めましょうか

!？」

百目鬼

「おう！我々『孤高の応援団』が全精力を賭けてネギ君を応援しよう！！」

龍太&田中

「押ーーーーっ忍！！」

百目鬼の言葉を合図に龍太と田中が応援する体勢になるが……。

葵

「あ！その前にちょっといいですか？」

ズルッ！！

突然、葵が手を挙げながら発言したので龍太達は勢い良くズッコケてしまう。

龍太

「い、一体どうしたんだ？」

沙耶花

「実はね、最近私達のチームに新しい子達が入部したんだけど……  
…その子達も一緒に加わってもいいかしら？」

百目鬼

「新人だと？我々は初耳だが……。」

アンナ

「あら、可笑しいわね……確か、葵が団長さん達に報告するって  
言ったと思うけど……。」

葵

「ギクッ!!」

葵はアンナの言葉を聞いて思わず苦笑いしながら硬直してしまう。

沙耶花

「葵、まさか忘れてたんじゃ……。」

葵

「え、え〜っと………すいませ〜ん、完全に忘れてました！」

そう言うと、葵は謝罪しながら深々と頭を下げる。

アンナ

「全く、しょうがない娘ね……………」。

沙耶花

「まあいいわ……………という訳で、その新人の子達も参加させていいかしら?」

百目鬼

「うむ……………いいだろう! 応援するならば一人よりも多い方がいいからな。」

沙耶花

「それじゃ、今から彼女達に連絡してみるからちょっと待っていて……………」。

そう言つて、沙耶花はミニスカのポケットから携帯電話を取り出して連絡を試みる。

カモ

(……………兄貴、何だか段々と凄い事になってきてますねえ。)

ネギ

(そ、そうだね……。)

沙耶花

「あ！もしもし……今何処に居るの？うんうん……何だ、今私達が居る場所の近くじゃない……実はね、今からチアの衣装に着替えてから来てほしいんだけど……そう、ある一人の少年を応援する為にね……うんうん……分かったわ！出来るだけ早く来てね。」

沙耶花が携帯電話で一通り話し終わると、すぐに携帯電話をポケットの中にしまう。

龍太

「どうだった？」

沙耶花

「場所も近いし、衣装も持参してたからすぐに来れるそうよ。」

百目鬼

「ほお、プライベートでも衣装を持参してるとは感心な新人達だな……田中！お前も少し見習った方がいいぞ！」

田中

「お、押忍！」



田中は百目鬼の喝に少し戸惑いながらも威勢良く答える。

？

「お待たせしました〜！」

沙耶花

「お？来たわね……。」「

ネギ

（あれ？今の声って……。）

そう思いながら、ネギ達は声が出た方を向いてみると……。

？

「……………あれ？あの子、ネギ君じゃない？」

？

「え？本当に？」

？

「あっ！？本当だ！ネギ君が居るよ〜！！！」

ネギ

「さ、桜子さん！？それに、柿崎さんや釘宮さんも……………」

ネギの目に写ったのは、沙耶花達と同じチアガールの衣装を身に纏ったネギのクラスメートの一員である椎名桜子・柿崎美砂・釘宮円の三人だった。

桜子

「ネギくん！会いたったよ！！」

美砂

「それに、何だか会うのも凄く久しぶりね！」

円

「って言うか、どうやってこの町へ来たの!？」

そう言いながら、桜子達はネギに抱き着いたり色々な疑問を投げ掛けながらネギを揉みくちやにする。

ネギ

「あわわわ……………み、皆さくん！取り敢えず落ち着いて下さーい！！」

龍太

「……………これは一体どういう事なんだろうっか？」

沙耶花

「さ、さあ……………」

応援団達とチアガールズ達はこの状況が全く理解出来ずに少々困惑していた。

〔数分後〕

ネギ

「……………という訳なんですよ。」

ネギは桜子達に今までの経緯をある程度控えながら説明していた。

美砂

「そうだったの、他のクラスの皆を捜す為に……………」。

円

「それにしても、まさか他のクラスの皆も私達と同じ目に遭ってるなんてね……………」。

桜子

「そうそう！てっきり私達だけが災難な目に遭ってると思ってたけど……………コレは正に私達3ーAの最大の危機って感じだね！」

円

「……………桜子、アンタ何か楽しんでない？」

円は桜子の何処か無邪気な発言に対して思わず苦笑いしながら冷静にツッコミを入れる。

ネギ

「さ、桜子さんは相変わらずですね……………ところで、皆さんはこの町で今まで何をしていらっしやっただんですか？」

円

「え？あゝ、うーんとね……………」。

美砂

「え〜っと、まず何から説明すればいいんだろう……。」

桜子

「私達ね、この町のチアガールズの一員として応援活動をしてるんだよ〜！」

美砂と円が何処から説明したらいいか悩んでいると、桜子が代表して一纏めにして答える。

ネギ

「えっ！？それじゃ、さっき雨宮さん達が言ってた新人達って……」

沙耶花

「え？ええ、桜子ちゃん達の事だけど……。」

葵

「えっとね、この子達がこの町で途方に暮れていたみたいだったから勇気付けようとメールを送ってあげたらね……。」

アンナ

「突然、私達に『弟子にして下さい!』って懇願しながら土下座したのよ……………あの時は本当に困ったわ……………」

そう言つと、アンナは当時の事を思い出しながら溜め息を付いてしまふ。

桜子

「だつて、雨宮先輩達の動きつて本当に凄いなも〜ん!」

美砂

「そうそう!あのキレのある華麗な動きは正に神業よね。」

円

「私達にとっては神様のような存在だよ。」

桜子達は沙耶花達に対してそれぞれの感想を述べながら絶賛する。

沙耶花

「か、神様だなんてちょっと大袈裟よ……………」

葵

「それに、そう言う貴女達だって新人なのに凄く様になってるじゃない。」

アンナ

「まあ、私達と比べたらまだまだだけだね。」

沙耶花達も桜子達に絶賛されて照れながらも、それぞれの感想を述べる。

ネギ

（そうなんだ……やっぱり桜子さん達は現役のチアリーディング部だから素質は十分にあっただろうね……それに、あの三人が無事で本当に良かった……。）

カモ

（それにしても、あのチアの姉さん達が全員揃ってこの世界に居たとはな……何とも奇妙な偶然だけ。）

ネギは桜子達の安否を確信して一安心をして、カモは三人揃って同じ世界に健在していた事に内心驚きながら感心する。

龍太

「団長、こんな偶然もあるもんですねえ。」

百目鬼

「そうだな……ところで、我々は何か重要な事を忘れてないか？」

田中

「重要な事……………ですか？」

そう言つて、田中が腕を組んで考え込むと……………。

龍太

「そ、そうだ！ネギ君の応援をしなくてはいけないだった！！」

田中

「ハッ！しまった！自分も忘れていた！！」

百目鬼

「その通り！自分達の使命を忘れるなど応援団としては失格だぞ！！」

龍太&田中

「お、押忍！！」

龍太と田中は百目鬼の喝に対して少し口籠りながらも威勢良く答える。



ネギ

「あ、いや、その……………」

百目鬼

「よし！それでは気を取り直して……………今から全力でネギ君にエールを送るぞお……………」

龍太&田中

「押……………っ忍……………」

龍太と田中が再び威勢良く答えると、応援団達はすぐに応援する体勢になって身構える。

沙耶花

「それじゃ、私達も張り切って応援するわよ！」

葵&アンナ

「OK……………」

そう言うと、チアガールズ達はそれぞれの両手にボンボンを持って応援する体勢になる。

桜子

「ほにゃらば、私らもネギ君を応援しようー!!」

美砂

「そつね! くぎみー、用意はいい?」

円

「勿論! って言うか、くぎみーって呼ぶな!」

桜子達も両手にボンボンを持って応援する体勢になるが、円が美砂に気に入らない愛称で呼ばれたので素早くツッコミを入れる。

百目鬼

「よし、全員準備が整ったようだな……………それでは、開始ー!」

百目鬼の掛け声を合図に、応援団とチアガールズ達の応援が開始されるのであった……………。

〔数時間後〕

百目鬼

「……………よし、以上でネギ君の応援を終える！」

龍太&田中

「押忍！！」

沙耶花

「みんな、お疲れ様！」

葵

「ふっつ、今回の応援は何時にも増して気合いが入ったね。」

アンナ

「ええ、それに良い汗をかいたわ……………」

しばらくして、応援団とチアガールズ達はネギに対する応援を終えて流れ出る汗をタオルで拭く。

桜子

「いやあ、やっぱり先輩達の応援はいつ見てもカッコイイよね。」

美砂

「うんうん！いつも間違えないで完璧に熟してるしね。」

円

「やっぱり私達にとっては神様だよね。」

桜子達もタオルで流れ出る汗を拭きながら沙耶花達を絶賛する。

カモ

（……………な、なあ兄貴、あの連中の応援半端なく凄かったツスねえ。）

ネギ

（う、うん……………それに、何だか不思議と力が湧いて来た気がするよ。）

そう思いながら、ネギとカモは応援団達の応援に啞然としながらも心底から感服していた。

龍太

「ところでネギ君、俺達の精一杯の応援……………君の心に届いたか？」

ネギ

「は、はい！勿論です！皆さんの応援のお蔭で元気が出て来ましたよ！」

百目鬼

「そうか、確かに最初に会った時と今とでは全然目の輝きが違うな……………」

そう言っていると、百目鬼はネギの心境の変化に気付いて微かに口元を緩める。

龍太

「それじゃ、元気が出たネギ君にコレをあげよう！」

そう言つて、龍太はポケットから自分達の頭に巻いているのと同じ赤い鉢巻きを取り出してネギに手渡す。

ネギ

「こ、この鉢巻きは……………」

龍太

「俺達からのプレゼントだ！また元気が無かったり、くじけそうになつたら頭に巻いてみてくれ！」

ネギ

「でも……本当に貰っちゃっていいんですか？」

百目鬼

「ああ、遠慮する事は無い！受け取ってくれ！」

ネギ

「団長さん……。」

ネギは思わぬプレゼントに感極まりながら、先程貰った赤い鉢巻きを頭に巻き付ける。

4725

桜子

「わあ〜！ネギ君似合ってるよ〜〜！！」

ネギ

「え？そ、そうですか？」

ネギは桜子に褒められて思わず頬を紅く染めながら照れてしまう。

美砂

「ところでネギ君、これからネギ君は他のクラスメートを捜しに行くとして……私達も一緒に捜しに行った方がいいよね？」

ネギ

「あ、いえ、お気持ちは有り難いのですが……とても危険なので皆さんはこの町で待機してて下さい。」

円

「でも、そんなに危険だったらネギ先生一人だけで捜し回るのは余計危ないんじゃない？」

ネギ

「そ、それなら大丈夫です！他にも明日菜さ……じゃなくて、タカミチやしずな先生達が3-Aの皆さんを全力で捜し回ってますから！」

桜子

「そっかぁ……うん！それだったら安心だね！」

ネギ

（ホッ、何とかごまかせた……。）

ネギは何とか桜子達を納得させた事に一安心して心の中でホッとす  
る。

美砂

「それじゃ、これから見知らぬ地へと旅立とうとするネギ君を応援しながら見送りましょう！」

桜子

「賛せい！やろつやろつー！！」

円

「まあ、私達が出来る事って言ったら応援する事ぐらいだからね……」

そう言うと、桜子達は再びボンボンを持って応援する体勢へと移る。

沙耶花

「これは負けてられないわね……二人共！もう一丁やるわよ！！！」

葵&アンナ

「OK！！！」

沙耶花の掛け声を合図に、チアガールズ達も再びボンボンを持って応援する体勢に移る。



百目鬼

「一本木！田中！我々も女子に負けずに精一杯見送るぞ！！」

龍太&田中

「押ーーーーっ忍！！」

そして、こちらも百目鬼の掛け声に龍太と田中が威勢良く返事をし  
て応援する体勢へと移る。

百目鬼

「少年よ！我々はいつまでも君の成功を応援している！だから最後  
まで決して諦めたりくじけたりするでないぞ！！」

ネギ

「は、はい！！」

百目鬼

「うむ！良い返事だ……それでは、ネギ先生に栄光あれーーーー  
！！」

龍太&田中

「押ーーーーっ忍！！」

沙耶花

「頑張つてね！私達も応援してるから！」

桜子

「勿論、私達も！ね？美砂！くぎみん！」

美砂

「当たり前でしょ！」

円

「って言うか、くぎみんって呼ぶなっつての〜！」

ネギ

「皆さん、本当にありがとうございました！それでは、僕はこれで失礼します！」

そう言うと、ネギは応援団達に見送られながら、その場から勢い良く立ち去っていく。

ネギ

「よ〜し〜この調子で残りのユー・Aのみんなを捜し出すぞ〜！〜！」

カモ

(ふうく、どうやらいつもの兄貴に戻ったみてえだな……………。)

そう思いながら、カモは明らかに元気を取り戻したネギを満足そうに見つめるのであった……………。

第一百十九話「応援で人を救う者達？」（後書き）

という訳で、今回は『押忍！闘え！応援団』編でした。

応援団と呼ばれる団体が困っている人々にエールを送って人々を救うという音楽アクションゲームです。

ゲームシステムとしてはゲームから流れる音楽に合わせて画面をタッチしたり回したりして応援を成功させるというゲームらしいです。

因みに、今回登場した応援団やチアガールズ達の口調は完全に自分のイメージで描いてしまったのですが……どうでしょうか？（苦笑）

もし読んで違和感とか感じましたら遠慮なく感想欄に書いて下さい。

それから、この作品の世界に桜子・美砂・円の三人を登場させたのは……やはり応援繋がりという事で登場させました（苦笑）。

という訳で、次回もお楽しみに！

第二百二十話 蝙蝠女の華麗なるギター演奏? (前書き)

今回の話はあまり面白くないかもしれません…… (汗)。

第二百二十話 蝙蝠女の華麗なるギター演奏？

〜ワルワルタウン〜

明日菜とのどかと美空は治安が悪そうな小さな町にやって来ていた。

のどか

「……………何だか、ちょっと怖い雰囲気町ですね。」

明日菜

「そ、そうね……………こんな町にクラスの誰かが居るのかしら？」

美空

「さあね、ひよつとしたらこの町の悪い奴らに拉致されてるんじゃない……………」

明日菜

「ちよつと美空ちゃん！縁起でも無い事言わないでよ！」

美空

「だ、だってこんな店が休みだらけの町だったらそついう可能性だつて……………あれ？」

明日菜が美空の不適切な発言に思わず怒りながら詰め寄ると、言い訳しようとした美空が何かを発見する。

のどか

「どうしたんですか？」

美空

「ほら、あの店だけ開いてるけど……………」

明日菜

「え？どれどれ……………」

明日菜とのどかは美空が指差す先を見てみると、看板に『GBミュージック』と書かれた小さな楽器店が目に入る。

明日菜

「本当だ……………」『GBミュージック』だって。」

のどか

「見たところ、楽器店のようですね。」

美空

「ね、ねえねえ！折角だからあの店に入ってクラスメートについて聞いてみるってのはどうよ？」

明日菜

「ううん、それもそうね……………よし！一応行ってみるか！」

そう言いつと、明日菜達三人は『GBミュージック』という名前の楽器店に入っていく。

〈GBミュージック内〉

明日菜達が店の中に入ると、店内には色々な種類の楽器が商品として並べられたり飾られたりしてて店員らしき人も誰一人居なかった。

のどか

「……………店の人がないみたいですね……………」



明日菜

「本当ね……………ひょっとして、まだ開店してなかったのかしら？」

美空

「まつさか、きっと普段から客が来ないだけなんじゃ……………」。

？

「あ、随分言ってくれるじゃない？」

全員

「!？」

その場に居る全員が何者かの声に反応して振り向いてみると、少し厚化粧をして首にピンク色でモコモコしたマフラーのような物を巻いた女性がカウンターで暇そうに膝を付いていた。

美空

「ビ、ビックリしたッス……………」。

のどか

「あ、あの……………もしかして、この店の人ですか？」

？

「ええ、そうよ……私がこの『GBミュージック』の店長をやっているバーバラ・バットよ。」

明日菜

「そ、そうでしたか……先程は失礼な事を言つてすいませんでした。」

バーバラ

「別にいいのよ、実際に今日もお客なんて来てない訳だしね……。」

そう言うと、バーバラ・バットと名乗った店長の女性はまるでいつもの事のように呆れながら語る。

美空

（まあ、こんだけボロけりゃ客も来ないわな……。）

そんな事を思いながら、美空は店中断ぎ接ぎだらけの壁を見ながら苦笑いを浮かべる。

バーバラ

「ところで、アンタ達は誰？もしかして、お客さんかしら？」

のどか

「あ、いえ、その……………」

明日菜

「私達、クラスメートを捜してるんだけど……………この中で見覚えのある顔はありませんか？」

そう言うと、明日菜がポケットからクラス名簿のコピー用紙を取り出してバーバラに見せる。

バーバラ

「うーん……………悪いけど、どれも見ない顔ばかりねえ……………」

のどか

「そ、そうですか……………」

明日菜

「本屋ちゃん……………」

明日菜は落ち込んでしまったのどかを見て何とか励まそうとするが……………。

バーバラ

「でも、もしかしたらこの町のどっかに居るかもしれないわね……  
…ちよっと待ってて、この町の連中にも聞いてみるから。」

明日菜

「え？で、でも……会ったばかりなのにそこまでしてくれるなんて……。」

美空

「別にいいじゃん、この人がやりたいって言ってんだしさ……。」

バーバラ

「あら、誰も私がやるなんて言ってないわよ？」

明日菜&美空

「……………へ？」

明日菜と美空はバーバラの発言の意味が理解出来ずに思わず首を傾げながら目を丸くしてしまつ。

明日菜

「じ、じゃあ誰が？」

バーバラ

「私の弟を代わりに捜させるわ……………ティンティン！ちょっとこっちに来なさい！」

パタパタパタツ……………。

バーバラが店の奥に向かって誰かを呼び掛けると、店の奥から紫色の頭巾を被って背中に蝙蝠こうもりのような小さな羽根を生やした赤ん坊ぐらいの大きさの小さな子供が背中の羽根を小さく羽撃はねたかせて飛行しながら現れる。

明日菜

「な、何？このメツチャちっちゃん子は……………」

美空

「……………つてか、普通に飛んできますけど……………」

のどか

「でも、可愛い……………」

明日菜と美空は突然現れた空飛ぶ小さな子供の登場に啞然とするが、のどかはその可愛らしい容姿に少しうっとりしてしまふ。

バーバラ

「ねえ、コレちょっと借りてもいい？」

明日菜

「え？は、はい……。」

そう答えると、明日菜はバーバラにクラス名簿のコピー用紙を手渡す。

バーバラ

「ティンティン、この紙に載ってる子達がこの町に居ないか町の連中に聞き出して来なさい。」

ティンティン

「……………」。

ティンティンは何も答えずに、ただ文句がありそうな表情を浮かべながらバーバラを見つめる。

バーバラ

「何よ、別にいいじゃない……………アンタ、どうせ暇なんでしょ？」

ティンティン

「……………」

パタパタパタパタツ……

すると、ティンティンはバーバラからクラス名簿のコピー用紙を受け取って飛行しながら渋々と店から出て行ってしまふ。

バーバラ

「全く、いっちょ前に口答えなんかしちゃって生意気なんだから……」

明日菜

（え？あの子、何か喋ったっけ？）

美空

（さあ、知らねッス……………」

明日菜と美空はバーバラに聞こえないように小声で話し合う。

のどか

「あ、あの……………あんな小さな子だけで大丈夫なんでしょうか？」

バーバラ

「大丈夫よ、あの子は姉の私に似てしっかりしてるからね。」

明日菜

「は、はあ………ところで、あの子さっき飛んでましたよね？」

バーバラ

「そりゃ飛べるわよ………だって、あの子は蝙蝠なんですもの。」

明日菜&のどか&美空

「こ、蝙蝠!？」

明日菜達はバーバラの発言に思わず耳を疑ってしまう。

明日菜

「そ、それじゃバーバラさんも？」

バーバラ

「ええ、そうよ………と言っても、私はティンティンと違って羽根が無いから飛べないけどね。」

美空

「ってか、そもそも何で蝙蝠の姉弟が楽器店なんか経営してんの？」



そんな事を思いながら、美空は怪訝そうにバーバラを見つめる。

バーバラ

「……………ところでアンタ達、あの子が戻って来るまでちょっとだけ私に付き合ってくれない？」

のどか

「え？いいですけど……………」

バーバラ

「何、ちよっとだけ私の演奏を聞いてほしいだけだから心配しないで。」

明日菜

「演奏？」

明日菜を含む三人はバーバラの発言に思わず耳を傾ける。

バーバラ

「実はね、最近仲間達と一緒にバンドを始めたんだけど……………未だに私と相性がピツタリなギターが見付からないのよねえ……………そこで、どのギターが私にピツタリなのかアンタ達に聞かせて確かめた

いって訳よ。」

明日菜

「あゝ、成程……………私達で良かったら全然いいですよ？」

バーバラ

「そう言ってくれると嬉しいよ……………そんじゃ、早速この町の広場で演奏するから私に付いて来て。」

のどか

「は、はい。」

美空

(ラッキー 今日色々捜し回らなくてすむかも……………)。

美空だけ心の中でガッツポーズを取りながら、三人はバーバラの後に付いて行きながら店を後にするのであった……………。

くワルワルタウン・とある広場く

明日菜達三人はバーバラに連れられて『ワルワルタウン』の広場へとやって来た。

のどか

「……………あの、此処で演奏するんですか？」

バーバラ

「そうよ……………まあ、演奏するって言ってもギターをちょこつとだけ軽く奏でるだけだからね。」

美空

「そんじゃ、ちやつちやつと始めちやつて下さい」「

明日菜

「って、美空ちゃん！そんな言い方じゃ失礼でしょ！？」

明日菜は何故か上機嫌でバーバラに早く演奏するように仄めかす発言に対してツツコミを入れる。

バーバラ

「おっと、それもそうね……………それじゃ、始めるわよ！」

そう言うと、バーバラはエレキギターを持って演奏を開始する。

ギュイーーーーーン！！

明日菜&のどか&美空

「！！！？？」

次の瞬間、明日菜達三人はバーバラが奏でたギターの凄まじい音色に思わず飛び跳ねてしまう。

明日菜

（な、何なの！？この騒音みたいな音色は……………。）

のどか

（す、凄い音……………。）

美空

（あ、頭が痛い……………。）

明日菜達はバーバラの演奏に堪えられずに思わず両手で耳を押さえ

てしまう。

バーバラ

「いえ〜い！ノッてるか〜い？」

ところが、バーバラは明日菜達の今の心境など全く気付かずにノリノリで大音量のままエレキギターを奏で続ける。

美空

（あ、明日菜……あの蝙蝠女に『演奏を止める』って言ってよ……。）

明日菜

（え？何？今何が言った？）

のどか

（な、何だか目まいが……もう……駄目……。）

美空は明日菜に話し掛けるが大音量のせいで何も聞き取れず、のどかはあまりの大音量で今にも意識が飛びそうになってしまっているのであった……。

〜数分後〜

バーバラ

「…………ふう、ノリにノッチャって思わず一曲弾いてしまったわ……………」

明日菜

（……………や、やっと終わった……………）

美空

（……………し、死ぬかと思った……………）

のどか

（あ、あう……………）

漸くバーバラが演奏を終えると、明日菜達三人は安堵の表情を浮かべながら俯せになってゆっくりと倒れ込んでしまう。

バーバラ

「あら？どつしたの？そんな所で倒れちゃって……………」

美空

（ア、アンタのせいでしょうが……………」

バーバラは自分の仕業とも知らずに倒れ込んでいる明日菜達を見て不思議そうに首を傾げる。

バーバラ

「ところで、さっきの私の演奏はどうだった？」

明日菜

「え？あゝ、いやゝ、えゝっと……………」

明日菜がバーバラの質問に何て答えたらいいか悩んでいると……………」

バーバラ

「ん？……………あ！ティンティンが戻って来たわ。」

バーバラの言う通り、ティンティンがこちらに向かって飛んで来る。

バーバラ

「どうだった？何か手掛かりとか掴めた？」

ティンティン

「……………」。

ティンティンはバーバラの質問に何も喋らずに首を横に振って答える。

バーバラ

「……………そう、この『ワルワルトウン』には居なったよね。」

明日菜

「そ、そうですね……………それじゃ、私達はそろそろ帰るっか？」

のどか

「は、はい……………」。

美空

「さ、賛成……………」。

そう言うと、明日菜達三人はゆっくりと立ち上がってそのまま覚束おぼつかない足取りで立ち去ってゆく。



バーバラ

「あつ!?!ちよつと!まだ感想を聞いてないんだけど……………」

ティンティン

「……………」

バーバラ

「え?」そろそろ店に戻った方がいい!」ですって?……………そうね、もしかしたらお客さんが来てるかもしれないし……………って、そんな事ある訳ないか……………あゝあ、また退屈な店番が私を待ってるのね……………」

そう言つと、バーバラとティンティンは『GBミュージック』に帰つてゆくのであつた……………。

一方、明日菜達は……。

明日菜

「痛たたた！まだ頭が痛むわ……二人共、大丈夫？」

のどか

「な、何とか大丈夫です……。」

美空

「……私は全然大丈夫じゃねッス……。」

明日菜の質問に対して、のどかと美空は片手で頭を押さえて苦痛な表情を浮かべながら答える。

明日菜

「そ、そう………そんなじゃ、今日はこのまま帰りましょ……。」

のどか

「そ、そうですね……………この町にもクラスのみんなは居ないようですし……………」

美空

「大賛成ツス……………」

そう言うと、明日菜達三人はまだ覚束ない足取りで『ワルワルタウン』を後にするのであった……………。

第二百二十話 蝙蝠女の華麗なるギター演奏？（後書き）

という訳で、今回は『大合奏！バンドブラザーズ編』でした。

このゲームはみんなでバンドを組んで合奏するゲーム………という風に聞いているのですが、実際はどうなんでしょうか？（汗）

因みに、ご存知だと思いますが………今回登場したバーバラ・バットは『スマブラX』でもアシストフィギュアとして登場してます。

それから、バーバラの性格は『バンドブラザーズ』の公式サイトに掲載されてる漫画によるとかなり我が儘な性格なのですが………全然似てませんね（苦笑）。

それと、前書きにも書いたのですが………今回はオチや捻りとかがありませんでしたね（汗）。

ただ、バーバラが『スマブラX』のように大音量でギターを演奏して明日菜達はそれに堪えられなくてそのまま帰ってしまうという何ともしようもないオチでした（苦笑）。

これからもこういう話を書くと思いますが、それでも読んで下さるのでした幸いです！

## 第二百一十一話　ナナシ島の古い守り神

ナナシ島・広場

木乃香・刹那・楓の三人は南国のような島の噴水がある町の広場にやって来ていた。

木乃香

「あ！せつちゃん、噴水の中に魚がいっぱい泳いどるえ〜！」

刹那

「ま、まさか……………幾ら何でも噴水の中に魚なんて……………」

そう言って、刹那が苦笑いしながら噴水を覗き込んでみると……………。

刹那

「う、嘘……………ホンマに魚が泳いどるわ……………」

楓

「うむ、しかも大量でござるな。」

刹那と楓の言う通り、噴水の中には沢山の魚が泳ぎ回っていた。

木乃香

「ね？ウチの言う通りやったやろ？」

刹那

「は、はあ……でも、何故噴水の中に魚が放たれているのでしょうか？」

楓

「恐らく、此処を釣り堀の代わりにしているのだと思います……どれ、試しに拙者が一匹釣り上げてみると思います。」

そう言うと、楓が何処からか木の枝で作った一本の釣竿を取り出す。

刹那

「って、一体何処から釣竿なんか……。」

木乃香

「あゝ、楓さんだけ狡いわあ……ウチらも釣りしたいわあ。」

楓

「およ？そつでござるか……それならば、お主達も拙者と一緒に釣りをするでござるか？」

そう言うと、楓はもう二本の釣竿を取り出して木乃香と刹那に手渡す。

木乃香

「わ〜い、これでウチらも釣りが出来るわ〜！」

刹那

「で、でも噴水で釣りをしてもいいんでしょうか？」

楓

「大丈夫でござろう……それに、此処ら辺に釣り禁止の立て札とかが無いでござるし。」

刹那

「し、しかし……。」

木乃香

「もう、せつちゃんったら心配性なんやから……ほなら、この島の人に聞いてみる？」

刹那

「そ、そうですね……まずは現地の方に確認を取ってからにしま

しょう!」

木乃香

「せやったら、まず人を捜さな……あ!居た!」

木乃香がすぐに辺りを見回すと、短髪で赤毛の少年が歩いていった。

木乃香

「ウチ、あの人にちょっと聞いてみるわ〜。」

刹那

「お、お待ち下さい!私も一緒に……。」

木乃香が赤毛の少年の方に駆け出したと同時に、刹那も後から慌てて駆け出していく。

木乃香

「あの〜、ちょっとええかな〜?」

?

「……………え?僕?」



木乃香が赤毛の少年に呼び掛けると、少年はその場に立ち止まって木乃香達の方を向く。

刹那

「はい、突然呼び止めてしまって申し訳ありません……少しお話を伺っても宜しいでしょうか？」

？

「い、いいけど……。」

木乃香

「あんな、あの噴水で釣りをしてもええんやろか？」

？

「噴水？確か昨日からまた釣り禁止になったって聞いたけど……あ！？」

刹那

「え？どうかしました……なっ！？」

木乃香

「ありゃりゃ……。」

刹那と木乃香は赤毛の少年と同じ方向を見ると、楓が既に何匹もの魚を釣った状態で噴水の中に釣糸を垂らして釣りをしていた。

ビシュッ！！

楓

「おっ！？また釣れたでござるな。」

すると、楓が釣竿を引き上げて一匹の魚を釣り上げてしまう。

刹那

「か、楓！何を一人で勝手に釣りをしているんだ！？」

楓

「およ？バレてしまったでござるか……………いやあ、つい待ち切れなくて先に始めてしまったでござるよ。」

木乃香

「……………でもね楓さん、どうやら此处は昨日から魚釣り禁止になつたみたいなんよ。」

楓

「そつでござつたか……………では、少々名残惜しいでござるが禁止なら

ば仕方ないでござるな……。」

そう言つて、楓は今まで釣り上げた魚を渋々と噴水に放とうとするが……。

ファンファンファンファンファンファンファンファンファン！

？

「コラーツ！ソコノ三人娘達ーーーーーッ！！」

木乃香 & 刹那 & 楓

「！？」

？

（あちゃ〜、やっぱり来ちゃったか……。）

突如、木乃香達の前に青色のボディのロボットが片手に警棒を持って頭上に付いてる赤いランプからパトカーのようなサイレンを鳴らしながら駆け寄つて来る。

木乃香

「わあ〜、青いロボットさんや〜！」

刹那

「あ、あの……………私達に何かご用でしょうか？」

？

「ソリヤアモウ大アリデスヨ！何セ、貴女達八違反ヲ犯シタンデスカラネ！」

楓

「は、はて？一体何の事でござるつか？」

楓はロボットの言葉に内心ドキッとしながらも白々しく聞き返す。

？

「惚ケテモ駄目デスヨ！貴女達ハコノ釣り禁止デ釣りヲシテイタデシヨー!?」

木乃香

（あやゝ、やっぱりバレとるわあ……………。）

刹那

「……………楓、もう白状した方がいいと思つぞ？」

楓

「そ、そつでござるな……申し訳ないでござる、ほんの出来心でつ  
い……………」

そつ言つと、楓はロボットに向かって深々と頭を下げながら謝罪す  
る。

？

「ヤハリソウデシタカ…………ソレデハ、両手ヲ前ニ出シテ下サイ。」

楓

「あい？両手でござるか？」

楓は訳が分からずに両手を突き出すように前に出すと…………。

ガシャン！！

木乃香 & 刹那

「！？」

楓

「…………およ？」

突然、ロボットが手錠を取り出して楓の両手に手錠を掛けてしまう。

？

「貴女ヲ規則違反ニヨリ現行犯逮捕シマス！」

刹那

「ちよ、ちよつと待って下さい！幾ら釣り禁止場所で釣りをしたからといって、何も逮捕までしなくても……。」

木乃香

「せや！楓さんは逮捕されるような悪い事はしてへんよ！」

？

「問答無用デス！コレガ『ななし島』ノ規則ナノデス！」

そう言つと、ロボットは刹那と木乃香の言葉にも耳を貸さずにそのまま楓を連行しようとする。

？

「……………ねえマップ、今回は許してあげたら？」

マップ

「ん？ソノ声ハ……。」

マツポと呼ばれたロボットは先程の赤毛の少年の声に反応して、そのまま首だけ少年の方を向いて立ち止まる。

マツポ

「オヤ、ぽっくるサンデハアリマセンカ……デモ、幾ラぽっくるサ  
ンノ頼ミデモコレバカリハ聞ケマセンヨ。」

ポツクル

「そ、そんな……。」

マツポ

「トニカク、コノ女性ハ処分ガ決マルマデ地下牢ニ閉ジ込メテオキ  
マス！サア、大人シク付ツイテ来ナサイ！」

楓

「あ、あいあい……。」

こうして、マツポはポツクルと呼ばれた赤毛の少年の制止を振り切  
って楓を連行しながら噴水の近くに建てられてる大きな建物の中  
入っていく。

木乃香

「……………せつちゃん、楓さんが捕まってもうたね……………」

刹那

「は、はい……………何とかして楓を助け出さなければなりませんね。」

木乃香

「せやね……………でも、どないすんの？」

刹那

「まずは、あの建物に入って責任者の方に楓を解放してくれるよう話を付けなければ……………」

ポツクル

「……………ねえ、もし良かったら僕がメイヤー村長に話してあげよっか？」

木乃香 & 刹那

「えっ!？」

木乃香と刹那はポツクルの発言に反応して一斉にポツクルの方を向く。



木乃香

「ホ、ホンマに？」

ポツクル

「うん、メイヤー村長とは顔見知りだから……多分、僕から頼み込めば分かって村長も分かって貰えると思うよ？」

刹那

「本当ですか！ありがとうございます！え〜っと……。」

ポツクル

「あ！まだ自己紹介してなかったね……僕の名前はポツクルだよ！」

ポツクルは木乃香と刹那に向かって軽く頭を下げながら自己紹介をする。

木乃香

「ポツクル君かぁ……ウチは近衛木乃香や、木乃香でええよ。」

刹那

「私は桜咲刹那と申します。」

ポツクル

「木乃香と刹那だね……それじゃ、早速役場の中に入ってみよう！」

木乃香

「ほえ？此処つて警察署とかやないん？」

ポツクル

「うん、この村にはそういうのが無いからね……だから、役場の地下牢に規則を破った人をしばらく閉じ込めるんだ。」

刹那

「そうなんですか……とにかく、私達はその地下牢に行ってみましょう！」

木乃香

「せやね、楓さんが心配やし……。」

ポツクル

「地下牢へ行くには、二階へと続く階段の近くに扉があるから……  
…それじゃ、改めて入ろう！」

そう言うと、木乃香達は役場の中に入っていく。

〔役場・地下牢〕

楓

「……………いやあ、参ったでござるなあ。」

一方、楓は役場の地下牢に閉じ込められていた。

楓

「まさか、拙者がお縄を頂戴されてそのまま牢屋行きにされるとは……………こんな経験は生まれて初めてでござるよ。」

そんな事を言いながら、楓は呑気に胡座を掻きながら辺りを見回している……………。

ギー……………

突然、部屋の奥の扉が開いた音が地下牢全体の部屋から響き渡る。

楓

「およ？誰か来たみたいでござるな……………まあ、大体検討は付いておるでござるが……………」

木乃香

「楓さん！」

楓の予想通りに、木乃香と刹那が部屋に入ってきて楓が閉じ込められてる檻の前までやって来る。

刹那

「何という事だ……………これでは大罪を犯して刑務所に收容された人と全く変わらないな……………」

木乃香

「でも、すぐに此処から出られるから安心してや〜。」

楓

「そつでござるか……………それを聞いただけで少し安心したでござるよ。」

楓は木乃香の言葉を聞いて安堵の笑みを浮かべながら一安心する。

刹那

「だが、元はと言えば楓があんな所で釣りをしたからこんな事になつてしまつたんだからな。」

楓

「いやはや、面目ないでござる……………」

木乃香

「せやけど、それだけで牢屋に入れるなんてあんまりやよ。」

刹那

「そ、それもそうですね……………」

刹那が木乃香の言葉に同意した時……………。

ギーーーーー……………

楓

「およ？また誰かが来るようでござるな……………」

木乃香

「ひょっとして、ポツクル君かもしれへん。」

そう言うと、ポツクルと一緒に青色のお団子頭のような髪型に黄色を基調としたスカート状の服を着た少女が階段から降りて来る。

ポツクル

「二人共、お待たせ！」

剎那

「どうですか？楓は無事に解放されますか？」

ポツクル

「いや、その事について今から此处でメイヤー村長と直談判するんだ。」

？

「ごめんなさい、ウチのパパが規則マニアだからこんな事になっちゃって……………」

すると、ポツクルの隣に立っていたお団子頭の少女が申し訳なさそうに深々と頭を下げながら木乃香達に謝罪する。

木乃香

「ポツクル君、その子は誰なん？」

ポツクル

「えっと、彼女は僕の友達でありメイヤー村長の娘のキャッピーだよ。」

キャッピー

「初めまして、宜しくね」

ポツクルに紹介されたキャッピーという名前の少女は木乃香達に優しい笑みを浮かべる。

刹那

「こ、こちらこそ初めまして………桜咲刹那と申します。」

木乃香

「ウチは近衛木乃香や、木乃香でええよ。」

楓

「拙者は長瀬楓でござるよ。」

木乃香達も思わずキャッピーに向かって軽く自己紹介をする。

キャツピー

「ところで、この辺りでは見掛けない顔だけど……ひょっとして、貴女達『シマソト』から来たの？」

木乃香

「『シマソト』？」

木乃香はキャツピーの言葉に思わず首を傾げる。

ポツクル

「僕達は『ナナシ島』以外の全ての場所を『シマソト』って呼んでるんだけど……君達の住んでいる島では違う名称で呼ばれてるのかな？」

刹那

「え、えっと……そ、そうです！私達はその『シマソト』と呼ばれている人達なんです。」

刹那はポツクル達の話に合わせるようにして出来るだけ上手く答える。

キャツピー

「やっぱりね、パパったら『ナナシ島』の規則を知らない『シマソト』」



ト』の人まで閉じ込めるなんて……… パパー！早く来てー！！」  
キャッピーは地下の入口の扉に向かって父親に対して早く来るように怒声混じりに呼び掛ける。

？

「はいはい、今行くのである！」

ギーーーーー……

扉が開かれたと同時に、大柄な体格で鼻の下に白い髭を生やして頭が禿げてる初老の男性がマッポと共に現れる。

マッポ

「めいやーサン、コチラノ糸目ノヨウナ女性ガ釣り禁止ノ規則ヲ破ツタ違反者デス。」

メイヤー

「うむ、またしても釣りによる規則違反であるか………最近、こういう違反が多いから非常に頭を悩ますのである。」

メイヤーと呼ばれた初老の男性は深々と溜め息を付きながら牢屋に入ってる楓を見つめる。

キャツピー

「もう〜！パパったら、何を呑気な事を言ってるのよ!？」

ポツクル

「キ、キャツピー……………取り敢えず落ち着こうよ……………」

キャツピーは父であるメイヤーの他人事のような発言に怒り出すが、ポツクルが慌ててキャツピーを宥めようとする。

メイヤー

「な、何でそんなに怒っているのか？」

キャツピー

「そりゃ怒るわよ!こうしてまた規則違反した人を牢屋に閉じ込めてるんだもの!！」

マツポ

「きゃっぴーサン、『ななし島』ノ規則ハ厳重注意ガ必要ナノ八百モ承知ノハズデス!ニモ関ワラズ、コノ人ハ島ノ規則ヲ破ツタンデスヨ！」

メイヤー

「そうそう、マップ君の言う通りなのだ〜よ。」

ポックル

「……………では、その人がこの島の住人では無かったらどうします?」

メイヤー&マップ

「……………?」

メイヤーとマップはポックルの発言に思わず耳を疑ってしまふ。

メイヤー

「ポ、ポックル君……………それは一体どういう意味なのかな?」

マップ

「モ、モシカシテ……………。」

キャツピー

「そうよ!…この人は『シマソト』の人なのよ!」

メイヤー

「な、何ですとお……………?」

マツポ

「マ、マジデスカ!？」

メイヤーとマツポはキャッピーの発言に度肝を抜かされてしまう。

ポツクル

「村長、『シマソト』の人を閉じ込めてしまったら色々とマズいんじゃないですか?」

キャッピー

「そうそう!そのせいで観光客が一気に減っちゃうかもしれないし……。」

メイヤー

「う~~~~む……………」

メイヤーはポツクルとキャッピーの言葉を聞いて腕を組みながら考え込んでしまう。

メイヤー

「……………マツポ君、直ちに彼女を釈放しなさい!」

マツポ

「リヨ、了解デス！」

ガチャン！！

次の瞬間、マップが持っていた牢屋の鍵で錠前を外して扉を開ける。

楓

「……………ふう、思ったよりも早く出られて良かったでござる」

そう言いながら、楓は開け放たれた牢屋の扉から嬉しそうに出て来る。

木乃香

「良かった、楓さんが無事に出られて……………ね？せつちゃん。」

刹那

「はい、そうですね。」

木乃香と刹那は楓が無事に釈放されて安堵の表情を浮かべる。

メイヤー

「いやあ、こちらのマップ君が失礼な事をして大変申し訳ないの

である。」

マツポ

「エエッ!? ソ、ソナ……私ハタダ自分ノ使命ヲ果タシタダケ  
ナノニ……。」

キャッピー

「パパ! マツポだけのせいにしちゃ駄目でしょ!」

メイヤー

「は、はい……。」

メイヤーはキャッピーに怒られてしまい意気消沈してしまう。

刹那

「ま、まあまあ……そもそも、あんな所で釣りをした楓にも非が  
ありますから……あまりお気になさらないで下さい。」

木乃香

「そうそう……せやから、あまりお父さんを叱らんであげとい  
てね?」

キャッピー

「……まあ、今回は木乃香ちゃん達に免じてこれ位で許してあげるわ。」

メイヤー

( ホッ、良かった……。 )

キャッピーが刹那達の説得によって怒りを鎮めると、メイヤーは心の底から安堵の表情を浮かべる。

メイヤー

「それでは、私は仕事が残ってるので失礼するのである………マッポ君、行くのである。」

マッポ

「ハイデス！」

メイヤーとマッポはまるで逃げるようにその場から立ち去っていく。

キャッピー

「ったく………それじゃ、私もチビタちゃんと遊ぶ約束してるから行くね。」

そう言いつつ、キャッピーも急いでその場から立ち去っていく。

刹那

「では、私達もそろそろ失礼して……………」

木乃香

「せつちゃん、その前にポツクル君にあの事を聞いてみよ？」

刹那

「あ！そうですね……………私とした事がすっかり忘れてました。」

楓

「不覚ながら拙者も忘れていたでござるよ……………」

木乃香

「もお！そんな大事な事を忘れたらアカンやんか。」

刹那

「す、すみません……………」

楓

「いやあ、面目ないでござる……………」



刹那は木乃香に注意されて頭を下げ、謝罪して、楓は苦笑いを浮かべながら謝罪する。

ポツクル

「……………あの、ところで僕に聞きたい事って？」

木乃香

「え、えつとね……………ウチら友達を捜してんねんけど、この中で見た事ある顔とかあるかな？」

そう言いながら、木乃香は3ーAのクラス名簿のコピー用紙を取り出してポツクルに見せる。

ポツクル

「う〜ん……………悪いけど、どの子の顔も初めて見る顔ばかりだなあ……………」

木乃香

「そ、そか……………この島にも居おらんみたいやね……………」

刹那

「お嬢様……………」

楓

「うぬ……………」

ポツクルの言葉を聞いた木乃香は落ち込んでしまい、刹那と楓は掛ける言葉が見付からずに押し黙ってしまう。

ポツクル

「……………もしかしたら、その友達に会えるかもしれないよ？」

木乃香&刹那

「……………えっ？」

木乃香と刹那は一瞬だけポツクルの言葉を理解出来ずに思わず耳を疑ってしまう。

ポツクル

「うん……………取り敢えず、僕に付いて来て。」

刹那

「分かりました。」

そう言うと、刹那達はポツクルの後を付いて行きながら地下牢を後にするのであった……………。

くテンジンの祠く

刹那達はポツクルに連れられて、寶錢箱のような入れ物の周りに十個ものオブジェのような物が置かれている一風変わった場所へとやって来た。

楓

「うむ、随分変わった場所でごさるな……………」。

木乃香

「ポツクル君、此処で一体何をするん？」

ポツクル

「ちよつと待ってて、その前に君達に見せたい物があるんだ……………」。

く

刹那

「私達に見せたい物？」

刹那はポツクルの発言に思わず耳を傾ける。

ポツクル

「今から呼び出すからあまり驚かないでね……………テンジン様……っ  
！！」

木乃香

「ほえ？呼び出すって何を……………」

木乃香がポツクルの言葉に疑問を持って質問しようとした時……………。

ポテッ！ポテッ！！

ポテッ！ポテッ！！

刹那

「な、何だ？この奇妙な音は……………」

楓

「つむ、足音にも聞こえなくはないでござるな……………」

そう言つと、刹那と楓は足音のような聞き慣れない音に反応して警戒しながら辺りを見回す。

ポツクル

「あ！来た来た……………みんな、後ろを見てごらん。」

木乃香

「え？後ろつて……………」

木乃香達二人はポツクルの言う通りに後ろを向いてみると……………。

刹那

「っ!？」

木乃香

「わあ〜！凄く大きいわあ〜!!！」

楓

「い、いやはや何とも……………」

三人の背後には、超巨大で全身が青色一色で手足が異様に長い奇妙な生物が立ち塞がっていた。

刹那

「ポ、ポツクルさん……こ、この巨大で珍妙な生物な何々ですか？」

ポツクル

「えっとね、コレはテンジンといって……この『ナナシ島』に古くから伝わる守り神だよ。」

楓

「ま、守り神……どうせると？」

木乃香

「ほなら、神様みたいなモンなんやね？」

ポツクル

「まあ、そういう事になるね……。」

刹那と楓はテンジンという守り神の登場に目を丸くするが、木乃香だけが目を輝かせながらテンジンを見上げながら見つめる。

刹那

「もしかして、こちらの守り神様が私達の願いを叶えて下さるのですか？」

ポツクル

「そう、テンジン様の力だったらすぐに友達に会えると思うよ。」

木乃香

「せやったら、早速テンジン様にお願いしよ！」

ポツクル

「ちよつと待って、その為にはアレが無いと……あ！あつたあつた。」

次の瞬間、ポツクルが腰にぶら下げてるバックの中からまがたま勾玉のような物を取り出す。

楓

「それは何でござるか？」

ポツクル

「これは『願い玉』といって、これに願いを込めればテンジン様が願いを叶えてくれるんだ。」

刹那

「願いを込めるといって……この『願い玉』に向かって祈りを捧

げればいって事ですな。」

木乃香

「ほなら、早速みんなで祈ってみよ！」

楓

「うむ！『善は急げ』と言つてござるからな。」

そう言うと、木乃香達三人はポツクルが持つてる『願い玉』に向かって目を瞑って両手を合わせながら祈り始める。

木乃香

（お願いします……ウチらの大切なクラスメートが一人でも多く見付かりますように……。）

刹那

（それと、どうか無事でありますように……。）

楓

（拙者達の願い、是非とも叶えてほしいでござる……。）

そう思いながら、三人が『願い玉』に向かって祈り続けていると……

……。



パァーパァーパァーッ!!

突然、ポツクルが持つてる『願い玉』が青色からピンク色へと変色していく。

楓

「およ？玉の色が変わったでござるな。」

ポツクル

「うん、君達の願いが玉に込められたんだ。」

木乃香

「そうなんや……ほんで？次はどないするん？」

ポツクル

「えっとね、最後の仕上げにこの『願い玉』を向こうの岩に奉納するんだ。」

そう言うと、ポツクルは『願い玉』を持ったまま寶錢箱の前にある墓石のような大きな岩の前に立ち尽くす。

ポツクル

「それじゃ、始めるよ?」

刹那

「え?始めるって何を……………」

ポツクル

「それっ!」

刹那の疑問の言葉も虚しく、ポツクルは岩に向けて『願い玉』を差し出すと……………。

パァー……………ッ!!

全員

「!?!」

突然、『願い玉』が岩の中に吸収されたと同時に岩から強い光が放たれる。

刹那

「な、何だ!?この光は……………」

木乃香

「ま、眩し過ぎるわ……………」

楓

「た、確かにこれでは何も見えないでござ……………」

そして、しばらくすると光がどんどん弱まってきた元の明るさに戻っていく。

ポツクル

「……………ふう、やっと光が止んだね……………つて、あれ？」

ポツクルが辺りを見回してみると、木乃香達三人の姿は何処にも無かった。

ポツクル

「……………みんな何処に行っちゃったんだろっ？」

そう言いながら、ポツクルが辺りを見回していると……………。

？

「おや？そこに居るのはポツクルではないか。」

ポツクル

「……………え？」

ポツクルは声が出た方を向いてみると、そこには上半身が裸で傘を杖代わりにしている白い髭を生やした老人が立っていた。

ポツクル

「ジギー！丁度良いところに……………実は、大変な事になったんだよ！」

ジギー

「これこれ、少し落ち着きなさい……………一体何があったんじゃ？」

ポツクル

「あ、あのね……………」

ポツクルはジギーという名前の老人に今までの経緯を説明し始める。

ジギー

「……………成程、そんな事があったんじゃな。」

ポックル

「そうなんだ……………あの三人は一体何処に行っちゃったんだろう？」

ジギー

「心配は要らん、きっとテンジン様がその娘達の願いを叶える為に何処か別の場所へと送ったんじゃないろう。」

ポックル

「そ、そうだといいんだけど……………」

そう言うと、ポックルは落ち込むように下に俯いてしまう。

ジギー

「大丈夫じゃよ、テンジン様を信じるんじゃ。」

ポックル

「……………」

ジギーがポックルの肩に手を置くと、ポックルは目の前のテンジンを見上げながら見つめる。

ポックル

「……………そうだね！僕もテンジン様を信じてみるよ！」

ジギー

「うむ！それで良い！」

ポツクルが元気を取り戻すと、ジギーも嬉しそうに笑顔を浮かべる。

ジギー

「さて、悩み事も解決したようだし……どうじゃ？ワシはこれから茸鍋でパーティーをするのじゃがポツクルも一緒に参加するか？」

ポツクル

「って、また茸鍋にするの……ジギーは本当に茸が好きなんだから……。」

ジギー

「まあな！ほれ、早速ワシの家に向かうぞい！」

ポツクル

「え？まだ参加するって言ってないんだけど……まあ、いつか。」

ポツクルはそのままジギーに手を引っ張られながらその場を後にしていく。

テンジン

「……………」。

そして、テンジンは周りの景色に溶け込むようにそのまま姿を消していくのであった……………」。

## 第二百一十一話〈ナナシ島の古い守り神〉（後書き）

という訳で、今回は『ギフトピア』編でした。

主人公のポツクルが一人前の大人になる為に島の人々の悩みを解決していくというゲームです。

因みに、本当はゲーム本編の後日談にする予定でしたが、それだとテンジンが登場出来ない（詳しくはゲーム本編をプレイしてみてください）のでゲーム本編の中盤という設定です。

……ところで、最近他の事に夢中になってて遅筆気味になってしまいました……これからもこの調子になるかもしれませんがご了承ください（汗）。



第二百二十二話 喧嘩上等！ストリートで大喧嘩

夜の街路

ネギとカモはすっかり夜が更ふけてしまったアメリカ風の街路へとやって来ていた。

カモ

「……なあ兄貴、もう夜だけどまだ捜すんですかい？」

ネギ

「勿論だよ！一刻も早くクラスのみんなを一人でも多く見付け出さなきゃいけないからね。」

カモ

（はあ、つ、兄貴ったら前の世界で応援されちまってからやる気がグーンと出て来ちまったな。）

そんな事を思いながら、カモはやる気満々のネギに少々呆れながら軽く溜め息を付いてしまう。

ネギ

「……………あれ？」

カモ

「ん？兄貴、どうかしたんスか？」

ネギ

「あそこで誰かが横たわってるような……………」

カモ

「どれどれ……………」

そう言って、カモはネギの指差す先を見てみると……………。

男

「う……………う……………」

一人の柄の悪そうな男が呻き声を上げながらお腹を押さえて横たわっていた。

カモ

「あ、兄貴！何だか苦しそうにしてるぜ！？」

ネギ

「ほ、本当だ！急いで介抱しないと……………」

そう言い掛けると、ネギは慌てて男性の側へと駆け寄る。

ネギ

「だ、大丈夫ですか！？お腹か痛いんですか？」

男

「うう……………ガ、ガキにやられた……………」

ネギ

「え？ガキ？」

ネギは苦しそつに訴えようとする男性の言葉に思わず耳を疑ってしまつ。

男

「あ、あのガキ……………メツチャ強え……………たった一撃で……………」

カモ

「何でい、ただ喧嘩に負けただけかよ……………兄貴、どうしやす？」

ネギ

「うん、木乃香さんが居れば治療魔法で治せるんだけど……。」

ネギがカモにどうするか聞かれて考えようとした時……。

？

「うぎゃーっ……！」

ネギ&カモ

「!？」

突如、遠くの方から別の男性の叫び声が響き渡る。

ネギ

「い、今は……。」

カモ

「兄貴、行ってみようぜ！」

ネギ

「う、うん！」

そう言うと、ネギは男性を残して叫び声がした方へと駆け出していく。

（街路の奥）

ネギ

「ハアツ、ハアツ……………確か、この辺りから聞こえたと思ったんだけど……………」

カモ

「兄貴！あそこに誰か居るぜ！」

ネギはカモが指差す先を見てみると……………。

男

「く、くそ……………何でガキのクセにこんなに強いんだ……………」

？

「へへっ、ガキやからって甘く見るからこっぴつ目に遭うんや！」

そこには黒い学生服を着て犬のような耳を生やした少年が地面に倒れ込んでいる柄の悪そうな男性に向かって挑発的な笑みを浮かべながら軽く睨み返していた。

カモ

「兄貴、アレってまさか……………」

ネギ

「うん、間違いないよ……………小太郎君！」

小太郎

「ん？その声は……………あつ！？ネギ！！」

ネギの声に反応した少年・犬上小太郎はすぐにネギの方へと駆け寄る。

小太郎

「メツチャ久しぶりやんけ！元気にしとったか！？」

ネギ

「う、うん……僕は元気だよ……。」

小太郎はネギとの再会に素直に喜ぶが、ネギは小太郎のテンションの高さに少しだけたじろいでしまう。

小太郎

「あ！せや！そないな事はどうでもええんやった……ネギ、此処は一体何処なんや？俺は確か、千鶴姉ちゃんや夏美姉ちゃんと一緒に僚に居たハズなんやけど……。」

ネギ

「うん、その事なんだけどね……。」

そう言つと、ネギは小太郎に今までの経緯を洗い浚い全て説明した。

小太郎

「……えっと、よく分からんけど大変な事になつとるんやな……」

ネギ

「まあね……でも、小太郎君が見付かって本当に良かったよ。」

小太郎

「ネギ……って、そんな恥ずかしい事言つなや！照れるやんか！」

ボカツ！！

ネギ

「あぶつ！？」

突然、小太郎はネギの言葉に照れ隠しながらネギの頭を殴り付ける。

ネギ

「痛たたた……もう、小太郎君は相変わらず乱暴なんだから……」

小太郎

「フン！……あ！せや！千鶴姉ちゃんと夏美姉ちゃんは無事か？」

ネギ

「え？千鶴さんには会ったけど、夏美さんにはまだ……」

小太郎

「そっか、千鶴姉ちゃんは無事なんやな？良かったあ……」



小太郎はネギから千鶴の安否を聞いて心の底から一安心する。

小太郎

「よっしや！早速夏美姉ちゃんや他のネギの生徒の姉ちゃん達を捜しに行こうぜ！」

ネギ

「え？それじゃ、小太郎君も手伝ってくれるの？」

小太郎

「当たり前やろ！俺かて夏美姉ちゃん達の事が心配やし……………それに、俺とネギの仲やんか！」

ネギ

「小太郎君……………」

ネギは小太郎の頼もしい言葉に思わず感極まってしまふ。

男

「ち、畜生……………覚えてろよ……………」

すると、先程叫び声を上げた男性が腹を押さえながらゆっくりと立

ち去っていく。

ネギ

「あれ？あの人は……………」

小太郎

「ああ、何や知らんけど俺にいきなり喧嘩売ってきたからパンチを一発だけ軽くお見舞いしてやったんや。」

カモ

「おいおい、それじゃあさっき向こうで倒れてた男も……………」

ネギ

「小太郎君、幾ら力加減したからって喧嘩は良くないよ！」

小太郎

「しゃあないやろ！あっちの方から手え出して来たんやし……………それに、こういうのを正当防衛って言うんとちゃうんかい！？」

ネギ

「いや、だからって……………」

ネギと小太郎がちょっとした事で言い争っている……………。

?

「おい、お前ら！」

ネギ & 小太郎

「え？」

ネギと小太郎は男の声に反応して振り向いてみると、ネギ達の周りにはいつの間にか柄の悪い男達を取り囲んでいた。

カモ

「あ、兄貴……………何かヤバイ雰囲気じゃないッスか？」

ネギ

「う、うん……………」

男A

「お前らだな？仲間達を痛め付けやがったのは……………覚悟は出来てんだろうな？」

小太郎

「は？何言っとんねん？先に手を出して来たんはそっちの方やんか！」

男B

「うるせえ！この辺りは俺らの縄張りなんだよ！」

男C

「だから、俺らの縄張りにノコノコやって来たお前らが悪いんだよ  
！！」

カモ

（随分と無茶苦茶な理屈だな……………。）

カモは男達の強引な理屈に呆れ返ってしまつ。

小太郎

「ハア〜ツ、しゃあないなあ……………ネギ、状況が状況やから手を出さへん訳にはいかんやろ？」

ネギ

「そ、そうだね……………でも、手加減しなきゃ駄目だからね？」

小太郎

「分かっとなるって！一般人相手に本気なんか出す訳ないやろ？」

男A

「何ゴチャゴチャ言ってるんだ？今更泣き言を言っても無駄だぜ……  
おい！みんなでやっちまおうぜ！！」

男達

「おおー！ー！ーっ！！！」

リーダーらしき男の掛け声を合図に男達はネギと小太郎に一斉に襲  
い掛かる。

（数時間後）

男D

「うぐぐぐ……く、くそお……。」

男E

「ガ、ガキのクセに何て強さだ……。」

しばらくすると、男達はネギと小太郎にコテンパンにされてしまい一人残らず倒されていた。

小太郎

「だから言つたやろ？ガキやからって甘く見るから痛い目に遭うんや！」

カモ

「おうよ！テメエらなんかネギの兄貴に指一本も触れられねえって事でい！」

ネギ

「カ、カモ君！喋っちゃ駄目だよ……………」

そう言うと、ネギは思わず興奮して喋り出してしまったカモの口を塞ぐ。

男A

（ち、畜生……………こんなガキ共に舐められて堪るか！）

そんな事を思いながら、リーダーらしき男は懐から小さなナイフを取り出しながらゆっくりと立ち上がる。

男 A

「これでも喰らええーーーーーっ!!」

小太郎

「ネ、ネギ！そっちに向かって来たで!!」

ネギ

「っ!？」

ネギは小太郎の声に反応してナイフを掲げて駆け寄って来た男の方を向くと……………。

ガシッ!!

男 A

「い、痛っ!!」

突然、ナイフを持った男は黒いランニングシャツを着て緑色の短パンを履いた黒髪わじの青年によって腕を掴まれて扱わじられてた。

男 A

「テ、テメエ！いきなり何しやが……っ！？」

男は自らの腕を掴んでいる青年に睨み付けながら講義しようとするが、青年の顔を見た途端に驚いたように表情を強張らせてしまう。

？

「それはこっちの台詞だ！大人の大人が子供相手に拳を振るって……  
…それに、自分がヤバくなったら武器を使って応戦など言語道断だ  
！！」

男A

「い、いや……これは、その……。」

カモ

（ん？さっきまでの威勢が全然無いぞ……。）

カモはオドオドしながらナイフをそこら辺に捨ててしまった明らか  
な男の態度の急変に疑問を感じる。

？

「何だったら、今度は俺が相手をしてやるっか？勿論、正々堂々と  
な。」



そう言つと、青年は姿勢を低くして両方の拳で素早くジャブを繰り出しながら身構える。

小太郎

(この兄ちゃん、ひよつとして……………。)

小太郎は何かを察したかのようにそのまま青年の構え方を見据える。

男A

「ひい！？そ、そんな滅相も無い……………お前ら！引き上げるぞ！！」

男達

「ま、待ってくれよリーダー！！」

男達はその場から慌てて立ち去っていく。

？

「フン、男のクセに意気地の無い奴らだな。」

そう言いながら、青年は逃げ出した男達に向かって軽くジャブを繰り出す。

ネギ

「あ、あの！助けて頂いて本当にありがとうございました！」

？

「ん？ああ、別にお礼なんかいいって！俺はああいう卑怯な奴らが気に入らねえからな。」

小太郎

「……………なあ兄ちゃん、さっきの構えってボクシングの構え方やる？」

？

「お？よく分かったなあ……………そうさ！こう見えても俺はボクサーさ！」

ネギ

「そ、そうだったんですか！？」

ネギは青年がボクサーだと知って素直に驚いてしまう。

？

「ああ、改めて自己紹介するけど……………俺の名はリトル・マック、ボクシングの世界チャンピオンを目指して日々トレーニングに励んでるんだ！」

ネギ

「ぼ、僕はネギです！こちらは友達の小太郎君です！」

小太郎

「小太郎や！宜しくな！」

リトル・マックと名乗ったボクサーの青年が軽く自己紹介すると、ネギと小太郎も軽く自己紹介をする。

マック

「ところで君達、どうしてこんな所に……此処ら辺は治安が悪いからさっきみたいな連中がうるついでるから危険だよ？」

ネギ

「そ、それは……………」

小太郎

「実は俺達、あちこち行って友達を捜してるんや！」

ネギ

「そ、そんなんです！この中で見覚えのある顔はありませんか？」

そう言くと、ネギは懐から3ーAのクラス名簿を取り出してマック

に見せる。

マック

「うーん……………どの子も可愛いけど見た事は無いなあ……………」。

ネギ

「そ、そうですか……………」。

ネギはマックの言葉を聞いて思わず俯いてしまう。

小太郎

「ネギ、そうガツカリすんなよ！俺も協力するって言ったやろ？」

ネギ

「……………そうだったね、ありがとう小太郎君！」

ネギは小太郎の言葉で元気を取り戻して笑顔を浮かべながらお礼を言う。

？

「おーい、マックー！」

マック  
「ん？」

マックが誰かに呼び掛けられて振り向いてみると、そこには五十年代ぐらいの大型の黒人男性が片手にチヨコバーを持ちながら立っていた。

ネギ

「あの人はい？」

マック

「ああ、彼は俺のトレーナーのドック・ルイスさ……彼の的確なアドバイスのお陰で俺は試合に勝ち進んでいるんだ。」

カモ

（成程、ボクサーには的確に指示を出すパートナーが必要不可欠って訳か……まるで俺っちとネギの兄貴みてえな関係だな。）

そんな事を思いながら、カモはマックとドック・ルイスという名前の黒人男性を自分とネギを重ね合わせながら見つめる。

ルイス

「そんな所で何やってんだ？早く戻ってトレーニングを始めるぞ！」

マック

「やっべ！すっかり忘れてた……………分かった！今行くよ！」

そう言うと、マックは慌ててルイスの方へと駆け出していく。

マック

「じゃあな！友達捜し頑張れよ！」

ネギ

「は、はい！本当にありがとうございました！」

マックがネギ達に激励を送ると、そのままルイスと共にその場から立ち去っていく。

小太郎

「……………うーん、あの兄ちゃんやったら世界チャンピオンになれるかもしれへんなあ……………」。

ネギ

「え？今何か言った？」

小太郎

「いや、別に……それより、早速その他の世界っちゅう所へ行くで！」

ネギ

「う、うん……って、小太郎君！そっちじゃないよぉ〜〜！！！」

ネギは全く違う方向へと駆け出して行った小太郎を慌てて追い掛けてゆくのであった……。

## 第二百二十二話 喧嘩上等！ストリートで大喧嘩（後書き）

という訳で、今回は『パンチアウト!!』編と『アーバンチャンピオン』編の二本立てでした。

『パンチアウト!!』は主人公であるリトル・マックがボクサーの世界チャンピオンを目指して対戦相手を次々を倒していくボクシングゲームです。

そして、『アーバンチャンピオン』は主人公（名無し）を操作してストリート（路上）に現れるチンピラを次々と倒しながら進んでいくゲームです。

この二つのゲームは何となく世界観が似ているので同じ世界観として登場させました。

それから、喧嘩という事で小太郎を登場させました（苦笑）。

という訳で、次回もお楽しみに！



第二百二十三話 魔法学校で奇跡の再会（前編）

コヴォマカ国・ウィルオウイスプ魔法学校前

明日菜とのかの二人はまるで城みたいに高々と聳え立っている巨大な建物の前にやって来ていた。

明日菜

「うっひゃ、随分でデッカい建物ねえ。」

のか

「そうですね、一体どんな所なんでしょうか？」

明日菜

「うん……まあ、入ってみれば分かるんじゃない？」

そう言うと、明日菜は正門に入ろうとそのまま進み出そうとする。

のか

「えっ！？い、いきなり入っちゃうんですか？」

明日菜

「だって、入ってみなきゃ此処が何なのか分からないでしょ？」

のどか

「そ、それはそうですね……。」

？

「おい！お前ら何やってんだ！？」

明日菜&のどか

「っ！！！？？」

明日菜とのどかは突然何者かに呼び掛けられて思わず飛び跳ねてしまふ。

のどか

「す、すみません！私達は決して怪しい者では……。」

明日菜

「そ、そうそう！ちょっと聞きたい事があって寄ってみただけなの！」

明日菜とのどかは声を掛けてきた相手の姿を見ずに必死に言い訳をする。

？

「……兄貴、何だか余計に怪しく見えるよな？」

？

「ああ、あんなに動揺してるからな……。」

そう言いながら、少し目付きの悪そうな金髪の少年と緑色のローブのような物を纏った小柄で金髪の少年は明日菜とのかの二人を怪しむような感じで見つめる。

？

「お前ら、見掛けない顔だけど……この学校の生徒か？」

明日菜

「え？此処って学校なの？」

？

「そう、此処は魔法使いになりたい奴が魔法の勉強をする『ウィル  
オウイスプ魔法学校』だよ。」

明日菜&のか

「ま、魔法学校！？」

明日菜とのどかはローブの少年の説明を聞いて思わず耳を疑った。

のどか

( ……明日菜さん、どうやらこの世界では魔法が一般的に実在してるみたいですね。 )

明日菜

( そ、そうね……………ネギも聞いたらビックリするでしょうね…………… )

明日菜とのどかは少年二人に聞こえないように背を向けて小声で話し合う。

？

「……………おい、コソコソと何やってんだ？」

明日菜

「な、何でもないわ！こっちの事だから……………それより、貴方達はこの学校の生徒なの？」

？

「ああ、そうさ……………俺の名はキルシュ・ピンテール、キルシュッ

て呼んでくれ。」

？

「俺はセサミ、セサミ・アッシュポットだよ……君達の名前は？」

明日菜

「わ、私達？私は神楽坂明日菜、明日菜でいいわ。」

のどか

「私は宮崎のどかです、のどかで結構です。」

キルシュと名乗る金髪の少年とセサミと名乗るローブの少年が自己紹介すると、明日菜とのどかも続けて自己紹介する。

キルシュ

「ふ〜ん、服装だけじゃなくて名前も変わってるな……ところで、学校に何か用か？」

明日菜

「ええ、実は私達クラスメートを捜してるんだけど……この中に覚えのある顔とかある？」

そう言うと、明日菜は懐から3ーAのクラス名簿のコピー用紙を取

り出してキルシュとセサミに見せる。

キルシュ

「うん、どねどね……。」

セサミ

「ふむふむ……兄貴、どねも可愛い子ばかりだね。」

キルシュ

「そ、そうだな……って、馬鹿野郎！真面目に見ろっつうの……！」

ボカッ！！

セサミ

「いてっ……！」

キルシュは茶々を入れたセサミの頭を思い切り殴り付ける。

のどか

「ま、まあまあ……喧嘩しないで下さいね？」

セサミ

「いててて……ったく、兄貴ったらマジで殴るんだから……あれ  
?」

セサミがキルシュに殴られて頭から生えた大きなタンコブを押さえながら再び生徒名簿に目をやると何かに気付いて名簿を見つめる。

キルシュ

「ん?どうかしたか?」

セサミ

「なあ兄貴、コレってさユエじゃないか?」

のどか

(えっ!? 夕映!?)

のどかはセサミの言葉に一早く反応する。

キルシュ

「どれどれ………あっ! 間違いねえ! この顔は確かにユエだぜ!」

キルシュはセサミが指差した『綾瀬夕映』と記された蒼色の独特な髪型で小柄な少女の写真を見て思わず声を上げる。

明日菜

「ち、ちょっと待って！夕映ちゃんがこの学校に居るの！？」

キルシユ

「あ、ああ……………一ヶ月ぐらい前からこの学校に転校してきたんだ。

」

セサミ

「何でも、この学校の校長のグラン・ドルシエ校長先生が道端で倒れていたユエを発見して、ユエの魔力を見込んでこの学校に入学させたって噂だぜ。」

のどか

（夕映が……………夕映が此処に……………。）

のどかはキルシユとセサミの言葉など上の空状態で『ウィルオウイスプ魔法学校』を見つめる。

明日菜

「……………本屋ちゃん？本屋ちゃん！！」

のどか

「は、はい！？」



のどかは明日菜に呼び掛けられて漸く我に返る。

明日菜

「もう、何ボケ〜ッとしてんのよ?」

のどか

「す、すみません……………此处に夕映が居ると聞いてつい……………」。

明日菜

「まあ、気持ちは分からなくも無いけどね……………でも、良かったわね?これでやっと夕映ちゃんに会えるんだから。」

のどか

「はい!嬉しいです!」

のどかは明日菜の言葉に心の底から嬉しそうに笑顔で答える。

セサミ

(……………兄貴、あんなに喜んでたら『あの事』を言えねえな……………。

キルシュ

(そ、そうだな……。)

一方、キルシュとセサミは明日菜とのどかに聞こえないように小声で何かを話し合う。

明日菜

「……………ねえ、悪いけど夕映ちゃんが居る所まで案内してくれない？」

キルシュ&セサミ

「ええっ!？」

キルシュとセサミは明日菜の言葉に思わず度肝を抜かされてしまう。

明日菜

「な、何もそんなに驚かなくても……………もしかして、何か用事とかあるの?」

キルシュ

「い、いや……………特に用事とかはねえけど……………」

セサミ

「実を言つと、ユエはな……………」。

のどか

「えっ！？夕映の身に何かあつたんですか？」

のどかはセサミの言葉にすぐに反応して不安げな表情を浮かべる。

セサミ

「え、えっと……………兄貴、俺の代わりに説明してくれ。」

キルシュ

「って、何で俺に振るんだよ！？」

キルシュはセサミにいきなり話を振られて思い切り戸惑つてしまふ。

明日菜

「何々？夕映ちゃんがどうかしたの？」

キルシュ

「い、いや、何ていうか……………まあ、俺らが説明するよりも直接会つてみりゃ分かるって！」

セサミ

(お！流石は兄貴……………上手く乗り切ったな。)

セサミはこの場を何とかごまかしたキルシュに思わず感心してしま  
う。

明日菜

「そ、そう……………それじゃ、早速夕映ちゃんに会わせてくれない？」

キルシュ

「お、おう！別にいいぜ……………な？セサミ。」

セサミ

「え？俺はちよつと用事が……………」

キルシュ

「何い！？嫌だつて言うのかよ！？」

セサミ

「い、いや……………分かったよ、俺も一緒に行くよ……………」

セサミは渋々ながらもキルシュと共に同行する事にする。

キルシュ

「よし！それでいい……そんなじゃ、早速行こうぜ！」

セサミ

「へいへい……。」

明日菜

（………何だか、色々と心配になってきたわ。）

のどか

（夕映、待ってて………もうすぐ会えるから。）

明日菜とのどかはそれぞれの心配事を抱えながらキルシュとセサミと共に『ウィルオウイスプ魔法学校』の正門に入っていく。

（ウィルオウイスプ魔法学校内）

明日菜とのどかはキルシュとセサミの案内で学校の内部にやって来た。

明日菜

「わあ〜！やっぱり中も広いのね〜。」

セサミ

「そりゃそつさ、この国一番の魔法学校だからな。」

のどか

「それじゃ、夕映も此处で魔法の勉強をしていたんですね。」

キルシュ

「ああ、だけど休み時間はいつも本を読んでて誰とも話さないんだよなあ……………」

明日菜

（ゆ、夕映ちゃんらしいわね……………。）

明日菜はキルシュから聞いた夕映の行動に思わず苦笑いを浮かべる。

のどか

「ところで、夕映は何処に居るんでしょっか？」

キルシュ

「うーん、あいつは休み時間になるといつも教室から居なくなるんだよなあ……………」

？

「あれ？キルシュとセサミじゃない？」

キルシュ

「ゲッ！？その声は……………」

キルシュが何者かの声に反応して振り向いてみると、そこには緑色の長い髪の少女が立っていた。

キルシュ

( やっぱりアランシアか…………… )

アランシア

「二人共、こんな所で何してるの？」

セサミ

「えーっと、実はね……………」

セサミはアランシアに先程までの経緯を出来るだけ簡単に説明した。

アランシア

「ふん、そうだったんだあ……初めまして、私の名前はアランシア・スコアノート、宜しくね。」

のどか

「こ、こちらこそ宜しくお願ひします。」

アランシアが明日菜達に軽く自己紹介しながら頭を下げると、のどかも釣られて軽く頭を下げる。

キルシュ

「ところでよ、ユエが何処に居るか知ってるか？」

アランシア

「え？あの子だったら、今日も図書室で本を読んでいると思うけど……。」

明日菜

「図書館……確かに、夕映ちゃんなら行きそうな場所ね……。」



のどか

「はい、何せ夕映は私と同じ『図書館探検部』の一員ですから……」

そんな事を言いながら、明日菜とのどかは夕映の居所について納得する。

セサミ

「兄貴、早速図書室に行ってみようぜ！」

キルシユ

「おう、そうだな！」

そう言っつて、キルシユ達は図書室を目指してその場を後にしようとするが……。

アランシア

「ねえキルシユ、私も一緒に行ってもいい？」

キルシユ

「な、何っ!？」

キルシュはアランシアの発言に思わず耳を疑ってしまふ。

アランシア

「駄目、かな？」

キルシュ

「いや、別に……好きにすればいいだろ！」

キルシュはアランシアの頼みにやや戸惑いながらも潔く承諾する。

明日菜

「……ねえ、キルシュはあのアランシアって子が苦手なの？」

セサミ

「いや、苦手っていうか……兄貴とアランシアは小さい頃からの幼馴染みだから何となく遠ざけちゃうんじゃないかな？」

のどか

「そうなんですか……でも、幼馴染みだったら仲良くお話とかすればいいのに……。」

セサミ

「そうはいかないと思うな……何せ、兄貴には好きな子がいるから

な。」

明日菜

「えっ！？そうなの？」

明日菜はセサミの爆弾発言(?)に素直に驚いてしまう。

セサミ

「ああ、相手は同じクラスメートの……。」

キルシュ

「って、コラ！勝手に俺のプライバシーをバラすな！！」

ポカッ！！

セサミ

「あだっ！？」

セサミはキルシュが好意を寄せる相手の名前を口に出そうとしたが、キルシュに頭を殴られて制止させられる。

キルシュ

「まったく、いつまでもくだらねえ話しないで早く図書室に行くぞ  
！」

アランシア

「あ！ちょっと待ってよ。」

のどか

「……………だ、大丈夫ですか？」

セサミ

「いてて……………な、何とか大丈夫……………それより、俺達も行くこつ。  
」

明日菜

「そ、そつね……………。」

こうして、明日菜達はアランシアも一緒に加えて図書室へと目指す。

くウィルオウイスプ魔法学校内・図書室く

明日菜とのどかはキルシユ達の案内のお陰で本棚に魔法に関する本が沢山並べられてる図書室へとやって来た。

のどか

「わあ〜！本がいっぱいありますね〜！！」

キルシユ

「って、図書室なんだから当たり前だろ……。」

のどかが沢山の本に目を輝かせながら当たり前な事を言うと、キルシユがツツコミを入れる。

明日菜

「はあ〜、『図書館島』と比べたら大分マシだけど……こんなに沢山の難しそうな本を目の当たりにすると何だか目まいしてくるわねえ……。」

キルシユ

「ああ、俺も何だか頭が痛くなってくるぜ……。」

セサミ

「……………俺もさっき兄貴に殴られたから頭が痛いよ……………」

そう言いながら、セサミは先程キルシュに殴られたせいで大きく生えたタンコブを優しく撫で回す。

アランシア

「ところで、ユエちゃんは何処に……………あつ！居た居た！」

のどか

「えっ!？」

のどかはすぐにアランシアが指差した先を見ると、そこには正しくのどかの大親友である少女・綾瀬夕映がこの世界独特の衣装を身に纏って静かに本を読んでいた。

明日菜

「本当だ！間違いなく夕映ちゃんだわ！」

のどか

「ゆ、夕映……………やっと……………やっと見付けた……………」

のどかは声を震わせながら読書中の夕映にゆっくりと近付いてゆく。

夕映

「……………ん？」

すると、夕映がのどかの気配に気付いてのどかの方に顔を向ける。

のどか

「ゆ、夕映……………夕映え—————っ!!」

夕映

「おわっ!？」

突然、のどかは嬉しさのあまりに夕映に抱き着いてしまう。

のどか

「会えた……………やっと会えたね……………私、ずっと捜してたんだよ……………」

明日菜

「本屋ちゃん……………」

セサミ

(兄貴、早くあの事を言った方が……………。)

キルシュ

(そ、そうだな……………。)

アランシア

「？」

明日菜はのどかと夕映の再会に感極まりそうになりながらも見守っているが、キルシュとセサミは何やら不安そうな表情を浮かべている。

夕映

「あ、あの……………。」

のどか

「……………あっ！？急にゴメンね！夕映にやっと会えて嬉しかったからつい……………。」

そう言つと、のどかは慌てて夕映から少しだけ距離を置いて離れる。

夕映

「……………。」



夕映は無言のままのどかの顔を食い入るよつにジッと見つめる。

のどか

「……………ねえ夕映、どうして黙ってるの？」

明日菜

「そ、そうよ！折角こうして再会出来たんだから何か言ってあげても……………」

夕映

「……………失礼ですが、どちら様ですか？」

のどか&明日菜

「……………え？」

明日菜とのどかは夕映の言葉に耳を疑い、一瞬だけ固まってしまつ。

明日菜

「あ、あはははは……………嫌だなあ、夕映ちゃんったら！こんな時に冗談なんか言っちゃってさ……………」

のどか

「冗談？な、な〜んだ！冗談だったんだ……………もう、私っただら思わ  
ずビックリしちゃったよ〜。」

夕映

「……………いえ、冗談ではなくて本当に知らないです。」

明日菜

「ほらね！やっぱり冗談じゃないって……………って、そんな……………。」

のどか

「嘘……………嘘だよ〜？」

明日菜とのどかは最初は苦笑いを浮かべていたが、夕映の一言です  
ぐに表情を凍らせてしまう。

のどか

「私はのどかだよ！同じ『図書館探検部』の一員でクラスメイトで  
友達の宮崎のどかだよ！？」

明日菜

「私は神楽坂明日菜よ？クラスメイトで夕映ちゃんと同じ『馬鹿レ  
ンジャー』の馬鹿レッドで運動神経は抜群だけど頭がちよっと悪く  
て……………」

夕映

「宮崎のどか……………図書館探検部……………クラスメート……………友達……………  
神楽坂明日菜……………馬鹿レンジャー……………うん……………」

夕映は明日菜とのどかが言った単語を淡々と呟きながら深々と考え込んでしまう。

アランシア

「……………ねえキルシュ、ひょっとして、のどかちゃん達にあの事を言っていないの？」

キルシュ

「あ、ああ……………」

明日菜

「え？ちよつと待って、『あの事』って一体何の事なの？」

キルシュ

「あ、いや、その、え〜と……………」

キルシュは明日菜に問い詰められて話そうとするが、口を濁らせてしまい中々話さない。

セサミ

「……………実は、ユエは記憶喪失になってるみたいなんだ。」

のどか

「えっ……………。」

明日菜

「き、記憶喪失!?!」

明日菜はセサミの説明を聞いて驚愕するが、逆にのどかは頭の中が真っ白になってしまったかのように啞然としてしまう。

アランシア

「ええ、ユエちゃんは自分の名前以外は何も覚えてないみたいなの。」

セサミ

「それに、校長先生が助けた時からユエは記憶喪失になってたみたいって言うってたよ。」

キルシユ

「そ、そうそう!そういう事だ!」

アランシアとセサミが丁寧に説明すると、キルシュが相槌を打つようにどさくさに紛れて会話に加わる。

明日菜

「そ、そんな……………っていうか、何でそんな大事な事をもっと早く言わなかったのよ!？」

キルシュ

「だ、だってよお……………お前らの嬉しそうな顔を見てたら言い出せなくて……………な?セサミ。」

セサミ

「いや、俺に振られても……………」

セサミはキルシュにいきなり話を振られて戸惑っている……………。

キーンコーンカーンコーン!!

突然、学校全体に学校のチャイムが鳴り響く。

夕映

「あ！もう休み時間が終わっただです……………それでは、私は次の授業があるので失礼しますです。」

明日菜

「あっ！？ちよ、ちよっと待って……………」

明日菜の呼び掛けも虚しく、夕映は慌てて図書室を後にしてしまう。

キルシュ

「ヤベエ！俺らも早く教室に戻らねえと……………セサミ、急ぐぞ！」

セサミ

「ま、待ってくれよ〜！」

キルシュとセサミも夕映の後から慌てて駆け出していく。

アランシア

「……………」

アランシアは心配そうな表情を浮かべながら明日菜とのどかを見つめる。

キルシュ

「アランシア！お前も早く来ねえと遅れちまうぞ！」

アランシア

「う、うん……………それじゃ、また後でね？」

そう言い残すと、アランシアもキルシュ達に続いて駆け出していく。

のどか

「……………夕映……………折角会えたのに……………やっと会えたのに……………」

「

明日菜

「本屋ちゃん……………」

明日菜はあまりの衝撃の事実ショックを受けて床に両膝を付けたまま意気消沈してしまったのどかをただ黙って見ているしかなかった……………。

## 第二百二十三話 魔法学校で奇跡の再会（前編）（後書き）

という訳で、今回は『マジカルバケーション』編でした。

主人公が魔法学校の生徒達と一緒に様々な事件に奮闘しながら解決していくアクションゲームです。

魔法学校の生徒達にはそれぞれ様々な属性を持っていますが、主人公はプレイヤー自身が性別と属性を選べる事が出来ます。

それと、今回の話は長くなりそうなので久しぶりに前編と後編に分けました。

果たして、夕映は記憶を取り戻す事が出来るのでしょうか？

という訳で、次回もお楽しみに！



第二百二十四話 魔法学校で奇跡の再会（中編）（前書き）

明日菜とのかは『ウィルオウイスプ魔法学校』で夕映と再会したが、夕映は記憶喪失になっていた……。

第二百二十四話 魔法学校で奇跡の再会（中編）

魔法学校・校門前

のどか

「……………」

のどかは夕映の記憶喪失でショックを受けてしまい、校門の前で俯きながらしゃがみ込んでいた。

明日菜

「……………ねえ本屋ちゃん、もうそろそろ元気出した方がいいんじゃない？」

のどか

「でも、夕映が……………」

明日菜

「まあ、確かに記憶喪失になってたけど……………でも、他は何とも無いみたいだったから良かったじゃない？」

のどか

「良くないです!?!」

明日菜

「っ!?!」

明日菜はまるで怒鳴るように大声を上げるのどかにビックリしてしまふ。

のどか

「あ……………すみません、大声出しちゃって……………でも、夕映があんな状態になって……………しかも、私の事を何一つ覚えてなくて……………私、凄くショックでした……………やっと……………やっと夕映に会えたのに……………」

明日菜

「本屋ちゃん……………そうよね、やっと会えた友達が記憶を無くしてて『アンタ誰?』って言われたらショックよね……………」

そう言うと、明日菜も一瞬だけ落ち込んで俯いてしまつが……………。

明日菜

「……………でも、だからってこのまま落ち込んでたって何も始まらないわ!」

のどか  
「……………え？」

明日菜の言葉を聞いたのどかは思わず顔を上げる。

明日菜

「何とかして夕映ちゃんの記憶喪失が治るように行動を起こさなきゃ！」

のどか

「でも、どうやって…………？」

明日菜

「簡単よ！それはね…………『ショック療法』よ。」

のどか

「『ショック療法』？」

のどかは明日菜の発言に思わず首を傾げる。

明日菜

「私が思うには、恐らく夕映ちゃんは『亜空間』ってのに吸い込まれたショックで記憶を失った訳よね？だから、同じように何か強い

ショックを与えれば夕映ちゃんは記憶を取り戻すかもしれないって  
思ったのよ。」

のどか

「な、成程……それで、一体どうやって夕映の記憶を取り戻すんですか？」

明日菜

「フッフ、よくぞ聞いてくれました……『アデアット』!!」

パアーーーーーッ!!

次の瞬間、明日菜が左手を高々と掲げて呪文を唱えると『ハマノツルギ』が現れる。

のどか

「ま、まさかそれで……。」

明日菜

「そう！コレで夕映ちゃんの頭を思いつ切り強く叩いてショックを与えたら、一発で記憶を取り戻すハズよ。」

のどか

「ちょ、ちょっと待って下さい！明日菜さんの馬鹿力で叩いたら……。」

明日菜

「大丈夫！きつと一発で……って、本屋ちゃん？さっき馬鹿力って言わなかった？」

のどか

「あ！？いえ、私は別に……。」

のどかが明日菜に対して少し（？）失礼な発言をしてしまい慌てて弁解しようとした時……。

キーンコーンカーンコーン！！

突然、『ウィルオウイスプ魔法学校』から授業終了のチャイムが鳴り響く。

明日菜

「あー！丁度チャイムが鳴ったわ……よし、早速この『ショック療法』を試してみましょ！」

のどか

「え！？あ、明日菜さん！待って下さい！！」

のどかは夕映に『シヨック療法』を試そうと張り切って駆け出した  
明日菜を慌てて追い掛けながら学校へと向かう。

くウィルオウイスプ魔法学校・教室内く

夕映

「……………ふう、やっと授業が終わったです。」

その頃、夕映は授業を終えたので教室で帰り支度をしていた。

夕映

「さてと、図書室で少し本を読んだら帰るとするです……………」。

そう言うと、夕映が自分の席から立ち上がって図書室に向かおうと  
するが……………。

キルシュ

「おい、ユエ！」

夕映

「ん？」

夕映がキルシュの声に反応して振り向いてみると、そこにはキルシュの他にもセサミとアランシアが立っていた。

夕映

「キルシュさん、それにセサミさんにアランシアさんも……何か  
ご用意ですか？」

キルシュ

「ああ、お前に会いに来たのどか達について話があるんだけどなあ  
……………」

夕映

「のどか……………うん、やはりその名前に聞き覚えがあるような無  
いような……………」

そう言いながら、夕映は腕を組んで深々と考え込んでしまう。



アランシア

「……………やっぱり、何も思い出せない？」

夕映

「はい……………でも、何故か頭の中で引つ掛かるような気がするです。」

セサミ

「だったら、もう一度あの二人に会ってみたら？ひよっとしたら、色々話してる内に記憶が戻るかもしれないさ。」

キルシュ

「そうだそうだ！やってみる価値はあると思っぜ？」

夕映

「そうですね……………」

夕映がキルシュ達の提案を承諾しようとした時……………。

？

「ユエ~~~~ッ!~!」

夕映

「え？今度は誰です？」

夕映が何者かの声に反応して振り向いてみると、そこには頭にズボンを被っている犬のような顔をした小柄の少年が居た。

？

「助けてほしいっぴ〜！次の試験までにオイラに魔法の特訓に付き合ってほしいっぴ〜！！」

夕映

「…………ピスタチオさん、またですか……………」

そう言うと、夕映はピスタチオという名前の少年に助けを求められて何故か深く溜め息を付いてしまう。

キルシュ

「おいピスタチオ！ユエは今俺達と大事な話をしてんだ！お前に構ってる暇はねえんだよ！」

ピスタチオ

「そ、そりゃ無いっぴ！オイラだって落第が掛かっってるんだっぴ！」

キルシュ

「だったら他の奴に頼めばいいだろ！それとも、俺が徹底的に鍛えてやろうか？」

ピスタチオ

「嫌だっぴ！キルシュは乱暴だから教えられたくないっぴ！」

キルシュ

「な、何だとお！？」

セサミ

「あ、兄貴！落ち着けって……………」

キルシュはピスタチオの言葉にキレて殴り掛かろうとするが、セサミに押さえ付けられてしまう。

ガラッ！！

明日菜

「失礼します！」

すると、教室の扉から明日菜が『ハマノツルギ』を持ったまま現れ

る。

キルシユ

「あ！噂をすれば……………」

セサミ

「って、何だ！？あのデカイハリセンは……………」

セサミは明日菜が持つてる『ハマノツルギ』を見て思わず目を疑ってしまふ。

明日菜

「あ！居た居た……………夕映ちゃん！覚悟お……………」

夕映

「っ！？」

すると、夕映の姿を視界に捉えた明日菜は『ハマノツルギ』を高く掲げながら駆け出してくる。

キルシユ

「お、おいおい！一体何をやる気だ！？」

アランシア

「ま、まさか……………」

明日菜

「とりゃ……………っ!!」

そして、明日菜は不安な表情を浮かべるキルシュ達を尻目に夕映に向けて『ハマノツルギ』を勢い良く振り下ろすが……。

夕映

「ハッ!!」

バツシィ……………!!

次の瞬間、夕映が素早く机の中から分厚い百科辞典を二冊取り出して明日菜が振り下ろした『ハマノツルギ』を二冊の百科辞典で真剣白羽取りの如く間髪受け止める。

セサミ

「……………ほ、本で受け止めた……………」

ピスタチオ

「か、神業だつぴ……………」

セサミ達は目の前の出来事を啞然とした表情を浮かべながら立ち尽くす。

明日菜

「や、やるわね夕映ちゃん……………」

夕映

「そ、それ程でも……………つて、そうではなくて！いきなり何の真似です!？」

明日菜

「決まってるじゃない？夕映ちゃんの記憶を取り戻す為にコレで強いシヨックを与えるのよ。」

夕映

「な、何を訳の分からない事を！そんな馬鹿デカいハリセンで叩かれたら何もかも忘れてしまつです!！」

明日菜

「大丈夫だつて！そんなに強く叩かないから……………ほら！もう観念しなさい!！」

夕映

(も、もう駄目です……。)

夕映の体力が限界に近づいてきて、明日菜の『ハマノツルギ』が段々と夕映に迫ってきた時……。

ガラッ!!

のどか

「夕映っ!!」

すると、今度はのどかが明日菜よりもかなり遅れて教室の中に慌てて入ってくる。

アランシア

「あ!のどかちゃん!」

のどか

「だ、誰か!誰か明日菜さんを止めて下さい!」

キルシュ

「お、おう！行くぞセサミ！ピスタチオ！！」

セサミ

「お、俺も！？」

ピスタチオ

「な、何でオイラまで！？」

キルシュ

「いいから行くぞ！！」

ガバツ！！

明日菜

「どわっ！？」

次の瞬間、キルシュ・セサミ・ピスタチオの三人が明日菜に向かって勢い良く飛び掛かってそのまま取り押さえる。

夕映

「ハアツハアツ……た、助かったです……。」



そう言うと、夕映はその場から慌てて立ち去っていく。

のどか

「ま、待って夕映!!」

そして、のどかも夕映を追い掛ける為にその場から立ち去っていく。

明日菜

「あっ!?!夕映ちゃんが逃げた………ちょっと!アンタ達何で私の邪魔すんのよ!?!」

キルシュ

「な、何でって………のどかが『止めて!』って言ったからつい…

…。」

セサミ

「俺はキルシュの兄貴が『行け!』って言うから………。」

ピスタチオ

「右に同じくだっぴ。」

キルシュ

「って、お前ら!俺一人だけのせいにするんじゃないねえ!!!」

そう言っつて、キルシュがセサミとピスタチオの頭を掴んだ時……………。

？

「ちよつと、教室で一体何騒いでるの？」

キルシュ

「ん？その声は……………」

キルシュが一早く誰かの声に反応して振り向いてみると、そこには華やかな衣装を着こなしている茶髪の少女が立っていた。

キルシュ

「キ、キャンディ！？」

キルシュはキャンディという名前の少女の姿を見るなり、慌ててセサミとピスタチオの頭を掴んでいた手を放す。

キャンディ

「何だか、教室の方が騒がしいから戻ってきたんだけど……………みんな何してるの？」

キルシュ

「え？あゝ、いやゝ、そのお……………」。

キャンディの質問に対して、キルシュは何故か言葉を濁してしまつた。

明日菜

「……………ねえ、あの子は？」

セサミ

「俺達と同じクラスのキャンディだよ……………それと、キルシュの兄貴が好きな相手なんだ。」

明日菜

「へえゝ！あの子が……………」。

セサミの説明を聞いた明日菜は興味津々にキャンディを見つめる。

キャンディ

「……………あら？その人は誰？」

すると、キャンディが明日菜の姿を見て首を傾げながら見つめ返す。

明日菜

「は、初めまして！私は神楽坂明日菜とって……。」

そう切り出すと、明日菜はキャンディに今までの経緯を簡単に説明した。

キャンディ

「……………そうだったの、貴女達はユエを捜しにこの学校へ来たのね。」

明日菜

「うん……………まあ、この学校に夕映ちゃんが居るって事は偶然知った事なだけだね。」

ピスタチオ

「それじゃ、すぐにユエを連れてくのかっぴ？」

明日菜

「うん、出来ればそうしたいけど……………でも、夕映ちゃんがある状態だからね……………」

そう言いながら、明日菜は苦笑いを浮かべながら片手で頭を掻く。

アランシア

「……………ところで、ユエちゃんとのどかちゃんは一体何処へ行った  
やっただらう？」

セサミ

「あ！そう言えば、すっかり忘れてた……………」

キルシュ

「しょうがねえ、捜しに行くとするか！」

キャンディ

「それじゃ、折角だから私も協力するわ！」

ピスタチオ

「オイラも捜すっぴ！」

明日菜

「みんな……………」

明日菜は夕映とのどかの為に懸命になろうとしているキルシュ達の  
行為に思わず感極まりそうになる。

キルシュ

「よし、そうと決まれば早速行くぞ！」

明日菜

「あーちょっと待って……………」

キルシュ達が早くその場から駆け出すと、明日菜も慌てて後から駆け出していく。

〈ウィルオウイスプ魔法学校・図書室〉

のどか

「……………夕映？此処に来てるんでしょ？」

その頃、のどかは夕映を捜しに図書室に来ていた。

のどか

「夕映、居るんだったら返事して！別に何もしないから……………」

「

そう言いながら、のどかは辺りを見回しながら夕映を捜している。  
……。

ガタツ!!

のどか

「!?!」

突然、奥の本棚から大きな物音が響き渡る。

のどか

「……だ、誰ですか？」

のどかは恐る恐る物音がした本棚の方を覗き込んでみると……。

のどか

「あつ!?!夕映!!」

夕映

「っ!?!」

のどかの目に写ったのは、本棚の隅っこで体育座りの状態で震えている夕映の姿だった。

のどか

「夕映ったら、こんな所に隠れてたんだね……………」。

夕映

「い、いえ、その……………あの人も一緒に居るですか？」

のどか

「え？あの人って明日菜さんの事？」

夕映

「そ、そうですね！私はあの人の持ってた馬鹿デカイハリセンで危うく張り倒されるところだったです！！」

のどか

(……………夕映、相当明日菜さんに怯えてるみたい……………)。

そんな事を思いながら、のどかは怯えながらも明日菜に対して抗議をする夕映の姿を見て苦笑いを浮かべる。



のどか

「で、でもね、明日菜さんは夕映の記憶を取り戻そうとしてあんな事をしたの……それだけでも分かってあげて？」

夕映

「で、ですが……。」

のどか

「……ねえ夕映、少し此处で話をしない？」

夕映

「……え？」

夕映はのどかの言葉に一瞬だけ耳を疑ってしまふ。

のどか

「駄目……かな？」

夕映

「……分かりました。」

そう言うと、夕映は真剣な面持ちでのどかを見据えながらゆっくりと立ち上がるのであった……。



第二百二十四話 魔法学校で奇跡の再会（中編）（後書き）

という訳で、『マジカルバケーション』編の中編でした。

本当はこの話で完結させるつもりでしたが、思ったよりも長くなりそうなので話を区切らせて頂きました（汗）。

果たして、のどかは夕映の記憶を取り戻す事が出来るのか………という訳で、次回までお待ち下さい。

第二百二十五話 魔法学校で奇跡の再会（後編）（前書き）

今回で『マジカルバケーション』編は完結です。

果たして、のどかは夕映の記憶を取り戻す事が出来るのか？

第二百二十五話 魔法学校で奇跡の再会（後編）

魔法学校・図書室

夕映

「では、教えて下さい！私は一体何処から来たのか、私はどういう人物だったのかを……。」

のどか

「わ、分かった……分かったから少し落ち着いて？」

そう言いながら、のどかは自らが何者なのか知りたいが為に思わず詰め寄った夕映を冷静に宥める。

夕映

「す、すみません……私とした事がつい取り乱してしまっただす……。」

のどか

「気にしないで？夕映の気持ちは分かってるつもりだから……。」

夕映

「のどかさん……………」

のどか

「のどかでいいよ、私達は親友なんだから……………ね？」

夕映

「は、はいです……………」

夕映はのどかの言葉に対してあまり状態が持てずに何となくばつが悪そうに答える。

のどか

「それじゃ、早速だけど夕映について出来るだけ分かりやすく説明するね？」

夕映

「お、お願いしますです……………」

そう答えると、夕映はのどかの説明に緊張感を抱きながら唾を飲み込む。

のどか

「えーっと、まず何から話せばいいんだろう……………夕映は最初に何

か知りたい事とかあるかな？」

夕映

「そ、そうですね……………それでは、私は一体何処の国から来たのか教えてほしいです。」

のどか

「あゝ、まずはその事についてね……………信じられないかもしれないけど、私と明日菜さんや夕映もこの世界の人じゃないの。」

夕映

「……………え？」

夕映はのどかの説明を聞いて一瞬だけ啞然としてしまう。

夕映

「ちょ、ちょっと待って下さい……………では、私は別の世界の異世界人だとおっしゃるのですか？」

のどか

「まあ、そういう事になるね……………それにね、夕映はその世界の『麻帆良学園』という学校で普通の女子中学生として暮らしていたの。」

「

夕映

「な、何ですって？私は普通の子供中学生？」

夕映はのどかの説明を聞いて再び耳を疑った。

夕映

「……………それは何かの冗談ですか？だって、現に私は魔法を使えま  
すですよ？」

のどか

「それはね、ネギ先生と仮契約したからなの。」

夕映

「ネギ先生？」

夕映は三度みたひのどかの言葉に耳を傾けて思わず聞き返す。

のどか

「そっか、ネギ先生の事も忘れちゃったんだ……………ネギ先生は私達  
の担任の先生なの、まだ十歳なのに一生懸命頑張ってる……………」

夕映



「じゅ、十歳!？」

夕映はのどかの口から自分の担任がまだ十歳の子供だと聞いて再び耳を疑ってしまふ。

夕映

「待って下さい、十歳と言ったらまだ子供じゃないですか!十歳の子供が先生だなんて有り得ません!それに、十歳の子供が中学生の問題を教えられるのですか?そもそも、これは労働基準法に違反するのでは?しかも、その子供先生と仮契約したというのは……………」

のどか

「わ、分かったから!一から順に説明するから少し落ち着いて。」

のどかは様々な疑問を延々と口に出し続ける夕映を慌てて一旦止める。

のどか

「ネギ先生はね、イギリスのウェールズから立派な魔法使いになる為に修行の一環として麻帆良にやって来たの。」

夕映

「魔法使い……………では、私はそのネギ先生という子供先生と仮契約をしたから魔法が使えるという事ですね?」

のどか

「うん、そついう事。」

夕映

「成程……………それで、その仮契約というのはどのような事をするの  
でしょうか?」

のどか

「……………え?」

のどかは夕映の質問に一瞬だけ固まってしまつ。

のどか

「え、えっと……………それは……………その……………」。

夕映

「ん?どうして顔が赤くなつて居るのですか?」

のどか

「ふえ!??そ、それは……………」。

のどかは夕映に顔を紅く染めた事を指摘されて動揺を隠せなくなる。

のどか

「……………どうしても知りたいの？」

夕映

「はい！是非とも知りたいです！」

夕映はのどかの質問に真剣な面持ちで即答する。

のどか

「そ、そう……………えっとね、仮契約をするにはある事をしなきゃいけないんだけど……………」

夕映

「それは何ですか？」

のどか

「そ、それは……………ネ、ネギ先生と……………キ……………キキ……………キスを……………」

夕映

「え？何です？小声でよく聞き取れないですけど……………」

のどか

「だ、だからね……………ちょっと耳を貸して？」

夕映

「え？は、はい……………」

夕映はのどかに言われた通りに左耳をのどかの口元に近付けると……………。

のどか

「ゴニョゴニョ……………」

夕映

「うむむむ……………」

のどかは声が漏れるのを防ぐ為にまるで内緒話をするかのように夕映の耳元で小声で仮契約について説明を始める。

夕映

「……………」

ボンッ！！

しばらくすると、夕映の顔が真っ赤に染まると同時にまるで蒸気機関車みたいに音を立てながら頭から蒸気が上がる。

夕映

「な、なな何ですと！？仮契約をするには……………キ……………キキキ……………キスをする……………因みに、キスってアレですよ？魚の鱗キスではないですよ？接吻せつぶんの事ですよ！？」

のどか

「う、うん……………」

のどかは顔を真っ赤にして動揺しながら質問する夕映に対して同じく顔を真っ赤になりながら答える。

夕映

「そ、そんな……………では、私の唇は既に……………」

そう言いながら、夕映はモジモジしながら片手で自らの唇を押さえる。

のどか

「で、でもね！仮契約については私も同意したし……………それに、あ

の時はハルナも強く（強引に）後押ししてくれたし……………」

夕映

「……………のどかさん、もう一つだけ聞いてもいいですか？」

のどか

「え？何？」

夕映

「……………私はネギ先生の事が好きだったのでしょうか？」

のどか

「え……………」

のどかは夕映の言葉を聞いて一瞬だけ背筋が凍ったように固まってしまう。

夕映

「だって、キスをしてまで私は仮契約をしたんですよ……………それ以外考えられないです……………」

のどか

「夕映……………」

のどかは夕映の言葉を聞いて少し戸惑い気味になるが……………。

のどか

「……………うん、夕映はネギ先生の事が好きだったの。」

夕映

「や、やはりそうでしたか……………」

のどか

「でもね、私もネギ先生の事が好きなの。」

夕映

「え？それって……………」

夕映はのどかの発言に内心動揺を隠せなくなってしまふ。

のどか

「実を言うとね、私の方が夕映よりも先にネギ先生を好きになったの……………それを知った夕映はハルナと一緒に私を励ましたり応援してくれたの。」

夕映

（私がそんな事を……でも、何故か身に覚えがあるような……。）

夕映はのどかの言葉を聞いてて、心の奥底から何処か懐かしい思いが少し込み上がってくるような感じを覚える。

のどか

「それでね、私もどつという経緯でそうなったのかよく分からないけど……夕映もネギ先生の事を好きになったの。」

夕映

（と、という事は……私とのどかさんは親友同士でもあり恋敵同士という事だったのですか……こ、今度は何だか心が痛くなってきた感じがするです……。）

そう思いながら、夕映は少し苦痛な表情を浮かべて胸元の服を片手で強く握り締める。

のどか

「そんな時、私達はこう誓ったの……ネギ先生に好きな人が居ないんだったら一緒に頑張ろうってね。」

夕映



「え……………私とのどかさんがそんな事を……………づうっ!？」

すると、突然夕映が両手で頭を押さえながら先程よりも苦痛な表情を浮かべる。

のどか

「ど、どうしたの夕映!？」

夕映

「きゅ、急に頭が……………うわぁ……………っ!！」

次の瞬間、夕映は立ち上がって悲痛な叫び声を上げながら本棚の方まで後退りする。

のどか

(も、もしかして夕映の記憶が戻ろうとしてるんじゃない……………でも、何だかとても苦しそう……………どうしたらいいんだろっ?)

のどかは夕映が本棚に背を向けて両手で頭を押さえながら苦しんでいる姿を見て慌てふためいていると……………。

バツタァ……………!!

明日菜

「二人共！此处に居るの！？」

突然、明日菜とキルシュ達が図書室の扉を勢い良く開けながら入って来る。

ヒューーーーーーッ！！

ドスッ！！

夕映

「ふぎやつ！？」

すると、明日菜が勢い良く扉を開けた衝撃で本棚から分厚い辞書が零れるように落ちてしまい運悪く夕映の脳天に当たってしまう。

のどか

「あっ！？ゆ、夕映の頭に本が……………」

夕映

「う、うん……………」

バッタアーーーーン!!

次の瞬間、夕映の頭に大きなタンコブを生えてきてそのまま目を回しながら倒れてしまう。

のどか

「ゆ、夕映!？」

キルシュ

「お、おい! 一体何がどうなってんだ!？」

セサミ

「お、俺に聞かれても困るよ……………」

アランシア

「とにかく、今は落ち着かなきゃ!」

ピスタチオ

「そうだったぴ! アランシアの言う通りだったぴ!」

キャンディ

「って、そう言うぴ。ピスタチオも落ち着いてよ!」

明日菜

「あゝも〜！何でもいいから静かにしなさい！」

明日菜達が騒ぎ立てている最中、のどかが気絶してしまった夕映に近づく。

のどか

「夕映！しっかりして！目を覚まして！！！」

そう言いながら、のどかは夕映の頬を軽く叩きながら何度も呼び掛けると……………。

夕映

「ん……………んんっ……………」

しばらくすると、夕映の目がゆっくりと開かれて意識を取り戻す。

明日菜

「あつ！？夕映ちゃんが目を覚ましたわ！」

キルシュ

「良かった、生きてたんだな！」

セサミ

「いや、勝手にユエを殺すなよ……………」。

キルシユの縁起の悪い言葉にセサミが素早くツッコミを入れる。

のどか

「……………夕映、大丈夫？」

夕映

「痛たたた……………はい、何とか大丈夫ですよ……………のどか。」

のどか

「そう、良かった……………あれ？」

のどかは夕映の言葉に一瞬だけ耳を疑った。

のどか

「ゆ、夕映？今、『のどか』って……………」。

夕映

「はい、言いましたです……貴女の名前は宮崎のどか、私と同じく麻帆良学園女子中等部・3年A組のクラスメートであり私の大親友です。」

のどか

「っ……！」

のどかは夕映の的確な説明を聞いて目を見開きながら驚愕する。

明日菜

「そ、それじゃ私は？私の事も思い出した！？」

夕映

「勿論です、貴女も私達と同じく3年A組のクラスメートで私がリーダーを務める『バカレンジャー』のバカレッドこと神楽坂明日菜さんです。」

明日菜

「って、『バカレンジャー』の事はどうでもいいけど……良かった！記憶が戻ったのね……！」

のどか

「ゆ、夕映……良かった……本当に良かった……うわぁ……  
っん……！」

夕映  
「おわっ!？」

次の瞬間、のどかが嬉しさのあまりに涙を流しながら夕映に抱き着く。

夕映  
「の、のどか……………少し恥ずかしいです……………」

明日菜  
「いいじゃない!折角こうして夕映ちゃんの記憶喪失が直ったんだし。」

アランシア  
「でも、一体何がきっかけで記憶が戻ったんだろ?」

キャンディ  
「まあ、こうして無事に解決したから細かい事は別にいいじゃない。」

ピスタチオ  
「その通りだっぴ!終わり良ければ全て良しだっぴ!」

キルシュ

「…………お前、意味分かって言ってるのか？」

セサミ

「そう言う兄貴もあまり分かってないんじゃないか？」

キルシュ

「な、何だとお!？」

全員

「ハハハハハハッ！」

夕映がのどかに抱き着かれて恥ずかしがっている中、とても賑やかで楽しい笑い声が図書室に響き渡っていく。

〈ウィルオウイスプ魔法学校・校門前〉



数十分後、明日菜達は学校の校門前までやって来て何やら話をしていた。

キルシュ

「……………そっか、やっぱり行っちゃまうのか。」

夕映

「はい、出来ればクラスの皆さんや先生方にもきちんと別れを告げたいのですが……………のどか達の話によると事態は一刻を争うようなのです。」

セサミ

「でも、まさかいきなりユエとお別れだなんて思いもしなかったよ……………」

アランシア

「そうね、折角お友達になれたのに……………」

そう言うと、アランシアを含む魔法学校の生徒達は寂しそうな表情を浮かべる。

夕映

「私の方こそ、皆さんと一緒に魔法の勉強をして色々楽しかったです。」

ピスタチオ

「オイラもユエに魔法をいっぱい教えてもらって感謝してるっぴ！」

キルシュ

「それじゃ、これからはこの俺がビシバシと鍛えてやるからな？」

ピスタチオ

「そ、それだけは勘弁してほしいっぴっ！！」

夕映

(……………この二人は相変わらずですね。)

そんな事を思いながら、夕映はキルシュとピスタチオのやり取りを苦笑いしながら見つめる。

キャンディ

「ユエ、もし機会があったらいつでもこの学校に遊びに来てね？」

セサミ

「そうそうー！いつでも歓迎するからな。」

夕映

「ありがとうございますです……………ところで、他のクラスの皆さんや先生方には……………」

キルシュ

「心配すんなって！クラスの連中や先生達からは俺達がちゃんと説明しとくからさ。」

ピスタチオ

「だから、ユエは安心して家に帰るっぴ！」

夕映

「皆さん……………」

夕映はキルシュ達の温かい心遣いに思わず感極まってしまっ。

夕映

「本当にありがとうございます……………皆さんには幾ら感謝しても感謝しきれないです。」

アランシア

「そんな事気にしなくていいよ。」

ピスタチオ

「そうだっぴ、クラスメートだから当然だっぴ！」

キルシュ

「おうよ！例え離れ離れになってもお前は俺達のクラスメートだぜ  
！」

夕映

「そ、そうですね………それでは、お世話になりましたです！」

夕映は律儀に一礼をしながらキルシュ達に別れを告げると、その場から少し離れていた明日菜とのどかが立っている場所まで駆け出ていく。

キルシュ

「ユエ〜！あばよ〜！〜！」

セサミ

「またな〜！！！」

アランシア

「元気でね〜！！！」

キャンディ

「絶対にまた来てね〜!!」

ピスタチオ

「バイバイだっぴ〜!!」

キルシュ達は大きく手を振ったり大声を出して夕映に別れを告げる。

夕映

「……………お待たせです。」

のどか

「もういいの？やっぱりみんなにちゃんと別れを言った方が……………」

「

夕映

「大丈夫です、その辺はキルシュさん達が他の皆さんにきちんと説明してくれるです。」

明日菜

「そう、それだったらいいんだけど……………あれ？夕映ちゃん、ひよっとして泣いてる？」

夕映

「い、いえ……………目に少しゴミが入ったです……………」

そう言いながら、夕映は涙目になっている目頭を片手で拭う。

のどか

(夕映ったら、嘘が下手なんだから……………)。

明日菜

「まあいつか……………よし！こうして夕映ちゃんを発見した事だし、早速館へと帰りますか！」

夕映

「……………え？館って何の事ですか？」

のどか

「その事については後で説明するから、取り敢えず私達に付いて来て？」

夕映

「はい、はいです……………」

こうして、明日菜とのどかは夕映と共に『ウィルオウスイプ魔法学  
校』を後にするのであった……。

第二百二十五話、魔法学校で奇跡の再会（後編）（後書き）

という訳で、今回で『マジカルバケーション』編は完結しました。

ところで、今回の話はあまり捻りが無いような気がします……  
どうなんでしょうか？（汗）

まあ、無事に夕映の記憶が戻ったので良しとしたいと思います（苦笑）。

という訳で、次回もお楽しみに！



第二百二十六話〜崩壊寸前の地球で……（前編）〜（前書き）

『ギフトピア』の世界で刹那達は島の守り神・テンジンの力によってワープされたが……。

第二百二十六話 崩壊寸前の地球で……（前編）

（東京・新宿シティ）

木乃香・刹那・楓の三人はテンジンの力で既に崩壊しているビルや建物が建ち並んでいる荒れ果てた場所へとやって来ていた。

木乃香

「……………せつちゃん、何か不気味な所に来てしもうたね……………」

刹那

「そうですね、人の気配が全く無いようですし……………」

楓

「うむ、こんな場所にクラスメートの誰かが居るのでござろうか……………」

そう言いながら、木乃香達三人は不安感を抱きながら辺りを見回す。

木乃香

「……………それにしても、何でこんなにビルとかが壊れてるんやろ？」

楓

「うぬ、この辺りで何かが起こった事は間違いないでござるが……」

刹那

「ああ、だけど一体何が……。」

ガタツ！！

全員

「！？」

すると、突然巨大な瓦礫がれきの中から大きな音が響き渡る。

木乃香

「な、何か大きな音がしたみたいやけど……。」

刹那

「お嬢様は此处を動かさないで下さい……楓、近付いてみよう。」

楓

「あいあい。」

そう言っつて、刹那と楓はゆっくりと瓦礫の方へと近付いてみると……。

ガッシャー……ン！！

？

「シャー……ッ！！」

刹那&楓

「！？」

すると、突然瓦礫の中からまるで昆虫のように何本もの足を生やした巨大な生物が勢い良く飛び出てきた。

刹那

「な、何だ！？この生き物は……。」

楓

「うぬ、何やら珍妙な生物でござるな……。」

刹那

「そんな呑気な事を言ってる場合じゃない！楓！用心した方がいい

「!!」

楓

「承知したでござる!」

そう言うと、刹那は夕凧を取り出して楓は懐から苦無クナイを取り出して謎の生物に警戒しながら身構える。

?

「グオーーーーーッ!!」

すると、突如謎の生物が刹那と楓に向かって襲い掛かって来る。

刹那

「く、来るぞ!!」

楓

「あいあい!!」

シュシュッ!!

次の瞬間、楓が謎の生物に向けて何本もの苦無を素早く投げ付ける。

ガツキーーーーーン!!

ところが、何の生物の皮膚が硬いせいなのか楓が投げ付けた苦無は全て弾き返されてしまう。

楓

「な、何と……………相当頑丈そうなボディでござるな……………」。

刹那

「ならばこれでどうだ！神鳴流秘剣・百烈桜華漸!!」

ズツシャーーーーーツ!!

刹那も夕凧で強力な剣技で謎の生物を切り付けるが……………。

?

「ガアーーーーツ!!」

刹那

「!?!?」

謎の生物は刹那の攻撃をビクともせず、雄叫びを上げる。

刹那

「き、効いてないのか!？」

楓

「これはこれは……刹那殿、どうやら一筋縄ではいかないようでご覧な……。」

刹那は謎の生物の頑丈さに驚愕するが、逆に楓は感心してしまう。

?

「ウガァー……ッ!」

次の瞬間、謎の生物が刹那と楓に向けて鋭い爪を高々と振り落とそうとするが……。

ズドドドドドドドッ!…

?

「ギャー……ッ!…!」

突然、謎の生物に向けて緑色の光を帯びた弾丸が何十発も命中する。

刹那

（な、何だ！？）

楓

（何やら、弾丸らしき物が命中して………ムッ！？）

？

「とりゃーっ……！」

すると、刹那と楓の背後から金髪にポニーテールのような髪型に黄色いシャツに黒い半ズボンを履いた少年が高々とジャンプしながら現れた。

？

「これでも喰らえ……！」

ズツシャーーーーッ！！

？

「グギャーーーーッ……！」



そして、少年は持っていた銃剣らしき武器で謎の生物を大きく切り付ける。

？

「グガ…………ガ…………。」

バッタア————ン！！

少年が地面に着地したと同時に、謎の生物が小さな呻き声を最後に倒れ込んでしまう。

？

「へへっ、一丁あがりってね！」

そう言いながら、銃剣を持った少年が謎の生物の亡骸<sup>なきがら</sup>を得意げに見つめる。

刹那

「す、凄い…………あの生物をあっという間に倒してしまった…………。」

「

楓

「うむ、拙者達の出番が無くなってしまったでござるな……………」。

刹那と楓は咄嗟の出来事だったのでその場で啞然とした表情を浮かべながら佇むしかなかった。

木乃香

「せつちゃん！楓さん！」

？

「……………ん？」

木乃香が刹那達を呼びながら駆け寄ると、少年が漸く刹那達に気付く。

木乃香

「二人共、無事で良かったわあ。」

刹那

「は、はい！あの人のお陰です。」

楓

「そうでござるな、拙者達よりもあの奇妙な生物を素早く倒したで

「じやる。」

木乃香

「せやね〜、あの人にお礼を言わな……あや？」

木乃香が少年の方に顔を向けると、少年がいつの間にか刹那達の側に佇んでいた。

？

「驚いたな、この辺りにも人が居たなんてな……もしかして、ア  
ンタ達も『救済グループ』の一員なのかい？」

刹那

「きゅ、『救済グループ』？」

刹那を含む三人は少年の言葉に思わず耳を傾けてしまう。

？

「あれ？違うのか？」

楓

「生憎、拙者達はお主が申した何とかグループではないでじやる。」

？  
「そっか……………まさか、『武装ボランティア』の生き残りじゃないよな？」

そう言いながら、少年は少し警戒した面持ちで刹那達に質問する。

刹那

「い、いえ……………私達はその武装何とかという者でもありません。」

？

「それも違うのか……………それじゃ、アンタ達は一体何者なんだ？」

木乃香

「え〜っと、ウチらは……………。」

？

「お〜い、サキ〜！」

サキ

「お？その声は……………。」

木乃香がサキという名前の少年に説明しようとした時、青いキャミ

ソールに灰色の長ズボンを履いた茶髪のショートヘアの少女がサキの名前を呼びながら駆け寄って来る。

サキ

「アイラン、遅かったじゃないか。」

アイラン

「何言っただよ、サキが俺を置いて先に行っちゃったからだろ？」

サキ

「アハハハ！そうだったな。」

アイラン

「ったく、笑い事じゃないっつーの……………」

アイランと呼ばれた少女はサキの呑気な言葉に思わず溜め息を付いてしまう。

刹那

「あ、あの……………」

アイラン

「ん？サキ、コイツらは誰なんだ？」

サキ

「さあ？俺もついさっき出会ったばかりだからさ……………」。

アイランは怪訝そうに刹那達を見据えながらサキに質問するが、サキは首を傾げながら曖昧に答える。

木乃香

「ウチら、友達を捜し回ってるんやけど……………この中に見覚えのある顔はないかな？」

そう言うと、木乃香は懐から3-Aのクラス名簿のコピー用紙を取り出してサキとアイランに見せる。

サキ

「うーん、どの顔の子も見ないなあ……………アイランはどうだ？」

アイラン

「残念だが、俺も見た事がない……………第一、この『新宿シティ』には人なんて居ないハズだし。」

刹那

「そうですか……………え？ちょ、ちょっと待って下さい。」

サキ  
「何だ？」

刹那  
「此処って、『東京』の『新宿』なんですか？」

アイラン  
「ああ、そうだけど……。」

木乃香  
「え〜っ！？此処があの『新宿』なん!？」

木乃香は此処が『東京』の『新宿』と聞いて思わず大声を上げながら驚愕してしまう。

サキ  
「……………な、何でそんなに驚くんだ？」

楓  
「いや何、こっちの事でいけるよ……………」

刹那

（お嬢様、どうやら此処は私達の世界の『新宿』とは全く別の違う世界の『新宿』のようです。）

木乃香

（そ、そうなんや……………良かった、ウチらの世界やのうって安心したわ。）

木乃香と刹那はサキ達に聞こえないように小声で話し合う。

楓

「ところで、もう一つ聞いてもいいでしょうか？」

サキ

「ああ、いいけど？」

楓

「この辺りはどうしてこんなに荒れ果てているのでしょうか？」

サキ

「……………な、何だって？」

サキは楓の質問に対して思わず戸惑い気味に耳を傾けてしまう。



楓

「ど、どうかしたでござるか？」

サキ

「いや、あまりにも可笑しな事を聞くから……………ルフィアンの仕業に決まってるだろ？」

木乃香

「ルフィアン？」

木乃香を含む三人はサキの言葉に思わず首を傾げる。

アイラン

「もしかして、ルフィアンを知らないのか？」

刹那

「え？えっと……………」

サキ

「ほら、さっき俺がやっつけたあの生物の事だ。」

そう言つと、サキが先程自ら倒した謎の生物に向けて指差す。

楓

「ほお、先程お主が倒したあの奇妙な生物の事でござつたか……………」

「

アイラン

（なあサキ、やっぱり可笑しいぞ…………ルフィアンを知らない人間なんてこの世に居るハズない。）

サキ

（ううん、確かに妙だな…………でも、嘘を付いてる訳でもなさそうだし…………。）

今度はサキとアイランが刹那達に聞こえないように小声で話し合つ。

楓

（マズイでござるな…………完全に拙者達を不信に思っているようではござる。）

刹那

（ああ、どうもそうらしいな…………。）

木乃香

(どないしたらウチらの疑いが晴れるのかな?)

楓

(うゝむ、今更口裏を合わせても余計に怪しまれるだけでござるし  
……………どうしたものでござるうか……………。)

木乃香達二人もサキ達に聞こえないように小声で相談し合っている  
と……………。

サキ

「なあ、もしかしてアンタ達は……………。」

刹那

「な、何でしょうか?」

サキ

「記憶喪失とかになっているのか?」

木乃香&刹那&楓

「……………へ?」

木乃香達三人はサキの予想外の発言に思わず啞然としてしまう。

アイラン

「そっか！じゃあルフィアンの事も忘れてしまったのも納得がいくな。」

サキ

「だろ？恐らく、ルフィアンによる襲撃によって何らかのショックで記憶喪失になってしまったんだよ。」

木乃香

(……何か、勝手に話が纏まってしもうたね。)

刹那

(そ、そうですね……。)

楓

(でも、これで一安心でござるな……ニンニン)

木乃香達はサキの一方的な勘違いによって難を逃れたので安堵の表情を浮かべる。

刹那

「ところで、そのルフィアンという生物は一体何なのでしょう？」

サキ

「ん？ああ、ルフィアンについてか……簡単に言えば、人類が食用の為に人工的に造り出した生物ってところだな。」

楓

「ほお、食用の為……でござるか。」

楓はサキの説明を聞いて微かに糸目を開けながら興味深そうに口を開く。

サキ

「そもそもの話は、地球の人口が爆発的に増えて食糧不足の危機に陥ってしまったんだ……そこで、その危機を脱線させようと人類が造り出したのが様々な環境下においても繁殖が可能な生物『ルフィアン』なんだ。」

アイラン

「だが、それが災いしてルフィアンは人間に対して攻撃本能を発芽してしまい世界各国はルフィアンによって壊滅の危機に陥ってしまったのさ。」

木乃香

「そうやったんや……ルフィアンは人間によって造られたんやね。」

「

刹那

「だけど、皮肉な事に自らが造り上げた生物によって壊滅の危機に陥ってしまった訳ですね……………」。

楓

「いやはや、何とも言えないでござるな……………」。

刹那達はサキとアイランの説明を聞いて複雑そうな表情を浮かべる。

サキ

「そこで、そのルフィアンを一匹残らず狩猟するのが俺達『経済グループ』の仕事って訳だ。」

アイラン

「と言っても、『経済グループ』のメンバーは俺達二人だけしか残っていないんだけどな。」

木乃香

「え？二人だけ？」

サキ

「ああ、色々と訳があつてな……………」

そう言つて、サキがバツが悪そうに苦笑いを浮かべていると……………」

グウ……………」

木乃香

「あや…………」ウチのお腹が鳴つてもうた……………」

そう言つと、木乃香は自らの腹を両手で押さえながら微かに頬を紅く染める。

楓

「そう言えば、拙者も少々小腹が空いてきたでござるな……………」

サキ

「そうか、そんじゃさつき退治したルフィアンで腹はら拵こしらえでもするか。

「

刹那

「え？先程倒したルフィアンを……………ですか？」

刹那はサキの発言に思わず目を丸くしながら聞き返えしてしまつ。

サキ

「ああ、元タルフィアンは食用として造られた生物だから……それに、肉を焼いて食つたら意外と美味いんだよね。」

アイラン

「まあ、ルフィアンの中には不味い奴もいるけど……。」

サキはルフィアンの食用としての味について絶賛するが、それに対してアイランは微妙な表情を浮かべる。

サキ

「よし、早速このルフィアンを調理するか……アイラン、ちょっと手伝ってくれ。」

アイラン

「はいはい……。」

サキが倒れているルフィアンの方へ駆け寄ると、その後からアイランも少し呆れながら駆け寄っていく。

木乃香



「……せつちゃん、アレって美味しいのかな？」

刹那

「さ、さあ………どうなのでしょう？」

楓

「うむ、それこそ実際に試食してみなければ分からないでしょうよ。」

木乃香と刹那はルフィアンを食用として頂く事に不安感を募らせるが、楓は逆に何故は期待を募らせていた………。

？

「本当にあの二人が俺の………。」

？

「だって、あの黒いコートを着た女の子が言ってたじゃない。」

？

「そりゃそうだけどさ……どうも信じられないぜ、此処がオリジナルの地球の過去の世界だなんてな……。」

？

「まあ、私もまだ半信半疑だけどね……それより、これからどうするの？」

？

「ん？そうだな……もうしばらく此処であいつらの様子を見てようぜ。」

？

「うん、分かった。」

そう言い合いながら、二つの人影は崩壊したビルの屋上で地上に居るサキ達を見下ろしながら眺めていた……。

第二百二十六話〜崩壊寸前の地球で……（前編）〜（後書き）

という訳で、今回は『罪と罰』編です。

近未来を舞台に主人公達が武器を駆使して敵を倒してゆくシューティング&アクションゲームです。

因みに、今回の舞台はN64版の『罪と罰・地球の継承者』の地球となっています。

それから、ラストに登場した二人組は………現段階では一応秘密です（苦笑）。

という訳で、次回もお楽しみに！

第二百二十七話 崩壊寸前の地球で……（後編）（前書き）

果たして、刹那達はこの世界で3-Aのクラスメートを見付けられる事  
が出来るのか？

第二百二十七話 崩壊寸前の地球で……（後編）

（東京・新宿シティ）

サキ

「ふう〜、食った食った……………な？意外と美味かっただろ？」

刹那

「は、はい……………」

楓

「うむ、見た目はあまり良くなかったが味は悪くなかったでござる。」

「

木乃香

「せやね、ウチもつお腹いっぱいやわ〜。」

刹那達はサキが捕獲したルフィアンの肉を食べて満腹感に満たされていた。

アイラン

「しかし、アンタ達よっぽど腹減ってたんだな……………あのルフィアンの肉を一片も残さずに食っちまった。」

楓

「いやいや、拙者達よりもサキ殿の方が沢山食べてたでござるよ。」

サキ

「はははは！腹が減ってたら戦は出来ねえからな。」

アイラン

「って、サキは腹が減ってなくても沢山食べるだろ……………」

高笑いするサキに対してアイランは呆れ返りながらツッコミを入れる。

刹那

「……………」

木乃香

「せっちゃん、さっきから難しそうな顔してるけど……………どないしたん？」

刹那

「え？あ、えつとですね……………少し考え事してたんです。」

木乃香

「考え事？」

木乃香は刹那の言葉に思わず首を傾げる。

刹那

「はい、本当にこの世界の何処かにクラスメートの誰かが居るのか  
と思ひまして……………」。

木乃香

「あ！せやったね……………でも、テンジン様がこの世界に送ってくれ  
たんやから間違いないと思っえ？」

楓

「木乃香殿の言っ通りでござるよ、あのテンジン殿を信じるしかない  
でござる。」

刹那

「ああ、勿論私もそう思っている……………だけど、一っだけ気掛かり  
な事があつてな……………」。

楓

「はて？何でござるか？」

刹那

「もしも、私や楓と違って戦闘が全く出来ない人がこの世界の何処かにさ迷っていたら先程のルフィアンに襲われてしまうのではと思つて……。」

木乃香

「あ……。」

楓

「うむ、確かにそれは心配でござるな……。」

刹那の言葉に木乃香は一瞬だけ固まってしまい、楓は真剣な面持ちに変わり片方の糸目を少しだけ開かせる。

サキ

「心配すんなって、俺達も捜すの手伝ってやるからさ。」

アイラン

「って、勝手に決めてるし……まあ、別にいいけどさ。」

木乃香

「ホンマに？それは助かるわあ〜。」



刹那

「ありがとうございます、私達の為に……………」。

そう言つて、刹那が深々とお辞儀しようとした時……………。

パァー……………ン！！

全員

「っ！？」

突如、何処からともなく銃声のような大きな音が辺りに響き渡る。

アイラン

「今のは……………銃声？」

サキ

「ああ、向こうの方からだ……………アイラン！行ってみよう！！」

アイラン

「あっ！？ま、待てよサキ！」

そう言つと、サキとアイランは銃声がした方へと素早く駆け出していく。

木乃香

「あゝ、あつという間に行つてもうた……。」

楓

「……………刹那殿、拙者達も行つてみるでござるか?」

刹那

「ああ! 勿論だ……………お嬢様! 暫ししばご足労そくろうをお願いします!」

木乃香

「う、うん!」

刹那が木乃香の手を掴むと、楓と共にサキ達が駆け出して行った方向へと駆け出してゆく。

パンツ！！パンツ！！  
パンツ！！パンツ！！

その頃、褐色の肌にストレートロングの黒い長髪に三白眼の大人びた風貌の少女が両手左右に小型の拳銃を構えながら目の前に佇んでいる巨大なルフィアンに目掛けて連射していた。

ルフィアン

「グオーーーーーッ！！」

ルフィアンは少女が放った拳銃を全く物ともせず雄叫びを上げる。

？

「チツ、全然効いていないみたいだ……それにしても、この怪物みたいな生き物は一体何々だ？」

そう呟きながら、少女は両手に持っていた拳銃を辺りに放り投げて背中に背負わせていた大型のライフル銃を取り出してルフィアンに向けて素早く構える。

？

「これならどうだ！」

ズドドドドドドドドッ！

少女が構えていたライフル銃でルフィアンに向けて連射するが……。

ルフィアン

「グオーーーーーッ！！」

ルフィアンは少女が放ったライフル銃の弾丸にも全く物ともせず少女に向かって大きな爪を突き立てながら襲い掛かる。とする。

？

(マ、マズイ！このままでは……………。)

少女が段々と迫って来るルフィアンの大きな爪から避けようと体を動かそうとした時……………。

ズドドドドドドドドッ！

ルフィアン

「グガアアアッ！！」

？  
「っ！？」

突然、ルフィアンの背後から何者かが緑色の光を帯びた弾丸を連射して全て命中させる。

？  
（な、何だ？今の攻撃は……………。）

？  
「おい！俺が相手をしてやるっか？」

少女とルフィアンは声がした方を向いてみると、そこには黄緑色の半袖の服に茶色の短パンを着た金髪の少年が拳銃らしき武器を持って佇んでいた。

ルフィアン  
「グオーーーーーッ！！！」

すると、先程の攻撃に激昂したルフィアンが少年に狙いを変えて勢い良く襲い掛かろうと駆け出していく。

？

「あ、危ない!!」

？

「へっ、攻撃されて頭に来たか……だが、頭に血が登ってちやあ俺には勝てないぜ!」

ブツシューーーーーッ!!

少年が言い終えた瞬間、少年の背中に背負ってるリュックのような機械からガスが噴射してそのまま勢い良く宙に浮かび上がる。

？

(飛んだ!?)

ルフィアン

「ガアーーーーッ!!」

ルフィアンは雄叫びと共に少年に向けて鋭い爪を生やした巨大な腕を振り上げようとするが……。

？

「遅過ぎるぜー!!」

ズツシャーーーーーッ!!

ルフィアン

「グガアアアアッ!!」

次の瞬間、少年が持っていた銃を瞬時に銃の下部に装備されてるビームのような光線剣でルフィアンの腕を切り付ける。

?

(何だ?銃が一瞬にしてビームサーベルのような剣に……………。)

?

「よし!チャージ完了つと……………喰らえ!!」

ドツカアーーーーン!!

ルフィアン

「グギヤヤヤヤッ!!」

次の瞬間、少年が銃の引き金を引くと弾丸が命中してルフィアンは

大爆発を起こしてしまう。

バッタアーーーーン！！

すると、ルフィアンは絶命してそのまま地面に倒れ込んでしまう。

？

「へへっ、一丁あがりってか！」

少年が勝ち誇ったような表情を浮かべながら持っている銃をクルクルと左右に回していると……。

？

「イサ〜！」

イサ

「ん？」

イサと呼ばれた少年が声がした方へ振り向いてみると、白いキャミソールの上にピンク色の長袖の上着を着て灰色のミニスカートを着たショートヘアの金髪の少女が駆け寄って来ていた。



イサ

「よお力チ！遅かったじゃないか。」

力チ

「『遅かったな』じゃないよ……………此処で一体何やってたの？」

イサ

「ん？何ってお前……………あの姉ちゃんが怪物に襲われそうになつてたから助けてやったんだよ。」

そう言いながら、イサはライフル銃を持ったまま唾然とした表情を浮かべている少女を指差しながら力チという名前の少女に説明をする。

力チ

「そうだったの……………それで？その怪物はやつつけたの？」

イサ

「勿論さ！キーパーズに比べりゃ全然大した事無かつたぜ。」

？

「……………なあ、ちよつといいかい？」

イサ&カチ  
「ん？」

少女が戸惑いながらもイサに声を掛けると、イサとカチは同時に少女の方へと振り向く。

？

「先程は助けてくれて感謝する……………だけど、アンタ達は一体？」

イサ

「おっと！まずはアンタの方から名乗るのが礼儀じゃないのか？」

？

「そ、そうだな……………私の名は真名、龍宮真名だ。」

龍宮真名と名乗る少女はイサに唆かされて渋々と軽く自己紹介をする。

イサ

「マナか……………俺はイサ、イサ・ジヨだ。」

カチ

「私はカチ、宜しくね。」

真名

「ああ、宜しく……。」

イサ

「それにしてもアンタ、随分と古臭い銃を持ってんだな。」

真名

「ふ、古臭い……だって?」

真名はイサの言葉を聞いて思わず耳を疑ってしまふ。

イサ

「だってさ、こんな数十年ぐらい前の銃じゃキーパーズどころかさ  
つきの怪物だって倒せっこないぜ。」

カチ

「そうね、今時普通の弾丸が発射されるだけの銃なんて使い物にな  
らないもんね。」

真名

（いや、私は弾丸以外の物が発射させる銃なんて初耳だぞ………そ  
れに、この『レミントンM700』は最近購入したばかりなのに古

物扱いされるとは……………。)

真名がイサとカチに愛用の銃をけなされて段々と苛立ちが募ってきた時……………。

木乃香

「あっ！？龍宮さんや！」

真名

「ん？この声は……………」

真名が聞き慣れた声に反応して振り向いてみると、銃声を聞いて駆け付けて来た刹那達の姿が目に見えた。

刹那

「龍宮！さっきの銃声はお前だったのか。」

楓

「いやはや、こうして真名に会うのも何だか久しぶりでござるな。」

「

真名

「刹那！それに楓や近衛も……………」

「

木乃香

「やっぱり、テンジン様はウチらのお願いをちゃんと叶えてくれはったんや……だって、こつやって龍宮さんに会えたんやから。」

刹那

「そうですね、テンジン様の力は本物でした。」

真名

「………楓、一体何の話をしているんだ？」

楓

「いや何、こつちの話でござるよ、ニンニン。」

真名は木乃香と刹那の話の内容が理解出来ずに首を傾げてしまい、楓はそんな真名を見て微かに笑みを浮かべる。

アイラン

「………どうやら、刹那達は仲間に出会えたみたいだな。」

サキ

「ああ、そのようだ………ところで、アンタ達は誰だ？」

そう言つと、サキとアイランは怪訝そんな表情を浮かべながらイサとカチを見つめる。

カチ

(イサ、どうするの？もしイサの事がバレちゃったら……………。)

イサ

(なぐに、俺の名前さえバレなきゃ大丈夫だって。)

カチ

(そりゃそうだけど……………。)

イサとカチはサキ達に聞こえないように小声で何かを話し合う。

アイラン

「それに、アンタが持つてるその武器……………サキが持つてるのと同じ『ガンソード』だよな？」

イサ

「ん？ああ、そうだ……………それがどうかしたか？」

サキ

「あ！本当だ……って事は、俺らと同業者か？」

カチ

「同業者？」

そう言つと、カチはサキの言葉の内容が理解出来ずに思わず首を傾げる。

サキ

「……………あれ？違うのか？」

イサ

「いや、まあそんなところさ。」

アイラン

「ハッキリしないな……なあ、サキ。」

サキ

「ん？何だ？」

アイランはサキ耳元に顔を近付けて、イサ達に聞き取れないように小声で話し始める。

アイラン

(……サキはあの二人をどう思う?)

サキ

(どつって……何が?)

アイラン

(いや、何がって……あの二人が怪しくなかったって聞いてるんだよー!)

サキ

(怪しい?いや、別に何も……だが……)。

そう言い掛けると、サキは横目でイサとカチを食い入るように見つめる。

サキ

(……あいつらとは前にどっかで会った気がするんだよな……)。

アイラン

(何だって?サキもそう思ったのか……)。



サキ

(え？それじゃ……。)

アイラン

(ああ、俺もサキと同じ事を思ってたんだ……。以前何処かで会った気がするってな……。)

サキ

(マジか！やっぱり俺達って気が合うよな。)

アイラン

(って、そんな呑気な事を言ってる場合じゃないだろ……。)

アイランはサキの発言に深く溜め息を付きながら呆れ返ってしまつ。

木乃香

「……………あの二人、さっきから何を話してるんやろ？」

刹那

「さ、さあ……………」

真名

「恐らく、私が出会ったあの二人を警戒しているのだろう。」

楓

「うむ、用心に越した事は無いでござるな。」

そう言いながら、刹那達は未だに内緒話をしてるサキ達を見つめる。

カチ

(……………ねえイサ、これからどうするの?)

イサ

(ん?どうするって……………上手い事言っでごまかすしかないだろ。)

カチ

(…って、言うのは簡単だけど……………そう上手くごまかせるかな……………  
……………)

イサとカチも刹那達に聞こえないように内緒話をしていると……………。

?

「ガァー……ッ……!」

全員

「っ！？」

この場に居る全員が不気味な鳴き声に反応して見上げてみると、上空には蝶のような大きな羽根を生やした沢山のルフィアン達が飛行していた。

アイラン

「ル、ルフィアンがまだこんなに潜んでいたとは……………」

サキ

「……………アイラン、少し離れてる。」

そう言いながら、サキは厳しい表情で『ガンソード』を上空のルフィアンに狙いを定める。

アイラン

「サキ……………一人で大丈夫か？」

サキ

「心配すんな、数は多いけど相手は雑魚だ……………だから、俺一人で十分さ。」

イサ

「……………いや、俺も手を貸すぜ。」

そう言って、イサもサキと同じように持っていた『ガンソード』で上空のルフィアンに狙いを定める。

サキ

「おいおい、さっき俺一人で十分だって言っただろ？」

イサ

「おっと、誤解しないでくれよ……………俺はただの暇潰しにコイツらの相手をするだけさ。」

サキ

「フツ、成程……………だったら、それ以上は何も言わないけど俺の足を引っ張るなよ？」

イサ

「へっ、その言葉そっくりそのまま返してやるぜ！」

カチ

（あゝあ、またイサの悪い癖が……………。）

カチは内心で呆れ返りながらイサを見つめる。

刹那

「幾ら何でも二人だけであんなに沢山のルフィアンに挑むなんて無茶だ……………楓！龍宮！私達も加勢しよう！」

楓

「刹那殿、気持ちは分からなくもないでござるが……………拙者達の武器が全く通じない敵を相手にしても足手纏いになるだけでござるよ。」

刹那

「だ、だが……………」

真名

「まあ、そう焦る必要も無い……………あの二人、かなりの遣り手と見て間違いないだろう。」

そう言いながら、真名は興味深そうな眼差しでサキとイサを交互に見る。

サキ

「それじゃ、戦闘開始といきますか！」

イサ

「おう！」

ズドドドドドドドドッ！！

次の瞬間、サキとイサは持っていた『ガンソード』でルフィアンに向けて一斉に発射させたのであった……………。

〈数時間後〉

サキ

「ハアツハアツ……………な、中々やるじゃないか……………」

イサ

「ゼエツゼエツ……………そう言うアンタもな……………」

あれから数時間後、サキとイサは『ガンソード』で全てのルフィアンを退治したので疲労感のあまり大の字の状態で地面に倒れ込んでいた。

木乃香

「……せつちゃん、本当にサキ君達だけでやっつけてしもうたね……。」

刹那

「そ、そうですね……しかも、一匹残らず全滅させてしまうとは……。」

楓

「いやはや、何とも見事な銃の腕前でござったな……これが本当の百発百中でござるかな？」

真名

「ああ、正にその通りだ……それにしても、あの『ガンソード』という銃は中々の威力だな……確かに、私の銃が古臭いと言われるても仕方ないだろうな……。」

刹那達はそれぞれ思ってる事を口にしながら倒れ込んでいるサキとイサを見つめる。

アイラン

「ふう、やっと終わったか……………サキ、怪我とかしなかったか？」

サキ

「ああ、ちよつとくたびれただけさ……………」

アイランがサキに声を掛けると、サキはアイランに向けてサムズアップをしながら答える。

カチ

「……………イサも大丈夫？」

イサ

「ま、まあな……………」

サキ

「……………へえ、お前イサって名前なのか。」

イサ

「そうそう、俺の名は……………って、あっ！？」

カチ



(あ、言っちゃった……。)

アイラン

(イ、イサ……。だって?)

イサはサキに自らの名前を知られて思わず口を塞いでしまい、アイランは目を見開きながら何故か内心驚愕する。

サキ

「随分と変わった名前だな……。因みに、俺の名はサキ！サキ・アマミヤだ！」

イサ

「そ、そっか……。ってか、一応知ってるんだけどな……。」

サキ

「ん？何か言ったか？」

イサ

「い、いや！別に何も……。カチ！そろそろ帰ろっぜ！」

カチ

「う、うん！」

アイラン

「あーちよ、ちよっと待て……………」。

アイランの制止も虚しく、サキと力子はまるで逃げるようにその場から慌てて立ち去っていく。

サキ

「あゝあ、あいつら行っちまったな……………」。

アイラン

（まさか、あいつは……………いや！そんなハズは無い！きっと同性同名ってだけだ！）

そんな事を思いながら、アイランは左右に激しく首を振る。

サキ

「……………アイラン？どうかしたか？」

アイラン

「え？……………あーいや！何でも無い！」

アイランはサキに声を掛けられて我に返り、少し動揺しながらも何とか気丈に振る舞う。

サキ

「そつか、それだったらいいんだけど……ところで、刹那達はこれからどうするんだ？」

刹那

「え？そ、そうですね……私達も帰りましょうか？」

木乃香

「せやね、龍宮さんにも会えたし……。」

楓

「つむ、ネギ坊主達も心配しているかもしれないでござるな。」

真名

「そつか、ネギ先生も居るのか……それじゃ、詳しい話はネギ先生にでも聞いてみるか。」

サキ

「……よく分からないけど、帰るんだったら気をつけて帰れよ？」

木乃香

「うん！分かったわ……サキ君、アイちゃんも今日は色々ありがとう！」

アイラン

「ア、アイちゃん……。」「

アイランは木乃香に可愛らしいあだ名で呼ばれて思わず苦笑いを浮かべてしまう。

刹那

「それでは、私達はこれで失礼します！」

楓

「ちらばでいけるーニンニン……。」「

そう言い残すと、刹那達はゆっくりとその場から立ち去っていく。

アイラン

「……………結局、また俺達二人だけになったな。」「

サキ

「そうだな……………それにしても、あいつら『帰る』って言ってたけど

何処に帰るんだろっな?」

アイラン

「さあな……みんな、それぞれ事情があるんだろっからあまり深く詮索しない方がいいだろ。」

サキ

「まあ、それもそうだな……さてと、俺達も帰るとすっか!」

アイラン

「って、俺達は何処に帰るんだよ……。」

サキ

「いや、寝所を探そうって事だよ……ほら、早く行こっぜ!」

そう言つと、サキはゆっくりと立ち上がってその場から立ち去ろうとする。

アイラン

「何だ、そういう事か……って、おい!ちょっと待てっば!」

サキ

(……それにしても、あの力チって奴……名前も雰囲気も『あ

いつ』に似てたな……………」

サキは必死に呼び掛けながら追いつけるアイランを気にする事無く考え事をしながら歩き続けるのであった……………」。

その頃、イサとカチは……………」。

イサ

「ふう〜、危ない危ない……………」カチ、あの二人の前で俺の名前を呼ぶなよな〜。」

カチ

「ごめん……………」もしかして、バレちゃったかな？」

イサ

「う〜ん、どうだろうなあ……………」まあ、俺が生まれる頃には忘れてるだろ。」

カチ

「イサは相変わらず楽観的なんだから……………」。

カチはイサの楽観的な思考に思わず溜め息を付いてしまう。

カチ

「……………ねえイサ。」

イサ

「ん？どうした？」

カチ

「私ね、よく分からないんだけど……………あの二人に会った事あるよ  
うな気がするの……………」。

イサ

「何だって？」

イサはカチの発言を聞いて思わず耳を疑ってしまふ。

カチ

「でもね、本当によく分からないの……………ただ、あの二人を見る

と何だか懐かしい気持ちが込み上げて来るの……………」

イサ

「それじゃ何か？カチが記憶喪失になる前にあの二人に会ったって言うのか？」

カチ

「うん……………」  
「ごめん、そこまで思い出せないわ……………」

イサ

「そ、そっか……………」

イサがカチの言葉を聞いて軽く俯いた時……………」

？

「お二人さうん、そろそろ帰る時間よ」

イサ

「……………」  
「ん？」

イサとカチが声が出た方を向いてみると、そこには黒いコートを纏ったリリーが立っていた。



イサ

「何だ、アンタか……………」

リリー

「どお？若い頃のお父さんとお母さんには会えた？」

イサ

「まあな……………でも、まさか本当に会えるとは思わなかったぜ……………」

カチ

「うん、私も最初は半信半疑だったわ……………」

リリー

「だからアタシの言った通りでしょ？えっへん！」

そう言うと、リリーは苦笑いを浮かべるイサとカチに向かって自慢げに大きく胸を張る。

イサ

「……………にしても、あんなお気楽そうな奴が俺の親父だなんて信じられないな……………それに、母さんもイメージと違って男みたいな喋り方だったんだな……………」

カチ

「でも、お父さんの方はイサとそっくりだったよ？」

イサ

「……………え？何処が？」

カチ

「何処がって……………性格や考え方とか色々。」

イサ

「……………マジで？」

カチ

「うん、マジ。」

イサ

「って、即答かよ……………。」

イサは即答したカチに対して思わずうなだれてしまう。

リリー

「お父さんとお母さんかあ……出来る事なら、アタシもお父様とお母様に会いたいなあ……。」

イサ

「ん？何か言ったか？」

リリー

「い、いえ！別に何も……それじゃ、元の時代に帰してあげるからアタシに付いて来て」

そう言うと、リリーはイサ達よりも一足先に駆け出していく。

イサ

「………そんなじゃ、帰るとすつか！」

カチ

「うん、私達の居た世界にね！」

そう言って、イサとカチはリリーの後を追いつけるように同時に駆け出していくのであった……。

第二百二十七話 崩壊寸前の地球で……（後編）（後書き）

という訳で、『罪と罰』編の後編でした！

『罪と罰』シリーズのファンには既に分かりますが、今回の話に登場したイサ・ジヨはサキ・アマミヤとアイラン・ジヨの子供です。

それから、カチという少女はサキが主人公の『地球の継承者』に登場したアチという少女と何らかの関係があるのですが………詳しい事は『宇宙の後継者』をクリアしてみてください（苦笑）。

という訳で、次回もお楽しみに！

## 第二百二十八話〜テンジン頼み〜

〜大乱闘の館〜

ネギ

「え〜っ！？そ、それは本当ですか！？」

ネギは館に帰って来た刹那達からテンジンの事を全部聞いて思わず  
大声を上げてしまう。

刹那

「はい、そのテンジン様のお陰で龍宮に会う事が出来ました。」

明日菜

「へえ〜、そのテンジンって便利ねえ……………」。

木乃香

「明日菜ったら、テンジン様は神様なんやから呼び捨てにしたらアカンよ〜。」

ネギ

「そうですね、きっと罪ひまが当たってしまいますよ…」

明日菜

「うっ……………そ、それは困るわね……………」

明日菜は木乃香とネギの言葉を真に受けて少し尻込みしてしまう。

小太郎

「せやったら、今からそのテンジンっちゅう神様がおる世界に行つて願いを叶えて貰ったらすぐにネギのクラスの姉ちゃん達を全員見付けられるんとちゃうか？」

夕映

「ですが、そう都合良く願いを叶えてくれるのでしょうか？」

ネギ

「うっん……………取り敢えず、僕達も実際にテンジン様に合わせてみましょうか。」

明日菜

「そうね！まずは会ってみないと何とも言えないしね。」

木乃香

「ほなら、また『ナナシ島』へ行かなアカンね。」

刹那

「……………楓、くれぐれもまた逮捕されないようにな。」

楓

「はははは、幾ら拙者でも二度もお縄に付くつもりは無いでござるよ。」

楓は刹那の皮肉っぱいツッコミに対して特に気にする事無く笑いながら言葉を返す。

明日菜

「そんじゃ、早速出発しましょうか!」

美空

「皆さま、気をつけて行ってらっしゃい!」

明日菜

「って、美空ちゃんも一緒に行くのよ!」

そう言うと、明日菜が一人だけ館に残ろうとした美空の首元の後ろ側の襟を掴む。

美空

「な、何でさ〜！私なんかが行ったってちつとも役に立たないってば〜〜！！！」

明日菜

「いいから！一人でも多い方が見付けられる確率が上がるんだからアンタも来なさい！！！」

美空

「そ、そんなあ……………」

美空は文句を漏らしながらも明日菜に襟を引っ張られながらワイプ土管へと入っていく……………。

くナナシ島・テンジンの祠く

『ナナシ島』に辿り着いたネギ達はそのままテンジンの祠へとやって来た。



真名

「随分と寂れた場所だが……刹那、此処にそのテンジン様が居らっしゃるのか？」

刹那

「ああ、そのハズだが……見たところ、此処には居ないようだ。」

木乃香

「ほなら、こっちから呼んでみよ……テンジン様あ~~~~~  
!~!」

木乃香はその場で大きな声を出しながらテンジンに呼び掛ける。

明日菜

「……って、本当に呼ぶだけで現れるの？」

木乃香

「だって、ポツクル君が呼んだらすぐ現れたし……。」

のどか

「ひゃっ!?!」

のどか以外全員

「っ!?!?」

突然、のどかが叫び声のような声を上げたのでその場に居る全員が反応して振り向いてみると……………。

夕映

「のどか!?!?どうかしたです……………か……………」

小太郎

「……………な、何やコレ?」

ネギ

「も、もしかしてコレが……………」

テンジン

「……………。」

ネギ達は突如目の前に現れたテンジンを目にして思わず絶句してしまつ。

木乃香

「あ！テンジン様や！」

明日菜

「コ、コレがテンジン……………何て奇妙な姿なの……………」

のどか

「それに、大きいですね……………」

夕映

「……………これは神様というよりも妖怪に近いのでは？」

美空

「ってか、鬼〇郎のぬりかべじゃん……………」

真名

「……………危うく撃つところだった……………」

明日菜達はそれぞれの事を思いながらテンジンを見つめ続ける。

楓

「まあ、確かに見掛けは少々奇妙でござるが力は本物でござるよ。」

刹那

「ええ、テンジン様のお力があればクラスの皆さんを見付け出すのは造作ぞうさくも無いかと……あっ!？」

すると、突然刹那が何かを思い出したのように説明をしてる最中に大声を上げてしまう。

明日菜

「ど、どうしたの刹那さん?いきなり大声なんか出しちゃって……」

刹那

「そ、それが……大事な事を一つ忘れていたんです……」

小太郎

「大事な事?何やそれ?」

刹那

「はい、『願い玉』が無いとテンジン様は願いを叶えて下さらないのです。」

ネギ

「『願い玉』?」

刹那は事情を知らないネギ達に『願い玉』について出来るだけ分かり易く説明していく。

明日菜

「……………じゃあ、その『願い玉』が無いと願いを叶えてくれないの？」

刹那

「はい、恐らく……………」

ネギ

「そんな……………その『願い玉』というのはどうしたら手に入るのですか？」

楓

「うゝむ、ポックル殿に聞いてみない事には何とも……………」

？

「ワンワンッ！」

真名

「……………ん？」

その場に居る全員が犬のような鳴き声に反応して振り向いてみると、そこには首に青い首輪を付けた白と黒の体毛の小さな犬が佇んでいた。

木乃香

「わあ〜！可愛い犬や……………ほら、こっちおいで〜！」

そう言うと、木乃香はその場にしゃがみ込んで手招きしながら犬に呼び掛ける。

？

「ワンワンッ！」

すると、犬は嬉しそうに吠えながら木乃香の方に駆け寄って来た。

木乃香

「よしよし……………この子、とっても人懐っこいわあ〜。」

？

「クウ〜ン……………。」

木乃香が犬の頭を優しく撫で回すと犬は気持ち良さそうに首をくねらせる。

刹那

「それにしても、この犬は何処から迷い込んだのでしょうか……………」

？

「お〜い！タオ〜、何処に言ったんだ〜？」

楓

「およ？この声は……………」

楓を含む全員が声がした方へ振り向いてみると、以前木乃香達が出会った少年・ポツクルが何かを探してるような様子で姿を現わす。

木乃香

「あっ！？ポツクル君や！」

ポツクル

「あ！君達はあの時の……………」

刹那

「はい、あの説は本当にお世話になりました。」

楓

「うむ、拙者からも改めてお礼を申すでござる。」

そう言つと、刹那と楓はポツクルに向かって深々とお辞儀をする。

ポツクル

「いやいや、別に僕はお礼を言われるような事なんて……………」

ポツクルは刹那達にお礼を言われて頭を掻きながら顔中を真っ赤に染める。

ネギ

「貴方がポツクルさんでしたか！貴方の事は刹那さん達から聞いてます……………僕からもお礼を言わせて下さい！」

そう言つて、ネギはいきなりポツクルの両手を掴んで握手を交わす。

ポツクル

「って、君は初めて見る顔だけど……………君も木乃香ちゃん達の友達？」

ネギ



「はい！僕は木乃香さん達の教師でもあり友達でもあるネギと申します！」

ポツクル

「きよ、教師？」

ポツクルはネギの発言に思わず目を丸くさせながら耳を疑ってしま  
う。

木乃香

「ところで、この子ってポツクル君の犬なん？」

ポツクル

「え？あゝ、そうそう！タオって名前なんだ。」

タオ

「ワンワンッ！」

ポツクルはタオという名前の犬の頭を優しく撫で回しながら紹介す  
る。

木乃香

「へえゝ、タオ君って名前なんや……………何か芸とか出来るん？」

ポツクル

「芸？一応出来るけど……あまり大した事無いと思うよ？」

木乃香

「何でもええから見せて〜な。」

ポツクル

「そ、そう？それじゃあまずは簡単なのを………タオ！お座り！」

タオ

「ワンッ！」

次の瞬間、タオがポツクルの掛け声と共にその場でゆっくりとお尻を地面に付けて座り始める。

木乃香

「わ〜！とってもお利口さんやね〜。」

小太郎

「………でも、お座りなんてしつけの基本中の基本やで？」

ネギ

「まあまあ、そう言わずに……………」。

楓

「そうでござるよ……………それに、小太郎も千鶴殿に毎日しつけられて  
いるのではないでござるか？」

小太郎

「な、何アホな事を言つとんねん！？俺は千鶴姉ちゃんにしつけな  
んかされとらんわ！！」

小太郎は楓の言葉に対して顔を真っ赤にさせながら怒り出す。

ポツクル

「え〜つと、次は……………タオ！伏せ！」

タオ

「ワンツ！」

ポツクルが再び掛け声を掛けると、タオが素早く四本の足と腹部を  
地面に付けて『伏せ』の状態になる。

明日菜

「へえ、『伏せ』も出来るんだ。」

のどか

「とても賢いですね。」

美空

「でも、コレも基本中の基本だよ。」

小太郎

「な？美空姉ちゃんもそう思うやろ？」

夕映

「……………お二人共、少し失礼ですよ。」

夕映は夕オの芸にケチを付けるような発言をする美空と小太郎に対してツッコミを入れる。

ポツクル

「よし、それじゃ最後にアレをやるか……………夕オ！バック宙だ！」

夕オ

「ワンワンッ！」

ポツクルが最後の掛け声を掛けると、夕オは素早く起き上がって勢い良くバツク宙をする。

ネギ

「おお〜！これは凄いですね！」

木乃香

「夕オちゃんお見事や〜！」

パチパチパチパチッ！！

ネギ達は夕オの見事なバツク宙を見て思わず拍手をして讃<sup>たた</sup>える。

ポツクル

「良かったな夕オ、みんなに褒められてさ。」

夕オ

「クウ〜ン……………」

ポツクルが夕オの頭を優しく撫で回すと……………。

タオ

「ワンワンワンッ!」

ザッザッザッザッ!!

突然、タオが賽銭箱の前で前足二本でいきなり地面を掘り始める。

ポツクル

「……………タ、タオ?急にどうしたんだ?」

美空

「ひょっとして、此处に小判とかが埋まっていたりして……………」

夕映

「まさか、昔話じゃないんですから……………」

そんな事を言いながら、タオが掘り終えるのを待っていると……………。

タオ

「ワンワンッ!」

美空

「お？遂に大判小判を掘り出したか……っ……って、何コレ？」

美空がタオが掘った穴を覗き込んでみると、穴の中には沢山の『願い玉』が入っていた。

木乃香

「あゝ！コレ全部『願い玉』やよ！」

明日菜

「ええっ！？コ、コレが『願い玉』なの！？」

のどか

「しかも、こんなに沢山……っ……。」

明日菜達は穴の中に埋まっていた沢山の『願い玉』を目にして思わず驚愕してしまう。

ポツクル

「……………タオ、これは一体どういう事？」

タオ

「ワンワンワンッ！」

小太郎

「何？『みんなが僕の芸を見て喜んでくれたから、最近ご主人のバツクからこつそり抜き取って集めた僕のコレクションをあげる』やて？」

ポツクル

「って、最近『願い玉』が減ってると思ったたらお前を仕業だったのか……って、あれ？君は夕オの言ってる事が分かるの？」

小太郎

「へ？あゝ、その、何ていうか……か、勘や！ただの俺の勘やから気にすんなや！」

小太郎は夕オの言葉を普通に通訳した事によって怪しく思ったポツクルに対して動揺しながらも何とかごまかす。

明日菜

「ネギ、幾ら何でもこの『願い玉』を使う訳にはいかないわよね？」

ネギ

「そうですね、元々ポツクルさんの物ですし……。」

ポツクル



「いや、使っていていいよ?」

ネギ

「そうですね、使っていていいですよね……って、え?」

ネギはポツクルの意外な発言に思わず耳を疑ってしまう。

ネギ

「で、でも……これは元々ポツクルさんの物ですよね?」

ポツクル

「まあ、確かに『願い玉』は僕が作ったんだけど……でも、『願い玉』だったらまた作ればいいから全部使っても構わないよ。」

ネギ

「で、ですが……。」

明日菜

「いいじゃない!本人がいいって言うてるんだし……それに、その『願い玉』って幾らでも作れるんでしょ?」

ネギ

「そ、それはそうかもしれませんが……。」

タオ

「クウ〜ン……………」

ネギが戸惑っていると、タオが悲しそうな表情を浮かべながらネギを見つめる。

小太郎

「ネギ、コイツめっちゃ悲しそうな顔してるで?」

明日菜

「きつと、この子も『願い玉』を貰ってほしいって思ってるのよ。」

木乃香

「ネギ君、この際やからタオ君の為にこの『願い玉』は貰っとく?」

ネギ

「う〜ん……………分かりました!この『願い玉』は有り難く使わせて頂きます!」

ポツクル

「そっか……………タオ、良かったな?」

タオ  
「ワンワンッ！」

タオはネギの言葉に満足して笑顔を浮かべながら大きく一声吠える。

明日菜

「えっと、『願い玉』は手に入ったのはいいけど……次は何をすればいいんだっけ？」

木乃香

「あんな、『願い玉』に向かって祈りながら願いを込めなアカンねん。」

ネギ

「祈りながら願いを込める……分かりました、やってみます。」

そう言うと、ネギは『願い玉』を両手で持って目を瞑りながら押し黙ってしまふ。

ネギ

（お願ひします……どうか僕の大切な生徒の皆さんに会わせて下さい。）

しばらくの間、ネギが強く思いを込めながら祈っていると……。

パァー………ッ!!

全員

「っ!？」

突然、ネギが持っていた『願い玉』が青色からピンク色へと変色する。

小太郎

「な、何や？急に玉の色が変わってもうたけど……。」

刹那

「恐らく、ネギ先生の思いが『願い玉』に込められたのでしょう。」

明日菜

「そうなんだ………で？この次はどうすんの？」

木乃香

「えっと、後はあの岩に『願い玉』を掲げればええねん。」

ネギ

「あの墓石のような立派な岩ですね……………分かりました。」

そう言って、ネギが『願い玉』を持って墓石のような岩の前に立って『願い玉』を掲げた時……………。

パァー……………ッ！！

ネギ

「うわっ！？ま、また玉が……………。」

突如、『願い玉』から先程よりも強い光がネギを包み込むように発生する。

明日菜

「……………や、やっと光が止んだようね……………って、あれ？ネギは？」

しばらくして段々と光が止むと、岩の前にネギの姿は無かった。

小太郎

「ネ、ネギ！？ネギが何処にもおらへんで！？」

楓

「小太郎、そんなに慌てなくてもよいでござるよ……恐らく、ネギ坊主も拙者達と同じように何処か他の世界に行ったのでござるう。」

木乃香

「でも、ネギ君一人だけで大丈夫やるか？」

明日菜

「うーん……まあ、あいっただったら大丈夫でしょ。」

刹那

「そうですね、ネギ先生はお強いですし……それより、私達もこの『願い玉』を使って残りのクラスの皆さんを捜しましょう。」

真名

「ああ、そうしよづ。」

夕映

「のどか、良かったですね……これでもうすぐパルに会えるですよ。」

のどか

「そ、そうだね……一緒に頑張ろうね！夕映！」

美空

（あゝあ、みんなして張り切っちゃってさあ……………早く麻帆良に帰  
りてえ……………。）

それぞれの思いを抱きながら、明日菜達も次々と『願い玉』を手に  
していくのであった……………。

マツポ

（ムムム……………何ヤラ騒ガシイト思ッテ来テミタラ……………何ヤラ怪  
シイデスネ……………めいやー村長ニ報告シナイト……………。）

そう思いながら、いつの間にか物陰に隠れてネギ達の様子を伺って  
いたマツポはその場からゆっくりと立ち去っていくのであった……………  
…。





## 第二百二十八話〜テンジン頼み〜（後書き）

という訳で、今回はあまり話が進まずに再び『ギフトピア』の世界を登場させました。

……やはり、もうそろそろこの『3-A救出編』を終わらせたいので少し都合の良い展開にしました（苦笑）。

なので、此処ら辺でリクエスト募集を終了致します。

今まで様々なリクエストを応募して下さいって本当にありがとうございました。ありがとうございました……読者の皆様には感謝してもしきれない思いです。

これからもこの小説を応援して下さい！

第三百二十九話〜ピーマンアドベンチャー（前編）〜（前書き）

果たして、テンジンの力でワープしたネギはどうなったのか!？

第二百二十九話〜ピーマンアドベンチャー（前編）〜

〜ニガピー王国〜

ネギ

「……………あ、あれ？」

ネギはテンジンの力によって、いつの間にか先端がピーマンの形をしたオブジェが象っているタワーのような巨大な建物の前に立っていた。

ネギ

「こ、此処は何処？確か僕は明日菜さん達と一緒にテンジン様の祠に来てたはずじゃ……………」

カモ

「あ、兄貴！取り敢えず落ち着きやしょうぜ。」

ネギがこの状況に困惑していると、ネギの左肩からカモが現れてネギを宥める。

ネギ

「あ、カモ君……………だって、僕はさっきまで明日菜さん達と一緒にだ

ったのにいつの間にか別の場所に居て……一体何がどうなってるの？」

カモ

「うーん、俺っちもよく分かんねえけど……恐らく、こりゃあのテンジンっちゅう神様の仕業だと思いますねえ。」

ネギ

「テンジン様の……それじゃ、この世界の何処かにクラスの誰かが居るって事なのかな!？」

カモ

「かもしれねえッスよ?何せ、神様の力は絶大だからなあ……。」

ネギ

「そっか……よし!早速捜してみよー!」

そう言っつて、ネギは張り切っつてその場から走り出そつとするが……。

カモ

「ちょ、ちょっと待っつて下せえ兄貴!」

ネギ

「え？な、何？」

ネギはいきなりカモに呼び止められて慌ててその場で立ち止まる。

カモ

「俺っち達の目の前に建ってるこの建物……何か怪しくねッスか？」

そう言うと、カモは目の前に聳え建っている建物に向かって指差す。

ネギ

「うーん、そう言われてみれば……それに、あのピーマンも気になるし……。」

カモ

「いや、確かにあのピーマンみてえなオブジェも怪しいけどよ……ありゃ何かありそうですぜ？」

ネギ

「そ、そうかなあ……それじゃ、一応入ってみる？」

カモ

「おつよ！俺っちの勘もそつ言ってますぜ！」

ネギ

(……………でも、カモ君の勘って当てになるのかな？)

そんな事を思いながら、ネギが建物の中に入ろうと入口の前まで足を運んだ時……………。

？

「うわぁ……………つ！！」

ドカー……………ッ！！

ネギ

「わぁ……………っ!？」

突然、入口から四名の少年少女が勢い良く飛び出てきてネギは避ける事無くぶつかってしまう。

カモ

「あ、兄貴！大丈夫ですかい!？」

ネギ

「痛たたた……う、うん……何とかね……。」

そう言いながら、ネギはゆっくりと起き上がる。

？

「いってえ、また放り出されちゃった……。」

？

「……ふう、これでもう二十回目ですよ。」

？

「いや違う、さっきので二十一回目だ。」

？

「それにしても、全然先に進めないわね……。」

すると、先程ネギにぶつかった四人の少年少女達もゆっくりと起き上がる。

カモ

「ったく、一体何々でい……あいつら、いきなり兄貴にぶつかったきやがって……。」

ネギ

「ま、まあまあ……………僕は大丈夫だから……………」

そう言いながら、ネギは不機嫌になった力毛を優しく宥める。

ネギ

「それより、あの人達に色々と聞いてみよう。」

そう言うと、ネギは四人の少年少女達の方へと近付いていく。

ネギ

「あの、すみません……………」

？

「え？何？」

ネギの声に反応した白と水色を基調とした服と帽子を被って兎のよ  
うな長い耳を生やした少年がネギの方を振り向く。

ネギ



「突然で失礼ですが、皆さんにお聞きしたい事があるんですよ。」

？

「え？私達に……………何かしら？」

次にピンク色のロングヘアと大きな耳に同じくピンク色と白を基調とした服を着た少女が首を傾げながらネギに尋ねる。

ネギ

「実はですね、僕は生徒……………じゃなくて、友達を捜しているんですけど、この中で見覚えのある顔は無いでしょうか？」

そうやって、ネギは懐から3-Aのクラス名簿を取り出して四人の少年少女に見せる。

？

「ふうむ、どの子も可愛らしいですね……………でも、僕のアレサちゃんに比べたらまだまだですね。」

一番最初に全身が緑色の体色の上に紳士風の黒いスーツのような服を着て黒い円形の帽子を被った太めの体格の少年がクラス名簿を一通り見て軽く溜め息を付きながら呟く。

？

「ん？待てよ……………この二人、どっかで見た気がするなあ……………」

すると、モグラのような顔付きで黒子みたいな黒い服を着た少年が『鳴滝風香』と名前が書かれたピンク色のツインテールにやや吊り目の少女と『鳴滝史伽』と名前が書かれた先程の『鳴滝風香』と同じ顔付きと髪の色ダブルシニヨンで垂れ目の少女の写真を指差しながら首を傾げる。

ネギ

「えっ！？風香さんと史伽さんを知ってるんですか！？」

？

「いや、知ってるって言うよりもこの国の新聞記事にその二人の顔写真が載っていたと思ってな……………ほら、コレだよ。」

そう言うと、モグラ顔の少年は懐から鳴滝姉妹の顔写真が大きく掲載されてる新聞記事を取り出してネギに見せる。

ネギ

「あっ！？間違いありません！風香さんと史伽さんですよ！！」

？

「という事は、君の友達もピマールに誘拐されちゃったんですか…

……お気の毒ですねえ。」

ネギ

「ピマーラ？」

ネギは太めの少年の言葉を聞いて思わず首を傾げながら尋ねる。

？

「あれ？貴方はこの国の人じゃないの？」

ネギ

「は、はい………此处よりも少し遠い所からやって来たんです。」

少女がネギに対して少し不審に思いながら質問すると、ネギは何とか上手い事を言っておまかす。

？

「そっか、それだったら知らないよね………ピマーラっていうのはこの『ニガピー王国』を支配する王様らしいんだ。」

？

「それと、噂によるとピマーラはピーマンが嫌いな奴を城の牢屋に閉じ込めているみたいだぞ。」

？  
「僕のアレサちゃんはピーマンが嫌いだったからピマールにさらわれちゃったんだと思います。」

？

「私達はアレサちゃんを助け出す為に城の忍び込んだんだけど……  
…城の人達に見つかっちゃって何回も追い出されて困っていたの。」

ネギ

「そっだったんですか……………」

ネギは四人の少女達の説明を聞いて、しばらく考え込んでいると……………。

ネギ

「……………あの、もし宜しかったら僕も一緒に付いて行っていいですか？」

全員

「えっ!？」

四人の少女少女達はネギの発言を聞いて思わず耳を疑ってしまふ。

カモ

(まあ、そうなっちまうだろうな……………。)

?

「でも……………本気で言ってるの?」

?

「そりゃあ、友達を助けたいっていう気持ちは分かるけどよ……………」

「

?

「城の中はとっても危険よ? 私達だって何回も城の外へ追い出されちゃったし……………」

ネギ

「心配しないで下さい、僕はこう見えても結構強いですから……………それに、人数が一人でも多い方が先に進める確率が少しでも高くなりますよ。」

?

「確かに、それも一理ありますね……………」

？

「うーん……………ちょっと待って、みんなで話し合ってから。」

そう言うと、四人の少年少女はまるで取り囲むように一塊になって何から小声で話し合う。

カモ

(兄貴、あいつら何やら話し合ってますぜ?)

ネギ

(そうみたいだね……………やっぱり迷惑だったかな?)

ネギとカモが不安感を抱きながら小声で話し合っていると……………。

？

「……………いいよ！僕達と一緒にいこう！」

ネギ

「ほ、本当ですか!?!」

？

「ええ、私達と貴方とは目的が一緒みたいだからね。」

？

「それに、確かに君の言う通りに人数は多い方がいいですからね。」

「

？

「まあ、戦闘に関してはあまり期待はしてないけどな……………」。

カモ

（チツ、兄貴の実力も知らねえで……………後で驚き過ぎて腰抜かすんじゃないねえぞ。）

そんな事を思いながら、カモはモグラの少年を睨むように見据える。

ネギ

「ありがとうございます！皆さんのお役に立てられるように頑張ります！」

？

「いやいや、そんなの気にしなくていいよ。」

？

「そうよ、私達はもう仲間なんだか……………ね？」

？  
「そうですね……あ！そう言えば、お互いまだ自己紹介してませんね。」

？  
「おお、そうだったな………そんなじゃ、まずはお前の名前から聞かせてくれよ。」

ネギ  
「は、はい！分かりました………僕の名はネギ、ネギ・スプリングフィールドです！」

？  
「ネギだね………僕の名はデミル、『ケチャプー王国』に住んでるんだ。」

？  
「私はパサラン、宜しくね。」

？  
「僕の名はソフビーと申します。」

？



「俺はレレク、こつ見えて新聞記者をやってるんだ。」

ネギ

「えっと、デミルさんにパサランさん、それとソフビーさんにレレクさんですね……………これから宜しくお願いします!」

デミル

「うん!こちらこそ宜しく!」

そう言うと、ネギとデミルはお互いに固い握手を交わす。

ソフビー

「それでは、仲間が一人増えた事ですし……………もう一度城の中に突入してみますか?」

レレク

「ああ、一刻も早くアレサを助けなきゃならないしな。」

パサラン

「それと、ネギ君のお友達さんもね。」

デミル

「よっし!早速突入するぞっ!」

全員

「おーーーーっ!!」

デミルの掛け声を合図に、その場に居る全員が城の中に勢い良く突入する。

「ニガピー城内」

?

「おっ！いい加減に此処から出してよっ!!」

その頃、『ニガピー城』の何処かにある牢屋の中で鳴滝姉妹の姉・鳴滝風香が大声で喚いていた。

?

「……………お姉ちゃん、私達何でこんな所に閉じ込められなきゃな

らないです〜?」

すると、風香の後ろから妹の鳴滝史伽が涙目になりながら風香に尋ねる。

風香

「そんなの僕だって知りたいよ！僕達は何も悪い事してないのに……」

史伽

「そ、そうですよね……でも、もしかしたらアレが原因かも……」

風香

「へ？アレって?」

史伽

「ほら、私とお姉ちゃんが目を覚まして、この建物の頂上のピーマンの形したオブジェを見た時に『うげ〜、ピーマンだ〜!』とか『ピーマン嫌い!』って言ったじゃないですか〜。」「

風香

「あ〜！確かに言ったね……でも、だからってそれだけで牢屋に入れるなんて酷くない?」

史伽

「そうですね〜！酷過ぎです〜！早く此処から出たいです〜！〜！」

そう言いながら、史伽が辺りに響く位に大声で泣き叫んでいると……。

？

「ちょっと、煩いわねえ……………折角気持ち良く眠ってたのに……………」

「

史伽

「ふえっ！？！ごめんなさいです……………って、え？」

風香

「あれ？僕達の他にも誰か居るの？」

風香と史伽が何者かの声に反応して振り向いてみると、牢屋の奥からオレンジ色でシニヨン風の髪型に白とオレンジを基調としたスカートを着て厚底ブーツのような靴を履いた少女が眠そうに目を擦りながら現れる。

？

「ふわぁ〜、あまりにも騒がしいから目が覚めちゃったじゃない…」

史伽

「は、はぁ……………どうも失礼しましたです。」

風香

「って、史伽ったら何謝ってんのさ……………ところで、アンタは誰？」

？

「だ、誰って……………そう言うアンタ達こそ誰なのよ？」

風香

「おっと、自己紹介がまだだったね……………僕は『麻帆良学園』で散歩部に所属してる鳴滝風香だよ！」

史伽

「わ、私は妹の鳴滝史伽です！同じく散歩部です！」

？

「ふ〜ん、アンタ達双子だったんだ……………道理で似てると思ったわ。」

「

そう言いながら、少女は珍しそうに風香と史伽を交互に見つめる。

風香

「ちよっと！僕達ちゃんと自己紹介したんだからそっちも名乗ったらどうなのさー！」

？

「あゝ、そう言えばそっね……………私はアレサ、宜しくね」

史伽

「こゝ、こちらこそ宜しくお願ひしますです。」

アレサと名乗る少女が自己紹介すると、史伽が思わずお辞儀をしながら言葉を返してしまふ。

風香

「……………ところでさ、アレサはどうして此処に捕まってるの？」

アレサ

「え？どうしてって……………そんなのこっちが聞きたいくらいだわー！」

史伽

「ひょっとして、アレサさんもピーマンの悪口を……………」

アレサ

「や、止めて！その単語を口にしないで！..」

突然、アレサが史伽の言葉を遮ろうとするかのように大声を上げる。

風香

「ど、どうしたの？急に大声出して.....」

アレサ

「ご、ごめん.....実は、私はピーマンって単語を口にしたり耳にするのも駄目な位にピーマンが大嫌いな.....」

史伽

「そうなんですか.....でも、その気持ちは何となく分かります。」

風香

「そうそう！ピーマンって苦くて美味くないから僕や史伽もピーマンは嫌いだな。」

アレサ

「え？何？それじゃ、アンタ達もピーマンが嫌いって事は.....私達って同士？」

風香&史伽

「……………え？」

風香と史伽はアレサの言葉を聞いて一瞬だけ唾然とするが……………。

風香

「……………でも、そう言われてみたらそうだよな？」

史伽

「そうです！私達とアレサさんは同士です！」

アレサ

「やっぱりね！あんな緑色でマズい食べ物なんて食べねえよな！？」

風香&史伽

「おうよー！ピーマンなんて食べねえ……………って、あれ？何だかさっきと口調が……………。」

風香と史伽はアレサの口調の変化に思わず耳を疑ってしまっ。

アレサ



「あ、いや、その……ピーマンなんて食べないわよね!？」

風香&史伽

( っ、明白あかひびなに言い直してるし……。 )

そんな事を思いながら、風香と史伽が少し動揺しながら訂正するア  
レサを見ていると……。

?

「プヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ!!--」

アレサ

「こ、この声は!!--」

風香

「な、何?この下品な笑い声は……。」

史伽

「お、お姉ちゃん!う、後ろ……。」

風香

「え?後ろって……っ!!--」

風香が史伽に促されたかのように後ろを向いてみると、いつの間にか牢屋の外で佇んでいた先程の奇妙な笑い声の主の姿を見て思わず度肝を抜かされてしまう。

？

「さっきから聞いてたら随分とピーマンを侮辱してくれたみたいだね……………そんな悪い子達は俺様が可愛がってやるっ。」

風香

「ア、アレサ……………あ、あいつ誰なの？」

アレサ

「えっと、私もよく分からないんだけど……………この国の王様のピマ―ラだって……………」

史伽

「お、王様!？」

風香

「……………マ、マジ？」

風香と史伽はアレサの説明を聞いて顔色が真っ青に変わってしまっ。

ピマール

「さてと、まずは君達からお仕置きをしてあげようかな……プヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ!!」

アレサ&鳴滝姉妹

「お仕置き嫌あ——————っ!!」

ピマールの笑い声とアレサと鳴滝姉妹の悲痛な叫び声が城中に響き渡るのであった……。

## 第二百二十九話〜ピーマンアドベンチャー（前編）〜（後書き）

という訳で、今回は『トマトアドベンチャー』編です。

トマトが嫌いな主人公のデミルが悪い王様に誘拐されたパサランを助け出す為に仲間達と奮闘するRPG形式のアクションアドベンチャーゲームです。

因みに、設定は本作のエンディング後なのでネタバレも含むので注意して下さい（苦笑）。

それから、ピマラーの容姿については公式では明かされていないようなので読者の皆様でそれぞれお好きなように想像して下さい（笑）。

という訳で、最近前編と後編が多いですが……次回もお楽しみに！

第三百三十話、ピーマンアドベンチャー（後編）（前書き）

果たして、ネギは風香と史伽を救う事が出来るのだろうか？

第三百三十話、ピーマンアドベンチャー（後編）

〜ピーマーラ城内〜

ネギ

「魔法の射手・光の二十九矢!!」

ズドドドドドドドッ!!

敵兵

「ぐわぁーっ!!」

ネギが放った光弾魔法が緑色の甲冑かっちゅうを身に纏った城の兵士達を吹き飛ばしていく。

デミル

「す、凄い……城の兵士達をあっという間にやっつけちゃった……」

パサラン

「本当……私達とは比べ物にならないぐらいだね……」

ソフビー

「そうですね、ネギ君を仲間にして本当に良かったですね。」

レレク

「ああ、こりやちょっとしたスクープにもなるかもな……………」

そう言って、デミル達はネギの戦いを傍観ぼっかんしながら呟く。

カモ

（やりやしたね！流石はネギの兄貴だぜ！）

ネギ

（まあね、一刻も早く風香さんと史伽さんを助けなきゃいけないしね。）

カモ

（成程ねえ、道理でいつもよりも張り切ってる訳だ……………。）

デミル

「……………ネギ君、さっきから誰と話してるの？」

ネギ

「え？……………い、いえ！何でもありません！！」

ネギとカモが小声で話していると、デミルが怪訝そうに声を掛けてきたのでネギは慌てて弁解する。

レレク

「それにしても、お前って不思議な力を持つてるな……なあ、お前のその不思議な力について詳しく取材させてくれよ？」

ネギ

「えっ！？そ、それは……。」

カモ

(……………コイツ、何だか朝倉の姉さんと同じ匂いがするな……………。)

そんな事を思いながら、カモはネギに迫りながら質問をするレレクを見て苦笑いを浮かべる。

デミル

「まあレレクったら、今はそんな事を言ってる場合じゃないだろ？」

ソフビー

「そうですねよ、早くアレサちゃんとネギ君の友達を助けなきゃならないんですから……………」。



レレク

「わ、分かってるよ……………冗談だよ、冗談。」

レレクはデミルとソフビーに色々とツッコまれてバツが悪そうに縮こまってしまふ。

パサラン

「……………デミルったら、私の知らない間にあんなに仲の良い友達を作っちゃって……………ちょっと妬けちゃうなあ。」

ネギ

「え？パサランさんはデミルさん以外の人達とは面識が無いんですか？」

パサラン

「う、うん……………実はね、私がある悪い王様に捕われちゃった事があって……………だけど、デミルが彼らを引き連れて私を助けに来てくれたの。」

ネギ

「そうだったんですか……………では、デミルさんとは仲が良いんですね？」

パサラン

「え？そ、そうね……………」

パサランはネギの質問に対して頬を微かに紅く染めながら答える。

ネギ

「あれ？どうしたんですか？何だか、顔が赤くなってるみたいですが……………」

パサラン

「へっ！？ほ、本当？」

ネギ

「はい、もしかして熱でもあるんですか？」

パサラン

「そ、そんなんじゃないよ……………」

デミル

「おい！二人共、早くしないと置いてっちゃうよー！」

デミル達三人はネギとパサランよりも少し先の通路から大声で呼び

掛ける。

パサラン

「あっ!?! デミルったらいつの間……ちょっと待ってよぉ〜っ  
!?!」

ネギ

「置いて行かないで下さ〜い!?!」

ネギとパサランは慌ててデミル達の方に向かって駆け出していく。

その頃、鳴滝姉妹とアレサは……。

アレサ

「ちよっちよっちよっち〜! 離しなさいよ〜!?!」

風香

「そつだそつだ〜！今すぐ離せ〜っ！〜！」

史伽

「離すです〜っ！〜！」

アレサと鳴滝姉妹は両手両足を縄で縛られた状態で宙に浮かびながら大声を上げていた。

ピマーラ

『プヒヤヒヤヒヤヒヤ！そうはいかない、お前達にはこれからピーマンの素晴らしさを嫌という程味あわせてやるのだ！』

ピマーラの声と共にピーマンの形をした帽子を被った人型の乗り物がアレサ達の前に現れる。

史伽

「……………い、一体何をします？」

ピマーラ

『ん？それはな……………こつするのだ〜！〜！』

ピョ〜〜〜〜ン〜！！

風香

「ふがあ~~~~っ!?!」

すると、ピマーラが操縦してると思われる乗り物から手の形をした二つの長い金具が風香の両頬を掴んで口を大きく開け始める。

史伽

「お、お姉ちゃん!?!」

アレサ

「ちょっと!何するつもりなのよ!?!」

ピマーラ

『今からコイツにピーマンをいっぱい食べさせるのだ!』

風香

「ふぁ、ふぁんふぁっふえ（何だってえ~~~~~）~~~~~っ

!?!」

ピマーラの発言に風香は両頬を引っ張られながらも驚きの声を上げる。

史伽

「そ、そんな酷い事しないで下さ〜い！お姉ちゃんが可哀相です〜  
！〜！」

アレサ

「そうよ！嫌いな物を無理矢理食べさせるなんてどうかしてるわ！  
〜！」

ピマーラ

『心配はいらん、後でお前達にもコイツと同じ目に遭わせてやる。』

アレサ&史伽

「それはもつと嫌あ（〜）ですう（〜）〜〜〜っ〜！！」

ピマーラの理不尽な発言にアレサと史伽は思わず叫び声に似た声を  
上げながら否定する。

風香

「ひゃ、ひゃめひえひよ（〜）やめてよ（〜）っ〜！！」

ピマーラ

『プヒヤヒヤヒヤヒヤ！幾ら騒いでも無駄だ！お前はピーマンから  
決して逃れられないのだ〜！！』

そう言いながら、ピーマンを持った手（金具）が風香の口にどんどん迫って来た時……………。

兵士

「ピーマーラ様！大変です！！」

突然、一人の兵士が慌ただしい様子でピーマーラの前に敬礼しながら現れる。

ピーマーラ

『ん？何だ？随分と騒々しいなあ……………。』

兵士

「も、申し訳ありません……………ですが、今すぐにピーマーラ様に報告しなければならぬ大切な事なので……………。」

ピーマーラ

『何々だ？一応聞いてやるから言ってみる。』

兵士

「は、はい……………実は、先程この城に五人の子供が侵入して城の中を暴れまくっているそうです……………。」

アレサ

(子供？もしかしたら……………。)

アレサは兵士の説明を聞いて何かに感付いて微かに笑みを浮かべる。

ピマーラ

『子供だと？…………戯たわけ者！たかが子供相手に何をしている！？』

兵士

「そ、それが……………子供は子供でもタダの子供ではないようで……………」

ガッシャー————ン！！

全員

「！？」

すると、突然此处から少し離れた場所から大きな音が響き渡る。

ピマーラ

『な、何事だ！？』



兵士

「き、来たあ〜〜!!」

そう言つと、兵士は情けない声を上げながらその場から逃げ出していく。

ピマーラ

『お、おいコラ！勝手に逃げるんじゃない!!』

ピマーラが逃げ出した兵士を呼び止めようとした時……………。

デミル

「ピマーマ！アレサ達を返せ〜〜〜っ!!」

ピマーラ

『だ、誰だ!?!』

ピマーラがデミルの声に反応して振り向いてみると、そこにはネギとデミル達四人が佇んでいた。

アレサ

「デミル！それにみんなも……………やっぱり来てくれたのね!!」

史伽

「あつ！？ネギ先生も一緒です〜〜〜っ！！」

風香

「ね、ねふいふえんふえ（ネギ先生）〜っ！！」

アレサと鳴滝姉妹はネギとデミル達の姿を見て思わず喜びの声を上げる。

ネギ

「風香さんに史伽さん！大丈夫ですか！？」

史伽

「は、はい！今のところ大丈夫です〜！」

風香

「ぶおふもふあんふおふあぶふいふあふお（僕も何とか無事だよ〜）！」

ネギ

「それは良かった……………それはそうと、風香さん達を返して下さい〜！」

ネギは風香達を安否を確認した後、ピマーラに向かって抗議をする。

ピマーラ

『ええい、嫌い！突然やって来て勝手な事ばかり言いやがって……お前達もピーマンを嫌という程食わせてやろうか！？』

ソフビー

「ピーマンよりもアレサちゃん達を返すのが先です！」

レレク

「おうよー！今はピーマンなんてどうでもいいんだよ！」

デミル

「そつだそつだ！今すぐアレサ達を返せ！！！」

デミル達はピマーラの脅しに対して全く屈する事無く更に抗議し続ける。

ピマーラ

『お、おのれ！俺様だけではなく大好きなピーマンまでもコケにおって……こうなったら、貴様ら全員絶対に生かして帰さぬぞ！』

『！』

そう言ったと同時に、ピマールが乗り込んでると思われる乗り物の手（金具）の部分が今まで掴んでいた風香の頬を離して巨大な鉄製のボクシンググローブへと変形させる。

レレク

「あゝあ、向こうはやる気満々だな……………」

ソフビー

「こうなったら、やるしかないですね。」

デミル

「そうだね……………パサランちゃんは危ないからどっかに隠れてて。」

パサラン

「う、うん……………気をつけてね……………」

そう言い残すと、パサランは名残惜しそうにその場から少し離れる。

カモ

（兄貴、こんな奴兄貴の魔法でパパッとやっつけちまえ！）

ネギ

（それはマズイよ……………風香さん達の前で魔法を使う訳にはいかないよ。）

カモ

（それだったら、兄貴の得意な拳法で……………。）

デミル

「……………ネギ、ちょっといいかな？」

ネギ

「は、はい！？何でしょうか？」

ネギは突然デミルに話し掛けられたので驚きながらも返事をする。

デミル

「僕達があいつを引き付けるから、その間にネギはアレサ達を助け出してほしいんだ。」

ネギ

「えっ！？で、でも……………」

レレク

「心配すんな、俺達だって結構強いんだぜ？」

ソフビー

「それに、意外とこういうバトルには慣れてるんですよ。」

デミル

「だから、この場は僕達に任せて………ね？」

ネギ

「………分かりました、アレサさんは必ず助けます。」

そう言うと、ネギはこの場をデミル達に任せてアレサ達が縛られている所に向かって駆け出していく。

ピマーラ

『コ、コラ！俺様を無視して何処へ行く！？』

デミル

「おっと！お前の相手は僕達だぞ！」歯車ヨーヨー「……！」

ガツンッ……！

ピマーラ

『あだっ！？』

ピマーラがネギに気を取られた瞬間、デミルが紐が付いた大きな歯車を取り出してヨーヨーのようにピマーラの乗り物に勢い良くぶつける。

ピマーラ

『痛たたた……このおっ！よくもやってくれたなあ~~~~っ  
！！』

デミルの攻撃で頭に来たピマーラはデミル達に狙いを定めて攻撃を仕掛けようとするが……。

ソフビー

「次は僕の出番ですね！デミルさん！お願いします！！」

デミル

「OK！それっ！！」

ポイツ！

次の瞬間、デミルが懐から巨大なチョコレートを取り出してピマールの乗り物に向けて投げ付ける。

ピマール

『何だ？そんな物を投げたところで何が始まると思うのだ………。』

ソフビー

「わぁ〜！チョコだ〜！頂きま〜〜〜す！！！」

すると、ソフビーが目をハートマークに変えて巨大チョコレートに向かって飛び掛かっていく。

ドカアッ！！

ピマール

『どわ〜〜〜っ！！！！』

そして、ピマールの乗り物は勢い良く飛び掛かってきたソフビーの大きなお腹に体当たりされて吹っ飛ばされてしまう。

デミル

「いいぞソフビー！その調子だよ！」



ソフビー

「モグモグ……うん、やっぱりチョコは甘くて美味しいですねえ」。

そう言いながら、ソフビーは先程ゲットした巨大チョコレートを満面の笑みを浮かべながら食べ始める。

ピマーラ

「お、おのれ……何てメタボな腹をしているんだ……今度こそ痛い目に遭わせてやる……！」

レレク

「おっと！次の相手はこの俺だぜ！」

ピマーラの乗り物が襲い掛かろうとした時、レレクがピマーラの前に立ち塞がる。

ピマーラ

「フツ、生意気なモグラめ……いいだろう！まずはお前から片付けてやる……！」

そう言って、ピマーラは乗り物に付いているボクシンググローブを

レレクに向けて勢い良く振り下ろす。

シュッ！！

ピマーラ

『！っ？』

ところが、レレクはグローブに命中する間一髪のところまでその場から姿を消してしまう。

ピマーラ

『な、何だ？一体何処へ行ったんだ！？』

レレク

「此処だよ！」

ズボッ！！

すると、突然レレクが地面の中から勢い良く飛び出てきた。

ピマーラ

『じ、地面を掘って攻撃を避けたのか！？』

レレク

「そういう事だ！行くぞ！必殺『モグラツシュ』！！」

ボンツ！！

ズツシャーーーーーツ！！

次の瞬間、レレクが小さく三人に分身して鋭い爪でピマーラの乗り物を素早い動きで切り付けていく。

ピマーラ

『ぐっ！こ、小癩こじまな……………。』

ソフビー

「わあ、レレクさんは相変わらず素早いですねえ。」

デミル

「って、そんな呑気な事を言ってる場合じゃないよ……………僕達も加勢しなきゃ！」

ソフビー

「そ、そうでしたね……それじゃ、僕達もレレクさんに続きまじようー！」

そう言いつと、デミルとソフビーはレレクに続くように「マーラの乗り物に向かって駆け出していく。

ネギ

「わゝ、デミルさん達も結構戦い慣れてるねえ……………」

カモ

「兄貴、戦いに見入ってる場合じゃないだろ？」

ネギ

「あ！そうだった……………急いで風香さん達を救出しないと……………」

そう言いつと、デミル達の戦闘に見入っていたネギは慌てて縄で縛られている風香と史伽を救出する。

風香

「ふうゝ、やっと自由になれたよゝ。」

史伽

「良かったねゝ、お姉ちゃん。」

ネギ

「お二人共、何処か怪我とかしてませんか？」

史伽

「はい！大丈夫です。」

風香

「僕はちょっと頬っぺが痛いけどね……………」

そう言いながら、風香が苦笑いしながら両頬を優しく撫でていると……………。

アレサ

「ちよつと〜！早く私も助けてよ〜〜！！」

アレサが風香達と同じように縛られた状態で足をバタバタさせながらネギに助けを求める。

ネギ

「す、すいません！今すぐ縄を解ほどきますから……………」

ネギは慌ててアレサを縛っている縄を解いていく。

アレサ

「……………全く、ちゃんと確認しなさいよね！」

ネギ

「す、すいませんでした……………」

カモ

（って、それが助けて貰った奴の言う台詞かよ！）

カモはアレサの態度に対して怒りを抑えながら心の中でツッコミをする。

風香

「まあまあ、こうして全員助かったんだからから良しとしようよ！」

史伽

「そうですね〜！それにネギ先生は凄くお人好しで何処か抜けてるけど、とっても良い子なんですよ〜。」

ネギ

「ふ、史伽さん……………」

ネギは史伽に褒められて無意識に照れながら頬を微かに紅く染める。

アレサ

「ま、まあ助けてくれた事には感謝するけど……お礼なんか言わないからね!」

ネギ

「は、はあ……………」

カモ

（……………この姉ちゃん、何だか明日菜の姐さんに似てる気がするな。）

そんな事を思いながら、ネギとカモは啞然とした表情を浮かべながらアレサを見つめていると……………。

デミル

「うわぁ……………っ!」

ネギ

「っ!?!」

突如デミルの悲痛な叫び声が響き渡りネギが振り向いてみると、そこにはピマーラに痛め付けられて全身傷だらけで倒れ込んでいるデミル達三人の姿が目に見えた。

アレサ

「あっ！？デミル達が危ない！！」

カモ

（兄貴！出番ですぜ！）

ネギ

「うん、そうみたいだね！」

そう言つて、ネギが拳を握つて駆け出そうとした時……。

風香

「大変だ！急いで助けに行こう！！」

史伽

「ま、待つてお姉ちゃん！！」

突然、何の前触れも無く風香と史伽がネギよりも一早く駆け出して



いく。

ネギ

「ふ、風香さん！それに史伽さんも危ないですよー！」

カモ

（あゝあ、行っちゃった……………。）

ネギの制止も虚しく、風香と史伽はそのまま駆け出してしまう。

デミル

「痛たたた……………ふ、二人共……………大丈夫？」

レレク

「な、何とかな……………」

ソフビロー

「ほ、僕もどうにか無事です……………」

ピマーラ

『プヒヤヒヤヒヤヒヤ！もはや一歩も動けまい！そろそろ止めを刺してやる……………』

そう言って、ピマーラの乗り物のグローブがデミル達に向けて勢い良く振り下ろそうとした時……。

風香

「ちよっと待ったぁー………っ!!」

ピマーラ

『……………んっ』

ピマーラが風香の声に反応して振り向いてみると、そこには風香と何故か風香の背中に重なるように隠れている史伽の姿が目に入った。

風香

「さっきはよくもやったな〜！お返しに僕達の凄い技を見せてやる  
……」

ピマーラ

『ほお、誰かと思ったらさっきお仕置きし損ねた双子の小娘共か……  
……面白い！その凄い技とやらを見せて貰おうか!!』

風香

「よ〜し、行つくぞお！鳴滝流忍法………。」

史伽

「ぶ、分身の術……！」

全員

「……………へ？」

その場に居る全員が鳴滝姉妹の忍法（ただ史伽が分身したかのよう  
に風香の背中から素早く現れただけ）に思わず唾然とした表情を浮  
かべながら押し黙ってしまふ。

カモ

（……………完全にヤツちまったな……………。）

アレサ

「ぶ、分身の術って……………ただ単に双子のアンタ達が重なって隠れて  
たのが分身したみたいに現れただけじゃん……………。」

風香

「あれ？何か全然ウケてないね……………。」

史伽

「……………だから私は止めよって言ったのに……………。」

そう言いながら、史伽は呆れ返りながら思わず深い溜め息を付いてしまっ。

ピマーラ

『い、一体何をするのかと思って身構えてた俺様が馬鹿だった……  
……こうなったら、目障りなお前達から先に片付けてくれるわ!!』  
そう言うと、ピマーラの乗り物がデミル達から風香と史伽に狙いを  
変えて襲い掛かってきた。

風香

「わあ〜！こっちに向かって来たあ〜っ!!」

史伽

「ネギ先生え〜！助けて下さ〜〜〜い!!」

カモ

（ほら兄貴！今度こそ出番ですぜ！）

ネギ

「そ、そうだね！急いで助けなきゃ……………」

アレサ

「ちよつと待って！」

ネギ

「……………え？」

ネギが再び拳を握って駆け出そうとしたが、突然アレサに呼び止められてしまう。

アレサ

「相手は妙な乗り物に乗ってるから、生身の人間じゃまず勝てないわ。」

ネギ

「だ、大丈夫ですよ！僕はこつ見えても……………」

アレサ

「いいからいいから、此処は私に任せて。」

ネギ

「『任せて』ってどうするんですか？」

アレサ

「フッフ、ロボにはロボで勝負って事よ……」トマトロボ二号『出動！！』

ポチッ！

アレサが懐からリモコンのような小さな機械を取り出して、そのスイッチを押すと……。

ガッシャー……ッ！！

全員

「！！！？？」

突然、全体的にトマトのような姿をした巨大なロボットが壁を突き破って突如として現れる。

ピマーラ

『な、何だ！？あの奇妙なロボは………。』

風香

「す、凄い！トマト型の巨大ロボだ〜！〜！」

史伽

「きつと私達を助けに来てくれたです〜！」

ネギ

「あ、あのロボットは一体……………」

アレサ

「私が作った『トマトロボ二号』よ……………私、こつ見えてもメカには自信があるんだから」

カモ

（あんな巨大なロボットを作っちまうなんて……………葉加瀬の姉さんよりもスゲエかもな……………。）

そんな事を思いながら、ネギとカモは啞然とした表情を浮かべながらアレサを見つめる。

ピマーラ

『ふ、ふざけるな！この『ニガピー王国』の王であるピマーラ様がトマトなんかに負けるものかぁ……………っ！』

そう言いながら、ピマーラの乗り物が両方のグローブを激しく振り回しながら『トマトロボ二号』に向かって突っ込んでいくが……………。

アレサ

「フン！トマトを馬鹿にする奴はトマトに泣くのみ……………これでも喰らいなさ……………い……………」

ポチツ！

バツコオー……………！！

ピマーラ

『プピヤ………………………………………ツ……………？』

アレサが再び機械のスイッチを押した瞬間、『トマトロボ二号』の強力なパンチがピマーラの乗り物に命中して遠くまで吹っ飛んでしまう。

ネギ

「い、一撃で……………」

カモ

（……………結局、兄貴の出番は無かったな……………）

風香



「わあ〜！凄い凄い！！」

史伽

「やっぱり正義は必ず勝つです〜！！」

ネギとカモが啞然としている一方で風香と史伽は大喜びしていた。

アレサ

「へへ〜ん、そりゃ私が作ったロボだからね！」

ソフビー

「いやあ〜、実にお見事でしたよ〜。」

アレサが誇らしげに指で鼻を擦っていると、全身ボロボロのソフビーが感心しながら近付いてきた。

アレサ

「ソフビー！アンタ、随分とボロボロになってるけど……………大丈夫？」

ソフビー

「は、はい……………見た目よりもそんなに痛くないんですよ……………ほら、僕って太ってるからきつとこの贅肉ぜいにくのお陰でダメージが半減し

「たんだと思います。」

アレサ

「フフツ、ソフビーったら……でも、本当に無事みたいで安心した。」

ソフビー

「えへへ……。」

アレサはソフビーのジョークに対して軽く笑った後、ソフビーにゆっくりと寄り添う。

デミル

「やれやれ、見せ付けてくれるな……。」

パサラン

「……ねえ、デミルも結構ポロポロだけど大丈夫なの？」

デミル

「え？う、うん！こんなの大した事無いよ。」

デミルは不意にパサランに声を掛けられたので、何故か少し動揺しながらも大丈夫だと答える。

パサラン

「そう……ごめんね、私はデミル達みたいに戦えないから見守る事しか出来なくて……。」

デミル

「そんな事気にしないでよ、僕はパサランちゃんに見守られてるからこんなに頑張れたんだよ？」

パサラン

「……………本当に？」

デミル

「うん、勿論だよ！……………だからさ、これからも僕の為に見守ってほしいんだ。」

そう言いながら、デミルは笑顔を浮かべながら両手でパサランの手を握り締める。

パサラン

「デミル……………うん、分かったわ！」

パサランはデミルの言葉に満面の笑顔で答える。

カモ

(フツ、青春だねえ……………。)

ネギ

「え？カモ君、さっき何か言っ……………」

風香&史伽

「ネギ先生え〜〜！！」

ガシツ！！

ネギ

「うわっ！？」

ネギがカモの独り言を聞き返そうとした時、突然風香と史伽がネギに抱き着いてきた。

風香

「僕達を助けに来てくれたんだね！嬉しいよ！」

史伽

「私、とっても怖かったです……!!」

ネギ

「あ、あの………とにかく、僕が来たからもう安心して下さい。」

そう言いながら、ネギは頬を微かに紅く染めながら風香と史伽を安心させようと頭を優しく撫でる。

レレク

「ケッ、どいつもこいつも惚気のそけやがって………ってか、また俺だけ仲間外れかよ……。」

レレクはそれぞれイチャついているデミル達の光景を目の当たりにして、不機嫌そうな表情を浮かべながら佇んでいた。

くピママーラ城前く

ネギ

「いいですか？僕が『良い』って言うまで絶対にその目隠しを外さないで下さいね。」

史伽

「はーい、分かりましたー！」

風香

「それにしても、一体どんな所に連れてってくれるんだろう？楽しみだなあー」

数分後、ピマーラの城の外でネギは風香と史伽に目隠しをさせていた。

カモ

（兄貴、本当にいいんですかい？この二人をあの館に連れてくなくて……。）

ネギ

（しょうがないよ、風香さん達をこの世界に残しとく訳にはいかないよ……それに、デミルさん達も此処ら辺の事を全く知らないみたいだし……。）

風香

「ねえねえ、早く連れてってよー!」

史伽

「私も早く行きたいですー!」

ネギがカモと小声で話していると、風香と史伽が不満そうに早く出発するように促す。

ネギ

「は、はい!そろそろ出発しましょうか………っと、その前にもう少しだけ待ってて下さい。」

そう言うと、ネギは同じく出発の準備をしているデミル達の方へと駆け寄っていく。

ネギ

「先程は本当にありがとうございました、皆さんのお陰で風香さんと史伽さんに会う事が出来ました。」

デミル

「いやいや、礼を言うのは僕達の方だよ。」

ソフビー

「そうですね、君のお陰でアレサちゃんを助け出す事が出来たんですからね。」

レレク

「ああ、だからお互いにお相手あいでって訳さ。」

アレサ

「いい？あの子達をしっかりとエスコートしなさいよ。」

ネギ

「は、はい！勿論です！」

ネギはアレサに釘を刺されたような発言に思わず声を裏返たような声で答えてしまう。

パサラン

「それじゃ、機会があったらまた何処かで会いましょ。」

ネギ

「はい！では、そろそろ失礼します！」

そう言うと、ネギはデミル達に向かって一礼した後で風香と史伽の方へと駆け寄っていく。



ネギ

「お待たせしました！では、早速出発しましょうー！」

風香&史伽

「おっっ！出発進行~~~~っ！！！」

その言葉を合図に、ネギと鳴滝姉妹はその場からゆっくりと歩き始める。

デミル

「……………さてと、僕達も『ケチャプー王国』へ帰る為に出発しようか！」

デミル以外全員

「おおーっっっ！！！」

デミル達も掛け声を合図に、その場からゆっくりと歩き始めるのであった……………。

第三百三十話、ピーマンアドベンチャー（後編）（後書き）

という訳で、『トマトアドベンチャー』編の後編でした。

それにしても、このネギま&スマブラ小説を書いてもうかれこれ二周年を迎えてしまいました……………早いもんですね（苦笑）。

丁度去年の今ぐらいにこの『3-A救出編』が開始されたのですが……………一年経ってもまだ終わってないですね（汗）。

まさかこんな長期になってしまふとは……………少しだけ後悔してます（苦笑）。

だけど、何としてでも最後まで書き続けるつもりです！

なので、これからも少しずついいのでこれからも応援して下さい！

第三百三十一話 小太郎とコジロー? (前書き)

今回の話は短いです。

## 第三百一十一話 小太郎とコジロー？

とある商店街

小太郎

「ハアッ、何で俺だけ一人で捜さなアカンねん……………」

そんな事を呟きながら、小太郎は沢山の人と様々な店が並ぶ商店街を歩いていった。

小太郎

「ったく、ネギの奴は先にどっかの世界に行っちゃまうし……………今度からはちゃんとネギと一緒に行動せなアカンな。」

……。  
そう言いながら、小太郎は辺りの店を見回しながら歩いていると……。

小太郎

「ん？あの店の中に居んのはひょっとして……………」

小太郎の目に写ったのは、看板に『NINTENDOGS』と書かれたペットショップの店内のガラス越しから赤毛のクセっ毛が目立つショートヘアで顔に雀斑そばかすがある少女が犬の顔の刺繍が付いている

エプロンを着て仔犬を大事そうに抱き抱えていた。

小太郎

「やっぱり間違いない！アレは夏美姉ちゃんや！」

そう言うと、小太郎は急いで店の中に入ってネギの生徒である村上夏美の方へと駆け寄っていく。

小太郎

「夏美姉ちゃん！！！」

夏美

「えっ？もしかして……あつ！？小太郎！！！」

夏美は小太郎の姿を見て思わず抱き抱えていた仔犬を手放しそうになりながら驚愕する。

小太郎

「久しぶりやな〜！それに、無事みたいで安心したわ〜！」

夏美

「え？っ、うん………私はこの通り無事だよ？」

小太郎

「そっか！それは良かったあ……………ってか、こんな所で何しとんねん？」

夏美

「な、何って……………見ての通り、この店でバイトしてるんだよ？」

小太郎

「バ、バイト!?!？」

小太郎は夏美の発言に素直に驚いてしまう。

夏美

「うん、此処で住み込みで働いてるんだよ。」

小太郎

「へえ、あの夏美姉ちゃんがバイトを……………珍しい事もあるもんやな。」

夏美

「って、ちょっと！その言い方なんか酷くない!?!？」

夏美は小太郎の皮肉っぽい言葉に思わず怒り出してしまふ。

小太郎

「ま、まあ少し落ち着きや……………こうしてお互いに会えた訳なんやからそれでええやんか。」

夏美

「そ、そりゃそうだけど……………まあ、確かに小太郎の言う事も一理あるかもね。」

小太郎

「せやろ？」

夏美

「これで私は無事に麻帆良に帰れるしね。」

小太郎

「そうそう！麻帆良に帰れ……………はい？」

小太郎は夏美の発言に思わず耳を疑ってしまふ。

夏美

「だって、小太郎は麻帆良からこの町へやって来たんでしょ？だっ

たら、小太郎に付いてつたら私は麻帆良に帰れる訳だし……………」

小太郎

「あゝ、それはそのゝ、えゝつとゝ、何て言ったらええんやろな……………」

小太郎は夏美の思い掛けない言葉に困惑してしまふ。

夏美

「どうしたの小太郎？何だか、顔色が悪いみたいだけど……………」

小太郎

「へ！？そ、そか？多分気のせいちゃうか？」

夏美

「そ、そうかな？」

夏美が怪訝そうな表情で小太郎を見つめると……………。

？

「ワンワンッ！」



小太郎

「ん？何や？」

小太郎は突然聞こえてきた犬の鳴き声に反応して夏美の足元を見てみると、小太郎と同じ顔付きの黒っぽい色の小さな仔犬が夏美の足を頬擦りしていた。

夏美

「あ！コジロー。」

小太郎

「コ、コジロー？」

夏美

「そう、この店の看板犬なの……………それに、この子って顔付きが小太郎に似てない？」

そう言って、夏美はコジローという名前の仔犬を抱き上げて嬉しそうに小太郎に見せる。

小太郎

「……………そ、そうか？そんなに似てるか？」

夏美

「うん！この目付きの悪そうな所なんか特に似てるよ！」

小太郎

「って、目付きが悪くて悪かったな！」

小太郎が夏美の発言に対して怒り出した時……。

コジロー

「ワンワンワンッ！！」

夏美

「あっ！？」

突然、コジローが夏美の胸元から飛び出してそのまま店の外へと飛び出してしまふ。

夏美

「ま、待ってコジロー！！」

小太郎

「あゝあ、どっかへ行ってしもたわ……………」。

夏美

「どうしよう、店長に怒られちゃう……………お願い小太郎！コジローを連れ戻して来て！」

小太郎

「はぁ！？な、何で俺が行かなアカンねん！？」

夏美

「だって、私は今バイト中だし……………だからね？お願いします！」

そう言って、夏美は小太郎に向かって両手を合わせながら懇願する。

小太郎

「……………分かった！俺が連れ戻したるわ！！」

そう言うと、小太郎はコジローを追い掛ける為にダッシュで店の外に出て行ってしまふ。

夏美

「頼むね〜！」

夏美は片手を上げて左右に振りながら駆け出した小太郎を目で見送

る。

〈数分後〉

小太郎

「……………ふう、あいつは一体何処へ行っでもうたんやろな？」

そう言いながら、小太郎が町外れの空き地周辺で辺りを見回しながらコジローを捜していると……………。

？

「キャーーーーン！！」

小太郎

「っ！？」

突如、何処からともなく犬の叫び声が響き渡る。

小太郎

「い、今のはもしかして……………行ってみよー!」

そう言うと、小太郎は叫び声の方へと慌てて駆け出していく。

小太郎

「えっと、確かこの辺りやと思うけど……………あっ!?!」

コジロー

「ワオーーーーーン!!」

小太郎が空き地に到着してみると、そこにはコジローが柄の悪そうな複数の大型犬達が傷だらけで倒れ込んでいる前で誇らしげに雄叫びを上げている光景が目についた。

小太郎

「……………な、何やコレ?」

コジロー

「アウツ!?!」

コジローは小太郎の声に反応して少し動揺しながら慌てて振り返る。

小太郎

「落ち着け、俺や、さっき店で会ったやろ？」

コジロー

「ア、アウ……………」

コジローは小太郎の姿を見るなり落ち着きを取り戻す。

小太郎

「それより、この伸びてる犬達……………ひよっとして、お前が全員やつつけたんか？」

コジロー

「ワンツッ!!」

コジローは小太郎の質問に対して何処か自信満々に大きく一吠えで答える。

小太郎

「へえ〜、やるなあ……………お前、ちっこいクセに中々強いやんか。」

コジロー

「ワオワオツ！！」

すると、突然コジローが小太郎の言葉を聞いた途端に怒り出してしまふ。

小太郎

「何？『ちっこいって言うな！』って？ハハハ！そら悪かったな！」

コジロー

「ワウツ……………」

コジローは笑いながら謝罪する小太郎に対して不満げな表情を浮かべる。

（更に数分後）

小太郎

「…………ふん、いつも店をこっそり抜け出して此処ら辺で乱暴な大型犬達と喧嘩してるんや。」

コジロー

「ワンワンッ！」

小太郎は夏美に頼まれていた事をすっかり忘れてコジローと世間話をしていた。

小太郎

「そっか……………実はな、俺も腕っ節には結構自信があるんやで？」

コジロー

「ワウッ？」

コジローは小太郎の自慢話(?)に対して怪訝そうな表情を浮かべながら首を傾げる。

小太郎

「な、何や？その顔は……………さては、俺の事を疑ってるな？」



コジロー  
「ワンッ！」

小太郎  
「って、お前なあ！素直に『うん！』って答えるな！！」

小太郎はコジローの素直な答えに対して思わず怒り出してしまつた。

小太郎  
「……………ところで、俺は此処へ何しに来たんやっ たっ け？」

そう言いながら、小太郎が両腕を組みながら首を傾げると……………。

夏美  
「小太郎ー！コジロー！何処なのー！っ！？」

小太郎  
「ん？今の声は……………夏美姉ちゃんや！」

小太郎は遠くから呼ぶ小太郎の声に反応して、その場で勢い良く立ち上がる。

小太郎

「しまった！コイツ（コジロー）を連れ戻しに店に戻らなアカンやつたわ……………すっかり忘れとったで……………」

コジロー

「ワウツ？」

コジローは小太郎の独り言を聞いて再び怪訝そうな表情を浮かべながら首を傾げる。

小太郎

「急いでコイツを連れて夏美姉ちゃんと合流せな……………いや、ちょっと待てよ？」

小太郎はコジローを抱き上げて夏美の声が聞こえた方へと駆け出そうとするが、ふと何かを思い出したみたいでそのまま立ち止まる。

小太郎

「もしこのまま夏美姉ちゃんに会ったらまた『一緒に帰れる！』とか言い出しそうやなあ……………かと言って、一般人の夏美姉ちゃんをあの妙な館に連れてく訳にはいかんしなあ……………え〜い、どないしたらええんや〜！！」

そう言いながら、小太郎は自らを髪を両手でクシャクシャにしなが

ら激しく葛藤する。

小太郎

「……………そつや！もつこの手しかあらへん！！」

コジロー

「アウツ？」

コジローは小太郎の独り言を聞いて、再び怪訝そつな表情を浮かべながら首を傾げる。

その頃、夏美は……………。

夏美

「……………全く、小太郎ったら一体何処まで捜しに行ったんだろう……………心配になったから早めにバイトを終えて捜しに来ちゃったよ……………」

コジロー

「ワンワンッ!」

夏美

「え?もしかして……………」

夏美が犬の鳴き声に反応して振り向いてみると、口に手紙をくわえたコジローがこちちに向かって駆け出して来ていた。

夏美

「コジロー!一体何処に行ってたの!?心配したんだよ……………って、その手紙は?」

コジロー

「ワンッ!」

コジローは口にくわえている手紙を夏美に差し出すように渡す。

夏美

「誰からの手紙なんだろう……………あっ!?!」

夏美はコジローから手紙を受け取って見回してみると、端っこに『

犬上小太郎』と書かれていた。

夏美

「コレって小太郎が書いた手紙……………一体何て書いてあるんだろう？」

そう言いながら、夏美は小太郎が書いたと思われる手紙の封を破いて中身を取り出す。

夏美

「え〜つと、何々……………」

『夏美姉ちゃんへ

悪いけど、俺は夏美姉ちゃんと一緒に麻帆良へ帰れへんねん。  
何故なら、俺はこれから久しぶりに里帰りするところなんや。  
せやから、夏美姉ちゃんはもう暫くあの店でバイトしててほしいんや。

せやけど、安心してや！近い内に俺が必ず夏美姉ちゃんを迎えに行くから！

だから、その日まで辛抱したつてや！

まあ、夏美姉ちゃんやったら多分大丈夫やるな……………。  
ほな、またな！

犬上小太郎より』だつて……………。」

小太郎が書いた手紙を全て読み終えた夏美は思わず軽く溜め息を付

いてしまう。

夏美

「そっかあ、里帰りするんだ……それだったら、邪魔しちや悪いよね。」

コジロー

「ワンワンッ！」

夏美が微笑みながら呟くと、コジローが小太郎の代わりに返事をするかのよう力強く吠える。

夏美

「……………コジロー、店長が心配してるからそろそろ帰ろっか？」

コジロー

「ワンッ！…！」

夏美

（分かったよ、小太郎……私、待ってるから。）

そう思いながら、夏美はコジローを大事に抱えながらその場を後にする。

小太郎

(どうやら、行ったようやな……さてと、早速ネギと合流して夏  
美姉ちゃんに会った事を報告せなアカンな……)。

夏美が去った後、小太郎は物陰からこっそりと現れてその場を後に  
するのであった……。

第三百三十一話 小太郎とコジロー？（後書き）

という訳で、今回は分かり難いと思いますが『ニンテンドックス』編でした。

『ニンテンドックス』と言ったら、犬や猫と触れ合う事が出来るゲームですがペットショップの名前として登場してます……………何だか、ほぼ無理がある設定ですね（汗）。

それに、今回はただ小太郎そっくりの仔犬が逃げ出してそれを小太郎が捜し出すという凄く単純な話でしたし……………これからは少し話を捻りたいと思います（苦笑）。

因みに、今回夏美が登場したのは……………本当に何と無くです（汗）。最近小説の更新が遅くて話が盛り上がりたらないだろうと思いますが、それでも読んで下さるといのでしたら本当に幸いです！

という訳で、また次回までお待ち下さい！



第三百三十二話　くエナジストの少年（前編）く

くアルファ山・ハイディア村く

明日菜・のどか・夕映・美空の四人は数軒の木造の家が建てられている小さな村へとやって来た。

明日菜

「この世界の何処かに生徒の誰かが居るのね。」

のどか

「一体誰がこの世界に居るのでしょうか……。」

夕映

「誰が居るにせよ、一刻も早く見付け出した方がいいです。」

明日菜

「そつね……それじゃ、早速この村で情報収集よ！」

のどか&夕映

「はい（です）！」

そう言うと、明日菜達は止めていた歩みを動かして3-A生徒の探索を開始させる。

美空

（あゝあ、結局付いて来ちゃったけど………やっぱり面倒臭いなあ。）

そんな事を思いながら、美空がやる気が無さそうに明日菜達の後に付いてっていると………。

？

「危ない！避けて！！」

美空

「……………へ？」

美空が何物かの声に反応して上を見上げてみると……………。

ドスッ！！

美空

「ぶべらっ！？」

突然、大きな藁の束が美空を真上に落下してきて美空はそのまま藁の束の下敷きにされてしまう。

明日菜

「み、美空ちゃん!？」

のどか

「大丈夫ですか!？」

美空

「はらほろひれはれ〜。」

夕映

「……どうやら、大丈夫ではないようですね。」

美空は明日菜達の呼び掛けに対して目を回しながら間抜けな声で答える。

明日菜

「でも、どうして上から藁が落ちてきたのかしら……。」

？

「だ、大丈夫！？怪我とかしなかったかい！？」

そう言いながら、明日菜達の側に建てられてる建物の屋根の上から首元に黄色くて大きなスカーフを巻いた金髪の少年が慌てて降りて来る。

のどか

「え、えっと……気絶してるけど、多分大丈夫だと思います……」

？

「そう、それは良かった……いや、俺の家に屋根に穴が空いたから修理してたんだけど材料の藁が落ちてしまっただけ……本当にごめんね。」

明日菜

「あ、いや、その……。」

夕映

「……ところで、貴方は？」

？

「あ！そう言えばまだ名乗ってなかったね……俺の名はロビン、この家で母さんと二人で住んでいるんだ。」

ロビンと名乗る少年は明日菜達に向かって改めて軽く自己紹介をする。

ロビン

「それより、君達は？この村では見掛けない顔だけど……。」

明日菜

「あゝ、その事なんだけど……私達、友達を捜しにやって来たの。」

ロビン

「友達を？」

ロビンは明日菜の言葉に無意識に耳を傾ける。

夕映

「はい、もし宜しければロビンさんに少しお伺いしたいのですが……。」

ロビン

「え？うん、別に構わないけど……その前にこの子を手当てしないよ。」

そう言いながら、ロビンは未だに目を回しながら気絶している美空に向けて指差す。

のどか

「そ、そうですね……………このまま放っておく訳にもいきませんし……………」

明日菜

「ったく、世話が焼けるわね……………よいしょっと！」

明日菜は文句を言いながらも気絶している美空を軽々と抱き上げる。

ロビン

「それじゃ、俺の家のベッドに寝かせよう……………さあ、入って！」

夕映

「では、お邪魔しますです……………」

ロビンが自らの家の中に招き入れると、明日菜達もそれに続いてロビンの家の中に入っていく。

〜ロビンの家内〜

美空

「すうすう……………すうすう……………」。

美空は気持ち良さをそつに寝息を立てながらロビンの家のベッドの中でぐっすり眠っていた。

5110

のどか

「春日さん、気持ち良さをそつに眠ってますね。」

明日菜

「全く、呑気なもんよね……………」。

夕映

「本当に申し訳ないです、ベッドまで貸して頂いて……………」。

ロビン

「いいよ、丁度母さんが知り合いの家に出掛けてたし……それに、困った時はお互い様だからね。」

夕映が申し訳なさそう深々と頭を下げようとするが、ロビンは苦笑いしながら手を左右に振る。

ロビン

「それより、さっき友達を捜してるって言ってたけど……もし良かったら、詳しく聞かせてくれないかい？」

のどか

「は、はい……私達は行方不明になってしまった数多くの友達を捜す為にあちこちの世界を旅しているんです。」

明日菜

「これが私達が捜している友達の顔なんだけど……この中に見覚えのある顔はある？」

そう言って、明日菜は懐から3-Aのクラス名簿を取り出してロビンに見せる。

ロビン

「うーん……ゴメンね、どの子もこの村には来ていないと思うよ。」



のどか

「そ、そうですか……………」

夕映

「でも、この世界の何処かに居るのは間違いないですよね？」

明日菜

「そうね、あのテンジンっていう神様が私達を此処に導いたものね……………もう少しだけこの村で捜してみましょ。」

ロビン

「それだったら、俺も一緒に村の人達に聞いてみるよ。」

のどか

「え？本当ですか？」

のどかを含む三人はロビンの発言に耳を疑いながら思わず聞き返す。

ロビン

「うん、此処まで話を聞いたらほって置けないし……………それに、友達を捜したいっていう気持ちが高い程分かるんだ。」

夕映

「……………それって、どうゆう事ですか？」

ロビン

「いや、こっちの話だから気にしないで……………」

明日菜

「まあとにかく、これからこの村で一通り聞いてみましょう！」

のどか&夕映

「はい(です)！」

そう言って、明日菜達はロビンと共に『ハイディア村』で情報収集を開始するのであった……………。

〈数時間後〉

明日菜

「……………ふう、結局この村には居なかったようね。」

夕映

「そうですね……………やはり、此处とは違う別の場所に居るんでしょうか？」

のどか

「それだったら、捜すのがもっと大変になるね……………ロビンさん、この辺りに他の村や町とかありますか？」

ロビン

「うーん、この『ハイディア村』は山の麓ふもとにあるから他の村や町とはかなり離れているんだよね……………だから、近くの村へ行くにしてもかなり歩くと思うよ。」

明日菜

「マ、マジで？」

夕映

「これは思ったよりもかなり骨が折れそうですね……………。」

明日菜達はまるで一気に疲労が募ってきたみたいに大きく肩を落と

す。

？

「おーい！ロビン！」

ロビン

「ん？」

ロビンが何物かの声に反応して振り向いてみると、向こうからロビンと同じぐらいの年齢の筈みたいな形で赤い色の髪型の少年とロングヘアーで茶髪の少女が駆け寄って来た。

ロビン

「ジェラルド！それにジャスミンも……そんなに慌ててどうしたの？」

ジェラルド

「そんな呑気な事を言ってる場合じゃないぞ！スクレータさんが……」

ロビン

「え？スクレータさんがどうかした？」

ジャスミン

「スクレータさんが落石に巻き込まれて怪我をしてしまったの！」

ロビン

「な、何だつて!?!」

ロビンはジェラルドという名前の少年とジャスミンという名前の少女の言葉を聞いて思わず耳を疑ってしまう。

ジェラルド

「今、村の人達がスクレータさんを救助しようと落下した岩を退かそうとして出払ってるんだけど……あまりにも大きな岩で全く動かす事が出来ないんだ。」

ジャスミン

「だからね、ロビンにも協力してほしいの。」

ロビン

「そうか……分かった!今すぐ行くよ!」

そう言うと、ロビンは明日菜達を残してジェラルド達と共に山道の方へと駆け出していく。

明日菜

「あっ!?!?ちよ、ちよっと待ってよ……………」。

夕映

「……………行っちゃったですね。」

のどか

「私達、取り残されてしまいましたね……………」。

明日菜

「ったく、協力するって言ったのに私達を取り残して行くなんて……ちよっと無責任じゃない?」

夕映

「まあ、それも一理あるですね……………ところで、これからどうするのです?」

明日菜

「え?そ、そうね……………うん……………」。

明日菜は腕を組んで深々と考え込んでしまふ。

明日菜

「……よし決めた！彼の後を追い掛けましょ！」

夕映

「……………はい？」

夕映とのどかは明日菜の思い掛けない発言に思わず耳を疑ってしま  
う。

のどか

「……………か、彼ってロビンさんの事ですか？」

明日菜

「ええ、そうよ。」

夕映

「で、ですが何故？」

明日菜

「そりゃ『協力する！』って言ったからには最後まで責任を果たし  
てもわなきゃね……………それに、さっきの彼らの話を聞いてたら何だ  
かほって置けなくてね。」

のどか

「そう言えば、誰かが岩の下敷きになったって言ってましたね……  
…。」

夕映

「うーん、確かに聞き捨てならない内容ですね……分りました！  
少々強引ですが、ロビンさん達の後を追いましょー！」

のどか

「夕映がそう言うなら、私も賛成します！」

明日菜

「よし！決まりね！そんじゃ、早速ロビンさん達を追い掛けますよ  
！！」

のどか&夕映

「はい(です)！」

明日菜達はロビン達が向かって行った山道を辿るよつに駆け出して  
いく。



しばらくして…………。

明日菜

「…………後を追って来たのはいいけど…………此処は一体何処だろう？」

夕映

「ハア〜ッ、やはりこうなってしまったですか…………。」

明日菜達は『ハイディア村』から出て早々、完全にロビン達を見失ってしまい山道で迷子になってしまった。

のどか

「ど、どうしよう夕映…………。」

夕映

「仕方ないです、一旦村の方へ戻るです。」

明日菜

「そ、そうね…………。」

そう言って、明日菜達が来た道に戻るうとした時……………。

コロコロコロ……………。

のどか

「な、何の音……………？」

夕映

「……………何だか、嫌な予感がするです……………。」

明日菜

「た、確かに……………んなっ!？」

明日菜がふと見上げてみると、崖の方から巨大な岩がこちらに向かって勢い良く転がってきていた。

コロコロコロコロッ!!

のどか

「こ、このままじゃ岩の下敷きになっちゃっ!！」

夕映

「あ、明日菜さん！貴女の馬鹿力で何とかして下さい！！」

明日菜

「無茶言わないでよー！っていつか、馬鹿力って言うな〜！！」

そんな言い合いをしてる間にも、巨大な岩が明日菜達に向かってどんどん迫ってくる。

のどか

（も、もう駄目……。 ）

のどかが観念したように目を閉じた時……。

？

「ムーブー！！」

ブワァー……ッ！！

ガシッ！！

明日菜

「……………あ、あれ？」

夕映

「……………た、助かった……………ですか？」

のどか

「でも、どうして……………あっ！？」

のどかが閉じていた目を開けてみると、黄緑の巨大な手のような物体が岩を掴むように動きを止めていた。

明日菜

「な、何？この手みたいな物は……………。」

？

「これは『エナジー』と呼ばれる力なんだ。」

夕映

「え？」

夕映が何物かの声に反応して振り向いてみると、そこにはロビン・ジェラルド・ジャスミンの三人が居た。

のどか

「あーロビンさん。」

ジェラルド

「あれ？君達はさっきの……………」

ジャスミン

「此処は落石が多いから危険よ……………今すぐ村に戻った方がいいわ。」

明日菜

「で、でも……………」

夕映

「……………あの、少し質問してもいいですか？」

ロビン

「ん？何？」

夕映が恐る恐る左手を上げながら質問を切り出すと、ロビンが首を傾げながら尋ねる。

夕映

「先程ロビンさんがおっしゃった『エネルギー』というのは一体何な  
のですか？」

ロビン

「あゝ、『エネルギー』についてね……簡単に言えば、俺達『エナジ  
スト』にしか使えない不思議な力のような物なんだ。」

のどか

（『エネルギー』と『エナジスト』……つまり、私達の世界で言う  
『魔法』と『魔法使い』みたいな物かな？）

夕映

（そのようですね……。）

のどかと夕映はロビン達に聞こえないように小声で話し合う。

明日菜

「あれ？『俺達』って事は……ひょっとして、その二人もさっきの『エナジー』ってのが使えるの？」

ジェラルド

「ああ、勿論さ……おっと！自己紹介が遅れちゃったけど、俺の名はジェラルドっていうんだ。」

ジャスミン

「私はジャスミン、宜しくね。」

のどか

「は、初めまして！宮崎のどかです。」

夕映

「綾瀬夕映です。」

明日菜

「私は神楽坂明日菜、明日菜でいいわ。」

ジェラルドとジャスミンが軽く自己紹介すると、明日菜達も続けて軽く自己紹介をする。

明日菜

「ところろで、さっき私達を助けてくれたのは？」

ロビン

「あ、俺だけど……。」

明日菜が先程誰か助けてくれたのかと尋ねると、ロビンがゆっくりと右手を上げながら名乗り出る。

夕映

「ロビンさんでしたか、お陰で助かりましたです。」

のどか

「ありがとうございます……！」

ロビン

「い、いやあ……。」

ジャスミン

「……………」。

ジャスミンはのどか達にお礼の言葉を言われて照れているロビンを見て少しムツとした表情を浮かべながら見つめる。



ジェラルド

「ジャスミン、どうかしたか？」

ジャスミン

「べ、別に……………」

ジェラルド

「そ、そう……………」

ジャスミン

(……………何よ、ロビンったらデレデレしちゃって……………)

そんな事を思いながら、ジャスミンは更に不機嫌な表情を浮かべながらロビンを見つめる。

夕映

「ところでロビンさん、先程の『エナジー』という力をもう一度だけ見せて頂きたいのですが……………宜しいでしょうか？」

ロビン

「え？い、いいよ……………それじゃ、さっき落ちてきたあの大きな岩を見ててごらん。」

そう言うと、ロビンは先程明日菜達の上に落下してきた巨大な岩を指差す。

ロビン

「よし、始めるよ……ムーブ!!」

ブワァー……ッ!!

ゴロゴロゴロツ……

すると、ロビンが左手を前に出した瞬間に黄緑の巨大な手が出て来て巨大な岩を転がしながら押し始める。

明日菜

「おお〜! 凄い!!」

パチパチパチパチッ!!

明日菜はロビンの『ムーブ』の力を見て思わず拍手をしてしまう。

夕映

(うゝむ、コレが『エナジー』と呼ばれる力ですか……………実に興味深いです。)

ロビン

「今のは『ムーブ』といって、こつやつて巨大な物を動かす事が出来るんだ。」

のどか

「す、凄いですね……………ジェラルドさん達もあんな事が出来るんですか？」

ジェラルド

「も、勿論さ！自慢じゃないけど、俺はロビンよりもかなり腕前の『エナジスト』だぜ？」

ジャスミン

「本当かしら……………」

ジャスミンはジェラルドが自慢げに話すのに対して思わず溜め息を零しながら呆れてしまう。

ジェラルド

「よゝし！そんじゃ、今度は俺の『エナジー』を見せてやろうかな

……。」

？

「おい！大変だ〜！！」

ジェラルド

「……………つて、何だよ。」

ジェラルドが自らの『エナジー』を披露しようとした時、複数の男達がこちらに駆け寄って来る。

ロビン

「『ハイディア村』の人達だ……………一体どうしたんだろう？」

ジャスミン

「何かあつたんですか？」

村人A

「それがよ、スクレータさんを救出しようとしたら突然モンスターが現れてな……………」

ジェラルド

「モ、モンスターだって！？」

ジェラルドを含む三人は村人の話を聞いて思わず耳を疑ってしまう。

村人B

「俺達じゃ全く敵わねえから慌てて逃げて来たんだけど、今頃スクレータさんはモンスターの餌食になってるんじゃないか……。」

村人C

「おい！縁起でもねえ事言っつんじゃないか！！」

村人D

「けどよ、このままじゃ本当にマズイんじゃないか？」

村人達がこの状況に困惑していると……。

ジェラルド

「……ロビン、此処は俺達の出番じゃないか？」

ロビン

「ああ、そうみたいだな。」

ジャスミン

「それに、どちらにしろ私達はスクレータさんを助けに来たんだものね。」

そう言うと、ロビン達は先へ進もうと歩き始める。

村人A

「お、おい！まさか先へ進むのか！？」

ロビン

「はい、モンスターは俺達が退治して来ます。」

村人B

「そうか………だけど、ロビン達だったら大丈夫だろう。」

村人C

「そうだな、ロビン達は世界の崩壊を食い止めた『ハイディアの戦士』だからな。」

村人D

「それじゃ、すまないけどお願いしていいか？」

ジェラルド

「おう！俺達に任せとけてー！」

ジャスミン

「ジェラルドったら調子に乗っちゃって……それでは、行って来ます！」

そう言って、ロビン達は改めて先へ進み始める。

明日菜

「あっ!?!? ちょ、ちょっと待って……。」

夕映

「………また行っちゃったですね。」

のどか

「えっと、これからどうします?。」

明日菜

「勿論、あの三人の後を追いつけるのよ!。」

夕映

「やはり……明日菜さんも物好きですね……。」

明日菜

「悪かったわね！とにかく、急いで追い掛けるわよ！」

のどか

「は、はい！」

そう言って、明日菜達もロビン達と同じ方向を目指して進み始めるのであった……。



第三十二話〈エナジストの少年（前編）〉（後書き）

という訳で、今回は『黄金の太陽』編です。

『エナジー』という不思議な力を使えるロビンを含むエナジスト達が主人公達のアクションRPGゲームです。

一応『開かれし封印』&『失われし時代』の後という設定です。

果たして、この世界には誰が居るのか……次回をお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4113h/>

---

魔法先生ネギま～ゲーム世界を巡る旅～

2011年10月5日05時54分発行